山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 94 集

高瀬山遺跡（ＳＡ）

第２・３次発掘調査報告書

本文・挿図　編

2001

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

高瀬山（たかせやま）遺跡（ＳＡ）

第２・３次発掘調査報告書

本文・挿図　編

平成13年10月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

遺跡遠景（北西から）

ST9860　遺物出土状況（南から）

巻頭図版 2

2 次調査区全景（西から）

3 次調査区全景（西から）

3 次調査区全景（東から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、高瀬山遺跡サービスエリア地区（ＳＡ）の調査成果をまとめたものです。

高瀬山遺跡ＳＡは、山形県のほぼ中央部に位置する寒河江市にあります。寒河江市は西に月山、朝日の山々を連ね、北に葉山、南に蔵王を望みます。南部には母なる川、最上川が悠然とした流れを見せてくれます。

この度東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）の建設工事に伴い、工事に先だって高瀬山遺跡ＳＡの発掘調査を実施しました。

調査では、縄文時代、奈良・平安時代、中世の遺構や遺物が見つかりました。特に奈良・平安時代の竪穴建物跡と掘立柱建物跡の分布状況や、中世の建物跡の広がり方など、集落の形態を考える上で興味のある内容を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年10月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　村　　宰

例　　言

1　本書は、東北横断自動車道酒田線（寒河江～西川間）建設工事に係る「高瀬山遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は日本道路公団仙台建設局（現東北支社）の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　　高瀬山遺跡サービスエリア地区
　　遺跡番号　山形県遺跡番号429他
所　在　地　　山形県寒河江市大字柴橋字落衣他
調 査 主 体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター
受 託 期 間　　平成８年４月１日～平成11年３月31日
　　平成12年４月１日～平成14年３月31日
現 地 調 査　　平成８年８月１日～平成８年11月20日（第２次調査）
調査担当者　　調査第一課長　　佐藤　庄一
　　主任調査研究員　　阿部　明彦
　　調 査 研 究 員　　伊藤　邦弘
　　調 査 研 究 員　　菅原　哲文
　　調　　査　　員　　志田　純子
現 地 調 査　　平成９年５月７日～平成９年11月26日（第３次調査）
調査担当者　　調査第一課長　　佐藤　庄一
　　主任調査研究員　　佐藤　正俊
　　調 査 研 究 員　　伊藤　邦弘
　　調 査 研 究 員　　森谷　昌央
　　調 査 研 究 員　　向田　明夫
　　調　　査　　員　　志田　純子
　　調　　査　　員　　大泉壽太郎
　　調　　査　　員　　稲村　圭一
整理担当者　　調査第一課長　　佐藤　庄一（平成９・10年度）
　　主任調査研究員　　佐藤　正俊（平成９・10・12年度　現調査第三課長）
　　調 査 研 究 員　　伊藤　邦弘（平成９・10・12年度）
　　調 査 研 究 員　　森谷　昌央（平成９年度）
　　調 査 研 究 員　　向田　明夫（平成９年度）
　　調　　査　　員　　志田　純子（平成９年度）
　　調　　査　　員　　大泉壽太郎（平成９年度）

調　査　員　　稲村　圭一（平成９年度）

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形県寒河江建設事務所、西村山教育事務所、寒河江市、寒河江市教育委員会等関係機関からご協力いただいた。また、北野博司・真保昌弘・高橋　学・平川　南・村田晃一・山中敏史の各氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は伊藤邦弘が担当した。編集は須賀井新人が担当し、全体については佐藤正俊が監修した。

6　委託業務は下記の通りである。

基準点測量については、株式会社寒河江測量設計事務所に委託した。

遺構の写真測量･実測及び遺物実測については､株式会社シン技術コンサルに委託した。資料の理化学分析については株式会社パレオ・ラボ（珪藻化石・花粉化石・植物珪酸体・リン・カルシウム)、パリノ・サーヴェイ株式会社（リン・カルシウム・胎土分析）に委託した。

出土遺物保存処理は、株式会社吉田生物研究所に依託した。

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管してる。

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

ST…竪穴建物跡	SB…掘立柱建物跡	SE…井戸跡	SK…土坑
SD…溝跡	SQ…工房跡	SX…性格不明遺構	EU…土器埋設遺構
EL…カマド・炉	ED…遺構内土坑	EP…遺構内ピット	RP…登録土器
RQ…登録石器	RM…登録金属製品	P…土器	S…石

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3　報告書執筆基準は下記の通りである。

⑴　調査区地割図（第４図）・地形図（第７図）に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系による。ただし、遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

⑵　グリッドの南北軸は、Ｎ－22°30′－Ｅを測る。

⑶　遺構実測図は1/20、1/40、1/60、1/80、1/400他の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中のアミは焼土の範囲を示す。

⑷　遺物実測図・拓影図は、原則的に1/2、1/3、1/4、1/8、1/10で採録し、各々スケールを付した。

⑸　遺物観察表中の（　）内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

⑹　本文中の遺物番号は、遺物実測図、遺物観察表、図版とも共通のものとした。

⑺　遺構覆土の色調の記載については、1987年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 6
Ⅲ　調査の経緯
　1　第１次調査の概要 …… 8
　2　第２次調査の概要 …… 8
　3　第３次調査の概要 …… 8
Ⅳ　遺跡の概要
　1　基本層序 …… 12
　2　地　　形 …… 12
　3　遺構の分布 …… 21
Ⅴ　縄文時代の遺構と遺物
　1　竪穴住居跡 …… 22
　2　土器埋設遺構 …… 24
　3　土　　坑 …… 29
　4　土坑出土土器 …… 39
　5　包含層出土遺物 …… 47
　6　石　　器 …… 49
Ⅵ　奈良・平安時代の遺構と遺物
　1　竪穴建物跡 …… 55
　2　掘立柱建物跡 …… 170
　3　井 戸 跡 …… 200
　4　土　　坑 …… 211
　5　その他の出土遺物 …… 243
Ⅶ　中世の遺構と遺物
　1　竪穴建物跡 …… 244
　2　掘立柱建物跡 …… 245
　3　井 戸 跡 …… 263
　4　土　　坑 …… 273
Ⅷ　溝　　跡 …… 284
Ⅸ　調査のまとめ …… 303
報告書抄録 …… 308

表

表１　調査工程表 …… 9
表２　ST150出土土器観察表 …… 23
表３　EU9325・9916・9931・9917
761・9945出土土器観察表…… 27
表４　SK4・81・140・141・154
9904出土土器観察表 …… 31
表５　SK869出土土器観察表 …… 42
表６　土坑出土土器観察表…… 42
表７　包含層出土土器観察表…… 47
表８　石器計測表…… 49
表９　ST34出土土器観察表 …… 56
表10　ST9001出土土器観察表 …… 61
表11　ST9002出土土器観察表 …… 64
表12　ST9003出土土器観察表 …… 65
表13　ST9004出土土器観察表 …… 68
表14　ST9005出土土器観察表 …… 69
表15　ST9007出土土器観察表 …… 74
表16　ST9008出土土器観察表 …… 75
表17　ST9011出土土器観察表 …… 75
表18　ST9514出土土器観察表 …… 82
表19　ST9525出土土器観察表 …… 91
表20　ST9559出土土器観察表 …… 92
表21　ST9561出土土器観察表 …… 95
表22　ST9590出土土器観察表 …… 96
表23　ST9591出土土器観察表 …… 98
表24　ST9607出土土器観察表 ……100
表25　ST9728出土土器観察表 ……107
表26　ST9816出土土器観察表 ……108
表27　ST9825出土土器観察表 ……112
表28　ST9826出土土器観察表 ……114
表29　ST9829出土土器観察表 ……118
表30　ST9834出土土器観察表 ……119
表31　ST9835出土土器観察表 ……120
表32　ST9846出土土器観察表 ……123
表33　ST9847出土土器観察表 ……124
表34　ST9860出土土器観察表 ……133
表35　SD9866出土土器観察表 ……135
表36　ST9861出土土器観察表 ……137
表37　ST9867出土土器観察表 ……140
表38　ST996・9868出土土器観察表 …146
表39　ST9869出土土器観察表 ……147
表40　ST9870出土土器観察表 ……151
表41　ST9871出土土器観察表 ……156
表42　ST9874出土土器観察表 ……158
表43　ST9875出土土器観察表 ……158
表44　ST9872出土土器観察表 ……160
表45　ST9873出土土器観察表 ……162
表46　ST9891出土土器観察表 ……165
表47　ST9895出土土器観察表 ……167
表48　ST9962出土土器観察表 ……169
表49　SB677出土土器観察表 ……180
表50　SB959出土土器観察表 ……180
表51　SB9515出土土器観察表 ……186
表52　SB9527出土土器観察表 ……189
表53　SB9548出土土器観察表 ……192
表54　柱穴出土土器観察表……199
表55　SE562井戸枠計測表 ……207
表56　SE764出土土器観察表 ……209
表57　SE9606出土土器観察表 ……210
表58　SK646出土土器観察表 ……211
表59　SK647出土土器観察表 ……211
表60　SK652出土土器観察表 ……214
表61　SK9015出土土器観察表 ……216
表62　SK9018出土土器観察表 ……216

表63　SK9020出土土器観察表 …… 216
表64　SK9324出土土器観察表 …… 220
表65　SK9604出土土器観察表 …… 224
表66　SK9605出土土器観察表 …… 224
表67　SK9613出土土器観察表 …… 224
表68　SK9820出土土器観察表 …… 227
表69　SK9876出土土器観察表 …… 229
表70　SK9888出土土器観察表 …… 233
表71　土坑出土土器観察表 …… 234
表72　包含層出土土器観察表　…… 241
表73　包含層出土土器観察表　…… 243
表74　SB9971出土土器観察表 …… 255
表75　SB9211出土土器観察表 …… 258
表76　SE9961出土土器観察表 …… 264
表77　SE9961出土木製品観察表 …… 264
表78　SE9961井戸枠計測表 …… 268
表79　SE9800出土土器観察表 …… 269
表80　SE9890出土土器観察表 …… 270
表81　SE9160出土土器観察表 …… 277
表82　SD9581出土土器観察表 …… 287
表83　SD9580出土土器観察表 …… 289
表84　SD4002・7085他
　　出土土器観察表 …… 294
表85　溝跡出土土器観察表 …… 300
表86　グリッド出土土器観察表 …… 301
表87　金属製品観察表 …… 302

挿　図

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　地形分類図 …… 4
第３図　土壌分類図 …… 5
第４図　調査区地割図 …… 7
第５図　１次調査概要図 …… 10
第６図　２次・３次調査概要図 …… 11
第７図　地形と基本層序 …… 13
第８図　遺構配置図１ …… 14
第９図　遺構配置図２ …… 15
第10図　遺構配置図３ …… 16
第11図　遺構配置図４ …… 17
第12図　遺構配置図５ …… 18
第13図　遺構配置図６ …… 19
第14図　遺構配置図７ …… 20
第15図　遺構配置図８ …… 21
第16図　縄文時代主要遺構分布図 …… 22
第17図　ST150・出土遺物 …… 23
第18図　EU9931・9739・9325
　　9916・出土遺物 …… 25
第19図　EU9917・出土遺物 …… 26
第20図　EU761・出土遺物 …… 27
第21図　EU9945・出土遺物 …… 28
第22図　SK3・4・12・14・15
　　16・139・143・出土遺物 …… 30
第23図　SK81・出土遺物 …… 31
第24図　SK140・141・142・144
　　146・147・出土遺物 …… 34
第25図　SK140出土遺物 …… 35
第26図　SK154・出土遺物 …… 36
第27図　SK9904・出土遺物 …… 37
第28図　SK9600 …… 38
第29図　SK9913 …… 39
第30図　SK9908・9909 …… 40
第31図　SK869出土遺物 …… 41
第32図　土坑出土土器（縄文）1 …… 43
第33図　土坑出土土器（縄文）2 …… 44

第34図　土坑出土土器（縄文）3 …… 45
第35図　包含層出土土器（縄文）1 …… 46
第36図　包含層出土土器（縄文）2 …… 48
第37図　石器実測図 1 …… 50
第38図　石器実測図 2 …… 51
第39図　石器実測図 3 …… 52
第40図　石器実測図 4 …… 53
第41図　石器実測図 5 …… 54
第42図　竪穴建物跡分布図（古代） …… 55
第43図　ST34・出土遺物 …… 56
第44図　ST532 …… 57
第45図　ST9001 …… 59
第46図　ST9001出土遺物 1 …… 60
第47図　ST9001出土遺物 2 …… 61
第48図　ST9002 …… 63
第49図　ST9002出土遺物 …… 64
第50図　ST9003 …… 66
第51図　ST9003出土遺物 …… 67
第52図　ST9004・出土遺物 …… 68
第53図　ST9005・出土遺物 …… 70
第54図　ST9006 …… 71
第55図　ST9007 …… 73
第56図　ST9007出土遺物 …… 74
第57図　ST9008・9011 …… 76
第58図　ST9008・9011出土遺物 …… 77
第59図　ST9513 …… 79
第60図　ST9514・SB9679 …… 81
第61図　ST9514出土遺物 …… 82
第62図　ST9525 …… 84
第63図　ST9525遺物分布図 …… 85
第64図　ST9525出土遺物 1 …… 87
第65図　ST9525出土遺物 2 …… 88
第66図　ST9525出土遺物 3 …… 89
第67図　ST9525出土遺物 4 …… 90
第68図　ST9559 …… 93
第69図　ST9559出土遺物 …… 94
第70図　ST9561・出土遺物 …… 95
第71図　ST9590・出土遺物 …… 97
第72図　ST9591・出土遺物 …… 99
第73図　ST9607 …… 101
第74図　ST9607遺物分布図 …… 102
第75図　ST9607出土遺物 1 …… 103
第76図　ST9607出土遺物 2 …… 104
第77図　ST9728 …… 105
第78図　ST9728出土遺物 1 …… 106
第79図　ST9728出土遺物 2 …… 107
第80図　ST9816 …… 109
第81図　ST9816出土遺物 …… 110
第82図　ST9825 …… 112
第83図　ST9825出土遺物 …… 113
第84図　ST9826 …… 115
第85図　ST9826出土遺物 …… 116
第86図　ST9829・出土遺物 1 …… 117
第87図　ST9829出土遺物 2 …… 118
第88図　ST9834・出土遺物 …… 119
第89図　ST9835・出土遺物 …… 121
第90図　ST9846 …… 122
第91図　ST9846出土遺物 …… 123
第92図　ST9847・出土遺物 …… 125
第93図　ST9857 …… 126
第94図　ST9859 …… 127
第95図　ST9860 …… 129
第96図　EL235
ST9860出土遺物 1 …… 130
第97図　ST9860出土遺物 2 …… 131
第98図　ST9860出土遺物 3 …… 133
第99図　SD9866 …… 134
第100図　SD9866出土遺物 …… 136
第101図　ST9861 …… 138
第102図　ST9861出土遺物 …… 139
第103図　ST9867 …… 141
第104図　ST9867出土遺物 …… 142

第105図　ST996・9868 …… 144
第106図　ST996・9868出土遺物１ … 145
第107図　ST996・9868出土遺物２ … 146
第108図　ST9869 …… 148
第109図　ST9869出土遺物 …… 149
第110図　ST9870・出土遺物１ …… 150
第111図　ST9870出土遺物２ …… 151
第112図　ST899・9871
9874・9875 …… 153
第113図　ST899・9874土層断面 …… 154
第114図　EL247・248・249 …… 155
第115図　ST9871出土遺物 …… 156
第116図　ST9874出土遺物 …… 157
第117図　ST9875出土遺物 …… 158
第118図　ST9872 …… 159
第119図　ST9872出土遺物 …… 160
第120図　ST9873 …… 162
第121図　ST9873出土遺物 …… 163
第122図　ST9891・出土遺物 …… 165
第123図　ST9895・出土遺物 …… 166
第124図　ST9900 …… 168
第125図　ST9962・出土遺物 …… 169
第126図　掘立柱建物跡分布図（古代）　170
第127図　SB535…… 172
第128図　SB577…… 173
第129図　SB595…… 174
第130図　SB557・567 …… 176
第131図　SB616…… 177
第132図　SB677・出土遺物
SB958…… 179
第133図　SB959・出土遺物
SB975…… 181
第134図　SB986・995 …… 183
第135図　SB966…… 184
第136図　SB997…… 185
第137図　SB9502
SB9515・出土遺物 …… 187
第138図　SB9526 …… 188
第139図　SB9527・出土遺物 …… 189
第140図　SB9648 …… 191
第141図　SB9548・出土遺物 …… 192
第142図　SB9562 …… 194
第143図　SB9837・9999 …… 196
第144図　柱穴出土遺物１ …… 198
第145図　柱穴出土遺物２ …… 199
第146図　SE562・出土遺物　…… 201
第147図　SE562井戸枠１　…… 202
第148図　SE562井戸枠２　…… 203
第149図　SE562井戸枠３　…… 204
第150図　SE562井戸枠４　…… 205
第151図　SE562井戸枠５　…… 206
第152図　SE562井戸枠６　…… 207
第153図　SE764・出土遺物１　…… 208
第154図　SE764・出土遺物２　…… 209
第155図　SE9606・出土遺物 …… 210
第156図　SK646・出土遺物　…… 212
第157図　SK647・出土遺物　…… 213
第158図　SK652・出土遺物　…… 215
第159図　SK9015・出土遺物 …… 217
第160図　SK9018・9019・9020 …… 219
第161図　SK9324・出土遺物 …… 221
第162図　SK524　…… 222
第163図　SK9330・9337
SK9338・9348　…… 223
第164図　SK9596・SK9597
SK9604・出土遺物 …… 225
第165図　SK9605
K9613・出土遺物　…… 226
第166図　SK9820・出土遺物 …… 228
第167図　SK9876・出土遺物１ …… 230
第168図　SK9876出土遺物２ …… 231
第169図　SK9876出土遺物３ …… 232

第170図　SK9888・出土遺物
SK9892・9893 …… 233
第171図　土坑出土遺物（古代）1 …… 235
第172図　土坑出土遺物（古代）2 …… 236
第173図　包含層出土遺物（古代）1 … 237
第174図　包含層出土遺物（古代）2 … 238
第175図　包含層出土遺物（古代）3 … 239
第176図　包含層出土遺物（古代）4 … 240
第177図　包含層出土遺物（古代）5 … 242
第178図　中世主要遺構分布図…… 244
第179図　ST9010 …… 245
第180図　SB186・195・206 …… 246
第181図　SB768…… 247
第182図　SB815…… 248
第183図　SB824・845 …… 249
第184図　SB943…… 250
第185図　SB9731 …… 251
第186図　SB9750 …… 252
第187図　SB9762 …… 253
第188図　SB9971・出土遺物 …… 255
第189図　SB9971土層断面 …… 256
第190図　SB9220
SB9211・出土遺物 …… 258
第191図　SB9264 …… 259
第192図　SB9273 …… 260
第193図　SB9290 …… 261
第194図　SB9316 …… 262
第195図　SE9961・出土遺物 …… 264
第196図　SE9961井戸枠1 …… 265
第197図　SE9961井戸枠2 …… 266
第198図　SE9961井戸枠3 …… 267
第199図　SE9961井戸枠4 …… 268
第200図　SE9159・
SE9800・出土遺物 …… 269
第201図　SE9890・出土遺物 …… 270
第202図　SE762・864・9598 …… 272
第203図　SK763・9012 …… 273
第204図　SK9013・9014 …… 275
第205図　SK9016・9017 …… 276
第206図　SK9160・出土遺物
SK9200 …… 277
第207図　SK9201・9202・9209
SK9203・9254・9301 …… 279
第208図　SK9372・9373
SK9593・9594 …… 281
第209図　SQ9009・SK9199 …… 283
第210図　溝跡分布図…… 284
第211図　SD9581 …… 285
第212図　SD9581出土遺物 …… 286
第213図　SD9580 …… 288
第214図　SD9580出土遺物 …… 289
第215図　SD4002 …… 291
第216図　SD7085 …… 292
第217図　SD4002・7085出土遺物　… 293
第218図　SD9165 …… 295
第219図　SD9587 …… 296
第220図　溝跡出土遺物1 …… 297
第221図　溝跡出土遺物2 …… 298
第222図　溝跡出土遺物3 …… 299
第223図　グリッド出土遺物 …… 301
第224図　金属製品集成図 …… 302
第225図　調査区全域図 …… 304
第226図　高瀬山SA・2期遺構全図 …… 305

Ⅰ　調査に至る経過

高瀬山遺跡は、古くから古墳群の存在が知られており、大正時代の調査ではすでに十数基の古墳が確認されていた。しかし、残念ながらその後の開墾などで古墳は失われ続けた。そんな中の昭和７年（1932)、ぶどう園の造園中に現れた石槨から直刀が出土し、これを機に発掘調査が行われることになった。その「高瀬山古墳」は、昭和30年（1955）に県史跡に指定された。

集落跡としての高瀬山遺跡が注目されるようになったのは、昭和55年（1980）の温泉湧出を契機にした、高瀬山周辺の開発計画に伴う分布調査による。それまでは、高瀬山遺跡と高瀬山B遺跡の２地点が縄文時代の集落跡として登録されていたが、寒河江市教育委員会の調査の結果、12の地点で遺構、遺物の集中地区が確認されたのである。

昭和57年（1982)、各種開発に伴い、寒河江市教育委員会が調査主体で、高瀬山J遺跡が調査され、次いで昭和59～61年（1984～1986）には高瀬山B・K・L遺跡が調査された。また、高瀬山K遺跡は山形県教育委員会も昭和62・63年（1987・1988）に発掘調査を行っている。

平成元年（1989)、東北横断自動車道酒田線建設が当地区に計画されたことから、山形県教育委員会では、調整を図る目的で、平成元年～４年（～1992）にかけて分布調査を実施した。その結果、計画路線中約1.6㎞に渡って、遺構や遺物が確認され、高瀬山遺跡の範囲は大幅に修正されることになった。山形県教育委員会ではこの結果を基に日本道路公団と協議を行い、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、日本道路公団の委託を受けて発掘調査を行う事となった。

高瀬山遺跡は、その調査対象面積が広範囲におよぶことから、調査区域を大きく３地区に分けて行うこととした。調査区域は各々１期、２期、SA（サービスエリア地区）と呼称した。なお、高瀬山遺跡の東側では、三条遺跡が、西側では落衣長者屋敷遺跡が調査され、SAの南側一帯ではハイウェイ・オアシス建設に伴う発掘調査が行われた。

発掘調査に至までの協議及び、各地区の現地調査工程は以下の通りである。

	【第２次調査】	【第３次調査】
◆日本道路公団東北支社長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、東北横断自動車道酒田線　建設工事の実施に伴う地区内の埋蔵文化財発掘調査の依頼	（H８/１/11）	（H９/１/24）
◆県埋蔵文化財センター理事長より日本道路公団東北支社長あてに、発掘調査を実施すること　及び経費見積りの回答	（H８/２/９）	（H９/２/10）
◆日本道路公団東北支社と県埋蔵文化財センターとで「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結	（H８/４/１）	（H９/４/１）

調査工程	H６（1994）	H７（1995）	H８（1996）	H９（1997）
高瀬山遺跡１期	１次	２次	３次	４次
高瀬山遺跡２期	１次	２次	３次	
高瀬山遺跡SA	１次		２次	３次

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

高瀬山遺跡が所在する寒河江市は、山形県内陸部のほぼ中央に開けた山形盆地の西部に位置する。東に天童市、西に大江町、北は河北町、南は中山町に隣接する。面積約140㎢のおよそ３分の２を山林が占める寒河江市は、その北西部に標高1,000ｍを超える葉山や月山などの山々が連なる。寒河江市の地勢は、山地・火山地、丘陵地等がおよそ60％を占めるが、約40％は台地・段丘または低地が占める。全県下では75％以上が、山地他を占めるのに対して、比較的バランスがとれている地区と言える。

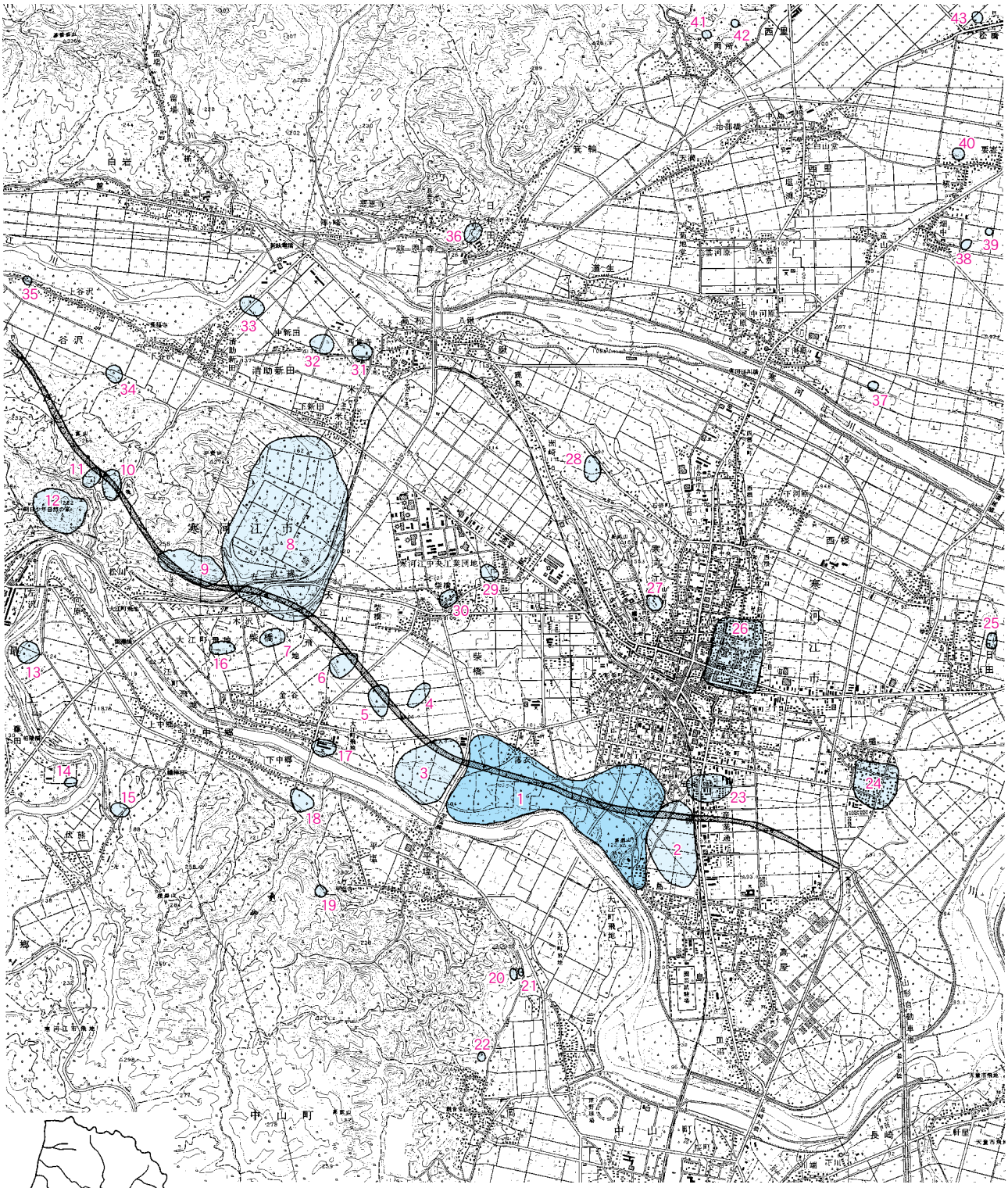
山形県内を貫く最上川は、本流の長さが229㎞、流域面積は7,040㎢に及び、長さでは全国第７位、水量では全国第４位を記録する。寒河江市は、この最上川のほぼ中流域に位置する。最上川は、寒河江市西部で、南から流れを転じ、市の南端を東流した後、同市南東端で再びその流れを北に転じ、平野部の北を東流する寒河江川と合流する。平野部の大部分は寒河江川の開析扇状地が占め、東部は最上川が自然堤防と後背湿地を形成している。この二つの河川が造り出した平野に市街地が広がる。

この周辺の気候は、比較的安定しており、山形県内の平均的な数値に近い。気温は年平均気温約10度で、１月の－４度から８月の26度まで、約30度の開きがある。年間降水量は約1,460㎜で、１ケ月当たり100㎜前後の降水量があるが、梅雨と秋の長雨の７月、11月には200㎜を超える。また、降雪量は、１月から３月までの平均で約70㎝である。降水日数は、１月～３月、11、12月が20日を超え、冬季間はぐずついた天気が多いことを裏付ける。日照時間は、年間で約2,034時間である。最も少ない11月で約81時間、最も多い８月で約296時間である。風は西から吹く日が多く、風速は年平均で秒速約1.3ｍである。

高瀬山遺跡は、寒河江市市街の南部に所在する。遺跡東端に位置する所謂高瀬山は、標高約122ｍの小高い丘の感を呈する。周辺との比高差は20～30ｍである。高瀬山遺跡を取巻く周辺の地形は、第２図に見られるように、東側に河間低地や旧河道を残す後背湿地が広がり、西側にも旧河道を随所に残す低位の段丘が広がる。三条遺跡で検出された水田跡は、東側に広がる河間低地に営まれたものと考えられる。一方、高瀬山は以前から断層地塁であることが指摘されてきた。1997年の横断道建設では、高瀬山を東西に掘削した際に断層露頭があらわれた。詳細な観察の結果、沖積世に活動している活断層であることが報告された（阿子島1999）。高瀬山遺跡SAや落衣長者屋敷遺跡は、この西側に広がる段丘上に立地する。

周辺の土壌については、第３図に見られるように、細粒褐色低地土壌に属し、土質は粘質で、通常畑や果樹園として利用されることが多く、一般的に生産力も高いとされる。

植生は、検出遺構内の土壌を分析した結果、ヨモギ属、クワ科、イネ科あるいはアズマネザサ等が開けた草地に繁茂し、チシマザサ、チマキザサ等を林床とするブナを主とした森林がいたるところに点在した景観が読み取られる。その後切り開かれた土地は主に果樹園や水田として利用されてきたが、近年では北側の市街地化が進み、昔の面影を急速に失いつつある。



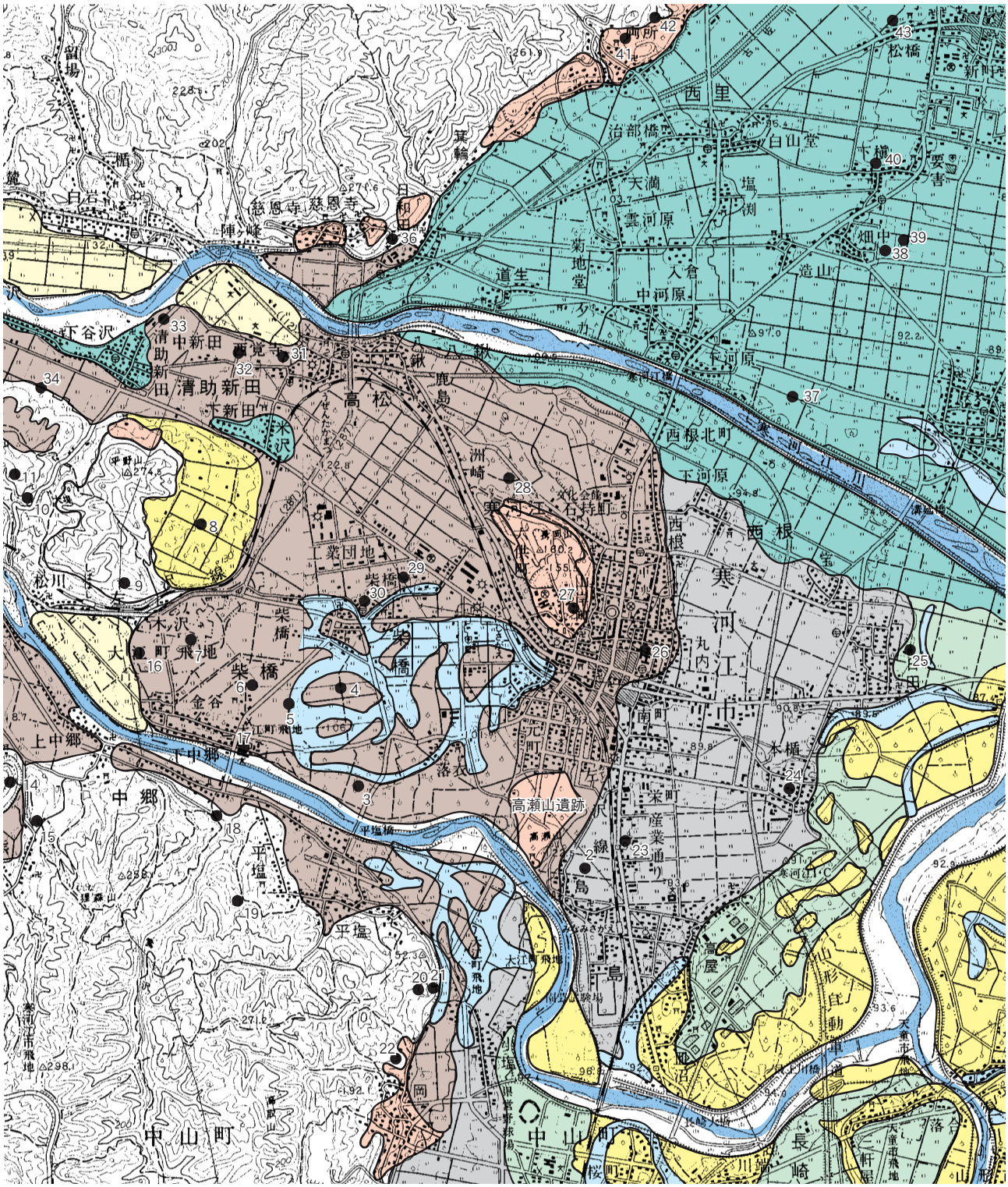
	遺跡名	遺跡番号	時　代
1	高瀬山遺跡	430	旧石器～近世
2	三条遺跡	423	縄文・弥生～中世
3	落衣長者屋敷遺跡	433	縄文・奈良～中世
4	高松Ⅰ遺跡	H元登録	縄文・平安
5	高松Ⅱ遺跡	H元登録	縄文・奈良～中世
6	高松Ⅲ遺跡	H元登録	平安
7	高松Ⅳ	H元登録	平安
8	平野山古窯跡群	440	縄文・奈良・平安
9	木ノ沢楯跡	H７登録	平安・中世
10	富山遺跡	H元登録	旧石器
11	富山２遺跡	H７登録	奈良・平安
12	左沢城跡	324-001	南北朝～安土桃山
13	向原遺跡	437	縄文
14	藤田原遺跡	542	縄文
15	明神山遺跡	438	旧石器

	遺跡名	遺跡番号	時　代
16	金谷原遺跡	436	旧石器
17	柴橋遺跡		縄文
18	うぐいす沢遺跡	439	縄文
19	平塩経塚	434	中世
20	松岡山遺跡	419	縄文
21	塩ノ原遺跡	418	縄文
22	松荷遺跡	415	奈良・平安
23	石田遺跡	421	縄文・弥生
24	本楯城跡	428	中世
25	新田館跡	427	中世
26	寒河江城跡	424	中世
27	山岸遺跡	426	縄文
28	石持原遺跡	425	縄文
29	柴橋蛇塚遺跡遺跡	89(市No.)	縄文
30	柴橋窯跡	435	平安

	遺跡名	遺跡番号	時　代
31	西覚寺遺跡	S63登録	旧石器
32	富沢Ⅱ遺跡	S62登録	縄文・平安
33	富沢Ⅰ遺跡	S62登録	縄文
34	中谷沢遺跡		縄文
35	谷沢遺跡	441	縄文
36	日和田遺跡	442	縄文
37	不動木遺跡	452	奈良・平安
38	畑中Ａ遺跡	453	奈良・平安
39	畑中Ｂ遺跡	454	奈良・平安
40	下槙遺跡	455	古墳
41	権現森遺跡	460	旧石器・縄文
42	裏田遺跡	461	縄文
43	若宮八幡遺跡	444	奈良・平安

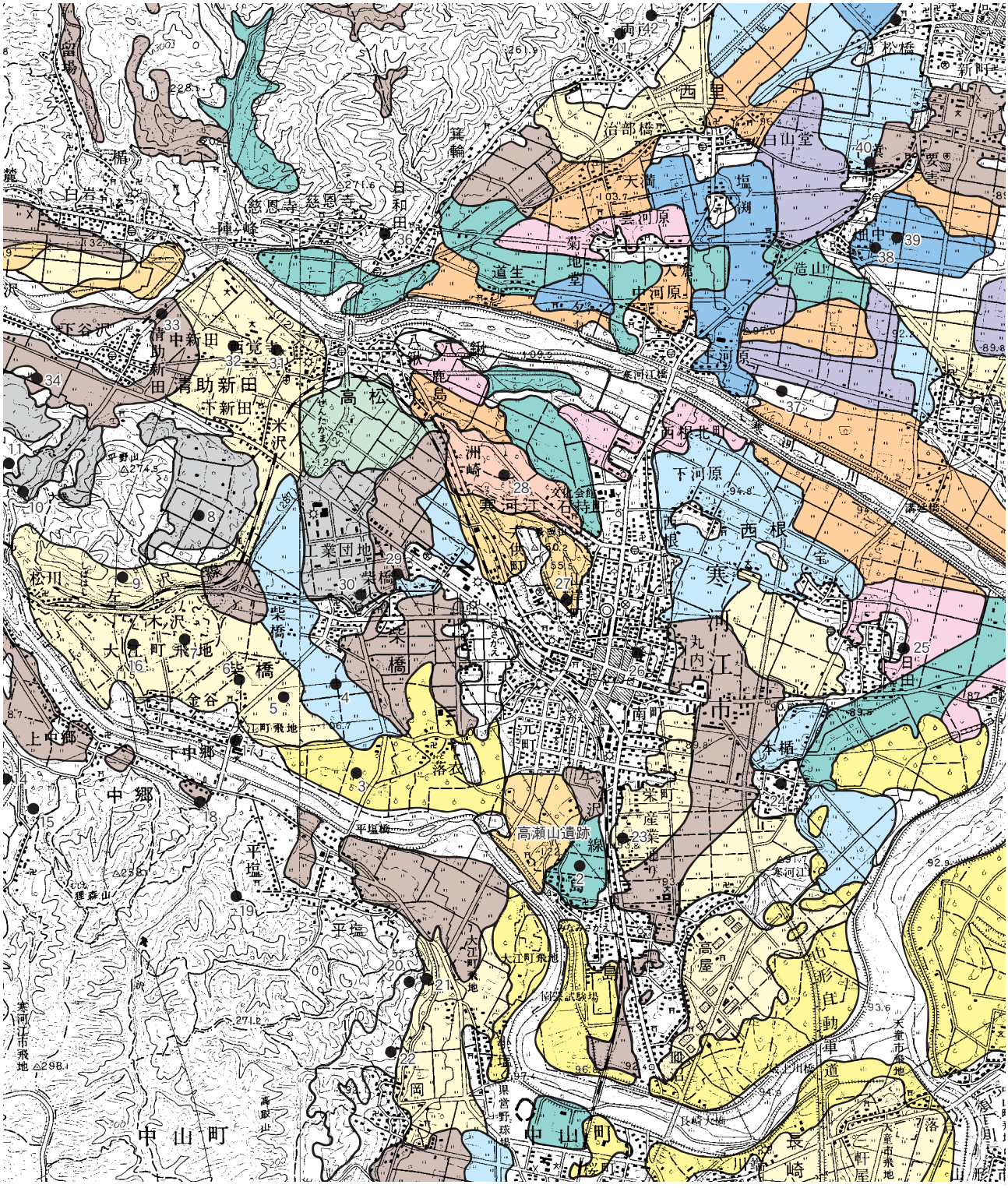
国土地理院発行
25,000分の１地形図
「海味」「谷地」「左沢」「寒河江」
を½縮小して使用

第１図　遺跡位置図（S＝１：50000）



山形県発行「土地分類基本調査」左沢1986、楯岡1981より
（国土地理院発行５万分の１地形図「左沢」「楯岡」を使用）

第２図　地形分類図（S＝１：50000）



第３図　土壌分類図（S＝１：50000）

2　歴史的環境

高瀬山遺跡を中心とした、半径５㎞ほどの中には、約40ケ所の遺跡が分布する（第１図）。時代は旧石器から近世まで幅広く、種別も集落跡、生産跡、城館跡等と多様である。最も多いのは縄文時代の集落跡で、23遺跡を数える。次いで奈良・平安時代の集落跡が16ケ所で確認されている。旧石器時代の遺跡も６ケ所で知られている。この中では富山遺跡（10)、金谷原遺跡（16)、そして高瀬山遺跡（１）等が調査され、金谷原遺跡から出土した石器により、東北日本の石刃技法やナイフ型石器等の研究が進められた。

縄文時代に入ると遺跡数は急増する。しかし、周辺には草創期、早期の遺跡は発見されておらず、前期の調査例も現在のところ、高瀬山遺跡（１期）のみである。中期以降は、柴橋遺跡(17)、うぐいす沢遺跡（18）等が調査されている。

弥生時代の遺跡は激減する。現在のところ周辺では３遺跡しか知られていない。石田遺跡(23）からは、発掘調査で出土した再葬墓に用いられた前期の土器と、大正10年（1921）に採取品された後期の土器が伝わる。古墳時代では、Ⅰ章で述べた高瀬山古墳が知られる。遺跡数は４ケ所と少ないが、近年高瀬山遺跡でも前期と考えられる土器を伴う住居跡が検出されており、弥生時代、古墳時代の集落跡は今後更に見つかる可能性は高いと考えられる。

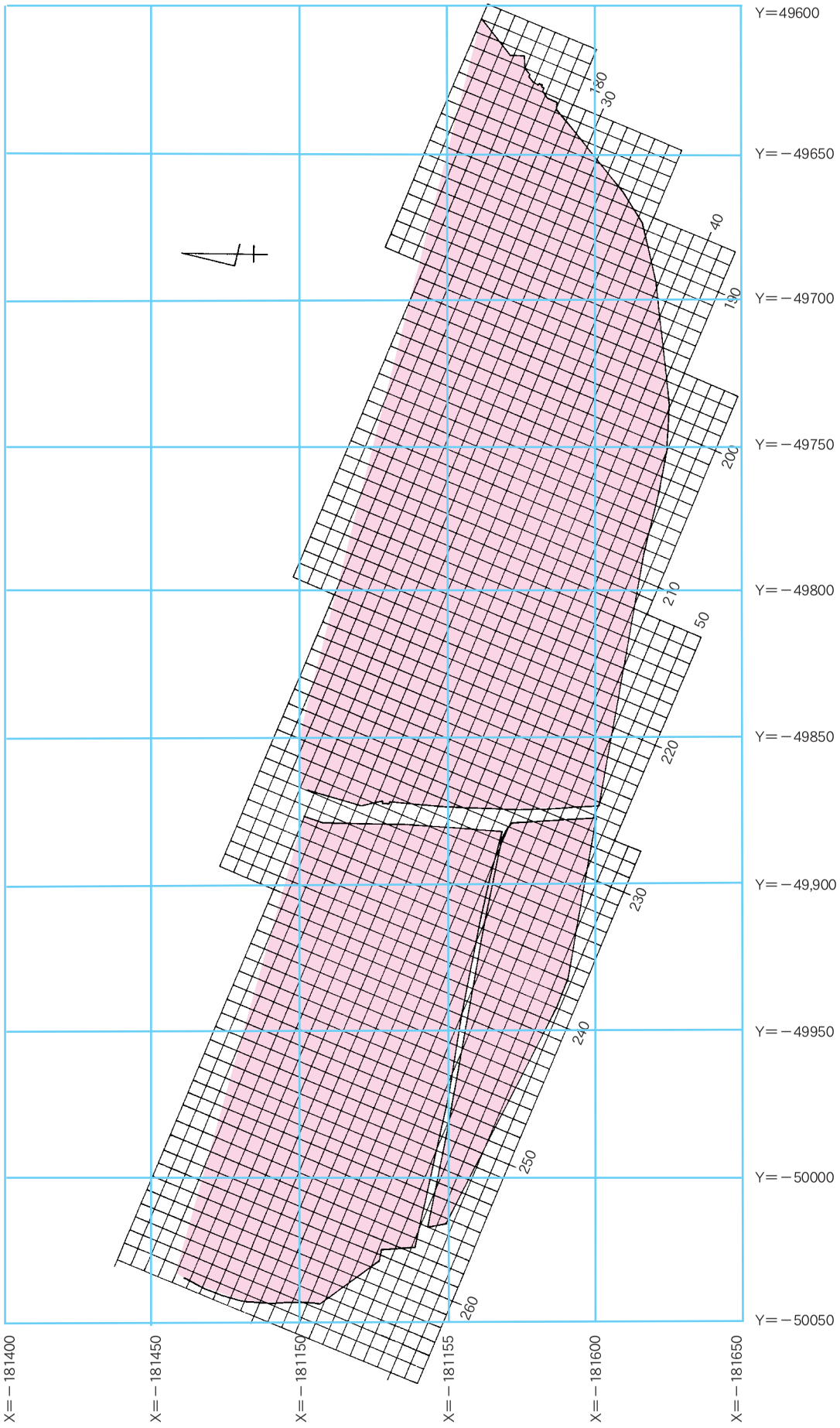
高瀬山遺跡SAの主体となる、奈良・平安時代の周辺地域は次のような経緯を辿る。

和銅５年（712）に出羽国が建国されると、それ以前は陸奥国に属していた現在の村山地方は、出羽国最上郡に編入された。その後仁和２年（886）に最上郡を２郡に分けて村山郡が成立する。高瀬山遺跡が所在する寒河江市は、この仁和２年以降、村山郡域に入ったと考えられている。『和名類聚抄』によると、村山郡には、大山、長岡、村山、大倉、梁田、徳有の六郷からなっている。寒河江市は、この中の長岡郷に比定する考えが有力である。

高瀬山遺跡の周辺には、旧石器時代から中世に至まで数多くの遺跡が点在する。広範囲にわたる高瀬山遺跡にも、旧石器や縄文、古墳、中世など重なりながら、あるいは地点を変えて各時代の遺構が存在する。また、東に隣接する三条遺跡や西に隣接する落衣長者屋敷遺跡などは、大きくとらえれば高瀬山遺跡と一連の流れの中にあると言える。

三条遺跡は奈良・平安時代を主体とした遺跡で、約450点以上もの墨書土器や木製品の出土に合わせて、東側には水田が営まれていたことも確認され注目された。一方、落衣長者屋敷遺跡では西へ行くにつれて竪穴建物等の遺構が希薄になり、集落の西端部の印象を与える。変わって石組の井戸跡等中世の所産である遺構が顕著にあらわれてくる。遺跡名は室町期に築城されたと考えられている、一辺約100ｍの方形短郭である落衣長者屋敷に近接することに由来する。北西約２㎞の所には、村山西部丘陵地域古窯跡群中最大の規模を持つ平野山古窯跡群がある。現在まで14地点で、窯跡あるいは散布地が確認されている。平成７年には、同事業により第12地点の調査が行われた。12基の窯跡が検出され、出土した遺物から８世紀後半と９世紀中～末にかけて操業されていたと考えられている。さらに、西にある富山２遺跡や木ノ沢楯跡の竪穴建物跡などは、９世紀代の須恵器工人と関連する遺跡としてとらえられている。

高瀬山遺跡もこれら周辺遺跡と関連が深く、地理的要因も考慮した検討が必要と考えられる。



第４図　調査区地割図（S＝１：2000）

Ⅲ　調査の経緯

1　第１次調査の概要

第１次調査は、本調査に入る前の予備調査である。高瀬山遺跡２期並びにSA地区について行ったもので、事業予定面積145,900m²の約4.4％にあたる6,400m²に及んだ。その結果縄文時代の土坑や、奈良、平安時代の竪穴建物跡等2,050基の遺構が検出された。しかし、その内容は、小柱穴が1,700基以上を数えるのに対し、竪穴建物跡は25棟にとどまった。また、分布状況も中央部より北側に集中する傾向が伺えた。

SA地内に関しては、34本のトレンチが設定され（第５図）、遺構の確認が行われた。調査区の主たる部分は１段低い地形になることから、遺構の密度はそれ程多くないものと想定された。

2　第２次調査の概要

第２次調査は、サービスエリア西側の一部について行った。高瀬山遺跡２期、14区の南に位置する（第６図）。調査面積は10,400m²である。平成８年８月1日から11月20日までの述べ71日間行われた。

縄文時代の土器埋設遺構や奈良、平安時代の竪穴建物跡の他、中世の掘立柱建物跡や井戸跡などが検出され、遺構の分布が希薄と考えられていた低地部分に関しても確実に遺構が広がることを確認した。また、これらの遺構の検出により、当初未確認であった中世の集落跡も存在したことが明かとなった。出土遺物は須恵器、土師器を主体としたもので、整理箱で28箱の出土である。

調査の工程は以下のとおりである（表１）。

８月１日～８月23日　　重機械による表土除去
８月１日～９月　２日　　面整理作業
９月２日～９月　５日　　委託業務　基準点測量
９月２日～11月19日　　遺構精査
９月26日・11月13日～11月14日　　委託業務　空中写真撮影
11月２日　　調査説明会
11月18日　　委託業務　理化学分析

3　第３次調査の概要

第３次調査は、２次調査で残った分の26,000m²を調査対象とした（第６図）。調査期間は、平成９年５月7日から11月26日までの、述べ133日間である。

調査では、第２次調査を引き継ぐ内容で、奈良、平安時代の竪穴建物が段丘上に展開し、低地にも中世の集落が広がる事を確認した。更に南側には再び奈良、平安時代の遺構が検出され、HO地区への広がりを捉えられた。出土遺物は、183箱である。

調査の工程は以下のとおりである（表１）。

５月９日～６月16日　　重機械による表土除去

５月９日～7月２日　　面整理作業

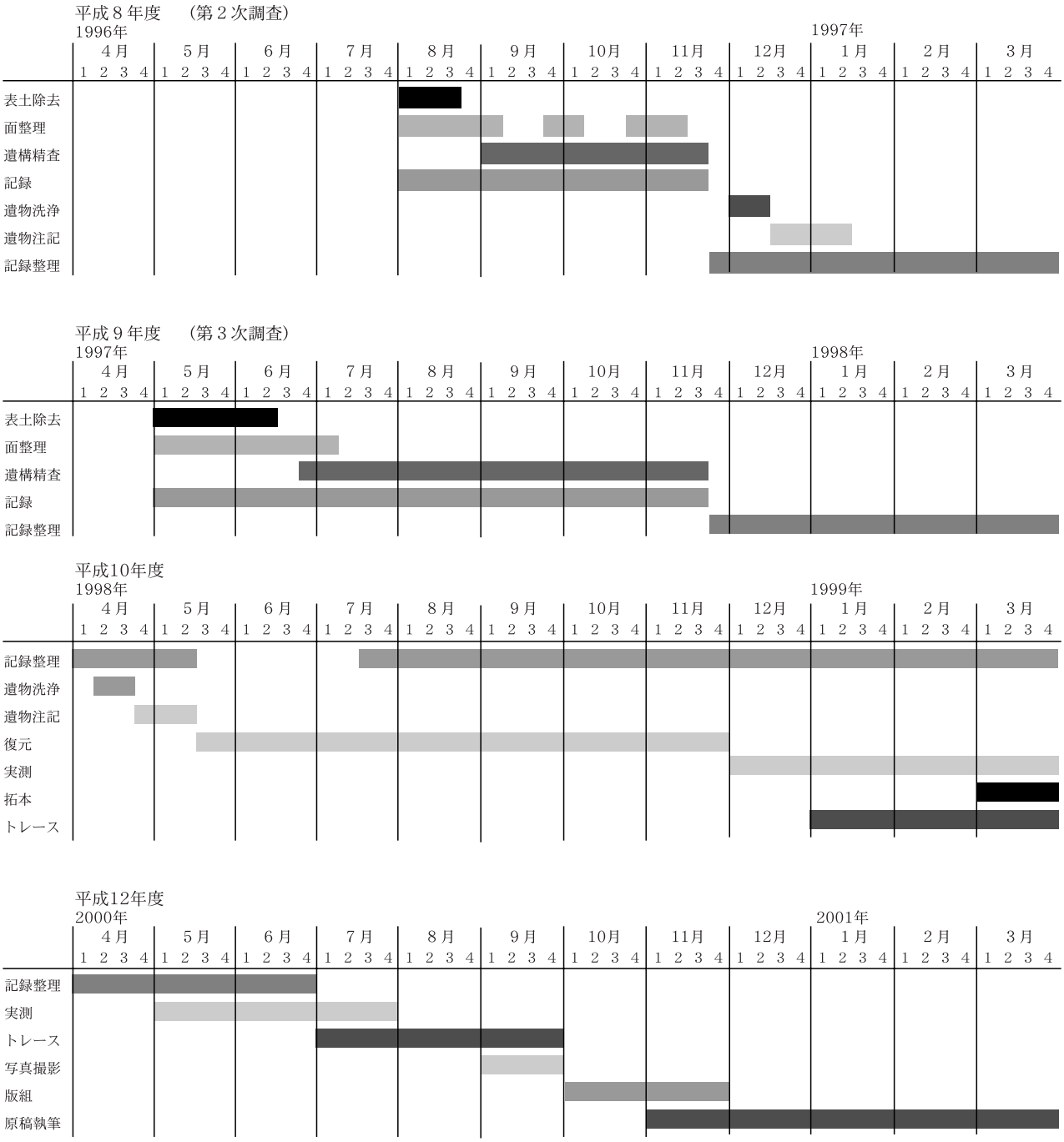
５月23日・26日・30日・６月19日・20日　　委託業務　基準点測量

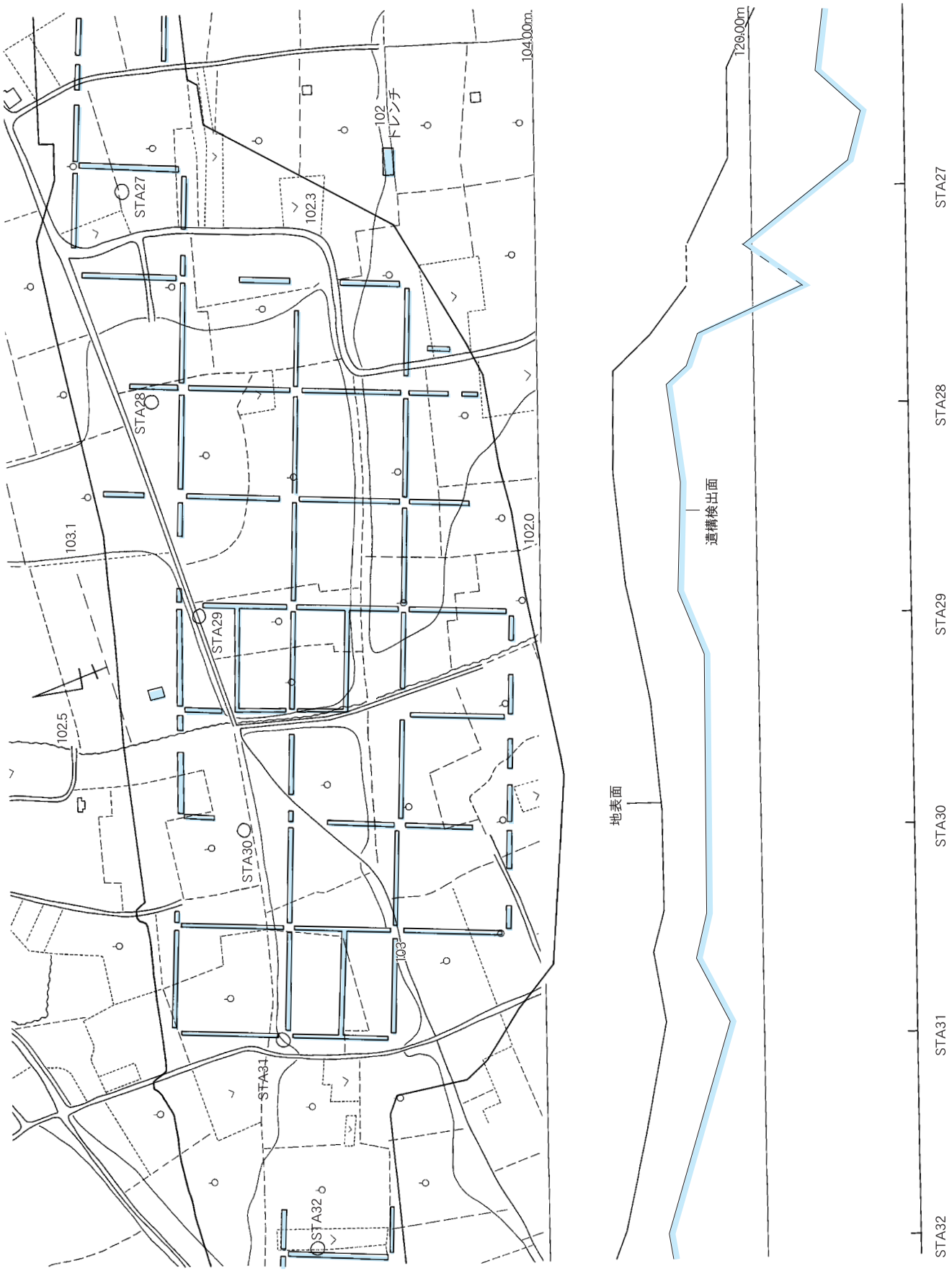
６月23日～11月26日　　遺構精査

６月19日・９月３日・11月11日～14日　　委託業務　空中写真測量

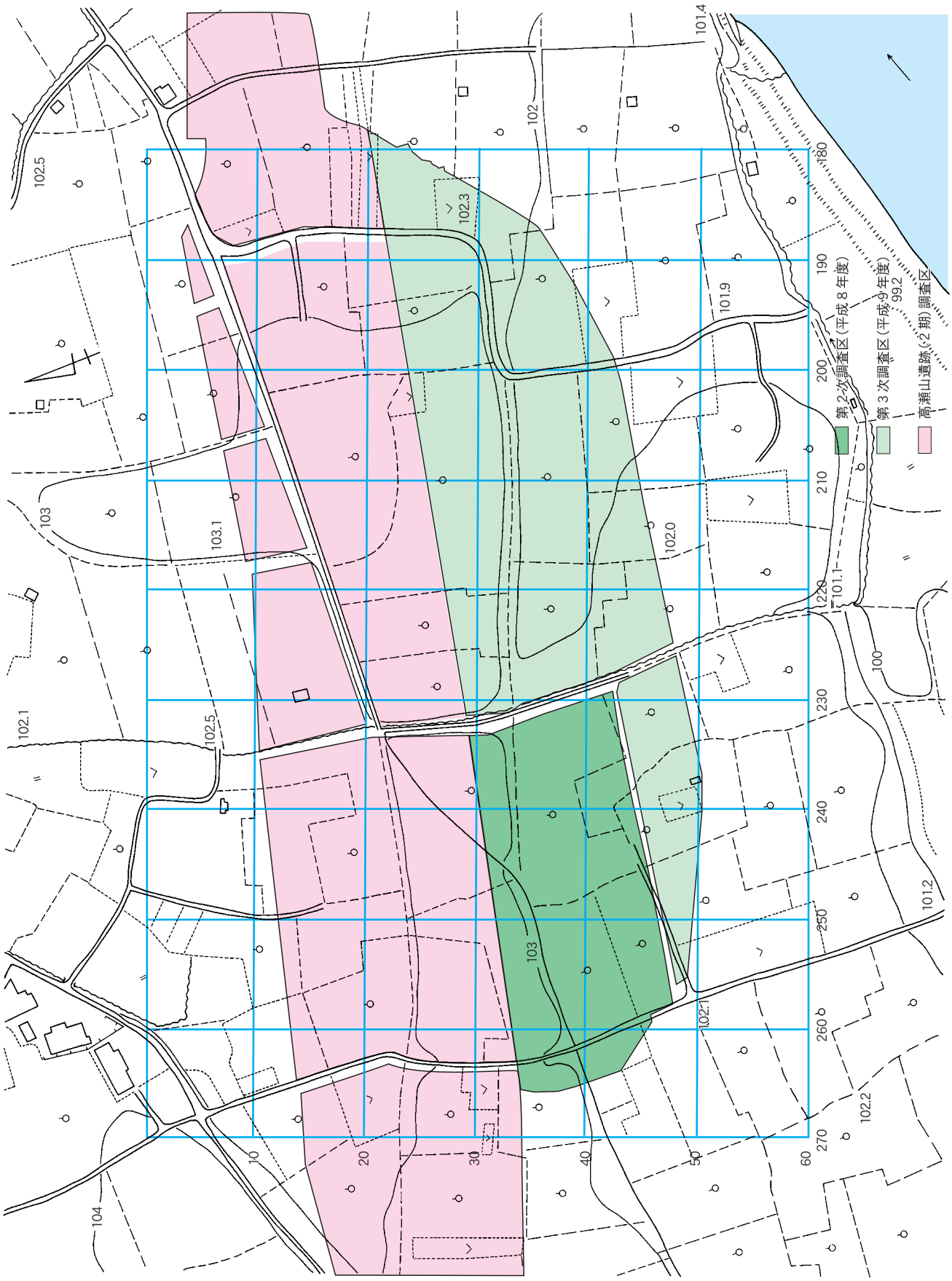
７月23日・11月１日　　調査説明会

表１　調査工程表





第５図　１次調査概要図（S＝１：2500）



第６図　２次・３次調査概要図（S＝１：2500）

Ⅳ　遺跡の概要

1　基本層序

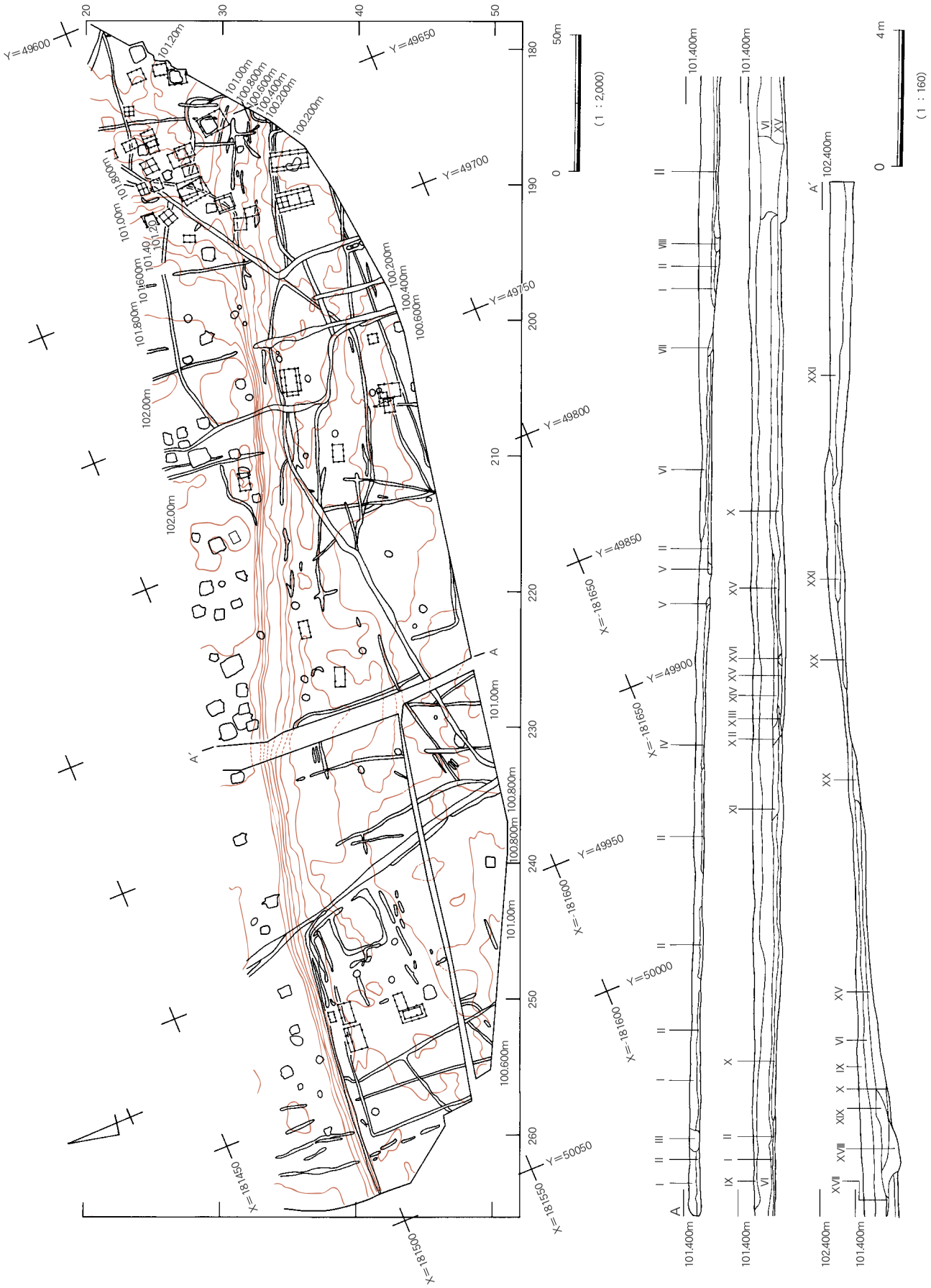
基本層序は、調査区の高低差が顕著に現れる48－226グリッドから29－232グリッドの南北線、約100ｍについて記録観察した（第７図）。遺跡を覆う土は、概ね２～４層のシルト質のものであるが、中央部分の低地には炭化粒を含む黒褐色土が薄く堆積する。北側及び南側では遺構検出面まで20～30㎝程しかなく、この周辺の遺構の掘り込みが浅いことからも、削平を受けていることが考えられる。

基本層序の土色並びに土質は以下のとおりである。

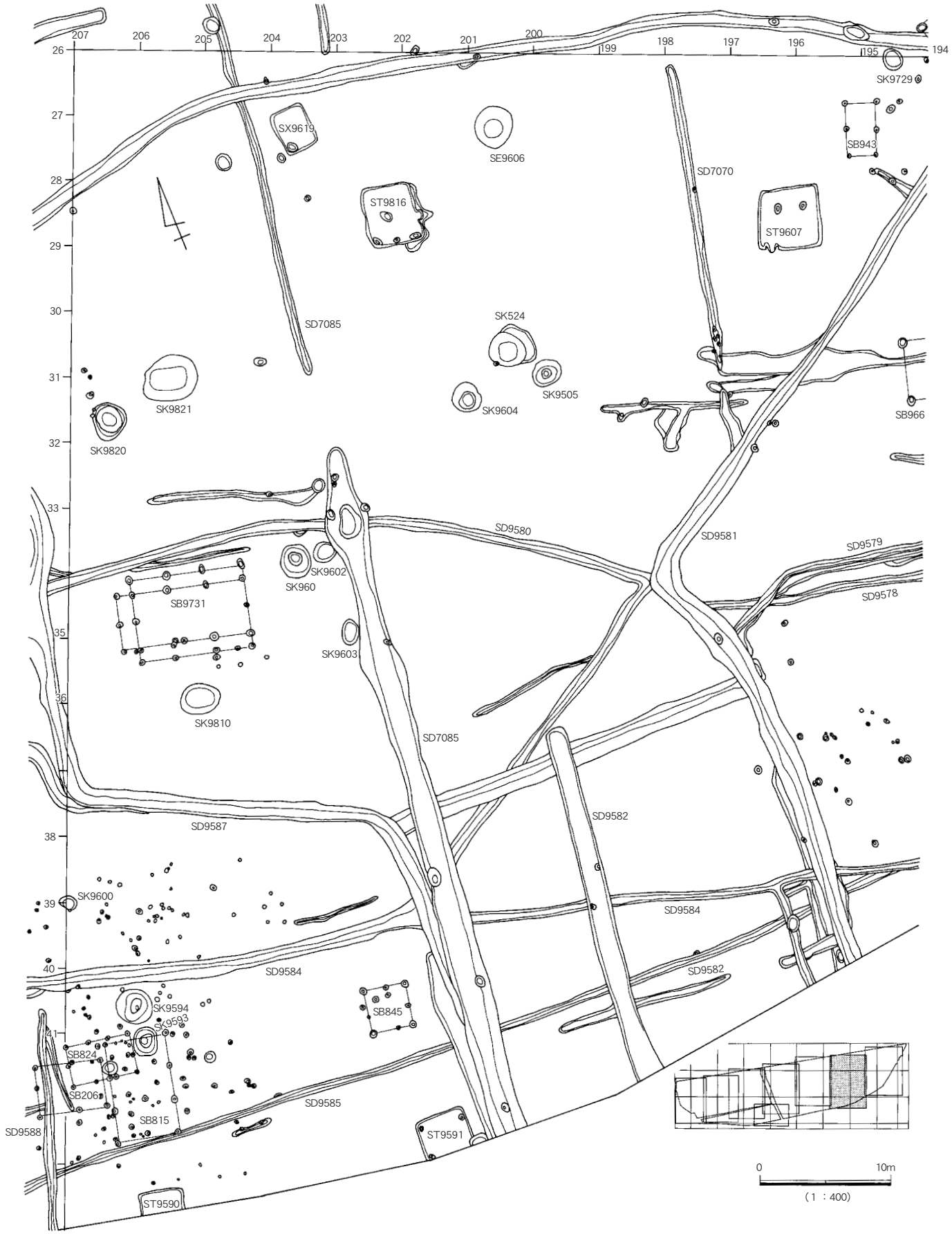
Ⅰ	10YR	3/3	暗褐色	シルト	砂礫含む
Ⅱ	10YR	4/6	褐色	砂質シルト	
Ⅲ	10YR	4/6	褐色	シルト	小礫､黒褐色土含む(撹乱)
Ⅳ	10YR	3/4	暗褐色	シルト	
Ⅴ	10YR	2/3	黒褐色	シルト	
Ⅵ	10YR	3/3	暗褐色	シルト	（Ⅰと類似）
Ⅶ	10YR	2/3	黒褐色	シルト	炭化物少量含む
Ⅷ	10YR	2/2	黒褐色	シルト	炭化物､黄褐色シルト粒含む｡堅く締る
Ⅸ	10YR	3/2	黒褐色	シルト	耕作土
Ⅹ	10YR	2/1	黒色	シルト	暗褐色シルト粒(３㎜大)含む｡遺物包含層
XI	10YR	2/2	黒褐色	シルト	炭化物少量､暗褐色シルト粒(３～５㎜大)含む
XII	10YR	2/2	黒褐色	シルト	炭化粒微量､黄褐色シルト粒多量含む
XIII	10YR	2/2	黒褐色	シルト	炭化粒微量､暗褐色､黄褐色シルトブロック含む
XIV	10YR	2/2	黒褐色	シルト	炭化物微量､黄褐色シルトブロック､黄褐色粒多量含む
XV	10YR	2/2	黒褐色	シルト	暗褐色シルト粒微量含む
XVI	10YR	2/2	黒褐色	シルト	暗褐色シルト粒含む
XVII	10YR	2/2	黒褐色	シルト	黄褐色シルト粒(10％)含む
XVIII	10YR	2/1	黒色	シルト	炭化粒少量､暗褐色シルトブロック少量含む
XIX	10YR	2/1	黒色	シルト	炭化粒少量､暗褐色､褐灰色シルトブロック少量含む
XX	10YR	5/6	黄褐色	シルト	地山
XXI	10YR	3/3	暗褐色	シルト	黒褐色シルトブロック含む

2　地　　形

SA地区の標高は約100ｍから102ｍである。２ｍの標高差は、緩やかに傾斜する地形ではなく、調査区北寄りの段差によるものである（第７図）。詳細に見れば、段上は東側に細かい高低差は見られるものの、ほぼ平坦な様相を呈する。この東側の地形は、耕作時の削平の他に整地を行ったことによると考えられる。



第７図　地形と基本層序（S＝１：2000）


207
206
205
204
203
202
201
200
199
198
197
196
195
194
26
27
28
29
30
31
32
33
35
36
38
39
40
41
SK9729
SX9619
SE9606
SB943
SD7070
ST9816
ST9607
SD7085
SK524
SK9505
SK9604
SK9821
SK9820
SB966
SD9580
SD9581
SD9579
SD9578
SK9602
SK960
SB9731
SK9603
SK9810
SD7085
SD9582
SD9587
SK9600
SD9584
SD9584
SD9582
SK9594
SK9593
SB845
SB824
SB206
SB815
SD9585
SD9588
ST9591
ST9590
0
10m
(1 : 400)

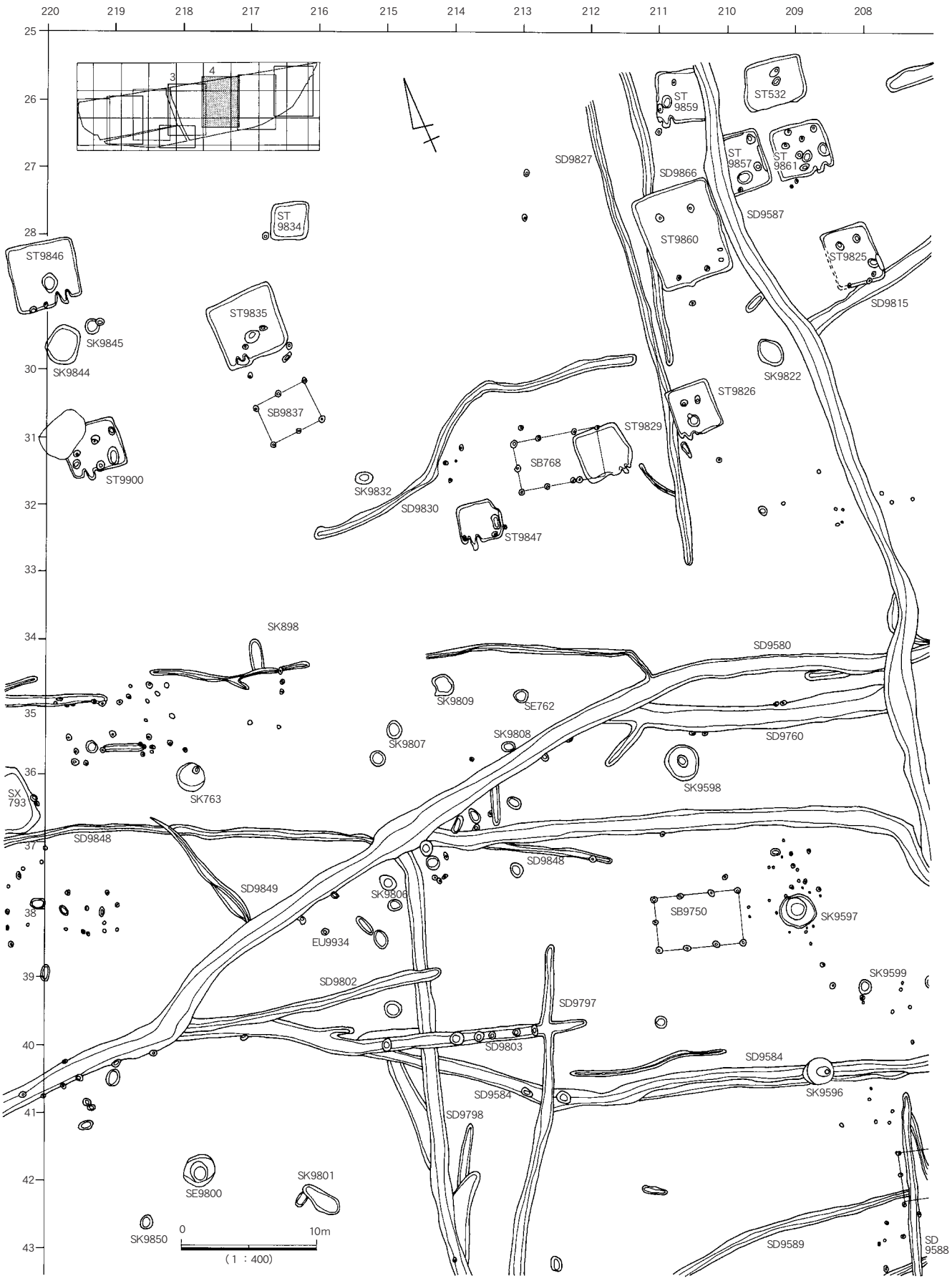
第８図　遺構配置図１

194
193
192
191
190
189
188
187
186
185
184
183
182
181
21
22
23
25
26
27
28
29
30
32
33
34
35
36
37
38
39
SB7045
SD9501
ST9513
SD9560
SB9548
SB9515
SB357
SB959
SK9718
SB995
ST9728
SB9562
ST9561
SB
9526
SB
567
SB958
SB
995
SK9723
SB9502
SB9999
ST9559
SK9710
SD9572
ST9514
SB997
SB535
SK652
SX647
SB9527
SD9581
SB677
SB9679
SD573
SB595
SB577
SD530
SD9574
ST
9962
ST9525
SD9552
SD9575
SD9576
SK9613
SB9648
SB616
SE562
SB966
SB986
SD530
SD9852
SD9579
SE9961
SB9971
SD9578
SB9762
SD9585
SD9584
0
10m
(1 : 400)
1
2
3
4
5
6
7

第９図　遺構配置図２

232
231
230
229
228
227
226
225
224
223
221
220
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
44
45
ST996
ST9868
ST9846
ST9891
ST9872
ST9867
SK9892
SK9844
ST9973
ST9869
ST9874
ST9896
ST9870
ST9871
ST899
SK9878
ST9895
SK9881
ST9900
ST9875
SK9877
SK9876
SE864
SK858
SE764
SK844
SB195
SE9888
SK9889
SE9890
SX793
SB186
SK794
SK130
SD814
SK120
SD9580
EU9931
SK9348
SK795
0
10m
(1 : 400)
SK9726
SK9922
SK9457
SK101
SK132
SK95
SK9921
SK96
SK9925
SD856
SK85
EU9932
SD9580
SK9905
SK9908
SK9909
SK9855
SK9904
SK9934
SK79

第10図　遺構配置図 3


220
219
218
217
216
215
214
213
212
211
210
209
208
25
26
27
28
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
3
4
ST 9859
ST532
ST 9857
ST 9861
SD9827
SD9866
SD9587
ST 9834
ST9860
ST9825
ST9846
SD9815
ST9835
SK9845
SK9844
SK9822
ST9826
SB9837
ST9829
SB768
ST9900
SK9832
SD9830
ST9847
SK898
SD9580
SK9809
SE762
SK9808
SD9760
SK9807
SK9598
SK763
SX 793
SD9848
SD9848
SD9849
SK9806
SB9750
SK9597
EU9934
SK9599
SD9802
SD9797
SD9803
SD9584
SK9596
SD9584
SD9798
SK9801
SE9800
SK9850
0
10m
(1 : 400)
SD9589
SD 9588

第11図　遺構配置図４

255
254
253
252
251
250
249
248
247
246
245
244
243
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
ST9004
ST9003
SD4002
ST9005
ST9006
SK9020
SK9372
SD9167
SD9166
SB9316
SB9290
SK9209
SK9013
SB9273
SD9165
SK9199
SK9014
SK9201
SK9202
SB9220
9211
SQ9009
SK9203
SX9202
SB9264
SK9200
SD9168
ST9010
0
10m
(1 : 400)

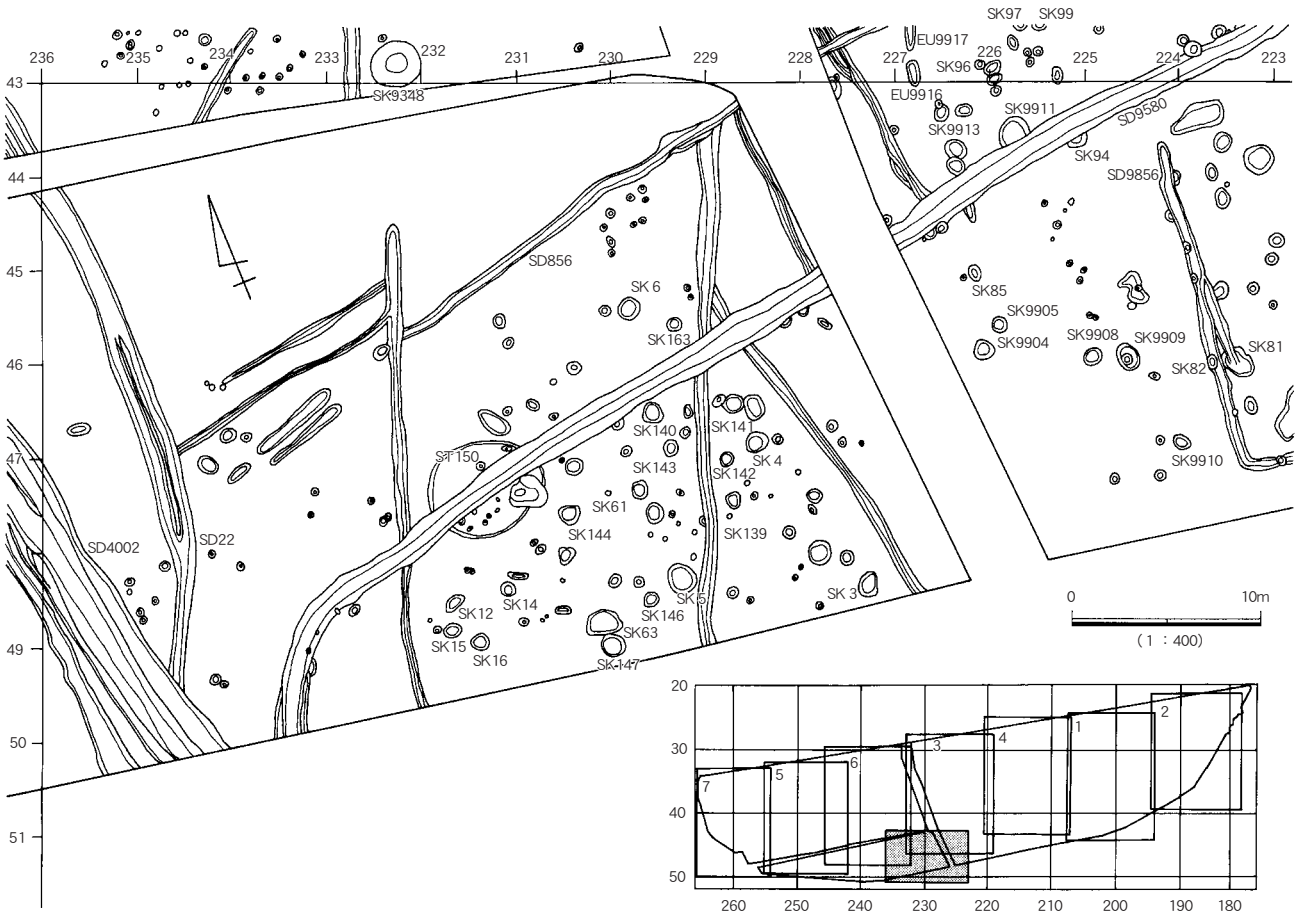
第12図　遺構配置図５

245
244
243
242
241
240
239
238
237
236
235
234
233
30
31
32
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
ST9001
ST9002
ST9003
ST9004
SK9019
SK9254
SK9160
SK9259
SK9172
SK9171
SK9373
SD9374
SK9018
SK9017
SD9021
SK9016
SD4002
SD9162
SD9165
SK9012
SD9163
SD9161
SD9023
EU9325
SK9348
SD9023
SD4002
SD18
SK25
0
10m
(1：400)

第13図　遺構配置図 6

266
265
264
263
262
261
260
259
258
257
256
255
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
SK9330
SD9352
SD4016
ST9007
ST9011
SD4006
SK9349
SK9337
SK9338
ST9008
SK9324
SK9020
SD4007
SD9198
SK9015
SD9165
SD9169
SD9170
SD9401
SD9328
0
10m
(1 : 400)

第14図　遺構配置図 7



第15図　遺構配置図８

一方、下段では緩い傾斜の窪地を形成しながら、南側に行くにつれて再び標高を上げて行く。中央部の最も低い地点から調査区南端の地点では約80㎝の高低差がある。大きなうねりのような地形は、さらに二つの段を有しながら南を流れる最上川に至る。

3　遺構の分布

SA地区は、前述したように約２ｍの高低差をもつ上段部と下段部からなる。上段部では、溝跡を除けば、大半が奈良、平安時代の遺構である。主体となる竪穴建物跡は25～32－206～230グリッドに比較的まとまって分布する。また、掘立柱建物跡は、20～32－181～194グリッド内にまとまる。この２地区以外は、竪穴建物跡や土坑が散在するにとどまる。

一方、下段部では、標高約100.20ｍ～100.60ｍの最も低い地区に中世の遺構が点在する。区画溝を伴い、20～50ｍの間隔を置いて掘立柱建物跡と井戸跡が分布する。この地区には、中世以外の所産と考えられる遺構はほとんど検出されていない。下段の中でも調査区南端部では、標高が再び上がりはじめ、それと共に100.60ｍを越えた辺りから奈良、平安時代の竪穴建物跡が分布するようになる。同様に100.60ｍ以上の標高をもつ42～50－220～235グリッド周辺では、土器埋設遺構や土坑など縄文時代の遺構が散見される。

Ⅴ　縄文時代の遺構と遺物

1　竪穴住居跡（第17図）

竪穴住居跡は、ST150の１棟のみである。調査区東寄りの南端、47・48－231・232グリッドに位置する。規模は、東西5.2m、南北4.4mを測る。平面形は、東西にやや長い楕円形を呈する。中央部を中世の所産であるSD9580によって切られることや、南東部にSK149があることなどから、撹乱が著しい。また、削平によるものか、床面までは10cm前後と浅く、床面にも随所に撹乱が見られる。住居跡内には、径40cm前後の円形ないしは楕円形の掘り込みが２基見られたが、明確に柱穴と認められるものはない。中央部南寄りには、径20cm前後の扁平な礫がまとまって出土している。これらは、床面から約30cm掘り込まれた底に、並べられたような痕跡を残すことから、形は成していないものの、複式炉の一部と考えられる。

第16図　縄文時代主要遺構分布図

出土遺物は、深鉢や浅鉢の小破片は25点程出土しているが、図化できたのは17－１の１点のみである。17－１は、口縁部が欠損するものの、内湾するタイプの浅鉢である。文様は、稜線状の隆沈線により、４単位の楕円文と、それらを分ける波濤文が施される。文様間の無文部分には磨り消しが施される。大木10式の中段階と考えられる。

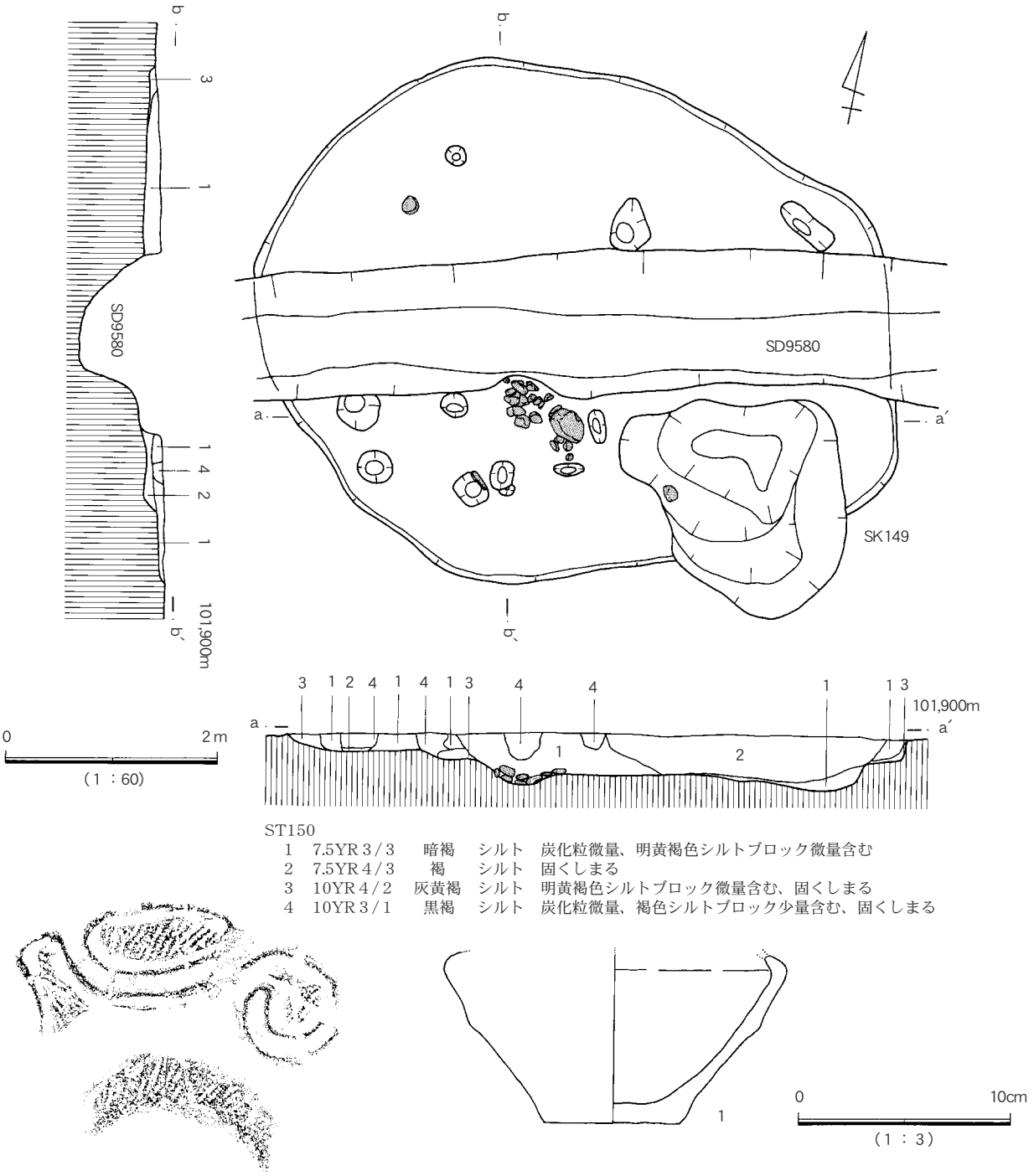


表２　ST150出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	文様	地文	出土地点	備考
17	1	縄文土器	浅鉢		64		5.5	細砂、金雲母混入	良	10YR7/4にぶい黄橙	楕円文・波濤文	RL	EU 9931	

第17図　ST150・出土遺物

2　土器埋設遺構

土器埋設遺構は、２次調査で１基、３次調査で７基検出された。分布する地点は、表土が最も薄い地区である。多分に削平を受けており、土器底部のみを残すものも見られる。全体的に遺存状態は良くない。

【EU9931】第18図

41－228グリッドに位置する。この地点以北は標高が下がることから、縄文時代の遺構が分布する西側の北限である。そのため表土が比較的厚く遺存状態は良好な方である。掘り方は長軸45㎝、短軸38㎝の楕円形である。深さは30㎝まで残っている。土器（18－１）は正位に埋設され、底部穿孔はない。器形は、口縁部が外反する深鉢と考えられる。文様は微隆起状の隆沈線により、体部上半に「e」・「s」字状文が横方向に展開する。文様間は磨り消され、文様内には地文のRL縄文が充填される。大木10式中段階のものと考えられる。

【EU9934】第18図

39－216グリッドに位置する。明確な縄文時代の遺構としては東限である。掘り方は、長軸25㎝、短軸20㎝、確認面からの深さは10㎝である。大半が削平を受けているため土器は底部が残るのみである。正位に埋設されたもので、底部穿孔は見られない。器形は深鉢と考えられるが、器面の磨滅が著しく詳細は不明である。

【EU9325】第18図

２次調査で検出された。42－236グリッドに位置する。掘り方は、径35㎝の僅かに歪んだ円形である。確認面からの深さは23㎝である。土器（18－２）は正位に埋設されている。底部穿孔はない。器形は深鉢で、体部下部と底部である。縄文が施されているが、器面が剥落しているため詳細は不明である。

【EU9916】第18図

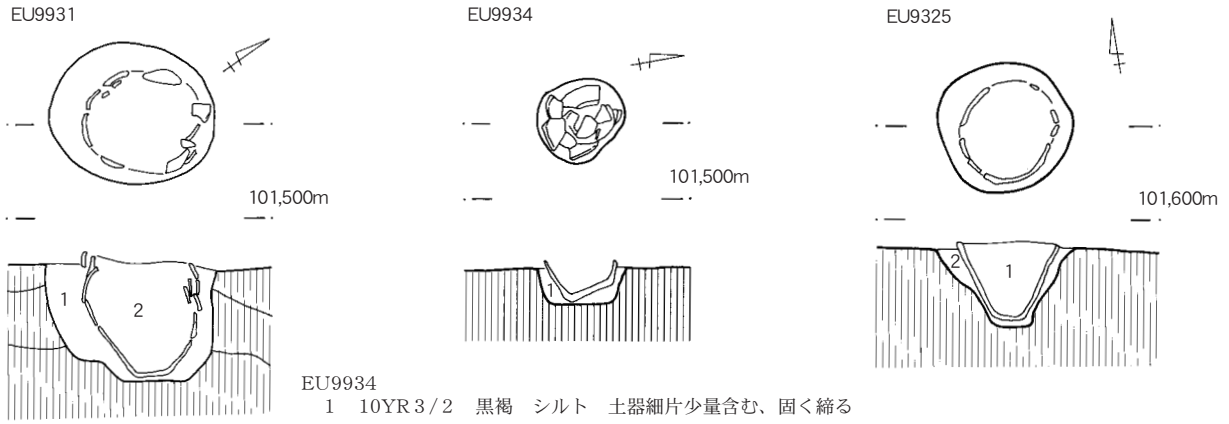
43－227グリッドに位置する。掘り方は、長軸43㎝、短軸39㎝の楕円形である。確認面からの深さは26㎝である。土器（18－3）は、正位に埋設され、底部穿孔は見られない。無文の深鉢底部である。

【EU9917】第19図

42－227グリッドに位置する。SK869が埋まった後に掘り込まれたものである。掘り方は、径40㎝のほぼ円形である。深さは、確認面から22㎝である。土器はかなり崩れていたものの、19－３が正位に埋設されていたと考えられる。口縁部が内湾する浅鉢で、微隆起状の隆沈線文により体部上半に「c」字状文が横方向に展開し、その下に区画線が施される。無文部分は研磨調整である。口縁部の外面や内面に炭化物が付着する。19－２も同様の文様が施された浅鉢である。器面は黒色で、無文部分は丁寧に磨かれる。19－１は深鉢の体部上半破片である。文様は微隆起状の隆沈線文により、「s」字状あるいは「e」字状文が描かれる。無文部分は盛り上がり、磨かれる。３点とも大木10式中段階のものと考えられる。

【EU761】第20図

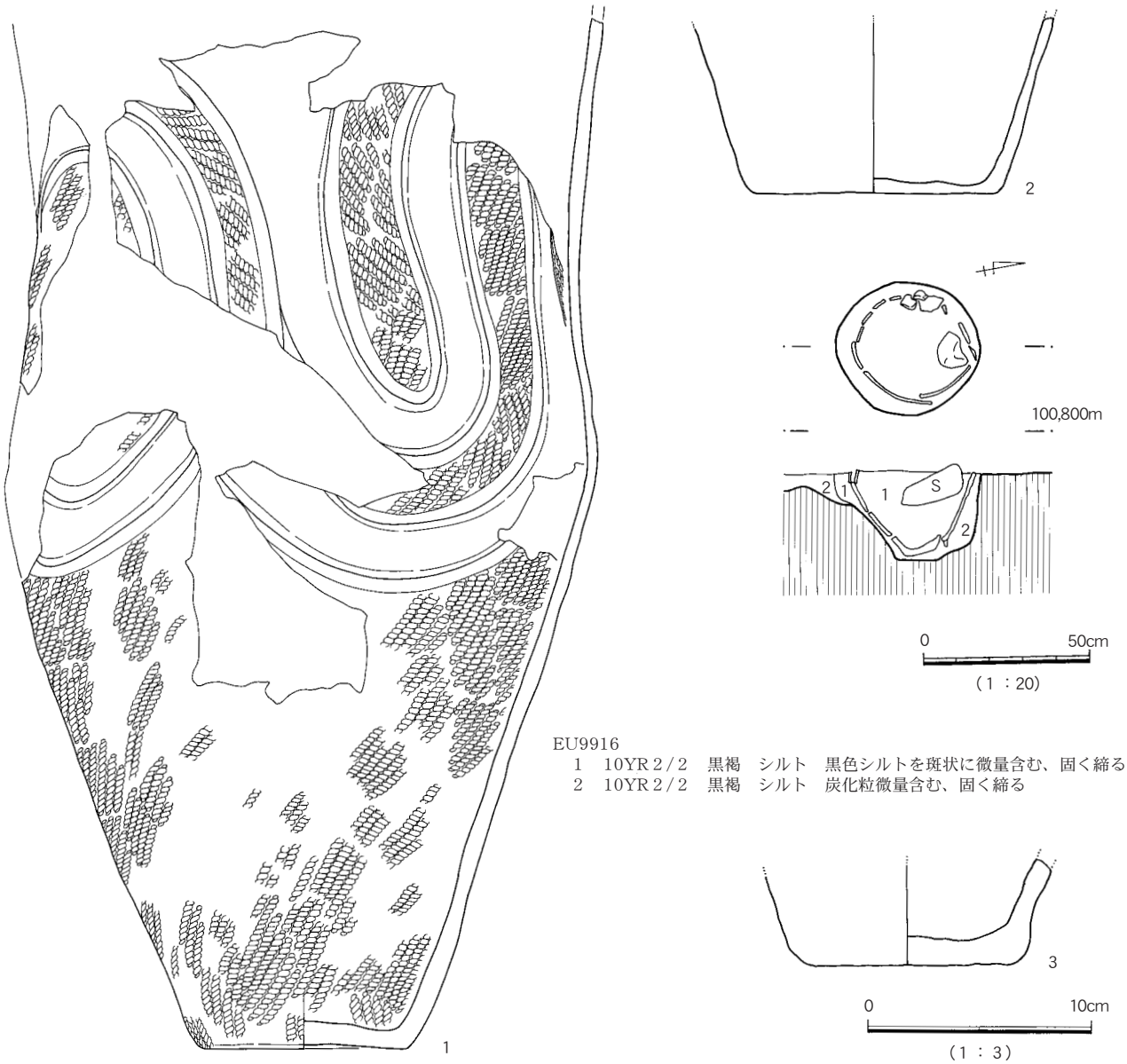
38－221グリッドに位置する。掘り方は、長軸110㎝、短軸68㎝の長楕円形である。深さは、



EU9934
1　10YR３/２　黒褐　シルト　土器細片少量含む、固く締る

EU9931
1　2.5Y３/２　黒褐　シルト　土器細片微量含む、固く締る
2　10YR４/２　灰黄褐　シルト　炭化粒微量含む、固く締る

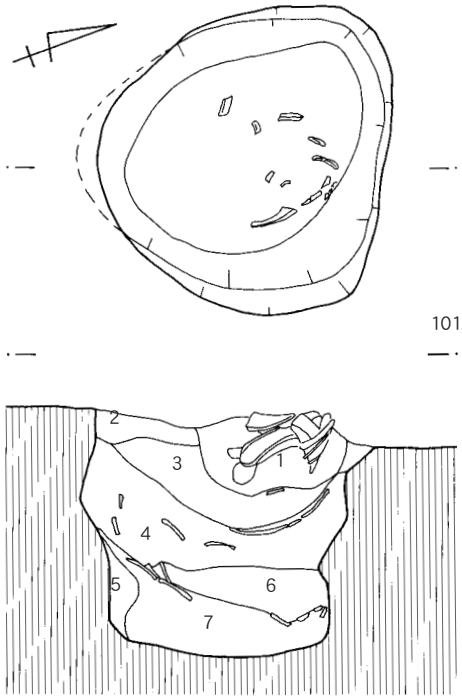
EU9325
1　10YR４/３　にぶい黄褐　シルト　炭化粒微量含む、固く締る
2　10YR３/３　暗褐　シルト　固く締る



EU9916
1　10YR２/２　黒褐　シルト　黒色シルトを斑状に微量含む、固く締る
2　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化粒微量含む、固く締る

第18図　EU9931、9734、9325、9916、出土遺物

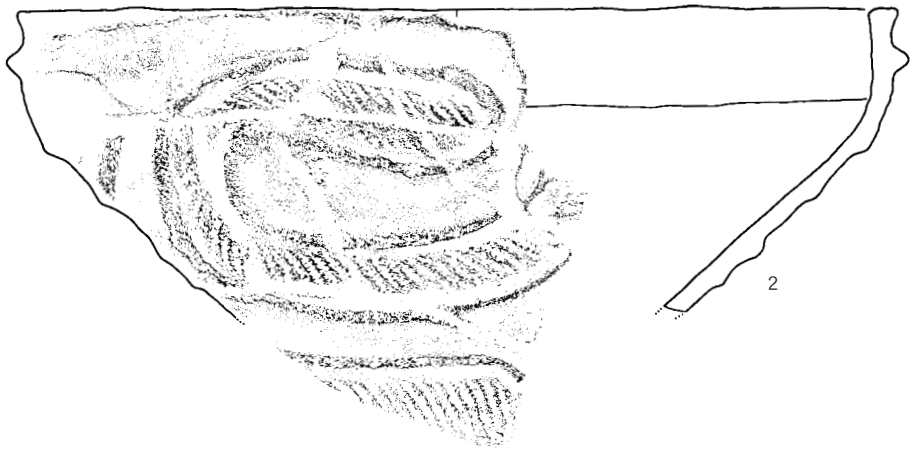
EU9917・SK869

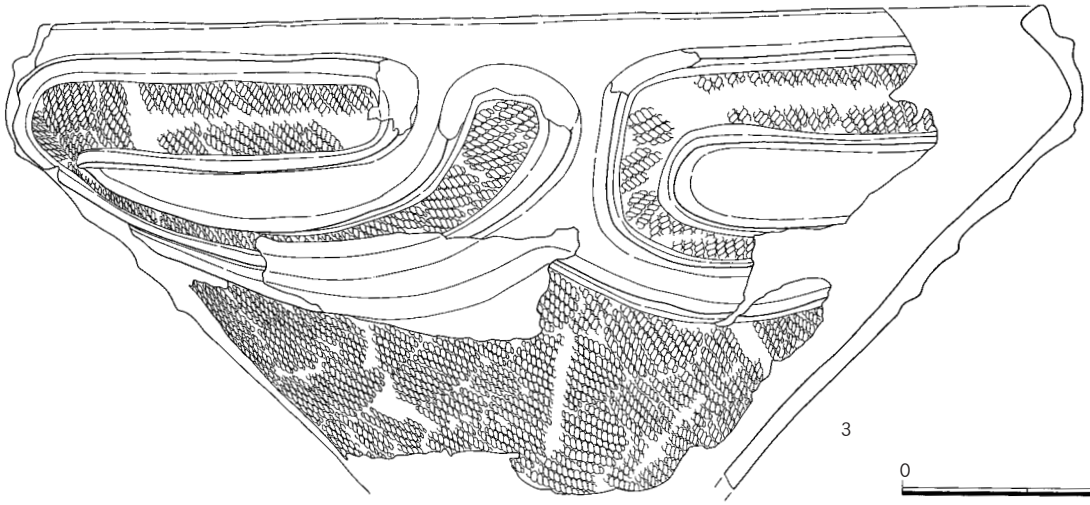


EU9917

1	10YR３/２	黒褐	シルト　固く締る
2	10YR２/２	黒褐	シルト　炭化粒（小）、小礫微量含む、固く締る
3	10YR３/３	暗褐	シルト　炭化粒（中）、小礫微量含む、固く締る
4	10YR３/３	暗褐	シルト　炭化粒（中）少量、小礫微量含む、固く締る
5	10YR３/４	暗褐	シルト　炭化粒（小）微量含む、固く締る
6	10YR３/３	暗褐	シルト　小礫多量含む、固く締る
7	10YR３/２	黒褐	シルト　小礫多量含む、固く締る

0　50cm
（１：20）





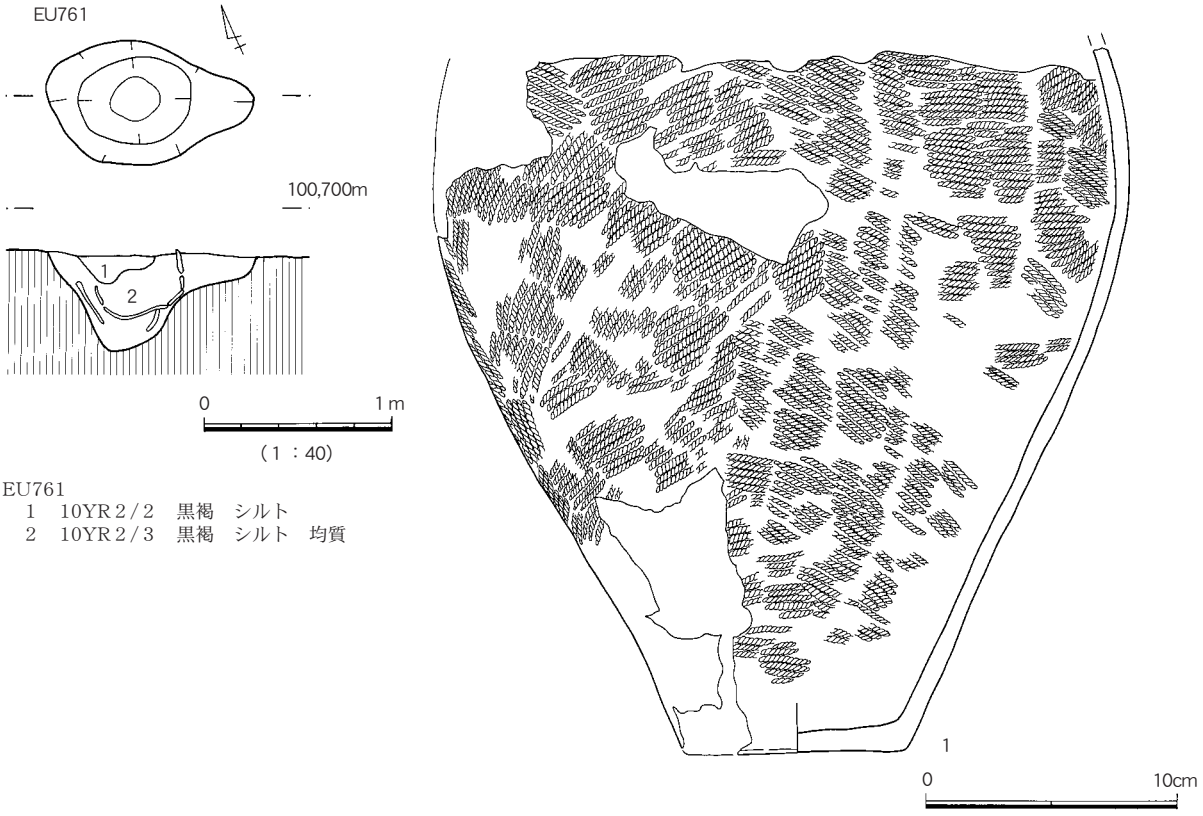
0　10cm
（１：３）

第19図　EU9917、出土遺物

確認面から50㎝である。土器（20－１）は正位に埋設され、底部穿孔はない。体部が比較的膨らむ深鉢で、LR縄文が斜・縦・横に無作為に施される。内面には幅３～４㎝の粘土紐の輪積み痕が認められる。

【EU9945】第21図

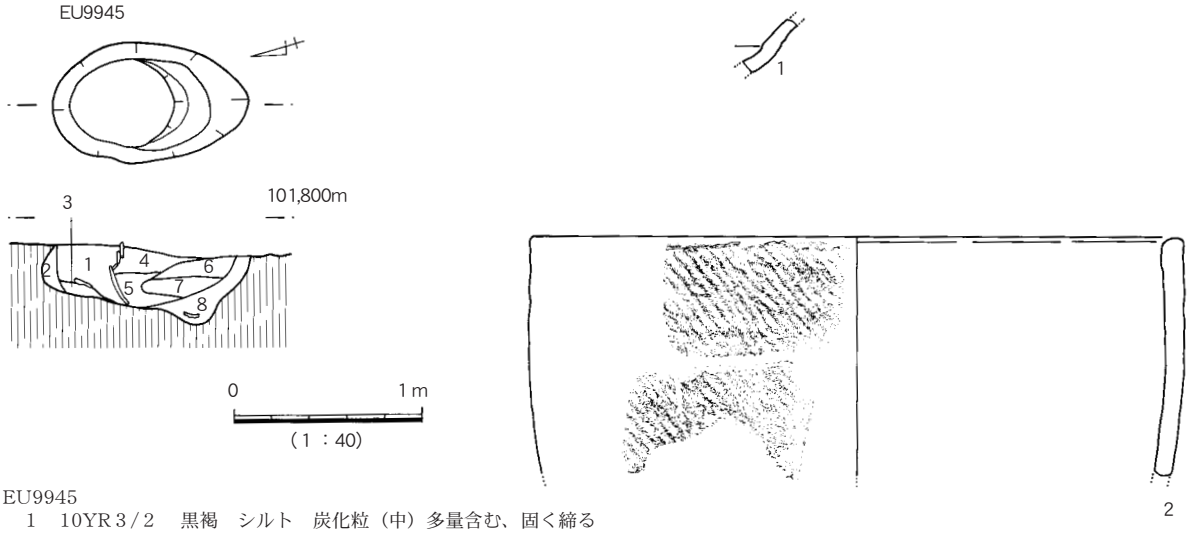
44－224グリッドに位置する。掘り方は長軸104㎝、短軸66㎝の長楕円形である。深さは、確認面から36㎝である。土器（21－3）は正位に埋設されたものであるが、口縁部、底部ともに欠損している。体部の上部に稜線状の隆沈線により、波濤文と思われる文様が施される。二次加熱のため、胴下部の器面の剥落が顕著である。大木10式中段階と考えられる。21－2は口縁部が直立する深鉢である。L縄文が縦に施文される。21－1は中世陶器の皿である。流れ込みである。



第20図　EU761、出土遺物

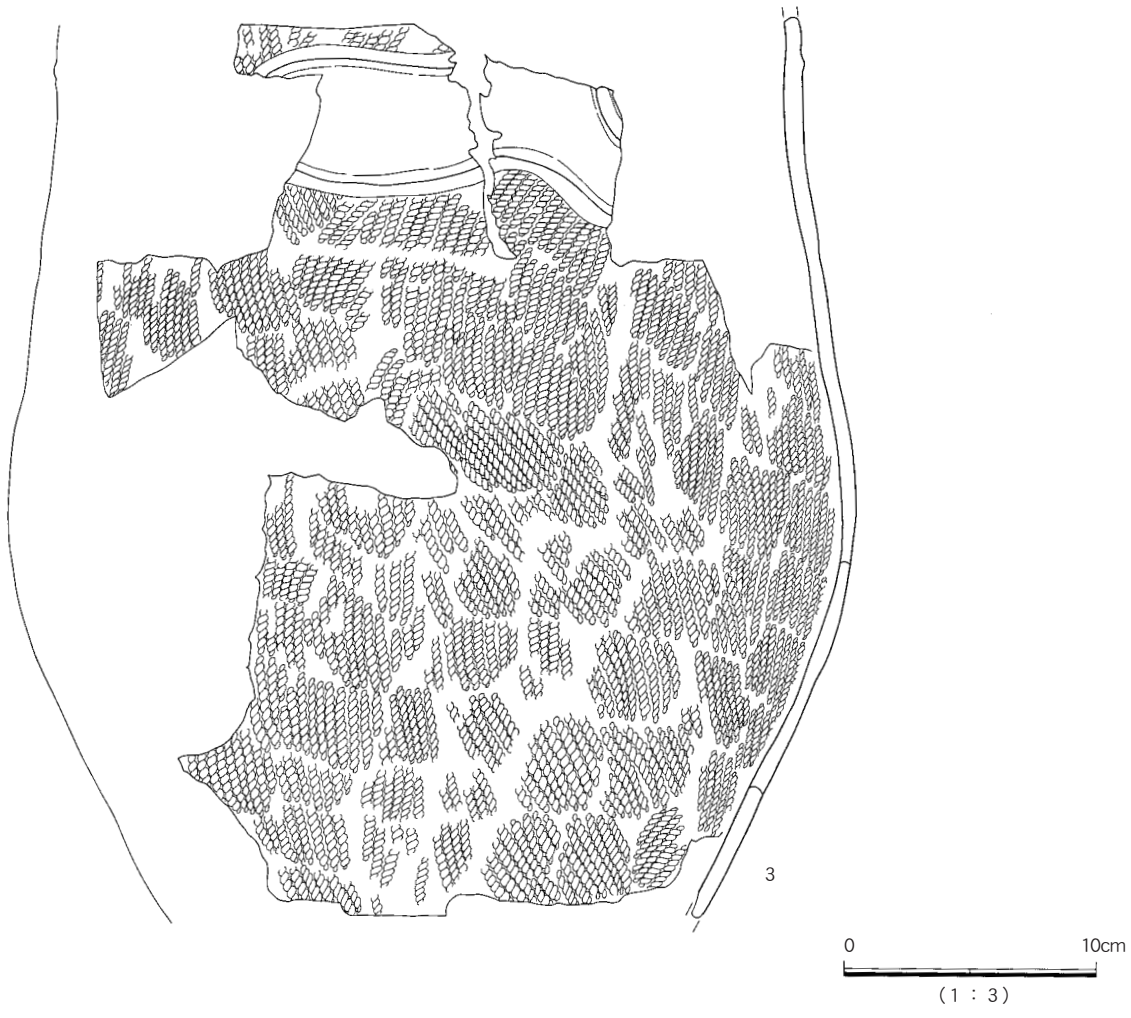
表３　EU9325、9916、9931、9917、761、9945出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	文様	地文	出土地点	備考
18	1	縄文土器	深鉢		90		6	砂粒混入	良	10UR6/4にぶい黄橙	「e」字、「s」字状文	RL	EU 9931	
	2	縄文土器	深鉢		(107)		6	砂粒混入	不良	7.5YR5/6明褐		原体不明	EU 9325	二次焼成
	3	縄文土器	深鉢		92		8	粗砂混入	不良	10YR7/3にぶい黄橙	無文		EU 9916	
19	1	縄文土器	深鉢				7.5	細砂、金雲母混入	良	10YR7/4にぶい橙	「s」字状文？	RL	EU 9917	
	2	縄文土器	浅鉢	(350)			7	粗砂、金雲母混入	良	10YR4/2灰黄褐	「c」字状文	LR	EU 9917	ベンガラ
	3	縄文土器	浅鉢	(398)			7	砂粒、金雲母混入	良	10YR5/2灰黄褐	「c」字状文	LR	EU 9917	
20	1	縄文土器	深鉢		85		9	砂粒混入	良	10YR7/4にぶい黄橙		LR	EU 761	
21	1	中世陶器	皿				6	緻密	不良	2.5GY7/1明オリーブ灰	灰釉	灰釉	EU 9955	
	2	縄文土器	深鉢	(260)			8	細砂混入	良	7.5YR6/6橙		L？	EU 9945	RP16
	3	縄文土器	深鉢				7	砂粒混入	良	10YR6/2灰黄褐	波濤文	RLR	EU 9945	



EU9945

1	10YR３/２	黒褐	シルト	炭化粒（中）多量含む、固く締る
2	10YR３/２	黒褐	シルト	褐色粗砂少量含む、固く締る
3	10YR３/２	黒褐	シルト	褐色粗砂多量含む、固く締る
4	7.5YR３/２	黒褐	シルト	炭化粒微量含む、固く締る
5	7.5YR３/３	暗褐	シルト	炭化粒、褐色シルトブロック微量含む、固く締る
6	7.5YR３/２	黒褐	シルト	固く締る
7	10YR３/３	暗褐	シルト	炭化粒微量、褐色シルトブロック含む、固く締る
8	10YR３/３	暗褐	シルト	褐色粗砂を斑状に含む、固く締る



第21図　EU9945・出土遺物

3　土　　坑

土坑は、概して小規模のものが多く、主体となるのは径が１ｍ前後を測るものである。タイプもフラスコ状土坑の他に、浅く壁が垂直に掘られるもの、壁が緩やかに掘り込まれたものが見られる。

【SK3】第22図

48－228グリッドに位置する。長軸138㎝、短軸110㎝、確認面からの深さは46㎝を測る。平面形は不正楕円形を呈する。壁は、南側の一部を除いてほぼ垂直に掘り込まれる。底は平坦である。出土遺物はないが、覆土の状態等から縄文時代の所産と考えられる。

【SK4】第22図

46－229グリッドに位置する。長軸108㎝、短軸100㎝のほぼ円形を呈する。深さは30㎝を測る。壁の掘り込みは緩く、明瞭な底を有しない。遺物は縄文土器片が26点出土している。22－１は小型の浅鉢で、LR縄文を、口縁部には横に、体部には縦に施文する。内面は横方向に磨かれる。

【SK12】第22図

48－232グリッドに位置する小型のフラスコ状土坑である。開口部は、長軸84㎝、短軸68㎝の楕円形を呈する。底面は平坦で、長軸100㎝、短軸82㎝を測る。深さは40㎝である。遺物は縄文土器片が40点出土している。

【SK14】第22図

48－232グリッドに位置する。平面形は、径100㎝の円形である。底面までは14㎝と浅い。壁は緩く掘り込まれ、底面は平坦である。出土遺物は、縄文土器片が14点である。

【SK15】第22図

48－232グリッドに位置する。長軸80㎝、短軸66㎝の楕円形である。深さは20㎝と浅い。南側は垂直に掘り込まれるが、北側は緩い傾斜で掘り込まれているため、明瞭な底面を持たない。出土遺物は、縄文土器片が46点である。

【SK16】第22図

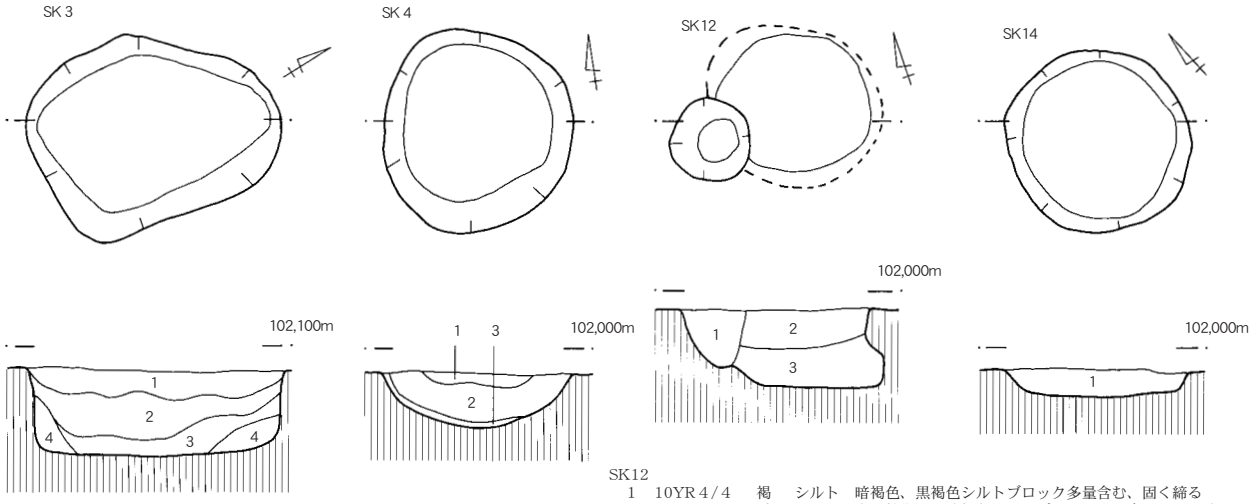
48－232グリッドに位置する。長軸94㎝、短軸80㎝の楕円形を呈する。深さは20㎝である。壁はほぼ垂直に掘り込まれるが、底面がやや広がる形態を示す。底面は平坦である。遺物は、縄文土器片が10点出土している。

【SK139】第22図

47－229グリッドに位置する。長軸74㎝、短軸66㎝の楕円形である。深さは22㎝である。壁は幾分オーバーハングし、底面がやや広がる。底面は平坦である。出土遺物は、縄文土器片が14点である。

【SK143】第22図

47－230グリッドに位置する。長軸90㎝、短軸82㎝の楕円形である。深さは30㎝を測る。西側の壁はほぼ垂直に掘り込まれるが、他は比較的緩やかである。底面は平坦である。遺物は出土していないが、形態や覆土の状態から上記の遺構と同様に、縄文時代の所産と考えられる。



SK 3
1　10YR 2 / 3　黒褐　シルト　暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、細砂含む
2　10YR 3 / 4　暗褐　シルト　黒色シルトブロック少量、褐色細砂多量含む、小礫含む
3　10YR 4 / 6　褐　細砂　黒色シルトブロック少量含む、小礫含む、やわらかい
4　10YR 4 / 6　褐　細砂　暗褐色シルトブロック多量含む、固く締る

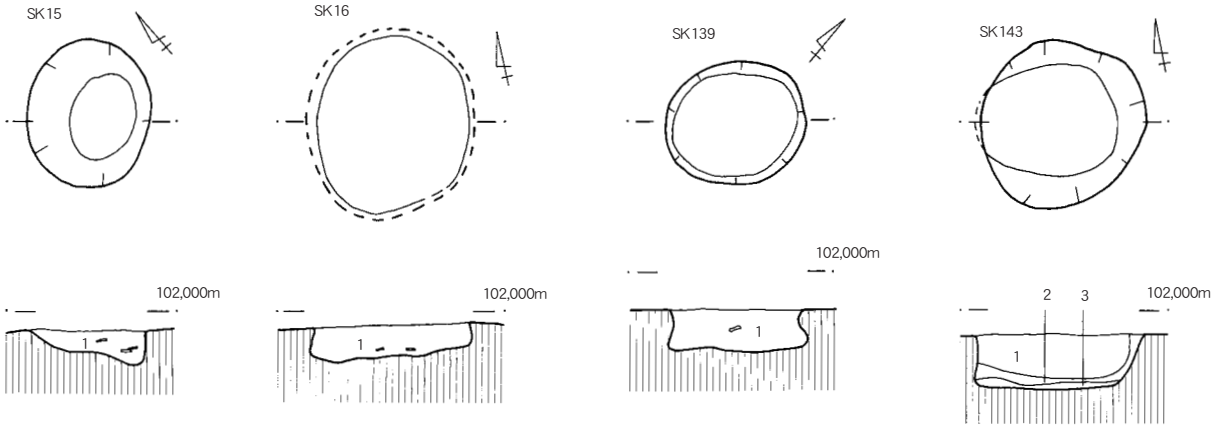
SK 4
1　10YR 3 / 2　黒褐　シルト　黄褐色シルト粒微量含む、固く締る
2　10YR 2 / 1　黒　シルト　炭化物少量、土器片含む、固く締る
3　10YR 2 / 3　黒褐　シルト　褐色細砂多量含む、固く締る

SK12
1　10YR 4 / 4　褐　シルト　暗褐色、黒褐色シルトブロック多量含む、固く締る
2　10YR 2 / 3　黒褐　シルト　炭化粒微量、暗褐色シルトブロック少量含む、固く締る
3　10YR 2 / 2　黒褐　シルト　炭化粒少量、焼土微量、土器片、黄褐色シルト含む

SK14
1　10YR 3 / 3　暗褐　シルト　炭化粒少量、白色風化礫多量含む、土器含む、固く締る

0　1 m
（1 ：40）

0　10cm
（1 ：3）



SK15
1　10YR 3 / 3　暗褐　シルト　炭化粒少量、土器片、石器含む、固く締る

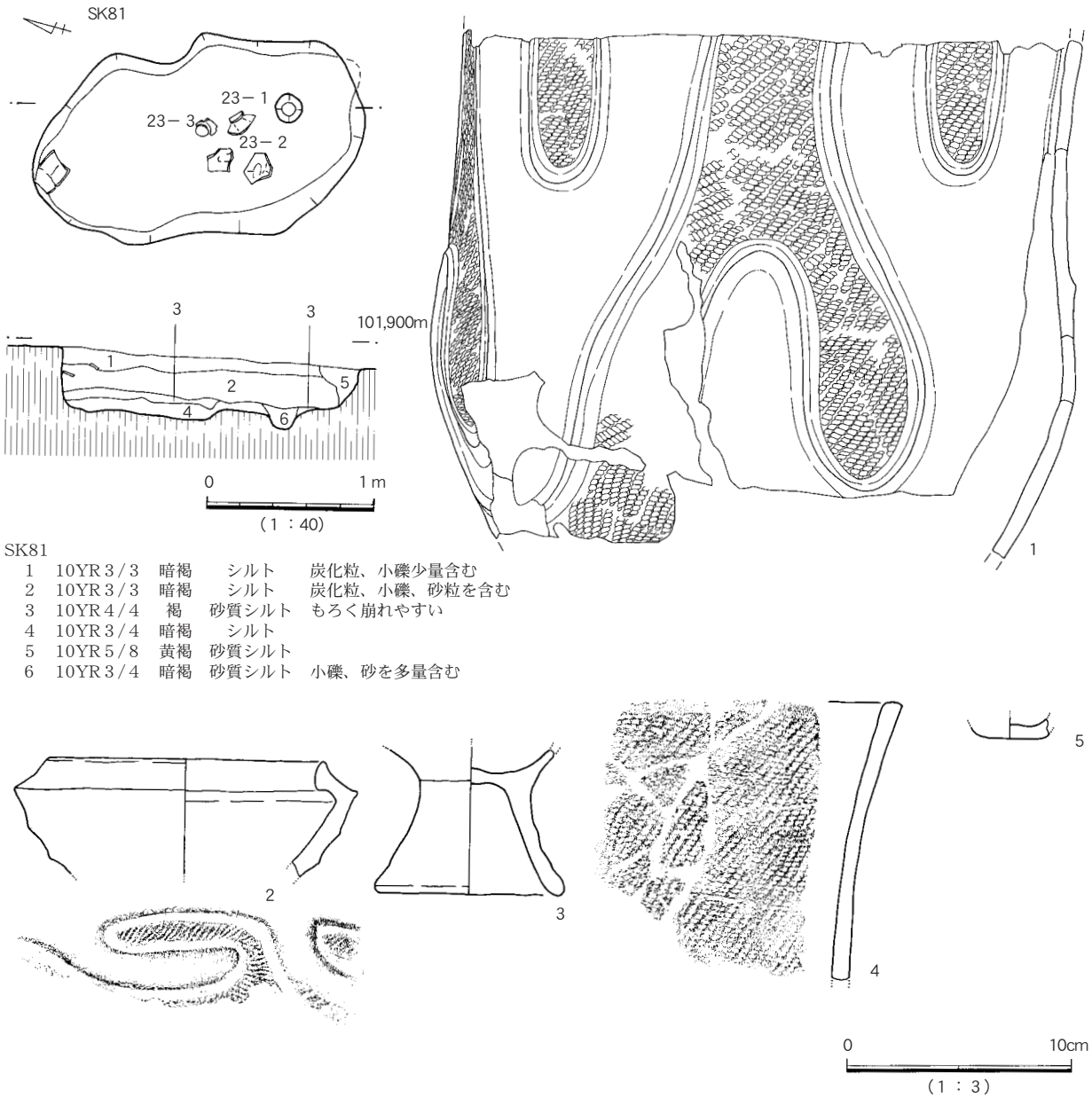
SK16
1　10YR 3 / 3　暗褐　シルト　炭化粒微量、細砂、土器片含む、固く締る

SK139
1　10YR 2 / 2　黒褐　シルト　炭化粒少量、小礫、土器片含む、固く締る

SK143
1　10YR 2 / 3　黒褐　シルト　炭化粒微量、暗褐色シルトブロック含む、固く締る
2　10YR 3 / 3　暗褐　シルト　褐色細砂微量含む、固く締る
3　10YR 3 / 4　暗褐　シルト　粗砂、小礫含む、固く締る

0　1 m
（1 ：40）

第22図　SK 3 ・ 4 ・ 12 ・ 14 ・ 15 ・ 16 ・ 139 ・ 143 ・ 出土遺物



SK81

1	10YR３/３	暗褐	シルト	炭化粒、小礫少量含む
2	10YR３/３	暗褐	シルト	炭化粒、小礫、砂粒を含む
3	10YR４/４	褐	砂質シルト	もろく崩れやすい
4	10YR３/４	暗褐	シルト	
5	10YR５/８	黄褐	砂質シルト	
6	10YR３/４	暗褐	砂質シルト	小礫、砂を多量含む

第23図　SK81・出土遺物

表４　SK4・81・140・141・154・9904出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	文様	地文	出土地点	備考
22	1	縄文土器	浅鉢	(164)			5	緻密、金雲母混入	良	10YR4/2灰黄褐		LR	SK4	
23	1	縄文土器	深鉢				7	砂粒、金雲母混入	良	10YR7/4にぶい黄橙	波濤文	RL	SK81	
	2	縄文土器	浅鉢	120			7.5	砂粒混入	良	7.5YR4/3褐	波濤文	RL	SK81	
	3	縄文土器	台付鉢		84		7	細砂混入	不良	10YR7/4にぶい橙			SK81	
	4	縄文土器	深鉢				6	細砂混入	良	7.5YR7/3にぶい橙		RL	SK81	
	5	縄文土器	ミニチュア土器		34			細砂混入	良好	2.5YR6/8橙			SK81	
24	1	縄文土器	深鉢				6.5	細砂混入	良	10YR7/3にぶい黄橙	不明	RL	SK141	
25	1	縄文土器	深鉢	345	98	616	8	砂粒混入	良	10YR7/4にぶい黄橙	「c」字状文、楕円文	RL	SK140	
26	1	縄文土器	深鉢		100		9	砂粒混入	良	10YR7/6明黄褐		RLR	SK154	
	2	縄文土器	深鉢				5	細砂・金雲母混入	良	7.5YR5/3にぶい橙	不明	RL	SK154	
		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
27	1	須恵器	坏	(138)	(74)	39	4	緻密	良	2.5YR6/2灰黄	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	内面に指紋？
	2	須恵器	有台坏	(128)	64	47	3	砂粒混入	良好	N6/灰	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	
		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	文様	地文	出土地点	備考
	3	縄文土器	深鉢				8	砂粒、金雲母混入	良	7.5YR/3にぶい褐	波濤文	RL	SK9904	
	4	縄文土器	深鉢	(340)			8	砂粒、金雲母混入	良	5YR7/6橙	波濤文	LR	SK9904	

【SK81】第23図

46－224グリッドに位置する。長軸200cm、短軸106cmの不整な長楕円形である。確認面からの深さは38cmである。壁はほぼ垂直に近い角度で掘り込まれる。底面には僅かな段差と小穴が認められる。出土遺物は縄文土器片155点である。

23－１は、深鉢の体部である。上部は粘土紐の接合部分から剥離している。文様は、微隆起状の隆沈線で、二又に分岐した波濤状の文様を４単位施文し、文様は体部下半でつながる。文様間の無文部分は研磨調整が施される。大木10式中段階と考えられる。23－2は小型の浅鉢である。口縁部が「く」の字状に強く内湾する。文様は隆沈線により波濤文を描く。口縁部には磨き調整が施される。体部の内外面には炭化物の付着が認められる。大木10式中段階と考えられる。23－3は、高台部分と体部下部のみ残存する台付鉢である。高台には縄文が施されていたと推定されるが、器面の剥落が著しく原体は不明である。中期末のものと考えられる。23－4は深鉢の口縁部である。RL縄文が縦に施文される。外面に炭化物が付着する。大木10式である。23－5は粗製のミニチュア土器の底部破片である。

【SK140】第24図

46－230グリッドに位置するフラスコ状土坑である。開口部の長軸は140cm、短軸は120cmを測る楕円形である。底面は長軸154cm、短軸144cmである。壁はオーバーハングし緩く開く。深さは、最深部で92cmである。底面は平坦であるが緩い傾斜を伴う。遺物は縄文土器片23点が出土し、底面には横位に潰れた深鉢（25－１）が出土した。

25－１は体部が緩やかに膨らみ、口縁部が外反する大型の深鉢である。文様は微隆起状の隆沈線で描かれ、上部に向かい合う一対の「c」字状文を２単位配置し、文様内はRL縄文が充填される。文様の下は波状の区画線で区切られる。体部下にも文様があり、区画線の下に楕円文が５単位配置されている。文様間は磨り消される。頻度は多くないと思われるが、使用による二次加熱の痕跡が認められる。大木10式中段階のものと考えられる。

【SK141】第24図

46－229グリッドに位置する。開口部の長軸78cm、短軸68cmを測る小型のフラスコ状土坑である。底面は長軸104cm、短軸92cmである。深さは50cmである。壁は緩くオーバーハングし、底面は平坦である。出土遺物は縄文土器片25点である。

24－１は深鉢の体部下半の破片と考えられる。文様は微隆起状の隆沈線で描かれるが意匠は不明である。内外面に炭化物の付着が認められる。大木10式中段階と考えられる。

【SK142】第24図

47－229グリッドに位置する。形は崩れているが、フラスコ状を呈する。長軸70cm、短軸60cm、深さ46cmを測る。底面は平坦である。19点の縄文土器片が出土している。

【SK144】第24図

48－23グリッドに位置する。長軸110cm、短軸102cm、深さ32cmを測るほぼ円形の土坑である。壁は比較的緩く掘り込まれ、明瞭な底面はない。出土遺物には縄文土器片９点の他に、須恵器の無台坏と甕片が四点含まれるが、覆土の状態等から縄文時代の所産と考えられる。

【SK146】第24図

48－230グリッドに位置する。長軸78㎝、短軸72㎝のほぼ円形を呈する。深さは20㎝程で、底面には凹凸が見られる。壁は僅かにオーバーハングするが、垂直に近い掘り込みである。縄文土器片が３点出土している。

【SK147】第24図

48－230グリッドに位置する。長軸118㎝、短軸102㎝の楕円形である。深さは、底面が傾斜しているため12㎝～24㎝を測る。壁は僅かにオーバーハングする。縄文土器片が10点出土している。

【SK154】第26図

49－234グリッドに位置するフラスコ状土坑である。東側はSD9580に切られ、西側は開口部が崩落している。開口部南北は98㎝、底面は102㎝である。底面は平坦であるが僅かに傾斜する。深さは55㎝前後を測る。残存する壁の状況から、底部にかけて丸く膨らむタイプのものと推定される。72点の縄文土器片が出土している。

26－１は深鉢の体部下半である。底部付近に煤が付着する。26－２は外反する深鉢の口縁部破片である。文様は、微隆起状の隆沈線で描かれ縄文が充填される。意匠は不明である。大木10式中段階のものと考えられる。

【SK869】第19図・第31図

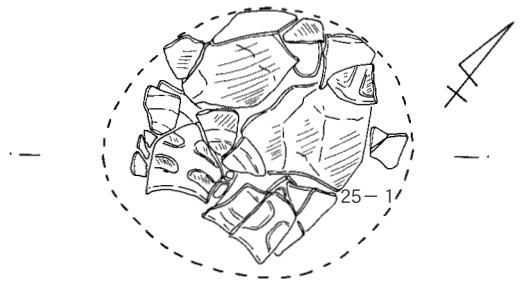
42－227グリッドに位置する。前述したEU9917に切られた土坑である。中位以上の形が崩れてしまっているが、本来はフラスコ状土坑だったものと考えられる。長軸85㎝、短軸78㎝、深さ62㎝を測る。底面は平坦で、径82～88㎝の不整楕円形を呈する。壁は崩落のため凹凸が見られる。縄文土器片71点が出土している。

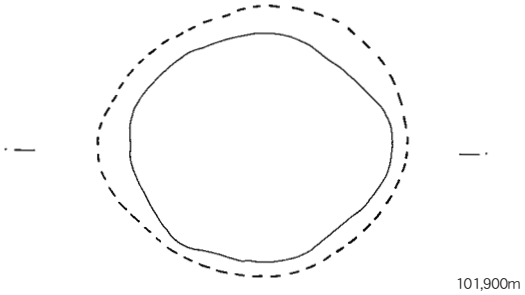
31－１は、体部が緩やかに膨らみ口縁部が外反する深鉢である。体部上半には微隆起状の隆沈線による「c」字状文が横方向に展開し、文様下は隆沈線により区画される。文様間の無文部分は磨り消しが施される。使用による二次加熱のためか、器面の剥落が目立つ。大木10式中段階のものと考えられる。32－2は外反する深鉢の口縁部破片である。RL縄文が縦に施文される。内面には研磨調整が施される。大木10式である。31－３は深鉢の体部破片である。RL縄文が斜方向に施文される。使用による二次加熱のためか器面の荒れが目立つ。31－４は深鉢の体部下半である。RL縄文が施文される。外面に使用による煤の付着が認められる。31－５は深鉢の体部中央付近の破片である。RL縄文が縦に施文される。31－６は深鉢の体部破片である。RL縄文が縦に施文される。部分的に使用による二次加熱で赤変してる。

【SK9904】第27図

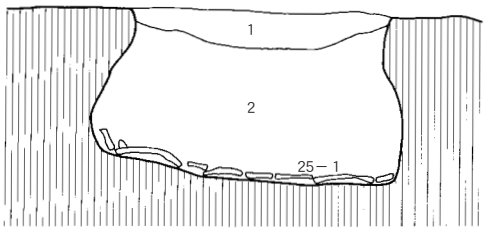
45－227グリッドに位置するフラスコ状土坑である。開口部は大きく抉られているが、上位の最小径は、長軸52㎝、短軸42㎝を測る。中位で強く張り出し、最大径は85㎝を測る。壁は丸みをおびたまま傾斜し、僅かな底面を作る。底径は35～40㎝である。深さは58㎝を測る。遺物は、上層から須恵器無台坏６点、有台坏１点、黒色土器坏１点が出土し、中層以下から縄文土器片116点が出土している。

SK140





101,900m

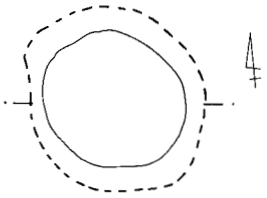


SK140
1　10YR４/２　灰黄褐　シルト　炭化粒、土器片、粗砂含む、固く締る
2　10YR４/２　灰黄褐　シルト　炭化粒多量含む、小礫含む、固く締る

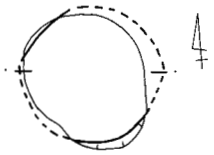
0　50cm
（1：20）

SK141
1　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化物微量、土器片、粗砂含む、固く締る
2　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化物微量、小礫、粗砂、暗褐色シルトブロック少量含む
3　10YR２/３　黒褐　シルト　暗褐色シルト粒少量、土器片、粗砂含む、固く締る

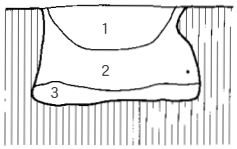
SK141



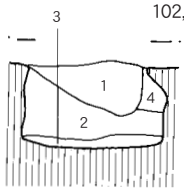
SK142



102,000m

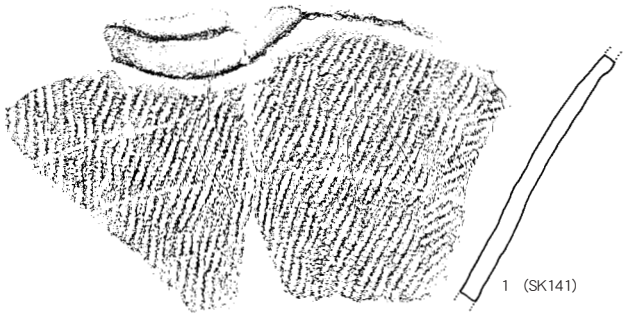


102,000m



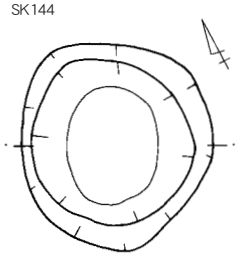
SK142
1　10YR２/２　黒褐　シルト　土器片、小礫含む、粗砂多量含む、固く締る
2　10YR３/２　黒褐　シルト　粗砂多量含む、やわらかくもろい
3　10YR３/２　黒褐　シルト　暗褐色シルト少量含む、固く締る
4　10YR３/３　暗褐　細砂　褐色細砂含む、やわらかいが締っている

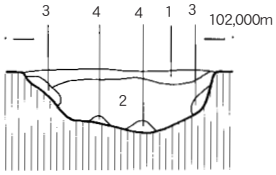
0　1m
（1：40）



0　10cm
（1：3）

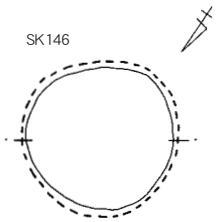
SK144

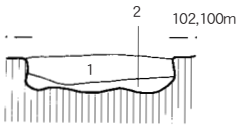




102,000m

SK146

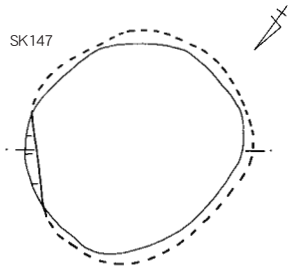


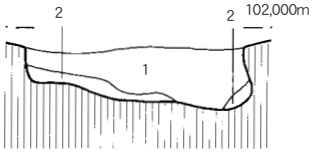


102,100m

SK146
1　10YR２/３　黒褐　シルト　細砂少量、小礫含む、固く締る
2　10YR２/３　黒褐　シルト　炭化粒微量、小礫含む、固く締る

SK147





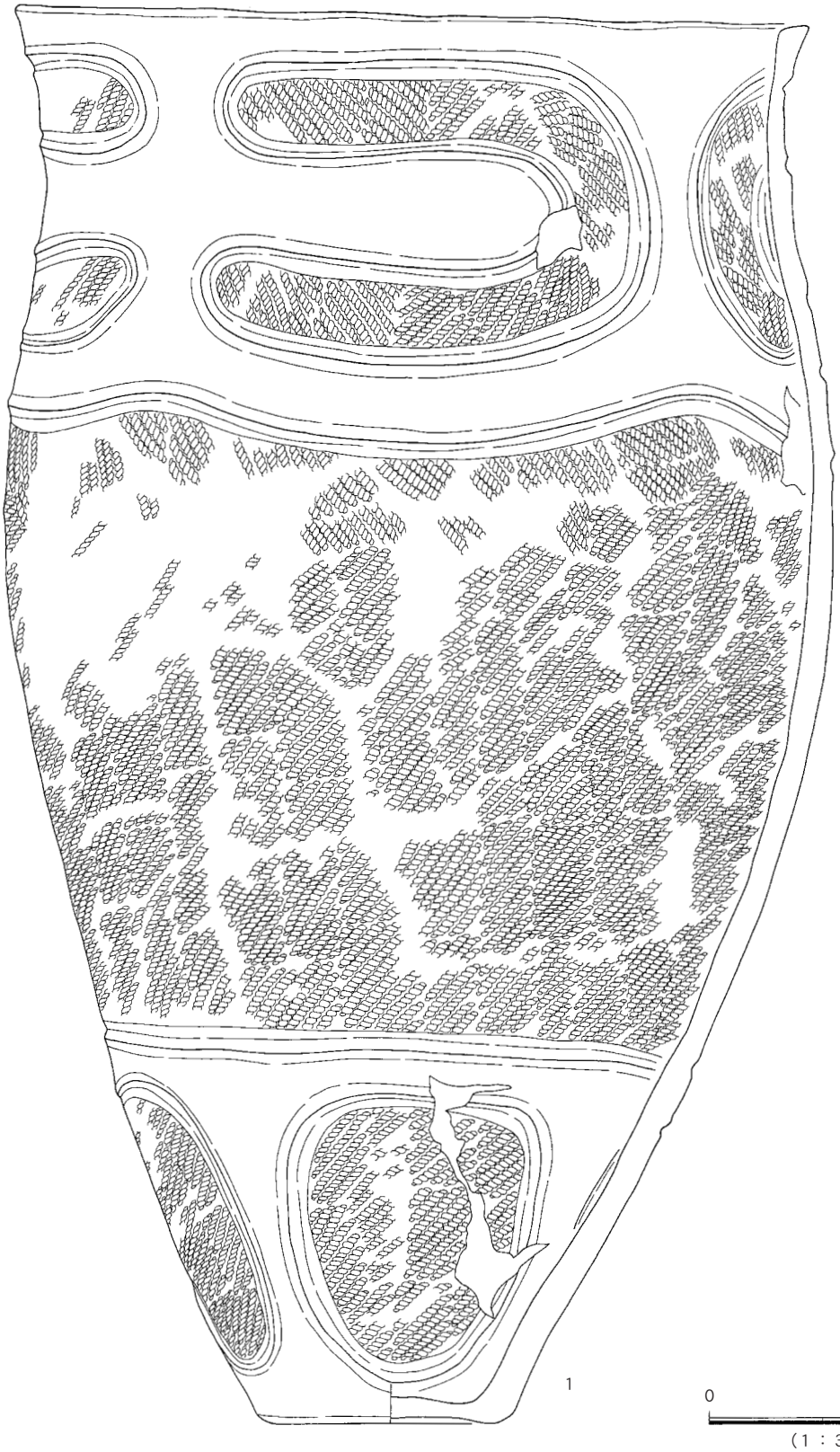
102,000m

SK144
1　10YR２/３　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック少量含む、固く締る
2　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色細砂微量含む、固く締る
3　10YR３/４　暗褐　シルト　黄褐色シルトブロック含む、固く締る
4　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色細砂含む、固く締る

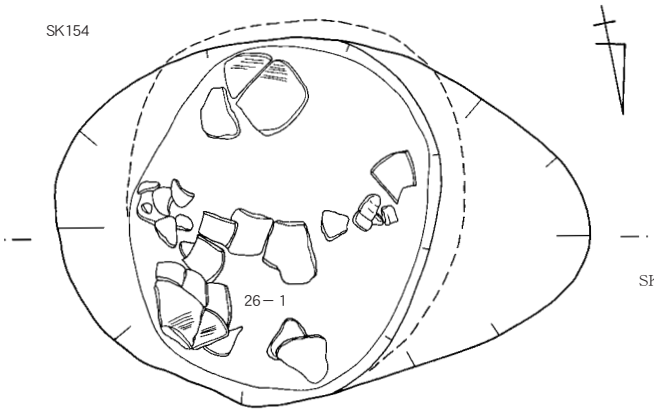
SK147
1　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化粒少量、大小礫、土器片含む、固く締る

0　1m
（1：40）

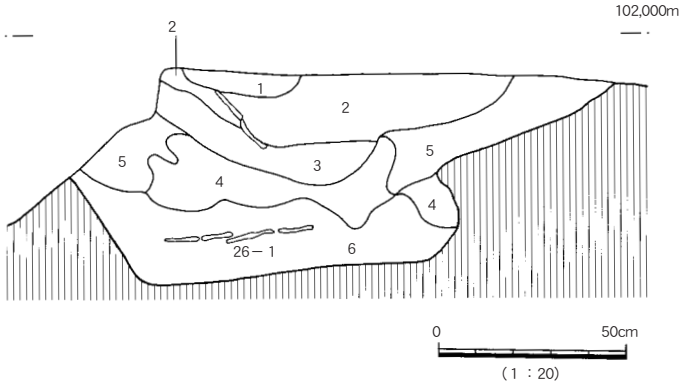
第24図　SK140、141、142、144、146、147、出土遺物



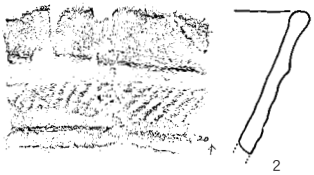
第25図　SK140・出土遺物



SK154
1　10YR３/２　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック、黄褐色シルト粒少量含む
2　10YR３/３　暗褐　シルト　黒褐色シルトブロック少量、黄褐色シルト粒微量含む
3　10YR２/３　黒褐　シルト　炭化粒多量、褐色細砂ブロック少量含む
4　10YR４/４　褐　シルト　黒褐色シルトブロック少量含む
5　10YR３/４　暗褐　シルト　焼土粒微量、黄褐色シルト粒微量含む
6　10YR３/３　暗褐　シルト　炭化物多量、褐色シルト粒少量含む

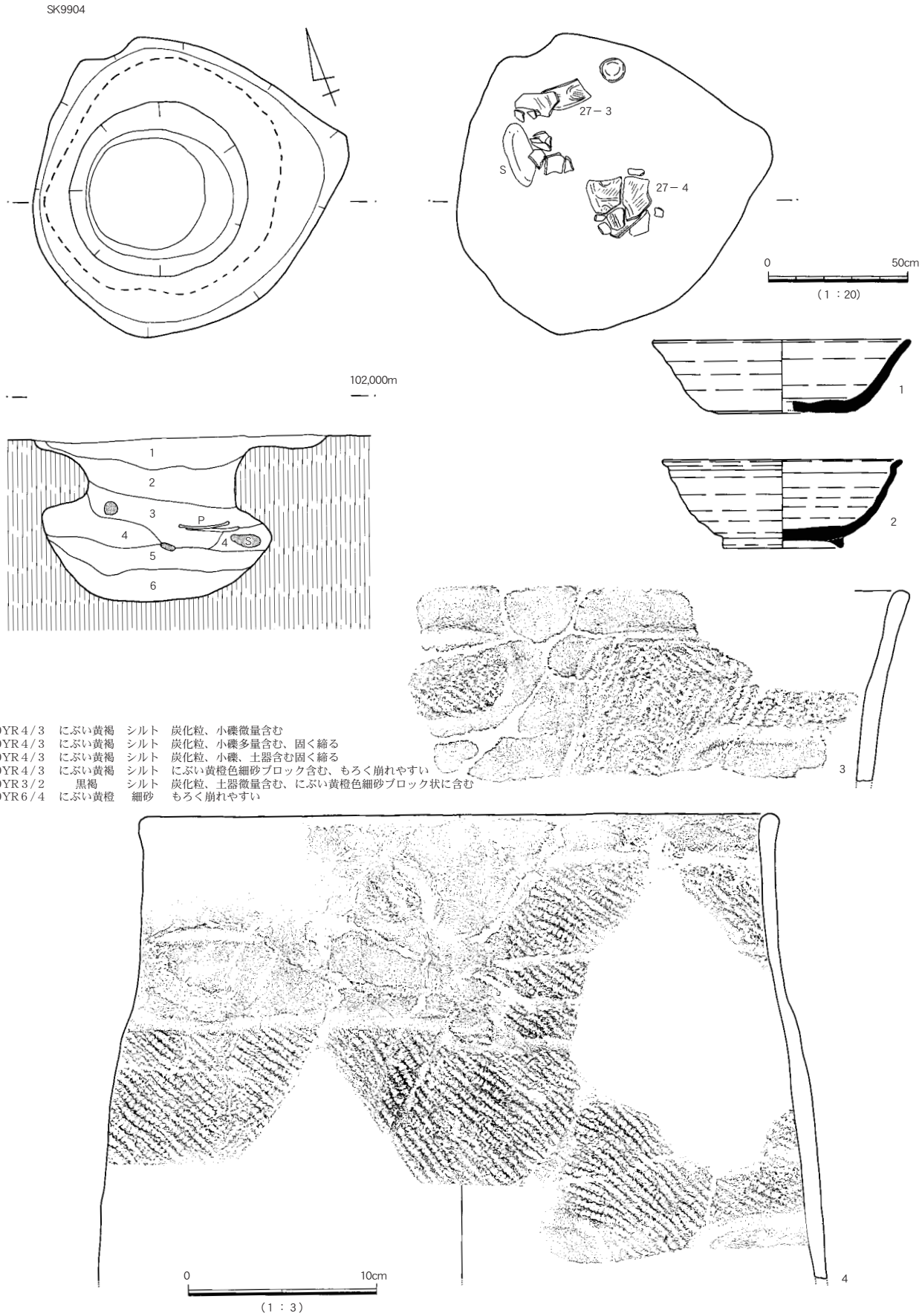


（１：20）



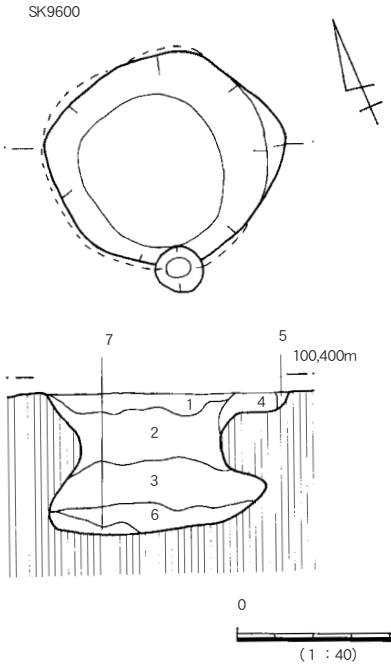
（１：３）

第26図　SK154　出土遺物



SK9904
1　10YR４/３　にぶい黄褐　シルト　炭化粒、小礫微量含む
2　10YR４/３　にぶい黄褐　シルト　炭化粒、小礫多量含む、固く締る
3　10YR４/３　にぶい黄褐　シルト　炭化粒、小礫、土器含む固く締る
4　10YR４/３　にぶい黄褐　シルト　にぶい黄橙色細砂ブロック含む、もろく崩れやすい
5　10YR３/２　黒褐　シルト　炭化粒、土器微量含む、にぶい黄橙色細砂ブロック状に含む
6　10YR６/４　にぶい黄橙　細砂　もろく崩れやすい

第27図　SK9904・出土遺物



SK9600

1	10YR2/1	黒	シルト	褐色微砂質シルトを斑状に含む、固く締る
2	10YR3/4	暗褐	砂質シルト	褐色微砂質シルト、黒色シルトを斑状に含む、固く締る
3	10YR3/4	暗褐	砂質シルト	黒色シルトを帯状に含む、固く締る
4	10YR3/3	暗褐	シルト	均質、固く締る
5	10YR3/4	暗褐	シルト	均質、固く締る
6	10YR3/4	暗褐	砂	黒色シルトブロック微量含む、固く締る
7	10YR4/4	暗褐	砂	均質、もろく崩れやすい

第28図　SK9600

27－1は須恵器無台坏である。底部は、ヘラ切り後無調整である。体部は、底部から丸みを持って立ち上がり、中位から僅かに外反して口縁部に至る。内外面とも火襷が顕著に認められる。27－2は須恵器有台坏である。底部は回転糸切りで、底部外周に断面三角形の台が貼付けられる。ロクロ目の凹凸が明瞭に見られる体部は、緩やかに内湾する。口縁部は強く屈曲し特徴的に外反する。2点とも9世紀前半代のものと考えられる。なお、これらは上層からの出土であり、流れ込みによるものと考えられる。

27－3は口縁部が外反する深鉢である。文様は、幅広の沈線による波濤文が描かれる。無文部分には研磨調整が施される。27－4は口縁部が外反気味に立ち上がる深鉢である。文様は、体部の上に沈線による波濤文が施され、体部中央にも下向きに波濤文が施されると推測される。無文部分には、研磨調整が施される。大木10式中段階のものと考えられる。

【SK9600】第28図

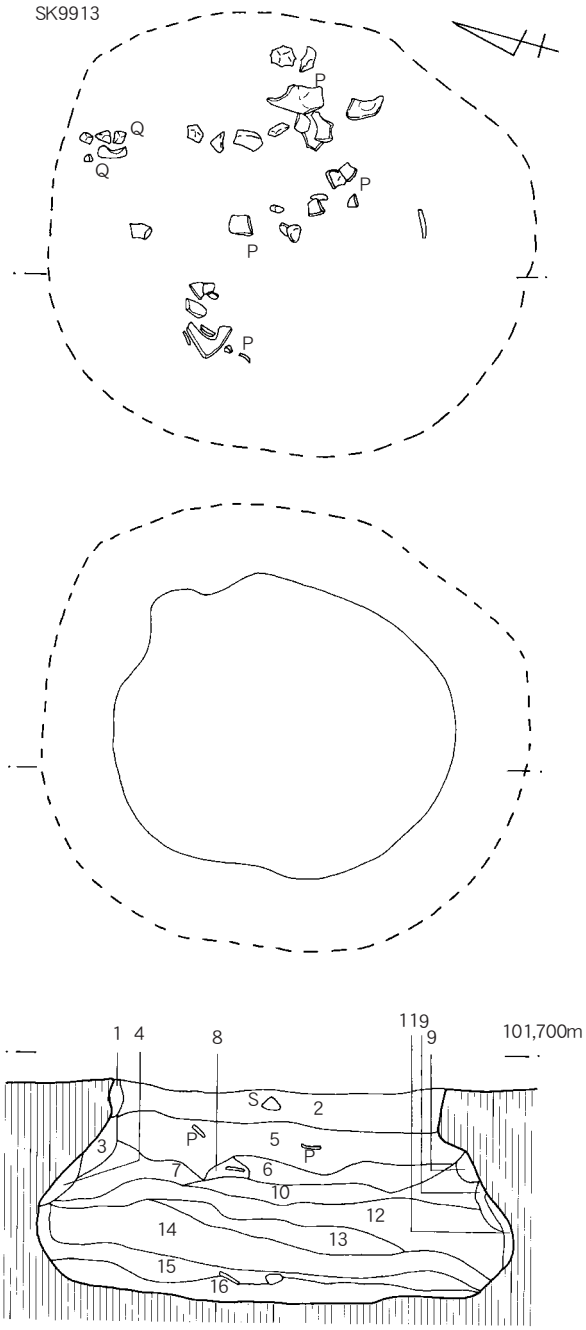
39－207グリッドに位置する。開口部の長軸128cm、短軸108cmの楕円形のフラスコ状土坑である。最小径は中位にあり、長軸80cm、短軸70cmを測る。壁の傾斜が非対称であるため、下部から底部に112cmの最大径を有する。深さは72cmを測る。底面はやや傾斜するが平坦である。出土遺物はない。

【SK9913】第29図

43－227グリッドに位置するフラスコ状土坑である。開口部の長軸91cm、短軸76cmの楕円形を呈する。確認面から10cm下がった所に最小径を有するが、開口部と大きく変わらない。最大径は約40cm下がった下部にあり、125cmを測る。底面は平坦で、径105cmである。壁の傾斜は対称的に丸みを帯びて傾斜する。深さは55cmである。縄文土器片76点が出土している。

【SK9908】第30図

45－225グリッドに位置するフラスコ状である。開口部は、長軸74cm、短軸66cmの不整楕円形である。最小径は、確認面から15cm下がったところに見られるが、径はほぼ同じである。最大径は、確認面から25ないし35cm下がった下部にあり、94cmを測る。壁は全体的に丸みを持つが、非対称の傾斜である。深さは47cmを測る。中位に長さ10～40cm代の大小の礫が入る。縄文土器片が105点出土している。



SK9913

1	10YR4/4	褐	シルト	均質
2	10YR3/3	暗褐	シルト	粗砂少量含む
3	10YR3/3	暗褐	シルト	均質
4	10YR4/4	褐	シルト	微砂質、均質
5	10YR2/3	黒褐	シルト	粗砂含む
6	10YR3/4	暗褐	シルト	小礫少量含む
7	10YR3/2	黒褐	シルト	均質
8	10YR3/3	暗褐	シルト	少量の微砂を含む
9	10YR4/6	褐	シルト	均質
10	10YR3/4	暗褐	シルト	炭化粒少量含む
11	10YR5/6	黄褐	砂質シルト	均質
12	10YR3/3	暗褐	シルト	炭化粒少量含む、粘性
13	10YR4/6	褐	砂質シルト	炭化粒少量含む
14	10YR3/3	暗褐	シルト	炭化粒含む、粘性
15	10YR3/3	暗褐	シルト	粘性、均質
16	10YR4/4	褐	砂	締りない

第29図　SK9913

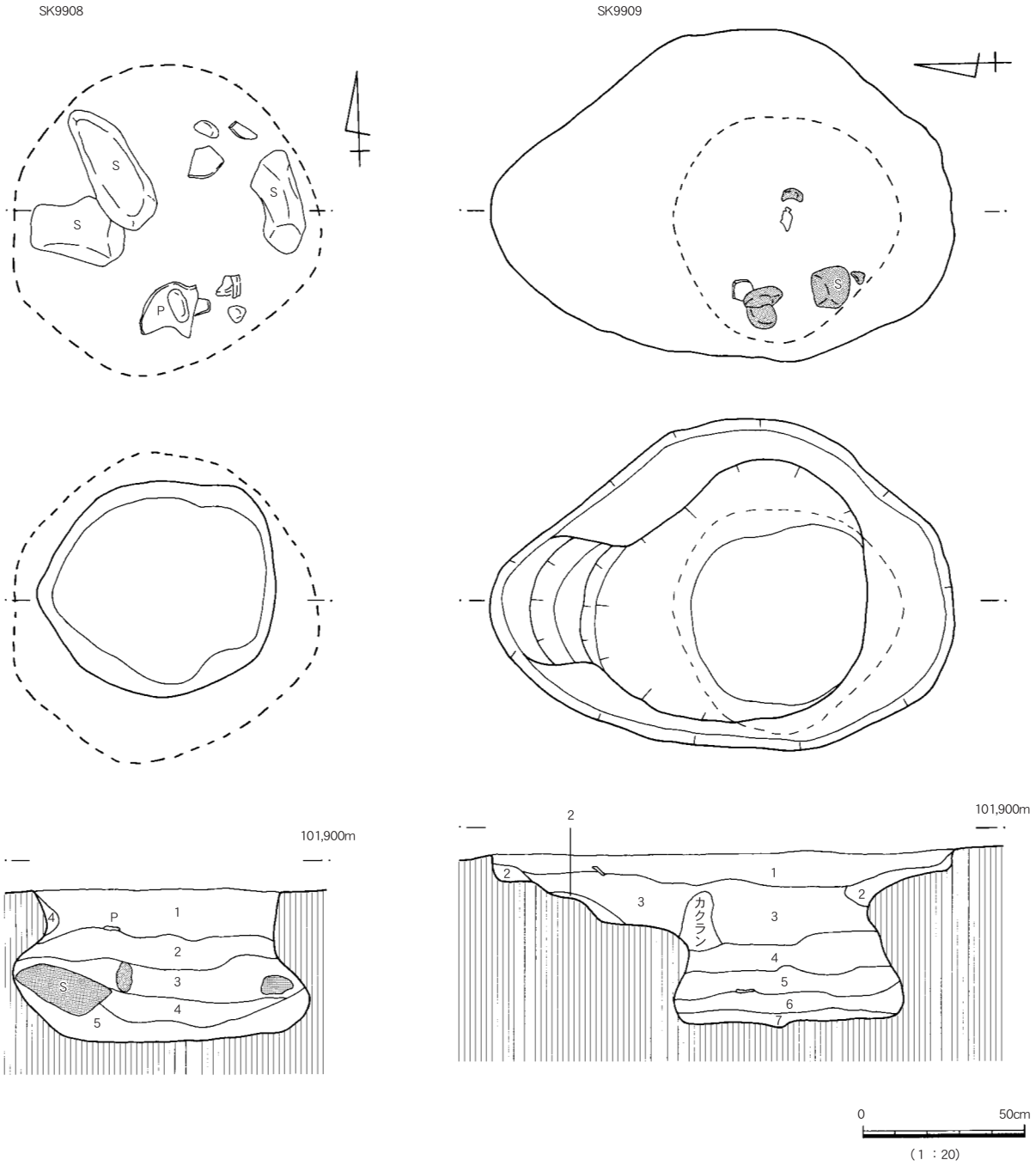
【SK9909】第30図

46－225グリッドに位置するフラスコ状土坑である。開口部は崩落が著しく、特に北側は大きく崩れている。比較的崩れが少ない東西径で104cmを測る。最大径は底面直上にあり、71cmである。深さは54cmである。壁は対称的にオーバーハングし、底は平坦である。5～15cm代の礫が数点見られる。縄文土器片が59点出土している。

4　土坑出土土器（第32・33・34図）

32－１～３は46－230グリッドに位置するSK６出土である。32－１は体部が直線的に外傾し、口縁が水平に「く」の字状に屈曲する深鉢である。文様は波濤文が５単位描かれると推測される。作りが丁寧であり、口縁部には研磨調整を施す。使用による二次加熱のため、体部下が赤変する。大木10式中段階と考えられる。32－２は外反する深鉢の口縁部破片である。RLR縄文が縦に施文される。口縁端部は丸く仕上げられる。内面の器面上には金雲母が目立つ。大木10式である。32－３は口縁部が外反する深鉢である。RL縄文が斜方向に施文される。下部に炭化物が付着する。大木10式である。SK6からは23点の出土である。32－４は、44－228グリッドにあるSK795出土の深鉢である。口縁部が内湾し、波状口縁となる。微隆起状の隆沈線により、「c」字状の文様を施す。胎土は緻密で、焼成も良く、外面には全面に研磨調整が施される。大木10式中段階と考えられる。

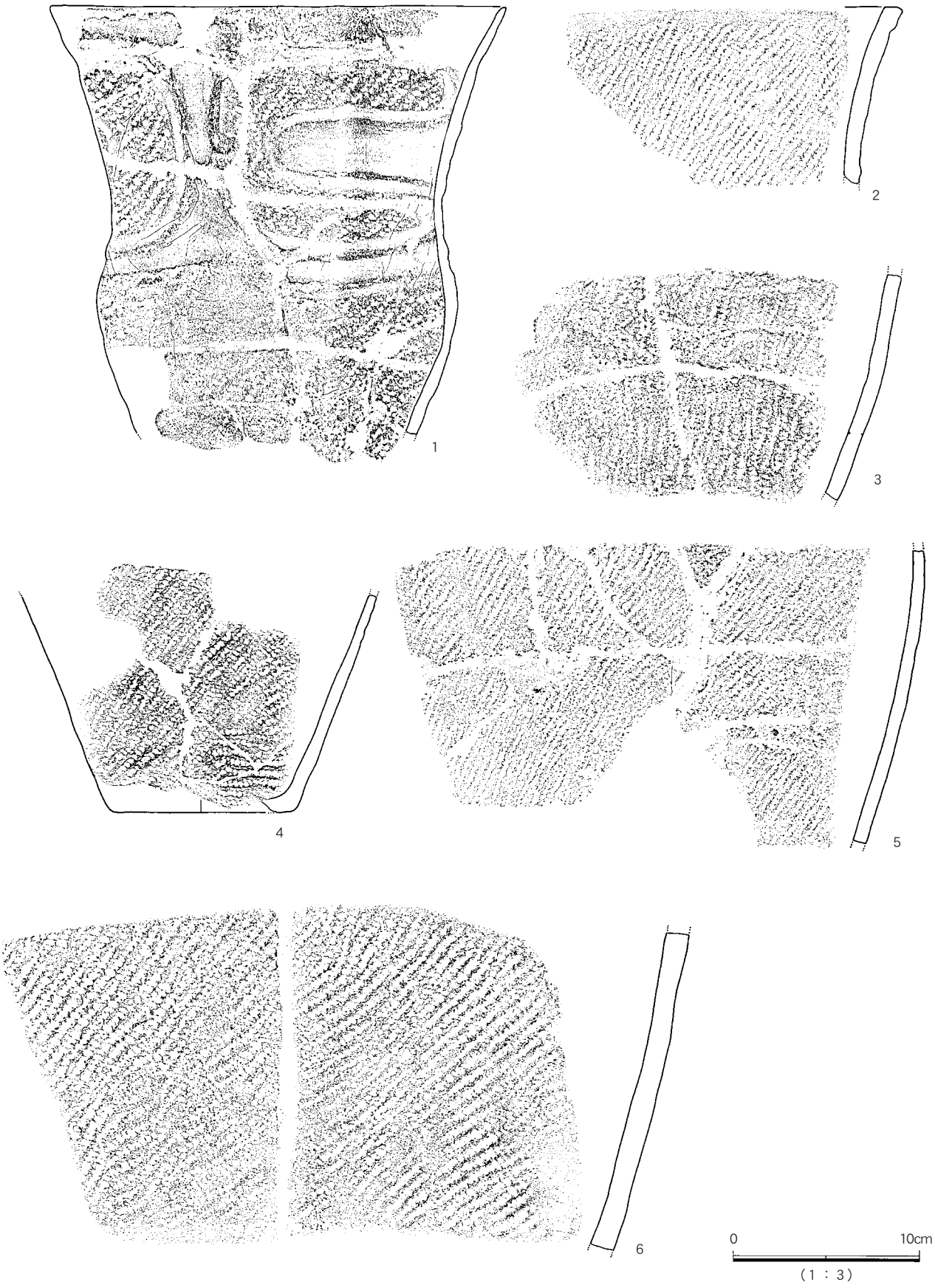
32－５は45－225グリッドに位置するSK852から出土した浅鉢型の注口土器である。残存部分が少なく、文様の展開は不明であるが微隆起状の隆沈線による楕円文が描かれると推測される。器面には研磨調整が施される。大木10式中段階のものと考えられる。



SK9908
1　2.5YR 3/2　黒褐　シルト　炭化粒微量、小礫少量、土器片微量含む、固く締る
2　2.5YR 3/2　黒褐　シルト　炭化粒少量、小礫微量含む、固く締る
3　10YR 3/2　黒褐　シルト　炭化粒少量、小礫含む、固く締る
4　10YR 3/2　黒褐　シルト　粗砂含む、固く締る
5　10YR 3/4　暗褐　粗砂　もろく崩れやすい

SK9909
1　10YR 4/3　にぶい黄褐　シルト　炭化粒、小礫微量含む、固く締る
2　10YR 4/3　にぶい黄褐　シルト　炭化粒（微小）、小礫微量含む、固く締る
3　10YR 4/3　にぶい黄褐　シルト　炭化粒微量、土器片含む、固く締る
4　10YR 3/2　黒褐　シルト　炭化粒、小礫微量含む、固く締る
5　7.5YR 3/1　黒褐　シルト　炭化粒、褐色細砂少量含む、土器片含む、固く締る
6　10YR 3/1　黒褐　シルト　炭化粒、小礫少量含む、土器片含む、固く締る
7　10YR 3/1　黒褐　粗砂　小礫少量含む、もろく崩れやすい

第30図　SK9908・9909



第31図　SK869　出土遺物

32－６は、45－223グリッドにあるSK135出土の深鉢である。口縁部は外反気味に立ち上がる。RLR縄文が縦に施される。大木10式である。SK135からは7点の出土である。

33－１と４は、48－230グリッドに位置するSK61から出土したものである。33－１は口縁部が外反する深鉢である。文様は、微隆起状の隆沈線により雁股文が描かれる。外面の無文部分には丁寧な研磨調整が施される。33－４は口縁部が短く外反する深鉢である。隆帯で体部と区画され、口縁部は無文である。使用による二次加熱により体部下半が赤変している。これらは大木10式中段階のものと考えられる。SK61からは77点出土している。

33－２・３・５は、44－222グリッドにあるSK854から出土したものである。33－２は深鉢の口縁部破片である。微隆起状の隆沈線により文様が描かれる。口縁部に研磨調整が施される。33－３と同一固体の可能性がある。33－３は深鉢の体部破片である。微隆起状の隆沈線で文様が描かれる。これらは大木10式中段階と考えられる。33－５は深鉢の底部である。RL縄文が施される。使用による二次加熱により赤変し底が抜けている。SK854からは13点出土している。

33－６・７は、44－224グリッドに位置するSK9919からの出土である。同一固体と考えられるこの２点は、深鉢の体部破片である。RLR縄文が縦に施文される。

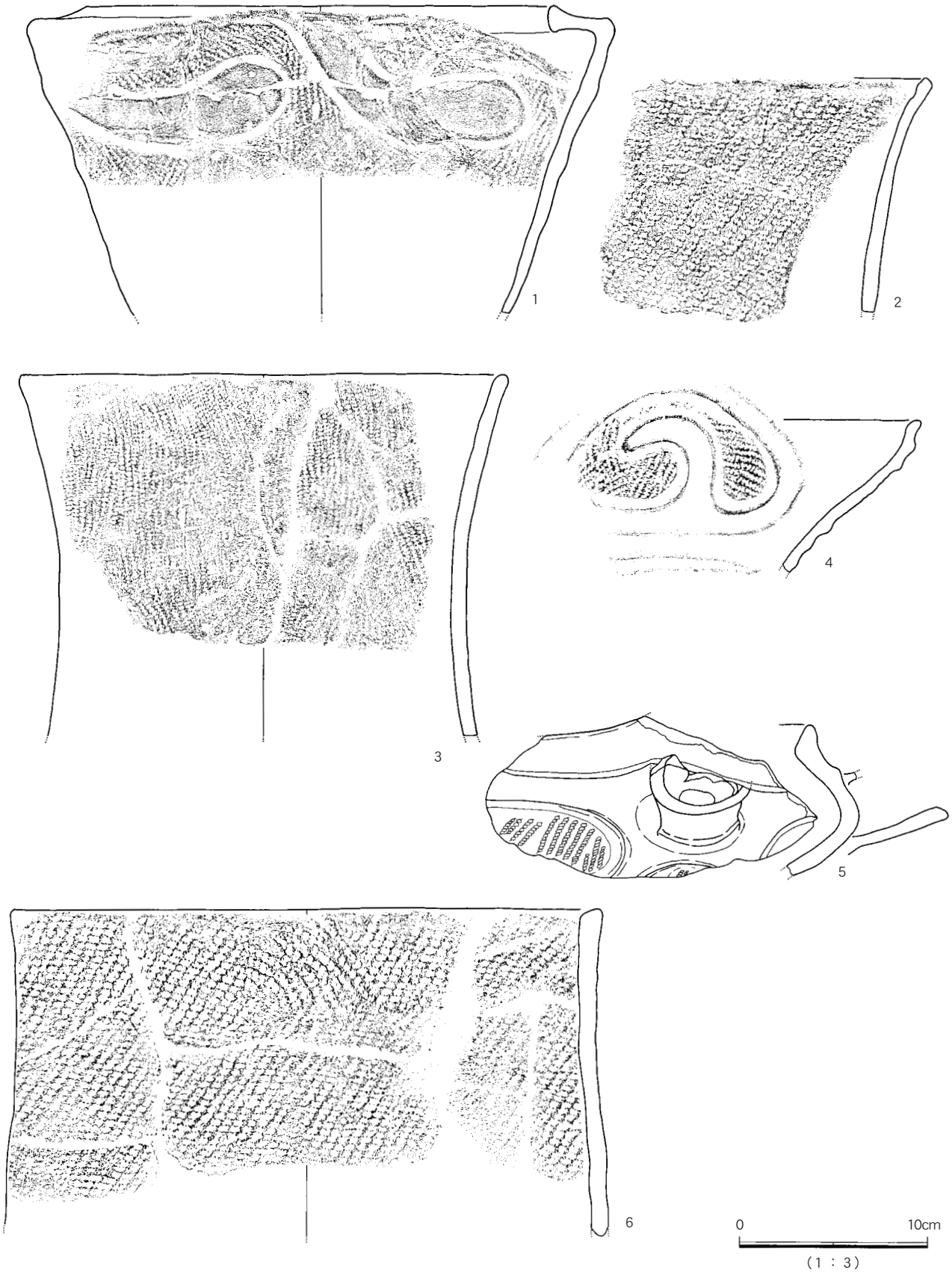
34－１は、46－222グリッドで検出されたSK9928から出土した深鉢である。口縁部は外反し、大きく開く。文様は微隆起状の隆沈線により雁股文が描かれるものと思われる。焼成が良く、内面には炭化物の付着が認められる。大木10式中段階のものと考えられる。SK9928からは50点の縄文土器が出土している。

表５　SK869出土土器観察表

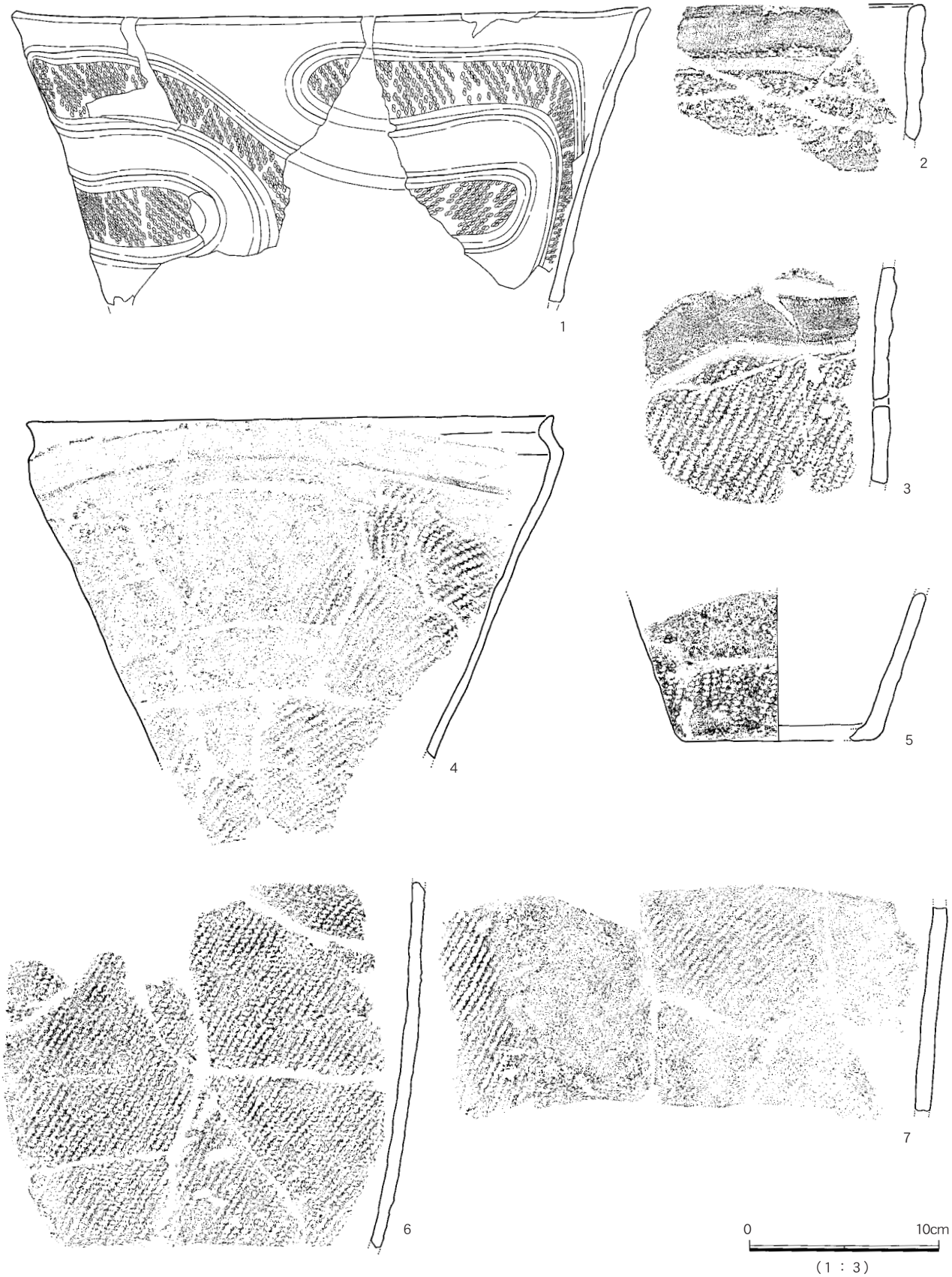
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	文様	地文	出土地点	備考
31	1	縄文土器	深鉢				7	細砂、金雲母混入	良	7.5YR6/3にぶい褐	「C」字状文	RL	SK869F3	
	2	縄文土器	深鉢				9	細砂、金雲母混入	良	10YR3/1黒褐		RL	SK869F3	
	3	縄文土器	深鉢				8	細砂、金雲母混入	良	５YR6/橙		RL	SK869F3	
	4	縄文土器	深鉢		(99)		7	細砂混入	良	7.5YR6/6橙		RL	SK869F3	
	5	縄文土器	深鉢				7	細砂、金雲母混入	良	10YR8/4浅黄橙		RL	SK869F3	
	6	縄文土器	深鉢				11	砂粒混入	良	５YR5/4にぶい赤褐		RL	SK869F7	

表６　土坑出土土器観察表

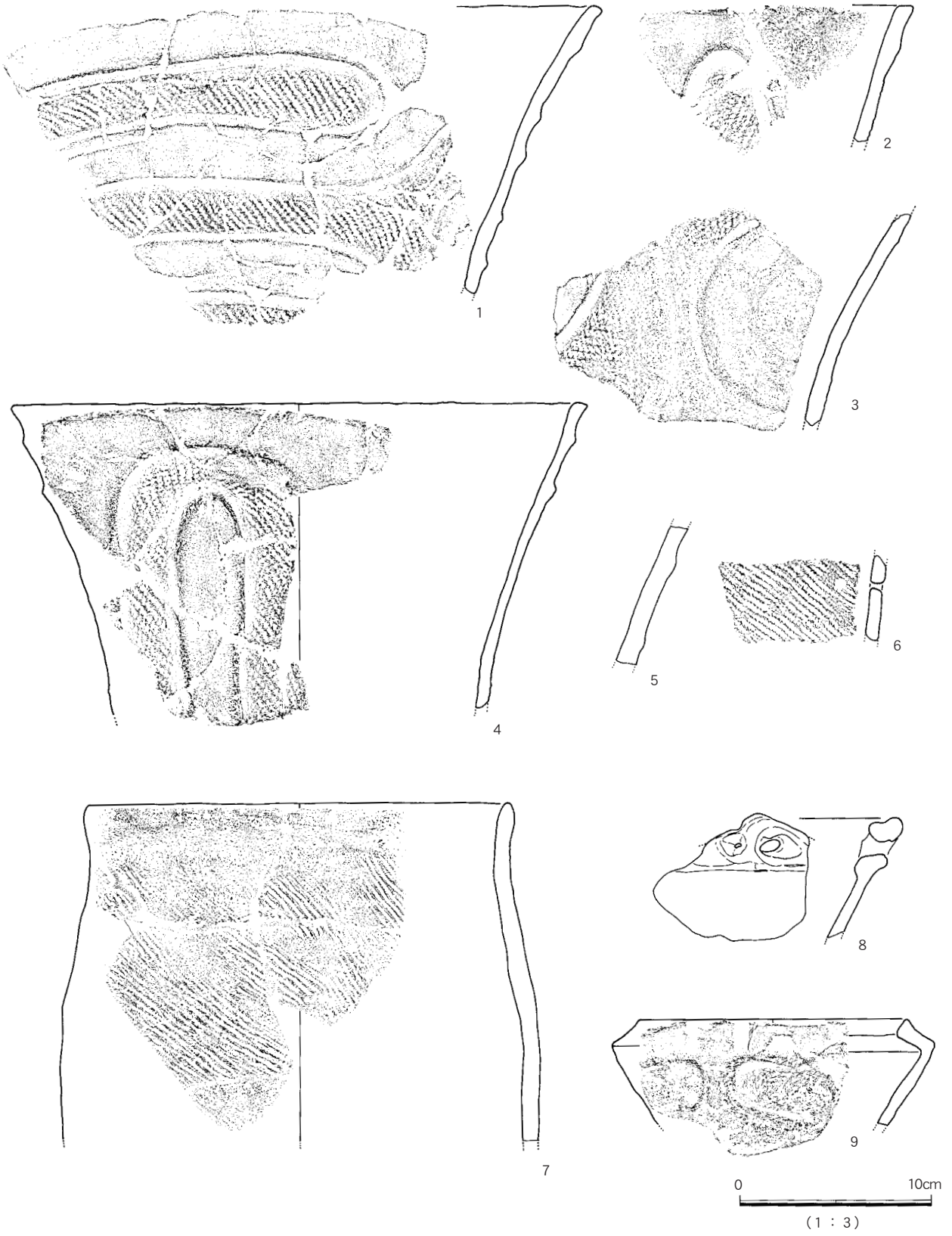
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	文様	地文	出土地点	備考
32	1	縄文土器	深鉢	310			7	砂粒、金雲母混入	良	7.5YR5/6明褐	波濤文	RL	SK6	
	2	縄文土器	深鉢	(260)			8.5	細砂、金雲母混入	良	7.5YRにぶい褐		RLR	SK6	
	3	縄文土器	深鉢				7	砂粒、金雲母混入	良	10YRにぶい黄褐		RL	SK6	
	4	縄文土器	深鉢				7	砂粒混入	良	10YR3/3暗褐	「C」字状文	RL	SK795	
	5	縄文土器	注口土器				7	細砂、金雲母混入	良	10YR5/4にぶい黄褐	楕円文？	RLR	SK852	
	6	縄文土器	深鉢	312			11	砂粒混入	良	10YR3/1黒褐		RLR	SK135	
33	1	縄文土器	深鉢	334			7	砂粒、金雲母混入	良	10YR3/1黒褐	雁股文	RLR	SK61	
	2	縄文土器	深鉢				8.5	細砂、金雲母混入	良	10YR7/4にぶい黄橙	不明	RL	SK854	
	3	縄文土器	深鉢				8	細砂、金雲母混入	良	10YR3/2黒褐	不明	RL	SK854	補修孔
	4	縄文土器	深鉢	(280)			5	細砂、金雲母混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	無文帯（口縁）	RL	SK61	
	5	縄文土器	深鉢		(100)		7.5	細砂、金雲母混入	良	5YR6/6橙		RL	SK854	二次焼成
	6	縄文土器	深鉢				7	細砂、金雲母混入	良	10YR4/4褐		RLR	SK9919	
	7	縄文土器	深鉢				8	砂粒、金雲母混入	良	10YR4/3にぶい黄褐		RLR	SK9919	
34	1	縄文土器	深鉢				7	細砂、金雲母混入	良	2.5YR5/6明赤褐	雁股文	RL	SK9928	
	2	縄文土器	深鉢	(283)			7	細砂、金雲母混入	良	2.5YR5/6明赤褐	不明	RLR	43-234	
	3	縄文土器	深鉢				7	細砂、金雲母混入	良	7.5YR5/8明褐	雁股文	RLR	X-0	
	4	縄文土器	深鉢	(300)			5	細砂、金雲母混入	良	7.5YR6/3にぶい褐	「S」字状文	RLR	46-234	
	5	縄文土器	深鉢				9	砂粒混入	良	10YR4/3にぶい黄褐	無文帯	RLR	44-232	
	6	縄文土器	深鉢				7	細砂、金雲母混入	良	10YR2/1黒		RL	46-232	補修孔
	7	縄文土器	深鉢	(220)			8.5	粗砂混入	良	7.5YR7/4にぶい橙		撚糸文R	X０	
	8	縄文土器	深鉢				7	粗砂混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	円孔突起		X０	
	9	縄文土器	浅鉢	(140)			6	細砂金雲母混入	良	10YR5/8赤	楕円文	RL？	46-234	



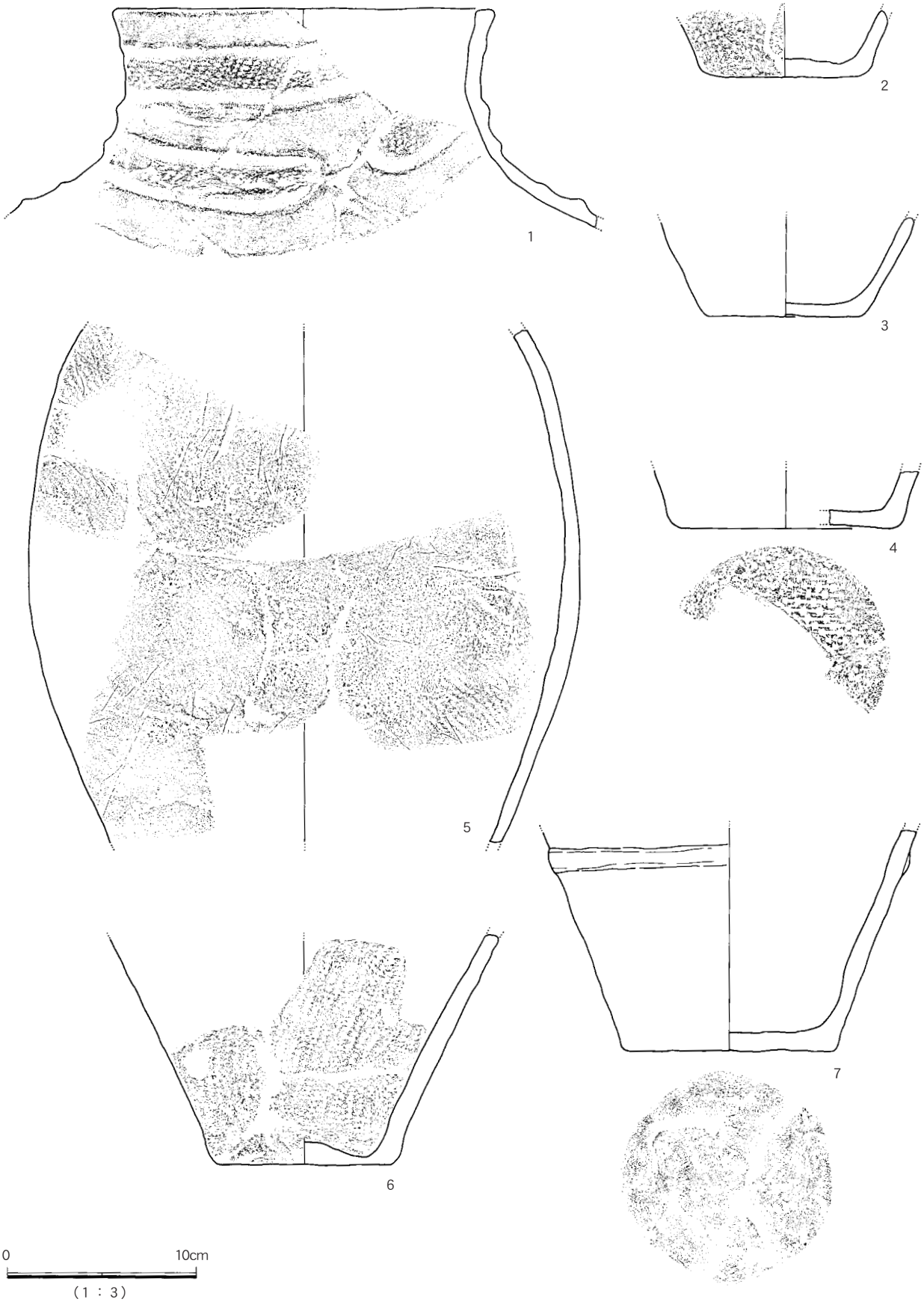
第32図　土坑出土土器（縄文）1



第33図　土坑出土土器（縄文）2



第34図　土坑出土土器（縄文）3



第35図　包含層出土土器（縄文）1

5　包含層出土遺物

34－２は口縁が外反する深鉢である。微隆起状の隆沈線により文様が描かれる。焼成は良く、磨り消しが施される。34－３は深鉢の体部上半の破片である。残存部が少なく文様展開が不明瞭であるが、微隆起状の隆沈線による雁股文などの文様が描かれると思われる。34－４は口縁部が外反する深鉢である。文様展開の詳細は不明であるが、稜線状の隆沈線により「S」字状の文様などが施文されていると思われる。焼成は良く、丁寧な調整がなされている。34－５は深鉢の体部破片である。稜線状の隆沈線により文様が描かれるが展開は不明である。以上の４点は大木10式中段階のものと考えられる。

34－６は深鉢の体部破片である。LR縄文が縦に施文される。補修孔が認められる。34－７は口縁部が外反気味に直立する深鉢である。口縁部は無文で、体部に撚糸文Rが施される。大木10式新段階の可能性も考えられる。34－８は口縁部が外反する深鉢で、円孔があいた突起がつく。体部は無文である。後期初頭の可能性も考えられる。

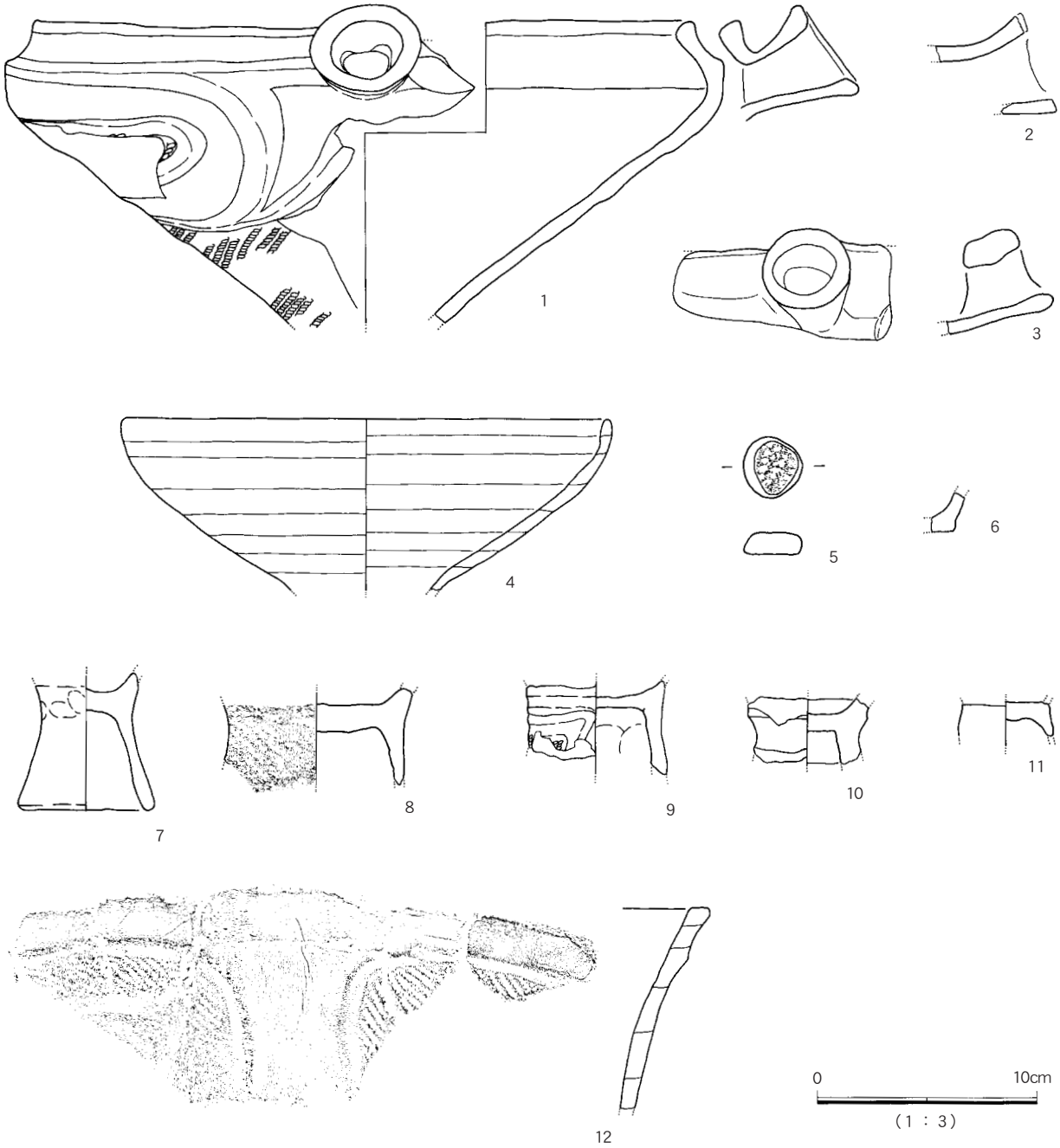
35－１は口縁部が外反し、体部にかけて大きく膨らむ深鉢である。微隆起状の隆沈線により「C」字状文を描く。無文部分にナデ調整を施す。大木10式中段階と考えられる。35－２は深鉢の底部である。RLR縄文が施文される。35－３も同じくRLR縄文が施文された深鉢の底部である。器面の剥落が著しい。35－４は底部に網代痕が認められる深鉢の底部である。35－５は深鉢の体部中央の部分である。LR縄文が縦に施文される。使用による二次加熱で、部分的に赤変している。35－６は深鉢の底部である。RL縄文が斜方向に施文される。35－７は深鉢の底部である。文様は、体部に一条の隆帯を貼付けているが、調整は丁寧ではない。外面には粗雑な研磨が施されるが縦方向に削られた痕跡が残る。底部には網代痕が認められる。大木10式新段階か後期初頭に位置付けられるものと考えられる。

36－１は口縁部が内湾する浅鉢型の注口土器である。口縁部は無文で、体部上半に微隆起状の隆沈線による楕円文で磨り消し縄文が施される。胎土は緻密で焼成も良い。大木10式中段階と考えられる。36－２は注口土器の注口部分である。外面にRL縄文が施文される。36－３は口縁部が内湾する浅鉢型の注口土器と思われる。器面剥落のため詳細は不明である。

表７　包含層出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	文様	地文	出土地点	備考
35	1	縄文土器	浅鉢	(202)			8	細砂、金雲母混入	良	2.5YR3/1暗赤灰	「C」字状文？	RLR	46-234	
	2	縄文土器	深鉢		86		7	細砂、金雲母混入	良	5YR5/6明赤褐		RLR？	44-234	
	3	縄文土器	深鉢		82		6	砂粒、金雲母混入	良	10YR6/6明黄褐		RLR	45-234	
	4	縄文土器	深鉢		(120)		8	粗砂混入	良	5YR7/8橙	無文		42-232	網代
	5	縄文土器	深鉢				7	細砂混入	良	5YR6/3橙		LR	B区	
	6	縄文土器	深鉢		96		10	砂粒、金雲母混入	良	5YR6/6橙		RL	47－233	
	7	縄文土器	深鉢		110		8	粗砂混入	良	10YR7/3にぶい橙	突帯文		B区	
36	1	縄文土器	注口土器	(303)			8	細砂、金雲母混入	良	5YR4/6赤褐	楕円文	RL	47－232、46－234	
	2	縄文土器	注口土器				7	砂粒混入、骨針	良	7.5YR5/4にぶい褐		RL	XO	
	3	縄文土器	注口土器				7	細砂混入	不良	7.5YR6/6橙			B区	
	4	縄文土器	浅鉢	(220)			5	細砂混入	良	10YR8/2灰白	無文		48-236	
	5	縄文土器	円盤状土製品				10	細砂混入	良	5YR6/6橙		RL	46-234	
	6	縄文土器	ミニチュア				6	細砂、金雲母混入	良	5YR6/6橙		LR	50-238	
	7	縄文土器	台付鉢？		46		4	粗砂混入	良	10YR7/6明黄褐	無文？		38-26	
	8	縄文土器	台付鉢				8	細砂、金雲母混入	良	5YR5/6明赤褐	円孔（透かし）	LRL	46-232	
	9	縄文土器	台付鉢				7	砂粒混入	良	7.5YR6/6橙	不明	RLR	XO	
	10	縄文土器	台付鉢				12	砂粒混入	良	10YR6/2灰黄褐	無文		46-226	
	11	縄文土器	台付鉢				5	粗砂混入	良	7.5YR7/3にぶい橙			A区	
	12	縄文土器	深鉢	(300)			8	細砂、金雲母混入	良	7.5YR5/8明褐	不明	LR	44-232	

36－４は口縁部が内湾する浅鉢である。器面の剥落が著しいが、無文と思われる。幅２㎝程の粘土紐の輪積み痕が認められる。36－５はRL縄文が施文される土器片の周辺を擦って円形に成形した円盤状土製品である。36－６はLR縄文が施文されるミニチュア土器の底部である。36－７～11は台付鉢である。９は底部から高台の上部が残存する。高台に隆沈線による文様が施文される。36－12は口縁部が外反する深鉢である。稜線状の隆沈線で「s」あるいは「c」字状の文様が描かれると思われる。大木10式中段階と考えられる。



第36図　包含層出土土器（縄文）2

6　石　　器

SA地区で出土した石器の点数は、２次加工のある剥片を含めて48点である。溝跡や包含層からの出土が多く、流れ込みによるものが大半を占める。器種は石鏃、石匙、掻器、削器、打製石斧、磨製石斧等である。２次加工のある剥片が17点、次いで11点出土した打製石斧が多い。

37－１・２は押圧剥離によって成形された基部が無茎である。１は先端部と基部をわずかに欠損する。断面形は菱形に近いふくらみを持つ。

37－５・６は、縦長剥片を素材とする掻器である。５は末端と右側縁が刃部となる。６は全周が刃部となるものである。

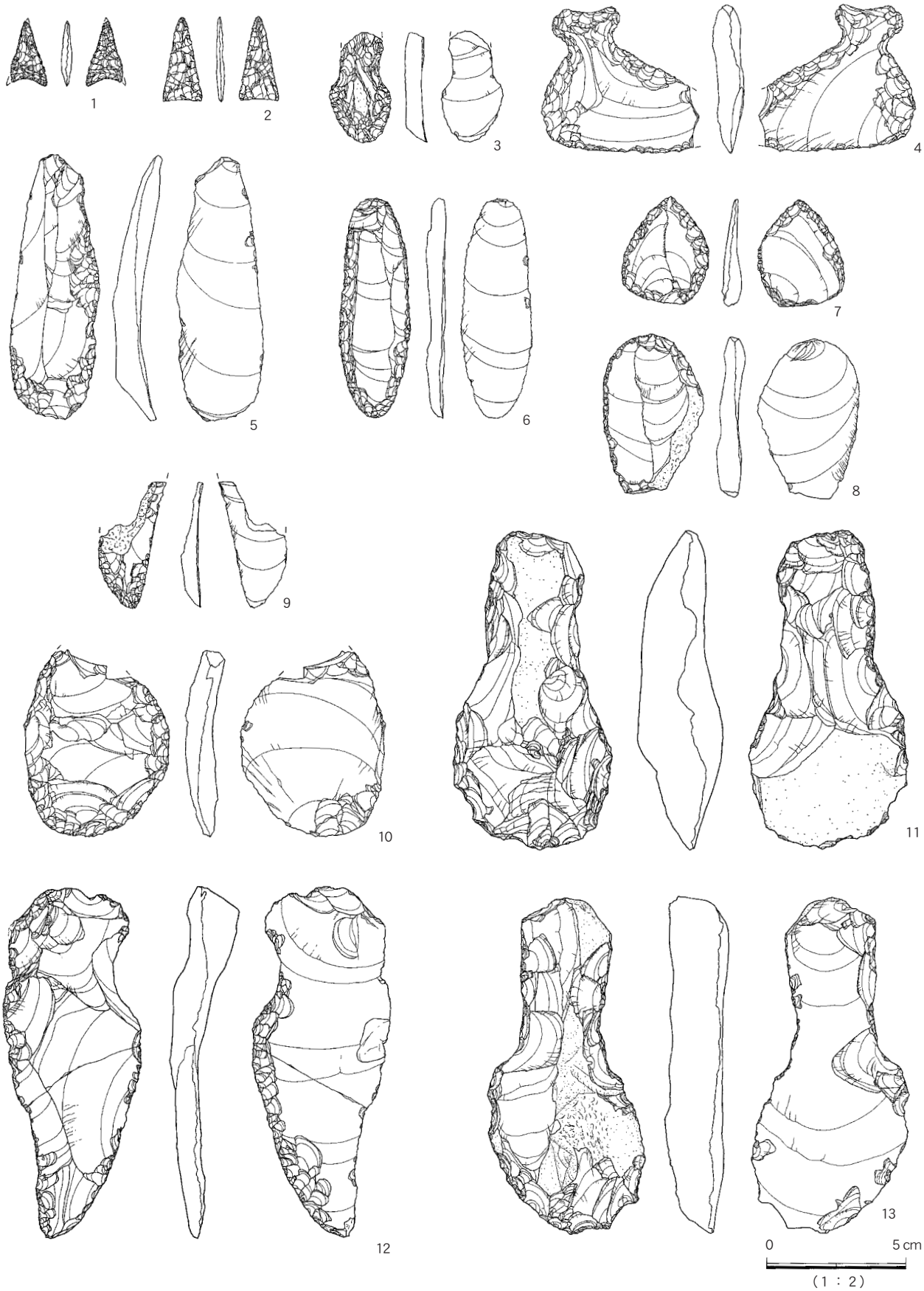
37－７は両面加工された尖頭器である。左右非対称で、最大幅の部位が異なる。断面形は基部が凸レンズ状になるが、それ以外は扁平である。

37－11・13・38－１～６・39－１～３は打製石斧である。幅は概ね60㎜前後であるが、長さからは３種類に分類できる。100㎜未満の小型のもの、120㎜未満の中型のもの、140㎜以上の大型のものである。形態はいずれも撥形で表皮面を残すものが多い。基部の断面形は、ほとんどが歪んだ楕円形を呈するが、37－13や39－３のように三角形になるものも見られる。刃部の断面形は、多くが凸レンズ状をなす。37－11・37－13・38－６・39－３は刃部に顕著な光沢が見られる。剥離は全体的に大まかで、特に刃部は僅かな剥離にとどまるものが多い。

磨製石斧は６点出土している。165－２は凝灰岩、222－12は砂岩の完形品である。いずれも両側縁が面取りされた定角式磨製石斧である。41－３は中央部が緩く窪む石皿である。41－５は一部欠損するものの、中央部に穿孔されたものである。その他、磨石、凹石が多数出土している。

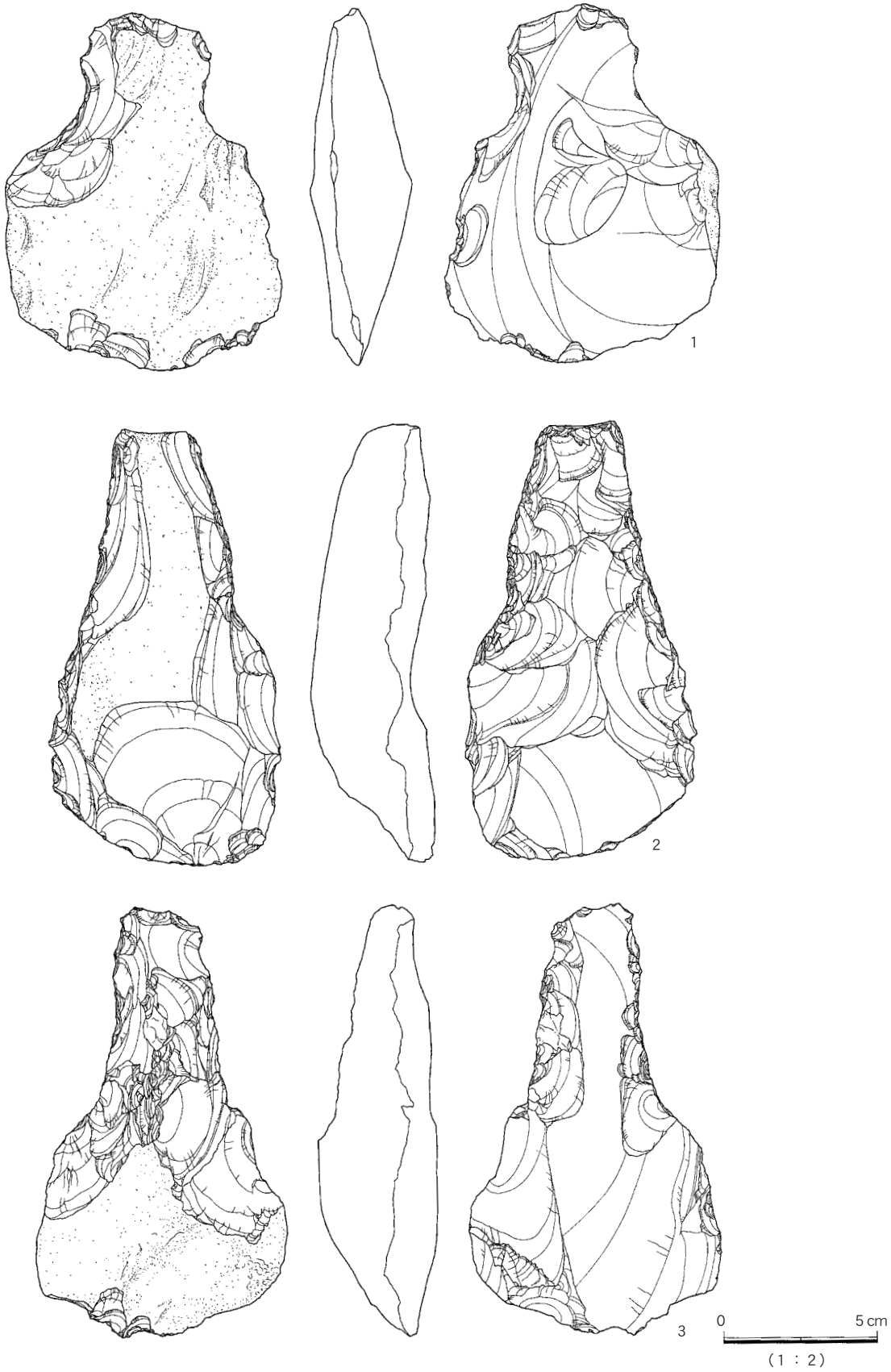
表８　石器計測表

挿図番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重さ(g)	残存部位	出土地点	備考
37	１石鏃	黒耀石	25	15	3.5	0.74		ST9847	RQ453
	２石鏃	玉髄	30	15	3	0.85		EU9917	
	３スクレイパー	珪質頁岩	40	20	6	6.5	上部欠損	SK81	
	４石匙	珪質頁岩	56	50	9	21.8	端部欠損	48－238G	
	５掻器	珪質頁岩	95	30	10	28.7		C区	RQ38
	６掻器	珪質頁岩	80	25	7	15.4		C区	RQ38
	７尖頭器	珪質頁岩	38	30	6	5.8		C区	RQ1
	８サイドスクレイパー	珪質頁岩	56	35	8	16.8	上部欠損	C区	RQ2　自然面残す
	９掻器	珪質頁岩	45	23	6	3.5		SK81	
	10掻器	玉髄	66	50	10	38.1		SE9890	
	11打製石斧	珪質頁岩	110	56	31	146.5		49-25IG	自然面残す
	12削器	珪質頁岩	124	48	14	76.1		SD4006	
	13打製石斧	頁岩	117	54	18	132.7		SD9580	自然面残す
38	１打製石斧	頁岩	86	50	21	69.8		SD4580	自然面残す
	２打製石斧	頁岩	118	66	19	123.3		SD9580	自然面残す
	３打製石斧	頁岩	118	65	31	234.8		SD9580	自然面残す
	４打製石斧	珪質頁岩	70	55	12	37.3		48－236G	自然面残す
	５打製石斧	珪質頁岩	90	60	16	72.1		SD4002	自然面残す
	６打製石斧	頁岩	112	60	22	124.4		SD9760	自然面残す
39	１打製石斧	頁岩	115	92	34	259.6		SD9169	自然面残す
	２打製石斧	頁岩	143	75	34	364.6		SD9830	
	３打製石斧	珪質頁岩	140	80	39	275.9		SD9815	
40	１磨石	安山岩	163	56	38	565.9		36－234G	
	２磨石	安山岩	140	80	71	1042.5		31－187G	
	３磨石	花崗岩	114	96	63	847.5		48－233G	
	４磨石	安山岩	(101)	100	45	638.0		31－187G	
	５磨石	花崗岩	126	68	50	620.5		31－187G	
	６凹石	花崗岩	144	106	62	1112.0		46－252G	
41	１磨製石斧	安山岩	(78)	48	23	149.0	上部欠損	33－188G	
	２磨製石斧	安山岩	(110)	58	34	388.6	上部欠損	SK9271	
	３石皿	安山岩	(116)	(142)	50	1691.4	上半、右半欠損	46－202G	
	４石核	珪質頁岩	72	54	34	125.4		SK101	
	５不明	泥岩	44	27	8	38.5	一部欠損	XO	径４mmの穴

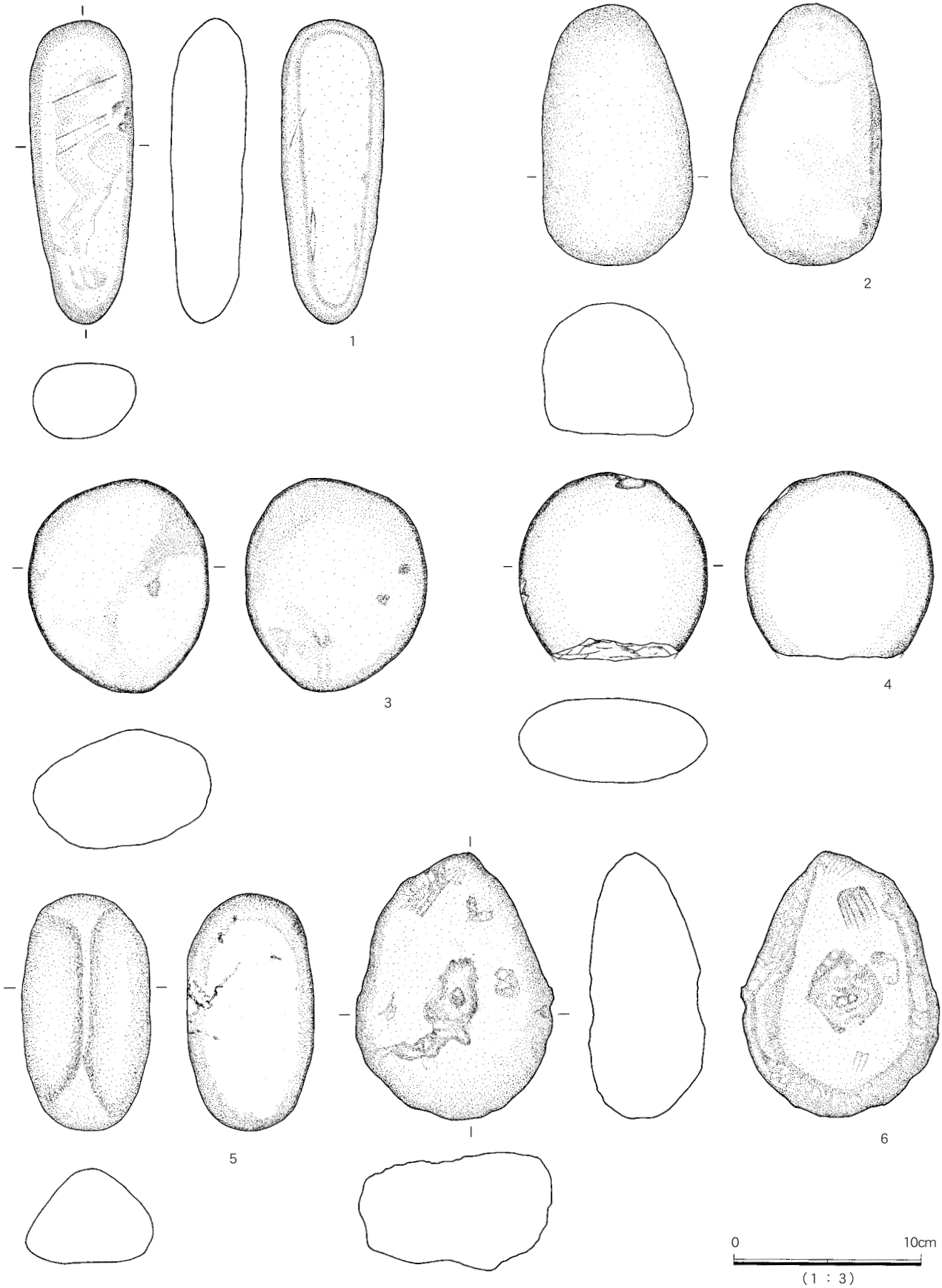


第37図　石器実測図 1

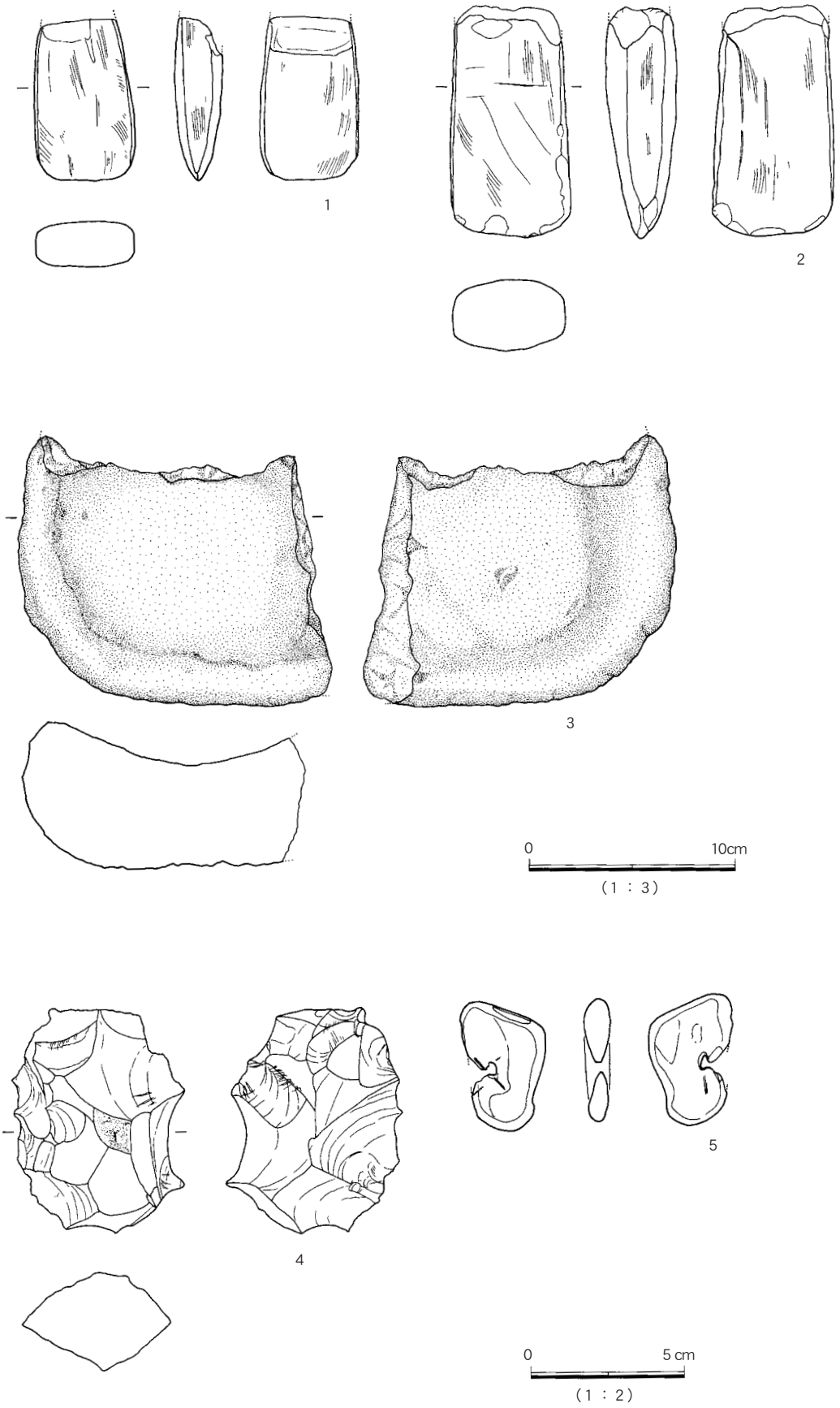
第38図　石器実測図 2



第39図　石器実測図 3



第40図　石器実測図４



第41図　石器実測図５

Ⅵ　奈良・平安時代の遺構と遺物

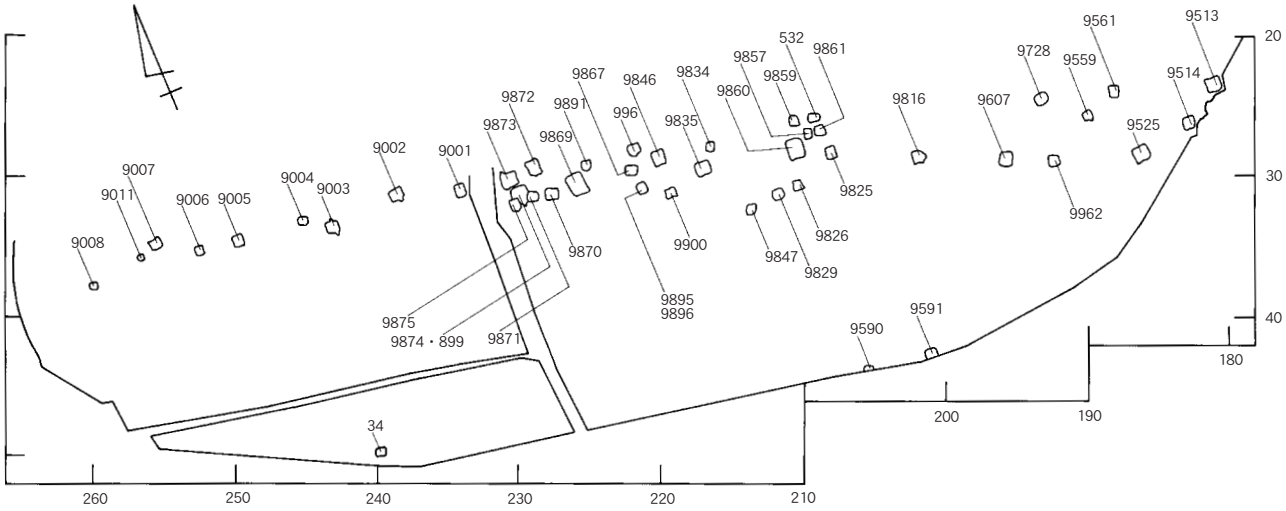
1　竪穴建物跡

SA地区で検出された奈良・平安時代の竪穴建物跡は、重複したものを含めて、48棟である。分布状況は、前述したように上段の25～32－206～230グリッドに比較的まとまっているが、本調査区と２期調査区を合わせてみても、全体的に散漫な印象を与える。主軸はほぼ南北に沿っているものが多く、カマドは南側に設けられたものが多い傾向にある。建て替え、あるいは拡張した建物も見受けられるが、建物間で重複するものは７棟と少ない。規模は大別して、一辺が７ｍを越える大型のもの、５ｍ前後の中型のもの、３ｍ前後の小型のものが見られる。小型の建物にはカマドを有さないものもある。主柱穴は、２基のものと４基で構成されるものの他に、建物内部には明確な主柱穴を認められないものも多くある。以下、建物毎にその状態と出土遺物について詳述する。

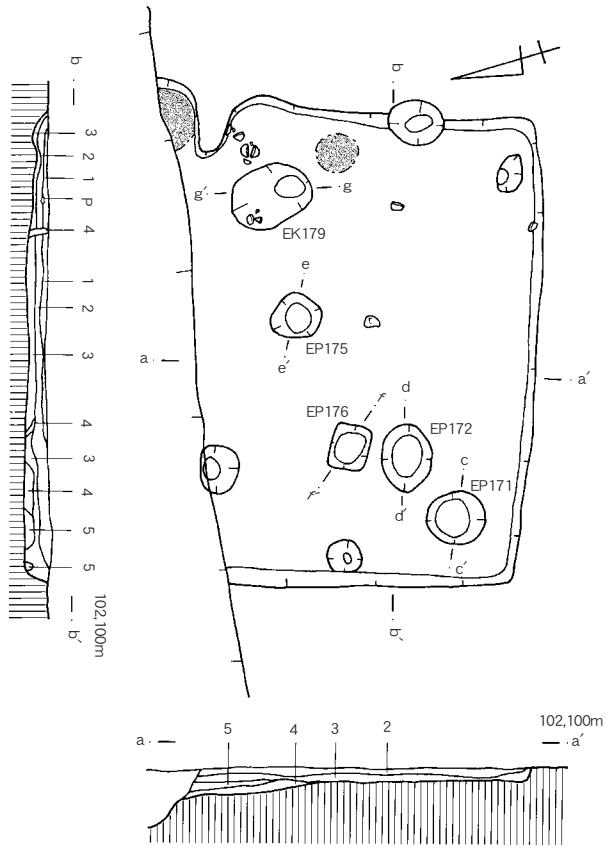
【ST34】第43図

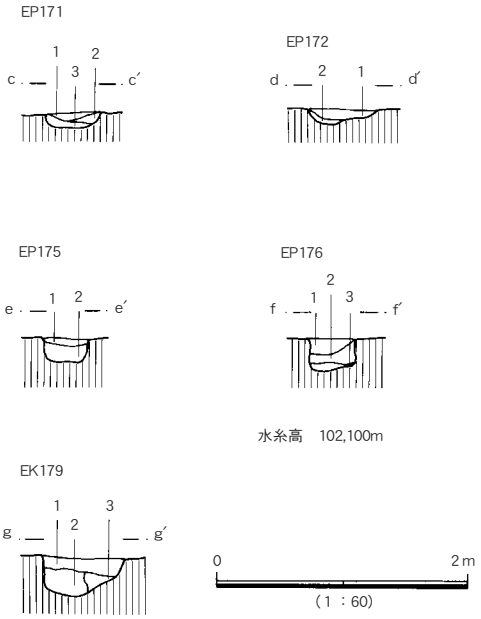
50－240・241グリッドに位置する。北側約１/３が畝状遺構により壊されている。主軸方向はN－70°－Eである。東西長3.6m、南北長３ｍのほぼ方形を呈する。壁は垂直に近い角度で掘り込まれるが、10㎝と浅く、削平によるものと考えられる。カマドは一部しか残っていないものの東側の北寄りに焼土が広がり、その痕跡をうかがうことができる。主柱穴は４基と考えられるが、北側の２基は壊されている。EP172と東壁に設けられた柱穴がそれにあたると推測される。床の一部には、貼床が見られる。覆土は自然堆積である。

遺物は、須恵器蓋、無台坏、有台坏、土師器坏、甕等54点が出土している。43－１は底部ヘラ切りによる須恵器無台坏である。丸みを帯びた体部は、内外面ともロクロ目が強く、火襷が明瞭に見られる。底部が小さく、体部が開き気味に立ち上がり、身が深くなることなどから８世紀後葉頃と考えられる。43－２は鉄鏃である。刃部は片側を欠損するが、抉りが入る三角形である。断面形は刃部が扁平、茎部が横長の四角形である。



第42図　竪穴建物跡分布図（古代）

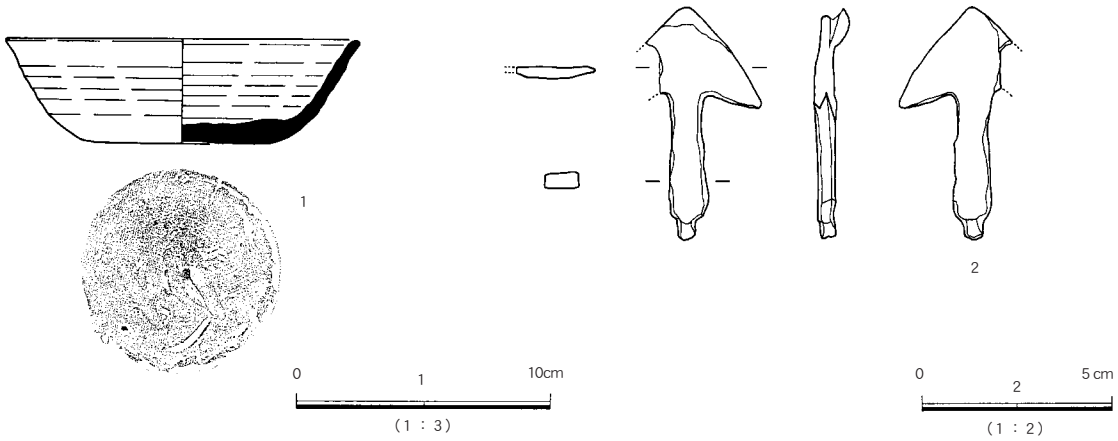




ST34
1　10YR2/2　黒褐　シルト　炭化粒微量、にぶい黄褐色シルトブロック少量含む
2　10YR2/3　黒褐　シルト　炭化粒微量、灰黄褐色シルトブロック微量含む
3　10YR4/2　灰黄褐　シルト　炭化粒微量、明黄褐色細砂微量含む
4　5YR5/2　灰褐　細砂　黒褐色シルトブロック微量含む、もろい
5　5YR6/2　灰褐　細砂　黒褐色シルトブロック微量含む、もろい

EP171・172・175・176
1　10YR3/1　黒褐　シルト　明黄褐シルトブロック微量含む
2　10YR3/1　黒褐　シルト　炭化粒、明黄褐色シルトブロック少量含む
3　10YR3/1　明黄褐　粗砂　黒褐色シルトブロック微量含む

EK179
1　10YR4/2　灰黄褐　シルト　炭化粒少量含む、固くしまる
2　10YR3/2　黒褐　シルト　炭化粒微量含む　固くしまる
3　10YR4/2　灰黄褐　粘土　炭化粒、明黄褐色シルトブロック少量含む



第43図　ST34　出土遺物

表9　ST34出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
43	1須恵器	坏	(140)	74	41	4	砂粒混入	良	5BG6/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	

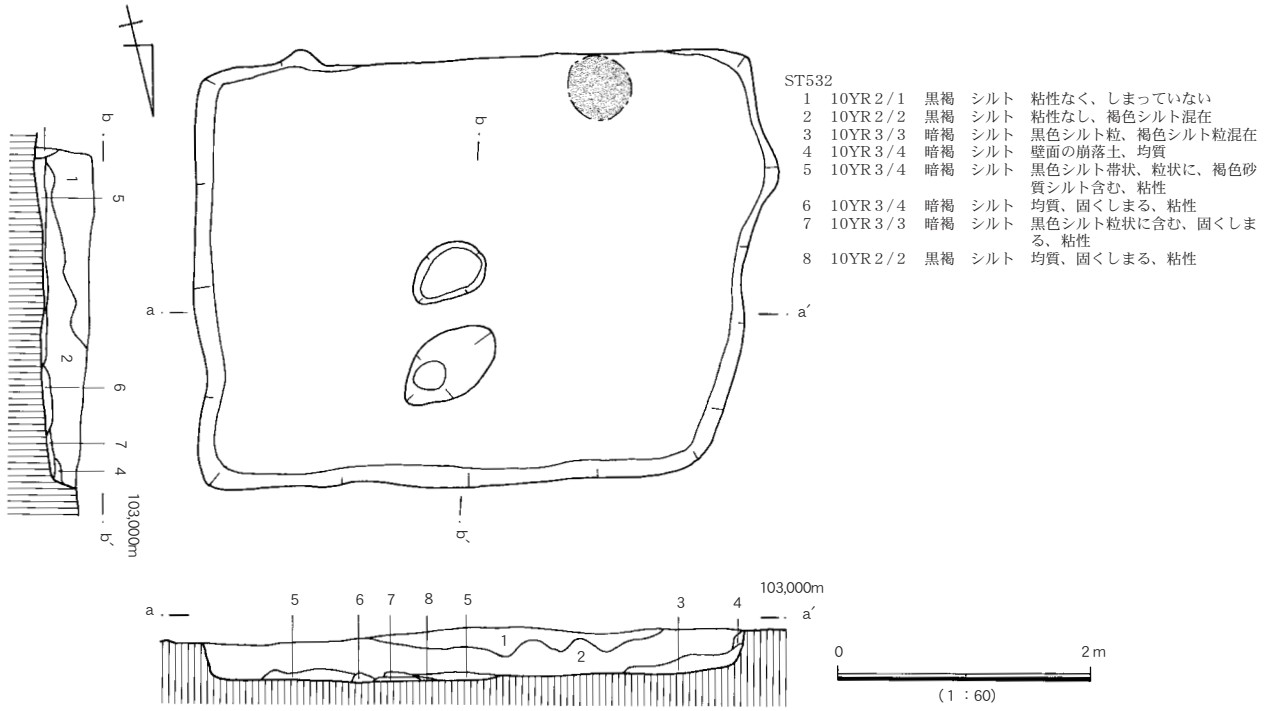
【ST532】第44図

26－210グリッドに位置する。２期調査区との境界近くである。本建物以外に８棟の建物が隣接し、集中区を構成する。南側は削平されて掘り込みがほとんど見られない。カマドも削平の際に壊されているが、南壁西寄りに焼土の広がりがあることから、この位置にカマドを想定できる。主軸方向はN－169°－Wである。平面形は、東西長４m、南北長3.7mの方形を呈するものと推定される。壁は急角度で掘り込まれ、比較的遺存状態の良い東側の壁で深さ約30cmを測る。中央部付近に径30cm、深さ40cmを測る柱穴を１基検出したが、建物の主柱穴と成り得るかは不明である。床は、黒褐色の粘質土による貼床が全面になされ、堅く締っている。覆土は自然堆積によるものである。

遺物は須恵器蓋、無台坏、甕、土師器坏、甕等29点の出土があったが、いずれも小破片のため時期特定が可能なものではない。

【ST9001】第45図

31・32－224・225グリッドに位置する。主軸方向はN－173°－Wである。平面形は東西、南北とも4.7mの方形である。深さは約30cmで、壁は急角度で掘られている。カマド（EL9302）は南壁の東角付近に作られている。袖部は短く、燃焼部は竪穴外に作られる。煙道は削平され未確認である。燃焼部内には、土師器甕（47－３）が逆位で出土している。カマドの右には貯蔵穴が設けられており、まとまった土器が出土している。柱穴は、EP9340、9345が比較的深く掘り込まれてあるが主柱穴になるものでは無いと考えられる。床は、ほぼ全面に貼床がなされてある。覆土は自然堆積である。



第44図　ST532

遺物は須恵器蓋、無台坏、有台坏、甕、鉢、横瓶、黒色土器坏、土師器甕等99点の土器類と鉄製品が出土している（第46・47図）。

46－１は扁平で天井部が緩やかに傾斜し、口縁部は緩く屈曲するものの、内傾せずそのまま開くタイプである。つまみは小振りで中心部が潰れた宝珠形である。天井部は回転ヘラ削りが施される。焼成は良好だが、胎土には多量の粗砂が混入する。46－２は天井部が幾分丸みを帯びて傾斜し、口縁部は強く屈曲して直立する。つまみは大振りなリング状である。全体的に厚手で重量感がある。胎土には、多量の粗砂が混入する。

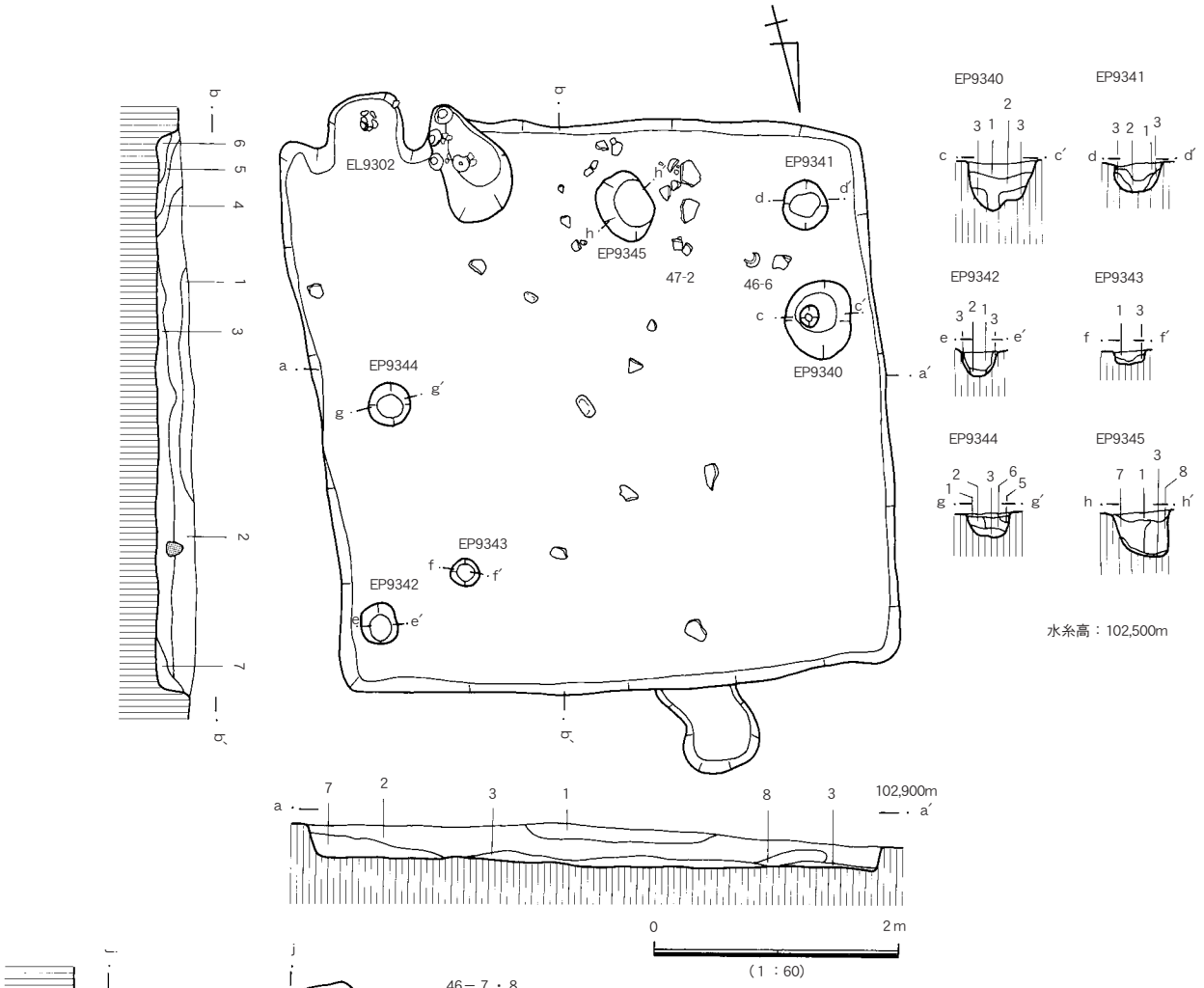
46－３～７は有台坏である。３は約１/２残存する。底部はヘラ切り後無調整である。台は断面形が四角で、やや内側に「ハ」の字形に貼付けられる。体部は、底部から強く屈曲し、開きながら直線的に立ち上がり口縁部に至る。胎土には粗砂を多量に含み、全体的に厚手である。４は口縁部の一部を欠損するもののほぼ完形品である。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。台は底部外縁に「ハ」の字形に貼付けられる。体部は丸みを帯びて立ち上がり、中程で僅かに外反して口縁部に至る。胎土には粗砂が多量に混入し、海綿骨針も顕著に見られる。５は１/４以下の残存である。底部欠損のため切り離しは不明だが、その形状からヘラ切りと推定される。細く丸みのある台が「ハ」の字状に貼付けられる。体部下半は丸みを持ち、上半は幾分開きながら直線的に口縁部に至る。口縁部は小さな玉縁状を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。６は１/２程残存するが、底部は粘土紐の継目から丸く剥離し、失われている。ヘラ切りまでは判断しうるが調整については不明である。断面形が三角に近い台が、ほぼ直立するように貼付けられる。体部は直線的に開く。胎土には細砂が多く混入する。７は１/４程の残存である。底部を欠損し、調整は不明である。台は細く、「ハ」の字状に貼付けられる。体部下半に弱い丸みを帯び、上半は直線的である。焼成不良のため磨滅している。

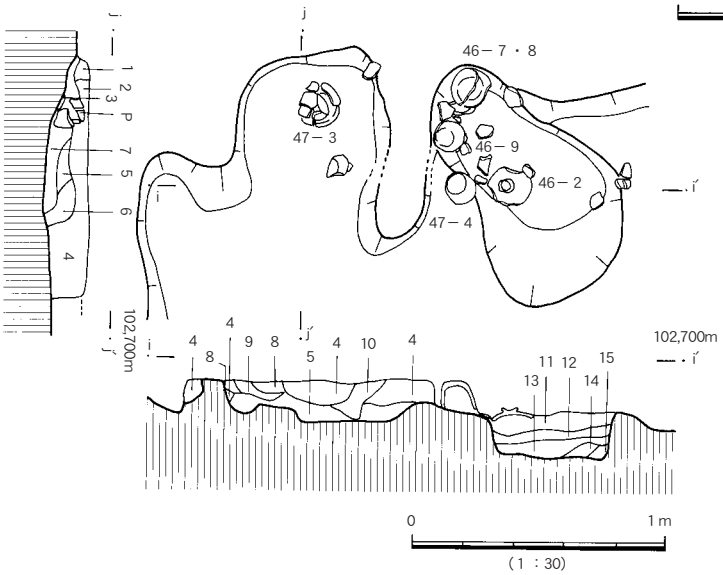
46－８～10は無台坏である。８は口縁部の一部を欠損する。底部はヘラ切り後無調整であるが、乾燥時における圧痕と考えられるものが認められる。体部は直線的に立ち上がり、所謂逆台形を呈する。胎土は粗砂が混入し、長石粒も含まれる。９はほぼ完形である。底部はヘラ切り後軽いナデ調整が施される。底部、体部ともやや丸みを帯びる。口縁部は僅かに肥厚する。胎土には砂粒が混入する。焼成は良い。10は口縁部から体部にかけての破片資料である。底部から体部中位までは丸みを帯びるが、中位から口縁部までは僅かに外反する。胎土は比較的緻密で、焼成も良い。

46－11は鉢の頸部から体部上半にかけての資料である。体部は丸みを帯び、頸部は強く屈曲する。外面の下部には、タタキ目の痕跡が認められるが、その後のロクロナデ調整により磨り消される。中央部から上部にかけてはロクロナデ調整で、特に頸部近くでは粗なカキメが施される。内面も同様に、下部にはアテの痕跡を認めることができるがロクロナデによって磨り消される。胎土には砂粒と海綿骨針が混入する。焼成は堅であるが、幾分甘い。

46－12は横瓶の閉塞部近くの破片である。閉塞部は欠損する。内面はロクロナデによりアテ痕がほとんど残らない。胎土には粗砂を混入し焼成は良好である。

46－13は丸底になる甕の底部近くの破片である。焼成不良で内面の調整は不明である。





ST9001

1	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト微量含む、やわらかい
2	10YR2/2	黒褐	シルト	焼土、黄褐色シルトブロック含む、固くしまる
3	10YR2/3	黒褐	シルト	焼土少量、黒褐色シルト、黄褐色シルト含む
4	10YR2/3	黒褐	シルト	焼土微量、黄褐色シルト粒多量含む、固くしまる
5	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色シルト粒含む、弱い粘性
6	10YR2/3	黒褐	シルト	炭化物含む、黄褐色シルト多量含む
7	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト少量含む、固くしまる
8	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト、暗褐色シルト含む、やわらかい

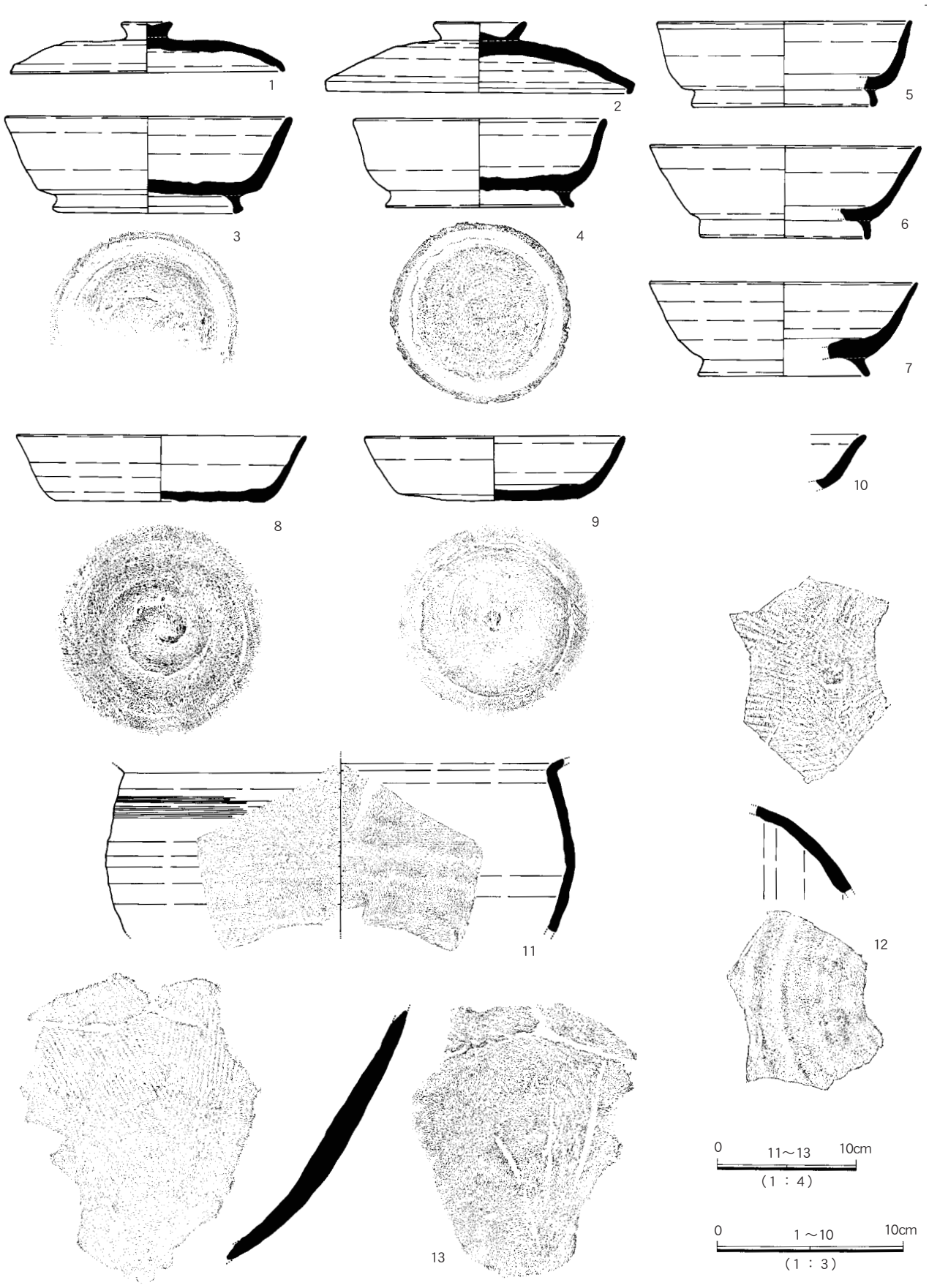
EP9340・9341・9342・9343・9344・9345

1	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック多量含む、弱い粘性
2	10YR4/6	褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、やわらかい
3	10YR4/6	褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固くしまる
4	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色砂質シルトブロック含む、固くしまる
5	10YR5/6	黄褐	シルト	黒褐色シルト粒微量含む、固くしまる
6	10YR3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック、黄褐色シルトブロック含む
7	10YR2/2	黒褐	シルト	黒色、暗褐色シルトブロック、黄褐色シルト粒含む
8	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色粒微量含む、固くしまる

EL9302

1	7.5YR3/3	暗褐	シルト	焼土、黄褐色シルト含む
2	7.5YR3/4	褐	シルト	焼土塊多量、黄褐色細砂含む
3	10YR5/6	黄褐	細砂	焼土、暗褐色シルト含む
4	10YR2/2	黒褐	シルト	焼土、炭化粒、黄褐色シルト粒含む
5	7.5YR2/2	黒褐	シルト	焼土塊多量、黄褐色砂質シルト含む
6	10YR3/4	暗褐	シルト	炭化粒、暗褐色シルト粒含む
7	5YR3/3	暗褐	シルト	焼土、固く焼きしまる
8	7.5YR3/3	暗褐	シルト	黒色シルトブロック含む、焼けている
9	7.5YR2/2	黒褐	シルト	焼土粒、黄褐色シルトブロック含む
10	7.5YR2/1	黒	シルト	焼土塊、炭化粒含む
11	7.5YR3/2	暗褐	シルト	焼土粒、黄褐色シルトブロック含む
12	7.5YR2/2	黒褐	シルト	焼土塊少量、黄褐色シルト、黒色シルト含む
13	7.5YR3/3	暗褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む
14	7.5YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む
15	7.5YR2/3	極暗褐	シルト	黄褐色シルト多量含む

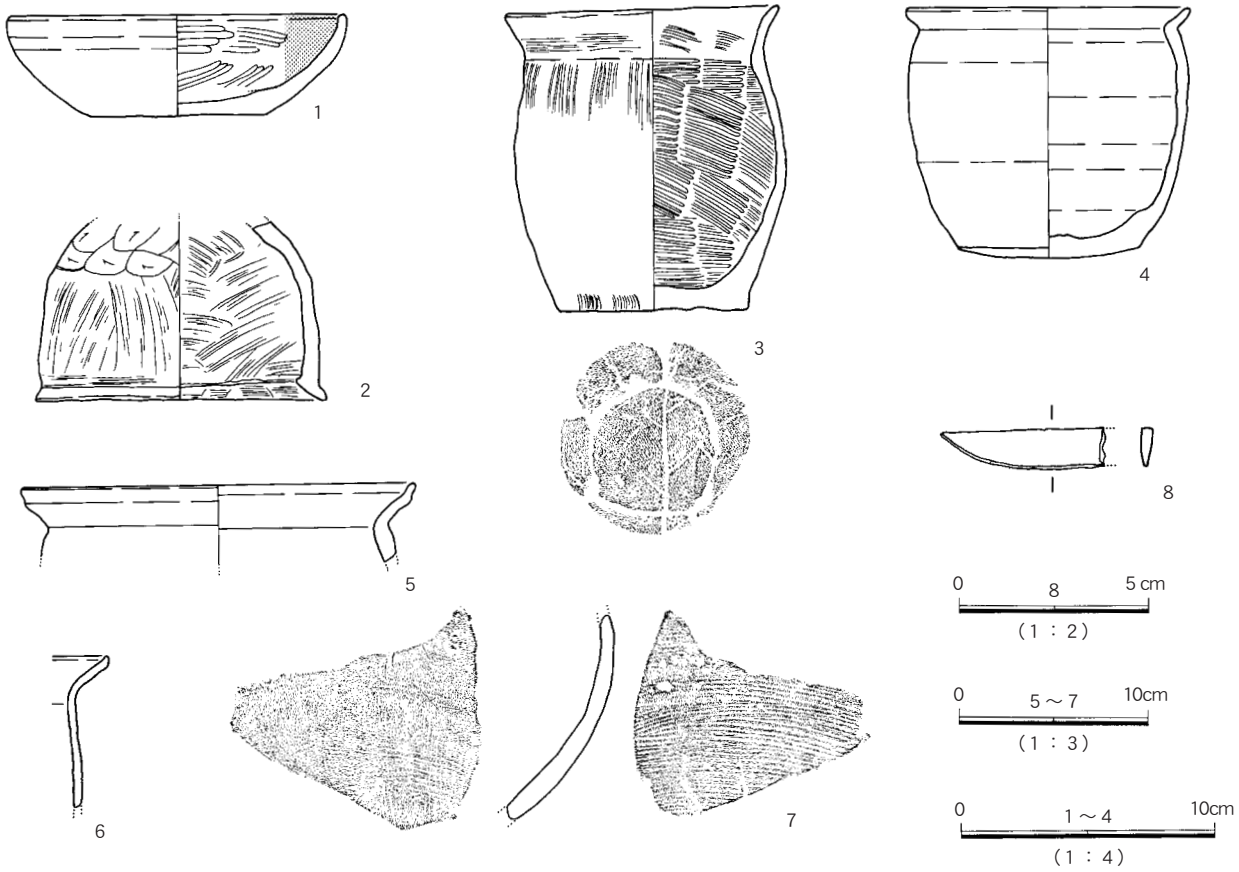
第45図　ST9001



第46図　ST9001　出土遺物 1

47－１は黒色土器の坏である。２次焼成により内外面とも剥離、磨滅が著しく、内面に僅かにミガキを認める程度である。体部は僅かに内湾する。

47－２は脚部と推定されるが器種は不明である。上部は丸みを帯びるが、中位からは直立し、端部は小さく屈曲し外反する。調整は外面上部にケズリ、下部にかけてはハケメが施される。内面はハケメ調整である。全体的に歪みがあり、粗雑な印象を与える。



第47図　ST9001　出土遺物２

表10　ST9001出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	１須恵器	蓋	147		28	4	粗砂混入	良	N7/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		EL9302内
	２須恵器	蓋	162		38	5	粗砂混入	良	2.5GY7/1明オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EL9302内
	３須恵器	有台坏	(157)	102	52	6	砂粒混入	良	5Y6/1灰	ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	４須恵器	有台坏	136	100	48	5	粗砂混入	良	7.5YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り､ナデ	EL9032、貼床下
	５須恵器	有台坏	(138)	(98)	46	4	砂粒混入	良	10BG5/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	６須恵器	有台坏	146	92	50	5	砂粒混入、骨針	良	10YR6/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
46	７須恵器	有台坏	(144)	(90)	51	4	砂粒混入	不良	7.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	８須恵器	無台坏	158	112	35.5	3	粗砂混入	良	2.5Y8/4淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	EL9302内
	９須恵器	無台坏	140	100	35	3.5	砂粒混入	良	5GY7/1明オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	EL9302内
	10須恵器	無台坏				4	砂粒混入	良	10YR8/3浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	11須恵器	鉢				8	粗砂混入	良	2.5Y8/1灰白	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｶｷﾒ、ﾀﾀｷ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｶｷﾒ		
	12須恵器	横瓶				9	粗砂混入	良好	2.5Y5/1黄灰	タタキ、ナデ	アテ痕、ロクロナデ		
	13須恵器	甕				17	粗砂混入	不良	2.5Y8/2灰白	タタキ			
	１内黒土器	無台坏	(130)	66	40	5.5	緻密	良	2.5Y7/4淡黄	ナデ	ミガキ	ケズリ	
	２土師器		(115)			6	砂粒混入	良	5YR7/6橙	ハケメ、ケズリ	ハケメ		
	３土師器	甕	110	74	120	4	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ハケメ	ハケメ	木葉痕	
47	４土師器	甕	(111)	76	98	4	砂粒混入、骨針	良	7.5YR8/4浅黄橙		ロクロナデ	ヘラ切り	EL9302内　二次焼成
	５土師器	甕	(209)			8	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､ﾊｹﾒ		EL9302
	６土師器	甕				5	砂粒混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ハケメ､ケズリ	ハケメ		
	７土師器	鉢				9	砂粒混入、骨針	良	10YR8/3浅黄橙	ハケメ	ハケメ		

47－3はカマド燃焼部内に逆位に置かれていた土師器小型甕である。体部は内湾し、中央部に最大径を置く。2次焼成を受けているため外面は磨滅しているが、体部上部及び体部下部にハケメ調整が認められる。内面は明瞭なハケメ調整が見られる。底部には木葉痕が残る。

47－4はカマド袖部右側の貯蔵穴上に、逆位で出土した土師器小型甕である。体部は弱く内湾し、口縁部は短く外反する。内面はロクロナデが認められるが、外面は2次焼成を受けており調整は不明である。

47－5・6は土師器甕の口縁部である。5は外面ロクロナデ、内面ハケメ調整が施される。6はハケメ後ケズリ調整、内面はハケメ調整である。

47－7は土師器鉢の体部片である。外面は縦横のハケメ、内面は横のハケメ調整である。

47－8は鉄製品の刀子である。

これらの遺物から本遺構は8世紀中葉から後葉頃の所産と考えられる。

【ST9002】第48図

31・32－239・240グリッドに位置する。主軸方向はN－179°－Eである。平面形は、東西、南北とも4.1mの方形である。壁は急角度で掘り込まれ、確認面から35cmを測る。カマド（EL9303）は南壁の東端に設けられる。燃焼部は竪穴内にあり、僅かに掘り窪めてある。煙道は約1m竪穴外に延びる。貼床は、ほぼ全面に渡り施される。床面には大小の円形あるいは不整楕円形を呈する掘り込みが認められるが、深さは10cm前後と浅く、いずれも主柱穴にはならないと考えられる。覆土は安定した自然堆積である。

遺物は須恵器蓋、無台坏、有台坏、短頸壷、甕、土師器甕片等157点と縄文土器片9点、鉄製品4点が出土している。（第49図）

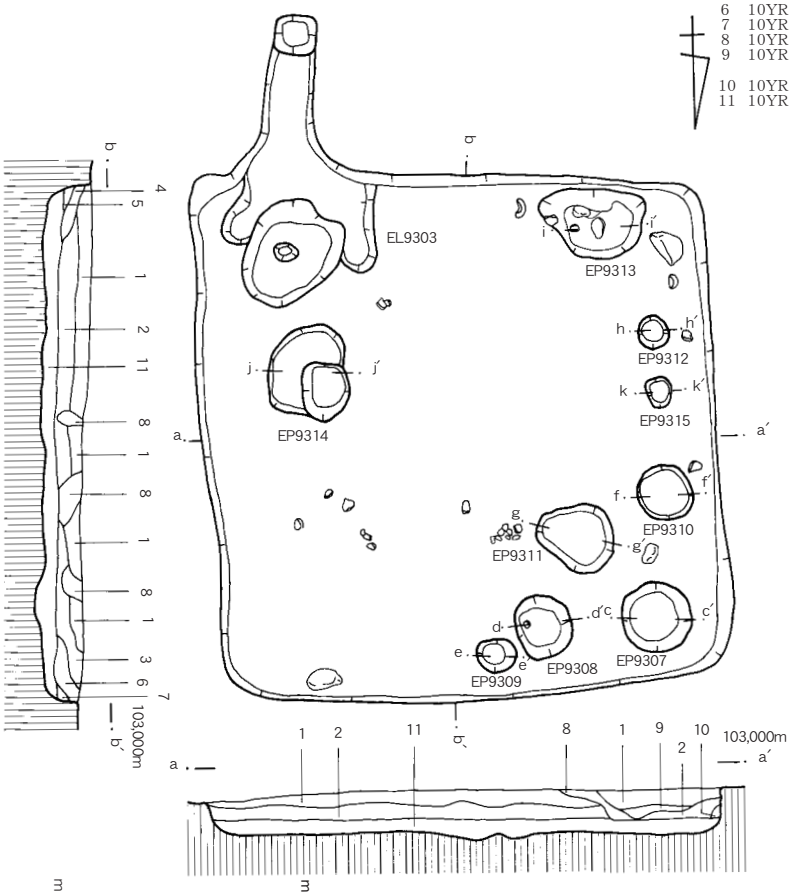
49－1・2は須恵器坏蓋である。2点とも法量、胎土、成形、調整が同じで、色調以外の違いは見られない。天井部は弱い回転ヘラケズリが施され、幾分沈み込む。つまみは扁平な宝珠形で高さは低い。口縁部は短く直立する。胎土には砂粒の他に海綿骨針が認められる。2の内面には径92mmの重ね焼きの痕跡が明瞭に見て取れる。

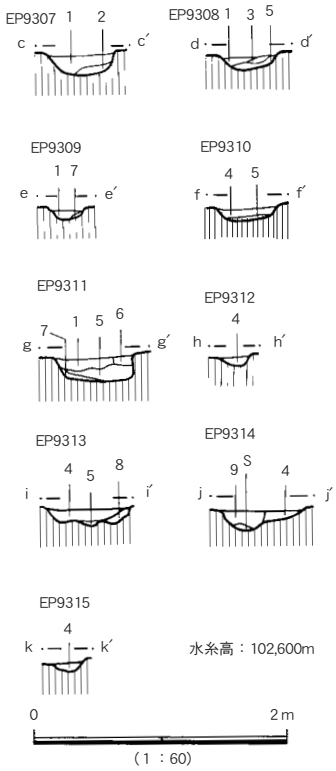
49－3・4は須恵器有台坏である。3は体部の一部を欠くが、ほぼ完形である。ヘラ切り後無調整の底部に、断面形が四角の低い台が「ハ」の字状に貼付けられる。体部下半に丸みを帯びるが中央部から口縁部にかけては直線的に立ち上がる。胎土には粗砂の混入の他、海綿骨針が認められる。4は約1/2の残存である。底部はヘラ切り後無調整で、低い台が「ハ」の字状に貼付けられる。体部は直線的に立ち上がる。口径は3と同じであるが、体部下部の丸みがすくない分、3より体部の傾きが大きい。胎土には粗砂を多く含む。

49－5・6は無台坏である。5は底部がヘラ切り後無調整である。体部中程までしか残存しないが、直線的に立ち上がると推定される。内外面ともロクロナデ調整であるが、焼成不良のため不明瞭である。胎土には少量の砂粒が混入し、海綿骨針も認められる。6も底部ヘラ切り後無調整であるが、乾燥時における草木あるいは板状の圧痕が認められる。体部は内外面ともロクロナデ調整が施される。残存は良くないが、体部は僅かに内湾するものと考えられる。胎土には粗砂を多く含むが、焼成は良い。

ST9002

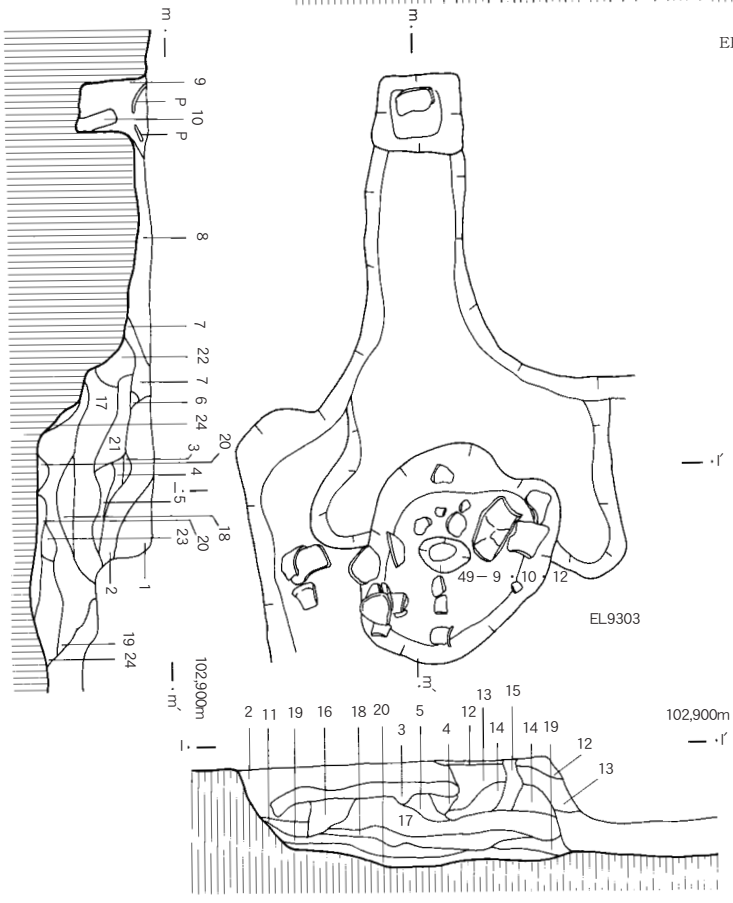
1	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト少量含む、やわらかい
2	10YR 2/1	黒	シルト	黄褐色シルト含む、固くしまる
3	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒、黒色シルトブロックを含む
4	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック、固くしまる
5	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、固くしまる
6	10YR 4/2	黒褐	シルト	黄褐色細砂含む、固くしまる
7	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色細砂多量含む、やわらかい
8	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む
9	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒、暗褐色シルトブロック含む
10	10YR 4/4	褐	細砂	黒褐色シルトブロック含む
11	10YR 3/3	暗褐	砂	黒褐色シルトブロック含む、固くしまる





EP9307・9308・9309・9310・9311・9312・9313・9314・9315

1	10YR 2/3	黒褐	シルト	黒色シルト粒、黄褐色シルトブロック含む
2	10YR 2/1	黒	シルト	黄褐色砂質シルト粒微量含む、固くしまる
3	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルト、黄褐色細砂含む、固くしまる
4	10YR 2/3	黒褐	シルト	褐色細砂ブロック含む、固くしまる
5	10YR 4/4	褐	シルト	黒褐色砂質シルト微量含む、固くしまる
6	10YR 2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック、黄褐色細砂含む
7	10YR 4/6	褐	シルト	地山
8	10YR 3/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒含む、固くしまる
9				撹乱

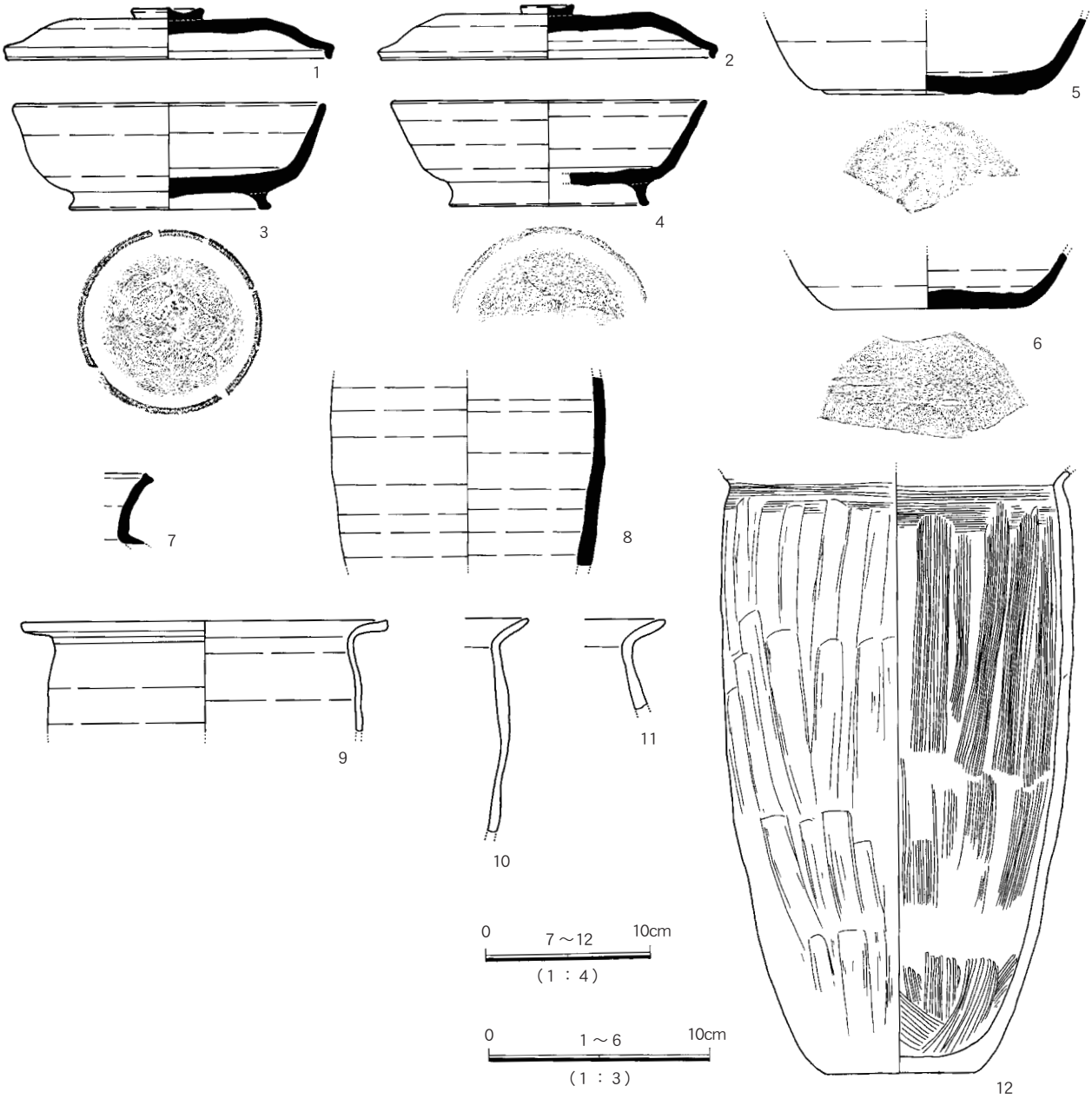


EL9303

1	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒、褐灰微砂粒含む固くしまる
2	10YR 3/3	暗褐	シルト	褐色細砂、黄褐色シルトブロック少量含む、固くしまる
3	10YR 2/3	黒褐	シルト	焼土粒、黄褐色シルト粒含む、固くしまる
4	10YR 3/3	暗褐	シルト	焼土粒、黄褐色細砂含む、固くしまる
5	10YR 2/3	黒褐	シルト	焼土粒、炭化粒、黄褐色シルト粒含む、やわらかい
6	10YR 3/4	暗褐	シルト	焼土粒、黄褐色シルト粒含む、固くしまる
7	7.5YR 3/4	暗褐	シルト	灰白微砂粒少量含む、固くしまる
8	10YR 3/2	暗褐	シルト	黄褐色シルト粒含む、固くしまる
9	10YR 2/3	黒褐	シルト	土器片、黄褐色シルト粒含む、やわらかい
10	10YR 4/6	褐	シルト	撹乱
11	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化粒、黄褐色粒含む、やわらかいがしまっている
12	10YR 2/3	黒褐	シルト	焼土粒、黄褐色粒含む、固くしまる
13	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む
14	7.5YR 4/6	褐	シルト	暗褐色シルトブロック、下部焼土化、袖部
15	10YR 2/3	黒褐	シルト	撹乱
16	10YR 3/3	暗褐	シルト	弱い粘性、袖部
17	7.5YR 2/3	極暗褐	シルト	焼土多量、黄褐色砂少量含む、しまりなくやわらかい
18	7.5YR 3/4	暗褐	砂	赤く焼ける、しまり、粘性なし
19	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色砂ブロック少量含む、固くしまる、粘性強い
20	10YR 4/4	褐	砂	黒褐色シルトブロック小量含む
21	7.5YR 3/4	暗褐	砂	黒褐色砂質シルトブロック小量、褐色砂少量、焼土含む
22	10YR 3/3	暗褐	シルト	固くしまる、袖部
23	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化物少量、褐色砂ブロック少量含む
24	10YR 4/4	褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック小量、炭化物微量含む

0 1m
(1：30)

第48図　ST9002



第49図　ST9002　出土遺物

表11　ST9002出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
49	1	須恵器	蓋	(150)		23	5	砂粒混入	良好	N5/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋	(150)		24	6	砂粒混入	良	10YR6/3にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	有台坏	142	90	48	5	粗砂混入	良	2.5Y6/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	ST9002－F
	4	須恵器	有台坏	142	90	48	3	粗砂混入	良	2.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	須恵器	無台坏		(90)		6.5	砂粒混入	不良	7.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	6	須恵器	無台坏		(84)		3	粗砂混入	良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	7	須恵器	甕		(88)		5	砂粒混入	良	2.5Y4/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	8	須恵器	甕				7	砂粒混入、骨針	良	7.5YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	9	土師器	甕	(222)			3	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		EL9303　二次焼成
	10	土師器	甕				6	粗砂混入	良	7.5YR6/6橙				
	11	土師器	甕				8	砂粒混入	良	7.5YR6/6橙	ハケメ、ロクロナデ	ハケメ		
	12	土師器	甕		90		7	粗砂混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ハケメ	ケズリ	EL9303

49－７は甕の口縁部から頸部にかけての資料である。破片が小さく、口径は求められないが、器厚からみても小型のものと推定される。外反する頸部に口縁部が小さく引き出される。

49－８は長胴になる甕の体部破片と考えられる。僅かに胴部が膨らみを見せるが、ほぼ直立する。内外面ともロクロナデ調整が施される。外面には幅約１㎝の輪積みの痕跡が認められる。胎土には、海綿骨針が顕著に認められる。

49－９～12は土師器の甕である。いずれも長胴になるタイプと考えられる。９は口縁部が強く屈曲し、水平に近い開きとなる。端部は肥厚し、平坦面が作られる。２次焼成のため表面は磨滅している。体部内面にはロクロナデが認められる。10は最大径が体部の上部に持つタイプである。口縁部の屈曲は弱く、端部には丸みを持つ。内外面とも磨滅しており調整は不明である。11は口縁部が比較的強く屈曲するもので、端部は幾分肥厚し丸みを持つ。外面上部にはロクロナデが認められるが、直下からは縦横のハケメ調整が施される。12は底部から頸部までの資料である。体部下半は２次焼成を受け磨滅する。底部から直線的に開き、最大径は体部中央に持つ。調整は、外面上部に幅５㎝程ロクロナデを残す。その後、下から上へ縦方向のケズリが施される。内面は上部にロクロナデと横方向のハケメが認められ、その上から縦方向のハケメが施される。胎土には多量の粗砂が含まれる。本遺構はST9001とほぼ同時期と考えられる。

【ST9003】第50図

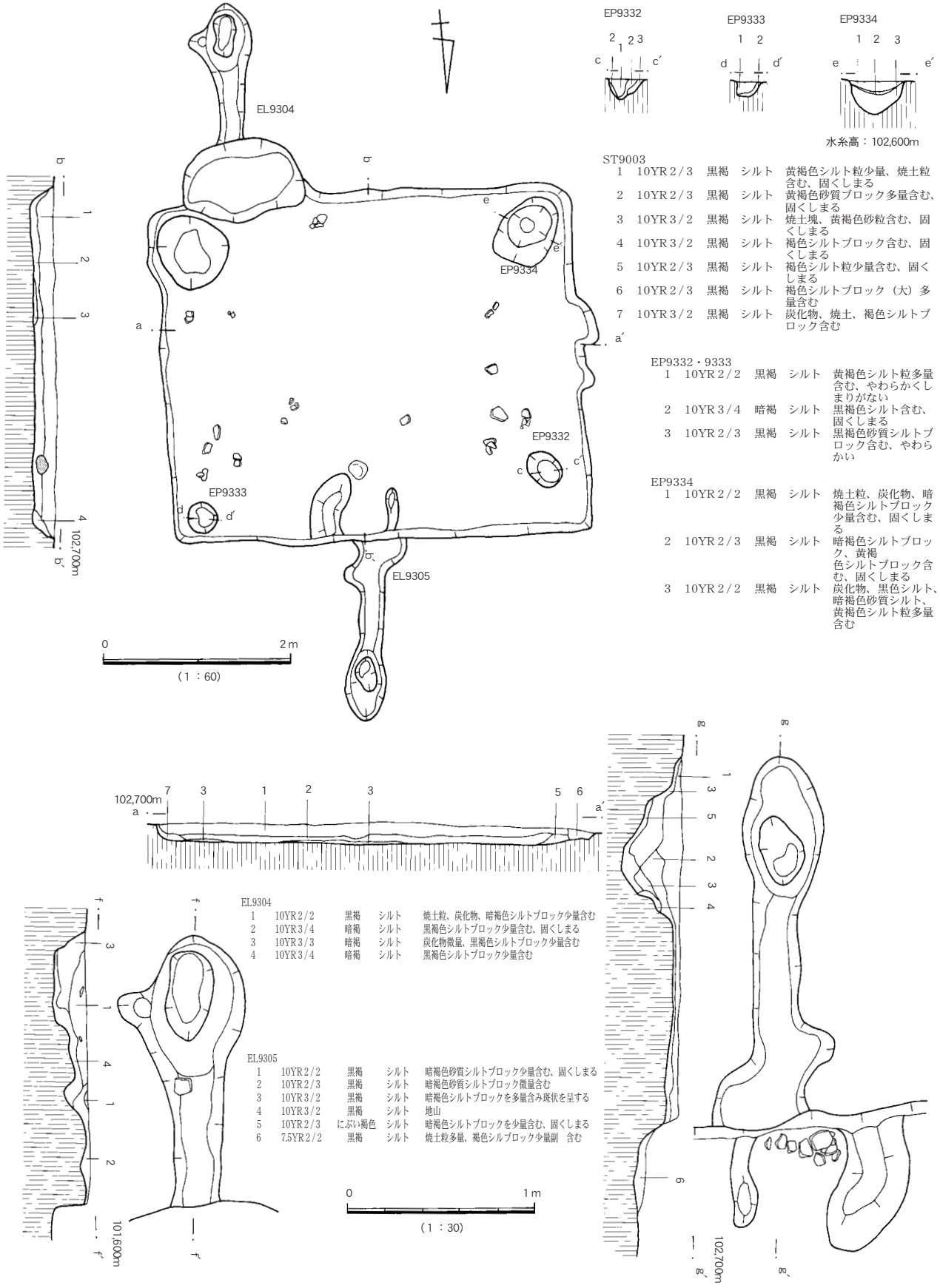
33・34－243・244グリッドに位置する。主軸方向はN－177°－Wである。平面形は東西4.5m、南北3.8mの東西に長い方形である。壁の傾斜は緩く、確認面からは約20㎝の掘り込みがある。カマドは南（EL9304）と北（EL9305）にあり、北から南へ作り替えられている。EL9305は北壁の中央部にある。燃焼部は竪穴内にあるものと推定される。僅かに残る袖部と燃焼部は、全面に施された貼床によって埋められていた。竪穴外には約２mの煙道が延びる。EL9304は南壁の東端にある。蒲鉾形の燃焼部を竪穴外に設ける構造である。煙道は屋外に1.5m延びる。竪穴内の四隅に径30～80㎝の掘り込みがあるが、いずれも主柱穴とは考えにくい。覆土は安定した自然堆積である。

遺物は、須恵器無台坏、有台坏、長頸壷、甕、横瓶、黒色土器坏、土師器甕片等の52点が出土している。（第51図）

51－１・２は有台坏である。１はヘラ切り後ナデ調整が施された底部に低めの台が「ハ」の字状に貼付く。体部下部には回転ヘラケズリ調整が施され、丸みを帯びた体部を作り出している。

表12　ST9003出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
51	1	須恵器	有台坏	120	74	48	5	緻密	良	10YR6/3にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	2	須恵器	無台坏	(110)			3	緻密	良好	7.5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	有台坏		84		6	砂粒混入	良	7.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	壷				7	粗砂混入	良	5YR6/1灰	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾀﾀｷ、ﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｱﾃ痕		
	5	須恵器	甕				9	砂粒混入	良	10YR1.7/1黒	タタキ	アテ痕		EL9304－F9
	6	須恵器	横瓶				8	緻密	良	7.5YR8/8黄橙	タタキ、ナデ	アテ痕、ナデ		RP47、48、52
	7	黒色土器	無台坏	(142)	82	35	4	緻密	良	2.5Y8/3淡黄	ナデ、ケズリ	ミガキ	ケズリ	
	8	土師器	甕	(170)			6	砂粒混入	良	5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ		EL9304
	9	土師器	甕				4	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙				
	10	土師器	甕		58		5	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ケズリ	ハケメ	ケズリ	EL9305
	11	土師器	甕		73		8	粗砂混入	良	2.5YR7/8橙	ケズリ	ハケメ	ケズリ	
	12	土師器	甕	(210)	70	320	5	砂粒混入	良	5YR6/6橙	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ、ｶｷﾒ	ロクロナデ	ケズリ	RP46、54、55、56



ST9003

1	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量、焼土粒含む、固くしまる
2	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色砂質ブロック多量含む、固くしまる
3	10YR3/2	黒褐	シルト	焼土塊、黄褐色砂粒含む、固くしまる
4	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロック含む、固くしまる
5	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む、固くしまる
6	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトブロック（大）多量含む
7	10YR3/2	黒褐	シルト	炭化物、焼土、褐色シルトブロック含む

EP9332・9333

1	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、やわらかくしまりがない
2	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルト含む、固くしまる
3	10YR2/3	黒褐	シルト	黒褐色砂質シルトブロック含む、やわらかい

EP9334

1	10YR2/2	黒褐	シルト	焼土粒、炭化物、暗褐色シルトブロック少量含む、固くしまる
2	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック、黄褐色シルトブロック含む、固くしまる
3	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化物、黒色シルト、暗褐色砂質シルト、黄褐色シルト粒多量含む

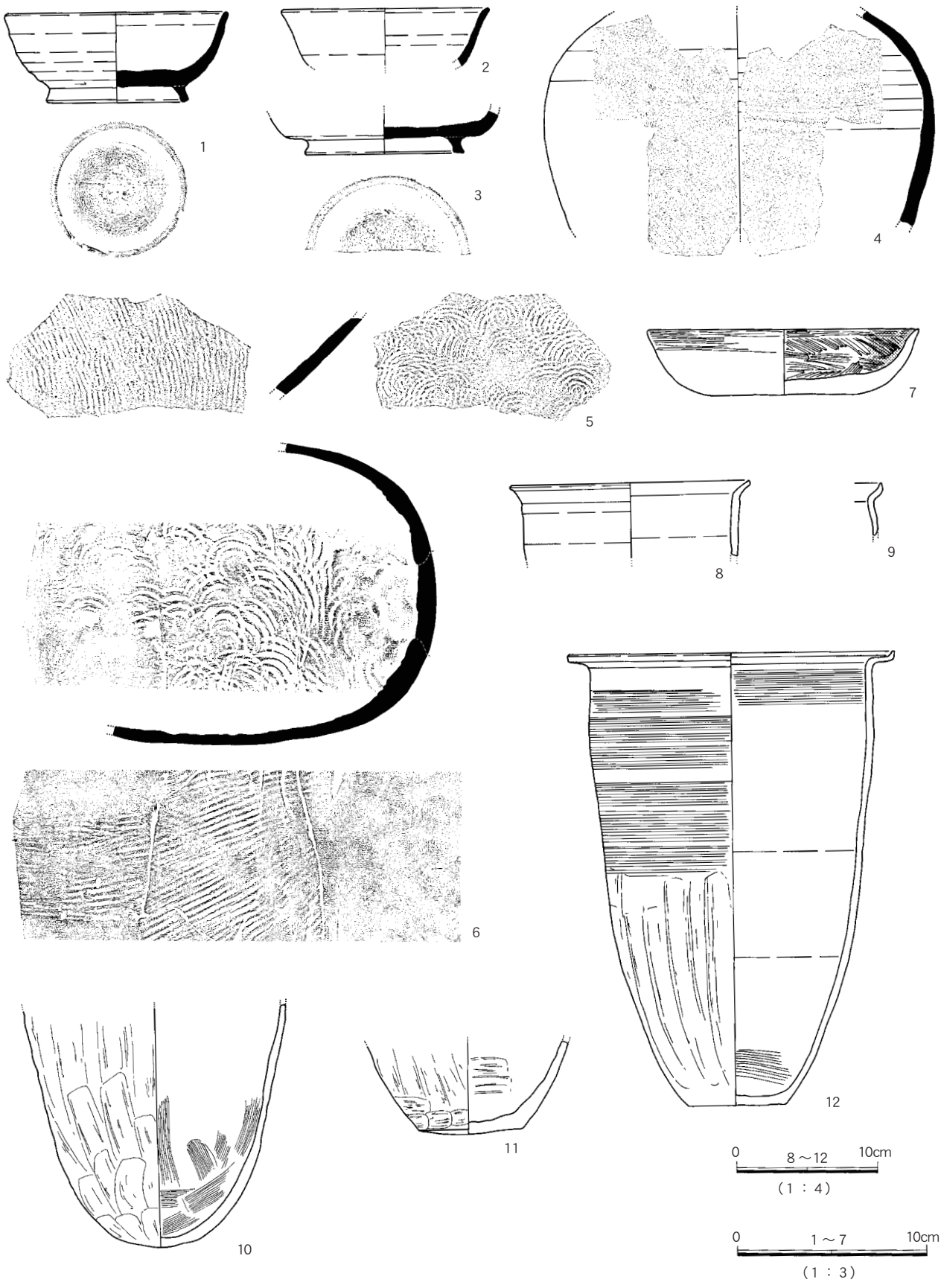
EL9304

1	10YR2/2	黒褐	シルト	焼土粒、炭化物、暗褐色シルトブロック少量含む
2	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固くしまる
3	10YR3/3	暗褐	シルト	炭化物微量、黒褐色シルトブロック少量含む
4	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む

EL9305

1	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック少量含む、固くしまる
2	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック微量含む
3	10YR3/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロックを多量含み斑状を呈する
4	10YR3/2	黒褐	シルト	地山
5	10YR2/3	にぶい褐色	シルト	暗褐色シルトブロックを少量含む、固くしまる
6	7.5YR2/2	黒褐	シルト	焼土粒多量、褐色シルブロック少量副　含む

第50図　ST9003



第51図　ST9003　出土遺物

胎土は緻密であるが、多量の海綿骨針が認められる。３はヘラ切り後無調整の底部のやや内側に、「ハ」の字状に低い台を貼付けたものである。

51－２は無台坏の口縁部から底部近くまでの資料である。体部下半は丸みを持ち、口縁部は僅かに外反する。胎土は緻密で、海綿骨針が認められる。焼成は良好である。

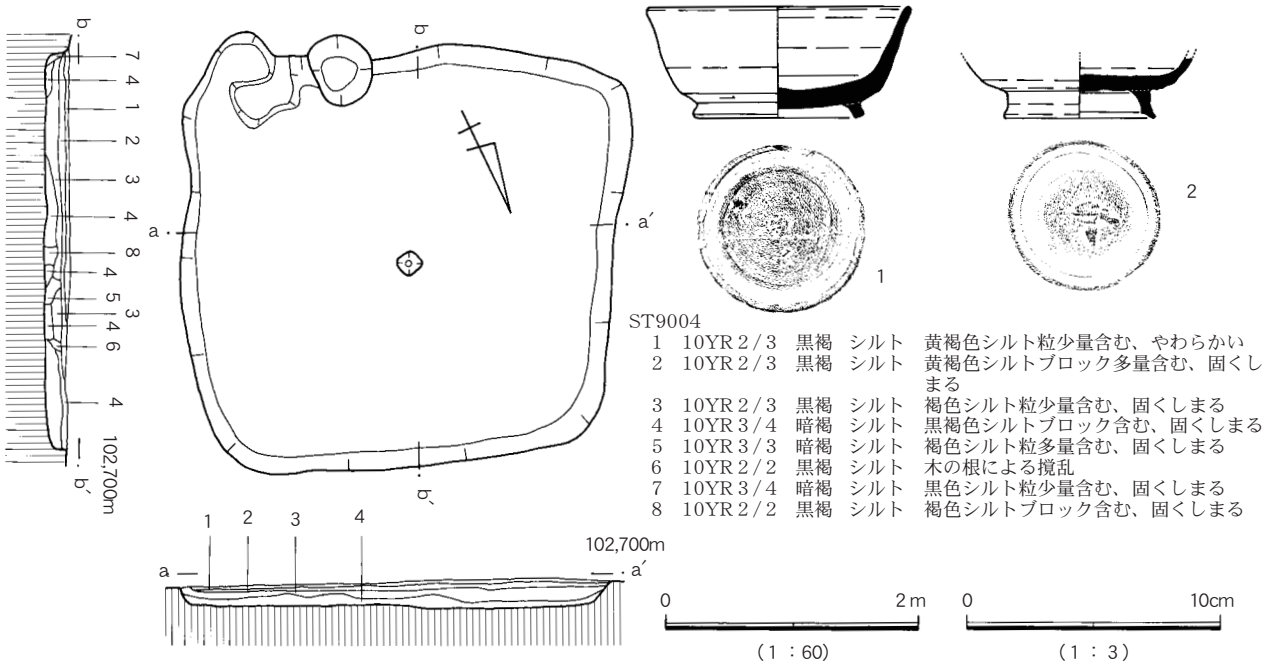
51－４は壷の肩部から体部中程にかけての資料である。肩から体部へはなだらかな曲線を描き、体部上部に最大径を有する。外面はロクロナデの後、体部中程からタタキとナデ調整が施される。内面にも、ロクロナデの後のアテ痕が認められる。胎土には粗砂と海綿骨針が認められる。

51－５は甕の体部片である。外面には自然釉が付着する。内面はアテ痕が明瞭である。

51－６は横瓶の閉塞部を含む体部片である。内面には同心円のアテ痕が明瞭に見られる。閉塞部は反時計回りに叩き出され、閉塞円盤が貼付けられる。外面は、体部にタタキとロクロナデの痕跡が認められるが、側面は丁寧なナデによってタタキの痕跡が消されている。焼成は堅だが、色調は褐色を呈する。

51－７は黒色土器の無台坏である。厚みのある底部から内湾気味に立ち上がる。外面は磨滅しているが、底部にケズリと口縁部に横ナデが僅かに認められる。内面は細めの工具によるミガキが全面に施される。胎土は緻密で、海綿骨針と雲母が微量混入する。

51－８～12は土師器の甕である。８、９は小型のもの、10～12は長胴になるタイプである。８は直立する体部から口縁部が直線的に外反する。口縁端部は、玉縁状の丸みを持つ。９の体部は、僅かに内湾する。口縁部は強く外反し、端部を上方につまみ上げたものである。



第52図　ST9004　出土遺物

表13　ST9004出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
52	1	須恵器	有台坏	104	68	44	4.5	緻密	良	10YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	RP58
	2	須恵器	有台坏		60		6	緻密	良	N7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	

10は外面をケズリ、内面をハケメによる調整を施した丸底の長胴甕である。体部の器厚は薄く保たれている。底部は叩き出しによるものと推定されるが、調整によりその痕跡は認められない。11は平底に作り出しているが、底部中央がやや盛り上がり安定感に欠ける。外面は底部を含めてケズリ調整が施され、内面は磨滅が著しいものの、ハケメ調整が認められる。厚手で重量感がある。胎土には多量の粗砂を含む。12は約１/３残存する平底の長胴甕である。底部から口縁部に至るまで緩やかに開く。口縁部はほぼ直角に外反し、端部は上方に小さく引き出される。外面はロクロナデ後、体部中央付近から下にかけて縦方向のケズリが施され、内面はロクロナデ調整である。外面には煤が付着する。

本遺構のEL9304を有する時期は８世紀後葉頃と推測される。

【ST9004】第52図

33・34－245・246グリッドに位置する。主軸方向は、N－176°－Wである。平面形は、東西3.5m、南北3.2mの方形を呈する。壁の傾斜は急で、確認面から約25cmの掘り込みがある。カマドは南壁の東角にあり、燃焼部を竪穴外に有する。貼床は見られず、堅く締った地山を床面とする。中央部にある小ピット以外柱穴等の掘り込みは見られない。覆土は自然堆積である。

遺物は、須恵器蓋、無台坏、有台坏、甕、土師器甕片等31点が出土している。(第52図) 52－１・２は須恵器有台坏である。１はヘラ切り後無調整の底部に断面形が四角の低い台が「ハ」の字状に貼付けられる。体部の下部に幅の狭い回転ヘラケズリ調整が施され、やや屈曲するが、直線的に立ち上がり口縁部に至る。胎土は緻密であるが、海綿骨針を多く含む。２もヘラ切り後無調整の底部に台が貼付けられたものだが、台は比較的高く、断面形は内側に綾を持つ三角形を呈する。内外面ともロクロナデ調整である。体部は幾分丸みを持って立ち上がる。これらは、９世紀前葉頃の所産と考えられる。

【ST9005】第53図

35・36－249・250グリッドに位置する。主軸方向は、N－180°－Wである。平面形は、東西3.9m、南北4.3mの南北にやや長い方形を呈する。壁は急であり、確認面からは約20cmの深さである。カマドは南壁の東角に設けられており、竪穴外に燃焼部が作られる構造である。カマド前面には、径１m程の掘り込みがある。床は周辺部にのみ貼床される。径50cm前後の掘り込みが数カ所に見られるが、いずれも緩く浅い掘り込みのため、柱穴とは認められない。覆土は４層からなる自然堆積である。

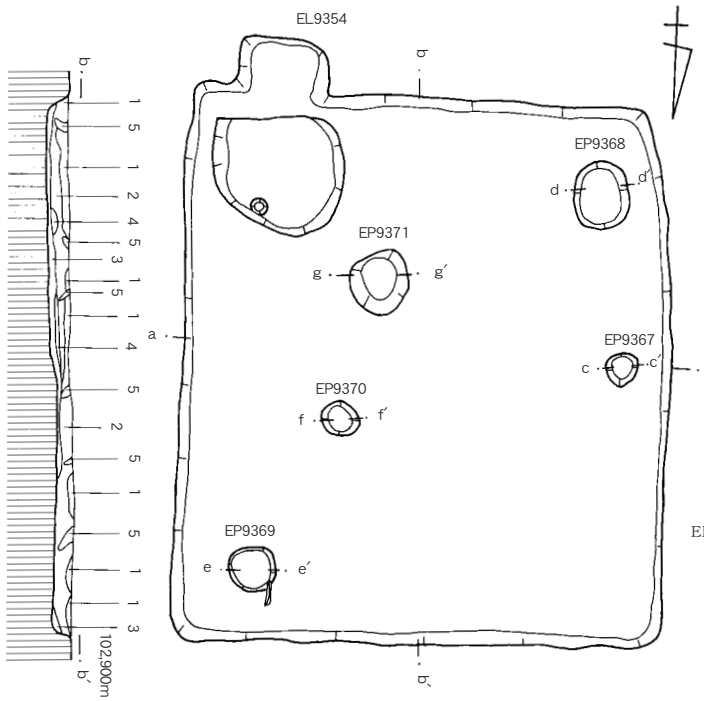
遺物は、須恵器蓋、甕、土師器甕片等６点と鉄製品の刀子１点にとどまる。(第53図)

53－１は小型の甕の底部と考えられる。底部中央に径30㎜程の僅かな窪みが認められる。体部は幾分内湾する。器厚は全体的に薄い。外面は火熱により剥離、磨滅が著しく、調整は不明である。内面も不明瞭だが、ナデの痕跡が認められる。胎土には微量ながら金雲母が混入する。

53－２は、刀子と考えられる鉄製品である。刀身は一部を残すのみだが、柄が装着される部分についてはほぼ完全な形で出土した。柄の部分は厚さ約６㎜程で、断面形は四角形を呈する。刀身に近付くにつれて、幅が広がり、端部では５㎜程のものが刀身部分では約20㎜を測る。柄と刀身の境にはリング状の留め具が残存する。

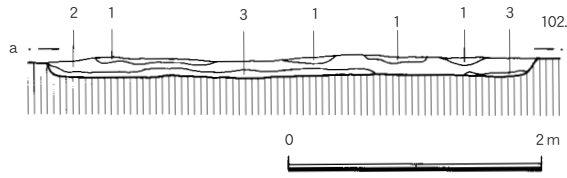
表14　ST9005出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
53	1	土師器	甕		80		3	緻密	良	7.5YR8/4浅黄橙				２次火熱



EP9367・9368・9369・9370・9371

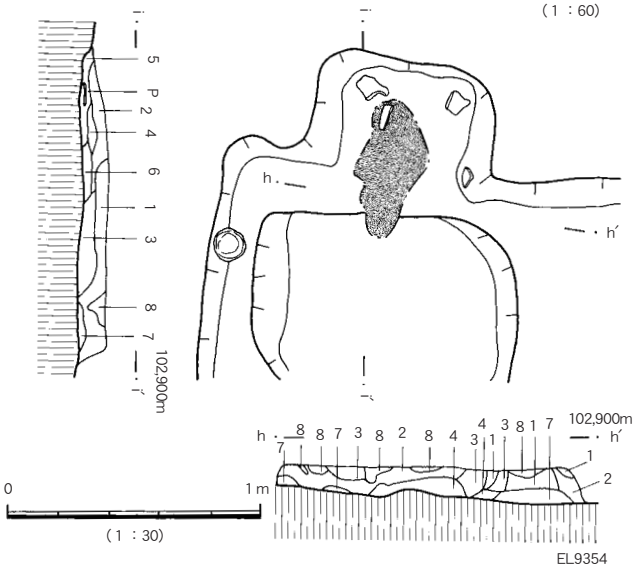
1	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色、褐色シルトブロックを斑状に含む、粘性、固くしまる
2	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、弱い粘性
3	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、褐色シルトブロック含む、粘性
4	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック少量含む、弱い粘性
5	10YR3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む
6	10YR3/4	暗褐	シルト	地山



（1：60）

ST9005

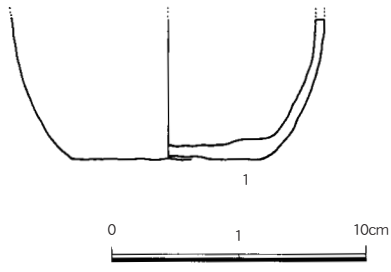
1	10YR3/3	暗褐	シルト	褐色シルト粒少量含む、固くしまる
2	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む、固くしまる
3	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、固くしまる
4	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトブロック（大）少量ふくむ、固くしまる
5				撹乱



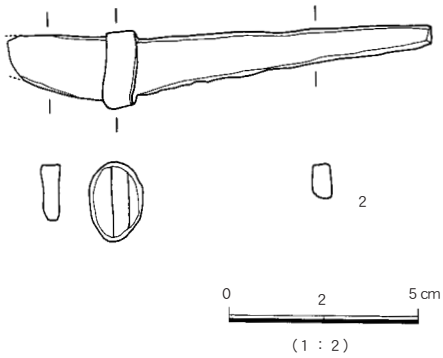
（1：30）

EL9354

1	10YR3/3	暗褐	シルト	褐色シルト粒少量含む、固くしまる
2	10YR4/4	褐	シルト	暗褐色シルト粒少量含む、固くしまる
3	10YR3/3	暗褐	シルト	焼土、炭化粒、黄褐色シルトブロック少量含む
4	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	焼土少量、黄褐色シルトブロック少量含む
5	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	土器片、焼土少量、黄褐色シルトブロック多量含む
6	10YR3/4	にぶい黄褐	シルト	焼土微量、赤褐色シルトブロック含む
7	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、固くしまる
8	10YR2/3	黒褐	シルト	撹乱



（1：3）



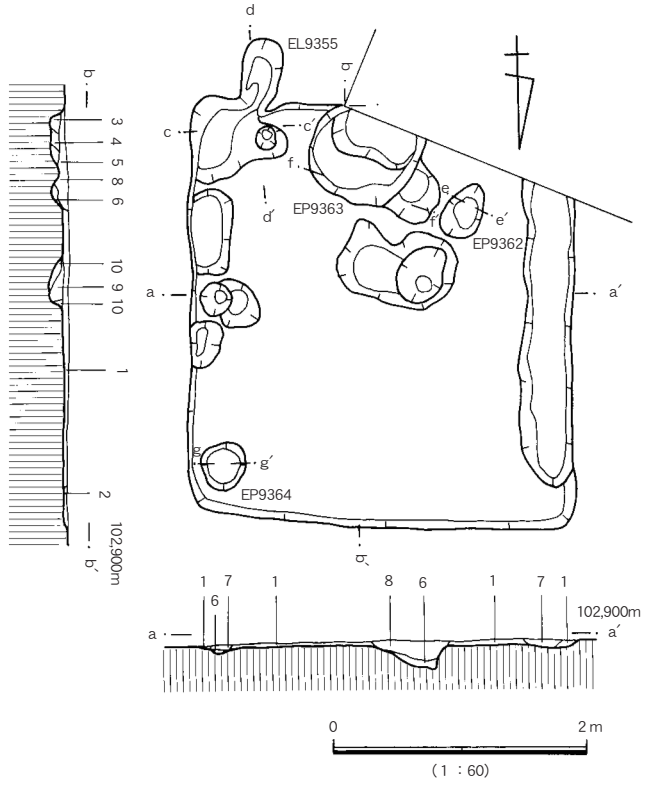
（1：2）

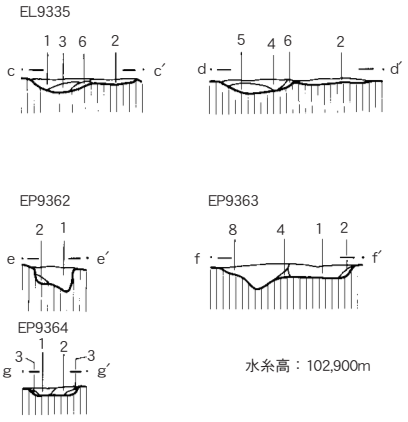
第53図　ST9005　出土遺物

【ST9006】第54図

35・36－253グリッドに位置する。主軸方向はN－176°－Wである。平面形は、東西3.1m、南北3.3mのほぼ方形である。南西角は削平を受け失っている。また、確認面からは6㎝程で床面に達し、全体的に削平を受けたことが伺える。カマドは南面の東寄りにあり、煙道状のものが竪穴外に延びる。燃焼部は、竪穴内に設けられる構造と考えられるが、遺存状態が悪く不明瞭である。床面は、周辺部に貼床の痕跡を認めることができる。中央付近と南壁寄りに径１m程の掘り込みを有するが、深さは10㎝前後しかなく、柱穴とは認められない。竪穴自体の覆土は１層で、堆積の状態は不明である。

遺物は、須恵器蓋、無台坏、土師器甕片等43点が出土しているが、いずれも小破片のため、図化や時期特定は不可能である。





ST9006
1 10YR２/３ 黒褐 シルト 褐色、暗褐色シルトブロックを斑状に含む
2 10YR３/３ 暗褐 シルト 褐色シルト少量含む、しまり弱くもろい
3 10YR３/２ 黒褐 シルト 炭化物微量、暗褐色シルトブロック含む、弱い粘性
4 10YR４/４ 褐 シルト 炭化物微量、褐色シルトブロック少量含む
5 10YR２/３ 黒褐 シルト 焼土粒微量、炭化物少量、暗褐色シルトブロック含む
6 10YR４/４ 褐 シルト 黒褐色シルトブロック含む
7 10YR２/２ 黒褐 シルト 褐色シルトブロック含む、固くしまる
8 10YR３/２ 黒褐 シルト 褐色シルトブロック、黒色シルトブロック少量含む
9 10YR２/３ 黒褐 シルト 暗褐色、褐色シルトブロックを斑状に含む
10 10YR４/４ 褐 シルト 黒褐色シルトブロックを少量含む

EL9355
1 10YR２/３ 黒褐 シルト 焼土、暗褐色、黒褐色シルトブロック微量含む
2 10YR３/２ 黒褐 シルト 焼土、炭化物少量、暗褐色シルトブロック含む
3 10YR３/２ 黒褐 シルト 暗褐色砂質シルトブロック含む、弱い粘性
4 10YR３/２ 黒褐 シルト 炭化物微量、暗褐色シルトブロックを斑状に含む
5 10YR３/２ 黒褐 シルト 焼土粒微量、暗褐色砂質シルトブロック少量含む
6 10YR４/４ 褐 シルト 黒褐色シルトブロック微量含む、弱い粘性

EP9362
1 10YR３/３ 暗褐 シルト 褐色砂質シルトブロック、黒色シルトブロック少量含む
2 10YR４/４ 褐 シルト 地山

EP9363
1 10YR２/２ 黒褐 シルト 暗褐色、褐色シルトブロック多く含む
2 10YR２/３ 黒褐 シルト 暗褐色、褐色シルトブロックを斑状に含む、固くしまる
3 10YR３/２ 黒褐 シルト 黒褐色、暗褐色シルトブロック少量含む
4 10YR４/４ 暗褐 シルト 黒褐色シルトブロック多量含む、しまりがない

EP9364
1 10YR３/２ 黒褐 シルト 褐色砂質シルトブロック微量含む、弱い粘性
2 10YR３/２ 黒褐 シルト 暗褐色砂質シルトブロック含む、弱い粘性
3 10YR４/４ 褐 シルト 地山

第54図　ST9006

【ST9007】第55図

35・36－256・257グリッドに位置する。主軸方向はN－176°－Eである。平面形は、東西4.2m、南北4.0mのほぼ方形である。壁の傾斜は緩く、確認面からの深さは約25cmである。カマドは、燃焼部が竪穴内に作られる構造で、南面の東寄りに設けられている。床面は、ほぼ全面に貼床が施される。竪穴内には、径30～70cm程の掘り込みが８ケ所で見られるが、EP9385、9386、9390の３基については柱穴の可能性を残すが、他は柱穴とは考えにくい。覆土は４層からなる安定した自然堆積である。

遺物は、須恵器蓋、無台坏、有台坏、甕等の破片が14点、土師器無台坏、甕片等が40点出土している（第56図）。

56－１・２は、つまみを欠損する須恵器の蓋である。１は、平坦な天井部から、やや丸みを帯び口縁部に至る。口縁部は緩く屈曲し、ほぼ垂直に引き出される。調整は、天井部から口縁部までロクロナデが施される。胎土には砂粒を多く含む。２は１とほとんど同様の形態を示すが、天井部の端部に弱いヘラケズリ調整が認められる。口縁部には径５㎜ほどの円形の孔を穿った様子が伺える。同様な円形の孔を穿ったものには須恵器無台坏（第175図８）もある。

56－３はヘラ切りの無台坏である。体部はやや丸みを帯びながら緩やかに開き、身は深い。内外面共ロクロナデ調整が施される。胎土には砂粒を多く含む。焼成は悪く無いが、器面は赤褐色を呈する。

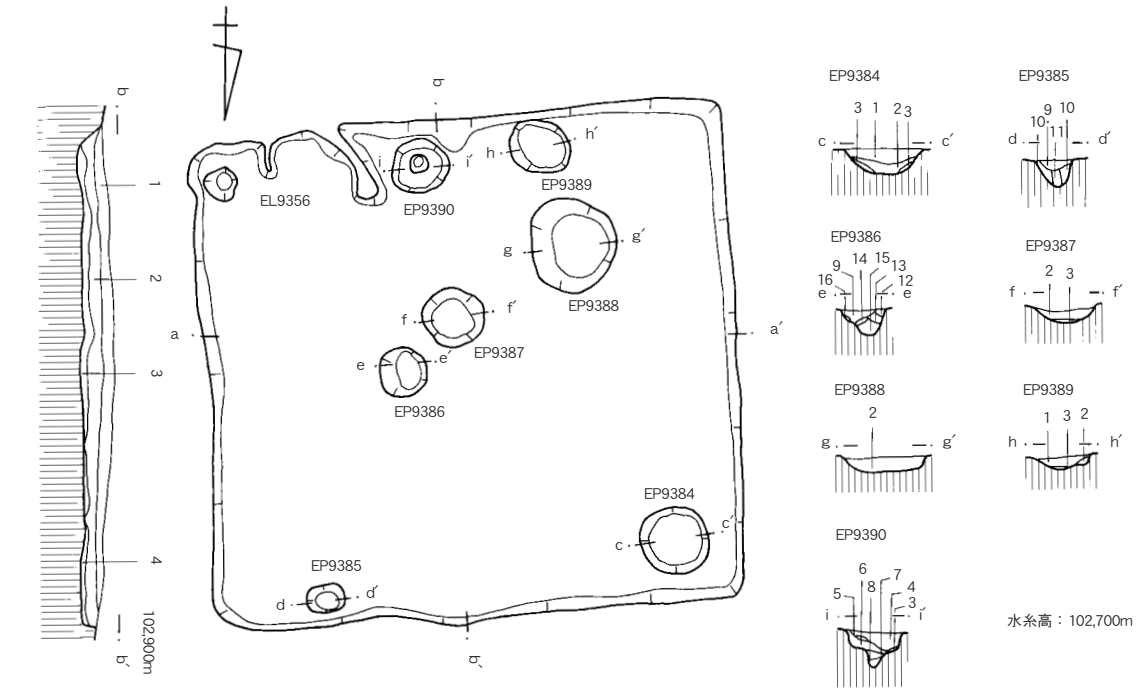
56－４は須恵器鉢の口縁部から体部上半にかけての資料である。丸みを帯びた体部から、均一な器厚のまま「く」の字状に屈曲し、口縁部を作り出している。内外面とも丁寧なロクロナデ調整が施される。胎土には砂粒と供に、径１㎜前後の黒褐色の粗砂を微量含む。焼成は良であるが、幾分甘く色調は灰白色である。

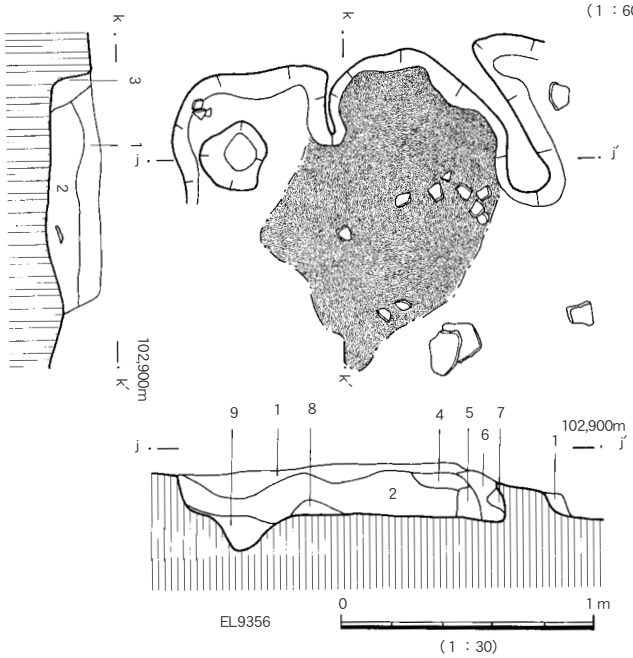
56－５は須恵器の把手のみの資料である。体部は171－８の様な塝か、もしくは221－６の様な壷状のものが想定できる。上面は粘土の折り返しの痕跡が認められる。側面及び下面はケズリにより成形される。胎土には砂粒を少量含む。焼成は良く、堅である。

56－６は、47－２と同器種で器形は不明である。内面は細かいナデ調整、外面には指頭痕と考えれる凹凸が認められる。胎土には、砂粒の他に金雲母と海綿骨針が僅かに混入する。

56－７は土師器甕の底部資料である。底部外面はケズリによる調整で平底を作り出している。また、籾圧痕と考えられる長さ６㎜、幅３㎜程の楕円形の窪みが認められる。体部外面には横方向のケズリの後、まばらな縦方向のケズリが見られる。内面は明瞭な底部を持たず、半球状に丸くなる。中心部から放射状のハケメ調整が施される。器厚は底部が厚く、体部にかけては比較的薄手である。胎土には３㎜前後の粗砂を含む。焼成は良い。

56－８は土師器の小型甕である。口縁部と体部から底部にかけての接合しない資料であるが、胎土、調整等の共通性から同一個体と判断できる。口縁部は「く」の字状に屈曲した後、端部が僅かに引き出される。体部は丸みを持ち、中央やや下方に最大径を有する。底部は平底である。外面は縦方向のケズリ、内面は太めのカキメが全面に施される。胎土には粗砂を多く含む。器面の状況と、細かく割れた破片の状態から、強い２次火熱を受けた事がうかがえる。





EL9356
1　10YR２/２　黒褐　シルト　黄褐色シルトブロック含む、固くしまる
2　10YR２/２　黒褐　シルト　焼土粒微量、黄褐色シルト粒少量含む
3　10YR２/３　黒褐　シルト　炭化粒、焼土粒、黄褐色シルト粒少量含む
4　10YR２/２　黒褐　シルト　黄褐色シルトブロック多量含む
5　10YR２/２　黒褐　シルト　焼土粒多量、土器片含む
6　10YR２/１　暗褐　シルト　暗褐色シルト粒少量含む、下部に焼土粒含む
7　7.5YR３/２　黒褐　シルト　焼土粒が大半を占める、黒褐色シルトブロック微量含む
8　7.5YR３/２　黒褐　シルト　炭化粒、焼土粒微量、黄褐色シルトブロック含む
9　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化粒微量、黄褐色シルト粒少量含む

ST9007
1　10YR２/３　黒褐　シルト　焼土粒少量、黄褐色、暗褐色シルトブロック含む
2　10YR２/１　黒　シルト　炭化物、焼土粒少量、暗褐色シルトブロック含む
3　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化物少量、焼土粒、黄褐色シルトブロック少量含む
4　10YR３/３　暗褐　シルト　黒褐色シルトブロック多量含む、固くしまる
5　10YR３/３　暗褐　シルト　撹乱

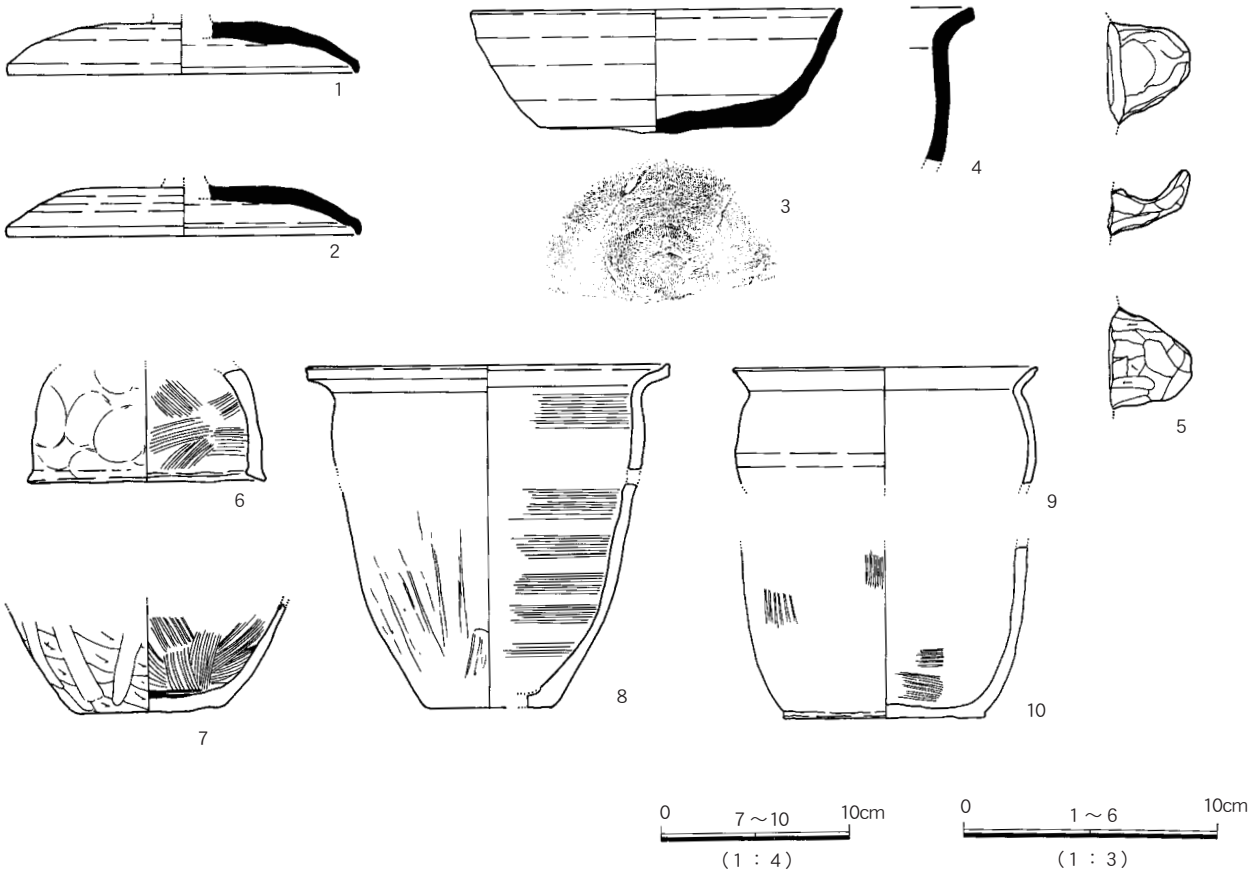
EP9384・9385・9386・9387・9388・9390
1　10YR２/１　黒　シルト　暗褐色砂質シルトブロック少量含む、粘性
2　10YR３/１　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック少量含む、弱い粘性
3　10YR３/３　暗褐　シルト　黒褐色シルトブロック少量含む
4　10YR２/１　黒　シルト　焼土、暗褐色砂質シルトブロック少量含む
5　10YR２/３　黒　シルト　暗褐色シルトブロック含む、粘性
6　10YR２/２　黒褐　シルト　焼土粒微量、暗褐色砂質少量含む、粘性
7　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化物微量、暗褐色砂質シルトブロック少量含む
8　10YR４/４　褐　シルト　地山
9　10YR２/２　黒褐　シルト　暗褐色砂質シルトブロック含む、しまりがない
10　10YR３/３　褐　シルト　黒褐色シルトブロック含む少量含む
11　10YR３/２　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック含む
12　10YR２/１　黒　シルト　暗褐色砂質シルトブロック少量含む
13　10YR３/３　暗褐　シルト　黒褐色シルトブロック少量含む
14　10YR２/２　黒褐　シルト　暗褐色砂質シルトブロック少量含む
15　10YR３/４　暗褐　シルト　黒褐色シルトブロック少量含む
16　7.5YR３/３　暗褐　シルト　焼土、黒褐色シルトブロック含む

第55図　ST9007

56－９は土師器の小型甕である。体部の残存は、ほぼ中央部付近までと考えられる。体部は丸みを帯び、器厚は均一である。口縁部は「く」の字状に外反し幾分肥厚する。端部は小さな玉縁状を呈する。内外面供ロクロナデ調整が施される。胎土には細砂を少量含み、金雲母と海綿骨針が混入する。焼成は良い。

56－10は土師器の小型甕である。底部は平底で大きく、外面には木葉痕と板状の圧痕が残る。底部内面は中心部が盛り上がる。体部の器厚は薄く、立ち上がりは直線的である。外面は２次火熱の影響で器面の状態が悪いが、縦方向のハケメ調整を見て取れる。内面には、横方向のハケメ調整が認められる。ハケメは、底部付近では明瞭であるが、体部に至ると、磨り消された状態で、不明瞭である。胎土には砂粒を多量に含み、僅かながら海綿骨針も混入する。

これらの遺物から８世紀後葉頃の所産と考えたい。



第56図　ST9007　出土遺物

表15　ST9007出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
56	1	須恵器	蓋	(138)			4	砂粒混入	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		EL9356
	2	須恵器	蓋	(138)			4	砂粒混入	良	2.5Y6/1黄灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		口縁部円形に穿孔か
	3	須恵器	無台坏	(146)	(92)	49	5	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	鉢				7	砂粒混入	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		EL9356
	5	須恵器	塝					砂粒混入	良	7.5Y5/1灰	ケズリ			取手
	6	土師器	脚部		(94)		6	砂粒混入	良	2.5YR6/6橙	指頭痕	ナデ		
	7	土師器	甕		78		7	粗砂混入	良	5YR7/8橙	ケズリ	ハケメ	ケズリ	
	8	土師器	甕	(192)	(68)		6.5	粗砂混入	良	5YR5/8明赤褐	ケズリ	カキメ	ケズリ	
	9	土師器	甕	(160)			5	細砂混入、骨針	良	5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	10	土師器	甕		102		6	砂粒混入	良	2.5YR7/6橙	ハケメ	ハケメ	木葉痕、板状圧痕	EL9356Y

【ST9008】第57図

38・39－260・261グリッドに位置する。主軸方向はN－85°－Eである。平面形は、東西2.6m、南北2.5mの方形である。南西部は風倒木によって壊される。壁は急傾斜で掘込まれ、深さは確認面から約15cmである。カマドは東面の南寄りに設けられ、燃焼部は竪穴内にあるものと考えられるが、ポンプ配管による撹乱があり、その構造は不明確である。床はほぼ全面に貼床される。柱穴は竪穴内西寄りに２基あったと想定されるが、北側のEP9395は残ったものの、南側については風倒木によって失ったと考えられる。２基の柱穴を持つ構造のものは他に、ST9607、9826、9870などがあげられる。覆土は２層からなる自然堆積である。

遺物は須恵器蓋、無台坏、有台坏、黒色土器碗、土師器甕、堝片等58点が出土した（第58図１～10）。この中で土師器甕片が最も多く、33点を数える。

58－１・２は須恵器蓋である。１は天井部に丸みを持ち、つまみは浅いリング状を呈する。口径124㎜と小振りである。口縁端部は細く屈曲し、幾分内傾する。天井部は回転ヘラケズリ後ロクロナデ調整が施される。胎土には海綿骨針が多量混入する。２は天井部が肥厚しているため、外観するより重量がある。つまみは浅いリング状である。口縁端部は厚く、ほぼ直立する。天井部に回転ヘラケズリが施される。胎土には海綿骨針が多量混入する。焼成は堅い。

58－３は須恵器有台坏である。台は欠損する。底部はヘラ切り後無調整に細い棒状の圧痕が認められる。体部外面の下部には幅５㎜程の細い回転ヘラケズリが施される。内面には底部に沈線状のものが一条巡り体部が立ち上がる。胎土には海綿骨針が多量に混入する。内外面とも黒色の吹出しが認められる。口縁部に焼成時の歪みがある。

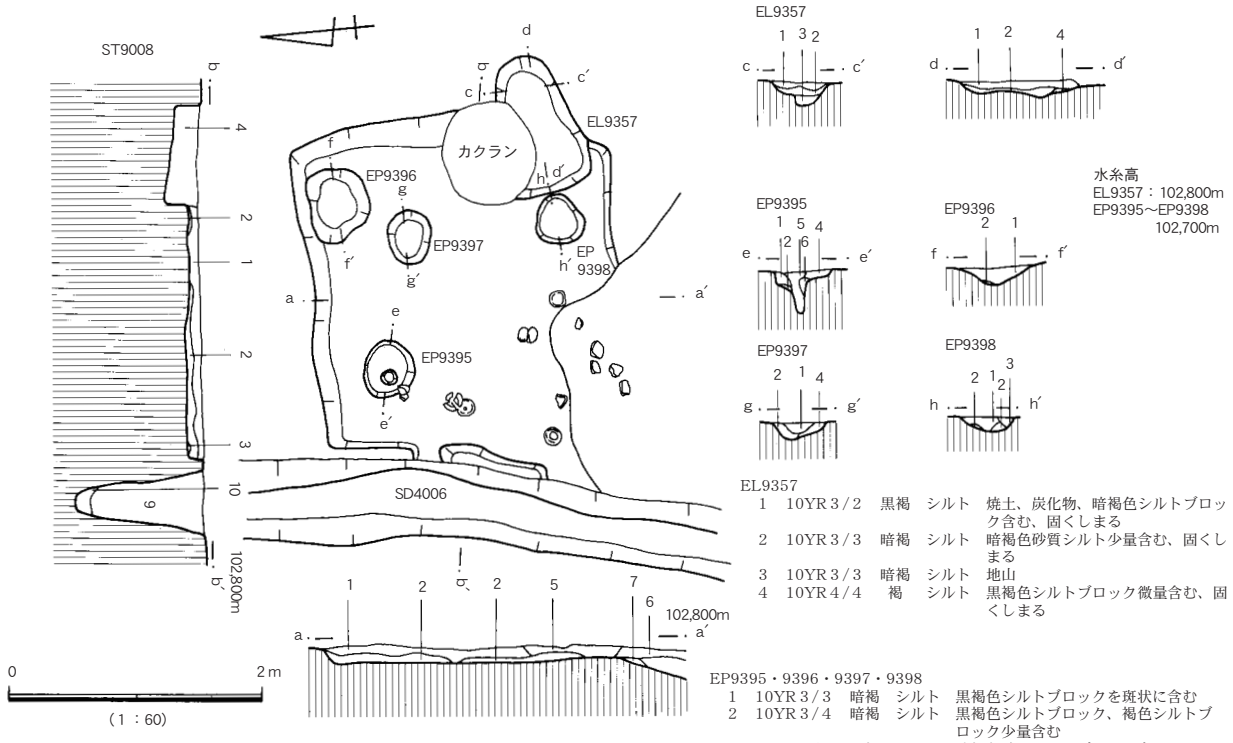
58－４～７は須恵器無台坏である。７は回転糸切、他はヘラ切りである。４は直線的な体部がやや外反して立ち上がる。５の体部は緩やかに内湾する。口縁部の内面には、一条の沈線状の窪みが巡る。内外面供２次火熱による火はねが著しい。６の体部も僅かに内湾しながら立ち上がる。３点とも胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。７の体部は丸みを帯びる。内面はよく使い込まれ、磨滅している。火襷が顕著で、外面では火襷に草木の圧痕を認めることができる。胎土には海綿骨針が多量混入する。

表16　ST9008出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
58	1	須恵器	蓋	124		33	8	砂粒混入、骨針	良好	7.5Y7/1灰白	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋	144		30	12	粗砂混入	良	2.5YR5/3にぶい赤褐	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	3	須恵器	有台坏	130			8	粗砂混入、骨針	良	10YP5/1褐灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	無台坏	142	90	45	5	砂粒混入	不良	2.5Y8/3淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	須恵器	無台坏	140	85	43	4	砂粒混入	不良	5Y8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	6	須恵器	無台坏	(142)	76	46	4	粗砂混入	不良	2.5Y8/3淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	7	須恵器	無台坏	(148)	(80)	41	6	砂粒混入、骨針	良	7.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	8	土師器	甕		60		4	緻密	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	9	土師器	堝				8	細砂混入	良	7.5YR8/8黄橙	タタキ、カキメ	カキメ、ナデ		
	10	土師器	甕				5	砂粒混入	良	2.5Y5/8明赤褐	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ		

表17　ST9011出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
58	11	須恵器	無台坏	(126)			3	粗砂混入	良	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	12	須恵器	甕				7	砂粒混入	不良	10YR8/6黄橙	タタキ	アテ痕		SK9324
	13	土師器	甕				7	砂粒混入	良	5YR6/8橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		EL9358
	14	土師器	甕				5	細砂混入、骨針	良	5YR5/6明赤褐	カキメ	ロクロナデ		



EL9357

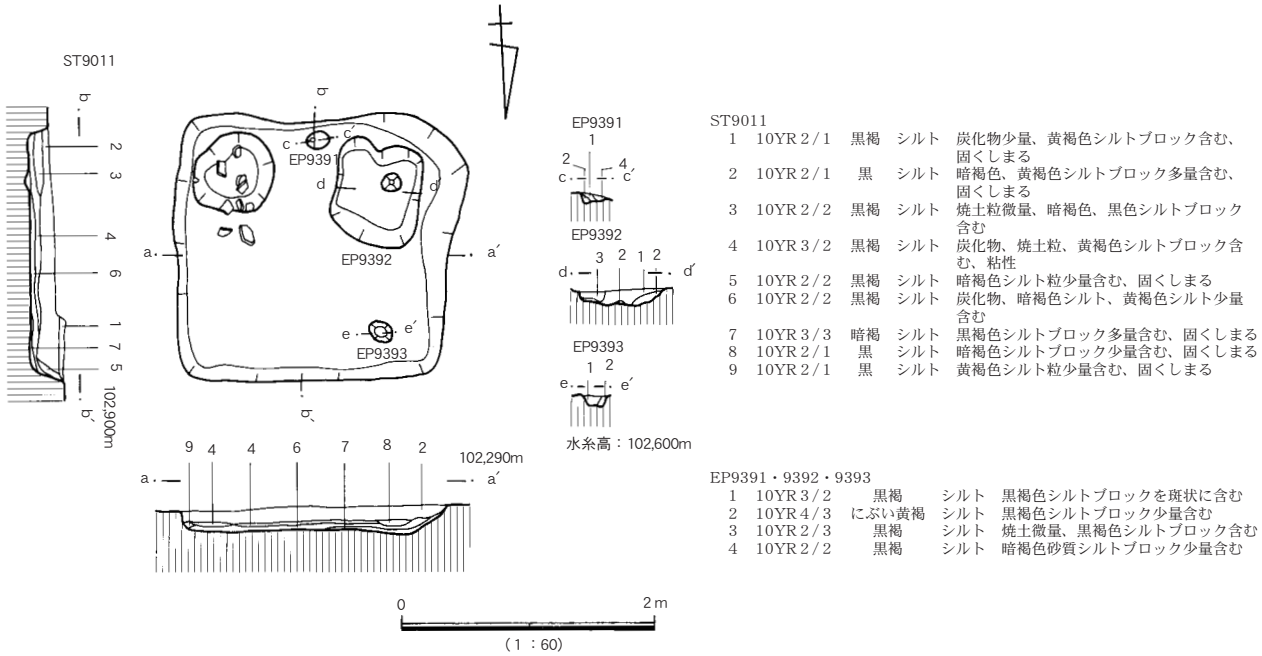
1	10YR３/２	黒褐	シルト	焼土、炭化物、暗褐色シルトブロック含む、固くしまる
2	10YR３/３	暗褐	シルト	暗褐色砂質シルト少量含む、固くしまる
3	10YR３/３	暗褐	シルト	地山
4	10YR４/４	褐	シルト	黒褐色シルトブロック微量含む、固くしまる

EP9395・9396・9397・9398

1	10YR３/３	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロックを斑状に含む
2	10YR３/４	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック、褐色シルトブロック少量含む
3	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック含む
4	10YR３/４	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック微量含む
5	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック含む
6	10YR３/４	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック微量含む

ST9008

1	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルト含む、やわらかい
2	10YR４/４	褐	シルト	黒褐色シルトブロック多量含む、固くしまる
3	10YR３/４	暗褐	シルト	地山
4	10YR２/２	黒褐	シルト	撹乱
5	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物少量、黄褐色シルト粒多量含む、固くしまる
6	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック微量含む、固くしまる
7	10YR３/２	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒含む、固くしまる
8	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固くしまる
9	10YR２/２	黒褐	シルト	黄褐色砂質シルトブロック、暗褐色シルトブロック多量含む
10	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色細砂を縞状に含む



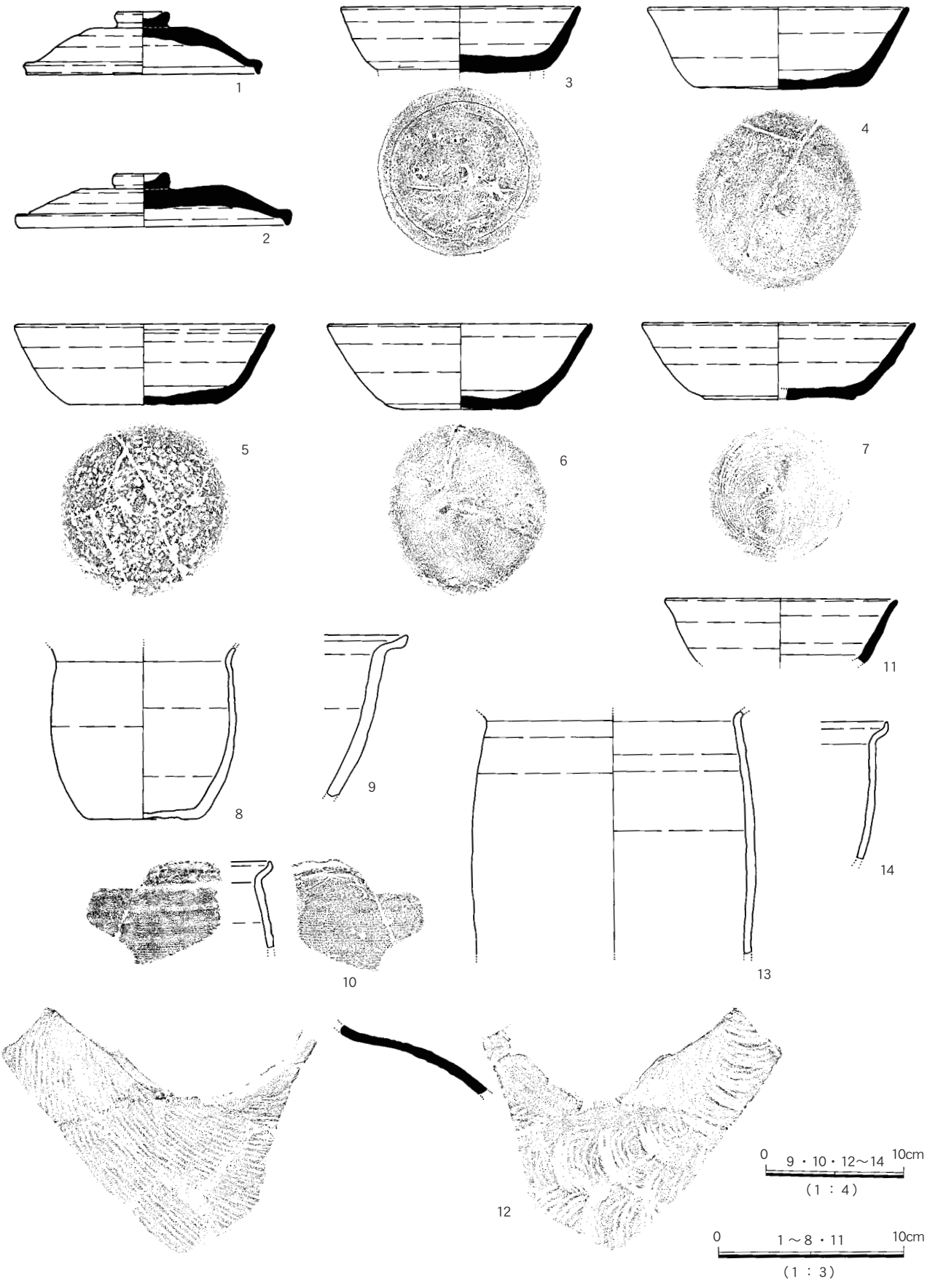
ST9011

1	10YR２/１	黒褐	シルト	炭化物少量、黄褐色シルトブロック含む、固くしまる
2	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固くしまる
3	10YR２/２	黒褐	シルト	焼土粒微量、暗褐色、黒色シルトブロック含む
4	10YR３/２	黒褐	シルト	炭化物、焼土粒、黄褐色シルトブロック含む、粘性
5	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒少量含む、固くしまる
6	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物、暗褐色シルト、黄褐色シルト少量含む
7	10YR３/３	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック多量含む、固くしまる
8	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固くしまる
9	10YR２/１	黒	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固くしまる

EP9391・9392・9393

1	10YR３/２	黒褐	シルト	黒褐色シルトブロックを斑状に含む
2	10YR４/３	にぶい黄褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む
3	10YR２/３	黒褐	シルト	焼土微量、黒褐色シルトブロック含む
4	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック少量含む

第57図　ST9008・9011



第58図　ST9008・9011　出土遺物

58－８は土師器小型甕である。体部は丸みを持ち、中央部に最大径を持つ。僅かに残存する口縁部は小さく屈曲し、短いものと推測される。器厚は全体的に極めて薄い。２次火熱により器面が荒れており、調整の痕跡はほとんど確認できない。

58－９は土師器堝の口縁部と体部上半の資料である。比較的小型のものと推測される。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は上方に短く引き出される。火熱により調整は不明瞭な部分もあるが、外面にはタタキの後カキメが施され、内面にもカキメが認められる。胎土には細砂を少量含む。焼成は良い。

58－10は土師器甕破片資料である。小型のものと考えられる。口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部を僅かに摘み出したものである。内外面供カキメが施される。火熱により器面が荒れている。胎土には砂粒を多く混入する。

これらの遺物は８世紀後葉の所産と考えられる。

【ST9011】第57図

36－257グリッドに位置する。主軸方向はN－176°－Eである。平面形は東西長、南北長ともに2.2ｍの方形を呈する。東面と南面の壁は比較的急な、垂直に近い角度であるが、西面と北面は緩く立ち上がる。確認面からの深さは約28㎝である。カマドは確認できないが南側に径70㎝程の掘込みが２基認められる。柱穴と考えられる遺構は見られない。床は全面に貼床される。覆土は安定した自然堆積である。

出土遺物は、須恵器無台坏、長頸壷、甕片等が10点、土師器甕片が24点である。（第58図11～14）

58－11は、推定口径が126㎜のやや小振りの須恵器無台坏である。体部は僅かに内湾するが、口縁部は弱く外反する。胎土には、粗砂、砂粒を多量に含み、海綿骨針の混入も見られる。

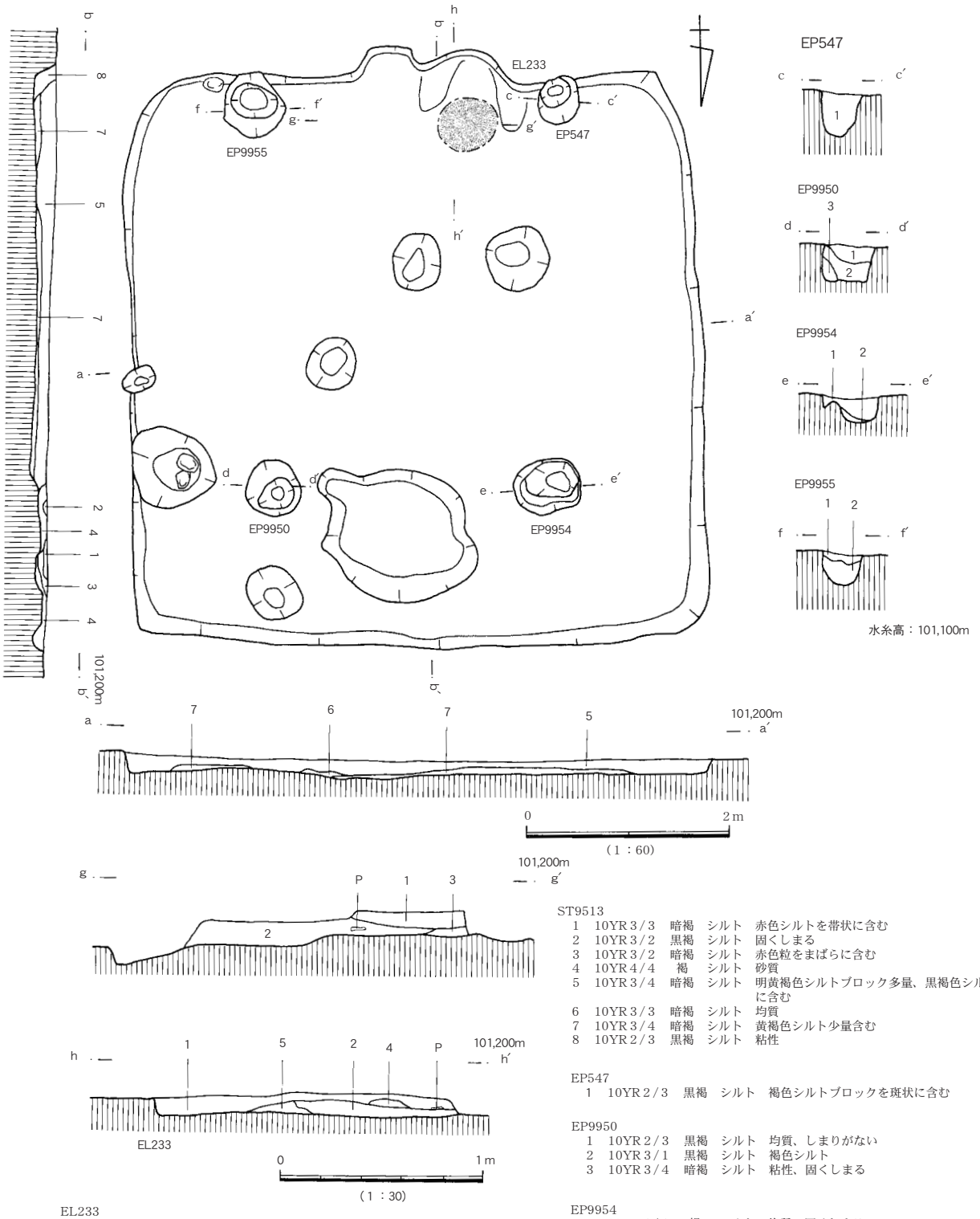
58－12は須恵器甕の肩部の資料である。外面は条線状タタキ、内面は青海波のアテ痕が認められるが、焼成が甘く磨滅している。器厚は薄手である。

58－13、14は土師器甕である。13は長胴タイプのもので、体部外面上部はロクロナデ、中位から下部にかけては、縦方向のケズリ調整が施される。内面はロクロナデの他は磨滅のため確認できない。14は小型の甕と考えられる。内外面とも火熱による磨滅が著しいが、外面にカキメ、内面にロクロナデの痕跡が僅かに認められる。

【ST9513】第59図

23・24－181・184グリッドに位置する。主軸方向はN－180°－Eである。平面形は、東西5.5ｍ、南北5.5ｍの方形を呈する。壁は急であるが、確認面からの深さは約18㎝にとどまる。カマドは、焼土を検出したことから南面のやや西寄りに設けられていたものと想定されるが、袖部等は失われている。壁が幾分張り出すが、燃焼部は竪穴内にある構造と推測される。床面は周辺部にのみ貼床され、堅く良く締っている。柱穴は４基で、南壁際にEP9955、547があり、竪穴内北寄りにEP9950、9954がある。柱穴径は30～50㎝、深さは約60㎝である。覆土は自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、須恵器蓋、無台坏、長頸壷、甕、土師器甕片等293点である（第61図１～４）。



ST9513
1　10YR３/３　暗褐　シルト　赤色シルトを帯状に含む
2　10YR３/２　黒褐　シルト　固くしまる
3　10YR３/２　暗褐　シルト　赤色粒をまばらに含む
4　10YR４/４　褐　シルト　砂質
5　10YR３/４　暗褐　シルト　明黄褐色シルトブロック多量、黒褐色シルト斑状に含む
6　10YR３/３　暗褐　シルト　均質
7　10YR３/４　暗褐　シルト　黄褐色シルト少量含む
8　10YR２/３　黒褐　シルト　粘性

EP547
1　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色シルトブロックを斑状に含む

EP9950
1　10YR２/３　黒褐　シルト　均質、しまりがない
2　10YR３/１　黒褐　シルト　褐色シルト
3　10YR３/４　暗褐　シルト　粘性、固くしまる

EP9954
1　10YR４/４　褐　シルト　均質、固くしまる
2　10YR３/３　暗褐　シルト　黒褐色シルト少量含む

EP9955
1　10YR４/４　褐　シルト　粘性、しまりがない
2　10YR２/３　黒褐　シルト　焼土、炭化物含む、しまりがない

EL233
1　10YR３/３　暗褐　シルト　褐色砂質シルトを斑状に含む
2　10YR３/４　暗褐　シルト　土器片含む、明褐色シルトを縞状に含む
3　7.5YR５/８　明褐　シルト　焼土層
4　10YR３/３　暗褐　シルト　明褐色シルトブロック含む
5　7.5YR５/６　明褐　シルト　焼土を多量含む

第59図　ST9513

61－１は口径113㎜の小振りな須恵器蓋である。天井部は丸みをもちながら盛り上がり、中央部に弱い回転ヘラケズリが施される。つまみは扁平な宝珠形である。胎土は緻密で、幾分海綿骨針の混入がある。焼成は良好で、黒色の吹出しが見られる。

61－２は黒色土器の無台坏である。内面と外面の口縁部付近に、横方向のミガキが認められ、これらの部分について黒色化する。焼成は良く、緻密な胎土には海綿骨針が微量混入する。

61－３・４は土師器甕の口縁部資料である。３は「く」の字に屈曲するもの、４は大きく開き、端面を作り出したものである。両者ともロクロナデ調整が施される。

【ST9514】第60図

26・27－183・184グリッドに位置する。主軸方向はN－171°－Eである。平面形は、東西4.4m、南北4.6mのほぼ方形を呈する。本遺構周辺は削平が著しく、確認面からの深さは７㎝と浅い。カマドは確認できなかったが、竪穴内の東面南寄りの所と南面西寄りの２ケ所に焼土が認められる。床は部分的に貼床され、貼床は堅く良く締っている。柱穴は見られない。覆土は遺構の残存が悪く、堆積状況は不明瞭である。なお、本遺構は他に２棟の竪穴建物跡とSB9679掘立柱建物跡と重複関係にあり、遺構間の切合いから最も新しい遺構と考えられる。しかしSB9679とは同軸にあり、近接するST9525とSB9646の例等から、この２つの遺構で１棟の建物を構成していた可能性も考えられる。

出土遺物は、須恵器蓋、無台坏、有台坏、長頸壷、甕片等59点、黒色土器坏等３点、土師器無台坏、有台坏、甕片等324点、合計386点である（第61図５～13）。

61－５は、天井部が回転糸切り後無調整で、つまみが無い須恵器の蓋である。内面には全面灰かぶりが見られる。同様な形態では、寒河江市木ノ沢楯跡ST150出土のものがあげられる。また米沢市大神窯跡からは類似する形態のものが焼き台として使われているが、本土器に関しては、２次的な焼成を受けた痕跡は認められない。焼成は良好で黒色の吹出しが見られる。

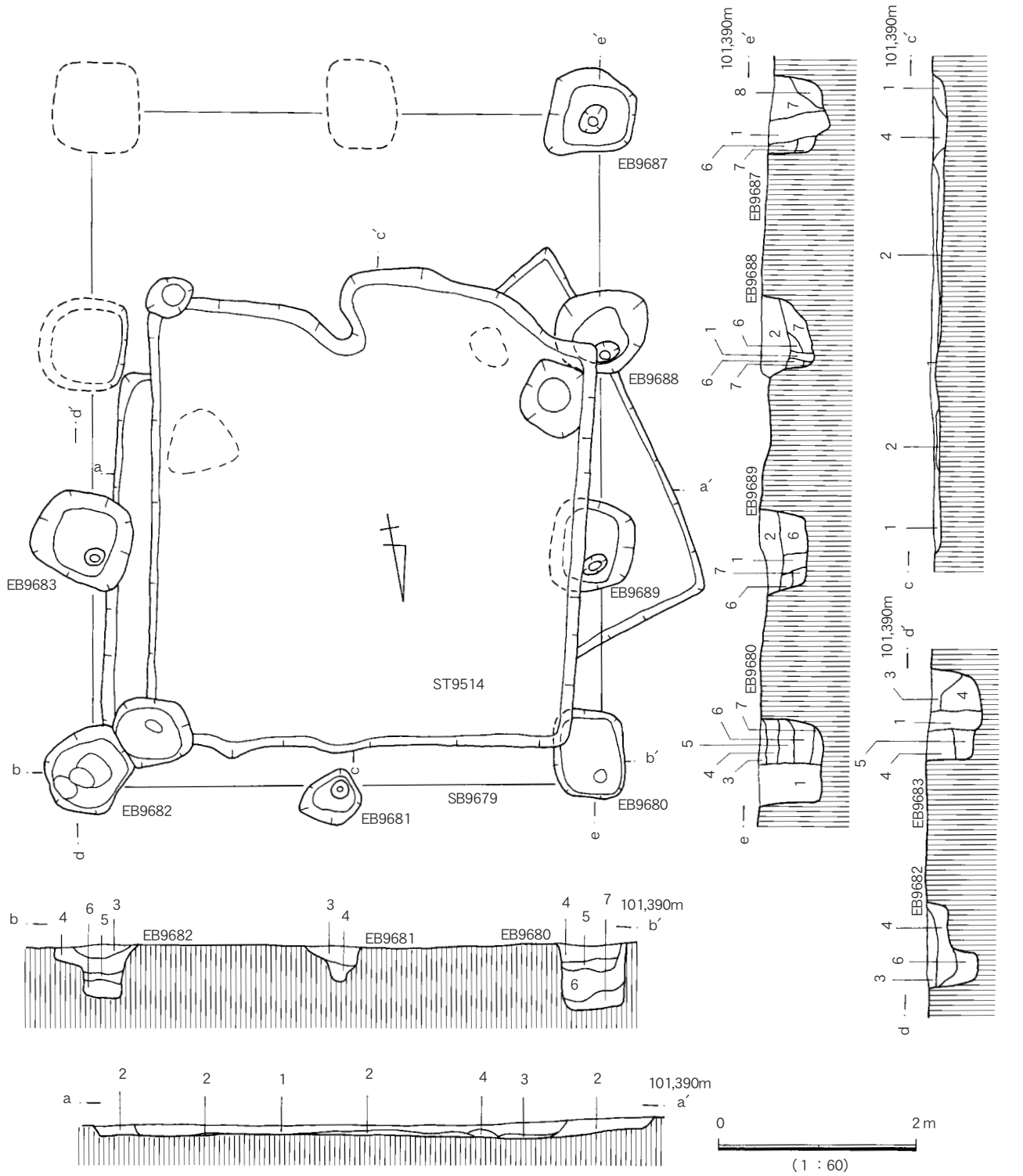
61－６～11は須恵器無台坏である。６は丸みを帯び内湾する体部から、口縁部を強く引出し外反させた、特徴的な形態である。胎土は緻密で焼成は良好である。７～９は口縁部資料、10・11は回転糸切り後無調整の底部資料である。草木状の圧痕が認められる。

61－12は須恵器短頸壷である。丸みのある体部は中央部に最大径を有する。焼成が悪いため磨滅が激しいが、外面はタタキの後カキメが施され、内面には青海波状のアテ痕が認められる。

61－13は土師器の小型甕である。２次火熱のため器面が著しく荒れている。

【SB9679】第60図

26～28－183・184グリッドに位置する。主軸方向はN－172°－Eで、前述したST9514とほぼ同じ軸線をとる。南東部が調査区外のため未確認であるが、東西２間、南北３間の南北棟と推定される。平面規模は東西5.1m、南北6.6mである。柱間距離は東西で東から2.5m、2.6m、南北の東側柱列では2.1m、西側柱列では北から2.1m、2.1m、2.4mである。柱穴掘り方は形が崩れているものの、一辺約90㎝の隅丸方形と考えられる。深さは約50㎝である。柱痕跡はは４ケ所で確認でき、径約20㎝の円形と推定される。構造上の理由か、これらの柱穴の中で東西柱列の中央にあるEB9681は、径60㎝程の不整楕円形を呈し、深さも35㎝で他の柱穴



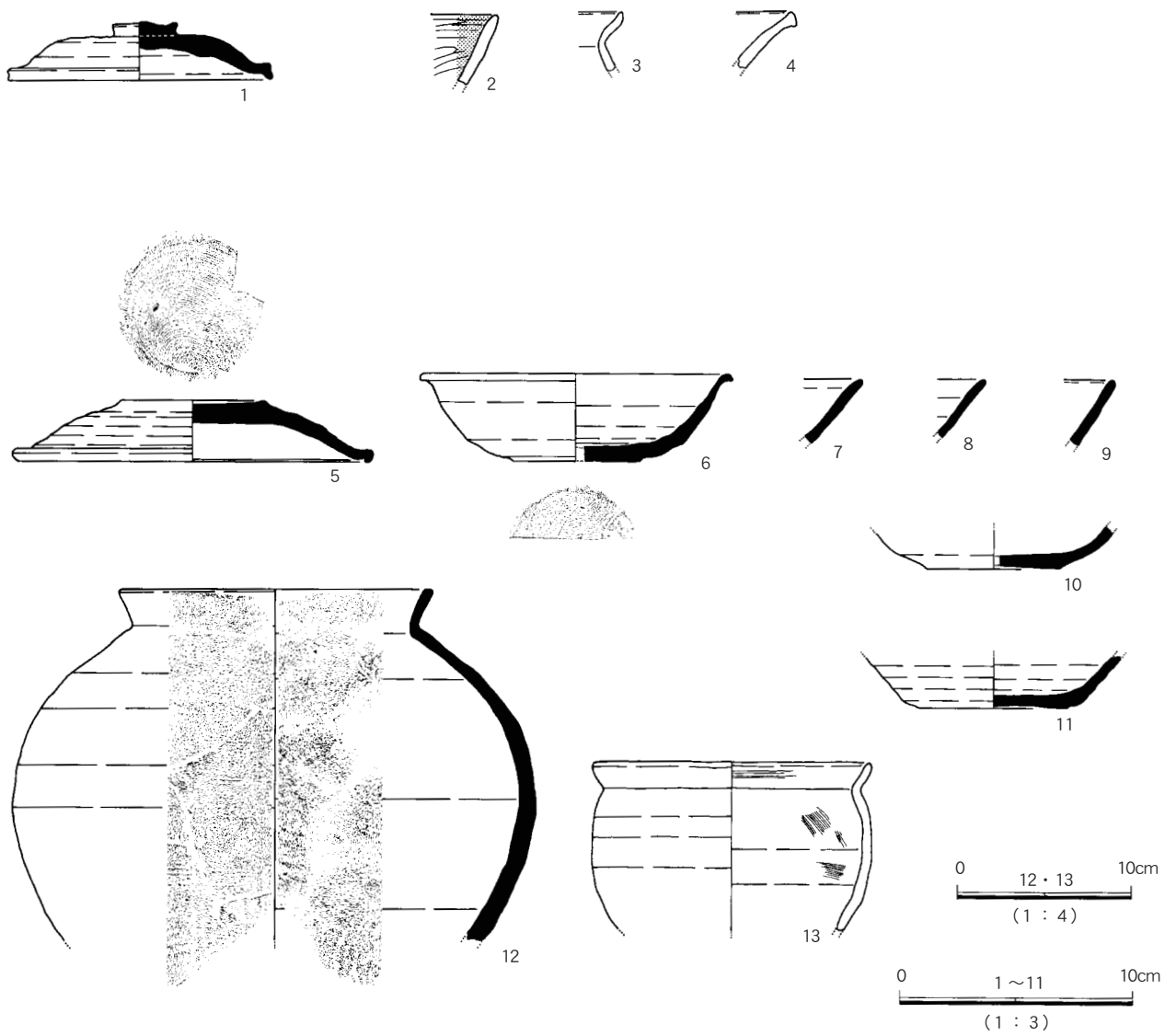
ST9514
1　10YR2/3　黒褐　シルト　褐色シルト粒微量含む
2　10YR4/6　褐　シルト　黒褐色シルトブロックを斑状に含む
3　10YR2/3　黒褐　シルト　焼土、褐色シルト粒を含む（EP）
4　10YR2/3　黒褐　シルト　焼土、褐色シルト粒を含む（EL）

SB9679
1　10YR2/2　黒褐　シルト　均質、締りない
2　10YR2/2　黒褐　シルト　褐色シルト粒少量含む
3　10YR4/6　褐　シルト　黒褐色シルトブロックを斑状に含む
4　10YR2/2　黒褐　シルト　褐色シルトブロック微量含む
5　10YR4/6　褐　シルト　黒褐色シルトを縞状に含む
6　10YR2/2　黒褐　シルト　褐色、暗褐色シルトブロックを斑状に含む
7　10YR2/2　黒褐　シルト　褐色シルトを斑状に含む

第60図　ST9514　SB9679

に比べると小さく浅い。遺構間の切合いから、ST9514より先行するST9514b・9514cより新しく、SB9502より古いことから、ST9514b・c→SB9679→ST9514→SB9502の新旧関係がとらえられる。

出土遺物は、EB9683から須恵器無台坏１点、黒色土器無台坏１点、土師器甕６点である。



第61図　ST9514出土遺物

表18　ST9514出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	1	須恵器	蓋	113		25	9	緻密	良好	N7/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	黒色土器	無台坏				5	緻密	良	10YR7/4にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ		
	3	土師器	甕				4.5	砂粒混入	良	5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	4	土師器	甕				7	砂粒混入、骨針	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	5	須恵器	蓋	(150)		26	5	細砂混入	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		回転糸切後未調整
	6	須恵器	無台坏	(134)	(53)	37	3.5	緻密	良好	5G5/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
61	7	須恵器	無台坏				3	砂粒混入	良好	2.5GY5/1オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	8	須恵器	無台坏				3	緻密、骨針	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	9	須恵器	無台坏				3	緻密	良好	7.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	10	須恵器	無台坏		(56)		4	砂粒混入	良好	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	11	須恵器	無台坏		62		4	緻密	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	12	須恵器	甕	(180)			8	砂粒混入	不良	2.5Y8/2灰白	タタキ、カキメ	アテ痕		
	13	土師器	甕	(160)			5	粗砂混入	不良	5Y6/4にぶい橙	ロクロナデ	ハケメ		

【ST9525】第62・63図

29・30－186・187グリッドに位置する。主軸方向はN－4°－Wである。東西、南北共に6.4ｍの方形を呈する。壁の傾斜は緩く、確認面からの深さも10㎝程で床に達する。床は全面に貼床が施される。カマドは調査区中唯一北面に設けられ、位置も中央に備えられる。竪穴内に燃焼部が有り、袖部の両端には土師器長胴甕を逆位にして構築材に用いている（東側：第67図９・西側：第67図５）。燃焼部に散乱する土師器長胴甕の破片（第67図６・７）も同じくカマドの構築材と考えられる。竪穴内には柱穴は認められないが、本遺構をSB9648（第140図）として登録した掘立柱建物跡の柱穴が軸を同じにして取り囲むことから、これらは一棟の建物を構成していた可能性が考えられる。

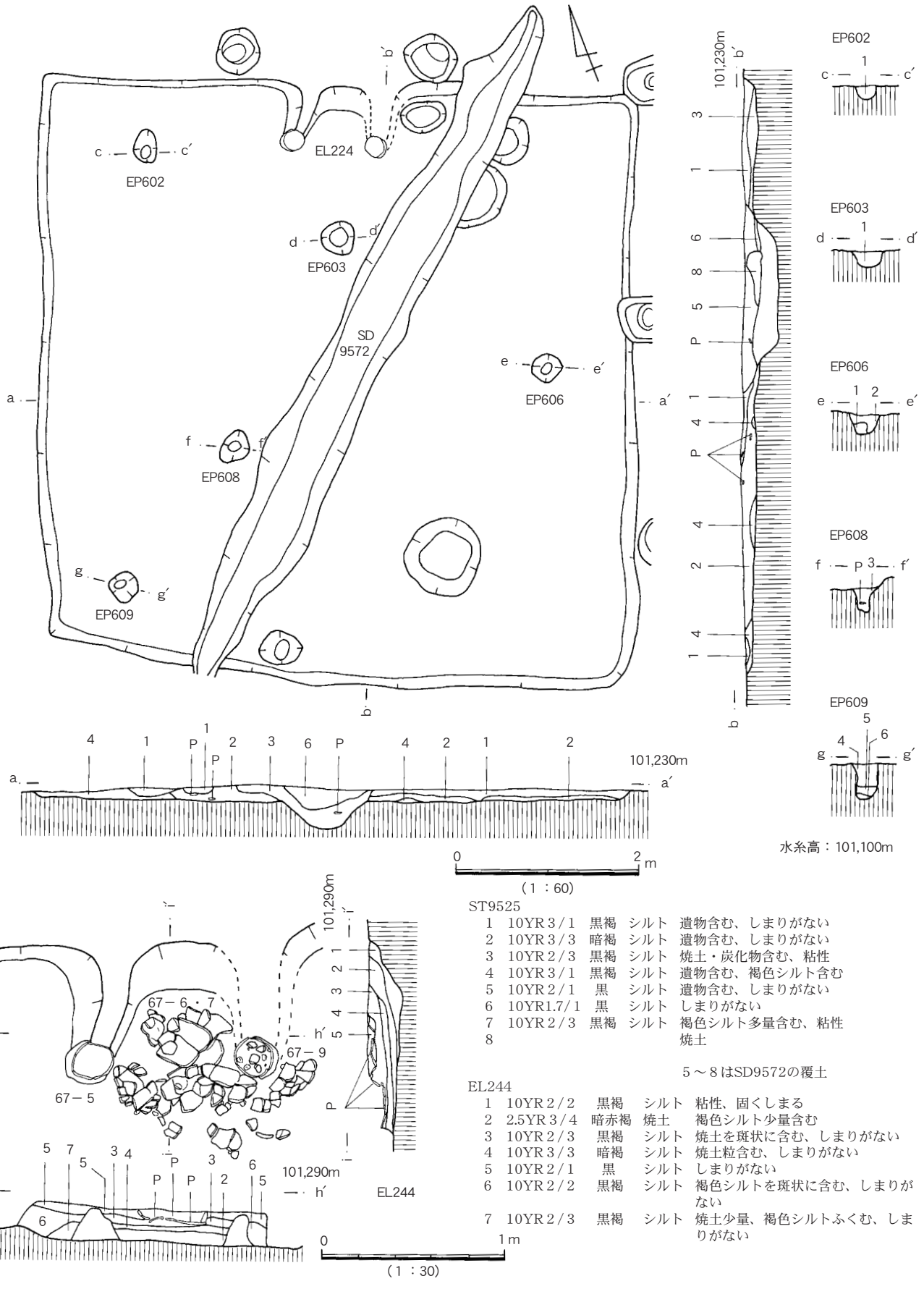
SB9648は、東西6.9ｍ、南北9.9ｍの規模があり、その中でST9525は北側２間半分を占める。南側には約３ｍの空間がある。SB9648の詳細については190頁で述べる。

覆土は浅いが、自然堆積によるものと考えられる。ST9525はSD9572との重複も見られる。SD9572からの出土遺物は、古代に所属するものに限られたが、断面観察からはST9525より新しく、周辺の遺構と考えあわせると中世の所産である可能性が高い。また、この溝跡の側にあるEP603・608・609等の小ピットは、溝跡に平行する柵と考えられる。

出土遺物は須恵器蓋10点、無台坏137点、有台坏14点、双耳坏１点、短頸壷１点、長頸壷３点、甕91点、大甕９点、黒色土器坏５点、土師器無台坏８点、甕485点、塝１点等破片点数765点あまりを数える他、風字硯、焼台等も出土した（第64図～第67図）。これらの遺物の多くは竪穴の中央部からやや北西寄りに集中する

64－１～７は須恵器蓋である。１は天井が丸く盛り上がり、器高が高くなる。天井部中央が回転ヘラケズリ、他はロクロナデ調整である。つまみは中央部が僅かに突起するが形骸化している。２も器高が高くなるタイプである。天井部は回転ヘラケズリが施されるが、不十分なため回転糸切りの痕跡をとどめる。つまみは低いリング状を呈する。３は天井部から体部にかけて緩やかな丸みを帯びる。前の２点に比べ器高は低い。口縁部は明瞭に作り出される。小さく形骸化したつまみが貼付く。４は天井部までの資料である。他の蓋に比べ回転ヘラケズリの面積が大きく、径90㎜を測る。５は天井部に回転ヘラケズリが施されるが、全体的に緩い丸みを帯び、体部との境が不明瞭である。６は天井部に回転糸切り痕を残す。器高は低く扁平である。リング状のつまみを貼付ける。口縁部は内側に折曲げ、丸くなる。７も扁平な器高のものである。天井部は小さく回転ヘラケズリが施される。つまみは基部以外欠損するが、リング状のものと推定される。口縁部は内側に折曲げたものである。

64－８～13は有台坏である。８はヘラ切り後無調整の底部に断面四角形の台を貼付けたものである。体部の開きが大きく、身は浅い。内面は使用痕が顕著である。９の台は低めで身も浅い。体部は緩やかな丸みを帯び、口縁部は外反する。使用痕は顕著ではない。10の底部は回転糸切り後無調整であるが、中央部に成形時に付いたと考えられる、棒状工具による径22㎜程の円が認められる。台は低く、断面形は三角である。体部は開き気味であるが、身は深い。口縁部内面に使用痕が認められる。



ST9525

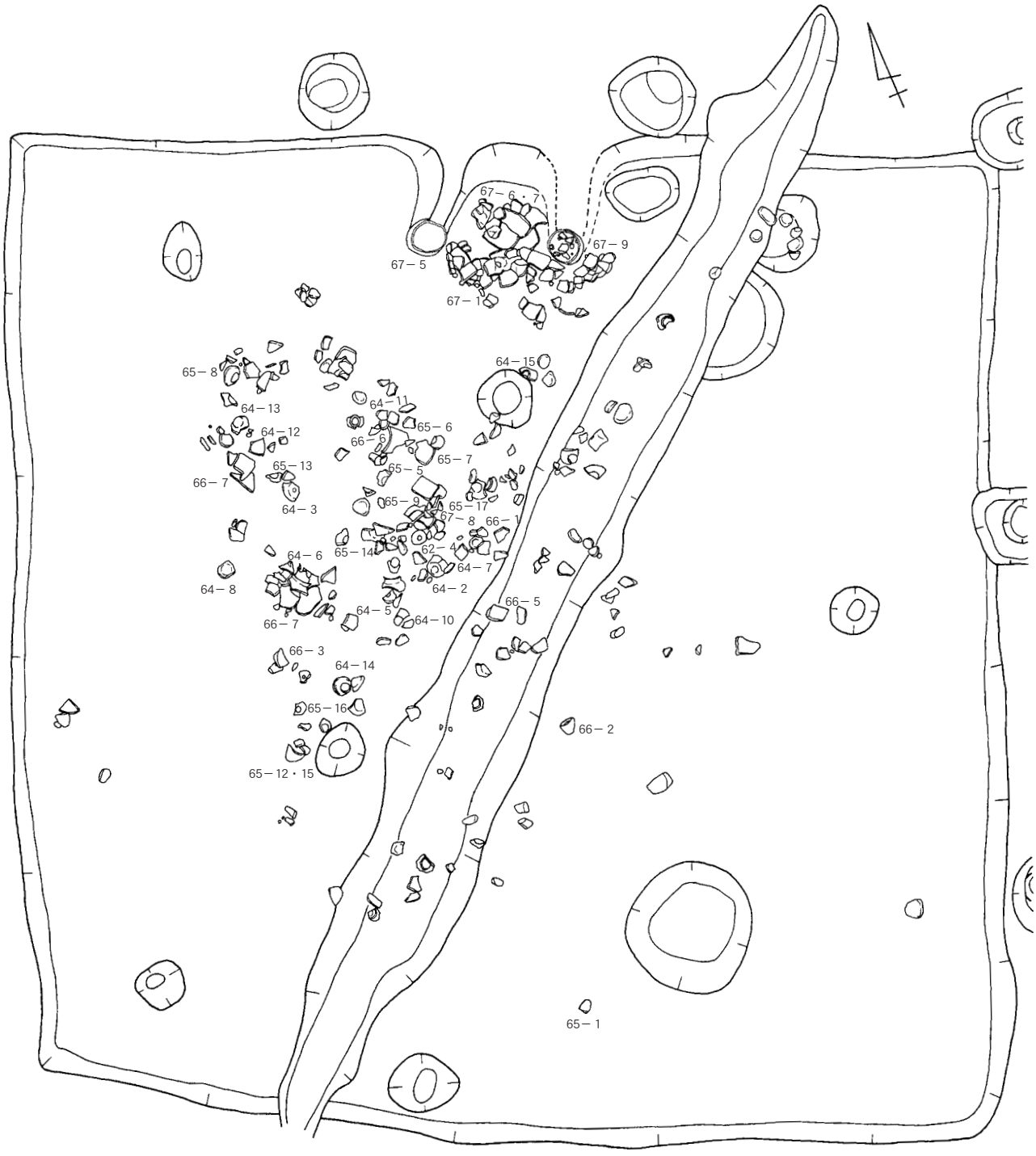
1	10YR3/1	黒褐	シルト	遺物含む、しまりがない
2	10YR3/3	暗褐	シルト	遺物含む、しまりがない
3	10YR2/3	黒褐	シルト	焼土・炭化物含む、粘性
4	10YR3/1	黒褐	シルト	遺物含む、褐色シルト含む
5	10YR2/1	黒	シルト	遺物含む、しまりがない
6	10YR1.7/1	黒	シルト	しまりがない
7	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト多量含む、粘性
8				焼土

5～8はSD9572の覆土

EL244

1	10YR2/2	黒褐	シルト	粘性、固くしまる
2	2.5YR3/4	暗赤褐	焼土	褐色シルト少量含む
3	10YR2/3	黒褐	シルト	焼土を斑状に含む、しまりがない
4	10YR3/3	暗褐	シルト	焼土粒含む、しまりがない
5	10YR2/1	黒	シルト	しまりがない
6	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルトを斑状に含む、しまりがない
7	10YR2/3	黒褐	シルト	焼土少量、褐色シルトふくむ、しまりがない

第62図　ST9525



EP602・603・606・608・609
1　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色ルシト粒微量含む
2　10YR２/２　黒褐　シルト　均質、しまっている
3　10YR２/３　黒褐　シルト　均質、土器片含む
4　10YR２/３　黒褐　シルト　均質、粘性
5　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色シルトブロック微量含む
6　10YR２/３　黒褐　シルト　均質、しまりがない

0　1m
（1：40）

第63図　ST9525遺物分布図

11は断面形が四角の低い台を貼付ける。器厚の薄い体部はやや丸みを帯び、口縁部は折るように外反する。台内部から体部外面にかけて灰かぶりが見られる。12の体部は直線的で開きが小さく、身は深い。口縁部に沈線状の窪みを有し、端部は玉縁状を呈する。13は回転糸切り後無調整の底部に断面形が三角の台を貼付けたものであるが、底部中央に径25㎜程の円形の摩痕を有する。前述の10と同様に成形時によるものと考えられる。台には草木状の圧痕が顕著である。 64－14は双耳坏である。耳部は両側供欠損する。体部外面の耳取り付け部にはケズリ調整が見られる。台の内側には台貼付けの際に付いたと考えられる爪跡が径約45㎜の円を描く。

64－15・16は須恵器及び土師器の皿である。15の底部には、台を貼付ける前に付いたと考えられる細い草木状の圧痕が明瞭に認められる。焼成時の歪みやひびが見られるが、内面には使用痕をうかがうことができる。16は焼成不良で磨滅が著しく、調整は不明瞭である。

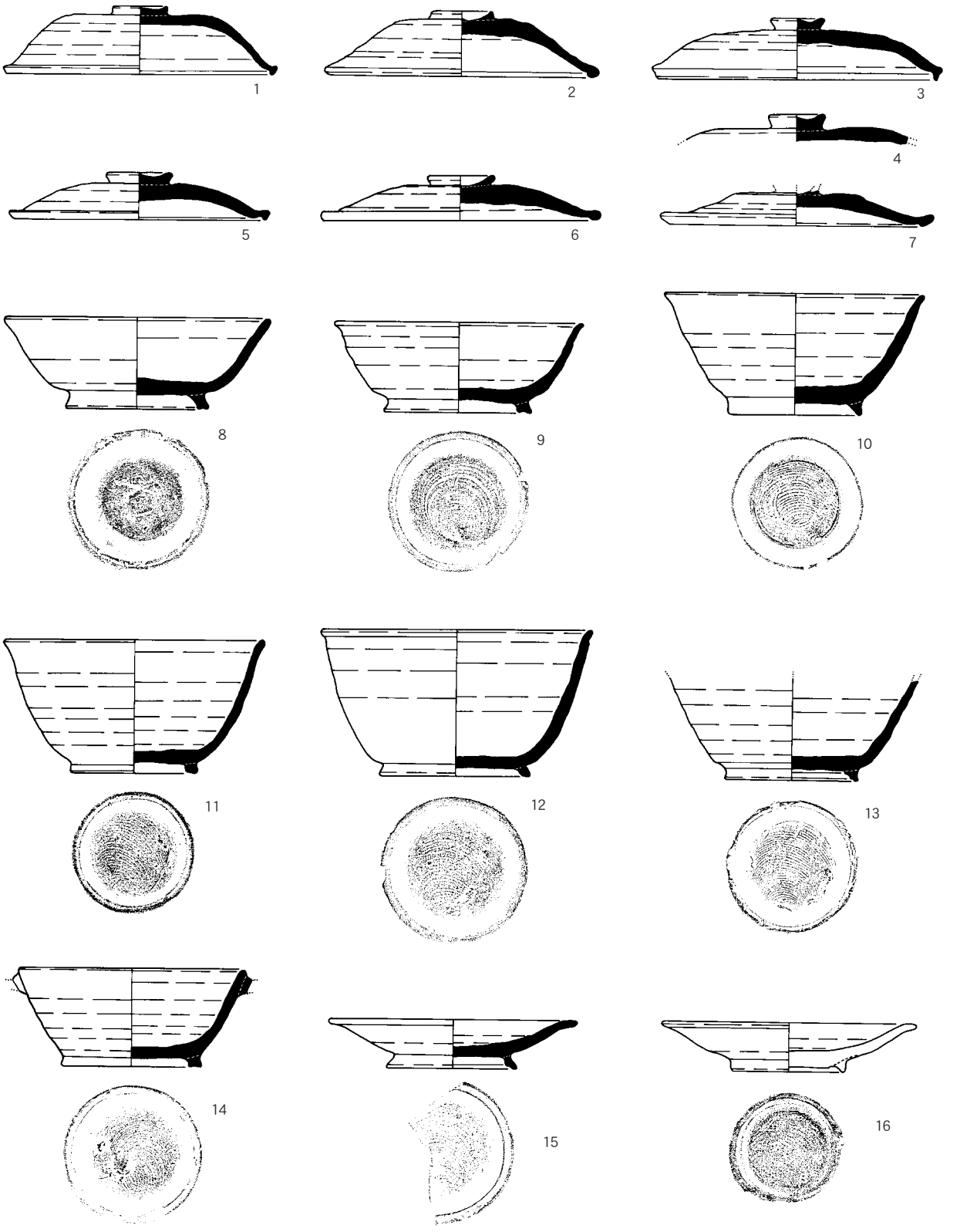
65図は須恵器無台坏である。底部は１のみヘラ切りで、他は回転糸切りであり、切離し後は無調整である。１は直線的な体部で開きは小さく身は浅い。内側の使用痕は明瞭である。２～17の無台坏は、大別すると口径が140㎜前後のものと、130㎜前後のもとが見られる。底径は２を除けば概ね60㎜前後である。器高は口径の大小に関わらず、40㎜と30㎜前後を測るものがある。成形上の特徴は、３～11がやや丸みを帯びた体部に外反する口縁部を持つのに対して、12～17は直線的な体部で、口縁部も外反しない。３、４、６、８、９、10、12、13、14、15、17には特に顕著な使用痕が認められる。

66－１～３は長頸、４・５は短めの頸の壷である。１と２は接合しないものの、同一個体と考えられる。１は頸部にリング状突帯を有し、接合は三段構成による。肩部は丸みをもつ。２は肩から体部上半にかけてはロクロナデ、下半には僅かにタタキの痕跡をとどめるが、縦方向のケズリの後、回転を利用した横方向のケズリが施される。３は台を欠損した底部資料である。外面はカキメの後、斜方向にケズリが施される。内面はカキメ状のナデに斜方向のハケメが認められる。４は頸部が短く開き、口縁部を屈曲させ平坦面を作り出す。肩から体部にかけては丸みを帯び、最大径は体部上半にある。口縁部から体部中央にかけてロクロナデ、下半は上から下への斜方向のケズリが施される。５は体部外面にタタキの痕跡をとどめるが、その上からハケメが施される。口縁部形態は４に類似する。

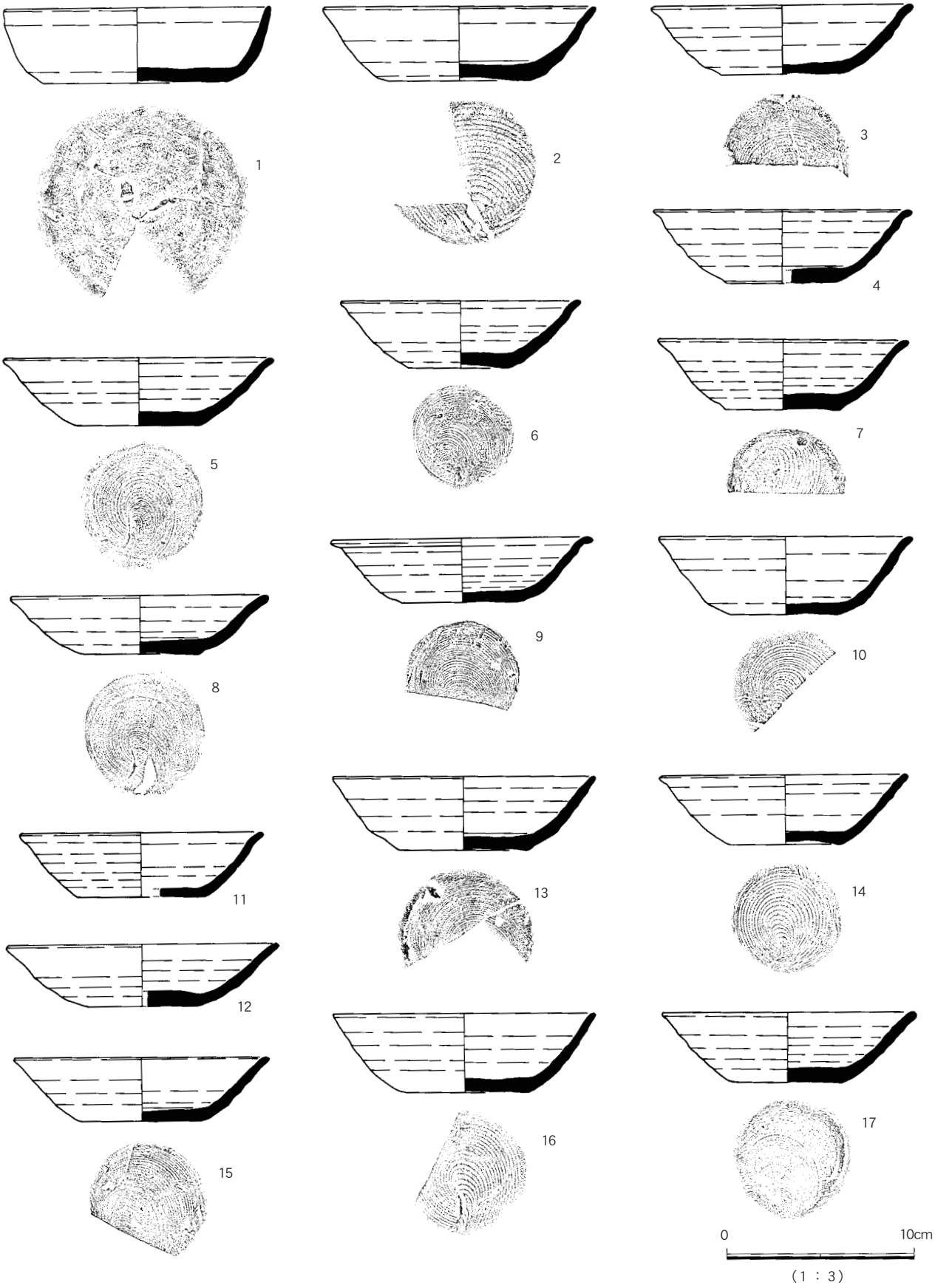
66－６・７は須恵器甕である。６の頸部から体部にかけて自然釉が全面に付着する。体部外面は平行タタキ、内面は青海波のアテ痕である。７の頸部は強く弧を描き外反し、端部を真上に引き上げる特徴的な口縁部を作り出す。肩は大きく張り出し、体部上反に最大径を有する。

66－８は横瓶の閉塞部である。閉塞円盤の内面には指頭痕による小さな凹凸が全面に見られる。外面は灰かぶりにより不明瞭であるが、カキメが施されている。

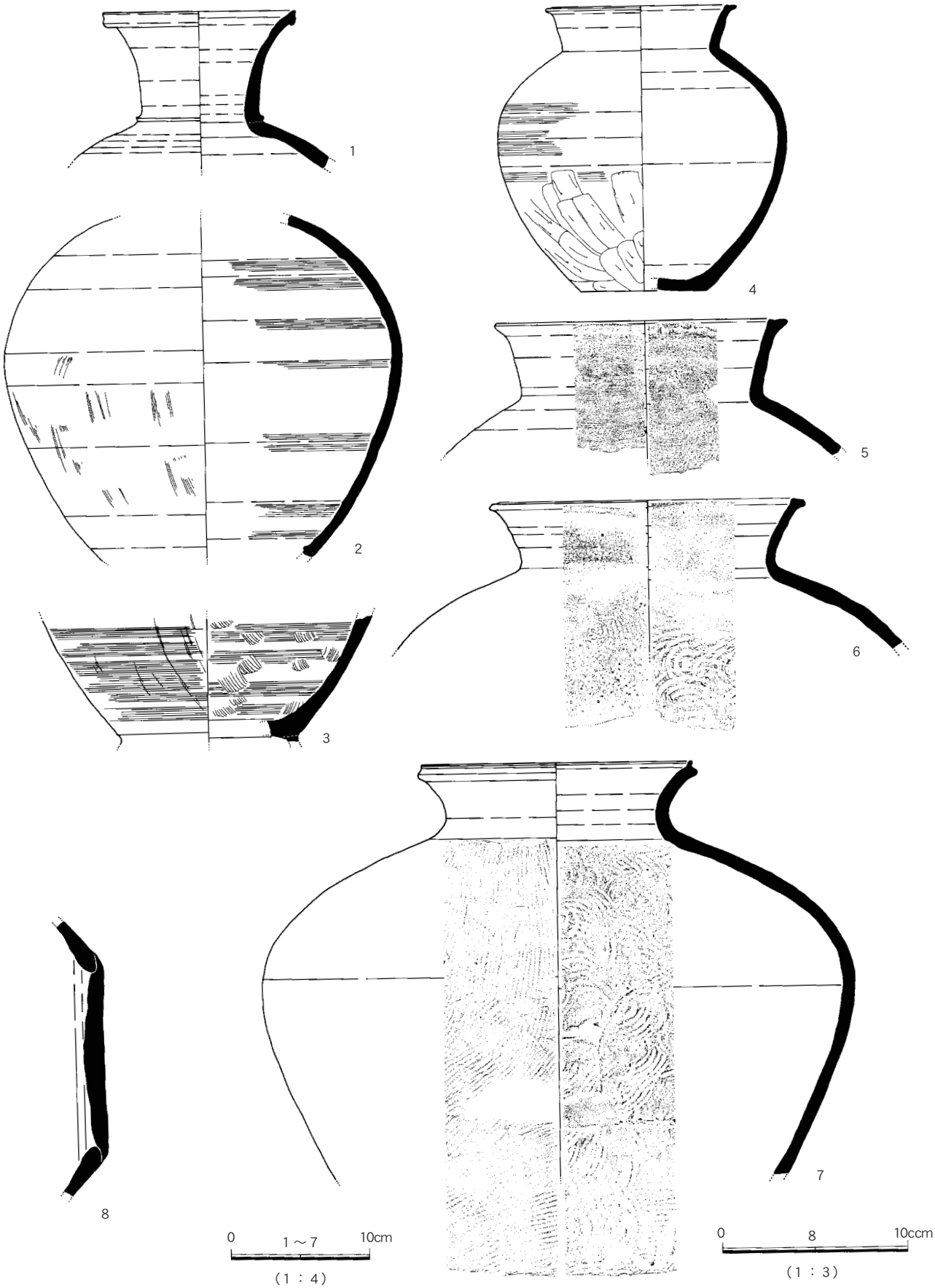
67－１・４～９は土師器長胴甕である。１は体部に幾分丸みをもち、頸部で僅かに窄む。頸部には沈線状の窪みが認められる。口縁部と体部外面には黒斑が見られる。底部には木葉痕と籾圧痕が残る。４は端部に「く」の字状の面を作り出した口縁部の資料である。内外面ともロクロナデ調整である。５は平底の底部で直線的な体部をともなう。口縁部は「く」の字に強く屈曲する。口縁部および体部の内面に黒斑が認められる。６は口縁部を欠くが、形態、調整とも



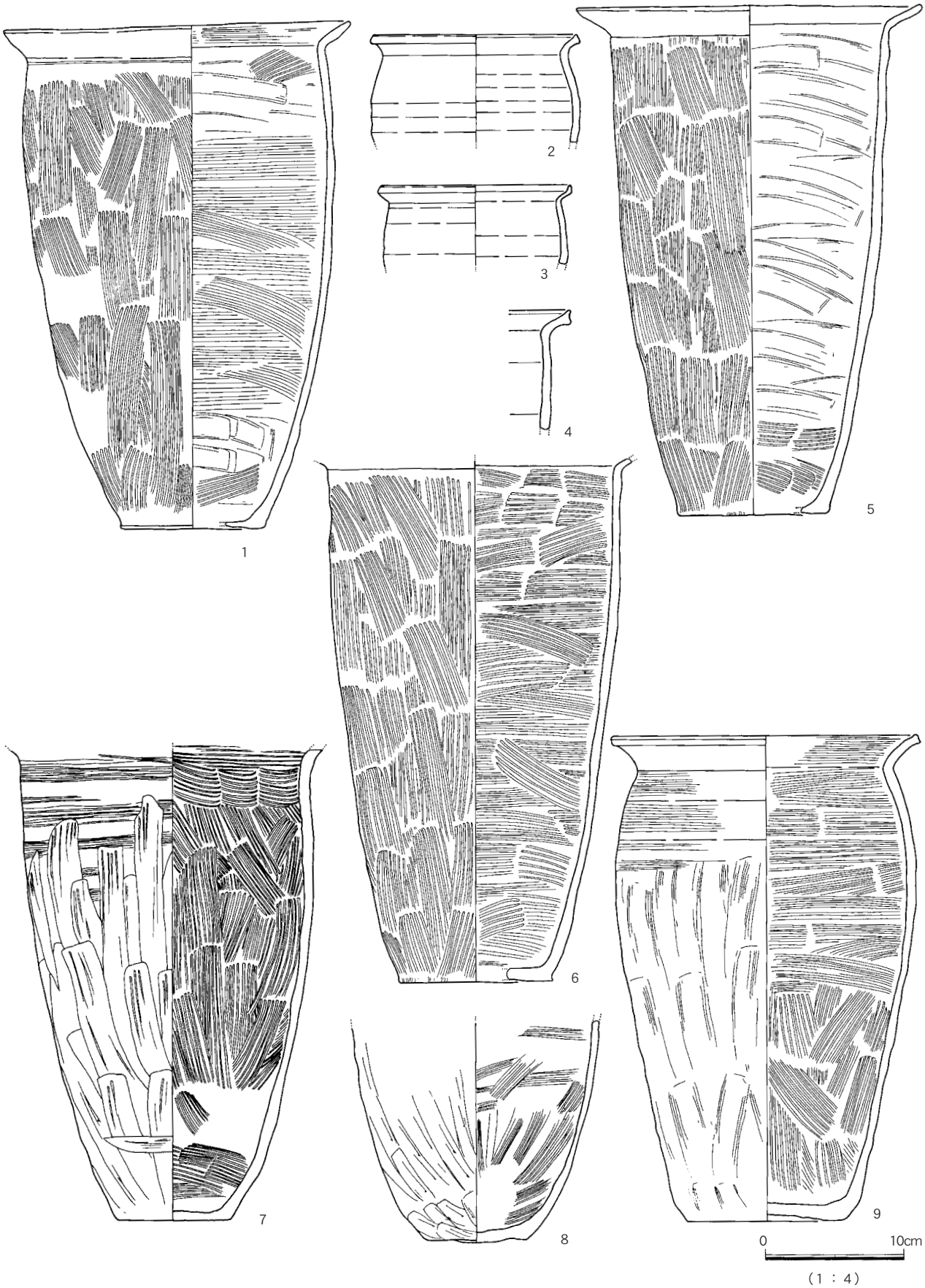
第64図　ST9525出土遺物 1



第65図　ST9525出土遺物２



第66図　ST9525出土遺物３



第67図　ST9525出土遺物４

に５に類似する。体部外面には黒褐色の土が焼き締った状態で付着するが。性格は不明である。７も口縁部を欠く。体部外面はロクロナデの後縦方向のケズリが施される。焼成は堅く、内外面とも黒斑は認められない。８の底部は周辺部が窪み、中央部が突出するタイプである。体部外面は縦方向のケズリが施される。９は大きめの平底から直線的な体部が立ち上がるが、上半部で丸みをもち、最大径を有する。頸部は窄み、「く」の字状に屈曲した厚めの口縁部に至る。体部外面には縦方向のケズリを見ることができるが、下半は火はねが著しい。胎土にはやや大きめの長石等の粗砂が多量混入する。

67－２・３は土師器小型甕である。２は口縁端部に平坦面を作り出したもので、体部は丸みをもち、最大径を中央部に有すると推測される。３は口縁部を強く屈曲させ、端部を真上に引き上げたものである。体部中央に最大径を有すると考えられる。

表19　ST9525出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	1	須恵器	蓋	(134)		35	4	細砂混入	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋	(130)		33	5	砂粒混入	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	蓋	(142)		31	7	粗砂混入	良好	5YR4/褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	4	須恵器	蓋				6	細砂混入	良	7.5Y5/灰	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ｹｽﾞﾘ	ロクロナデ		
	5	須恵器	蓋	(128)		24	5	細砂混入	良好	5B6/青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	6	須恵器	蓋	(140)		23	5	砂粒混入、骨針	良	7.5YR4/2灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ		RP149、ST9525C
	7	須恵器	蓋	(130)			45	緻密	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
64	8	須恵器	有台坏	(136)	74	47	5	砂粒混入、骨針	良	7.5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	9	須恵器	有台坏	(126)	74	46	3	砂粒混入、骨針	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	10	須恵器	有台坏	(134)	67	62	5	砂粒混入、骨針	良	N3/暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	11	須恵器	有台坏	(133)	65	68	4	砂粒混入、骨針	良好	5P6/1紫灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ST9525
	12	須恵器	有台坏	(170)	76	75	6	砂粒混入	良好	2.5Y3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	13	須恵器	有台坏		66		4	緻密	良	2.5Y6/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	14	須恵器	双耳坏	(114)	70	50	4	砂粒混入	良	5Y3/1オリーブ黒	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	15	須恵器	皿	(128)	(68)	25	4	粗砂混入	良	10YR6/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	16	土師器	皿	(130)	58	25	4	砂粒混入、骨針	良	5YR7/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	1	須恵器	無坏台	(142)	100	40	5	砂粒混入	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	2	須恵器	無坏台	(144)	78	40	4	砂粒混入	良	5Y7/3浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	3	須恵器	無坏台	140	64	37	5	砂粒混入	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	無坏台	(138)	(58)	39	4	緻密、骨針	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	無坏台	143	63	36	4	砂粒混入	良	2.5Y6/2灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	無坏台	(128)	54	36	6	緻密、骨針	良	10YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ST9525
	7	須恵器	無坏台	(133)	(60)	37	4	緻密	良	2.5GY6/1オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	8	須恵器	無坏台	137	62	31	5	砂粒混入	良	7.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
65	9	須恵器	無坏台	140	60	34	4	緻密	良	5Y8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	10	須恵器	無坏台	(136)	56	41.5	5	砂粒混入、骨針	良	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ST9525
	11	須恵器	無坏台	(130)	(68)	34	4	緻密	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	12	須恵器	無坏台	(145)	(54)	33	5	砂粒混入、骨針	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	13	須恵器	無坏台	(140)	(70)	39	6	細砂混入、骨針	良	2.5GY7/1明オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	14	須恵器	無坏台	132	58	37	4	細砂混入	良	2.5Y6/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	15	須恵器	無坏台	(136)	64	34	5	緻密	良	7.5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	16	須恵器	無坏台	(140)	64	42	4	緻密	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	17	須恵器	無坏台	136	58	38	4.5	粗砂混入、骨針	良	5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	1	須恵器	壷	(140)			6	緻密	良	10YR5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		RP149
	2	須恵器	壷				7	緻密	良	10YR5/1灰	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ｹｽﾞﾘ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ		RP120、RP155、RP162
	3	須恵器	壷				7	砂粒混入、骨針	良	10YR3/1黒褐	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ｹｽﾞﾘ,ｶｷﾒ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾊｹﾒ		RP164
66	4	須恵器	壷	138	(90)	207	6	砂粒混入	良	2.5Y6/1黄灰	ｹｽﾞﾘ、ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ロクロナデ	ナデ	RP138、156、157、228
	5	須恵器	壷	(152)			8	砂粒混入、骨針	良	2.5Y6/1黄灰	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾀﾀｷ,ﾊｹﾒ	ロクロナデ		
	6	須恵器	甕	(230)			10	緻密	良好	N4/灰	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ﾀﾀｷ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｱﾃ痕		自然釉
	7	須恵器	甕	194			10	緻密	良	5Y8/1灰白	タタキ	アテ痕		
	8	須恵器	横瓶				8.5	緻密	良	N5/灰	タタキ, ナデ, カキメ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ナデ		SD9572
	1	土師器	甕	250	105	366	6	粗砂混入	良好	2.5YR6/8橙	ハケメ	ハケメ	木葉痕	
	2	土師器	甕	(150)			5	砂粒混入	良	5YR8/4淡橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	土師器	甕	(140)			4	砂粒混入	良	7.5YR6/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	4	土師器	甕				6	緻密、骨針	良	5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		SD9572
67	5	土師器	甕	250	(108)	371	6	粗砂混入	良	5YR5/6明赤褐	ハケメ	ハケメ	ナデ	
	6	土師器	甕		(112)		6	粗砂混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ハケメ	ハケメ	ナデ	
	7	土師器	甕		(80)		5	粗砂混入	良	7.5YR7/橙	ハケメ、ケズリ	ハケメ	ナデ	RP123、130
	8	土師器	甕		74		6	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ケズリ	ハケメ	ナデ	
	9	土師器	甕	224	100	351	5.5	粗砂混入	良	5YR8/2灰白	ロクロナデ	ハケメ		RP181

【ST9559】第68図

26－190・191グリッドに位置する。主軸方向はN－177°－Eである。平面形は東西3.1m、南北3.2mの方形を呈する。壁の傾斜は強く垂直に近い。確認面からの深さは約20cmを測る。カマドは南辺東寄りにあり、竪穴内に燃焼部をもつ構造である。袖部は左側の一部を除きほとんど失われている。竪穴外に長さ約１m、幅約30cm、深さ10cm～18cmの煙道が延びる。床には貼床の痕跡は認められない。柱穴も竪穴内には確認できない。覆土は安定した自然堆積状を呈するが、黄褐色土の混入具合等の土質の状態から、埋め戻された可能性も考えられる。この竪穴建物跡の周囲には掘立柱建物跡が密集し、建物構築にともなう整地の痕跡が見られることからも竪穴建物は人為的に埋められ掘立柱建物が建てられたと推測される。

出土遺物は、須恵器蓋、無台坏、長頸壷、甕片等74点、黒色土器２点、土師器甕片等174点の計250点を数える土器類と、砥石、鉄製品がある（第69図）。

69－１～４は須恵器蓋である。１は天井部に回転ヘラケズリ調整が施されるが、体部にかけて緩やかな丸みを帯び、境は不明瞭である。２～４は口縁部資料で、各々屈曲が弱く端部が丸くなるもの、強く屈曲し端部を三角にするもの、端部を細く引出すもの等の特徴が見られる。

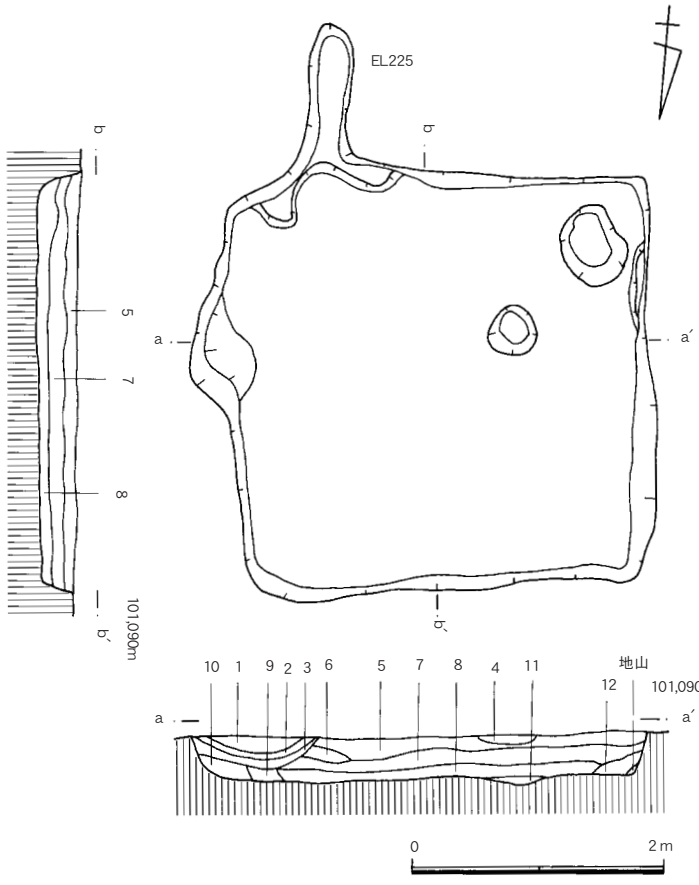
69－５～７は回転糸切り、８はヘラ切りの有台坏底部資料である。台はいずれも低い台が貼付けられ、細めとやや太めのものが見られる。７の台は体部下端に貼付けられたものである。

69－９・10は双耳坏の口縁部と体部上半並びに耳部である。９は図上復元による口径が104㎜程と小振りであるが、残存する耳の基部は幅33㎜、厚さ５㎜を測り、比較的大きめのものを貼付けていたことが推定できる。10の計測値は長さ40㎜、最大幅29㎜、厚さ約５㎜である。平面形は最大幅を中央部に有する俵型を呈する。全面にケズリ調整が施される。

69－11～20は無台坏である。底部が残存するものについては全て回転糸切りである。11は丸

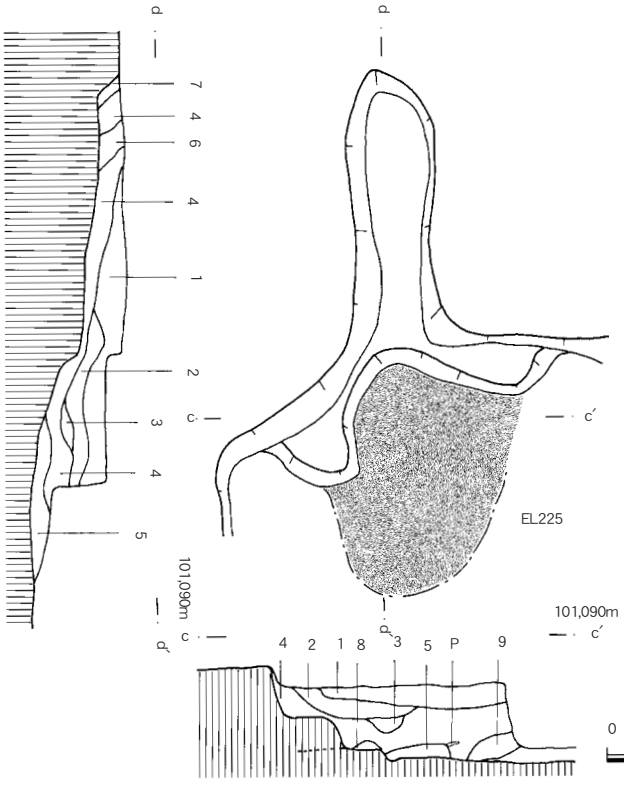
表20　ST9559出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	1	須恵器	蓋	(152)			5	細砂混入、骨針	良	7.5Y8/1灰白	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋				4	細砂混入、骨針	良好	7.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	蓋				4	細砂混入	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	4	須恵器	蓋				4	細砂混入、骨針	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	5	須恵器	有台坏		(60)		4	細砂混入	良好	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	有台坏		70		5	砂粒混入、骨針	良好	2.5Y4/2暗灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	7	須恵器	有台坏		(70)		4	細砂混入	良好	10YR4/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	
	8	須恵器	有台坏		75		4	細砂混入	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	9	須恵器	双耳坏	(104)			5	緻密	良好	N4/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	10	須恵器	双耳坏				8	細砂混入	良好	10YR5/1褐灰	ケズリ	ロクロナデ		
	11	須恵器	無台坏	(146)	(76)	43	7	細砂混入	良	7.5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	12	須恵器	無台坏	(148)	(76)	35	5	砂粒混入	良	10Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	13	須恵器	無台坏	(116)			4	緻密	良好	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
69	14	須恵器	無台坏		66		7	緻密	良	10YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	15	須恵器	無台坏		(68)		5	細砂混入	良	5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	16	須恵器	無台坏				5	細砂混入	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	17	須恵器	無台坏				5	砂粒混入	良	7.5Y6/１灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	18	須恵器	無台坏				5	細砂混入	良好	7.5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	19	須恵器	無台坏				5	緻密	良好	2.5GY5/1オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	20	須恵器	無台坏				4	細砂混入	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	21	須恵器	円面硯				6	緻密	良	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	22	須恵器	甕				4	砂粒混入	良	10YR2/2黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	23	土師器	甕		(100)		7.5	砂粒混入	不良	5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	
	24	土師器	無台坏		(80)		5	砂粒混入、骨針	良	2.5Y8/3淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	25	土師器	甕		(52)		7	粗砂混入	良	5YR6/3にぶい橙	ナデ	ナデ	ナデ	
	26	土師器	甕		(92)		8	砂粒混入	良	10YR7/4にぶい橙	ケズリ	ハケメ	ナデ	
	27	土師器	甑				5	粗砂混入	良	5YR7/6橙	ケズリ			



(1 ：60)

1	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化物、風化礫少量含む、固くしまる
2	10YR 2/2	黒褐	シルト	焼土粒、黄褐色粒少量含む、固くしまる
3	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色粒少量含む、固くしまる
4	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、固くしまる
5	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化粒微量、黄褐色シルトブロック含む
6	10YR 2/3	黒褐	シルト	黒色シルトブロック、黄褐色シルトブロック多量含む
7	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化粒微量、黄褐色シルトブロック多量含む
8	10YR 2/1	黒	シルト	炭化物、焼土、土器、黄褐色シルトブロック含む
9	10YR 3/3	黒	シルト	焼土粒、炭化粒、黄褐色シルト含む、やわらかい
10	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルト粒少量含む、やわらかいがしまっている
11	10YR 2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒斑状に含む、固くしまる
12	10YR 2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、固くしまる



(1 ：30)

EL225

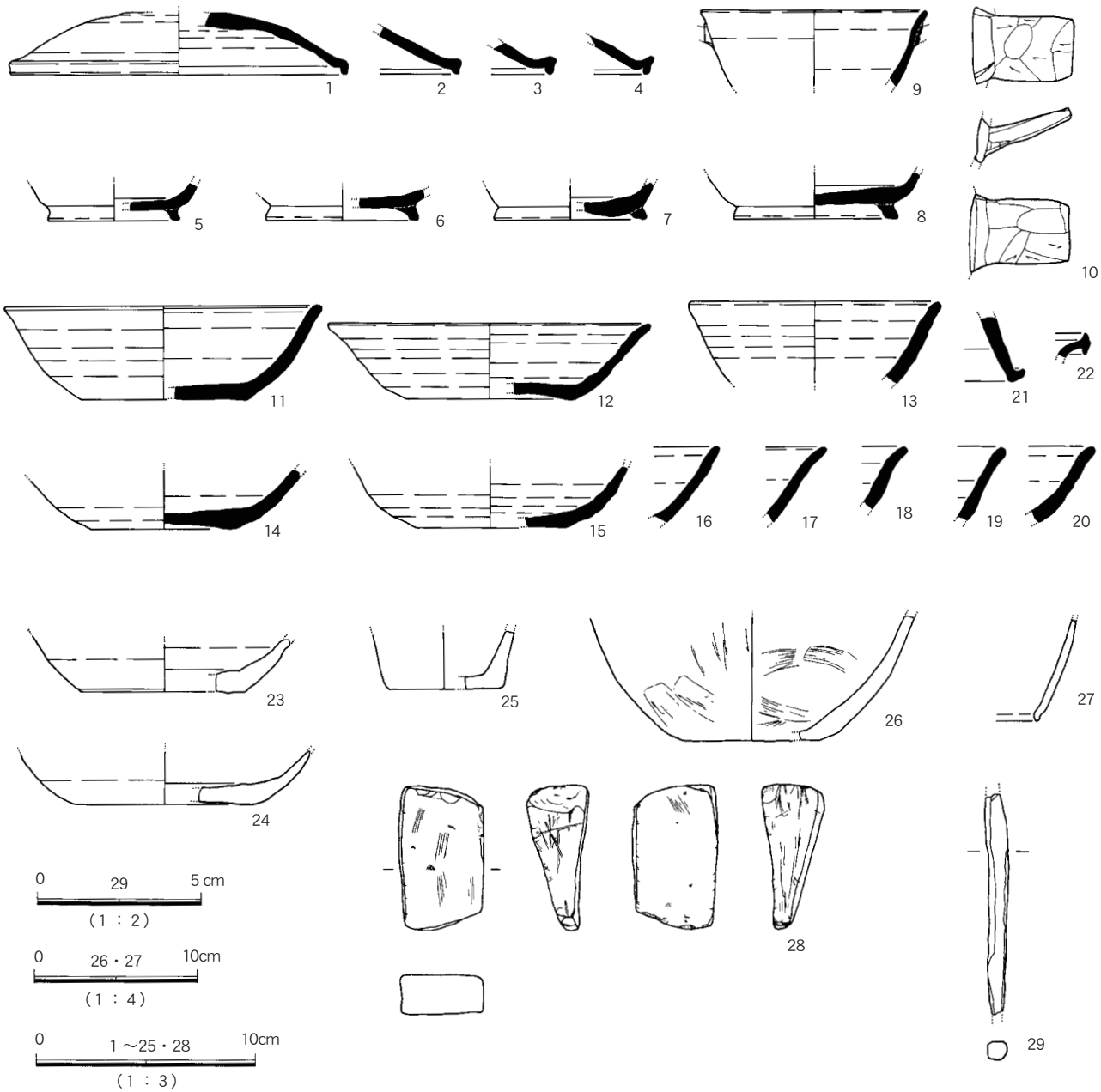
1	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化物少量、黄褐色粒含む、固くしまる
2	10YR 2/2	黒褐	シルト	焼土ブロック、黒色シルト、黄褐色シルト粒含む
3	10YR 2/2	暗褐	細砂	黒褐色シルト粒少量含む、やわらかいが良くしまる
4	10YR 2/1	黒	シルト	炭化物少量、黄褐色シルト粒微量含む、固くしまる
5	7.5YR 2/2	黒褐	シルト	焼土、炭化物、土器片、黄褐色細砂含む、焼土化
6	10YR 3/4	暗褐	細砂	黒色シルト粒少量含む、固くしまる
7	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒色シルト微量含む、固くしまる
8	10YR 3/3	暗褐	細砂	やわらかいが良くしまる
9	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化物、黒色シルト、黄褐色シルトブロック含む、固くしまる

第68図　ST9559

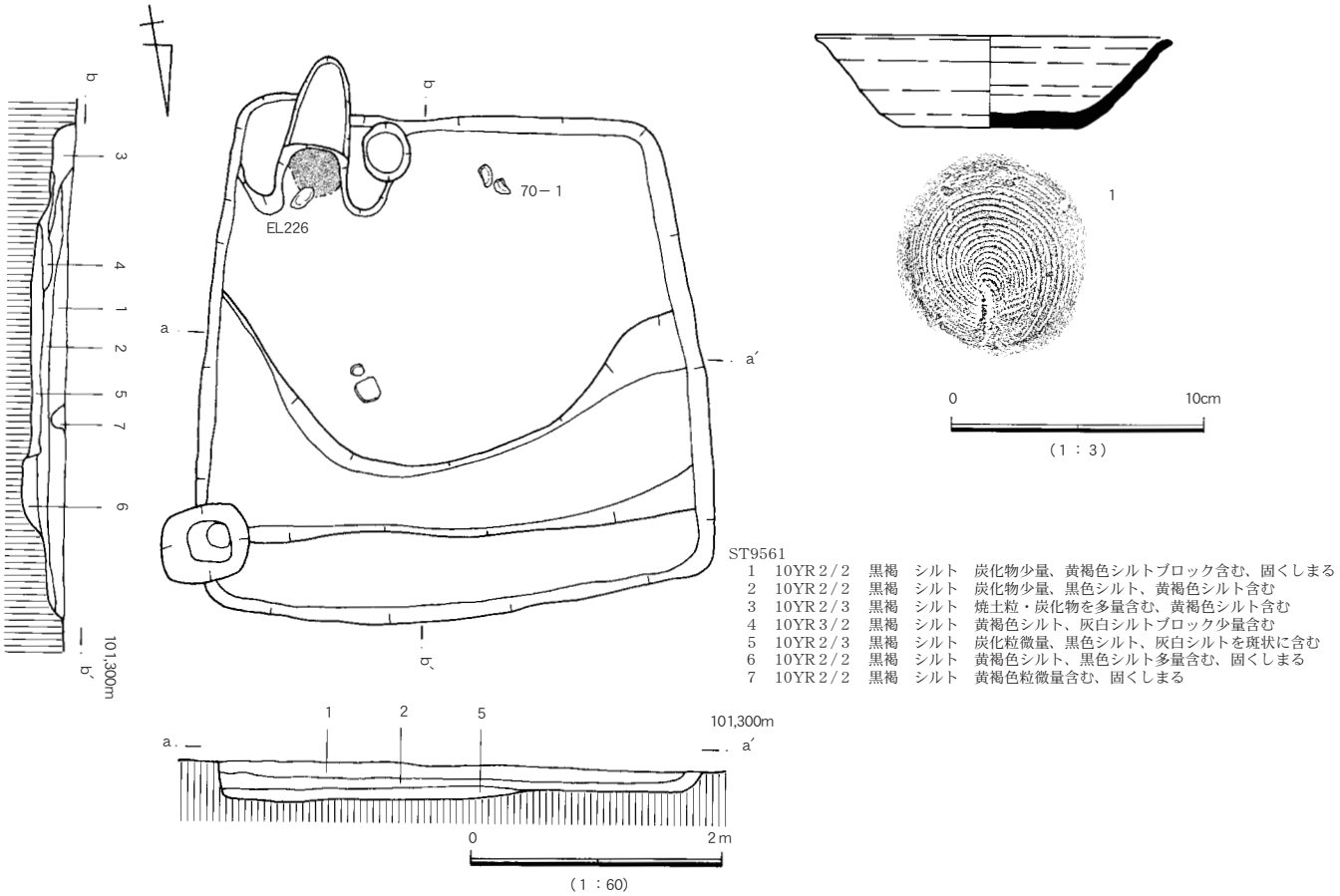
みのある体部を有し、口縁部は僅かに外反する。身は浅く、口径、底径が大きい。内外面とも顕著な使用痕が認められる。12は身が浅く、体部は直線的で開きが大きい。13、16～20は丸みを帯びた体部から僅かに口縁部が外反する形態である。14､15は内面の使用痕が顕著である。

69－21は円面硯の脚部、22は口縁端部を「T」字状に作り出した小型甕の資料と考えられる。 69－23、26は土師器小型甕である。23は底部が肥厚し、26は底部から体部にかけて全体的に厚い。外面にはケズリ調整が認められるが、２次火熱を受けており器面は荒れ、一部剥落する。

69－24は回転糸切りの土師器坏底部である。底部は肥厚し径は大きい。体部は薄く丸みをもって立ち上がる。器面は磨滅し、特に外面の調整は不明瞭である。



第69図　ST9559出土遺物



第70図　ST9561　出土遺物

表21　ST9561出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
70	1	須恵器	無台坏	141	70	37	4.5	緻密、骨針	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	

69－25は縄文土器の底部である。胎土には粗砂を多量混入する。

69－28は砥石である。平面及び横断面の形状は長方形だが、縦断面は楔状を呈する。欠損部を除く５面で使用されている。表裏面は滑らかな光沢があり、両側面には深い擦痕が見られる。

69－29は鉄製品で、上下端を欠くが釘と考えられる。断面形は四角形である。

これらは、須恵器無台坏等の特徴により、９世紀前半から中頃にかけての所産と考えられる。

【ST9561】第70図

24－188・189グリッドに位置する。主軸方向はN－175°－Eである。平面形は東西3.4m、南北3.5mの方形を呈する。壁はほぼ垂直で、確認面からの深さは20cm～30cmを測る。カマドは竪穴内に燃焼部を設ける構造である。右袖部はSB567のEB568によって壊されている。床は地山を利用し、北側に高さ約10cm、幅60cm程の段差が作られている。柱穴は確認できない。覆土はST9559と同様に、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物は、須恵器蓋、無台坏、有台坏片等55点、黒色土器、土師器甕片等122点である。

70－1は回転糸切りの須恵器無台坏である。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。内外面とも使用痕が顕著である。底径、口径が大きく、９世紀前半代の様相が見られる。

【ST9590】第71図

44－206グリッドに位置する。主軸方向はN－166°－Wである。平面形は、南側が調査区外にあたるため南北1.8mまでの検出にとどまったが、東西長は3.4mあり、方形を呈しているものと推測される。壁は垂直に近い角度があり、確認面からの深さは約20cmである。カマドはその大半が南辺に設けられていることから、本竪穴のカマドも南辺にあると考えられる。貼床は無く、地山を床面とし、堅く締っている。柱穴は確認できない。覆土は自然堆積である。

出土遺物は、須恵器無台坏、有台坏、長頸壷、甕片等16点、黒色土器蓋、無台坏片等２点、土師器甕片等40点の計58点である（第71図）。

71－１は黒色土器蓋の口縁部である。内外面ともに黒色処理される。内面にはミガキを認められるが、外面は磨滅しているため調整は不明である。

71－２の須恵器は、体部の立ち上がりから器高が高いタイプと推定される。口縁部は屈曲し、比較的シャープな端部を作り出す。

71－３、４、７は回転糸切り、５、６はヘラ切りの須恵器有台坏である。３は身が深く、体部から口縁部まで直線的で、大きめの底部には低い台が貼付く。４は身が浅く、内湾する体部から外反する口縁部に至る。細い台は大きめの底部の外周に「ハ」の字状に貼付けられる。５は小さい底部に低い台が貼付く。体部は丸みをもち、下端では回転ヘラケズリ調整が施される。底部の器厚が均一でないことから内面は傾斜をもつ。これらの特徴から双耳坏の可能性も考えられる。６は底径が大きく、断面四角形の高い確りした台が貼付けられる。７は大きい底径に、端部を外側に強く引出した特徴的な台が貼付けられる。回転糸切りの痕跡は目が粗く大きい。体部は内湾気味に大きく開く。

71－８は耳部の貼付け痕が残る双耳坏である。口径、底径とも小さいが、器厚は全体的に厚い。体部から口縁部まで直線的に開く。台は低く、断面は三角である。耳貼付け部から口縁部まで焼成時の歪みが見られる。器面には黒色の吹出しが認められる。

71－９～16は須恵器無台坏である。底部が残存するものは全て回転糸切り後無調整である。底径は、９と13を除いて約70㎜あり、大きめである。９は身が浅く、体部が大きく開く。口

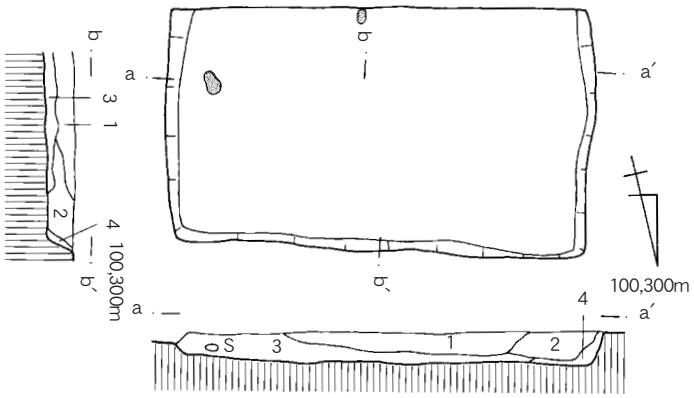
表22　ST9590出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	1	黒色土器	蓋				4	緻密	良	2.5Y4/1黄灰		ミガキ		
	2	須恵器	蓋				5	細砂混入	良好	N4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	有台坏	(134)	(72)	57	4	緻密	良好	N3/1暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	有台坏	(124)	(74)	48	4	細砂混入	良好	N3/1暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	有台坏		66		5	細砂混入	良	2.5GY6/1オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	6	須恵器	有台坏		(87)		5	砂粒混入、骨針	良	10YR7/3にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	7	須恵器	有台坏		(88)		4.5	緻密	良好	2.5YR3/1暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	8	須恵器	双耳坏	(110)	66	57	7	砂粒混入	良	2.5Y3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
71	9	須恵器	無台坏	(136)	66	35	4	緻密	良好	2.5GY6/1オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	10	須恵器	無台坏	(134)	(72)	37	5	緻密	良	5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	11	須恵器	無台坏	(138)	70	31	6	砂粒混入、骨針	良好	7.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	12	須恵器	無台坏				4	細砂混入	良好	N2/黒	ロクロナデ	ロクロナデ		
	13	須恵器	無台坏		62		7	緻密	良	2.5Y7/3浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	内面に指紋
	14	須恵器	無台坏		(70)		5	細砂混入	良好	7.5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	15	須恵器	無台坏		(70)		6	緻密	良好	7.5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	転用硯
	16	須恵器	無台坏				5	緻密	良好	10YR2/1黒	ロクロナデ	ロクロナデ		
	17	須恵器	甕				7	緻密	良好	10YR5/1褐灰	タタキ、カキメ	アテ痕		

縁部は屈曲し外側に引出される。10の口縁部も外側に強く引出され、小さな玉縁状を呈する。13の回転糸切り痕は他と比べて目が粗く大きい。13、14、15は底部内面の使用痕が顕著である。

71－17は外面は平行タタキ後カキメが施され、内面は青海波のアテ痕が残る須恵器甕である。

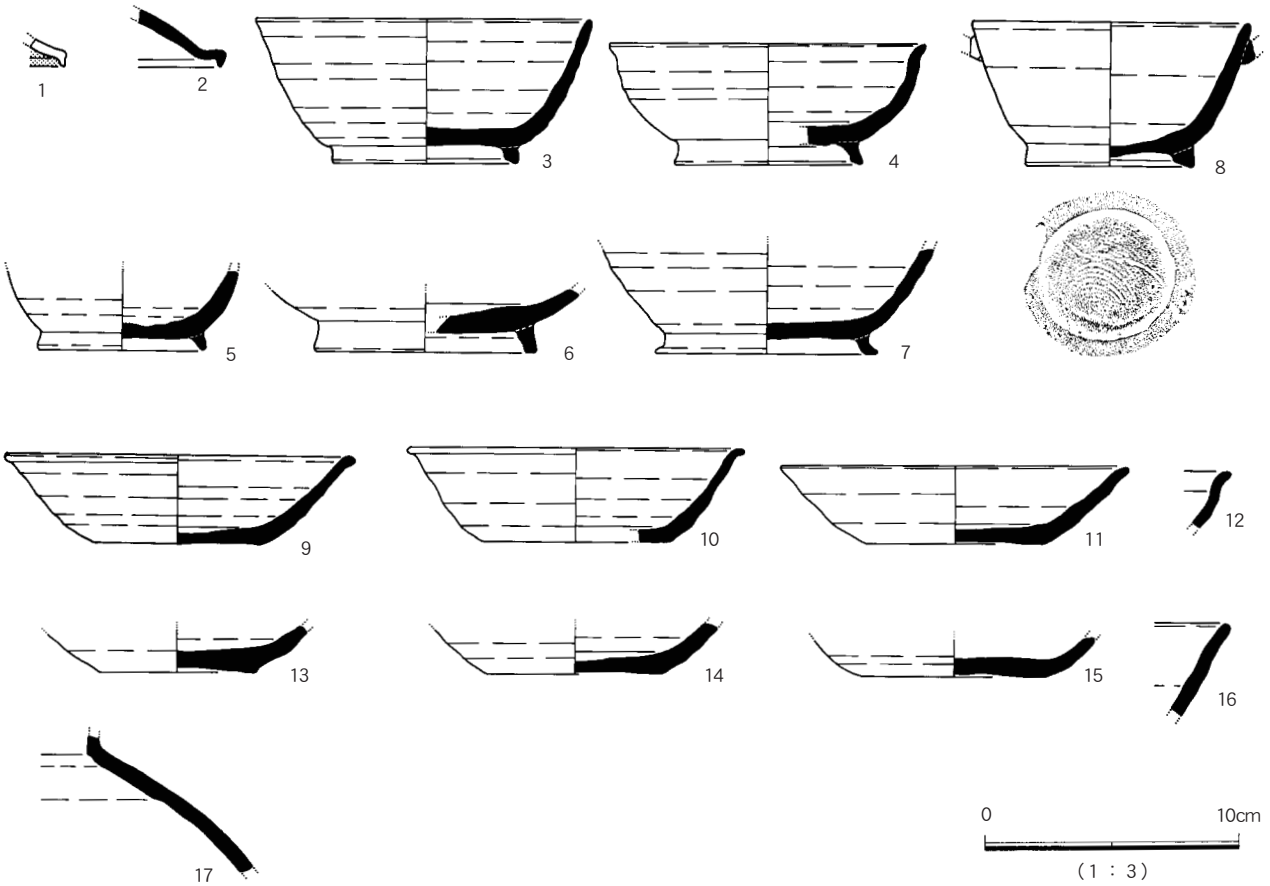
これらの土器は、有台、無台両者とも回転糸切りを主体とするが、底径、口径とも大きく、器高が低い等の特徴から、９世紀前半代の所産と考えられる。



ST9590

1	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐シルトブロック状に含む
2	10YR２/２	黒褐	シルト	ほぼ均質、固くしまる
3	10YR３/３	暗褐	シルト	ほぼ均質
4	10YR４/３	にぶい黄褐	シルト	暗褐シルト含む、固くしまる

0　2m
（1：60）



0　10cm
（1：3）

第71図　ST9590　出土遺物

【ST9591】第72図

43－201・202グリッドに位置する。主軸方向はN－180°－Eである。南側が調査区外にあたるため南北長は３ｍまでの検出にとどまる。平面形は、東西が3.8ｍであることから、南北もほぼ同様の長さをもつ方形を呈するものと推測される。壁は垂直に近く、確認面からの深さは最深部でも約20㎝で、多くは約10㎝と極めて浅い。カマドは南辺に設けられていたものと推定される。地山を床面とし、堅く締っている。竪穴内に３基のピットが見られるが、中世以降に掘られたものと考えられ、竪穴の柱穴にはあたらない。覆土は、遺構の残存が悪く不明瞭ではあるが、自然堆積によるものと推測される。

出土遺物は、須恵器が蓋、無台坏、長頸壷等14点、土師器甕片が10点である。

72－１～３は須恵器蓋である。１の口径は小さく、108㎜である。天井部は回転ヘラケズリが施され、体部との境を作り出す。口縁端部は細く内傾する。つまみは中央部が僅かに突起するが形骸化した扁平なものである。２も天井部の回転ヘラケズリにより、体部との境が作られる。体部は丸みがあり、屈曲した口縁部は僅かに内傾する端部をもつ。３のつまみは中央部が突起するものの、高さが３㎜しかなく、著しく扁平である。天井部は径70㎜の小さな回転ヘラケズリにより作られるが、傾斜があるため体部との境は不明瞭である。口縁部はシャープさを欠き、端部は丸くなる。内面には焼成時のひびが認められる。

72－４～９は須恵器無台坏である。４～６は回転糸切り後無調整である。４は底径､口径が小さく、身は深い。体部下半は丸みをもち、上半は弱く外反する。５は身も深く、口径も大きい。体部上半から弱く外反する。６は身が浅いが、口径、底径ともに大きい。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部近くで僅かに外反する。７は体部からほぼ直線的に口縁部に至るもの。８は口縁部が僅かに外反するもの。９の口縁部は小さく屈曲し、内傾するなどの特徴が見られる。

72－10は須恵器の小型の壷と考えられる。頸部及び底部は欠損するため全形は不明だが､底部には高台を有し、長い頸が付けられたものと推測される。肩は大きく張り出し、体部との境に最大径をもつ。内面はロクロ目の凹凸が顕著である。

72－11は平底の須恵器甕である。底部にはタタキの後ナデ調整の痕跡が認められる。体部外面はタタキの後ロクロナデが行われ、さらに下半には縦方向のケズリが施される。内面はロクロナデの後、ヘラ状工具によるナデが施され、器面に凹凸はあるが、アテ痕は認められない。

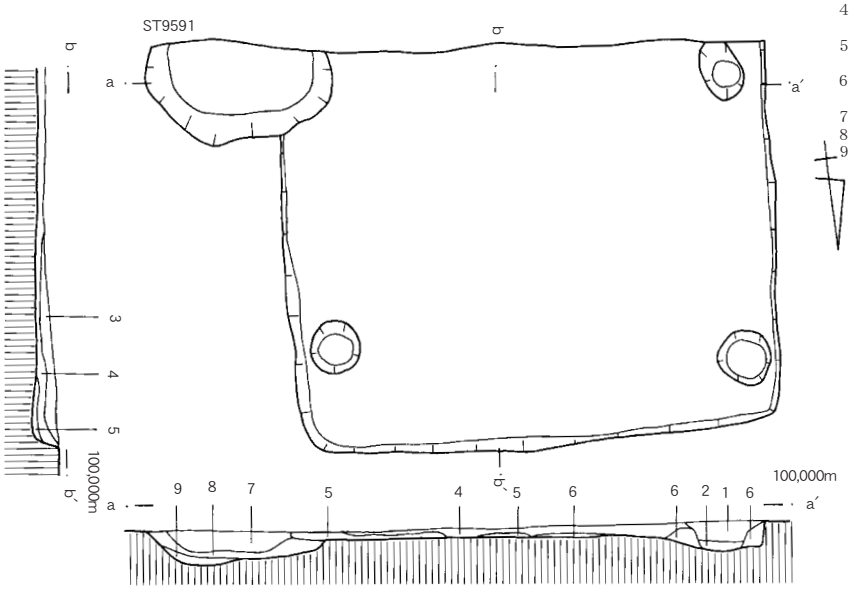
無台坏の口、底径の小型化や身の深さ、蓋の形状等から９世紀中頃に近い時期が想定される。

表23　ST9591出土土器観察表

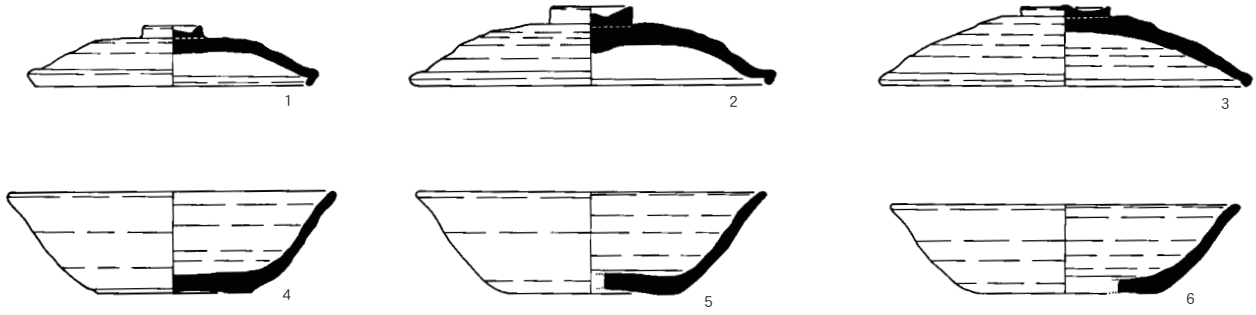
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	1	須恵器	蓋	108		24	5	緻密	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋	144		31	5	緻密	良好	N6/灰	ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ		
	3	須恵器	蓋	142		31.5	5	緻密	良	2.5Y7/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	4	須恵器	無台坏	130	60	40	4	粗砂混入	良	5BG6/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	無台坏	(138)	(64)	40	4	砂粒混入	良好	10Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
72	6	須恵器	無台坏	(138)	(74)	35	7	細砂混入	良好	5B5/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	7	須恵器	無台坏	(140)			4	細砂混入	良	5B5/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	8	須恵器	無台坏				4	緻密	良	7.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	9	須恵器	無台坏				4	細砂混入	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	10	須恵器	壷				6.5	砂粒混入	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	11	須恵器	甕				10	粗砂混入	良好	2.5Y5/3黄褐	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､ﾀﾀｷ､ﾅﾃﾞ	ロクロナデ、ナデ		

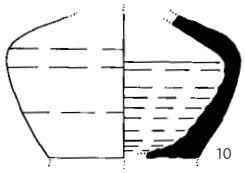
ST9591

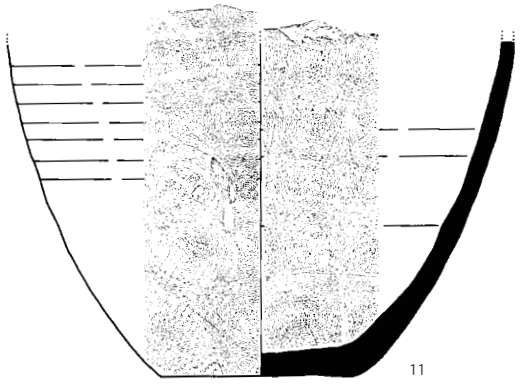
1	10YR2/2	黒褐	シルト	均質、固くしまる
2	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐微砂含む、固くしまる
3	10YR2/3	黒褐	シルト	にぶい黄褐シルトが斑状に含む、固くしまる
4	10YR2/3	黒褐	シルト	ほぼ均質、部分的に暗褐シルトが斑状に含む
5	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐シルトをブロック状に含む、固くしまる
6	10YR4/4	褐	シルト	ほぼ均質だがしまりがない
7	10YR2/2	黒褐	シルト	均質、固くしまる
8	10YR2/3	黒褐	シルト	均質、固くしまる
9	10YR4/3	にぶい黄褐	微砂	均質、しまっているがもろい



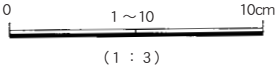
（1：60）







（1：4）



（1：3）

第72図　ST9591　出土遺物

【ST9607】第73図

29・30－196・197グリッドに位置する。主軸方向はN－157°－Wである。東西長5.1m、南北長4.8mを測り、やや東西に長い方形を呈する。壁の傾斜はほぼ垂直に近く、確認面からの深さは約35cmである。カマドは南辺の西寄りに設けられている。竪穴内に燃焼部をもつ構造で袖部の遺存状態も比較的良好である。面取りされた石材（第76図５）を用いて構築したものと推測される。床は全面に貼床されるが、必ずしも全面が堅く締った状態ではない。柱穴は竪穴内北寄りに２基確認された。北辺から1.5m南で、東辺から1.2m、西辺から1.4mの位置にあり、柱間距離は2.1mを測る。平面形は長軸約60cm、短軸約40cmの南北に長い長楕円形を呈する。深さは約50cmである。同様な構造の竪穴建物跡にはST899、9826、9870があげられる。

出土遺物は須恵器蓋11点、無台坏62点、有台坏６点、双耳坏１点、長頸壷１点、甕56点、大甕10点の147点。黒色土器３点、土師器無台坏１点、有台坏１点、甕165点で、総破片数317を数える（第75・76図）。出土状況は、第74図に示したようにカマドの周辺よりも北側の柱穴周辺に集中する傾向が認められる。

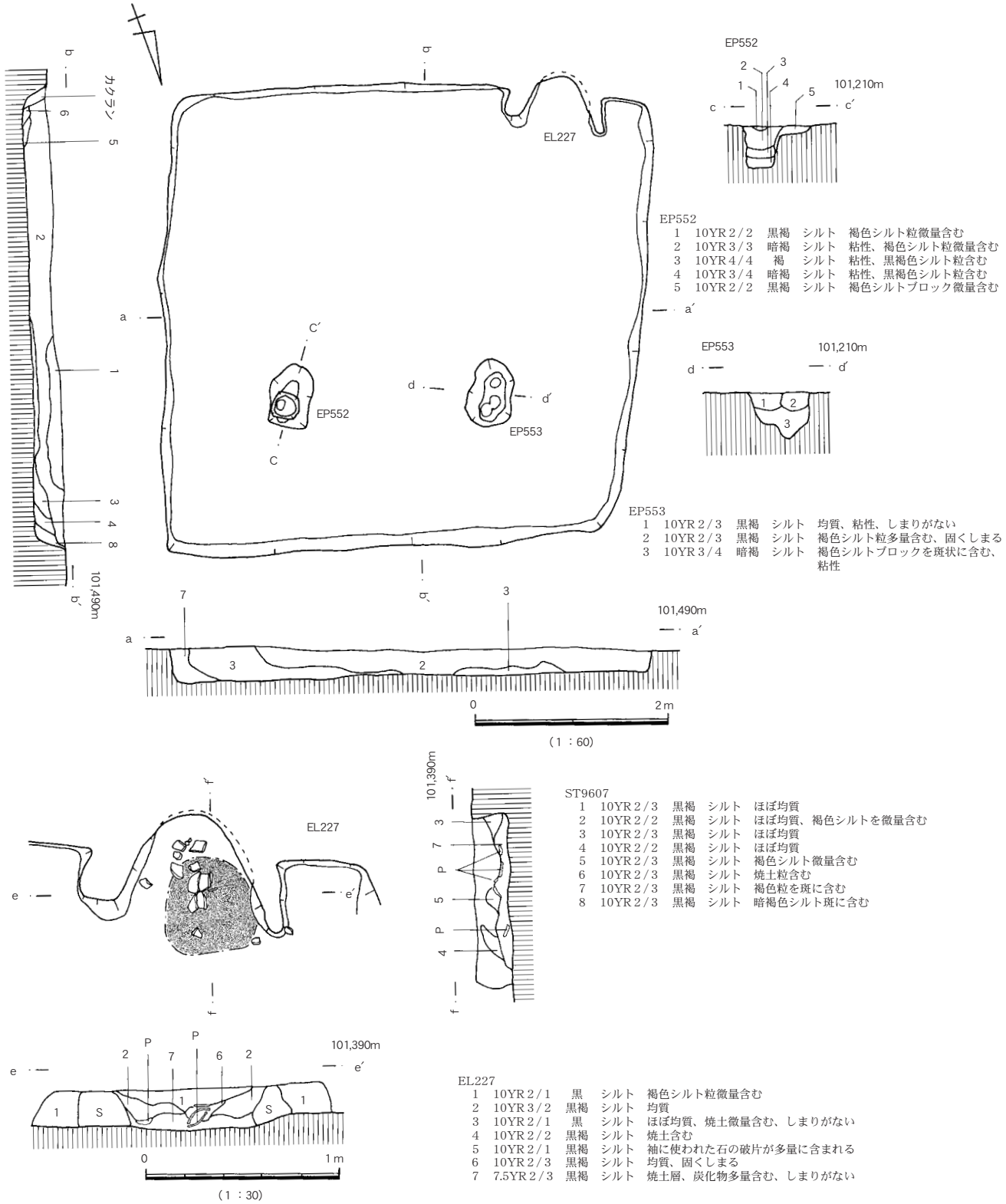
75－１は天井部に回転ヘラケズリが施されるものの、僅かに回転糸切りの痕跡をうかがうことができる。形状は扁平で、天井部と体部の境は不明瞭である。口縁端部は内側へ折り曲げられる。75－２は天井部から体部にかけて丸みをもつもので、つまみはリング状を呈する。

75－３はヘラ切り、４～７は回転糸切りの有台坏である。３は口径、底径とも大きく、身は浅い。４は３に比べ口径が大きく、身も深くなる。５、６はさらに口径も小さくなり、身が深くなる。この２点は、厚く重量感のある高台等の特徴から同一工人の手によるものと推測される。７は口径が大きく、身は浅い。体部外面はロクロ目の凹凸が顕著に見られる。

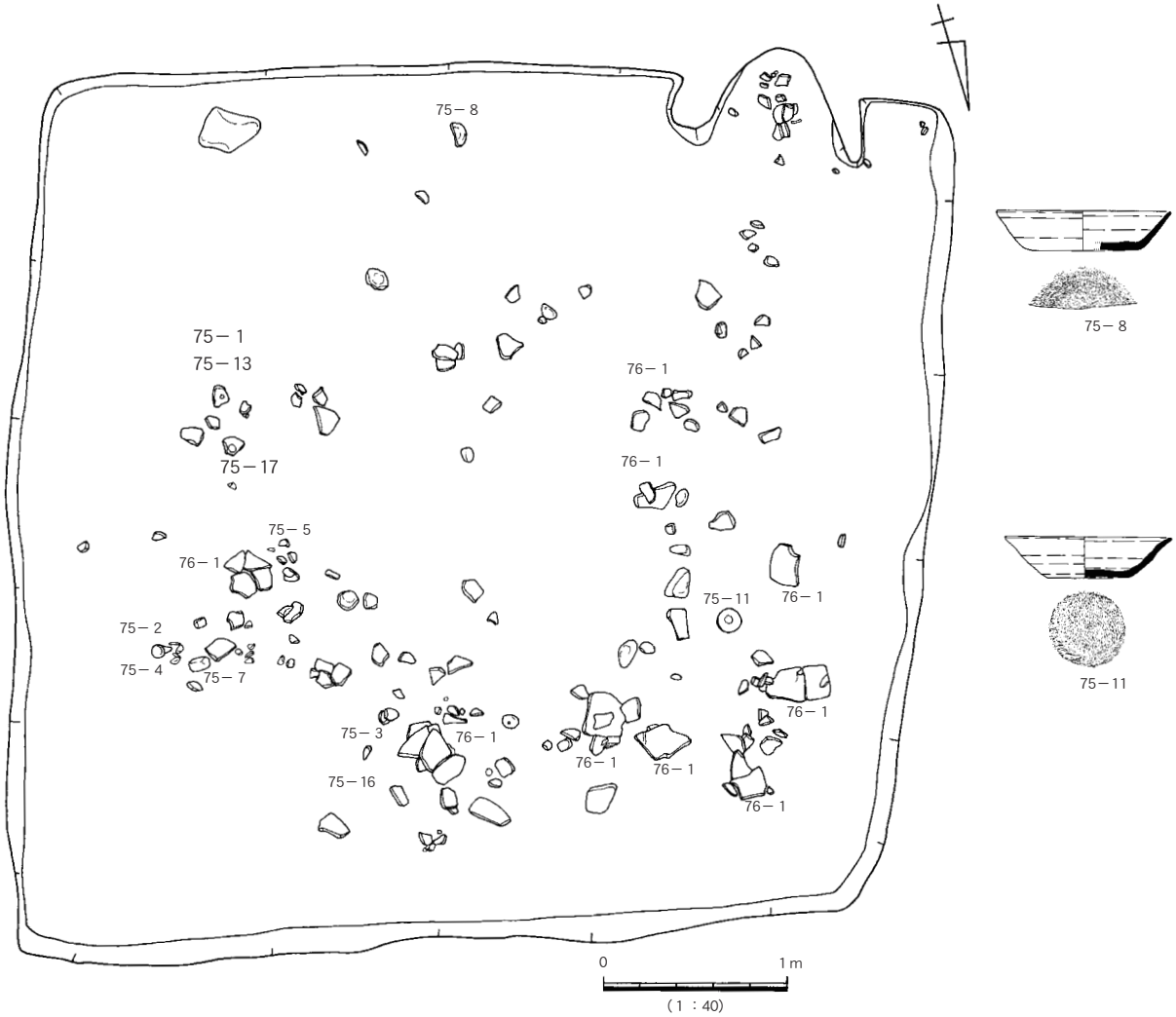
75－８、９はヘラ切り、10～17は回転糸切り後無調整の須恵器無台坏である。８、９は口径、底径とも大きく、身は浅い。10は口径が小さく、身も浅い。口縁部は強く外反する。11～17には、口径、底径が比較的大きく、身の深さが30㎜未満のものと、口径が小さく、身の深さが30㎜をこえるものとが見られる。特に17は、体部の開きが小さく身が深い特異な形態である。

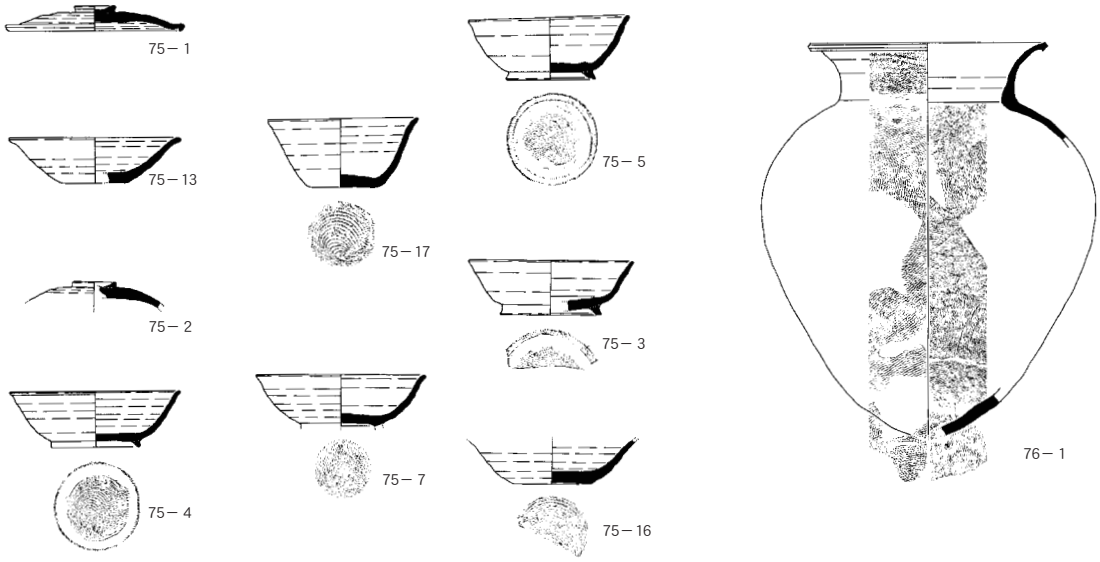
表24　ST9607出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
75	1	須恵器	蓋	(134)		20	6	緻密	良好	5Y6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋				8	細砂混入	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	有台坏	(130)	(80)	43	4	砂粒混入、骨針	良好	5GY7/1明オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	有台坏	(134)	70	44	4	砂粒混入、骨針	良好	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	有台坏	126	72	52	5	砂粒混入、骨針	良好	2.5Y2/1黒	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	RP109、RP167
	6	須恵器	有台坏	(124)	68	51	4	砂粒混入	良好	N2/黒	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	7	須恵器	有台坏	(132)			4	緻密、骨針	良好	10YR5/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	ST9608、ST9681
	8	須恵器	無台坏	(142)	(92)	32	4	緻密、骨針	良	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	9	須恵器	無台坏	(146)	(80)	34	3.5	粗砂混入	良	2.5Y7/3浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	10	須恵器	無台坏	(120)	60	30	3	粗砂混入	良	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	11	須恵器	無台坏	135	60	33	4	粗砂混入、骨針	良好	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	12	須恵器	無台坏	(140)	64	37	4	砂粒混入	良	5Y5/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	13	須恵器	無台坏	(136)	(50)	36	5	粗粒混入	良好	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	14	須恵器	無台坏	(139)	(70)	38	4	緻密	良	5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	15	須恵器	無台坏	128	56	42	4	緻密	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	16	須恵器	無台坏		60		5	細砂混入、骨針	良好	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	17	須恵器	無台坏	118	54	54	4	緻密	良	10YR4/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
76	1	須恵器	甕	(500)			15	砂粒混入、骨針	良好	N4/灰	タタキ	アテ痕		火膨れ
	2	黒色土器	有台坏	(144)	(65)		5	緻密	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ミガキ	回転糸切り	
	3	黒色土器	無台坏		(70)		8	緻密	良	10YR7/6明黄橙		ミガキ	回転糸切り	
	4	土師器	甕	160	56	136	7	砂粒混入	良	7.5YR8/3浅黄橙	ケズリ	ロクロナデ、ハケメ	ケズリ	

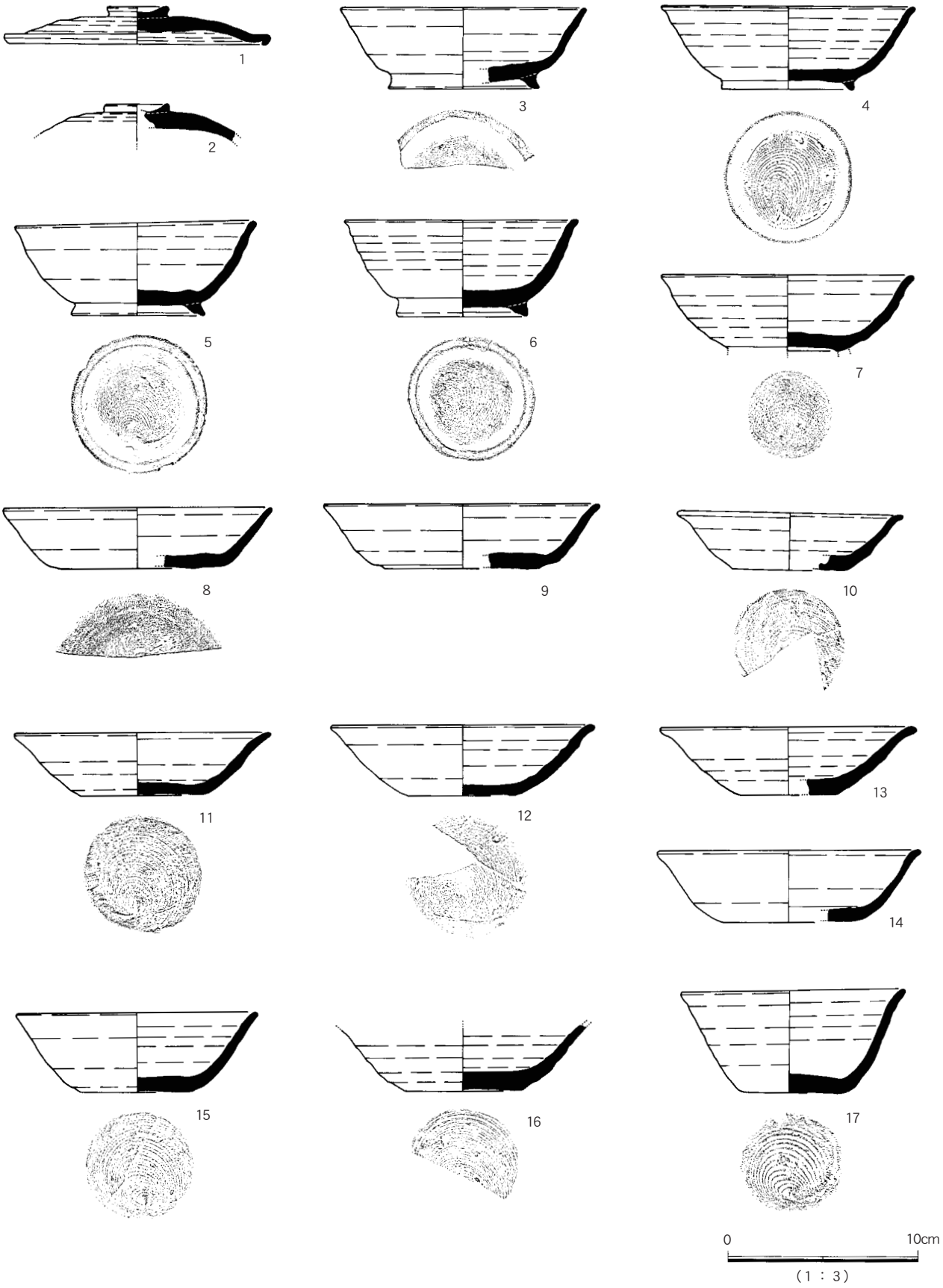

EP552
101,210m
EP552
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む
2 10YR3/3 暗褐 シルト 粘性、褐色シルト粒微量含む
3 10YR4/4 褐 シルト 粘性、黒褐色シルト粒含む
4 10YR3/4 暗褐 シルト 粘性、黒褐色シルト粒含む
5 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロック微量含む
EP553
101,210m
EP553
1 10YR2/3 黒褐 シルト 均質、粘性、しまりがない
2 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルト粒多量含む、固くしまる
3 10YR3/4 暗褐 シルト 褐色シルトブロックを斑状に含む、粘性
カクラン
EL227
EP552
EP553
101,490m
0
2m
(1：60)
ST9607
1 10YR2/3 黒褐 シルト ほぼ均質
2 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質、褐色シルトを微量含む
3 10YR2/3 黒褐 シルト ほぼ均質
4 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質
5 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルト微量含む
6 10YR2/3 黒褐 シルト 焼土粒含む
7 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色粒を斑に含む
8 10YR2/3 黒褐 シルト 暗褐色シルト斑に含む
EL227
101,390m
EL227
1 10YR2/1 黒 シルト 褐色シルト粒微量含む
2 10YR3/2 黒褐 シルト 均質
3 10YR2/1 黒 シルト ほぼ均質、焼土微量含む、しまりがない
4 10YR2/2 黒褐 シルト 焼土含む
5 10YR2/1 黒褐 シルト 袖に使われた石の破片が多量に含まれる
6 10YR2/3 黒褐 シルト 均質、固くしまる
7 7.5YR2/3 黒褐 シルト 焼土層、炭化物多量含む、しまりがない
0
1m
(1：30)

第73図　ST9607





第74図　ST9607遺物分布図

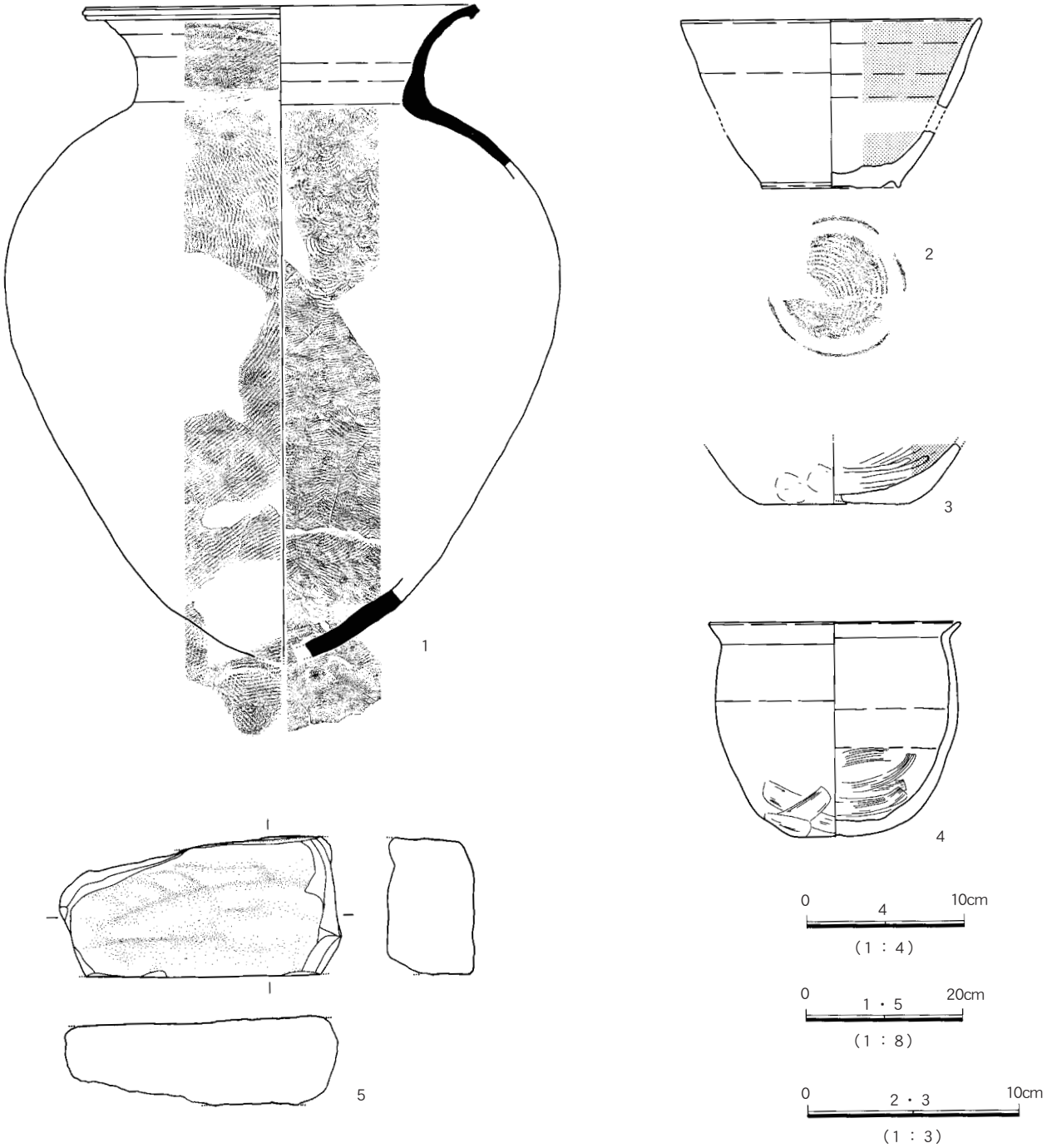


第75図　ST9607出土遺物 1

76－１は須恵器大甕である。体部上半に最大径を有し、73㎝を測る。底部にかけて窄み、卵型を呈する。外面は平行タタキ、内面は上半が青海波、下半では平行のアテ痕が残る。

76－２の黒色土器有台坏は、体部下端に細い高台を貼付けるが、低いため底部も接地面となる。76－３も黒色土器であるが、器厚は厚く、鉢状の大型製品と考えられる。４は火熱による磨滅が著しく器面が荒れるが、僅かに外面のケズリと内面のハケメ調整が認められる。

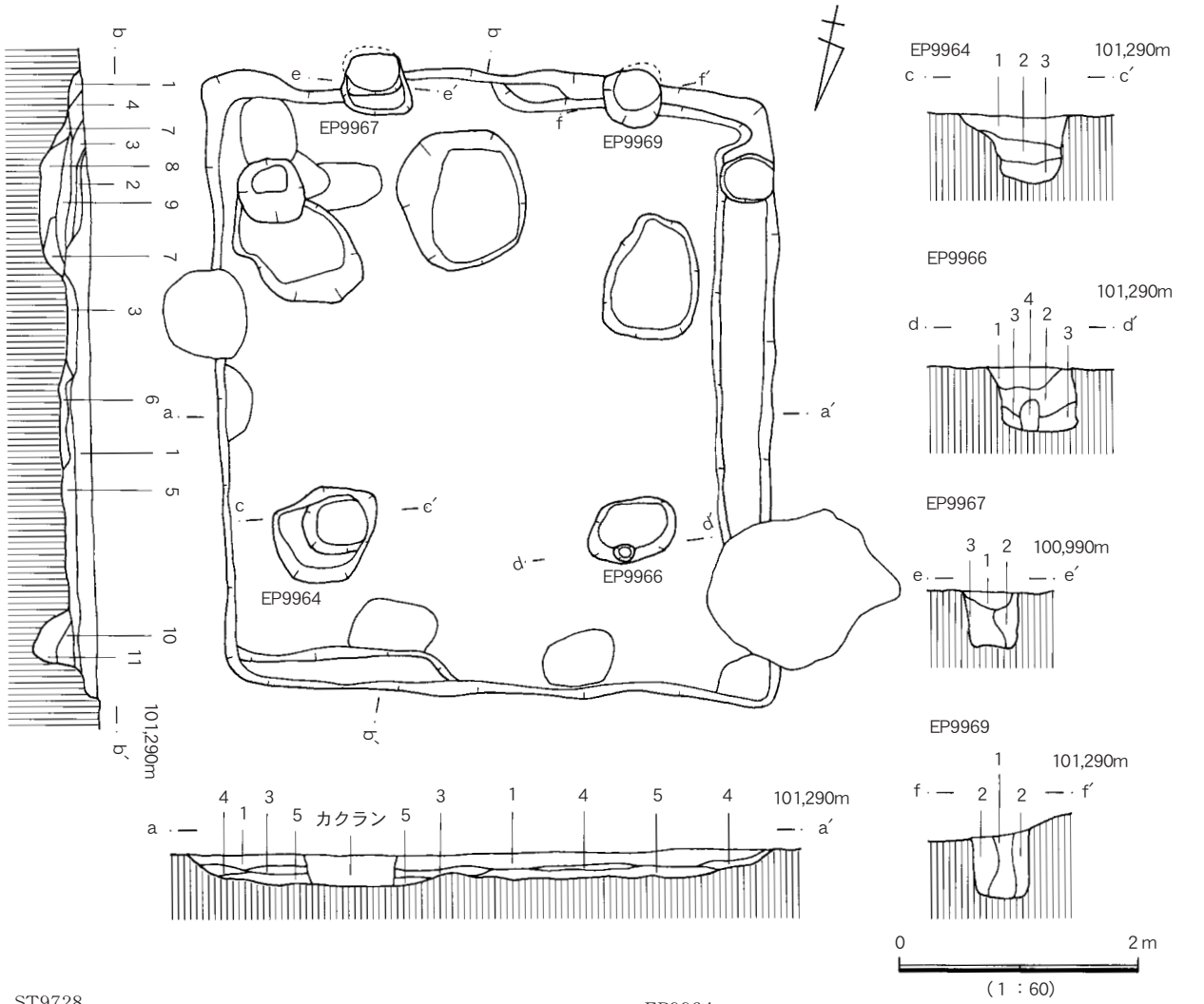
一部古相も見られるが、有台坏の形状や径の小さい無台坏等から、９世紀中頃と考えられる。



第76図　ST9607出土遺物２

【ST9728】第77図

24・25－193・194グリッドに位置する。主軸方向はN－173°－Eを測る。平面形は、東西5.3m、南北5.1mの方形を呈する。確認面からの深さは約30cmで壁は急な所が多い。カマドは南辺東寄りに設けられたものと推測されるが、完全に壊れており焼土のみ認められる。床は全面が貼床である。柱穴は４基確認された。EP9967、9969は南辺壁際にあり約半分が竪穴外にはみだす。径約50cm、深さ約50cmを測る楕円形である。北側のEP9964、9966は北壁から約1.2m離れ深さ約60cm、長径約70cmの楕円形である。SB995→ST9728の新旧関係がある。



ST9728
1 10YR2/1 黒 シルト 砂質、均質
2 10YR2/1 黒褐 シルト 褐色シルト少量含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質
4 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロックを斑に含む
5 10YR3/2 黒褐 シルト 焼土、炭化物を含む
6 10YR2/3 黒褐 シルト 黒色シルトブロックを斑状に含む
7 10YR2/1 黒 シルト 炭化物多量、褐色シルト粒微量含む
8 10YR2/3 黒褐 シルト 焼土、炭化物多量含む
9 10YR2/1 黒 シルト 褐色シルトブロックを斑状に含む
10 10YR2/3 黒褐 シルト 黒色シルトブロックを斑状に含む
11 10YR2/3 黒褐 シルト 焼土粒多量含

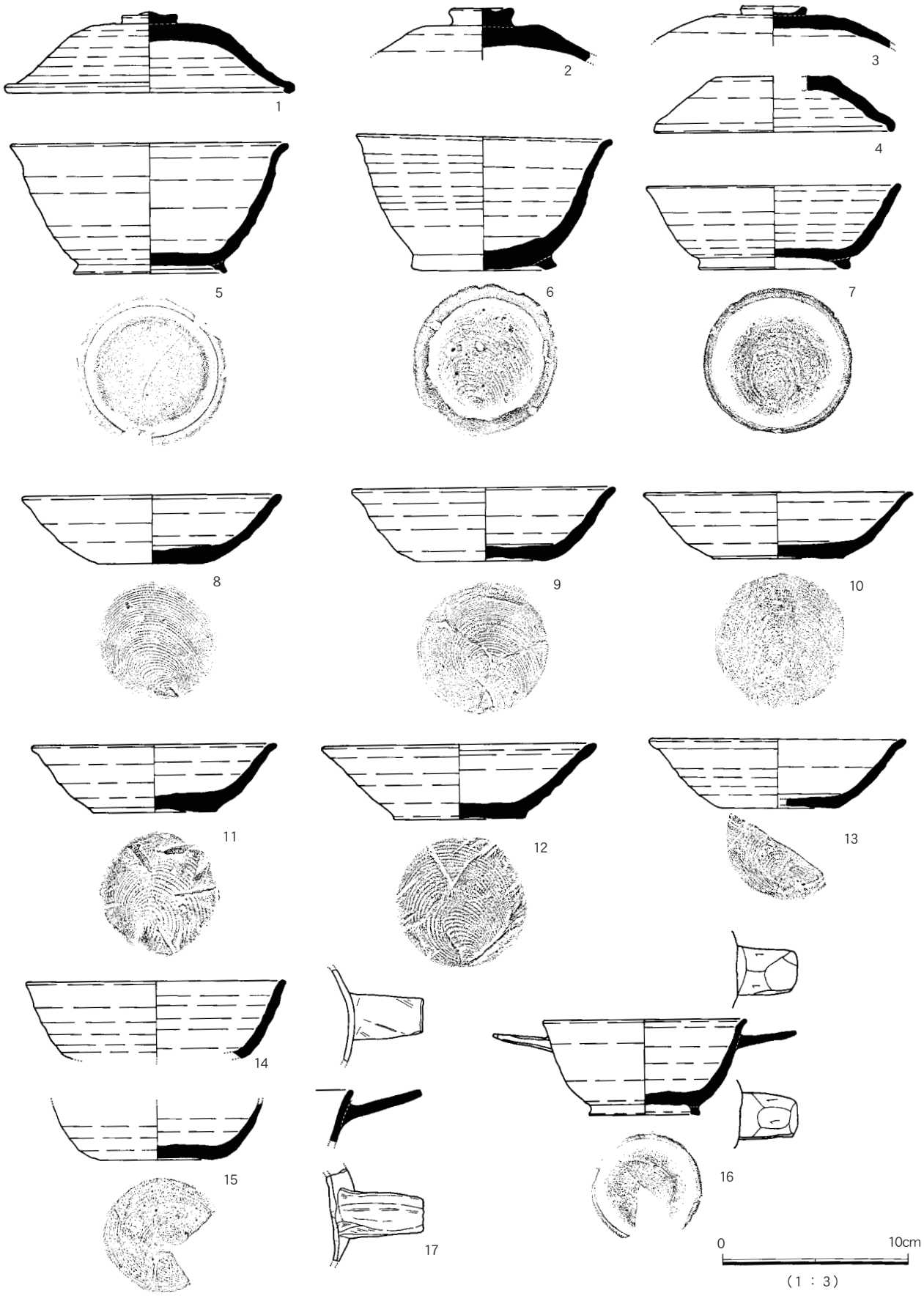
EP9964
1 10YR2/1 黒 シルト 均質
2 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロックを斑状に含む

EP9966
1 10YR2/1 黒 シルト 均質
2 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロック少量含む
4 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む

EP9967
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロックを斑状に含む
2 10YR3/2 黒褐 シルト 炭化物微量含む、しまりがない
3 10YR2/2 黒褐 シルト はば均質、しまっている

EP9969
1 10YR2/1 黒 シルト ほぼ均質、やわらかくもろい
2 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロックを斑状に含む

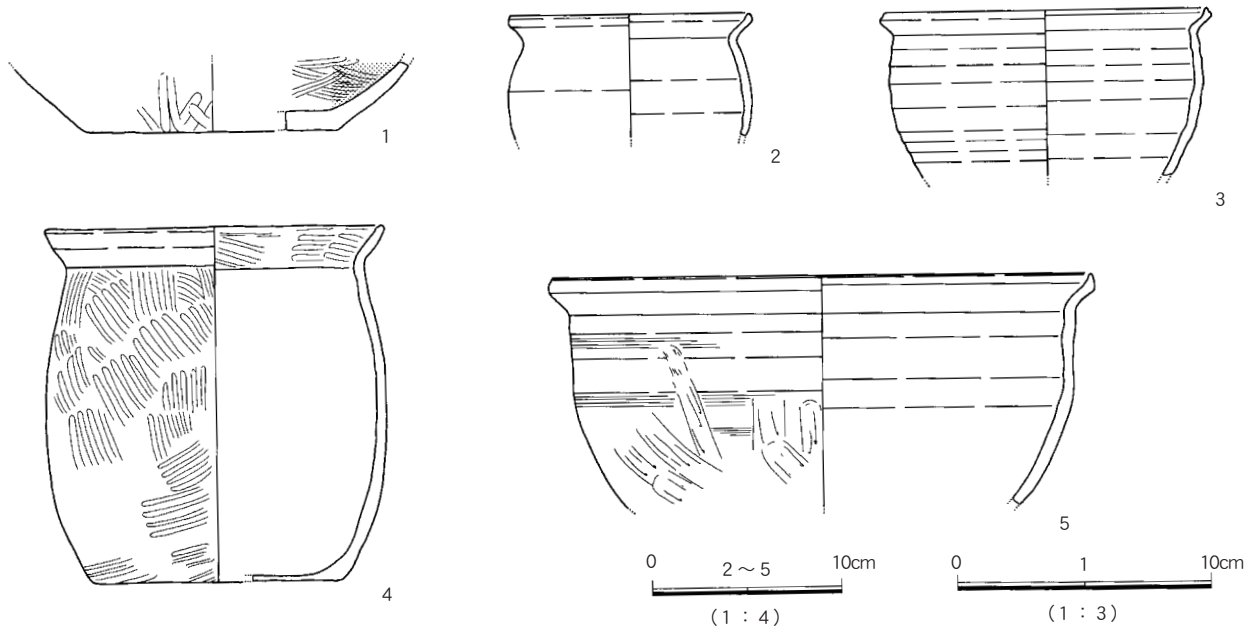
第77図 ST9728



第78図　ST9728出土遺物 1

出土遺物は、須恵器の蓋16点、無台坏71点、有台坏４点、双耳坏２点、長頸壷５点、甕12点の110点。黒色土器が５点、土師器の無台坏５点、有台坏１点、甕412点、堝１点の419点、総破片数は534点を数える（第78・79図）。

78－１～４は須恵器蓋である。１は器高が高く、体部が丸みをもち、回転ヘラケズリされた天井部との境が不明瞭である。つまみは中心部が突出するものの扁平である。口縁部は端部を内側に折曲げ丸みをもつ。２は天井部と体部の境が明瞭に見られる。回転ヘラケズリは天井部と体部の一部に施される。つまみの高さはあるが形態は扁平である。３の器厚はほぼ均一で、回転ヘラケズリが施された天井部と体部との境は僅かに傾斜が変換する。つまみはリング状である。４は器高が高く、回転ヘラケズリが施された天井部と体部との境は明瞭である。



第79図　ST9728出土遺物２

表25　ST9728出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
78	1	須恵器	蓋	(148)		43	5	細砂混入、骨針	良好	2.5GY6/オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋				5	粗砂混入、骨針	良	5Y7/灰白	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	3	須恵器	蓋				5	緻密	良	5Y6/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	4	須恵器	蓋	(128)			5.5	粗砂混入	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	5	須恵器	有台坏	(150)	83	70	5	細砂混入	良	2.5Y3/2黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	有台坏	(138)	78	71	4	緻密	良好	10YR4/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	7	須恵器	有台坏	(138)	(80)	45	4.5	砂粒混入、骨針	良好	5YR2/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	8	須恵器	無台坏	140	60	37	5	細砂混入	良	2.5Y7/2灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	9	須恵器	無台坏	142	70	39.5	4	細砂混入	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	10	須恵器	無台坏	146	70	35	4	砂粒混入	不良	7.5Y8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	11	須恵器	無台坏	(132)	64	36	4	緻密、骨針	良好	10BG4/1暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	12	須恵器	無台坏	(150)	70	41	5	緻密	良	2.5Y6/2灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	13	須恵器	無台坏	(138)	(62)	37	3	細砂混入、骨針	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	14	須恵器	無台坏	(140)			4	緻密	良	10YR3/2黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	15	須恵器	無台坏		60		4.5	細砂混入	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	16	須恵器	双耳坏	(110)	60	51	3	細砂混入	良好	N2/黒	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	17	須恵器	双耳坏				4	緻密	良好	N2/黒	ケズリ	ロクロナデ		
79	1	黒色土器	無台坏		(100)		5	砂粒混入、骨針	良	10YR4/1褐灰	ミガキ	ミガキ		
	2	土師器	甕	(130)			5	細砂混入	良	2.5YR7/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	土師器	甕	(178)			4	緻密	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	4	土師器	甕	(180)	(130)	187	6	粗砂混入	良	10YR8/4浅黄橙	ハケメ	ハケメ	木葉痕	
	5	土師器	堝	(284)			6	粗砂混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		

78－５～７は回転糸切りによる須恵器有台坏である。５は口径、底径とも大きく、身も深い。体部は開きが小さく、僅かに内湾する。口縁部は外反する。６は全体的に焼成時の歪みがある。５より小振りであるが、身の深さは同じである。形状も高台の作り以外は類似する。７は回転糸切り後、唯一ナデ調整が行われている。口径、底径が大きく、身は浅い。

78－８～13、15は全て回転糸切り後無調整の須恵器無台坏である。12は体部が外反気味に大きく開き、口縁部に至る。器高も41㎜を測る。他は口径が140㎜前後、器高が35㎜前後である。形状は、口径、底径が大きく、内湾気味の体部から、口縁部が僅かに外反するもので、身は浅く30㎜未満のものが多い。

78－16、17は双耳坏である。16は耳が口縁直下に付けられたもので、やや上方に傾くが、ほぼ水平である。表裏面、側面がケズリ調整され、薄く作られたものである。

79－１は黒色土器の坏としたが、底径が大きく、鉢状の大型品の可能性も考えられる。内外面ともミガキが入れられ。底部にはむしろ状の圧痕が認められる。

79－２～４は土師器の小型甕である。２、３は体部が丸く、最大径を中央部に有するものである。４は寸胴型で、最大径は体部下半にある。内外面とも粗いハケメによる調整である。

79－５は土師器堝で、外面はロクロナデの後下半に縦方向のケズリ調整が認められる。

器高が高い蓋、高台が低く、開きが小さい有台坏、身の浅い無台坏、双耳坏などの形状から、９世紀中頃を主体とした時期と考えられる。

【ST9816】第80図

29－202・203グリッドに位置する。主軸方向はN－102°－Eである。平面形は東西4.0m、南北4.8mの南北に長い方形を呈するが、東辺には深さ10㎝程の浅い掘り込みの張り出しがあり、この部分を加えると東西4.6mになりほぼ正方形となる。壁の傾斜は急で、確認面からの深さは約50㎝である。カマドは東辺のほぼ中央部に設けられ、竪穴内に燃焼部をもつ構造である。また、袖部の両側からは、構築材に用いたと考えられる長楕円形の自然石が、直立した状態で検出された。竪穴中央部には、径約40㎝の焼土の広がりがあり、床面も強く焼けている。貼床はされず、地山を床面とする。竪穴内に柱穴は確認できない。覆土は不安定な堆積状態を示すが、自然堆積によるものと考えられる。

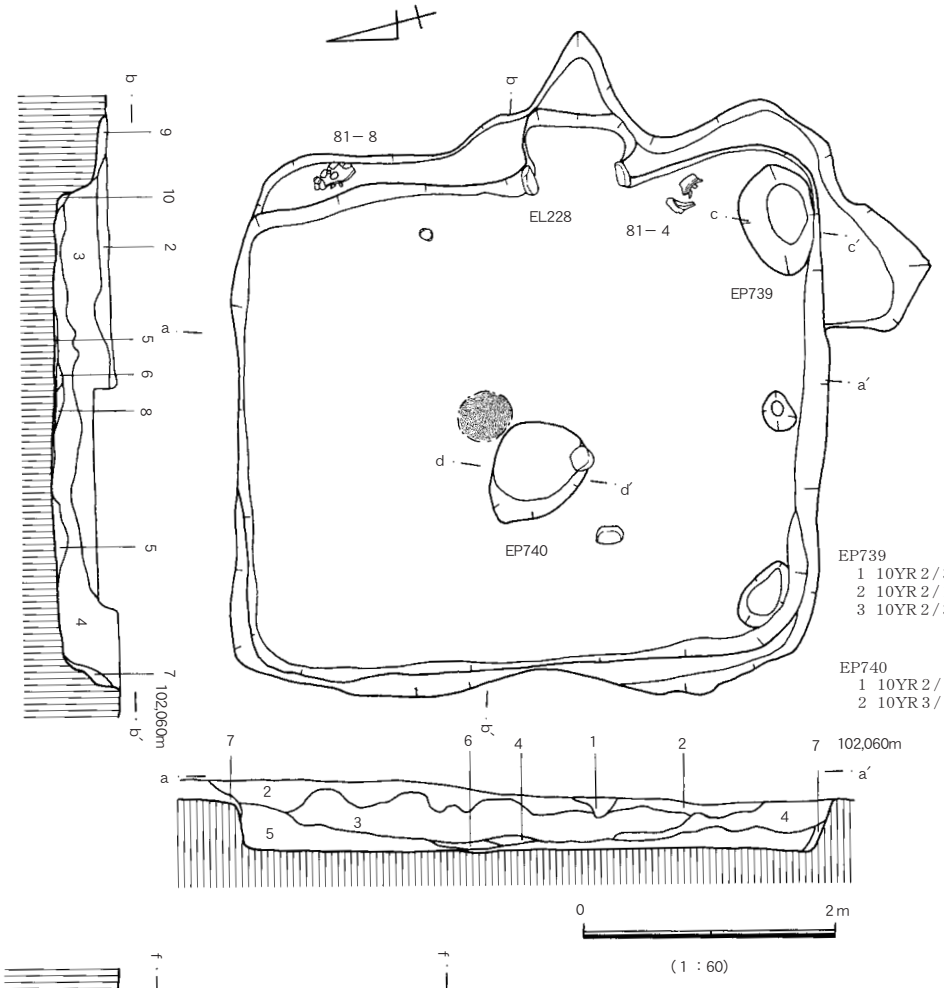
出土遺物は、須恵器無台坏７点、甕８点、土師器無台坏１点、鉢１点、甕102点である。

81－１は、回転へら切り後無調整の底部から短く直線的な体部が立ち上がり口縁部に至る。

81－２の土師器は坏として分類したが、肥厚した丸底様の底部をケズリによって僅かな平坦面

表26　ST9816出土土器観察表

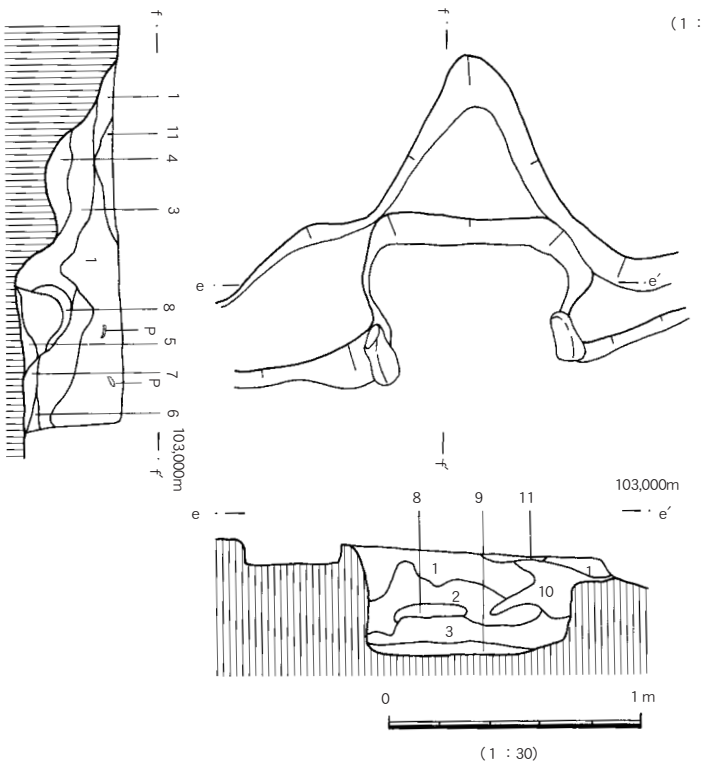
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
81	1	須恵器	無台坏	(144)	108	35	5	砂粒混入	良	2.5Y6/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	2	土師器	無台坏	(90)	5	38	4	粗砂混入	良	5YR8/3淡橙	ケズリ		ケズリ	
	3	土師器	鉢	(156)	80	87	5	砂粒混入	良	7.5YR7/8黄橙	ロクロナデ,ミガキ,ケズリ	ロクロナデ、ミガキ	ミガキ	
	4	須恵器	甕	176			8	砂粒混入	良	10YR6/2灰黄褐	タタキ、ナデ	アテ痕、ナデ		
	5	土師器	甕	(180)	(110)	168	5	粗砂混入	良	5YR5/8明赤褐	ハケメ、ナデ	ハケメ		
	6	土師器	甕	(206)			6.5	細砂混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	7	土師器	甕	240			10	粗砂混入	良	10YR8/3浅黄橙	ハケメ	ハケメ		
	8	土師器	甕	(232)	(82)	354	8	粗砂混入	良	10YR6/4にぶい黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	9	土師器	甕	(260)			7	粗砂混入	良	10YR8/4浅黄橙	タタキ,ハケメ,ケズリ			



（1：60）

EP739
1 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む
2 10YR2/1 黒 シルト 均質
3 10YR2/3 黒 シルト 褐色シルト含む

EP740
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色砂ブロック含む
2 10YR3/2 黒褐 シルト 褐色砂ブロック斑状に含む

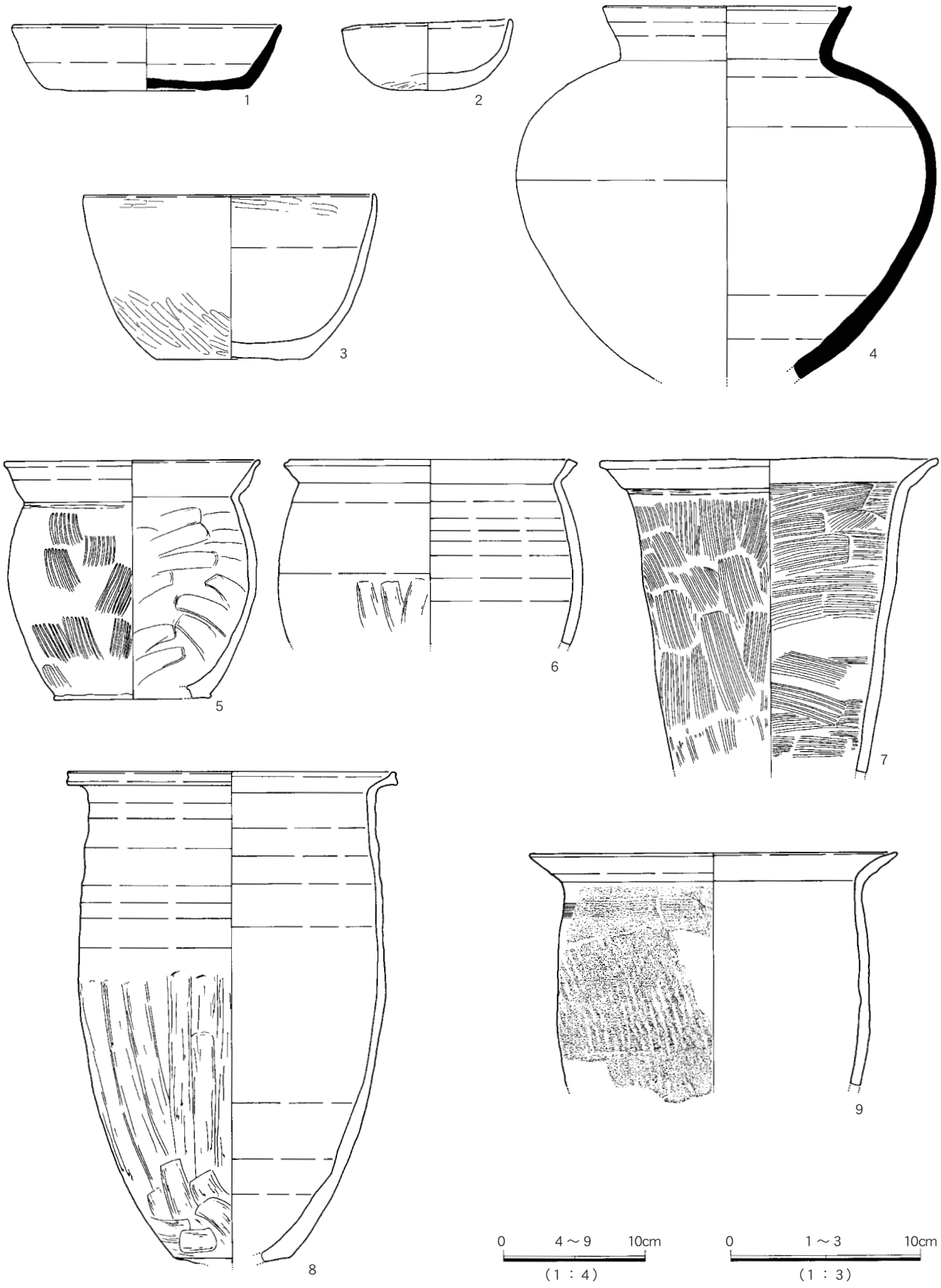


（1：30）

ST9816
1 10YR2/1 黒 シルト 均質、固くしまる
2 10YR2/2 黒褐 シルト 黒色シルトブロック（大）含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトを粒状に含む
4 10YR2/1 黒 シルト 暗褐色シルトをブロック状に含む、土器含む
5 10YR2/2 黒褐 シルト 砂質
6 5YR3/3 暗赤褐 シルト 焼土と暗褐色シルトが縞状に入る
7 10YR3/3 暗褐 シルト 砂質（地山）
8 10YR2/1 黒 シルト 焼土粒多量含む
9 10YR3/3 暗褐 シルト 黒褐色シルトを斑状に含む
10 10YR2/1 黒 シルト 暗褐色シルト粒状に含む

EL228
1 10YR2/1 黒 シルト 土器片、焼土、炭化粒含む
2 10YR2/1 黒 シルト 褐色砂質シルト粒少量含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト 焼土粒、炭化粒含む、しまりがない
4 7.5YR3/2 黒褐 シルト 大粒の炭化物含む
5 7.5YR3/2 黒褐 シルト 褐色砂質シルト粒含む
6 10YR2/1 黒 シルト 炭化物多量含む
7 10YR2/2 黒褐 シルト 炭化粒、焼土粒多量含む
8 10YR3/6 暗赤褐 シルト 焼土層、黒褐色シルト含む
9 10YR2/1 黒 シルト ほぼ均質、粘性強い、固くしまる
10 10YR2/3 黒褐 シルト カマドの崩落土
11 撹乱

第80図　ST9816



第81図　ST9816出土遺物

ち作り出したもので、内面に見られる体部の貼付け痕や粗雑な口縁部の作りからも特異である。

81－3は土師器の鉢としたものである。底部にはミガキが施され、内湾気味の体部は開きが小さい。体部下半にはケズリ調整が施され、その後ミガキが行われる。

81－4は小型の須恵器甕である。底部を欠損するが、丸底になるものと推測される。肩部は張ることがなく、体部は球胴を呈し、最大径は中央やや上方にある。頸部は外反し、口縁端部は内側に弱く引出される。体部外面には、目の細かい平行タタキの痕跡が認められ、その後ケズリとナデ調整が施される。内面は、特に意匠が見られない楕円形のアテ具による痕跡が残る。

81－5、6は土師器の小型甕である。5は丸みのある体部で、最大径は中央部にある。比較的頸部が長く、口縁部は玉縁状である。6の体部も丸みをもち、中央部に最大径を有するものと推測される。頸部は短く、口縁端部には平坦面を作り出す。被熱により調整は不明瞭だが、外面には僅かにケズリの痕跡が認められる。

81－7～9は土師器長胴甕である。7は頸部が大きく外反し、口縁端部は玉縁状に作られる。頸基部には横方向のナデが入れられ、沈線状に窪む。体部の最大径はこの頸基部にあり、底部にかけては窄んでいく。体部外面には縦方向、内面には横方向のハケメ調整が施される。8の底部は中央部が突出するタイプである。体部最大径は中央にあり、ここより上部はロクロナデ、下方はケズリ調整である。頸部は短く折れ、口縁部には面を作り出す。9の体部は、タタキで成形された後、上部はロクロナデ、下部にはケズリ調整が施されたものである。頸部は大きく開き、直線的に口縁部まで至る。なお、内面の調整は器面が荒れているため不明である。

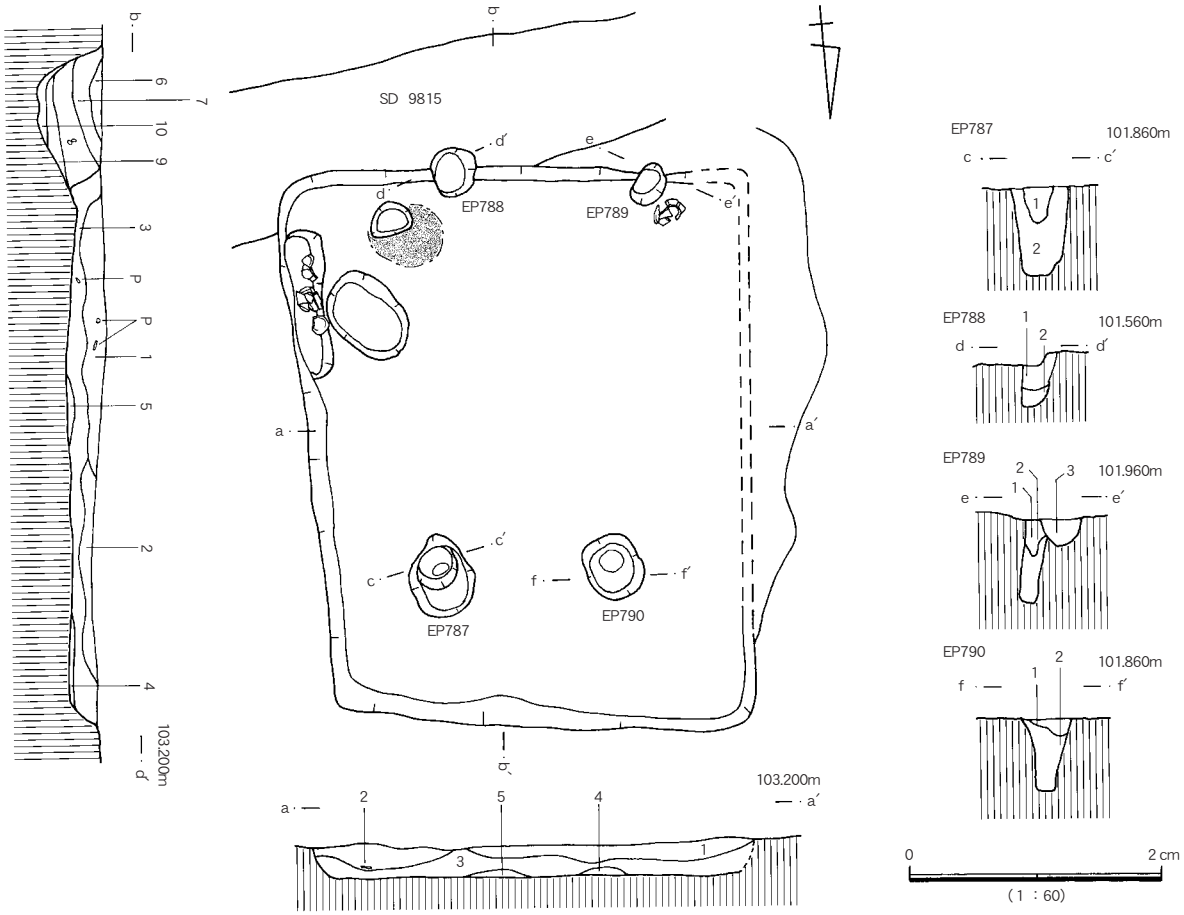
須恵器無台坏や土師器鉢の形状、あるいは土師器小型甕、7のような長胴甕からは、8世紀中頃まで遡り得る可能性が考えられる。

【ST9825】第82図

28・29－208・209グリッドに位置する。主軸方向はN－177°－Wである。西辺の大部分が撹乱を受け、壁を欠損する。平面形は、東西3.4m、南北4.3mで南北に長い方形である。確認面からの深さは約30cmあり、壁は急である。カマドは失われているが、焼土の位置から南辺の東端に設けられていたものと推測される。床は全面に貼床され、堅く締っている。柱穴は4基あり、南壁に2基、竪穴内北寄りに2基検出された。南のEP708、709は約半分が竪穴外にはみ出す。柱穴は径40cm前後の楕円形で、深さは40～60cmである。柱間距離は1.5mを測る。一方北側のEP787、790は北壁から1.2m離れた位置にある。柱穴は径約50cmの長楕円形で、深さは60～70cmである。柱間距離は、同じく1.5mを測る。北側にある竪穴内の柱穴に比べ南側の竪穴外に出る柱穴は小さく貧弱な印象を受ける。このことから、竪穴内のものが主柱となり、竪穴外に出るものが支柱の機能を果たしたと考えられる。この様相は前述したST34、9513、9728にも同様なことが言え、竪穴建物跡の類型の一つととらえられる。遺構間の重複関係はSD9815→ST9825が確認されている。覆土は自然堆積である。

出土遺物は、須恵器蓋4点、無台坏33点、有台坏3点、長頸壷5点、甕9点の54点、土師器無台坏1点、甕片等406点にのぼる（第83図）。

83－1は体部が丸みをもち、器高が高くなる須恵器蓋である。天井部は回転ヘラケズリにより



ST9825
1　10YR２/２　黒褐　シルト　褐色シルト、黒色シルト粒状に含む
2　10YR２/２　黒褐　シルト　褐色シルトを粒状に含む、ほぼ均質、固くしまる
3　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色シルトを帯状に含む、やわらかい
4　10YR３/３　暗褐　シルト　黒色粘質シルト含む
5　10YR３/３　暗褐　シルト　焼土、黒色粘質シルト含む
6　10YR２/２　黒褐　シルト　均質
7　10YR４/６　褐　シルト　黒色シルト粒少量含む
8　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色シルト粒少量含む
9　10YR３/１　黒褐　シルト　褐色シルト粒少量含む
10　10YR３/１　黒褐　シルト　均質

6～10はSD9815の覆土

EP　787
1　10YR３/３　暗褐　微　砂　褐色シルト、黒褐色シルトブロック微量含む
2　10YR３/３　暗褐　シルト　褐色シルト、黒褐色シルトブロックを斑状に含む

EP　788
1　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色シルト粒微量含む
2　10YR３/３　暗褐　シルト　黒褐色シルトブロック微量含む

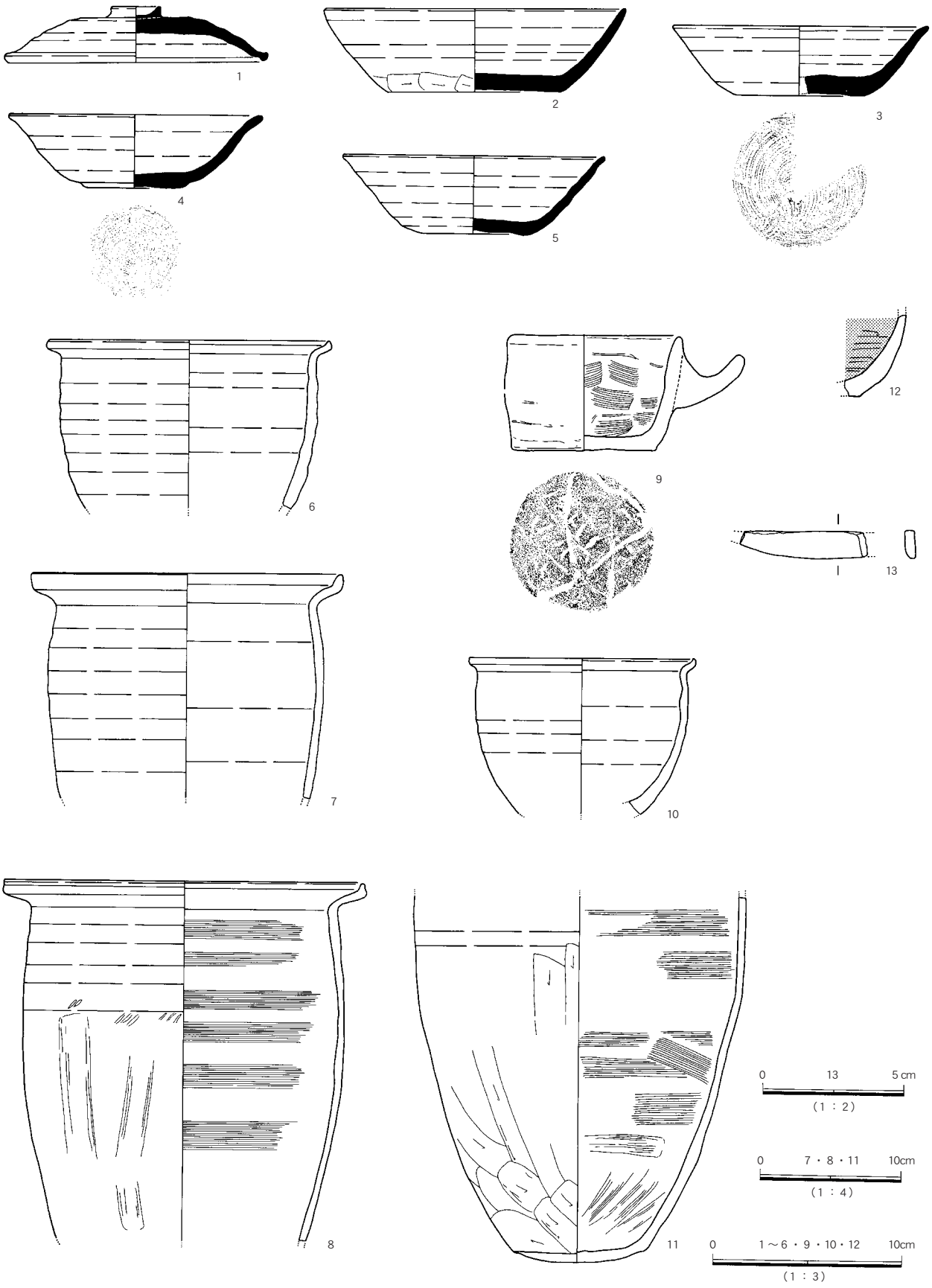
EP　789
1　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色シルト粒微量含む、しまりがない
2　10YR３/３　暗褐　シルト　褐色シルト、黒褐色シルトブロックを斑状に含む
3　撹乱

EP　790
1　10YR３/２　黒褐　シルト　褐色シルトブロック微量含む
2　10YR３/３　暗褐　微　砂　褐色シルト、黒褐色シルトブロック微量含む

第82図　ST9825

表27　ST9825出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
83	1	須恵器	蓋	134		29	5	緻密	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	無台坏	(160)	92	44	5	細砂混入	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り、ケズリ	
	3	須恵器	無台坏	136	70	37	5	砂粒混入	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	無台坏	(134)	52	39	4	緻密	良	5Y7/3浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	無台坏	(138)	56	41	4	緻密	良	10YR5/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	土師器	甕	(146)			7	細砂混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	7	土師器	甕	(220)			6	砂粒混入	良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	8	土師器	甕	(254)			5	細砂混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ,ｹｽﾞﾘ,ﾀﾀｷ	ロクロナデ、カキメ		
	9	土師器	把手付き坏	(90)	74	61	7	粗砂混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ハケメ	ハケメ	木葉痕	
	10	土師器	甕	(160)			5	砂粒混入	良	5YR5/6明赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	11	土師器	甕		92		5	粗砂混入	良	7.5YR7/6橙	ケズリ	ハケメ	ナデ	
	12	黒色土器	無台坏				8	緻密	良	10YR7/6明黄褐	ロクロナデ、ケズリ	ミガキ		



第83図　ST9825出土遺物

体部との境が見られる。口縁端部は内側に小さく折られ丸くなる。つまみはリング状である。

83－２～５は須恵器無台坏である。２は静止糸切り後ケズリ調整が施される。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部でも変化を見せない。体部外面下端には手持ちヘラケズリが認められる。３～５は回転糸切り後無調整である。３点とも体部が開き、口縁部が外反する。身が深い等の共通点が見られるが、３の底径が大きいのに対して他は小振りである。

83－６、10は口縁部を短く屈曲させ小さな面を端部に作り出した土師器小型甕である。

83－７、８、11は土師器長胴甕である。７は口縁部が肥厚するもの、８は細く引出した口縁端部を内側に折曲げ、さらに平坦面に一条の沈線状の窪みが巡るものである。11は丸底風の底部をもつものである。

83－９は土師器の把手付きの坏である。底部には木葉痕が残る。把手の平面形は長方形、断面形は長楕円形である。器面が荒れていることもあり、調整は確認できない。

83－12は黒色土器の坏、13は鉄製品の刀子である。

須恵器蓋や無台坏の特徴から、９世紀前半代ととらえられる。

【ST9826】第84図

31－211グリッドに位置する。主軸方向はN－180°－Wである。平面形は東西3.4m、南北3.6mを測り、南北にやや長い方形を呈する。確認面からの深さは約30cmで、壁は急である。カマドは南辺の西角に設けられる。燃焼部は竪穴内に作られ、袖は短く張り出す。燃焼部中央には長楕円形の自然石が１個置かれる。右袖部には土師器長胴甕（85－７）が僅かに内傾する正位で埋設され、中から須恵器有台坏（85－２）と無台坏（85－3）が入れ子状態で出土した。床は全面に貼床されるが、全体的に薄い。柱穴は竪穴内の北寄りに２基あり、北壁から約1.3m離れる。柱穴径は40～50cmで深さは約40cmである。柱間距離は1.2mである。覆土は黒褐色シルトを主とした自然堆積である。遺構間の重複関係はSD9827→ST9826が確認されている。

出土遺物は須恵器蓋、無台坏、有台坏、甕片等40点、土師器甕片等が108点である。

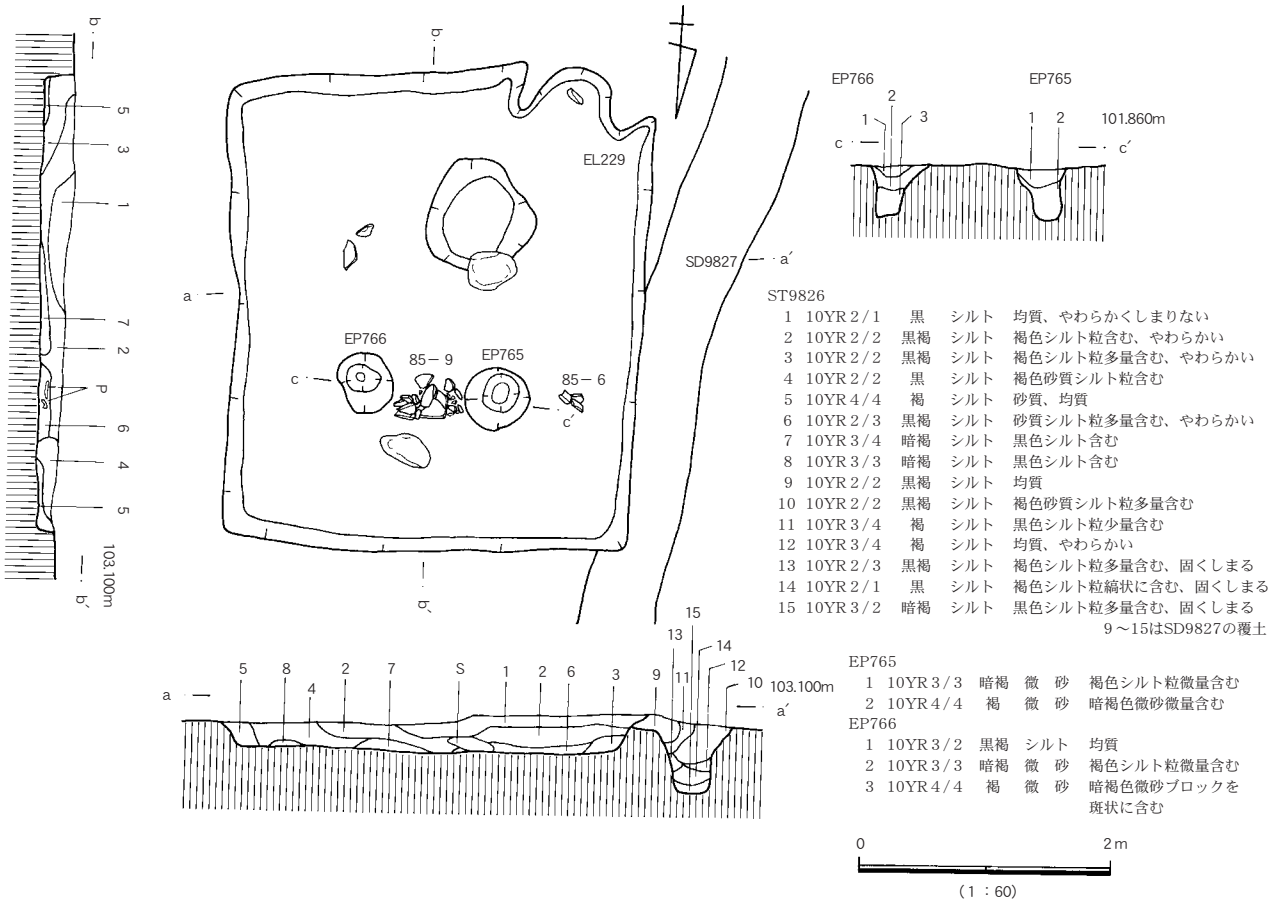
85－１は回転ヘラケズリにより大きく平坦に天井部をつくり出している。体部は直線的に傾斜し、口縁部は直立する。つまみは中窪みの扁平なものである。全体的に肥厚し、重量感がある。

85－２は高台を欠損するヘラ切りの須恵器有台坏、３はヘラ切り後ナデ調整が施され、さらに草木状の圧痕が認められる無台坏である。火襷が顕著に見られ、焼成時のひび割れが口縁部から体部まで入る。使用痕は認められない。４は回転糸切り後無調整の無台坏である。

85－５は横瓶である。閉塞部の大部分を欠損する。外面はタタキ後、ナデ調整が施される。

表28　ST9826出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
85	1	須恵器	蓋	154		34	7	細砂混入	良	10YR8/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	有台坏	147			4	粗砂混入	良	5Y8/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	無台坏	136	90	41.5	4	粗砂混入	良好	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	無台坏	(136)	(54)	37	4	緻密	良	2.5Y7/3浅黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	横瓶				6	砂粒混入、骨針	良	5Y6/1灰	タタキ、ナデ	アテ痕		
	6	土師器	甕	(230)			6	砂粒混入	良	5YR6/6橙	ロクロナデ	ハケメ		
	7	土師器	甕		42		7	粗砂混入	良	10YR7/4にぶい黄橙	ケズリ、ハケメ	ハケメ		
	8	土師器	甕	(178)			6	砂粒混入	良好	7.5YR7/4にぶい橙	タタキ、ハケメ、ケズリ	ハケメ		
	9	土師器	塝	(390)	(130)	210	10	粗砂混入	良	5YR7/6橙	ロクロナデ、タタキ、ケズリ	ロクロナデ		



ST9826

1	10YR２/１	黒	シルト	均質、やわらかくしまりない
2	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む、やわらかい
3	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色シルト粒多量含む、やわらかい
4	10YR２/２	黒	シルト	褐色砂質シルト粒含む
5	10YR４/４	褐	シルト	砂質、均質
6	10YR２/３	黒褐	シルト	砂質シルト粒多量含む、やわらかい
7	10YR３/４	暗褐	シルト	黒色シルト含む
8	10YR３/３	暗褐	シルト	黒色シルト含む
9	10YR２/２	黒褐	シルト	均質
10	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色砂質シルト粒多量含む
11	10YR３/４	褐	シルト	黒色シルト粒少量含む
12	10YR３/４	褐	シルト	均質、やわらかい
13	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルト粒多量含む、固くしまる
14	10YR２/１	黒	シルト	褐色シルト粒縞状に含む、固くしまる
15	10YR３/２	暗褐	シルト	黒色シルト粒多量含む、固くしまる

9～15はSD9827の覆土

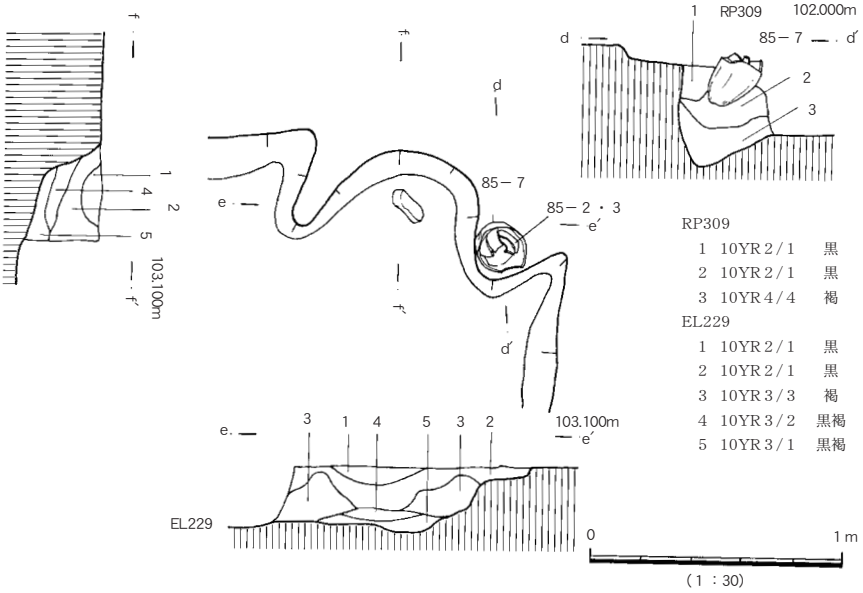
EP765

1	10YR３/３	暗褐	微　砂	褐色シルト粒微量含む
2	10YR４/４	褐	微　砂	暗褐色微砂微量含む

EP766

1	10YR３/２	黒褐	シルト	均質
2	10YR３/３	暗褐	微　砂	褐色シルト粒微量含む
3	10YR４/４	褐	微　砂	暗褐色微砂ブロックを斑状に含む

0　2m
（1：60）



RP309

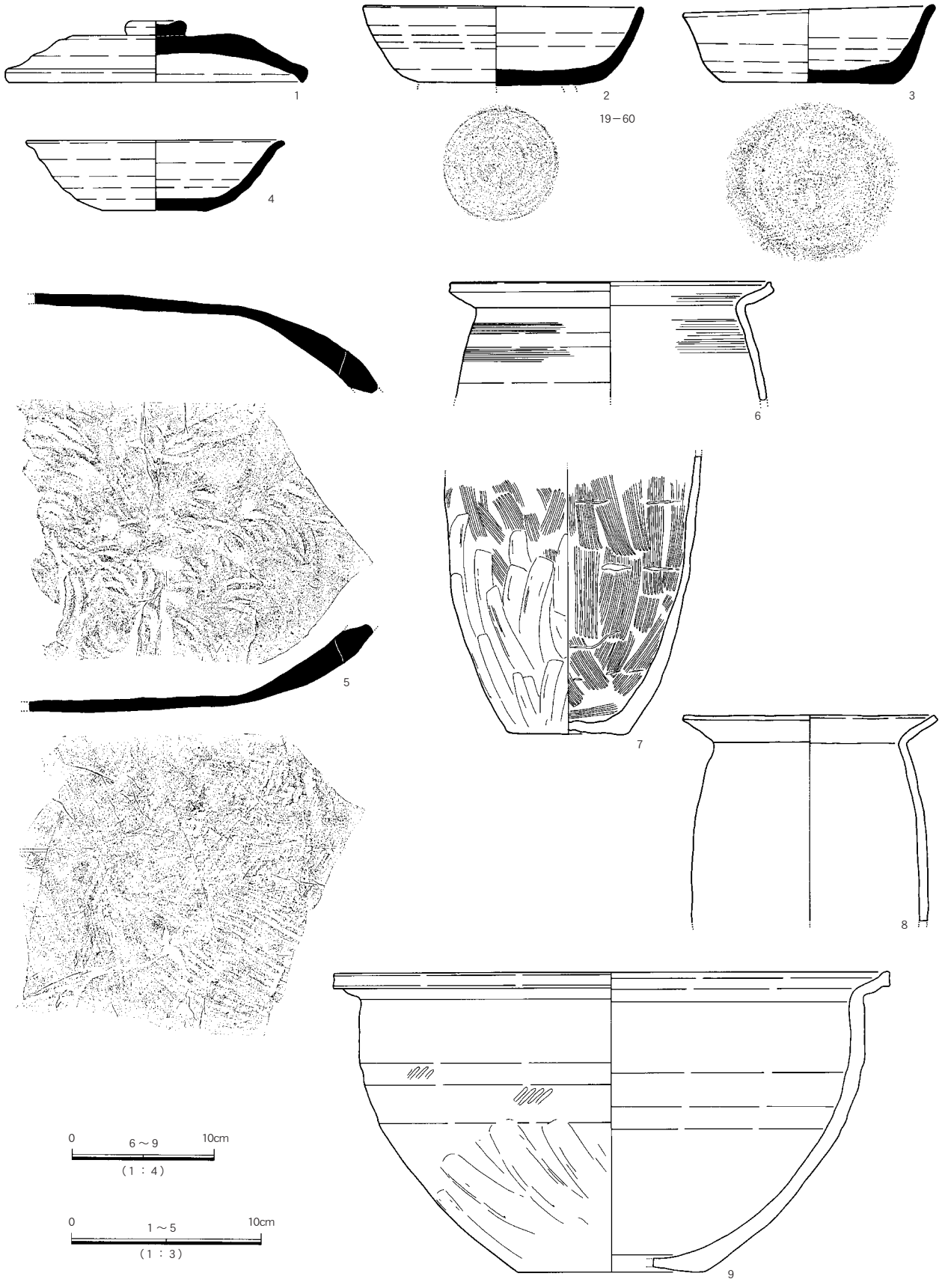
1	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色シルトブロック微量含む、やわらかい
2	10YR２/１	黒	シルト	焼土微量、暗褐色シルト粒少量含む、固くしまる
3	10YR４/４	褐	細　砂	黒褐色シルト粒微量含む、固くしまる

EL229

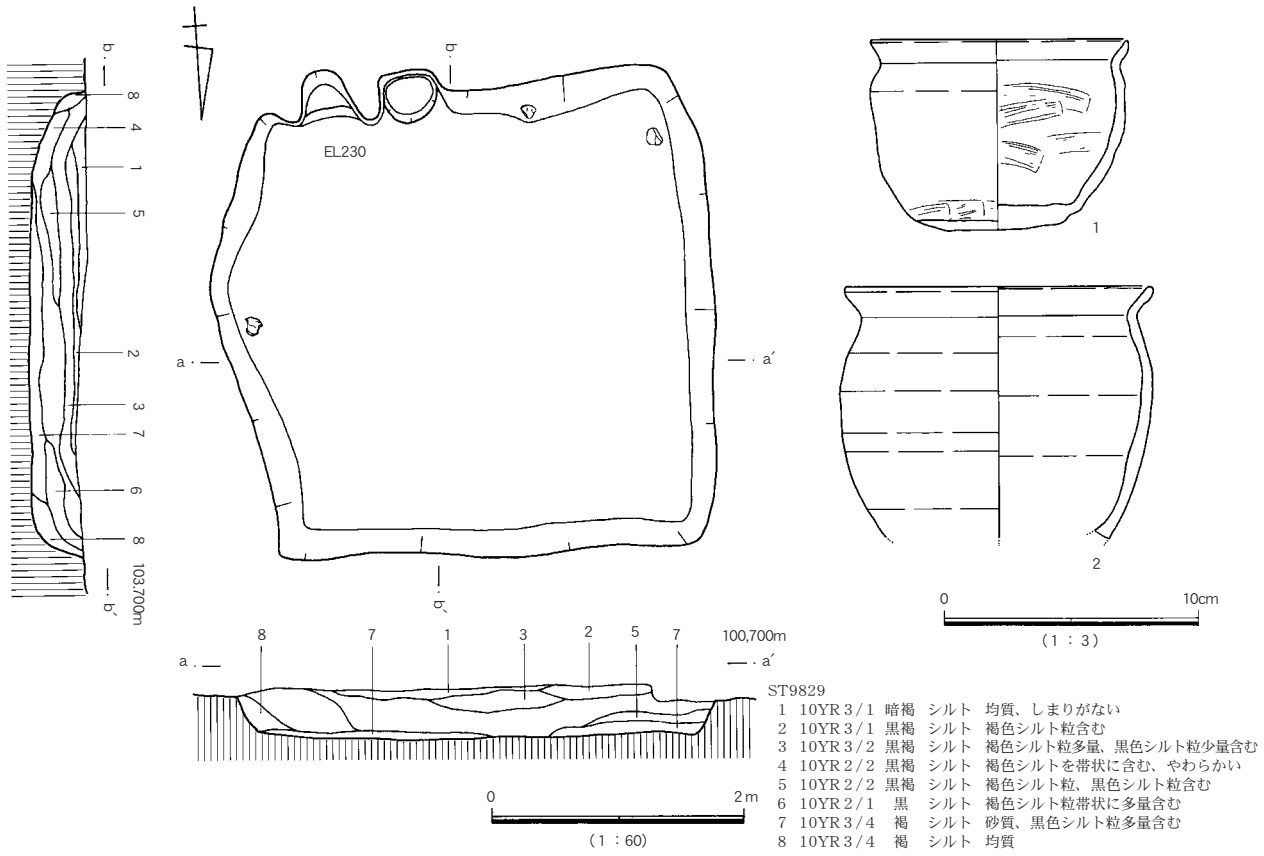
1	10YR２/１	黒	シルト	均質、やわらかい
2	10YR２/１	黒	シルト	焼土粒微量、褐色シルト粒少量含む
3	10YR３/３	褐	シルト	焼土粒微量、黒色シルト粒少量含む
4	10YR３/２	黒褐	シルト	焼土粒を帯状に多量含む、やわらかい
5	10YR３/１	黒褐	シルト	焼土粒含む、やわらかい

0　1m
（1：30）

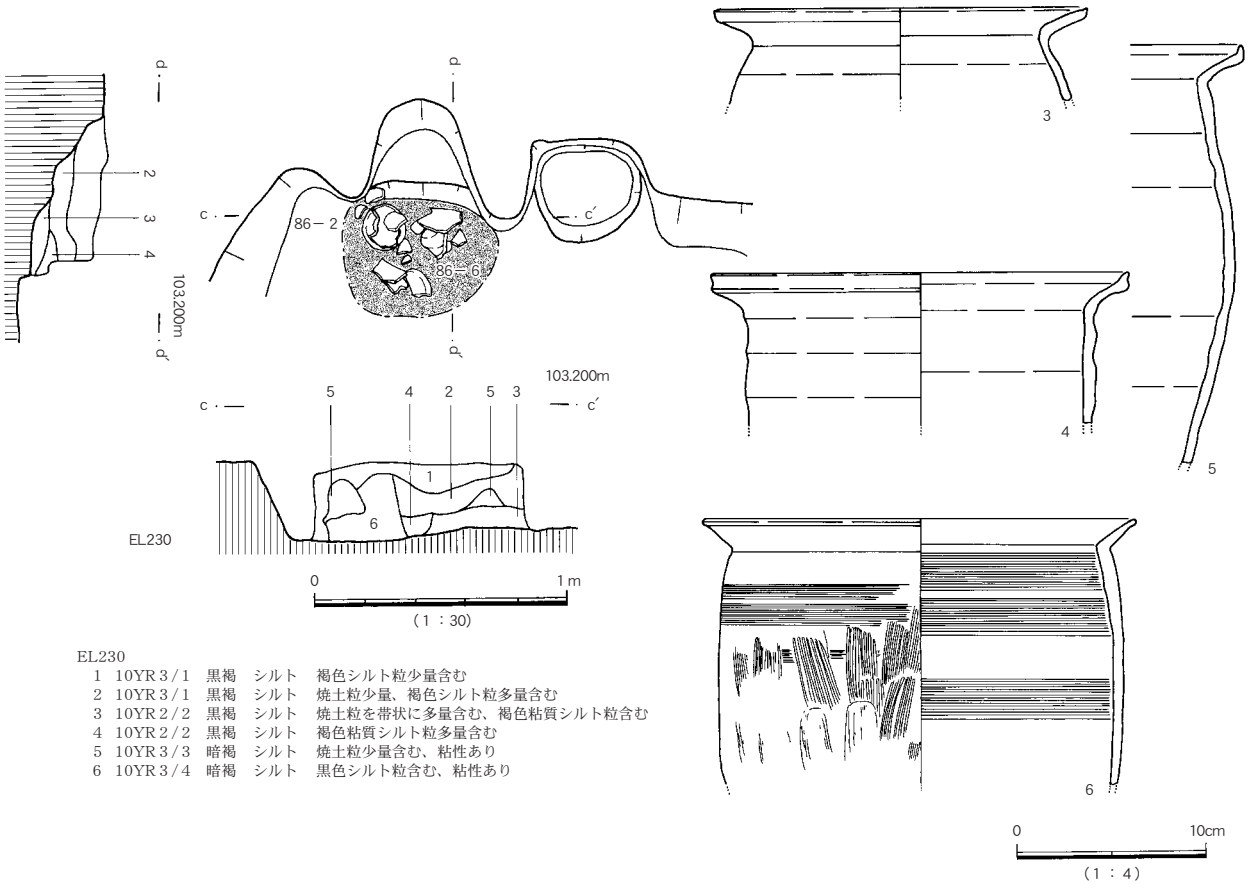
第84図　ST9826



第85図　ST9826出土遺物



ST9829
1 10YR3/1 暗褐 シルト 均質、しまりがない
2 10YR3/1 黒褐 シルト 褐色シルト粒含む
3 10YR3/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒多量、黒色シルト粒少量含む
4 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトを帯状に含む、やわらかい
5 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒、黒色シルト粒含む
6 10YR2/1 黒 シルト 褐色シルト粒帯状に多量含む
7 10YR3/4 褐 シルト 砂質、黒色シルト粒多量含む
8 10YR3/4 褐 シルト 均質

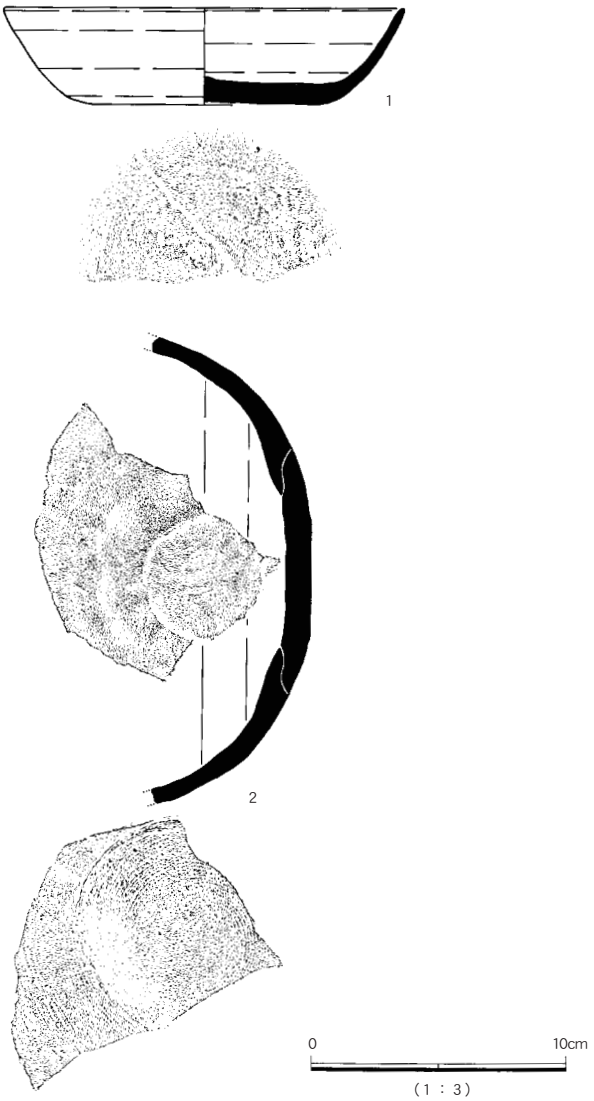


EL230
1 10YR3/1 黒褐 シルト 褐色シルト粒少量含む
2 10YR3/1 黒褐 シルト 焼土粒少量、褐色シルト粒多量含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト 焼土粒を帯状に多量含む、褐色粘質シルト粒含む
4 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色粘質シルト粒多量含む
5 10YR3/3 暗褐 シルト 焼土粒少量含む、粘性あり
6 10YR3/4 暗褐 シルト 黒色シルト粒含む、粘性あり

第86図　ST9829　出土遺物 1

85－６～８は土師器長胴甕である。６はロクロナデ調整、７は外面がタタキ後、体部上方に縦方向のハケメが入れられ、さらに下方に縦方向のケズリが施されたものである。内面は縦方向のハケメ調整で、粘土紐の輪積み痕が明瞭に見られる。８も同じような調整が行われるが、体部上半は、内外面とも横方向のハケメ調整である。

85－９は大型の土師器堝である。火熱により器面が磨滅しているが、体部外面中央部付近にタタキの痕跡を僅かにとどめ、下半には斜方向のケズリ調整を認めることができる。



第87図　ST9829出土遺物２

【ST9829】第86図

31・32－212・213グリッドに位置する。主軸方向はN－179°－Wである。平面形は、東西3.6m、南北3.7mの方形を呈する。確認面からの深さは約50㎝である。カマドは南辺の東寄りに設けられる。袖をほとんど失っているが、焼土の範囲から燃焼部を竪穴内にもつ構造と考えられる。床は全面に貼床される。柱穴は確認できない。覆土は自然堆積である。カマドの西の柱穴は、SB768を構成するもので、中世の所産と考えられるものである。

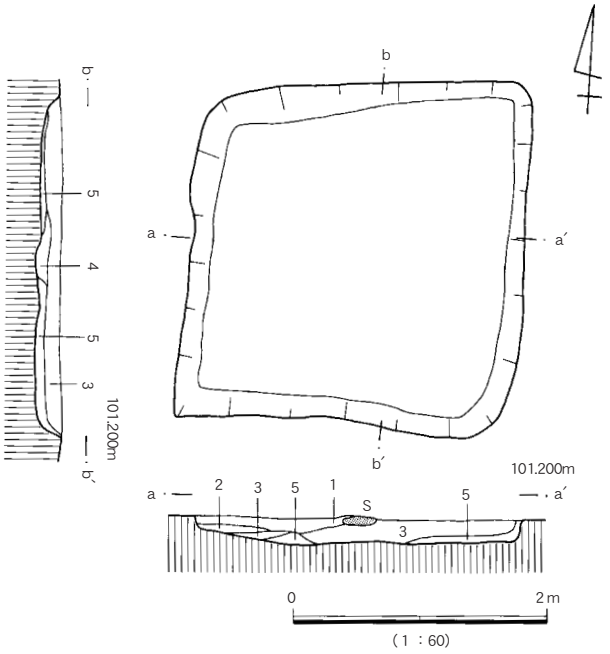
出土遺物は須恵器蓋、無台坏、甕、横瓶片等４点、土師器甕片51点である（第86・87図）。

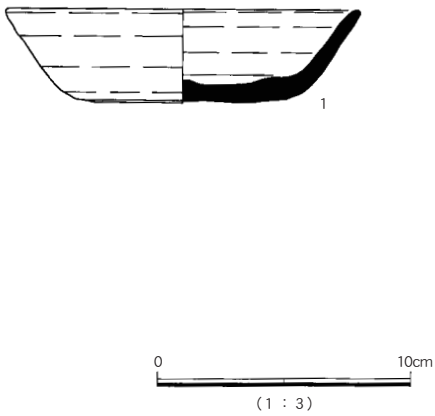
86－１、２は土師器小型甕である。火はねによる器面の荒れがひどく、外面下部のケズリと内面のハケメ以外不明瞭である。

86－３～６は土師器長胴甕である。３は頸部が「く」の字状に強く屈曲し、体部が大きく膨らむ様子がうかがえる。口縁部は直線的に開く。４は体部が直立するタイプで、口縁端部が上方に引出され、面が作られる。５も口縁端部が引き上げられるが、体部の中央部が大きく膨らみ、最大径を有するタイプである。６は直線的に開く口縁部から体部が僅かに開き、

表29　ST9829出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
86	1	土師器	甕	(109)	66	75	6.5	細砂混入	良	7.5YR8/3浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ハケメ	ナデ	
	2	土師器	甕	164			6	粗砂混入	良	7.5YR8/3浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		RP384、RP385
	3	土師器	甕	(196)			5	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	4	土師器	甕	(220)			6	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	5	土師器	甕				5	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ、ハケメ		
	6	土師器	甕	(228)			7	粗砂混入	良	2.5Y8/3淡黄	ハケメ、ケズリ	カキメ		EL230
87	1	須恵器	無台坏	(160)	(90)	38	5	砂粒混入	不良	7.5YR8/3浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	RP383
	2	須恵器	横瓶				10	砂粒混入	良	5Y5/1灰	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、ナデ		





ST9834
1 10YR3/4 暗褐 シルト 均質、固くしまる
2 10YR3/4 暗褐 シルト 焼土含む、しまりない
3 10YR2/3 黒褐 シルト 暗褐色シルト斑状に少量含む、固くしまる
4 10YR2/3 黒褐 シルト 均質、固くしまる
5 10YR3/4 暗褐 シルト 黒褐色シルトをブロック状に含む、固くしまる

第88図　ST9834　出土遺物

表30　ST9834出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
88	1 須恵器	無台坏	140	80	36	6	粗砂混入、骨針	良	2.5Y6/3にぶい黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	

上方に最大径を有するタイプである。外面は火はねによって荒れている。

87－1はヘラ切りの須恵器無台坏である。口径、底径が大きく、身は浅い。底部の厚さに比べ体部は薄い。体部は内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。焼成不良で器面は磨滅するが、内外面にロクロナデが認められる。

87－2は横瓶の閉塞部である。閉塞部の径は約65㎜、閉塞円盤の径は約100㎜である。体部外面にはカキメが施される。内面には閉塞円盤貼付け時の押圧痕が見られる。また、閉塞側面には、径約120㎜、厚さ約２㎜の円形の融着痕が認められ、周囲には緑色の自然釉が付着する。

須恵器坏のもつ特徴からは、８世紀後半頃の所産と考えられる。

【ST9834】第88図

28・29－217グリッドに位置する。主軸方向はN－65°－Wである。小型の竪穴で、平面形は東西2.6m、南北2.8mの方形を呈する。壁は比較的急で、確認面からの深さは約20㎝である。カマドは遺存しないが、焼土の塊は西壁周辺で検出されている。床は全面に貼床される。柱穴は確認できない。覆土は自然堆積である。

出土遺物は少なく、須恵器無台坏１点、土師器甕片３点のみである（第88図）。

88－1はST9834出土遺物中、唯一図化できた須恵器無台坏である。底部はヘラ切り後ナデ調整が施されている。口径、底径が大きく、身は浅い。体部は外反気味に立ち上がる。口縁部はやや肥厚する。内外面に明瞭な火襷が認められる。

【ST9835】第89図

29・30－217・218グリッドに位置する。主軸方向はN－177°－Eである。平面形は、東西5.2m、南北5.1mの方形を呈する。確認面からの深さは約40cmである。壁は急角度をもつ。カマドは南辺の西寄りに設けられている。構造は、竪穴内に燃焼部をもつものである。長さ50～60cmの馬蹄形の袖が残存する。床は中央部より南側に若干の貼床が認められる。径50cm前後の楕円形の掘込みがあるが。貼床にともなうもので、柱穴とは考えられない。覆土は均質で、堅く締った黒褐色のシルトを主とする自然堆積である。

出土遺物は、須恵器無台坏19点、甕５点等24点、土師器甕片251点である（第89図）。破片数は少ない方ではないが、床面からの出土が無く、ほとんどが覆土内からの出土である。そのためまとまりがなく、図化できる資料が限られる。

89－１は回転糸切りの須恵器無台坏である。底部は磨滅し、切離しの痕跡は一部にしか見られない。厚目の体部は僅かに内湾し、口縁部は小さく外反する。内外面に火襷が見られる。口径、底径が比較的大きく、９世紀前半代のものと考えられる。

【ST9846】第90図

29・30－220・221グリッドに位置する。主軸方向はN－170°－Wである。平面形は東西4.9m、南北5.1mを測る方形を呈するが、東辺は4.4mしかなく、やや南北が短くなる。壁は急傾斜を保ち、確認面からの深さは約40cmである。カマドは南辺の東寄りにあり、竪穴内に燃焼部をもつ構造である。長さ50～60cmの袖部が遺存する。煙道は竪穴外に約50cmの長さまで確認できた。床は中央部にのみ貼床される。柱穴は確認できない。覆土は安定した自然堆積である。

遺物の出土状況は、カマド周辺に集中する傾向がうかがわれる。須恵器蓋２点、無台坏35点、長頸壷１点、甕３点等41点。土師器無台坏８点、甕472点等480点が出土した（第91図）。

91－１は口径120㎜の小振りな須恵器蓋である。回転ヘラケズリは天井部から体部中頃まで施される。体部は緩い丸みをもち、口縁部は強く内側に折り込まれる。シャープな稜線の口縁部から、細い端部が内側に引出される。つまみは中央部が小さく突出するが、扁平である。

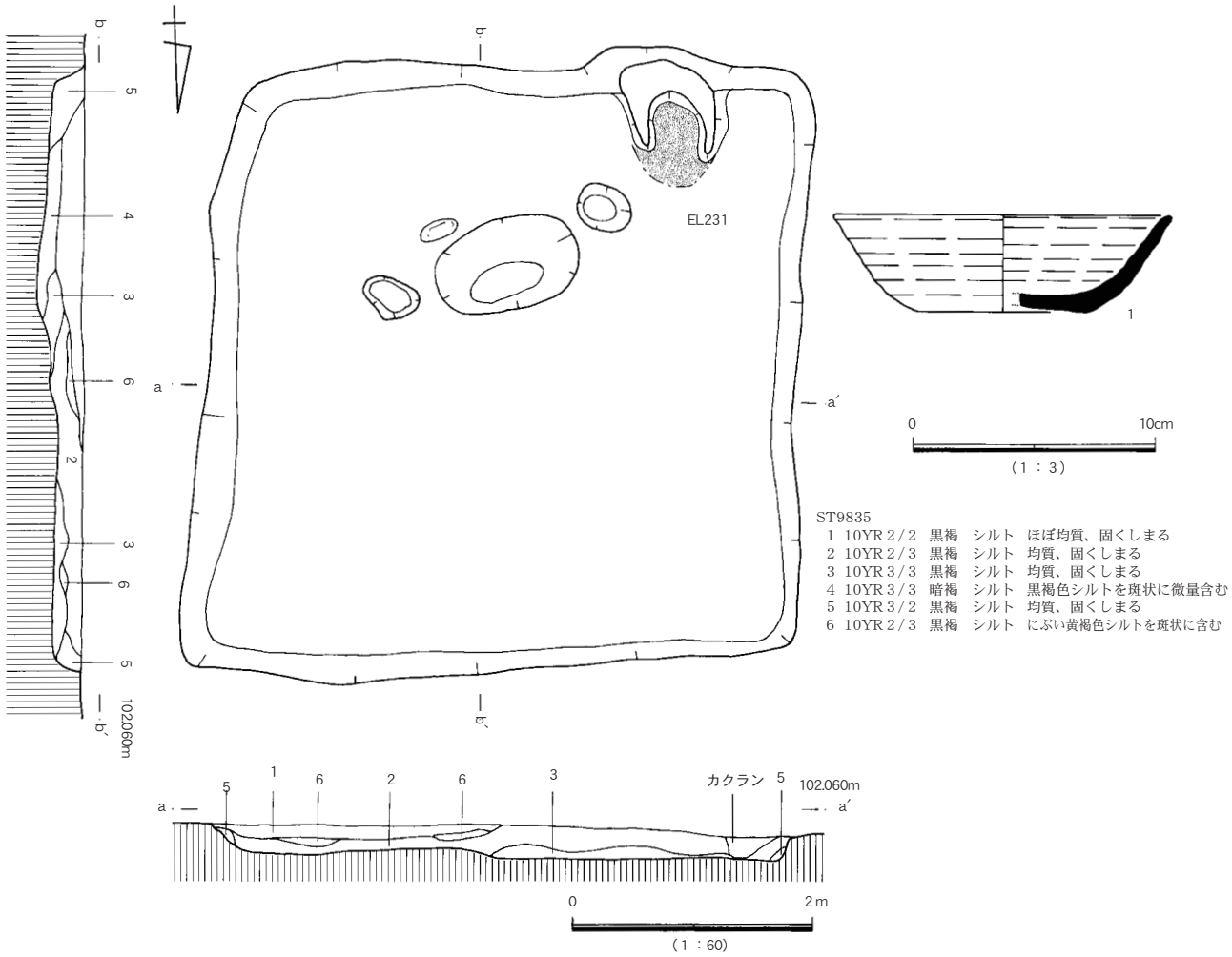
91－２は回転糸切りの須恵器無台坏である。口径、底径が大きく、身が浅い。糸切りの目は粗く、切離し後は無調整である。体部は丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。焼成は良いが、赤褐色に発色する。胎土には砂粒の他に、微細な海綿骨針の混入も見られる。

91－３は土師器小型鉢である。底部はヘラ切り後、ナデ調整されたもので、草木状の圧痕も認められる。体部は丸みをもち、中央部付近に最大径を有する。口縁部は短く外反する。

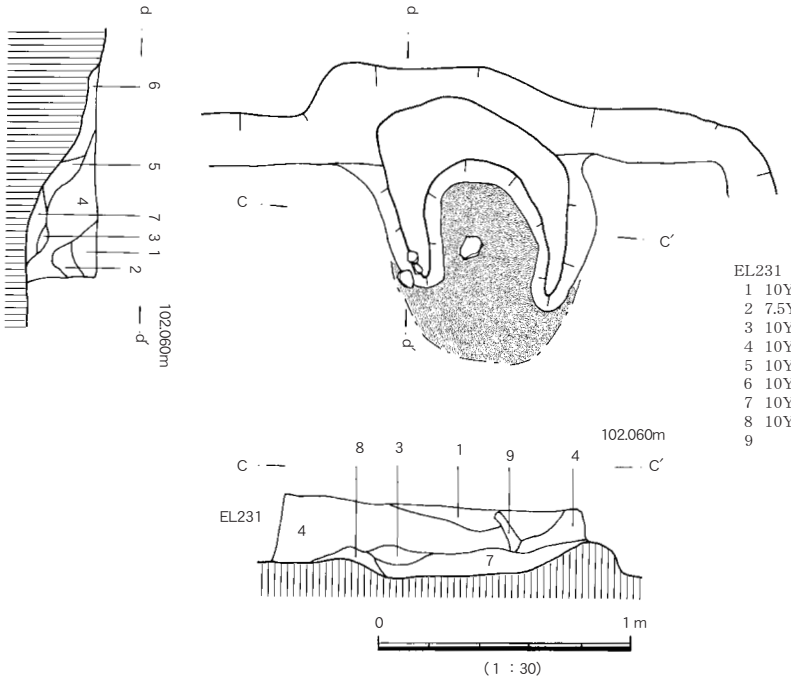
91－４、５、７は土師器小型甕である。４の底部は磨滅するものの、回転糸切りによるものと考えられる。底部は肥厚するが、体部から口縁部にかけての器厚は薄く、均一である。体部は緩く内湾し、最大径を中央部付近にもつ。口縁部は極端に短く、端部を僅かに摘まみ上げたものである。体部外面は火熱を受け、器面が荒れる。内外面ともロクロナデ調整である。

表31　ST9835出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
89	1 須恵器	無台坏	(140)	(70)	40	5	砂粒混入	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	

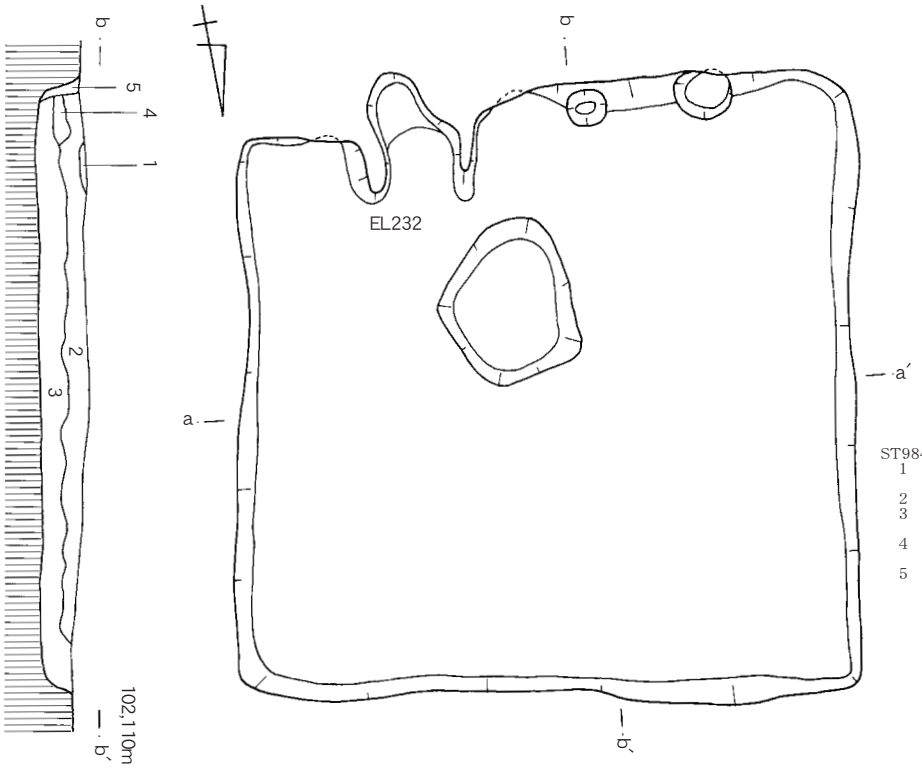


ST9835
1 10YR 2/2 黒褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
2 10YR 2/3 黒褐 シルト 均質、固くしまる
3 10YR 3/3 黒褐 シルト 均質、固くしまる
4 10YR 3/3 暗褐 シルト 黒褐色シルトを斑状に微量含む
5 10YR 3/2 黒褐 シルト 均質、固くしまる
6 10YR 2/3 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルトを斑状に含む



EL231
1 10YR 3/3 暗褐 シルト ほぼ均質、しまりがない
2 7.5YR 3/4 暗褐 シルト 黒褐色シルトブロック含む、しまりがない
3 10YR 3/2 黒褐 シルト 黄褐色シルト斑状に含む、固くしまる
4 10YR 2/2 黒褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
5 10YR 2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
6 10YR 3/2 黒褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
7 10YR 2/2 黒褐 シルト 焼土を斑状に含む
8 10YR 3/3 暗褐 シルト 黄褐色シルト微量含む
9 撹乱

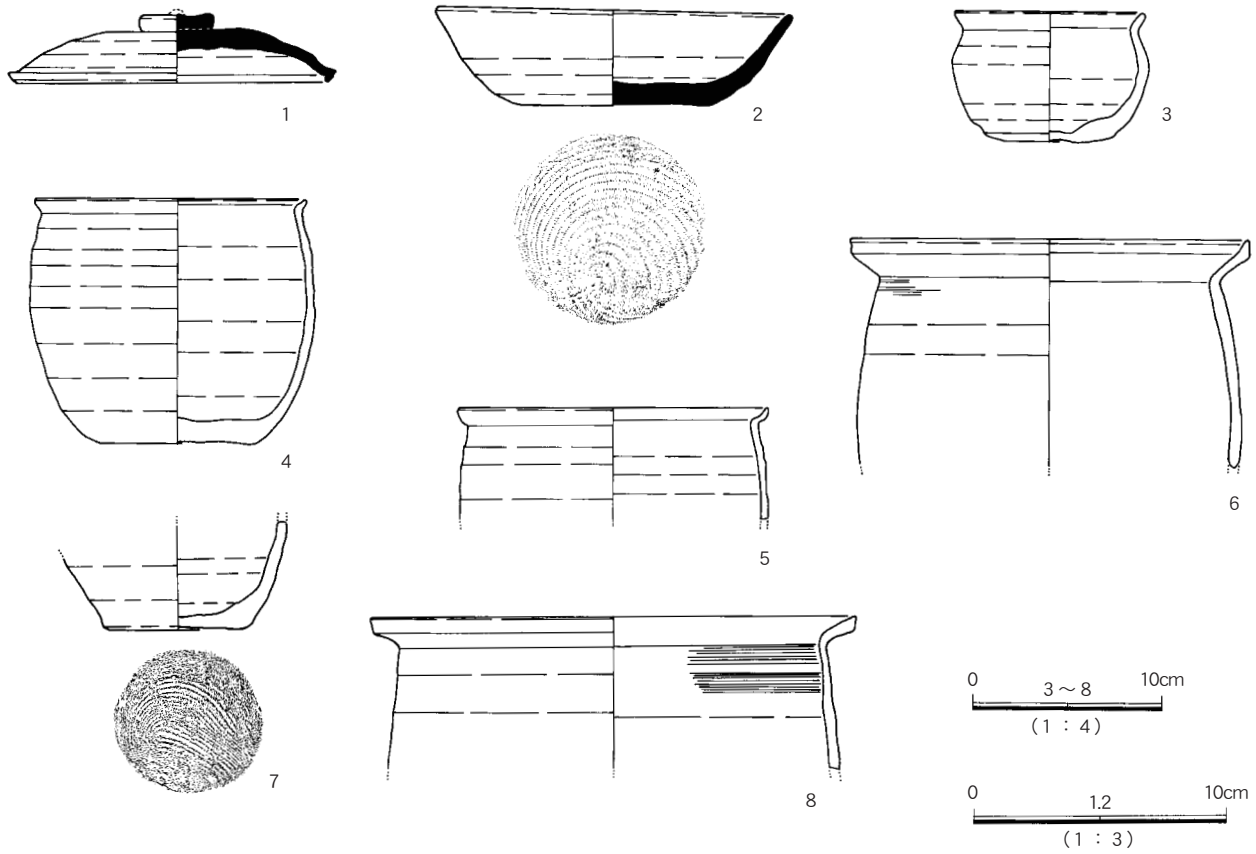
第89図　ST9835　出土遺物



ST9846
1　10YR3/3　暗褐　シルト　黒褐色シルト、褐色シルト少量含む、固くしまる
2　10YR2/2　黒褐　シルト　ほぼ均質、固くしまる
3　10YR3/2　黒褐　シルト　褐色シルトブロックを斑状に含む、固くしまる
4　10YR3/2　黒褐　シルト　褐色シルトブロックを斑状に微量含む、固くしまる
5　10YR3/3　暗褐　シルト　均質、固くしまる

EL232
1　10YR4/4　褐　微砂　ほぼ均等、袖部
2　10YR2/3　黒褐　シルト　焼土多量含む
3　10YR2/2　黒褐　シルト　焼土多量含む
4　10YR2/3　黒褐　シルト　焼土粉多量含む、しまりがない
5　7.5YR3/3　暗褐　シルト　焼土層
6　10YR2/1　黒　シルト　均質、しまりがない
7　10YR4/4　褐　微砂　均質
8　10YR2/2　黒褐　シルト　ほぼ均質
9　10YR2/2　黒褐　シルト　焼土微量含む

第90図　ST9846



第91図　ST9846出土遺物

表32　ST9846出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
91	1	須恵器	蓋	120			5	緻密	良好	N5/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	2	須恵器	無台坏	140	76	36	5	砂粒混入	良	7.5YR6/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	3	土師器	鉢	(100)	66	68	5	砂粒混入	良好	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	土師器	鉢	144	82	127	4	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	土師器	甕	(162)			4	砂粒混入	良	10YR7/4にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	6	土師器	甕	(210)			6	砂粒混入	良	5YR7/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	7	土師器	甕		78		6	砂粒混入	良	10R5/6赤	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	8	土師器	甕	(254)			6	砂粒混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ	ハケメ		

５は４と類似する形態と考えられるが、４に比べ口縁部と端部の摘み出しが僅かに長く、口径も大きい。７の内面は、底部と体部との明瞭な境がなく、底部に平坦面をもたない。外面は底部からの立ち上がりを明瞭にもつことから、底部は肥厚し、重量感がある。また、この底部の形態からは、器形が鉢になることも考えられる。調整は内外面ともロクロナデである。

91－６、８は土師器の長胴甕である。６は内湾気味の体部から頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部を上方に引出したものである。火熱のため調整痕をほとんど止めないが、外面の一部にロクロナデが認められる。８は頸部に向かって直線的に窄まる体部をもつ。頸部は大きく外反し、やや肥厚した口縁部に至る。６と同様に調整は不明瞭だが、外面にロクロナデ、内面の体部から口縁部にかけて横方向の細かいハケメが認められる。

これらの土器群は、無台坏や蓋の特徴から、９世紀前半代と考えられる。

【ST9847】第92図

33－214グリッドに位置する。主軸方向はN－166°－Wである。平面形は、東西3.0m、南北3.2mのほぼ方形を基本にする。東辺の一部に1.8m幅で約40cmの張り出しが見られるが、土層断面の観察からは、ST9847が使われなくなった後に掘込まれた可能性を含ませる。確認面からの深さは約30cmを測り、壁は全体的に急である。カマドは南辺の西寄りに設けられる。竪穴内に短かめの袖があり、燃焼部の約半分が竪穴外にある構造である。燃焼部は長楕円形を呈する。煙道は約40cm確認できた。竪穴内の中央部北寄りには、径50cm程の円形の焼土が広がり、床面が強く焼けていることを確認できる。床は東側の張り出し部と西辺際に溝状の掘り方が認められる。また、貼床は中央部に施される。南辺の東西角に径30～50cmの楕円形の掘込みを検出したが、柱穴とは考えがたい。覆土は黒褐色のシルトを主とするもので、後に掘込まれたと考えられる箇所以外は自然堆積によるものである。

出土遺物は、須恵器鉢（第92図１）１点、黒色土器無台坏（第92図２）１点、土師器甕片１点のみで、極めて少ない。

92－１は小さい底径から内湾する体部が立ち上がり、頸部で僅かな窄まりを見せるが、口を大きく開く。口縁部は内側に「く」の字状に屈曲し、端部を細く摘み出す。外面の底部から体部下部に平行タタキの痕跡をとどめる。下半には縦方向のケズリが施される。中央部にはカキメ、上半はロクロナデ調整である。調整の順序はロクロナデ・タタキ→カキメ→ケズリと考えられる。内面にはロクロナデ調整とハケメが認められる。

92－２はヘラ切りと考えられ、底径、口径が大きく、身も深い。体部は僅かに内湾し、変化することなく口縁部に至る。器厚は、底部を始め全体的に厚い。外面は磨滅し、調整は不明瞭であるが、体部下部にケズリが入れられ、他はロクロナデ調整が施されたものと推測される。内面も剥離し、器面は部分的にしか残存しない。確認できるところでは、比較的細かい横方向のミガキが入れられ黒色処理される。

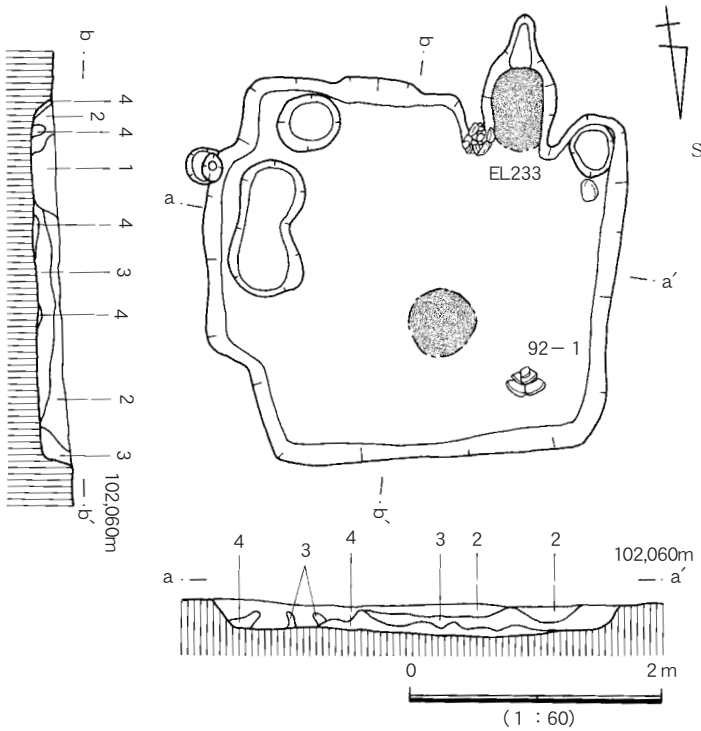
これらの土器は、竪穴内の供伴遺物も少なく、器形の類例も見られないことから、所属時期の判断は難しい。しかし、鉢の口縁部の作りや調整、あるいは口径、底径の大きい無台坏などから、８世紀後半代に想定できるものと考えられる。

【ST9857】第93図

27・28－210・211グリッドに位置する。主軸方向はN－174°－Wである。平面形は方形を呈するものと考えられるが、西側をSD9587によって壊されているため全形は不明である。規模は南北4.3m、東西は3.2mまで遺存する。確認面からの深さは約20cmと浅く、壁の掘込みは比較的急角度を保つ。カマドは完全に失われているが、床に残る焼土の状況から、南辺の西寄りに設けられたものと推測される。また、南側の東寄りにも径約50cmの焼土を検出した。この

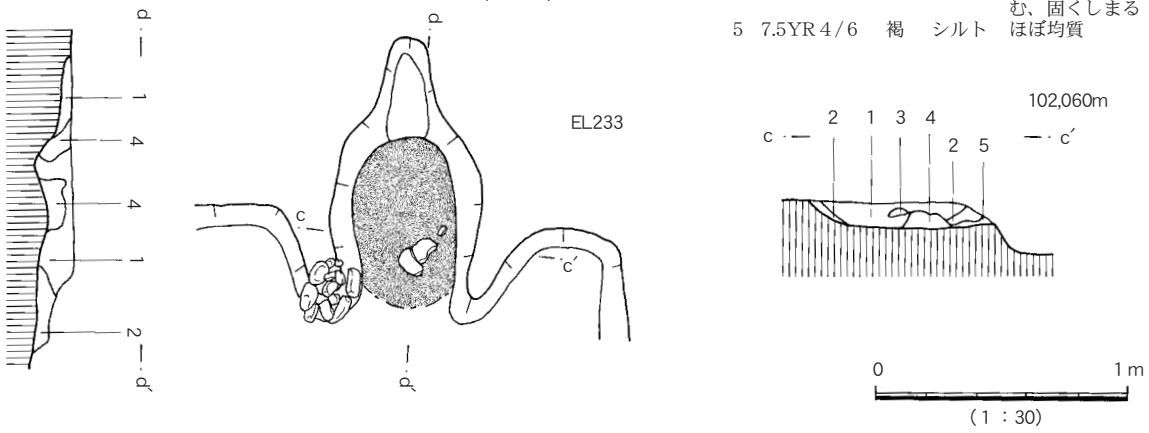
表33　ST9847出土土器観察表

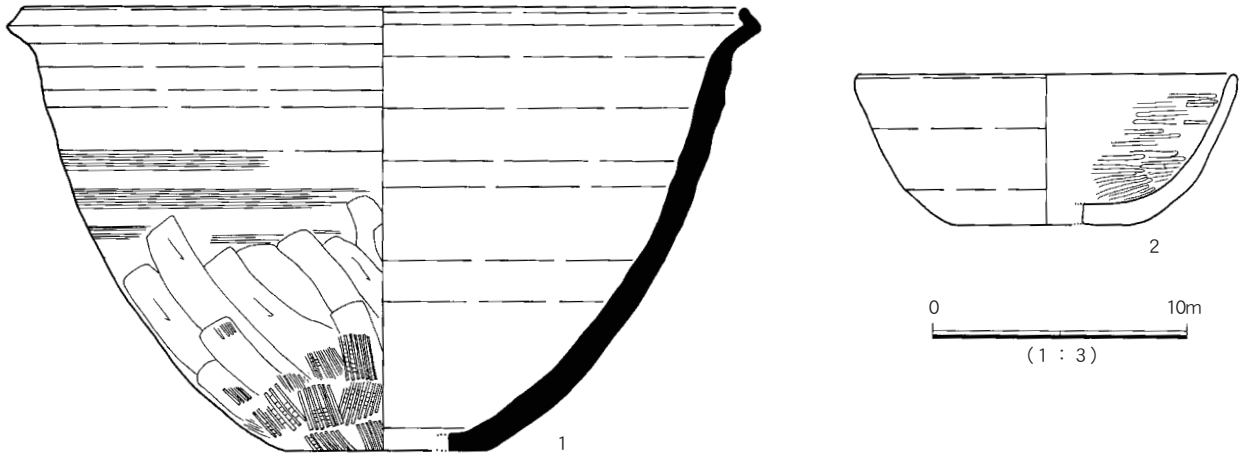
挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
92	1 須恵器	鉢	(286)	(80)	175	8	粗砂混入、骨針	良	5Y4/灰	ケズリ、カキメ、タタキ	ロクロナデ	タタキ	
	2 黒色土器	無台坏	(150)	(80)	60	7	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ミガキ		



ST9847
1 10YR2/2 黒褐 シルト 黒色シルト、褐色シルト少量含む、固くしまる
2 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
3 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質、褐色シルト微量含む
4 10YR4/4 褐 シルト 黒褐色シルトブロック斑状に含む

EL233
1 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
2 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト 焼土、褐色シルト粒を斑状に含む、固くしまる
4 10YR2/2 黒褐 シルト 焼土ブロック、炭化粒含む、固くしまる
5 7.5YR4/6 褐 シルト ほぼ均質

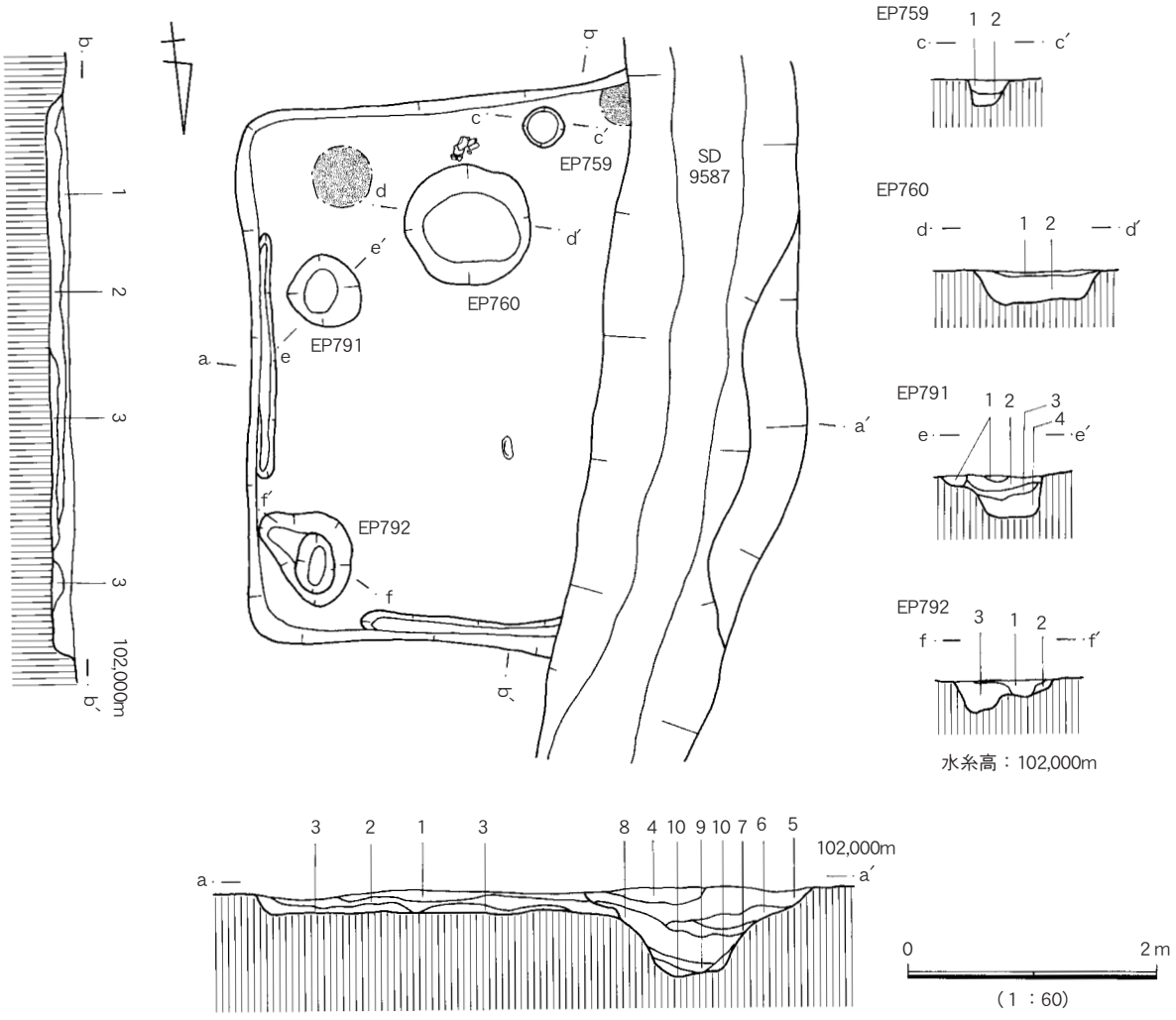




第92図　ST9847　出土遺物

焼土も床まで焼けていることが確認された。床は全面に貼床され、堅く締った状態である。柱穴は東壁際に２基検出された。EP791は南壁から1.5ｍ離れた所にあり、径60㎝程のほぼ円形を呈し、深さは35㎝を測る。EP792は南東角にあり、径60～80㎝の不整楕円形を呈し、深さは25㎝である。南北の柱間距離は2.2ｍである。対称する西側にも２基の柱穴の存在が推定されることから、４基の柱で構成する建物と考えられる。覆土は自然堆積によるものである。

出土遺物は、須恵器無台坏３点、甕２点、土師器甕片179点であるが、小破片の資料のみで図化できるものはない。本遺構の周辺には竪穴建物跡が比較的密集することから、隣接する遺構を検討して、所属時期を考えたい。



ST9857
1	10YR２/２	黒褐	細砂	褐色細砂少量含む
2	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色細砂少量含む
3	10YR２/２	黒褐	シルト	砂質、ほぼ均質
4	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色細砂ブロックを縞状に含む
5	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色細砂粒少量含む
6	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色細砂ブロックを縞状に含む
7	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色細砂粒微量含む
8	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色細砂を縞状に含む
9	10YR４/４	褐	シルト	黒褐色シルトブロックを斑状に含む
10	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色細砂微量含む

４～10はSD9587の覆土

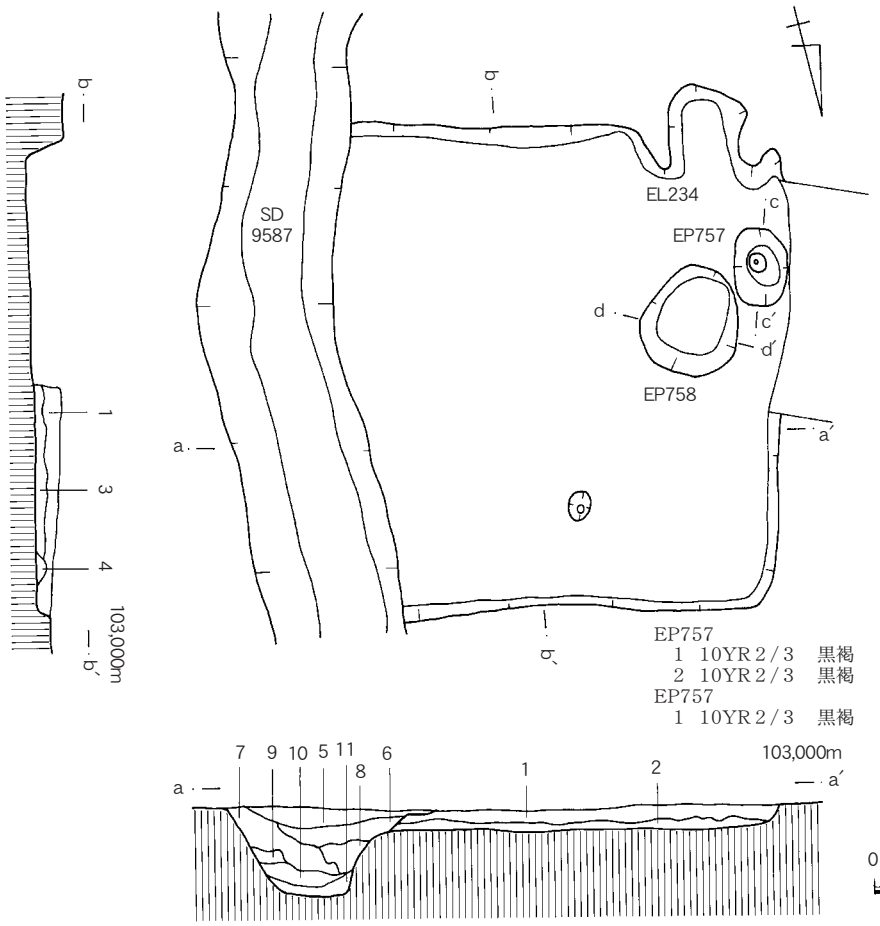
EP759
1	10YR２/２	黒褐	シルト	ほぼ均等
2	10YR４/４	褐	シルト	黒褐色シルト微量含む

EP760
1	10YR２/２	黒褐	シルト	ほぼ均質
2	10YR３/３	褐	シルト	褐色砂質シルトブロックを斑状に含む

EP791
1	10YR２/２	黒褐	シルト	均質
2	10YR４/４	褐	シルト	暗褐色微砂ブロック微量含む
3	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色シルトブロック斑状に含む
4	10YR３/３	暗褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む

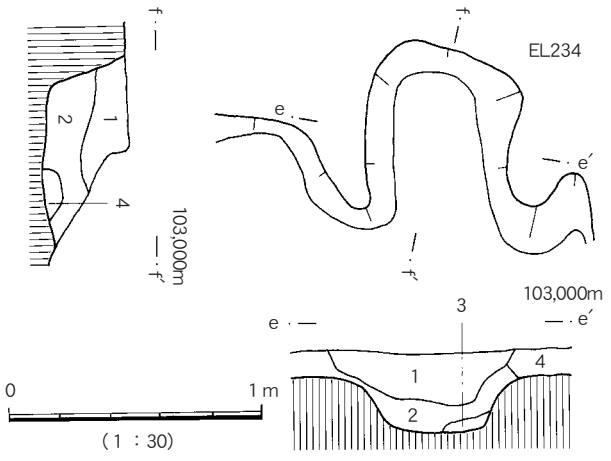
EP792
1	10YR２/２	黒褐	シルト	均質
2	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
3	10YR３/３	暗褐	シルト	褐色、黒褐色シルト粒を斑状に含む

第93図　ST9857



EP757
1 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルトブロック微量含む
2 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルト粒少量含む

EP757
1 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む



ST9859
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色砂質シルト少量含む
2 10YR3/4 暗褐 シルト 褐色砂質シルト、黒色シルト少量含む
3 10YR3/3 暗褐 シルト 褐色シルト粒微量含む
4 10YR3/4 暗褐 シルト 均質
5 10YR3/1 黒褐 シルト 褐色砂質シルト粒少量含む
6 10YR3/1 黒褐 シルト 均質
7 10YR3/2 黒褐 シルト 褐色砂質シルト粒、黒色シルト粒少量含む
8 10YR3/2 黒褐 シルト 粘性、均質
9 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒少量含む
10 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性、褐色シルト粒多量含む、固くしまる
11 10YR3/3 暗褐 シルト 粘性、砂含む

5～11はSD9587の覆土

EL234
1 10YR3/1 黒褐 シルト 褐色シルト粒少量含む
2 10YR3/3 暗褐 シルト 焼土粒を帯状に多量含む
3 10YR3/3 暗褐 シルト 焼土粒、褐色シルトを帯状に含む
4 2.5YR4/6 赤褐 焼土層

第94図　ST9859

【ST9859】第94図

26・27－211・212グリッドに位置する。主軸方向はN－161°－Wである。平面形は、東辺をSD9587によって壊され失っているが、方形を呈するものと考えられる。南北長は3.8ｍを測り、東西は3.5ｍまで確認できる。壁は比較的急な掘込みをとどめるが、確認面からの深さは、削平を受けていることもあり、20㎝程しかない。カマドは南辺の西角に設けられる。燃焼部の約半分を竪穴外にもつ構造である。床は貼られることなく、地山を利用する。柱穴は確認できない。覆土は自然堆積によるものと考えられる。

出土遺物は、須恵器蓋３点、甕４点、土師器無台坏１点、甕４点の計12点で極めて少なく、図化できる資料にも恵まれなかった。

【ST9860】第95図

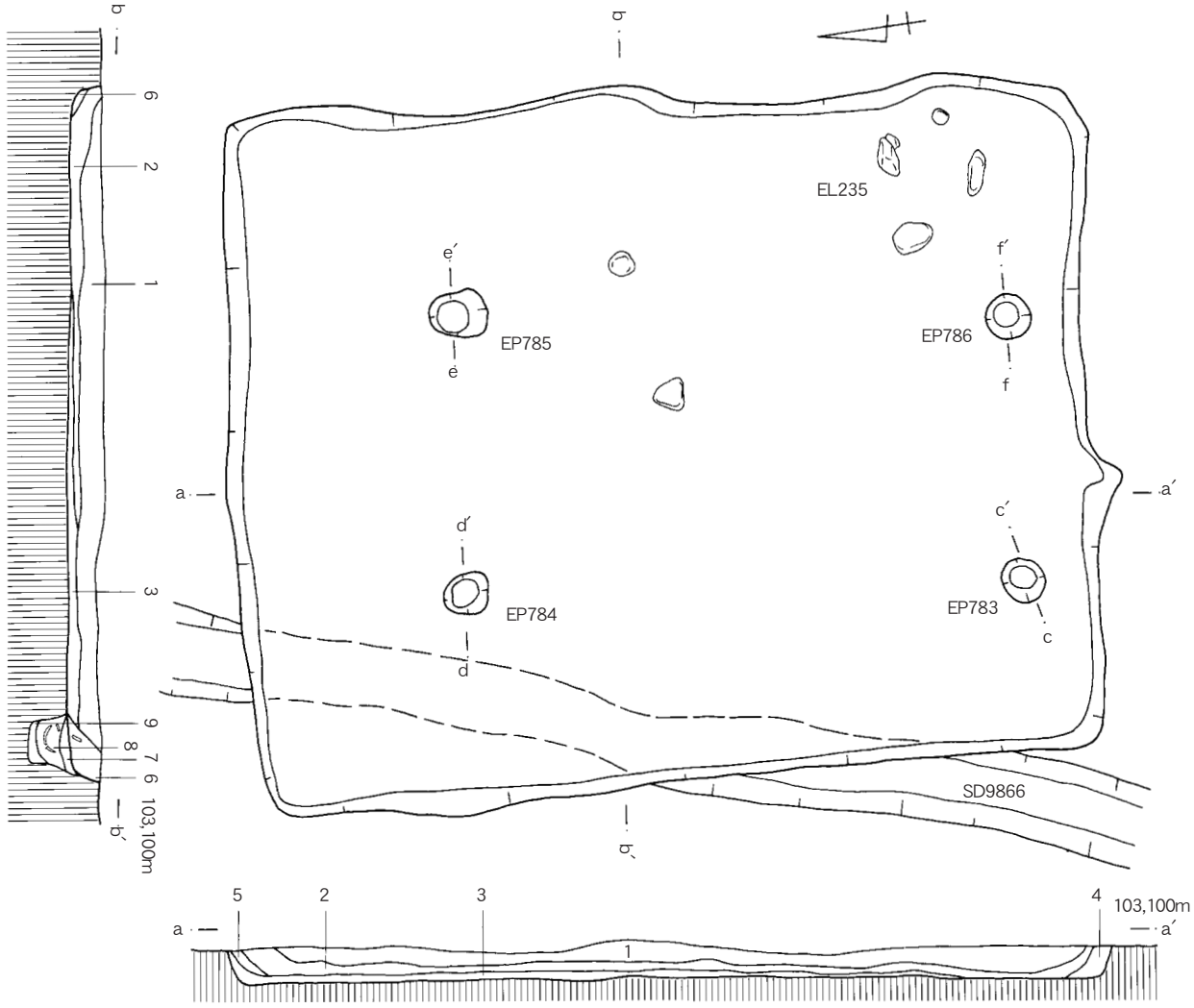
28・29－211・212グリッドに位置する。主軸方向はN－96°－Eである。平面形は、東西5.3ｍ、南北7.2ｍの南北に長い方形である。壁の掘込みは急で、確認面からの深さは約30㎝である。カマドはほとんど形をとどめず、焼土や礫が僅かな痕跡を残すのみである（第96図）。焼土は東辺の南角にあり、焼けた床以外に火熱を受けている粘土塊が見られる。また焼土の周囲には、長楕円あるいは長方形の自然礫が出土しており、これらはカマドの構築材に用いられたものと推測される。東壁には張り出しが見られず、その遺存状況から、竪穴内に燃焼部をもつ構造のものと考えられる。柱穴は４基確認された。EP784、785北側柱列は、北壁から約1.8ｍ離れ、東西壁からは各々約1.6ｍ離れる。柱間距離は2.3ｍである。径約30㎝の楕円形を呈し、深さは50㎝を測る。一方南側柱列EP783、786は、南壁から約60㎝離れ、EP786は東壁から2.0ｍ、EP783は西壁から1.4ｍの所にある。柱間距離は2.2ｍであり、北側柱列より狭い。柱穴は径約30㎝の円形で、深さは40～50㎝を測る。EP786がやや西側にずれるが、カマド前の空間確保に起因するものと考えられる。床は、ほぼ全面に貼床され、堅く良く締っている。覆土は自然堆積によるものである。他遺構間では、SD9866と重複関係にあり、SD9866を埋めた後、貼床されST9860が作られている。

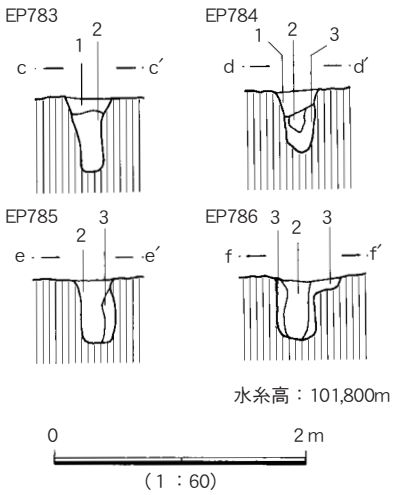
出土遺物は、カマドの周囲に集中して分布する傾向が見られた。須恵器蓋９点、無台坏56点、有台坏２点、長頸壷１点、甕31点、横瓶３点の102点、黒色土器無台坏２点、土師器有台坏１点、甕片等649点の650点、計754点が出土している（第96～98図）。

96－１の須恵器蓋は、リング状のつまみをもち、天井部には回転ヘラケズリが施される。体部は角度をもって立ち上がり、器高は高い。口縁部は内側に折り曲げられ、端部は丸みをもつ。

96－２はヘラ切りの有台坏で、口径、底径が大きく、身は浅い。断面四角形の比較的高い台が「ハ」の字状に貼付けられる。高台の一部は、焼成時における底部の歪みにより亀裂が生じている。体部下半は内湾し丸みをもち、上半から口縁部は外反する。

96－３、５は回転糸切りの無台坏、４はヘラ切りの無台坏である。６は底部を欠損するため、有台坏の可能性も考えられる。３は口径、底径が大きく、身が浅い。底部には、目の粗い糸切り痕が認められる。体部は内湾し、口縁部で僅かに外反する。内外面ともロクロ目が顕著に見られる。底部の器厚が薄く、得に中心部は端的である。４はやや小振りで、体部から口縁部に





ST9860

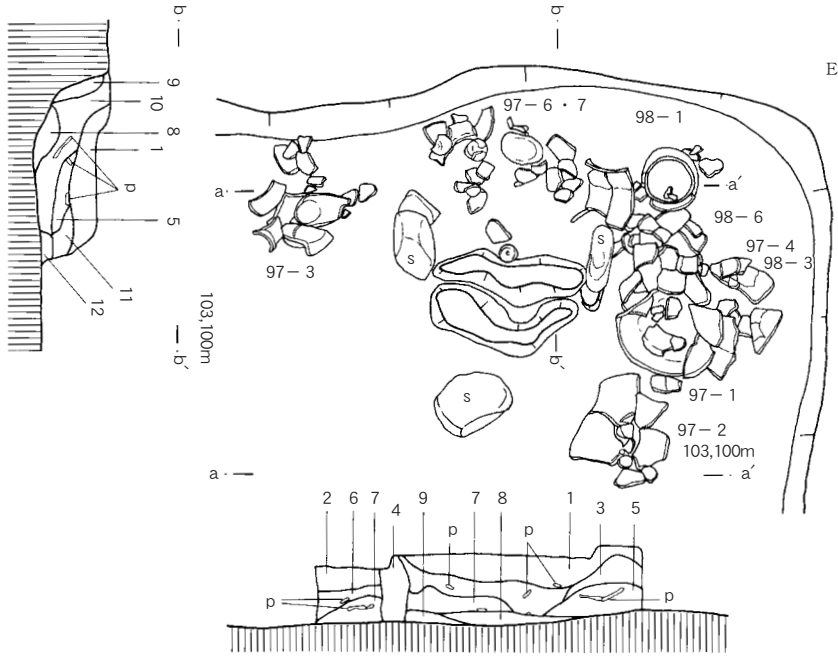
1	10YR 2/2	黒褐	シルト	均質、やわらかくしまりない
2	10YR 2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む、やわらかい
3	10YR 3/4	褐	シルト	黒色粘質シルト少量含む
4	10YR 3/4	褐	シルト	黒色シルト粒少量含む
5	10YR 3/2	黒褐	シルト	黒色シルト粒少量含む
6	10YR 2/1	黒	シルト	均質、しまりがない
7	10YR 3/4	褐	シルト	黒色シルト粒多量含む
8	10YR 3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
9	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒色シルト粒少量含む、粘性

6～9はSD9866の覆土

EP783・784・785・786

1	10YR 2/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む
2	10YR 2/3	黒褐	微砂	褐色シルト粒微量含む
3	10YR 3/3	暗褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む

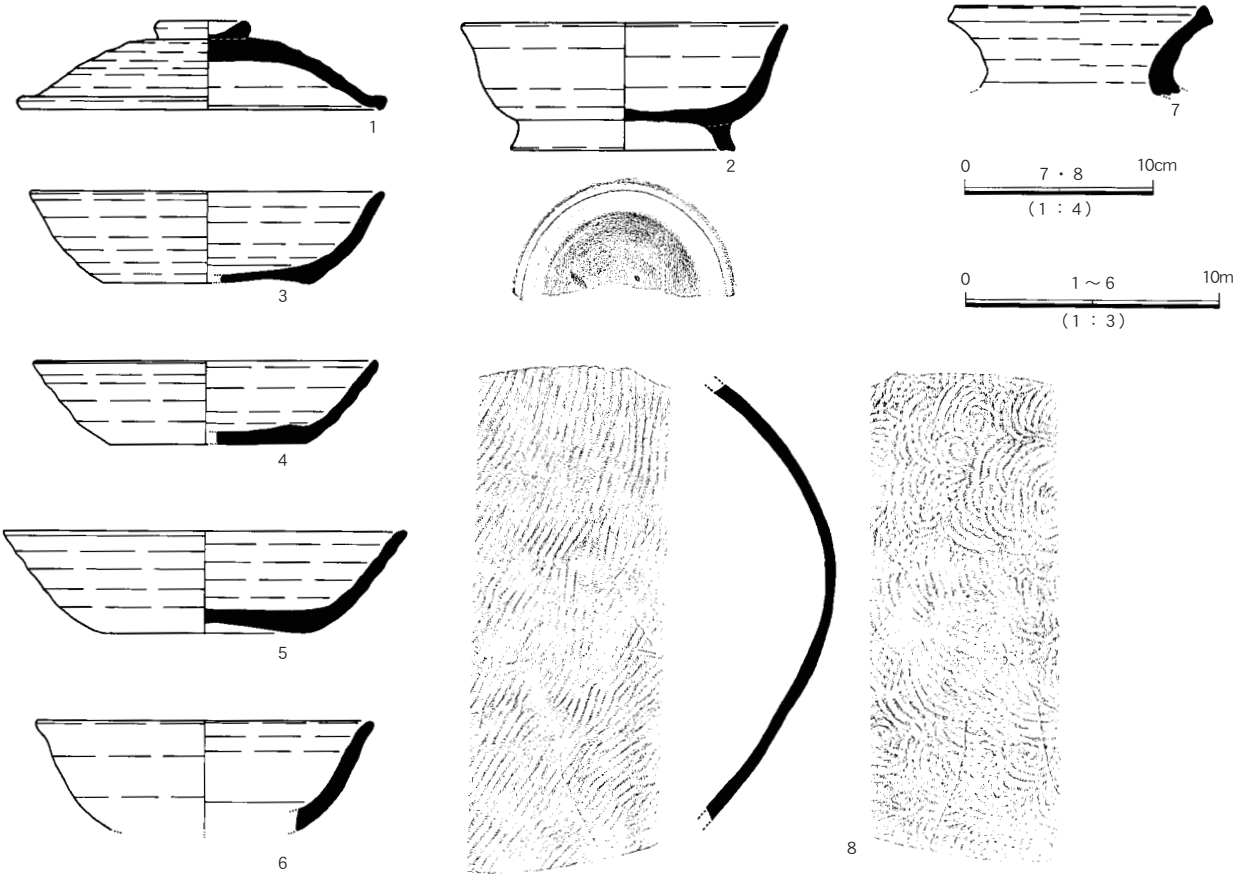
第95図　ST9860



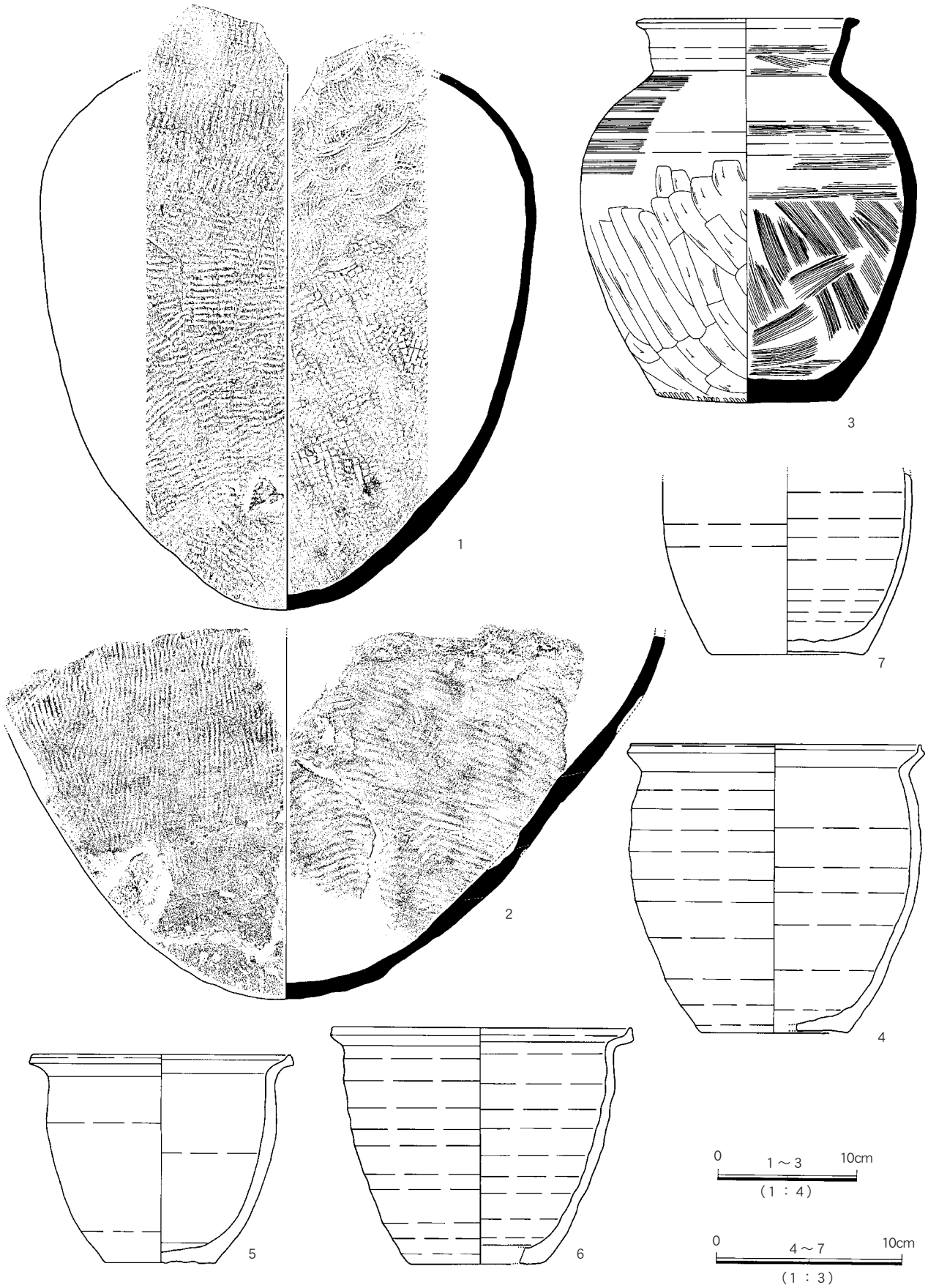
EL235

1	10YR２/２	黒褐	シルト	均質、しまりがない
2	10YR２/３	黒褐	シルト	焼土粒少量、褐色シルト粒少量含む
3	10YR３/３	暗褐	シルト	褐色シルト粒多量、黒色シルト粒少量含む
4	10YR３/４	暗褐	シルト	焼土粒少量、黒色シルト粒多量含む
5	10YR３/２	黒褐	シルト	焼土粒を帯状に多量含む
6	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
7	10YR３/１	黒褐	シルト	焼土粒を帯状に多量含む
8	10YR３/３	暗褐	シルト	焼土含む
9	10YR３/４	暗褐	シルト	砂質
10	7.5YR３/３	暗褐	シルト	焼土粒を帯状に多量含む
11	10YR３/４	暗褐	シルト	均質、やわらかい
12	10YR２/１	黒	シルト	均質、やわらかくしまりがない

0　1m
（1：30）



第96図　EL235、ST9860出土遺物１



第97図　ST9860出土遺物２

かけて直線的に立ち上がる。ロクロ目は大きく明瞭である。５は口径、底径が大きく、身は浅い。体部は外反気味に立ち上がる。底部内面の使用痕が顕著である。６の体部は内湾し丸みをもつ。口縁部はやや肥厚し外反する。

96－７は横瓶の口縁部資料と考えられる。口縁端部が僅かに内側に摘まみ上げられたもので、頸部にかけて全体的に肥厚する。頸基部には接合された体部の一部が残る。

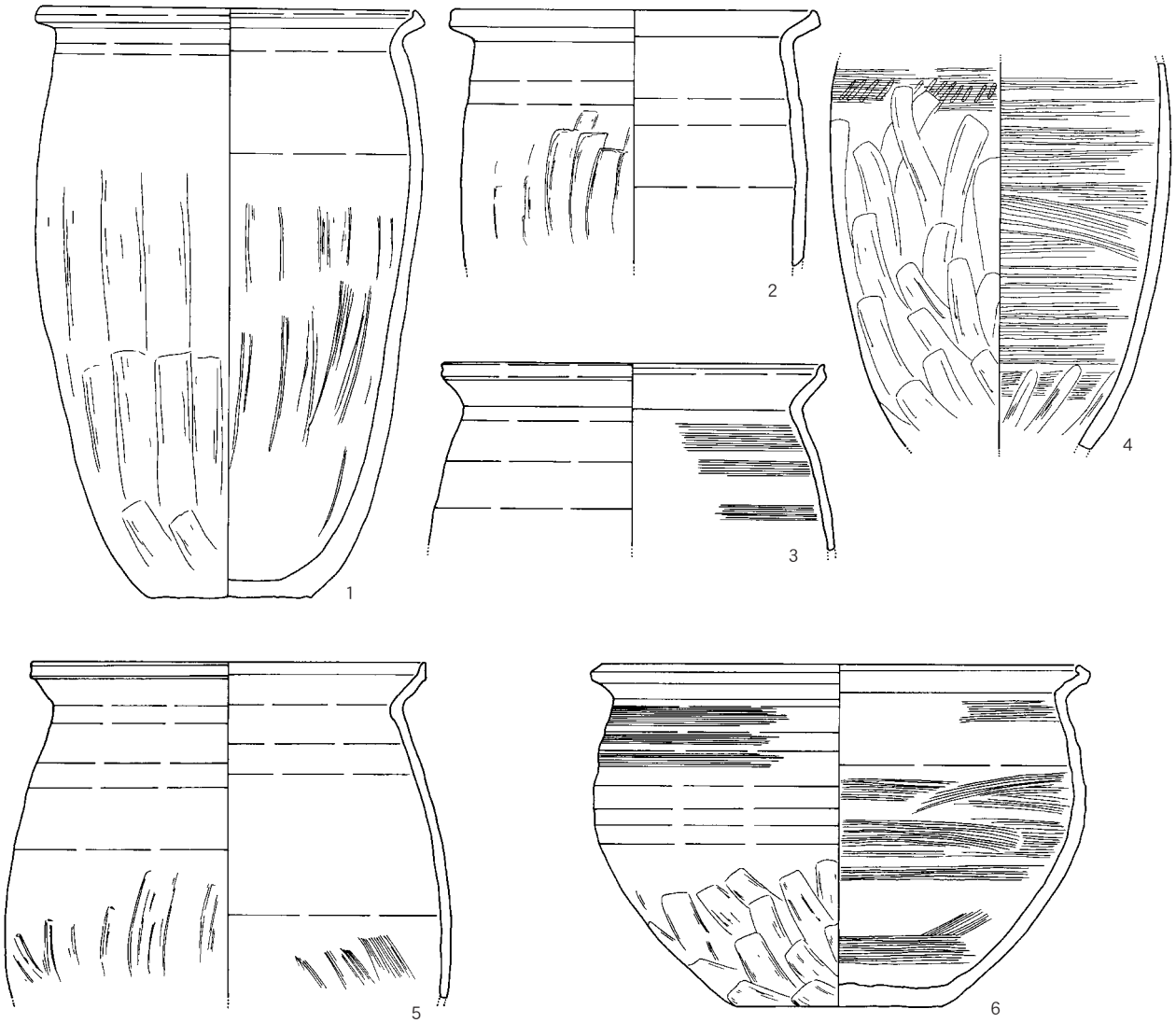
96－８、97－１、２は須恵器甕である。96－６は肩から体部下半までの資料である。体部の角度や器厚から小型の甕と推測される。外面はタタキの後、横方向のナデが数カ所に入れられる。内面には同心円のアテが細かく入る。97－１は頸部から口縁部までを欠くが、肩から底部まではそろっており、約１/２が残存する。肩は緩く傾斜するなで肩で、体部との境に最大径を有する。体部中位は僅かに窄むが直立に近い角度である。体部下部では角度を変え、一気に底部まで至り、丸底の底部となる。器厚は底部でやや厚くなるものの、全体的に薄手である。外面は格子状のタタキが施される。肩から底部まで同一工具によるものと考えられるが、肩は縦方向、体部は基本的に横方向、底部は中心から放射状に叩かれる。内面は、頸部に近い部分に同心円のアテ痕が残り、肩から体部との境までは、同心円アテを利用した下半円のアテ痕に変化する。さらに、体部中位から底部にかけては格子状のアテ具へと変わる。底部は叩き出しによるもので、中心部にはアテ具の痕跡が認められない。２は大甕の底部である。焼成が不良なうえ２次的な火熱も受けているため、器面は内外を問わず火はねが著しく荒れている。外面は縦方向の平行タタキ、内面は横方向の平行アテ具による痕跡が残る。また、体部中位付近からは、青海波のアテ痕も認められる。

97－３は須恵器の広口壷である。頸は短く、口縁部を外側に引出す。肩はなで肩で、体部との境に最大径を有する。体部下半にかけては緩やかに窄み、平底の底部へと至る。外面の肩部にはカキメが施され。体部は底部まで斜方向のケズリが上から下へ入れられる。底部にはタタキの痕跡が認められる。内面にはカキメとナデ調整が見られる。器厚が厚く重量感がある。

97－４～７は土師器小型甕である。４の口縁部は「く」の字状に外反し、端部を上方に細く摘まみ上げたものである。体部の中央に最大径をもつ。底部は回転糸切りである。５も回転糸切りで、体部の膨らみは小さく、上半に最大径がある。口縁端部は摘み出しが弱く丸みをもつ。６は体部が僅かに内湾するが、頸部の窄まりはほとんどない。ロクロ目の凹凸が顕著である。７は回転糸切りの大きめの底部である。残存する体部から最大径は中央部にあると推測される。

98－１～５は土師器長胴甕である。１は火熱により、調整が不明瞭である。体部の外面下部は縦方向のケズリ調整の痕跡が認められる。口縁端部は内側に折り曲げられたものである。２は口縁端部が肥厚し摘み出しは弱い。体部外面は高い位置から縦方向のケズリ調整が入れられる。３は口縁端部が上方に引出される。体部内面にはハケメ調整が見られる。４の上部にはタタキの痕跡も認められ、タタキ→ロクロナデ→ケズリの順で調整が行われている。５の口縁端部は比較的シャープに摘み出されている。体部外面中位から縦方向のケズリ調整が入る。

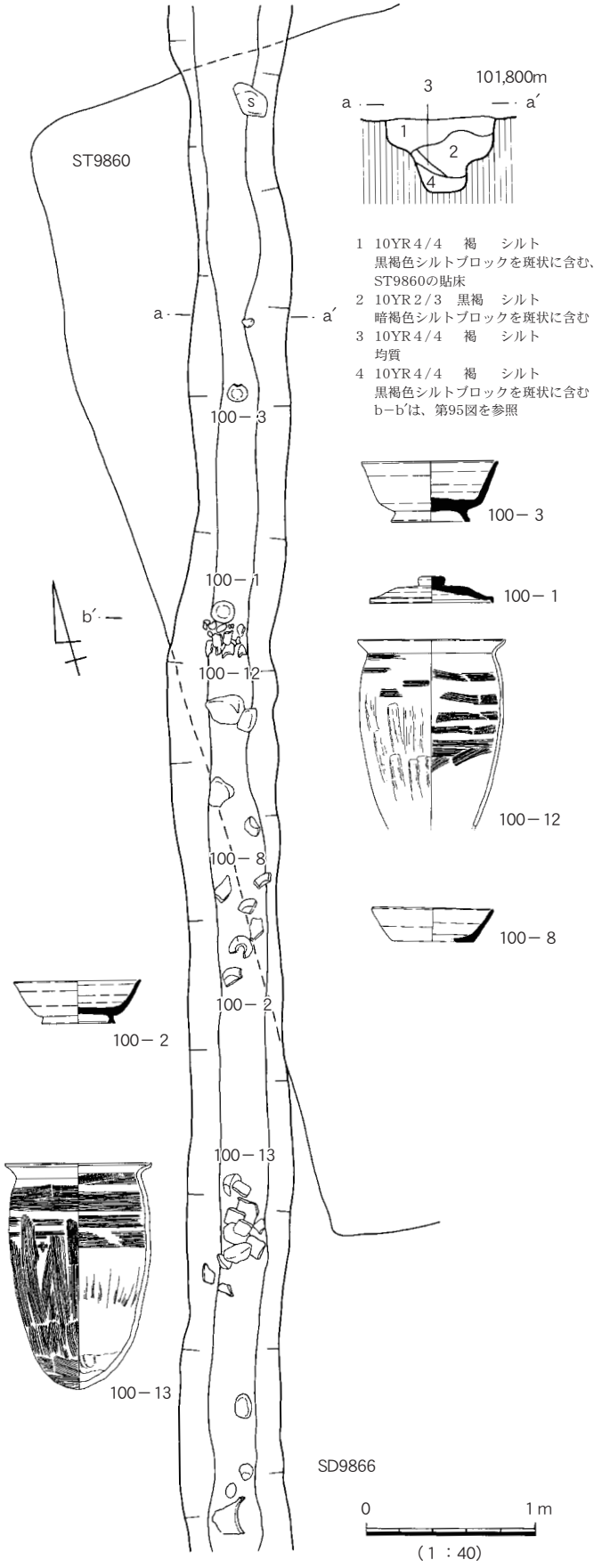
98－６の土師器堝は、体部は丸みをもち、最大径を中央部にもつ。口縁部は屈曲し、端部は内側に折り曲げられる。火熱は破片毎に度合いが違うことから、破損後に受けたと推測される。



第98図　ST9860出土遺物３

表34　ST9860出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
96	1	須恵器	蓋	134		35	5	緻密、骨針	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	有台坏	(128)	(88)	50	8	細砂混入、骨針	良	5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	須恵器	無台坏	(140)	(80)	36	4	砂粒混入	良	7.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	無台坏	(136)	(76)	33	4	細砂混入	良	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	須恵器	無台坏	(158)	76	40	4	砂粒混入、骨針	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	無台坏	(134)			5	細砂混入	良好	7.5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	7	須恵器	横瓶	(132)			9	砂粒混入	良好	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ		
	8	須恵器	甕				6	砂粒混入	良好	N4/灰	タタキ	アテ痕		
97	1	須恵器	甕				8	砂粒混入	良好	2.5Y4/2暗灰黄	タタキ	アテ痕		
	2	須恵器	甕				12	砂粒混入	不良	10YR8/1灰白	タタキ	アテ痕		
	3	須恵器	壷	160	130	276	9	緻密	良	N5/灰	ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	タタキ	
	4	土師器	甕	(154)	(80)	155	4.5	細砂混入	良	7.5YR7/3にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	RP258
	5	土師器	甕	(142)	59	112	6	砂粒混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	RP302
	6	土師器	甕	160	69	127	5	砂粒混入	良好	10YR7/6明黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	7	土師器	甕		82	97	4	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
98	1	土師器	甕	215	90	330	7	砂粒混入	良	5YR6/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		RP255
	2	土師器	甕	(206)			7	細砂混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	土師器	甕	(218)		105	6	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ、ハケメ		
	4	土師器	甕				6	粗砂混入	良	7.5YR6/6橙	ケズリ､タタキ､ハケメ	ロクロナデ		RP301
	5	土師器	甕	(220)			5	細砂混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		
	6	土師器	塝	270	115	193	7	砂粒混入	良	7.5YR8/8黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		



第99図　SD9866

【SD9866】第99図

25～29－210・211グリッドに位置するが、２期調査区から続く溝であり北限はSD7085によって切られる22－212グリッドに端を発する。僅かに曲線を描くが概ね直線的で、磁北から約15°東へ傾く。検出した長さは43ｍに及ぶ。幅は上場で50～60㎝、下場で20～30㎝を測る。深さは約60㎝である。壁は中場をもつ場所も見られるが、大部分は急角度の掘込みで、底面は平坦に作られる。覆土は黒褐色のシルトを主体とするもので、人為的に埋め戻されたと推測される。

遺物はST9860と重複する場所並びにその南側から集中して出土した。出土した遺物は、須恵器蓋２点、無台坏27点、有台坏３点、壷１点、甕16点、黒色土器１点、土師器無台坏１点、甕239点の計290点である（第100図）。

100－１はロクロナデのみの調整である。天井部は平坦に作られるため、体部との境は明瞭である。また、この境の部分は器厚が極度に肥厚する。口縁部は直角に折り曲げられ、端部は下方に短く引出される。つまみの厚さはあるが形骸化したものである。

100－２は口径、底径が大きく、身は浅い。体部は直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。底部はヘラ切りで、高台貼付けにともなうナデ調整が見られる。高台は端部を外と内の両側に摘み出したもので、ほぼ垂直に貼付けられる。なお、底部には「花」と考えられる文字が墨書される。100－３は、口径、底径が大きく、器高も高い。全体的に大振りな印象を与える。体部から口縁部にかけて

外反気味に立ち上がる。底部はヘラ切り後無調整である。厚く四角い高台は「ハ」の字状に貼付けられる。器厚は厚く、特に底部は10㎜超えるため、重量感がある。外面には、焼成時に入った貫入状の多くのひびが、体部下部を一周する。

100－４～９は全てヘラ切りによる須恵器無台坏である。４は身の深さに変化はないが、口径、底径がやや小型化したものである。直線的な体部は、口縁部に至っても変わらず、逆台形を呈する。５はヘラ切り後ナデ調整が施されたものである。体部は幾分内湾し、口縁部で僅かに外反する。残存率は１/２であるが、底部の中央には、径約25㎜の円形の穴があいていたことが推測される。この穴は、内側に剥離痕が認められ、焼成後に外側からあけられたものと考えられる。６の底径は大きいが、体部の開きが小さく、口径は一般的である。体部は僅かに内湾し、口縁部は外反する。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。特に内面の使用痕が顕著である。７は口径、底径が大きく、身は浅い。底部はヘラ切り後ナデ調整が施され、草木状の圧痕も認められる。薄い体部は内湾し、口縁部で外反する。内外面とも火襷が残る。底部内面の使用痕が顕著である。８もヘラ切り後ナデ調整され、草木状の圧痕が認められる。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、逆台形状を呈する。底部には、大きさが違うが、５と同じように穴があけられる。穴は径約50㎜で、焼成後内側からあけられたものと推測される。底部は元より内外面の体部に至まで顕著な使用痕が認められる。９はヘラ切り後無調整である。体部は薄く、内湾してやや肥厚する口縁部に至る。

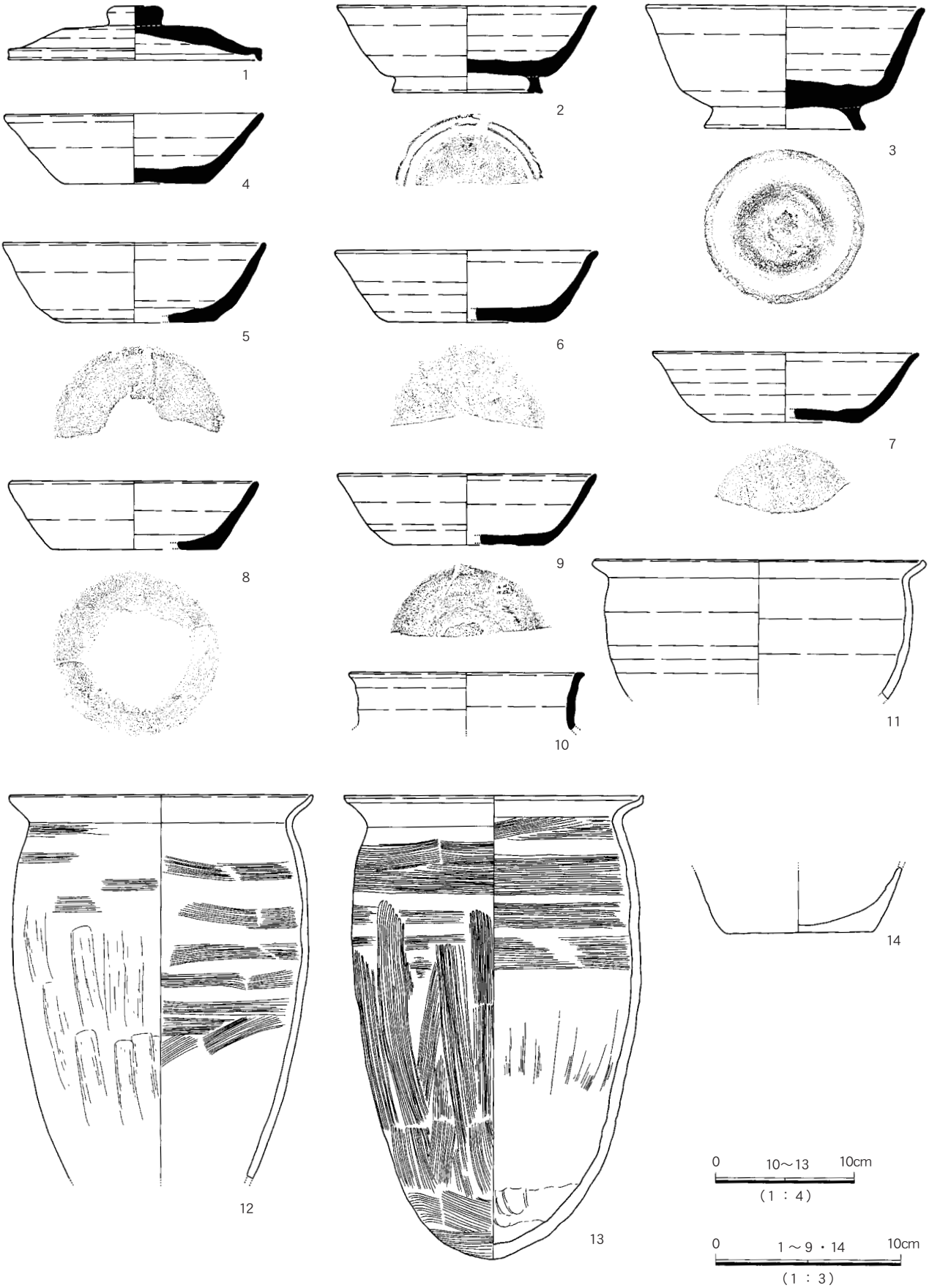
100－10は広口壷の頸部から口縁部の資料と考えられる。頸部は僅かに開き、口縁部は外側に小さく摘み出される。両面に灰かぶりが見られ、一部自然釉が付着する。

100－11は土師器堝である。体部は内湾し、上部に最大径を有する。口縁部は大きく外反し、端部は内側に小さく摘み出される。

100－12～14は土師器の甕である。12は体部が内湾し、最大径を上半部にもつ。頸基部は窄むが、外反は弱く、緩い「く」の字状を呈する。口縁部は直線的に延び、端部は僅かに上方に摘み出される。体部外面は上部にロクロナデが残り、上半部から縦方向のケズリが入れられる。内面はハケメ調整である。13は丸底の長胴甕で、所謂砲弾型を呈する。最大径は体部上部にあり、下方へ緩やかに窄む。口縁部は大きく外反し、端部を上方に細く摘まみ上げる。外面上部はカキメが入れられ、その後縦方向のハケメが下から上へ施される。さらに底部には円を描く

表35　ST9866出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
100	1 須恵器	蓋	136		29	7	緻密、骨針	良好	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2 須恵器	有台坏	(140)	(80)	47	3	砂粒混入、骨針	良	N3/暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	底部に墨書「花」？
	3 須恵器	有台坏	152	87	67	6	砂粒混入、骨針	良好	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4 須恵器	無台坏	140	78	39	3.5	砂粒混入、骨針	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	28－212
	5 須恵器	無台坏	(142)	86	43	6	砂粒混入、骨針	良	5YR5/6明赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	6 須恵器	無台坏	(140)	(87)	39	5	砂粒混入、骨針	良	5Y5/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	7 須恵器	無台坏	(144)	(80)	38	3	砂粒混入	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	8 須恵器	無台坏	134	(90)	37	5	細砂混入	良	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	内面磨滅
	9 須恵器	無台坏	(142)	(84)	38	4	砂粒混入	良	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	10 須恵器	壷	(170)			5	砂粒混入	良	10YR2/1黒	ロクロナデ	ロクロナデ		
	11 土師器	堝	(236)			5	砂粒混入	良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	12 土師器	甕	(220)			5	砂粒混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ、ケズリ	ハケメ		
	13 土師器	甕	116		334	10	粗砂混入	良	7.5YR6/8橙	ハケメ、ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、ハケメ	カキメ	RP306
	14 土師器	甕		80		6	細砂混入	良	7.5YR7/4にぶい橙				



第100図　SD9866出土遺物

ようなハケメが入れられる。内面の底部には、粘土紐貼付けによるものと見られる大きな凹凸が２段認められる。丸底は叩き出しによるものではなく、粘土紐あるいは粘土板を使った閉塞成形によるものと考えられる。14は小型の甕であるが、火熱により調整痕は不明である。

これらの遺物は、溝跡出土という性格上厳密な一括性には欠けるが、出土状況からは、ST9860を作る際に捨てられた可能性が高く、また底部穿孔の土器からも同時性を示唆するものと考えられる。坏類には回転糸切りがなく、やや小型化傾向にあるものの、身が浅いものを主体とすることなどから、８世紀後半ととらえておきたい。なお、後続するST9860では回転糸切りが半数近く混在し、土師器甕におけるハケメやケズリの後退化、積極的なロクロナデ調整などから９世紀前半代の所産と考えられる。

【ST9861】第101図

27・28－209・210グリッドに位置する。主軸方向はN－170°－Wである。平面形は、東西4.0m、南北3.5mの東西にやや長い方形を呈する。壁は急角度を保ち、深さは確認面から約30cmを測る。カマドは南辺の東寄りに設けられ、竪穴内に燃焼部をもつ構造である。床は中央部に貼床され、堅く良く締っている。竪穴内には、径50～100cmの円形あるいは楕円形の掘込みが８ケ所で確認できたが、柱穴と考えられるのはEP748のみである。EP748は中央部北寄りにあり、小さく浅いことから支柱的な役割と推測される。覆土は自然堆積によるものと考えられる。

出土遺物は、須恵器無台坏、有台坏、甕、横瓶等６点、土師器甕、埦等９点である。

102－１、２はヘラ切りの有台坏である。１は綾碗を意識したものと考えられる。底部直上に稜線をもち、稜線から口縁部までは外反する。底部には、焼成時の亀裂が約10cmに渡り生じており、器としての使用に耐えるものではない。実際使用痕は認められない。２の体部は丸みを帯び内湾する。断面が三角形の低い台が付けられる。内面に使用痕が認められる。

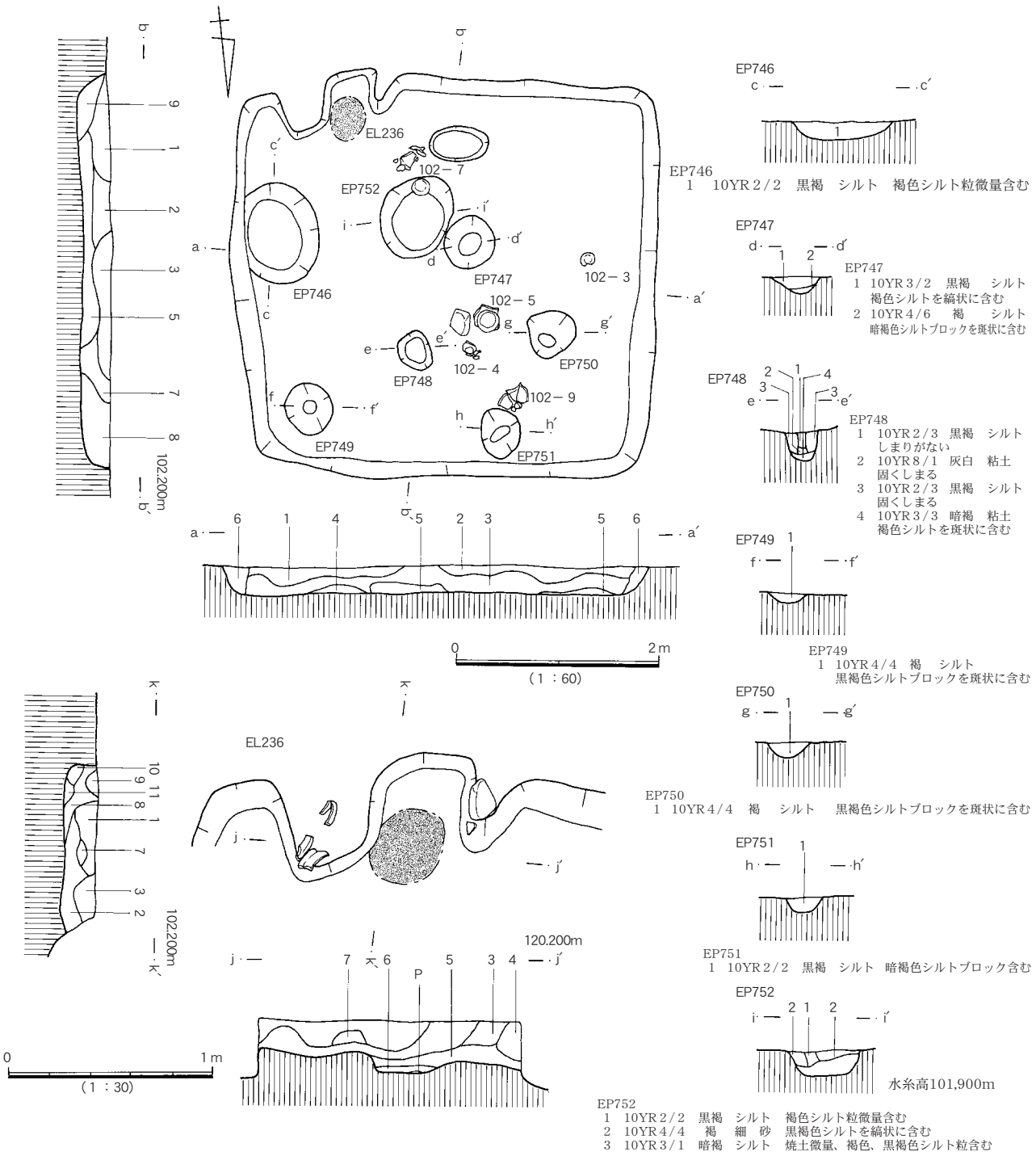
102－３はヘラ切り、４は回転糸切りの無台坏である。３の底部には草木状の圧痕が残る。体部の開きが大きく、身は浅い。口縁部は僅かに外反する。内外面に火襷が認められる。４は底部が厚いため器高は高いが、身は浅い。体部は丸みをもち内湾する。焼成不良で磨滅する。

102－５は口縁端部が外側に摘み出され、内側にも小さな綾をもつ。外面は叩きが行われるが、肩の基部は幅２cm程がナデ消される。頸部には成形時の叩きの痕跡が認められる。

102－６は横瓶の体部片である。閉塞部は剥離する。外面は平行タタキ、内面は青海波のアテ痕が残るが、閉塞部の近くは外面が摩り消され、内面はカキメが施される。外面には自然釉が付着する。内外面に黒色の吹出しがある。

表36　ST9861出土土器観察表

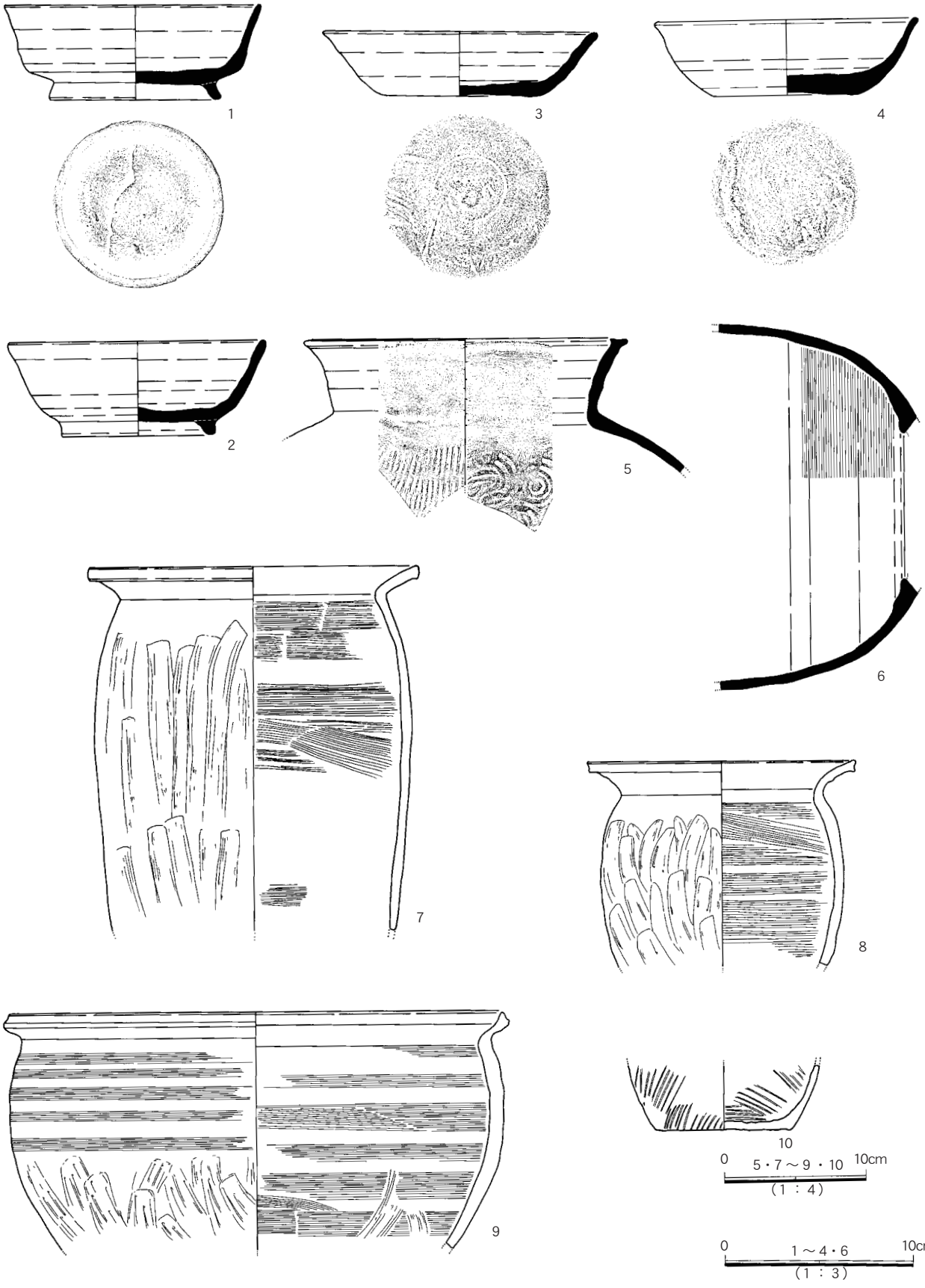
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
102	1	須恵器	有台坏	135	90	50	4	砂粒混入	良好	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	焼成時に亀裂
	2	須恵器	有台坏	(136)	(82)	50	3	細砂混入	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	須恵器	無台坏	146	84	34	4	砂粒混入、骨針	良	10YR6/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	無台坏	(140)	76	40	4	細砂混入、骨針	不良	10YR7/6明黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	甕	228			6.5	緻密、骨針	良	7.5YR4/2灰褐	タタキ	アテ痕		
	6	須恵器	横瓶				7	砂粒混入	良	2.5YR6/2灰黄	タタキ	アテ痕、カキメ		
	7	土師器	甕	(240)			6	粗砂混入	良	7.5YR6/8橙	ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		
	8	土師器	甕	(190)			6.5	粗砂混入	良好	7.5YR7/6橙	ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		
	9	土師器	埦	(346)			10	砂粒混入	良	5YR6/8橙	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､ｶｷﾒ､ｹｽﾞﾘ	ロクロナデ、ハケメ		
	10	土師器	甕		96		5	粗砂混入	良	2.5Y8/3淡黄	ハケメ	ハケメ	木葉痕	



ST9861
1　10YR２/１　黒　シルト　粘性、褐色シルト少量含む、しまりない
2　10YR２/２　黒褐　シルト　均質、やわらかい
3　10YR３/１　黒褐　シルト　褐色シルト粒多量含む、固くしまる
4　10YR３/４　暗褐　シルト　黒色シルトを帯状に含む、固くしまる
5　10YR３/１　黒褐　シルト　褐色粘質シルトを帯状に含む
6　10YR３/３　暗褐　シルト　壁の崩落土
7　10YR３/２　黒褐　シルト　黒色、褐色シルト粒を多量含む
8　10YR３/１　黒褐　シルト　均質、固くしまる
9　10YR３/２　暗褐　シルト　褐色シルト粒多量含む

EL236
1　10YR２/２　黒褐　シルト　褐色シルト粒含む、粘性あり、固くしまる
2　10YR３/２　黒褐　シルト　焼土粒少量、褐色シルト粒含む
3　10YR３/１　黒褐　シルト　褐色粘質シルト粒多量含む
4　10YR３/１　黒褐　シルト　褐色シルト粒多量含む
5　10YR３/１　黒褐　シルト　焼土含む、褐色シルト粒を帯状に含む
6　10YR３/４　暗褐　シルト　地山
7　10YR２/１　黒　シルト　均質
8　10YR３/３　暗褐　シルト　焼土多量含む
9　10YR３/１　黒褐　シルト　均質、やわらかい
10　10YR２/２　黒褐　シルト　焼土粒少量含む、やわらかい
11　10YR３/１　褐　シルト　焼土粒少量、褐色シルト粒少量含む

第101図　ST9861



第102図　ST9861出土遺物

102－７、８、10は土師器甕である。7の長胴甕は、頸基部が窄み、その直下に最大径を有する。体部は垂直に近い角度である。口縁部は均一な厚さで、端部は僅かに下方に摘み出される。外面のケズリは高い位置から入れられる。８は小振りな長胴甕である。体部は丸みをもち、上半に最大径を有する。頸部は大きく屈曲し、口縁端部は下方に摘み出され、面を作り出す。端面には一条の窪みが付けられる。外面のケズリは高い位置から入れられる。10は小型の甕と考えられる。底部に木葉痕が認められる。内外面ともハケメ調整である。

102－９は土師器堝である。体部は球胴状で、ほぼ中央付近に最大径を有すると考えられる。頸部は短く外反し、口縁部を外側に引出した後、口縁端部を上方に摘まみ上げる。外面上半はカキメが施され、下半は縦方向のケズリが入れられる。

稜椀状の有台坏や、身の浅い無台坏等から９世紀前半代の所産と考えられる。

【ST9867】第103図

30－222・223グリッドに位置する。主軸方向はN－18°－Eである。平面形は東西4.2m、南北3.7mの東西にやや長い方形を呈する。壁は急角度で、確認面からの深さは約40㎝である。カマドは北辺の中央部から僅かに東へ寄る。本調査区において、北にカマドを持つ竪穴建物跡は、ST9003（旧）との２棟のみである。燃焼部を竪穴内に持つ構造で、左側は大部分が失われているものの、馬蹄形の袖になると推測される。床は全面に貼床されている。中央部と四隅にそれぞれ不整楕円形の掘込みがあるが、いずれも柱穴とは考えにくい。覆土は黒褐色のシルトを主とするもので、自然堆積によるものと考えられる。

出土遺物は須恵器蓋、無台坏、有台坏、甕等が12点、土師器甕等が59点である（第104図）。104－１は、回転ヘラケズリによって、大きく平坦な天井部が作り出されている。したがって体部は短く、器高は低くなる。口縁部は屈曲し、端部を内側に折り曲げる。つまみはリング状である。天井部に火襷、体部に灰かぶり、融着が認められる。

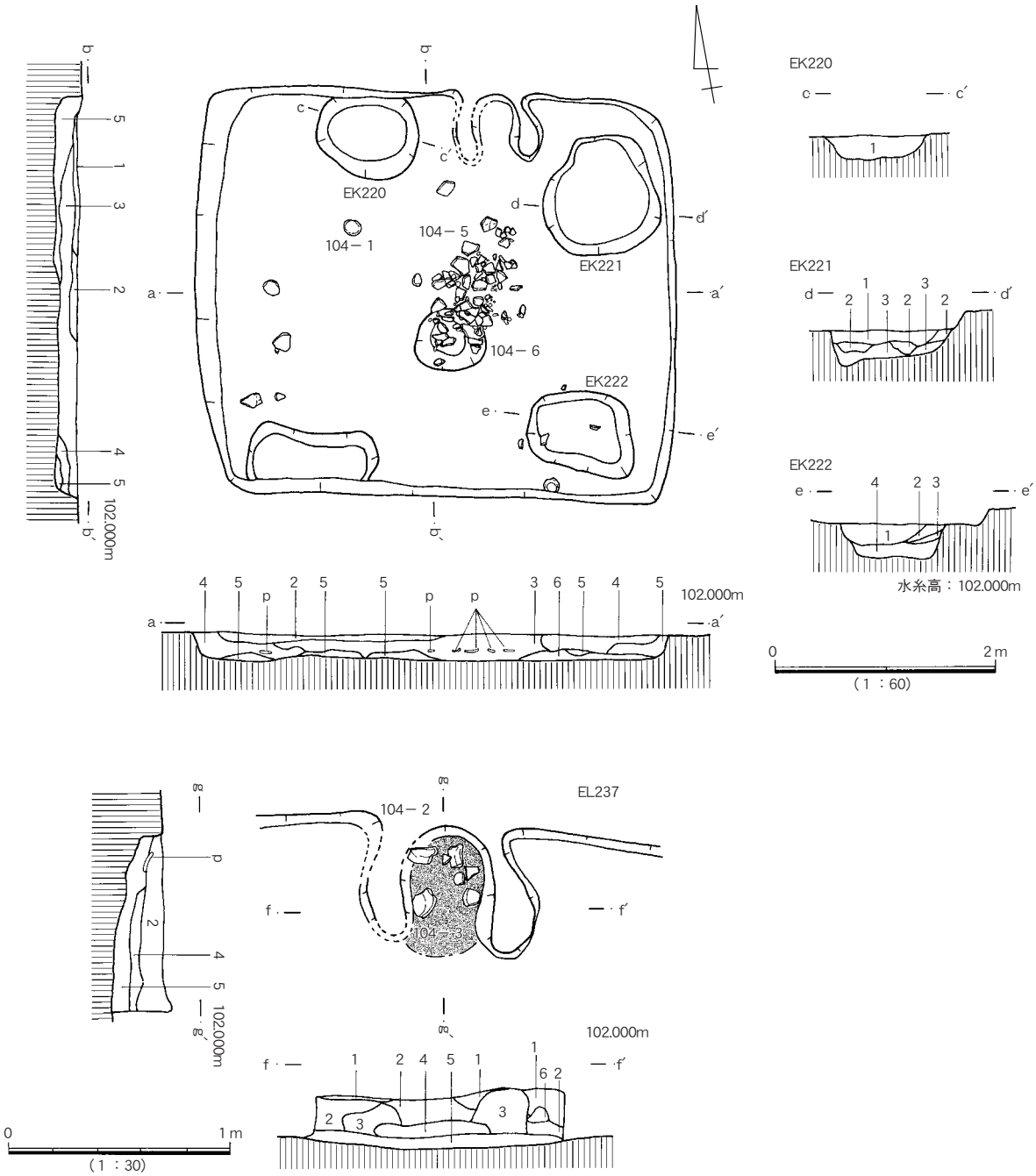
104－２、３はヘラ切りの有台坏である。２は体部下方に丸く緩い綾をもち、ここから開きが小さく直線的な体部は口縁部まで至る。高台は低く、「ハ」の字状に貼付けられる。３も体部下方に緩い綾をもち、やや開き気味の体部が直線的に立ち上がる。高台は比較的高めである。

104－４は口径、底径が大きく、身も深い箱型を呈する。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。体部は開きが小さく、直線的である。胎土には長石粒の混入が際立つ。

104－5は平底の須恵器甕である。焼成不良のため磨滅が著しい。肩の張りは小さく、体部との境に最大径を有する。外面は平行タタキ目が残り、肩部にはタタキ後カキメが施される。内面は、肩部付近まで青海波のアテ痕が残り、その下は平行線アテ痕である。

表37　ST9867出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
104	1	須恵器	蓋	138		26	5	細砂混入	良好	5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	有台坏	(144)	100	49	5	砂粒混入	不良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	須恵器	有台坏	(140)	(94)	50	4	砂粒混入	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	無台坏	145	98	45	4.5	粗粒混入	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り、ナデ	
	5	須恵器	甕	180	105	335	9	砂粒混入	不良	10YR8/1灰白	タタキ	アテ痕	タタキ	
	6	土師器	甕	188			5	粗砂混入	良	5YR7/8橙	ロクロナデ、ケズリ	カキメ		
	6	土師器	甕	188			5	粗砂混入	良	5YR7/8橙	ロクロナデ、ケズリ	カキメ		
	7	土師器	堝		114		6	粗砂混入	良	2.5YR8/4淡黄	ケズリ、ハケメ	ハケメ	ナデ	



ST9867
1	10YR3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
2	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトを斑状に含む、しまりない
3	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量、黒色シルト粒微量を斑状に含む
4	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量、黒色シルト粒微量含む、しまりない
5	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトを斑状に含む
6	10YR2/2	黒褐	シルト	ほぼ均質、固くしまる

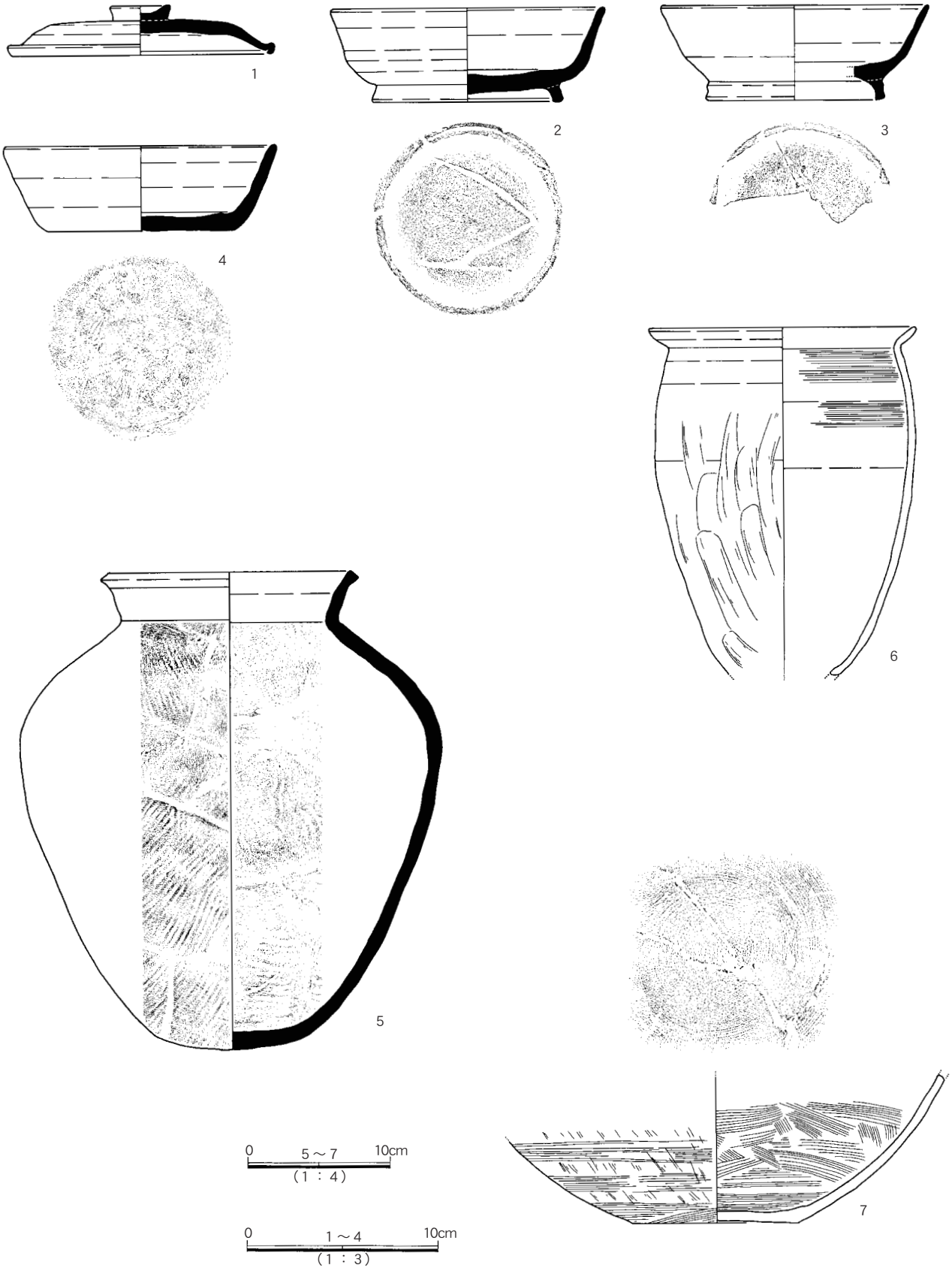
EL237
1	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト斑状に含む、固くしまる
2	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト、暗褐色シルト斑状に含む、固くしまる
3	7.5YR4/3	褐	シルト	焼土多量含む、固くしまる
4	10YR3/2	黒褐	シルト	焼土多量、褐色シルトブロック含む
5	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
6				撹乱

EK220
1	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色砂質シルトブロック、褐色シルト粒を斑状に含む

EK221
1	10YR2/1	黒	シルト	ほぼ均質
2	10YR2/1	黒	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む
3	10YR3/4	暗褐	シルト	褐色、黒褐色シルトブロックを斑状に含む

EK222
1	10YR2/3	黒褐	シルト	ほぼ均質
2	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトを縞状に含む
3	10YR2/3	黒褐	シルト	ほぼ均質
4	10YR3/4	暗褐	シルト	褐色、黒褐色シルトブロックを斑状に含む

第103図　ST9867



第104図　ST9867出土遺物

104－６は小型の土師器長胴甕である。口縁部は直線的に短く外反する。体部は内湾し、中程に最大径がある。外面はロクロナデの後、下から上へのケズリ調整が体部上位にまで及ぶ。内面は横方向のカキメが入れられる。

104－７は大型の堝と考えられる。底部は小さく、内湾する体部は大きく開いて立ち上がる。外面は縦方向のケズリの後、間を取ったカキメが施される。内面はハケメ調整の後、内底にカキメが入れられる。外面底部はナデ調整である。

口径、底径の大きい坏類の特徴から、８世紀中頃の資料と考えられる。

【ST996】第105図

28･29－222･223グリッドに位置する。主軸方向はN－95°－Eである。平面形は東西4.2m、南北3.6mで、東西にやや長い方形を呈する。壁の傾斜は緩く、確認面からの深さは25㎝を測る。カマドは東辺の南寄りに設けられ燃焼部の一部が竪穴外に延びる構造である。床は全面に貼床される。柱穴は確認できない。覆土は黒褐色シルトを主とする自然堆積である。ST9868と重複関係にあり、南側を除いてほぼ同じ場所に重なる。ST9868→ST996の関係にある。

出土遺物は、須恵器蓋、無台坏、甕等13点、土師器甕等582点である（第106・107図）。

【ST9868】第105図

28・29－222・223グリッドに位置する。主軸方向はN－178°－Wである。大半がST996と重なるため南側一部の検出にとどまる。東西3.5m、南北1.1mまで確認され、平面形は一辺4m前後の方形と推測される。残存する壁の傾斜は緩く、確認面からの深さは約20㎝である。カマドは南辺にあり、東寄りに位置すると考えられる。燃焼部を竪穴内にもつ構造で、中央部が広い馬蹄形を呈する。竪穴外には、幅20㎝、深さ４㎝程の浅い煙道が、長さ約80㎝まで確認された。柱穴は確認できない。覆土は自然堆積によるものと考えられる。

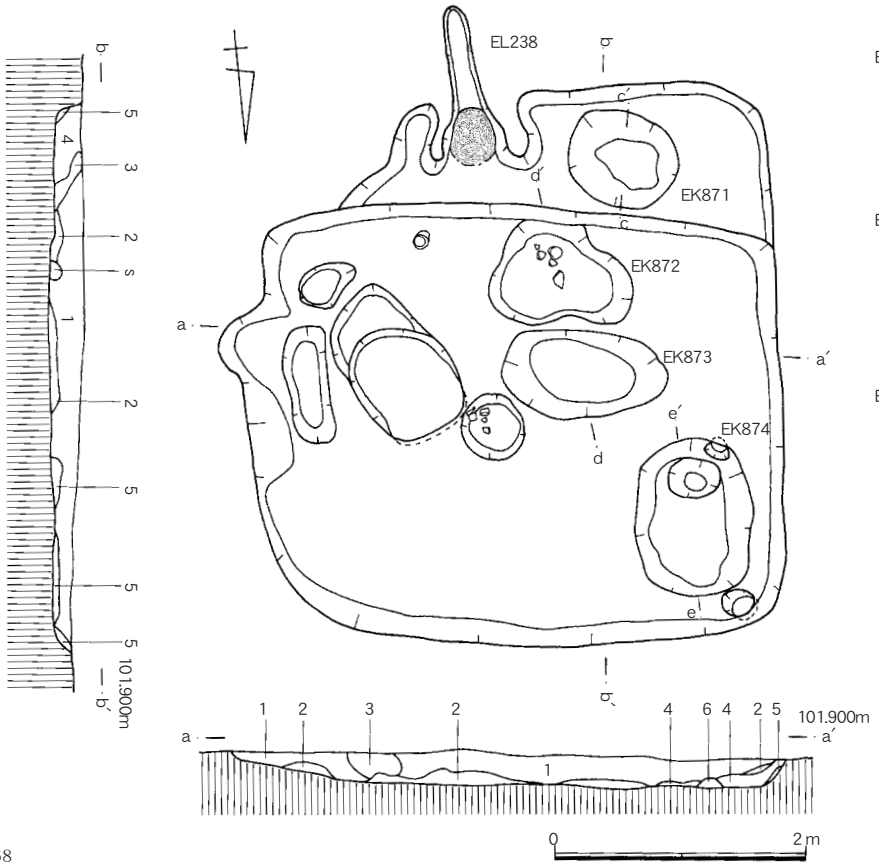
出土遺物はST996として登録したものが大半を占める。ST9868としては燃焼部南寄りから、土師器小型甕（第106図５）が正位で出土している。

106－１は回転糸切り後無調整の坏である。底径は小さいが、体部の開きが大きいため、口径は大きくなる。体部は直線的で、口縁部は僅かに外反する。

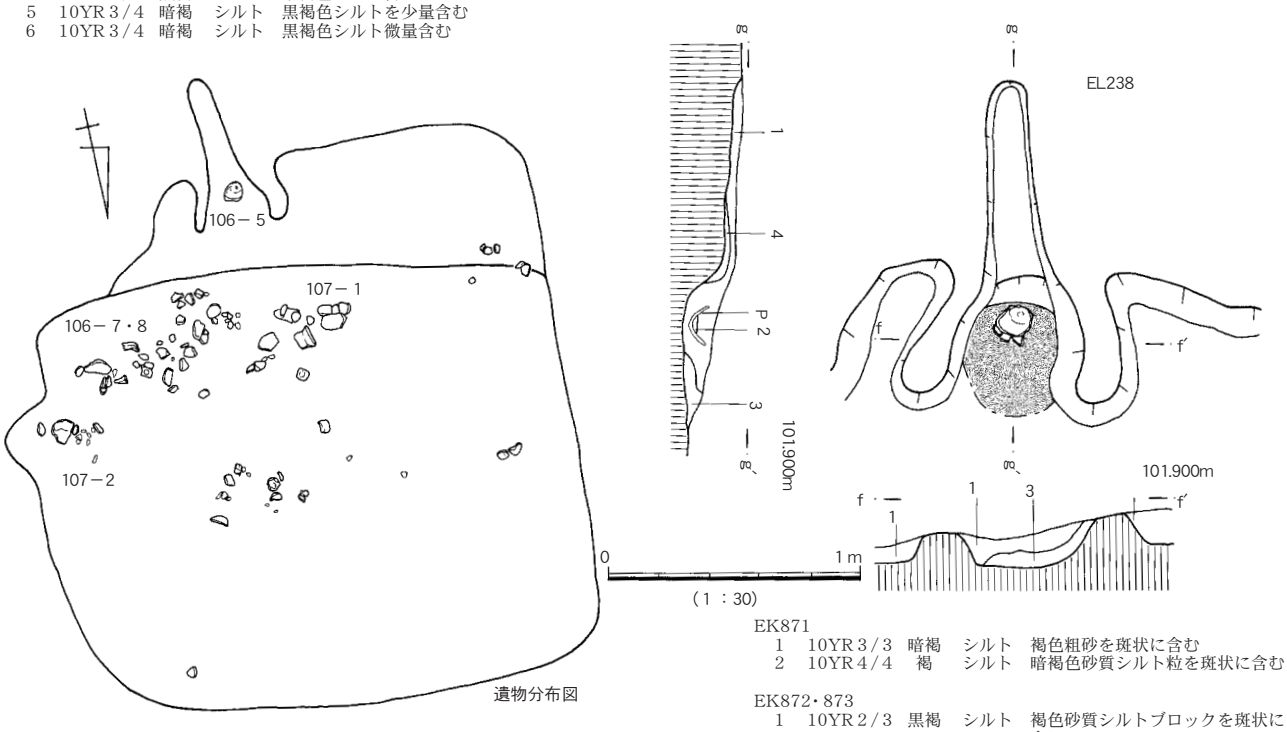
106－２は有台の須恵器壷である。体部中位から下の破片であるが、長頸壷になるものと推測される。高台は欠損しているが、剥離面には接合時の削り込みが認められる。内面には自然釉が付着し、火膨れによる亀裂も見られる。内外面ともロクロナデ調整である。

106－３は内面を黒色処理した坏である。底部には木葉痕が残る。体部は直線的に立ち上がるが、口縁部で内傾する。外面は太めの工具によるミガキで、内面はそれより細い工具でのミガキが施される。

106－4～6は土師器小型甕である。４はヘラ切りの底部に板状圧痕を残す。体部は丸みをもち、最大径は中央部にある。頸部は短く外反し、口縁部を僅かに摘まみ上げる。火熱により調整痕はほとんど確認できない。５の底部もヘラ切りである。体部は僅かに内湾し、最大径を中央部よりやや下方に置く。頸部は屈曲が小さく、内湾気味にそのまま口縁部に至る。火熱による器面の荒れが著しい。６についてもヘラ切りと推測される。体部は丸みをもち、最大径は中央部



ST9868
1　10YR２/３　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック斑状に含む
2　10YR２/２　黒褐　シルト　ほぼ均質、固くしまる
3　10YR２/３　黒褐　シルト　暗褐色シルトを斑状に含む
4　10YR２/２　黒褐　シルト　暗褐色シルト含む
5　10YR３/４　暗褐　シルト　黒褐色シルトを少量含む
6　10YR３/４　暗褐　シルト　黒褐色シルト微量含む



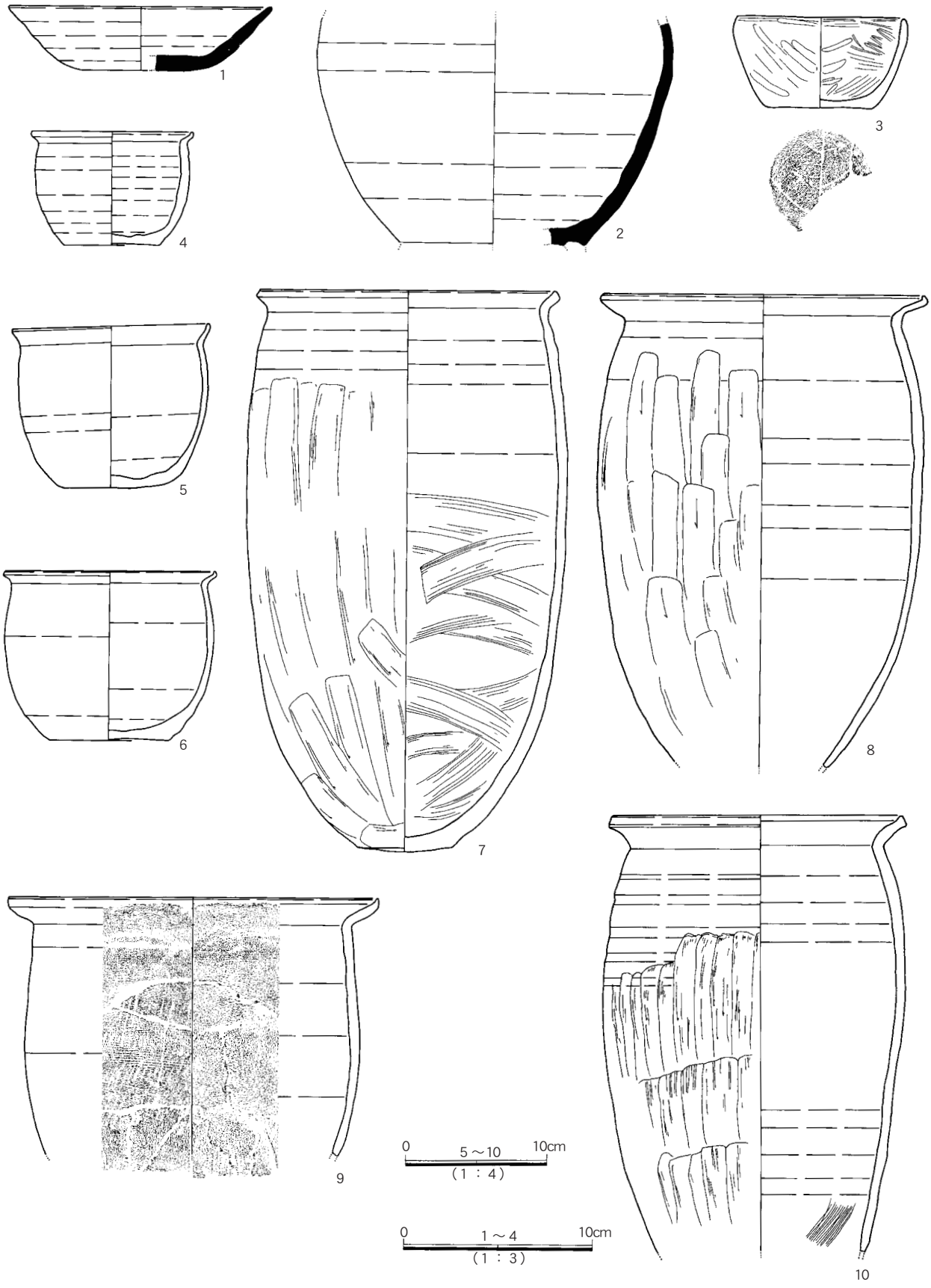
EL238
1　10YR２/２　黒褐　シルト　暗褐色シルト粒微量含む
2　10YR３/４　暗褐　シルト　均質、固くしまる
3　10YR２/３　黒褐　シルト　焼土粒、炭化粒、暗褐色シルト微量含む、固くしまる
4　10YR３/３　暗褐　シルト　均質、固くしまる

EK871
1　10YR３/３　暗褐　シルト　褐色粗砂を斑状に含む
2　10YR４/４　褐　シルト　暗褐色砂質シルト粒を斑状に含む

EK872・873
1　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色砂質シルトブロックを斑状に含む
2　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色砂質シルト粒含む
3　10YR２/１　黒　シルト　均質

EK874
1　10YR２/２　黒褐　シルト　褐色砂質シルトブロックを斑状に含む

第105図　ST996・9868

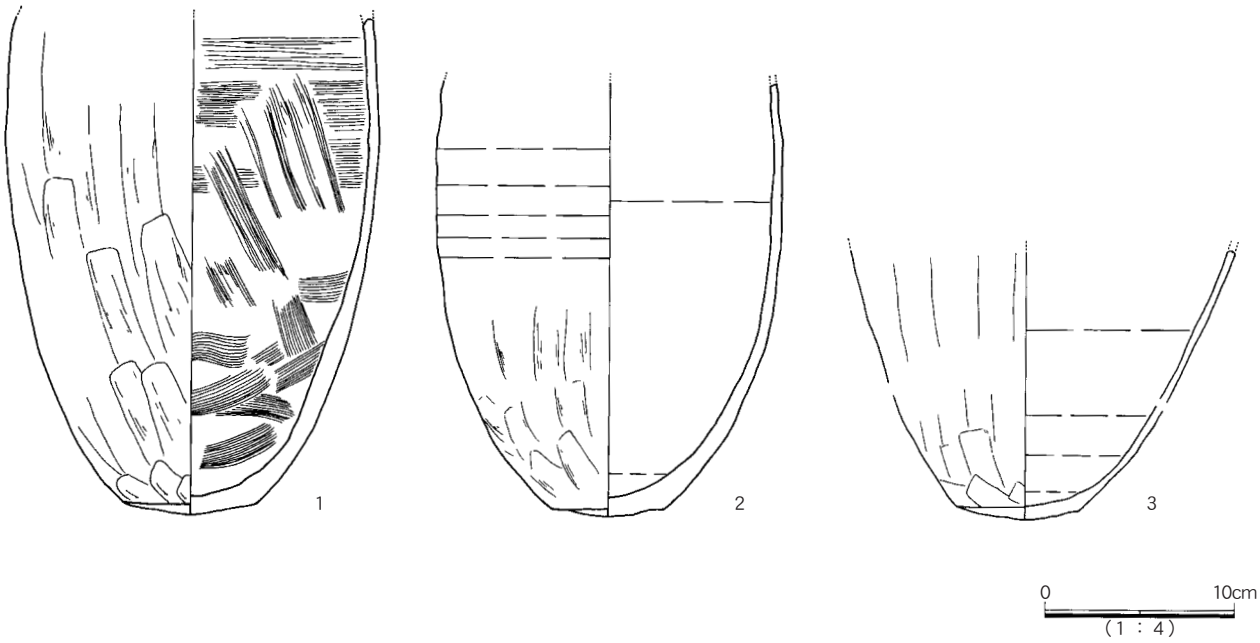


第106図　ST996・9868出土遺物 1

にある。頸部は短く屈曲し、口縁端部は小さく摘み出される。火熱により調整は不明である。

106－7～10、107－１～３は土師器長胴甕である。７は頸部と底部近くは窄むものの、体部中央部はほぼ直線的である。底部は小さく、ケズリとナデによる調整が行われる。外面は高い位置から縦方向のケズリが入れられ、内面はハケメ調整である。８の体部は緩やかな丸みをもち、中央部に最大径を有する。頸部は大きく屈曲し、口縁部は上方に摘み出される。外面は高い位置からのケズリ調整が施され、内面はロクロナデである。９の外面には、タタキの後ハケメが入れられ、さらに下方には、縦方向のケズリ調整が行われたものである。内面にはロクロナデ調整が見られる。10は最大径を体部上位にもち、底部まで緩やかに窄む。頸部は厚く、口縁部を僅かに摘まみ上げる特徴的な形態である。外面は比較的高い位置から縦方向のケズリが入れられる。内面はロクロナデ調整であるが、底部近くにハケメが入れられる。107－１～３は底部と体部の境を明瞭に形作っているが、底部の中央が丸みを持って突出する。また外面のケズリ調整、内面のロクロナデを主とした調整等、類似する点が多い。

ST9868と996の時間差を検討する資料に乏しく、996については９世紀前半としておく。



第107図　ST996・9868出土遺物２

表38　ST996・9868出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
106	1	須恵器	無台坏	(140)	(60)	33	5	緻密	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	2	須恵器	壷				8	砂粒混入､骨針	良	10YR3/2黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		自然釉、灰かぶり
	3	黒色土器	無台坏	(88)	54	48	4	細砂混入	良	7.5YR8/3浅黄橙	ミガキ	ミガキ	木葉痕	
	4	土師器	鉢	113	67	80	7	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	土師器	甕	140	80	113	4	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	6	土師器	鉢	(144)	86	119	5	粗砂混入	良	2.5YR6/8橙	磨滅			
	7	土師器	甕	(215)	66	396	7	粗砂混入	良	5YR6/8橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ハケメ	ナデ	
	8	土師器	甕	(224)			6	粗砂混入	良	10YR8/6黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	9	土師器	甕	(260)			7	粗砂混入	良	2.5YR6/8橙	タタキ､ハケメ､ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		
	10	土師器	甕	(211)			6.5	砂粒混入	良	7.5YR6/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		RP316
107	1	土師器	甕		64		6	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ケズリ	ロクロナデ､ナデ	ナデ､ケズリ	RP316
	2	土師器	甕		56		6	粗砂混入､骨針	良	10YR8/6黄橙	ロクロナデ、ケズリ		ナデ､ケズリ	
	3	土師器	甕		64		4	砂粒混入	良	5YR6/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	ナデ	EK878

【ST9869】第108図

30～32－226・227グリッドに位置する。主軸方向はN－179°－Wである。平面形は、南北に長い方形を呈する。規模は、東西6.2m、南北7.7mあり、本調査区中最大の竪穴建物跡である。壁は急角度を保ち、深さは確認面から約40cmを測る。カマドは南辺の東寄りに設けられる。燃焼部を竪穴内にもつ構造であるが、南壁が竪穴外に僅かに張り出す。袖部は大半を失うが、内側に突出する壁がその痕跡をとどめる。カマドの両脇には貯蔵穴と考えられる穴が設けられる。床はほぼ全面に貼床されており、堅く良く締っている。柱穴は建て替え分を含めて６基検出された。南側柱列は建て替えが認められ、内側から外側への移動が見られる。EP803、804は南壁から1.5m離れ、東西の壁から各々1.4mの位置にある。柱穴は、径約60cm、深さ約60cmを測る楕円形である。柱間距離は3.3mである。一方、建て替えられたEP801、805は南壁から1.4m離れ、東西壁から1.0mの位置にある。柱穴は、径50～60cmの楕円形で、深さは約70cmである。柱間距離は4.0mである。EP806、807の北側柱列は、北壁から1.8m離れ、EP806は西壁から1.6m、EP807は東壁から1.3mに位置する。柱穴は径50～60cmを測る楕円形で、深さは約50cmである。柱間距離は3.2mである。覆土は黒褐色シルトを主とする自然堆積である。

出土遺物は、須恵器蓋26点、無台坏247点、有台坏14点、双耳坏２点、短頸壷１点、長頸壷３点、甕24点、鉢１点等319点、黒色土器無台坏10点、土師器無台坏２点、甕1330点等、計1661点にのぼる（第109図）。

109－１は天井部と体部の中程まで回転ヘラケズリを施す。口縁部はめりはりがなく、僅かに端部を摘み出す程度にとどまる。つまみの高さはあるが、形骸化したものである。

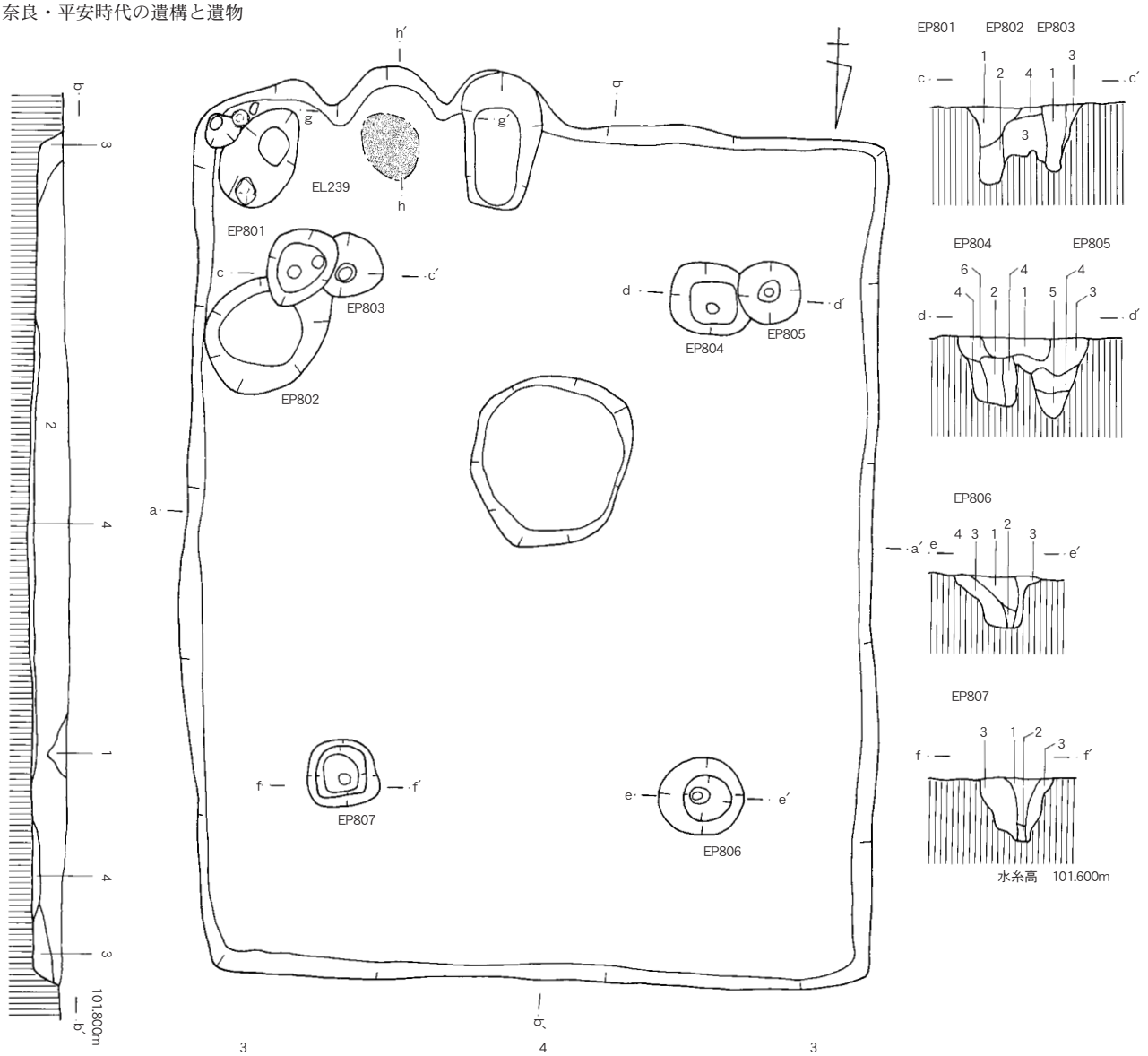
109－２、３はヘラ切りの有台坏である。２は接地面が傾き、外側のみ付く低い台である。体部は丸みをもつものと考えられる。３は比較的高い台が「ハ」の字状に貼付けられる。底部には「大」の刻書がある。刻書の前に細線で線刻されているが、内容は不明である。

109－４はヘラ切り、５は回転糸切りの無台坏である。４は直線的な体部で、開きも小さい。５は内湾する体部で開きが大きく、身も深い。口縁部は外反する。

109－６は底部外周に断面が三角形の高台状の突帯を貼付け、さらにその内側に脚を付けたものである。脚は基部を残し欠損するが、高瀬山Ｋ遺跡出土のものから、高さ2.5cm程の大きく湾曲する脚をもつことがわかる。上部が無いため断定できないが香炉火舎の可能性も考えられる。

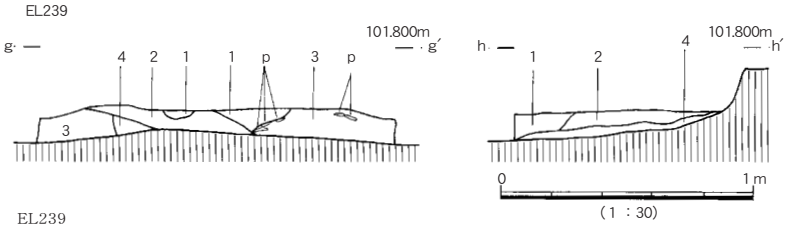
表39　ST9869出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
109	1	須恵器	蓋	(140)		37	8	砂粒混入、骨針	不良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	有台坏		80		3	砂粒混入、骨針	不良	10YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	須恵器	有台坏		(78)		7	緻密、骨針	良	N7/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	底部にヘラ描き「大」
	4	須恵器	無台坏	(150)	(90)	42	5	砂粒混入	良	2.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	須恵器	無台坏	(140)	(66)	39	5	細砂混入	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	脚付有台坏				7	緻密	良	N7/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	7	須恵器	壷				3.5	緻密	良	N3/暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	8	黒色土器	無台坏	(140)	(68)	66	4	砂粒混入、骨針	良	10YR8/3浅黄橙		ミガキ		
	9	黒色土器	無台坏		(80)		6	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙		ミガキ	回転糸切り	
	10	土師器	甕				7	砂粒混入	良	5YR7/6橙	ナデ	ナデ	木葉痕	
	11	土師器	甕	(228)			6	砂粒混入	良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ、ナデ、ケズリ	ロクロナデ		EK883
	12	土師器	甕	222	45	36	5	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ケズリ、カキメ	ナデ	ナデ	
	13	土師器	甕	(220)			5	細砂混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	14	土師器	甕	(260)			4	砂粒混入	良	5YR8/4淡橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	15	土師器	甕	(180)			5	粗砂混入	良	5YR7/8橙	タタキ、ロクロナデ	ロクロナデ		EK883



ST9869

1	10YR3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルトを斑状に少量含む
2	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化粒少量含む、暗褐色シルト粒微量含む、かたくしまる
3	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色シルトをまばらに含む、固くしまる
4	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	黒褐色シルトを縞状に含む、固くしまる



EL239

1	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
2	10YR2/3	黒褐	シルト	焼土、暗褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
3	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロックを斑状に含む
4	10YR3/4	暗褐	シルト	ほぼ均質、固くしまる

EP801・802・803

1	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色、暗褐色シルト粒を斑状に含む
2	10YR4/4	褐	微砂	暗褐色シルトブロック斑状に含む
3	10YR3/4	暗褐	微砂	褐色、暗褐色シルトブロックを斑状に含む
4	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む

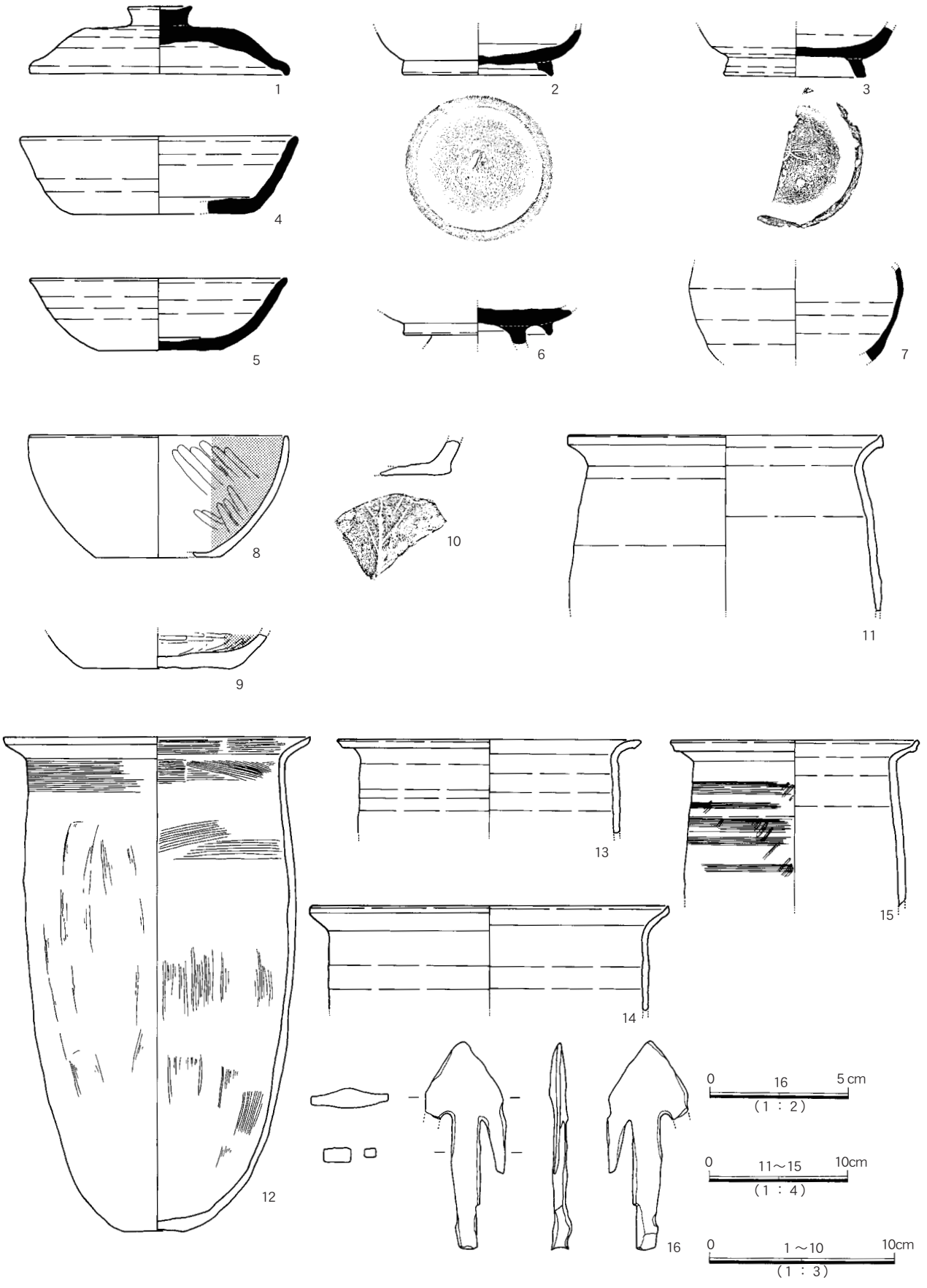
EP804・805

1	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
2	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色粘土ブロック斑状に含む
3	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色、暗褐色微砂ブロック斑状に含む
4	10YR3/4	暗褐	シルト	褐色、黒褐色シルトブロック斑状に含む
5	10YR4/6	褐	シルト	暗褐色シルト粒微量含む
6	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む

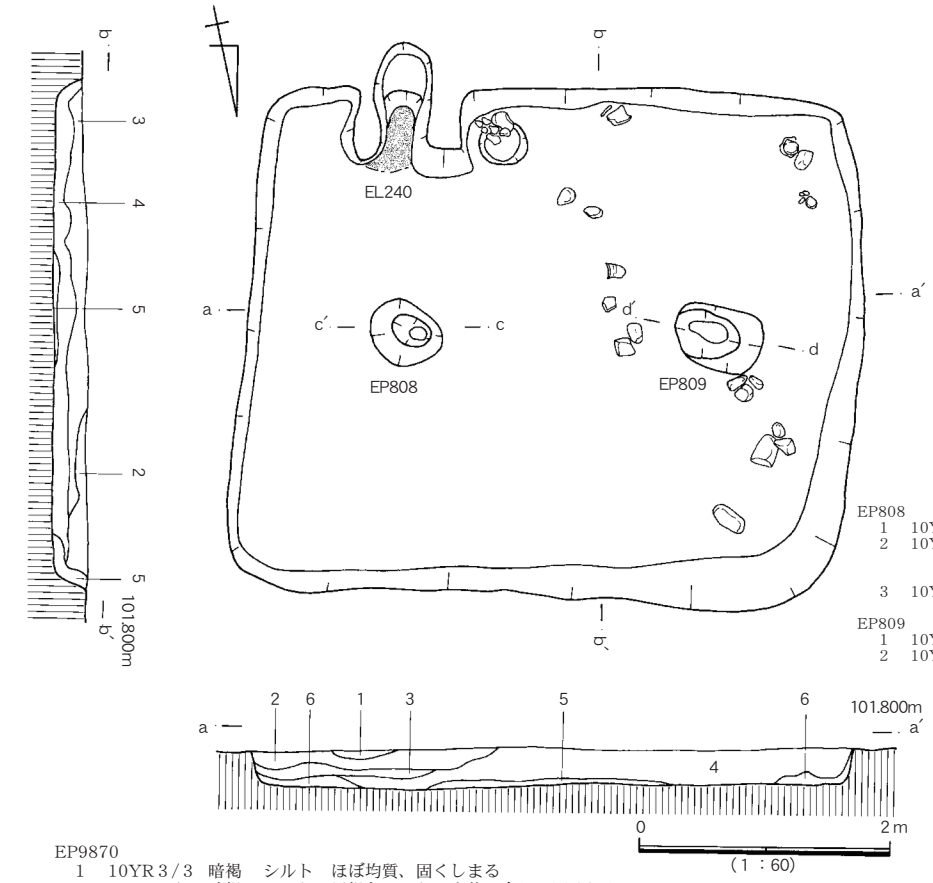
EP806・807

1	10YR3/2	黒褐	シルト	ほぼ均質
2	10YR3/4	暗褐	微砂	褐色、黒褐色シルトブロック斑状に含む
3	10YR4/4	褐	シルト	暗褐色、黒褐色シルトブロック斑状に含む

第108図　ST9869



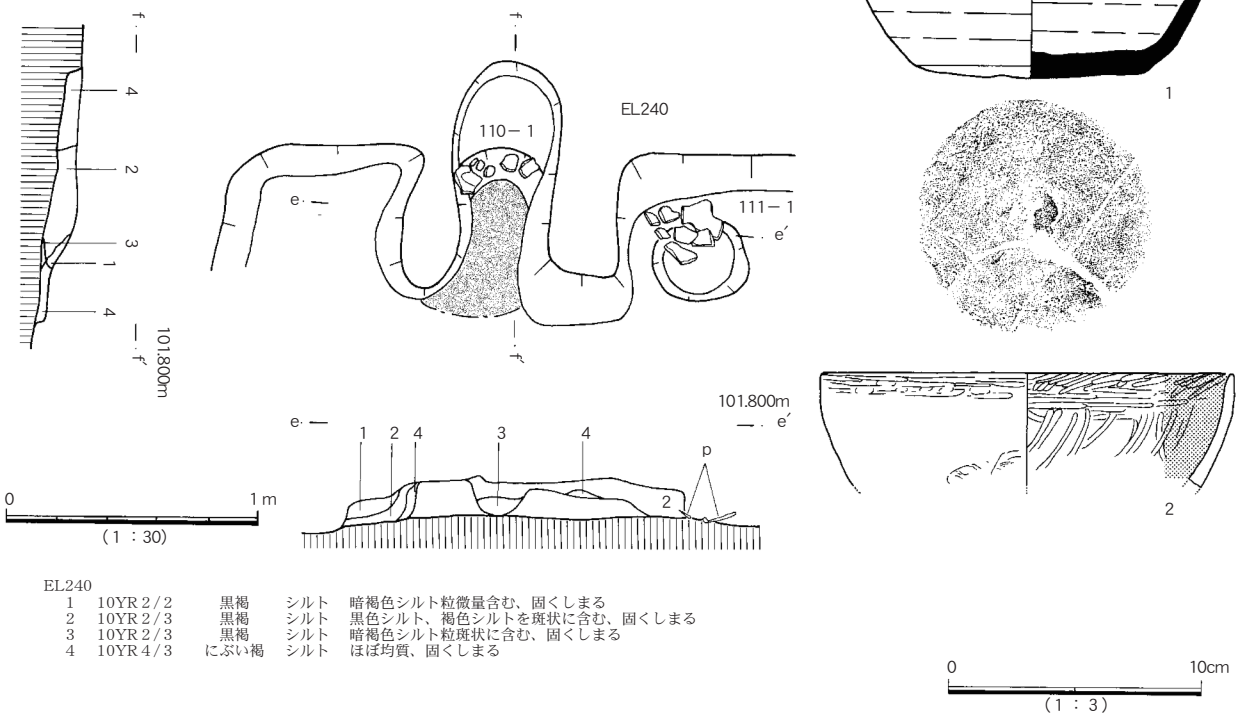
第109図　ST9869出土遺物



EP808
1　10YR 2/1　黒　シルト　ほぼ均質
2　10YR 3/3　暗褐　シルト　黒色シルトブロック微量含む
3　10YR 3/4　暗褐　シルト　褐色シルト粒を斑状に含む

EP809
1　10YR 3/2　黒褐　シルト　ほぼ均質
2　10YR 3/4　暗褐　シルト　褐色シルトブロックを斑状に含む

EP9870
1　10YR 3/3　暗褐　シルト　ほぼ均質、固くしまる
2　10YR 3/3　暗褐　シルト　黒褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
3　10YR 2/3　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック斑状に含む
4　10YR 2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルト粒微量含む、固くしまる
5　10YR 2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロックを斑状に含む、固くしまる
6　10YR 3/3　暗褐　シルト　黒褐色シルトを斑状に含む、固くしまる



EL240
1　10YR 2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルト粒微量含む、固くしまる
2　10YR 2/3　黒褐　シルト　黒色シルト、褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
3　10YR 2/3　黒褐　シルト　暗褐色シルト粒斑状に含む、固くしまる
4　10YR 4/3　にぶい褐　シルト　ほぼ均質、固くしまる

第110図　ST9870　出土遺物 1

109－7は小型壷の体部である。肩から体部上方に灰かぶりが見られる。

109－８、９は黒色土器の無台坏である。８の体部は内湾しそのまま口縁部に至る。切り離しは不明である。９は底径が大きく、切り離しは回転糸切りによるものである。

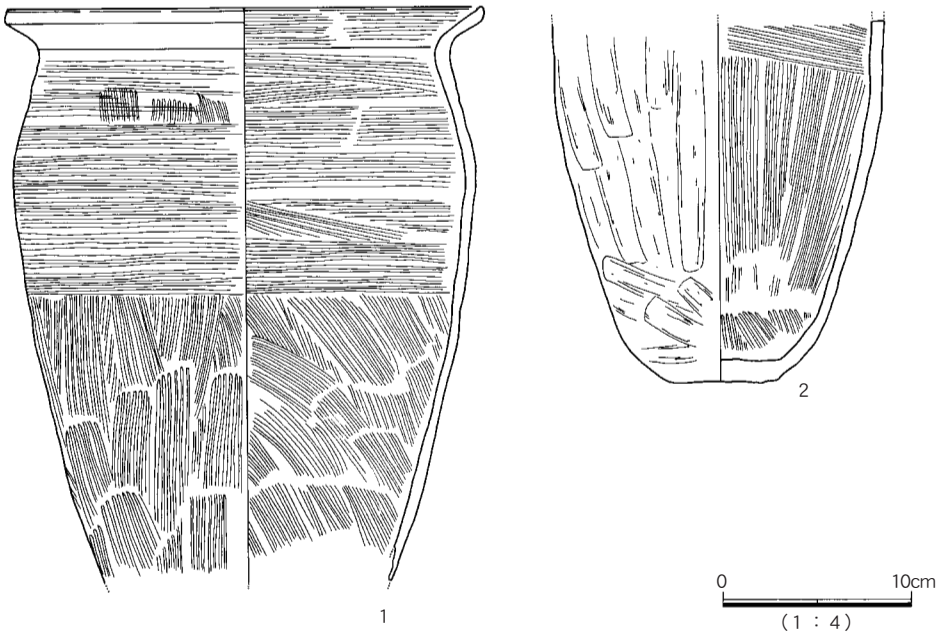
109－10は小型の甕11～15は長胴甕である。10の底部には木葉痕が残る。11は頸部が弱く外反し口縁を小さく摘み出したものである。外面はロクロナデと縦方向のケズリ調整である。12は最大径を中央部にもつが、体部には張りが無い。頸部は大きく外反し、そのまま口縁部に至る。体部外面には、暗褐色土が焼き付き、これが無い部分は火熱により器面が荒れる。体部上方はカキメが入れられ、その下方から縦方向のケズリが入れられる。13は直立する体部から頸部がほぼ直角に曲る。口縁端部は下方に摘み出される。14の体部も直立するが、頸部の屈曲は小さく、口縁端部は僅かに上方に摘み出される。15は体部に平行タタキの痕跡をとどめ、その上からカキメが入れられる。下方は縦方向のケズリ調整である。口縁端部は特徴的である。

109－16は鉄鏃である。幅広の刃先から長い茎部が延びる。逆刺は長く、茎部と平行するような角度をもつ。刃部断面はレンズ型、茎部は扁平な方形である。

底径が小さく小型化の有台坏や口径、底径が大きい無台坏等から９世紀前半代と考えられる。

【ST9870】第110図

31・32－228・229グリッドに位置する。主軸方向はN－172°－Wである。平面形は東西4.7m、南北4.0mの東西に長い方形を呈する。壁は急角度であり、確認面からの深さは約30㎝である。カマドは南辺の東寄りにあり、馬蹄形の燃焼部を竪穴内にもつ構造である。カマドの右には貯蔵穴が見られる。床は全面に貼床され、堅く良く締っている。柱穴は２基あり、南北各壁から２m離れる。EP808は東壁から1.4m、EP809は西壁から1.2mの位置にある。柱間距離は2.4mである。



第111図　ST9870出土遺物２

表40　ST9870出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
110	1 須恵器	無台坏	144	90	48	5.5	粗砂混入	良	2.5Y8/3淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	2 黒色土器	無台坏	(164)			5	緻密	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ,ミガキ,ケズリ	ロクロナデ、ミガキ		
111	1 土師器	甕	252			6	砂粒混入	良	7.5YR8/3浅黄橙	ロクロナデ、ナデ、ハケメ	ハケメ		
	2 土師器	甕		56		7	粗砂混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ケズリ	ハケメ		

柱穴は径50～70㎝の楕円形で、深さは40～60㎝を測る。覆土は自然堆積と考えられる。

出土遺物は須恵器蓋１点、無台坏６点、有台坏１点、長頸壷２点、甕４点等14点、黒色土器碗等11点、土師器甕片等57点の計82点である。

110－１はヘラ切り後ナデ調整が施されるが、中心部が出っ張り安定性に欠ける。底径が大きく、身が深い。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。

110－2は黒色土器の無台坏と推察される。体部は内湾し、口縁部は細く摘み出され、外反する。外面は口縁部に横方向のミガキが施され、体部下半はケズリ調整である。内面も口縁部には横方向のミガキが入れられるが、体部は縦方向のミガキに変わる。

111－１、２は土師器の長胴甕である。1は体部上半に最大径を有する。口縁部は僅かに肥厚し、端部は小さく摘み出されるにとどまる。外面は縦方向のハケメが施された後、上部にカキメ状のロクロナデが入れられる。内面も同様な調整法がとられる。２は閉塞板による小さな平底が作られる。外面はケズリ、内面はハケメ調整が施される。

資料数が少ないが、口径が小さく、身が深くなる無台坏から９世紀前半と考えておきたい。

【ST899】第112図

32－230・231グリッドに位置する。主軸方向はN－177°－Wである。平面形は東西4.5m、南北5.3mで東西に長い方形を呈する。壁の角度は緩く、深さは約30㎝である。カマドは南辺の東寄りに設けられるが、重複するST9874のものと重なる可能性も考えられる。燃焼部は竪穴内に設けられる。柱穴は北寄りに２基あり、北壁から1.3m離れる。EP890は東壁から、EP891は西壁から各々1.3mの位置にある。柱間距離は2.0mである。径60㎝前後の楕円形で、深さは70㎝を測る。床は地山を利用し、堅く締る。覆土はST9874の貼床である。

【ST9871】第112図

32－229・230グリッドに位置する。主軸方向はN－176°－Wである。平面形は東西4.4m、南北3.4mの東西に長い方形を呈する。壁の角度は比較的急であるが、確認面からの深さは10㎝程である。カマドは大半を失っているが、南東部の床が焼け、焼土塊が散乱する。竪穴内に柱穴は確認できない。ST9874と重複する所は貼床になる。覆土は自然堆積である。

出土遺物は、須恵器無台坏、甕等14点、土師器甕が68点である（第115図）。

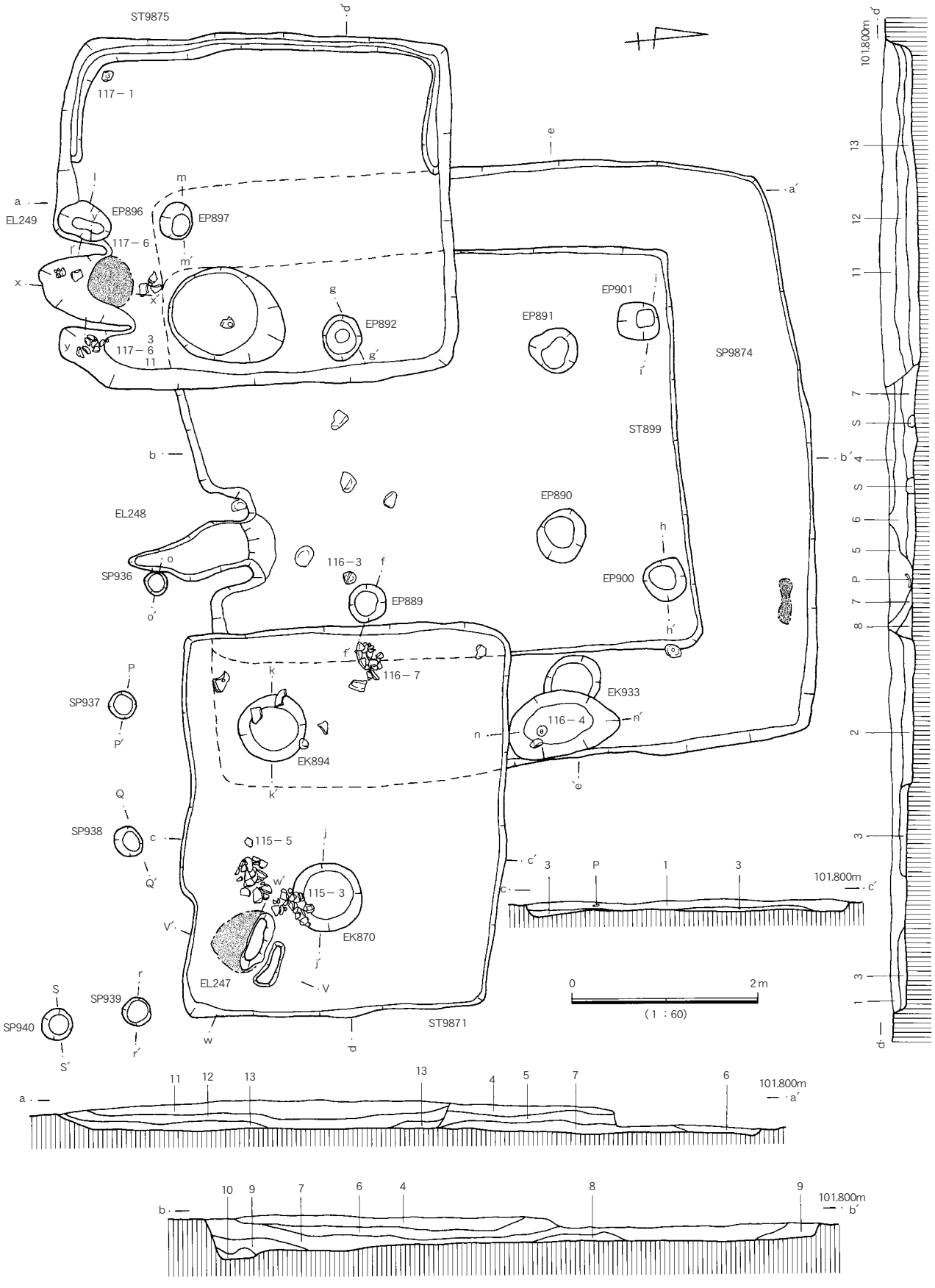
115－１は口径、底径が小さい回転糸切りの無台坏である。体部は内湾し、口縁部は外反する。

115－２は肩が張り、体部との境に明瞭な綾を持つ短頸壷である。外面にはカキメとケズリが施されるが、僅かにタタキの痕跡を認める。焼成時に歪み、亀裂が入っている。

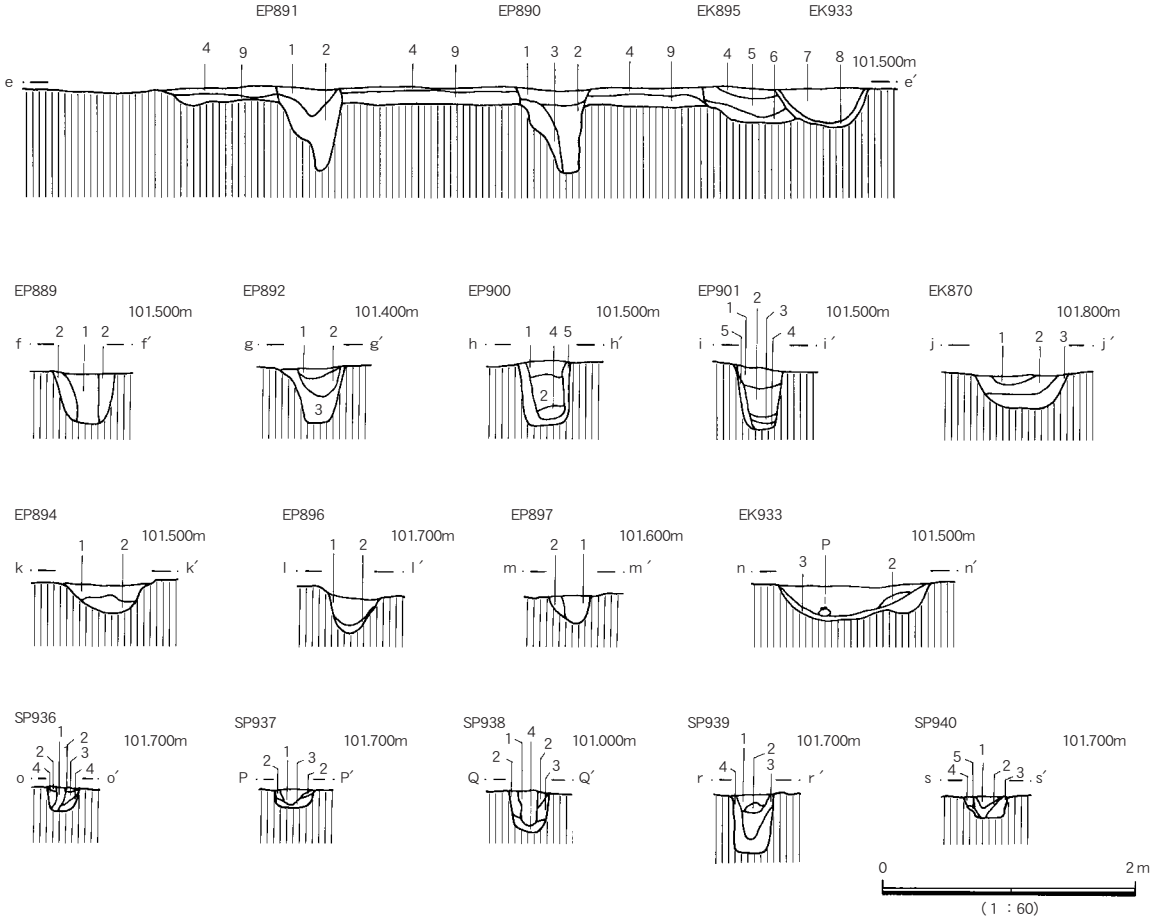
115－３、４は小型甕、５は長胴甕である。３の体部は丸みを持ち、最大径を中央部に有する。外面はロクロナデとケズリによる。４は回転糸切り後無調整で、外面にはロクロ目が顕著な凹凸を見せる。５は小さく平らな底部から体部が緩く内湾する。最大径を中央部に有する。外面は頸基部付近まで縦方向のケズリ調整が入れられる。内面はハケメ調整である。

【ST9874】第112図

31・32－230・231グリッドに位置する。主軸方向はN－177°－Wである。平面形は、１辺6.5mの方形を呈する。壁はほぼ垂直を保ち、深さは確認面から約10㎝である。カマドは南辺に



第112図　ST899、9871、9874、9875



ST9871
1 10YR2/2 黒褐 シルト 灰黄褐色シルト粒微量含む、固くしまる
2 10YR2/3 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
3 10YR4/4 褐 シルト 均質、固くしまる
ST9874
4 10YR2/1 黒 シルト 均質、固くしまる
5 10YR2/2 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルトブロック含む、固くしまる
6 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルト少量含む、固くしまる
7 10YR3/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
8 10YR2/3 黒褐 シルト 黒色シルトを斑状に含む、固くしまる
9 10YR2/1 黒 シルト にぶい黄褐色シルトを微量含む、固くしまる
10 10YR2/1 黒 シルト にぶい黄褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
ST9875
11 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトを斑状に少量含む、固くしまる
12 10YR2/2 黒褐 粘 土 にぶい黄褐色シルトブロックを斑状に含む、固くしまる
13 10YR2/2 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルト、黒色シルトを斑状に含む
EP890・891・EK895・933
1 10YR4/4 褐 シルト 暗褐色シルト少量含む、固くしまる
2 10YR4/4 褐 シルト 暗褐色シルト微量含む（5％）、しまりがない
3 10YR4/4 褐 シルト 暗褐色シルト微量含む（1％）、しまりがない
4 10YR4/4 褐 シルト 黒褐色シルトを縞状に含む、固くしまる
5 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロック（大）多量含む、固くしまる
6 10YR4/4 褐 シルト 黒褐色シルトを斑状に含む
7 10YR2/2 黒褐 シルト にぶい黄褐シルト粒少量含む
8 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルト微量含む、しまりがない
9 10YR4/4 褐 シルト 黄褐色シルト、黒褐色シルトを斑状に含む
EP889
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒少量含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルトブロック微量含む
EP892
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒少量含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルト少量含む、固くしまる
3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルト微量含む、固くしまる
EP900・901
1 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルト粒微量含む、しまりがない
2 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトを斑状に含む、しまりがない
3 10YR2/1 黒 シルト 均質、しまりがない
4 10YR3/4 暗褐 シルト 黒褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
5 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルトを斑状に含む、固くしまる

EK870
1 10YR3/2 黒褐 シルト 暗褐色シルト粒微量含む、固くしまる
2 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトを斑状に含む
3 10YR2/1 黒 シルト 褐色シルトブロック少量含む
EK894
1 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルトを斑状に含む
2 10YR2/1 黒 シルト 褐色シルト粒微量含む
EK896
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
2 10YR4/4 褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
EP897
1 10YR2/2 黒褐 シルト 均質
2 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトを斑状に含む
EK933
1 10YR2/2 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルト粒含む、しまりがない
2 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルトを斑状に含む、しまりがない
3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルト微量含む、しまりがない
SP936
1 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルト粒微量含む
2 10YR2/3 黒褐 シルト 暗褐色シルトを斑状に含む
3 10YR3/4 暗褐 シルト 黒褐色シルト少量含む
4 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
SP937
1 10YR2/2 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルトを微量含む
2 10YR2/3 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルトを斑状に含む
3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルトを微量含む、固くしまる
SP938
1 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトブロック含む
2 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトブロックを斑状に含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルト微量含む
4 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
SP939
1 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトブロック含む
2 10YR3/4 暗褐 シルト 黒褐色シルトを斑状に含む
3 10YR3/4 暗褐 シルト 黒褐色シルト微量含む
4 10YR3/4 暗褐 シルト ほぼ均質
SP940
1 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルト微量含む
2 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトブロック少量含む
3 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質
4 10YR2/3 黒褐 シルト 暗褐色シルトを斑状に含む
5 10YR3/4 暗褐 シルト ほぼ均質

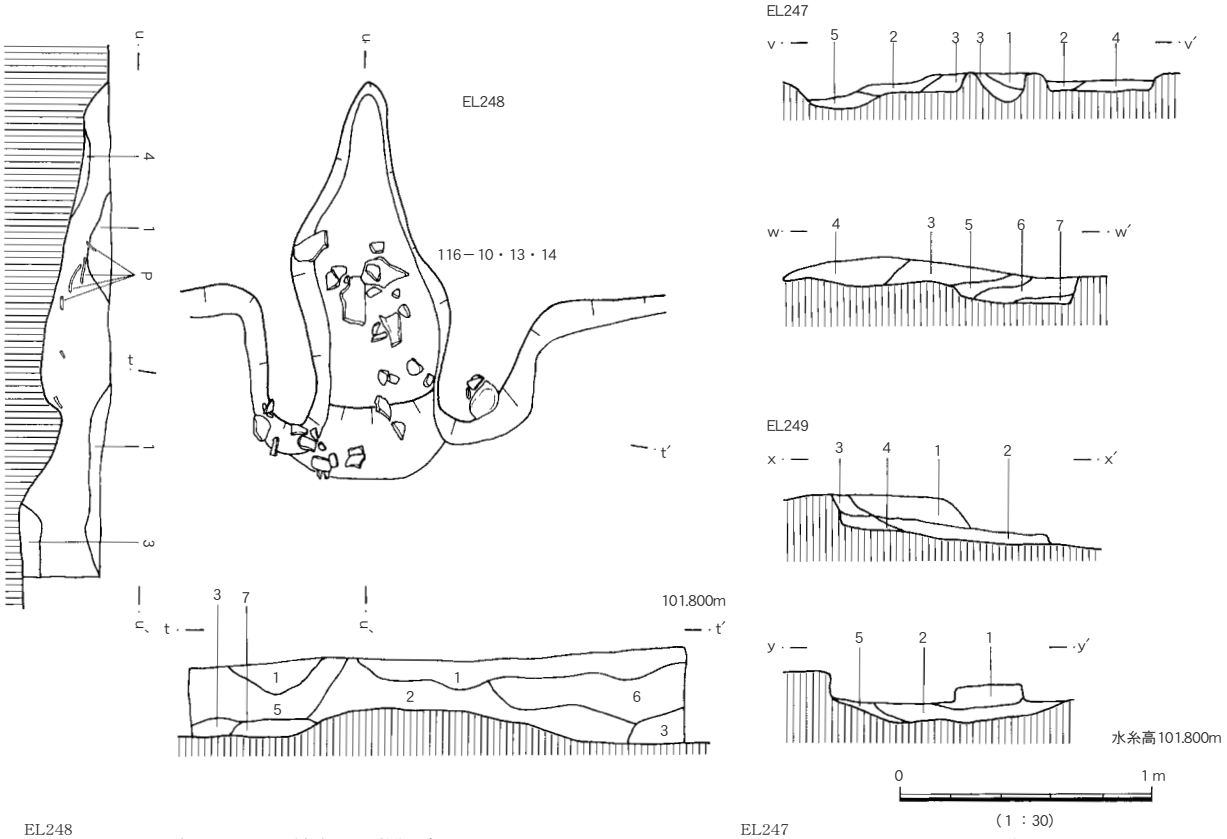
第113図　ST899、9874土層断面

あり、中央からやや東に寄る。構造はST899で述べた。床は全面に貼床されている。柱穴は４基検出された。EP900、901北側柱列は、北壁から1.6m離れる。一方EP889、892南側柱列は南壁から1.8m離れる。東西壁からは各々1.8mの位置にある。柱間距離は東西で2.9m、南北で3.0mである。柱穴径は約40㎝で楕円形を呈し、深さは約50㎝を測る。

出土遺物は、須恵器蓋、有台坏、短頸壷等６点、土師器甕等39点である（第116図）。

116－１、２は須恵器蓋である。１は天井部にのみ回転ヘラケズリが入れられ、僅かに体部との境が見られる。擬宝珠のつまみが付けられる。口縁端部は直立する。２は天井部から体部のほぼ全般にわたって回転ヘラケズリが施される。口縁端部は僅かに内傾する。

116－３、４は有台の坏である。３は口径、底径が大きく、身は浅い。高台の幅は厚く、接地面が傾くため断面形は三角を呈する。体部は内湾するが、口縁部付近で外反する。４はヘラ切り後ナデ調整が施される。口径、底径は小さく、身が深い。高台は細く、「ハ」の字状に貼付けられる。体部下半に綾を有し内湾するが、中位から外反してそのまま口縁部に至る。



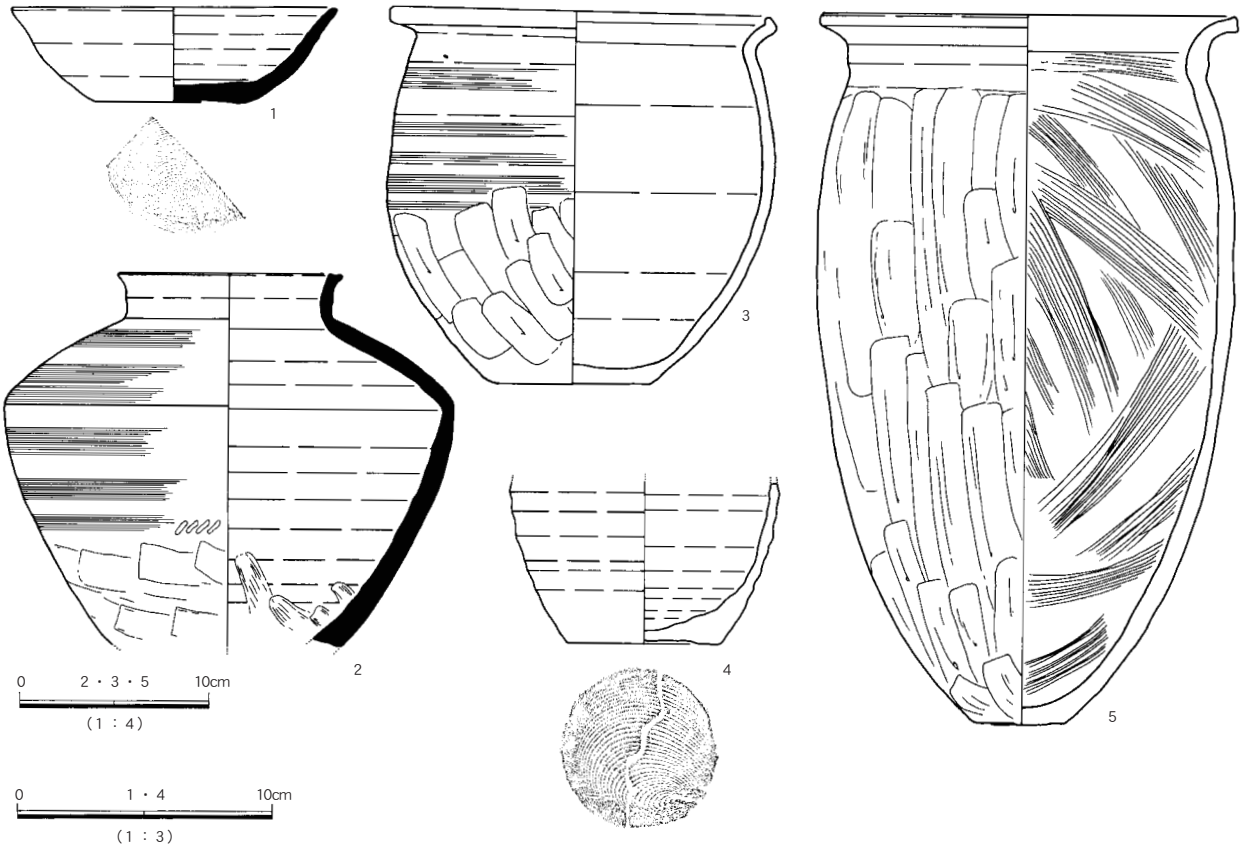
EL248
1	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒微量含む、固くしまる
2	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色シルト、褐色シルト粒を斑状に含む、固くしまる
3	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルト斑状に含む、固くしまる
4	10YR４/４	褐	シルト	均質、固くしまる
5	10YR２/３	黒褐	シルト	暗褐色シルト斑状に含む、固くしまる
6	10YR２/３	黒褐	シルト	暗褐色シルト微量含む、固くしまる
7	10YR４/４	褐	シルト	ほぼ均質、固くしまる

EL249
1	10YR２/３	黒褐	シルト	暗褐色シルト斑状に含む、固くしまる
2	10YR３/３	暗褐	シルト	焼土含む
3	10YR２/３	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒斑状に含む、固くしまる
4	10YR４/２	灰黄褐	シルト	褐色シルト斑状に含む
5	7.5YR４/４	褐	シルト	ほぼ均質、固くしまる

EL247
1	10YR２/１	黒	シルト	均質、しまりがない
2	10YR２/３	黒褐	シルト	暗褐色シルト斑状に含む
3	10YR２/３	黒褐	シルト	暗褐色シルト微量含む、固くしまる
4	10YR２/２	黒褐	シルト	ほぼ均質
5	10YR４/４	褐	シルト	黒褐色シルト微量含む
6	10YR２/３	黒褐	シルト	暗褐色シルト斑状に含む、固くしまる
7	10YR４/４	褐	シルト	暗褐色シルト微量含む、固くしまる

第114図　EL247、248、249

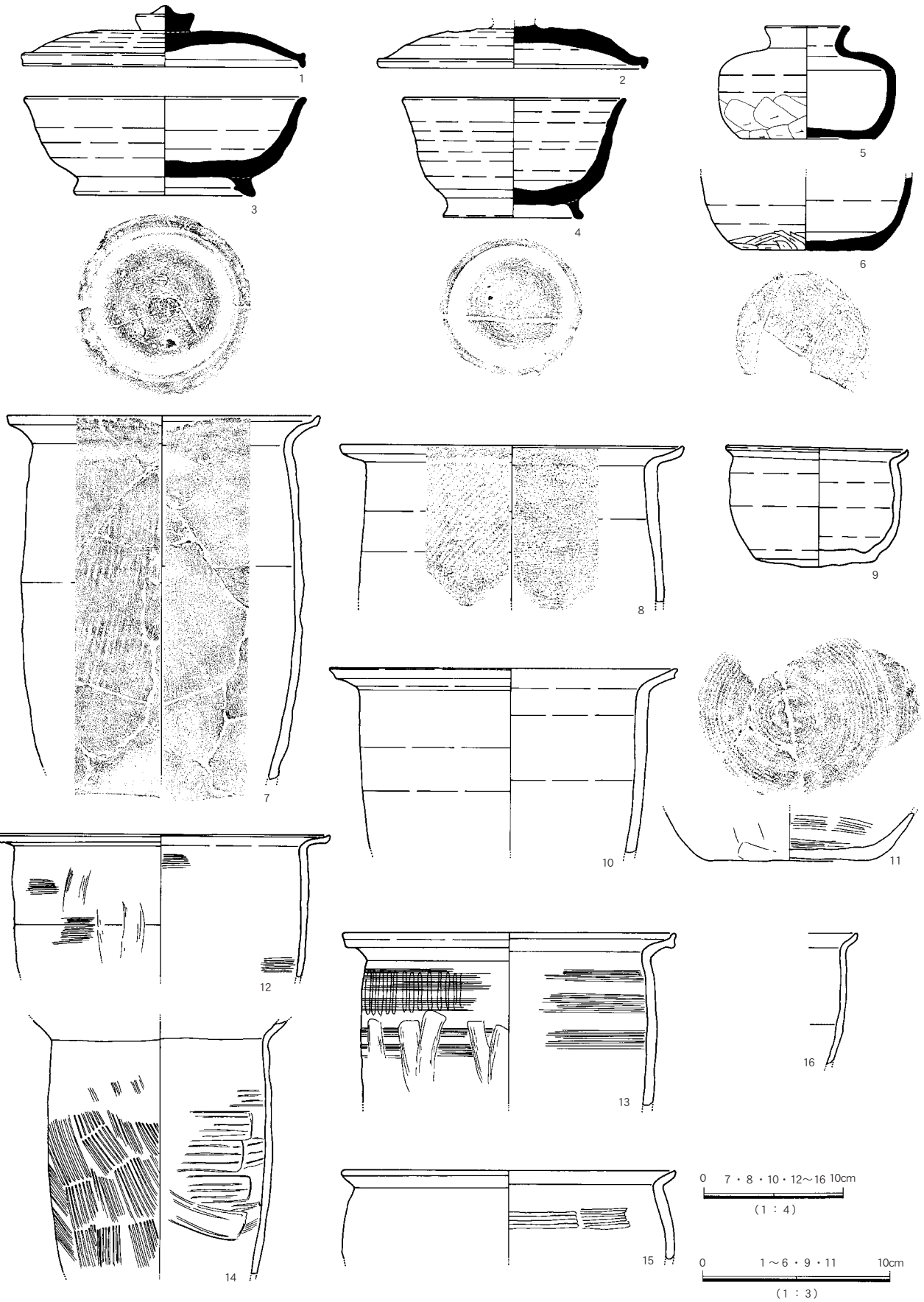
116－５、６は小型の壷である。底部はヘラ切りで、ケズリ調整が入れられる。５は体部中位までケズリ調整が見られる。体部は丸みを持つが、直立気味である。肩は大きく張り、体部との明瞭な境を持つ。口縁部は短く外反する。自然釉が付着する。６は体部中位までの資料であるが、形状は５に類似するものと推測される。体部下端にケズリ調整が認められる。
116－７～14の中で９、11以外は長胴の甕である。これらは14を除いて、タタキによる成形後、上部にロクロナデ、中位より下にケズリ調整が入れられたものである。体部の開きや口縁部の作りに各々個性が見られる。14の器厚は均一で薄く、外面には縦から斜方向のハケメ、内面には横方向のハケメの後ロクロナデ調整が施される。９は小型の鉢で、底部はヘラ切り後無調整である。体部は僅かに内湾し、口縁部は短く外反する。11は小型の甕として分類したが、内面に入れられたカキメ状の調整から、堝の可能性も考えられる。器厚は極めて薄い。15は身が浅く、体部が大きく内湾する平底の甕と推測される。外面にはタタキ目が認められる。内面はハケメ調整である。16も小型の甕で、器厚は薄く、ロクロナデとケズリ調整が施される。



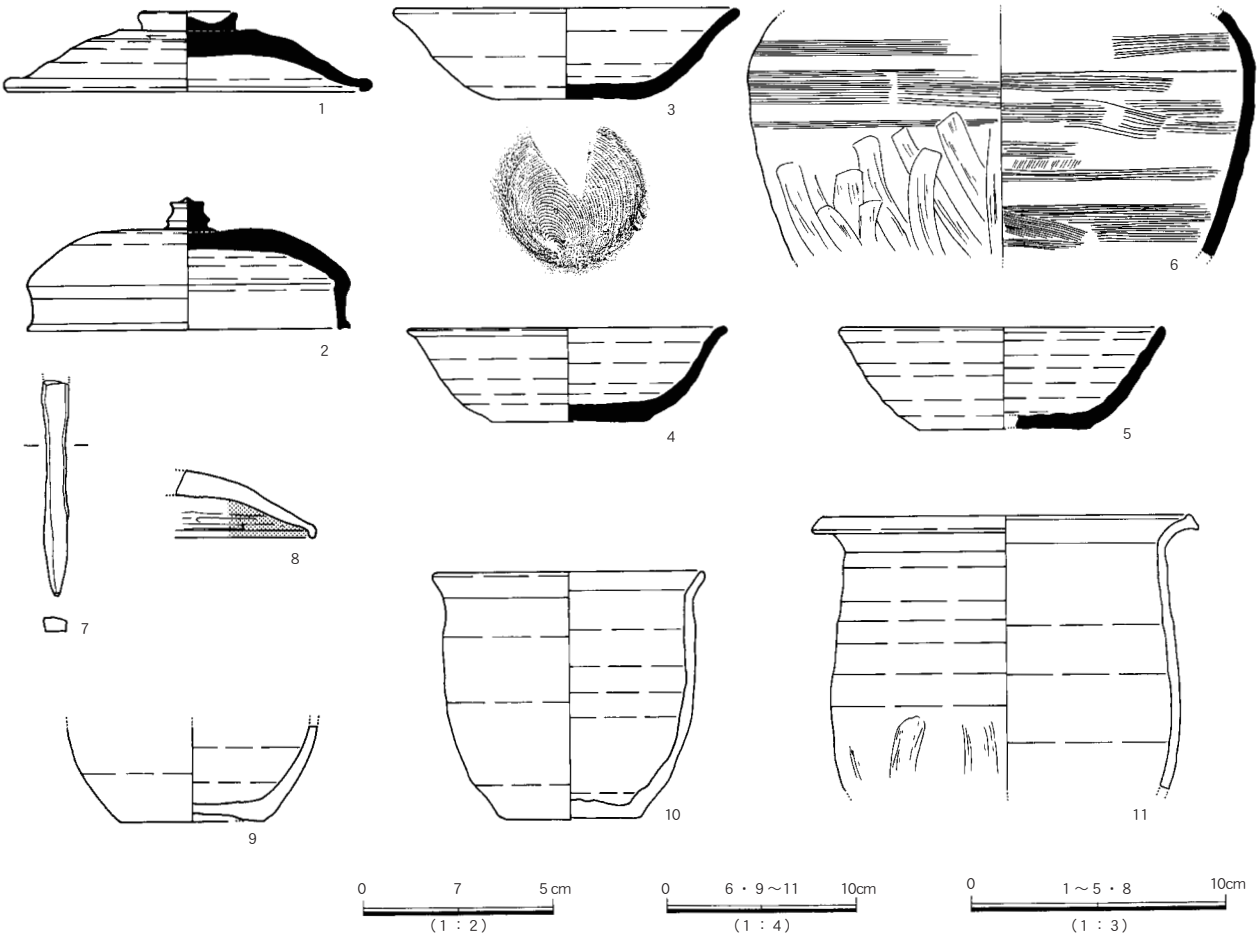
第115図　ST9871出土遺物

表41　ST9871出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
115	1	須恵器	無台坏	(128)	(60)	37	6	緻密	良	2.5YR6/3にぶい黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	2	須恵器	壷	118			9	緻密	良好	7.5YR4/2灰褐	タタキ、カキメ、ケズリ	ロクロナデ、ナデ		焼成時にゆがみ
	3	土師器	甕	198	80	197.5	6.5	粗砂混入	良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	4	土師器	壷		82		5		良	2.5YR6/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	土師器	甕	220	50	377	9	砂粒混入	良	5YR6/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ナデ		



第116図　ST9874出土遺物



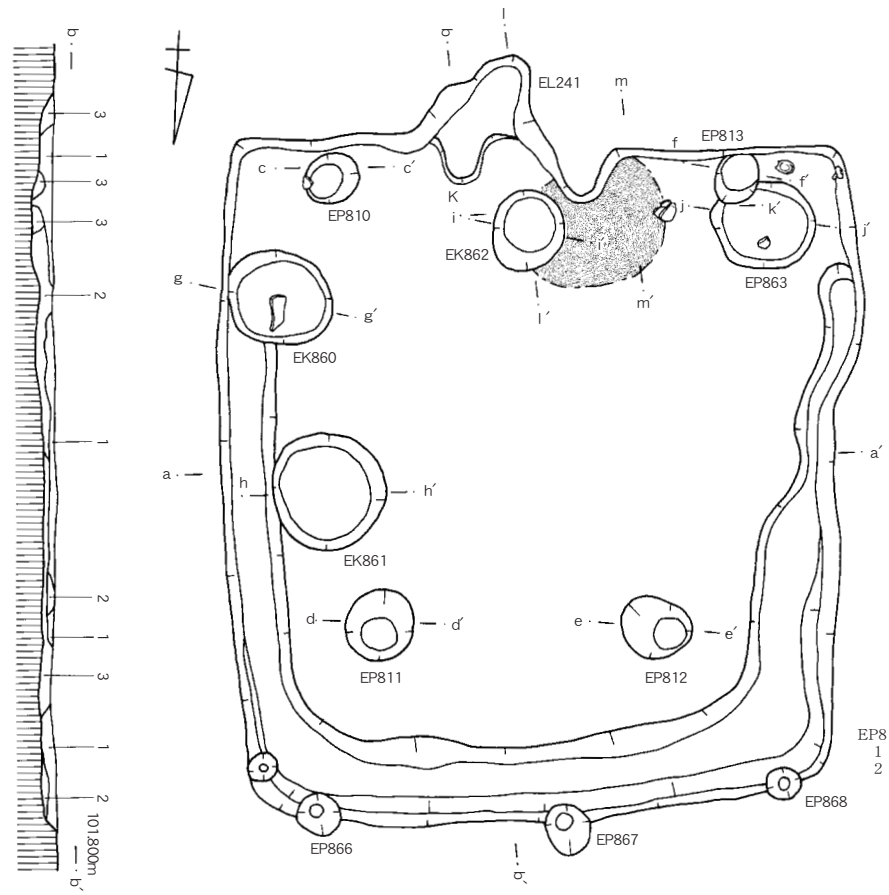
第117図　ST9875出土遺物

表42　ST9874出土土器観察表

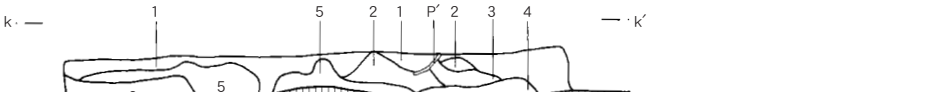
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
116	1	須恵器	蓋	151		33	5	細砂混入	良好	10YR6/褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋	137			9	緻密、骨針	良	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	有台坏	150	96	53	5	砂粒混入、骨針	良	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	有台坏	(120)	74	64	4	砂粒混入、骨針	不良	2.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	須恵器	壷	45	72	61	4	砂粒混入	良	5Y6/1灰	ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	EK933
	6	須恵器	壷		70		4	砂粒混入	良好	N6/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ナデ	ヘラ切り、ケズリ	
	7	土師器	甕	224			5	砂粒混入	良	10YR8/4淡黄	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ		
	8	土師器	甕	244			7	粗砂混入	良	5YR7/6橙	ロクロナデ、タタキ	ハケメ		
	9	土師器	鉢	98	64	64	4	砂粒混入	良	2.5YR8/4橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	10	土師器	甕	(248)			7	粗砂混入	良	10YR7/4にぶい橙	タタキ、ロクロナデ	ロクロナデ		
	11	土師器	甕		88		5	粗砂混入	良	5YR6/6橙	ケズリ	ハケメ	草木状圧痕	
	12	土師器	甕	(246)			5	粗砂混入	良	10YR8/4浅黄橙	タタキ、ナデ	ナデ		
	13	土師器	甕	(239)			5.5	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	タタキ,ロクロナデ,ケズリ	ロクロナデ		
	14	土師器	甕				5	粗砂混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ、ハケメ	ロクロナデ、ハケメ		
	15	土師器	甕	(240)			8	粗砂混入	良	10YR6/4にぶい黄橙	タタキ	ハケメ		
	16	土師器	甕				4.5	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		

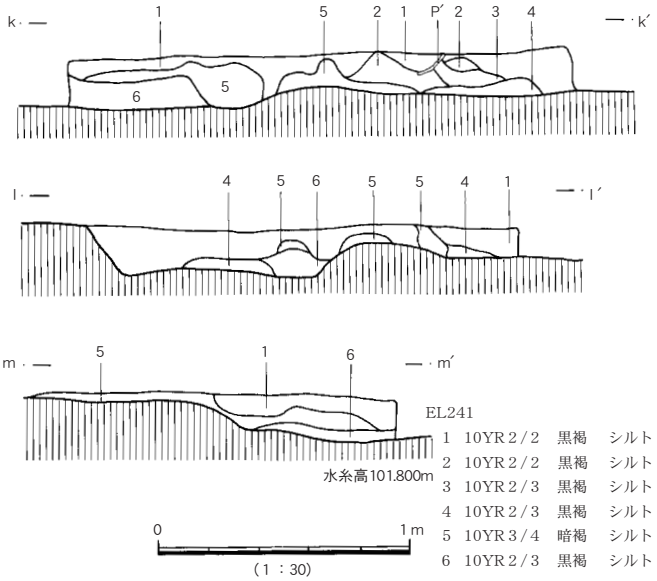
表43　ST9875出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
117	1	須恵器	蓋	(140)		32	7	緻密、骨針	良好	7.5Y5/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋	126		53	8	細砂混入、骨針	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	3	須恵器	無台坏	136	56	36	4	粗砂混入、骨針	良好	2.5GY7/1明オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	無台坏	(126)	60	37	4	細砂混入	良	5GY4/1明オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	無台坏	(130)	(66)	40	4	細砂混入	良好	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	壷				6	緻密	良	5PB5/1青灰	ロクロナデ,ケズリ,カキメ	ロクロナデ、ハケメ		
	8	黒色土器	蓋				7	緻密	良	10YR8/6黄橙	ロクロナデ	ミガキ		
	9	土師器	甕		75		6	砂粒混入	良	5YR6/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	10	土師器	甕	(144)	74	130	5	砂粒混入	良	5YR5/6明赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	11	土師器	甕	(238)			5.5	粗砂混入	良	5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		

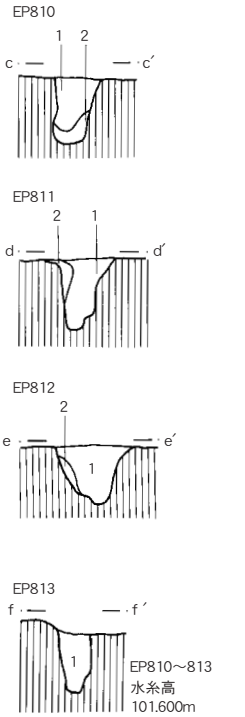


ST9872
1 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
2 10YR3/4 暗褐 シルト 黒褐色シルトを斑状に含む
3 10YR3/4 暗褐 シルト ほぼ均質、固くしまる

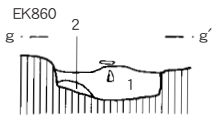




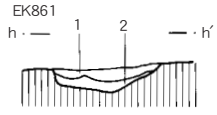
EL241
1 10YR2/2 黒褐 シルト 焼土粒、暗褐色シルト粒を斑状に含む、固くしまる
2 10YR2/2 黒褐 シルト 焼土粒多量、黄褐色シルト粒微量含む
3 10YR2/3 黒褐 シルト ほぼ均質、固くしまる
4 10YR2/3 黒褐 シルト 黄褐シルト粒微量含む、固くしまる
5 10YR3/4 暗褐 シルト 焼土含む
6 10YR2/3 黒褐 シルト 黄褐色シルトを斑状に含む



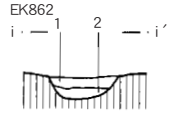
EP810・811・812・813
1 10YR2/2 黒褐 シルト ほぼ均質
2 10YR3/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトを斑状に含む



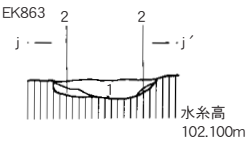
EK860
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロック含む
2 10YR3/2 褐 シルト ほぼ均質



EK861
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトを斑状に含む
2 10YR4/4 褐 シルト ほぼ均質



EK862
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトを斑状に含む
2 10YR4/4 褐 シルト 黒褐色シルト微量含む



EK863
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト微量含む、固くしまる
2 10YR4/4 褐 シルト ぼほ均質

第118図　ST9872

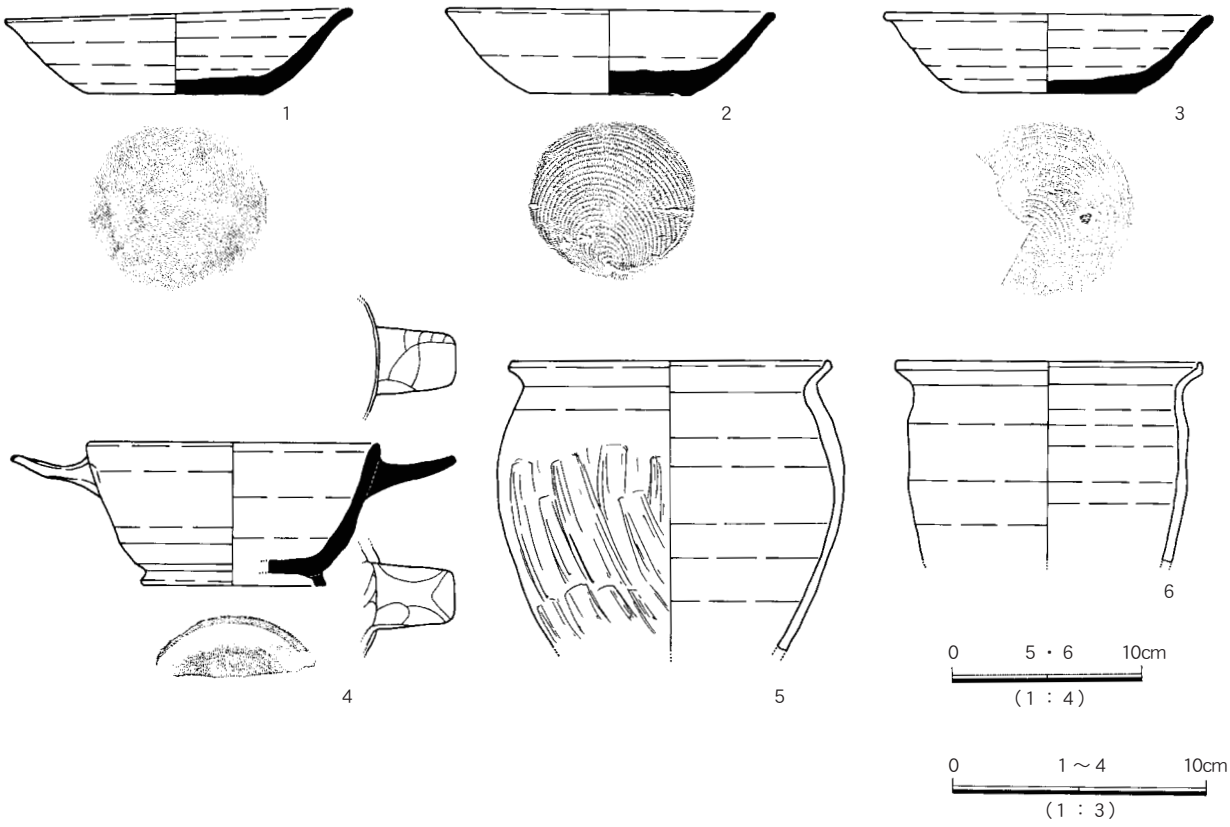
【ST9875】第112図

32・33－230・231グリッドに位置する。主軸方向はN－176°－Wである。平面形は東西3.6m、南北4.2mで南北に長い方形を呈する。壁は垂直に近い角度で、確認面からの深さは約20cmを測る。カマドは南辺の東寄りに設けられる。竪穴内に燃焼部を持つ構造である。床は全面に貼床される。柱穴は確認できない。覆土は自然堆積によるものである。

出土遺物は、須恵器蓋６点、無台坏47点、有台坏7点、長頸壷２点、甕11点等73点、土師器無台坏２点、甕413点等415点である（第117図）。

117－１はリング状のつまみを貼付けた蓋で、天井部は回転ヘラケズリが入れられるが、体部との境が不明瞭な丸みを作り出す。口縁端部は内側に折り曲げられたものである。内面の中央部に使用痕が認められる。

117－2は多重の形状を呈するつまみが付いた壷蓋である。天井部には回転ヘラケズリが入れられる。体部に綾を持ち、口縁部は外反気味に直立する。端部は僅かに外側へ引出される。



第119図　ST9872出土遺物

表44　ST9872出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
119	1	須恵器	無台坏	136	70	34	4	緻密	不良	10YR8/3浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	2	須恵器	無台坏	130	64	33	5	緻密	良好	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	3	須恵器	無台坏	130	68	31	4	緻密	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	双耳坏	(114)	(72)	57	5	砂粒混入	良	N5/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	土師器	甕	170			5	粗砂混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		２次火熱
	6	土師器	甕	(160)			6	砂粒混入	良	7.5YR7/9橙	ロクロナデ	ロクロナデ		

117－３～５は回転糸切りの無台坏である。口径130㎜前後、底径60㎜前後のもので、身が深く小型化の傾向にある。３、４の体部は内湾し、口縁部は外反する。５は直線的である。

117－６はタタキの痕跡が僅かに認められる壷の体部である。タタキ成形後は、外面上半にカキメ、下半にはケズリ調整が施される。内面はハケメ調整である。

117－７は鉄製品の釘と考えられる。断面形は方形である。頭部を欠損する。

117－８は内面を黒色処理した坏蓋である。体部の傾きは小さく、口縁部は短く直立する。

117－９、10は小型の甕、11は長胴の甕である。９は火熱による火はねが著しく、器面は荒れる。10についても同様であるが、体部の下端から底部にかけては比較的遺存度が良く、回転糸切り後無調整の状態は明瞭である。11は口縁端部を上方に摘み出したものである。体部上半はロクロナデ、下半にはケズリが入れられる。またこの辺りから、暗褐色土が焼き付く。

無台坏等の特徴から、これらの遺物は９世紀前半から中頃の所産と考えられる。

これまで概述してきたST899・9871・9874・9875は各々重複しており、その新旧関係は遺構間の切合いから、ST899→9874→9871・9875と考えられる。なお直接重複しないST9871と9875については、出土遺物を比較する限り大きな時間差を感じない。

【ST9872】第118図

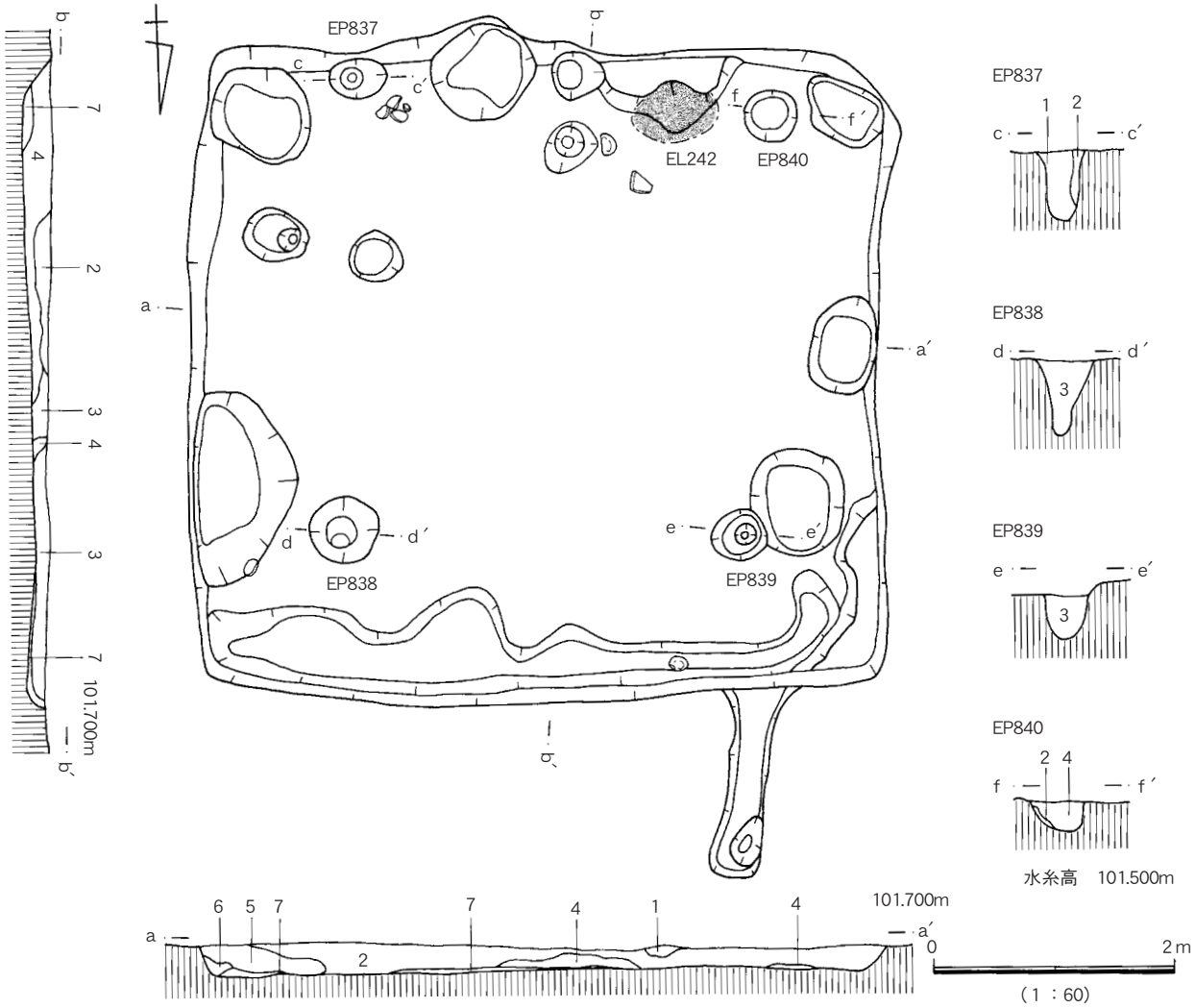
29・30－229・230グリッドに位置する。主軸方向はN－179°－Eである。平面形は東西5.0m、南北5.5mで南北にやや長い方形を呈する。壁は急角度を保つが、多分に削平されており、確認面からの深さは10㎝に満たない。カマドは袖を含む大半の場所を失っているが、床の焼土面から、南辺のやや西寄りに設けられたものと推測される。また焼土面の場所から竪穴内に燃焼部を持つものと考えられる。カマドの右には貯蔵穴EK863が設けられる。床は堅く良く締っており、壁周辺に貼床が認められる。柱穴は４基確認された。EP810、813南側柱列は南壁際にあり、東西壁から各々80㎝の位置である。柱穴径は40～50㎝の楕円形で、深さは約50㎝である。柱間距離は3.3mを測る。EP811、812北側柱列は北壁から約1.5m離れ、東西壁から各々約1.2mの距離を置く。柱穴は60㎝前後の径で、約50㎝の深さである。柱間距離は2.4mを測る。また、北壁上にEP866、867、868が約1.8mの間隔で並ぶことから、壁柱穴と考えられる。遺存率は極めて少ないが、覆土は自然堆積によるものと推測される。

出土遺物は、須恵器蓋、無台坏、双耳坏、甕片等が44点、黒色土器が５点、土師器無台坏、甕片等が303点である（第119図）。

119－１～３は回転糸切りの無台坏である。１は焼成が不良で、切り離しや調整の痕跡をほとんど確認することができない。２の口縁部には重ね焼きの際の別個体の口縁部が融着する。火襷は見られない。３は内外面とも、ロクロナデによる凹凸が顕著に見られる。

119－４はヘラ切り後無調整の双耳坏である。体部下端には回転ヘラケズリが施される。高台は低く、「ハ」の字状に付けられる。耳は口縁部直下に付けられ、上方に傾く。平面形は先端部が幾分狭まる方形を呈する。ケズリによって成形される。

119－５・６は土師器の小型甕である。５は体部上半に最大径を有する。２点とも強く火熱を受けており、５の一部に縦方向のケズリ調整を認めるのみである。



ST9873

1	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロックを少量含む、固くしまる
2	10YR 2/3	黒褐	シルト	にぶい黄褐色シルトを斑状に微量含む
3	10YR 2/2	黒褐	シルト	ほぼ均質、にぶい黄褐色シルト粒微量含む
4	10YR 2/2	黒褐	シルト	にぶい黄褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
5	10YR 2/2	黒褐	シルト	にぶい黄褐色シルトを微量含む、固くしまる
6	10YR 3/2	暗褐	シルト	にぶい黄褐色シルトを微量含む、固くしまる
7	10YR 4/3	にぶい黄褐	シルト	黒褐色シルトを微量含む、固くしまる

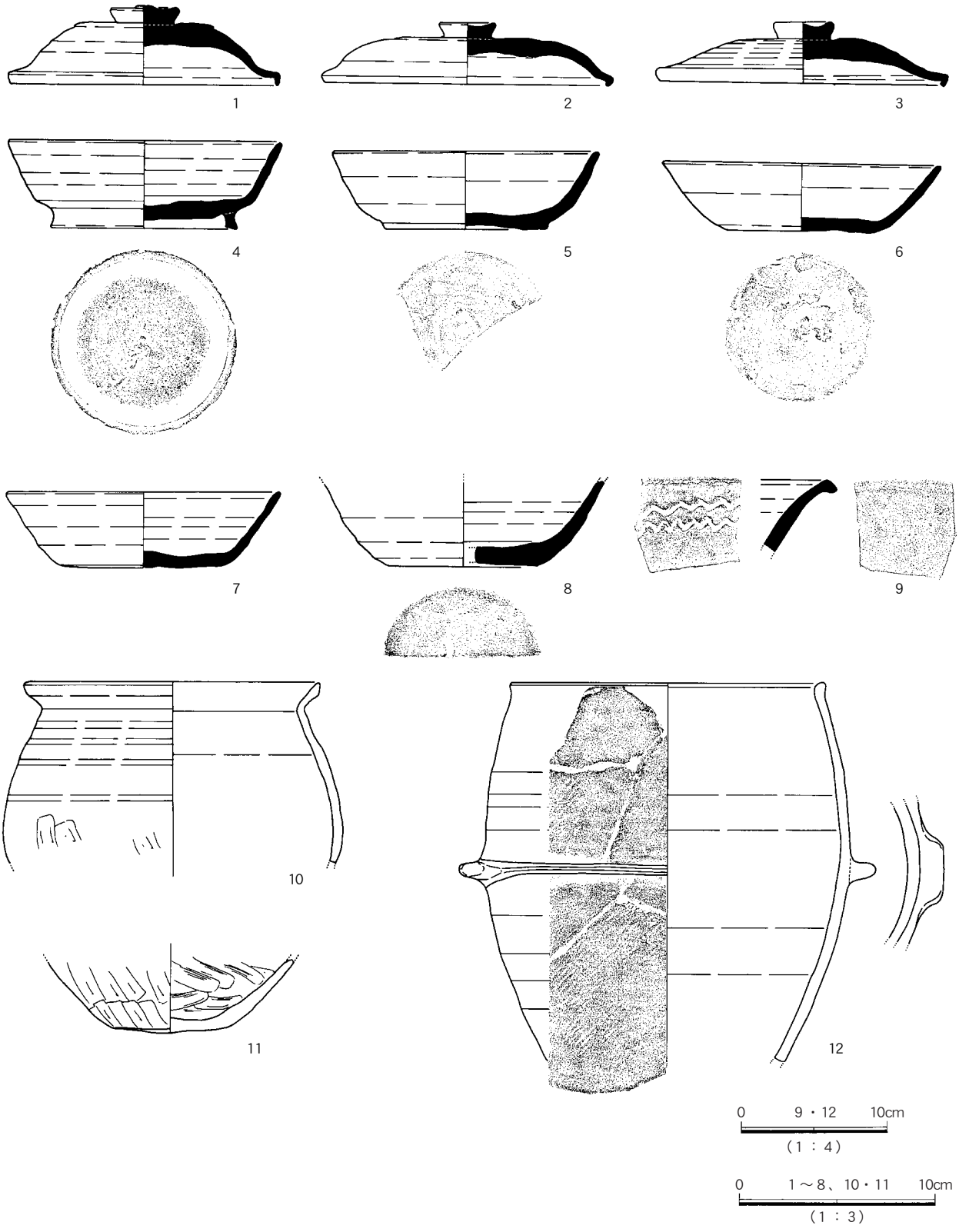
EP837・838・839・840

1	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色微砂質シルト粒を含む
2	10YR 3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトを斑状に含む
3	10YR 2/2	黒褐	シルト	ほぼ均質
4	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色微砂質シルトを斑状に含む

第120図　ST9873

表45　ST9873出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
121	1	須恵器	蓋	(136)		40	4	細砂混入	良	N6/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	2	須恵器	蓋	(144)		31.5	6	緻密	良好	5Y6/1灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		ST9873－3
	3	須恵器	蓋	147		31.5	6	細砂混入	良好	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	4	須恵器	有台坏	(140)	95	45	4	砂粒混入、骨針	良	5YR4/3にぶい赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	須恵器	無台坏	(136)	(80)	40	5	緻密	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	内面に指頭圧痕あり
	6	須恵器	無台坏	(142)	74	35	3	緻密	良	5G6/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	7	須恵器	無台坏	(140)	(82)	39	5	緻密	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	8	須恵器	無台坏		(76)		6	砂粒混入	不良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	9	須恵器	甕				9	砂粒混入	良	10YR4/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		櫛描波状文
	10	土師器	塝	(250)			6	砂粒混入、骨針	良	2.5YR6/8橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	11	土師器	甕		84		6	砂粒混入、骨針	良	2.5YR6/8橙	ケズリ	ハケメ	ナデ	
	12	土師器	甑	(216)			7	砂粒混入、骨針	良	7.5YR8/6浅黄橙	ﾀﾀｷ,ｹｽﾞﾘ,ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ロクロナデ		



第121図　ST9873出土遺物

【ST9873】第120図

30・31－231・232グリッドに位置する。主軸方向はN－177°－Wである。平面形は、東西5.6m、南北5.2mのやや東西に長い方形を呈する。壁は比較的急傾斜を保ち、確認面からの深さは約20cmである。カマドは完全に失われているが、床面に残る焼土の痕跡から南辺のやや西寄りに設けられたものと推測される。また、焼土の位置からは燃焼部を竪穴内に持つ構造と考えられる。床は、西側など部分的に貼床される。柱穴は、EP837～840の４基である。EP837、840南側柱列は、ほぼ北壁に接し各々東西壁から約1.2m離れる。柱穴は径50cm前後の楕円形で、深さはEP837が50cm、EP840が25cmである。柱間距離は3.4mを測る。EP838、839北側柱列は北壁から約1.4m離れ、東西壁からは各々約1.2mの位置にある。柱穴は径50cm前後の楕円形で深さはEP838が60cm、EP839が35cmである。柱間距離は3.3mである。覆土は黒褐色のシルトを主体とするもので、自然堆積によるものと考えられる。

出土遺物は、須恵器蓋、無台坏、有台坏、長頸壷、甕等74点、黒色土器３点、土師器甕、塝片等438点である（第121図）。

121－１～３は須恵器蓋である。１の口径は小さいが、体部の傾きが大きく器高は高い。天井部は回転ヘラケズリによって体部との境を明瞭にする。口縁部は直立する。２は回転ヘラケズリにより天井部が広く作られるため体部が短く、器高が低い。内面のロクロ目の凹凸が顕著である。３は完形品であるが、口縁部の一部が大きく歪む。天井部は回転ヘラケズリされるが、小さい。体部の傾きは緩く、器高は低い。つまみは形骸化したものである。

121－４は、口径、底径が大きく、身が浅い有台坏である。直立気味の高台は底部外周に付けられる。底部はヘラ切り後ナデ調整される。体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る。

121－５～８はヘラ切りの無台坏である。５は底部内面に明瞭な指頭痕が巡る。底部と体部外面にナデ調整が施される。６も底部にナデ調整が施される。７の底部は無調整である。内外面に火襷が見られる。８は焼成不良のため調整は不明である。

121－９は頸部に波状文が入れられた甕である。波状文は２段で、各々ヘラのような幅の広い工具によるものと考えられる。口縁部は外側につまみ出されたものである。

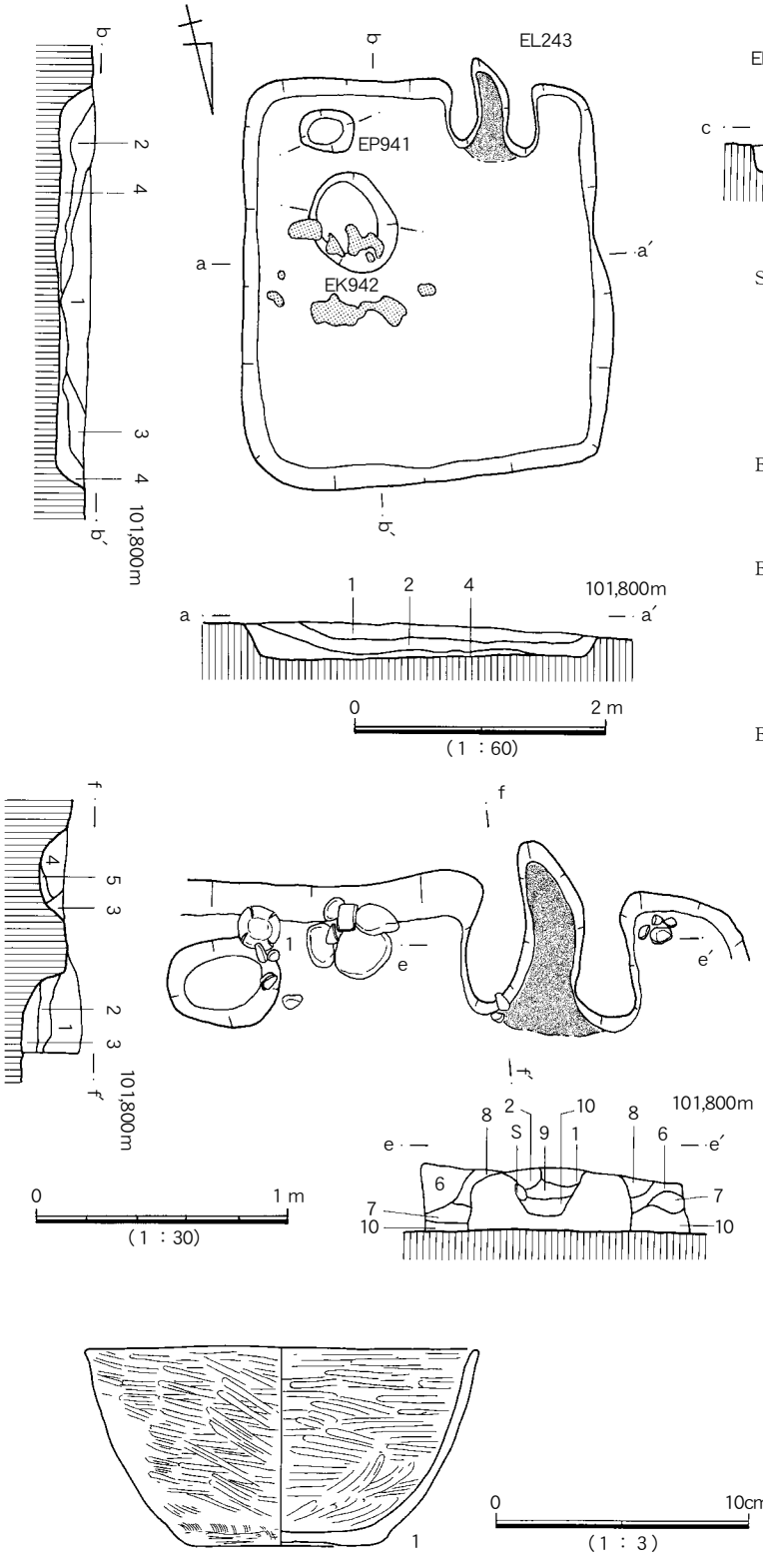
121－10と11は同一個体と考えられる。体部の中程に最大径を有し、同位置付近から縦方向のケズリが入れられる。内面はハケメ調整である。底部は平底であるが、中央部がやや突出る。

121－12は甑と考えられる。体部中央に最大径を有し、同部位に凸帯が巡る。凸帯の一部は幅広になる。外面は、タタキ後ロクロナデ調整が施され、下部には縦方向のケズリが入れられる。

小型化の傾向にある無台坏の形態等から、8世紀後半の所産と考えられる。

【ST9891】第122図

29・30－226グリッドに位置する。主軸方向はN－160°－Wである。平面形は、東西2.7m、南北3.1mの南北に長い方形を呈する。壁の傾斜は急で、深さは確認面から約20cmである。カマドは南辺の西寄りに設けられ、竪穴内に幅の狭い燃焼部を持つ構造である。カマドの左側には径20～40cm代の礫が集められている。床は全面貼床である。床面には白色粘土が散乱し、EK942内からも粘土塊が出土している。柱穴は確認できない。覆土は自然堆積である。



EP941

EK942

水糸高101,600m

ST9891

1	10YR3/1	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
2	10YR2/1	黒	シルト	褐色シルト粒、黒褐色シルト粒少量含む
3	10YR2/2	黒褐	シルト	黒色シルトを帯状に含む、褐色シルト粒含む
4	10YR3/1	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む、固くしまる

EK941

1	10YR2/1	黒	シルト	黒褐色シルトを斑状に含む、最下部に白色粘土

EK942

1	10YR2/3	黒褐	シルト	灰黄褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
2	10YR2/2	黒褐	シルト	灰黄褐色シルトブロック少量含む
3	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	黒褐色シルト微量含む
4	10YR4/4	褐	シルト	黒褐色シルト微量含む

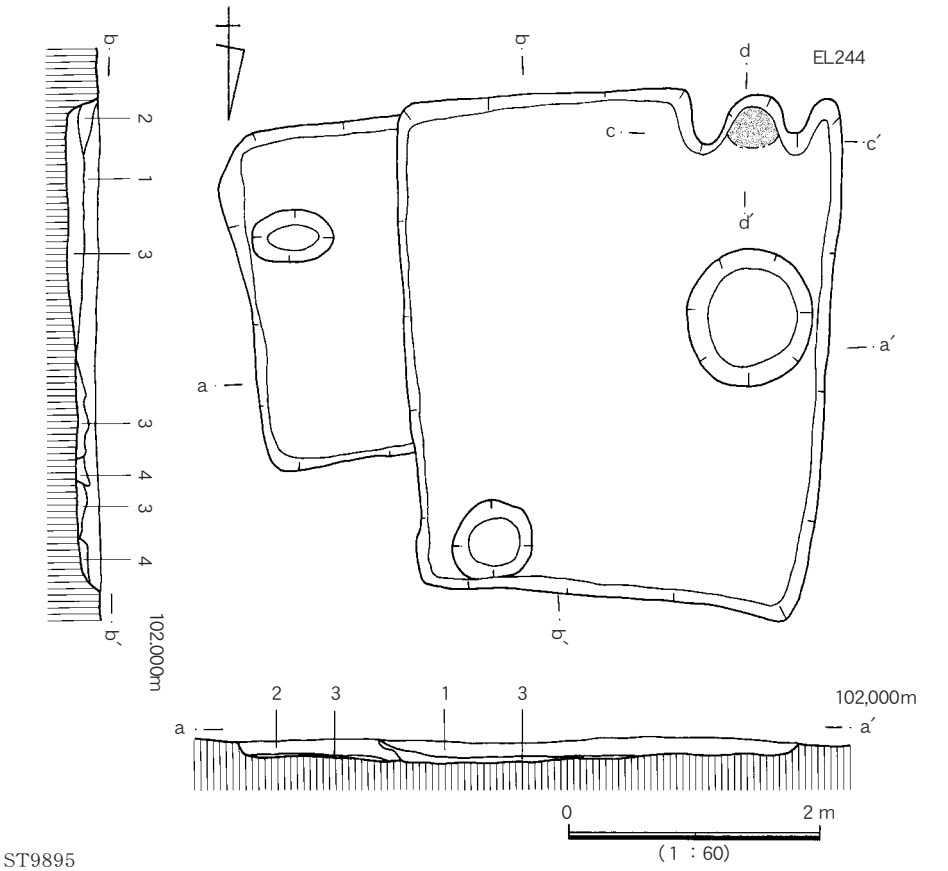
EL9891

1	10YR3/1	黒褐	シルト	褐色シルト粒、黒色シルト粒少量含む
2	10YR3/4	暗褐	シルト	均質、しまりがない
3	10YR2/1	黒	シルト	焼土粒少量、褐色シルト粒少量含む
4	10YR3/2	黒褐	シルト	均質
5	10YR3/3	黒褐	シルト	均質
6	10YR2/1	黒	シルト	黒褐色シルト、褐色シルト粒少量含む
7	10YR3/1	黒褐	シルト	褐色シルト粒、少量含む、固くしまる
8	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
9	10YR3/1	黒褐	シルト	焼土粒少量含む
10	10YR3/2	黒褐	シルト	焼土粒多量含む

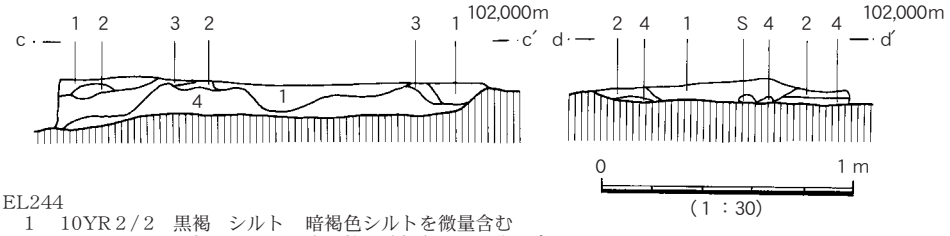
第122図　ST9891　出土遺物

表46　ST9891出土土器観察表

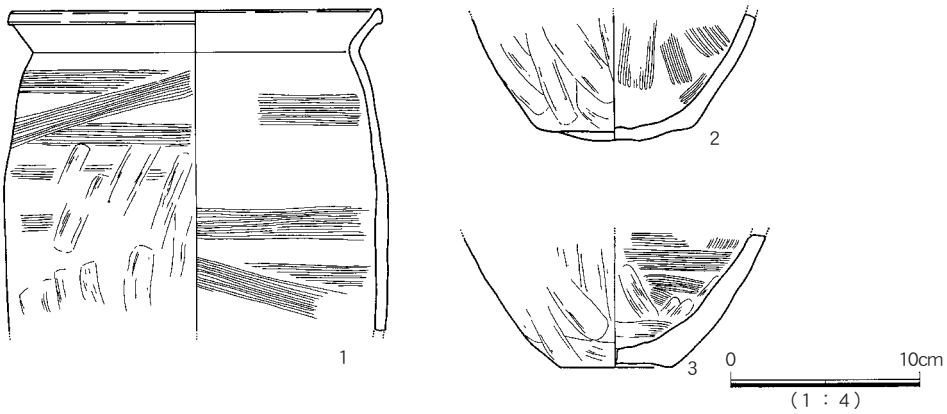
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
122	1	黒色土器	無台坏	(155)	74	74	4	細砂混入、骨針	良好	5YR7/8橙	ミガキ,ハケメ,ケズリ	ミガキ	ミガキ	
	2	土師器	甕	(138)	(90)		5	粗砂混入	不良	7.5YR7/6橙			木葉痕	



ST9895
1　10YR2/2　黒褐　シルト　黒色シルト少量含む、固くしまる
2　10YR2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルトを微量含む、固くしまる
3　10YR3/2　黒褐　シルト　黒色シルト、褐色シルトを斑状に含む、固くしまる
4　10YR2/2　黒褐　シルト　ほぼ均質、固くしまる



EL244
1　10YR2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルトを微量含む
2　10YR3/2　黒褐　シルト　炭化粒、暗褐色シルト微量含む
3　10YR3/2　黒褐　シルト　黒色シルト、褐色シルトを斑状に含む
4　10YR3/4　暗褐　シルト　均質



第123図　ST9895　出土遺物

出土遺物は、須恵器甕片が２点、黒色土器無台坏４点、土師器甕片29点である。

122－１は内面を黒色処理した大型の坏である。外面にはミガキの他に下部を主体にハケメとケズリが施される。

122－２は土師器小型甕である。底部の木葉痕は認められるが、他は火熱により器面が磨滅し調整は不明である。

資料に乏しいが、8世紀末から９世紀前半頃と考えられる。

【ST9895】第123図

31･32－222グリッドに位置する。主軸方向はN－176°－Wである。平面形は、東西3.4m、南北4.3mの南北に長い方形を呈する。壁の傾斜は緩く、確認面からの深さは約10㎝と浅い。

カマドは南辺の西寄りに位置し、燃焼部は竪穴内に持つ構造である。床は地山を利用し、堅く締る。

柱穴は確認できない。ST9896と重複し、

新旧関係は、ST9896→ST9895である。

出土遺物は、須恵器無台坏、長頸壷、甕片等12点、土師器甕片34点である（第123図）。

123－１～３は土師器長胴甕である。１の体部外面にはロクロナデとハケメ調整後、比較的高い位置から縦方向のケズリが入れられる。２は底部中央が盛り上がるタイプ、３は小さく、ほぼ平坦になるタイプである。２点とも外面にケズリ、内面にハケメ調整が施される。

【ST9896】第123図

大部分がST9895と重複するため全容は不明である。南北長は2.7m、東西長はST9895との掘込みの違いから3.1mと推定できる。やや東西に長い方形である。壁は急角度で、約15cmの深さが残る。カマドは失われているが、南辺の床に焼土面が残ることから、この付近に設けられたものと考えられる。床は地山面を使い、貼床はされない。柱穴は確認できない。

出土遺物は、須恵器無台坏、長頸壷、甕片等４点、黒色土器１点、土師器甕片等50点であるが、いずれも小破片のため詳細については不明である。

【ST9900】第124図

31・32－219・220グリッドに位置する。主軸方向はN－174°－Wである。北西角が撹乱を受けている。平面形は一辺４mの方形を呈する。壁は垂直に近い角度を保つ。確認面からの深さは、約20cmである。カマドは南辺の西寄りに位置する。竪穴外に馬蹄形の燃焼部を持つ構造である。床は中央部にのみ貼床される。検出された柱穴は１基で、竪穴のほぼ中央に位置する。EP779は径60cm程の楕円形で、深さは約60cmである。カマドの左には貯蔵穴と考えられるEK777、778がある。EK777は長軸1.3mの長楕円形、EK778は径約70cmの円形である。深さは２基とも約50cmである。覆土は黒褐色シルトを主体とする、自然堆積である。

出土遺物は、須恵器蓋、無台坏、長頸壷、甕片等６点、土師器無台坏、甕片等20点であるが、図化できるものは無く、詳細は不明である。

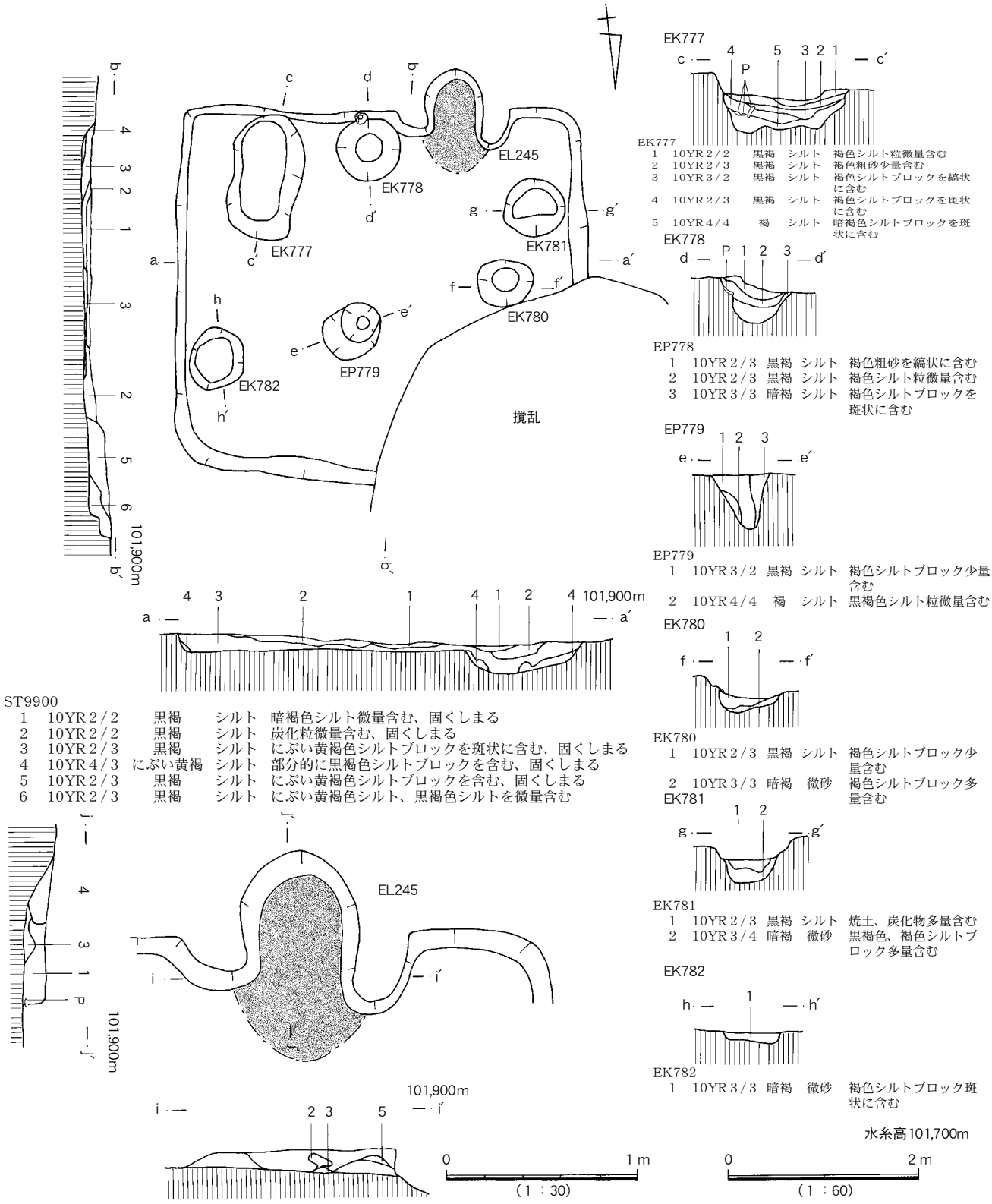
【ST9962】第125図

29・30－193グリッドに位置する。主軸方向はN－169°－Eである。南辺中央部に、SB616掘立柱建物跡を構成するEB618柱穴が重複する。新旧関係は、ST9962→SB616である。平面形は、東西3.7m、南北4.0mで南北に長い方形を呈する。確認面からの深さは、削平により約10cmと浅く、壁の傾斜も緩い。カマドは南辺の西寄りに設けられるが、EB618によって左袖部を壊される。細い馬蹄形の燃焼部を竪穴外にもつ構造である。また、EB618から竪穴中央部にかけて、焼土の広がりが見られる。床はほぼ全面に貼床される。柱穴は確認できない。覆土は浅いため、黒褐色シルトの１層で堆積状況は不明である。

出土遺物は、須恵器無台坏６点、有台坏１点、甕片等２点、黒色土器坏１点、土師器甕片等61点である（第125図）。

表47　ST9895出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
123	1	土師器	甕	(198)			5	粗砂混入	良	5YR6/6橙	ロクロナデ､ハケメ､ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		
	2	土師器	甕		(82)		6	砂粒混入	良	7.5YR6/6橙	ケズリ	ハケメ	ナデ	
	3	土師器	甕		(60)		8	砂粒混入	良	7.5YR6/4にぶい橙	ケズリ	ハケメ、ナデ	ナデ	



EK777
1 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む
2 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色粗砂少量含む
3 10YR3/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロックを縞状に含む
4 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルトブロックを斑状に含む
5 10YR4/4 褐 シルト 暗褐色シルトブロックを斑状に含む

EK778
EP778
1 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色粗砂を縞状に含む
2 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルト粒微量含む
3 10YR3/3 暗褐 シルト 褐色シルトブロックを斑状に含む

EP779
1 10YR3/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロック少量含む
2 10YR4/4 褐 シルト 黒褐色シルト粒微量含む

EK780
1 10YR2/3 黒褐 シルト 褐色シルトブロック少量含む
2 10YR3/3 暗褐 微砂 褐色シルトブロック多量含む

EK781
1 10YR2/3 黒褐 シルト 焼土、炭化物多量含む
2 10YR3/4 暗褐 微砂 黒褐色、褐色シルトブロック多量含む

EK782
1 10YR3/3 暗褐 微砂 褐色シルトブロック斑状に含む

ST9900
1 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルト微量含む、固くしまる
2 10YR2/2 黒褐 シルト 炭化粒微量含む、固くしまる
3 10YR2/3 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルトブロックを斑状に含む、固くしまる
4 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 部分的に黒褐色シルトブロックを含む、固くしまる
5 10YR2/3 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルトブロックを含む、固くしまる
6 10YR2/3 黒褐 シルト にぶい黄褐色シルト、黒褐色シルトを微量含む

EL254
1 10YR2/3 黒褐 シルト 黄褐色シルト斑状に含む、固くしまる
2 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 均質、固くしまる
3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルト斑状に含む、固くしまる
4 10YR2/3 黒褐 シルト 黄褐色シルト斑状に含む、固くしまる
5 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト 黒褐色シルト微量含む、固くしまる

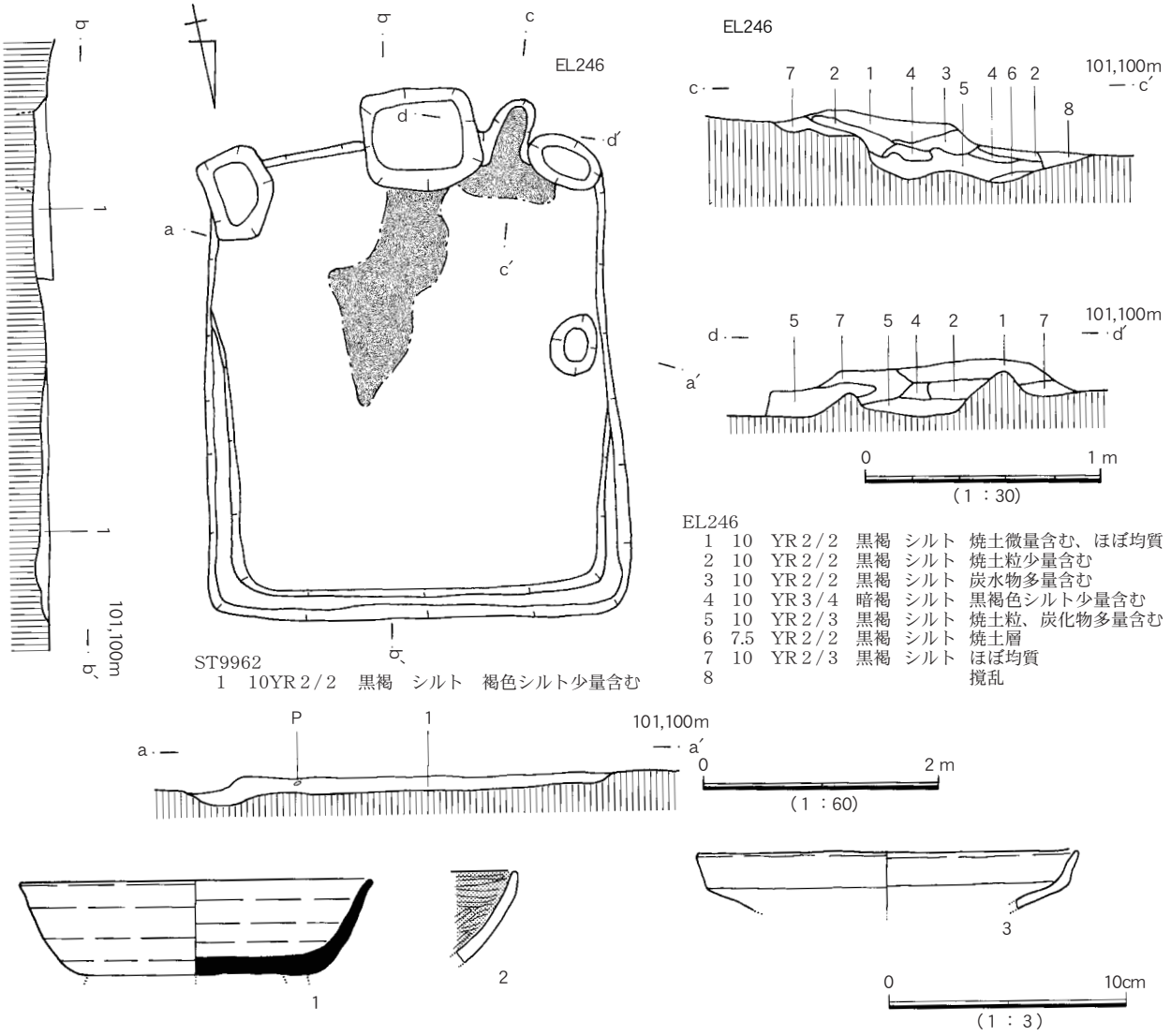
第124図　ST9900

125－１は、高台を欠損するが須恵器有台坏である。底部は、ヘラ切り後無調整である。口径、底径が大きく、身は比較的浅い。体部は幾分内湾し、口縁部は外側に弱く引出される。胎土には粗砂粒が多く混入し、器面に影響を与えている。

125－２は内面が黒色処理された坏である。体部は内湾し、そのまま口縁部に至る。内外面ともミガキ調整が施される。

125－３は土師器盤状坏と考えられる。破片資料のため全形は不明である。体部は、傾斜する底部から屈曲して短く立ち上がり、僅かに外反する。器厚はほぼ均一で、全体的に薄手である。調整は、焼成不良のため器面が磨滅し、不明である。

資料数は少ないが、有台坏の形態等から８世紀中から後半頃の所産と考えられる。



第125図　ST9962　出土遺物

表48　ST9962出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
125	1	須恵器	有台坏	148			5	粗砂混入、骨針	良	5Y5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	2	黒色土器	無台坏				5	砂粒混入	良	10YR8/3浅黄橙	ミガキ	ミガキ		EK777
	3	土師器	盤状坏	(160)			4	砂粒混入	良	2.5Y8/2灰白				

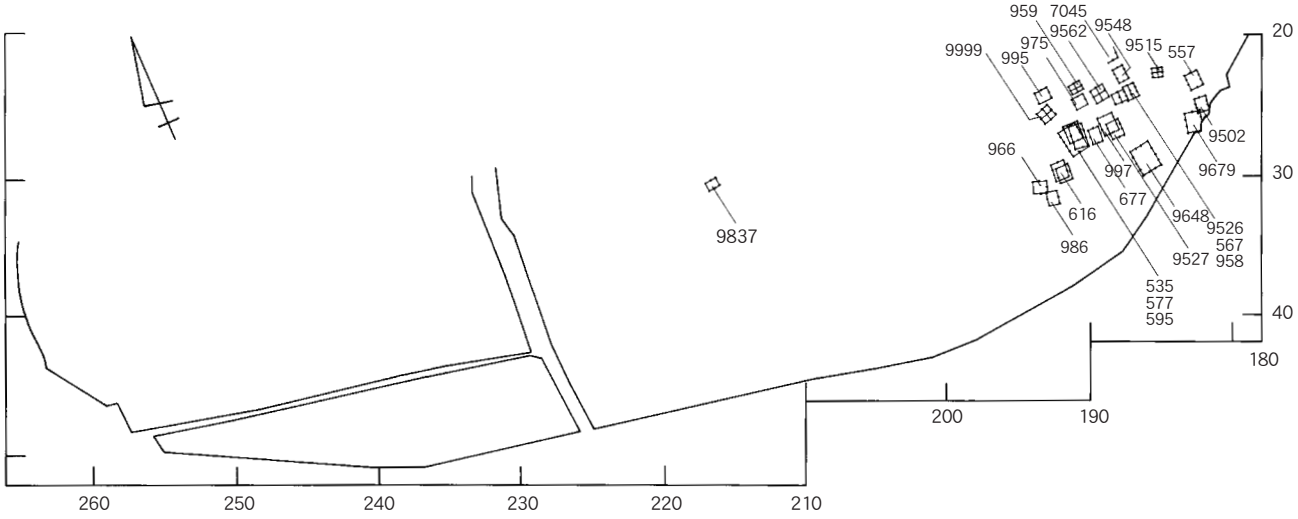
2　掘立柱建物跡

SA地区における奈良・平安時代の掘立柱建物跡は25棟を数える。その分布状況は、大部分が調査区東側に集中する傾向にあり、具体的には、21～32－182～194グリッドの約3,000m²の範囲内に納まる（第126図）。地形的には、一段高い地区である標高約101ｍの段丘上に立地することになる（第７図）。この地区では竪穴建物跡の分布も少なく、当該時期の遺構も希薄である。また、中央部付近では、竪穴建物跡を埋め戻したり（ST9559・ST9561）、整地を行った痕跡もうかがえる。建物はほぼ全てが南北棟で、主軸方向の振れは磁北から10度未満のもので占められる。建物の構造は、側柱建物を主体とし、総柱建物と考えられるのは４棟のみである。また、側柱建物の規模には、ばらつきが見られるが、総柱建物は全て２間×２間の小規模なものである。建物を構成する柱穴には、比較的大きく、隅丸方形を呈するものと、小型で円形あるいは楕円形を呈するものに大別できる。これらの違いは建物の規模にも反映する傾向にある。掘立柱建物跡群の中心的建物と考えられるSB535建物跡は、規模を変えて２度の建て替えが行われたものと考えられる（SB577･SB595）。さらに、他の建物にも建て替えが認められることから、少なくとも３期の変遷あるものと考えられる。

以下、建物毎に状況と出土遺物について詳述する。

【SB535】第127図

27・28－191・192グリッドに位置する。梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向はＮ－２°－Ｅである。南東角の柱穴が、中世の所産と考えられるSD9573溝跡によって失われている。規模は、梁が５ｍ、桁が6.3ｍを測り、面積は約32m²である。柱心心間の距離は、梁が2.5ｍ等間、桁が2.1ｍ等間である。柱穴は一辺約80㎝の隅丸方形を基本とするが、桁の内側の柱穴に関しては長軸約100㎝、短軸約80㎝の長方形を呈するものも見られる。そのため掘り方の面が通らず、不揃いな印象を受ける。深さは約80㎝であるが、整地層の除去後に検出された南側柱列は50㎝である。柱穴底には、径20㎝前後の円形の柱痕跡が残る。柱痕跡の土質変化や、酸化鉄を多量に含み、硬化しているのは、柱の重量からくる含水比の低下によるものと考えら



第126図　掘立柱建物跡分布図（古代）

れる。覆土は、黄褐色シルトブロックを含む黒褐色のシルトを充填し、堅く締る。SB577、595との重複関係があり、EB536、541、542、543との切合いからSB595→535→577の新旧関係が得られている。柱穴からの出土遺物は、以下の通りである。

EB537　須恵器甕１点、土師器無台坏１点、甕７点
EB538　須恵器蓋１点（144－１）、無台坏３点、有台坏１点（144－８）、皿１点（144－６）土師器甕17点
EB539　須恵器蓋２点、無台坏２点、甕１点、土師器甕６点
EB541　須恵器蓋１点（144－２）、無台坏１点（144－５）、土師器無台坏１点、甕４点
EB542　須恵器無台坏２点、有台坏１点（144－９）、土師器甕13点
EB543　須恵器無台坏９点、有台坏１点、黒色土器無台坏１点、土師器甕18点
EB544　須恵器無台坏３点（144－３・４・７）、土師器無台坏３点、甕６点

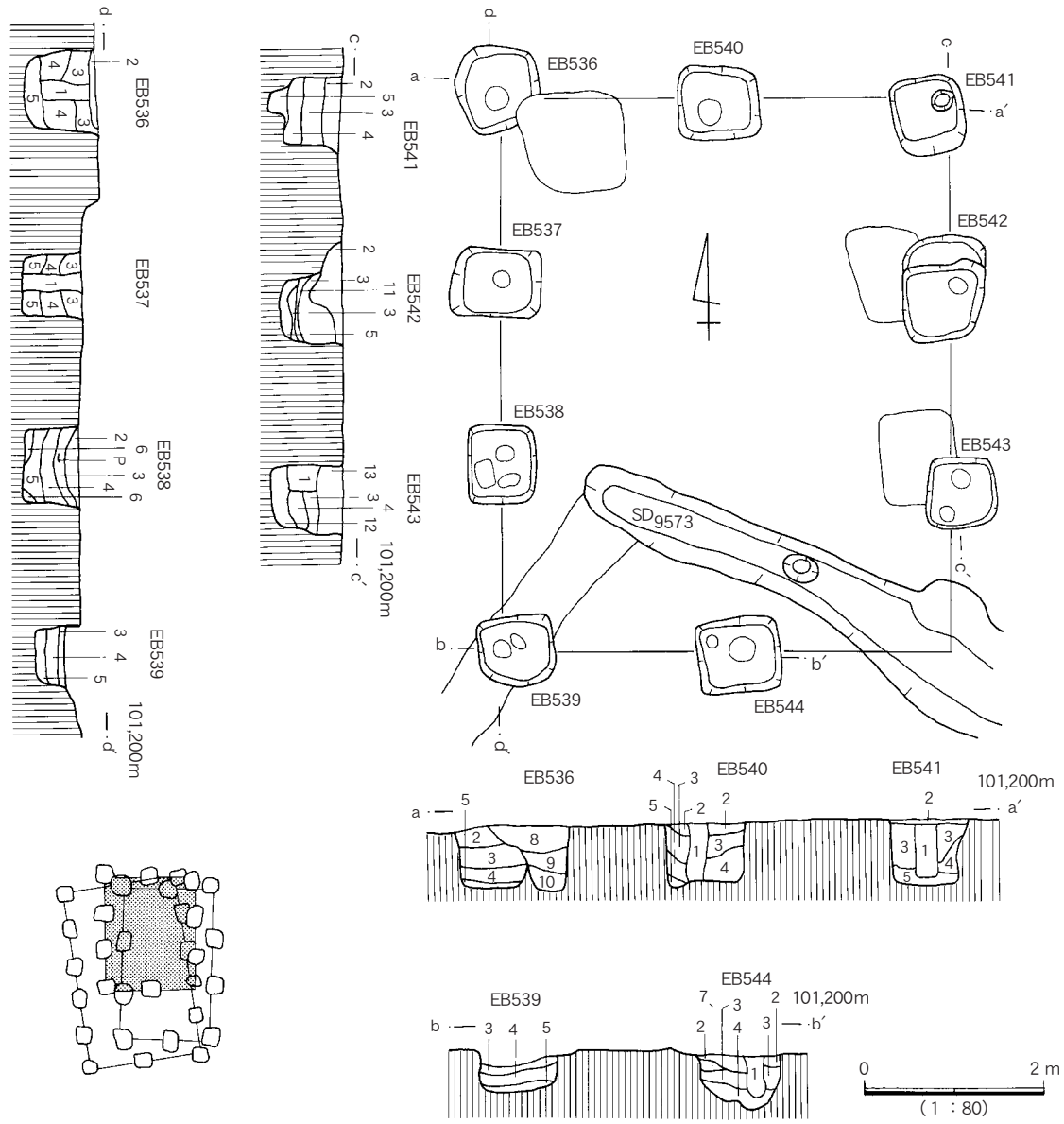
【SB577】第128図

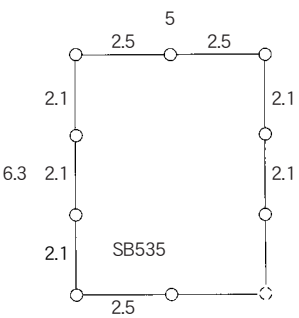
27～29－191・192グリッドに位置する。梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向は、N－１°－Eで、南北の柱筋がほぼ磁北に乗る。規模は、梁が5.1m、桁が8.4mを測り、面積は約43m²である。柱心心間の距離は、梁の南側柱列で西から2.7m－2.4m、北側柱列で2.7m－2.4m。桁の東側柱列で北から3.0m－2.4m－3.1m、西側柱列で3.0m－2.7m－2.7mである。柱穴は長軸約100㎝、短軸約80㎝で、主に南北に長い隅丸方形を呈する。深さは50～70㎝を測る。EB578、581、583、584の土層断面には柱痕跡を観察できる。柱穴底には径約20㎝の円形の柱痕跡が確認できる。柱痕跡は、含水比の低下により酸化鉄を多量に含み、硬化している。覆土は、黄褐色シルトブロックの他に、炭化物や焼土が混入する黒褐色のシルトを充填し、堅く締る。遺構間の切合いはSB535で述べた。柱穴からの出土遺物は以下の通りである。

EB578　土師器甕３点
EB580　須恵器蓋１点（144－12）、無台坏１点、土師器甕５点
EB581　須恵器蓋（144－14）、無台坏１点（144－15・20）、有台坏１点（144－21）、甕１点、土師器甕15点
EB583　須恵器蓋１点（144－１３）、無台坏17点（144－16･18）、有台坏２点、甕１点、土師器無台坏１点、甕37点
EB584　須恵器蓋１点、無台坏8点、土師器甕22点
EB585　須恵器無台坏３点（144－17）、皿１点（144－19）、土師器甕26点
EB586　須恵器無台坏２点、土師器甕16点

【SB595】第129図

27～29－191～193グリッドに位置する。梁行２間､桁行５間の南北棟である。主軸方向は、N－８°－Wである。重複関係がある３棟の建物中、磁北からの振れが最も大きく、当該時期の掘立柱建物の中でも２番目に大きい振れを示す一群の中にある。規模は、梁が6.8m、桁が10.1mを測り、面積は約69m²である。面積に関しても、本調査区中最も大型の建物である。柱心心間の距離は、梁が南北柱列とも3.3m等間、桁も東西柱列とも北から2.2m－2.1m－1.8

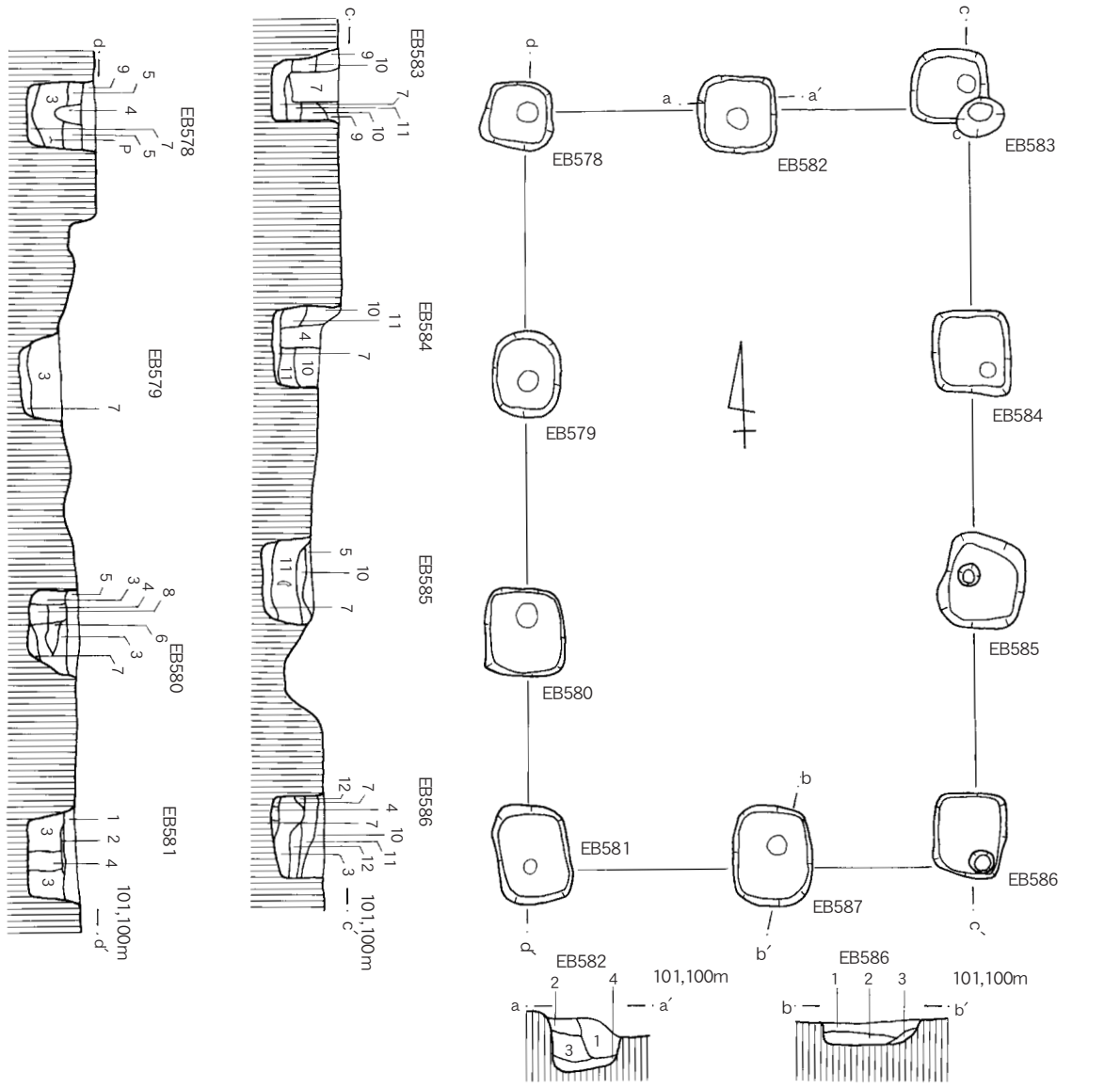


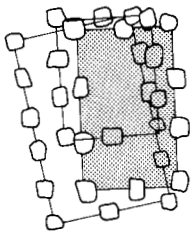


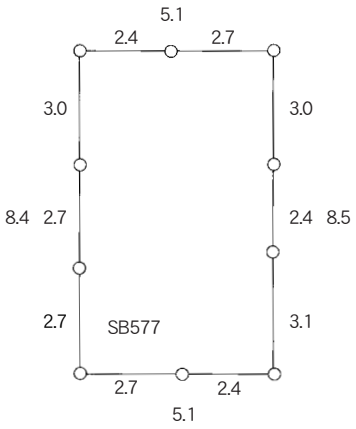
SB535

1	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化粒微量、黄褐色シルト少量含む、固く締まる
2	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化粒少量、黄褐色シルトブロック含む、固く締まる
3	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色、黒色シルトブロック少量含む、固く締まる
4	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色、黒色シルトブロック多量含む、固く締まる
5	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
6	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒微量含む、固く締まる
7	10YR3/4	暗褐	シルト	黄褐色、黒色シルトブロック含む、固く締まる
8	10YR2/3	黒褐	シルト	炭化物少量、焼土微量含む、固く締まる　SD9641
9	10YR2/3	黒褐	シルト	焼土粒微量、黄褐色シルトブロック含む　EB633
10	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルト粒、黄褐色シルトブロック含む　EB633
11	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
12	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色、黄褐色シルトブロック斑状に含む、固く締まる
13	10YR3/3	暗褐	シルト	炭化粒、黄褐色細砂、黒褐色シルト粒斑状に含む

第127図　SB535



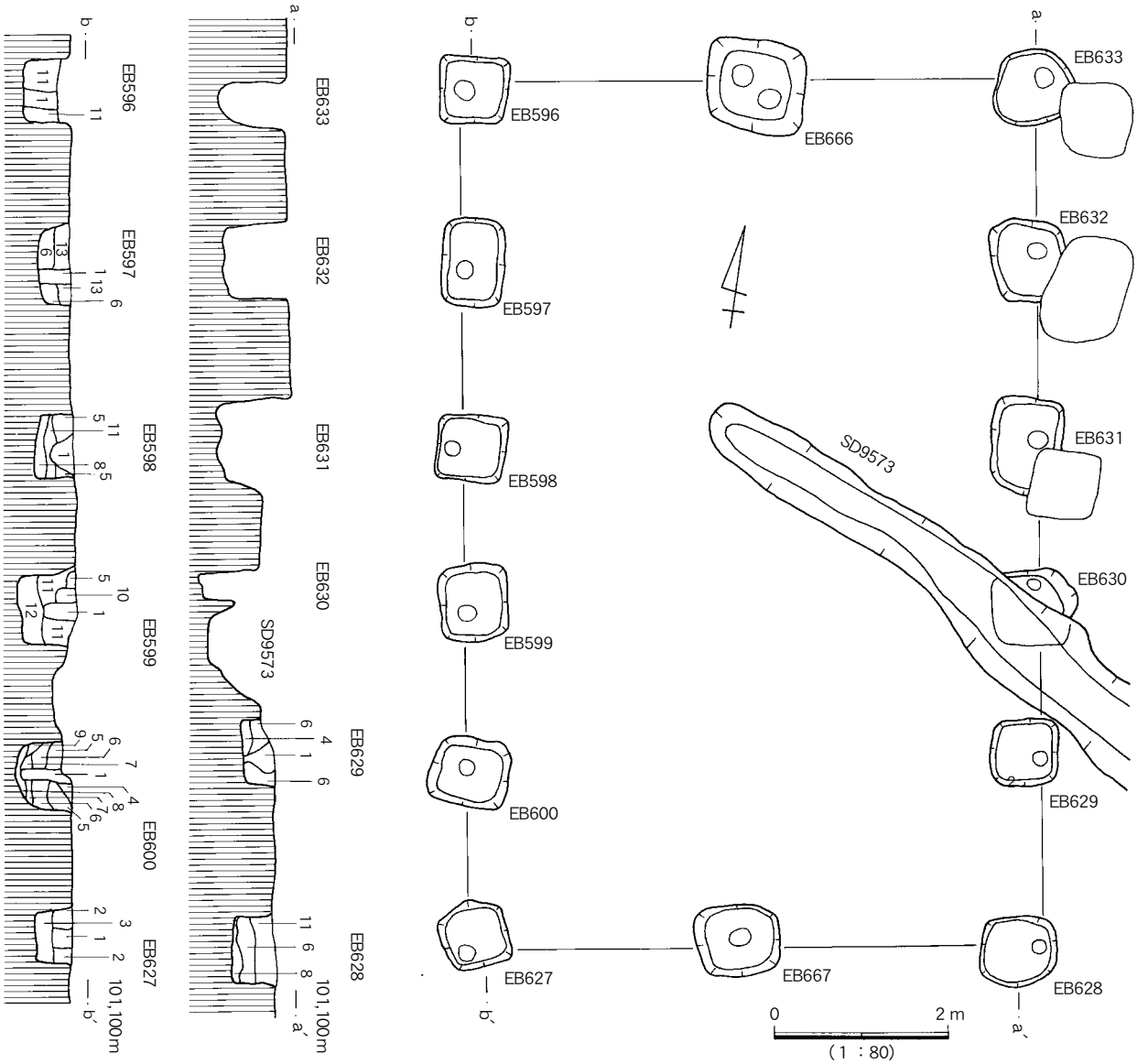


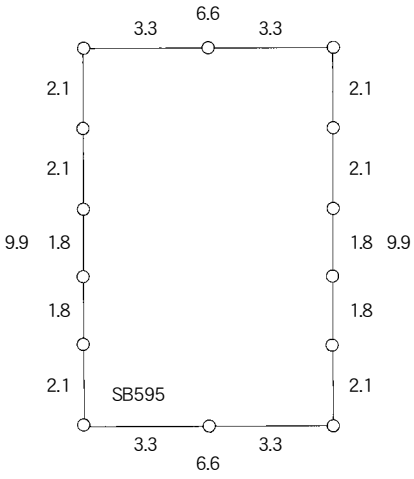


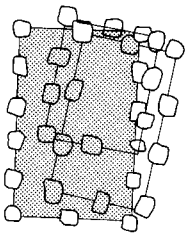
SB577

1	10YR 3/4	暗褐	シルト	炭化物少量、黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
2	10YR1.7/1	黒	炭化物層	
3	10YR 3/4	暗褐	シルト	炭化物少量含む、黄褐色細砂を斑状に含む
4	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化物少量、黄褐色細砂少量含む、やわらかい
5	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化物、焼土、黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
6	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化物微量、暗褐色、黄褐色シルトブロック少量含む
7	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、固く締まる
8	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
9	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化物、焼土、黄褐色シルト粒微量含む、固く締まる
10	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化物（大）微量、黄褐色シルトブロック斑状に含む
11	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化物少量、黄褐色、暗褐色シルト粒斑状に含む
12	10YR 3/3	暗褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック微量含む、固く締まる

第128図　SB577







SB595

1	10YR2/1	褐	シルト	炭化物、黄褐色シルト粒微量含む、固く締まる
2	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化物微量、暗褐色シルト粒少量含む、固く締まる
3	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒含む、固く締まる
4	10YR2/3	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
5	10YR3/2	黒褐	シルト	炭化物、暗褐色、黄褐色シルトブロック斑状に含む
6	10YR4/4	褐	シルト	暗褐色、黒褐色シルトブロック斑状含む、固く締まる
7	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
8	10YR3/3	暗褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
9	10YR3/3	暗褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、弱い粘性、固く締まる
10	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化物微量、黄褐色シルトブロック多量含む
11	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック斑状に含む
12	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック含む、弱い粘性、固く締まる
13	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
14	10YR3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルト粒少量含む

第129図　SB595

m－1.8m－2.1mである。柱穴は、主に一辺約80cmの隅丸方形を呈するが、EB597、631は南北に長軸を持ち、100cmを測る長方形となる。また、掘り方の面からは不揃いな印象を受ける。深さは、整地層を除去した影響もあり、西側及び南側は40cmと浅いが、本来は北東側のように70cm以上掘込まれたものと推測される。EB596、597、599、600の土層断面には柱痕跡を観察することができる。柱穴底には、含水比の低下により硬化した、径約20cmの円形の柱痕跡を確認できる。EB666に見られるもう１本の柱痕跡は、重複するSB577のEB582のものである。覆土は、黄褐色シルトブロックを含む黒褐色シルトを充填し、堅く締る。遺構間の切合いは前述した通りである。柱穴からの出土遺物は以下の通りである。

EB596　須恵器蓋１点、無台坏４点（144－24)、有台坏２点（144－23・25）
　　黒色土器無台坏１点、土師器甕33点
EB597　須恵器無台坏３点、土師器甕10点
EB600　須恵器無台坏１点、土師器有台坏１点、甕４点
EB627　土師器甕４点
EB628　須恵器蓋１点、
EB630　須恵器無台坏１点（144－22)、土師器甕４点
EB632　須恵器無台坏１点、土師器甕９点
EB633　須恵器無台坏３点、土師器無台坏１点、甕10点

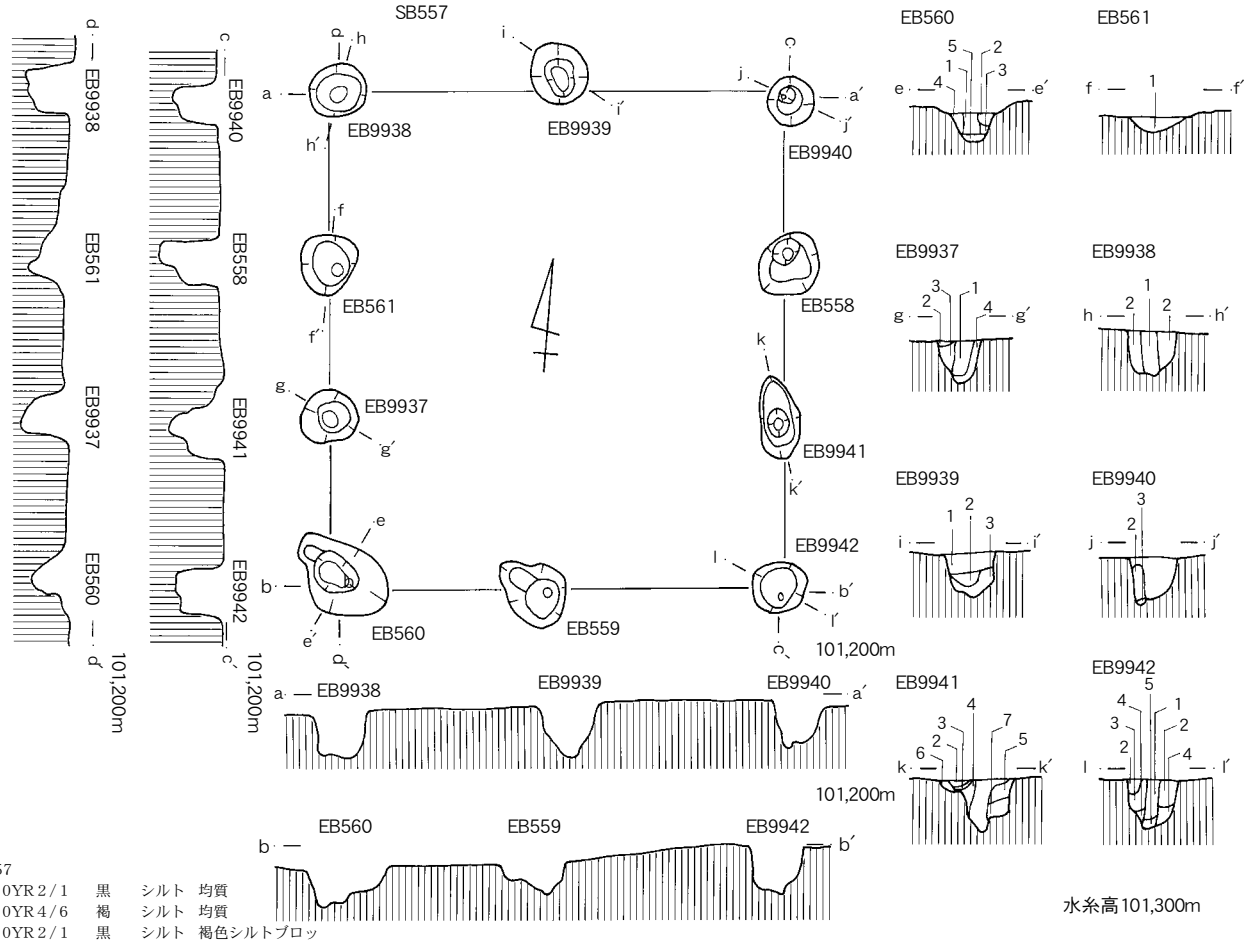
【SB557】第130図

23・24－183・184グリッドに位置する。梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向は、N－５°－Wである。規模は、梁が4.6m、桁が5.4mを測り、面積は約25m^{2}である。柱心心間の距離は、梁が南北とも2.4m等間、桁の東側柱列が北から1.8m－1.6m－1.8m、西側柱列が1.6m－1.8m－1.8mである。柱穴は、径40～80cmの楕円形もしくは不整楕円形を呈する。深さは、30～50cmである。EB560、9937、9938、9940、9941、9942の土層断面には柱痕跡が確認できる。また、EB561、559、9937、9938の柱穴底には含水比の低下により硬化した、径18cm前後の柱痕跡が認められる。覆土は比較的混入物の少ない黒色シルトが充填される。

柱穴からの出土遺物は確認されなかった。

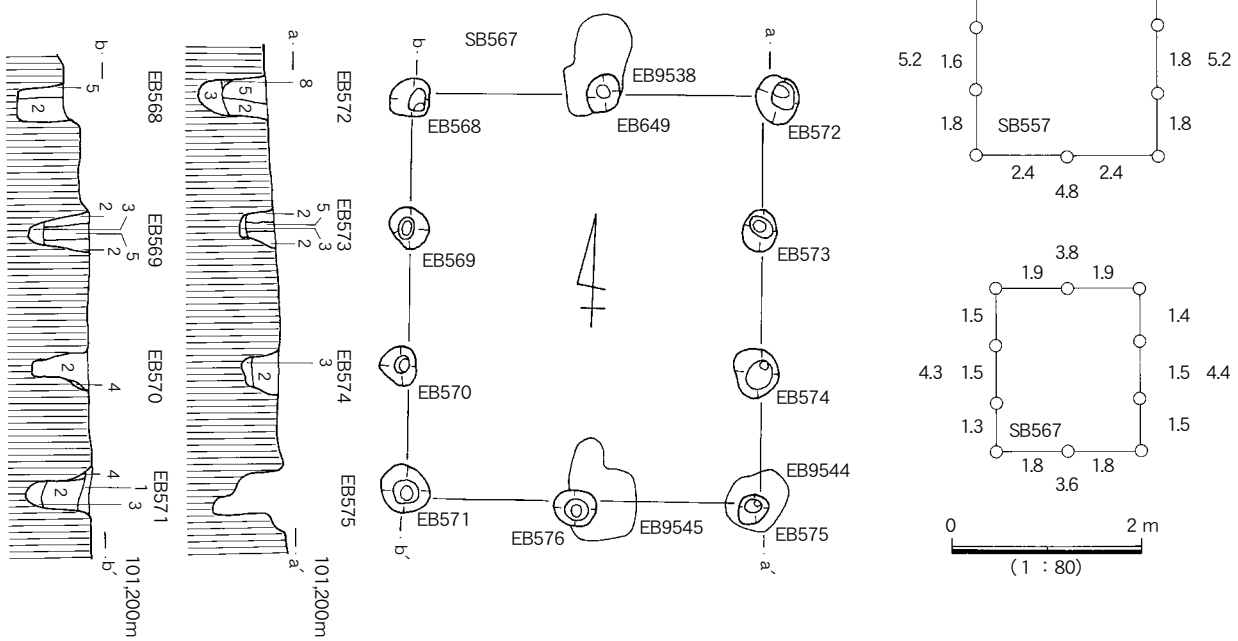
【SB567】第130図

24・25－187・188グリッドに位置する。梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向は、N－８°－Eである。規模は、北側梁が3.8m、南側で3.6m、東側桁が4.4m、西側で4.3mを測る。面積は約16 m^{2}である。柱心心間の距離は、北側梁が1.9m等間、南側が1.8m等間、桁の東側柱列は、北から1.4m－1.5m－1.5m、西側柱列は1.5m－1.5m－1.3mである。柱穴は、径40～50cmの楕円形を呈する。深さは40～60cmを測る。土層断面に柱痕跡が確認できるのは、EB568、569、572、573である。また、柱穴底には径15cm前後の円形の柱痕跡が認められる。覆土は黒褐色シルトを充填する。遺構間の切合いは、ST9561が埋められた後にEB568が掘られ、SB9526のEB9538、9545上にSB958のEB927、929が掘られる。さらにその後、EB649、576が掘られる。これらの観察結果から、ST9561→SB9526→SB567→SB958の新旧関係が推定される。出



SB557
1 10YR2/1 黒 シルト 均質
2 10YR4/6 褐 シルト 均質
3 10YR2/1 黒 シルト 褐色シルトブロックを縞状に含む
4 10YR2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロックを斑状に含む
5 2.5Y8/1 灰白色 粘 土 粘性強い、固く締まる

SB567
1 10YR2/1 黒 シルト 褐色シルトブロック少量含む、やわらかく締まりない
2 10YR3/1 黒褐 シルト 黄褐色シルト粒少量含む、やわらかいが締まりある
3 10YR2/2 黒褐 シルト 黄褐色シルトブロック含む、固く締まる
4 10YR2/1 黒 シルト 黄褐色粒微量含む、固く締まる
5 10YR2/2 黒褐 シルト 黄褐色シルト、黒色シルト少量含む、固く締まる



第130図　SB557、567

土遺物は以下の通りである。

EB570　須恵器蓋１点（144－10）

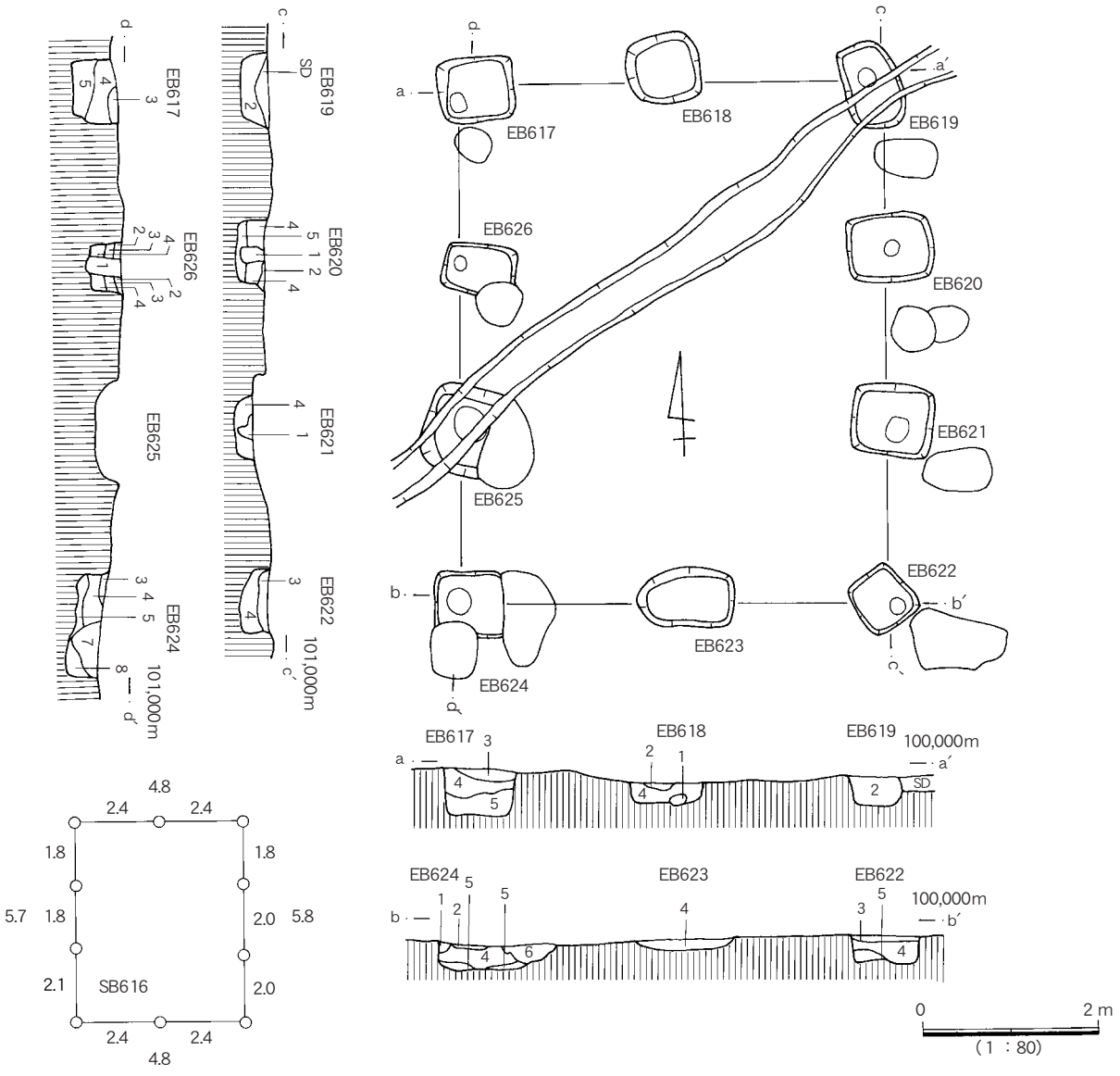
EB572　須恵器無台坏５点、土師器甕8点

EB573　土師器甕３点

EB574　須恵器無台坏３点、壷１点（144－11）、土師器甕７点

【SB616】第131図

30・31－192・193グリッドに位置する。梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向は、



SB616

1	10YR２/２	黒褐	シルト	均質だが締まりない
2	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色シルト粒を縞状に含む
3	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む
4	10YR４/４	褐	シルト	黒褐色シルトブロックを斑状に含む
5	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを（大）斑状に含む
6	10YR２/３	黒褐	シルト	黒色シルトブロックを斑状に含む
7	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを微量含む
8	10YR２/３	黒褐	粘土	均質

第131図　SB616

N－３°－Wである。規模は、梁が南北とも4.8m、東側桁が5.8m、西側が5.7mを測り、面積は約28m²である。柱心心間の距離は、梁が2.4m等間、桁の東側柱列は、北から1.8m－2.0m－2.0m、西側は1.8m－1.8m－2.1mである。柱穴は、長軸約100cm、短軸約80cmの長方形のものが主であるが、ほぼ方形を呈するものもある。深さは、南側が削平を受け、遺存状態が良く無いため比較的浅く、30～50cmである。EB620、622の土層断面には柱痕跡を観察できる。また、EB618、623を除く８基の柱穴の底には、含水比の低下により硬化した、20cm前後の円形の柱痕跡を認めることができる。覆土は、褐色シルトを混入する黒褐色シルトが充填される。遺構間の切合いは、ST9962のカマド付近にEB618が掘られることから、ST9962→SB616の新旧関係が得られる。

出土遺物は以下の通りである。

EB618　須恵器蓋２点、土師器甕11点

EB621　須恵器蓋１点、有台坏１点、甕２点、土師器甕12点

EB624　須恵器無台坏３点、長頸壷２点、土師器甕１点

EB626　土師器甕６点

【SB677】第132図

27・28－190・191グリッドに位置する。 梁行２間、桁行２間の南北棟である。主軸方向はN－２°－Eである。規模は、梁が南北とも3.6mである。南東角のEB682が、SD9573によってほとんど壊されているため、柱心心が不明である。したがって、東側桁は4.5～4.8mと推測される。西側桁は4.8mである。面積は約17m²と推測される。柱心心間の距離は、梁が1.8m等間、桁の東側柱列は北から2.4m－2.1～2.4m、西側柱列は2.4m等間である。柱穴は径40～50cmの楕円形で、深さは20～50cmである。EB681では土層断面に柱痕跡を観察することができたが、他は柱穴底においても、その痕跡は認められなかった。覆土は、暗褐色ないし黄褐色シルトを含む黒褐色シルトが充填され、堅く締る。他遺構との重複は、SB677→SD9573の新旧関係が見られる。

出土遺物は以下の通りである。

EB678　土師器甕７点

EB680　土師器甕９点

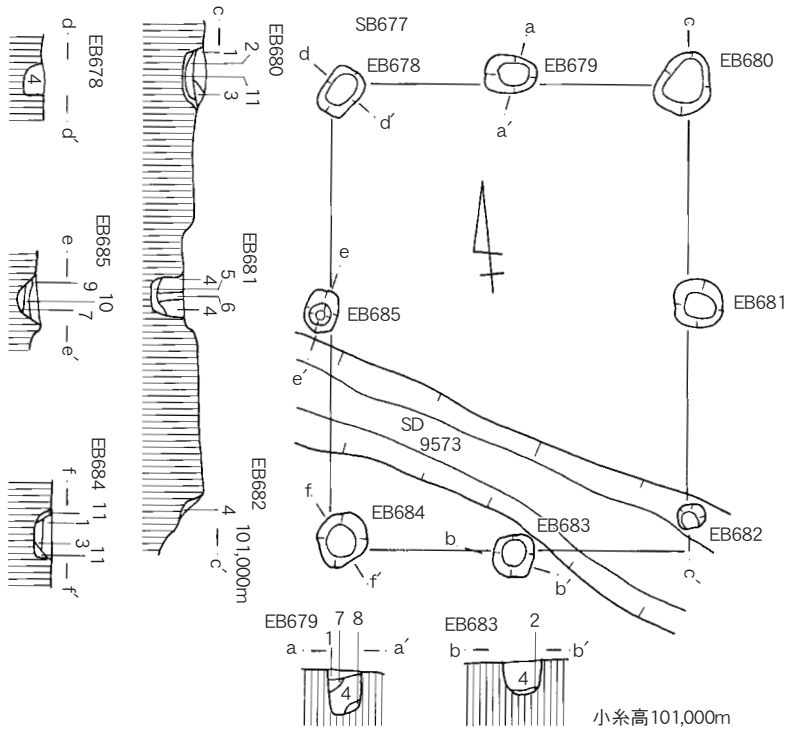
EB685　須恵器蓋１点、無台坏１点、黒色土器無台坏１点、土師器甕９点

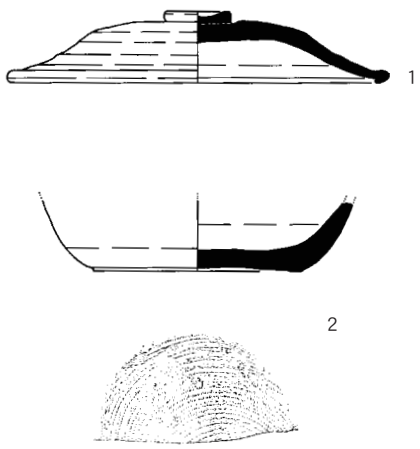
132－１の蓋は、回転ヘラケズリを施した天井部から、傾斜の強い体部が延びるため、器高は比較的高い。口縁部は内側に折り、丸味を持ったものである。つまみは扁平なリング状である。 132－2は底径が大きい、回転糸切りの無台坏である。内面に火襷が認められる。

132－3は、EB678出土の鉄製品である。断面は径約５㎜の円形、頭頂部は折り曲げられる。

【SB958】第132図

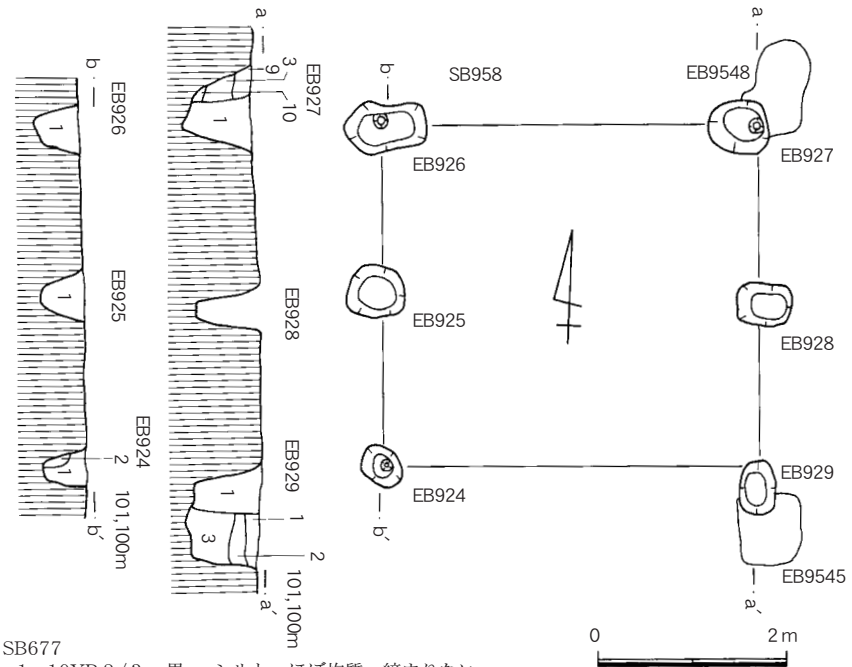
24・25－188・189グリッドに位置する。梁行１間、桁行２間の南北棟である。主軸方向はN－３°－Wである。規模は、梁が南北とも3.9m、桁が東西とも3.6mを測り、面積は約14m²である。柱心心間の距離は、東西桁とも1.8m等間である。柱穴は、長軸約60cm、短軸約40cm



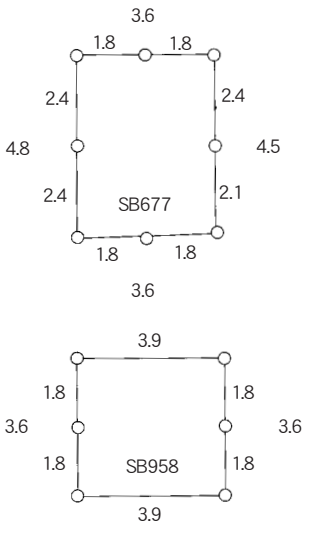


SB677
1　10YR２/１　黒　シルト　暗褐色、黒褐色シルトブロック含む、やわらかい
2　10YR２/２　黒褐　シルト　黄褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
3　10YR３/３　暗褐　シルト　黒色シルト粒微量含む、固く締まる
4　10YR２/１　黒　シルト　暗褐色シルトブロック微量含む、固く締まる
5　10YR２/２　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック微量含む、弱い粘性、固く締まる
6　10YR２/１　黒　シルト　黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
7　10YR２/２　黒褐　シルト　黄褐色シルトブロック多量含む、固く締まる
8　10YR３/３　暗褐　シルト　黒色シルトブロック少量含む、固く締まる
9　10YR２/２　黒褐　シルト　黒色シルトブロック（大）含む、固く締まる
10　10YR３/１　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
11　10YR４/４　褐　細砂　地山

0　3　5 cm
（１：２）



0　1・2　10cm
（１：３）



SB677
1　10YR２/３　黒　シルト　ほぼ均質、締まりない
2　10YR３/３　暗褐　シルト　褐色、黒褐色シルトブロック斑状に含む
※ ３以降は、SB9526の柱穴

0　2 m
（１：80）

第132図　SB677　出土遺物、SB958

の楕円形もしくは長楕円形を呈する。深さは50～70㎝である。土層断面からは、柱痕跡を確認することができなかったが、EB924、926、927の柱穴底には、径12㎝前後の円形の柱痕跡が認められる。覆土は、黒色シルトの単純層で締まりがない。他遺構との切合いは、前出のSB567で述べた通りである。

出土遺物は、EB926から須恵器無台坏１点、土師器甕３点である。

【SB959】第133図

24・25－191・192グリッドに位置する。東西２間、南北２間の総柱建物である。主軸方向は、N－１°－Eである。東西柱列北側の中央と、南北柱列西側の中央の柱穴を中世の所産と考えられるSD9581溝跡によって失う。また、EB708、730もSD9560溝跡から一部削平を受けている。規模は、東西3.2m、南北4.0mをはかり、面積は約13m²である。柱心心間の距離は、３基とも遺存する東西柱列の南側で2.0m等間、南北柱列の東側で1.6m等間である。柱穴の形態は一様ではなく、径50～60㎝の楕円形のものや、長軸80～100㎝の長楕円形のものが混在する。深さは、溝跡等により削平を受けていないもので、40～50㎝である。土層断面からは、柱痕跡を確認することはできなかったが、EB710、727、730、734の柱穴底には、径20㎝前後の硬化した柱痕跡が認められる。覆土は、炭化物や黄褐色シルトを混入する黒褐色シルトで、堅く締ったレンズ状の堆積を見せる。他遺構との重複は、SB959→SD9560→SD9581である。

出土遺物は、EB727から須恵器蓋（133－１）１点、土師器甕２点である。133－１は、口径約104㎜の小型の蓋である。つまみは欠損する。天井部は回転ヘラケズリによる調整が施される。口縁部は内側に折り込まれ、細く摘み出された端部は内傾する。９世紀前半代に位置付けられるものと考えられる。

【SB975】第133図

25・26－191・192グリッドに位置する。東西２間、南北２間の側柱建物である。主軸方向は、南北軸が磁北上に重なるN－０°である。規模は、東西3.9m、南北3.8mを測り、面積は約15m²である。柱心心間の距離は、東西柱列北側で西から1.7m－2.2m、南側で1.9m－2.0m。南北柱列西側は1.9m等間、東側は北から1.7m－2.1mである。柱穴はEB701を除き、長軸70～80㎝、短軸50～60㎝の長楕円形を呈するもので、長軸を柱筋に合わせる傾向がうかがえる。深さは20～50㎝で、EB712、717、985が浅く、四隅にある柱穴が深く掘込まれている。EB699、701の土層断面には柱痕跡が確認できる。また、EB699、704、711、712、985の柱穴底には、径20㎝前後の円形の柱痕跡が認められる。覆土は、黄褐色シルト等を混入する暗褐色シルトを主とし、比較的柔らかい。他遺構との重複はSB975→SD9560の新旧関係がある。

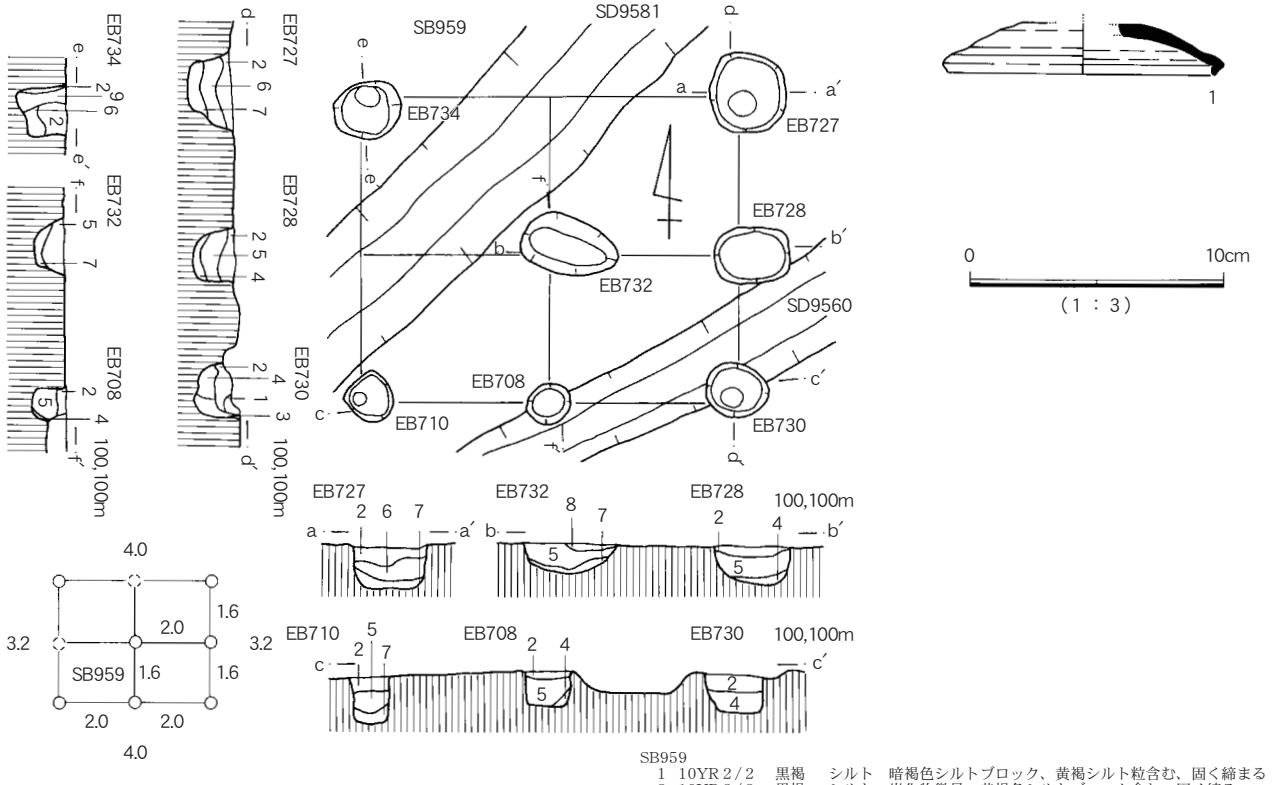
柱穴からの出土遺物は確認されていない。

表49　SB677出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
132	1	須恵器	蓋	(140)		28	5	砂粒混入、骨針	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	2	須恵器	無台坏		(80)		6	細砂混入	良	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	

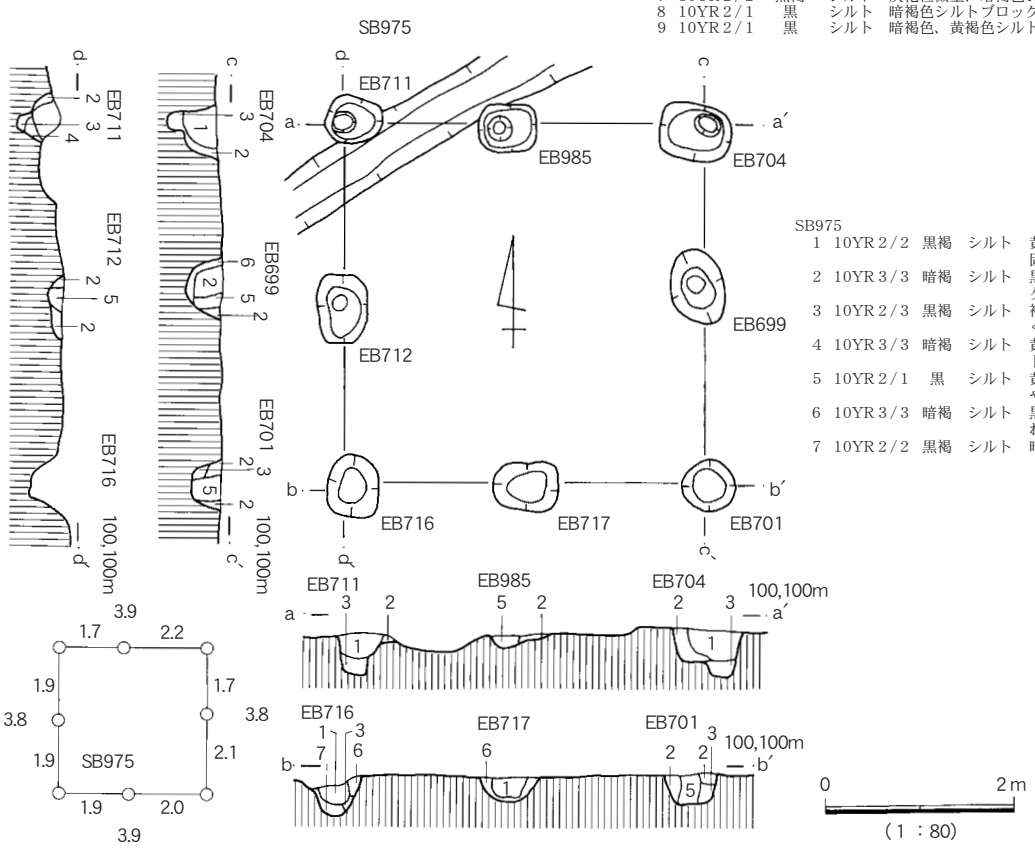
表50　SB959出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
133	1	須恵器	蓋	(104)			5	緻密	良好	10BG6/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		



SB959

1	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック、黄褐シルト粒含む、固く締まる
2	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化物微量、黄褐色シルトブロック含む、固く締る
3	10YR 4/4	褐	シルト	均質
4	10YR 2/1	黒	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック含む、固く締る
5	10YR 2/1	黒	シルト	炭化粒、焼土粒微量含む、黄褐色シルト粒少量含む
6	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック少量含む、固く締る
7	10YR 2/2	黒褐	シルト	炭化粒微量、暗褐色シルトブロック含む、固く締る
8	10YR 2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック多量、黄褐色シルト少量含む
9	10YR 2/1	黒	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック少量含む、固く締る



SB975

1	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、固く締る
2	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒色シルト粒、褐色シルトブロック少量含む、やわらかい
3	10YR 2/3	黒褐	シルト	褐色シルトブロック少量含む、固く締る
4	10YR 3/3	暗褐	シルト	黄褐色シルト粒帯状に、黒色シルトブロック少量含む
5	10YR 2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、やわらかく締りない
6	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒色シルトブロック少量含む、やわらかく締りない
7	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒少量含む、固く締る

第133図　SB959　出土遺物、SB975

【SB986】第134図

32・33－193・194グリッドに位置する。奈良・平安期の掘立柱建物跡としては調査区中最南端にあり、標高も最も低い100.2mライン上である。地形も平坦ではなく、北から南へ向かって低く傾斜する。周辺の遺構密度は希薄で、中世に所属する溝跡が数条走るのみである。

建物の構造は、東西２間、南北２間の側柱建物跡である。主軸方向はN－７°－Eである。規模は東西柱列が南側、北側とも3.4m、南北柱列の西側が4.6m、東側が4.5mを測る。面積は約15m^{2}である。柱心心間の距離は、東西柱列北側で西から1.6m－1.8m、南側で1.7m等間。南北柱列西側は2.3m等間、東側で北から2.4m－2.1mである。柱穴は径40～60cmの楕円形を呈し、不揃いな印象を受ける。南東側の削平が著しく、柱穴の遺存状態は極端に悪い。そのためEB989、991、993は10cm足らずの深さしか残らない。比較的良好なところでは、約40cmである。柱穴底には凹凸があり、平坦なものは少ないが、EB988、991、992、993の柱穴底には、径18cm前後の柱痕跡が認められる。覆土は、褐色シルトを混入する黒褐色シルトを主とする。

遺構間の切合いは、EB987がSB966掘立柱建物跡のEB972に切られることから、SB986→SB966の新旧関係が認められる。

柱穴からの出土遺物は確認できない。

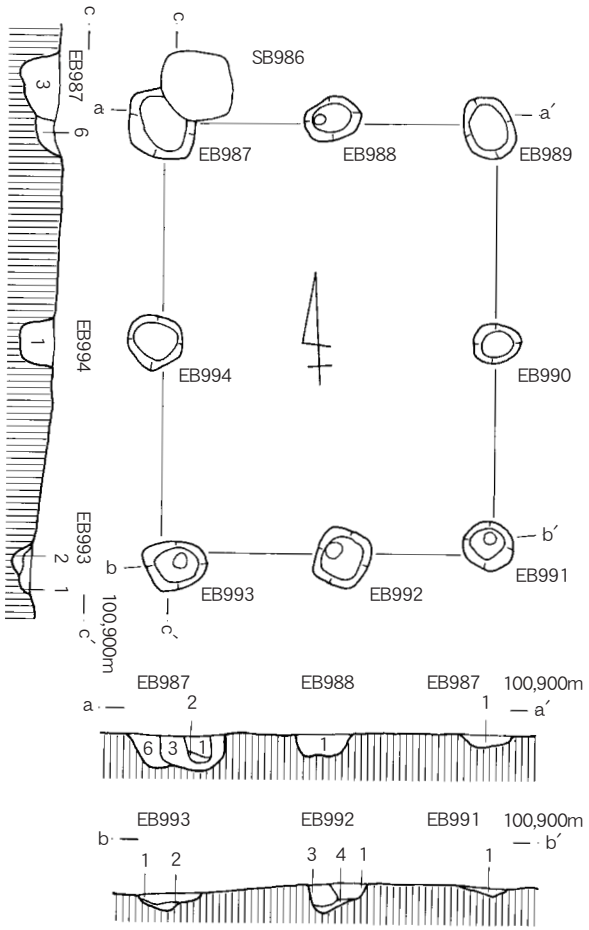
【SB995】第134図

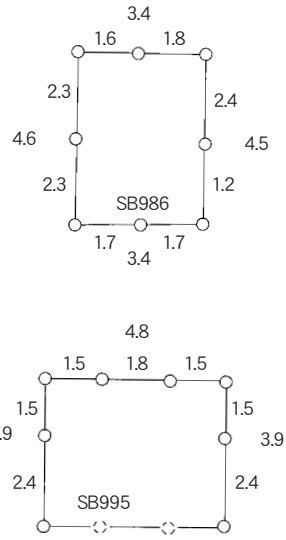
24・25－193・194グリッドに位置する。掘立柱建物跡が集中する区域の西端部にあたり、周辺の遺構密度も希薄になる。標高は約101mを測り、平坦な地形である。

ST9728との重複等により失われている柱穴もあり、不明な点が多いものの、残存する柱穴からは、梁行２間、桁行３間の東西棟であると推測される。本調査区中でも数少ない東西棟である。主軸方向は、N－89°－Eである。規模は、梁が東西とも3.9m、桁も南北とも4.8mを測り、面積は約19m^{2}である。柱心心間の距離は、梁が東西とも北から1.5m－2.4m。桁は北側が西から1.5m－1.8m－1.5mを測るが、南側は２基の柱穴を欠損するため、柱間距離は不明である。柱穴はEB564、592等は隅丸方形状を呈するが、多くは径50～60cmの楕円形である。深さは40～50cmである。土層断面には柱痕跡を確認することはできない。柱穴には褐色シルトをブロック状に混入する黒色シルトを主とした覆土が堆積する。EB556、563、564、589、590の柱穴底には、径20cm前後の円形の柱痕跡が認められる。

遺構間の切合いでは、ST9728との重複関係が認められる。当初ST9525とSB9648との関係のように同一建物を構成することも検討されたが、ST9728が独自の柱穴を持つことや両者の軸にずれが生じること等により、別個の遺構として取り扱った。SB995の柱穴検出状況は、EB556、563、565、589、590が、ST995の覆土を掘りさげ後、床面上等で検出されている。これらのことからSB995→ST9728の新旧関係が考えられる。この地区の竪穴建物跡と掘立柱建物跡との新旧関係は、竪穴建物が埋められた後に、掘立柱建物が建てられていたが、ST9728とSB995の場合はそれが逆転している。

柱穴からの出土遺物は確認されていない。



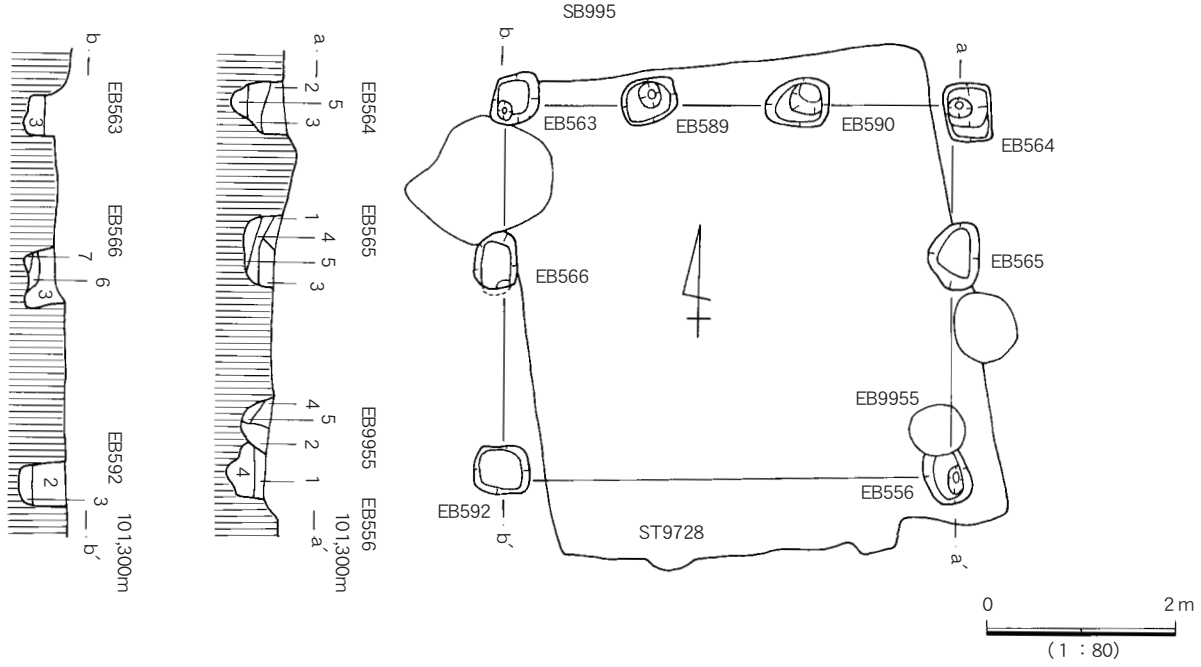


SB986

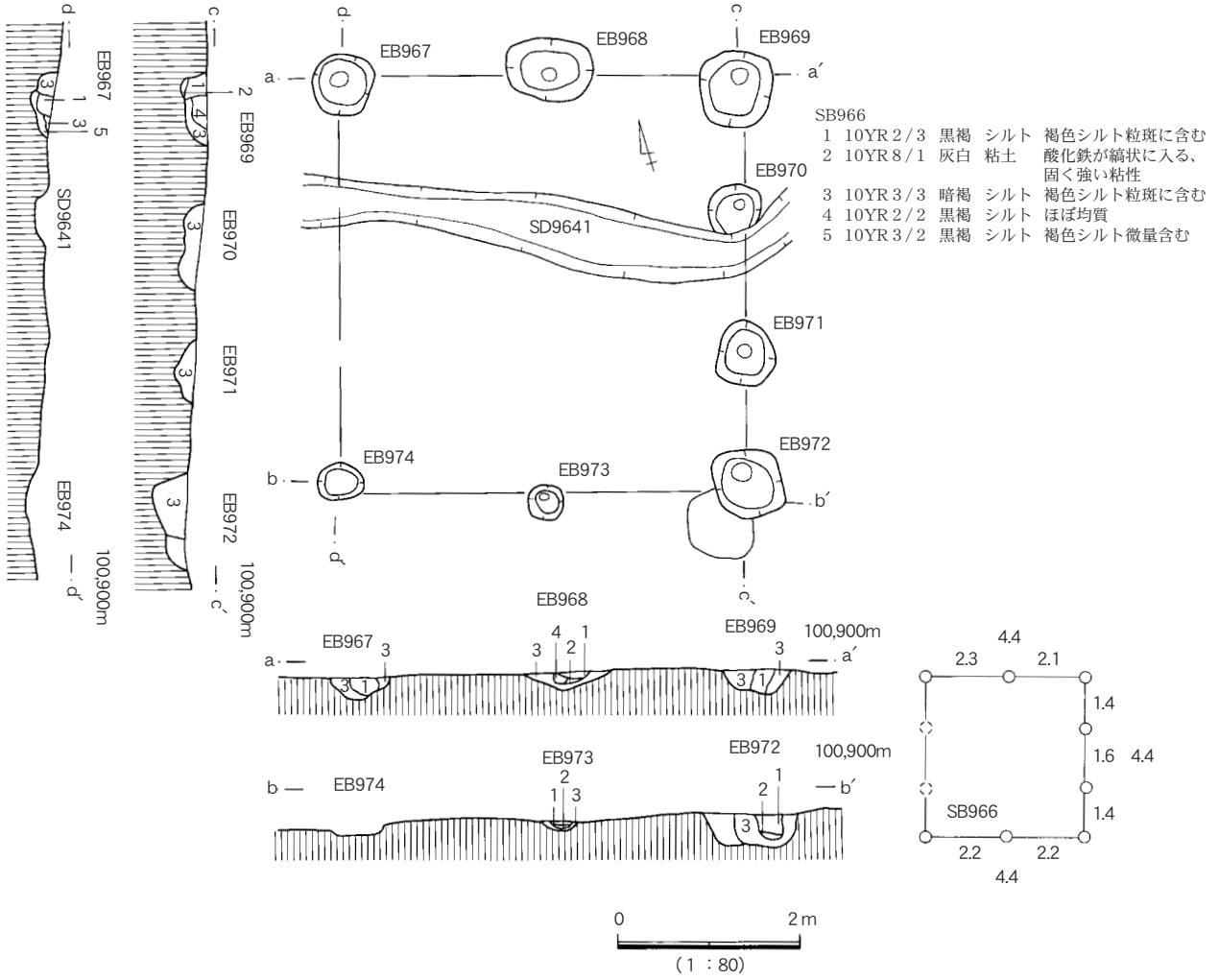
1	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒斑状に含む
2	10YR8/1	灰白	粘土	酸化鉄が縞状に入る、固く強い粘性
3	10YR3/3	暗褐	シルト	褐色シルト粒斑に含む
4	10YR2/2	黒褐	シルト	ほぼ均質
5	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト微量含む

SB995

1	10YR2/1	黒	シルト	褐色シルトブロック縞状に含む
2	10YR2/1	黒	シルト	ほぼ均質
3	10YR3/3	暗褐	シルト	黒色シルトブロック微量含む
4	10YR3/4	暗褐	シルト	褐色粘質シルトブロック微量含む、弱い粘性
5	10YR2/2	黒	シルト	褐色シルトブロック微量含む
6	10YR2/1	黒	シルト	にぶい黄褐色粘質シルトブロック斑状に含む
7	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	黒色シルトブロック縞状に含む、弱い粘性



第134図　SB986、995



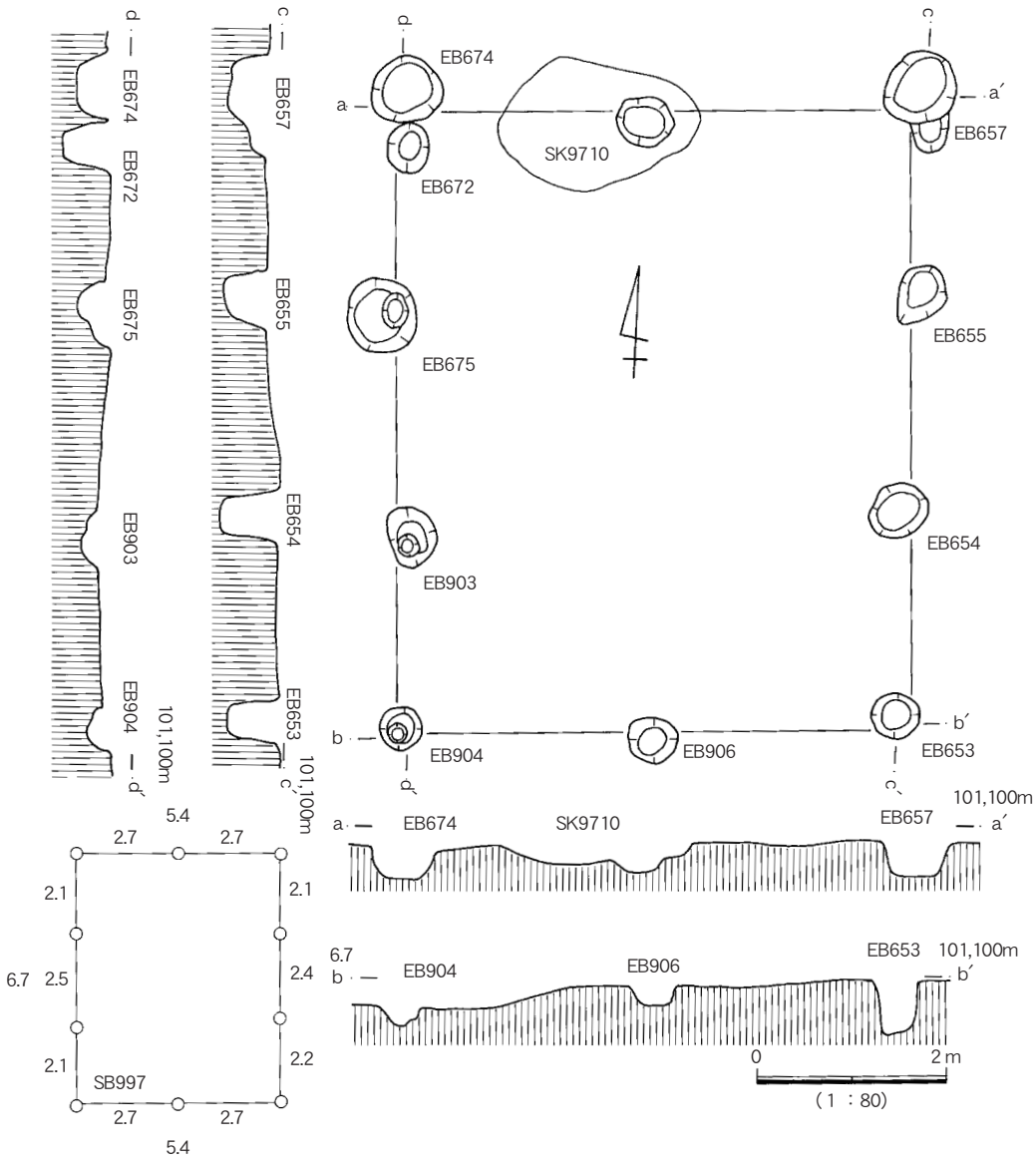
第135図　SB966

【SB966】第135図

31・32－194・195グリッドに位置する。掘立柱建物跡が集中する地区の南西端にあり、標高は約100.5ｍである。地形は平坦ではなく、北東から南西方向に傾斜する。

北西部が削平を受けていることや、SD9641が掘られることから、西側桁の柱穴２基が失われ、南側梁の柱穴も遺存状態が悪い。残存する柱穴から考えられる構造は、梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向はＮ－16°－Ｅである。規模は、梁が南北とも4.4m、桁も東西とも4.4ｍを測り、方形を呈する。面積は約19m^{2}である。柱心心間の距離は、北側梁が西から2.3ｍ－2.1ｍ、南側が2.2ｍ等間。東側桁が北から1.4ｍ－1.6ｍ－1.4ｍである。柱穴は径約60㎝の隅丸方形もしくは楕円形を呈し、削平を受けた柱穴は下部のみ小さく痕跡を残す。深さは遺存率の良いもので約40㎝である。EB967、968、969、972の土層断面には僅かに柱痕跡が見られる。また、EB967、968、969、970、971、972、973の柱穴底には、径16～20㎝の円形で硬化した柱痕跡が認められる。他遺構との重複は、SB966→SD9641の新旧関係がある。

柱穴からの出土遺物は確認されていない。



第136図　SB997

【SB997】

第136図

26～28－189・190グリッドに位置する。掘立柱建物跡が集中する地区の、ほぼ中央部にあたり、標高は約101mである。建物跡の西側を中心に整地層が認められる。

建物の構造は、梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向はN－３°－Wである。規模は梁が南北とも5.4m、桁が東西とも6.7mを測り、面積は36m²である。柱心心間の距離は、梁が2.7m等間、西側桁が北から2.1m－2.5m－2.1m、東側が2.1m－2.4m－2.2mである。柱穴は、南西側のEB903、904、905については整地層を除去しているため、径は40㎝程で、深さも30㎝程しか残っていない。他の柱穴は、径60～70㎝の楕円形を呈し、深さは40～60㎝残存する。EB675、903、904の柱穴底には、径18㎝前後の硬化した柱痕跡が認められる。覆土は褐色シルトを混入する黒褐色シルトを主とする。他遺構との重複関係は、SB9527とSK9710とがあるが、SB9527とは直接切合いがなく、新旧関係は不明である。しかし、SB997の検出状況はSB9527に比べ不明瞭だったことや、SK9710の掘り下げ後に柱穴が検出されていることなどを考えあわせると、SB9527とSK9710よりSB997の方が先行する可能性を含んでいる。

SK9710からは須恵器無台坏２点、土師器甕５点が出土しているが、SB997を構成する柱穴からの出土遺物は確認されていない。

【SB9502】第137図

25・26－182・183グリッドに位置する。掘立柱建物跡集中区から約30m東にあり、調査区の東端にあたる。その間の遺構密度は希薄である。標高は約101.2mを測る。

建物の構造は、梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向は、N－３°－Eである。規模は、梁が南北とも3.9m、桁が東西とも5.1mを測り、面積は約20m²である。柱心心間の距離は、北側梁が西から1.8m－2.1m、同じく南側が2.1m－1.8m。西側桁が北から1.8m－1.8m－1.5m、東側が1.8m－1.5m－1.8mである。柱穴は、一辺約80cmの隅丸方形を基本とするものと考えられるが、EB9503、9505、9508、9510等四隅の柱穴は形が崩れる。深さは約60cmである。EB9503、9504、9505、9509、9512の土層断面には柱痕跡が観察できる。また、全ての柱穴底に、含水比の低下により硬化した径18cm前後の円形の柱痕跡が認められる。EB9506、9509、9511では、硬化した柱痕跡が僅かにずれて２ケ所に見られる。覆土は黄褐色シルトブロックを混入する黒褐色シルトを主として充填し、堅く締る。

他遺構との関係は、SB9679のEB9682（第60図）とEB9510が切合い、SB9679→SB9502の新旧関係が確認されている。

柱穴からの出土遺物は以下の通りである。

EB9507　須恵器蓋１点、無台坏２点、土師器甕７点

EB9512　須恵器蓋１点、短頸壷１点、土師器甕10点

【SB9515】第137図

23・24－185・186グリッドに位置する。掘立柱建物跡集中区から約10m東にある。周辺は削平を受けていることもあり、遺構の密度が希薄なことから孤立する印象を受ける。

建物の構造は、東西２間、南北２間の総柱建物である。主軸方向はN－１°－Eである。規模は東西南北全て3.3mの方形を呈する。面積は約11m²である。柱心心間の距離は、東西が西から1.5m－1.8m、南北が北から1.8m－1.5mを測る。柱穴は、径約50cmの楕円形を主とし、深さは30～40cmである。EB9516、9517、9518、9519、9522、9523、9524の土層断面には柱痕跡を観察できた。また全ての柱穴底には、径18cm前後の硬化した柱痕跡が認められる。覆土は黄褐色シルトを含む黒色シルトが充填され、堅く締る。

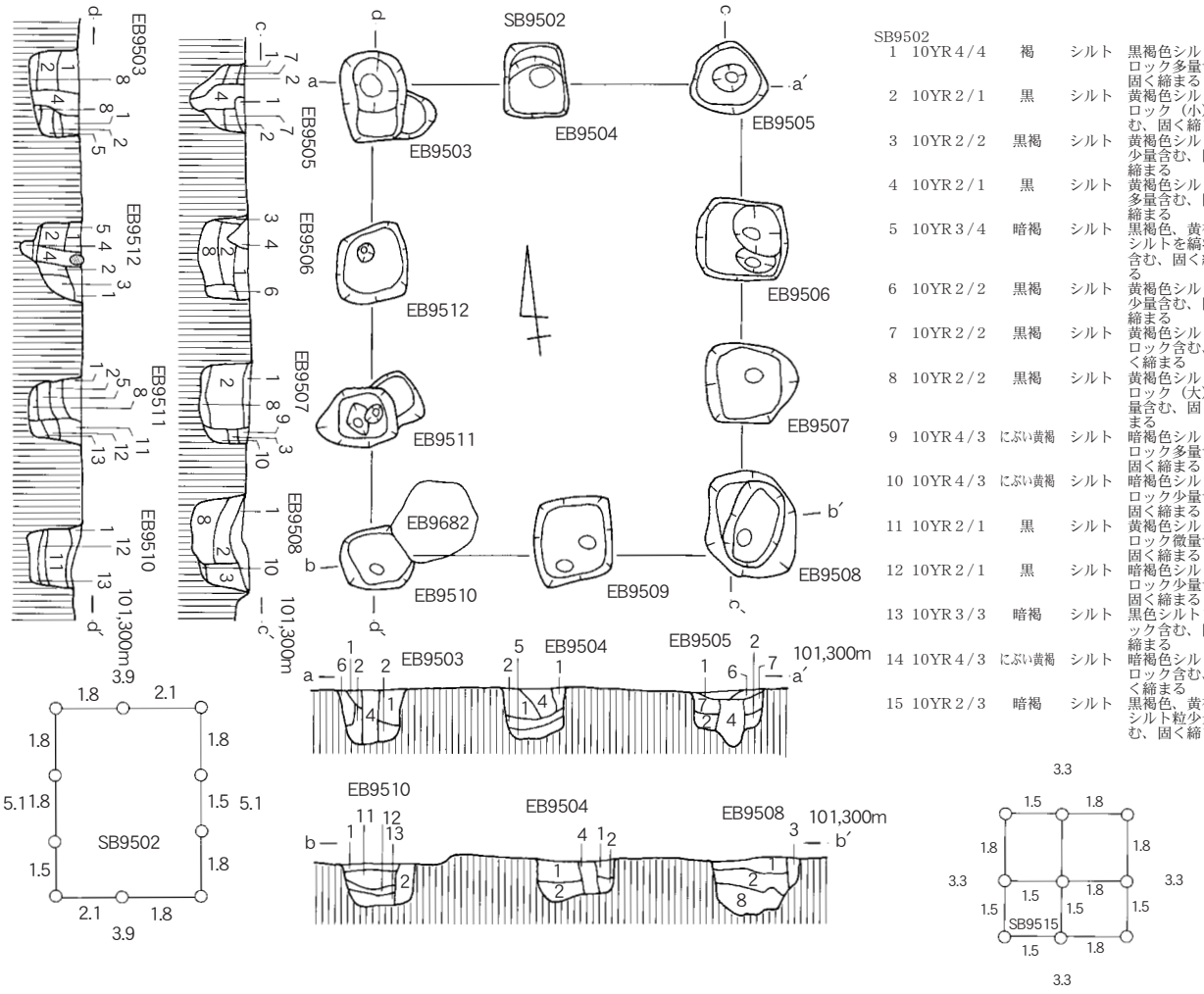
中世の所産と考えられるSD9501と重複するが、直接の切合いはない。

出土遺物はEB9520から須恵器坏１点である（137－１）。

137－１は、回転糸切りの痕跡が、一部ナデ消した状態に見えるが、基本的には無調整である。体部内面には、底部円盤から体部を立ち上げた際の、粘土貼付け痕と考えられる継目が明瞭に見られる。また、体部外面の上方には、ロクロナデの凹凸とともに、沈線状の細い凹みが一条巡る。体部は内湾し、口縁部は外側に強く摘み出される。口縁端部は印象的に玉縁状に作られる。焼成は堅であるが、灰白色に発色する。

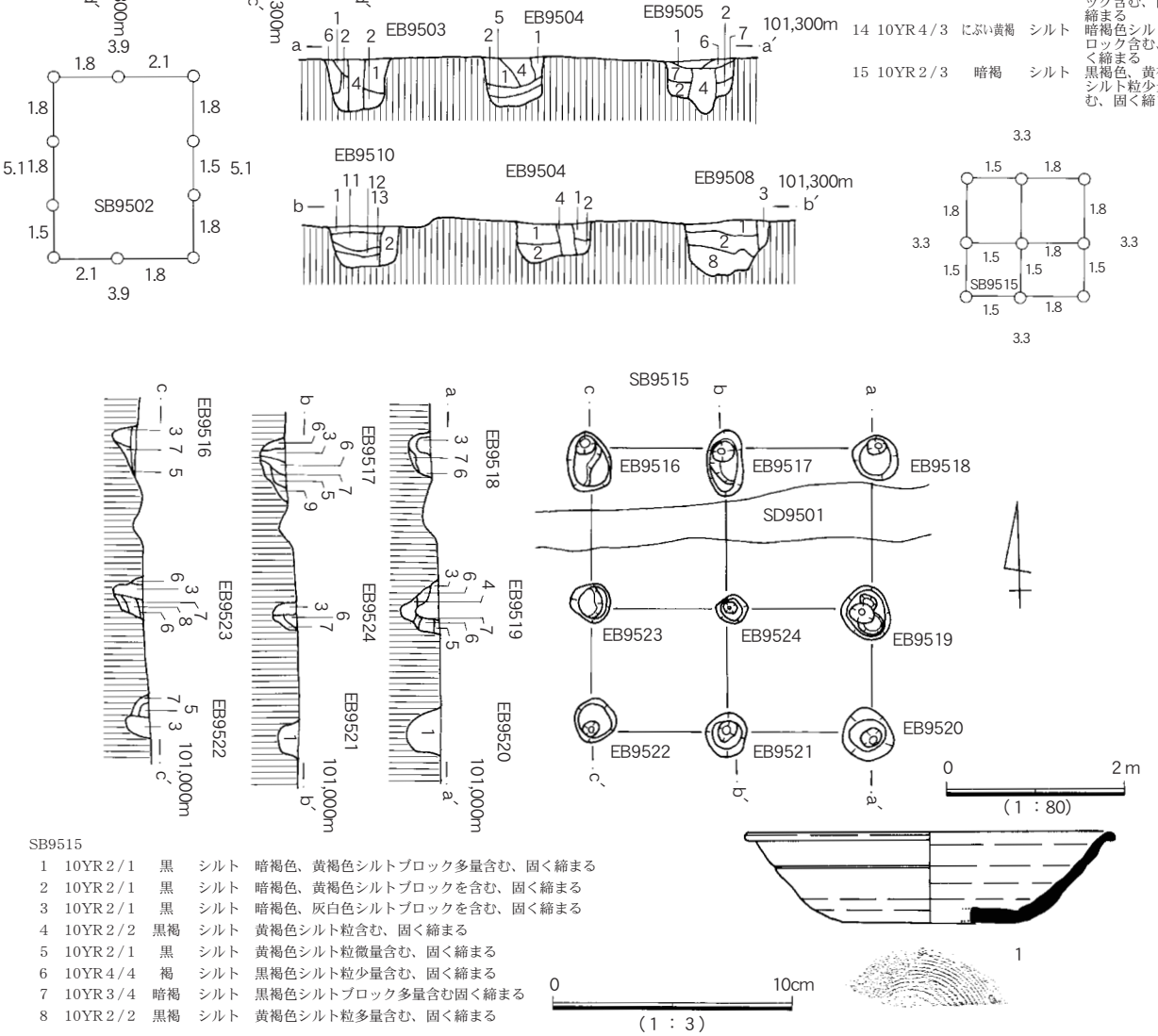
表51　ST9515出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
137	1 須恵器	無台坏	(155)	(80)	38	4	砂粒混入	不良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	



SB9502

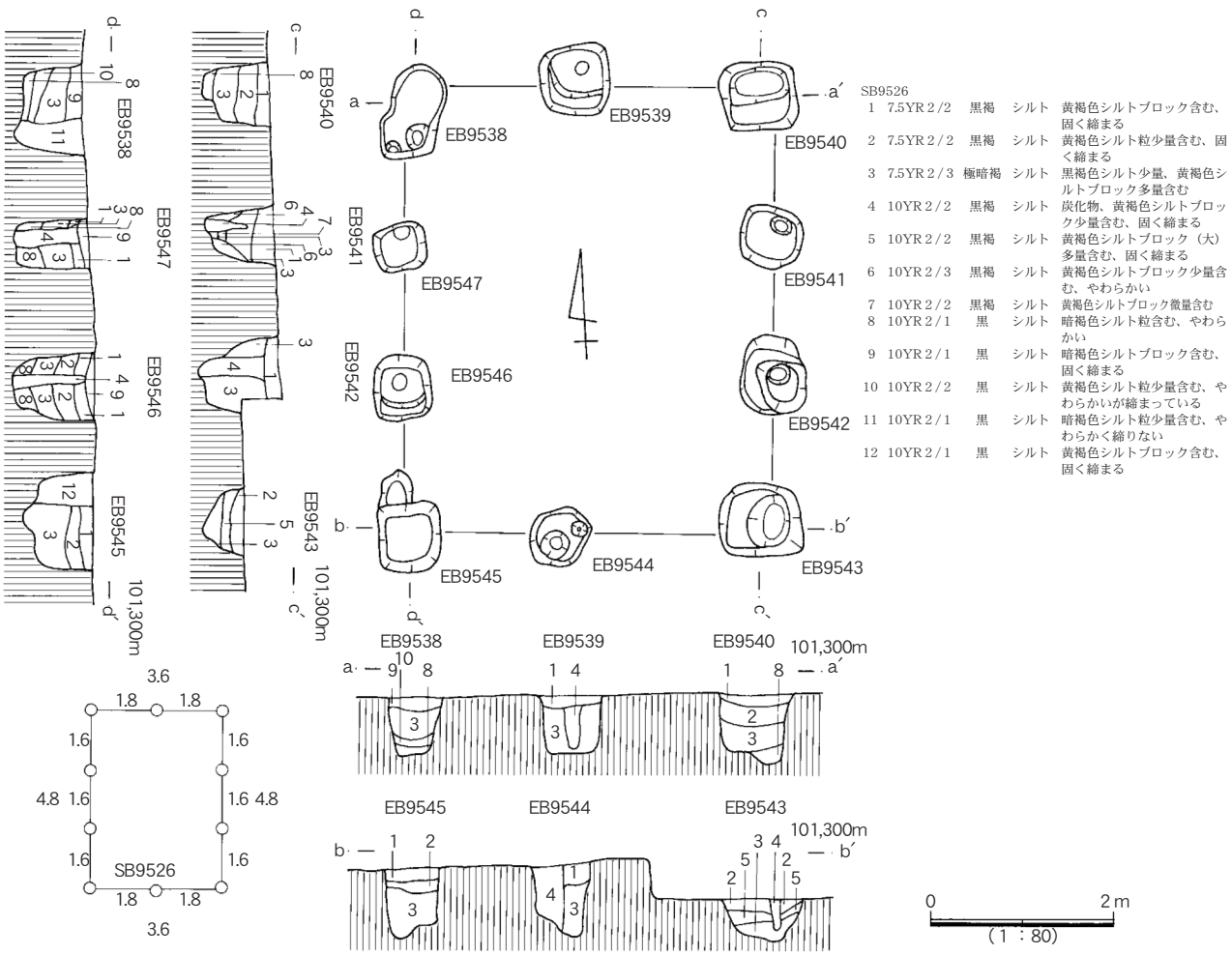
1	10YR4/4	褐	シルト	黒褐色シルトブロック多量含む、固く締まる
2	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック（小）含む、固く締まる
3	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
4	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、固く締まる
5	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色、黄褐色シルトを縞状に含む、固く締まる
6	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
7	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、固く締まる
8	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック（大）多量含む、固く締まる
9	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	暗褐色シルトブロック多量含む、固く締まる
10	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
11	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック微量含む、固く締まる
12	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固く締まる
13	10YR3/3	暗褐	シルト	黒色シルトブロック含む、固く締まる
14	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む、固く締まる
15	10YR2/3	暗褐	シルト	黒褐色、黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる



SB9515

1	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締まる
2	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロックを含む、固く締まる
3	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色、灰白色シルトブロックを含む、固く締まる
4	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒含む、固く締まる
5	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒微量含む、固く締まる
6	10YR4/4	褐	シルト	黒褐色シルト粒少量含む、固く締まる
7	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック多量含む固く締まる
8	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、固く締まる

第137図　SB9502・SB9515　出土遺物



第138図　SB9526

【SB9526】第138図

24・25－187・188グリッドに位置する。南東部が削平を受けており、EB9842、9543の上部が失われる。それ以外は平坦な地形で、標高は101ｍである。

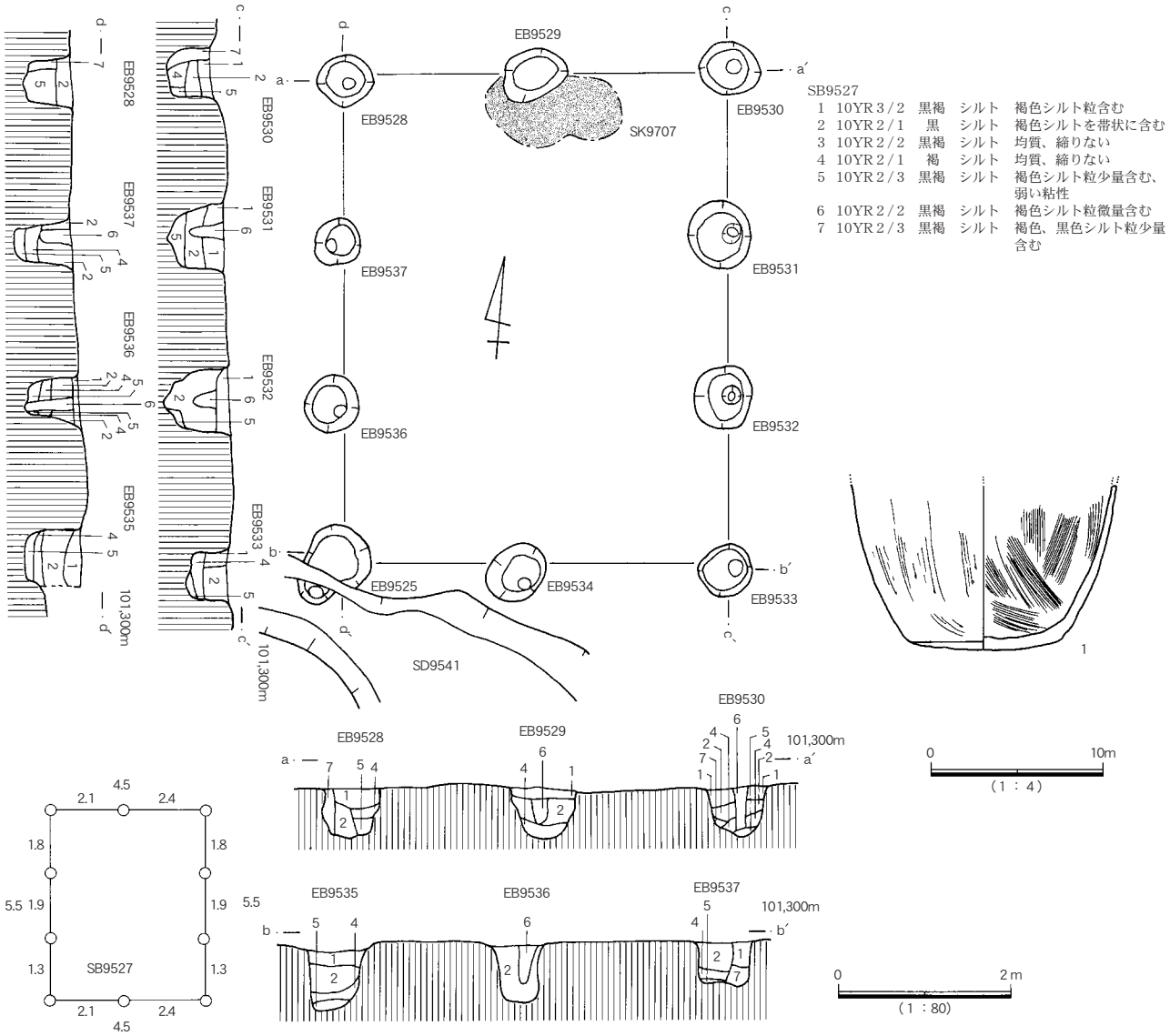
建物の構造は、梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向はＮ－２°－Ｅである。規模は、梁が3.6ｍ、桁が4.8ｍを測り、面積は約17m²である。柱心心間の距離は、梁が1.8ｍ等間、桁が1.6ｍ等間である。柱穴は一辺60～80㎝の隅丸方形を呈する。深さは70～90㎝である。EB9539、9541、9542、9543、9544、9546、9547の土層断面には柱痕跡が観察できる。EB9538、9540、9543、9545を除く柱穴の底面には、含水比の低下により硬化した、径18㎝前後の円形の柱痕跡が認められる。覆土は、主として黄褐色シルトまたは暗褐色シルトを混入した黒褐色シルトを充填し、堅く締る。

他遺構との重複は、EB9544がSB567のEB544に、EB9545がEB576に、EB9538がEB649に切られる。またEB9545はSB958のEB929に、EB9548はEB927に切られる。SB567とSB958との新旧関係は判明しているので、これらを総合すると、ST9561→SB9526→SB567→SB958の新旧関係がとらえられる。柱穴からの出土遺物はない。

【SB9527】第139図

27・28－188・189グリッドに位置する。平坦な地形上にあり、標高は101.2mである。

建物の構造は梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向はN－３°－Wである。規模は、梁が4.5m、桁が5.5mを測り、面積は約25m²である。柱心心間の距離は、南北梁とも西から2.1m－2.4m、桁は北から1.8m－1.9m－1.8mで東西とも同じである。柱穴は、径50～70cmの円形に近い楕円形である。深さは50～80cmである。EB9529、9530、9531、9532、9534、9536、9537の土層断面には柱痕跡が観察できる。またEB9529、9535以外の柱穴底には、径18cm前後の硬化した柱痕跡が認められる。覆土は褐色シルトを混入する黒色ないし黒褐色のシル



第139図　SB9527　出土遺物

表52　SB9527出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
139	1	土師器	甕		88		7	砂粒混入	良	5YR6/6橙	ケズリ	ナデ	ナデ	

トが充填されるが、必ずしも堅く締った状態では無い。

SD9541、SX648と切合い、各々SB9527より新しいことが確認されている。SX646は、EB9529の掘り方及び周辺に広がる焼土の範囲で、その両端には土器が一括して出土したSK646（第156図）、647（第157図）がある。これらの遺構の性格は不明であるが、SB9527にともなう何らかの屋内施設の可能性も考えられる。また、185頁のSB997の項でも述べたが、重複関係にあるSB997とは、SB997→SB9527の新旧関係が想定される。

出土遺物はEB9533から須恵器無台坏１点、土師器甕２点である。139－１は土師器長胴甕の底部で、平底風に作り出すが、中央部が盛り上がるタイプである。外面にはケズリ、内面にはナデ調整が施される。

【SB9648】第140図

28～31－185～188グリッドに位置する。掘立柱建物跡集中区から、やや間を置く南東部にある。標高101ｍ上に立地するが、地形は平坦では無く、南東方向に向けてなだらかに傾斜する。周辺には同時期の遺構は希薄である。

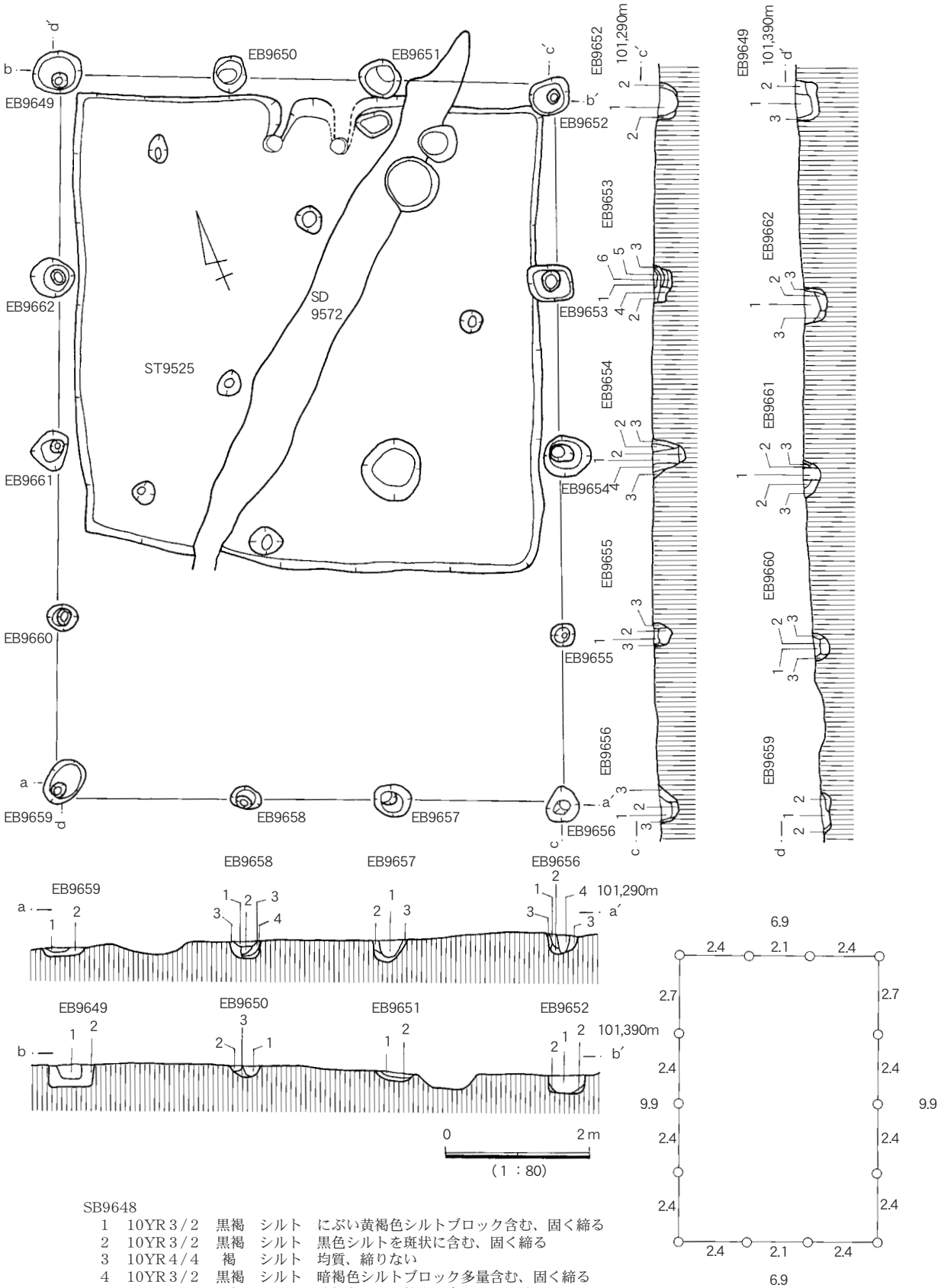
建物の構造は、梁行３間、桁行４間の南北棟である。主軸方向は、Ｎ－３°－Ｗである。規模は、梁が6.9ｍ、桁が9.9ｍを測り、面積は約68m²である。柱心心間の距離は、梁は南北とも西から2.4ｍ－2.1ｍ－2.4ｍ。桁は東西とも北から2.7ｍ－2.4ｍ－2.4ｍ－2.4ｍである。柱穴は、径40～60㎝の楕円形を呈する。深さは30～50㎝を測るが、地形的に低くなる南側は全体的に浅く、削平の影響も考えられる。EB9649、9652、9654、9656、9659、9661、9662、9657の土層断面では柱痕跡を観察することができる。また、全ての柱穴の底面で、径15㎝前後の硬化した柱痕跡が確認できる。覆土は、暗褐色のシルトを混入する黒褐色シルトを主として充填し、堅く締っている。

柱穴からの出土遺物は確認されていない。

他遺構との重複関係は、直接遺構間の切合いはないが、中世の所産と考えられるSD9572が北東から南西に掘られてある。また、83頁のST9525で述べたように、SB9648の中にST9525が作られている。以下、構造が違うこの２つの建物について見てみる。

SB9648の柱穴は、北半ではST9525の外周を巡り、南側は約３ｍ長く柱が建てられる。EB9649と9652は正確にST9525の北西及び北東角に位置する。また、EB9650と9651は両端の柱穴からの距離を2.4ｍ取り、ST9525のカマドを挟む位置に建てられている。これらのことを考慮すると、SB9648とST9525は同一の建物としたほうが妥当と考えられる。現在までのところ、この構造の建物は確認されたものがなく、性格など不明な点が多い。その他、この建物の特徴的な事項には、次のような事が上げられる。北辺の中央部にカマドを持つ。約３分の１の面積が竪穴以外の空間に利用される。遺物の出土量が多く、特に須恵器の比率が高い。遺物の中には製品として流通しえない破損品や窯跡で使われる焼台などが含まれる。

構造上の特徴については不明であるが、出土遺物の特徴などから、この建物は居住のためのものではなく、何らかの形で須恵器の生産、あるいは流通に関わる機能を持つための特殊な施設と推測される。



SB9648

1	10YR３/２	黒褐	シルト	にぶい黄褐色シルトブロック含む、固く締る
2	10YR３/２	黒褐	シルト	黒色シルトを斑状に含む、固く締る
3	10YR４/４	褐	シルト	均質、締りない
4	10YR３/２	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック多量含む、固く締る
5	10YR２/３	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒少量含む、固く締る
6	10YR３/４	暗褐	シルト	均質、固く締る

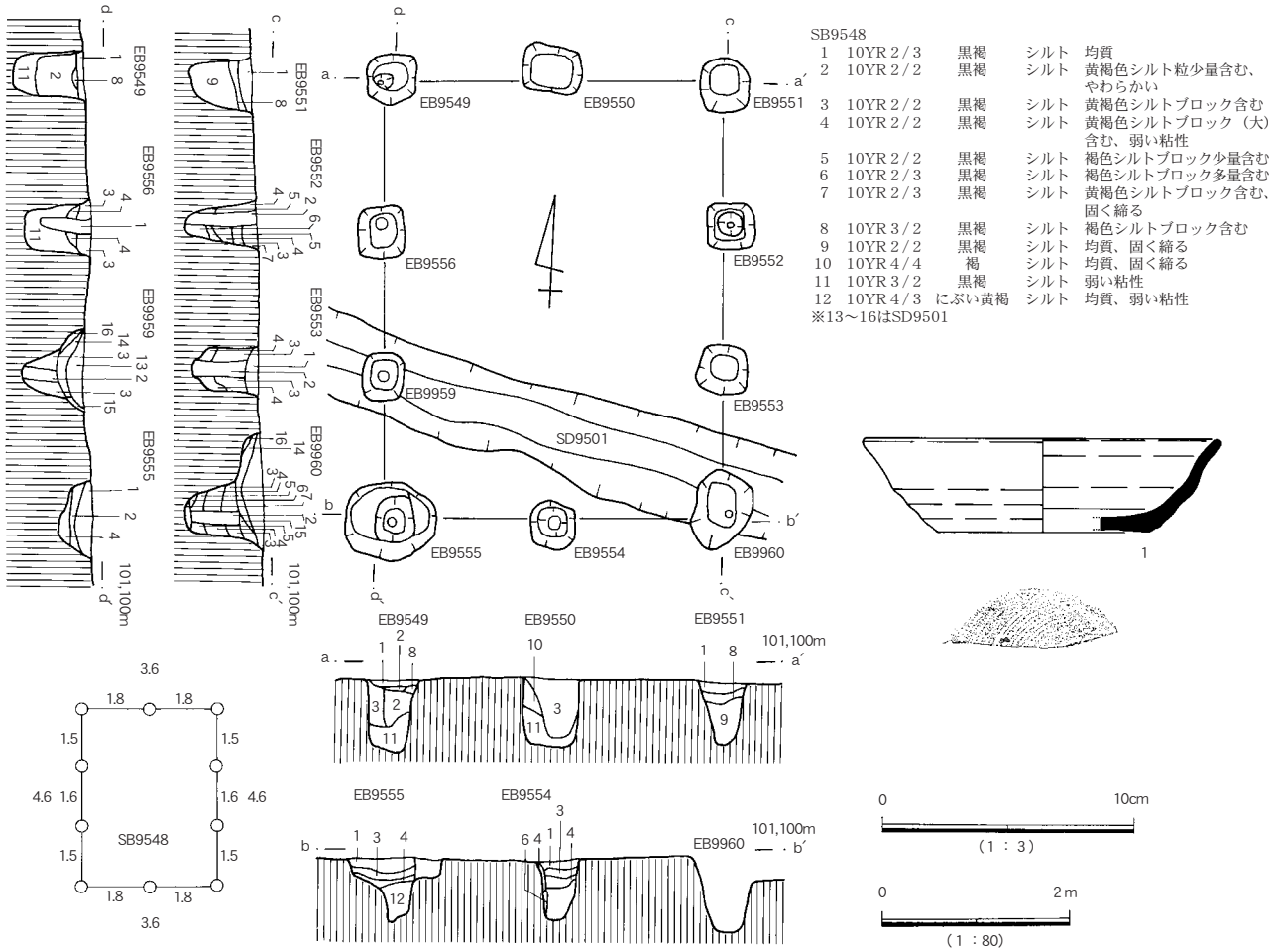
第140図　SB9648

【SB9548】第141図

23・24－188・189グリッドに位置する。掘立柱建物跡集中区の北東端にあたる。平坦地にあり、標高は約100.8ｍである。

建物の構造は、梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向はN－３°－Wである。規模は、梁が3.6ｍ、桁が4.6ｍを測り、面積は約17m²である。柱心心間の距離は、梁が1.8ｍ等間、桁が東西とも北から1.5ｍ－1.6ｍ－1.5ｍである。柱穴は、一辺50～60㎝の比較的そろった隅丸方形を呈する。深さは60～70㎝である。EB9552、9556、9553、9960、9959の土層断面には柱痕跡が観察できる。また、EB9550、9551、9553を除いた柱穴の底には、含水比の低下により硬化した、径約15㎝前後の円形の柱痕跡が認められる。覆土は、黄褐色シルトを混入した黒褐色シルトを主として充填し、堅く締る。

他遺構との切合いでは、SD9501を掘り下げた後、溝跡底面からEB9959と9960が検出された。したがってSB9548→SD9501の新旧関係が認められる。また、南に位置するSB9562と北



第141図　SB9548出土遺物

表53　SB9548出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
141	1 須恵器	無台坏	(140)	(84)	36	4.5	細砂混入	良好	N5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	

にあるSB7045とは建物の規模が同じで、主軸をほぼ同じくし、柱筋も通ることなどから、これら３棟の建物は同時期に存在したと推測される。

出土遺物は、EB9550から須恵器無台坏１点（141－１）、9555から土師器甕１点である。141－１は回転糸切り後無調整の無台坏である。口径、底径が大きく、身が浅い。体部の中位に綾を持ち、ここを境に内湾から外反に転じる。９世紀前半代の所産と考えられる。

【SB9562】第142図

24～26－189～191グリッドに位置する。掘立柱建物跡群のほぼ中央部にある。地形は平坦で、標高は100.8ｍである。建物の構造は、東西２間、南北２間の総柱建物である。主軸方向はＮ－２°－Ｅである。規模は、東西4.8ｍ、南北4.8ｍの方形を呈し、面積は約23m²である。柱心心間の距離は、東西が2.4ｍ等間、南北も2.4ｍ等間である。柱穴は一辺80～90㎝の隅丸方形である。深さは、EB9563、9565、9567、9569が80～100㎝、他が40㎝前後を測る。つまり、四隅の柱穴は深く掘込まれるが、それ以外は約半分の深さまでしか掘られない特殊な構造を示している。EB9564、9565、9571、9566、9568、9567の土層断面には柱痕跡が観察できる。また、全ての柱穴の底には、含水比の低下により硬化した、径18㎝前後の円形の柱痕跡が認められる。覆土は、黄褐色シルトブロックを多量に混入する黒褐色シルトが充填され、堅く締る。

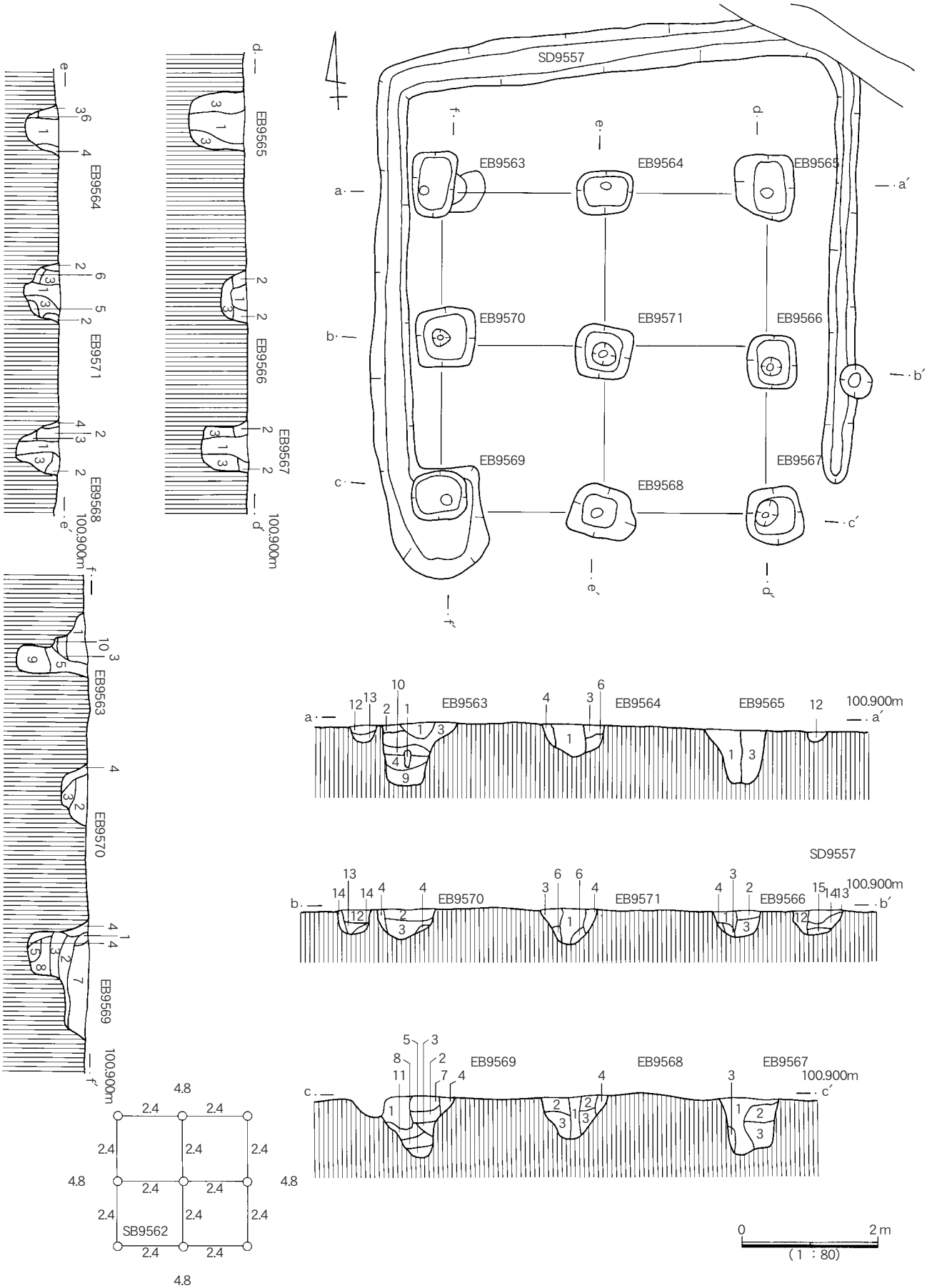
柱穴からの出土遺物は以下の通りである。

EB9566　土師器甕４点
EB9567　須恵器有台坏１点（145－２）
EB9569　須恵器蓋１点（145－１）
EB9570　須恵器甕１点、土師器甕２点
EB9571　須恵器双耳坏１点、甕２点、土師器甕２点

屋外の施設としては、建物の南面を開口し、東、西、北面を取り囲むように掘られたSD9557溝跡がある。南北辺は建物と平行するが、東西辺は東側が開き、北西角のEB9563から1.5ｍ離れるのに対し、北東角のEB9565からでは2.0ｍ離れる。東西辺での距離は、西側が掘り方にほぼ密接し、東側は掘り方から約50㎝離れる。長さは、西側が若干短いが、各々内法で約３ｍである。幅は40～60㎝、深さは30～40㎝である。なお、南西端はEB9569を取込むように掘られているが、土坑状の遺構が柱穴と溝を切っており、後出する別の遺構である。覆土は主に２層の黒褐色シルトからなり、炭化物を含み堅く締る。この溝跡は、建物に近すぎることから、雨落溝とは考えがたく、建物の区画を目的としたものと推測されるが、柵や板塀等の構造物の痕跡も確認できなかった。出土遺物は、須恵器蓋が２点である。

もう一つは、図示しなかったが、建物周辺の取り分け、南辺と西辺に検出されている多くの小柱穴である。殆どは、建物を構成するに至らなかったものであるが、この中で、SB9562の柱筋に乗ってくるものが見られる。北辺では検出されなかったが、他の３辺ではEB9563の西を除き、径30～40㎝の楕円形の柱穴が確認されている。これらの柱穴は、SB9562の構造に直接関わる柱穴ではなく、建築の際の足場穴と推測される。

遺構間の切合いでは、SD9557→SD9501が確認されている。



第142図　SB9562

【SB9837】第143図

31・32－212～214グリッドに位置する。掘立柱建物跡群から大きく西に外れる。段丘の落ち際に近いが、地形は平坦で、標高は調査区中最も高い102ｍ上にある。

建物構造は、梁行１間、桁行２間の東西棟である。主軸方向はＮ－87°－Ｅである。規模は、西側梁が3.0ｍ、東側が3.1ｍ、桁が南北とも4.0ｍを測り、面積は約12m²である。桁の柱心心間距離は、南北とも2.0ｍ等間である。柱穴は、径約30～40㎝の楕円形で、深さは20～40㎝である。EB9839と9840の土層断面には柱痕跡が観察できる。覆土は暗褐色のシルトで、黒褐色や褐色のシルトを混入する。

遺構の密度が極めて低い地域のため、他の遺構との重複関係は無い。柱穴からの出土遺物も確認できない。建物が立地する場所や主軸となる方向、周辺の遺構の状況等から古代の所産として考えたが建物の構造、規模等の点からは中世の建物の可能性も考えられる。

【SB9999】第143図

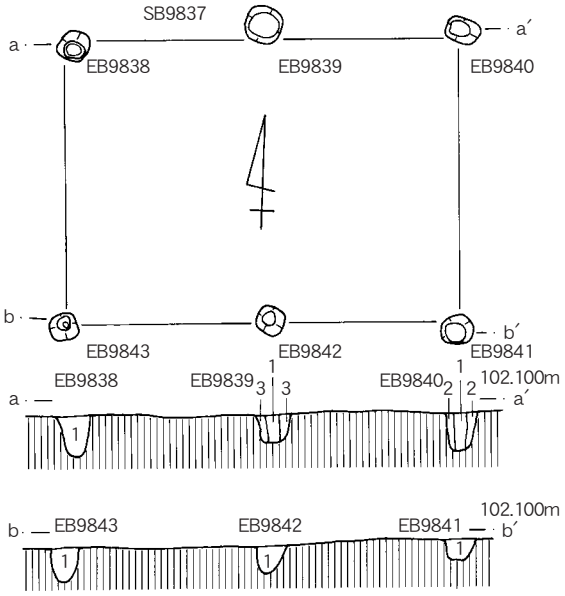
26・27－193・194グリッドに位置する。掘立柱建物跡集中区の西端にある。平坦な地形上に立地し、標高は約101ｍである。周辺の遺構密度は比較的低い。

建物の構造は、東西２間、南北２間の側柱建物である。建物の中心部にも柱穴（EB508）を１基検出しているが、南北の柱筋は通るものの、EB508が北へずれるため東西は通らない。主軸方向はＮ－18°－Ｗで、振れが大きい方である。規模は、東西4.8m、南北4.4ｍを測り、面積は約21m²である。柱心心間の距離は、東西が2.4ｍ等間、南北が2.2ｍ等間である。柱穴は隅丸方形状を呈するものも見られるが、多くは径40～60㎝の楕円形である。深さは50～60㎝を測る。EB500、502、504、506、507、508の土層断面には柱痕跡が見られる。また、全ての柱穴の底に、径20㎝前後の円形の柱痕跡が認められる。覆土は褐色シルトを混入する黒褐色のシルトが充填され、堅く締る。

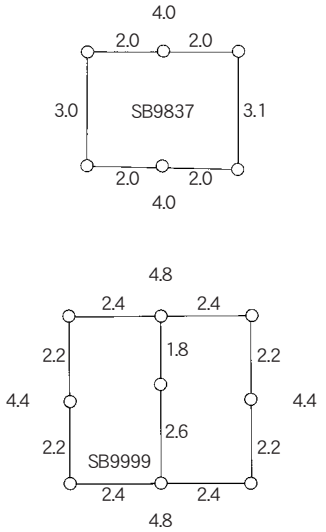
SD9815と切合い、SB9999→SD9815の新旧関係がある。柱穴からの出土遺物はない。

SB9562

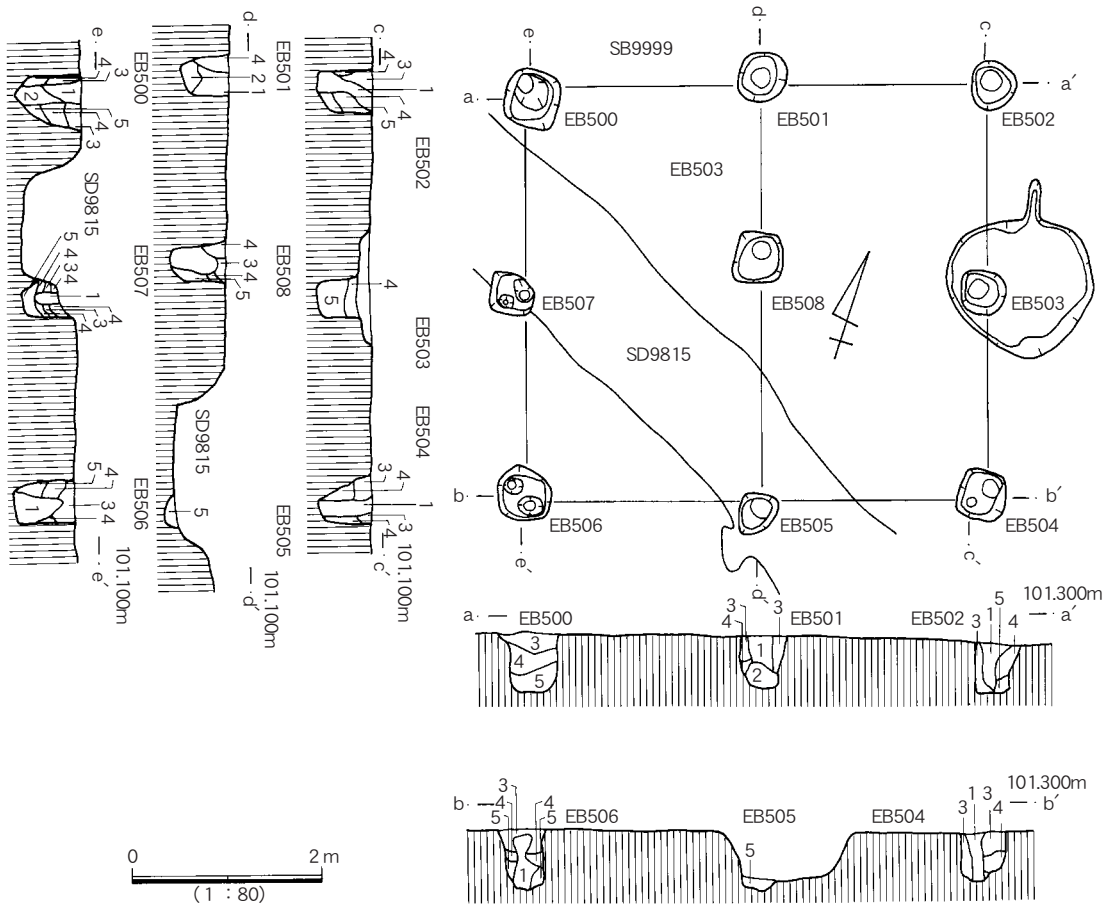
1	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
2	10YR2/3	黒褐	シルト	黒色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
3	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック（大）多量含む、固く締る
4	10YR3/2	暗褐	砂質シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
5	10YR4/4	褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、やわらかい
6	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色、黒色シルトブロック縞状に含む、固く締る
7	10YR2/1	黒	シルト	炭化物、黄褐色シルト粒、黄褐色細砂含む、固く締る
8	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック含む、やわらかく締りない
9	10YR3/1	黒褐	シルト	褐色、黒褐色シルトブロック斑状に含む
10	10YR2/2	黒褐	シルト	黒色、黄褐色、シルトブロック（大）を斑状に含む
11	10YR4/4	褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック（大）少量含む、固く締まる
12	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化物少量、黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
13	10YR2/3	黒褐	シルト	炭化物、土器片、黄褐色シルトブロック少量含む
14	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量に斑状に含む、固く締まる
15	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締まる
				12～15はSD9557



SB9837
1　10YR 2/3　黒褐　シルト　均質
2　10YR 3/3　暗褐　シルト　黒褐色、褐色シルトを斑状に含む
3　10YR 3/4　暗褐　シルト　撹乱？



SB9999
1　10YR 2/2　黒褐　シルト　均質、締りない
2　10YR 2/3　黒褐　シルト　均質、締りない
3　10YR 2/2　黒褐　シルト　褐色シルト粒を斑状に含む、締っている
4　10YR 3/2　黒褐　シルト　褐色ブロックシルトを斑状に含む、固く締る
5　10YR 2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック斑状に少量含む
6　10YR 2/3　黒褐　シルト　炭化物、褐色シルト粒微量含む
7　10YR 3/3　暗褐　シルト　ほぼ均質



第143図　SB9837、9999

柱穴出土遺物（第144・145図）

遺物が出土した柱穴は、建物を構成しなかったものも含めると、96基に上る。その内訳は、３次調査が大部分を占める88基である。これは中世の掘立柱建物跡を主体とした２次調査に比べ、３次調査では奈良・平安時代の掘立柱建物跡を数多く分布する地区が調査対象となったことに由来すると考えられる。出土する遺物は、相対的に土師器の方が多いが、図化できる資料には恵まれない。

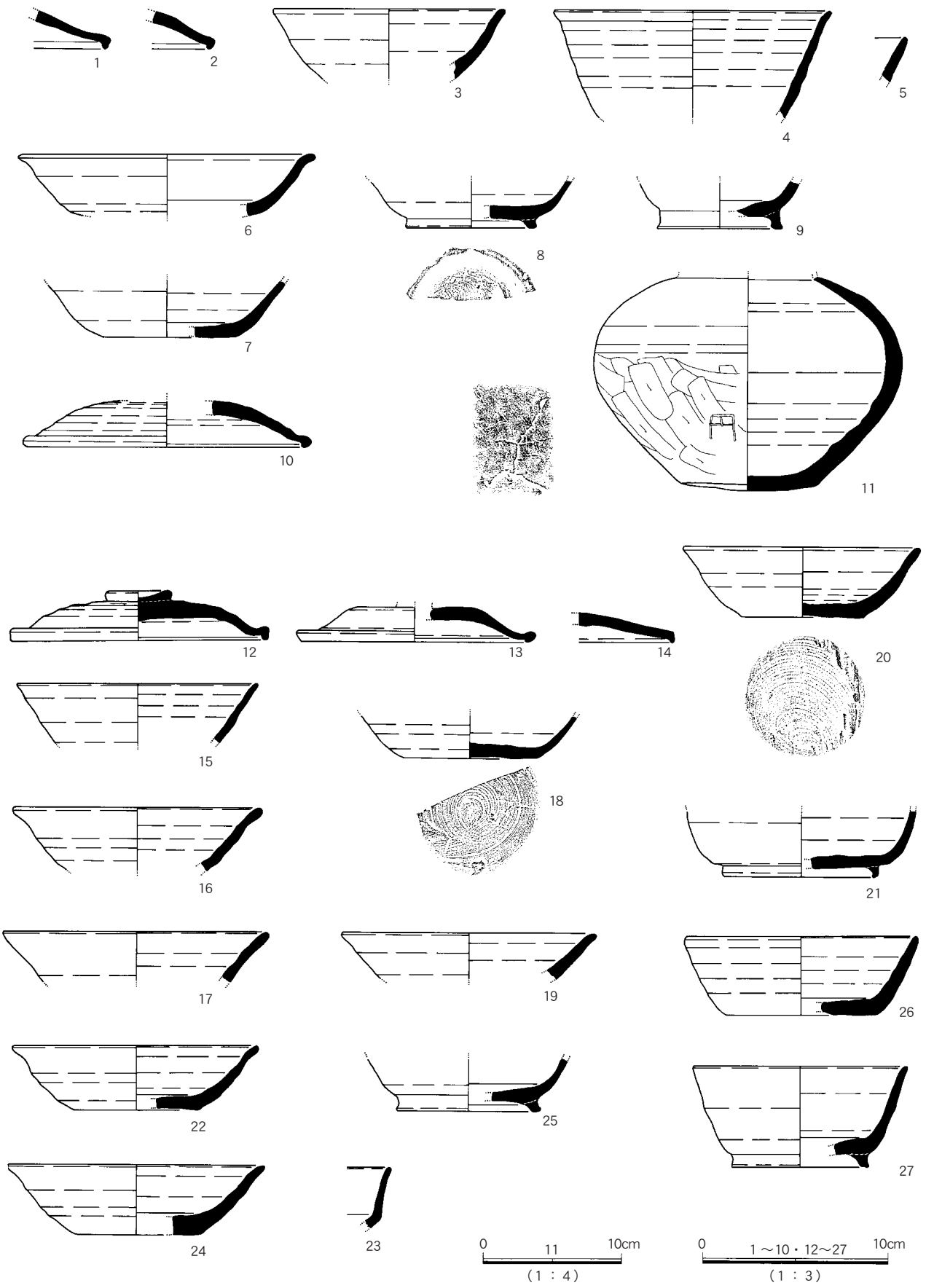
144－１～９はSB535（第127図）を構成する柱穴から出土したものである。１、２は蓋の口縁部資料である。１の端部は直立するように摘み出され、２は小さく丸味のある端部である。３～９は坏類である。３は小振りで身が浅いタイプである。４の口径は大きいが、体部の開きは小さく、身は深い。形態的には有台の可能性が高い。口縁部は特徴的に外反する。６は体部の傾きや身の浅さ、引き出された口縁部の作り等から、皿と考えられるものである。７は底部ヘラ切り後無調整である。８は回転糸切り後無調整、９は小振りなヘラ切りの有台坏である。

144－10、11は、SB567（第130図）の柱穴からの出土である。10は天井部に小さく回転ヘラケズリが施される。口縁部は内側に折曲げられ丸味をもった端部が作られる。天井部内面に使用痕が認められる。11は頸部を欠損するが、直立する短い頸が付くものと推測される。体部は強い丸味を持ち、やや上方に最大径を有する。最大径から下部には粗雑なケズリが入れられる。焼成時に生じた亀裂が内外面ともに見られる。串状工具で「円」の一字が書かれる。

144－12～21は、SB577（第128図）の柱穴から出土したものである。12は扁平なリング状つまみを貼付けた蓋で、天井部は弱い回転ヘラケズリが施される。口縁部は屈曲し、端部は小さく直立する。13の体部は傾きが強いが、天井部は回転ヘラケズリされた平坦なものである。口縁部は丸味を持って内側に折り込まれる。14の器高は低く、天井部と体部との境は不明瞭である。口縁部は屈曲せず直線的で、端部は小さく直立する。15～21は坏類である。15は体部から口縁部まで直線的に立ち上がるタイプである。16の体部は内湾し、口縁部は僅かに肥厚しながら外反する。17は体部が外反し、そのまま口縁部に至るものである。18は回転糸切り後無調整の底部から、薄い体部が立ち上がるものである。19は口縁部が僅かに外反する皿である。20の底部は回転糸切り後無調整で、体部は内湾から上位で外反に転じ口縁部に至る。21は底部ヘラ切り後ナデ調整された有台坏である。端部を内側に小さく摘み出した、低く細い高台が貼付けられる。体部は開きが小さく、直立気味である。

144－22～25は、SB595（第129図）の柱穴から出土したものである。22は回転糸切り後無調整である。体部は内湾し、口縁部は大きく外反する。内面の使用痕が顕著である。23は腰部が屈曲し綾を持ち、体部は僅かに外反する綾碗と考えられる。24の底部は、静止糸切り後無調整である。口径、底径が大きく、身は浅い。内面の使用痕が顕著である。25は回転糸切り後無調整の有台坏である。高台は低く、「ハ」の字状に貼付けられる。

144－26はEB635出土の無台坏である。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。体部は直線的に立ち上がる。器厚は全体的に厚い。144－27はEB642出土の有台坏である。底部はヘラ切りによるものと考えられる。口径、底径とも小さく、身は深い。体部は開きが小さく直線的に



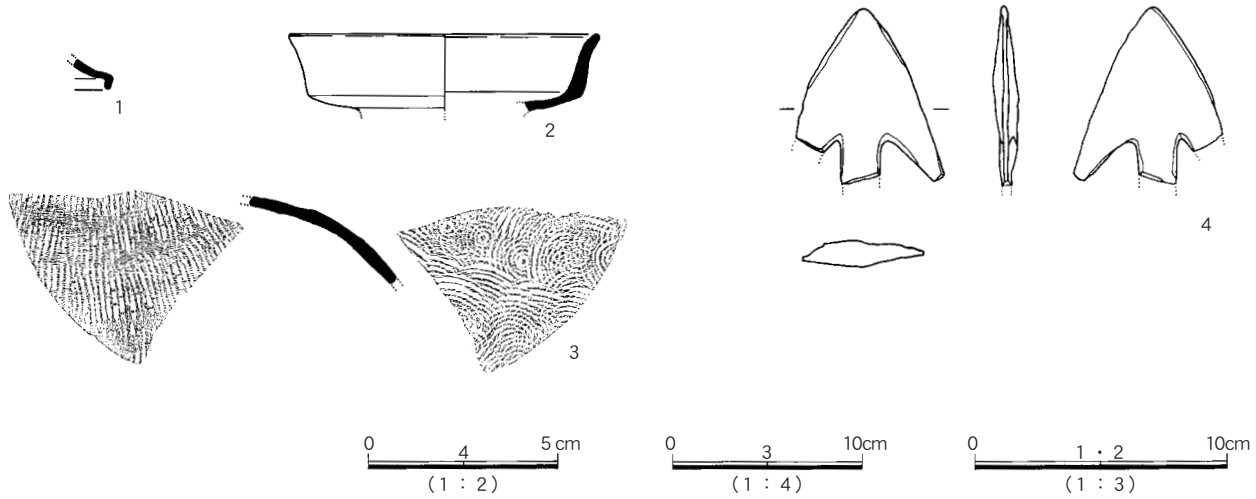
第144図　柱穴出土遺物 1

立ち上がる。高台は低く「ハ」の字状に貼付けられ、接地部には一条の凹みが巡る。

145－１、２はSB9562（第142図）の柱穴から出土したものである。１は小振りの蓋である。口縁部は、細く直立するよう摘み出される。２は腰部が強く屈曲し綾を持つ。体部上半は外反し、そのまま口縁部に至る。高台は貼付け部から剥離し欠損する。

145－３はSB9731（第185図）のEB9734から出土した甕の体部片である。外面は格子状のタタキ後、カキメが入れられる。内面は同心円のアテ痕が明瞭に見られる。

145－４はSB9502（第137図）のEB9504出土の鉄鏃である。幅広の刃部から直接茎部が延びる。刃部の断面はレンズ状を呈する。



第145図　柱穴出土遺物２

表54　柱穴出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	1	須恵器	蓋				5	緻密	良好	10YR6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 538
	2	須恵器	蓋				6	細砂混入	良好	10BG4/1暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 541
	3	須恵器	無台坏	(126)			5	細砂混入	良	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 544
	4	須恵器	無台坏	(150)			4	砂粒混入	良	7.5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 544
	5	須恵器	無台坏				4	砂粒混入	良	7.5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 541
	6	須恵器	皿	(160)			4	細砂混入、骨針	良	N5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 538
	7	須恵器	無台坏		(70)		4	緻密	良	5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	EB 544
	8	須恵器	有台坏		(70)		4	緻密	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	EB 538
	9	須恵器	有台坏		(68)		5	緻密	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	EB 542
	10	須恵器	蓋	(150)			5	緻密	良好	10YR6/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 570　SB567
	11	須恵器	壷		96		11	砂粒混入	良	2.5Y3/1黒褐	ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ	ケズリ	EB 574 同上 「山」柳書文字
	12	須恵器	蓋	(138)		27	8	砂粒混入	良好	10BG5/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 580
	13	須恵器	蓋	(120)			8	緻密	良好	10GY5/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 583
144	14	須恵器	蓋				7	緻密	良好	7.5YR5/2灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 581
	15	須恵器	無台坏	130			3.5	緻密	良	2.5Y7/2灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 581
	16	須恵器	無台坏	(134)			5	細砂混入	良好	10YR4/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 583
	17	須恵器	無台坏	(144)			4	緻密	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 585
	18	須恵器	無台坏		(64)		3	緻密、骨針	良	10YR4/3にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	EB 583
	19	須恵器	皿	(138)			5	細砂混入	良	2.5Y6/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 585
	20	須恵器	無台坏	(130)	65	37	5	粗砂混入	良	10YR8/3浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	EB 581
	21	須恵器	有台坏		(84)		6	砂粒混入、骨針	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	EB 581
	22	須恵器	無台坏	(134)	(68)	34	5	粗砂混入、骨針	良	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	EB 630
	23	須恵器	有台坏				3	緻密	良	7.5YR2/1黒	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 596
	24	須恵器	無台坏	(140)	(68)	38	6	細砂混入	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	静止糸切り	EB 596
	25	須恵器	有台坏		(78)		4	緻密	良	5G5/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	EB 596
	26	須恵器	無台坏	(126)	(80)	43	5	粗砂混入	良	2.5Y6/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	EB 635
	27	須恵器	有台坏	(116)	(74)	5	4	緻密、骨針	良	2.5GY8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	EB 642
	1	須恵器	蓋				3	緻密	良	10YR5/2灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 9569
145	2	須恵器	有台坏	(122)			3	粗砂混入	良	N3/暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ		EB 9567　SB9564
	3	須恵器	甕				6	緻密	良	7.5YR3/2黒褐	タタキ、カキメ	アテ痕		EP 9734

3　井　戸　跡

奈良・平安時代の井戸跡として明確に判断できるのはSE562、764、9606の３基である。しかし、調査段階で土坑と分類した中にも井戸跡の可能性を含むものも見られる。また、それらの中には、中世の遺物を含まないことから所属時期を古代に分類したが、中世に所属する井戸跡あるいは土坑も含まれると考えられる。

【SE562】第146図

31－188グリッドに位置する。掘立柱建物跡群の真南約20ｍの所に位置する。周辺の遺構密度は希薄で、奈良・平安時代に属する遺構は、最も近いもので約10ｍ離れたSB9648である。

掘り方は東西2.8ｍ、南北2.9ｍの方形を呈する。確認面からの深さは２ｍである。掘り方上方の平面形は、井戸枠の軸とずれており、面の向きは一致しない。井戸枠は井桁組みで、井戸底から４ないし５段まで残存する。土層断面の状態から、上部の約１ｍについては、掘り返されて抜き取られたものと考えられる。掘り方の内側と外に、径20㎝前後、深さ約50㎝の楕円形の掘込みがあり、井戸に架けた屋根を支えた柱穴の可能性が考えられる。

井戸枠は長さ約110㎝、幅15～18㎝、厚さ約５㎝の板材を主とする（第147～152図）。組まれた材の他に、148－１、149－３・４、150－４、152－１のように、隙間の充填用に用いられたと考えられるものもある。最下段には、一回り大きい148－２、149－５、151－１、152－３が組まれている。特に南面と北面に使われた151－１と152－３は長さが135㎝あり、下端面が弧状になるなどの点から転用材の可能性がある。最下段の内寸は約100㎝、２段目からは一辺約75㎝である。また、２段目より上の段は南から北へ約10㎝の平行なずれが生じている。

掘り方上部に見られるレンズ状堆積の中で、３～５層に焼土を含んでいる。中でも４層とした層は、平面形は円形を呈し均一に強い火力で焼き締った状態で検出された。それ以外は少量の炭化物が出土したのみである。井戸を廃棄する際の祭祀儀礼の可能性も考えられる。

出土遺物は、須恵器蓋４点、無台坏30点、有台坏５点、短頸壷１点、長頸壷19点、甕４点、土師器無台坏６点、甕53点である。

【SE764】第153図

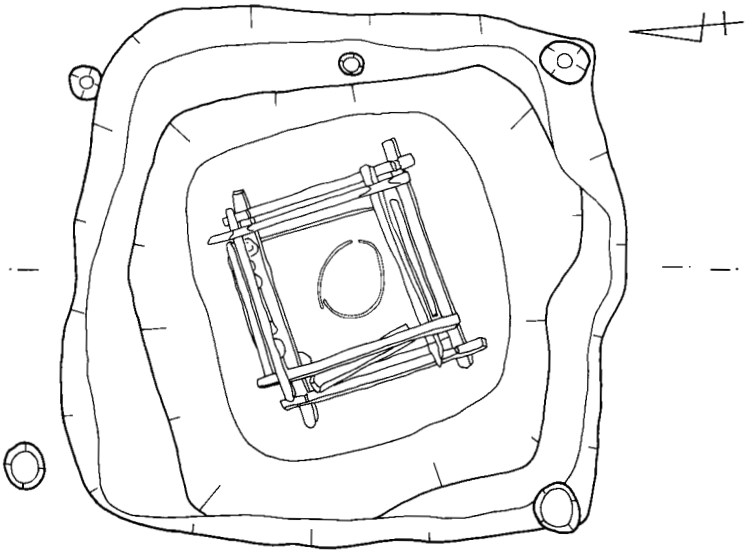
34・35－222グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2ｍである。周辺の遺構密度は希薄で、竪穴建物までは約20ｍ、中世の掘立柱建物までは約５ｍの距離にある。

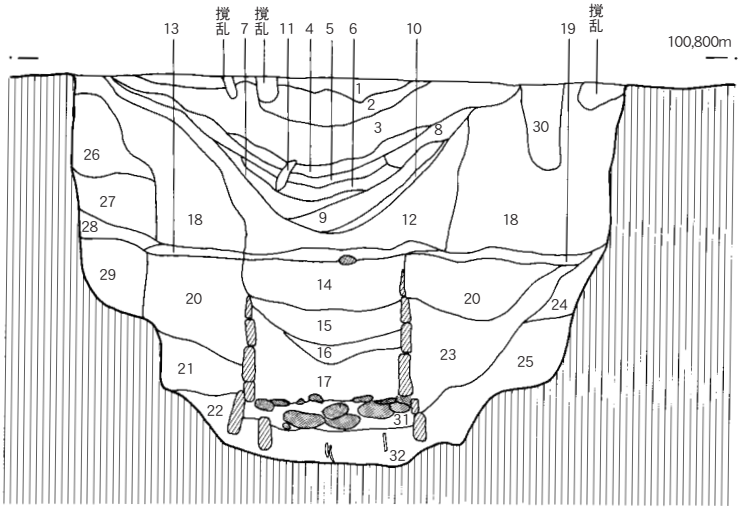
平面形は、径約３ｍのほぼ円形を呈し、深さは1.6ｍを測る。壁は30～40°の傾斜を持つが、一部には崩落も認められる。底部は一辺約70㎝の方形になることから、井戸枠が組まれていたことが推測される。覆土は黒色シルトを主とし、レンズ状の堆積を見せる。

出土遺物は、須恵器蓋３点、無台坏14点、有台坏７点、甕５点、黒色土器無台坏２点、土師器甕31点である（第153・154図）。遺物の多くは５層以下の層からの出土である。

153－１は３層出土の小型甕である。頚部は短く外反し端部は小さく三角形に摘み出される。肩部は撫で肩で丸味を持つ。外面は平行タタキ、内面には青海波のアテ痕が強く残る。

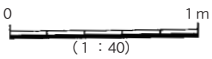
153－２は４層出土の綾碗である。体部下半に回転ヘラケズリで作り出した綾を有する。薄手の高台が「ハ」の字状に大きく開く。内面は使用痕が顕著である。

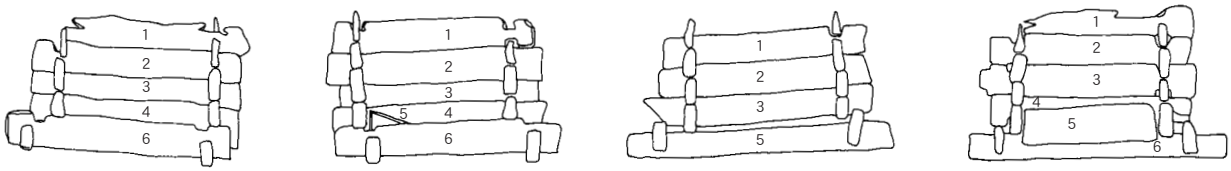


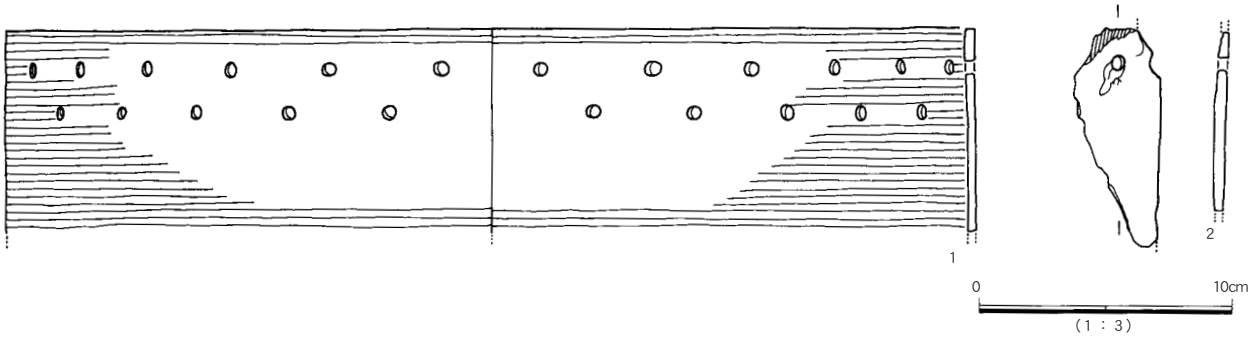


SE562

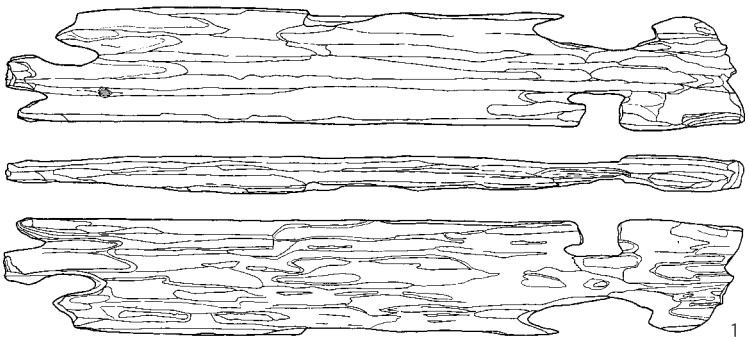
1	10YR３/４	暗褐	シルト	褐色シルトブロック含む、固く締る
2	10YR２/２	黒褐	シルト	焼土粒、炭化粒少量、灰白シルト粒微量含む、固く締る
3	10YR２/１	黒	シルト	炭化粒少量、暗褐色シルトブロック焼土含む、やわらかい
4	５YR４/４	にぶい黄褐	シルト	焼土層、均一に焼けており壁状をなす、固く締る
5	10YR1.7/１	黒	シルト	炭化物　焼土ブロック、暗褐色シルトブロック含む
6	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物少量、褐色砂質ブロック多量含む、固く締る
7	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物、焼土粒微量含む、やわらかいが締っている
8	10YR２/１	黒	シルト	炭化物、焼土ブロック、褐色シルト粒、粗砂含む、固く締る
9	10YR３/３	暗褐	シルト	炭化物少量、焼土粒、黄褐シルトブロック微量含む
10	10YR３/２	黒褐	シルト	黒色シルトブロック多量、暗褐色シルトブロック含む
11	10YR1.7/１	黒	シルト	炭化物、焼土ブロック、暗褐色シルトブロック含む
12	10YR３/４	暗褐	シルト	炭化物少量、礫、黄褐色シルトブロック少量含む、固く締る
13	7.5YR３/４	暗褐	シルト	12が酸化、炭水化物少量、礫、黄褐色シルトブロック少量含む
14	10YR２/３	黒褐	シルト	炭化物少量、細砂、黄褐色シルト粒少量含む、やわらかい
15	10YR２/２	黒褐	シルト	灰白シルト粒少量含む、木片含む、グライ化、やわらかい
16	10YR３/３	暗褐	シルト	灰白シルト粒含む、細砂含む、グライ化、固く締る
17	10YR２/１	黒	シルト	炭化物少量、灰白シルト粒、細砂少量含む、グライ化
18	10YR３/４	暗褐	シルト	黒色、褐色、黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
19	7.5YR４/６	褐	シルト	18が酸化、黒色、褐色、黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
20	10YR３/３	暗褐	シルト	炭化物微量、黄褐色シルトブロックを斑状に含む、細砂含む
21	10YR３/１	黒	シルト	黒色シルトブロック微量、灰白シルトブロック少量含む
22	10YR４/２	灰黄褐	シルト	暗褐色シルトブロック、細砂含む、やわらかいが締っている
23	10YR２/１	黒	シルト	灰白シルトブロックを斑状に含む、褐色細砂含む、グライ化
24	10YR４/６	褐	シルト	褐色、灰白シルトブロック、細砂含む、固く締る
25	10YR３/４	暗褐	シルト	黒色シルトブロック少量、灰白シルトブロック、細砂含む
26	10YR３/３	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック、黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
27	10YR３/３	暗褐	シルト	黒褐、黄褐シルト粒、粗砂を斑状に含む、固く締る
28	10YR３/４	暗褐	シルト	褐灰シルトブロック含む、固く締る
29	10YR３/４	暗褐	シルト	黒色シルト粒、黄褐シルトブロック、細砂含む、固く締る
30	10YR２/３	黒褐	シルト	炭化粒、焼土、黄褐色シルト粒含む、固く締る
31	10YR４/６	褐	砂	径30cm前後の礫を多量に含む礫層
32	10BG４/１	暗青灰	細砂	黒褐色シルト含む、弱い粘性



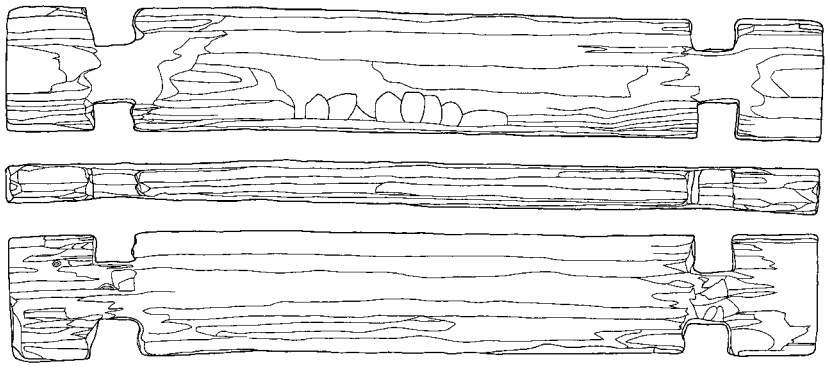




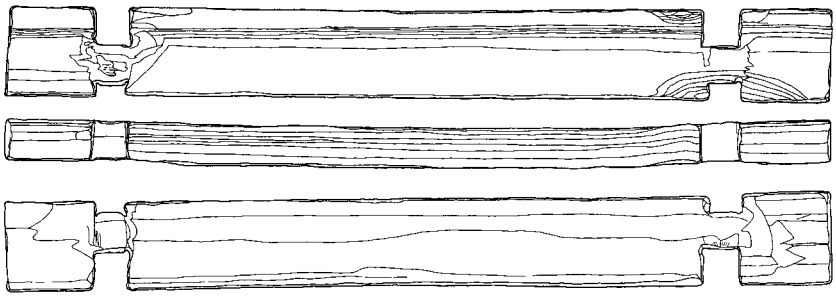
第146図　SE562　出土遺物



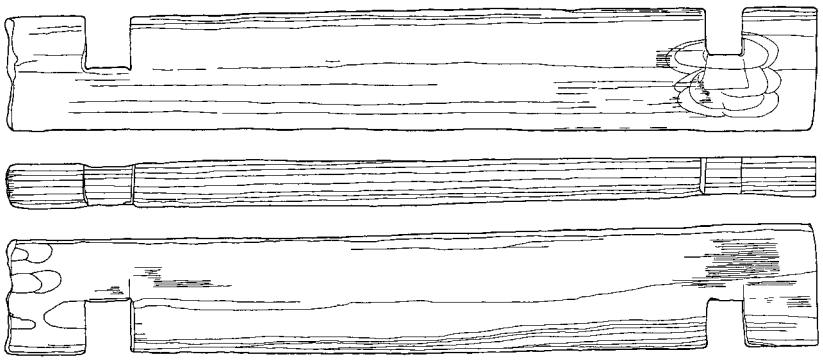
1　（東－1）



2　（東－2）

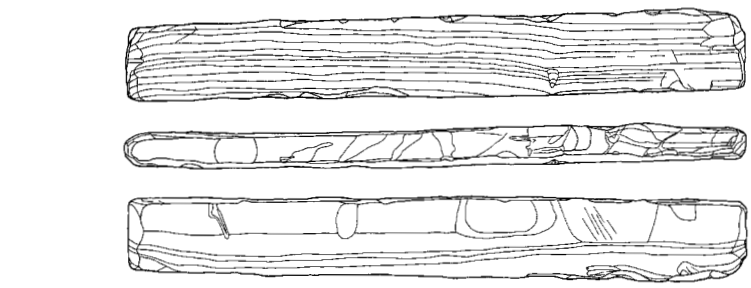


3　（東－3）

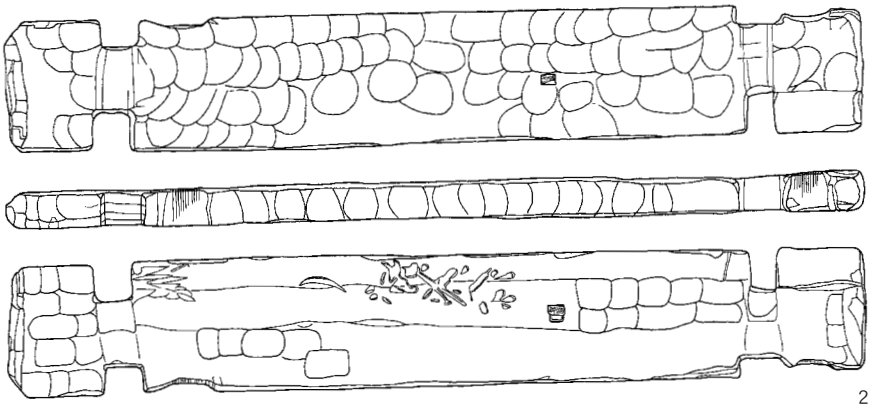


4　（東－4）　0　20cm　（1：10）

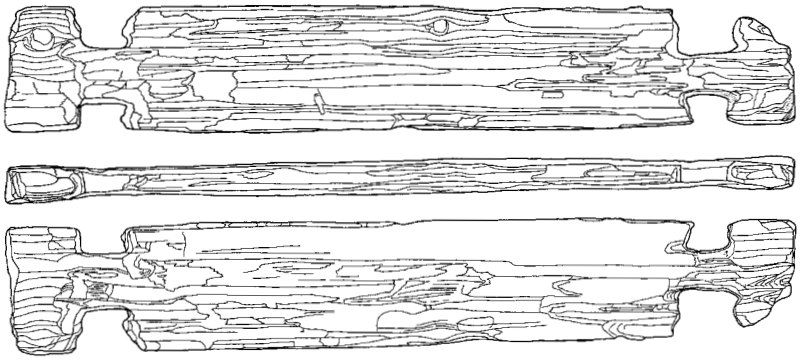
第147図　SE562　井戸枠 1



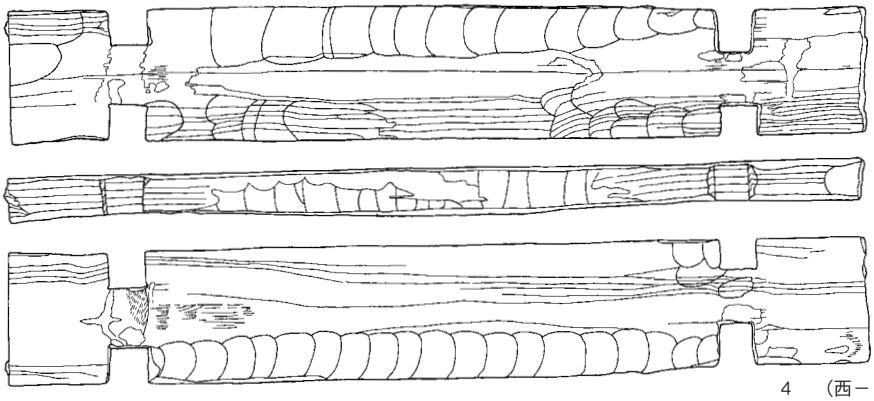
1　（東－５）



2　（東－６）

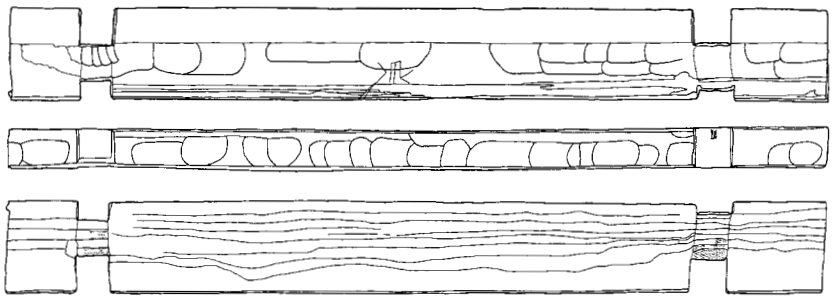


3　（西－１）

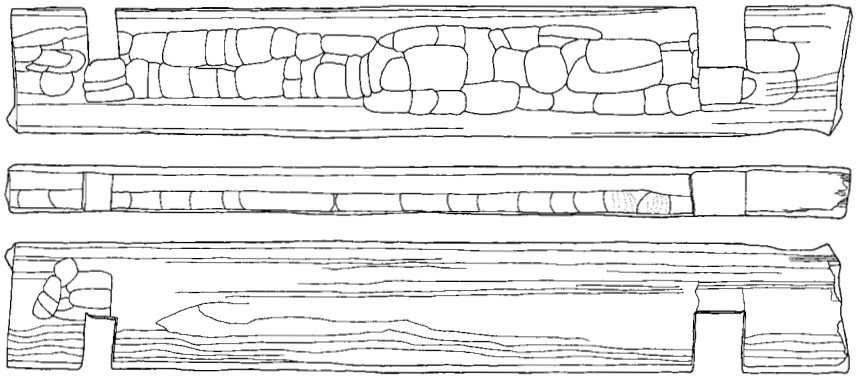


4　（西－２）　0　20cm　（１：10）

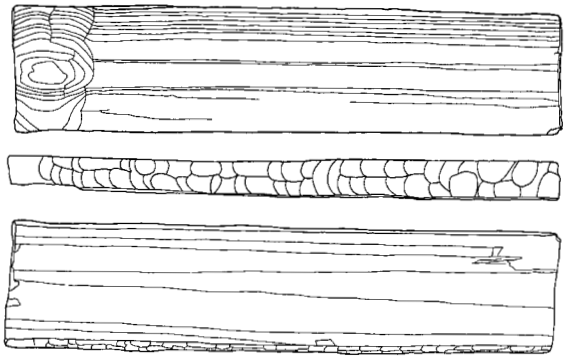
第148図　SE562　井戸枠２



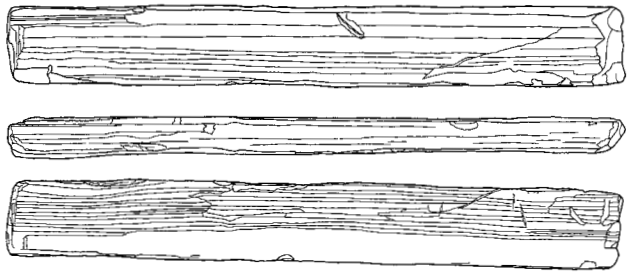
1　（西－3）



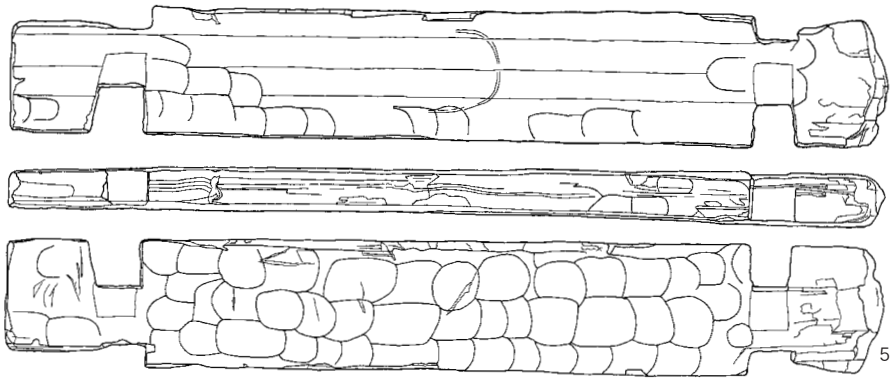
2　（西－4）



3　（西－5）



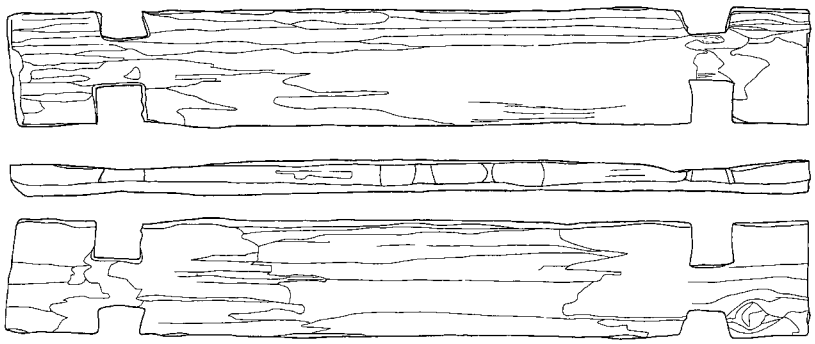
4



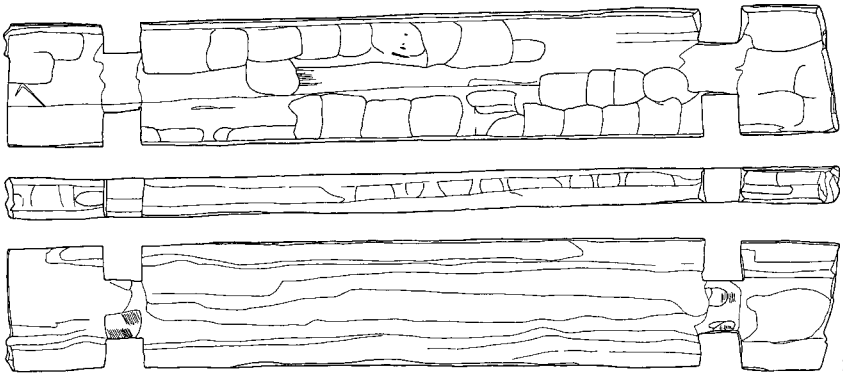
5　（西－6）

0　20cm
（1：10）

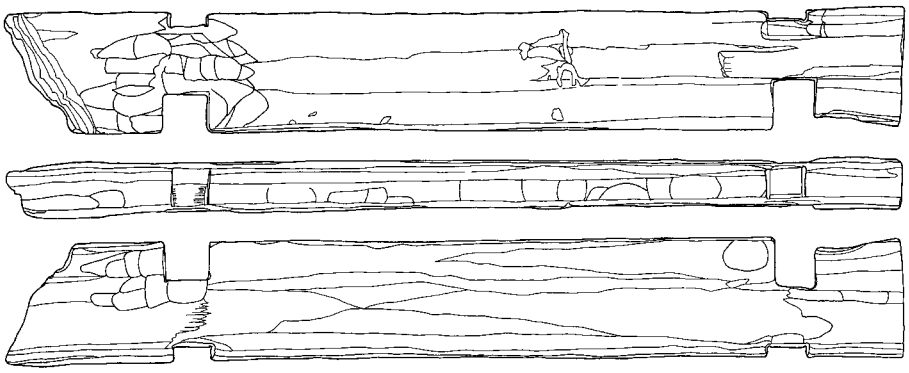
第149図　SE562　井戸枠3



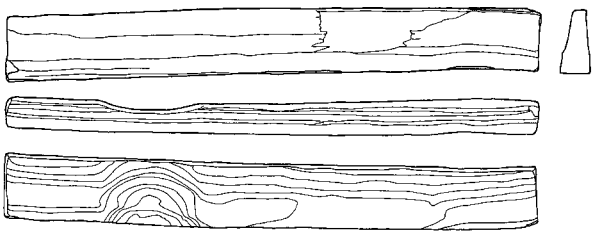
1　（南－1）



2　（南－2）



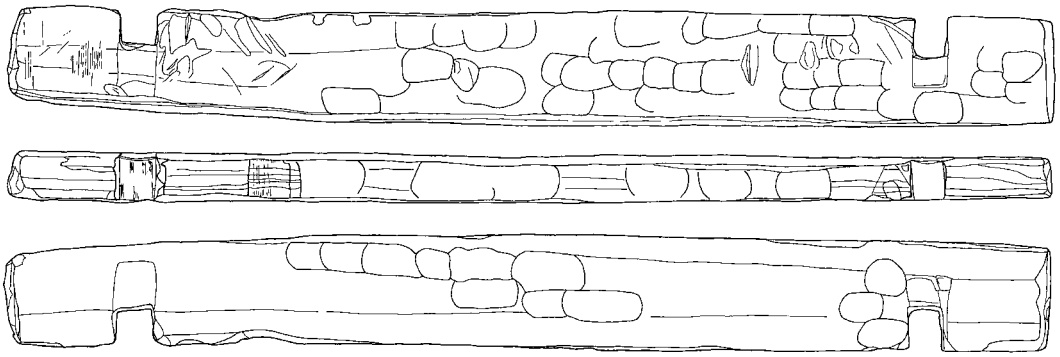
3　（南－3）



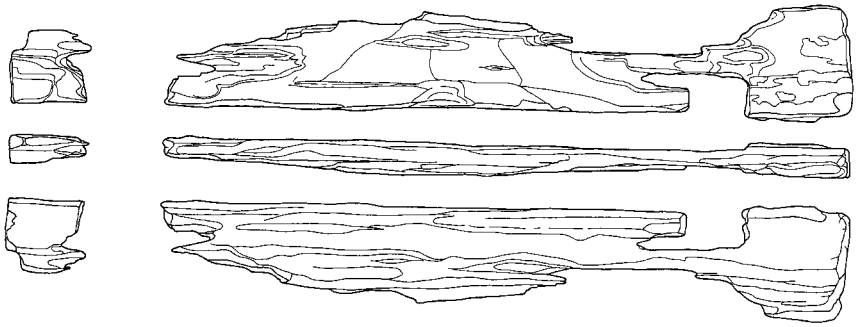
4　（南－4）

0　20cm
（1：10）

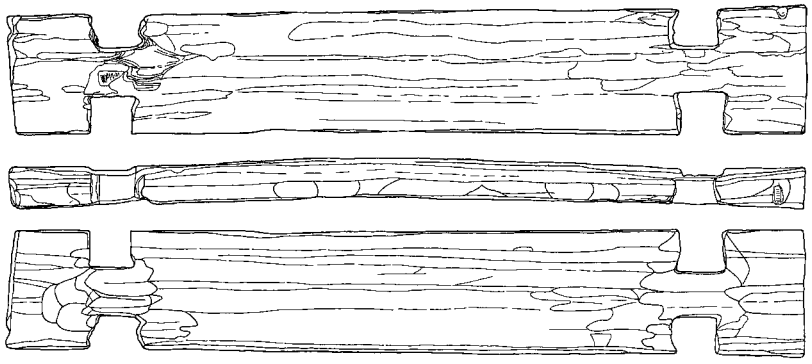
第150図　SE562　井戸枠4



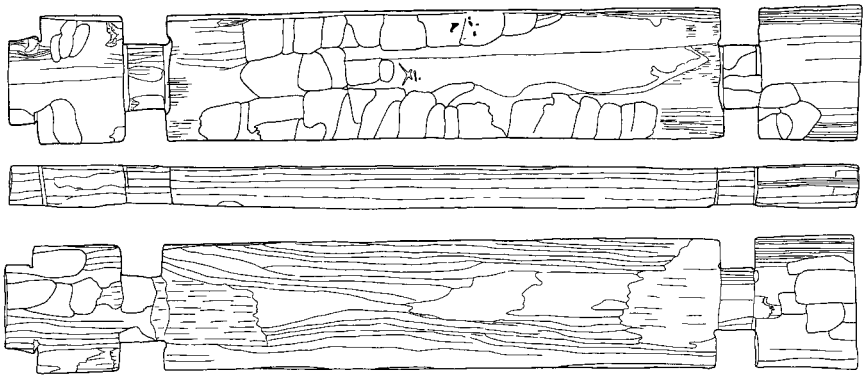
1（南－5）



2（北－1）



3（北－2）

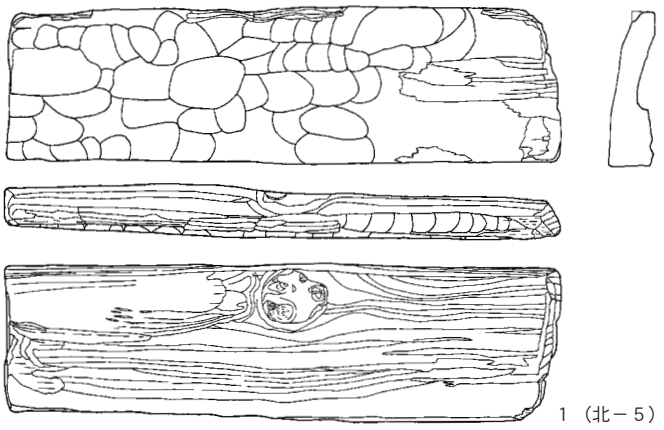


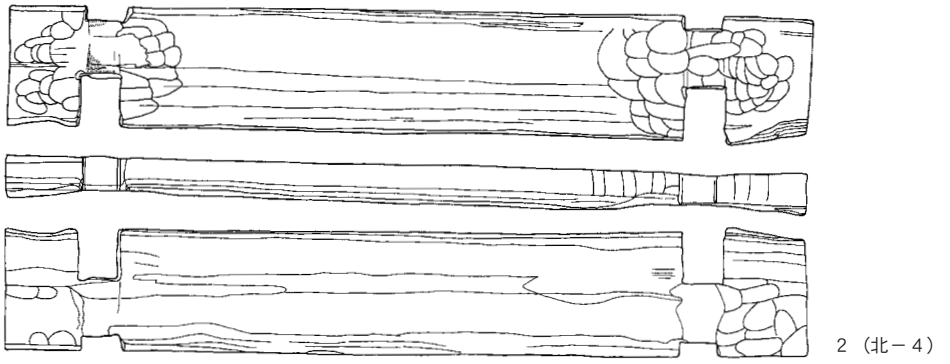
4（北－3）

0　20cm

（1：10）

第151図　SB562　井戸枠5



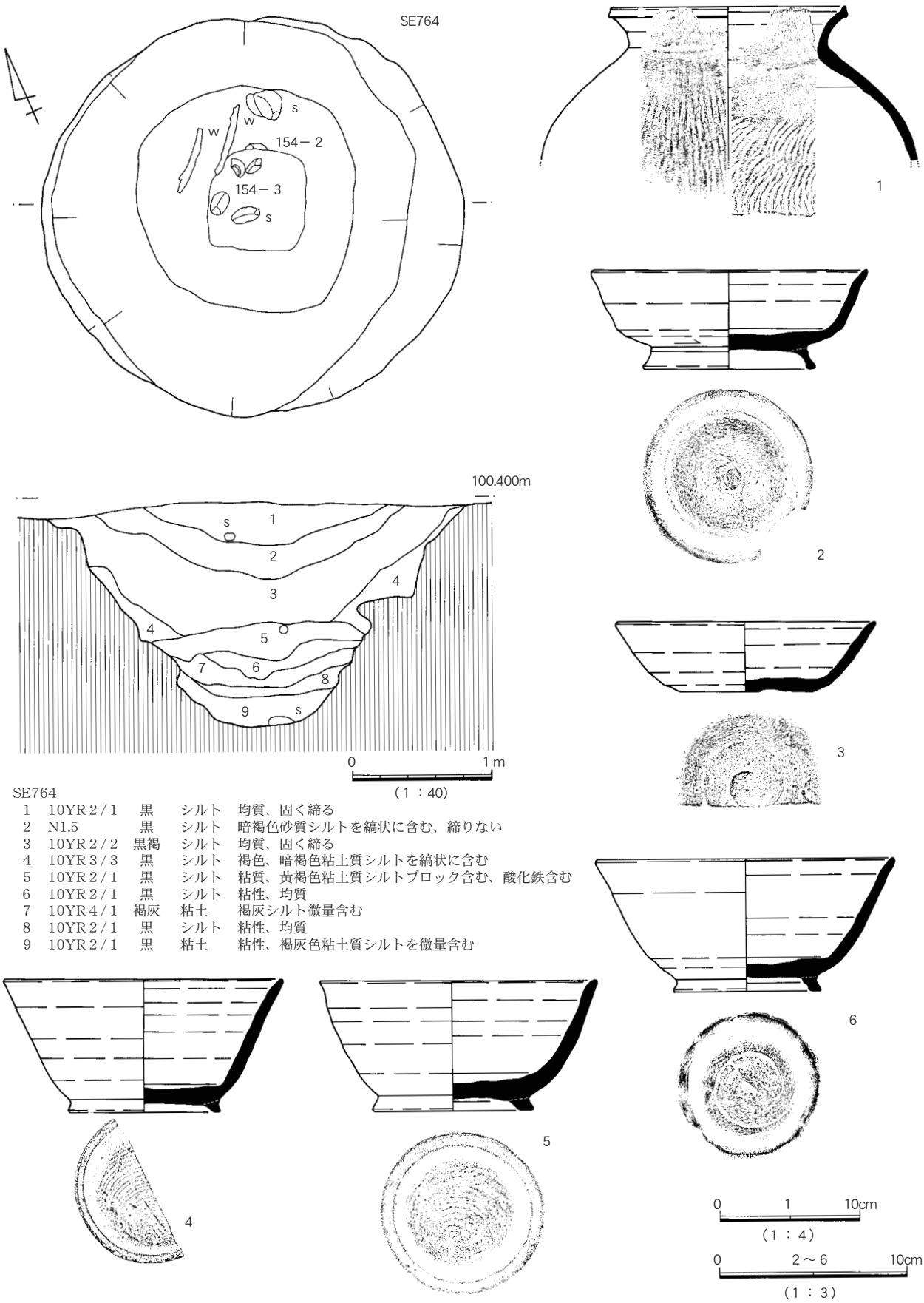


第152図　SB562　井戸枠6

表55　SE562井戸枠計測表

（　）は残存値

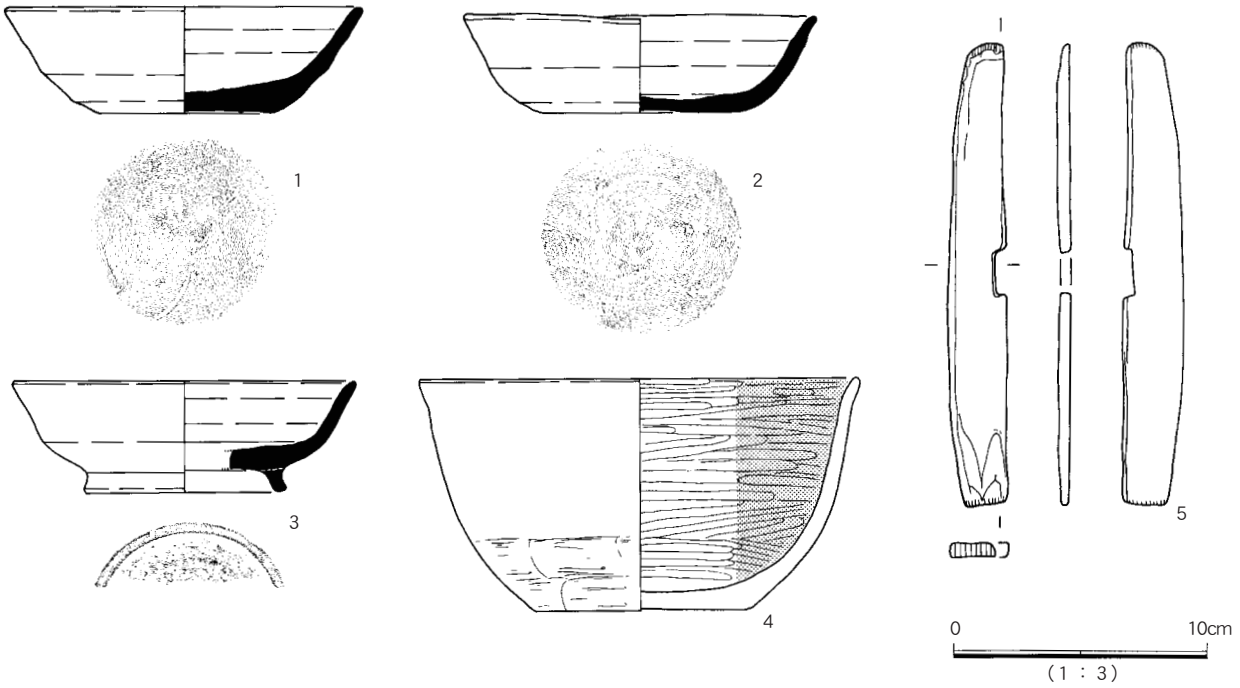
挿図番号		部位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
147	1	東－1	(96)	(15)	4	
	2	東－2	107	15	6	上下に切り込み
	3	東－3	108	12	6	上下に切り込み
	4	東－4	106	16	6	上面のみ切り込み
148	1	東－5	82	11	5	隙間の充填用
	2	東－6	113	18	5	上下に切り込み、最下段
	3	西－1	(103)	16	(4)	上下に切り込み
	4	西－2	113	17	6	上下に切り込み
149	1	西－3	108	12	5	上下に切り込み
	2	西－4	111	17	6	上面のみ切り込み
	3	西－5	72	17	5	隙間の充填用
	4	西	81	11	5	隙間の充填用
149	5	西－6	116	17	6	上下に切り込み、最下段
150	1	南－1	106	16	4	上下に切り込み
	2	南－2	110	17	5	上下に切り込み
	3	南－3	119	16	6	上下に切り込み
	4	南－4	70	8	4	隙間の充填用
151	1	南－5	138	15	6	上面のみ切り込み
	2	北－1	(91)	(14)	(4)	上下に切り込み
	3	北－2	105	16	5	上下に切り込み
	4	北－3	112	17	6	上下に切り込み
152	1	北－4	73	21	7	隙間の充填用
	2	北－5	106	16	5	上下に切り込み
	3	北－6	137	15	5	上面のみ切り込み、最下段



SE764

1	10YR2/1	黒	シルト	均質、固く締る
2	N1.5	黒	シルト	暗褐色砂質シルトを縞状に含む、締りない
3	10YR2/2	黒褐	シルト	均質、固く締る
4	10YR3/3	黒	シルト	褐色、暗褐色粘土質シルトを縞状に含む
5	10YR2/1	黒	シルト	粘質、黄褐色粘土質シルトブロック含む、酸化鉄含む
6	10YR2/1	黒	シルト	粘性、均質
7	10YR4/1	褐灰	粘土	褐灰シルト微量含む
8	10YR2/1	黒	シルト	粘性、均質
9	10YR2/1	黒	粘土	粘性、褐灰色粘土質シルトを微量含む

第153図　SE764　出土遺物 1



第154図　SE764出土遺物２

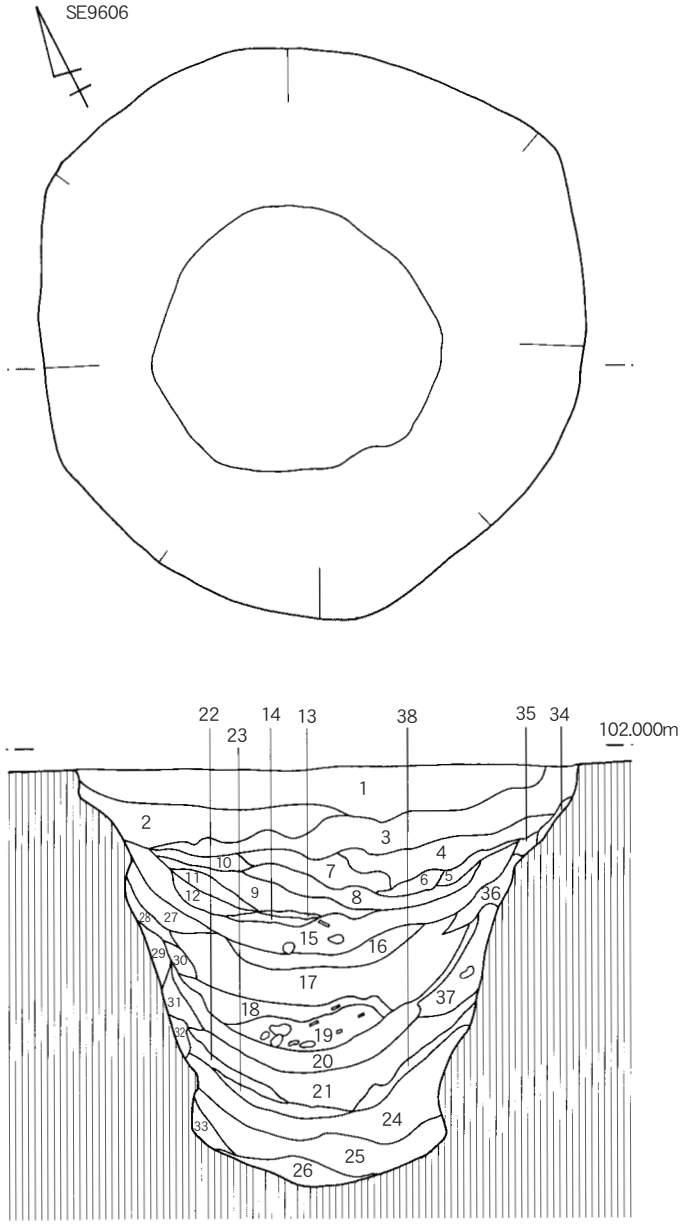
表56　SE764出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
153	1	須恵器	甕	(168)			5	砂粒混入、骨針	良	5Y4/1灰	タタキ	アテ痕		
	2	須恵器	有台坏	(146)	90	52	4	緻密、骨針	良	N6/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	須恵器	無台坏	(140)	(72)	37	5	砂粒混入、骨針	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	有台坏	(148)	82	71	7	砂粒混入	良好	N3/暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	有台坏	148	86	69	5	砂粒混入	良好	N3/暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	有台坏	(160)	78	71	5	砂粒混入	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
154	1	須恵器	無台坏	142	74	42	5	砂粒混入、骨針	不良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	2	須恵器	無台坏	140	78	37	6	緻密、骨針	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	須恵器	有台坏	(135)	(80)	44	4	粗砂混入	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	黒色土器	鉢	(173)	81	91	6	細砂混入	良	10YR8/3浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ミガキ	ナデ	

153－３～６は５層出土の坏類である。３はヘラ切り後無調整で、体部はほぼ直線的に立ち上がる。４、５は回転糸切り後無調整の有台坏である。４は低い高台が底部外周に貼付けられる。体部は外反気味に立ち上がり口縁部まで至る。器厚は全体的に肥厚する。５は厚く低い高台が底部外周に貼付けられたものである。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。器厚は全体的に肥厚し、重量感がある。６はヘラ切り後ナデ調整された有台坏である。内側に一条の綾を持つ、細く低い高台が貼付けられる。体部は下半が内湾し、上半では外反に転じる。口縁部の周辺は使用痕が明瞭である。

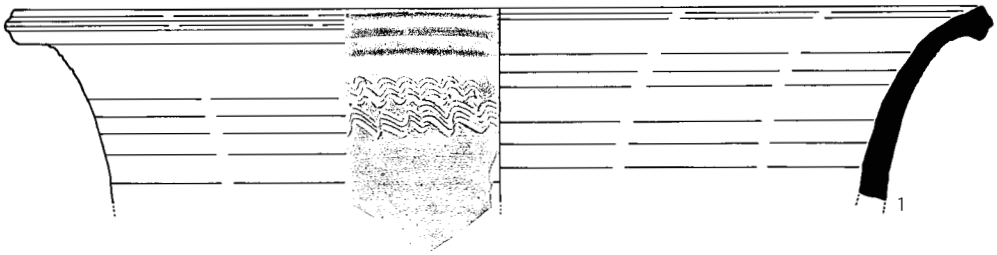
154－１は６層出土の無台坏である。底部はヘラ切り後ナデ調整されたもので、径は小さい。外面に弱い綾を持ち、丸味を帯びるが、内面は直線的に開く。口径も小さく、身が深い。底部は肥厚し重量感がある。内面に火襷及び使用痕が認められる。

154－２～４は９層出土である。２は底部ヘラ切り後ナデ調整が施される。体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。内外面とも使用痕が顕著である。３は弱い回転ヘラケズリにより体部下半に綾を持つ有台坏である。口径、底径が大きく、身は浅い。底部はヘラ切り後ナデ調整される。４は内面を黒色処理した鉢である。体部は内湾し、口縁部は外反する。内面は横方向



SE9606

1	10YR2/2	黒褐	シルト	風化礫、細砂、暗褐色シルトブロック含む、固く締る
2	10YR2/2	黒褐	シルト	細砂、暗褐色シルト粒多量含む、固く締る
3	10YR2/3	黒褐	シルト	風化礫、黄褐色、シルトブロック多量含む、固く締る
4	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
5	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒微量含む、固く締る
6	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
7	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック多量含む、やわらないが締っている
8	10YR2/2	黒	シルト	黄褐色シルト粒少量、暗褐色シルトブロック含む
9	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック斑状に多量含む、やわらかく締りない
10	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
11	10YR2/2	黒	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、やわらなく締りない
12	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒含む、やわらかく締りない
13	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒微量含む、固く締る
14	10YR2/1	黒	シルト	黄褐細砂多量含む、やわらかいが締っている
15	10YR2/2	黒褐	シルト	土器、小礫、黄褐色シルト、細砂少量含む、締っている
16	10YR4/4	褐	細　砂	黒褐色シルトブロック含む､やわらかいが締っている
17	10YR2/1	黒	シルト	褐色細砂、黄褐色シルト粒少量含む、締っている
18	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色細砂､黄褐色シルトブロック少量含む、締っている
19	10YR2/2	黒褐	シルト	礫多量含む、黄褐色シルトブロック微量含む
20	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色細砂、縞状に多量含む、黄褐色シルトブロック含む
21	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロックを縞状に含む、炭化物含む
22	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、やわらかいが締っている
23	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、酸化鉄少量含む
24	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト、黒褐色シルトを縞状に含む、固く締る
25	10YR3/3	暗褐	細　砂	黄褐色細砂、黒褐色シルトブロックを縞状に含む
26	10YR3/2	黒褐	細　砂	灰白色粘土ブロック、黄褐色シルトブロック含む
27	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
28	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック微量含む、やわらかいが締っている
29	10YR2/3	黒褐	粘　土	黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
30	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色細砂少量含む、固く締る
31	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色細砂含む、固く締る
32	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック（小）含む、やわらかいが締っている
33	10YR4/4	褐	シルト	黄褐色粘土、暗褐色細砂含む、酸化鉄含む、締っている
34	10YR2/3	黒褐	細　砂	黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
35	10YR3/4	暗褐	細　砂	黒褐色シルトブロック多量含む、固く締る
36	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色細砂ブロック含む、固く締る
37	10YR2/2	黒褐	シルト	礫含む、褐色細砂ブロックを斑状に含む､締っている
38	10YR2/3	黒褐	シルト	黒色シルトブロック､褐色細砂を斑状に含む、締っている



0　1m
（1：40）

0　10m
（1：4）

第155図　SE9606出土遺物

表57　SE9606出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
155	1 須恵器	甕	(508)			12	砂粒混入、骨針	良好	N2/黒	ロクロナデ	ロクロナデ		櫛書波状文

の比較的太めのミガキが入れられる。外面の調整は、磨滅するため不明瞭であるが、下半部については回転ヘラケズリが施される。底部と体部に黒斑が認められる。

154－５は中央部に方形の抉りが入れられた木製品である。両端は削られて薄くなる。部材と考えられるが、用途は不明である。

以上、層毎に出土遺物を見てきたが、大きな時間差はなく、９世紀前半代の範疇として捕らえる事ができる。

【SE9606】第155図

27－200グリッドに位置する。段丘上段の平坦地に立地し、標高は約101.8ｍである。周辺には、竪穴建物や溝跡が僅かに見られる以外、遺構は極めて希薄である。

平面形は、径約3ｍの楕円形を呈する。深さは2.2ｍを測る。壁の傾斜は約20°で急峻である。素掘りと推測される。覆土は黒褐色のシルトを主とする、細かいレンズ状の堆積を見せる。

出土遺物は、須恵器蓋１点、無台坏３点、有台坏１点、長頸壷４点、甕12点、土師器甕２点である。155－１は、頸部の上方に４条１単位の櫛描き波状文を２段に施した甕である。口縁部は外反し、端部には凸帯が摘み出される。

４　土　　坑

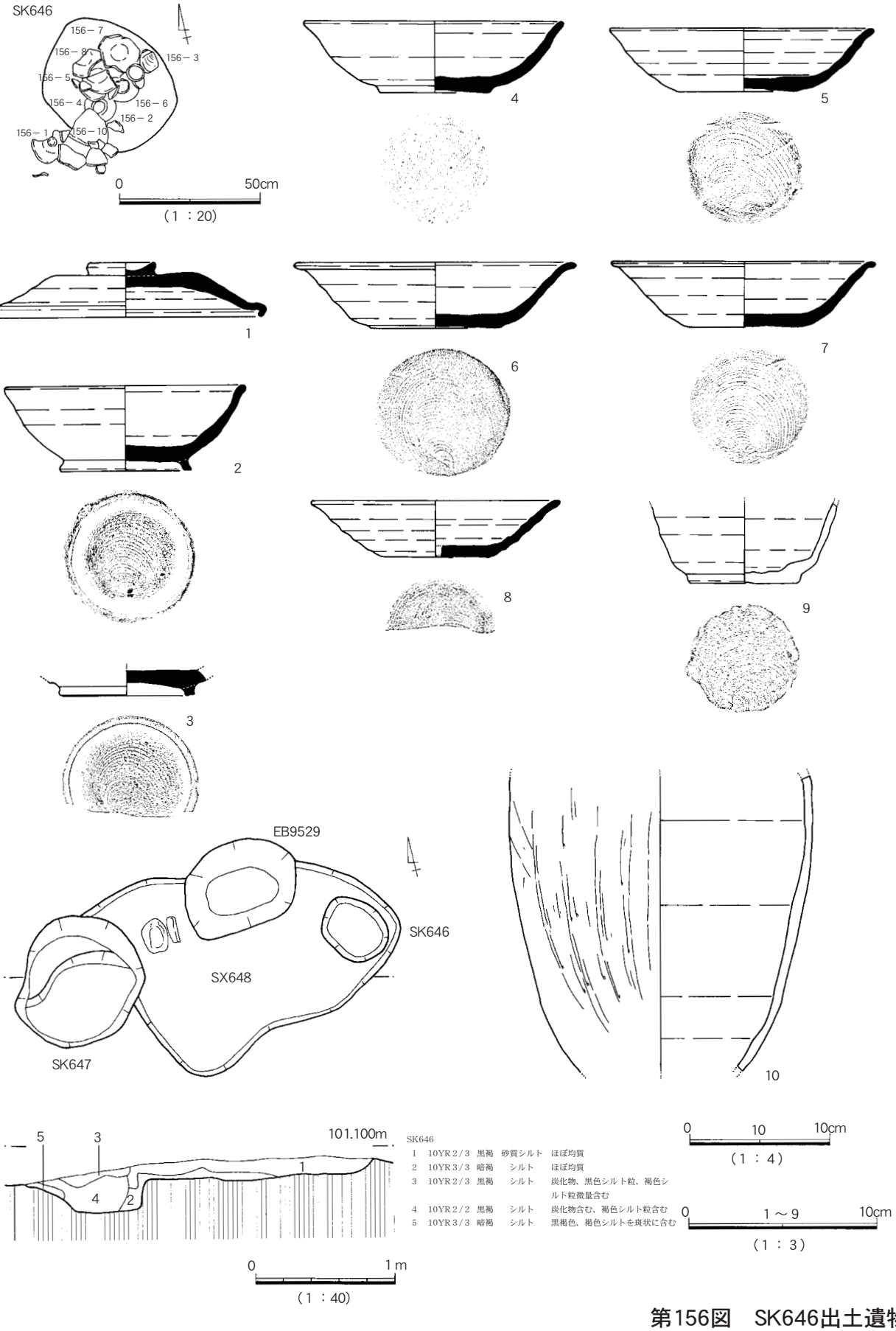
本調査区で土坑として登録した遺構は344基（２次－33基・３次311基）である。この中には縄文時代や中世の所産とするものも含まれる。奈良・平安時代の土坑は、概ね段丘の上段に立地する傾向にあり、規模も小さいものが多く認められる。しかし出土遺物が無く、所属時期の判断に窮する土坑も少なくない。したがって、以下で概述するのは、主に奈良・平安期の遺物を出土するものを中心に取り上げたが、中世に所属する可能性も十分に考えられる。

表58　SK646出土土器観察表

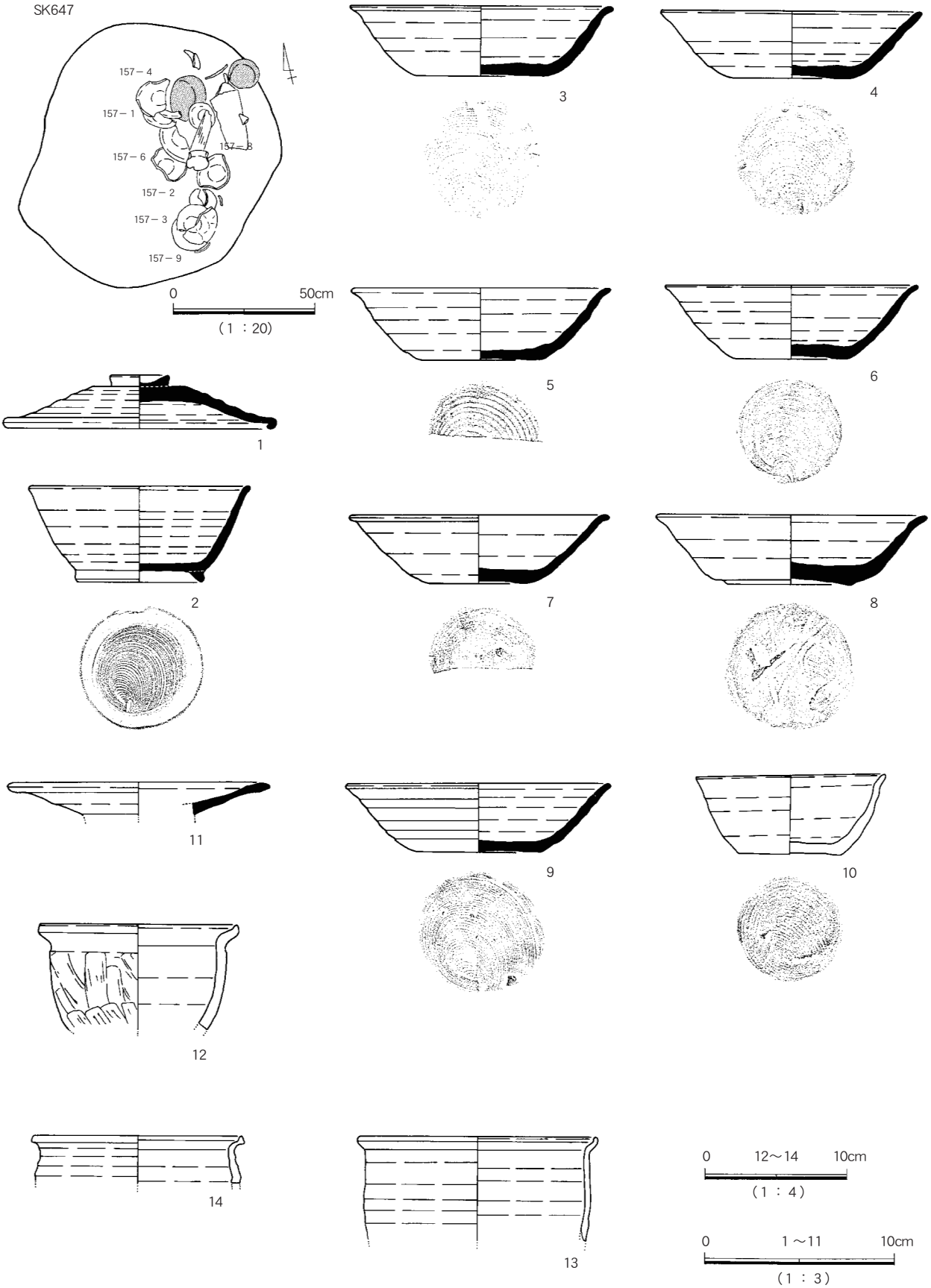
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
156	1	須恵器	蓋	142		28	7	砂粒混入	良好	2.5Y6/黄灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	2	須恵器	有台坏	128	70	43.5	4	細砂混入、骨針	良	2.5Y4/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	3	須恵器	有台坏		72			細砂混入	良	5G6/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	無台坏	138	59	37	5	粗砂混入	不良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	無台坏	142	64	34	5	砂粒混入	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	無台坏	150	68	35	4	粗砂混入、骨針	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	7	須恵器	無台坏	140	60	36	4	砂粒混入、骨針	良	5G5/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	8	須恵器	無台坏	(132)	58	30	4	砂粒混入、骨針	良	2.5YR5/2暗灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	9	土師器	壷		56		4	砂粒混入、骨針	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	10	土師器	甕				6	粗砂混入	良	5Y6/8橙	ケズリ	ロクロナデ		

表59　SK647出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
157	1	須恵器	蓋	140		28	5	緻密	良好	N6/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	2	須恵器	有台坏	117	66	50	4	緻密	良	10YR5/3にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	3	須恵器	無台坏	138	62	38	4	砂粒混入	良	10YR4/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	無台坏	(140)	60	35	4	砂粒混入、骨針	良	2.5GY6/1オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	須恵器	無台坏	(138)	(60)	38	5	砂粒混入、骨針	良	2.5Y5/2暗灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	6	須恵器	無台坏	(134)	56	39	4	緻密	良	2.5YG6/1灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	7	須恵器	無台坏	(134)	56	37	3	粗砂混入	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	8	須恵器	無台坏	144	64	36	5	砂粒混入	良	2.5YR4/2暗灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	9	須恵器	無台坏	140	64	36	4	砂粒混入、骨針	良	2.5YR5/2暗灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	10	土師器	無台坏	100	54	43	5	細砂混入	良好	5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	11	須恵器	皿	140			4	細砂混入	良好	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	12	土師器	甕	(140)			7	細砂混入、骨針	良好	7.5YR7/6橙	ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ		
	13	土師器	甕	(170)			5	砂粒混入	良	5YR6/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ		RP338
	14	土師器	甕	(148)			6	細砂混入	良好	7.5YR8/8黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		



第156図　SK646出土遺物



第157図　SK647出土遺物

【SK646】第156図

27－189グリッドに位置する。SX648の中にありSK647と対峙する。平面形は長軸50㎝、短軸40㎝の楕円形を呈する。深さは約16㎝である。出土遺物は、須恵器蓋１点、無台坏５点、有台坏２点、土師器無台坏１点、壷１点、甕９点である（第156図）。

156－１は天井部を回転ヘラケズリにより平坦に作り、大きめのリング状つまみを貼付けたものである。体部の傾きが強いため、器高が高くなる。口縁部は屈曲し、端部は内側に折り込まれる。天井部内面が著しく摩滅し、滑らかである。

156－２、３は回転糸切り後無調整の有台坏である。２の高台は低く、「ハ」の字状に開く。体部は内湾し丸味を持ち、口縁部は外反して玉縁状を呈する。底部内面には径５㎝程の油痕と考えられる染みがあり、その僅か上方には灯心痕と考えられる１㎝程の暗褐色の付着物が認められる。また口縁の一部に油煙が付着する。３は低く、直立に近い高台を貼付けたものである。

156－４～８は回転糸切り後無調整の無台坏である。何れも体部の開きが大きく、身が浅い。体部は内湾する４、５と外反する６～８がある。６、７の口縁部は玉縁状を呈し特徴的である。

156－９は底部から体部下半の資料で、全形を知り得ないが、底部内面の状態や体部の形状から小型の壷状の器と推測される。底部は回転糸切りで、肥厚し柱状を呈する。

156－10の土師器長胴甕は火熱により調整が不明瞭であるが、縦方向のケズリが認められる。

これらの遺物から、９世紀中～後半代の所産と考えられる。

【SK647】第157図

27－189グリッドに位置する。SX648と重複し、SX648→SK647の新旧関係が認められる。平面形は長軸95㎝、短軸80㎝の楕円形を呈する。深さは約30㎝である。出土遺物は須恵器蓋３点、無台坏17点、有台坏１点、甕１点、黒色土器無台坏１点、甕24点である（第157図）。 157－1は焼成時の歪みが大きく、黒色の吹出しが見られる。天井部は小さく回転ヘラケズリされ、リング状つまみが付く。体部はロクロ目が顕著である。口縁端部は内側に折り込まれる。

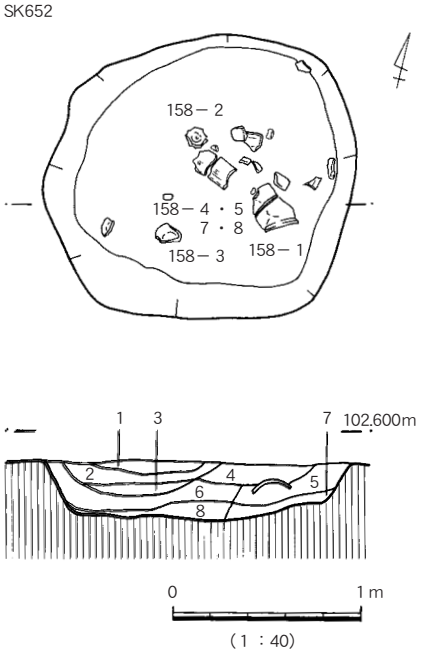
157－２にも焼成時の歪みがある。小振りで身が深い有台坏である。底部は回転糸切り後無調整で断面三角形の低い高台が貼付く。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。

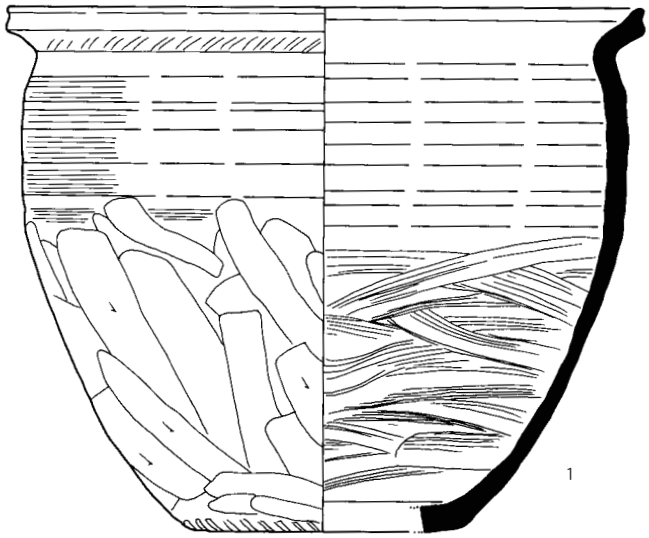
157－３～９は回転糸切り後無調整の無台坏である。口径、底径が小型化傾向にあり、幾分身が深い。体部はやや内湾し、口縁部は外反する。７の口縁端部は小さな玉縁状を呈する。

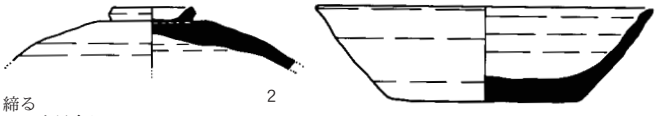
157－10は土師器坏としたが、他に類を見ない器形である。底部は回転糸切り後無調整である。体部は丸味を持ち、口縁部は特徴的にくびれ外反する。内外面ともロクロナデ調整である。

表60　SK652出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	1	須恵器	鉢	(250)	(110)	208	7	粗砂混入、骨針	良	N4/灰	ケズリ､ロクロナデ､カキメ	ロクロナデ、ナデ		
	2	須恵器	蓋				5	砂粒混入、骨針	良好	N5/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	3	須恵器	無台坏	132	76	37	4	粗砂混入	良	5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	土師器	皿	(140)			5	砂粒混入	良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
158	5	土師器	甕	(108)			5	細砂混入	良	7.5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	6	土師器	甕	(155)			5	砂粒混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	7	土師器	甕	(218)			5	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	8	土師器	塝	(332)			7	砂粒混入	良	5YR6/8橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	9	土師器	塝	(296)			5	粗砂混入	良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ハケメ		

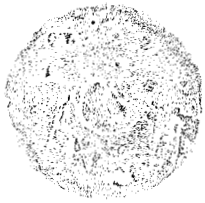


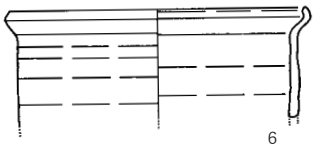


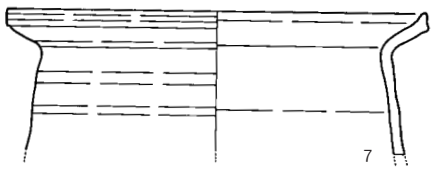


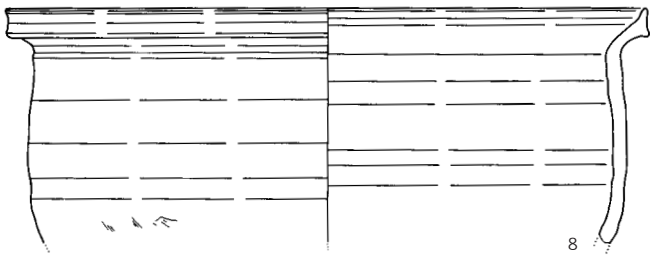
SK652

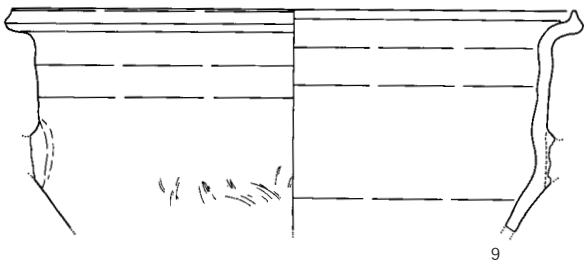
1	10YR２/３	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色シルトブロック少量含む、固く締る
2	10YR３/２	黒褐	シルト	炭化物、焼土粒、土器含む、黄褐色シルトブロック少量含む
3	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物、焼土ブロック少量含む、やわらかいが締る
4	10YR２/３	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色シルトブロック含む、固く締る
5	10YR２/３	黒褐	シルト	炭化物少量、焼土ブロック多量、黄褐色シルトブロック含む
6	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物、焼土粒少量含む、黄褐色シルト粒少量含む
7	10YR２/３	黒褐	シルト	炭化物多量、焼土粒、黄褐色シルト粒含む、やわらかい
8	10YR３/３	暗褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む、炭化物少量含む、固く締る

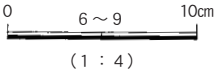


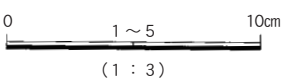












第158図　SB652　出土遺物

157－11は須恵器皿である。高台は欠損する。口縁部付近で肥厚し、端部は再び薄くなる。

157－12～14は土師器小型甕である。12の体部は肥厚し、外反した口縁部の端部を小さく摘まみ上げる。外面はケズリ調整される。13は直立する体部から短い口縁部が屈曲して摘み上げられる。14は強く屈曲した口縁部にシャープな面が作り出される。

これらの土器から、９世紀中～後半代の所産と考えられる。

【SK652】第158図

27－191グリッドに位置する。掘立柱建物跡群のほぼ中心にあり、標高は約101mである。平面形は長軸1.7m、短軸1.5mの楕円形を呈する。深さは約30㎝である。覆土には炭化物や焼土粒を含む。出土遺物は、須恵器蓋４点、無台坏43点、有台坏３点、長頸壷１点、鉢１点、黒色土器無台坏２点、土師器皿２点、甕80点等（第158図）があり、土坑中では多い方である。 158－１は須恵器鉢である。平底から内湾する体部が立ち上がり、中央部に最大径を有する。口縁部は「く」の字に屈曲し端部は上方に摘み出される。外面は、タタキ→カキメ(ロクロナデ)→ケズリの順で成形、調整される。内面はナデ調整である。

158－２は天井部の回転ヘラケズリが不十分なため、回転糸切りの痕跡も認められる。つまみは綾を持つリング状である。口縁部は全面が鱗状に欠損し、打ち欠かれたものと考えられる。

158－３はヘラ切り後ナデ調整された無台坏である。口径、底径は小さく、身はやや深めである。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。内外面に火襷が認められる。

158－４は土師器皿である。体部は内湾し、口縁部は強く屈曲する。焼成が甘く磨滅する。

158－５、６は土師器小型甕、７は長胴甕である。５は口縁部が短く屈曲し、端部を小さく摘まみ上げるもの。６は直立する体部から口縁部が屈曲し、端部が内傾するものである。７の体部は開き、口縁部は長く屈曲する。端部は上方に摘み上げられる。

158－８、９は土師器堝である。８の体部は内湾し、口縁部は弱く外反する。端部は上方に摘み出される。９は欠損しているものの、体部外面に把手が貼付けられたものである。横長の長楕円形の接合面が残る。体部は把手の上方が直立し、下方は内傾する。下半部はケズリ調整が施される。口縁部は強く屈曲し、端部は上方へ細く摘み上げられる。

【SK9015】第159図

41・42－258・259グリッドに位置する。段丘下段にあり、標高は約100.4mである。平面形は長軸3.2m、短軸2.7mの楕円形を呈する。深さは約1.7mである。覆土は、黒褐色シルトの他、粘性が強くグライ化したシルト等をレンズ状に堆積する。出土する遺物は古代に属するもの

表61　SK9015出土土器観察表

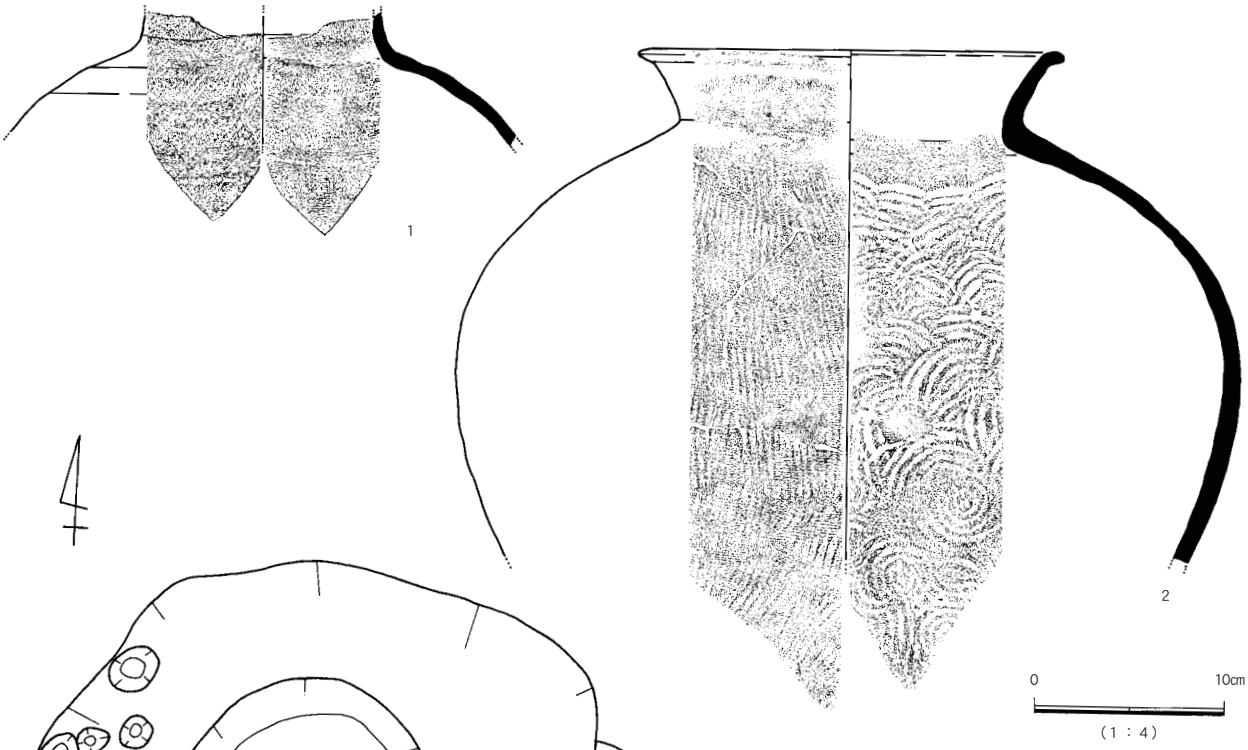
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
159	1	須恵器	壷				6	細砂混入	良	7.5YR4/1褐灰	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ、ハケメ		
	2	須恵器	甕	224			7	砂粒混入	良好	2.5YR3/4暗赤褐	タタキ、カキメ	アテ痕		

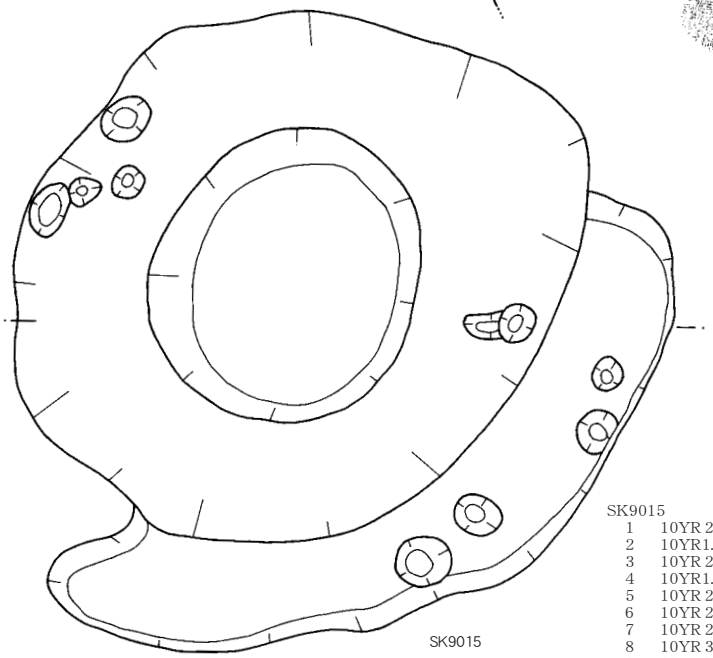
表62　SK9018出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
160	1	土師器	甕	(168)	83	162	4	砂粒混入	良	10YR7/3にぶい黄橙	ケズリ	ハケメ	ケズリ	

表63　SK9020出土土器観察表

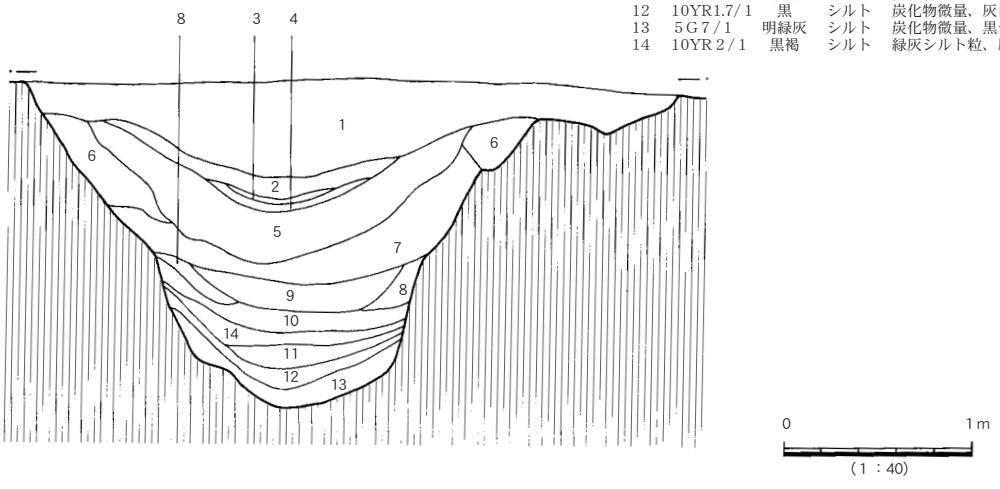
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
160	2	土師器	甕	120	62	105	6	砂粒混入、骨針	良	2.5YR7/8橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	土師器	甕	140	78	132	4	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	





SK9015

1	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色シルトブロック微量含む、固く締る
2	10YR1.7/１	黒	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む。やわらかく締りない
3	10YR２/２	黒褐	シルト	黒色シルトブロック少量、黄褐色粒含む、固く締る
4	10YR1.7/１	黒	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、やわらかく締りない
5	10YR２/３	黒褐	シルト	黒色シルトブロック、黄褐色シルト粒少量含む
6	10YR２/３	黒褐	シルト	黄褐色粒多量含む、固く締る
7	10YR２/３	黒褐	シルト	黒色、黄褐色シルトブロック、暗褐色シルト粒多量含む
8	10YR３/４	黒褐	シルト	黒色、黄褐色、灰黄褐色シルト粒少量含む、弱い粘性
9	10YR1.7/１	黒	シルト	灰白、黄褐シルトブロック少量含む、弱い粘性、やわらかい
10	５G７/１	明緑灰	シルト	暗灰、黄色シルトブロック多量含む、強い粘性、やわらかい
11	10YR２/２	暗褐	シルト	炭化物、灰白シルトブロック含む、強い粘性、やわらかい
12	10YR1.7/１	黒	シルト	炭化物微量、灰白シルトブロック多量含む、強い粘性
13	５G７/１	明緑灰	シルト	炭化物微量、黒色シルトブロック多量含む、強い粘性
14	10YR２/１	黒褐	シルト	緑灰シルト粒、灰白シルト粒少量含む、強い粘性



第159図　SK9015　出土遺物

のみであるが、立地する地形や周辺に見られる遺構の状態、そして遺構の形態等から中世に所属する井戸跡の可能性も考えられる。出土遺物は、須恵器短頸壷１点、長頸壷１点、甕２点、土師器無台坏５点である（第159図）。

159－１は撫で肩の短頸壷である。頸部は直立するが上端を欠く。外面はタタキ後ロクロナデされ、内面はカキメ状の細かいハケメが施される。

159－２の甕は体部が大きく張り球胴状を呈する。外反する頸部から口縁部が外側に引き出される。体部外面はタタキ後カキメが入れられる。内面には同心円のアテ痕が明瞭に残る。

【SK9018】第160図

38・39－236グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。周辺は遺構の密度が薄い。平面形は、径約1.8mのほぼ円形を呈する。深さは最深部で1.3mである。壁は10°前後の急角度である。底は南から北へ緩い傾斜を持ち、平坦ではない。出土遺物は、須恵器無台坏３点、土師器甕５点である。

160－１は、最大径を体部中央やや上位に有する。頸部は「く」の字に屈曲し口縁端部は上方に摘み出される。体部外面及び底部はケズリ調整、内面はハケメが施される。

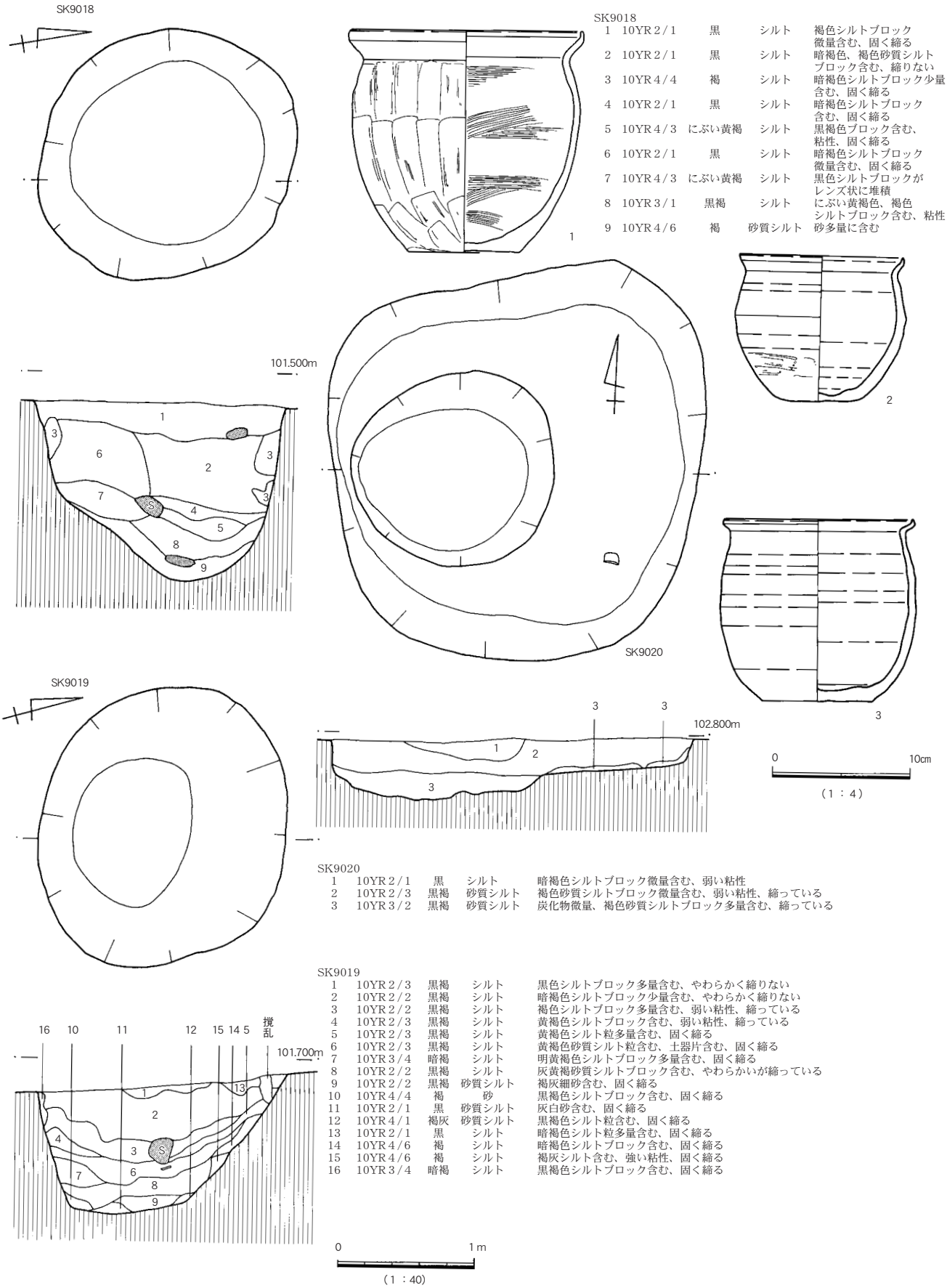
【SK9019】第160図

35－237・238グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。この地区一帯は黒色シルトが堆積していた場所ということもあり、周辺の遺構は極めて少ない。平面形は、長軸2.0m、短軸1.8mの楕円形である。深さは0.9mである。壁の傾斜は、南が約10°であるのに対し、北は緩く約40°である。底面は長軸1.1m、短軸0.8mの楕円形で平坦である。覆土は、黒褐色のシルトを主とし、レンズ状に堆積する。遺構内からの出土遺物はない。

【SK9020】第160図

37・38－255・256グリッドに位置する。段丘上段に立地し、標高は約101.8mである。周辺の遺構密度は希薄である。平面形は、長軸2.8m、短軸2.6mの楕円形である。底面には西側に寄ってもう１段の掘り込みがある。２段目の掘り込みは、長軸は1.5m、短軸は1.4mを測る楕円形である。深さは浅い方で0.2m、２段目の深い方で0.4mである。東西の壁は垂直に近い角度であるが、南北は30°程の傾斜である。覆土は３層からなり、炭化物等を含む黒褐色の砂質シルトが単純な堆積を見せる。出土遺物は、土師器甕５点の他に縄文土器14点が出土している。

160－２、３は土師器小型甕である。２の底部はヘラ切りで、切り離し後外周部がヘラケズリ調整され、さらにナデが施される。体部は丸味を持ち、最大径を中央部に置く。頸部は小さく屈曲し、口縁端部は上方に細く、小さく摘み上げられる。体部外面下半は横方向のケズリ調整が入れられる。上半部はロクロナデによる器面の凹凸が顕著に見られる。体部下半から底部にかけて肥厚し、見た目より重量感がある。３は火熱により器面が荒れ、詳細な調整痕は不明である。底部はヘラ切りで、切り離し後にナデ調整がとられたものと考えられる。体部は上下の絞り込みが小さく、寸胴型である。最大径は、中央よりやや下方にある。頸部は短く屈曲し、口縁端部は僅かに摘み上げられる。体部外面にはロクロナデによる凹凸が認められる。器厚は全体的に薄手である。



SK9018

1	10YR2/1	黒	シルト	褐色シルトブロック微量含む、固く締る
2	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色、褐色砂質シルトブロック含む、締りない
3	10YR4/4	褐	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固く締る
4	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック含む、固く締る
5	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	黒褐色ブロック含む、粘性、固く締る
6	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック微量含む、固く締る
7	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	黒色シルトブロックがレンズ状に堆積
8	10YR3/1	黒褐	シルト	にぶい黄褐色、褐色シルトブロック含む、粘性
9	10YR4/6	褐	砂質シルト	砂多量に含む

SK9020

1	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック微量含む、弱い粘性
2	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色砂質シルトブロック微量含む、弱い粘性、締っている
3	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	炭化物微量、褐色砂質シルトブロック多量含む、締っている

SK9019

1	10YR2/3	黒褐	シルト	黒色シルトブロック多量含む、やわらかく締りない
2	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、やわらかく締りない
3	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロック多量含む、弱い粘性、締っている
4	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、弱い粘性、締っている
5	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
6	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色砂質シルト粒含む、土器片含む、固く締る
7	10YR3/4	暗褐	シルト	明黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
8	10YR2/2	黒褐	シルト	灰黄褐砂質シルトブロック含む、やわらかいが締っている
9	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	褐灰細砂含む、固く締る
10	10YR4/4	褐	砂	黒褐色シルトブロック含む、固く締る
11	10YR2/1	黒	砂質シルト	灰白砂含む、固く締る
12	10YR4/1	褐灰	砂質シルト	黒褐色シルト粒含む、固く締る
13	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルト粒多量含む、固く締る
14	10YR4/6	褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む、固く締る
15	10YR4/6	褐	シルト	褐灰シルト含む、強い粘性、固く締る
16	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、固く締る

第160図　SK9018、9019、9020

【SK9324】第161図

37・38－258グリッドに位置する。段丘上段に立地し、標高は約101.8mである。周辺の遺構は希薄で、最も近いST9011でも北東へ約７mの距離がある。平面形は、長軸2.1m、短軸1.9mの楕円形を呈する。深さは約0.9mである。壁は、開口部西側の崩落した一部を除いて、約15°の傾斜を持つ。底面はほぼ平坦で、長軸1.3m、短軸1.0mの楕円形である。覆土は、炭化物や黄褐色シルトを混入する黒褐色シルトを主とし、レンズ状の堆積を見せる。

出土遺物は、須恵器蓋１点、無台坏10点、有台坏５点、長頸壷１点、甕５点、土師器無台坏５点、有台坏１点、甕91点の他縄文土器１点が出土している。

161－１～３、５はヘラ切りの須恵器無台坏である。切り離し後はナデ調整が施される。１は口径、底径が大きく、身が浅い。体部はやや丸味を持ち、口縁部は僅かに外反する。２は口径が小さく、相対的に身が深い。体部の立ち上がりは直線的である。器厚は全体的に厚い。内面は使用痕が顕著である。３の体部は内湾し、２と同様に相対的に身が深い。５は体部が直線的で、底部との境も明瞭である。焼成不良で器面が磨滅しているため不明瞭であるが、底部外周に調整痕が認められ、有台坏の高台が剥離したことも考えられる。

161－４、６～８はヘラ切りの有台坏である。４は体部の開きが小さく、口縁部は外反する。６は底径が大きく、断面が三角形の低い高台が貼付けられる。７は体部が丸味を持って立ち上がる。８は断面が四角の低い高台が貼付けられたものである。

161－９は壷の底部と考えられる。「ハ」の字に開いた低い高台が貼付けられる。高台外端部は外側に摘み出され、内端部が接地する。内面には灰被りが認められる。

口径、底径にやや小型化の傾向が見え始める無台坏や有台坏の様相などから、8世紀中頃以降の資料と考えられる。

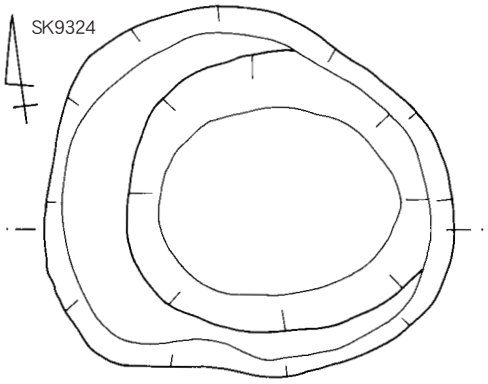
【SK524】第162図

31－201グリッドに位置する。段丘上段に立地し、標高は約101.8mである。周辺の遺構は希薄であるが、SK9604(第164図)やSK9505が隣接する。また、北へ約10mの地点にはST9816がある。平面形は、長軸2.8m、短軸2.4mの不整楕円形を呈する。北東部は撹乱により大きく抉られる。底面は２段掘り込みで、１段目が径約1.5mのほぼ円形、２段目も径約0.4mの円形である。壁の傾斜は比較的緩やかで、30°前後である。覆土は、褐色の砂質シルトを混入する黒褐色の砂質シルトで、自然堆積である。締まりはよくない。

５点の須恵器甕片が出土している。

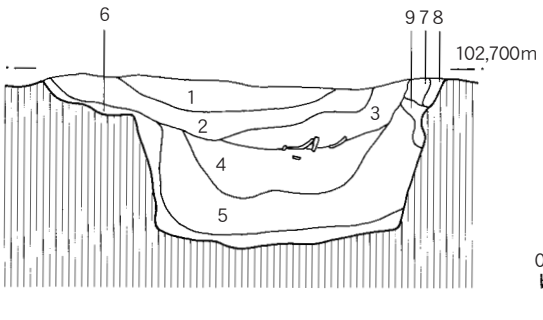
表64　SK9324出土土器観察表

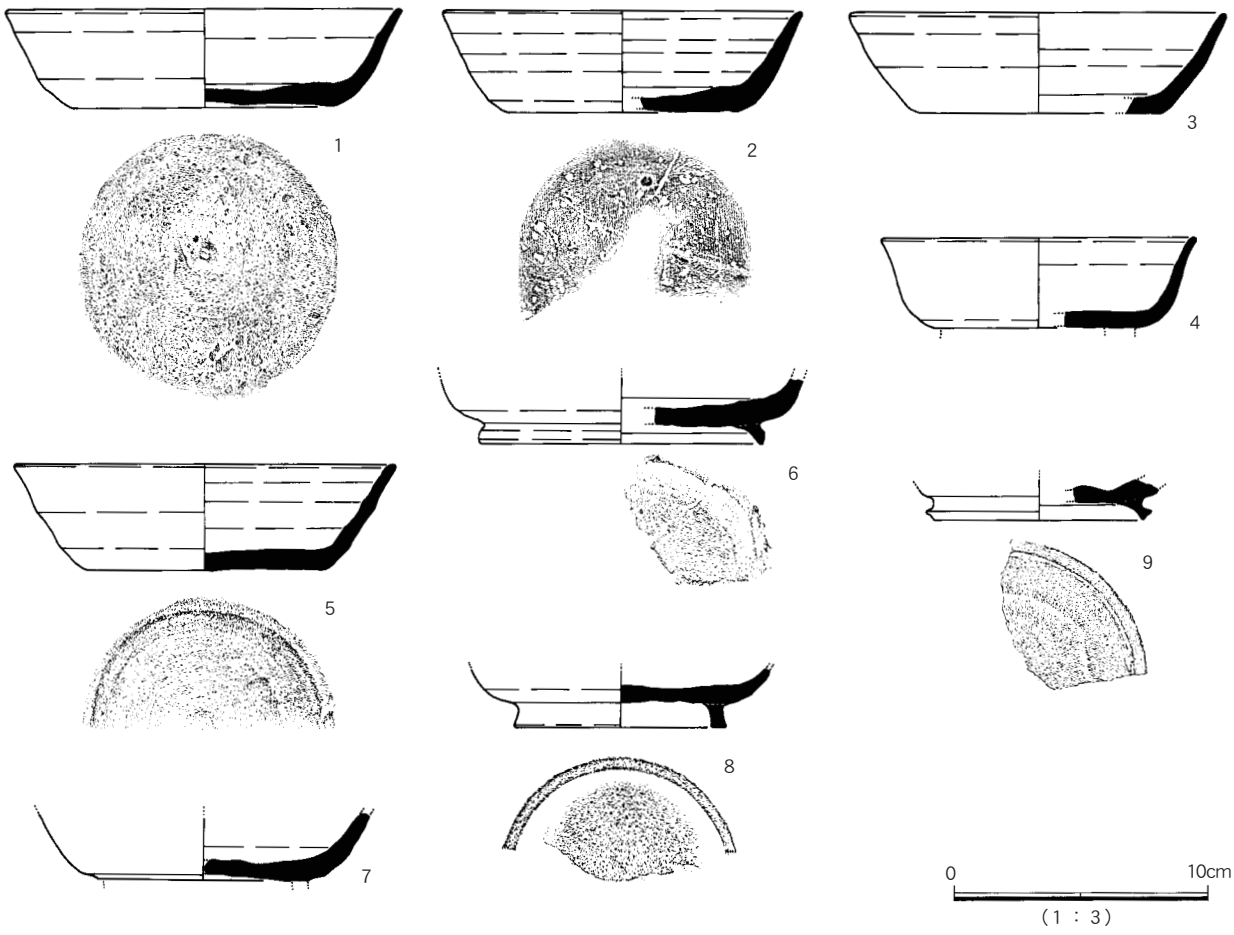
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
161	1	須恵器	無台坏	156	104	39	4.5	粗砂混入	良	2.5YR8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	2	須恵器	無台坏	142	90	40	5.5	砂粒混入、骨針	良	7.5YR8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	須恵器	無台坏	(148)	(95)	40	5	粗砂混入	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	有台坏	(124)			4	砂粒混入、骨針	良	5YR4/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	5	須恵器	無台坏	(150)	94	42	5	粗砂混入	不良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	6	須恵器	有台坏		(110)		7	砂粒混入、骨針	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	7	須恵器	有台坏				6	粗砂混入	不良	2.5YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	8	須恵器	有台坏		84		5	砂粒混入	良	7.5YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	9	須恵器	壷		(110)		7	細砂混入	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	



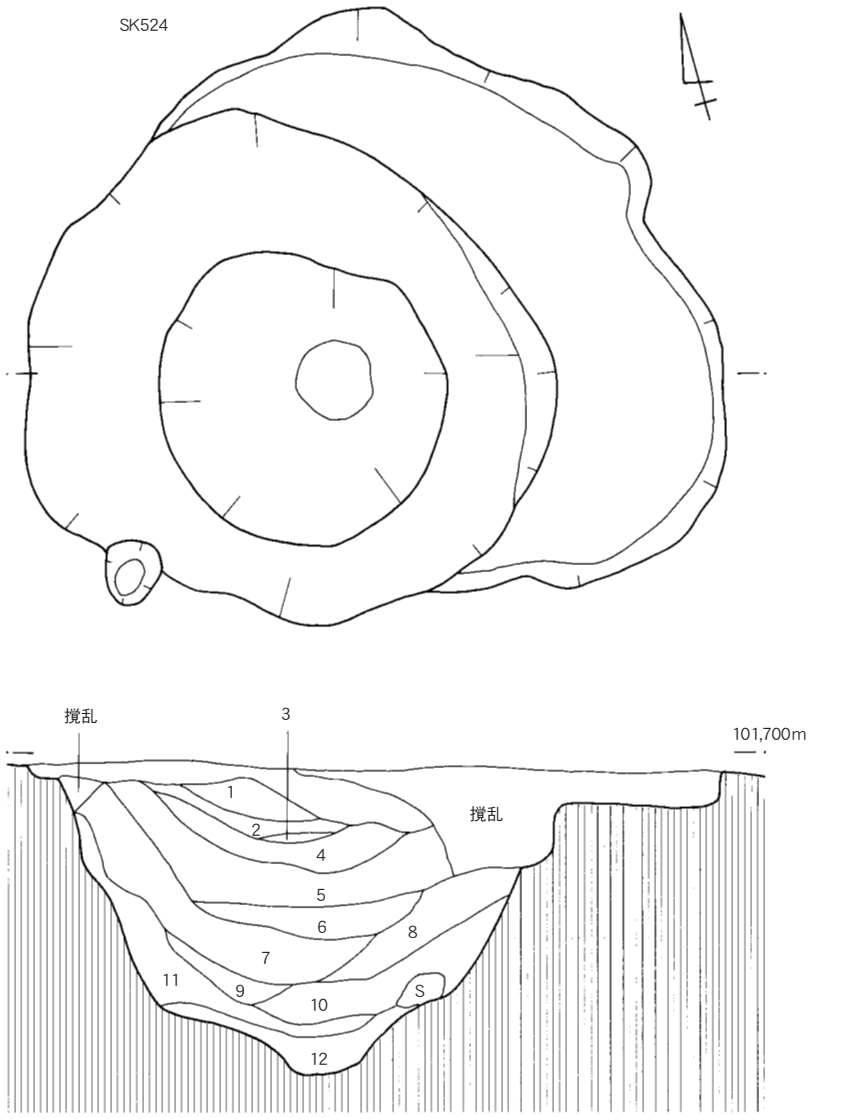
SK9324

1	10YR2/3	黒褐	シルト	撹乱、炭化物、褐色細砂、黒褐色シルトブロック含む
2	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック、炭化物少量含む、固く締る
3	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化物、土器含む、黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
4	10YR2/1	黒	シルト	炭化物少量、黄褐色シルト粒少量含む、やわらかいが締る
5	10YR2/1	黒	シルト	炭化物少量、黒褐色シルトブロック、黄褐色シルト粒含む
6	10YR5/8	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック、黒色シルトを縞状に含む
7	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック、黄褐色シルト粒含む、固く締る
8	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色、黒褐色シルトブロック微量含む、固く締る
9	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色細砂ブロック多量含む、やわらかく締りない





第161図　SK9324　出土遺物



SK524

1	10YR２/１	黒	粘土	暗褐色の砂質シルト粒少量含む、固く締る
2	10YR２/１	黒	シルト	粉末状の炭化物が層をなして含む、締りない
3	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	ほぼ均質
4	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	３cm大の炭粒を含む
5	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	暗褐色砂質シルト粒含む
6	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色砂質シルト粒（大）含む
7	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	褐色砂質シルトブロック微量含む、粒状の酸化鉄下部に分布
8	10YR３/４	暗褐	砂質シルト	砂質強く、締りない
9	10YR４/６	褐	砂質シルト	黒褐色砂質シルトを斑状に微量含む
10	10YR４/６	褐	砂質シルト	黒褐色砂質シルトを斑状に含む
11	10YR４/６	褐	砂	黒褐色砂質シルトブロック含む
12	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	暗褐色砂質シルトを縞状に含む、粒状の酸化鉄分布

0　1m
（1：40）

第162図　SK524

【SK9330】第163図

35－259・260グリッドに位置する。段丘上段の平坦地に立地し、標高は約101.8ｍである。周辺には土坑、溝跡が数基検出されたが、密度は薄い。

平面形は、長軸1.1ｍ、短軸0.8ｍの長楕円形を呈する。底面は２段になるため、深さは浅い方で0.7ｍ、深い方で0.9ｍである。壁はほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は、暗褐色砂質シルトを含む黒色シルトを主とする自然堆積で、堅く締る。

遺物は出土していない。

【SK9337】第163図

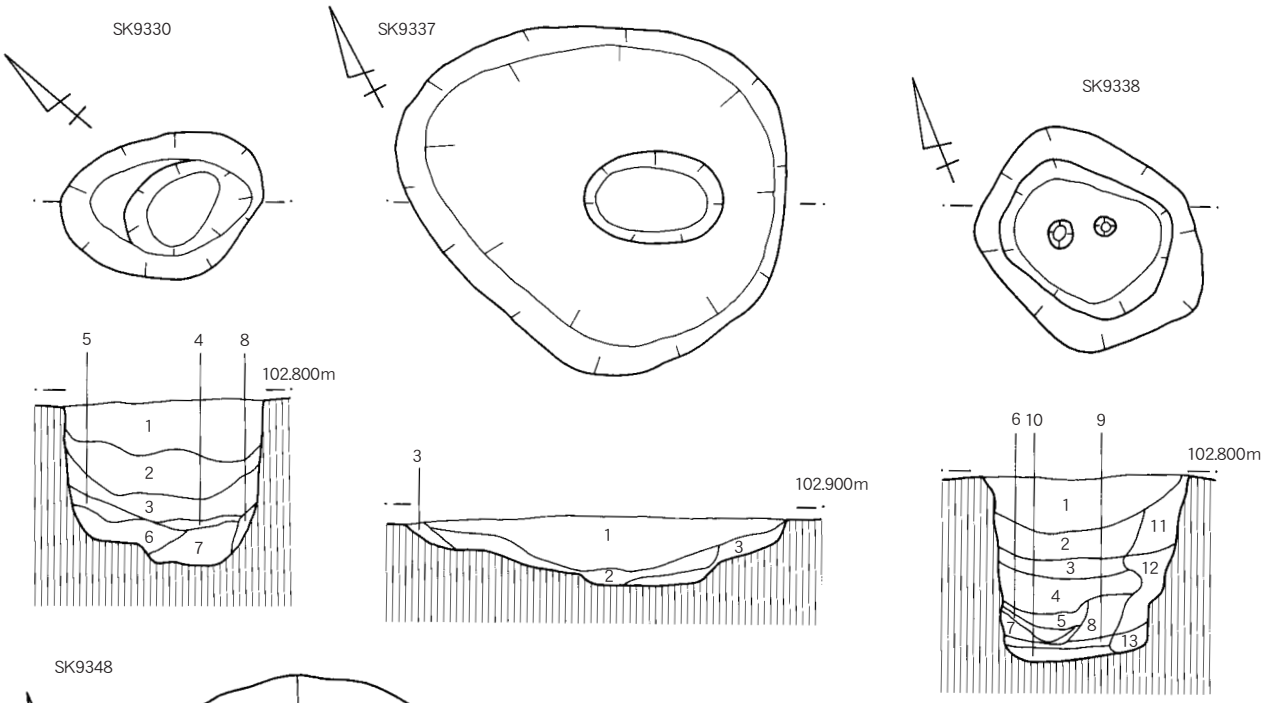
37－260・261グリッドに位置する。段丘上段の平坦地に立地し、標高は約101.8ｍである。周辺には溝、土坑を始め、約５ｍ南にST9008がある。

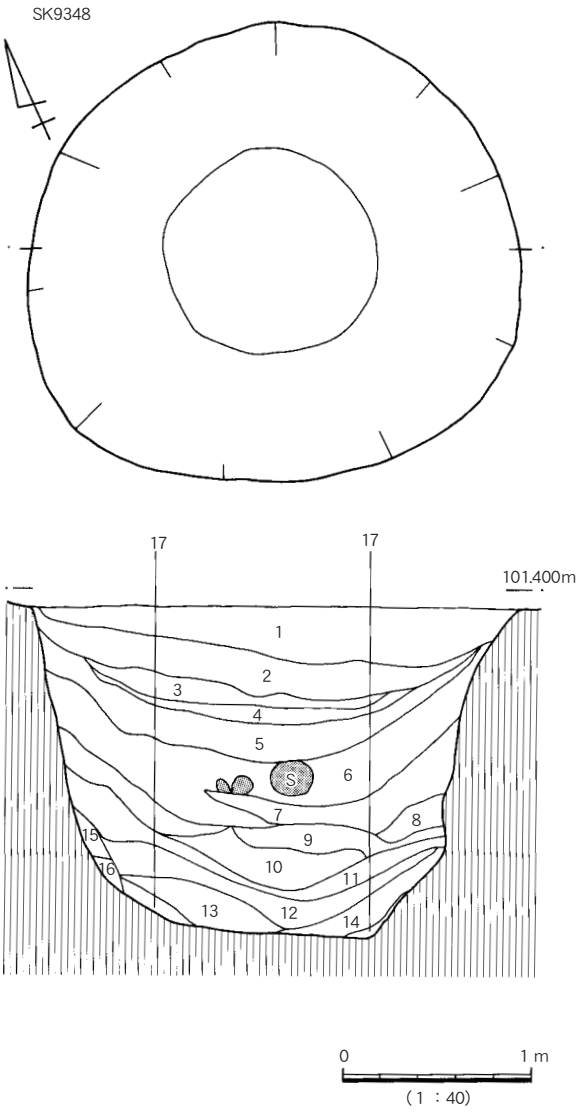
平面形は、長軸2.1ｍ、短軸1.7ｍの楕円形を呈する。深さは0.4ｍである。壁は緩やかな所が多く、20～50°の角度である。底面は平坦ではなく、約80°の傾斜がある。覆土は暗褐色の砂質シルトの自然堆積で、堅く締る。出土遺物はない。

【SK9338】第163図

37・38－260・261グリッドに位置する。段丘上段の平坦面に立地し、標高は約101.8ｍである。北側３ｍの地点にSK9337、南側３ｍの地点にST9008等があるが、遺構の密度は薄い。

平面形は、長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍの長楕円形であるが、崩落した上部を除くと、隅丸の長方





SK9330

1	10YR 2 / 1	黒	シルト	暗褐色砂質シルトブロック微量含む、固く締る
2	10YR 2 / 1	黒	シルト	暗褐色砂質シルトを縞状に含む
3	10YR 3 / 3	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む
4	10YR 2 / 2	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルトブロック少量含む
5	10YR 2 / 1	黒	シルト	暗褐色砂質シルトブロック少量含む
6	10YR 3 / 4	暗褐	砂質シルト	黒褐色シルトを縞状に含む
7	10YR 2 / 3	黒褐	砂質シルト	黒色、暗褐色砂質シルトブロック少量含む
8	10YR 4 / 4	褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック微量含む、崩落土

SK9337

1	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
2	10YR 3 / 4	暗褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック（大）含む、固く締る
3	10YR 3 / 3	暗褐	砂質シルト	褐色細砂含む、固く締る

SK9338

1	10YR 2 / 2	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒、ブロック含む、固く締る
2	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒、ブロック含む、やわらかいが締っている
3	10YR 2 / 2	黒褐	シルト	黒色、暗褐色シルトブロック含む、やわらかく締っていない
4	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	黄褐色砂質シルトブロック、黄褐色シルト含む、固く締る
5	10YR 3 / 4	暗褐	砂質シルト	黒色シルトブロック（大）含む、固く締る
6	10YR 2 / 2	黒褐	シルト	黒色シルト、黄褐色シルト粒含む、やわらかいが締っている
7	10YR 3 / 4	暗褐	砂質シルト	黒色シルト、黒褐色シルトブロック含む、やわらかい
8	10YR 4 / 6	褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固く締る
9	10YR 2 / 1	黒	シルト	褐色細砂、炭化物含む、やわらかい
10	10YR 3 / 4	暗褐	シルト	黒褐色、黄褐色シルト粒含む、固く締る
11	10YR 3 / 4	暗褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固く締る
12	10YR 4 / 6	褐	砂質シルト	褐色シルトブロック少量含む、固く締る
13	10YR 3 / 4	暗褐	シルト	黒褐色シルト粒微量含む、弱い粘性、固く締る

SK9348

1	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	炭化粒微量、黄褐色シルトブロック（中）含む、固く締る
2	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	炭化粒微量、黄褐色シルトブロック含む、固く締る
3	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	黄褐色、黒色シルトブロック含む、固く締る
4	10YR 2 / 3	黒褐	粗砂	黄褐色、黒色シルトブロック微量含む
5	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒含む
6	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	黄褐色シルトを板状に含む、固く締る
7	10YR 3 / 3	暗褐	シルト	黒褐色、黄褐色シルトブロック含む、固く締る
8	10YR 5 / 3	にぶい黄褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、明褐色シルトを板状に含む
9	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、明褐色細砂板状に含む
10	2.5Y 5 / 2	暗灰黄	シルト	褐灰、灰白シルトブロック含む、赤褐色シルト微量含む
11	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	にぶい黄橙色細砂ブロック（大）少量含む、固く締る
12	10YR 4 / 1	褐灰	シルト	黒褐色、灰黄褐色シルトを板状に含む、赤褐色粗砂含む
13	2.5Y 4 / 1	黄灰	シルト	黒褐色、暗灰黄色シルトブロック含む
14	10YR 2 / 3	黒褐	シルト	赤褐色粗砂、シルトをブロック状に含む
15	7.5YR 3 / 1	黒褐	礫	固く締る
16	10YR 7 / 2	にぶい黄橙	細砂	赤褐色シルトブロック含む、固く締る
17	7.5YR 3 / 1	黒褐	礫	にぶい黄橙シルトブロック（大）含む、固く締る

第163図　SK9330、SK9337、SK9338、SK9348

形を呈する。深さは約1.0mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれる。底面に傾斜は無く、平坦であるが、中央部には径10cm前後の逆茂木の痕跡と考えられる小穴を２基検出している。覆土は暗褐色または黒褐色のシルトを主とする自然堆積で、堅く締る。２期調査の14区で検出されたSK4019、4219等11基が並ぶ陥し穴に続くものと推定される。前述したSK9330もその中間地点にあり、逆茂木の痕跡は確認できなかったが、形態的にも類似し、陥し穴と推測される。遺物は出土していない。２期調査時も遺物の出土がなく、他の遺跡の類例により、縄文前期初頭から中期の間の所産としている。

【SK9348】第163図

43・44－233グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。周辺には中世に所属すると考えられる小柱穴が多数検出されている。また、この付近から南東方向へ約40mの範囲で縄文時代の遺構や遺物が分布する。

平面形は、長軸2.6m、短軸2.4mの楕円形である。深さは1.7mを測る。壁の傾斜は10°前後で、垂直に近い角度である。覆土は黄褐色シルトをブロック状に混入する黒褐色のシルトを主とした自然堆積で、堅く締る。出土遺物は、須恵器無台坏１点、甕３点、土師器甕２点、中世陶器１点である。

本遺構の土層中、14層(黒褐色シルト)について珪藻化石、花粉化石並びに植物珪酸体の分析を行っている。詳細については付編を参照されたいが、分析結果では、花粉化石は良好な資料が得られず、植物珪酸体についてもイネの機動細胞珪酸体他が検出されているが、個数としては少なく、稲籾等が貯蔵されたものではないと報告されている。また、珪藻化石からは、ジメジメとしているが比較的水分が少なく、密閉された状態ではなかったことが推定されている。本遺構は、中世に所属する可能性が高いが、上記のように、稲類の貯蔵穴でも井戸でもないことが判明したが用途については不明である。

【SK9596】第164図

41－209グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。10m程の距離を置き、南にはSB206、824、北にはSB9750等の中世の掘立柱建物跡がある。SD9584と重複し、SD9584→SK9596の新旧関係にある。平面形は、長軸2.3m、短軸2.0mの楕円形である。深さは0.7mを測る。壁は垂直に近く、オーバーハングする所も見られる。底面は傾斜し、平坦ではない。覆土は黒褐色のシルトを主とし、堅く締る。出土遺物は、須恵器長頸壷１点、甕２点、中世陶器１点である。中世に所属する可能性が高い。

表65　SK9604出土土器観察表

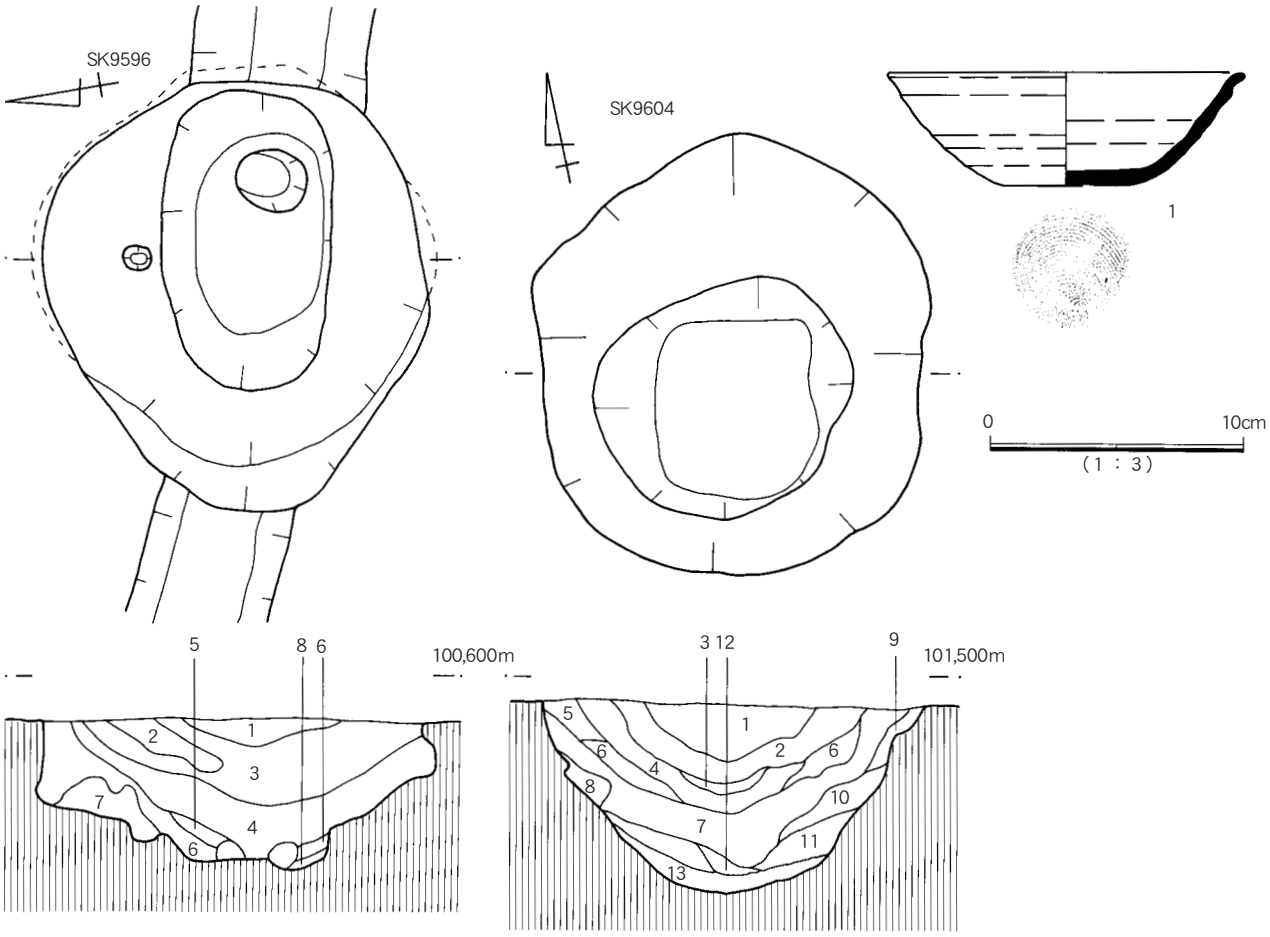
挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
164	1 須恵器	無台坏	140	48	45	4	粗砂混入	良	5Y8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	

表66　SK9605出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
165	1 須恵器	甕			10		砂粒混入	良好	N2/黒	タタキ	アテ痕		

表67　SK9613出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
165	3 須恵器	蓋	138		36	7	粗砂混入	良好	N5/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		
	4 土師器	塝	350	84	210	8	砂粒混入	良好	5YR7/6橙	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ ｹｽﾞﾘ	ロクロナデ、ハケメ		



SK9596

1	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む、固く締る
2	10YR2/2	黒褐	シルト	ほぼ均質、固く締る
3	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒を斑状に少量含む、固く締る
4	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒を斑状に少量含む、固く締る
5	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色、にぶい黄褐色シルトを斑状に含む、固く締る
6	10YR3/4	暗褐	シルト	ほぼ均質、固く締る
7	10YR4/4	褐	シルト	ほぼ均質、粘性、固く締る
8	10YR2/3	黒褐	シルト	ほぼ均質、固く締る

SK9597

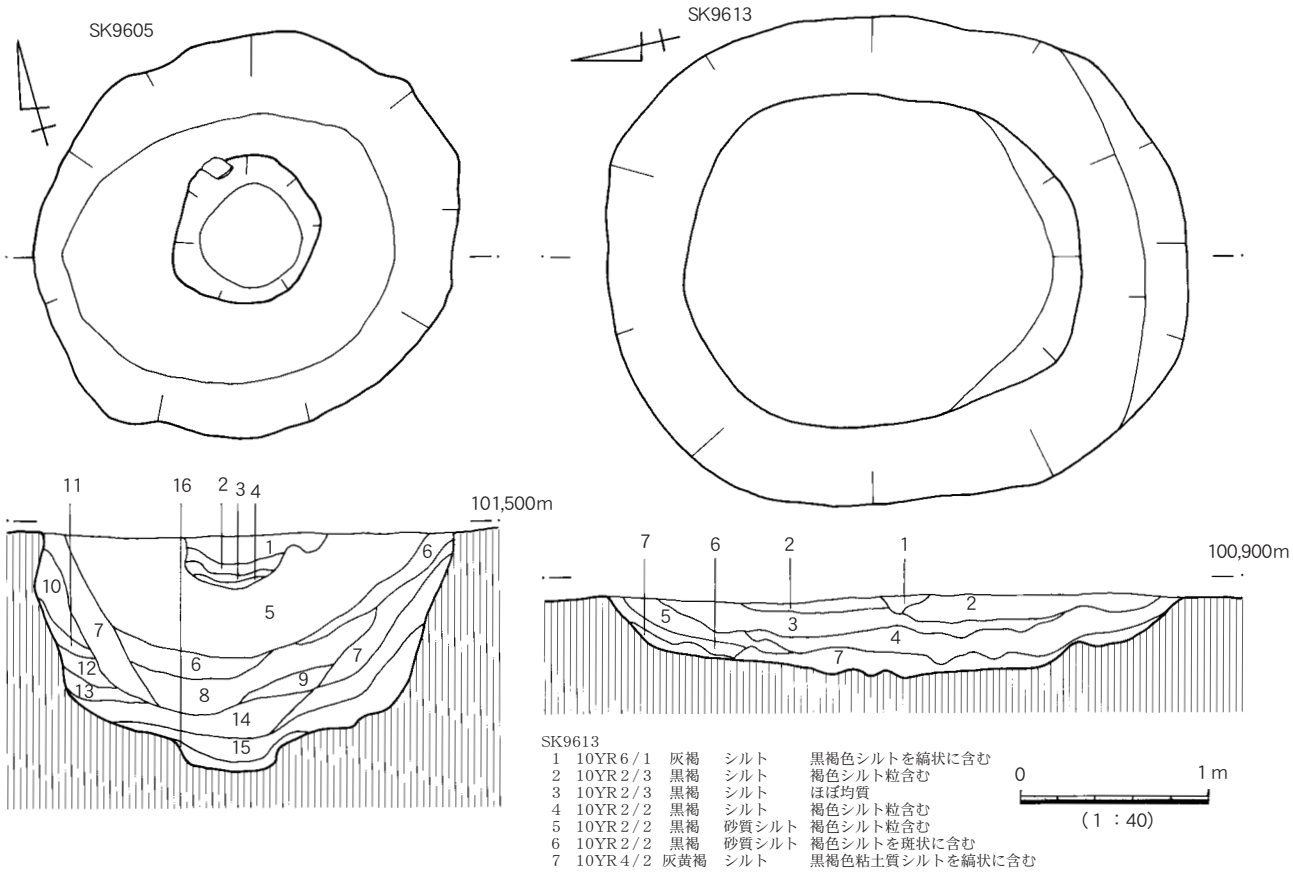
1	10YR2/1	黒	シルト	締りない
2	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色砂質シルト粒多量含む
3	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色砂質シルト粒少量含む
4	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色砂質シルト粒多量含む
5	10YR2/1	黒褐	シルト	にぶい黄褐色粘質シルトブロック含む
6	10YR2/1	黒褐	シルト	ほぼ均質
7	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト	ほぼ均質、粘性
8	10YR3/4	暗褐	砂	黒色シルトを縞状に微量含む

SK9604

1	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト微量含む
2	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	均質
3	10YR3/4	暗褐	シルト	炭化物含む
4	10YR2/3	黒褐	シルト	均質
5	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む
6	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	均質
7	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒、細砂含む
8	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色シルトを縞状に多量含む
9	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒含む
10	10YR2/2	黒褐	細砂	褐色シルトを斑状に含む
11	10YR4/8	褐	微砂	黒褐色シルトを縞状に微量含む
12	10YR2/3	黒褐	微砂	炭化物、褐色シルト粒含む
13	10YR2/3	黒褐	細砂	褐色粘土を斑状に含む

0 1 m
(1 : 40)

第164図　SK9596、SK9597、SK9604　出土遺物

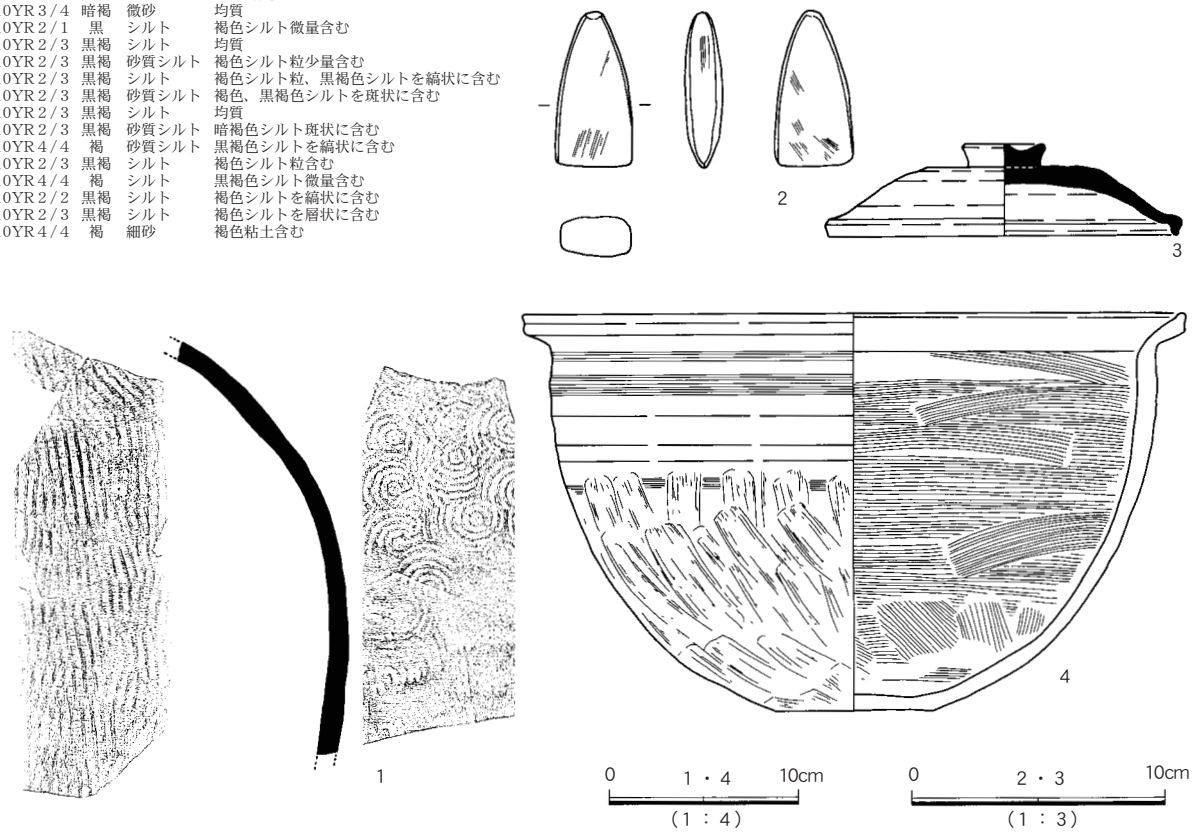


SK9613

1	10YR6/1	灰褐	シルト	黒褐色シルトを縞状に含む
2	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む
3	10YR2/3	黒褐	シルト	ほぼ均質
4	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む
5	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒含む
6	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	褐色シルトを斑状に含む
7	10YR4/2	灰黄褐	シルト	黒褐色粘土質シルトを縞状に含む

SK9605

1	10YR2/3	黒褐	シルト	黒色、暗褐色シルトを縞状に含む
2	10YR2/3	黒褐	シルト	ほぼ均質
3	10YR3/4	暗褐	微砂	均質
4	10YR2/1	黒	シルト	褐色シルト微量含む
5	10YR2/3	黒褐	シルト	均質
6	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒少量含む
7	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒、黒褐色シルトを縞状に含む
8	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色、黒褐色シルトを斑状に含む
9	10YR2/3	黒褐	シルト	均質
10	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	暗褐色シルト斑状に含む
11	10YR4/4	褐	砂質シルト	黒褐色シルトを縞状に含む
12	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む
13	10YR4/4	褐	シルト	黒褐色シルト微量含む
14	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルトを縞状に含む
15	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトを層状に含む
16	10YR4/4	褐	細砂	褐色粘土含む



第165図　SK9605、SK9613　出土遺物

【SK9597】第164図

38・39－209・210グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2mである。平面形は、長軸2.7m、短軸2.5mの楕円形を呈する。深さは約0.9mである。壁は10°前後の傾斜を持つ。底面は平坦ではなく、約60°の緩い角度で傾斜し擂鉢状を呈する。覆土は砂質のシルトを含む黒または黒褐色のシルトが主である。自然堆積で堅く締る。出土遺物は、須恵器無台坏１点、長頸壷２点、甕１点である。中世に所属する遺物は出土していないが、周辺の遺構との状況からSB 9750に付属する中世の遺構の可能性が高い。

【SK9604】第164図

32－201グリッドに位置する。段丘の落ち際に立地し、標高は約101.4mである。平面形は、長軸2.4m、短軸2.0mの楕円形を呈する。深さは約1.0mである。壁は約30°の傾斜を持つ。底面は一辺が約90cmの方形を呈するが、平坦ではない。覆土は上層から中層に黒褐色シルト、下層に細砂が入り、レンズ状に堆積する。出土遺物は須恵器無台坏１点（164－１）である。

164－1は回転糸切り後無調整の底部から内湾する体部が立ち上がり、小さく外反する口縁部に至る。口縁部直下に、ロクロナデによる強い凹凸が作り出される。

【SK9605】第165図

30・31－200グリッドに位置する。段丘上段に立地し、標高は約101.4mである。SK524、9604に隣接する。平面形は、長軸2.3m、短軸2.0mの楕円形を呈する。底面は２段に掘り込まれ、最深部で約1.3mを測る。壁の傾斜は約20°である。覆土は、褐色シルトを含む黒褐色シルトを主とする自然堆積である。出土遺物は須恵器甕１点（165－１）、土師器甕４点である。

165－１は甕の肩部である。外面は平行タタキで、灰被りがある。内面は同心円のアテ痕が残るが、体部付近ではアテの後に横方向のナデ調整が入れられる。

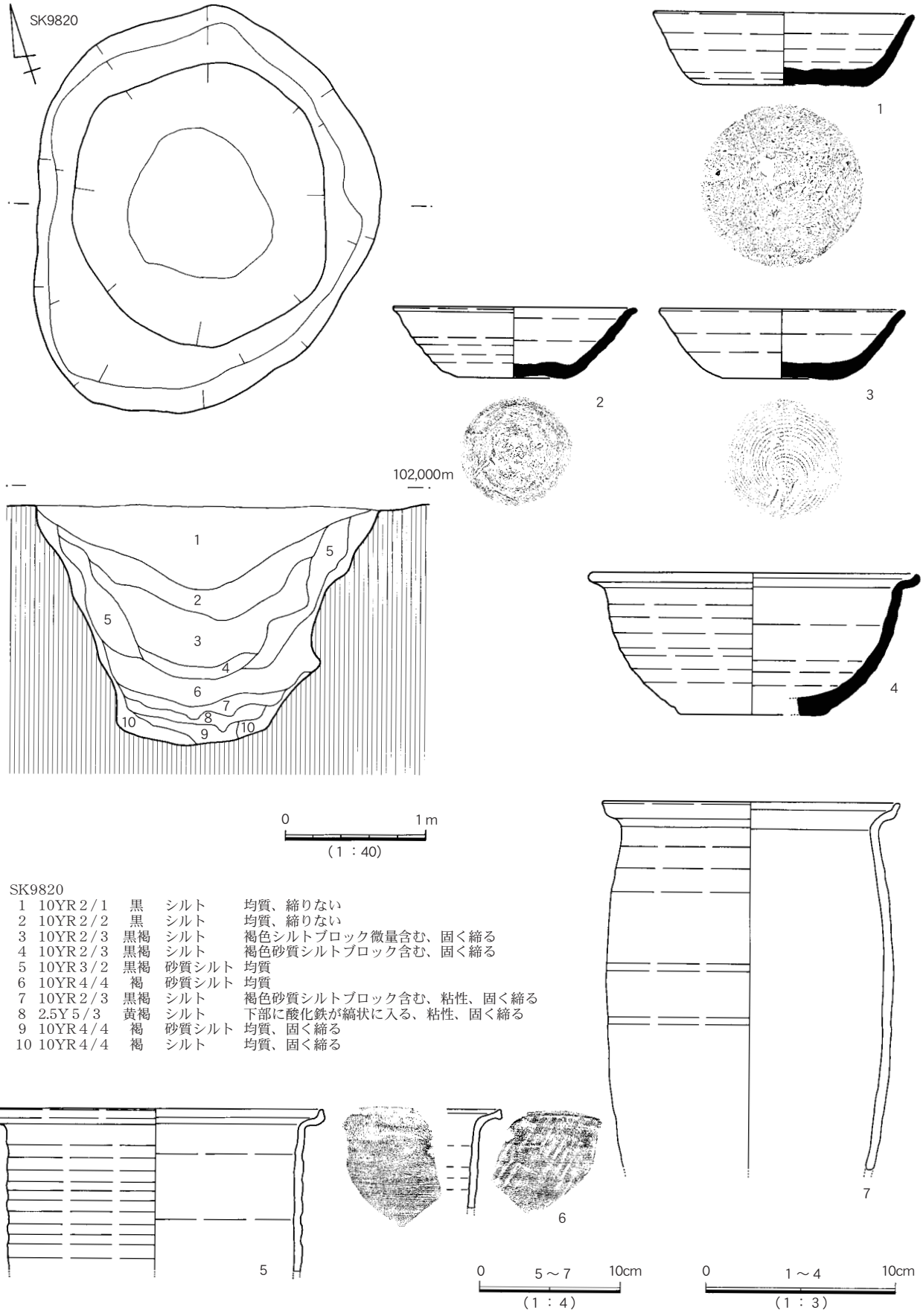
【SK9613】第165図

30・31－191・192グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.8mである。掘立柱建物跡群の南端にありSB616に隣接する。平面形は、長軸3.1m、短軸2.6mの長楕円形を呈する。深さは約0.4mを測る。壁の角度は45～50°で、なだらかである。覆土は褐色シルトを含む黒色シルトを主とする自然堆積である。出土遺物は、須恵器蓋8点、無台坏19点、有台坏９点、短頸壷３点、長頸壷５点、甕３点、横瓶８点、黒色土器碗２点、土師器無台坏１点、有台坏１点、甕272点である。これらの大半は南壁周辺からまとまって出土している。

165－１は両側縁が面取りされた小型の定角式磨製石斧である。165－２は天井部が回転ヘラケズリされる器高の高い蓋である。165－３は外面下半がケズリ、内面がハケメ調整された堝である。

表68　SK9820出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
166	1	須恵器	無台坏	138	87	38.5	4.5	砂粒混入、骨針	良	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	2	須恵器	無台坏	125	58	37	4	砂粒混入	良	6Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	内面に漆付着
	3	須恵器	無台坏	130	60	37	5	砂粒混入、骨針	良	10YR4/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	鉢	(176)	(76)	74	5	砂粒混入	不良	10YR8/3浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	5	土師器	甕	(236)			5	砂粒混入	良好	2.5YR7/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	6	土師器	甕				5	緻密	良	5YR7/8橙	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ		
	7	土師器	甕	(210)			6.5	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		



SK9820

1	10YR2/1	黒	シルト	均質、締りない
2	10YR2/2	黒	シルト	均質、締りない
3	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトブロック微量含む、固く締る
4	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色砂質シルトブロック含む、固く締る
5	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	均質
6	10YR4/4	褐	砂質シルト	均質
7	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色砂質シルトブロック含む、粘性、固く締る
8	2.5Y5/3	黄褐	シルト	下部に酸化鉄が縞状に入る、粘性、固く締る
9	10YR4/4	褐	砂質シルト	均質、固く締る
10	10YR4/4	褐	シルト	均質、固く締る

第166図　SK9820　出土遺物

【SK9820】第166図

32－207グリッドに位置する。段丘上段の際に立地し、標高は101.9mである。約２m北には竪穴建物が集中するブロックがある。平面形は、長軸2.9m、短軸2.4mの長楕円形を呈する。底面は径約1.0mの楕円形である。深さは1.7mを測る。壁は25～30°の傾斜を持つ。覆土は褐色の砂質シルトを含む黒褐色シルトを主とする自然堆積である。出土遺物は、須恵器無台坏７点、長頸壷３点、甕４点、鉢１点、土師器有台坏１点、甕50点である(第166図)。

166－１、２はヘラ切り後ナデ調整された無台坏である。１の体部は直線的でロクロナデの凹凸が顕著である。２は口径、底径が小さい。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。内面には僅かに漆が付着する。３は回転糸切り後無調整の底部から、内湾する体部が立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。内外面とも使用痕が顕著である。

166－4は須恵器鉢である。底部は回転糸切り後無調整である。体部は丸味を持って内湾しながら大きく開き、頸部はほぼ直角に屈曲する。口縁端部は上方に短く摘み上げられる。

166－5～７は土師器長胴甕である。５の外面はロクロナデによる凹凸が顕著に見られ、６は平行タタキの後ロクロナデが入れられる。タタキの痕跡は頸部にも残る。７の上部はロクロナデ、下部には縦方向のケズリ調整が施される。９世紀中頃の時期が想定される。

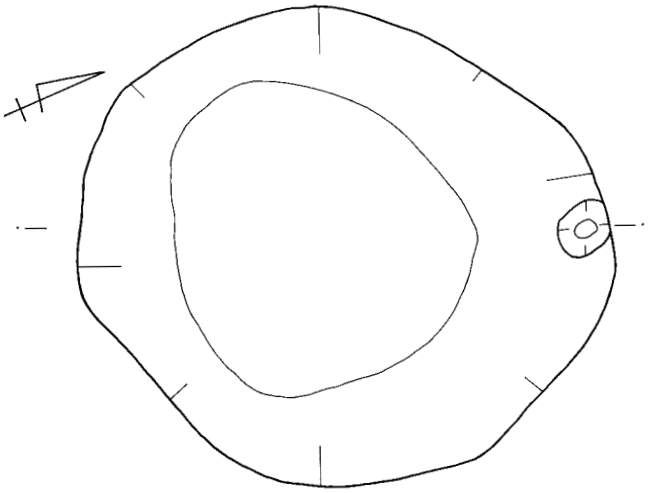
【SK9876】第167図

33－224グリッドに位置する。段丘上段の際に立地し、標高は約101.8mである。北へ10mの地点にはST9869等の一群があり、東へ約10mの地点にはST9895等の一群が広がる。平面形は、長軸2.9m、短軸2.5mの楕円形を呈する。深さは約1.7mを測る。壁は15～20°の傾斜を持ち急峻である。覆土は黒褐色シルトを主とする自然堆積である。

表69　SK9876出土土器観察表

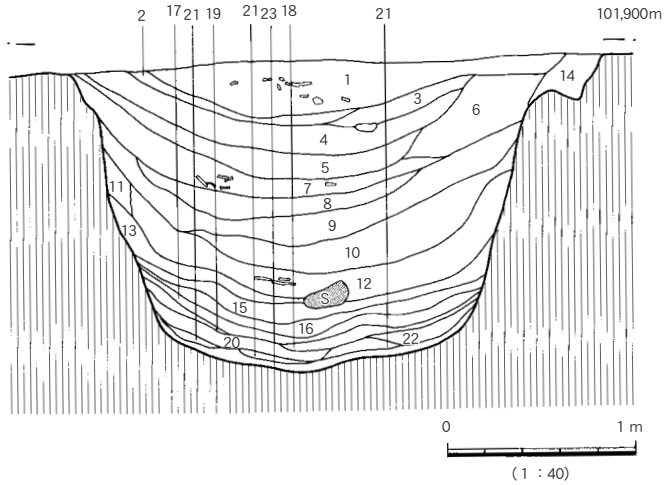
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
167	1	須恵器	無台坏	140	74	36	5	粗砂混入	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	2	須恵器	無台坏	(136)	(66)	42	6	緻密	良	5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	3	須恵器	無台坏	146	70	39	5	緻密	良	10YR7/3にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	4	須恵器	有台坏	(156)	88	85	4	細砂混入	良	5G4/1暗緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SK9876-F2
	5	土師器	甕				7	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ､ハケメ		
	6	黒色土器	蓋				9	砂粒混入	良	5YR6/6橙	ケズリ､ロクロナデ	ミガキ		
	7	黒色黒色	鉢				10	砂粒混入	良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ､ミガキ		
168	1	須恵器	蓋	(152)		33	6	細砂混入、骨針	良好	7.5YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	無台坏	(136)	(84)	40	5	細砂混入	不良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	須恵器	有台坏	135	93	45	4.5	細砂混入	良	5G5/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	4	須恵器	横瓶				10	緻密	良	5Y6/2灰オリーブ	タタキ	アテ痕、ナデ		SK9876-F1
	5	土師器	塝	220			8	砂粒混入、骨針	良	5YR6/8橙	ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ		
	6	土師器	高坏	(138)			6	緻密	良	7.5YR8/6浅黄橙	ミガキ、ケズリ	ミガキ		
	7	須恵器	無台坏	140	80	38	4	砂粒混入、骨針	良	2.5Y7/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	8	須恵器	蓋	138		29	9	細砂混入、骨針	良	7.5Y6/灰	ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ		
	9	須恵器	有台坏	(110)	72	43	4	砂粒混入、骨針	良	10YR8/3浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SK9876-F12、F1、F2
	10	須恵器	無台坏		82		4	緻密、骨針	良	5Y6/3オリーブ黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	底部に墨書「荷」？
	11	須恵器	長頸壷				13	砂粒混入	良	2.5Y4/2暗灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ		
	12	土師器	甕	210	67	352	6	粗砂混入	良	7.5YR6/8橙	タタキ､ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ､ハケメ		
169	1	須恵器	蓋	146		34	10	緻密、骨針	良好	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		
	2	須恵器	無台坏	(130)	(84)	33	5	緻密	良	2.5YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	
	3	黒色土器	無台坏		(80)		10	緻密	良	7.5YR7/4にぶい橙	ミガキ	ミガキ		
	4	土師器	塝	(231)			6	砂粒混入	良	7.5YR7/8橙	ロクロナデ､ケズリ	ロクロナデ､ハケメ		SK9879-F12
	5	土師器	甕	(230)			5	粗砂混入	良	5YR7/8橙	ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ		
	6	土師器	甕	(230)			5	粗砂混入	良	7.5YR7/8橙	ロクロナデ､ケズリ	ハケメ､ロクロナデ		
	7	土師器	甕	(260)			5	粗砂混入	良	5YR7/8橙	ロクロナデ、タタキ、ケズリ	ロクロナデ		
	8	土師器	甕	(230)			5	砂粒混入	良	7.5YR7/8黄橙	ロクロナデ、ケズリ、タタキ	ロクロナデ		
	9	土師器	甕		(53)		5	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ケズリ	ハケメ	ナデ	
	10	土師器	甕	(240)	(54)	312	6	粗砂混入	良	7.5YR8/8橙	タタキ、ケズリ	ハケメ		

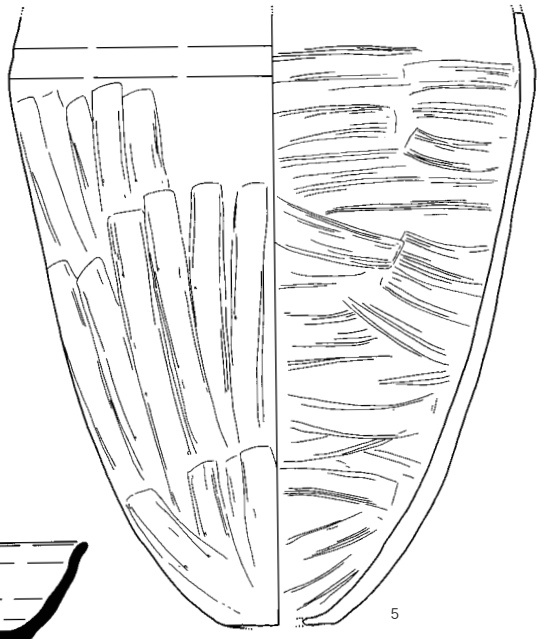
SK9876

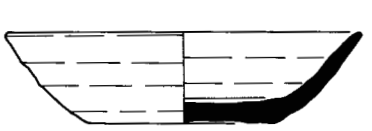


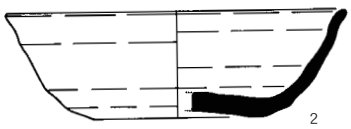
SK9876

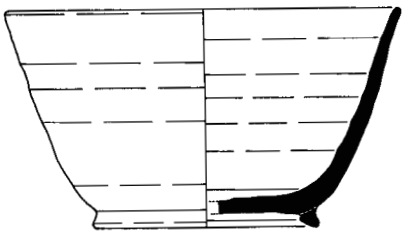
1	10YR2/2	黒褐	シルト	均質、土器片多く含む
2	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒微量含む
3	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色粘質シルト粒少量含む
4	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒微量含む
5	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトを縞状少量に含む
6	10YR2/2	黒褐	シルト	ほぼ均質、土器小片含む
7	10YR2/2	黒褐	粘土	暗褐色シルト粒微量含む、炭化粒含む
8	10YR2/1	黒	シルト	褐色砂質シルトブロック少量含む
9	10YR3/3	暗褐	砂質シルト	黒色、褐色シルトブロック少量含む
10	10YR2/1	黒	シルト	褐色砂質シルトブロック含む
11	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色砂質シルト粒含む
12	10YR3/4	暗褐	砂質シルト	褐色砂質シルト、黒色シルトブロック含む
13	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	均質
14	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
15	10YR4/6	褐	細砂	灰白シルトブロック少量含む
16	10YR4/6	褐	シルト	褐色細砂、黒色シルトブロック少量含む、やわらかい
17	10YR4/4	褐	シルト	暗褐色、黒褐色シルトブロック微量含む、やわらかい
18	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色細砂、暗褐色シルトブロック縞状に含む、やわらかい
19	10YR4/4	褐	細砂	固く締る
20	10YR2/1	黒	シルト	褐色シルトブロック微量含む、固く締る
21	10YR2/1	黒	シルト	褐色細砂をブロック状に含む、固く締る
22	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロック、褐色細砂含む、固く締る
23	10YR4/4	褐	細砂	

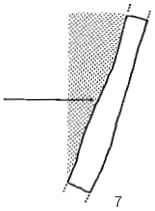








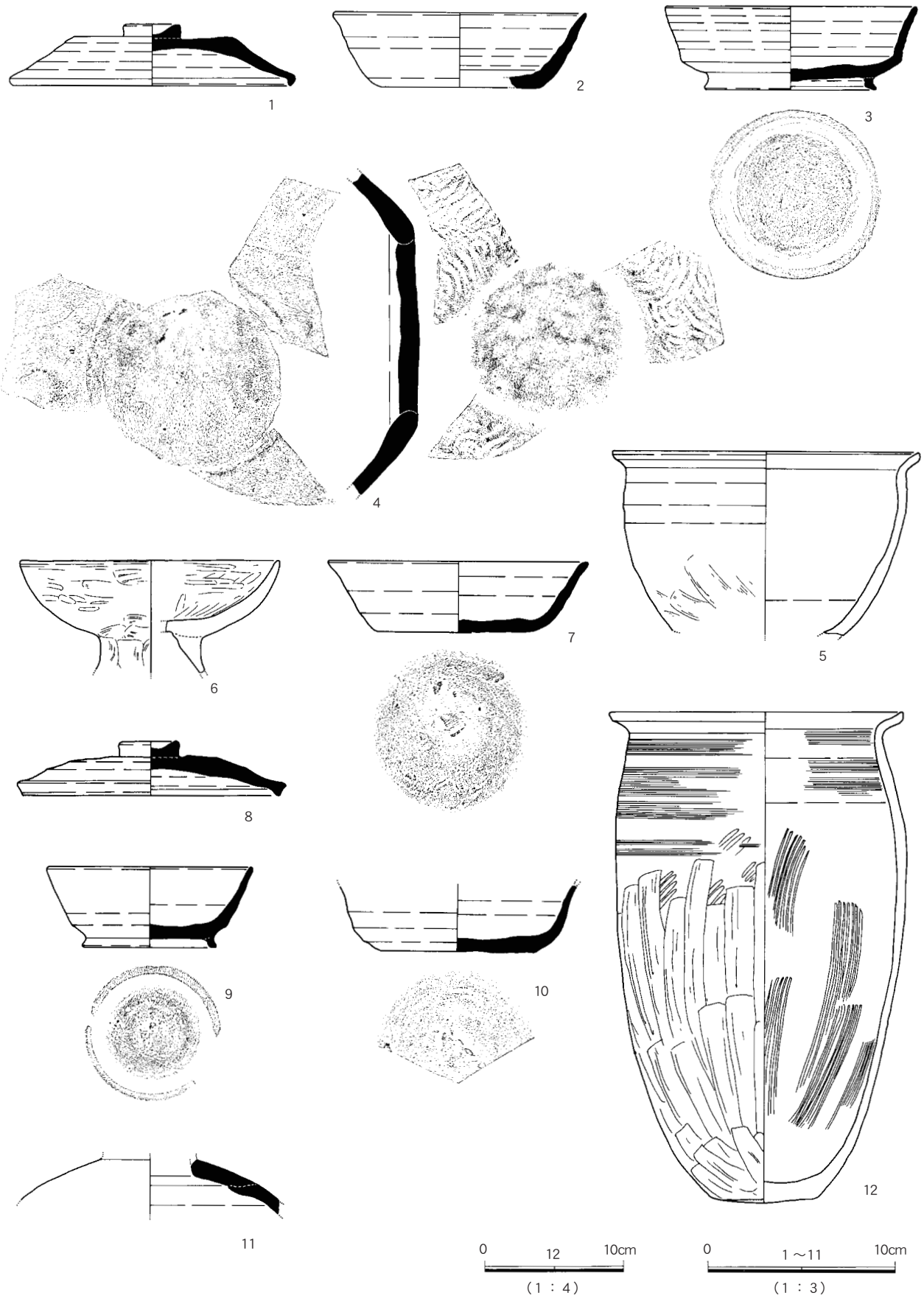




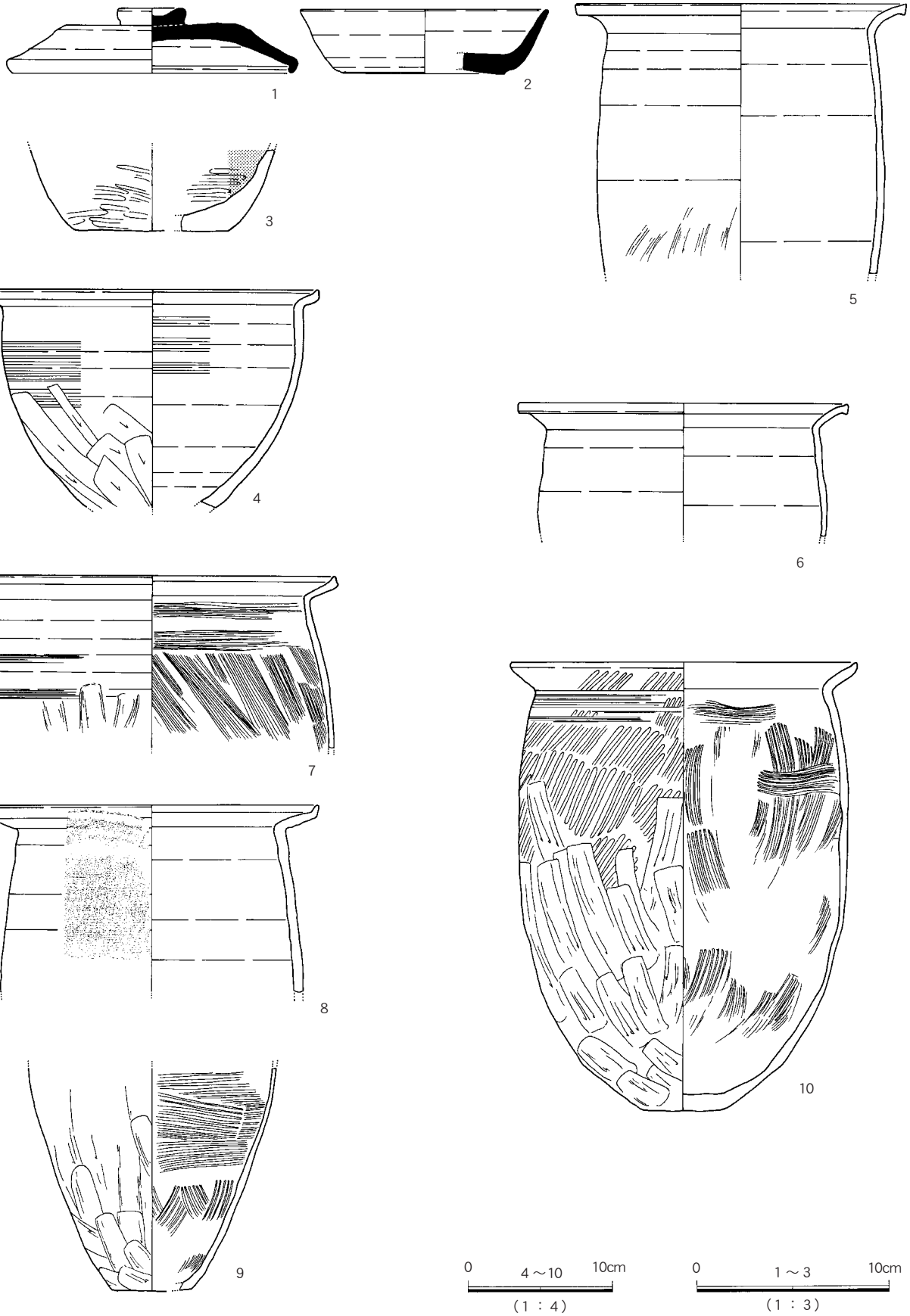
0 5 10cm
(1 : 4)

0 1～4・6・7 10cm
(1 : 3)

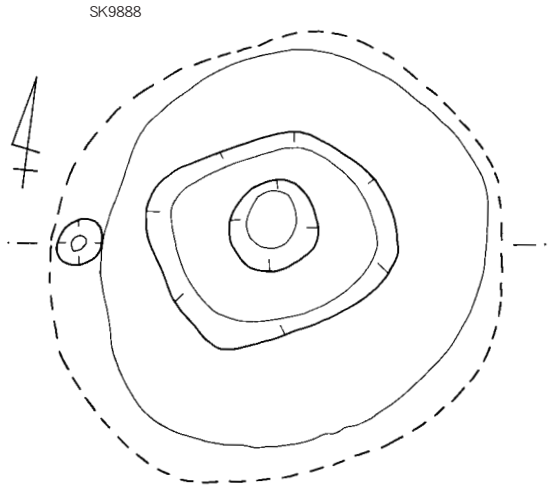
第167図　SK9876　出土遺物 1

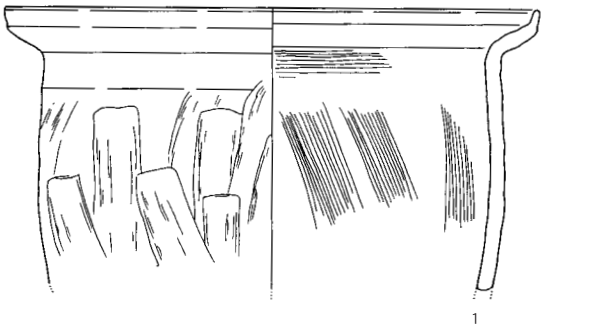


第168図　SK9876　出土遺物２

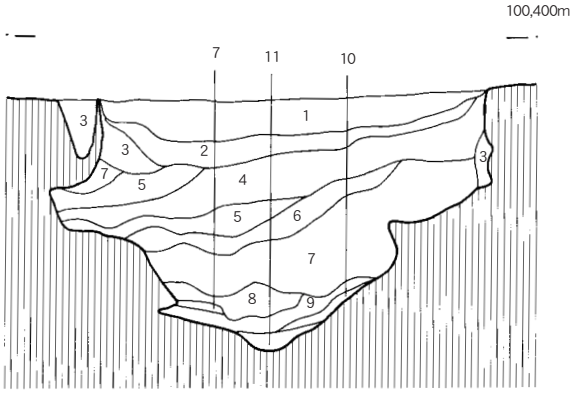


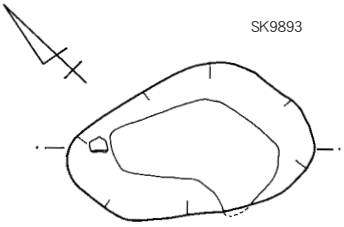
第169図　SK9876　出土遺物３

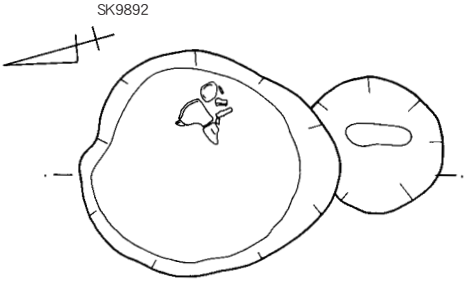


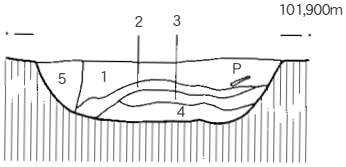


SK9888
1　10YR2/2　黒褐　シルト　明黄褐色シルトを縞状に含む、炭化粒、土器片含む
2　10YR3/3　暗褐　シルト　炭化粒微量含む、土器片含む、固く締る
3　10YR3/3　暗褐　シルト　明黄褐色シルトブロック微量含む、固く締る
4　10YR3/1　黒褐　シルト　明黄褐色、褐灰色、灰黄褐色シルトブロック斑状に含む
5　2.5YR3/1　黒褐　シルト　明黄褐色、褐灰色、灰黄褐色シルトブロック斑状に含む
6　2.5YR4/1　黄灰　シルト　橙色シルトブロック微量含む、やわらかい
7　7.5YR4/4　褐　シルト　黒褐色シルトを縞状に含む、固く締る
8　10YR3/1　黒褐　シルト　黄橙色シルトを縞状に含む、固く締る
9　10YR6/2　灰黄褐　シルト　黄橙色シルトを縞状、ブロック状に含む、やわらかい
10　7.5YR7/1　灰白　シルト　灰白細砂微量含む、固く締る
11　10YR6/2　灰黄褐　細砂　黄橙色シルトブロック含む

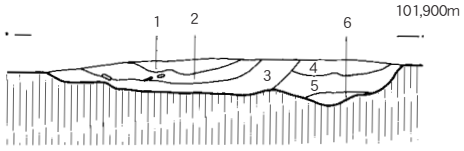




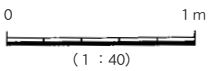




SK9893
1　10YR2/3　黒褐　シルト　暗褐色シルト粒少量
2　10YR2/3　黒褐　シルト　褐色シルトブロックを斑状に含む
3　10YR2/3　黒褐　シルト　ほぼ均質
4　10YR3/2　黒褐　シルト　ほぼ均質
5　10YR2/1　黒　シルト　均質だがもろい



SK9892
1　10YR2/1　黒　シルト　均質
2　10YR2/3　黒褐　シルト　褐色シルト粒少量含む
3　10YR2/2　黒褐　シルト　褐色シルトブロック斑状含む
4　10YR2/3　黒褐　シルト　均質
5　10YR2/2　黒褐　シルト　褐色シルト粒微量含む
6　10YR2/2　黒褐　シルト　褐色シルトブロック斑状に含む



第170図　SK9888　出土遺物、SK9892、9893

表70　SK9888出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
170	1 土師器	甕	(210)			6.5	砂粒混入	良	5YR5/8明赤褐	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ、ナデ		

出土遺物は須恵器蓋8点、無台坏29点、有台坏４点、長頸壷７点、甕５点、横瓶７点、黒色土器無台坏３点、土師器甕313点、堝9点、合計386点あまりが出土している（第167～169図）。

167－１～７は１層出土の遺物である。1～３は回転糸切り後無調整の無台坏、４も回転糸切りで、低い高台が付く身の深い有台坏である。５は外面がヘラケズリ、内面がハケメ調整された長胴甕である。６は内面が黒色処理された蓋、７も同様に処理された鉢と考えられる。

168－１～４は２層出土である。１は回転ヘラケズリが施された広い天井部にリング状つまみが貼付けられたものである。体部の傾きは大きく、器高が高い。２はヘラ切りの無台坏、３もヘラ切りであるが、底部には焼成時の亀裂が生じている。体部にはロクロナデによる細かい凹凸が見られる。４は横瓶の閉塞部である。黒色の吹出しが見られる。

168－５は３層出土の堝である。火熱により器面は荒れるが、ケズリ調整が認められる。

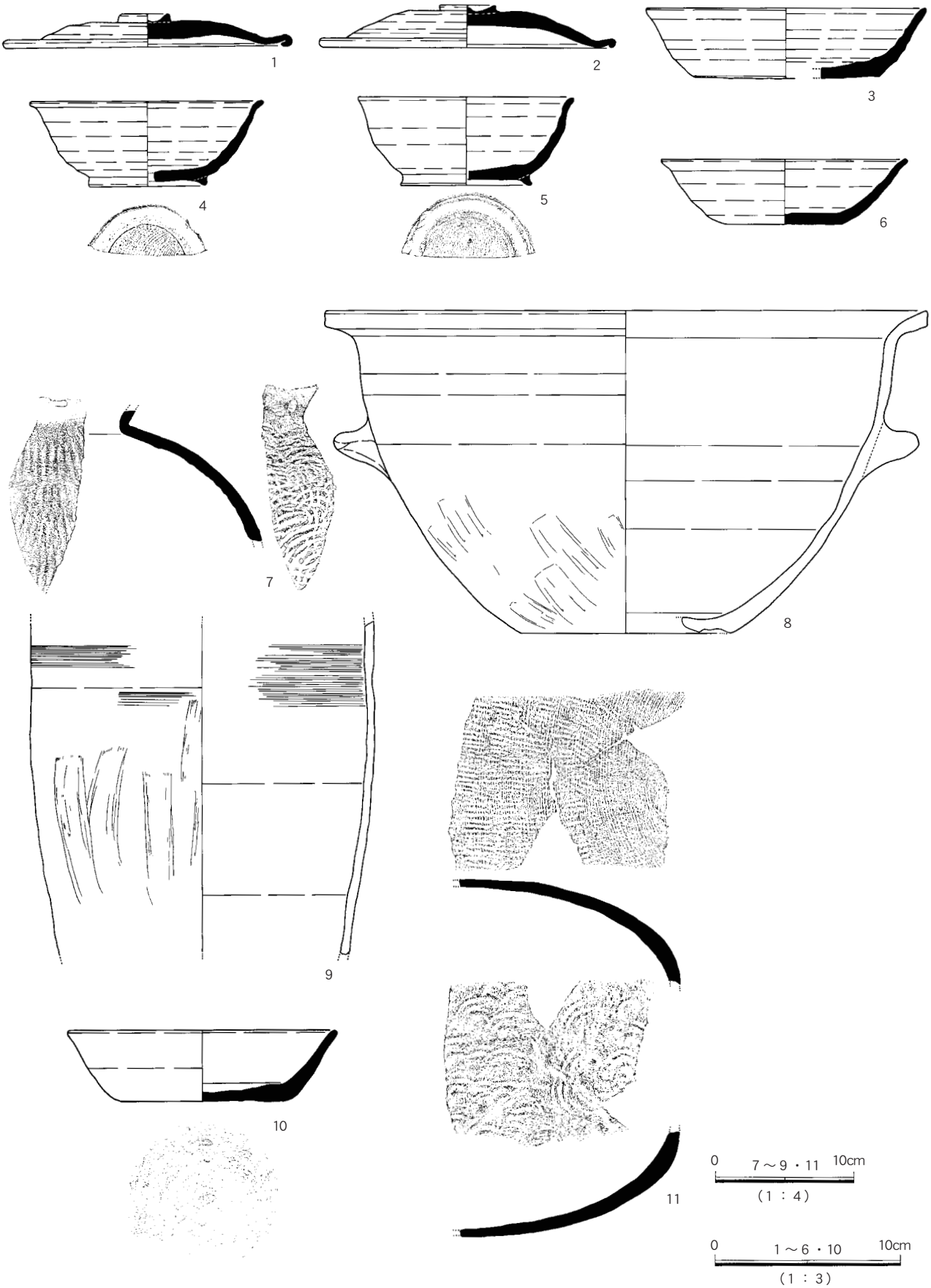
168－６～12は４層出土である。６は内外面にミガキが施され、内面は黒色処理を施した可能性がある。脚部は幅約1.5㎝の縦方向のケズリが入れられ、面取りしたような形状である。７、10はヘラ切り後ナデ調整された無台坏で、10の底部には墨書が認められる。８は回転ヘラケズリされた天井部にリング状のつまみが付けられる。体部の傾きは小さく、口縁部は内傾する。９は小型の有台坏である。体部は直線的である。11は三段構成の長頸壷である。外面には灰被りが見られる。12はタタキ成形後、上部にロクロナデ、下部に縦方向のケズリが施された長胴甕である。底部は小さく、中央部が盛り上がるタイプである。

169－１、２、５は10層出土である。１は回転ヘラケズリされた広い天井部にリング状つまみが付けられる。口縁端部は内傾する。168－１に類似する。２はヘラ切りの無台坏で、口径、底径が大きく、身は浅い。５はタタキ成形後、ロクロナデとケズリ調整が施された長胴甕である。

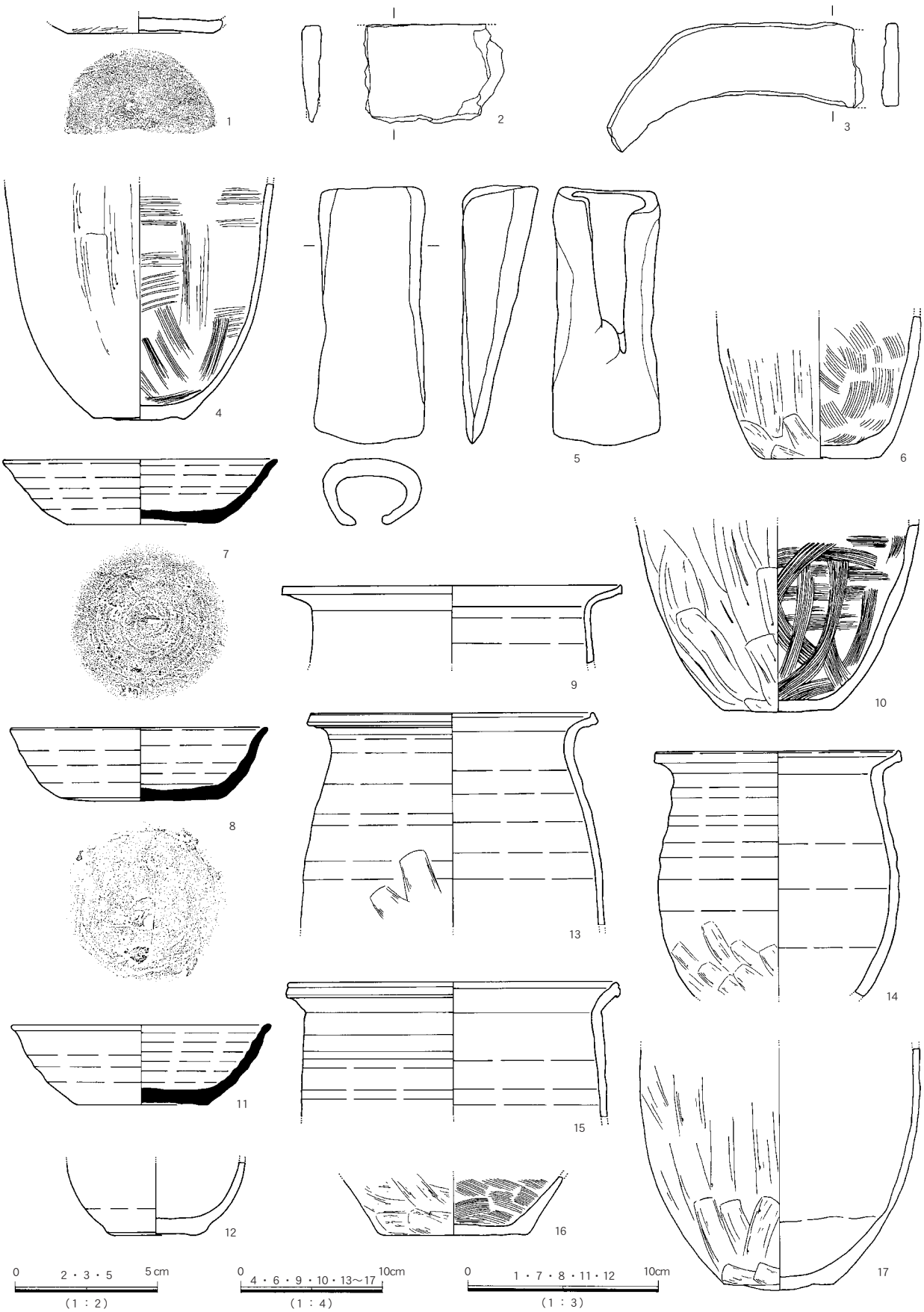
169－３、４、６～10は12層出土である。３は内面を黒色処理した坏と考えられる。４は小型の甕、６～10は長胴甕である。

表71　土坑出土土器観察表

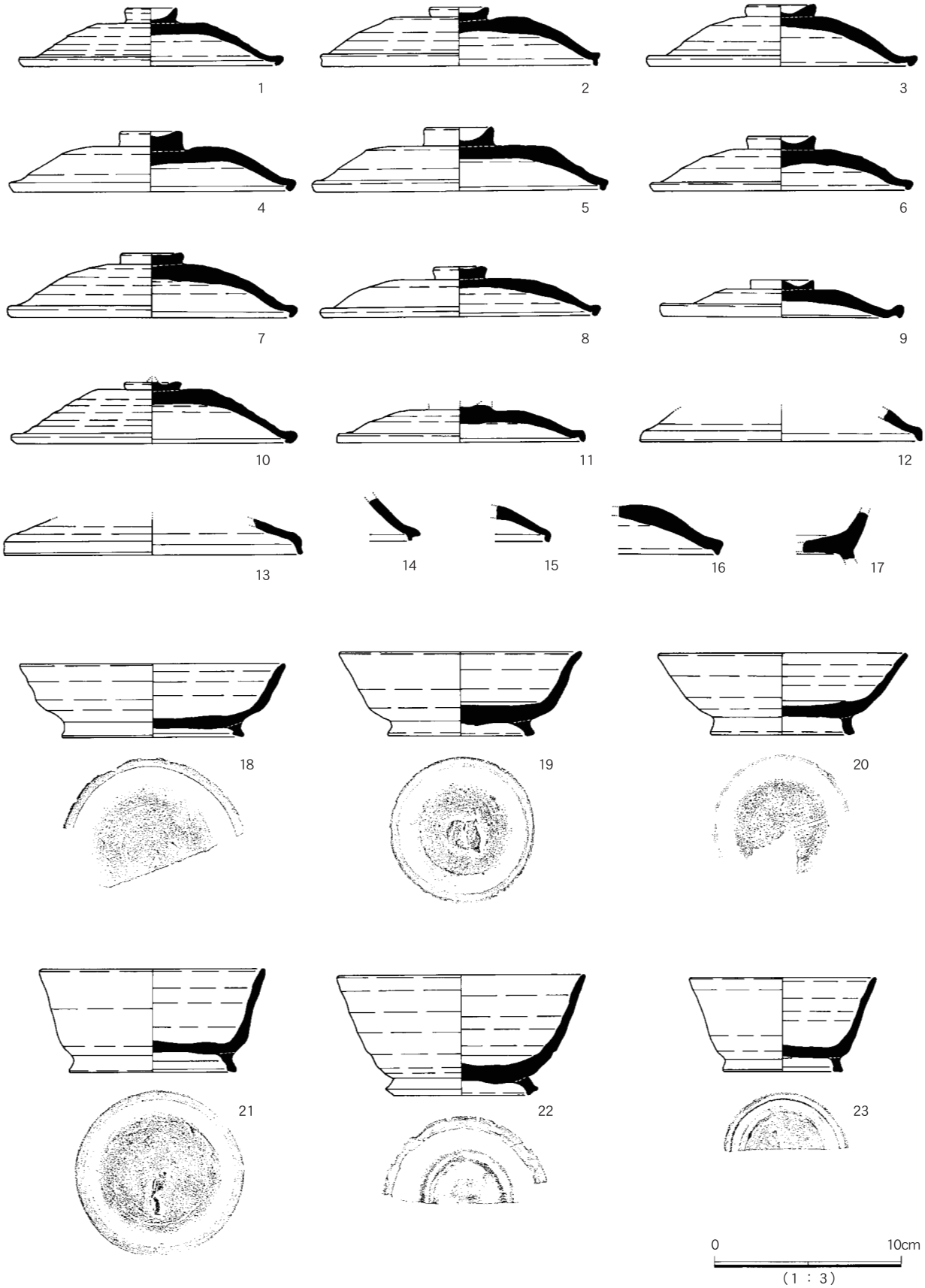
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	出土地点	備考
171	1	須恵器	蓋	146		18	6	細砂混入、骨針	良	2.5Y6/黄灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		SK 719	
	2	須恵器	蓋	160		22	5	細砂混入、骨針	良好	10YR6/褐灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		SK 719	天井部　回転糸切り
	3	須恵器	無台坏	150	99	38	5	砂粒混入、骨針	不良	7.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SK 159	
	4	須恵器	有台坏	(126)	(62)	46	5	砂粒混入	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SK 719	
	5	須恵器	有台坏	(116)	(72)	48	6	緻密	良	5BG5/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SK 119	
	6	須恵器	無台坏	134	66	35	6	緻密	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SK 722	
	7	須恵器	甕				8	砂粒混入	良	2.5Y4/1黄灰	タタキ	アテ痕		SK 9376	
	8	須恵器	堝	(434)	(150)	232	8	粗砂混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		SK 9376	
	9	須恵器	甕				6	砂粒混入、骨針	良	5YR6/6橙	ケズリ、ロクロナデ	ロクロナデ、ハケメ		SK 9376	
	10	須恵器	無台坏	(145)	91	38.5	5	粗砂混入	良	5Y8/4淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り、ナデ	SK 9598	
	11	須恵器	横瓶				11	砂粒混入	良	5Y6/1灰	タタキ、カキメ	アテ痕		SK 9598	内面に自然釉
172	1	土師器	堝		(105)		9.5	粗砂混入	良	5YR6/8橙	ケズリ	ナデ	ナデ	SK 9723	底部ヘラ記号「×」
	4	土師器	甕		66		3	砂粒混入	良	7.5YR8/8黄橙	ケズリ	ハケメ、ナデ	ナデ	SK 9895	
	6	土師器	甕		86		6	粗砂混入	良	5YR6/1橙	ケズリ	ハケメ		SP 643	
	7	須恵器	無台坏	144	80	34	4	砂粒混入、骨針	良	7.5GY5/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SP 9197	低部に墨書、「花」
	8	須恵器	無台坏	134	86	38	5	細砂混入、骨針	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SP 643	
	9	土師器	甕	(238)			5	砂粒混入	良	5YR6/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ		SP 643	
	10	土師器	甕		78		7	細砂混入	良	7.5YR6/4にぶい橙	ケズリ	ハケメ、ロクロナデ	ナデ	SP 601	
	11	土師器	無台坏	(136)	68	42	4	緻密	良	7.5Y5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SX 9647	
	12	土師器	鉢		51		4.5	砂粒混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	磨滅			SX 9958	RP192
	13	土師器	甕	(200)			6	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		SX 9958	
	14	土師器	甕	(172)			7	粗砂混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		SX 9958	
	15	土師器	甕	(230)			6	粗砂混入	良	5YR7/8橙	ロクロナデ	ロクロナデ		SX 9958	SX9958
	16	土師器	甕		104		8	粗砂混入、骨針	良	7.5YR7/4にぶい橙	ケズリ	ナデ	ケズリ	SX 9958	
	17	土師器	甕		(74)		5	砂粒混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ケズリ		ナデ	SX 9958	29-191



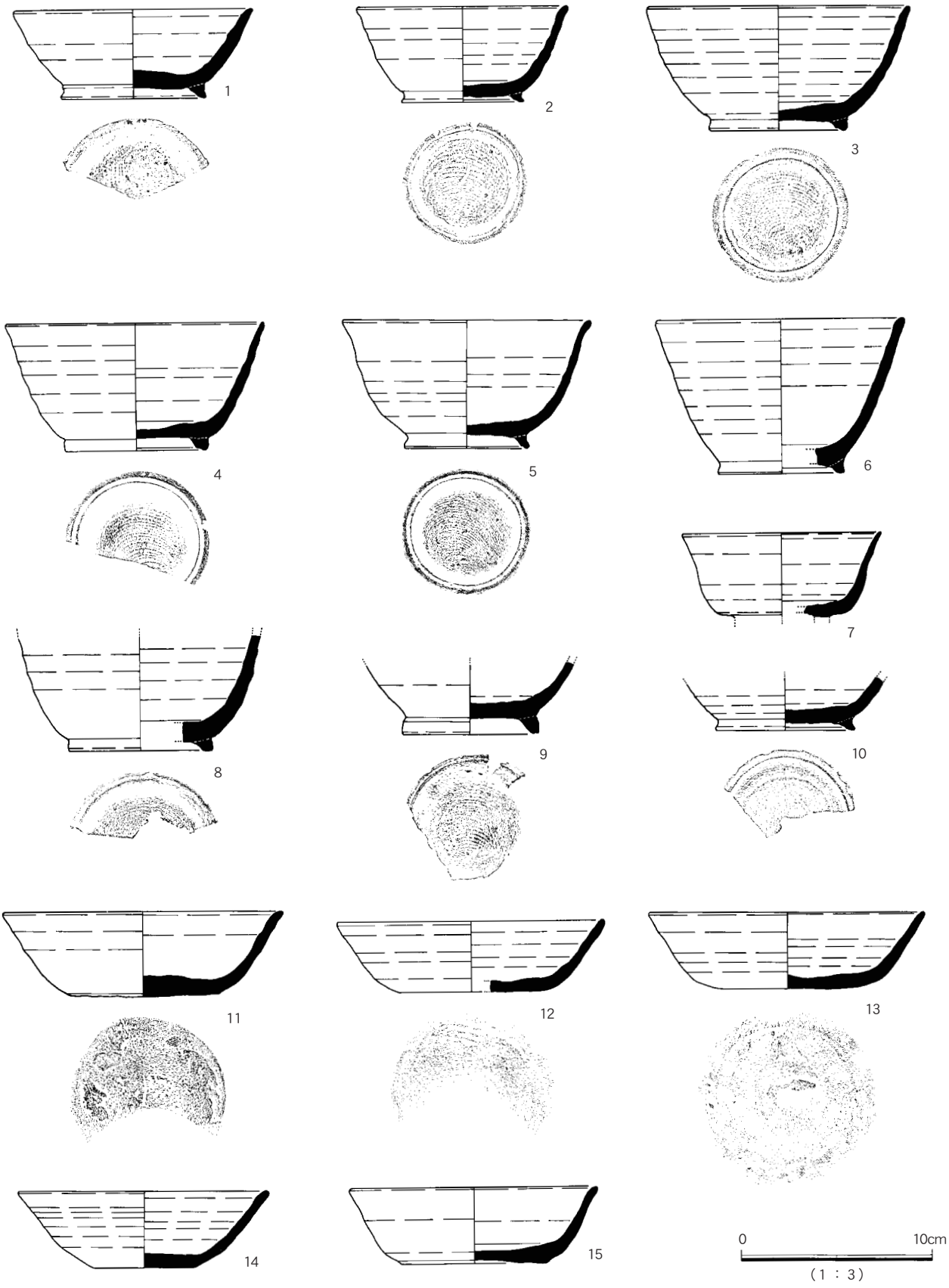
第171図　土坑出土遺物（古代）1



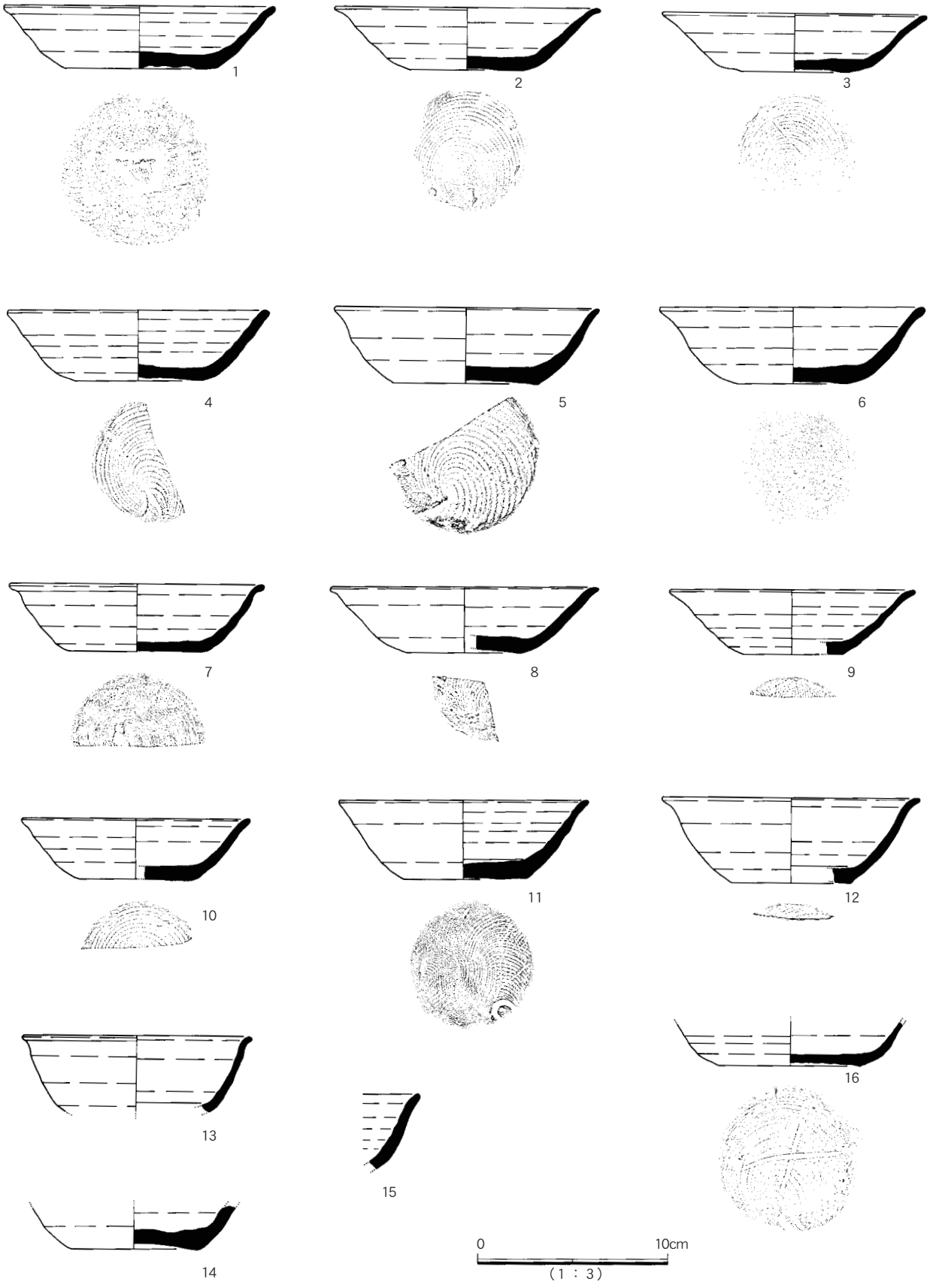
第172図　土坑出土遺物（古代）2



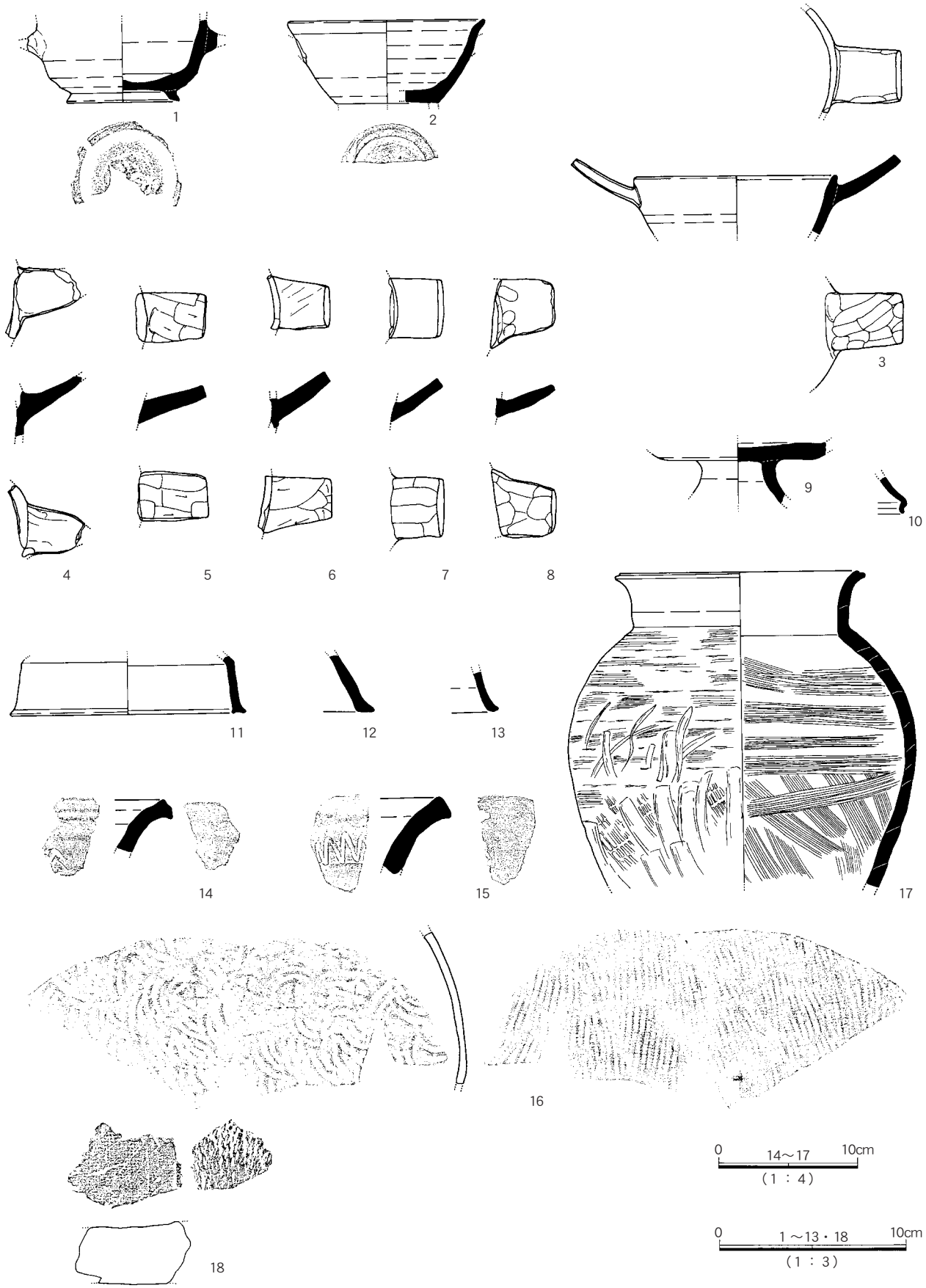
第173図　包含層出土遺物（古代）1



第174図　包含層出土遺物（古代）2



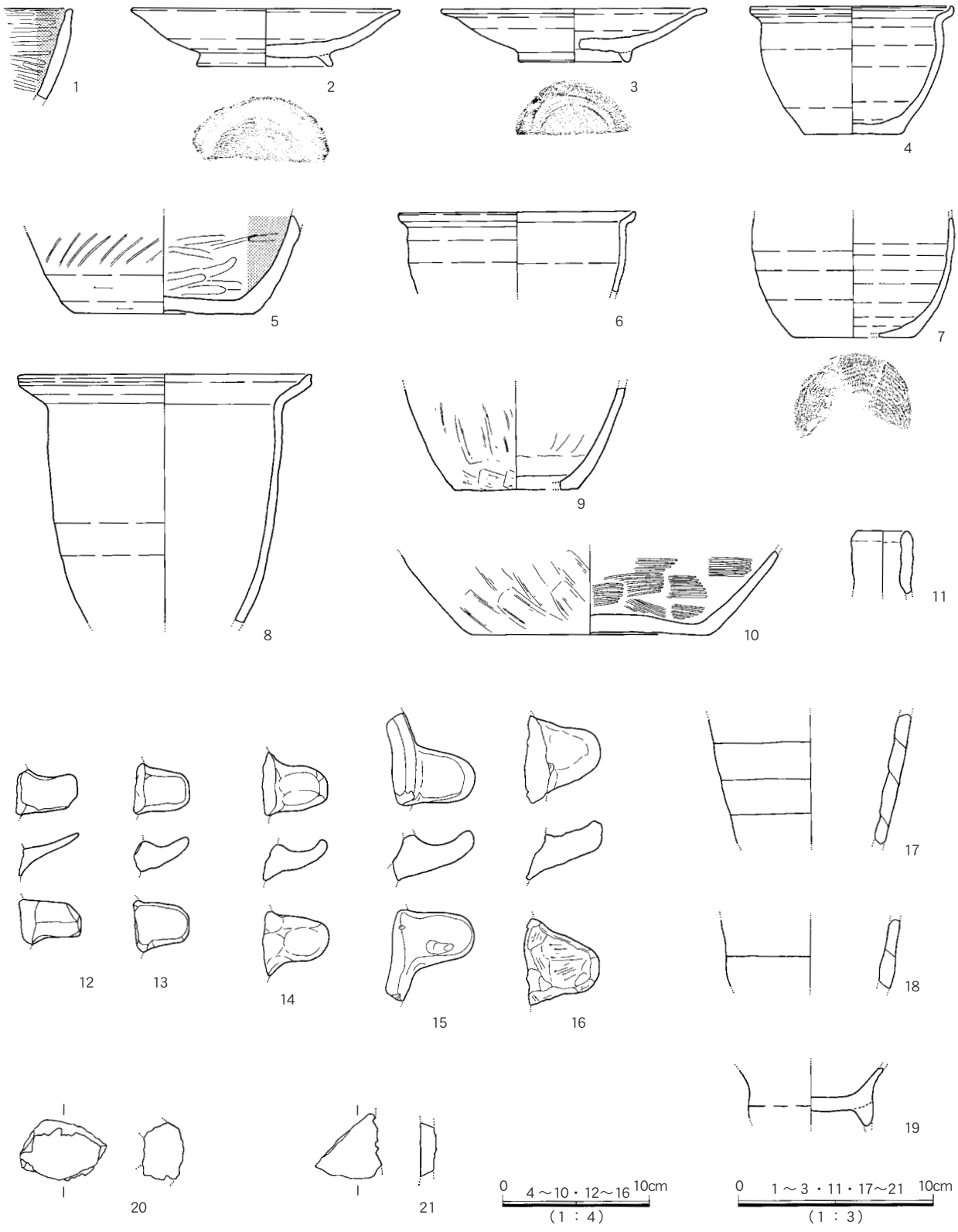
第175図　包含層出土遺物（古代）3



第176図　包含層出土遺物（古代）4

表72　包含層出土土器観察表（1）

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	出土地点	備考
	1	須恵器	蓋	(134)		31	3.5	細砂混入	良好	5B6/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		34-188	
	2	須恵器	蓋	(149)		31.5	4.5	細砂混入	良好	5G5/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ		34-187	
	3	須恵器	蓋	(140)		32	6	緻密	良好	5G6/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ		34-188	
	4	須恵器	蓋	(147)		32	5	緻密、骨針	不良	10YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		26-194	
	5	須恵器	蓋	(154)		32	5	緻密、骨針	良	7.5GY7/1明緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ		26-195	
	6	須恵器	蓋	(136)		29	7	緻密、骨針	良好	5BG5/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		33-190	
	7	須恵器	蓋	(154)		34	5	緻密、骨針	良好	10GY5/1	ロクロナデ	ロクロナデ		34-188	
	8	須恵器	蓋	146		27	7	緻密、骨針	良好	2.5GY	ロクロナデ	ロクロナデ		34-188	
	9	須恵器	蓋	(126)		20	5	緻密	良好	5BG4/暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		29-191	
	1	須恵器	蓋	(142)			4	緻密	良好	10BG5/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		30-192	
	11	須恵器	蓋	(132)			6	緻密、骨針	良	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		29-130	
173	12	須恵器	蓋	(150)			5	緻密	良好	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		38-234	
	13	須恵器	蓋	(158)			4	粗砂混入	良	10YR5/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ		44-230	
	14	須恵器	蓋				4	緻密	良	7.5YR2/1黒	ロクロナデ	ロクロナデ		29-194	
	15	須恵器	蓋	(150)			5.5	砂粒混入	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		34-236	
	16	須恵器	蓋				7	砂粒混入、骨針	良	5Y7/2灰白	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		38-246	
	17	須恵器	有台坏				6.5	緻密	良	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	79-194	
	18	須恵器	有台坏	(142)	(97)	39	4	砂粒混入、骨針	良	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	34-187	
	19	須恵器	有台坏	(130)	78	45	5	緻密、骨針	良	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	34-192	
	20	須恵器	有台坏	134	74	44	4	砂粒混入	良	10YR6/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	34-187	
	21	須恵器	有台坏	120	90	56	4	緻密	良	N3/暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	34-187	34-188
	22	須恵器	有台坏	(132)	(71)	64	5	緻密、骨針	良	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	26-192	
	23	須恵器	有台坏	(100)	(64)	50	3	緻密	良	N8/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	28-194	
	1	須恵器	有台坏	(124)	76	46	5.5	砂粒混入	良好	10YR2/1黒	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	28-193	28-192
	2	須恵器	有台坏	(110)	64	50	3	砂粒混入、骨針	良	N7/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	27-192	27-191包、28-192
	3	須恵器	有台坏	(136)	70	64	6	砂粒混入	良好	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	42-258	
	4	須恵器	有台坏	(136)	74	67	5	緻密、骨針	良	7.5YR5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	34-188	
	5	須恵器	有台坏	(130)	65	67	4	粗砂混入	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	34-188	
	6	須恵器	有台坏	(130)	(66)	80.5	5	細砂混入、骨針	良	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	A区　包	
	7	須恵器	有台坏	(104)			6	緻密	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		38-254	
174	8	須恵器	有台坏		(74)		5	緻密	良	5YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	38-238	
	9	須恵器	有台坏		(70)		5	緻密	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	X0	
	10	須恵器	有台坏		(72)		7	緻密	良	2.5Y5/3黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	X0	
	11	須恵器	無台坏	(148)	80	44	5	砂粒混入	良好	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	38-234	X0
	12	須恵器	無台坏	(140)	(76)	37	4	緻密	良	10Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	34-188	A区包
	13	須恵器	無台坏	(144)	(95)	40	5	細砂混入	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	34-188	
	14	須恵器	無台坏	(130)	52	40	4	緻密	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	32-188	
	15	須恵器	無台坏	(130)	(76)	40	5	細砂混入、骨針	良	10Y7/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	32-188	
	1	須恵器	無台坏	144	80	33	4	細砂混入	良好	10Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	34-188	
	2	須恵器	無台坏	(140)	60	33	5	砂粒混入	良	2.5Y7/2灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	30-192	
	3	須恵器	無台坏	(140)	6	31	4	砂粒混入	良	5GY6/1オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	28-190	
	4	須恵器	無台坏	(138)	66	37	5	細砂混入	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	29-130	
	5	須恵器	無台坏	(140)	76	40	5	砂粒混入	良	2.5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	34-188	
	6	須恵器	無台坏	(140)	58	40	5	細砂混入	良	10YR8/3浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	30-192	
	7	須恵器	無台坏	(134)	(70)	35	4	細砂混入	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	34-188	
175	8	須恵器	無台坏	(142)	60	34	4	砂粒混入、骨針	良	N6/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	34-188	焼成後口縁部に一ケ所孔
	9	須恵器	無台坏	(130)	(54)	34	4	砂粒混入	良	5G6/1緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	28-192	
	10	須恵器	無台坏	(120)	(60)	32	5	緻密	良	10Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	28-191	
	11	須恵器	無台坏	(130)	62	41	5	緻密	良	10Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	42-258	
	12	須恵器	無台坏	(136)	(62)	45	4	粗砂混入	良	2.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	29-191	
	13	須恵器	無台坏	(120)			3	細砂混入	良	7.5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		44-258	
	14	須恵器	無台坏		(66)		6	緻密、骨針	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	33-192	
	15	須恵器	無台坏				5	緻密	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		A区包	
	16	須恵器	無台坏		76		3	砂粒混入	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	A区包	底部ヘラ記号「×」
	1	須恵器	双耳坏		(60)		6.5	砂粒混入	良	10YR6/1褐灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り	A区包	
	2	須恵器	双耳坏	(104)			4	緻密	良	10YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	45-231	
	3	須恵器	双耳坏	(108)			5	細砂混入	良	10YR5/2灰黄褐	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		27-191	
	4	須恵器	双耳坏				4	細砂混入	良	10YR5/1褐灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		30-193	
	5	須恵器	双耳坏				8	緻密	良好	10YR4/2灰黄褐色	ケズリ			34-188	
	6	須恵器	双耳坏				4	緻密	良好	10YR4/2灰黄褐	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		32-188	
	7	須恵器	双耳坏				6.5	緻密	良好	10YR3/1黒褐	ケズリ			28-192	
	8	須恵器	双耳坏				4	緻密	良	2.5Y4/2暗灰黄	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		32-188	
	9	須恵器	高坏				7.5	砂粒混入、骨針	良	2.5YR5/にぶい赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ		A区	
176	10	須恵器	高坏				7.5	砂粒混入、骨針	良	2.5YR6/にぶい赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ		A区	
	11	須恵器	円面硯		(12.6)		4.5	緻密	良	7.5YR5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		26-91	
	12	須恵器	円面硯				5	砂粒混入、骨針	良	5P7/明紫灰	ロクロナデ	ロクロナデ		A区包	
	13	須恵器	円面硯				4	緻密	良	2.5Y6/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ		A区包	
	14	須恵器	甕				10	砂粒混入	良	5Y5/2灰オリーブ	ロクロナデ、櫛描波状文	ロクロナデ		38-234	
	15	須恵器	甕				11	砂粒混入	良	N4/灰	ロクロナデ、櫛描波状文	ロクロナデ		44-262	
	16	土師器	甕				5	緻密	良好	7.5YR8/4浅黄橙	タタキ	アテ痕		31-192	
	17	須恵器	壷	(181)			8	砂粒混入	良好	N3/暗灰	ロクロナデ、タタキ、ケズリ	ロクロナデ、ナデ		42-258	
	18		女瓦				33	粗砂混入	良	N5/灰	縄タタキ	布目		21-182	



第177図　包含層出土遺物（古代）5

【SK9888】第170図

36・37－229グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2mである。隣接してSE9890があり、約10m南にはSB186がある。平面形は、径約2.1mの楕円形を呈し、深さは1.3mを測る。壁は湧水によるものと考えられる抉りが見られ、中程が10～30㎝オーバーハングする。覆土は、黒褐色を主とするもので自然堆積と考えられる。出土遺物は、須恵器無台坏16点、有台坏１点、長頸壷３点、甕５点、黒色土器無台坏１点、土師器甕74点である。

【SK9892】第170図

30－226グリッドに位置する。段丘上段に立地し、標高は約101.8mである。ST9867、9891に隣接する。径0.7mの土坑と切合う。平面形は、長軸1.4m、短軸1.2mの楕円形を呈し、深さは約0.2mである。出土遺物は土師器甕176点である。

【SK9893】第170図

30－225グリッドに位置する。段丘上段に立地し、標高は約100.8mである。平面形は、長軸1.3m、短軸0.8mの楕円形で、深さは0.3mを測る。出土遺物は土師器甕５点である。

5　その他の出土遺物

第171、172図は、土坑やその他の遺構からの出土遺物である。171－１、２の蓋の天井部には回転糸切りの痕跡が残る。４、５は低い高台から内湾する体部が立ち上がり、口縁部が外反するが、高台の形態に違いが見られる。３はヘラ切り、６は回転糸切りの無台坏である。８は把手付きの大型の堝である。把手は丸味のある小さなもので、断面は楕円形である。11は横瓶の閉塞部であるが、閉塞円盤は欠損する。内面に緑灰色の自然釉が付着する。172－２、３、５は鉄製品である。３は不明であるが５は鉄斧、２は刀子と考えられる。

第173～177図は包含層出土の遺物である。Ａ区包含層、あるいは30～34－188グリッドの遺物は、主にSE562から南西方向に広がっていた10～15㎝の黒褐色土中のものである。また、26～28－190～194グリッド出土遺物は、大半が掘立柱建物跡集中区で見られた整地層からである。包含層からの出土遺物点数は、須恵器3212点、土師器6461点、黒色土器88点である。

表73　包含層出土土器観察表（２）

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	出土地点	備考
	1	内黒	無台坏				5	細砂混入	良	10YR8/2灰	ミガキ	ミガキ		34-188	
	2	土師器	皿	(137)	(68)	29	6	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	31-181	
	3	土師器	皿	(136)	(58)	27	4	砂粒混入	良	7.5YR8/6浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	A区包含層	
	4	土師器	鉢	(138)	(66)	87	7	砂粒混入､骨針	良	7.5YR8/4浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		29-192	30-192
	5	黒色土器	鉢		(120)		10	細砂混入	良	10YR7/6明黄褐	ケズリ､ハケメ	ミガキ	ナデ	34-188	
	6	土師器	甕	(162)			5	砂粒混入	良	2.5YR6/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ		X0	
	7	土師器	甕		80		4	粗砂混入､骨針	良	2.5YR7/6橙	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	32-206	
	8	土師器	甕	(200)			6	細砂混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		26-189	
	9	土師器	甕		(85)			粗砂混入	良	10YR7/4にぶい黄橙	ケズリ			27-192	
177	10	土師器	堝		164		9	砂粒混入､骨針	良好	5YR7/8橙	ケズリ	ハケメ	ナデ	26-188	
	11	土師器	管状品				6	細砂混入	良	7.5YR8/3浅黄橙				33-189	
	12	土師器	把手				6	粗砂混入	良	5YR5/8明赤褐				44-232	
	13	土師器	堝(取手)				12	細砂混入	良	5YR7/6橙				27-191	
	14	土師器	堝				10	砂粒混入	良	7.5YR7/4にぶい橙	ナデ､ケズリ			33-192	
	15	土師器	堝				13	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	ナデ	ロクロナデ		30-180	
	16	土師器	堝				17	粗砂混入	良	5YR6/6橙	ケズリ､ナデ			34-188	
	17	製塩土器					6	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙				48-236	強い２次火熱
	18	製塩土器					6	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙				48-236	
	19	製塩土器					6	砂粒混入	良	7.5YR8/4浅黄橙				48-236	

Ⅶ　中世の遺構と遺物

1　竪穴建物跡

本調査区で確認された竪穴建物跡はST9010の１棟のみである。隣接する２期調査区（10区）においても中世の遺構、遺物は数多く検出されているが、竪穴建物跡に関しては１棟の検出にとどまる。また、竪穴建物跡の在り方も本調査区と共通する点がうかがえる。

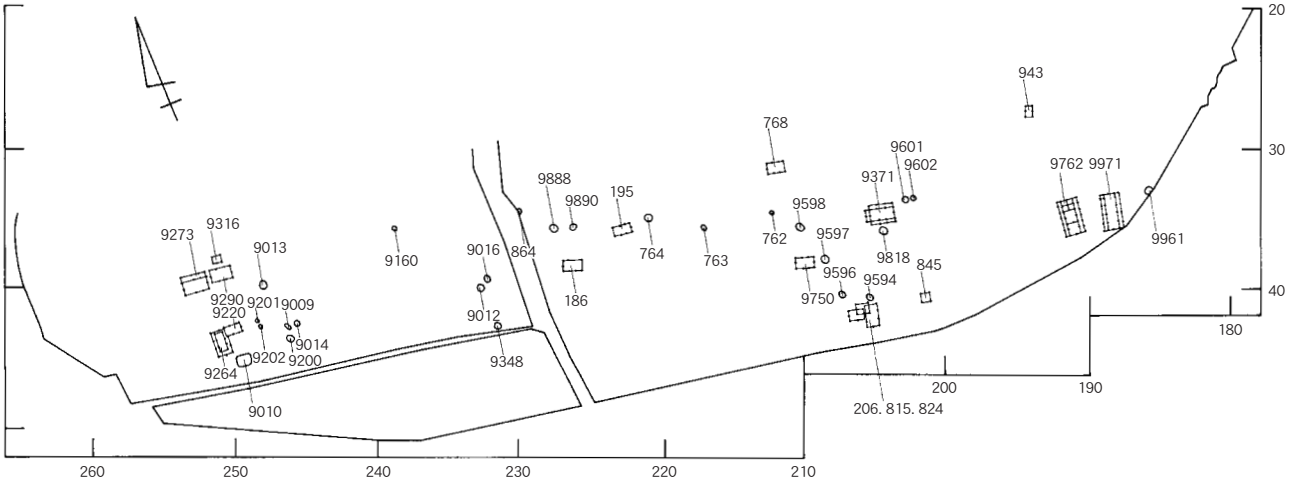
本遺跡における中世の遺構は比較的広範囲に渡り、必ずしも密度は濃くないものの、一定量の遺構は検出されている。これらの遺構からは、中世集落の一形態を窺い知る事ができる。即ち、本遺跡の中世期の集落では、掘立柱建物を主体とするものであり、竪穴建物は居住施設ではないと考えられる。さらに、掘立柱建物に付属して建てられた施設ではないことも、その数から明らかである。これらの事から、本遺跡の竪穴建物は、極めて特殊な用途のために設けられた建物であると推測される。

【ST9010】第179図

45・46－250・251グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。調査区中最も標高が低い地点の一つである。周辺には、SB9264、9220などの中世の遺構が分布し、奈良・平安期の遺構は皆無である。

主軸方向は、Ｎ－99°－Ｅである。平面形は、東西5.4m、南北4.4mを測り、東西に長い方形を呈する。確認面からの深さは約35㎝である。土層断面観察の結果、東側の壁と床面に灰白色シルトを貼って、壁や床を作っている痕跡がうかがえることから、建て替えられた可能性がある。建て替え時の規模は、一辺4.4mの方形と推測される。壁の角度は、東と南は緩く、西と北では25°前後の傾斜である。竪穴内にカマド、柱穴は確認できない。床には建て替え時と考えられる灰白色の粘土質シルトを含む黒褐色や暗灰黄色の粘土（３、４層）が貼られ、堅く締っている。覆土は、暗褐色または黒褐色のシルトで堅く締る。

遺物は出土していない。



第178図　中世主要遺構分布図

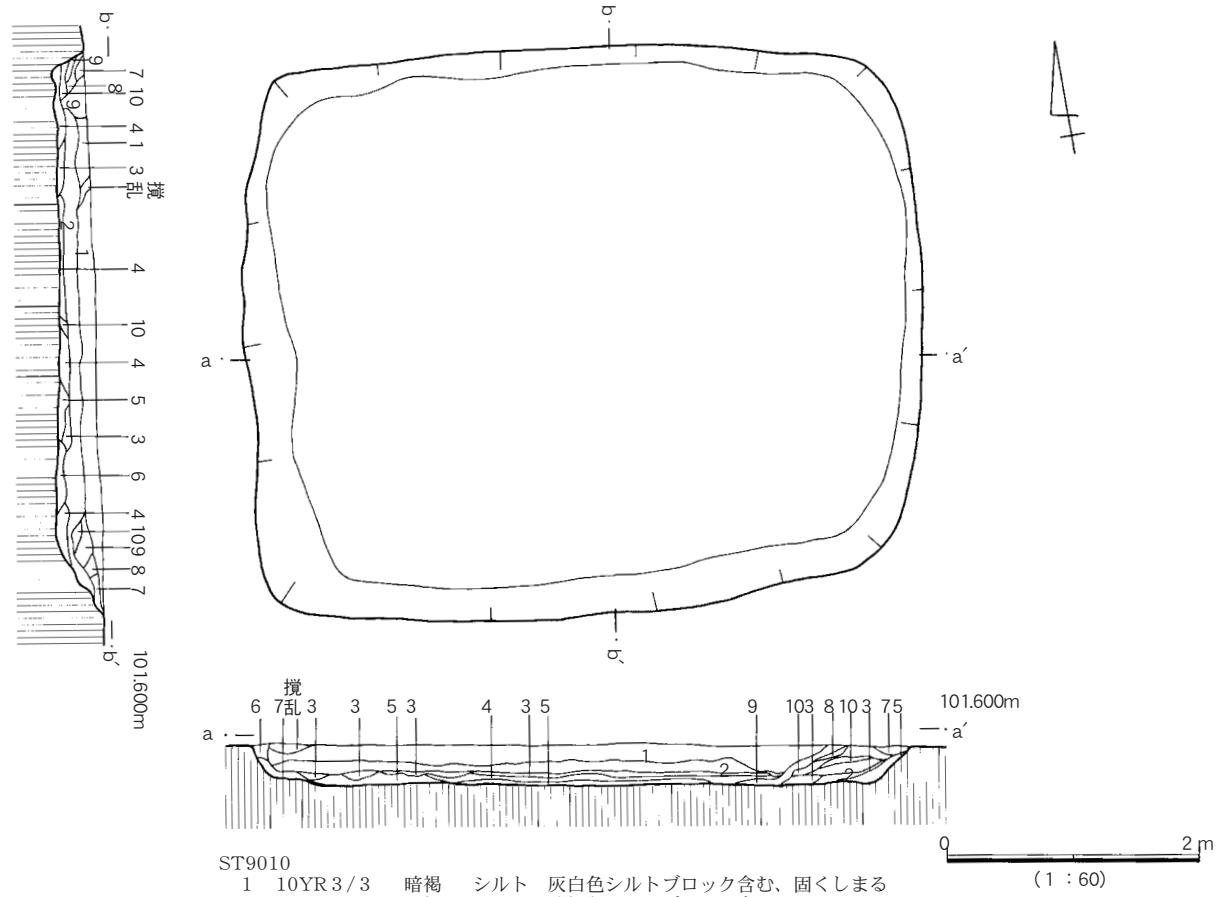
2　掘立柱建物跡

中世に所属する掘立柱建物跡は、18棟におよぶ。そのほとんどが段丘下段の凹地に立地する。分布状況は、奈良・平安時代のように一区画に集中する事なく、広範囲に散在する様子がうかがえる。規模は１間×３間が最も多く、面積は20m²前後の中規模なものが多い。柱穴は、円形または楕円形を呈し、全体的に小さい。建物の方向は、大半が東西棟であり、南北棟は５棟を数えるのみである。また、南北棟の主軸方向は10～20°の振れを持っており、この点においても奈良・平安時代の建物との相違が見られる。

建て替えあるいは重複は最大３期まで確認されるが、多くは建て替えが認められない。しかし、残念ながら建物を構成するに至らなかった柱穴も多数あり、確認されている以上の建物が存在したことは確実と考えられる。

【SB186】第180図

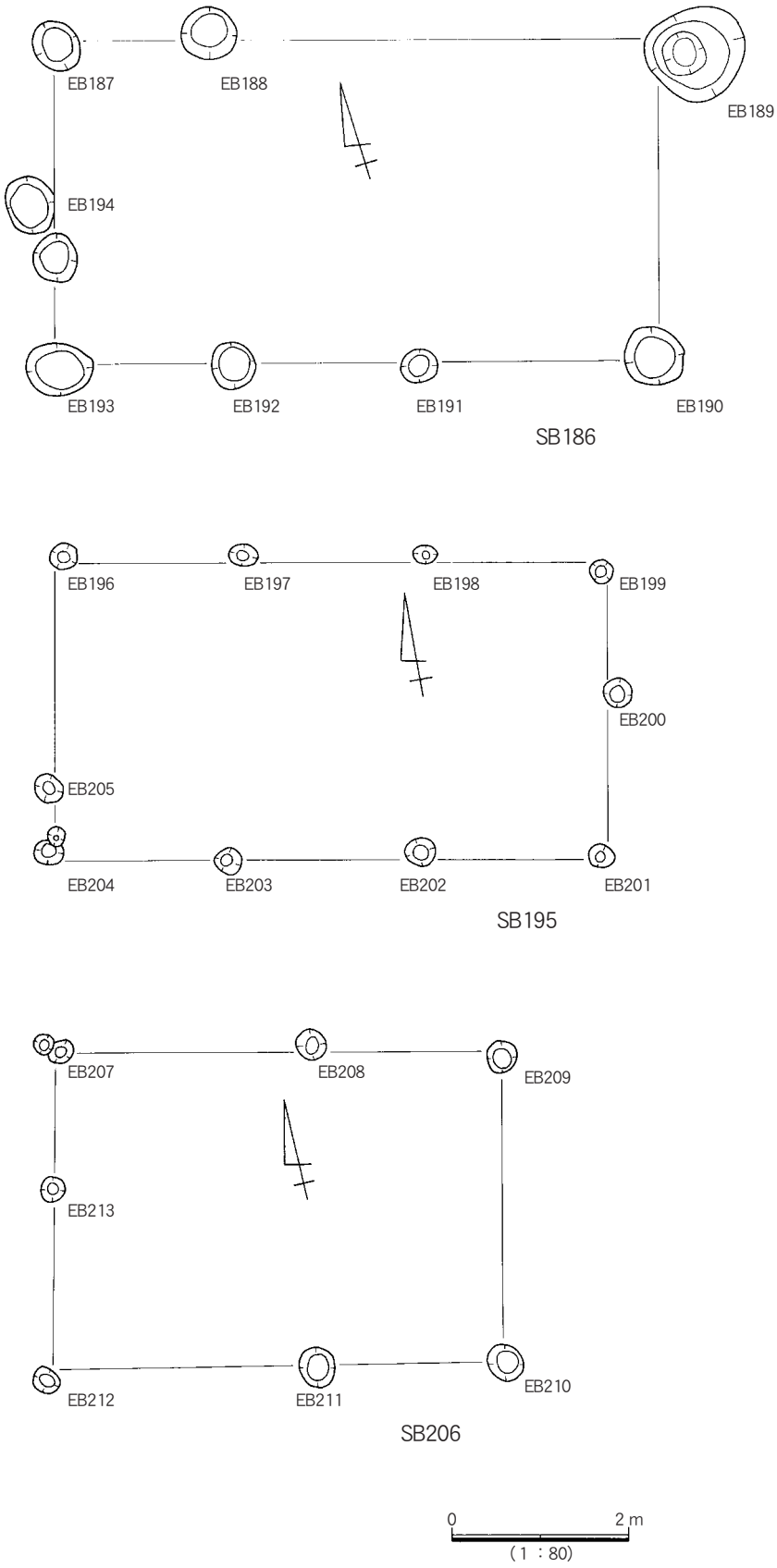
38・39－227・228グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2ｍである。周辺



ST9010

1	10YR３/３	暗褐	シルト	灰白色シルトブロック含む、固くしまる
2	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む
3	10YR３/１	黒褐	粘土	灰白色、暗褐色シルトブロック含む、固くしまる
4	2.5YR５/２	暗灰黄	粘土	灰白色、黒褐色シルト帯状に含む、固くしまる
5	10YR３/１	黒褐	シルト	灰白色、暗褐色シルトブロック含む、固くしまる
6	10YR1.7/１	黒	シルト	黒褐色シルトブロック多量含む、固くしまる
7	10YR７/６	明黄褐	粗砂	やわらかい
8	7.5YR２/１	黒	シルト	小礫微量含む
9	10YR３/１	黒褐	シルト	灰白色シルト粒多量含む、固くしまる
10	2.5YR５/３	黄褐	シルト	灰白色、黒褐色シルト多量含む固くしまる

第179図　ST9010



第180図　SB186、195、206

にはSK9889やSE9890があるが遺構密度は希薄である。建物の構造は、梁行１間、桁行３間の東西棟である。主軸方向はＮ－72°－Ｗである。規模は、梁が3.8m、桁が6.8mを測り、面積は約26m²である。柱心心間の距離は、南側桁で西から2.1m－2.1m－2.6m、北側は柱穴を１基欠き、西側の１間も1.8mと狭い。柱穴は径60cm前後の楕円形で、確認面からの深さは約10cmである。柱穴からの出土遺物は確認されていない。

【SB195】第180図

36・37－223・224グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2mである。SE764とSK858が近接するが、遺構密度は薄い。建物の構造は、梁行１間、桁行３間の東西棟である。主軸方向はＮ－80°－Ｗである。規模は、梁が3.4m、桁が6.2mを測り、面積は約21m²である。柱心心間の距離は、南北桁とも西から2.1m－2.1m－2.0mである。柱穴は、径約38cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。

柱穴からの出土遺物はない。

【SB206】第180図

42・43－207・208グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は再び高くなりはじめる約100.5m上にある。SB815と隣接し、SB824と重複する。その他に、土坑や溝跡、小柱穴などがあり、遺構は比較的密集する。建物の構造は、梁行１間、桁行２間の東西棟である。主軸方向はＮ－75°－Ｗである。規模は、梁が3.6m、桁が5.1ｍを測り、面積は約18m²である。柱心心間の距離は、南北桁とも西から2.9ｍ－2.2ｍを測る。柱穴は径約40㎝前後の楕円形で、深さは約20㎝である。遺構間の新旧関係は、直接切合いがなく不明である。

柱穴からの出土遺物はない。

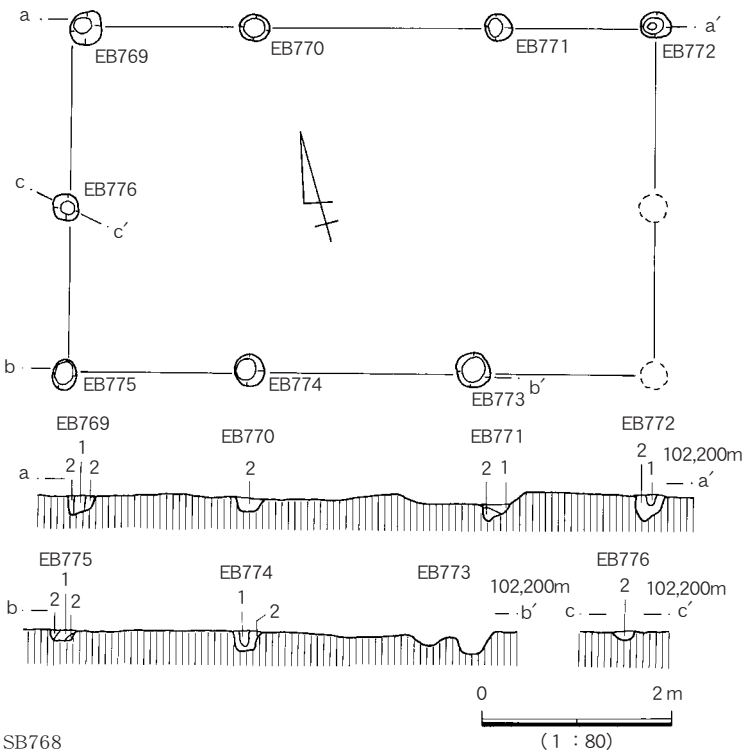
【SB768】第181図

31・32－212～214グリッドに位置する。段丘上段に立地し、標高は約102ｍである。ST9827と重複するが、その他の遺構は希薄で、特に中世に所属すると考えられる遺構はほとんどない。建物の構造は、梁行２間、桁行３間の東西棟である。主軸方向はＮ－72°－Ｗである。規模は、梁が3.6m、桁が6.0ｍで、面積は約24m²である。柱心心間の距離は、梁が1.8ｍ等間、北側桁が西から1.8ｍ－2.5ｍ－1.7ｍ、南側が1.9ｍ－2.4ｍ－1.7ｍを測る。柱穴は、径約30㎝のほぼ円形で、深さは15～20㎝である。EB769、772、774、775の土層断面には、幅15㎝前後の柱痕跡を観察できる。覆土は、黒褐色シルトの単純層である。

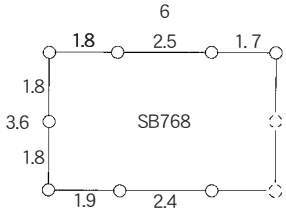
柱穴からの出土遺物はない。

【SB815】第182図

42・43－206・207グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.5ｍである。SB206と隣接し、SB824、SK9593と重複する。周辺の状況はSB206の記述と同様である。建物の構造は、梁行１間、桁行３間の南北棟である。主軸方向はＮ－14°－Ｅである。桁に僅かなずれが生じる。規模は、梁が4.7m、桁が7.6ｍで、面積は約36m²である。柱心心間の距離は、東西桁とも北から2.6ｍ－2.5ｍ－2.5ｍを測る。柱穴は、径



SB768
1　10YR２/２　黒褐　シルト　褐色シルト微量含む、固く締る
2　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色シルトブロック含む



第181図　SB768

30～40㎝のほぼ円形で、深さも30～40㎝である。EB816、817、818、822、823の土層断面には幅16㎝前後の柱痕跡が見られる。覆土は黒褐色シルトの単純層である。遺構間の新旧関係は、直接の切合いがなく不明である。

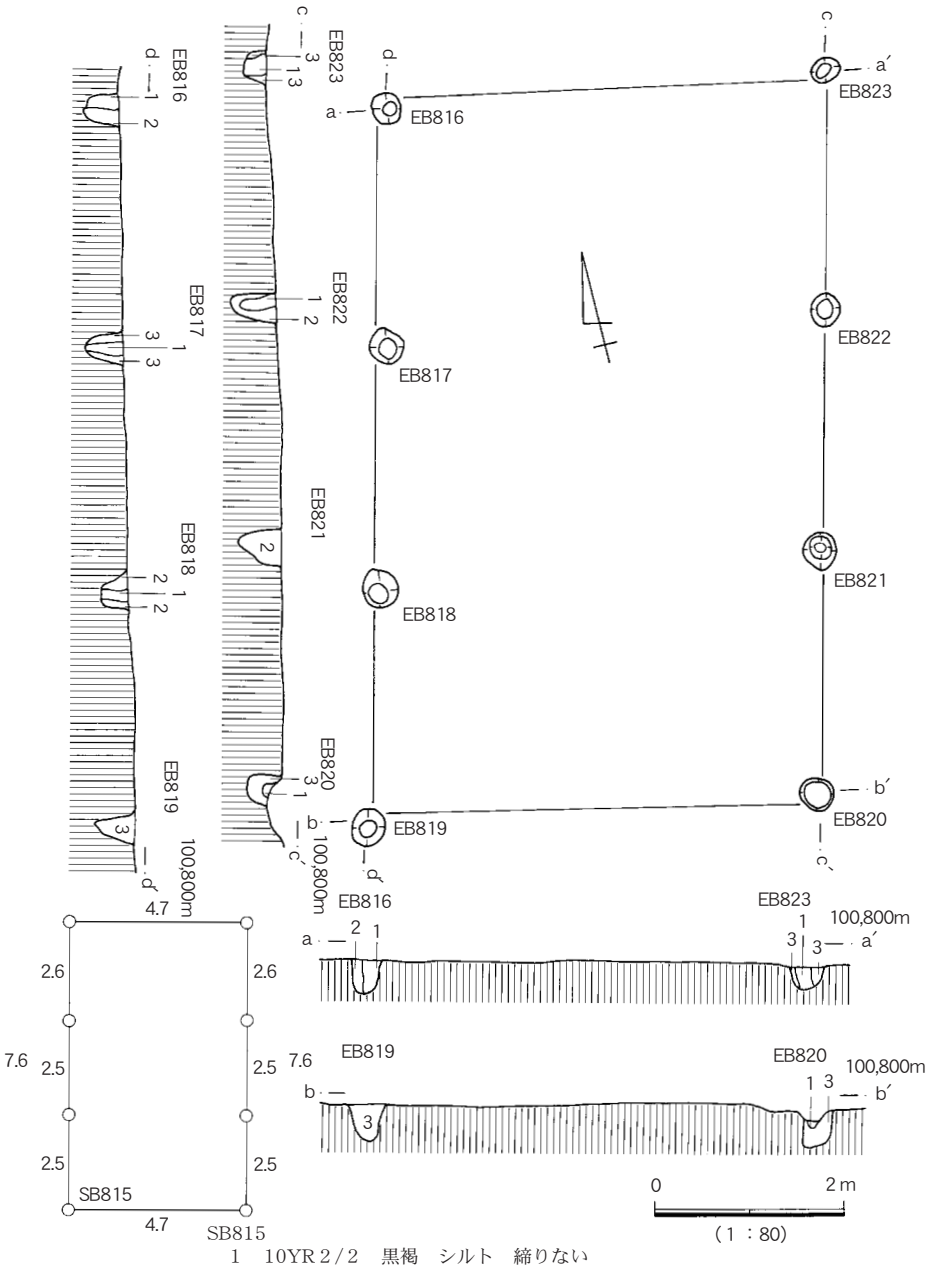
柱穴からの出土遺物は確認されない。

【SB824】第183図

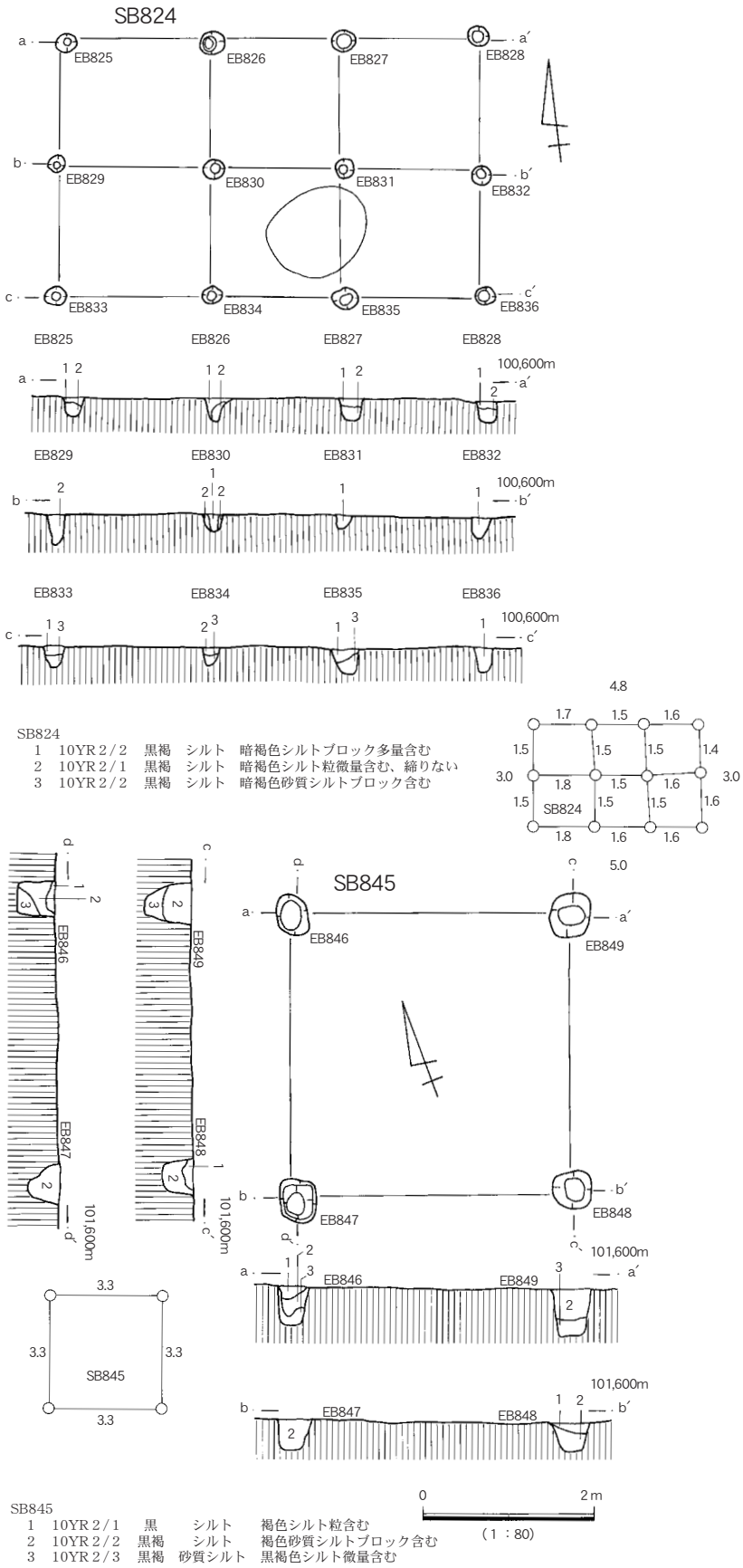
42・43－207・208グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.5ｍである。SB206、815と重複し、SK9593、9594に近接する。周辺の状況はSB206の記述と同様である。建物の構造は、梁行２間、桁行３間の総柱建物で、東西棟である。主軸方向はＮ－83°－Ｗである。規模は、梁が3.0ｍ、北側桁が4.8ｍ、南側が5.0ｍを測り、面積は約15m²である。柱心心間の距離は、西側梁が1.5ｍ等間、東側が北から1.4ｍ－1.6ｍ、北側桁が西から1.7ｍ－1.5ｍ－1.6ｍ、南側が1.8ｍ－1.6ｍ－1.6ｍである。建物内部は概ね1.5ｍの距離が取られるが、EB829と830間は1.8ｍ、EB830と831の間は1.5ｍの間隔があり、柱筋にややずれが生じる。柱穴は、径25～30㎝のほぼ円形で、深さも25～30㎝である。EB830には僅かに柱痕跡を確認することができる。

覆土は、黒褐色を主とする単純層で締まりがない。他遺構との重複関係は前述した通りだが、直接切合いがなく新旧関係は不明である。

柱穴からの出土遺物は確認されない。



第182図　SB815



第183図　SB824、845

【SB845】第183図

41・42－202・203グリッドに位置する。段丘下段に立地し標高は約100.5ｍである。

SD9584、9585、7085溝跡に三方を囲まれるが、周辺にその他の遺構はない。

建物の構造は、東西、南北とも１間である。軸線を南北に仮定した場合の主軸方向は、Ｎ－20°－Ｅである。規模は東西、南北とも3.3ｍの方形で、面積は約10m²である。

柱穴は、径40～50㎝の楕円形を呈し、深さはEB849が50㎝、他は約40㎝を測る。

覆土は、黒褐色を主とする１ないし３層の単純層である。

柱穴からの出土遺物はない。

【SB943】第184図

27・28－195グリッドに位置する。段丘上段に立地し、標高は約101.2ｍである。ST9607、SK9729、SD9581、9815等に近接するが、中世の遺構密度は薄い。

建物の構造は、梁行１間、桁行２間の南北棟である。主軸方向は、Ｎ－20°－Ｅである。

規模は、北側梁が2.3ｍ、南側が2.2ｍ、桁が東西とも4.1ｍを測り、面積は約９m²である。柱心心間の距離は、西側桁で北から2.0ｍ－2.1ｍ、東側で2.2ｍ－1.9ｍである。

柱穴は、径30～40㎝の楕円形

を呈する。深さは30～50㎝とばらつきがあるが、四隅の柱穴が深くなる傾向にある。

覆土は、黒褐色シルトを主とした単純層である。他の遺構との重複は認められず、柱穴からの出土遺物も確認できない。

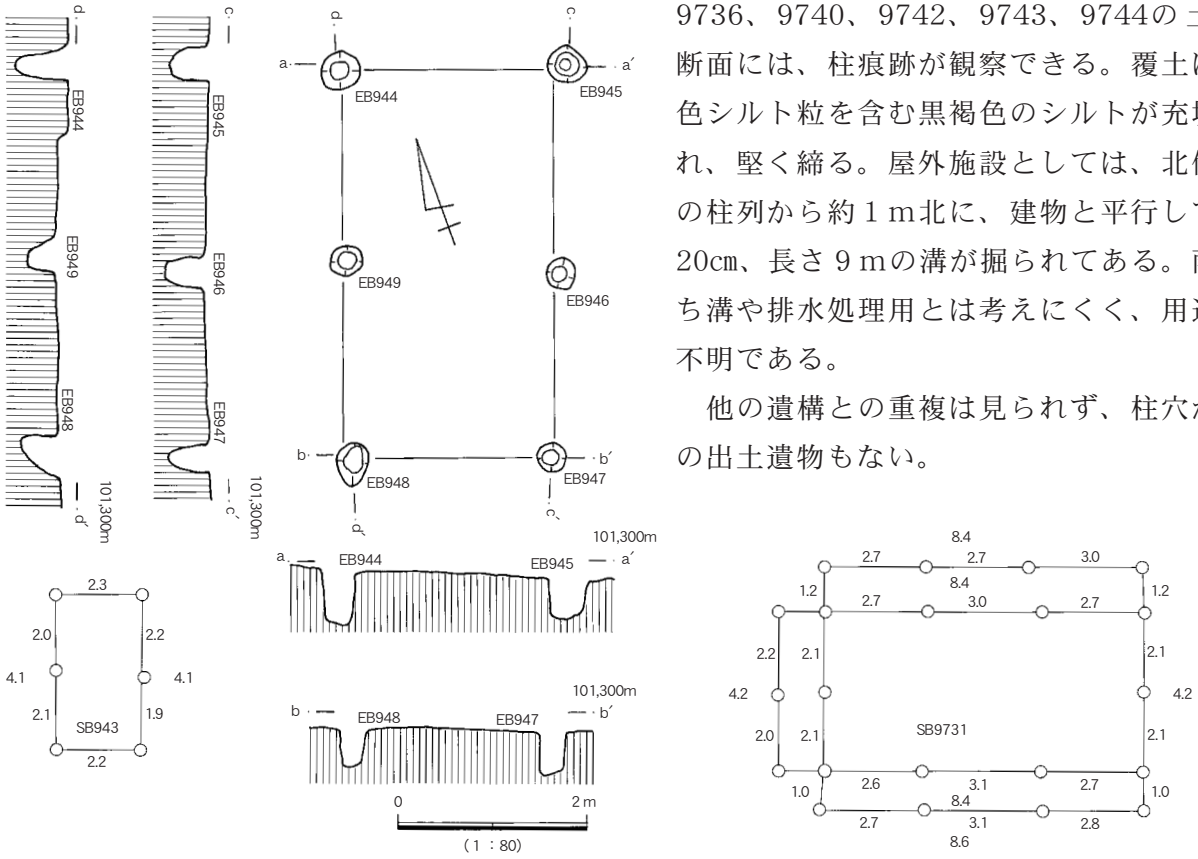
【SB9731】第185図

34～36－205・206グリッドに位置する。段丘直下に立地し、標高は約100.4ｍである。SD7085、9580、9587によって囲まれ、SK960、9810に隣接する。遺構密度は希薄である。

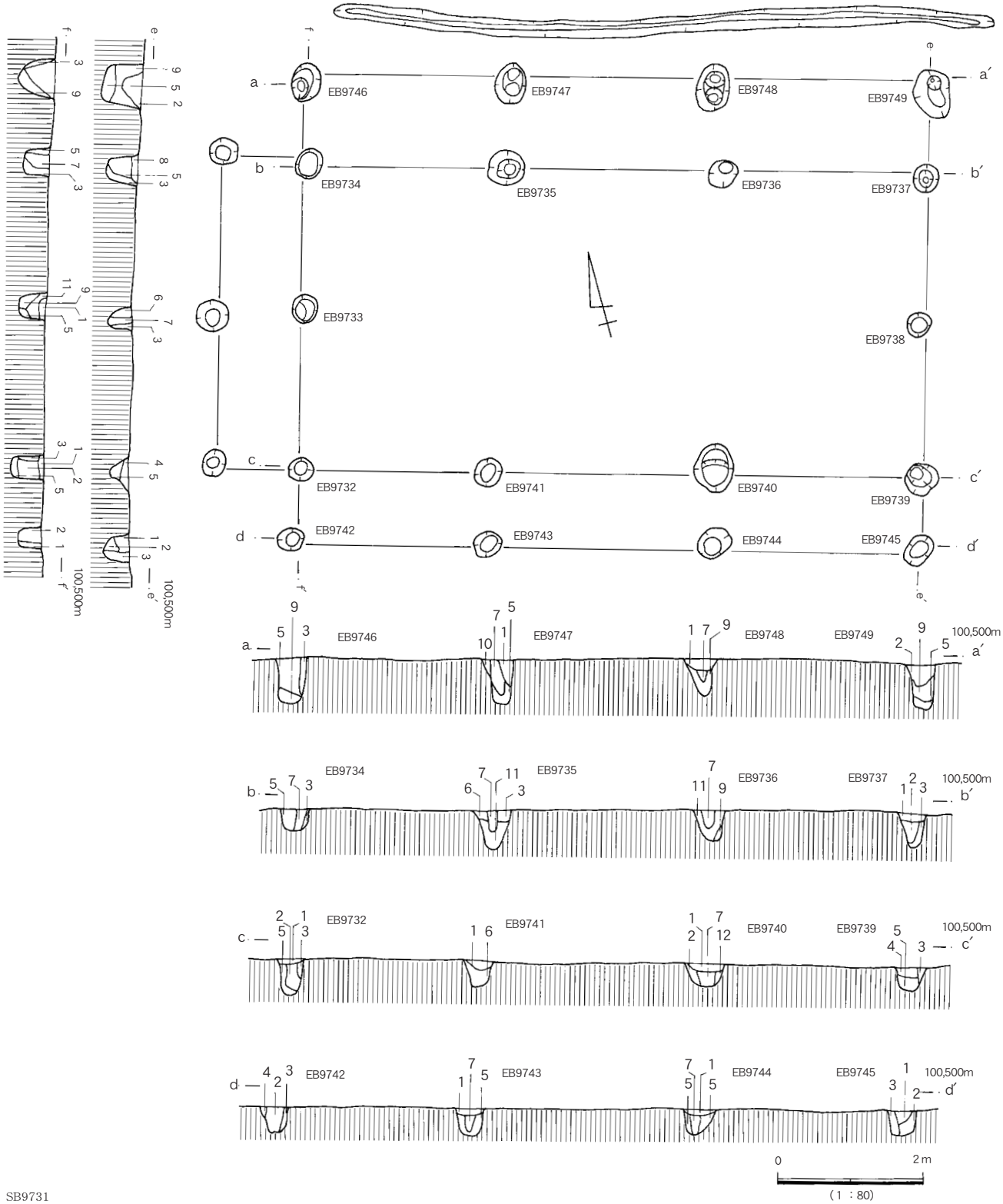
建物の構造は、梁行２間、桁行３間の東西棟の身舎に、南、北、西の三面に庇を付設したものである。主軸方向はＮ－76°－Ｗである。身舎の規模は、梁が東西とも4.2ｍ、桁も南北とも8.４ｍを測り、面積は約35㎡である。柱心心間の距離は、梁が2.1ｍ等間、北側桁が西から2.7ｍ－3.0ｍ－2.7ｍ、南側が2.6ｍ－3.1ｍ－2.7ｍを測る。庇については、北と西側が身舎から1.2ｍ、南側は1.0ｍ離れる。柱心心間の距離は、身舎のものとは異なり、柱筋に若干のずれが生じる。また、南側について東西の長さが8.6ｍあり、身舎より僅かに長くなる。

柱穴は、径40㎝前後の円形のものが大半を占めるが、北側庇の柱穴は、長軸約60㎝の楕円形を呈する。これらの柱穴にはEB9747、9748のように、柱痕跡が２個認められるものがあり、改築されたことが推測される。深さは浅いもので約30㎝、深いもので約60㎝を測るが、多くは約40㎝のものである。EB9734、9735、9736、9740、9742、9743、9744の土層断面には、柱痕跡が観察できる。覆土は黒色シルト粒を含む黒褐色のシルトが充填され、堅く締る。屋外施設としては、北側庇の柱列から約１ｍ北に、建物と平行して幅20㎝、長さ９ｍの溝が掘られてある。雨落ち溝や排水処理用とは考えにくく、用途は不明である。

他の遺構との重複は見られず、柱穴からの出土遺物もない。



第184図　SB943



SB9731

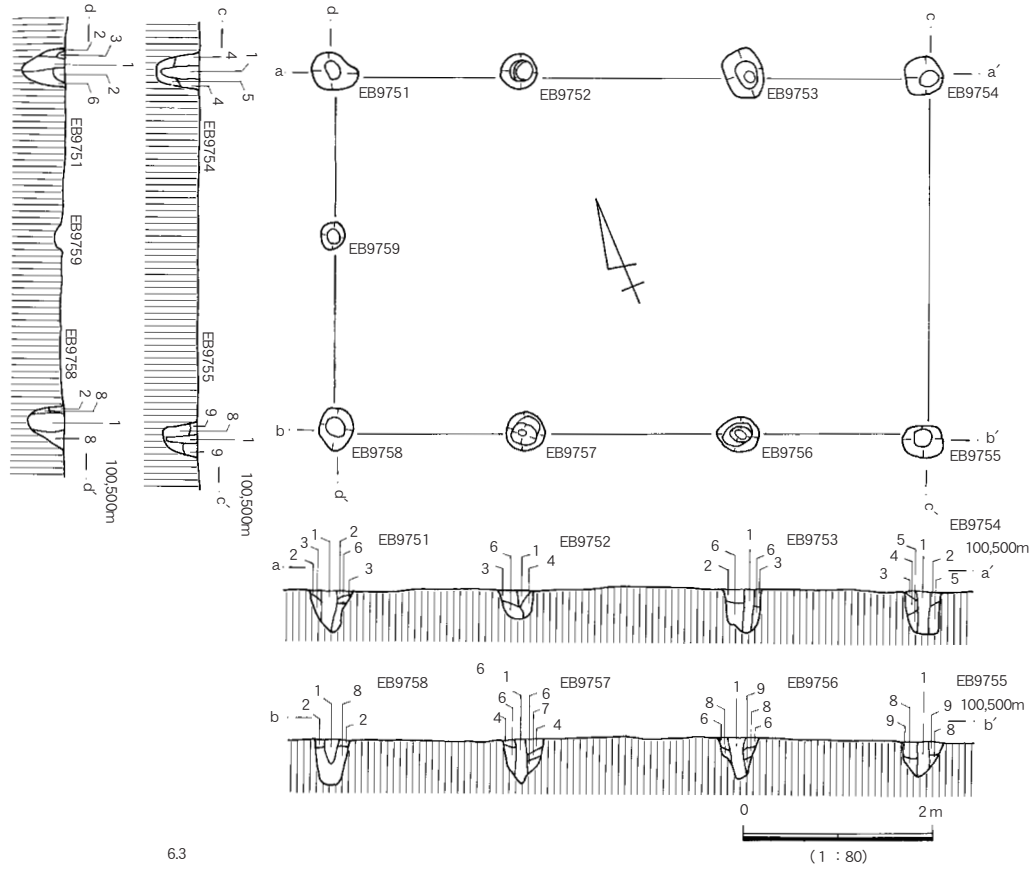
1	10YR 2/1	黒褐	シルト	褐色シルト粒多量含む
2	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒色、褐色シルト粒多量含む
3	10YR 3/1	黒褐	シルト	黒色シルトを帯状に含む
4	10YR 2/1	黒	シルト	均質、やわらかく締りない
5	10YR 2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む、固く締る
6	10YR 3/1	黒褐	シルト	均質、やわらかい
7	10YR 3/1	黒褐	シルト	褐色砂質シルト粒少量含む
8	10YR 3/1	黒褐	シルト	黒色シルト粒少量含む、粘性、固く締る
9	10YR 3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒を帯状に含む、締りない
10	10YR 4/4	褐	シルト	黒色シルトを帯状に含む、やわらかい
11	10YR 2/1	黒	シルト	褐色シルト粒含む、固く締る
12	10YR 3/3	暗褐	シルト	砂質シルトを少量含む、固く締る

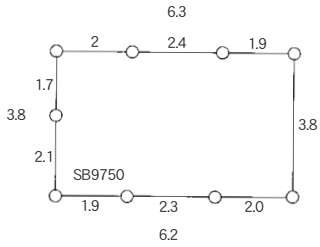
第185図　SB9731

【SB9750】第186図

38・39－210～212グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。SD9584、9587溝跡に囲まれ、SK9597に隣接する。遺構密度は濃くないが、まとまりがある。

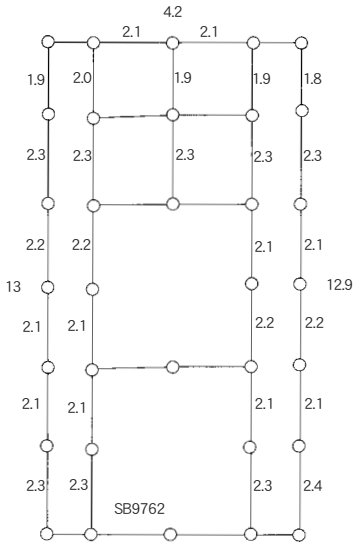
建物の構造は、基本的には梁行１間、桁行３間の南北棟と考えられるが、西側梁の中程には小柱穴があり、東側には梁の柱筋から外れた地点に小柱穴が検出されている。SB9750に伴う





SB9750

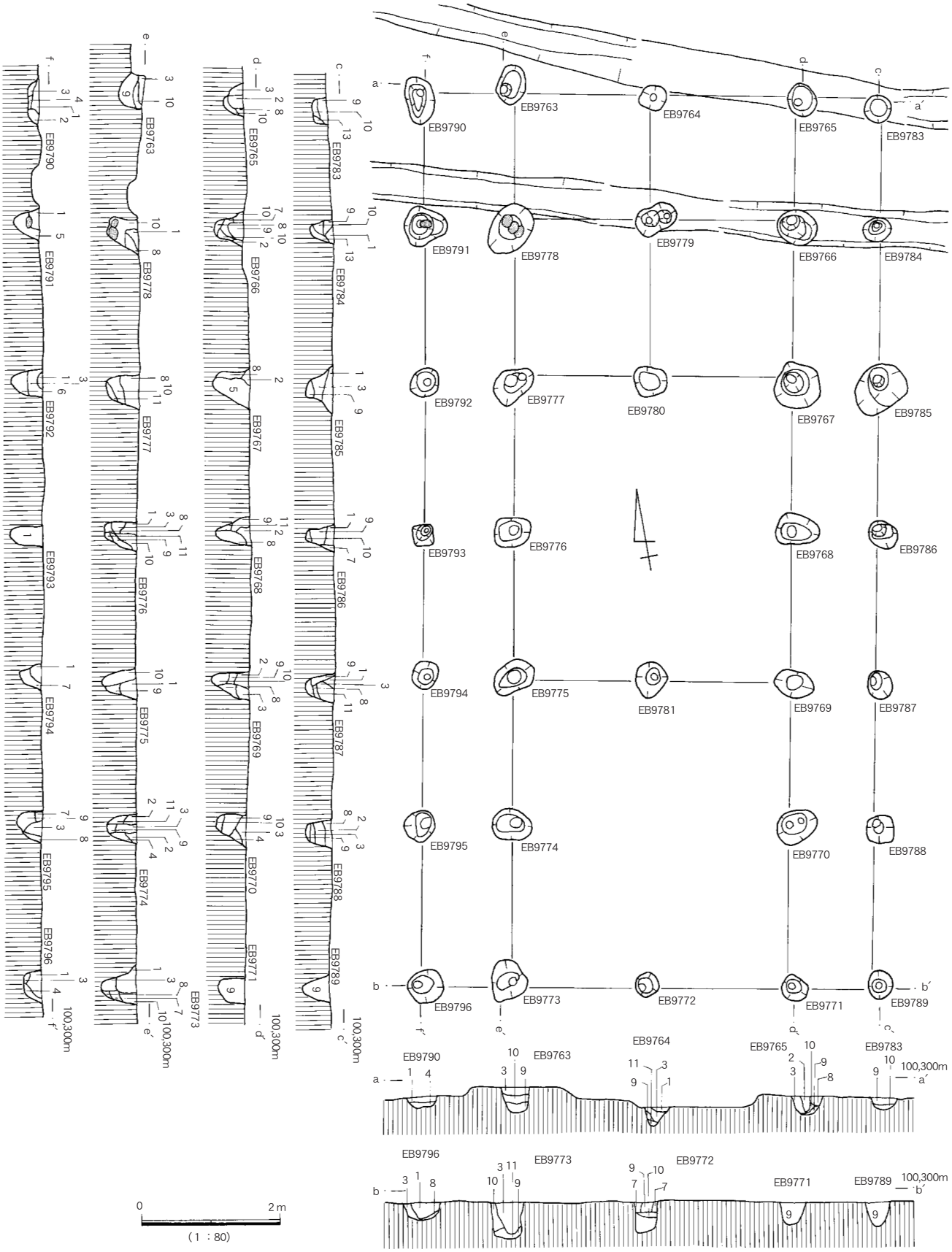
1	10YR３/１	黒褐	シルト	均質、やわらかく締りない
2	10YR３/１	黒褐	シルト	褐色シルトを帯状に含む、やわらかい
3	10YR３/１	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
4	10YR３/１	黒褐	シルト	褐色シルトを帯状に含む
5	10YR２/２	黒褐	シルト	黒色、褐色シルト粒少量含む、固く締る
6	10YR３/４	暗褐	シルト	黒色シルト粒微量含む
7	10YR２/１	黒	シルト	均質、やわらかくもろい
8	10YR３/２	黒褐	シルト	褐色砂質シルト粒少量含む、やわらかい
9	10YR２/２	黒褐	シルト	均質、固く締る



SB9762

1	10YR２/２	黒褐	シルト	均質、粘性、締りない
2	10YR３/２	黒褐	シルト	均質、粘性
3	10YR３/１	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
4	10YR３/３	暗褐	シルト	黒褐色シルト少量含む
5	10YR３/１	黒褐	シルト	褐色シルトを帯状に多量含む、締りない
6	10YR３/４	暗褐	シルト	黒色シルトを帯状に多量含む、締りない
7	10YR４/３	にぶい黄褐	砂質シルト	均質
8	10YR３/４	暗褐	砂質シルト	褐色シルト粒少量含む
9	10YR２/１	黒	粘質シルト	褐色シルト粒含む、固く締る
10	10YR３/１	黒褐	シルト	褐色砂質シルト粒多量含む
11	10YR３/２	黒褐	砂質シルト	均質
12	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色砂質シルト粒多量含む
13	10YR２/１	黒	粘土	均質、締りない

第186図　SB9750



第187図　SB9762

ものとは断定できないが、棟持柱になる可能性も考えられる。主軸方向はＮ－67°－Ｗである。規模は、梁が東西とも3.8m、北側桁が6.3m、南側が6.2mを測り、面積は約24m²である。柱心心間の距離は、北側桁で西から2.0m－2.4m－1.9m、南側で1.9m－2.3m－2.0mである。柱穴は、径40～50cmの楕円形を呈し、深さはEB9752が30cmと浅い以外は、ほぼ40cmである。また、土層断面には、遺存度の良、不良はあるが、全ての柱穴で柱痕跡が確認できた。

覆土は褐色シルトを含む黒褐色シルトを主として充填するが、比較的柔らかい。他の遺構との重複はなく、柱穴からの出土遺物もない。

【SB9762】第187図

34～37－191～193グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2mである。SB9971に隣接し、SD9578、9579と重複する。柱穴も数多く検出されており、中世の遺構が密集する地点である。

建物の構造は、梁行２間、桁行６間の南北棟の身舎に、東西二面の庇を付設したものである。また、北から一間目と二間目、四間目には各々中間に柱が設けられ、間仕切りが取られていた可能性も考えられる。主軸方向はＮ－15°－Ｅである。身舎の規模は、梁が南北とも4.2m、桁が西側で13.0m、東側で12.9mを測り、面積は約55m²である。柱心心間の距離は、梁で南北とも2.1m等間、西側桁は北から2.0m－2.3m－2.2m－2.1m－2.1m－2.3m、東側は1.9m－2.3m－2.1m－2.2m－2.1m－2.3mを測る。一方庇は、身舎の柱列から1.2mの間隔を置く。柱心心間の距離は、西側で北から1.9m－2.3m－2.2m－2.1m－2.1m－2.3m、東側で1.8m－2.3m－2.1m－2.1m－2.1m－2.4mを測り、僅かな違いはあるが、ほぼ柱筋に沿っている。

柱穴は、径30～50cmの楕円形で、平面形は統一性に欠け不揃いである。深さは身舎の柱穴で40～50cm、庇のもので30cm前後を測る。EB9778、9791の底面には、径15cm程の礫が１ないし３個置かれる。土層断面に柱痕跡が確認できるものはほとんどないが、大半の底面には径16cm前後の硬化した柱痕跡が認められる。

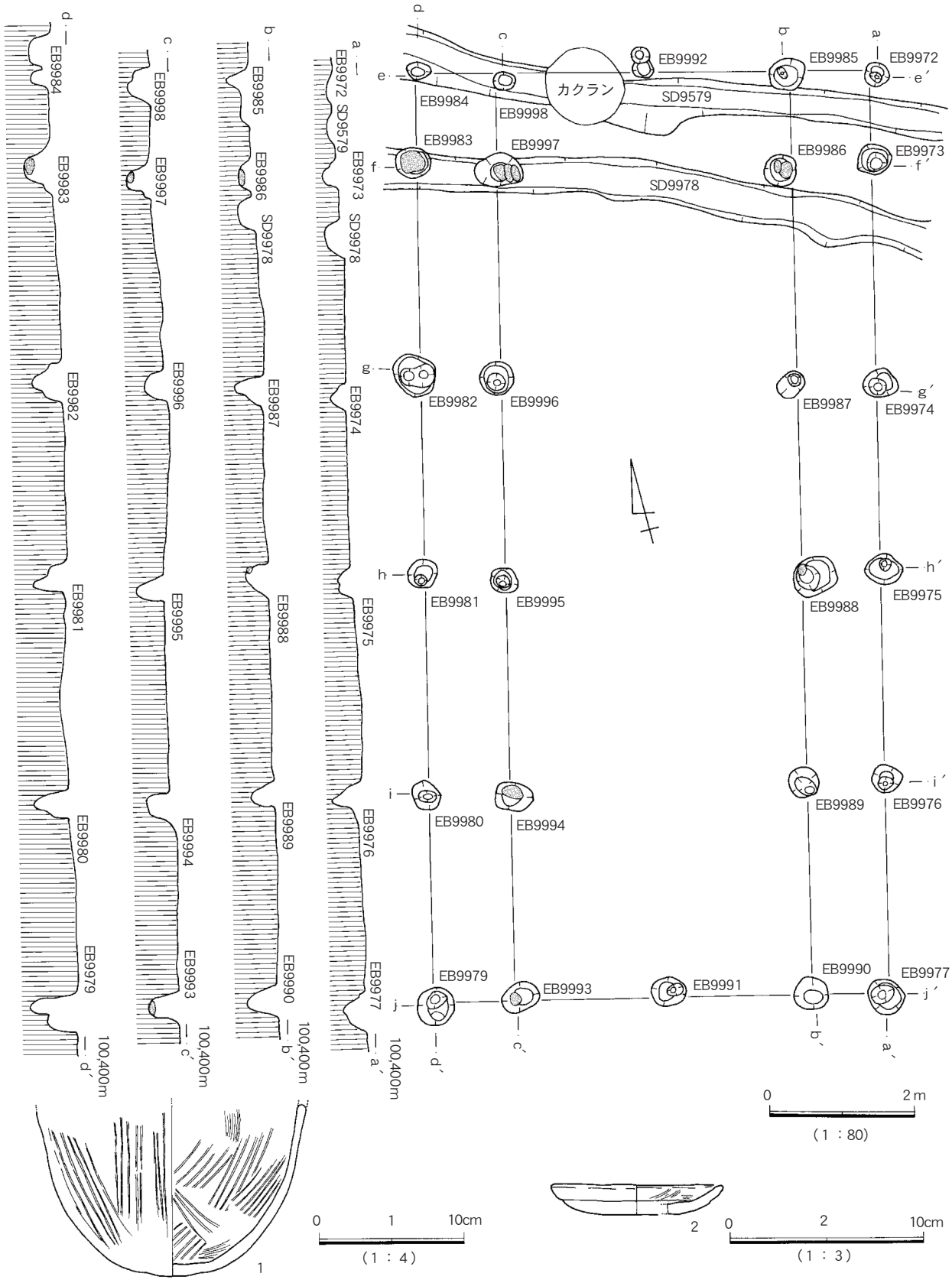
覆土は、褐色シルトをを含む黒褐色シルトを主とし、全体的に柔らかく締りない。遺構間の重複では、SB9762→SD9578、9579の新旧関係が認められる。

出土遺物は、EB9767、9790から各々土師器甕片が数点出土している。

【SB9971】第188図

34～36－189・190グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2mである。西約10mにSB9762、東約10mにSE9961がある。また、SD9578、9579と重複し、SB9762と同様に溝の方が新しいことが確認されている。その他、建物跡の内外に数多くの柱穴が検出されており、重複する複数の建物が存在したと推測される。

建物の構造は、梁行２間、桁行５間の南北棟の身舎に、東西二面の庇を付設したものであるが、北側一間が1.2mと狭く、東西の庇程の幅しか持たない事から、北にも庇を付設した南北４間の建物である可能性が高い。主軸方向はＮ－13°－Ｅである。身舎を２×４とした場合の規模は、梁が南北とも4.0m、桁が東西とも11.5mを測り、面積は約46m²である。柱心心間の距離は、梁が2.0m等間、桁が北から2.9m－2.8m－2.9m－2.9mを測り、東西とも同じ距離が取



第188図　SB9971　出土遺物

表74　SB9971出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
188	1	土師器	甕				5.5	砂粒混入	良	10YR6/8黄橙	ハケメ	ハケメ		EK777
	2	かわらけ	皿	(88)		15	6	緻密	良		ナデ	ハケメ		

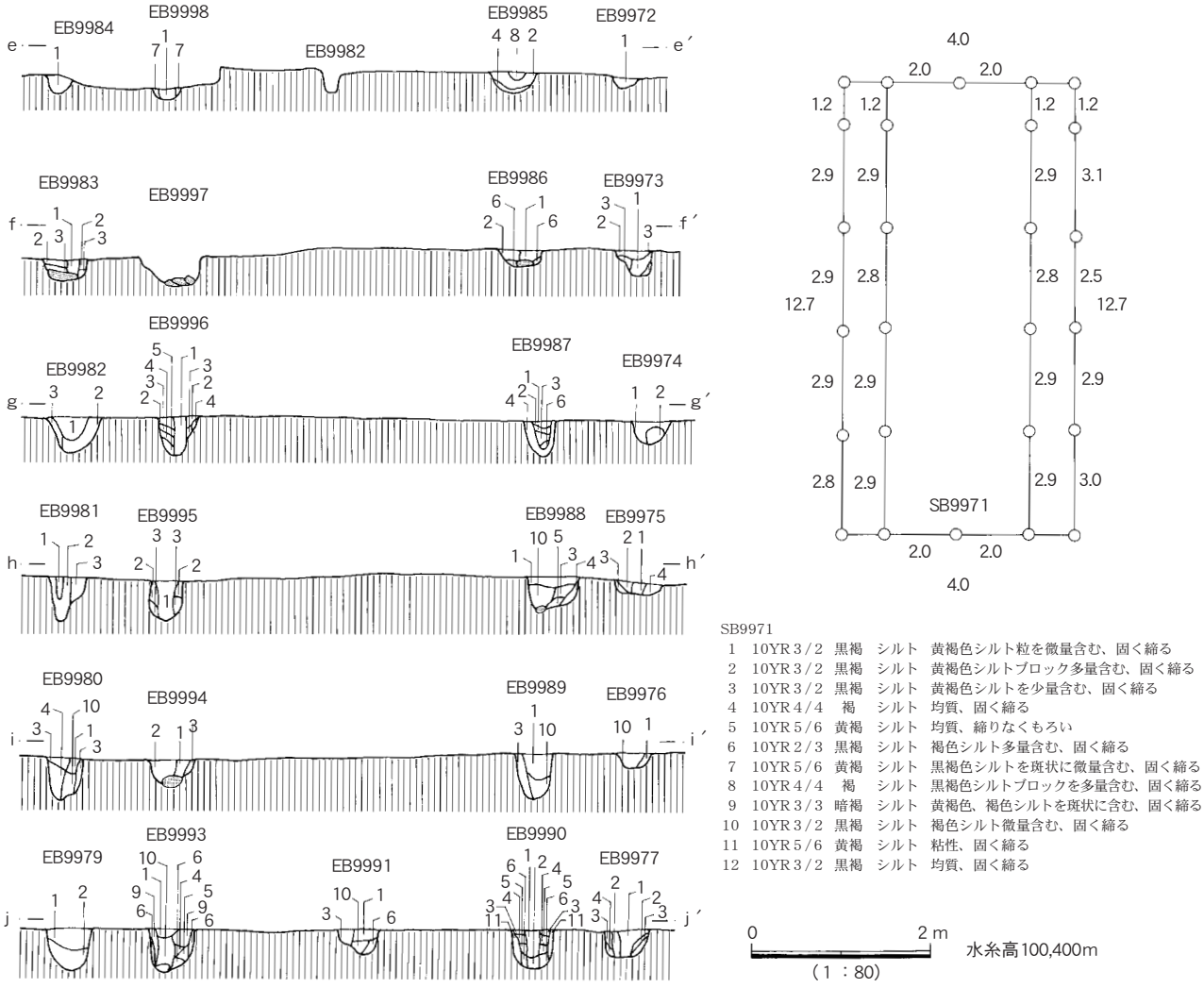
られる。庇の可能性がある北側一間についても、全て1.2ｍの距離である。

庇については、西側の北から2.9ｍ－2.9ｍ－2.9ｍ－2.8ｍ、東側が3.1ｍ－2.5ｍ－2.9ｍ－2.9ｍである。身舎の柱筋とは僅かなずれが生じる。

柱穴は、径40～60㎝の楕円形を呈するが、50㎝前後のものが主体を成し、平面形は不揃いである。深さは、身舎の柱穴で40～50㎝を測り、西側庇も同程度の計測値を示すが、東側庇については20㎝程の深さである。EB9983、9986、9989、9993、9994、9997の底面には、径15㎝程の礫が１～３個置かれる。なお､EB9983については径35㎝程の扁平な礫が１個置かれていた。また、EB9973、9975、9980、9983、9986、9990、9994、9995、9996の土層断面には、幅16㎝程の柱痕跡が確認できる。

覆土は、黄褐色シルトを含む黒褐色のシルトが充填され、堅く締っている。遺構間の重複では、SB9762→SD9578、9579の新旧関係が認められる。

出土遺物は、EB973から須恵器無台坏２点、土師器甕５点（188－１）、EB9980から須恵器無台坏２点、かわらけ１点(188－２)である。



SB9971

1	10YR３/２	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒を微量含む、固く締る
2	10YR３/２	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
3	10YR３/２	黒褐	シルト	黄褐色シルトを少量含む、固く締る
4	10YR４/４	褐	シルト	均質、固く締る
5	10YR５/６	黄褐	シルト	均質、締りなくもろい
6	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルト多量含む、固く締る
7	10YR５/６	黄褐	シルト	黒褐色シルトを斑状に微量含む、固く締る
8	10YR４/４	褐	シルト	黒褐色シルトブロックを多量含む、固く締る
9	10YR３/３	暗褐	シルト	黄褐色、褐色シルトを斑状に含む、固く締る
10	10YR３/２	黒褐	シルト	褐色シルト微量含む、固く締る
11	10YR５/６	黄褐	シルト	粘性、固く締る
12	10YR３/２	黒褐	シルト	均質、固く締る

第189図　SB9971土層断面

188－１は丸底の土師器長胴甕である。本調査区で出土した長胴甕には、底部の中央が盛り上がるタイプのものは多く見受けられるが、基本的に平底を作り出したものであり、他に例を見ないタイプである。底部成形は叩き出しによるものと推測される。体部は幾分開いて上方に立ち上がるが、開きは小さい。外面は火熱により器面が剥離するが、縦方向のハケメが認められる。内面は幅の広いハケメがランダムに入れられる。

188－２は手づくね成形によるかわらけである。１段ナデにより、底面と体部に段を有する。口縁部は体部から直線的に延びる。底面はユビオサエ、体部はヨコナデによる。内底面には僅かにハケメの痕跡が認められる。12世紀後半以降の所産と考えられる。

【SB9211】第190図

43・44－250～252グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。SB9264、ST9010に隣接する他、多くの柱穴や土坑、溝等が検出されており、中世の遺構が最も密集する地区である。

建物の構造は、梁行１間、桁行３間の東西棟である。主軸方向は、Ｎ－82°－Ｗである。規模は梁が3.3m、桁が6.4mを測り、面積は約21m^{2}である。柱心心間の距離は、西側桁で北から2.1m－2.2m－2.1m、東側で2.1m－2.3m－2.0mである。

SB9211を構成する柱穴は、東桁をEB9212、9213、9214、9215、西桁はEB9216、9217、9218、9219である。これらの柱穴は、径40～50㎝の不揃いな楕円形を呈し、深さは40～50㎝を測る。EB9213、9214の土層断面には柱痕跡が認められる。

覆土は、黒褐色のシルトを主体とするが、黄褐色や暗褐色のシルトブロックを斑状に混入し、堅く締っている。遺構間の重複では、SB9220とほぼ重なる状態での重複が認められる。構造、規模とも同じ様相を示すことから、建て替えによるものと考えられる。柱穴の切り合いから、SB9220→SB9211の新旧関係が認められる。また、近接するSB9264の北東部と重複する位置にあり、EB9212と9216がSB9264の庇部の柱穴と重なる可能性も考えられる。

柱穴からの出土遺物は、EB9218からのかわらけ１点（190－１）である。

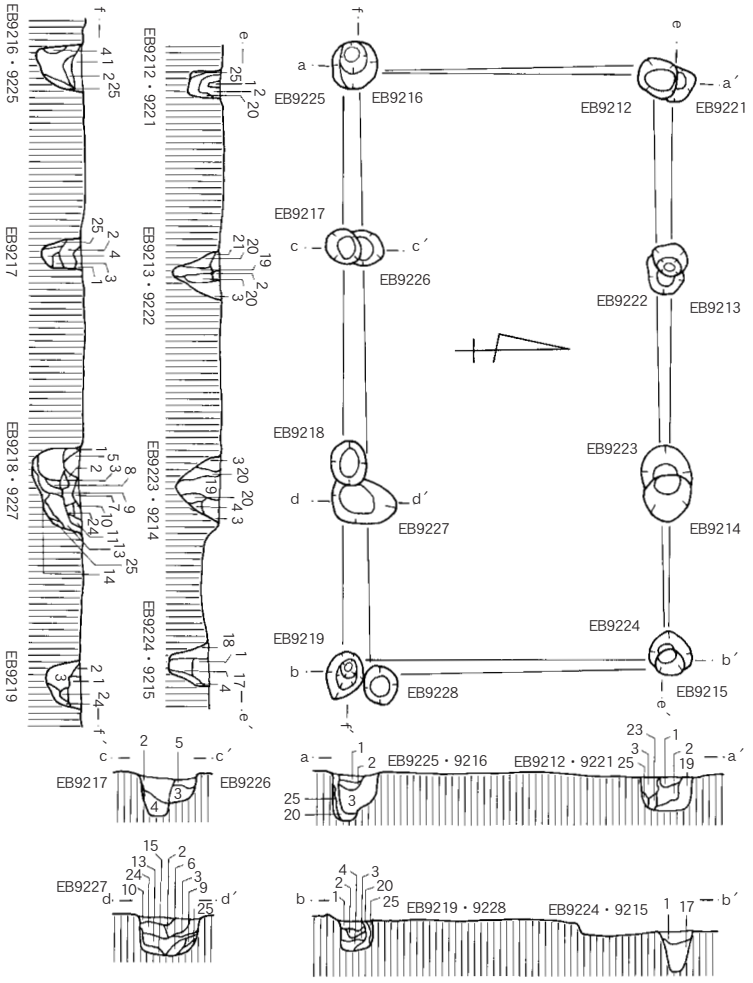
190－１は手づくね成形によるかわらけである。１段ナデにより、体部に僅かな段を有する。口縁部は面取りされるが、面が窪まない面取りで、ナデも弱く不明瞭である。底面にはユビオサエが認められる。器厚は全体的に厚い。13世紀代の所産と考えられる。

【SB9220】第190図

43・44－250～252グリッドに位置する。周辺の環境はSB9211で記述した通りである。

建物の構造は、梁行１間、桁行３間の東西棟である。主軸方向は、Ｎ－84°－Ｗである。規模は梁が3.5m、桁が6.3mを測り、面積は約22m^{2}である。柱心心間の距離は、西側桁で北から1.8m－2.7m－1.8m、東側で2.1m－2.3m－1.9mである。

SB9220を構成する柱穴は、東桁をEB9221、9222、9223、9224、西桁はEB9225、9226、9227、9228である。これらの柱穴は、重複するSB9211を構成する柱穴によって多くが壊されているが、概ね径40～50㎝の不揃いな楕円形を呈する。深さは、30～50㎝でSB9211の柱穴より幾分浅いものが多い。



SB9971

1	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック、黄褐色シルト含む、固く締る
2	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
3	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック少量含む、固く締る
4	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
5	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、固く締る
6	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
7	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
8	10YR4/6	褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固く締る
9	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、固く締る
10	10YR4/4	褐	シルト	黒褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
11	10YR2/1	黒	シルト	暗褐色シルト粒微量含む、固く締る
12	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック微量含む、やわらかい
13	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック含む、固く締る
14	10YR4/4	褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック含む、固く締る
15	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、固く締る
16	10YR4/4	褐	砂質シルト	黒褐色シルトブロック含む、固く締る
17	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固く締る
18	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒微量含む、固く締る
19	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、暗褐色シルト含む、固く締る
20	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固く締る
21	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む、固く締る
22	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック微量含む、固く締る
23	10YR4/4	褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、固く締る
24	10YR4/6	褐	シルト	黒褐色、暗褐色シルトブロック少量含む、固く締る

0　10cm
（1：3）

0　2m
（1：80）
水糸高100,400m

第190図　SB9220、SB9211　出土遺物

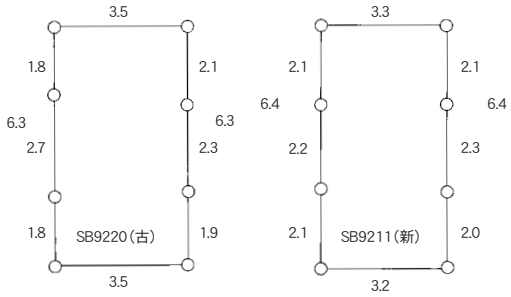


表75　SK9211出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調
190	1 かわらけ	皿	(130)	(60)	26	7	緻密	良	7.5YR8/4浅黄橙

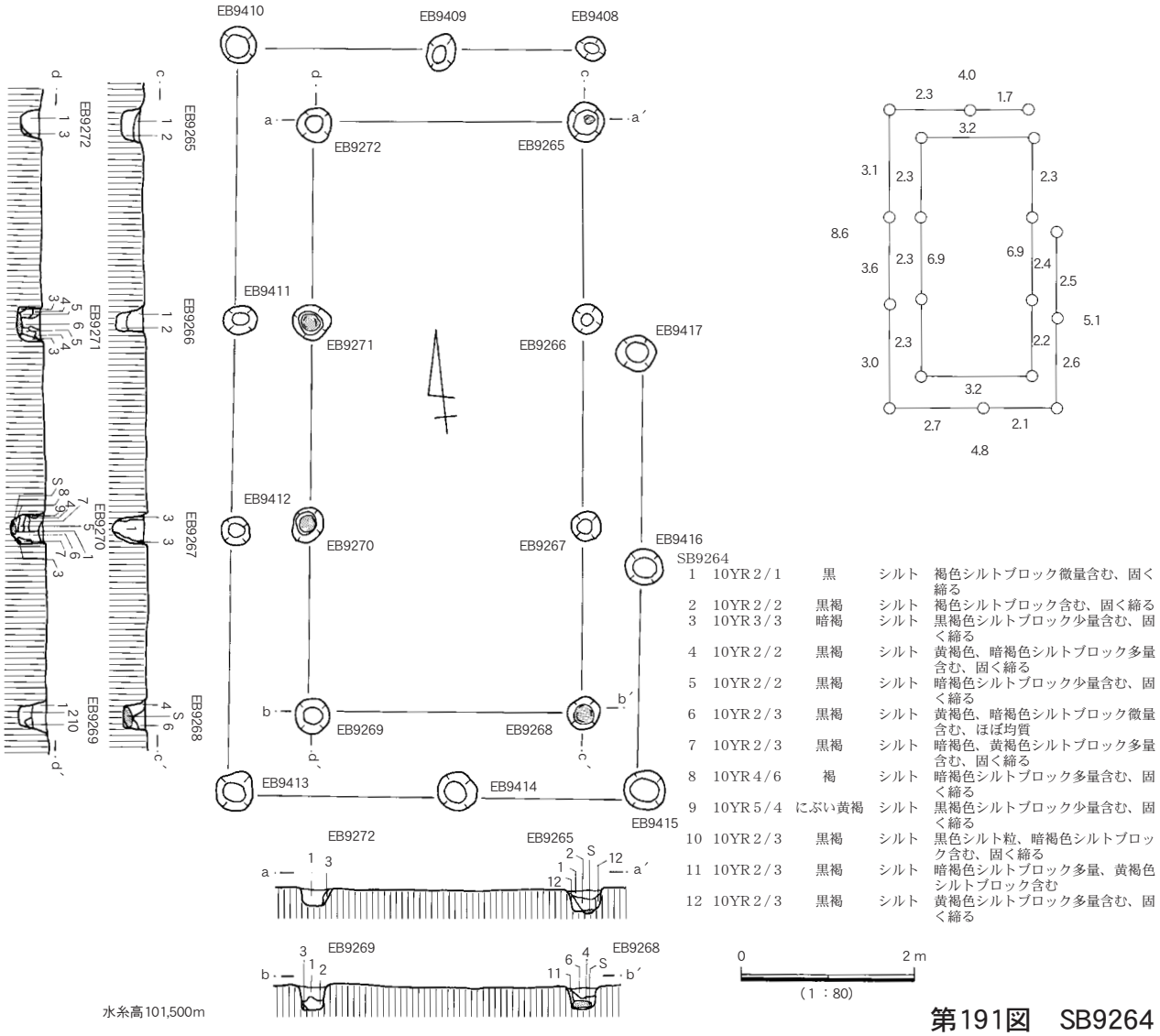
外面	内面	底部	備考
ナデ	ナデ	ナデ	

覆土は、暗褐色のシルトブロックを斑状に含む黒褐色シルトを主とし、堅く締っている。遺構間の重複関係は、前述したSB9211と9264との新旧関係がある。出土遺物はない。

【SB9264】第191図

43～45－251・252グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約101.4mである。SB9211、9220、ST9010に隣接する。中世の遺構が密集する地区である。

建物の構造は、梁行１間、桁行３間の南北棟の身舎に、四面に庇が付設されたものである。



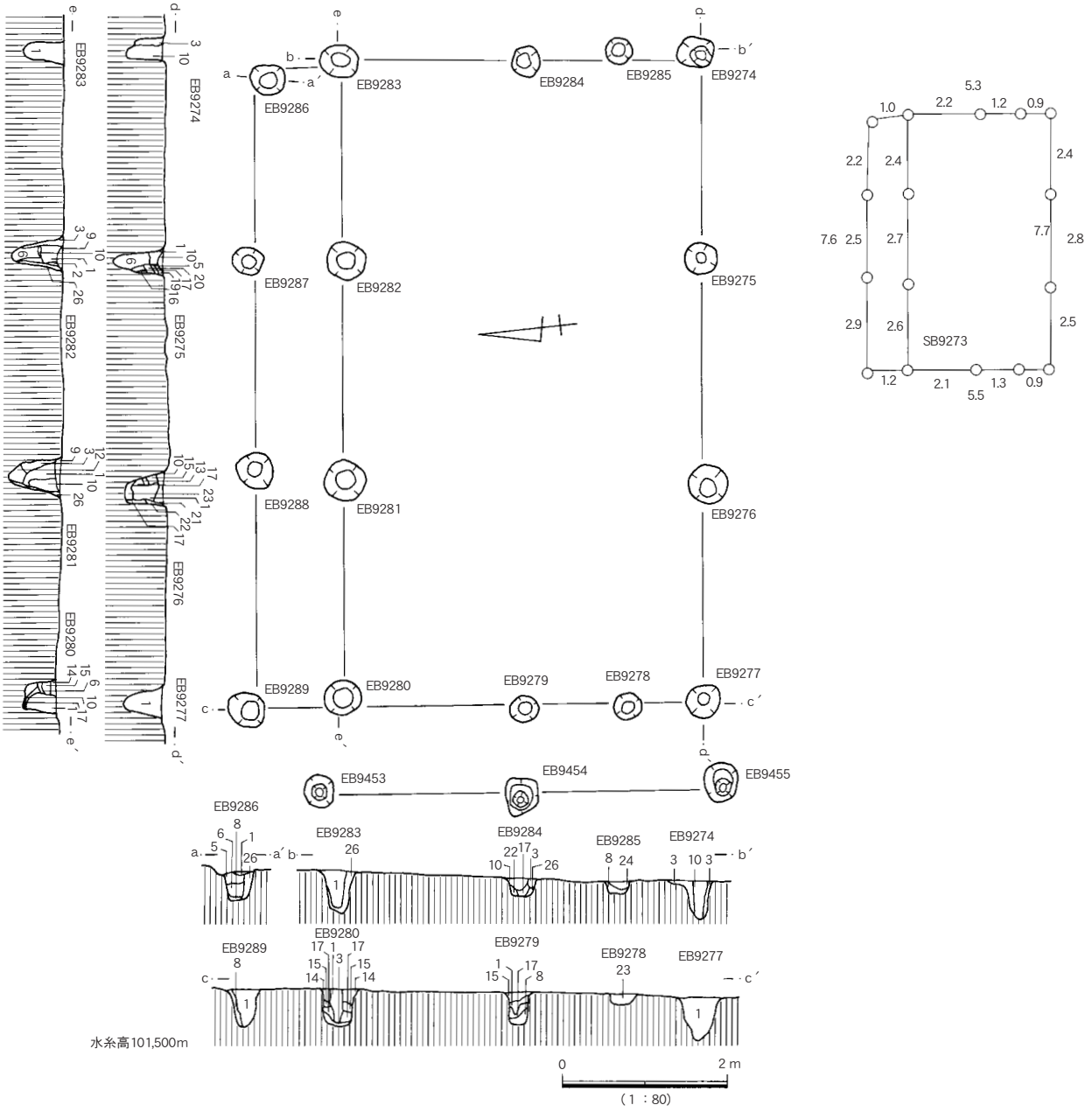
1	10YR2/1	黒	シルト	褐色シルトブロック微量含む、固く締る
2	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロック含む、固く締る
3	10YR3/3	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固く締る
4	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色、暗褐色シルトブロック多量含む、固く締る
5	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固く締る
6	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色、暗褐色シルトブロック微量含む、ほぼ均質
7	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
8	10YR4/6	褐	シルト	暗褐色シルトブロック多量含む、固く締る
9	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固く締る
10	10YR2/3	黒褐	シルト	黒色シルト粒、暗褐色シルトブロック含む、固く締る
11	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック多量、黄褐色シルトブロック含む
12	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る

第191図　SB9264

主軸方向は、N－12°－Eである。規模は梁が3.2m、桁が6.9mを測り、面積は約22m²である。柱心心間の距離は、西側桁が2.3m等間、東側が北から2.3m－2.4m－2.2mである。

庇の北東部はSB9211と重複する。身舎と庇との距離は、東面が68㎝、西面が82㎝、南面が100㎝、北面が西面と同じく82㎝である。長さは東が二間分で5.1m、西が8.6m、南が4.8m、北が4.0mである。柱心心間の距離は、東面が北から2.5m－2.6m、西面が3.1m－2.5m－3.0m、南面が西から2.7m－2.1m、北面が2.3m－1.7mである。北東角を除く３ケ所の隅柱は、各々身舎の角の対角線上に建てられる。東面は身舎の柱筋とのずれがあり、南北面では中間に１本設けられる。

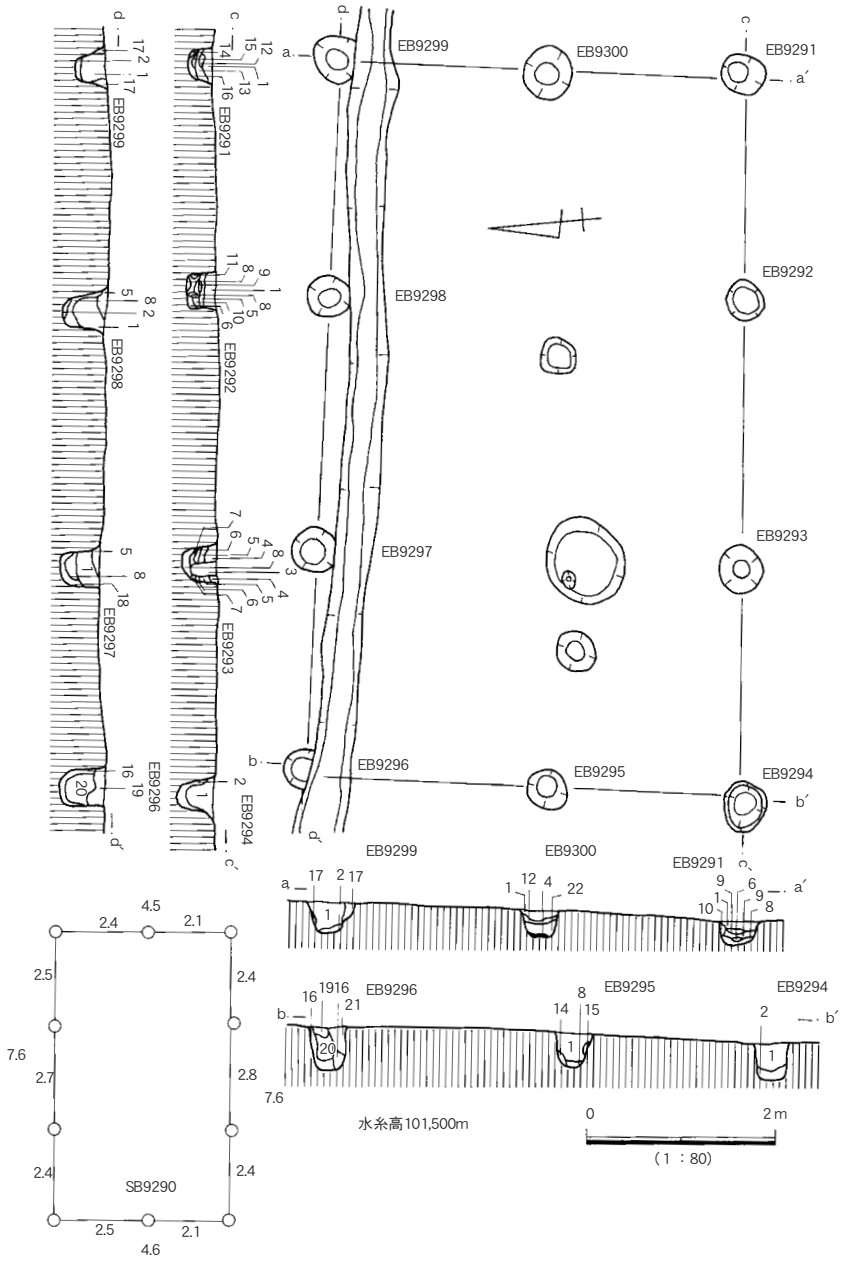
柱穴は、径30～40㎝の円形で、深さは20～40㎝を測る。EB9265、9268、9270、9271の底面には、径20㎝前後の礫が入れられる。EB9270、9271の土層断面には柱痕跡が見られる。覆土は黒褐色のシルトブロックを主として充填され、堅く締る。遺構間の重複は、SB9211の説明に記載した通りである。柱穴からの出土遺物はない。



SB9273

1	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色、褐色シルトブロックを斑状に多量含む
2	10YR 2/3	黒褐	シルト	粘性、締りなくもろい
3	10YR 3/2	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
4	10YR 3/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に多量含む、固く締る
5	10YR1.7/1	黒	粘土	黒褐色シルトブロックを微量含む、粘性、締りあり
6	10YR 2/1	黒	シルト	褐色シルトブロック微量、暗褐色シルトブロック含む
7	10YR 3/2	黒褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、固く締り粘性強い
8	10YR 4/6	褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固く締り粘性強い
9	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック（大）を斑状に多く含む
10	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色、褐色、暗褐色シルトブロックを斑状に多量含む
11	10YR 2/2	黒	シルト	黄褐色、暗褐色シルトブロック含む、固く締る
12	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト多量、暗褐色シルト少量斑状に含む
13	10YR 5/6	黄褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、固く締り粘性強い
14	10YR 4/6	褐	シルト	黒褐色、暗褐色シルトブロック少量含む
15	10YR 4/6	褐	シルト	黒褐色、暗褐色シルトブロックを斑状に多量含む
16	10YR 5/8	黄褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、粘性、締りあり
17	10YR 4/6	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロックを少量含む、固く締り粘性強い
18	10YR 3/4	暗褐	シルト	黄褐色、褐色、黒褐色シルトブロック少量含む
19	10YR 2/1	黒	シルト	黄褐色、褐色シルトブロック少量含む
20	10YR 2/1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む
21	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色、褐色、暗褐色シルトブロックを斑状に含む
22	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色、褐色、暗褐色シルトブロックを斑状に多量含む
23	10YR 3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック微量含む
24	10YR 2/3	暗褐	シルト	暗褐色シルトブロック微量含む、粘性
25	10YR 3/4	暗褐	シルト	黒色シルトブロック多量含む、粘性
26				地山

第192図　SB9273



SB9290

1	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒、ブロック含む、やわらかいが締る
2	10YR4/4	にぶい黄褐	シルト	黒褐色シルト粒含む、粘性、固く締る
3	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒多量含む、やわらかく締りない
4	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色、暗褐色シルトブロック含む、固く締る
5	10YR2/1	黒	シルト	大粒の黄褐色、暗褐色シルトブロック多量含む
6	10YR3/3	暗褐	シルト	黒色シルトブロック少量含む、固く締る、弱い粘性
7	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルト粒含む、固く締る弱い粘性
8	10YR6/6	明黄褐	シルト	黒褐色シルトブロック多量含む、固く締る、弱い粘性
9	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む、固く締る
10	10YR2/1	黒	シルト	黄褐色、暗褐色シルトブロック多量含む、固く締る
11	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルト粒含む
12	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック多量含む、固く締る
13	10YR3/3	暗褐	シルト	粘性、固く締る
14	10YR4/4	褐	シルト	黒褐色シルト少量含む、固く締る
15	10YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む、固く締る
16	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色、黄褐色シルト含む、粘性、固く締る
17	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、固く締る
18	10YR4/6	褐	シルト	暗褐色、灰白色シルト粒含む、固く締る、弱い粘性
19	10YR3/3	暗褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
20	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色粒微量含む、固く締る、弱い粘性
21	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック、小礫含む（SD9166）
22	10YR3/4	暗褐	シルト	黄褐色、黒褐色シルト粒微量含む、固く締る

第193図　SB9290

【SB9273】第192図

40・41－253～255グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。SB9290、9316が隣接し、中世の遺構が密集する地区である。

建物の構造は、梁行２間、桁行３間の東西棟の身舎に、北一面に庇を付設したものである。梁の南側一間には床束と考えられる小柱穴が見られる。主軸方向は、Ｎ－78°－Ｗである。身舎の規模は、梁が4.3m、桁が7.7ｍを測り、面積は約33m²である。柱心心間の距離は、西側梁で北から2.1ｍ－1.3m、東側で2.2ｍ－1.2m、北側桁で西から2.6ｍ－2.7ｍ－2.4m、南側桁で2.5ｍ－2.8ｍ－2.4mである。

庇は身舎から約１ｍの距離を置く。東端の柱がややずれるが、ほぼ身舎の柱筋に乗る。柱穴は径40～50㎝の円形で、深さは50～60㎝を測るが、棟束と床束と考えられる柱穴については、約30㎝の掘り込みしか持たない。EB9274、9276、9280、9281の土層断面には柱痕跡が認められる。

覆土は褐色や黄褐色の粘性のあるシルトを主として充填し、堅く締る。他の遺構との重複関係はない。柱穴からの出土遺物もない。

【SB9290】第193図

39・40－251～253グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。周辺の状況は、SB9273で記述した通りである。

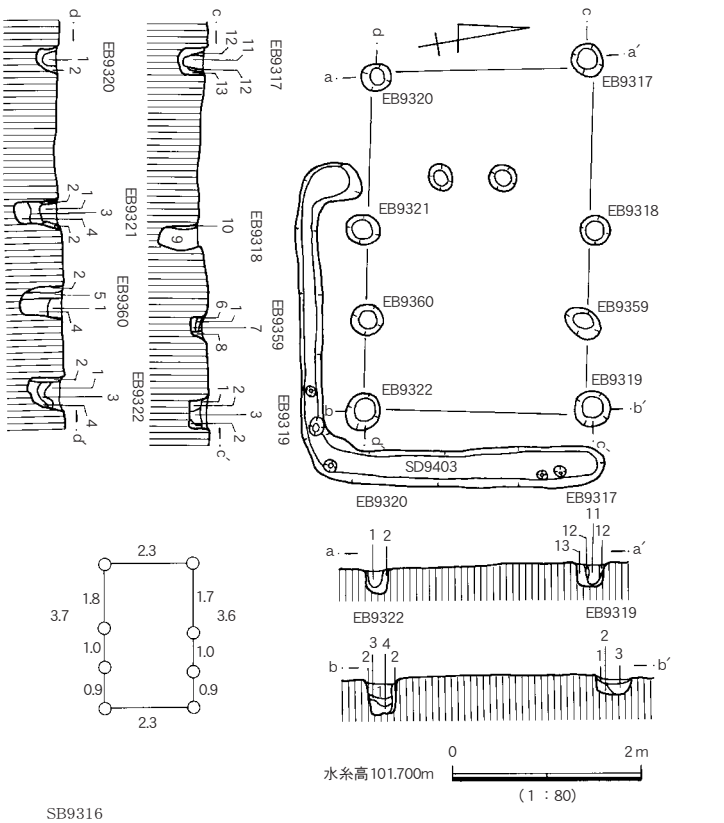
建物の構造は、梁行２間、桁行３間の南北棟である。主軸方向はＮ－84°－Ｗである。規模は、西側の梁が4.6m、東側が4.5m、桁が南北とも7.6mを測り、面積は約35m²である。柱心心間の距離は、西側の梁が北から2.5m－2.1m、東側が2.4m－2.1m、北側桁が西から2.4m－2.7m－2.5m、南側が2.4m－2.8m－2.4mである。柱穴は、径40～50cmの円形で、深さは30～40cmを測る。EB9293の土層断面には、柱痕跡が認められる。

覆土は暗褐色や黒色のシルト等をレンズ状に堆積し、堅く締る。SD9166と重複し、EB9296、9299との切り合いから、SB9290→SD9166の新旧関係が認められる。柱穴からの出土遺物はない。

【SB9316】第194図

38・39－252グリッドに位置する。段丘直下に立地し、標高は約100.6mである。周辺の状況はSB9273で記述した通りである。建物の構造は、梁行１間、桁行３間の南北棟であるが、東辺と南辺を巡るSD9403の形状から、桁行は２間の可能性も考えられる。主軸方向はＮ－82°－Ｗである。規模は、梁が2.3m、北側桁が3.7m、南側が3.6mを測り、面積は約９m²である。柱心心間の距離は、北側桁が西から1.8m－1.0m－0.9m、南側が1.7m－1.0m－0.9mである。柱穴は、径30～40cmで深さは20～40cmである。

覆土は、炭化物や黄褐色シルトブロック等を含む暗褐色及び黒褐色のシルトが堆積し、堅く締る。遺構間の重複はない。SD9403は、 幅25～40cm、深さ10cm足らずであるが、付設する遺構と考えられる。また中央西寄りの２基の柱穴も関連すると推測される。



SB9316

1	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物微量、暗褐色、黄褐色シルト少量含む、固く締る
2	10YR３/３	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固く締る
3	10YR３/４	暗褐	シルト	炭化物微量、明黄褐色、黄橙色、黒色シルト粒多量含む
4	10YR３/３	暗褐	シルト	炭化物微量、黄褐色、黒色シルトブロック多量含む
5	10YR３/３	暗褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量、黒色シルトブロック少量含む
6	10YR４/６	褐	砂質シルト	黄褐色、黒色シルトブロック含む、固く締る
7	10YR５/６	黄褐	シルト	黒色シルトブロック少量含む、固く締る
8	10YR３/４	暗褐	シルト	黒色シルトブロック少量含む、固く締る
9	10YR４/６	褐	シルト	暗褐色、黒褐色シルトブロック多量含む、固く締る
10	10YR２/３	黒褐	シルト	黄褐色、黒褐色シルトブロック多量含む、固く締る
11	10YR３/２	黒褐	シルト	炭化物微量、黄褐色シルトブロック少量含む、やわらかい
12	10YR３/４	暗褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、やわらかい
13	10YR４/６	褐	砂質シルト	暗褐色シルトブロック含む、固く締る

第194図　SB9316

3　井　戸　跡

現地調査段階で、中世の井戸跡として登録した遺構は、７基である。しかし、200頁の奈良・平安時代の井戸跡の項で述べたように、所属時期や遺構の性格が判然としないものもあることから、土坑に仕分けた中にも当該時期の井戸跡を含むと推測される。現地調査段階では、井戸枠などの構造物が見られるもの、掘り方が垂直に近く、数値的に開口部の径よりも深さがあるもの等を主な判断材料とした。以下、各遺構毎に内容を詳述し、次項の土坑についても再度検討を加える材料としたい。

【SE9961】第195図

34－186グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2ｍである。調査区中最も低い位置にある。また、調査区東端にあたり、一部を調査区外に残す。周辺にはSB9971、9762等があり、中世の遺構が密集する。同時に本調査区の中では主要となる地区と考えられる。15ｍ北には９世紀代のSE562井戸跡があり、この地区に水脈があったことが推測される。

掘り方の平面形は、径約2.5ｍの円形であるが、構築時は一辺約２ｍの方形を呈したものと考えられる。深さは、確認面から1.9ｍである。井戸枠の構造は、四隅の支柱に横桟を組み、板材を立てたものである。板材は少なくとも３段以上組まれたことが考えられる。１段目は一辺が約70㎝の方形で、高さも約70㎝である。２段目は、１段目から約10㎝外に広がり、一辺90㎝の方形を呈する。１段目とは30㎝程の重なりがある。板材は30㎝程遺存するが上部は腐蝕する。最下層には水溜めの曲物（図版140）が置かれる。廃棄の際には、上部の板材が抜き取られ、礫が投げ込まれてある。

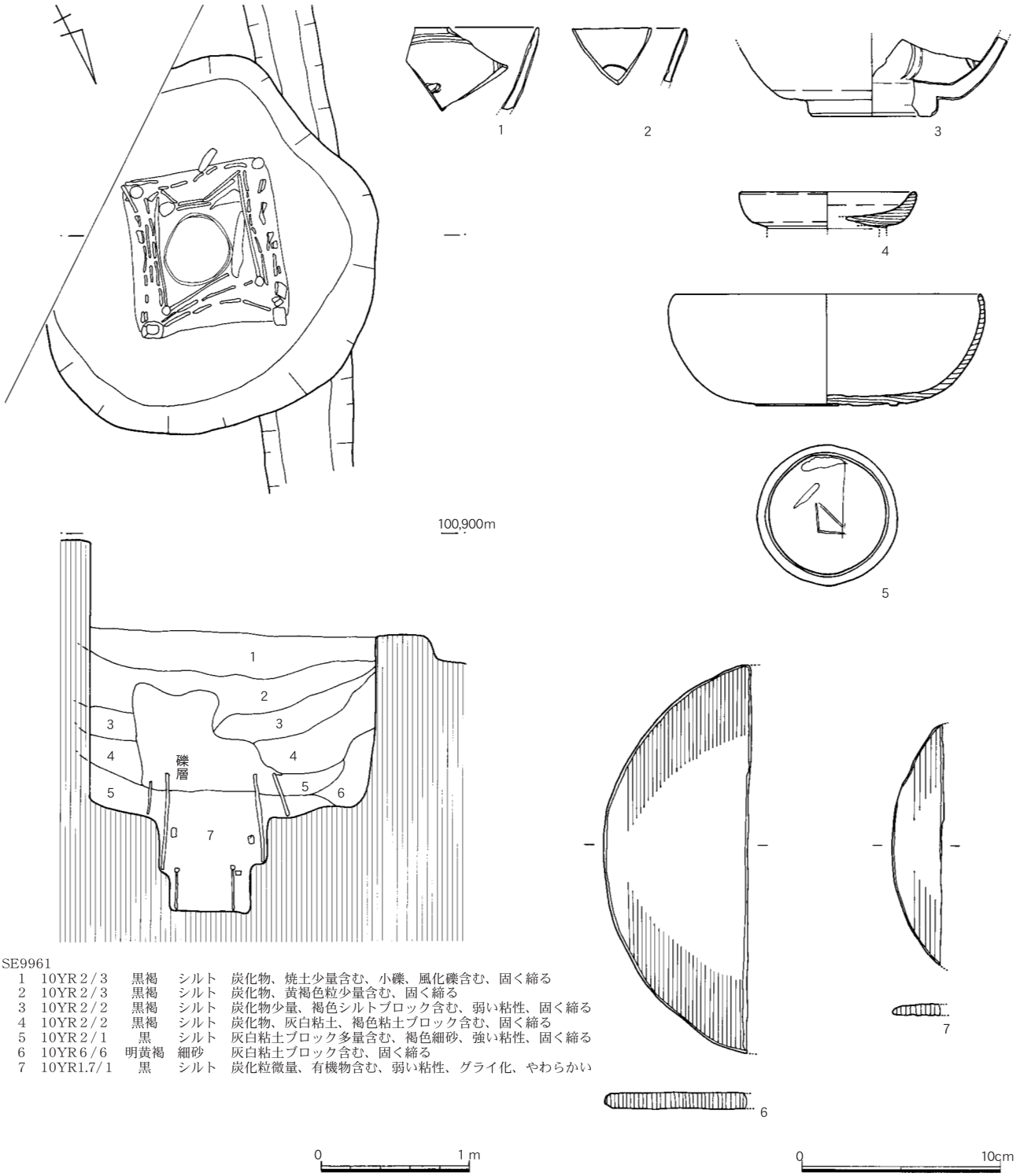
板材は、大半が板目の割り材を用いているが、198－３、６のような柾目の転用材と考えられるものも含まれている。板材の長さは腐蝕の度合いによるが、80～90㎝程と考えられる。幅は20㎝前後で、厚さは約２㎝のものが多いが、均一ではなく断面が三角形を呈するものも見られる。これらの板材も、幅や厚さが不揃いであり、転用されたものと考えられる。

横桟（198－８～10）は、長さ約85㎝、幅４㎝、厚さ３㎝程の角材が使われる。両端に５㎝程のほぞが作られる。四隅の支柱（199－１～４）は径約８㎝の丸材で、４本ともほぞ穴部分で折れているため全長は不明だが、100～130㎝と推測される。下端部は尖らせてあり、打ち込まれたものと考えられる。上端部も削られ、三角錐状の多面を作り出す。199－２はさらに頭部を作り出している。２と３には樹皮が残る。

出土遺物は須恵器無台坏７点、有台坏１点、長頸壷１点、甕５点、土師器無台坏５点、甕９点、青磁碗３点、漆器皿１点、椀１点、曲物底板２点である。

195－１～３は、内面劃花文の龍泉窯系青磁碗である。１は釉が緑灰に発色するもの、２は黄味掛るもの、３は青白に発色するものである。胎土は３が白色で、他はやや灰色が強い。３点とも掘り方内からの出土である。12世紀中頃～後半に位置付けられる。

195－4、５は黒漆が塗られた漆器である。4は高台を欠損する小皿、５は木地が薄く、低い高台が作られたものである。高台内には線刻の記号が認められる。掘り方内からの出土である。６、７は柾目材である。



SE9961
1　10YR 2 / 3　黒褐　シルト　炭化物、焼土少量含む、小礫、風化礫含む、固く締る
2　10YR 2 / 3　黒褐　シルト　炭化物、黄褐色粒少量含む、固く締る
3　10YR 2 / 2　黒褐　シルト　炭化物少量、褐色シルトブロック含む、弱い粘性、固く締る
4　10YR 2 / 2　黒褐　シルト　炭化物、灰白粘土、褐色粘土ブロック含む、固く締る
5　10YR 2 / 1　黒　シルト　灰白粘土ブロック多量含む、褐色細砂、強い粘性、固く締る
6　10YR 6 / 6　明黄褐　細砂　灰白粘土ブロック含む、固く締る
7　10YR1.7/ 1　黒　シルト　炭化粒微量、有機物含む、弱い粘性、グライ化、やわらかい

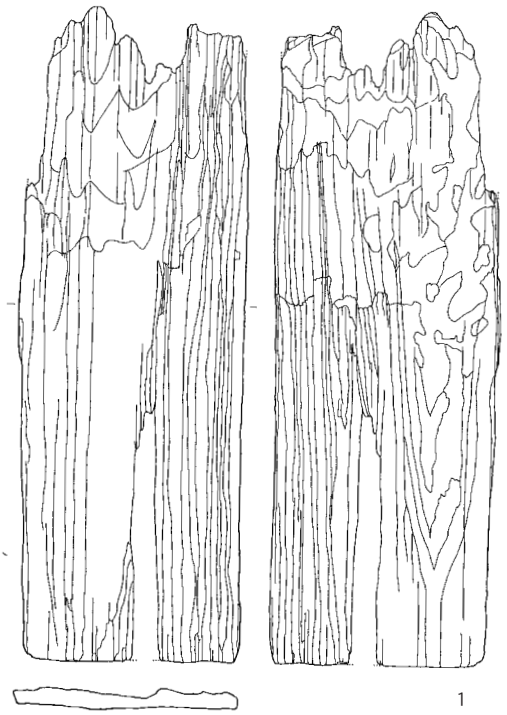
第195図　SE9961　出土遺物

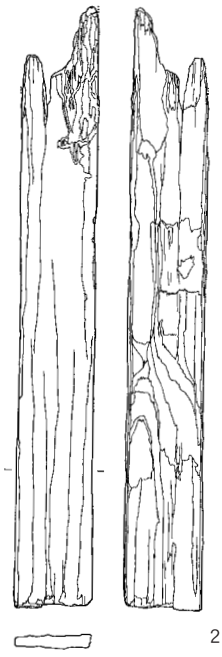
表76　SE9961出土土器観察表

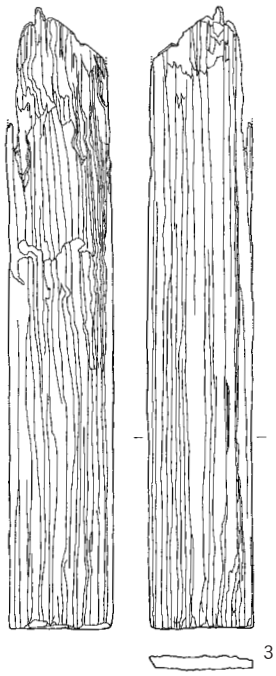
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
195	1	青磁	碗				5	緻密	良	7.5Y5/2灰オリーブ	無文	劃花文		
	2	青磁	碗				4.5	緻密	良	2.5GY6/1オリーブ灰	無文			
	3	青磁	碗		(60)		8	緻密	良	5GY6/1オリーブ灰	無文	劃花文	畳付露胎	

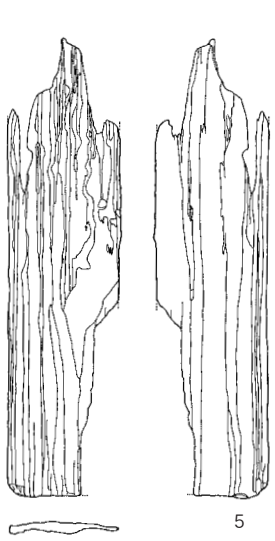
表77　SE9961出土木製品観察表

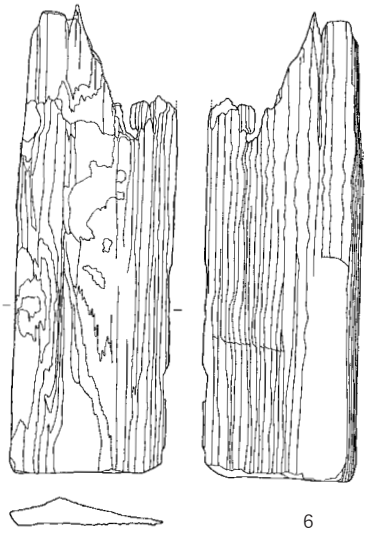
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	備考
195	4	漆器	皿	(90)			6	黒漆	黒漆	台欠損	
	5	漆器	椀	(152)	70	54	4	黒漆	黒漆	線刻	
				径	厚			備考			
	6		底板		8			柾目			
	7		底板		6			柾目			

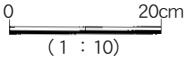




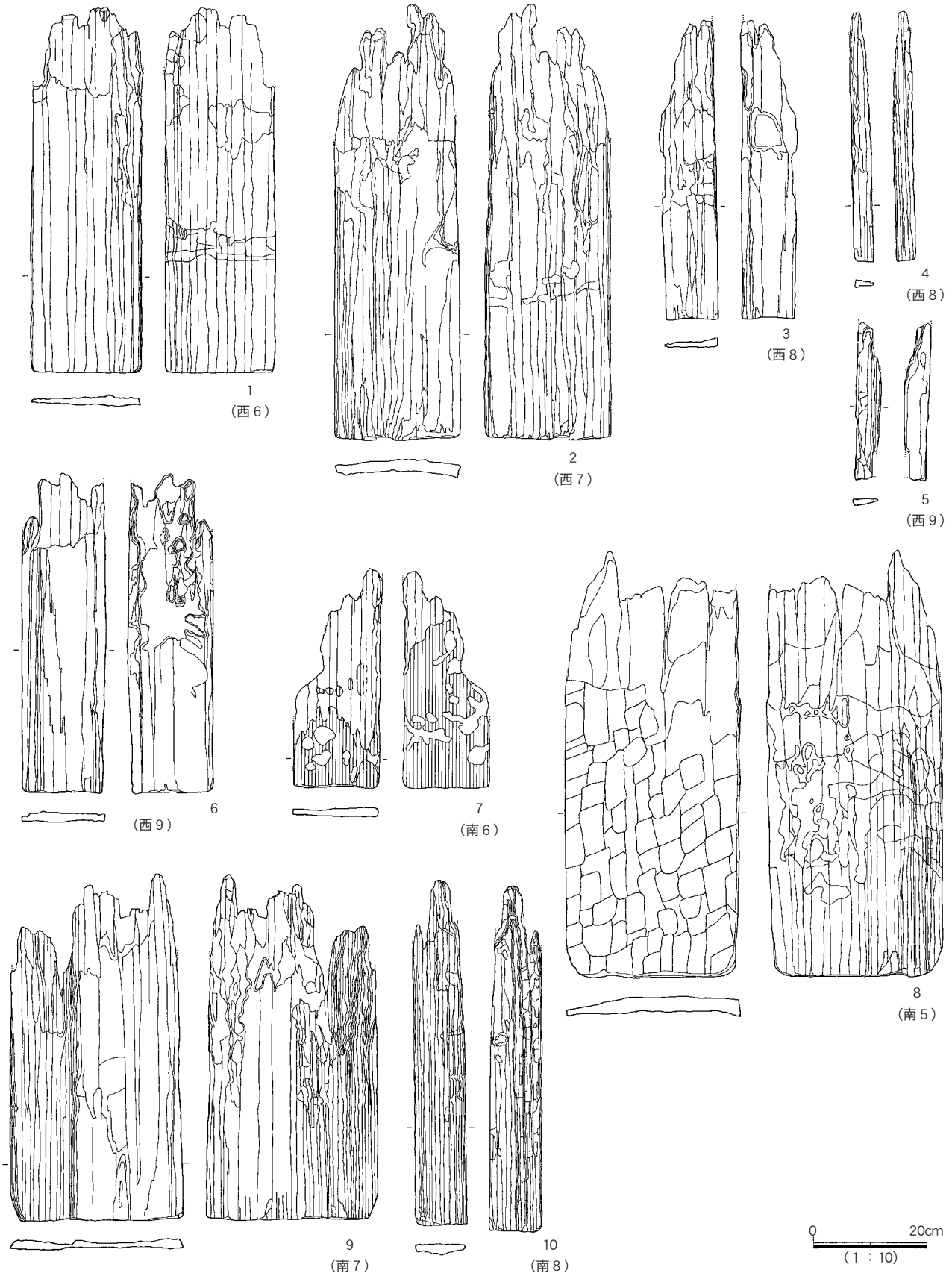




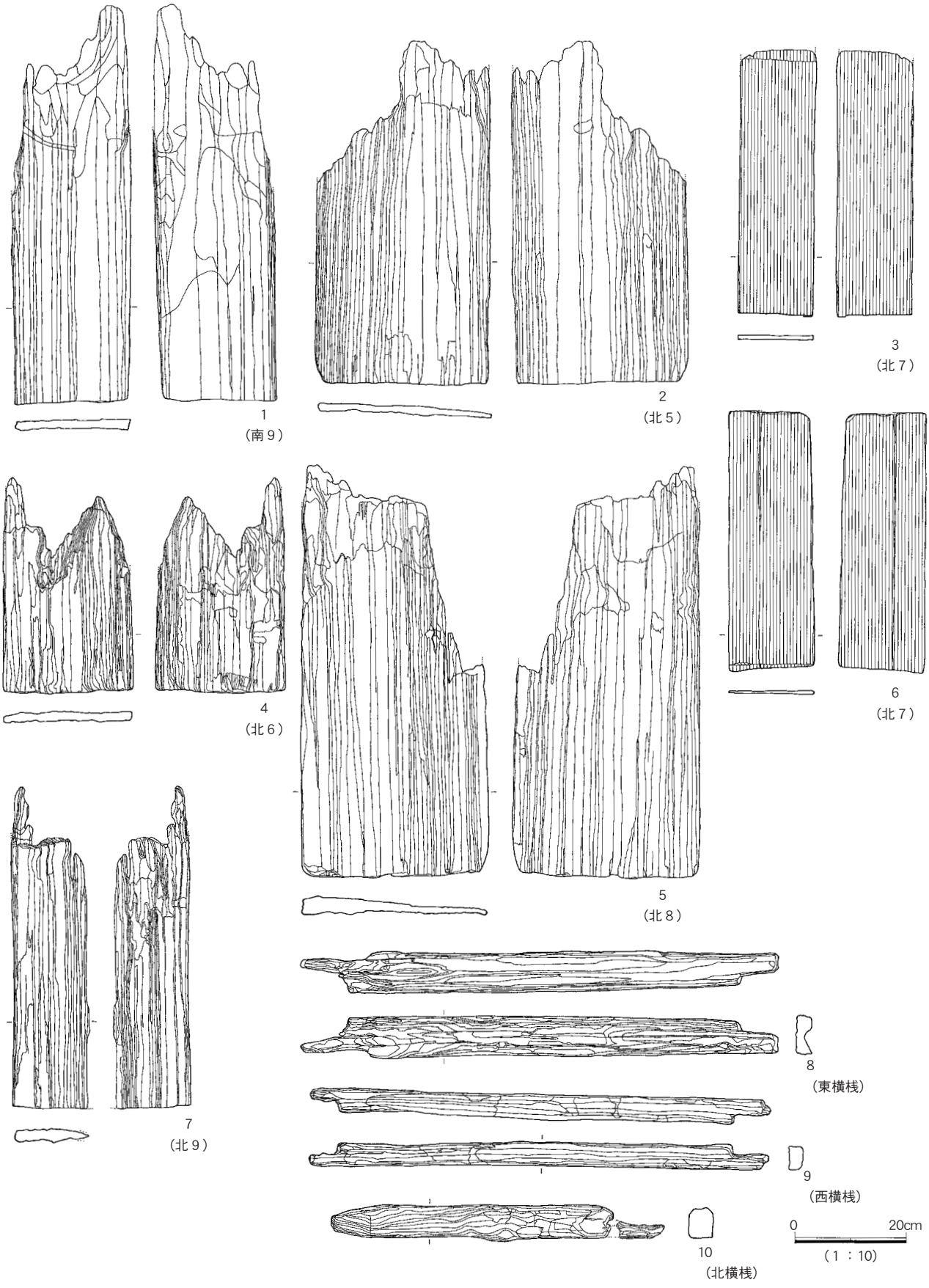




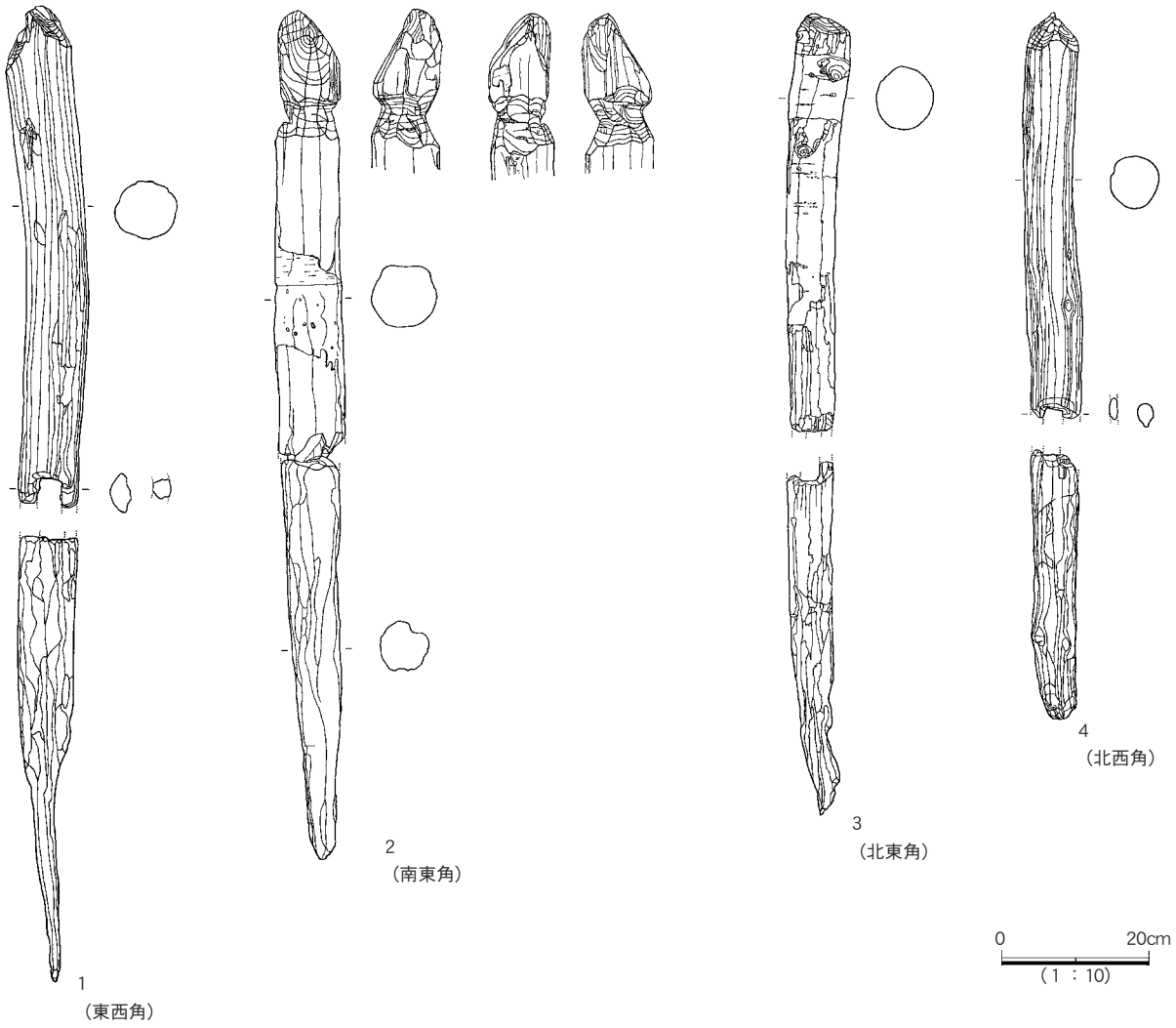
第196図　SE9961井戸枠１



第197図　SE9961井戸枠２



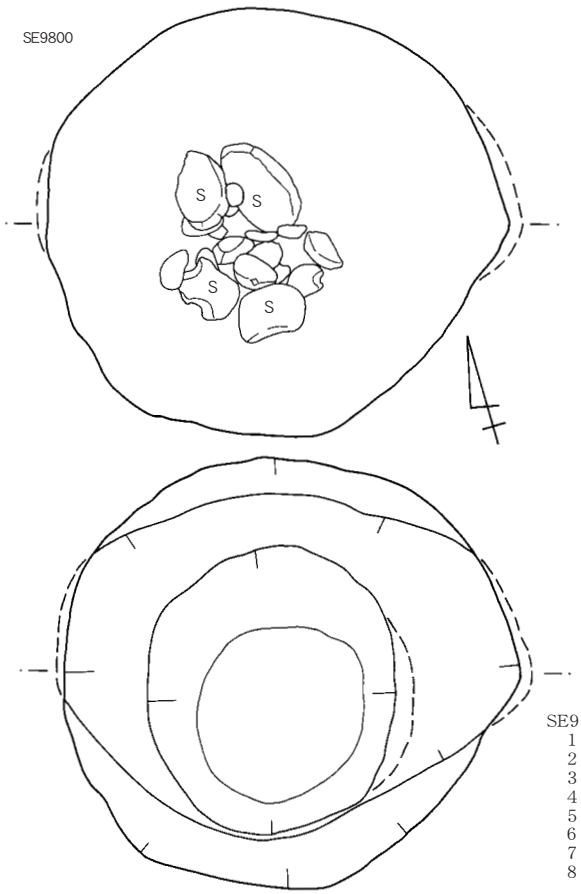
第198図　SE9961井戸枠３

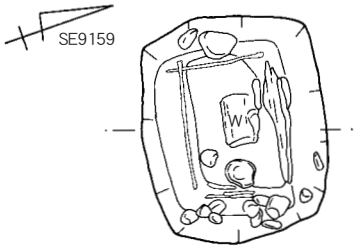


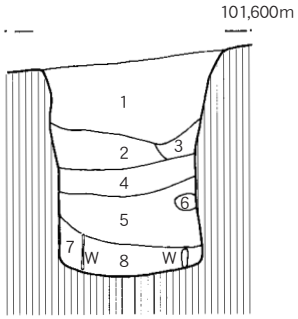
第199図　SE9961井戸枠４

表78　SE9961井戸枠計測表

挿図番号		部位	長（cm）	幅(cm)	厚(cm)	備考
196	1	東6	(87)	30	3	
	2	東7-1	(80)	10	2	
	3	東7-2	(82)	14	2	
	4	東8	(93)	22	3	
	5	東10	(60)	15	2	断面三角形
	6	西5	(61)	21	3	
197	1	西6	(65)	20	2	
	2	西7	(76)	22	2	
	3	西8	(53)	10	1	
	4	西8	(45)	4	1	
	5	西8	(28)	4	1	
	6	西9	(57)	15	2	
	7	南6	(39)	15	2	
	8	南5	(75)	31	3	加工痕顕著
	9	南7	(62)	30	2	
197	10	南8	(62)	9	2	
198	1	南9	(72)	21	2	
	2	北5	(62)	31	2	
	3	北7	(47)	14	1	柾目、転用材
	4	北6	(38)	24	2	
	5	北8	(74)	34	3	
	6	北7	46	15	1	柾目、転用材
	7	北9	(58)	14	3	
	8	東横桟	86	8	3	両端にほぞ
	9	西横桟	82	4	3	両端にほぞ
	10	北横桟	60	6	4	
199	1	東西角	(131)	8	8	中央部にほぞ穴
	2	南東角	(115)	9	8	上端部加工
	3	北東角	(105)	8	9	中央部にほぞ穴
	4	北西角	(91)	6	7	中央部にほぞ穴

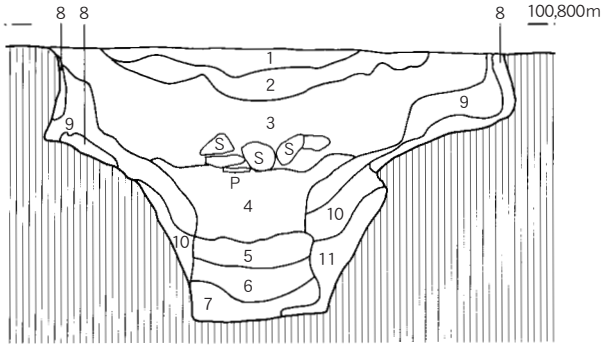


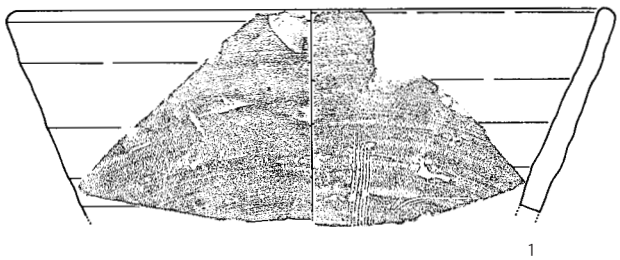


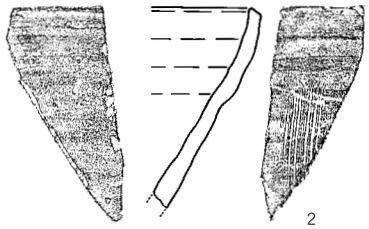


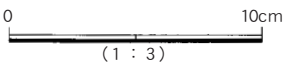
SE9159

1	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色細砂微量含む、やわらかいが締っている
2	10YR２/２	黒褐	シルト	黄褐色細砂ブロック含む、固く締る
3	10YR２/２	黒褐	シルト	黄褐色粘質シルトブロック、黄褐色細砂含む、固く締る
4	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色細砂含む、やわらかいが締っている
5	10YR２/１	黒	シルト	褐色細砂微量含む、土器含む、弱い粘性、締っている
6	10YR４/４	褐	砂	小礫含む、固く締る
7	10YR２/１	黒	シルト	灰黄褐色砂質シルトブロック多量含む、締っている
8	10TR２/１	黒	砂質シルト	やわらかいが締っている









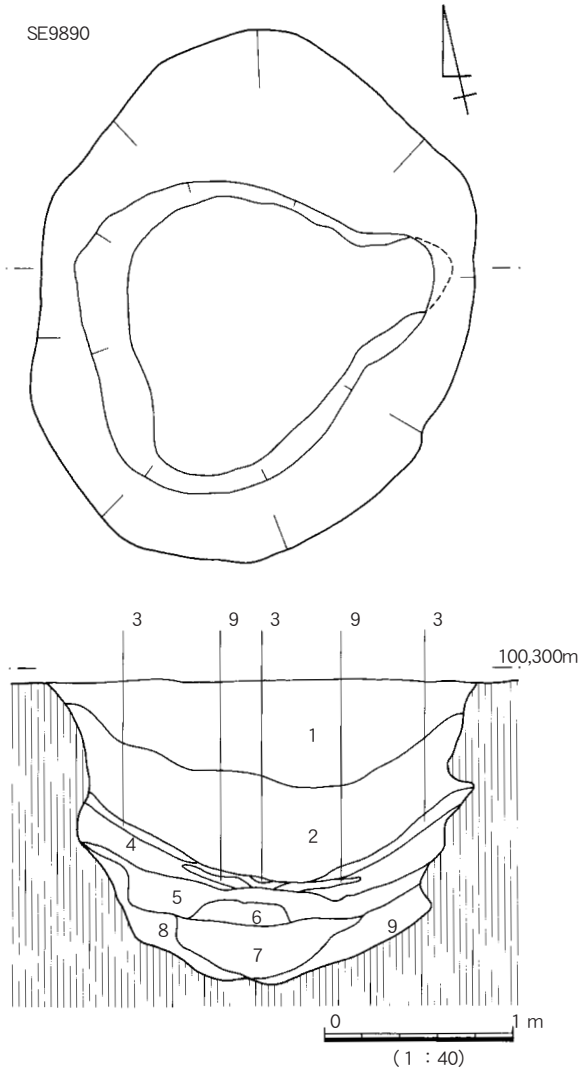
SE9800

1	10YR３/２	黒褐	シルト	黒褐色粗砂、小礫含む、固く締る
2	10YR３/１	黒褐	シルト	黒褐色粗砂、褐色シルトブロック、小礫含む、固く締る
3	10YR３/１	黒褐	シルト	黒褐色粗砂、褐色シルトブロック、礫、土器含む、固く締る
4	10YR３/１	黒褐	シルト	炭化粒、小礫微量含む、固く締る
5	10YR３/１	黒褐	シルト	黄褐色シルトを斑状に含む、固く締る
6	10YR４/１	褐灰	シルト	褐灰色粗砂、黄褐色シルトを板状に含む、固く締る
7	10YR４/１	褐灰	粗砂	黄褐色シルトを板状に含む、締まりない
8	10YR６/８	明黄褐	シルト	均質、固く締る
9	10YR７/２	灰黄褐	シルト	にぶい黄褐色シルトブロックを板状に含む、固く締る
10	10YR４/２	灰黄褐	シルト	灰黄褐、にぶい黄褐シルトブロック斑状に含む、固く締る
11	10YR３/４	暗褐	粗砂	締まりなくもろい

第200図　SE9159、SE9800　出土遺物

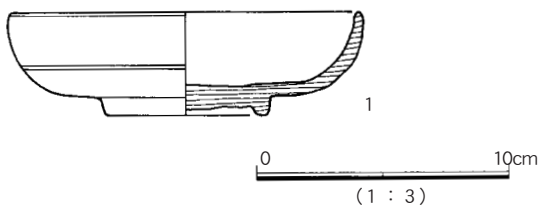
表79　SE9800出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面
200	1	須恵器系陶器	擂鉢	(308)			12	粗砂混入	良	10YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ
	2	須恵器系陶器	擂鉢				8	緻密	良	10YR6/1褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ



SE9890

1	10YR 2 / 2	黒褐	シルト	黒色、黄褐色シルトブロック少量含む、焼土粒微量含む
2	10YR 2 / 1	黒	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック含む、焼土粒微量含む
3	10YR 4 / 2	灰黄褐	シルト	酸化鉄含む、固く締る
4	10YR 2 / 1	黒	シルト	炭化粒微量、灰黄褐色シルト粒、酸化鉄含む、固く締る
5	10YR 2 / 1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック、黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
6	10YR 5 / 3	にぶい黄褐	シルト	酸化鉄含む、粘性、固く締る
7	10YR1.7/ 1	黒	シルト	暗褐色シルトブロック、灰黄褐色シルトブロック含む
8	10YR1.7/ 1	黒	シルト	褐灰色シルトブロックを縞状に含む、粘性、固く締る
9	7.5YR 3 / 4	暗褐	シルト	酸化鉄層



第201図　SE9890　出土遺物

【SE9800】第200図

42－218グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.6ｍである。周辺の遺構密度は極めて薄い。

平面形は、長軸2.4m、短軸2.2ｍの南北にやや長い楕円形を呈する。深さは1.4ｍである。掘り込みは２段になっており、１段目が約50㎝掘り込まれる。２段目は径を1.3ｍに狭め約30°の角度で掘られる。１段目の底のレベルには中央部に20～50㎝大の礫が入れられる。また２段目の土層ではほぼ垂直に立ち上がる層が確認できることから、SE9961と同様に、井戸は廃棄の際に１段目が掘られ、井戸枠部材が抜き取られた後に礫が投げ込まれたものと考えられる。

出土遺物は、須恵器無台坏１点、甕１点、中世陶器擂鉢２点である。

200－１、２は須恵器系陶器の擂鉢である。１は口縁部外端に面を取り、鋭利な櫛歯原体による８条の直線文と曲線が描かれる。２は卸し目を８ないし９条の粗雑な櫛歯原体で描いたものである。口縁部は外端に面を取り、内側に小さく摘み出したものである。13世紀初頭のものと考えられる。

【SE9159】第200図

36－238グリッドに位置する。段丘斜面に立地し、標高は約101.5ｍである。

平面形は長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍの長方形である。深さは1.2ｍを測る。壁は垂直に掘り込まれ、底部も平坦である。最下層に、長軸70㎝、短軸40㎝の板材が一部組まれた状態で遺存する。内部から木材片と礫が出土しているが、時期判断ができる資料はない。形態が特異であり、井戸と断定できない。

表80　SE9890出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部	備考
201	1 漆器	椀	140	62	42	4	黒漆	黒漆		

【SE9890】第201図

36－226グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は100.2ｍである。SB186やSE9889に隣接する。中世の遺構が比較的まとまって検出されている地区である。

平面形は、長軸2.8ｍ、短軸2.3ｍの南北に長い不整楕円形を呈する。深さは1.6ｍである。壁は約15°傾くが、開口部から60～80㎝の深さでは、湧水によると考えられる壁の崩れがあり、オーバーハングする。底面には緩い傾斜があり、擂鉢状を呈する。覆土は、下層に暗褐色シルトを含む黒色シルト等による自然堆積と考えられるが、湧水帯より上層については、埋め戻された可能性もある。

出土遺物は、須恵器無台坏19点、短頸壷２点、長頸壷７点、甕３点、土師器無台坏３点、甕73点、漆器椀１点である。201－１は黒漆による漆器椀である。体部は短く直立し、外面には一条の沈線が巡る。身は浅く、口径は大きい。

【SE762】第202図

35－213グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.3ｍである。周辺にはSK9808、9809やSD9580等の遺構が分布するが、密度は希薄である。

平面形は、径約１ｍの楕円形である。深さは1.4ｍである。壁には崩落によると考えられる凹凸があるものの、ほぼ垂直である。底面は窄み、径50㎝程の円形の平坦面を持つ。覆土は、褐色や黄褐色のシルトを斑状に含む黒褐色シルトで堅く締る。埋め戻されたものと考えられる。

遺物は出土していない。

【SE864】第202図

35－230グリッドに位置する。段丘直下に立地し、標高は約101.4ｍである。西側半分は水路があるため調査不可能である。南側及び南東側に井戸跡や掘立柱建物跡等が展開するが、10ｍ以上の距離を持つ。中世の遺構が見られる北端に位置する。

平面形は、径約2.5ｍの円形と推測される。表土からの深さは約1.9ｍあり、遺構の確認面からでは約1.5ｍである。壁は、上部で約20°の傾斜を持つが、下部ではほぼ垂直である。底面は僅かに傾斜するが、径1.4ｍ程の円形の平坦面がある。底面近くからは井戸枠部材と推測される板材が出土する。覆土は、褐色シルトを含む黒褐色シルトを主体とする。人為的な埋め戻しによる堆積と考えられる。

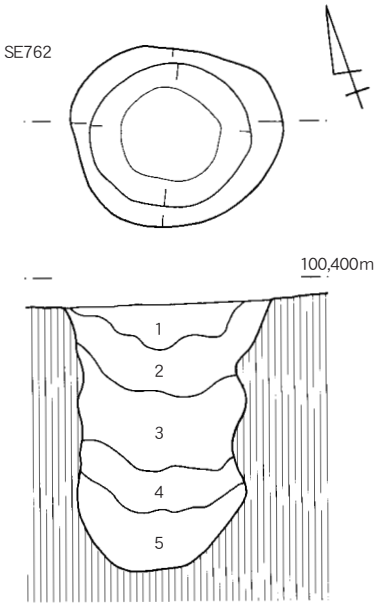
出土遺物は、須恵器蓋１点、無台坏４点、有台坏１点、甕３点、土師器甕２点である。

【SE9598】第202図

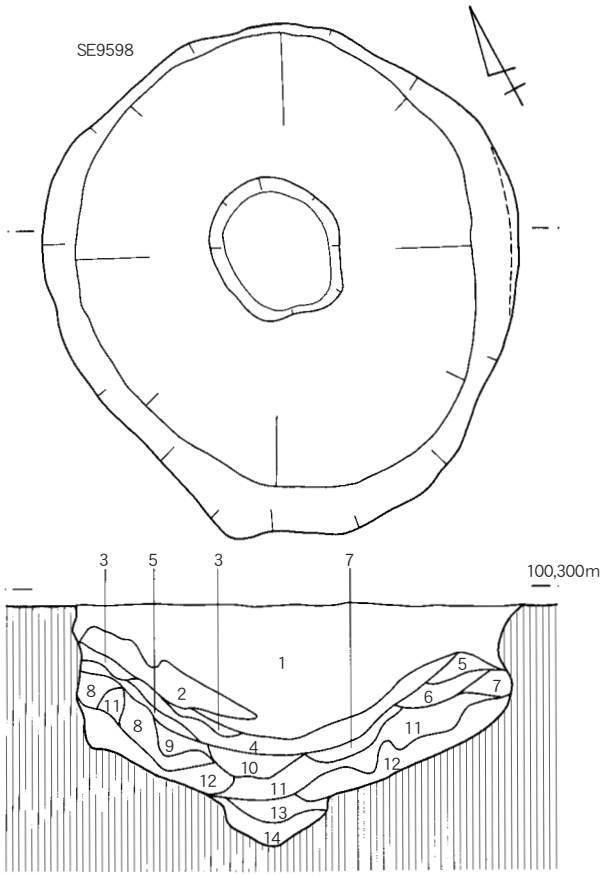
36－210グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2ｍである。SD9760や9587等の溝跡に囲まれる。柱穴などはほとんど見られず、遺構密度は希薄である。

平面形は、長軸2.7ｍ、短軸2.5ｍの南北にやや長い楕円形を呈する。底面には傾斜があり、擂鉢状になる。また、底面中央部には径約0.7ｍの円形の掘り込みがある。深さは、壁の落ち際で0.8ｍ、中央の最深部で1.3ｍである。壁は東側の一部がオーバーハングするものの、他はほぼ垂直である。下層は自然堆積と考えられるが、上層は埋め戻しによるものと推測される。

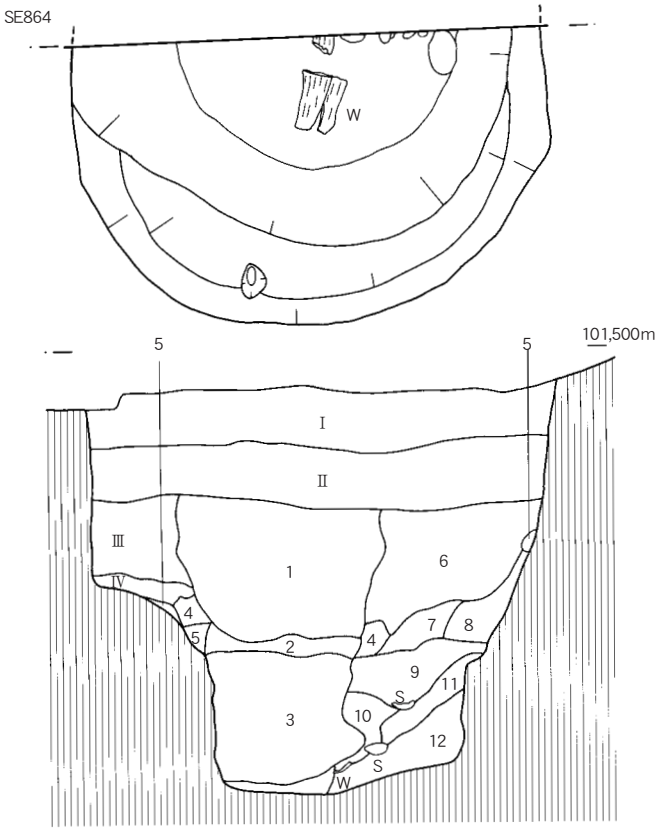
出土遺物は、須恵器無台坏３点、甕９点、黒色土器２点、土師器無台坏１点、甕６点である。



SE762
1　10YR３/２　黒褐　シルト　褐色シルトブロック少量、明黄褐色微量含む、固く締る
2　10YR３/２　黒褐　シルト　褐色シルトを板状に、明黄褐色シルトブロックを斑状に含む
3　10YR３/２　黒褐　シルト　褐色シルト、灰黄褐色、明黄褐色シルトブロック含む
4　10YR３/２　黒褐　シルト　灰黄褐色シルトブロック（大）を板状に含む、固く締る
5　10YR３/２　黒褐　シルト　褐灰シルトブロック（大）を斑状に含む、固く締る



SE9598
1　10YR２/１　黒　シルト　礫多量含む、均質
2　10YR２/２　黒褐　シルト　礫多量含む
3　10YR２/３　黒褐　シルト　礫多量含む
4　10YR２/１　黒　シルト　褐色砂質シルトブロック少量含む
5　10YR２/２　黒褐　シルト　ほぼ均質
6　10YR２/１　黒　シルト　均質
7　10YR２/１　黒　シルト　褐色砂質シルトを縞状に少量含む
8　10YR２/１　黒　シルト　褐色砂質シルトブロック（大）多量含む
9　10YR４/４　褐　シルト　均質
10　10YR２/２　黒褐　シルト　褐色砂質シルトブロック少量含む
11　10YR３/２　黒褐　シルト　褐色砂質シルトブロック微量含む
12　10YR４/４　褐　シルト　灰黄褐色粘土質シルトブロック（大）含む、
13　10YR４/２　灰黄褐　シルト　粘性
14　7.5YR５/８　明褐　シルト　礫多量含む



SE864
Ⅰ　10YR２/３　黒褐　シルト　盛土
Ⅱ　10YR３/２　暗褐　シルト　黒褐色シルト粒微量含む（表土）
Ⅲ　10YR２/２　黒褐　シルト　褐色シルト粒微量含む、締りない
Ⅳ　10YR２/１　黒　シルト　暗褐色シルト粒微量含む

1　10YR２/２　黒褐　シルト　灰白粘土ブロック微量含む
2　10YR２/２　黒褐　粘土　ほぼ均質、酸化鉄の層が入る
3　10YR２/１　黒　粘土　ほぼ均質、酸化鉄の層が入る
4　10YR２/２　黒褐　シルト　粘性、均質
5　10YR３/１　黒褐　シルト　褐色シルト粒を少量含む
6　10YR２/２　黒褐　シルト　褐色シルト粒微量含む、締りない
7　10YR２/３　黒褐　シルト　褐色シルト粒含む
8　10YR３/２　黒褐　粘土　褐色シルトブロック斑状に含む
9　10YR４/１　褐灰　粘土　灰白粘土粒を斑状に含む
10　10YR４/１　褐灰　粘土　均質
11　５YR５/２　灰オリーブ　粘土　黒褐色シルトを縞状に含む
12　10YR４/６　褐　粗砂　均質、酸化鉄多量含む

0　1m
（１：40）

第202図　SE762、864、9598

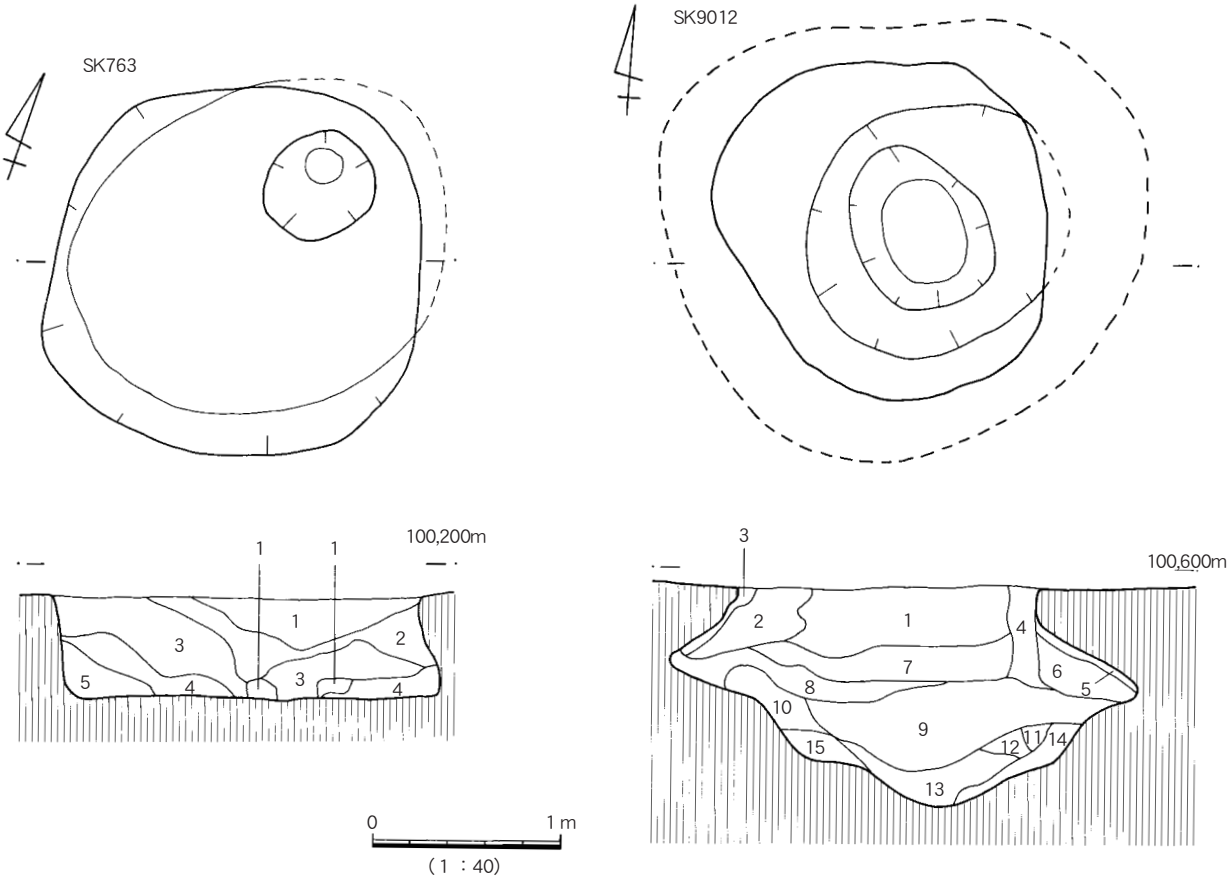
4　土　　坑

【SK763】第203図

36－216グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2ｍである。若干の柱穴と溝跡が分布するが遺構密度は希薄である。

平面形は、長軸2.1ｍ、短軸1.9ｍの楕円形を呈する。深さは0.5ｍである。底面の北東部に径約50㎝の楕円形の掘り込みを持つ以外は、平坦である。壁は北東部で20㎝程のオーバーハングする箇所が見られるが、多くはほぼ垂直である。覆土はほとんど混じり気のない、黒色または暗褐色のシルトで、自然堆積によるものと考えられる。

覆土中に多量の礫を含むが、遺物は出土しない。



SK763

1	10YR２/１	黒	シルト	多量の礫を含む
2	10YR２/１	黒	粘土	均質
3	10YR３/３	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む
4	10YR４/４	褐	砂質シルト	均質
5	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	均質

SK9012

1	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	褐色シルトブロックを縞状、斑状に含む
2	10YR３/３	暗褐	シルト	固く締る、崩落土
3	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、締りなくもろい
4	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色砂質シルトブロック多く含む
5	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色、褐色砂質シルトブロック多く含む
6	10YR４/３	にぶい黄褐	シルト	固く締る、崩落土
7	10YR４/３	にぶい黄褐	砂	黒色シルトブロックを斑状に少量含む
8	10YR３/３	暗褐	シルト	黄褐色、黒褐色シルトブロック含む
9	10YR２/１	黒	シルト	黄褐色シルトブロック多量、暗褐色シルトブロック少量含む
10	10YR３/３	暗褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む、崩落土
11	10YR３/３	暗褐	シルト	固く締る
12	10YR３/２	黒褐	シルト	炭化物少量含む
13	10YR４/３	にぶい黄褐	シルト	粘性、暗褐色粘土質シルト含む
14	10YR４/３	にぶい黄褐	シルト	暗褐色シルトブロックをレンズ状に含む
15	10YR３/２	暗褐	シルト	下部に暗褐色シルトブロック含む、やわらかく締りない

第203図　SK763、9012

【SK9012】第203図

40・41－234グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.6ｍである。周辺には、SK9016やSD9021等の他に数多くの柱穴が検出されており、掘立柱建物跡の存在が想定されるが、建物を構成するには至らなかった。中世に所属する遺構の密度は比較的濃く、縄文時代の遺構も散見される。

平面形は、径1.8ｍの不整楕円形を呈する。２段階の掘り込みがあり、１段目で0.9ｍ、２段目で1.2ｍの深さがある。底面は平坦な所がなく、傾斜のついた擂鉢状である。壁は全面が大きくオーバーハングし、断面形は算盤玉型を呈する。最大60㎝、細小20㎝、平均30㎝程の抉り込みが見られる。

覆土は、暗褐色シルト等を含む黒褐色のシルトが、締りなくもろい堆積をする。

遺構内からの出土遺物はない。

【SK9013】第204図

40・41－249グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は、調査区中最も低い約100.2ｍである。北西にSB9273、9290、南西にSB9264、9220などの遺構があり、ほぼその中間点に位置する。中世の遺構が最も多く密集するブロックである。

平面形は、径約3.0ｍの円形である。掘り込みは２段階になされ、１段目は約20°の角度で、1.0ｍまで掘られる。１段目の底面には約60°の緩い傾斜がつけられ、２段目は1.2ｍ地点から約30㎝、ほぼ垂直に掘られ、最深部は1.5ｍを測る。１段目の底面は径約2.0ｍの楕円形、２段目は径1.1ｍの円形を呈し、平坦である。

覆土は、５層以下に黄褐色シルトを含む黒褐色のシルトを主とした自然堆積層が見られる。４層は、黄褐色や暗褐色の比較的大きいシルトブロックが斑状に混入し、短時間で人為的に埋められたものと考えられる。

遺構からの出土遺物はない。

【SK9014】第204図

43－246・247グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.5ｍである。SQ9009やSK9199、9200に近接する。中世の遺構が密集する地域の一区画である。

平面形は、長軸2.6ｍ、短軸2.2ｍの南北に長い楕円形を呈する。深さは1.1ｍを測る。壁は、垂直に掘り込まれ、50㎝程の深さで傾斜が変換する。変換後は約60°の角度で底面に至る。底面は径約90㎝の楕円形で、平坦である。

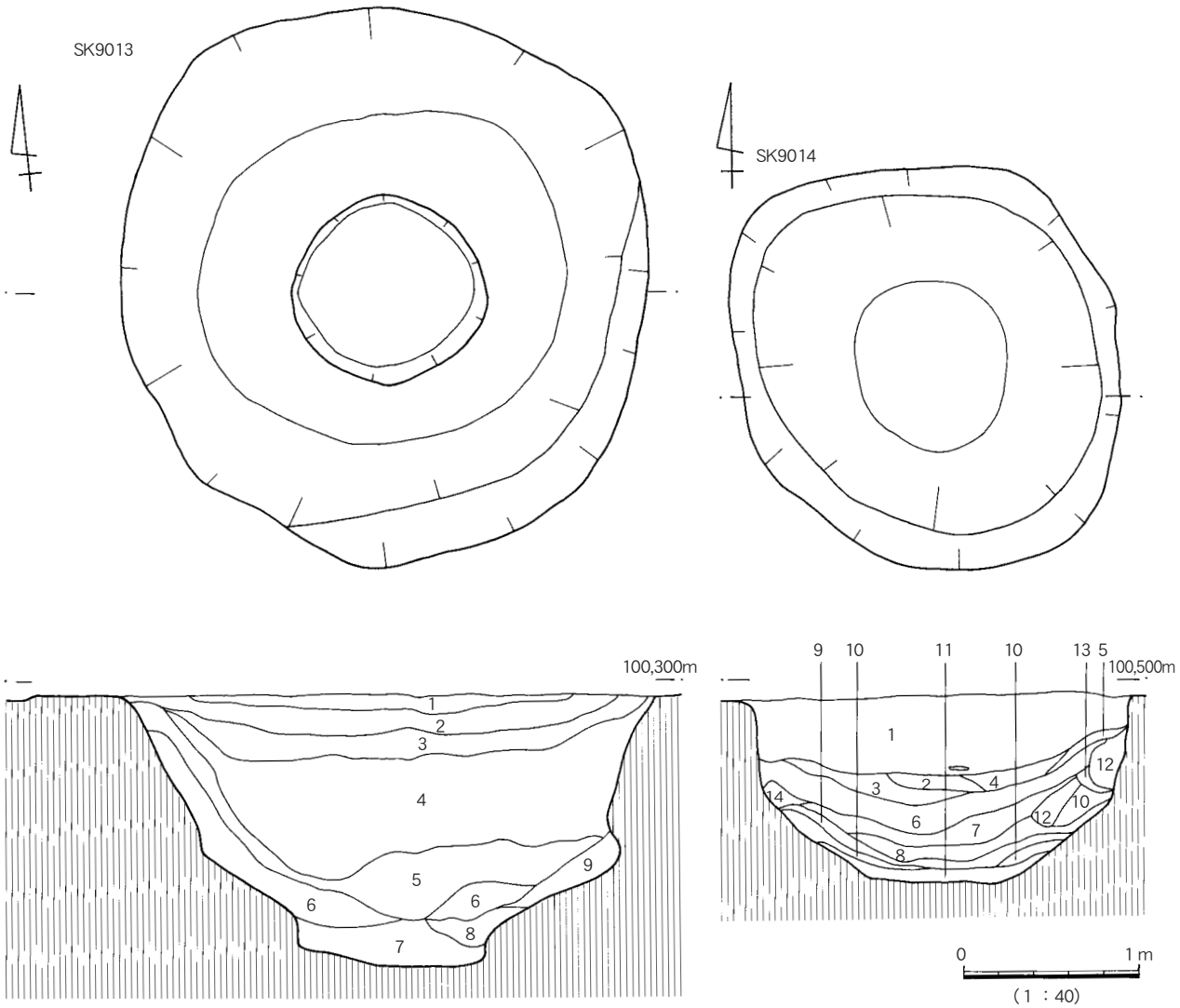
覆土は、２層以下に黄褐色や黒褐色のシルトブロックを含む暗褐色または黒褐色のシルトが堆積する。これらは水成堆積によるものと考えられるが、１層は小礫、粗砂を多量に含む以外はほとんど混入物はなく、短時間で埋没したものと考えられる。なお、11層については珪藻化石、花粉化石、植物珪酸体の分析を行っている。しかし、植物珪酸体と花粉化石の分析からは良好な結果を得られなかった。珪藻化石の分析結果からは、土坑が密閉された環境になかったことが報告されている。

出土遺物は、須恵器甕１点である。

【SK9016】第205図

40－233・234グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2mである。前述したSK9012の東に近接する。また、SD9021と切り合い、断面観察等によりSD9021→SK9016の新旧関係が確認される。

平面形は、長軸2.3m、短軸2.1mの南北にやや長い楕円形を呈する。深さは1.2mを測る。



SK9013

1	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒、砂微量含む、固く締る
2	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量、砂多量含む、固く締る
3	10YR2/3	黒褐	シルト	炭化粒微量、暗褐色、黄褐色シルトブロック、砂含む
4	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色粗砂、黄褐色、暗褐色シルトブロック、小礫含む
5	10YR2/2	黒褐	シルト	炭化粒微量、灰黄褐色シルトブロック、粗砂含む、弱い粘性
6	10YR2/2	黒褐	シルト	灰黄褐色、明黄褐色シルトブロック、粗砂多量含む
7	5Y3/1	オリーブ黒	シルト	炭化粒微量、黄灰砂含む、粘性（グライ化）
8	10YR3/4	暗褐	粗砂	黒褐色シルトブロック含む
9	10YR6/4	にぶい黄橙	シルト	黒褐色シルトブロック、暗褐色粗砂含む、固く締る

SK9014

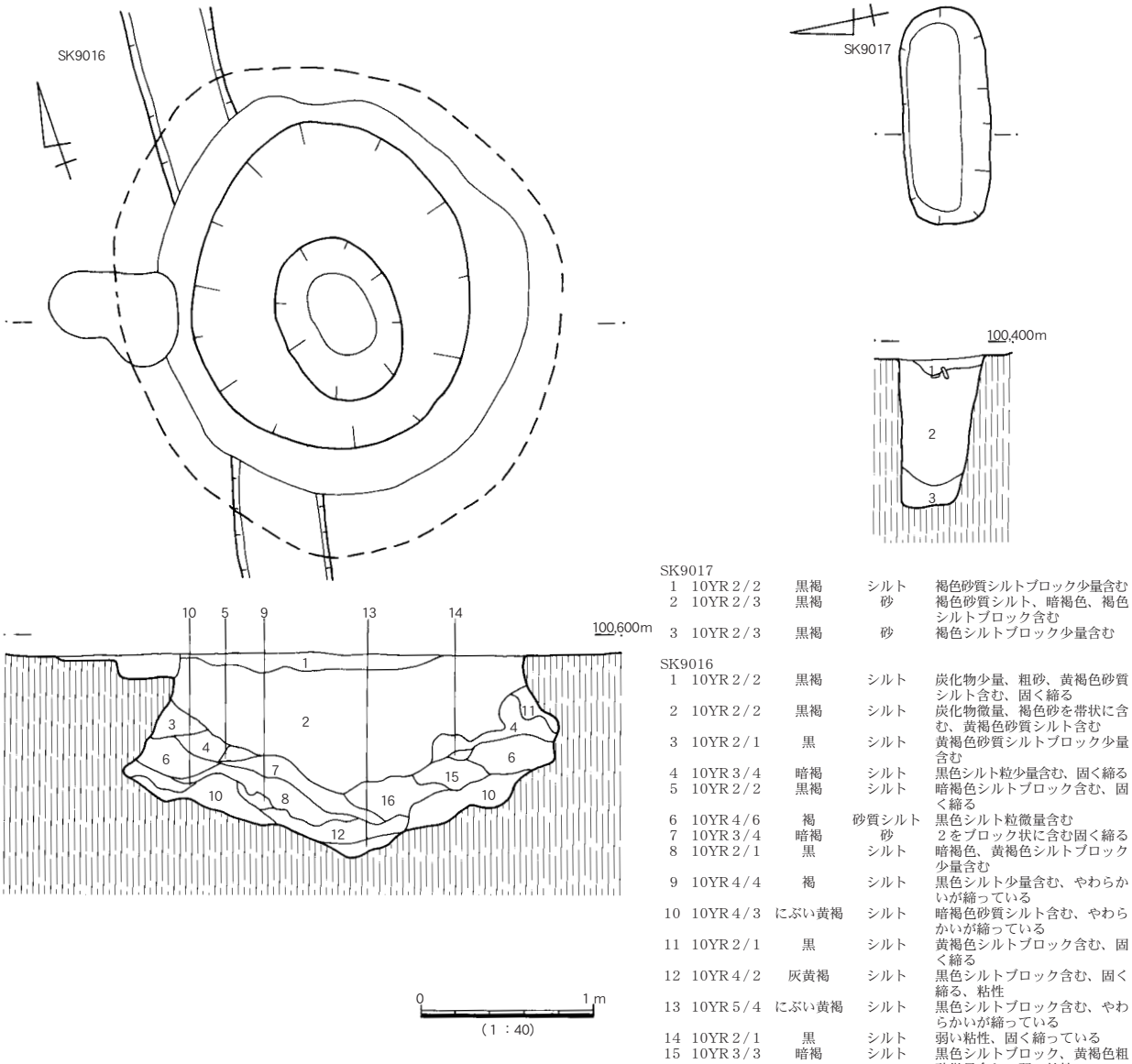
1	10YR2/3	黒褐	シルト	小礫、粗砂多量含む、焼土粒、炭化粒、黄褐色シルト含む
2	10YR2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
3	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色、黄褐色シルトブロック、細砂含む、固く締る
4	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色、黄褐色シルトブロック、細砂含む、固く締る
5	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	焼土粒、粗砂含む、固く締る
6	10YR2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量、焼土粒少量、炭化粒、礫含む
7	10YR2/3	黒褐	シルト	焼土(大)、炭化物、黄褐色シルトブロック含む、固く締る
8	10YR3/2	黒褐	シルト	黒色シルトブロック、焼土(小)少量含む、強い粘性
9	10YR4/3	にぶい黄橙	シルト	黒色シルト粒、細砂含む、弱い粘性、固く締る
10	10YR6/6	明黄褐	シルト	細砂含む、弱い粘性、壁の崩落土、固く締る
11	10YR3/4	暗褐	シルト	焼土粒微量含む、褐色細砂、黄褐色シルトブロック含む
12	10YR3/4	暗褐	粘土	黒褐色シルトブロック含む、壁の崩落土、固く締る
13	10YR3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック多量含む、固く締る
14	10YR3/4	暗褐	細砂	黒褐色シルト粒少量含む、壁の崩落土、固く締る

第204図　SK9013、9014

壁は全面オーバーハングし、深さ60㎝の地点で最大径となる。最大径は長軸2.9m、短軸2.5mまで膨らむ。底面は、最大径が巡る地点から約70°の傾斜で中心部まで至る。断面形はSK9012に類似する算盤玉型を呈する。

覆土は、下層に黄褐色シルトや黒色シルトを大きなブロック状に含む、暗褐色やにぶい黄褐色のシルト等が不規則に重なっており、自然堆積と壁等の崩落が繰り返されたものと考えられる。２層には褐色の砂や砂質のシルトが霜降り状に含まれる。人為的な埋め戻しによるものと考えられる。13層は珪藻化石、花粉化石、植物珪酸体の分析を行っているが、植物珪酸体と花粉化石の分析からは良好な結果を得られなかった。しかし、植物珪酸体の個体数では、ネザサ節型とヨシ属が１個体も含まれないことは、周辺環境の違いによるものなのか検討する必要がある。珪藻化石の分析結果からは、土坑が密閉された環境になかったことが報告されている。

遺構からの出土遺物はない。



SK9017

1	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色砂質シルトブロック少量含む
2	10YR２/３	黒褐	砂	褐色砂質シルト、暗褐色、褐色シルトブロック含む
3	10YR２/３	黒褐	砂	褐色シルトブロック少量含む

SK9016

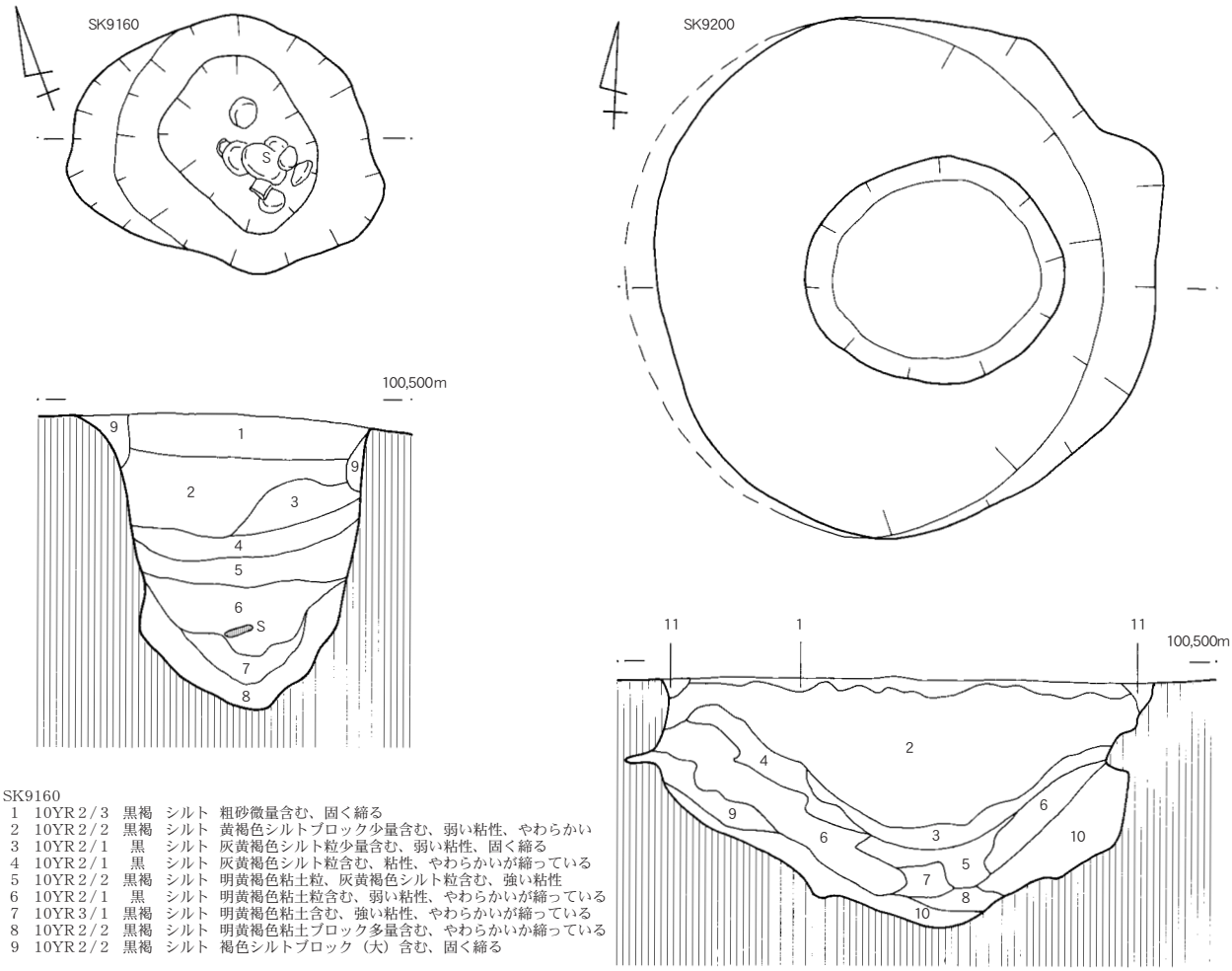
1	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物少量、粗砂、黄褐色砂質シルト含む、固く締る
2	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物微量、褐色砂を帯状に含む、黄褐色砂質シルト含む
3	10YR２/１	黒	シルト	黄褐色砂質シルトブロック少量含む
4	10YR３/４	暗褐	シルト	黒色シルト粒少量含む、固く締る
5	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む、固く締る
6	10YR４/６	褐	砂質シルト	黒色シルト粒微量含む
7	10YR３/４	暗褐	砂	２をブロック状に含む固く締る
8	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック少量含む
9	10YR４/４	褐	シルト	黒色シルト少量含む、やわらかいが締っている
10	10YR４/３	にぶい黄褐	シルト	暗褐色砂質シルト含む、やわらかいが締っている
11	10YR２/１	黒	シルト	黄褐色シルトブロック含む、固く締る
12	10YR４/２	灰黄褐	シルト	黒色シルトブロック含む、固く締る、粘性
13	10YR５/４	にぶい黄褐	シルト	黒色シルトブロック含む、やわらかいが締っている
14	10YR２/１	黒	シルト	弱い粘性、固く締っている
15	10YR３/３	暗褐	シルト	黒色シルトブロック、黄褐色粗砂微量含む、弱い粘性
16	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色粗砂、シルト、黄褐色シルト多量含む締っている

第205図　SK9016、9017

【SK9017】第205図

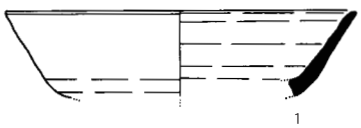
39－235グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.3mである。SK9018等が隣接するが、遺構はそれほど密集しない。

平面形は、長軸1.2m、短軸0.5mの東西に長い楕円形である。深さは0.9mを測る。壁は、南側が幾分傾くが、他はほぼ垂直に掘り込まれる。



SK9160
1　10YR2/3　黒褐　シルト　粗砂微量含む、固く締る
2　10YR2/2　黒褐　シルト　黄褐色シルトブロック少量含む、弱い粘性、やわらかい
3　10YR2/1　黒　シルト　灰黄褐色シルト粒少量含む、弱い粘性、固く締る
4　10YR2/1　黒　シルト　灰黄褐色シルト粒含む、粘性、やわらかいが締っている
5　10YR2/2　黒褐　シルト　明黄褐色粘土粒、灰黄褐色シルト粒含む、強い粘性
6　10YR2/1　黒　シルト　明黄褐色粘土粒含む、弱い粘性、やわらかいが締っている
7　10YR3/1　黒褐　シルト　明黄褐色粘土含む、強い粘性、やわらかいが締っている
8　10YR2/2　黒褐　シルト　明黄褐色粘土ブロック多量含む、やわらかいか締っている
9　10YR2/2　黒褐　シルト　褐色シルトブロック（大）含む、固く締る

SK9200
1　10YR2/3　黒褐　砂質シルト　粗砂、暗褐色シルト含む、固く締る
2　10YR2/1　黒　シルト　粗砂多量、褐色細砂ブロック状に、暗褐色シルト斑状に含む
3　10YR2/2　黒褐　シルト　細砂含む、やわらかい
4　10YR2/2　黒褐　シルト　炭化物微量、暗褐色シルト粒少量含む、やわらかい
5　10YR2/1　黒　シルト　細砂、暗褐色シルトブロック含む、固く締る
6　10YR3/4　暗褐　シルト　黒色シルトブロック、細砂含む、固く締る
7　10YR4/2　灰黄褐　シルト　細砂、黄褐色シルト含む、粘性、固く締る
8　10YR5/6　黄褐　細砂　固く締る
9　10YR5/6　黄褐　シルト　黒色、褐色シルトブロック含む、弱い粘性、固く締る
10　10YR4/4　褐　細砂　褐色シルト微量含む、固く締る
11　10YR3/4　暗褐　砂質シルト　黒褐色、黄褐色シルト粒含む、固く締る



0　10cm
（1：3）

0　1m
（1：40）

第206図　SK9160　出土遺物、9200

表81　SK9160出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
206	1 須恵器	無台坏（138）				6	粗砂混入	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		

覆土は３層に分層したが、概ね同質のもので、短時間で埋没したことがうかがえる。遺構内から104点の縄文土器が出土している。周辺には縄文時代に所属する遺構はないが、20ｍ南に土器埋設遺構EU9325があることから、縄文時代の遺構の可能性が高い。

【SK9160】第206図

35・36－240グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4ｍである。周辺には僅かに土坑や柱穴が見られるが、遺構の数は希薄である。

平面形は、長軸1.7ｍ、短軸1.3ｍの不整楕円形を呈する。深さは1.6ｍを測る。壁は垂直に近い角度で掘り込まれる。底面に平坦な面はなく、擂鉢状を呈する。

覆土は、黄褐色の粘土粒を含む、黒褐色のシルトを主とした、水成堆積である。６層から径10～20㎝大の礫がまとまって出土している。また、最下層の８層の試料を使って、珪藻化石、花粉化石、植物珪酸体の分析を行っている。その結果、珪藻化石の分析結果からは、土坑が密閉された環境になかったことが考えられ、花粉化石の分析からはヨモギ属、ソバ属、クワ科、イネ科、ブナが比較的高率に出現していることから、周辺にこれらの植物が茂っていたことや、ブナが主要な森林構成要素であったことが考えられた。さらに、ソバ属の出現が特徴付けられ、ソバの貯蔵あるいは果皮などの廃棄に使われた可能性が示唆された。植物珪酸体については、クマザサ節型、ヨシ属等が検出されているが量的には少なく、周辺環境の影響によるもので、直接遺構の性格を反映したものではないと考えられた。

出土遺物は、須恵器蓋２点、無台坏１点、甕３点、土師器無台坏３点、甕19点である。

【SK9200】第206図

44－247グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.3ｍである。SQ9009、SK9014、9199等が近接し、中世の遺構は比較的まとまっている。

平面形は、径約2.8ｍの楕円形を呈する。深さは1.3ｍである。壁は部分的にオーバーハングするが、60～80㎝の深さまでは、ほぼ垂直に掘り込まれたと推測される。ここからは約30°の傾斜で最深部まで至る。底面は擂鉢状を呈する。

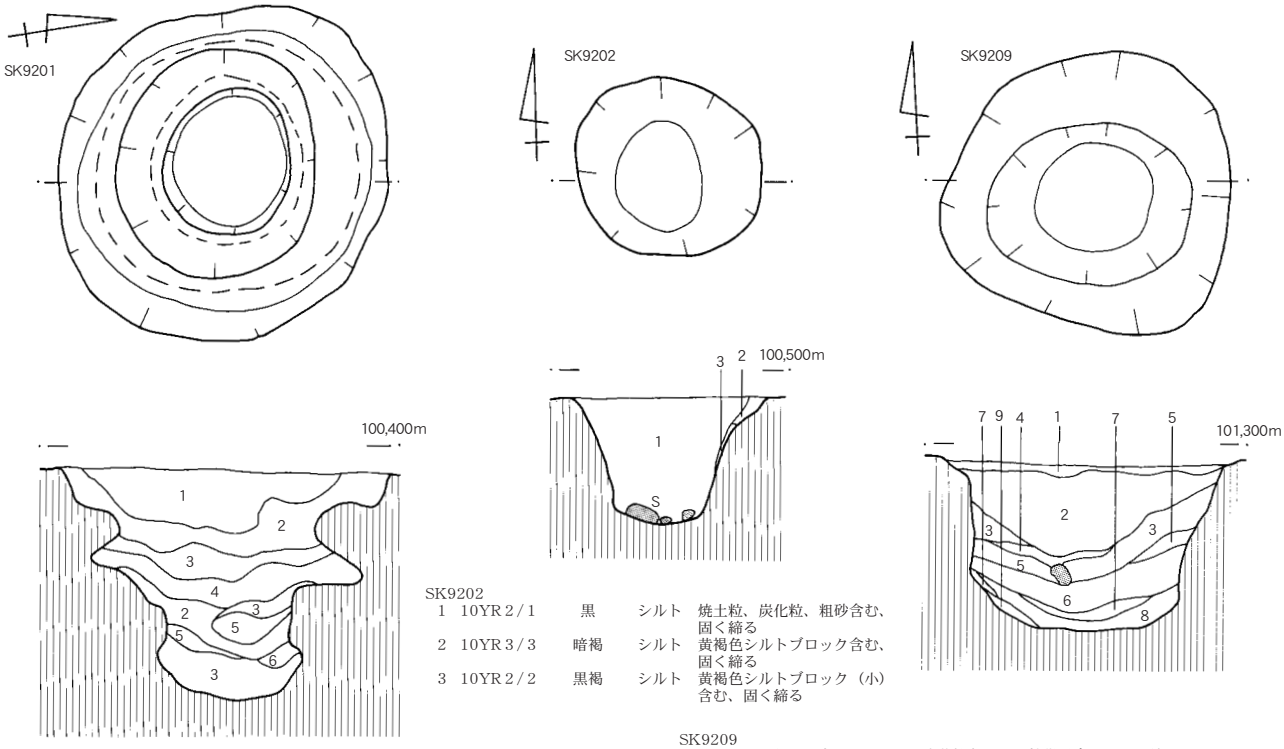
覆土は、３層以下が細砂あるいは細砂を含む黄褐色土を主とする自然堆積と考えられるが、２層は人為的な埋め戻しによると推測される。最下層の10層を試料とした珪藻化石、花粉化石、植物珪酸体の分析の結果、植物珪酸体と花粉化石の分析からは、種類、数量とも少なく良好な結果を得られなかった。しかし、珪藻化石では、淡水種珪藻化石が全くなく、海水種珪藻化石のみ検出されたことから乾燥した環境あるいは密閉された環境にあったことが想定されている。このことから、植物珪酸体と花粉化石の分析結果も理解できると考えられる。

遺構内から遺物は出土していない。

【SK9201】第207図

43－249グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4ｍである。周辺にはSB9220、9211やSK9199等があり、中世の遺構が密集する地区である。

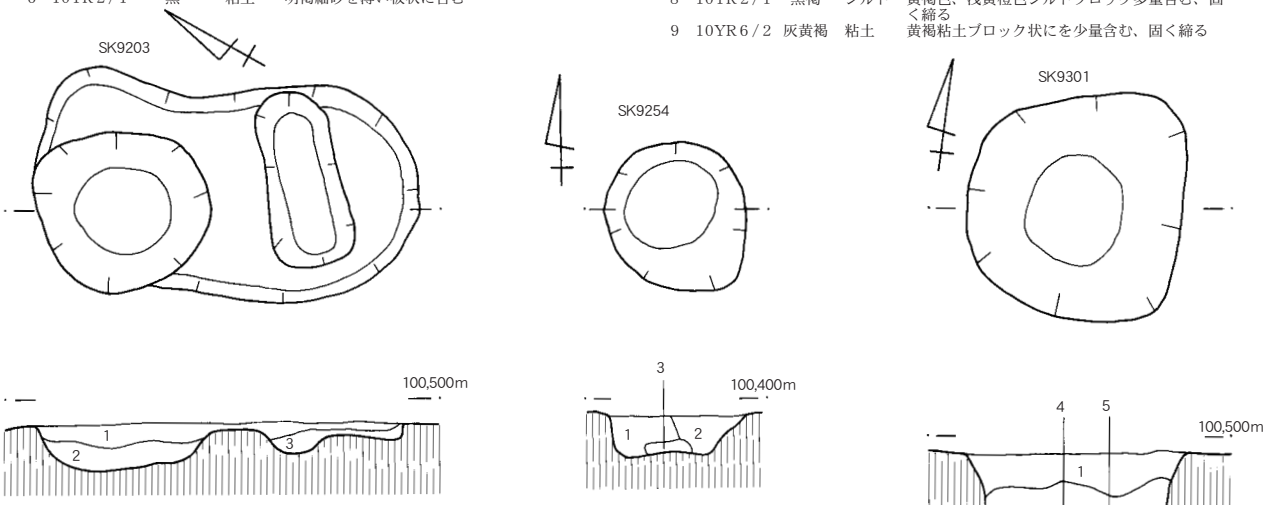
平面形は、径約1.8ｍのほぼ円形である。深さは1.2ｍである。壁は深さ50㎝の地点で30㎝程外側に抉られる。その下からは、ほぼ垂直に掘り込まれ、底面近くで再び抉り取られる。開口



SK9202
1 10YR2/1 黒 シルト 焼土粒、炭化粒、粗砂含む、固く締る
2 10YR3/3 暗褐 シルト 黄褐色シルトブロック含む、固く締る
3 10YR2/2 黒褐 シルト 黄褐色シルトブロック（小）含む、固く締る

SK9201
1 10YR3/3 暗褐 粗砂 暗褐色、褐色シルトブロック、黄橙シルト粒まばらに含む
2 10YR3/3 暗褐 シルト 暗褐粗砂、褐色シルトブロック、粗砂まばらに含む
3 10YR6/4 にぶい黄褐 シルト 褐色シルトブロック、黄橙色シルト粒、粗砂まばらに含む
4 10YR2/3 暗褐 粗砂 褐色シルトブロック含む、固く締る
5 10YR6/8 明黄褐 シルト 黒褐色シルト粒、粗砂含む、固く締る
6 10YR2/1 黒 粘土 明褐細砂を薄い板状に含む

SK9209
1 7.5YR3/1 黒褐 シルト 浅黄橙色シルト粒微量含む、固く締る
2 7.5YR3/1 黒褐 シルト 浅黄橙シルトブロックまばらに含む、固く締る
3 7.5YR3/1 黒褐 シルト 浅黄橙シルト、明黄褐シルトブロック微量含む
4 7.5YR3/1 黒褐 シルト 黄褐シルトブロック、浅黄橙シルト粒多量含む、固く締る
5 7.5YR3/1 黒褐 シルト 黄褐（大）、浅黄橙シルトブロック（小）少量含む
6 7.5YR3/1 黒褐 シルト 褐色シルトブロック多量、黄褐色粘土を板状に薄く含む
7 10YR2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルト粒多量含む、固く締る
8 10YR2/1 黒褐 シルト 黄褐色、浅黄橙色シルトブロック多量含む、固く締る
9 10YR6/2 灰黄褐 粘土 黄褐粘土ブロック状にを少量含む、固く締る



SK9203
1 10YR2/3 黒褐 シルト 黄褐色シルト粒、ブロック含む、固く締る
2 10YR2/3 暗褐 シルト 炭化粒微量、黄褐色シルト粒少量含む、固く締る
3 10YR3/4 暗褐 シルト 黒褐色シルトブロック少量含む、固く締る

SK9254
1 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト にぶい黄橙色シルトまばらに含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト にぶい黄橙砂質シルトブロック（大）多量含む、固く締る
3 10YR6/4 にぶい黄褐 砂質シルト にぶい黄褐シルト微量含む、もろく崩れやすい

SK9301
1 10YR2/1 黒褐 細砂 褐色シルト粒少量含む、固く締る
2 10YR2/1 黒 シルト 炭化物、焼土粒微量含む、褐色シルト粒含む、固く締る
3 10YR2/1 黒 シルト 褐色シルト粒少量含む
4 10YR2/2 黒褐 粗砂 黒色シルトブロック含む
5 10YR2/2 黒褐 シルト 粗砂含む

0 1m
（1：40）

第207図　SK9201、9202、9209　SK9203、9254、9301

部も大きく開くことから、断面形は「S」字状を描く。

覆土は、褐色シルト等を含む暗褐色シルトと粗砂が交互に堆積する。自然堆積によるものと考えられる。遺構内からの出土遺物はない。

【SK9202】第207図

43－249グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。周辺にはSK9201、9203、SB9211、9220等があり、中世の遺構が密集する地区である。

平面形は、径約1.0mの円形を呈する。深さは1.2mを測る。壁は約20°の傾斜を持つ。底面は径50～60cmの楕円形で、平坦である。径10cm前後の礫が入る。

覆土は焼土や炭化物を含む黒色シルトのほぼ単一層である。遺構からの出土遺物はない。

【SK9203】第207図

44－250グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。SB9211、9220、SK9201、9202に近接する。中世の遺構が密集する地点である。

平面形は、長軸2.0m、短軸1.0mの南北に長い長楕円形である。内部に径約80cmの円形と長軸90cm短軸40cmの長楕円形の２ケ所の掘り込みがあり、各々20cmと16cmの深さがある。他は8cm前後と浅く、平坦である。壁は約30°の傾斜を持つ。

覆土は、暗褐色のシルトを主に堆積し、堅く締る。遺構内からの出土遺物はない。

【SK9209】第207図

40－250グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。SB9290、9273、SK9013等に近接する。中世の遺構が集中する地区である。

平面形は、径約1.5mの楕円形である。深さは0.9mを測る。壁は急峻な所で約５°、緩い所で約30°である。底面は径約60cmの円形で、平坦である。

覆土は３層以下、黄褐色シルトを含む黒褐色シルトを主とした自然堆積であるが、２層は人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺構内からの出土遺物はない。

【SK9254】第207図

35－236グリッドに位置する。段丘の落ち際に立地し、標高は約100.4mを測る。主な遺構までは約10mの距離があり、遺構密度は極めて希薄な地区である。

平面形は、長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形を呈する。深さは約0.2mを測る。北側の壁はほぼ垂直であるが、南側は緩く、約50°である。底面は径約50cmの円形で、平坦である。

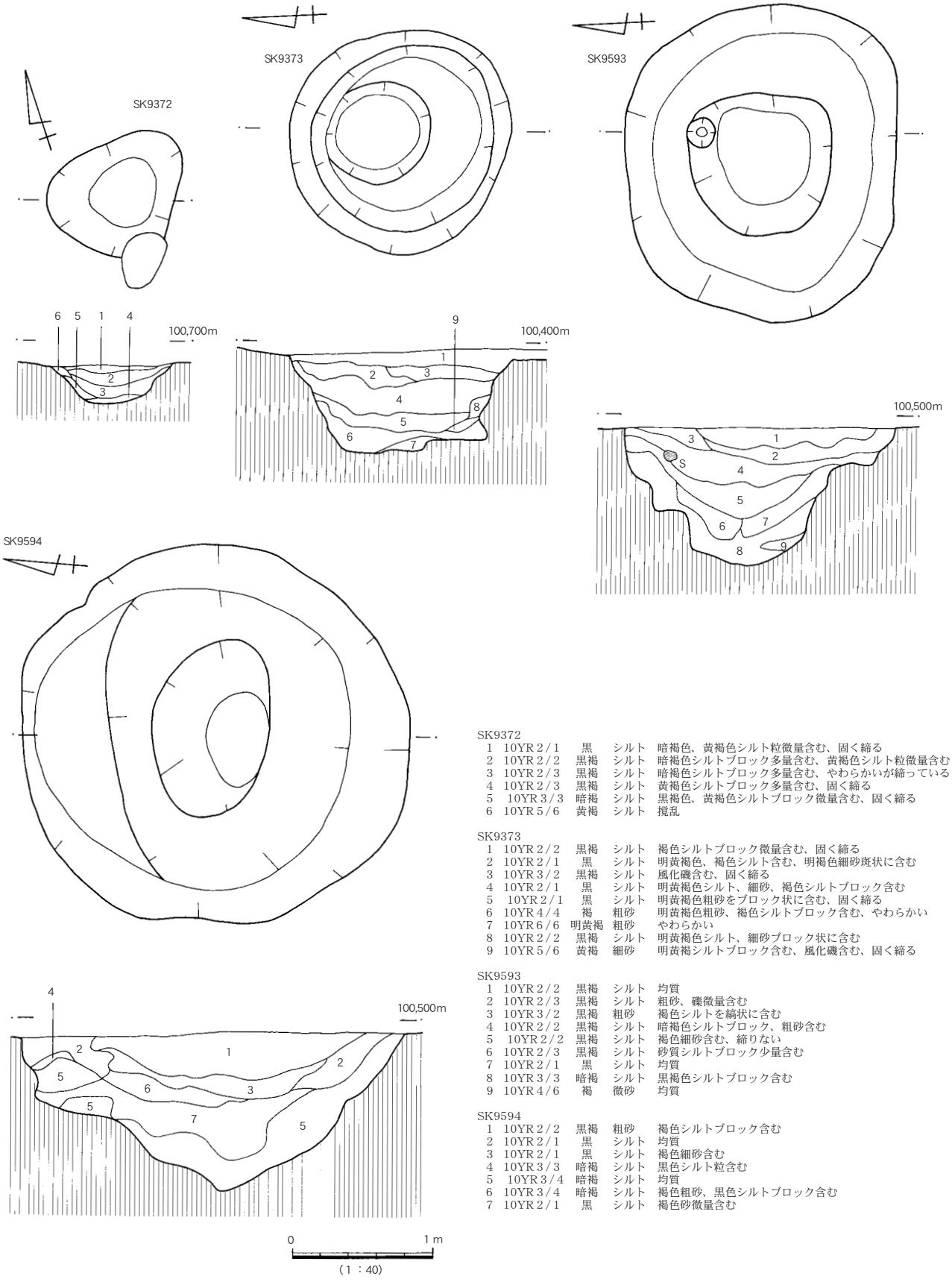
覆土は、にぶい黄褐色のシルトを主とするものである。遺構内からの出土遺物はない。

【SK9301】第207図

44－248グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4mである。周辺には前述したSK9201等主な土坑があり、中世の遺構が多く分布する地区である。

平面形は、径約1.2mの隅丸方形に近い円形を呈する。深さは約0.8mである。壁は約20°の傾斜を持つ。底面は径50cmの円形を呈し、平坦である。

覆土は、褐色シルトや炭化物、焼土等を含む黒褐色または黒色のシルトで、堅く締る。自然堆積によるものと考えられる。遺構内からの出土遺物はない。



SK9372
1 10YR 2/1 黒 シルト 暗褐色、黄褐色シルト粒微量含む、固く締る
2 10YR 2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトブロック多量含む、黄褐色シルト粒微量含む
3 10YR 2/3 黒褐 シルト 暗褐色シルトブロック多量含む、やわらかいが締っている
4 10YR 2/3 黒褐 シルト 黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
5 10YR 3/3 暗褐 シルト 黒褐色、黄褐色シルトブロック微量含む、固く締る
6 10YR 5/6 黄褐 シルト 撹乱

SK9373
1 10YR 2/2 黒褐 シルト 褐色シルトブロック微量含む、固く締る
2 10YR 2/1 黒 シルト 明黄褐色、褐色シルト含む、明褐色細砂斑状に含む
3 10YR 3/2 黒褐 シルト 風化礫含む、固く締る
4 10YR 2/1 黒 シルト 明黄褐色シルト、細砂、褐色シルトブロック含む
5 10YR 2/1 黒 シルト 明黄褐色粗砂をブロック状に含む、固く締る
6 10YR 4/4 褐 粗砂 明黄褐色粗砂、褐色シルトブロック含む、やわらかい
7 10YR 6/6 明黄褐 粗砂 やわらかい
8 10YR 2/2 黒褐 シルト 明黄褐色シルト、細砂ブロック状に含む
9 10YR 5/6 黄褐 細砂 明黄褐シルトブロック含む、風化礫含む、固く締る

SK9593
1 10YR 2/2 黒褐 シルト 均質
2 10YR 2/3 黒褐 シルト 粗砂、礫微量含む
3 10YR 3/2 黒褐 粗砂 褐色シルトを縞状に含む
4 10YR 2/2 黒褐 シルト 暗褐色シルトブロック、粗砂含む
5 10YR 2/2 黒褐 シルト 褐色細砂含む、締りない
6 10YR 2/3 黒褐 シルト 砂質シルトブロック少量含む
7 10YR 2/1 黒 シルト 均質
8 10YR 3/3 暗褐 シルト 黒褐色シルトブロック含む
9 10YR 4/6 褐 微砂 均質

SK9594
1 10YR 2/2 黒褐 粗砂 褐色シルトブロック含む
2 10YR 2/1 黒 シルト 均質
3 10YR 2/1 黒 シルト 褐色細砂含む
4 10YR 3/3 暗褐 シルト 黒色シルト粒含む
5 10YR 3/4 暗褐 シルト 均質
6 10YR 3/4 暗褐 シルト 褐色粗砂、黒色シルトブロック含む
7 10YR 2/1 黒 シルト 褐色砂微量含む

第208図　SK9372、9373　SK9593、9594

【SK9372】第208図

38－252グリッドに位置する。段丘直下に立地し、標高は約100.6ｍである。SB9316に近接する。北側にはSD9198を境に段丘面が迫り、中世の遺構はなくなる

平面形は、径約1.0ｍの楕円形を呈する。深さは約0.3ｍである。壁の傾斜は緩く、約40°である。底面は径約0.4ｍの楕円形で、平坦である。

覆土は黒褐色のシルトを主とした自然堆積で、堅く締る。出土遺物はない。

【SK9373】第208図

38－234グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.2ｍである。調査区中最も低い地点である。 SD9021、9374等の溝跡以外特になく、遺構密度は薄い。

平面形は径1.5ｍの円形を呈する。深さは約0.7ｍである。壁は約30°の傾斜を持つ。底面には僅かに段を有するが、最深部は径約60㎝の円形を呈し、平坦である。

覆土は黄褐色シルトを含む黒色のシルトを主とする自然堆積と考えられる。出土遺物はない。

【SK9593】第208図

41・42－206グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.5ｍである。SB815と重複関係にある他、SB824やSK9594等に近接し、中世の遺構が集中する地区である。

平面形は、長軸2.3ｍ、短軸2.0ｍの東西に長い楕円形を呈する。深さは約1.0ｍである。壁には凹凸が見られるが、約30°の傾斜を持つ。底面は径70㎝程の楕円形で中央部がやや窪む。

覆土は、砂質のシルト等を含む黒褐色シルトを主とする自然堆積である。出土遺物はない。

【SK9594】第208図

41－206・207グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.5ｍである。

平面形は、長軸2.8ｍ、短軸2.6ｍの東西にやや長い楕円形を呈する。深さは1.1ｍを測る。壁は50～60°の緩い傾斜を持ち、平坦な底を作ることなく中心部まで掘られる。

覆土は、褐色の砂を含む黒色または黒褐色のシルトで、自然堆積である。出土遺物はない。

【SK9199】第209図

43－247グリッドに位置する。段丘下段に立地し、標高は約100.4ｍである。SQ9009、SK9014等に隣接する。中世の遺構が多く検出されている地区である。

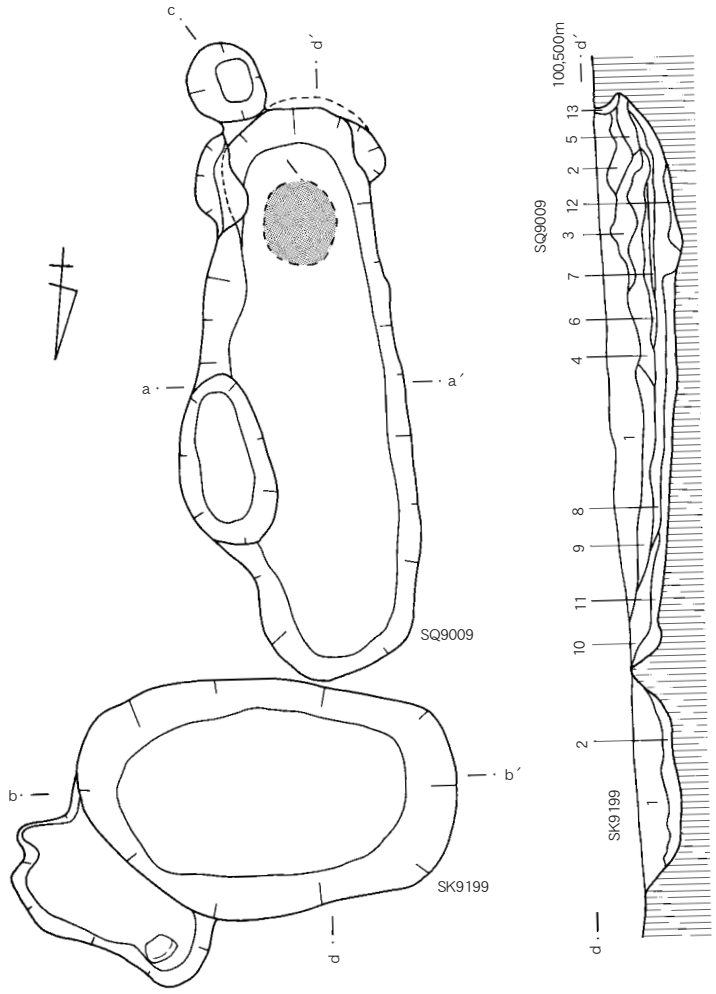
平面形は、東西2.0ｍ、南北1.3ｍの長楕円形である。深さは約0.2ｍを測る。壁は緩く50～60°の傾斜である。底面には、東西1.5ｍ、南北0.9ｍの楕円形の平坦面を持つ。

覆土は自然堆積である。SQ9009に付属する施設の可能性が考えられる。出土遺物はない。

【SQ9009】第209図

43－247グリッドに位置する。SK9199に隣接し、標高は約100.4ｍである。

平面形は、南北3.0ｍ、東西1.0ｍの長楕円形である。南東部に突出する掘り込みを有する。深さは約0.4ｍを測る。壁は０～30°の傾斜を持ち、広く平坦な底面を作り出す。底面の南側と南壁から突出部にかけては、強い火熱により堅く焼き締っている。覆土には炭化物や焼土が混入する。青森県境関館や根城で検出されている、所謂かまど状遺構である。唯一の検出例であり、出土遺物もないことから、不明な点が多いが、鍛冶に関連した施設と考えておきたい。

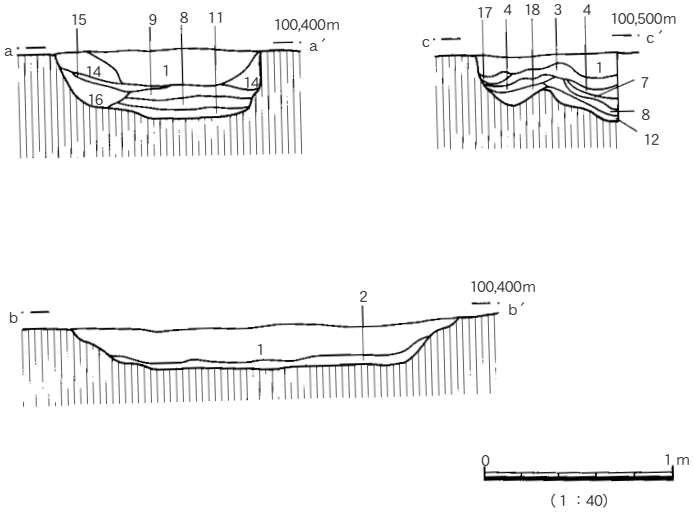


SQ9009

1	10YR２/３	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色シルト粒、暗褐色シルトブロック、粗砂含む
2	10YR２/３	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
3	10YR３/４	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む、粗砂含む
4	10YR２/１	黒	シルト	黄褐色シルト粒微量含む、固く締る
5	10YR２/２	黒褐	シルト	焼土少量、黄褐色、暗褐色シルトブロック多量含む
6	10YR２/３	黒褐	シルト	焼土多量含む、やわらかいが締っている
7	10YR1.7/１	黒	炭化物層	黒色シルト含む、固く締る
8	10YR４/３	黒褐	シルト	焼土を多量に含む、黒褐色、黄褐色シルトブロック含む
9	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色シルトブロック多量含む、固く締る
10	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、やわらかい
11	10YR３/４	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック、粗砂含む、固く締る
12	10YR２/１	黒	シルト	暗褐色シルトブロック微量含む、固く締る
13	10YR３/４	暗赤褐	シルト	焼壁
14	10YR２/２	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒微量含む、固く締る
15	10YR２/２	黒褐	シルト	炭化物微量含む、やわらかいがしまっている
16	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック少量含む、固く締る
17	10YR２/２	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る
18	10YR２/２	黒褐	シルト	暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む、固く締る

SK9199

1	10YR２/２	黒褐	シルト	黒褐色シルトブロック微量、黄褐色シルトブロック含む
2	10YR３/４	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック少量含む、固く締る



第209図　SQ9009、SK9199

Ⅷ　溝　　跡

本調査区で検出された溝跡は、長短合わせて91条に上る。これらの分布状況は、第210図で見られるように、段丘下段により多くの溝が掘られた様子をうかがうことができる。段丘下段にはこれまで述べてきたように、奈良・平安時代の遺構はほとんど無く、中世の遺構が主体を成している。したがって、これらの溝跡も大半が中世に所属するものと考えられる。

出土遺物は量的に少なく、内容は須恵器や土師器等の土器類が多くを占める。中世の遺物は極めて少ないのが現状であり、出土遺物から遺構の所属時期を判断することは困難である。形態的には、幅や深さ、断面の形状等はまちまちである。また、他の調査区まで続いている溝も多くあり、総合的な検討が必要と考えられる。

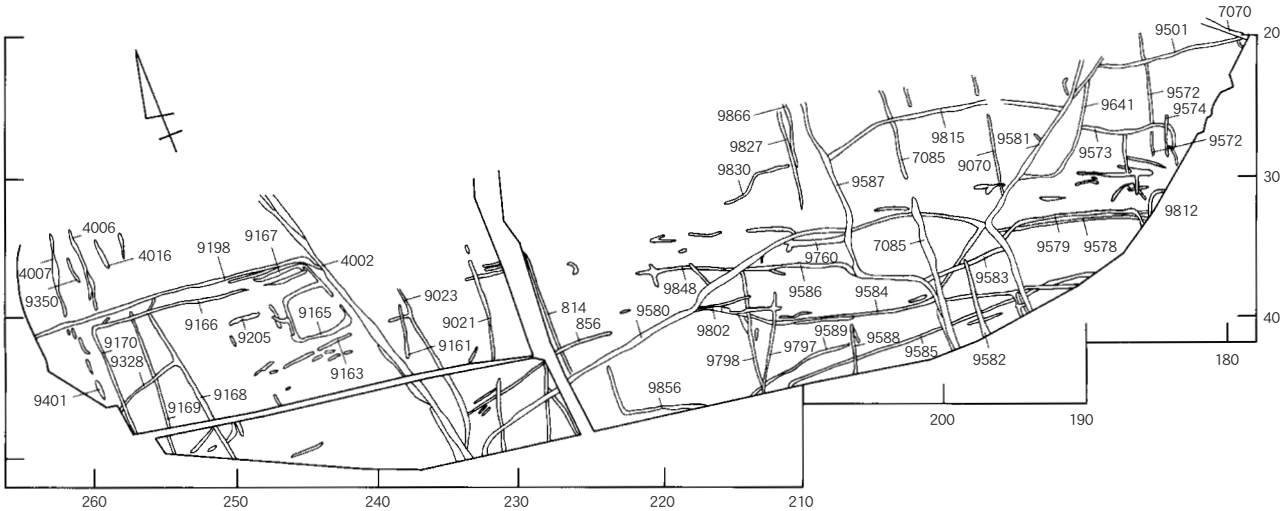
【SD9185】第211図

22－191グリッドから40－195グリッドまで検出された。調査区内の検出長は103ｍである。北は２期調査区から始まり、南はHO調査区まで延びる。２期調査でSD7001で登録された溝跡につながる（高瀬山遺跡２期第２・３次発掘調査報告書本文編　第59図：以下２期報告書）。２期、HOを含めた総延長は196ｍにおよぶ。

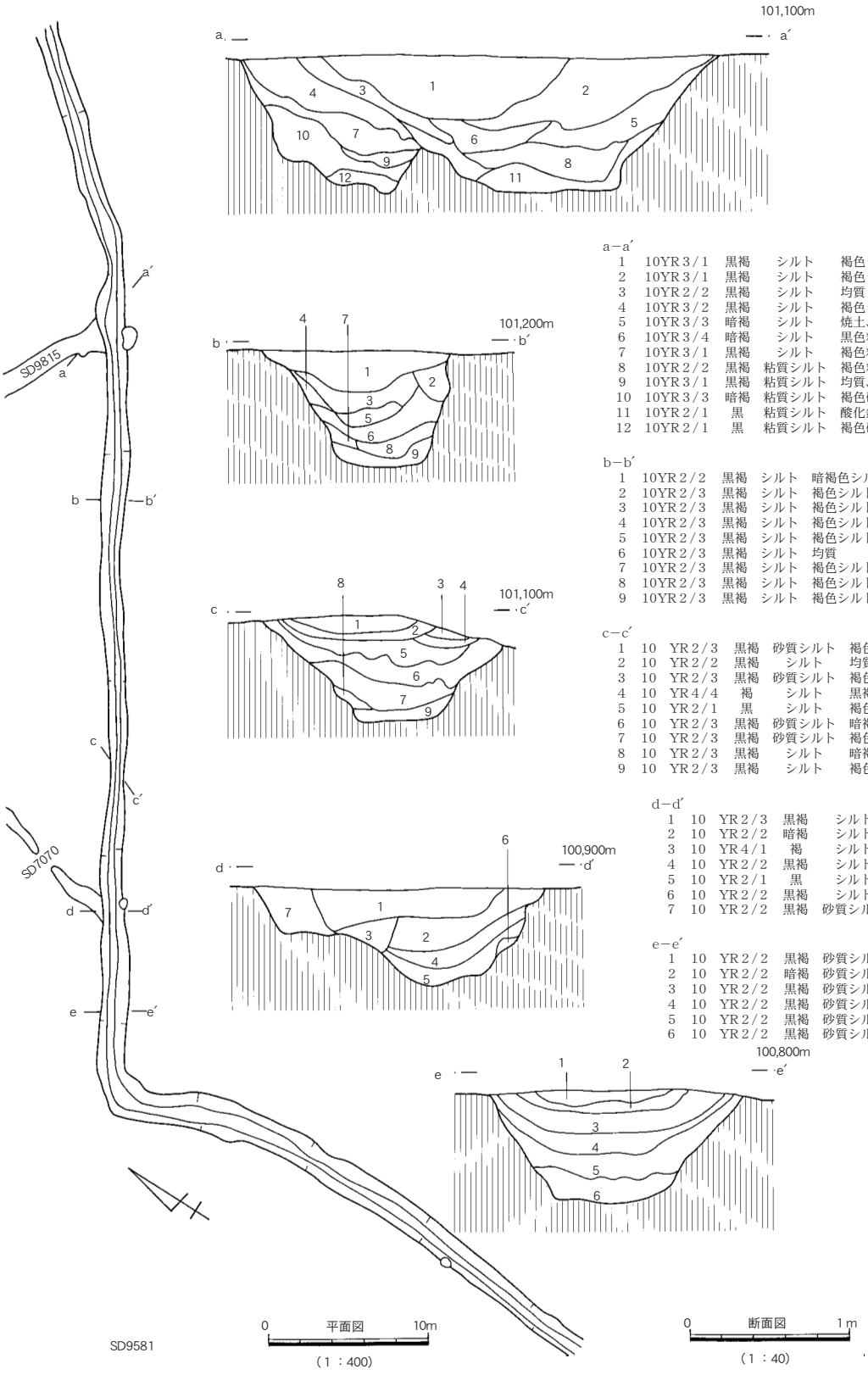
大きく２ケ所で屈曲するが、それ以外は直線的である。幅は1.1ｍ～2.4ｍで開きがあるが、概ね1.8ｍ程が平均的である。深さは、段丘上で約90㎝、段丘下段では約70㎝である。断面形は、基本的に逆台形を呈し、壁の傾斜は約30～40°である。

覆土は、褐色のシルトを含み、北部は粘質、南部は砂質の黒褐色シルトが主体となる。概ねレンズ状の堆積を見せる。SD9815、7070、9580、9578、9579、9583と切り合いがあり、SD7070→9815・9578・9579・9850→9583→9581の新旧関係が認められる。

出土遺物は須恵器蓋22点、無台坏138点、有台坏13点、短頸壷１点、長頸壷21点、甕80点、横瓶１点、円面硯２点、黒色土器無台坏２点、土師器無台坏９点、皿１点、甕527点、縄文土器３点、かわらけ１点、中世陶器１点、である（第212図）。



第210図　溝跡分布図



a－a′

1	10YR3/1	黒褐	シルト	褐色シルト粒多量含む
2	10YR3/1	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
3	10YR2/2	黒褐	シルト	均質
4	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒多量、黒色シルト粒少量含む
5	10YR3/3	暗褐	シルト	焼土、褐色シルト粒少量含む
6	10YR3/4	暗褐	シルト	黒色粘質シルト粒、褐色粘質シルト含む
7	10YR3/1	黒褐	シルト	褐色粘質シルト粒多量含む
8	10YR2/2	黒褐	粘質シルト	褐色粘質シルト粒多量含む、堅く締る
9	10YR3/1	黒褐	粘質シルト	均質、堅く締る
10	10YR3/3	暗褐	粘質シルト	褐色砂質シルト粒少量含む
11	10YR2/1	黒	粘質シルト	酸化鉄を稿状に多量含む
12	10YR2/1	黒	粘質シルト	褐色砂質シルト微量含む

b－b′

1	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒含む
2	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む
3	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト微量含む
4	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト微量含む、しまりない
5	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトを稿状に含む
6	10YR2/3	黒褐	シルト	均質
7	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む
8	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト微量含む
9	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む

c－c′

1	10 YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒微量含む
2	10 YR2/2	黒褐	シルト	均質
3	10 YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒少量含む
4	10 YR4/4	褐	シルト	黒褐色シルト粒含む
5	10 YR2/1	黒	シルト	褐色シルト粒微量含む
6	10 YR2/3	黒褐	砂質シルト	暗褐色シルトを稿状に含む
7	10 YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒微量含む
8	10 YR2/3	黒褐	シルト	暗褐色シルトを稿状に含む
9	10 YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトを斑状に含む

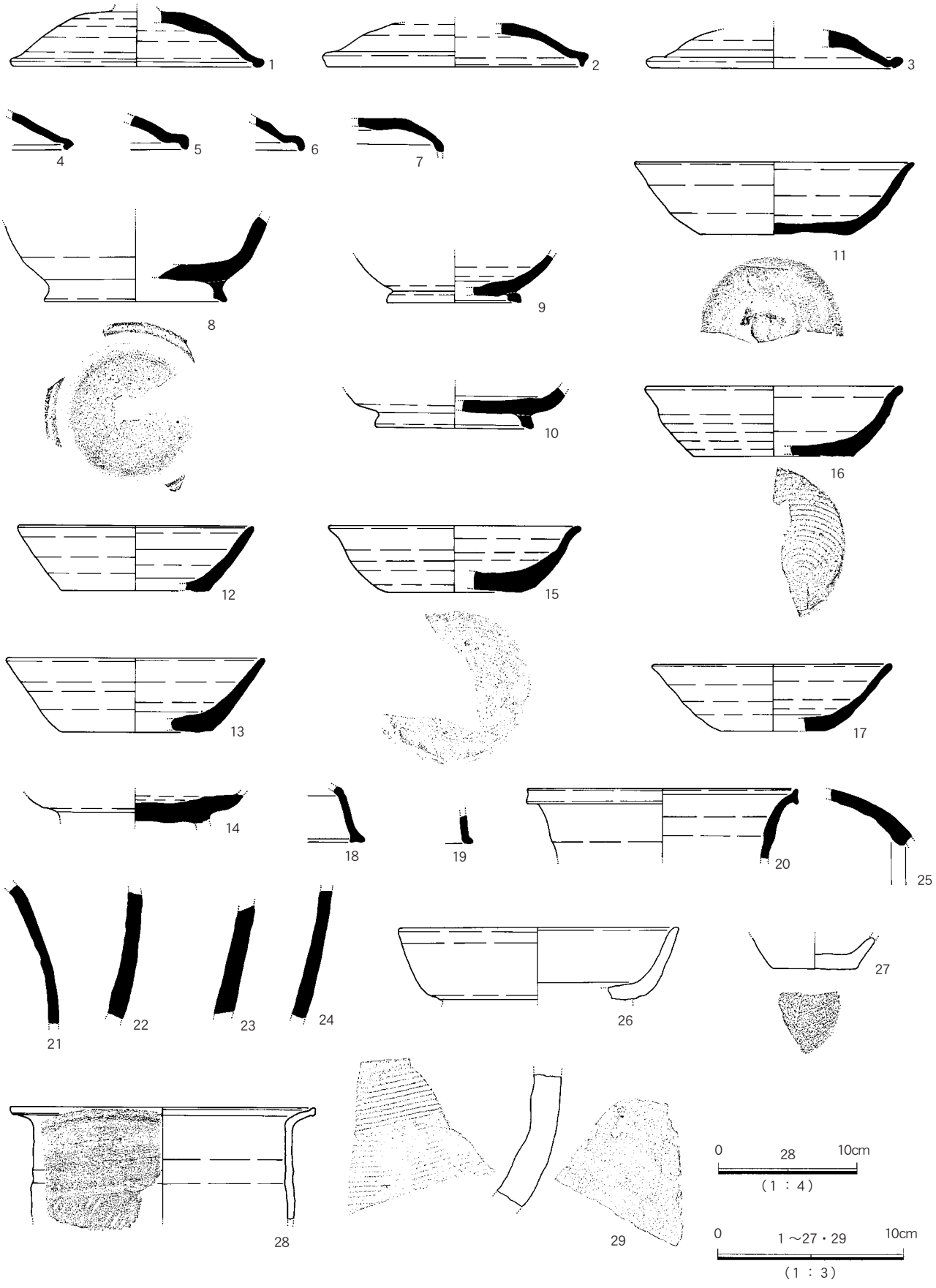
d－d′

1	10 YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む
2	10 YR2/2	暗褐	シルト	黒褐色シルト粒少量含む
3	10 YR4/1	褐	シルト	黒褐色シルトを斑状に多量含む
4	10 YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルトを稿状に含む
5	10 YR2/1	黒	シルト	褐色シルト粒少量含む
6	10 YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルトを斑状に多量含む
7	10 YR2/2	黒褐	砂質シルト	均質

e－e′

1	10 YR2/2	黒褐	砂質シルト	均質
2	10 YR2/2	暗褐	砂質シルト	褐色シルト粒微量含む
3	10 YR2/2	黒褐	砂質シルト	黒色、褐色シルト粒含む
4	10 YR2/2	黒褐	砂質シルト	黒色、褐色シルトを稿状に含む
5	10 YR2/2	黒褐	砂質シルト	黒色、褐色シルトを稿状に少量含む
6	10 YR2/2	黒褐	砂質シルト	黒色、褐色シルト、白色粘土含む

第211図　SD9581



第212図　SD9581出土遺物

212－１～７は須恵器蓋であ。全点つまみを欠く破片資料である。１～３の天井部には、回転ヘラケズリ調整が認められる。１は器高が高く、体部の傾きから４、６も高くなる可能性がある。口縁部は１、３が内側に折り曲げたもの、２、５はほぼ直立するものである。７は天井部が広く平坦に作られ、体部はやや丸味を持ち、口縁部に向かって強く屈曲する。天井部と体部に丁寧な回転ヘラケズリが施される。坏蓋とは明らかな違いが見られる。

212－9、10は有台坏の底部資料である。９は回転糸切りで、接地面の広い高台が貼付けられる。10はヘラ切り後ナデ調整されたもので、外端部が接地面となるものである。

212－1～13はへら切り、15～17は回転糸きりの無台坏である。11の体部は内湾し、口縁部が外反するものであるが、12、13は体部から口縁部にかけて直線的である。13の底部は円形に穿孔されたものと考えられる。同様に212－８の壷底部の中心が穿孔されている。15、16は口径、底径とも大きく、身は浅い。体部上半から口縁部にかけて強く外反し、特徴的な形を作る。

212－14は有台の皿と考えられる。高台が欠損する底部のみの資料で全容は不明である。底部はヘラ切り後ナデ調整される。底部を二重に貼った様な痕跡が見られるが、技法は不明である。

212－18、19は円面硯の脚部と考えられる。外端が小さく摘み出され、内端部が接地面となる。

212－21～24は各々アテ具の違いが見られる甕の体部片である。アテ具は21が目の細かい平行、22は格子、23は目の粗い平行、24は同心円である。タタキは何れも平行である。

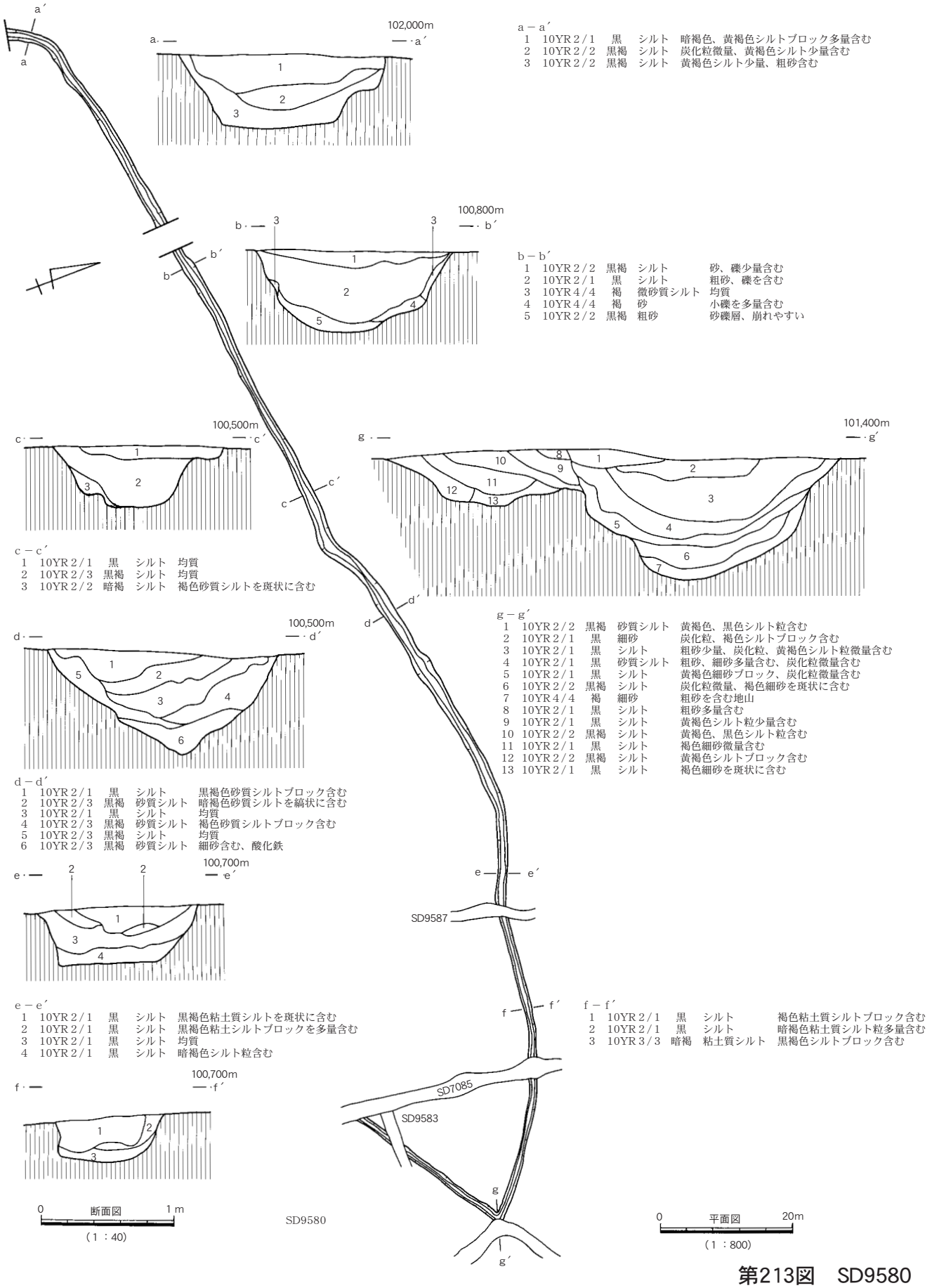
212－25は横瓶の閉塞部である。内外面とも閉塞円盤接合部までタタキとアテ痕が残る。

212－26～28は土師器である。26は高台が欠損する有台坏である。口径、底径が大きく、身は浅い。27は底部に櫛描きがある小型甕、28は外面にタタキが残る長胴甕である。

212－29は、須恵器系陶器の甕の体部片である。

表82　SD9581出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
	1	須恵器	蓋	(126)			5	細砂混入	良好	7.5YR5/1灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		26-194G
	2	須恵器	蓋	(136)			5	細砂混入	良好	N5/灰	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ		29-194G
	3	須恵器	蓋	(130)			8	緻密	良好	5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		26-194G
	4	須恵器	蓋				4	細砂混入	良好	5B5/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		31-196G
	5	須恵器	蓋				4	細砂混入、骨針	良好	5B6/1青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		26-194
	6	須恵器	蓋				4	細砂混入	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		26-194G
	7	須恵器	蓋				6	細砂混入	良好	5PB7/1明青灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	8	須恵器	壷		(98)		7	粗砂混入、骨針	良	10YR7/1灰白	ロクロナデ、ケズリ	ロクロナデ	ヘラ切り	28-194　底部穿孔
	9	須恵器	有台坏		(72)		5	細砂混入	良好	N3/暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	
	10	須恵器	有台坏		(84)		7	細砂混入	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	26-139
	11	須恵器	無台坏	150	78	39	4	砂粒混入	良	2.5YR7/2灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	26-194
	12	須恵器	無台坏	(128)	(78)	35	7	細砂混入	良	5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	27-184G
	13	須恵器	無台坏	(140)	(80)	40	4	砂粒混入	不良	5Y8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	27-184
	14	須恵器	皿				6	砂粒混入	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	29-194G
212	15	須恵器	無台坏	(136)	(72)	35.5	5.5	緻密	良	2.5Y5/1黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	29-194
	16	須恵器	無台坏	(138)	(86)	38	5.5	緻密	良	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	29-194
	17	須恵器	無台坏	(130)	(55)	36	4	細砂混入	良	10Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	26-193G
	18	須恵器	円面硯				3	緻密	良	2.5Y3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	19	須恵器	円面硯				3	緻密	良	10YR2/3黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
	20	須恵器	甕	(194)			5	緻密	良	7.5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
	21	須恵器	甕				7	緻密	良	10YR2/1黒	タタキ	アテ痕		27-184
	22	須恵器	甕				11	緻密	良好	10YR4/1褐灰	タタキ	アテ痕		26-194
	23	須恵器	甕				12	粗砂混入	良	2.5Y5/2暗灰黄	タタキ	アテ痕		26-194
	24	須恵器	甕				10	緻密	良	2.5YR5/1黄灰	タタキ	アテ痕		
	25	須恵器	横瓶				10	緻密	良	7.5YR5/1褐灰	ロクロナデ、タタキ	アテ痕		27-184、29-194
	26	須恵器	有台坏	(150)			5	砂粒混入	良	7.5YR6/4にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
	27	土師器	甕		(46)		5	粗砂混入	良	2.5YR5/6明赤褐			ケズリ	底部櫛書き
	28	土師器	甕	(220)			6	粗砂混入	良	7.5YR7/6橙	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ		
	29	須恵器系陶器	甕				16	緻密	良	5Y6/2灰オリーブ	タタキ	アテ痕		



a－a´
1　10YR２/１　黒　シルト　暗褐色、黄褐色シルトブロック多量含む
2　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化粒微量、黄褐色シルト少量含む
3　10YR２/２　黒褐　シルト　黄褐色シルト少量、粗砂含む

b－b´
1　10YR２/２　黒褐　シルト　砂、礫少量含む
2　10YR２/１　黒　シルト　粗砂、礫を含む
3　10YR４/４　褐　微砂質シルト　均質
4　10YR４/４　褐　砂　小礫を多量含む
5　10YR２/２　黒褐　粗砂　砂礫層、崩れやすい

c－c´
1　10YR２/１　黒　シルト　均質
2　10YR２/３　黒褐　シルト　均質
3　10YR２/２　暗褐　シルト　褐色砂質シルトを斑状に含む

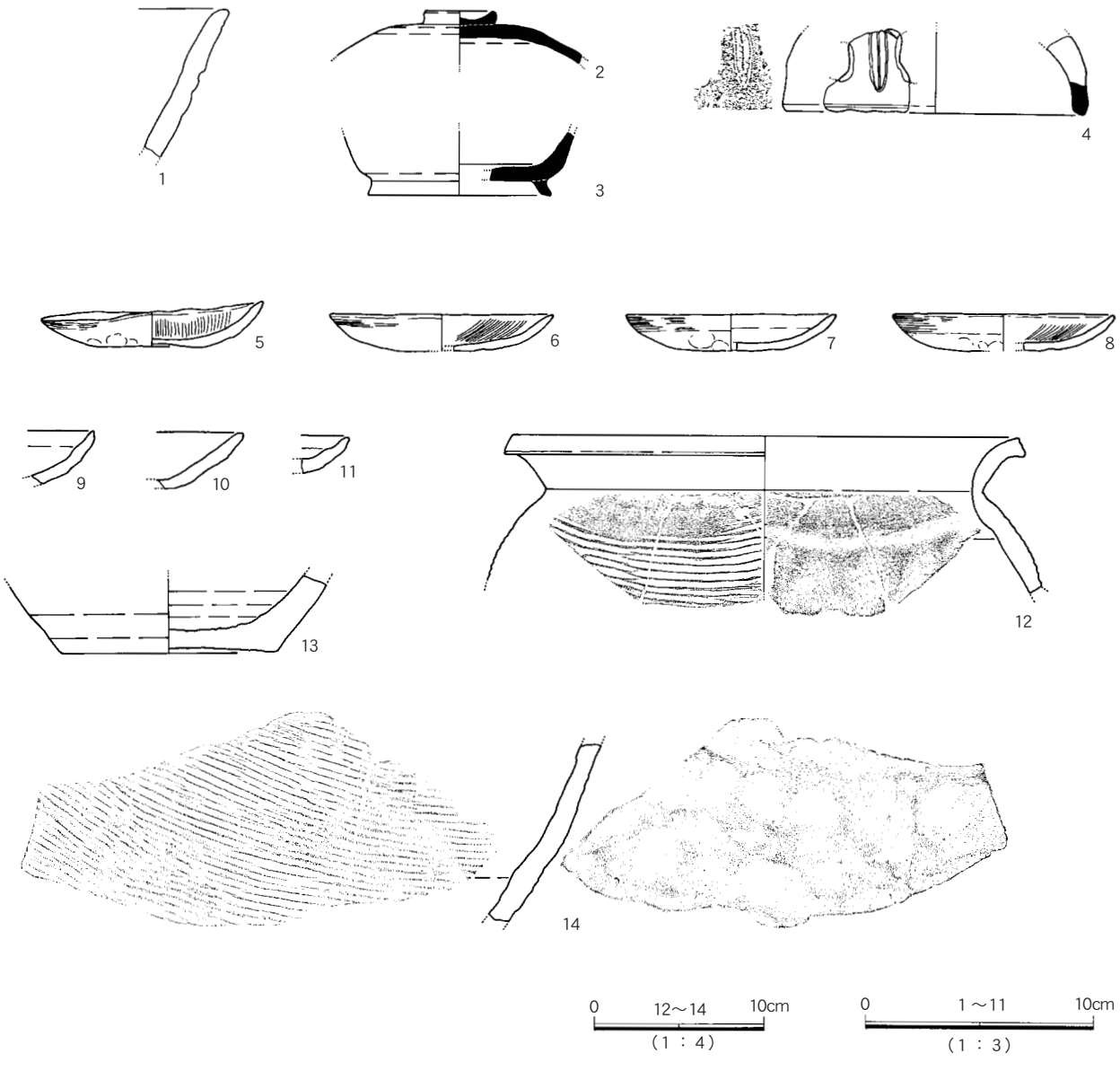
g－g´
1　10YR２/２　黒褐　砂質シルト　黄褐色、黒色シルト粒含む
2　10YR２/１　黒　細砂　炭化粒、褐色シルトブロック含む
3　10YR２/１　黒　シルト　粗砂少量、炭化粒、黄褐色シルト粒微量含む
4　10YR２/１　黒　砂質シルト　粗砂、細砂多量含む、炭化粒微量含む
5　10YR２/１　黒　シルト　黄褐色細砂ブロック、炭化粒微量含む
6　10YR２/２　黒褐　シルト　炭化粒微量、褐色細砂を斑状に含む
7　10YR４/４　褐　細砂　粗砂を含む地山
8　10YR２/１　黒　シルト　粗砂多量含む
9　10YR２/１　黒　シルト　黄褐色シルト粒少量含む
10　10YR２/２　黒褐　シルト　黄褐色、黒色シルト粒含む
11　10YR２/１　黒　シルト　褐色細砂微量含む
12　10YR２/２　黒褐　シルト　黄褐色シルトブロック含む
13　10YR２/１　黒　シルト　褐色細砂を斑状に含む

d－d´
1　10YR２/１　黒　シルト　黒褐色砂質シルトブロック含む
2　10YR２/３　黒褐　砂質シルト　暗褐色砂質シルトを縞状に含む
3　10YR２/１　黒　シルト　均質
4　10YR２/３　黒褐　砂質シルト　褐色砂質シルトブロック含む
5　10YR２/３　黒褐　シルト　均質
6　10YR２/３　黒褐　砂質シルト　細砂含む、酸化鉄

e－e´
1　10YR２/１　黒　シルト　黒褐色粘土質シルトを斑状に含む
2　10YR２/１　黒　シルト　黒褐色粘土シルトブロックを多量含む
3　10YR２/１　黒　シルト　均質
4　10YR２/１　黒　シルト　暗褐色シルト粒含む

f－f´
1　10YR２/１　黒　シルト　褐色粘土質シルトブロック含む
2　10YR２/１　黒　シルト　暗褐色粘土質シルト粒多量含む
3　10YR３/３　暗褐　粘土質シルト　黒褐色シルトブロック含む

第213図　SD9580



第214図　SD9580出土遺物

表83　SD9580出土土器観察表

挿図番号	器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	備考
214	1 縄文土器	深鉢				9	粗砂混入	良	10YR6/3にぶい黄橙				
	2 須恵器	蓋				5	緻密	良好	7.5Y5/1灰	ロクロナデ,ケズリ	ロクロナデ		27-184G
	3 須恵器	有台坏		(80)		6	細砂混入	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	27-184G　底部穿孔？
	4 須恵器	円面硯		(130)		9	砂粒混入	良好	7.5YR2/1黒	ロクロナデ、櫛書	ロクロナデ		34-210　円形透かし
	5 かわらけ	皿	98		20	4	緻密	良	5YR6/8橙	ナデ、指頭痕	ハケメ	指頭痕、板状圧痕	
	6 かわらけ	皿	(100)		16	3	緻密	良	5YR6/8橙	ナデ、指頭痕	ハケメ		
	7 かわらけ	皿	(94)		16	4	緻密	良	7.5YR6/6橙	ナデ、指頭痕	ナデ	指頭痕	
	8 かわらけ	皿	(100)		16	4	緻密	良	5YR6/8橙	ナデ、指頭痕	ハケメ	指頭痕	
	9 かわらけ	皿				5	緻密	良	5Y6/8橙	ナデ	ナデ		
	10 かわらけ	皿				4	緻密	良	7.5YR5/6明褐	ナデ、指頭痕	ナデ		
	11 かわらけ	皿				6	緻密	良	10YR5/4にぶい橙	ナデ	ナデ		
	12 須恵器系陶器	壺	(296)			10	砂粒混入	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ,アテ痕		48-230
	13 須恵器系陶器	甕		126		18	砂粒混入	良	10YR7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	砂底	
	14 須恵器系陶器	甕				14	砂粒混入	良	10YR8/1灰白	タタキ	アテ痕		

【SD9580】第213図

39－201から北東に向かい、33－199グリッドで屈曲し、大きな弧を描くように50－233グリッドまで続く。総延長は226ｍにおよぶ。溝の幅は、検出面の違いにもよるものと考えられるが、0.8～1.6ｍと開きがある。幅が狭い地点は深さも無く、多分に削平を受けた結果によるものと考えられる。削平を受けたと思われる所以外の深さは､50～80㎝である。壁は30～40°の傾斜を持ち、断面形は基本的に逆台形を呈するものと考えられるが、壁の崩落や底面の抉り込みによる型崩れも見られる。

覆土は黒褐色の砂質および粘質のシルトを含む、黒色シルトを主とする自然堆積である。多くの溝跡と切り合うが、本溝跡より新しいのはSD7085、9581、9583、9587の４条である。

出土遺物は、須恵器蓋２点、無台坏30点、有台坏９点、長頸壷25点、甕66点、土師器無台坏３点、甕95点、縄文土器120点、かわらけ４点、中世陶器２点である（第214図）。

214－１は縄文前期の深鉢口縁部破片である。爪形文が充填される。流れ込みである。

214－２～４は須恵器である。２の蓋は天井部に回転ヘラケズリが施されながらも、回転糸切り痕を残し、小さなリング状つまみが貼付けられたものである。３はヘラ切りの有台坏である。焼成後に底部穿孔されたものと考えられる。４は円面硯の脚部である。円形の透孔の間に草葉様の模様が櫛描きされたものである。

214－５～11はかわらけである。５～８の内底面にハケメの痕跡が認められる。底面にはユビオサエが見られる。９～11の口縁部は僅かに面取りされたものと考えられる。

214－12～14は須恵器系陶器の甕である。同一個体と考えられる。13の底部は砂底である。

【SD4002】第215図

32－247・248から50－234・235グリッドまで、ほぼ南北に沿って一直線な溝である。調査区内では57ｍに渡り検出した。２期、HOでも各々検出されており、総延長は290ｍにおよぶ。なお、遺構番号は２期調査のものを踏襲した（２期報告書第122図）。

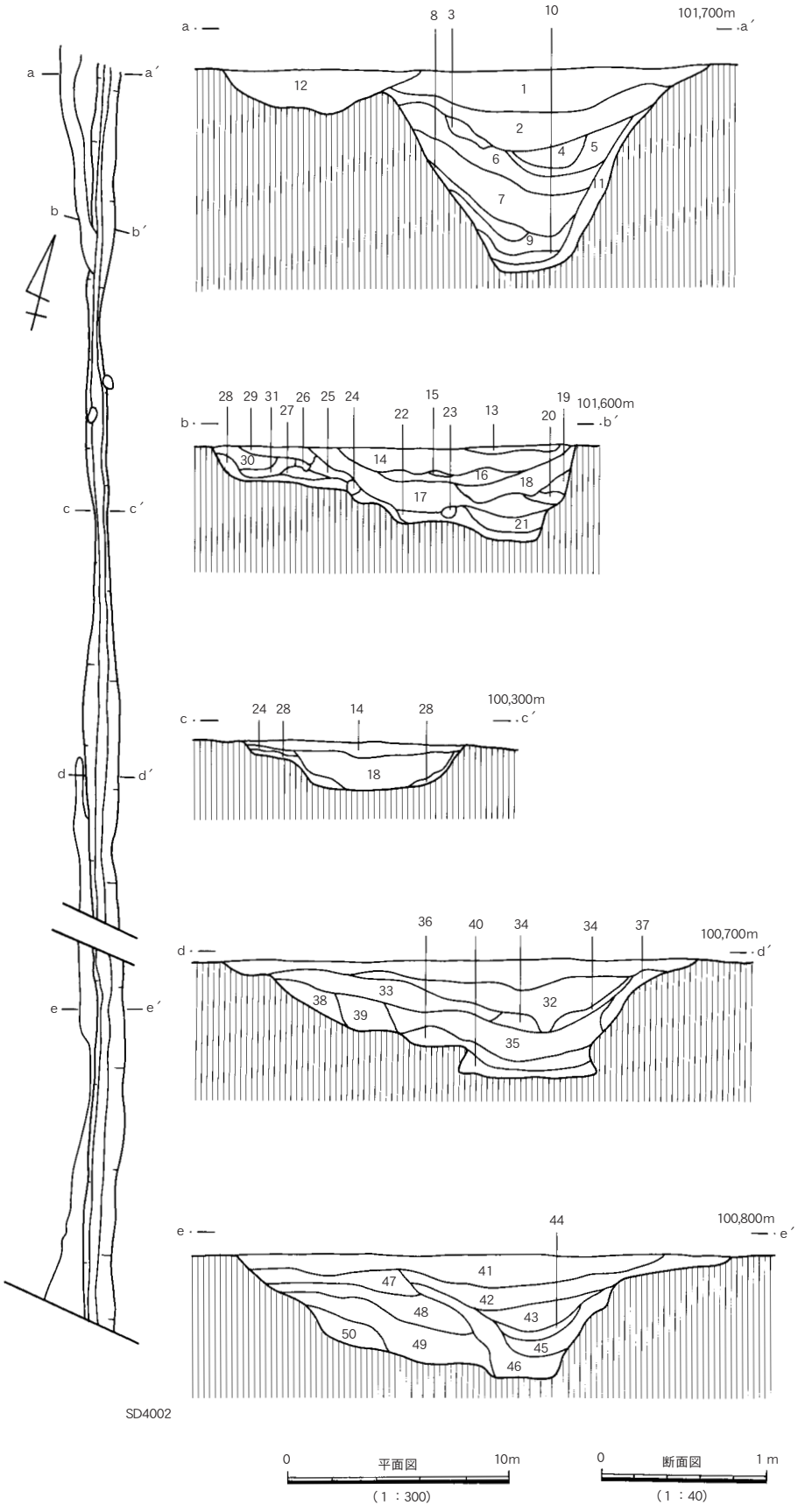
少なくとも２条の溝が重なっており、古い溝を掘り返した痕跡も見られる。幅や深さには前述したSD9580と同様の傾向がうかがえる。段丘上段では、幅約2.0ｍ、深さ1.2ｍで壁の傾斜が約30°の薬研堀状の形態を示す。段丘下段では、他の溝との重複もあるが幅1.5～2.0ｍ、深さ0.7ｍほどである。

覆土は概ね黒褐色のシルトで、自然堆積によるものである。

出土遺物は須恵器蓋２点、無台坏１点、有台坏１点、短頸壷１点、長頸壷５点、甕９点、土師器甕32点、甑１点、縄文土器14点である（第217図２～７）。

217－２～６は須恵器である。２は天井部と体部の一部に回転ヘラケズリが施されたもので、つまみは端部を欠損するが、リング状を呈すると考えられる。３はヘラ切りの有台坏で、口径、底径が大きく、身は浅い。細めの高台が付けられる。４もヘラ切りで、低く接地面の広い高台が付けられる。５はヘラ切りの無台坏である。口径、底径が小さく、比較的身が深い。６は焼成時に壷と甕の体部が融着したものである。両側が内面で、甕には青海波のアテ痕が残る。

217－７は土師器塝の口縁部である。外面はタタキの後ロクロナデが施される。

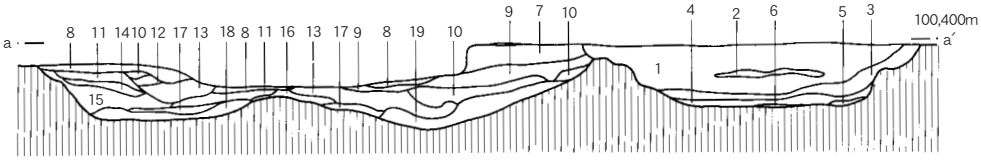


1	10YR 2/2	黒褐	シルト	黒色シルト粒微量、黄褐色シルト粒少量含む
2	10YR 2/2	黒褐	シルト	黒色シルト粒、暗褐色シルトブロック、黄褐色粒多量含む
3	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック微量含む
4	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色、暗褐色、黒色シルト多量含む
5	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色、暗褐色、黒色シルト、細砂多量含む
6	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色、暗褐色、黒色シルトブロックを斑状に含む
7	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色、暗褐色、黒色シルトブロックを多量含む
8	10YR 5/6	黒褐	シルト	黒色、暗褐色シルトブロック少量含む
9	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色、黒色シルトブロック少量含む、酸化鉄多量含む
10	10YR 4/2	灰黄褐	砂質シルト	灰白砂質シルトブロック多量、黒色シルトブロック少量含む
11	10YR 5/6	黄褐	砂質シルト	黒色シルトブロック微量含む
12	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルト少量含む
13	10YR 2/1	黒	シルト	暗褐色、黄褐色シルト粒少量含む
14	10YR 2/3	黒褐	シルト	黒色シルトブロック、黄褐色、暗褐色シルト粒多量含む
15	10YR 3/3	暗褐	シルト	黄褐色シルト粒多量含む
16	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック、小礫微量含む
17	10YR 2/3	黒褐	砂質シルト	黄褐色、黒色シルトブロック少量含む
18	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒多量、黄褐色シルト粒微量含む
19	10YR 3/3	暗褐	シルト	黒色シルトブロック少量含む
20	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック少量含む
21	10YR 2/2	黒褐		シルト　暗褐色、黒褐色シルトブロック含む
22	10YR 2/3	黒褐	シルト	黒色シルト粒、黄褐色、暗褐色シルトブロック含む
23	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色粒、酸化鉄粒多量含む
24	10YR 2/1	黒	シルト	黄褐色、暗褐色シルトブロック少量含む
25	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒、細砂含む
26	10YR 2/3	黒褐	砂質シルト	黒色、黄褐色シルトブロック含む
27	10YR 2/3	黒褐	砂質シルト	黒色シルト粒少量含む
28	10YR 3/4	暗褐	シルト	黄褐色シルト粒微量含む
29	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルト粒微量含む
30	10YR 2/2	黒褐	シルト	黒色、黄褐色シルト粒微量含む
31	10YR 2/2	黒褐	シルト	黒色、暗褐色シルト粒多量含む
32	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒、暗褐色シルトブロック多量含む
33	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量含む
34	10YR 2/2	黒褐	シルト	黒色、黄褐色シルト粒微量含む
35	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化物、黄褐色、暗褐色シルト含む
36	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む
37	10YR 3/4	暗褐	シルト	黒褐色シルトブロック含む
38	10YR 2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック多量含む
39	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック、暗褐色シルト粒多量含む
40	10YR 3/3	暗褐	細砂	黄褐色シルトブロック少量含む
41	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化粒微量、黄褐色、黒色シルト粒多量含む
42	10YR 2/3	黒褐	シルト	炭化粒微量、黄褐色シルトブロック多量含む
43	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色、暗褐色シルトブロック多量含む
44	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒少量、焼土微量含む
45	10YR 2/3	黒褐	シルト	黄褐色シルトブロック多量含む
46	10YR 2/3	黒褐	シルト	黒色、黄褐色シルト粒少量含む
47	10YR 2/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒微量含む
48	10YR 3/2	黒褐	シルト	黄褐色シルト粒多量、黒褐色、暗褐色シルト少量含む
49	10YR 2/3	黒褐	シルト	黒色、黄褐色シルト少量、酸化鉄多量含む
50	10YR 2/3	黒褐	シルト	黒色、黄褐色、暗褐色シルトブロック少量含む

第215図　SD4002

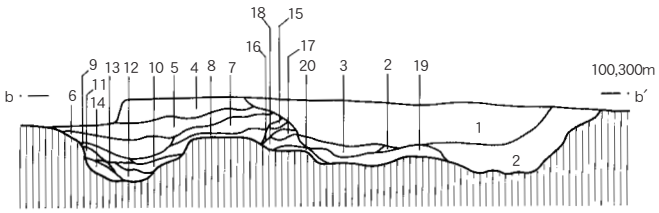
a－a′

1	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	均質
2	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒微量含む
3	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒少量含む
4	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	均質、弱い粘性
5	10YR3/2	黒褐	細砂	酸化鉄を縞状に含む
6	10YR3/2	黒褐	粗砂	酸化鉄、褐色シルト粒を縞状に含む
7	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、褐色シルトブロックを斑状に含む
8	10YR2/2	黒褐	シルト	均質
9	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、褐色シルトブロック少量含む
10	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロック（大）含む
11	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
12	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
13	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む、酸化鉄含む
14	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒、酸化鉄含む
15	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒を縞状に含む
16	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
17	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒、酸化鉄微量含む
18	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒、酸化鉄微量含む、弱い粘性
19	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルトブロック（大）含む



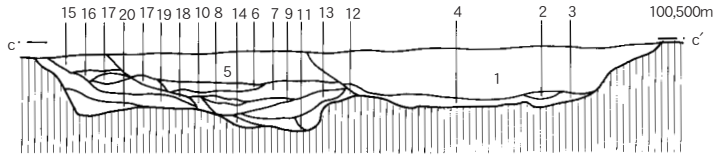
b－b′

1	10YR3/2	黒褐	シルト	均質
2	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
3	10YR3/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
4	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、褐色シルトブロックを斑状に含む
5	10YR2/2	黒褐	シルト	暗褐色、褐色シルトブロック少量含む
6	10YR3/1	黒褐	砂質シルト	灰黄褐色砂質シルトブロック（大）を斑状に含む
7	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む
8	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色、灰黄褐色、暗褐色シルトブロックを斑状に含む
9	10YR3/2	黒褐	シルト	灰黄褐色シルト粒少量含む
10	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	暗褐色、灰黄褐色細砂を縞状に含む
11	10YR3/2	黒褐	シルト	灰黄褐色シルトブロックを斑状に含む
12	10YR3/2	黒褐	シルト	灰黄褐色シルトブロック少量含む
13	10YR3/2	黒褐	シルト	均質
14	10YR2/3	黒褐	細砂	均質
15	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
16	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒少量含む
17	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒を斑状に含む
18	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
19	10YR2/1	黒	シルト	褐色シルト粒微量含む
20	10YR2/1	黒	シルト	褐灰色粘土ブロックを斑状に含む



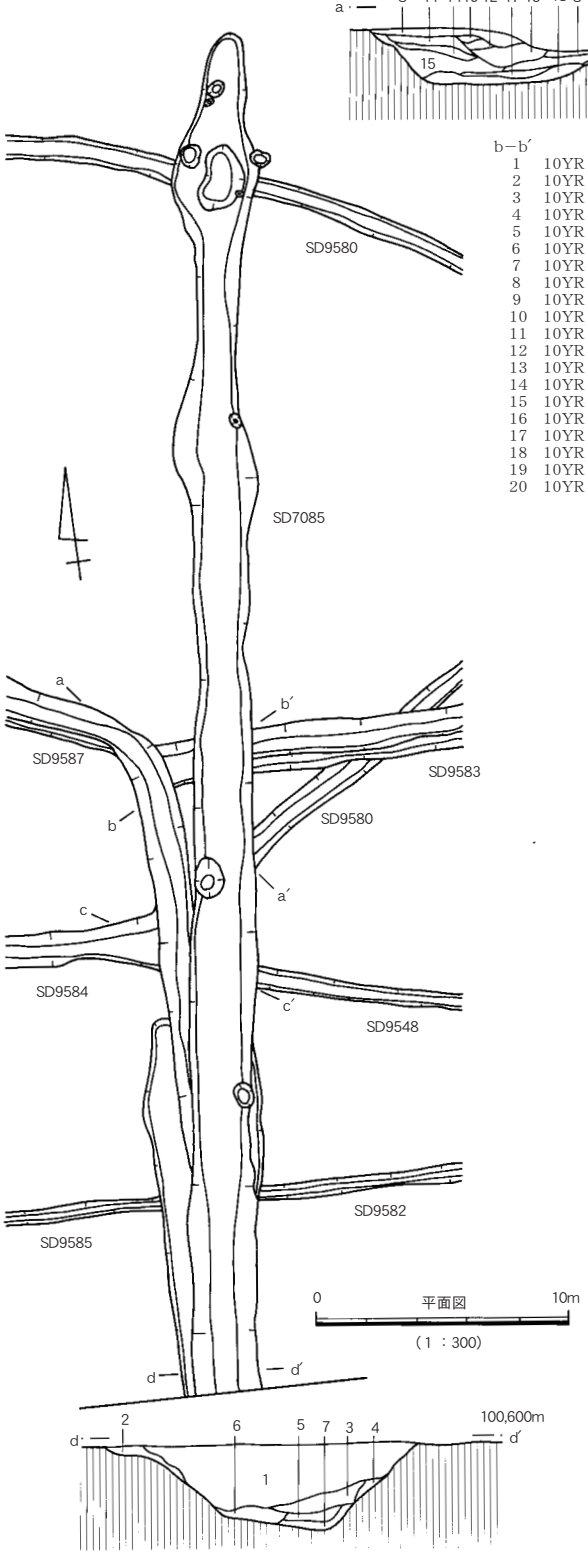
c－c′

1	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	均質
2	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	砂を多量に含む
3	10YR2/2	黒褐	細砂	均質
4	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒を縞状に含む
5	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	細砂層入る、褐色、暗褐色粒斑状に含む
6	10YR2/2	黒褐	細砂	褐色シルト粒を縞状に含む
7	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む
8	10YR2/2	黒褐	細砂	暗褐色シルトブロックを斑状に含む
9	10YR2/2	黒褐	シルト	均質
10	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒微量含む
11	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	褐色、灰黄褐色シルト粒を斑状に含む
12	10YR2/3	黒褐	細砂	灰黄褐色粘土を縞状に含む
13	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	褐色、灰黄褐色粒微量含む
14	10YR2/2	黒褐	細砂	均質
15	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
16	10YR2/2	黒褐	細砂	褐色粒を少量含む
17	10YR2/2	黒褐	シルト	褐色シルト粒微量含む
18	10YR2/2	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒少量含む
19	10YR2/2	黒褐	シルト	均質
20	10YR2/3	黒褐	シルト	褐色シルト粒含む

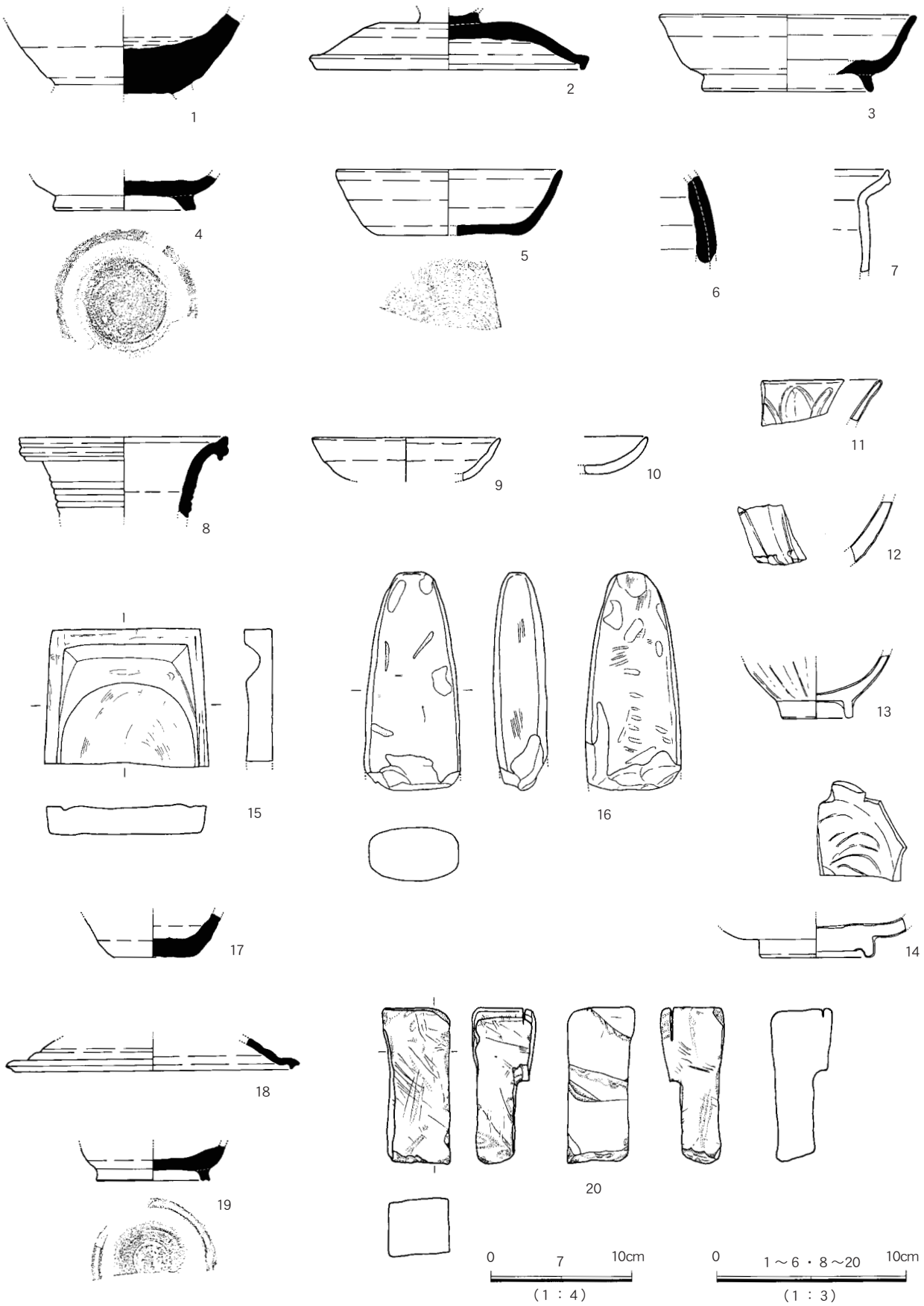


d－d′

1	10YR3/2	黒褐	砂質シルト	均質
2	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒微量含む
3	10YR2/3	黒褐	細砂	褐色シルト粒微量含む
4	10YR2/3	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒微量含む
5	10YR2/3	黒褐	細砂	褐色シルト粒、暗褐色シルトブロックを斑状に含む
6	10YR2/3	黒褐	粗砂	均質
7	10YR2/3	黒褐	粗砂	褐色シルト粒を縞状に含む



第216図　SD7085



第217図　SD4002・7085出土遺物

【SD7085】第216図

25－206から44－200グリッドまで検出された。南北に沿ってほぼ一直線である。２期調査区からは断片的に見られ、本調査区でも段丘際で一度消滅するが段丘下で再び現れる。なお、２期調査の遺構番号とは一致しない。長さは本調査区で約90m、断片的な２期およびHO地区を含むと約220mである。段丘上段では幅、深さとも規模は小さいが、段丘下では幅2.0～2.5m、深さ0.6～0.9mである。壁は比較的緩く、50～60°の傾斜で断面形は逆台形を呈する。

覆土は黒褐色砂質シルトの単純層で、短時間で埋没したことが考えられる。

出土遺物は須恵器無台坏13点、有台坏１点、長頸壷９点、甕30点、土師器無台坏１点、甕17点、青磁１点である（第217図８～14）。217－９、10はかわらけである。９は１段ナデによるが、口縁部の面取りは見られない。217－11～13は蓮弁文、14は見込みに飛雲文と考えられる模様が施された青磁碗である。217－15は石製の硯、16は磨製石斧である。

【SD9165】第218図

37～41－243～247グリッドに位置する。全形は、南面が22mを測り、他の３面は約15mを測る台形状を呈する。東面の中央部に幅３mの開口部がある。溝の幅は１m前後を測るが、深さは10㎝足らずで、壁の立ち上がりも曖昧である。内部には多数の小柱穴を検出しているが、建物などの施設を構成するものではない。西側にある建物との関連は十分考えられ、何らかの囲い、あるいは区画の施設と推測されるが、出土遺物も無く、性格は不明である。

【SD9587】第219図

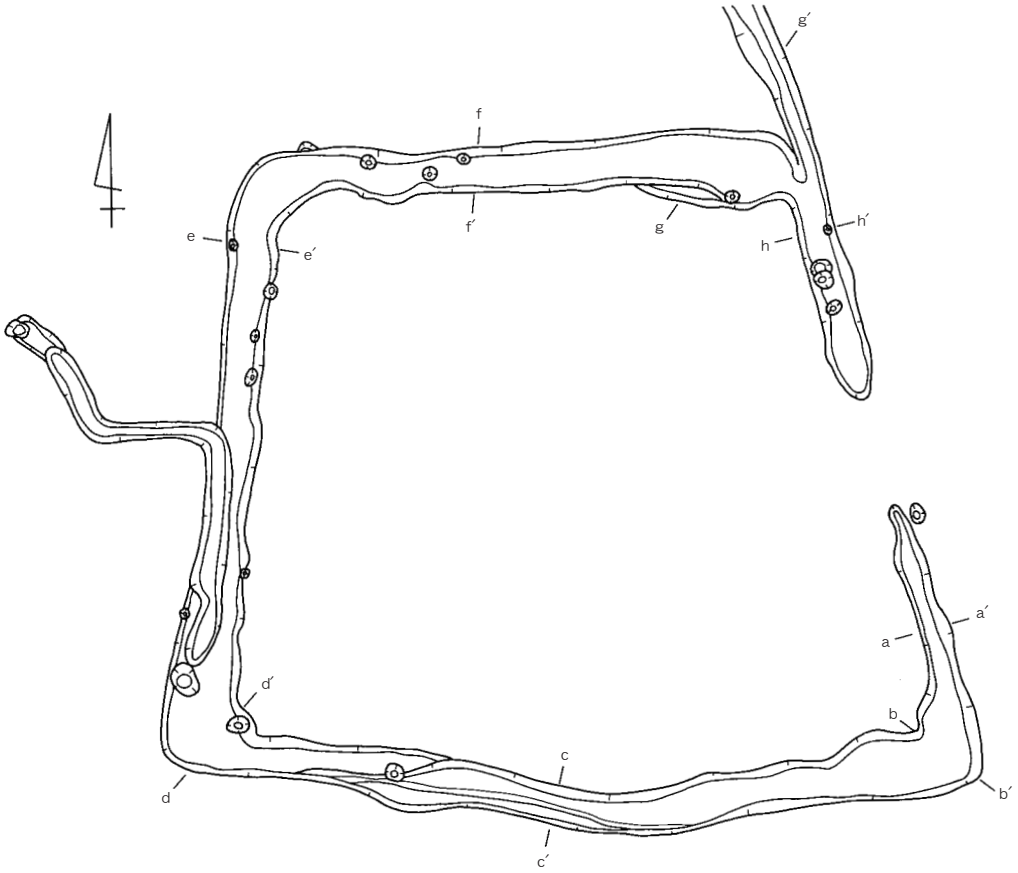
26－210から41－201グリッドまで、本調査区では103mが検出された。２期調査のSD7085（２期報告書第59図）に続く溝である。２期調査区では約60m北に直進した後、直角に曲って東西の溝となり、道路状遺構を形成する。本調査区でも大きく２ケ所で屈曲し、最終的にはSD7085に切られる。幅は1.2～1.5m、深さは最も浅い所で0.4m、他は0.7～1.0mである。壁は30～40°の傾斜を持ち、断面形は逆台形を呈する。

覆土は黒褐色の砂質シルトを主とするもので、自然堆積と考えられる。

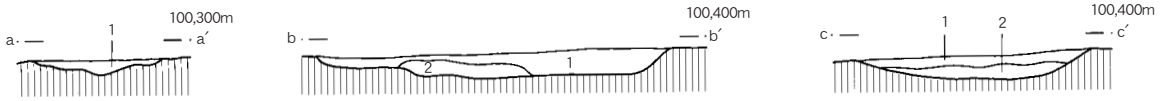
出土遺物は須恵器無台坏９点、有台坏１点、長頸壷8点、甕16点、土師器甕46点である。

表84　SD4002・7085他出土土器観察表

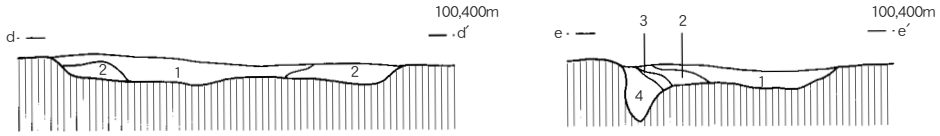
挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	出土地点	備考
	1	須恵器	壷				11	粗砂混入	良	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		SD 530	
	2	須恵器	蓋	(140)			8	緻密、骨針	良	2.5YR7/1灰白	ﾛｸﾛﾅﾃﾞｹｽﾞﾘ	ロクロナデ		SD 4002	
	3	須恵器	有台坏	(136)	(90)	41	4	砂粒混入	良	10YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SD 4002	
	4	須恵器	有台坏		75.5		5	緻密、骨針	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SD 4002	
	5	須恵器	無台坏	(120)	(80)	35	6	砂粒混入	良	10YR8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SD 4002	指跡痕
	6	須恵器	甕				12	砂粒混入	良	10YR4/1褐灰		ロクロナデ		SD 4002	50-236 焼成時に付着
	7	土師器	塝				7	砂粒混入	良	7.5YR8/3浅黄橙	ﾛｸﾛﾅﾃﾞﾀﾀｷ	ロクロナデ		SD 4002	50-236
	8	須恵器	蓋	(110)			5.5	緻密	良	10YR5/2灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		SD 7085	
217	9	かわらけ	皿	(100)			3	緻密	良	10YR8/4浅黄橙	ナデ	ナデ		SD 7085	40-201G
	10	かわらけ	皿			20	5	緻密	良	10YR7/4にぶい橙	ナデ	ナデ		SD 7085	41-201
	11	青磁	碗				4	緻密	良好	2.5GY6/1オリーブ灰	蓮弁文			SD 7085	白濁
	12	青磁	碗				7	緻密	良好	2.5GY6/1オリーブ灰	蓮弁文			SD 7085	白濁
	13	青磁	碗		36		5	緻密	良好	7.5Y4/1灰	蓮弁文		畳付露胎	SD 7085	大きめの貫入
	14	青磁	碗		(60)		8	緻密	良好	7.5GY7/1明緑灰		見込みに飛雲文	高台内露胎	SD 7085	
	17	須恵器	壷		60		9	緻密	良	7.5YR3/1黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	SD 9165	
	18	須恵器	蓋	(150)			4	緻密	良	2.5Y5/2暗灰黄	ﾛｸﾛﾅﾃﾞｹｽﾞﾘ	ロクロナデ		SD 9170-F1	
	19	須恵器	有台坏		60		5	緻密	良	2.5GY5/1オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SD 9198	



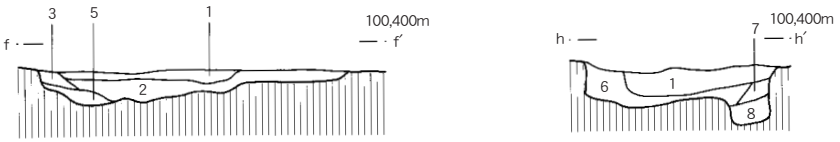
0　平面図　5m
（1：200）



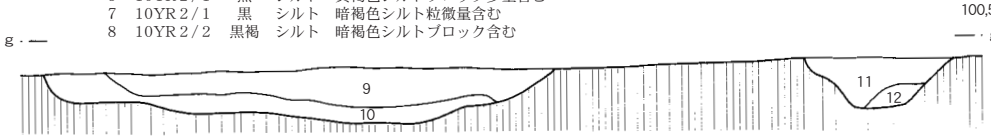
1　10YR2/2　黒褐　シルト　炭化粒微量、明黄褐色シルト粒含む
2　10YR2/2　黒褐　シルト　明黄褐色シルトブロック少量含む



3　10YR2/2　黒褐　シルト　明黄褐色シルトブロック含む
4　10YR2/2　黒褐　シルト　明黄褐色シルトブロック微量含む



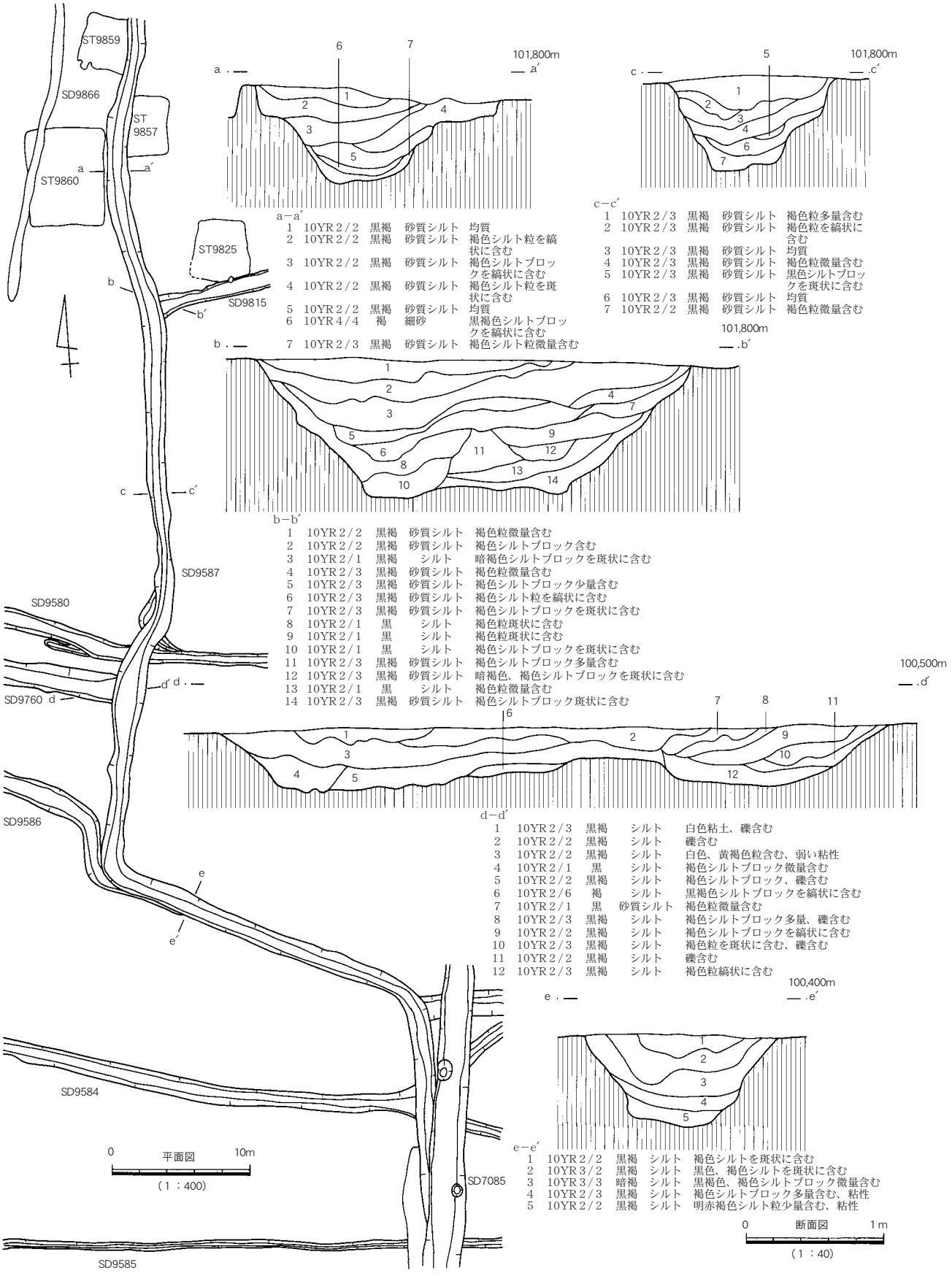
5　10YR3/4　暗褐　シルト　黒褐色シルトブロック多量含む
6　10YR2/1　黒　シルト　黄褐色シルトブロック多量含む
7　10YR2/1　黒　シルト　暗褐色シルト粒微量含む
8　10YR2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック含む



0　断面図　1m
（1：40）

9　10YR2/1　黒　シルト　黄褐色シルト粒、暗褐色シルトブロック微量含む
10　10YR2/2　黒褐　シルト　黄褐色シルト粒少量、暗褐色シルトブロック多量含む
11　10YR2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルト粒微量含む
12　10YR2/2　黒褐　シルト　暗褐色シルトブロック多量含む

第218図　SD9165



a－a′

1	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	均質
2	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒を縞状に含む
3	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	褐色シルトブロックを縞状に含む
4	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒を斑状に含む
5	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	均質
6	10YR４/４	褐	細砂	黒褐色シルトブロックを縞状に含む
7	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒微量含む

c－c′

1	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色粒多量含む
2	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色粒を縞状に含む
3	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	均質
4	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色粒微量含む
5	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	黒色シルトブロックを斑状に含む
6	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	均質
7	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	褐色粒微量含む

b－b′

1	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	褐色粒微量含む
2	10YR２/２	黒褐	砂質シルト	褐色シルトブロック含む
3	10YR２/１	黒褐	シルト	暗褐色シルトブロックを斑状に含む
4	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色粒微量含む
5	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色シルトブロック少量含む
6	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色シルト粒を縞状に含む
7	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む
8	10YR２/１	黒	シルト	褐色粒斑状に含む
9	10YR２/１	黒	シルト	褐色粒斑状に含む
10	10YR２/１	黒	シルト	褐色シルトブロックを斑状に含む
11	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色シルトブロック多量含む
12	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	暗褐色、褐色シルトブロックを斑状に含む
13	10YR２/１	黒	シルト	褐色粒微量含む
14	10YR２/３	黒褐	砂質シルト	褐色シルトブロック斑状に含む

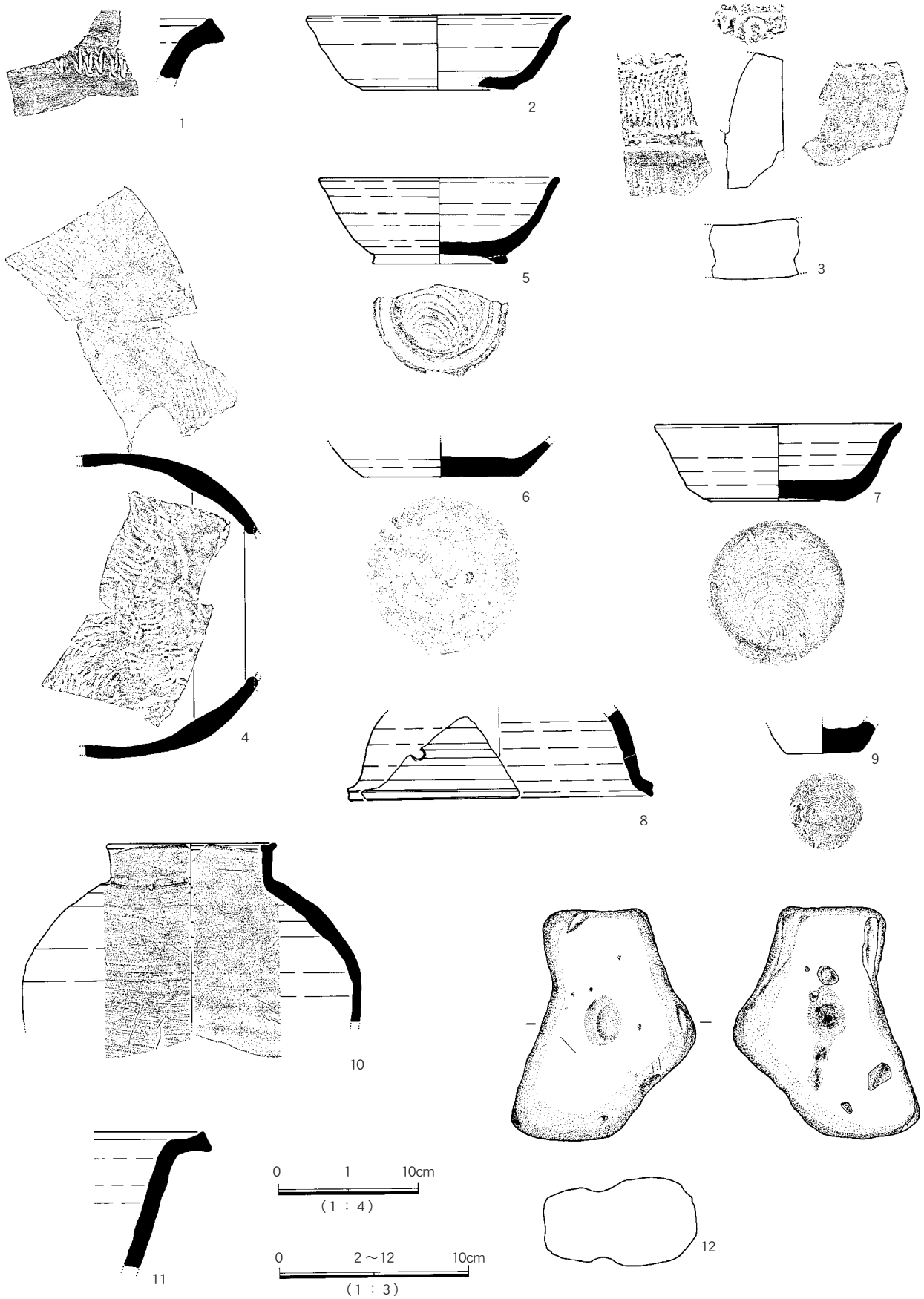
d－d′

1	10YR２/３	黒褐	シルト	白色粘土、礫含む
2	10YR２/２	黒褐	シルト	礫含む
3	10YR２/２	黒褐	シルト	白色、黄褐色粒含む、弱い粘性
4	10YR２/１	黒	シルト	褐色シルトブロック微量含む
5	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色シルトブロック、礫含む
6	10YR２/６	褐	シルト	黒褐色シルトブロックを縞状に含む
7	10YR２/１	黒	砂質シルト	褐色粒微量含む
8	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルトブロック多量、礫含む
9	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色シルトブロックを縞状に含む
10	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色粒を斑状に含む、礫含む
11	10YR２/２	黒褐	シルト	礫含む
12	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色粒縞状に含む

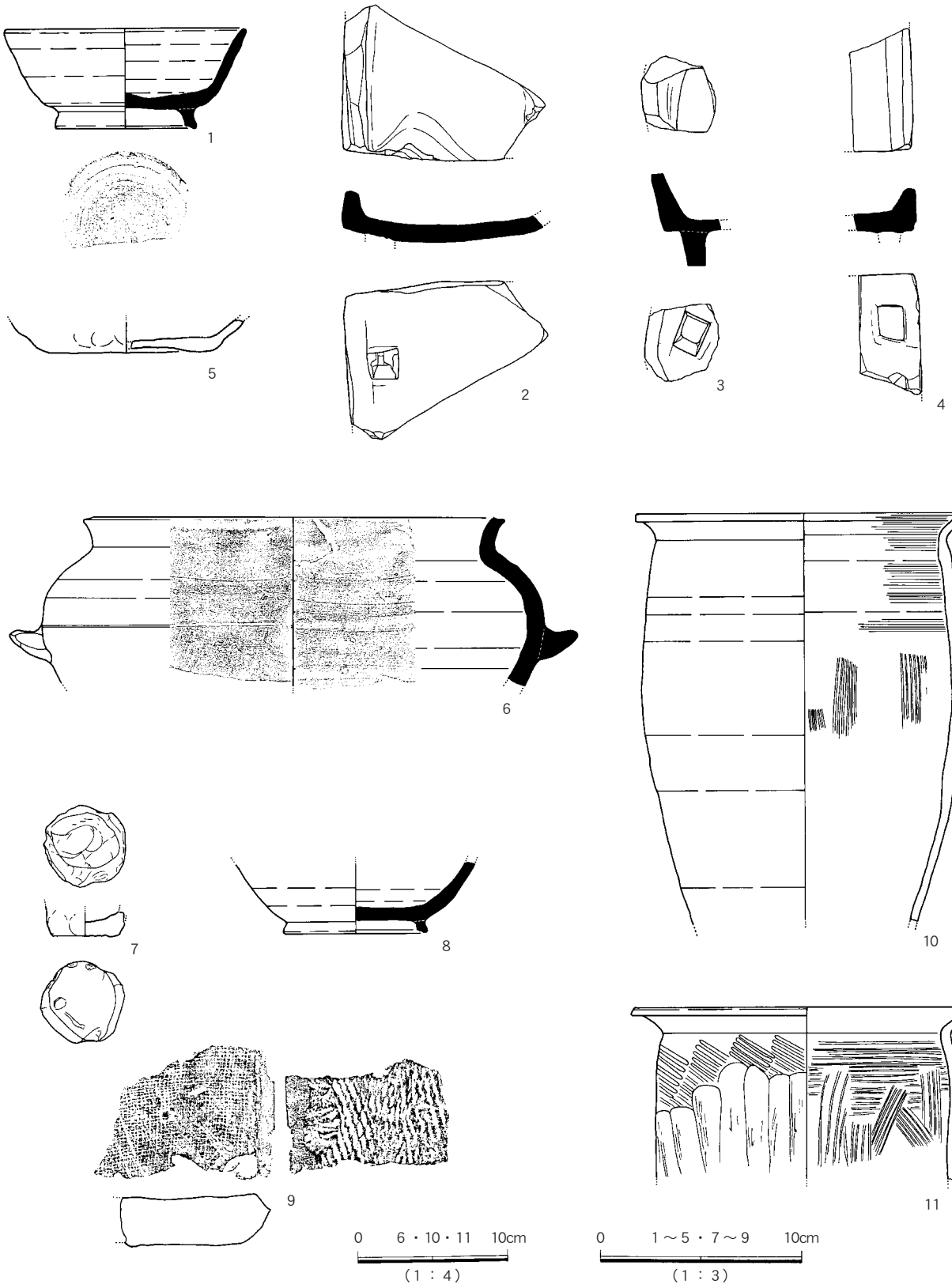
e－e′

1	10YR２/２	黒褐	シルト	褐色シルトを斑状に含む
2	10YR３/２	黒褐	シルト	黒色、褐色シルトを斑状に含む
3	10YR３/３	暗褐	シルト	黒褐色、褐色シルトブロック微量含む
4	10YR２/３	黒褐	シルト	褐色シルトブロック多量含む、粘性
5	10YR２/２	黒褐	シルト	明赤褐色シルト粒少量含む、粘性

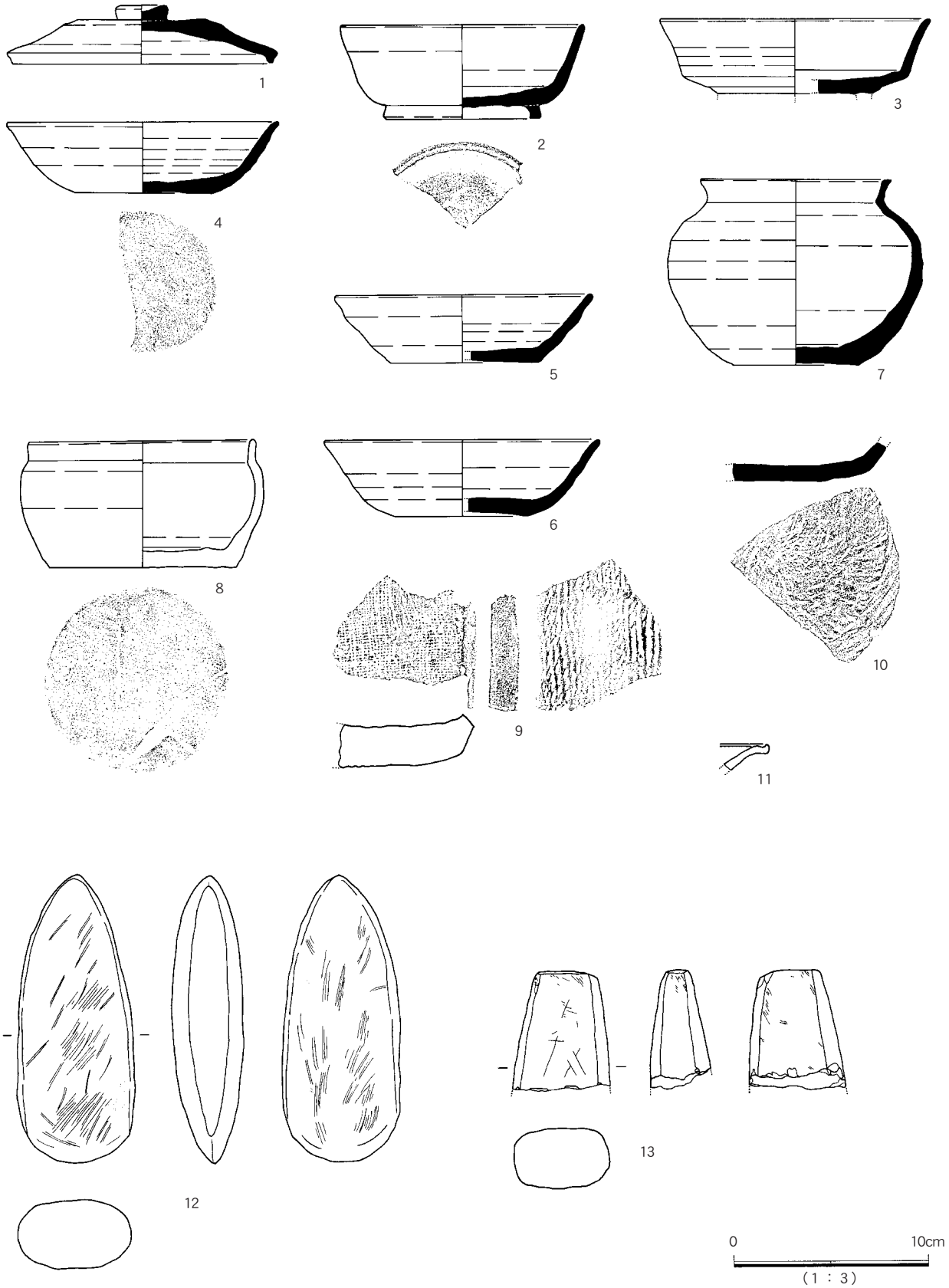
第219図　SD9587



第220図　溝跡出土遺物 1



第221図　溝跡出土遺物２



第222図　溝跡出土遺物３

【溝跡出土遺物】第220～222図

本調査区で検出された91条の溝跡の中で、遺物が出土したのは68条である。その内訳は、

須恵器：　蓋、134点、無台坏645点、有台坏92点、双耳坏１点、短頸壷25点、長頸壷132点、甕676点、横瓶９点、堝１点、その他２点の計1717点。

黒色土器：無台坏７点、碗６点、の計13点。

土師器：　無台坏94点、有台坏２点、皿１点、壷２点、甕2581点、甑１点の計2681点。

かわらけ15点、中世陶器8点、青磁４点で、総計4438点である。

溝跡の大半は中世に所属するものと考えられるが、中世の遺物が占める割合は、溝跡出土遺物全体の0.6パーセント程である。遺構別に見ると、SD9573、9581等の須恵器、土師器出土量が群を抜いて多い。この２条とも中世の溝と考えられるが、遺物の多さは古代の遺構が密集する地区に掘削されたことに由来すると推測される。以下､特筆される遺物について記述する。

220－３は顎部を欠損する宇瓦である。花文または渦巻文と考えられるが詳細は不明である。

220－６は円面硯の脚部である。径約９㎝の円形の透かしが空けられる。端部は外側に屈曲し、接地面はほぼ垂直に摘み出され、長頸壷の口縁部状を呈する。

221－２～４は風字硯である。３点とも同一個体の可能性がある。２は焼成時の歪みがあり、脚は欠損する。３は丸味を持った前方部と考えられる。ケズリ調整された、四角形の脚が付く。

221－６は把手の付いた須恵器短頸壷である。把手の平面形は台形状で、ケズリとナデによる調整がなされる。体部中央には一条の沈線が巡る。

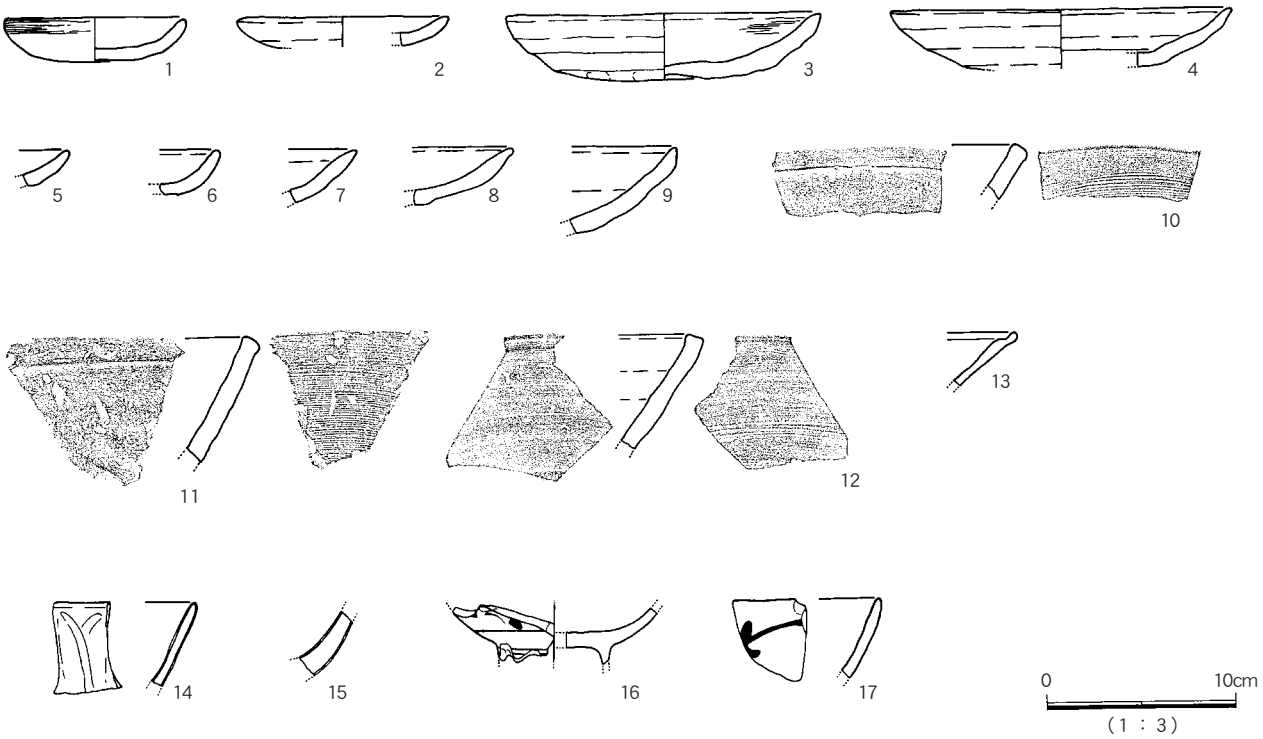
表85　溝跡出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	出土地点	備考
	1	須恵器	甕				16	緻密	良	2.5Y3/1黒褐	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､櫛描波状文	ロクロナデ		SD 9168-F2	
	2	須恵器	無台坏	(140)	(80)	40	5	砂粒混入	不良	2.5Y8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SD 9501	
	3		宇瓦				28	砂粒混入	良	5Y4/1オリーブ黒	縄タタキ	布目		SD 9501	
	4	須恵器	横瓶				10	緻密	良好	2.5YR3/1暗赤灰	タタキ､ナデ	アテ痕、ナデ		SD 9168	
	5	須恵器	有台坏	(128)	(72)	46	5	細砂混入､骨針	良好	N4/灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SD 9572	
220	6	須恵器	無台坏		(84)		5	緻密	良	5Y8/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SD 9572	
	7	須恵器	無台坏	132	70	41	5	砂粒混入	良	5Y6/2灰オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SD 9572	
	8	須恵器	円面硯		(160)		5	緻密	良好	2.5YR4/1赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ		SD 9572	円形の透かし孔
	9	須恵器	壷		40		12	緻密	良	5RP6/1紫灰	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､ｹｽﾞﾘ	ロクロナデ	回転糸切り	SD 9572	27-186
	10	須恵器	壷	(90)			7	緻密	良	2.5Y6/1黄灰	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､ﾊｹﾒ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､ﾊｹﾒ		SD 9572	
	11	須恵器	鉢				8	砂粒混入､骨針	良	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ		SD 9572	
	1	須恵器	有台坏	(120)	(70)	50	4.5	細砂混入､骨針	良好	7.5Y6/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SD 9573	
	2	須恵器	風字硯				8	緻密	良好	N1.5/黒	ケズリ､ナデ			SD 9573	28-188、ST9816
	3	須恵器	風字硯				8	緻密	良好	N1.5/黒	ケズリ､ナデ			SD 9573	
	4	須恵器	風字硯				8	緻密	良好	N1.5/黒	ケズリ､ナデ			SD 9573	
	5	かわらけ	皿		(80)		4	緻密	良	10YR5/2灰黄褐	指頭痕	ナデ		SD 9573	
221	6	須恵器	鉢	(280)			11	粗砂混入	良	N6/灰	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､ﾀﾀｷ	ロクロナデ		SD 9575	30-186　一条の沈線
	7	土師器	ﾐﾆﾁｭｱ土器		35		7	砂粒混入	良	5YR7/6橙	指頭痕	指頭痕	板状圧痕	SD 9584	40-207G
	8	須恵器	有台坏		72		5	砂粒混入､骨針	良	5Y5/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SD 9584	
	9		女瓦				23	砂粒混入	良	5Y2/2オリーブ黒	縄タタキ	布目		SD 9584	40-207
	10	土師器	甕	225			6	砂粒混入	良	10YR8/6黄橙	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ､ﾀﾀｷ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ﾊｹﾒ		SD 9584	40-202
	11	土師器	甕	(235)			5	砂粒混入	良	7.5YR7/6橙	タタキ､ケズリ	ハケメ		SD 9584	
	1	須恵器	蓋	134		30	5	砂粒混入	良	5Y6/2灰オリーブ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、ｹｽﾞﾘ	ロクロナデ		SD 9830	30-213　天井部に墨書
	2	須恵器	有台坏	(125)	(80)	48.5	5	砂粒混入	良	5Y3/1オリーブ黒	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	SD 4006	
	3	須恵器	有台坏	(140)			3	粗砂混入､骨針	良好	N2.5GY4/1暗オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	ST 9815	26-200G
	4	須恵器	無台坏	140	72	36.5	4	砂粒混入	不良	2.5Y8/2灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SD 9585	39-150
	5	須恵器	無台坏	(134)	(78)	35	5	細砂混入	良	7.5Y7/1灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SD 9641	
222	6	須恵器	無台坏	(142)	(70)	39	4	砂粒混入	良	5Y8/灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	SD 9760	35-208
	7	須恵器	壷	(98)	66	95	5	砂粒混入	良好	5G4/暗緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ､板状圧痕	SD 9557	
	8	土師器	鉢	119	96	63	6	粗砂混入	不良	2.5Y8/4淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	制止糸切り	SD 856	
	9		女瓦				20	砂粒混入	良	5Y2/2オリーブ黒	縄タタキ	布目		SD 9586	37-203
	10	須恵器	壷		(148)		7	砂粒混入､骨針	良	2.5GY6/1オリーブ灰	タタキ	ナデ	タタキ	SD 7760	35-208
	11	瀬戸	皿				4	緻密	良	5Y6/2灰オリーブ				SD 9830	灰釉

【グリッド出土遺物】第223図

グリッドからの出土遺物は、縄文土器1,486点、須恵器3,212点、土師器6,461点、黒色土器88点、かわらけ42点、中世陶器13点、青磁２点を数える。奈良・平安時代の遺物は、掘立柱建物跡が集中する地区と段丘下段のSE562周辺から多く見られた。また、縄文土器は、46－234周辺の縄文時代の遺構が散見される地区に集中する。

223－１～９はかわらけである。全て手づくねによるもので、底面にはユビオサエが見られる。３、４、９の体部は２段ナデ、他は１段ナデによるもと考えられる。３、４、７、８、の内底面には僅かにハケメの痕跡が認められる。



第223図　グリッド出土遺物

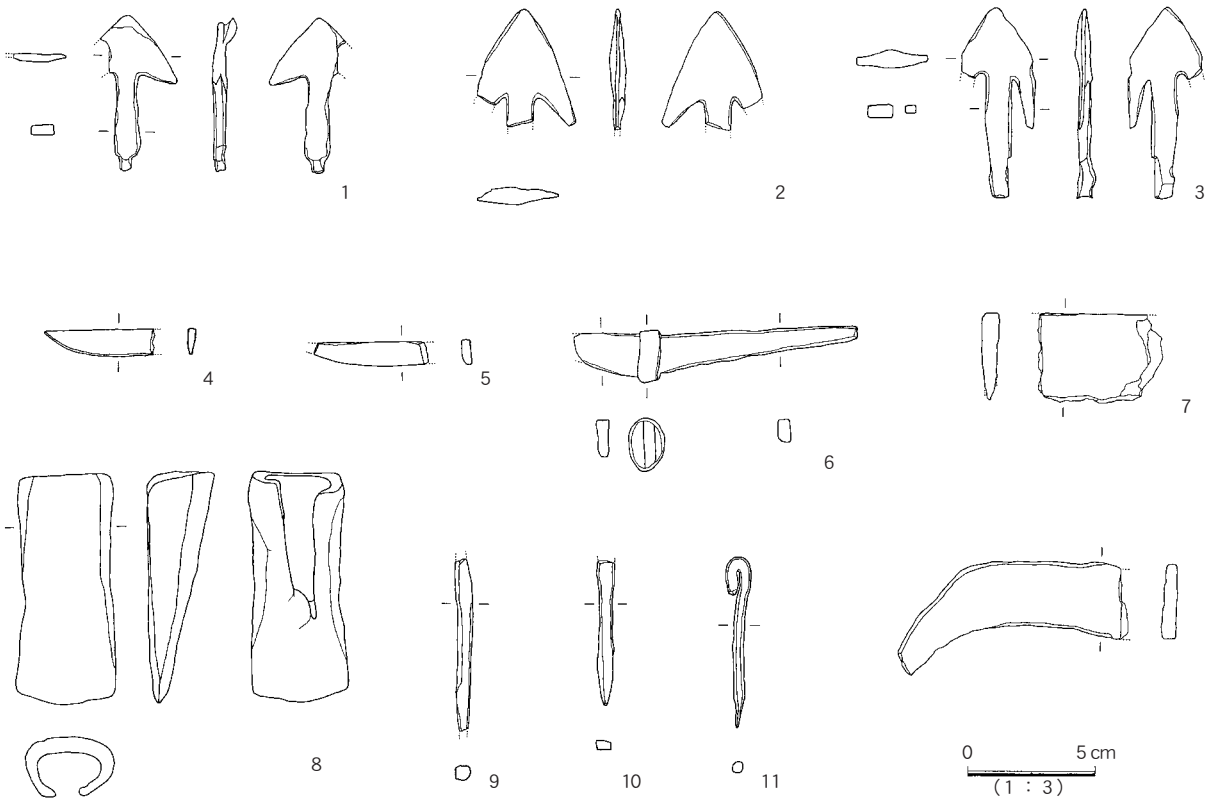
表86　グリッド出土土器観察表

挿図番号		器種	器形	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	外面	内面	底部	出土地点	備考
	1	かわらけ	皿	(71)		17	5.5	緻密	良	10YR8/2灰白	ナデ	ナデ		32-193	31-193
	2	かわらけ	皿	(84)		12	5	緻密	良	10YR8/3浅黄橙	ナデ	ナデ		27-191	
	3	かわらけ	皿	(140)	(40)	31	9	緻密	良	2.5YR8/2灰	ナデ	ナデ	指頭痕、板状圧痕	27-191	
	4	かわらけ	皿	(134)			5	緻密	良	10YR8/2灰白	ナデ	ナデ		33-192	
	5	かわらけ	皿				5	緻密	良	10YR8/3浅黄橙	ナデ	ナデ		34-187	
	6	かわらけ	皿			18	6	緻密	良	10YR8/2灰白	ナデ	ナデ		A区包	
	7	かわらけ	皿				6	緻密	良	10YR8/3浅黄橙	ナデ	ナデ		38-228包	38-22包
	8	かわらけ	皿				6.5	緻密	良	10YR8/2灰白	ナデ	ナデ		34-189	
223	9	かわらけ	皿				5	細砂混入	良	10YR8/2灰白	ナデ	ナデ		33-190	
	10	須恵器系陶器	擂鉢				9	緻密	良	5Y4/1灰	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ		42-264	
	11	須恵器系陶器	擂鉢				10	砂粒混入	良好	5Y4/1灰	ロクロナデ、指頭痕	ロクロナデ、カキメ		X-0	
	12	須恵器系陶器	擂鉢				10	緻密	良好	N5/灰	ロクロナデ	ロクロナデ		38-222	
	13	瀬戸	皿				4	緻密	良	7.5Y7/2灰白	口縁部のみ施釉			27-193	灰釉
	14	青磁	碗				4.5	緻密	良	10Y6/2オリーブ灰	蓮弁文			32-188	細かい貫入
	15	青磁	碗				7.5	緻密	良	5GY6/1オリーブ灰				50-242	
	16	染付	碗				5	緻密	良	N8/灰白				35-190	
	17	染付	碗				4.5	緻密	良	7.5GY8/1明緑灰				35-190	

223－10～12は須恵器系陶器の擂鉢である。10、11は内面素文で横方向の細かいハケメ状の調整が見られる。口縁部外端は小さく摘み出される。12も内面は素文で、ロクロナデによる凹凸が見られる。体部は僅かに内湾し、口縁部内端を摘み出したものである。

229－13は瀬戸の灰釉折縁皿である。外面は口縁部のみ施釉し、体部は露胎である。

229－14、15は青磁碗である。14は蓮弁文であるが、彫り込みが浅く不鮮明である。胎土は灰色で釉の発色にも灰色がかかる。15は底部に近い部分である。外面には沈線、内面には隆線が見られる。16、17は近世磁器碗である。



第224図　金属製品集成図

表87　金属製品観察表

No	挿図番号	種別	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	体積（m^3）	出土地点	備　　考
1	43－2	鉄製品	鉄鏃	6	2.5	0.5	8	ST34	RM40
2	145－4	鉄製品	鉄鏃	4.5	4	1	18	EB9504	
3	109－16	鉄製品	鉄鏃	7.5	3	0.5	11	ST9869	
4	47－8	鉄製品	刀子	4.5	1.5	0.5	3	ST9001	
5	83－13	鉄製品	刀子	4.5	1.5	0.5	3	ST9825	
6	53－2	鉄製品	刀子	11	2.5	1	28	ST9005	RM63　4分割　接合
7	172－2	鉄製品	刀子	4.5	3.5	0.5	8	ST9824	RM443
8	172－5	鉄製品	鉄斧	9	4.5	1.5	61	SP919	
9	69－29	鉄製品	釘	7	0.5	0.5	2	ST9559	
10	117－7	鉄製品	釘	5	0.5	0.5	1	ST9875	
11	132－3	鉄製品	釘	6.5	0.5	0.5	2	EB678	
12	172－3	鉄製品	不明	10	3	1	30	SK9911	

IX　調査のまとめ

本発掘調査では、大きく分けて３時期の遺構及び遺物が検出された。各々の分布状況は、概ねかち合うことがなく、異なる広がりを見せる。変化のある地形はその特徴により、遺構の分布に反映されている。しかし、概して遺構の密度は濃いとは言えず、むしろ印象としては散在している感がある。

【縄文時代】

縄文時代の遺構は、調査区ほぼ中央の南端で検出されている。１段下がった段丘が再び高まりを見せ始める地区で、標高は約100.8ｍから分布する。検出された遺構には、竪穴住居跡、土器埋設遺構、土坑、ピット等がある。竪穴住居跡は１棟のみの検出である。竪穴住居跡の周辺には小型の土坑が多数見つかっており、さらに外側の約30ｍ離れた地点からは、土器埋設遺構が検出される。これらの遺構は多分に削平や後世の遺構等によって撹乱を受けており、遺存状態は必ずしも良好ではない。しかし、これらの遺構の分布状況は、集落が南西方面に展開することを示唆しているものと考えられる。

高瀬山遺跡１期調査区では前期の集落跡が、２期調査区では陥し穴列が検出され、またHO地区では中期～晩期の遺構が確認されている。このことからも、当地区には縄文時代の長期間に渡る生活痕跡が残されていることがわかる。

本調査区は、出土遺物から大木10式を主体とする時期の集落跡の一部と考えられるが、中期の極限られた断片的なものでしかなく、今後、高瀬山遺跡全体の中で、集落の変遷を追うことができるものと考えられる。

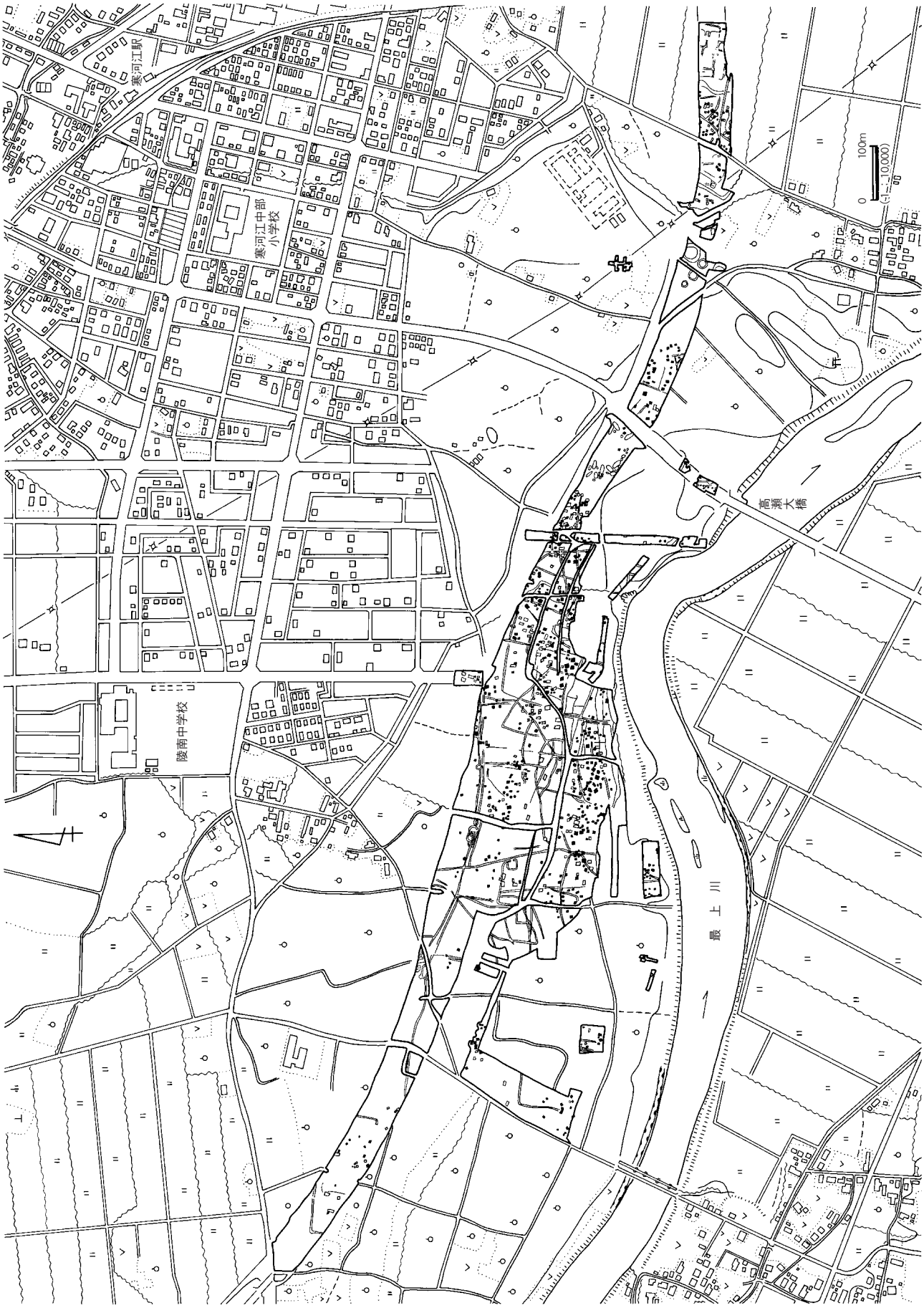
【奈良・平安時代】

この時期の遺構は、大半が段丘上段に分布する。調査区南端で再び遺構が現れる地点でも標高は101ｍを超えている。主な検出遺構は、竪穴建物跡48棟、掘立柱建物跡25棟、井戸跡、土坑等である。

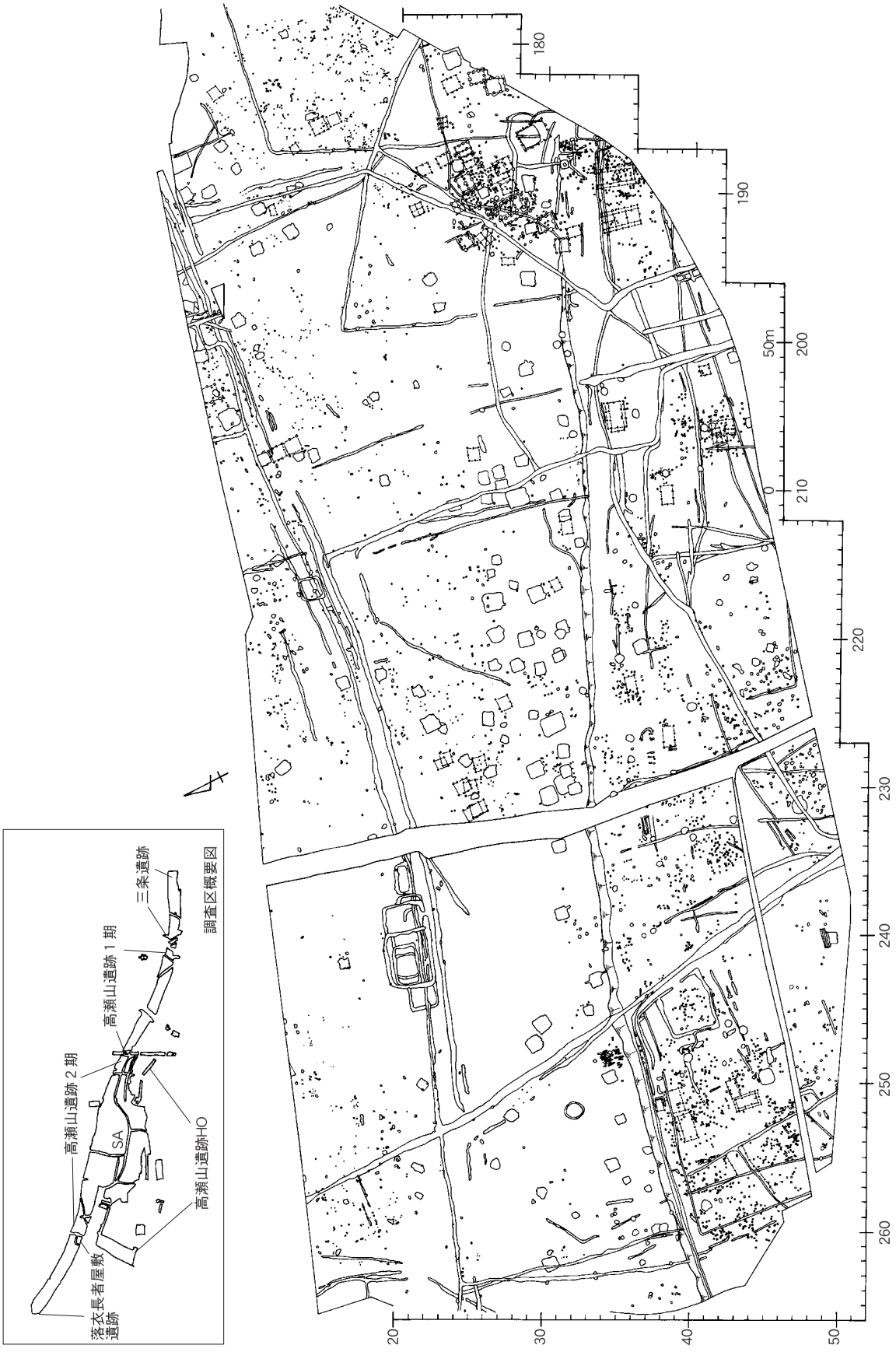
竪穴建物跡の規模には長さが６ｍを超える大型のものと、３ｍ未満の小型のもの、そして３ｍ～５ｍの中型のものに分けられる。大型４棟、小型６棟に対し、中型は圧倒的に多く38棟を数える。構造上では、柱穴の在り方やカマドに差違が認められる。柱穴の在り方では、竪穴内に持たないもの、ほぼ中央部に２基設けられるもの、竪穴内に４基設けられるもの、カマドがある辺の壁際と竪穴のほぼ中央部に計４基が設けられるもの、竪穴建物跡の周辺に柱穴が巡り、掘立柱建物跡状を呈するもの等である。

カマドには竪穴内に燃焼部を持つものと、竪穴外に設けられるものとがある。袖部の構築では、地山を削り出したもの、白色粘土等を用いて構築したもの、土師器長胴甕を構築財に用いているもの、加工した礫等を構築材とするもの等が見られる。

床面では、地山を床面とするもの、貼床されるもの、貼床の中には、全面に貼られるもの、中央部に貼られるもの、周辺部に貼られるもの、特に決められた場所に限らずランダムに貼床されるもの等が見られる。また、貯蔵穴の有無などにも差違が生ずる。



第225図　調査区全域区



第226図　高瀬山SA・２期（11～14区）遺構全図（S＝１：2,000）

竪穴建物跡の帰属時期は概ね８世紀中頃から９世紀後半頃までの、ほぼ一世紀弱の時間に納まると考えられる。時期別に見た遺構数と分布状況は、８世紀代は少なく点々と分布するのに対して、９世紀代にはいると、数は増加し、分布状況も部分的に集中するグループ化が見られる。さらに、９世紀後半代に移ると、竪穴の数は激減し、掘立柱建物跡が集中化する傾向が認められるようになる。そして現在のところ、明らかに10世紀代に入る遺構は確認できない。

次に掘立柱建物跡の構造上の特徴であるが、総柱建物が少なく、側柱建物が多い、規模は２間×３間が最も多く、13棟を数える。面積は20m^{2}未満のものが10棟、次いで20～30m^{2}のものが６棟であり、全体的に小型である。向きは１棟を除き全て南北棟である。重複や、切り合いから、最大で３期の変遷が考えられる。帰属時期は、柱穴からの出土遺物が少なく、積極的な判断ではないが、坏類の切り離しが回転糸切りによるものが大半を占めることや、底径に小型化の傾向が見られる、身がやや深くなる等の特徴から９世紀中頃のものと考えられ、掘立柱建物跡の建築はそれ以降に本格化するものと考えられる。

建物跡群の特徴としては、竪穴建物跡との分布域が異なり、限られた区域に集中すること、また、その中で建て替えが認められること、柱筋を通して連なるものが見られる等が上げられる。建物跡の性格としては、規模が最も大きく、２度の建て替えがあるSB595（535・577）がこの地区の中心になる建物と考えられる。さらに、もう一つの中心になる建物が、SB9562と考えられる。この建物に見られる構造上の特徴から、他の建物とは異なる機能を持たせられたものと考えられる。また、竪穴建物跡と複合する構造を持ち、出土遺物も一般の建物のものとは異なる様相を見せるSB9648等、個性的な建物跡が見られる。この他の建物に関しても、居住のためのものではなく、別の用途で設けられた施設と考えられる。

これらの具体的な機能は不明であるが、出土遺物からは平野山古窯跡群と密接な関係を持っていたものと推測される。さらに、水運としての最上川が近い等の地理的な条件から、平野山古窯跡で生産された土器類の集荷、配送を担っていた施設と考えることはできないだろうか。

現在までの調査の結果、平野山古窯跡群では、８世紀第３四半期を中心とする時期から、９世紀第４四半期頃までの生産が確認されている。高瀬山遺跡SAにおいても、その動きに呼応するような盛衰をたどる。その後、集落はその使命を終えたかのように途絶え、再びこの地に集落が営まれるのは、12世紀の後半まで待たなければならない。

【中　　世】

本調査区での中世は、古代末から中世前期の12世紀後半～13世紀全般に主体を持つと考えられる。検出された主な遺構は、掘立柱建物跡18棟、竪穴建物跡１棟、井戸跡７基、かまど状遺構１基他、土坑、溝跡等である。

掘立柱建物跡は、古代に比して東西棟が多く、半数以上を占める。分布状況も大半が段丘下段の低地にあり、集中化することなく分散する傾向にある。規模は、１間×３間のものが８棟と最も多く、面積は20m^{2}前後のものが主体を成す。多くの場合は建物跡の近くに井戸跡が検出される。また、大小の溝が縦横に掘られ、区画を形成する。この溝跡については、掘られた時期や機能等詳細な検討が必要であるが、現在のところ、SA地区の約２万m^{2}内には９区画程の

区割りを想定できる。一区画は約1,000～1,500m²で、区画内には１～２棟の建物と井戸がセットとして見られる。西側の45－245グリッド周辺ではこれに竪穴建物跡と、かまど状遺構が構成に加わる。

13世紀代の集落の中心的な場は、SB9750・9971にあると考えられるが、それ以前の12世紀後～末段階では、SB9264・9220を中心にした可能性が考えられる。

これらの遺構は寒河江荘に関連することも十分に考えられるが、寒河江荘成立期まで遡る資料は得られていない。（寒河江荘の名は藤原忠実の日記『殿暦』の天仁３年（1110）が初見であるが、建長５年（1252）に書かれた『近衛家所領目録』の記載内容により、11世紀前半には成立したと考えられている。）

以上、各時期毎に該述してきたが、高瀬山遺跡他三条遺跡、落衣長者屋敷遺跡を合わせて、約35万m²を調査し（第225図）、県内でも類を見ない調査例であることから、本遺跡を取巻く周辺遺跡をも加えた総合的な検討が今後の課題である。

【参考文献】

山形県　：1986『土地分類基本調査　左沢』

寒河江市　：1994『寒河江市史　上巻　原始・古代・中世編』

佐藤庄一・須賀井明子：1998『平野山古窯跡群第12地点遺跡第２次発掘調査報告書』
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

大宮富善・阿部明彦　：1998『高瀬山遺跡（チェリークア・パーク整備事業）発掘調査報告書』
山形県寒河江市埋蔵文化財調査報告書第16集

阿部明彦・水戸弘美　：1999「山形県の土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

丸山晶子　：2000『高瀬山遺跡（２期）第２次・３次発掘調査報告書
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第80集

黒坂雅人・伊藤　元他：2001『落衣長者屋敷遺跡発掘調査報告書』
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第79集

報告書抄録

ふりがな	たかせやまいせき(SA)だい２・３じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	高瀬山遺跡(SA)第２・３次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第94集
編著者名	伊藤邦弘
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　　TEL 023－672－5301
発行年月日	2001年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たかせやまいせき 高瀬山遺跡 SA	やまがたけん 山形県 さがえし 寒河江市 おおあざしばはしあざ 大字柴橋字 おとも 落衣 他	6206	430	38度 21分 50秒	140度 15分 50秒	２次調査 19960801 ～ 19961120 ３次調査 19970507 ～ 19971126	２次調査 10,400 ３次調査 26,000	東北横断自動車道酒田線(寒河江～西川間)建設工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文時代 (中期)	竪穴式住居　1 土器埋設遺構　7 土坑　73	縄文土器（深鉢・浅鉢・注口土器） 石器（石鏃・石匙・掻器・打製石斧・磨製石斧）	複式炉を持つと考えられる竪穴式住居と土器埋設遺構を検出
集落跡	奈良・平安 (8～9世紀)	竪穴建物　48 掘立柱建物　25 井戸　3 土坑 溝	須恵器（有台坏・無台坏・蓋・甕・壷・横瓶・円面硯・風字硯） 土師器（無台坏・有台坏・皿・甕・塝・甑）	掘立柱建物跡が集中して建てられた地区を検出
集落跡	中世 (12～13世紀)	竪穴建物　1 掘立柱建物　18 井戸　7 かまど状遺構　1 土坑 溝	かわらけ 中世陶器（甕・擂鉢） 青磁（碗）	掘立柱建物跡と井戸跡、区画溝より構成される集落 (総出土箱数：211箱) ２次調査　28箱 ３次調査　183箱

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第94集

高瀬山（たかせやま）遺跡（SA）第２・３次発掘調査報告書
本文・挿図　編

2001年10月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161
山形県上山市弁天二丁目15番１号
☎023－672－5301
印刷　㈱大風印刷

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 94 集

高瀬山遺跡（ＳＡ）

第２・３次発掘調査報告書

図版・付編　編

2001

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

高瀬山（たかせやま）遺跡（ＳＡ）

第２・３次発掘調査報告書

図版・付編　編

平成13年10月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

図 版 目 次

図版１　遺跡全景・２次調査区全景
図版２　３次調査区全景・３次調査空中写真
図版３　表土除去・面整理・基本層序他
図版４　竪穴建物跡検出状況・遺構完掘状況
図版５　竪穴建物跡空中写真（1）（2）
図版６　竪穴建物跡空中写真（3）（4）
図版７　ST150・EL155・RP37
図版８　ST9001・9002他
図版９　ST9003・9004他
図版10　ST9005・9006・9007・9008他
図版11　ST34・532・9513・9514
図版12　ST9525・EL他
図版13　ST9531・9559・9561・9590他
図版14　ST9607・9728・EL
図版15　ST9816・9819・9825・9826他
図版16　ST9829・9834・9835・9846他
図版17　ST9847・9856・9857他
図版18　ST9860・9861他
図版19　ST9867・9868他
図版20　ST9869・9870・9871・9872他
図版21　ST9873・9874他
図版22　ST9891・9895・9896・9900他
図版23　ST9010・SQ9009・SK9199他
図版24　掘立柱建物跡空中写真（1）（2）
図版25　掘立柱建物跡検出状況・完掘状況
図版26　SB9562 検出状況・完掘状況
図版27　SB9548検出状況・完掘状況
図版28　SB9526検出状況・完掘状況
図版29　SB535・577・595・9515他
図版30　SB9515・9502・9648他
図版31　SB616・9527・9502・9548他
図版32　EB537・540・573・9547他
図版33　EB9539・9546・9564・9570他
図版34　掘立柱建物跡鳥瞰写真
図版35　掘立柱建物跡空中写真（3）（4）
図版36　掘立柱建物跡空中写真（5）（6）
図版37　掘立柱建物跡空中写真（7）（8）
図版38　SB9264・9290・9316
図版39　SB9762検出状況・完掘状況
図版40　SB9211・9220・9316・9731
図版41　SB9273・9290・9731・9971他
図版42　EB9265・9268・9270・9271他
図版43　SE562
図版44　SE9961・764・762・9159
図版45　SE9961
図版46　EU761・9916・9325・9931他
図版47　SK３・４・６・16・61・139
図版48　SK88・140
図版49　SK141・144・146・154他
図版50　SK9904・9913・9338
図版51　SK646・647・652・9202他
図版52　SK9160・9301・9016・9018他
図版53　SK9012・9013・9014・9015他
図版54　SK9324・9348・9820・9888他
図版55　２次調査区・３次調査区
図版56　SD4002・4006他
図版57　SD7085・9583・9170他
図版58　SD9168・9579・9580他
図版59　SD9581・9586・9587他
図版60　SD9198・SP9197・643他
図版61　SD7085
図版62　SD9328・9583・9584

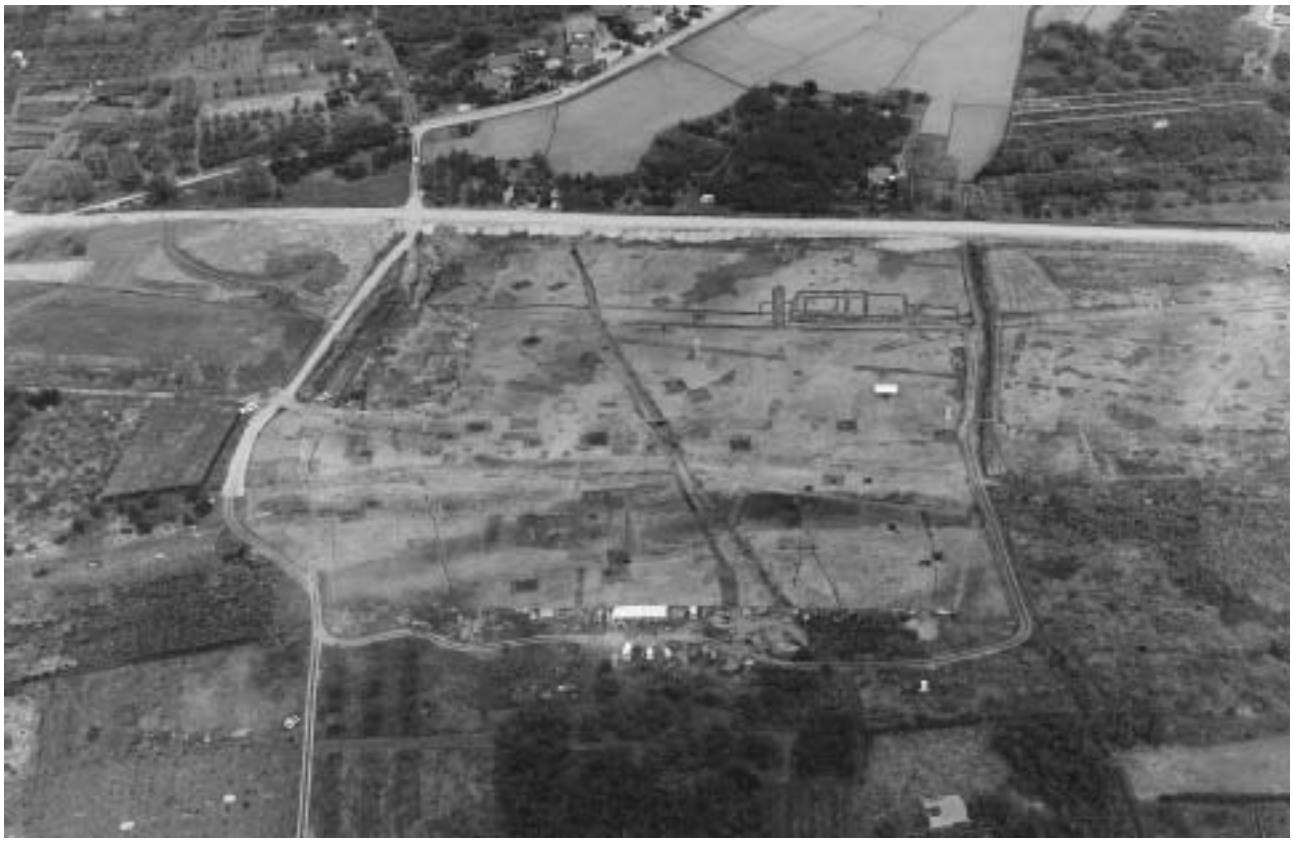
図版63　SD9581
図版64　２次調査区と２期12・13区
図版65　３次調査区とHO調査区
図版66　３次調査鳥瞰写真１
図版67　３次調査鳥瞰写真２
図版68　３次調査鳥瞰写真３
図版69　３次調査鳥瞰写真４
図版70　第17、18、23、33図　掲載遺物
図版71　第20、26図　掲載遺物
図版72　第19、21、23、27、35図　掲載遺物
図版73　第25図　掲載遺物
図版74　第21、27、35、36図　掲載遺物
図版75　第31、34、35図　掲載遺物
図版76　第27、32、33、35図　掲載遺物
図版77　第34、36図　掲載遺物
図版78　第31、32、33図　掲載遺物
図版79　第19、21、22、23図他　掲載遺物
図版80　第37、38図（石器）掲載遺物
図版81　第39、40図（石器）掲載遺物
図版82　第41、46、47図　掲載遺物
図版83　ST9001、9002　出土遺物
図版84　ST9002、9003、9004　出土遺物
図版85　ST9003、9007、9008　出土遺物
図版86　ST9007、9008、9514　出土遺物
図版87　ST9011、9514、9525　出土遺物
図版88　ST9514、9525　出土遺物
図版89　ST9525　出土遺物
図版90　ST9525　出土遺物
図版91　ST9525、9559、9590　出土遺物
図版92　ST9559、9590、9816　出土遺物
図版93　ST9590、9591、9607　出土遺物
図版94　ST9607、9728　出土遺物
図版95　ST9728、9816　出土遺物
図版96　ST9829、9846、9860他
出土遺物
図版97　ST9816、9825　出土遺物
図版98　ST9826、9829、9834　出土遺物
図版99　ST9846、9847、9860
出土遺物
図版100　ST9860、SD9866　出土遺物
図版101　ST9860、9861、SD9866
出土遺物
図版102　SD9866、9869、9874　出土遺物
図版103　SD9866、ST9861　出土遺物
図版104　ST9867、9868　出土遺物
図版105　ST9868、9869　出土遺物
図版106　ST9868、9869、9870　出土遺物
図版107　ST9871、9874　出土遺物
図版108　ST9874、9875　出土遺物
図版109　ST9875、9872　出土遺物
図版110　ST9872、9873、9895　出土遺物
図版111　ST9873、9962　柱穴出土遺物
図版112　SB677、9515　柱穴出土遺物
図版113　SE764、SK647　出土遺物
図版114　SK646、647、652　出土遺物
図版115　SK647、652、9020　柱穴出土遺物
図版116　SK9015、9613、9876　出土遺物
図版117　SK9015、9020、9324　出土遺物
図版118　SK9820、9876　出土遺物
図版119　SK9876　出土遺物
図版120　第171図　掲載遺物
図版121　第172、173図　掲載遺物
図版122　第172、173、176図　掲載遺物
図版123　第174、175図　掲載遺物
図版124　第175、177、195図　掲載遺物
図版125　第177図掲載遺物、SD9581
出土遺物
図版126　SD9580、9581　出土遺物
図版127　第217、220、222図　掲載遺物
図版128　第220、221、222、223図
掲載遺物
図版129　鉄製品、木製品

図版130　SE562　東井戸枠
図版131　SE562　東、西井戸枠
図版132　SE562　西井戸枠
図版133　SE562　南井戸枠
図版134　SE562　北井戸枠
図版135　SE562　北井戸枠
図版136　SE9961　東、西井戸枠
図版137　SE9961　西、南井戸枠
図版138　SE9961　南、北井戸枠
図版139　SE9961　井戸角柱
図版140　SE9961　井戸横桟、曲物、漆器

付　　編 …… 巻末
「高瀬山遺跡SA地区土坑内堆積物の珪藻化石」
「高瀬山遺跡SAの土坑内堆積物の花粉化石群」
「高瀬山遺跡SAの植物珪酸体」
「高瀬山遺跡SAのリン・カルシウム分析」
「高瀬山遺跡SA地区の理化学分析」
「高瀬山遺跡SA関連の胎土分析」

図版 1

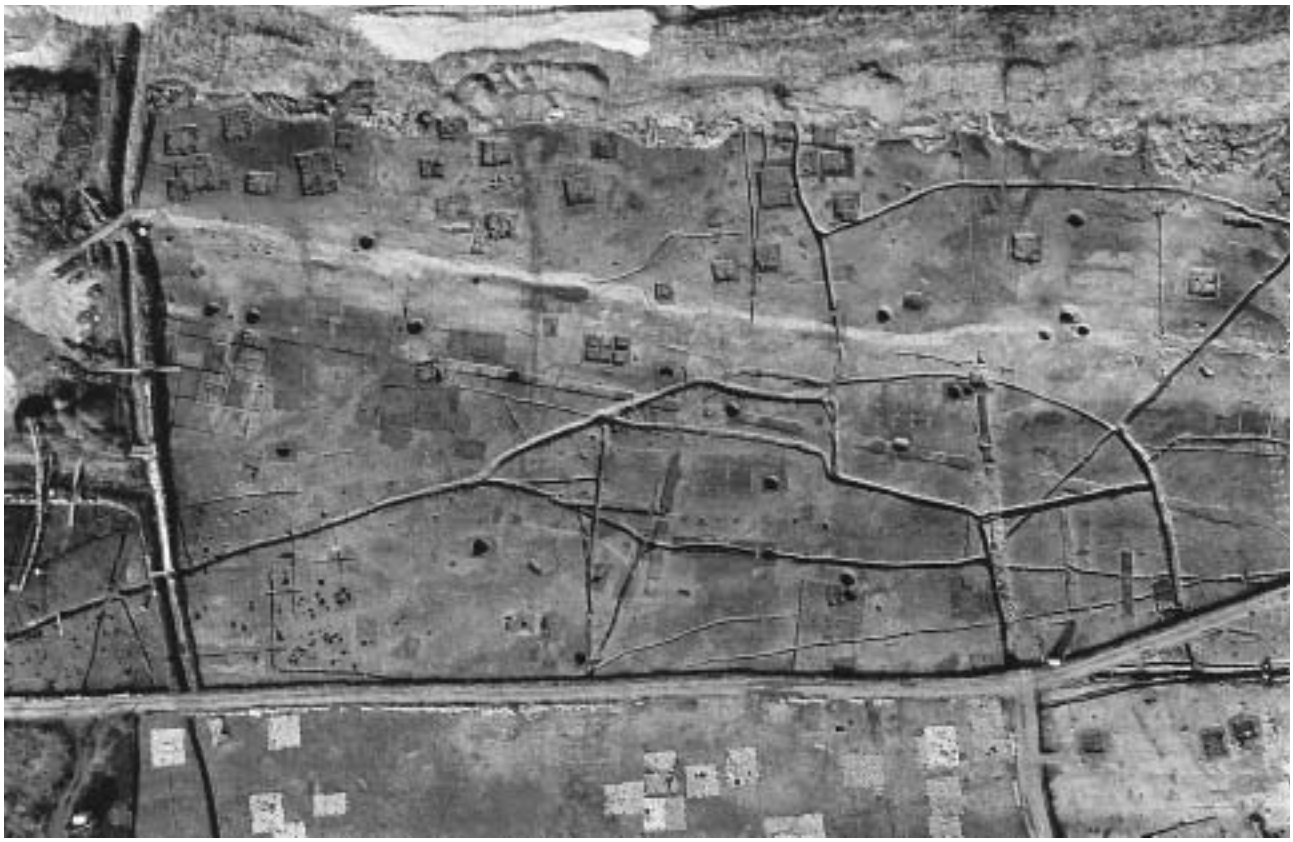
遺跡全景（西から）



2 次調査区・ 2 期14区全景（南から）

図版 2

3 次調査区全景（東から）



3 次調査空中写真（上が北）

表土除去（北西から）

面整理（東から）

南側基本層序（東から）

中央基本層序（東から）

遺構検出（北から）

現地説明会

図版４

竪穴建物跡検出状況（西から）

遺構完掘状況（東から）

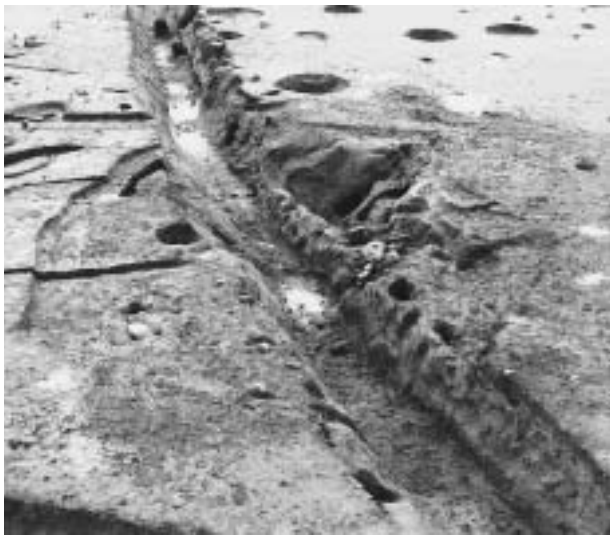
竪穴建物跡・空中写真（１）

竪穴建物跡・空中写真（２）

図版 6

竪穴建物跡・空中写真（３）

竪穴建物跡・空中写真（４）



ST150（西から）

ST150（北から）

ST150土層断面（北から）

ST150EL（北から）

ST150内RP37（北から）

図版８

ST9001（南から）

ST9001内RP１～６（北西から）

ST9001内EL9302（北から）

ST9001内RP85・86（南から）

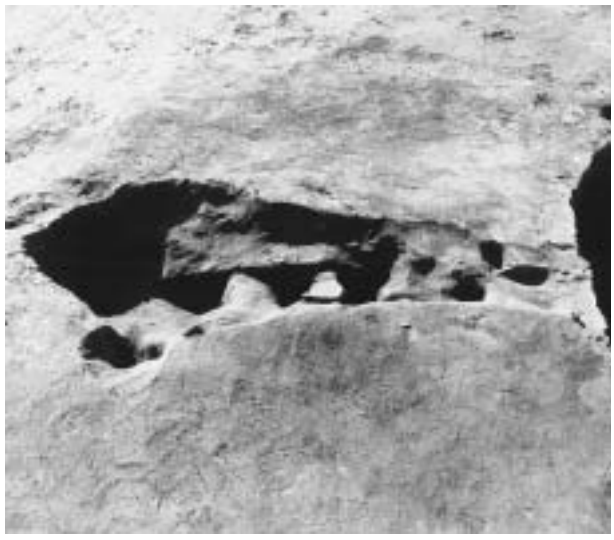
ST9002（南から）

ST9002内EL9303（北から）

ST9003（南から）

ST9003内RP87（南から）

ST9003（南から）



ST9003内EL9304（東から）

ST9004土層断面（南東から）

ST9004（南から）

図版10

ST9005（南から）

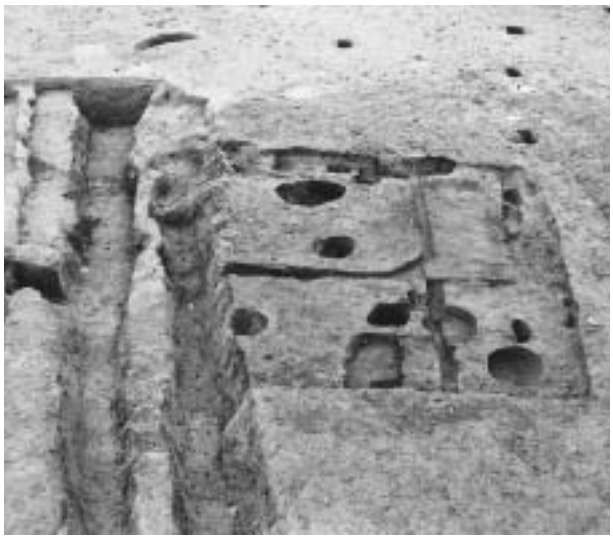
ST9008（東から）

ST9011（南から）

ST9008内出土遺物（北から）

ST9006（南から）

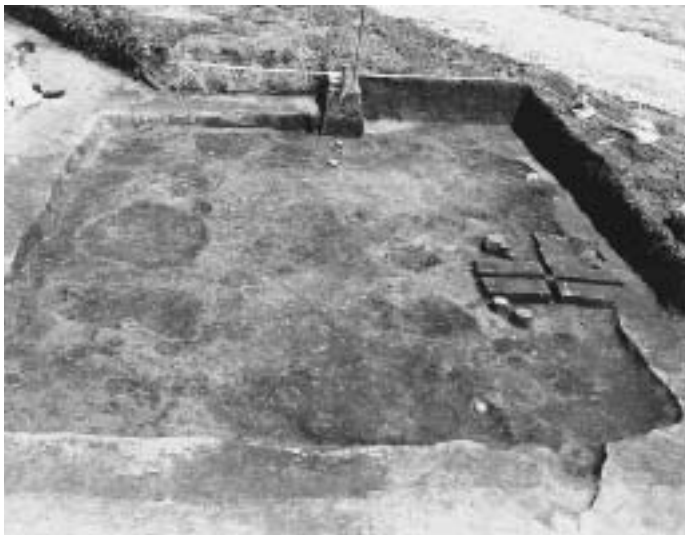
ST9007（南から）



ST34（西から）

ST532（南から）

ST9513検出状況（北から）



ST9513（西から）

ST9514検出状況（西から）

ST9514（北から）

図版12

ST9525（西から）

ST9525遺物出土状況（南から）

ST9525EL（南から）

ST9525内RP180～184（南から）

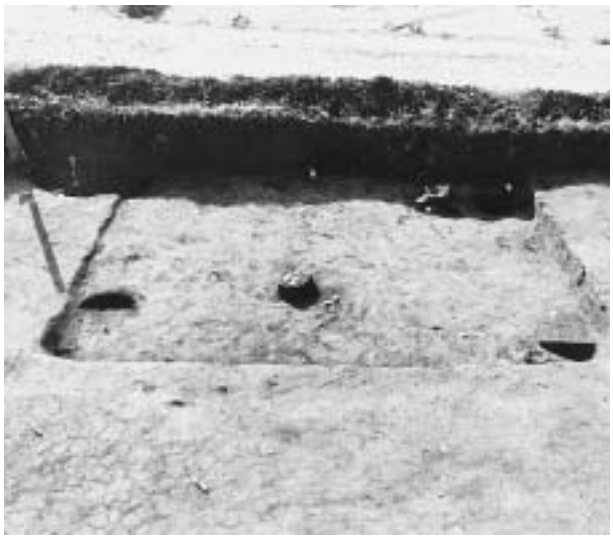
ST9525内RP115（北から）

ST9531（北から）

ST9559（南から）

ST9561（南から）

ST9590（北から）



ST9591（北から）

ST9591内RP397（東から）

図版14

ST9607（南から）

ST9607内RP104・167（南から）

ST9607（西から）

ST9607EL（北から）

ST9728（西から）

ST9728内SP9967・RP230（北から）

ST9816（西から）

ST9816EL（西から）

ST9819（南から）

ST9825（東から）

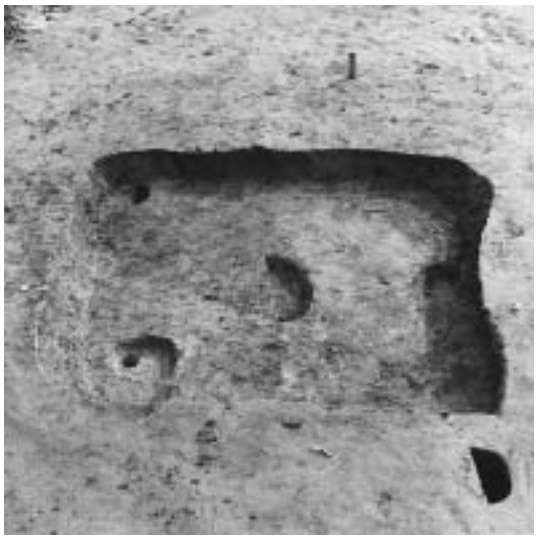
ST9826（南から）

ST9826内RP309（東から）

図版16

ST9829（南から）

ST9829EL（北から）



ST9834（西から）

ST9835（南から）

ST9846（南から）

ST9846内RP313（西から）

ST9846EL（北から）

ST9846内RP312（東から）

ST9847（東から）

ST9847EL（北から）

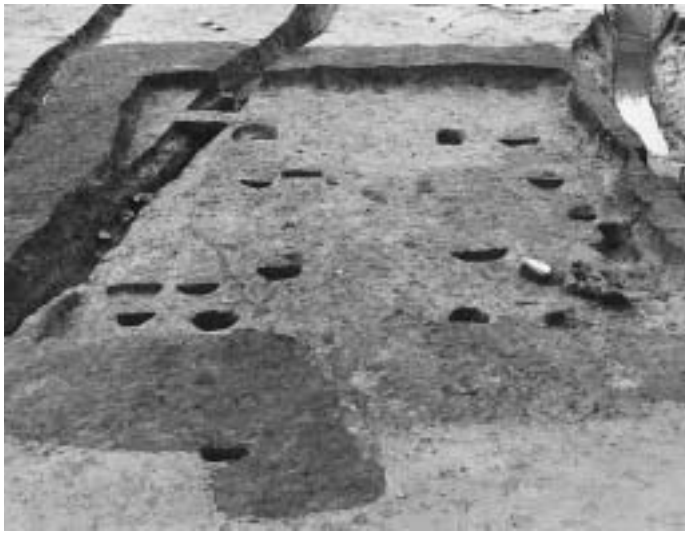
ST9856（東から）

ST9857（南から）

図版18

ST9860（西から）

ST9860内遺物出土状況（西から）



ST9860（南から）

ST9860内RP259（西から）

ST9861（北東から）

ST9861内RP248・249（南から）

ST9867（南から）

ST9867内RP321（北から）

ST9868（南から）

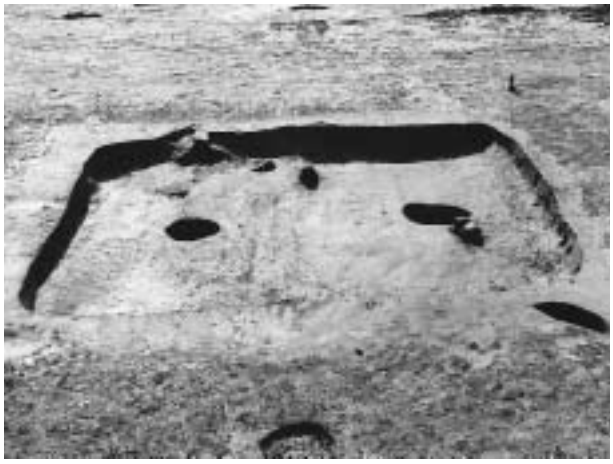
ST9868内RP315（北から）

ST9868内RP316（南から）

ST9868内RP451（南から）

図版20

ST9869・9891（東から）

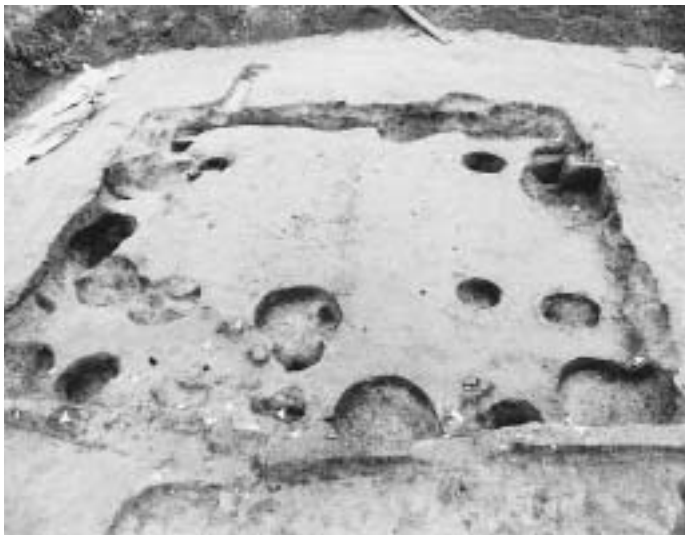


ST9870（北から）

ST9872（南から）

ST9871・9874・9875（東から）

ST9871内RP430・431（西から）



ST9873（南から）

ST9874内EP891（南から）

ST9874（南から）

ST9874内EP889（南から）

ST9874EL248（北から）

ST9874内RP456・457（西から）

図版22

ST9891（東から）

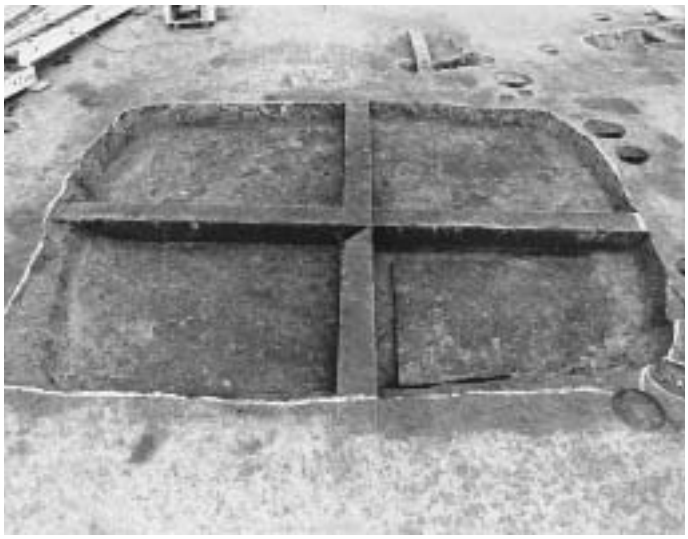
ST9891内EL（北から）

ST9895・9896（南から）

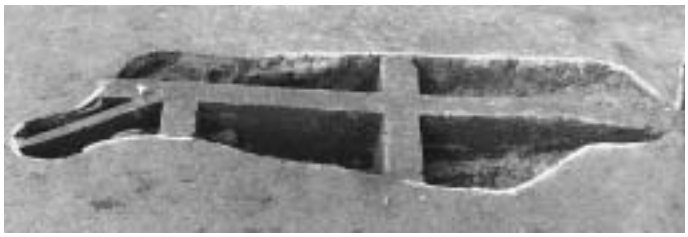
ST9962（南から）

ST9900（南から）

ST9900・9895・9896（北西から）



ST9010（南から）

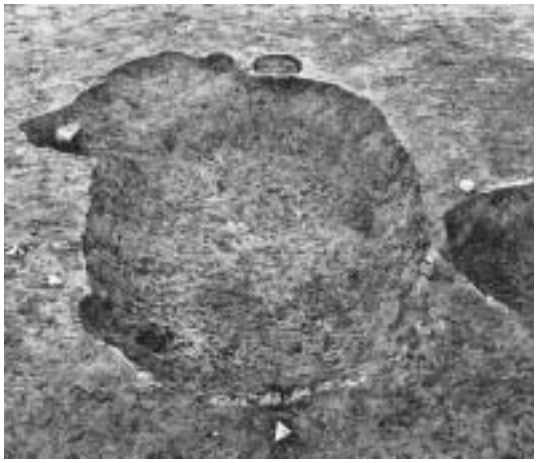


SQ9009土層（東から）

SQ9009・SK9199（南から）

SQ9009土層（北から）

SQ9009（南から）



SK9199（西から）

図版24

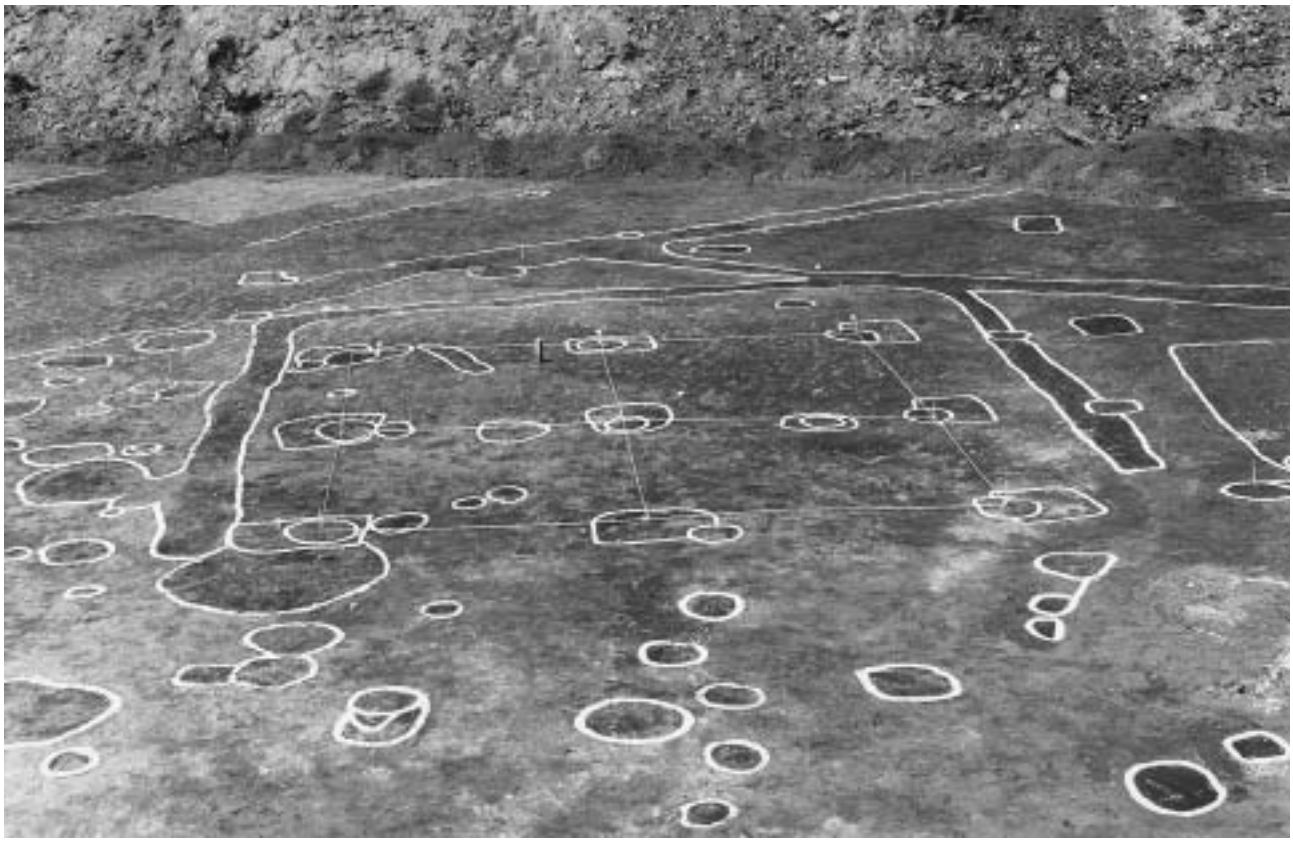
掘立柱建物跡空中写真（１）

掘立柱建物跡空中写真（２）

掘立柱建物跡検出状況（北から）

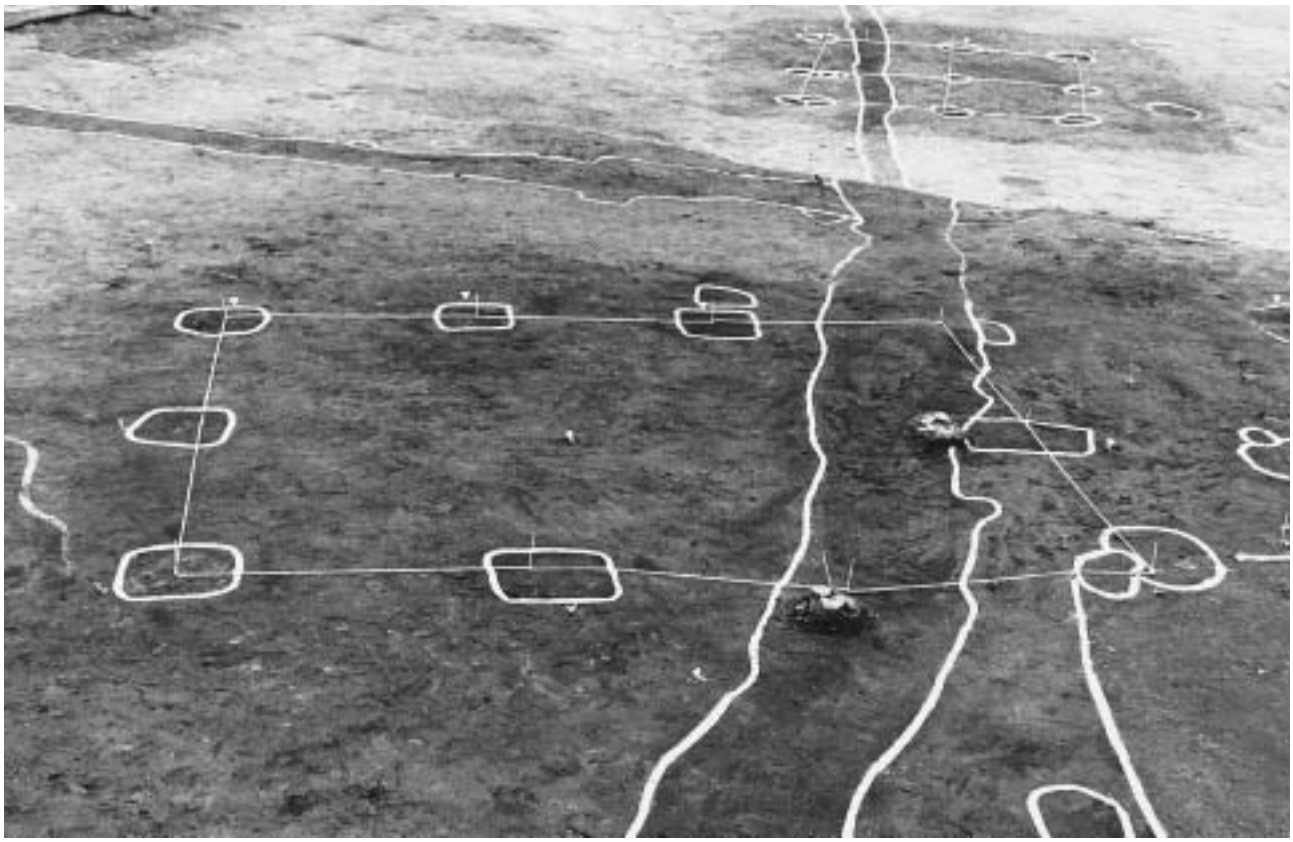
掘立柱建物跡完掘状況（北から）

図版26

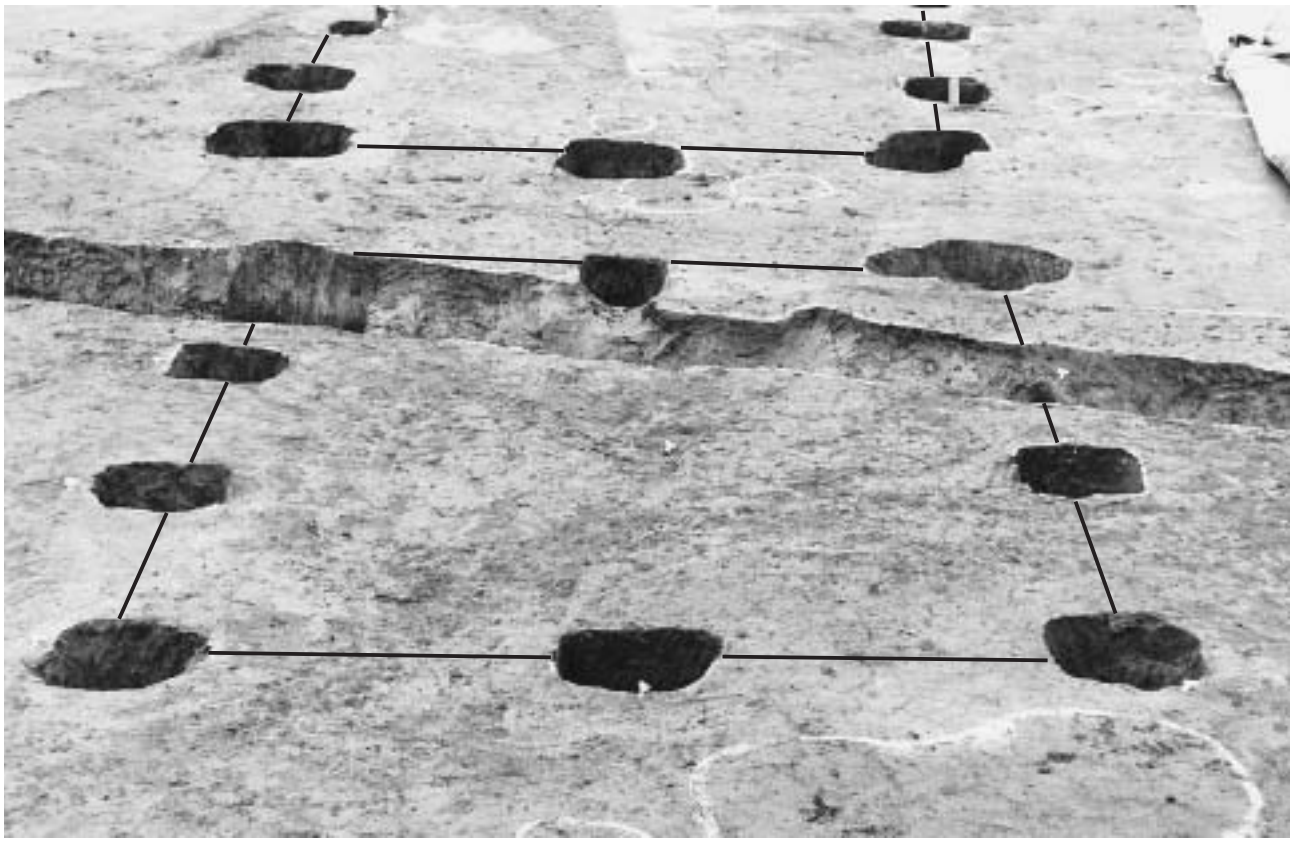


SB9562検出状況（南から）

SB9562完掘状況（南から）



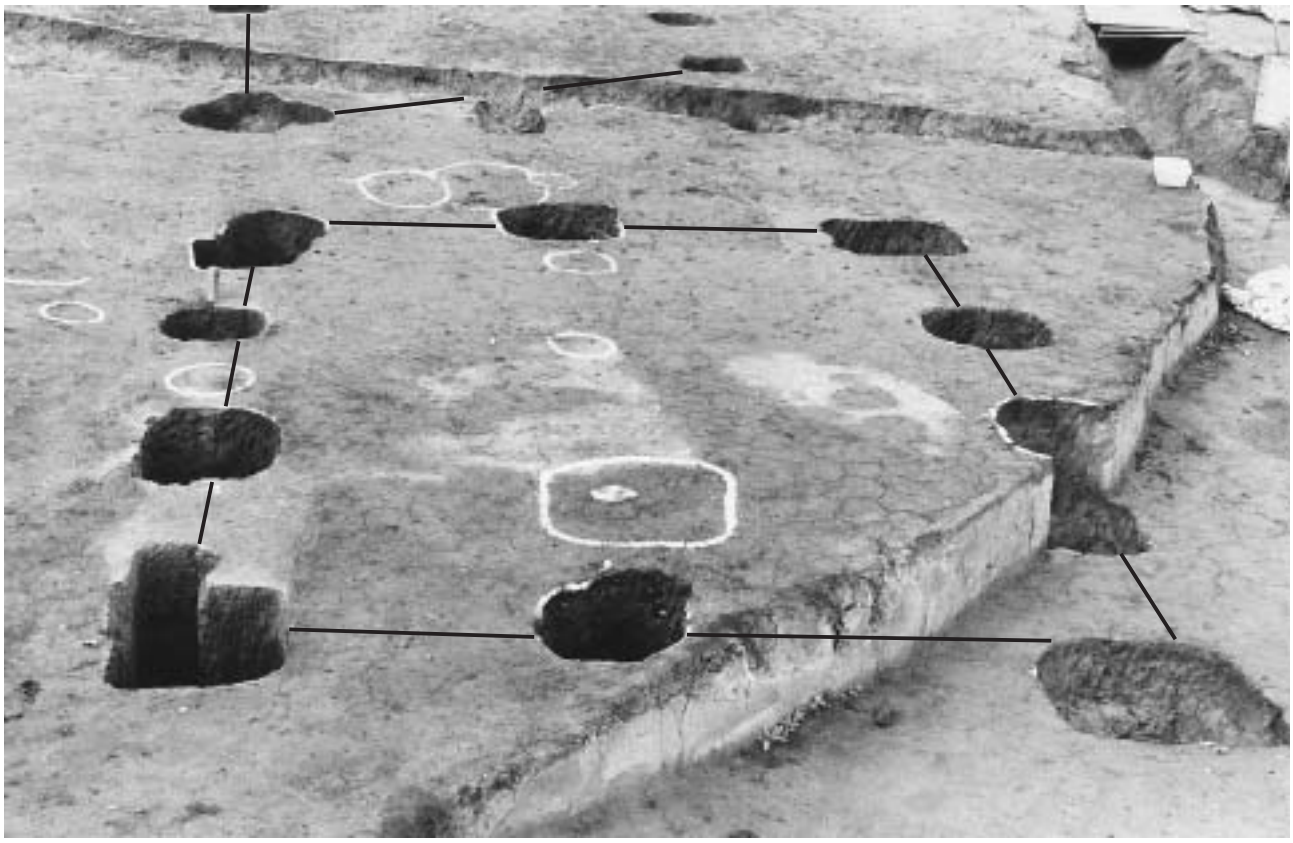
SB9548検出状況（西から）



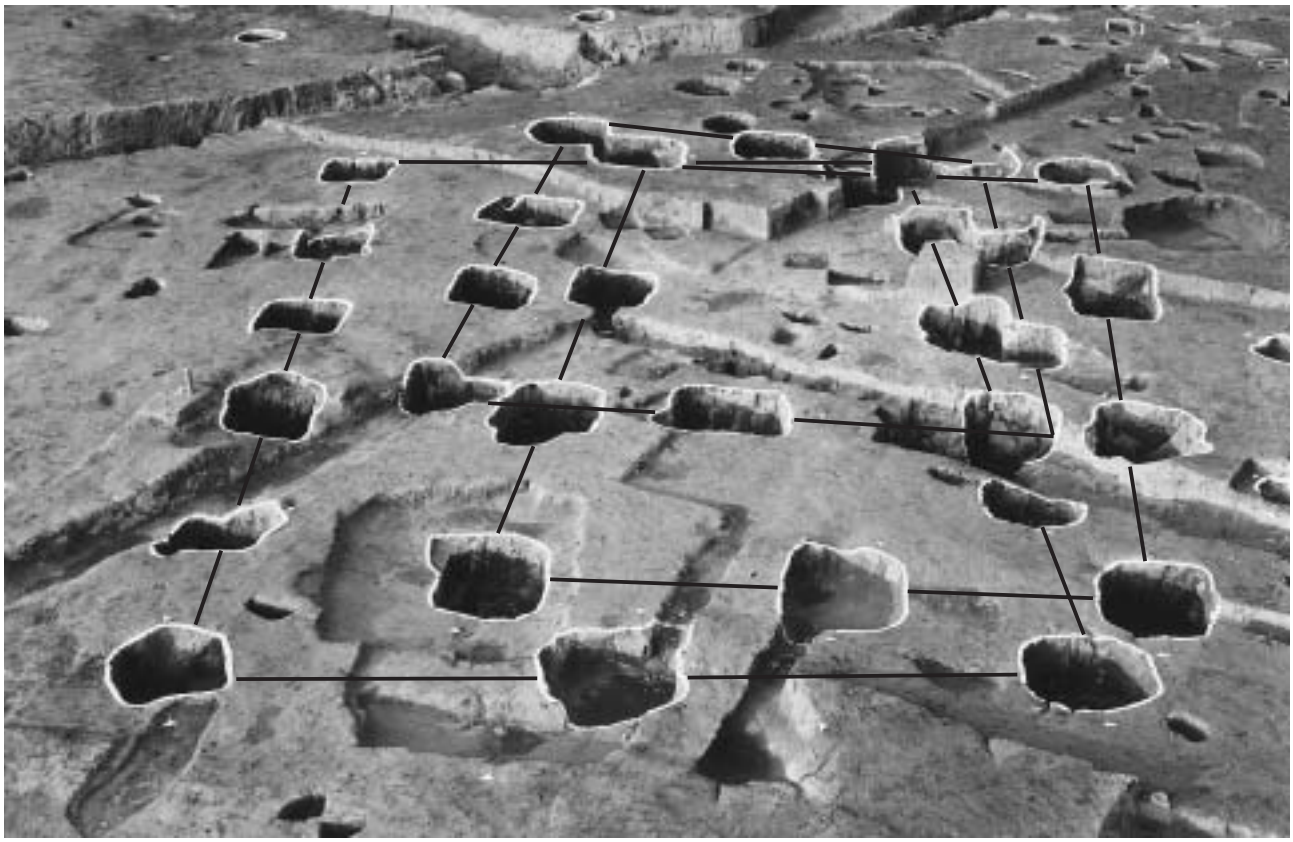
SB9548完掘状況（北から）

図版28

SB9526検出状況（南から）



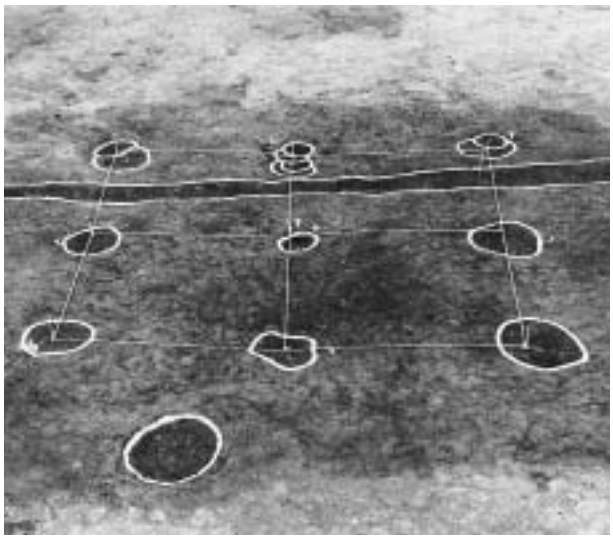
SB9526完掘状況（南から）



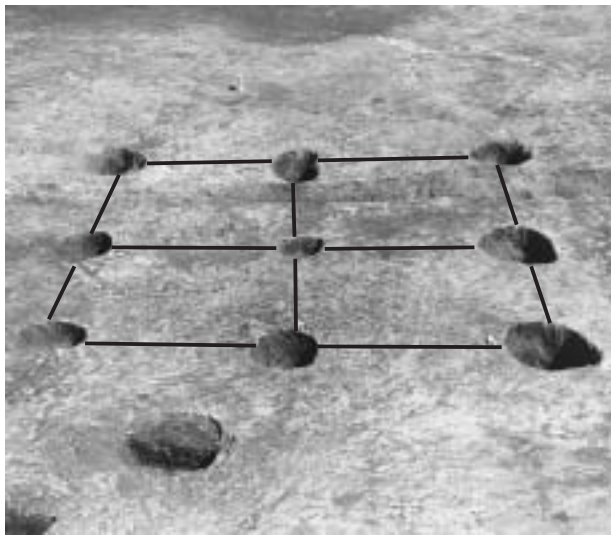
SB577・535・595（南から）

SB9515・9502・557（西から）

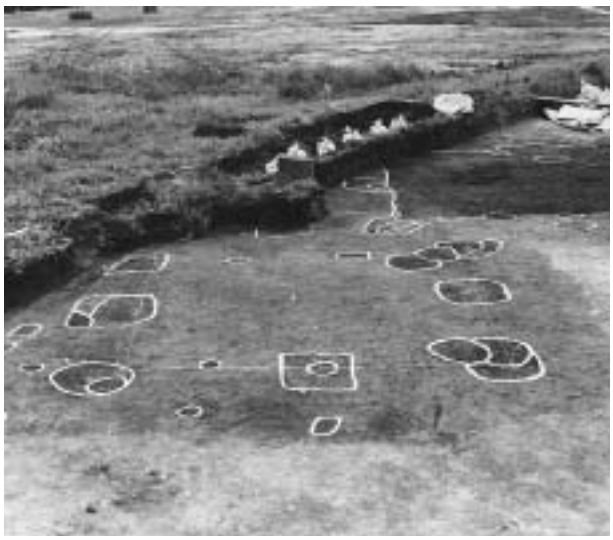
図版30



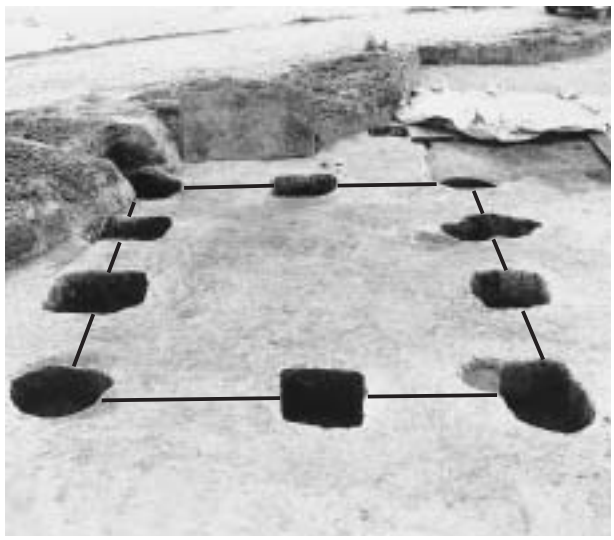
SB9515検出状況（南から）



SB9515完掘状況（南から）



SB9502検出状況（北から）

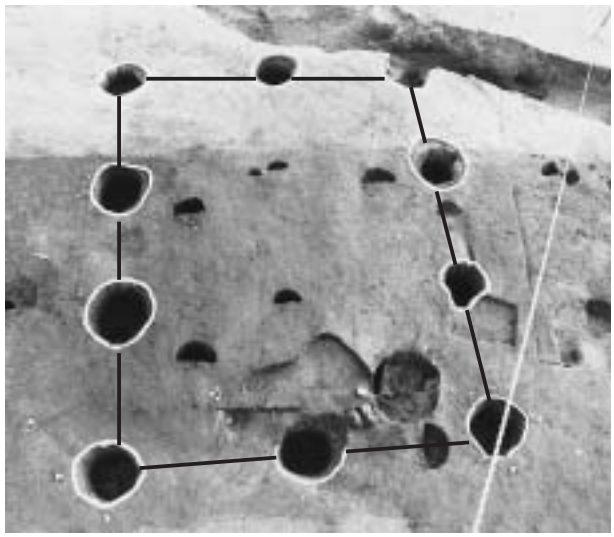


SB9502完掘状況（北から）

SB9648検出状況（南から）

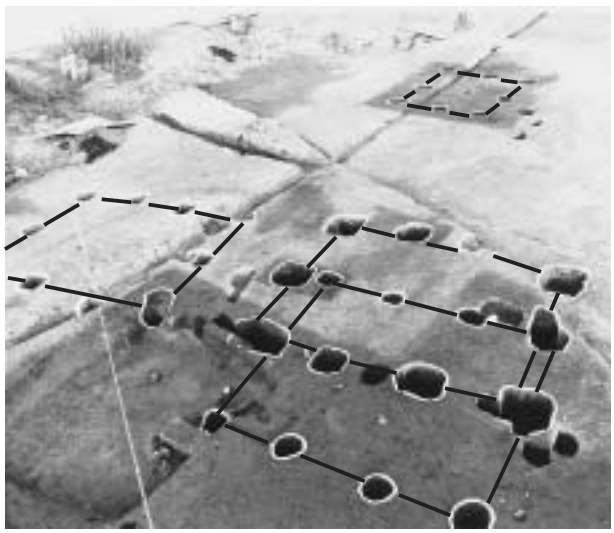
SB9648完掘状況（北から）

SB616（東から）



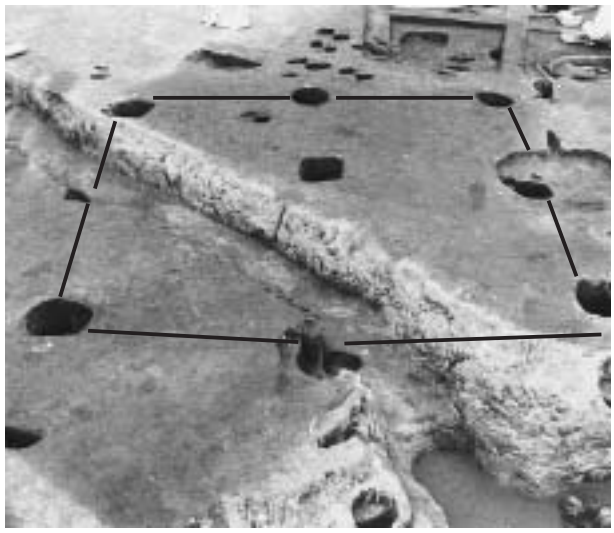
SB9527（北から）

SB9502・9679（西から）



SB9548・9526・567（西から）

SB557（南から）



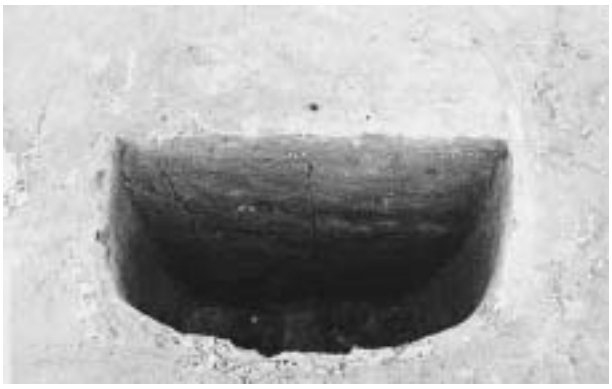
SB9999（南から）

図版32

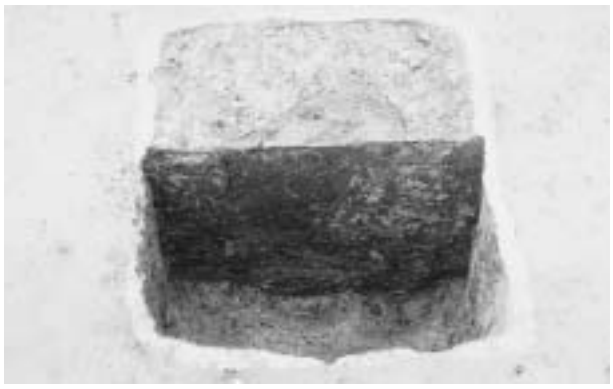
SB535－EB537（西から）

SB535－EB540（北から）

SB567－EB573（東から）

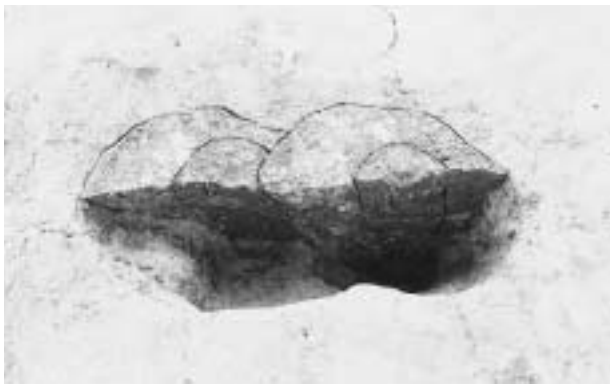


SB2526－EB9547（西から）

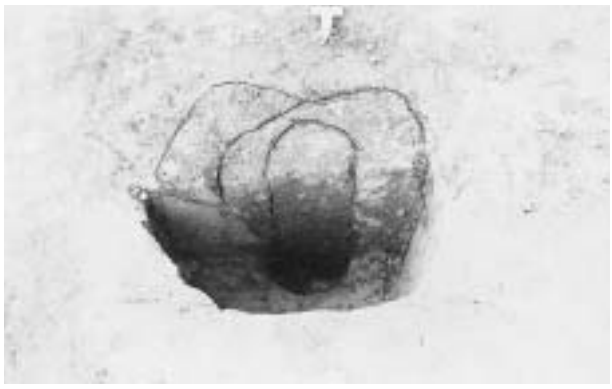


SB9502－EB9504（南から）

SB9502－EB9504（西から）



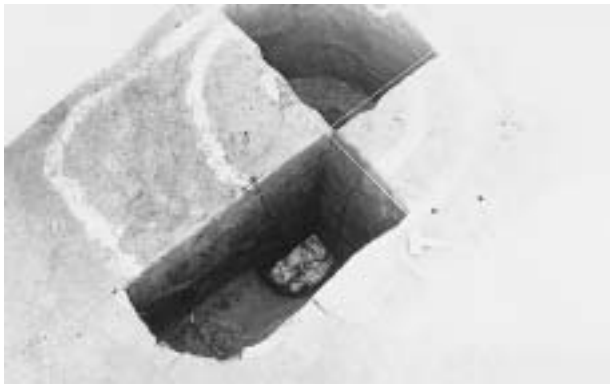
SB9515－EB9517（東から）



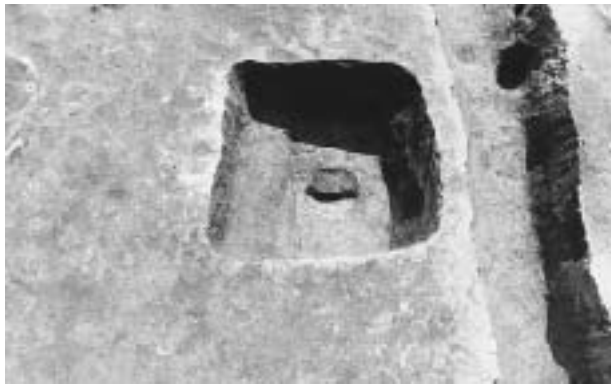
SB9515－EB9521（南から）

SB9526－EB9539（北から）

SB9526－EB9546（西から）



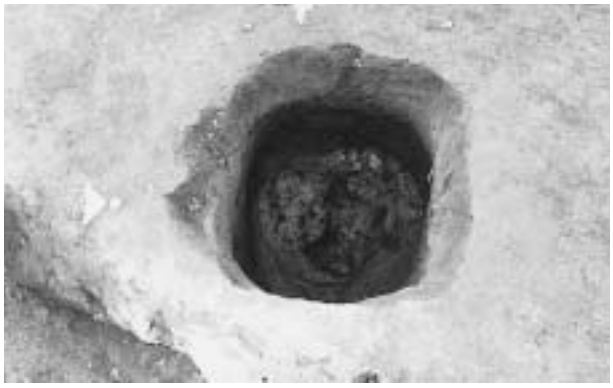
SB9562－EB9564（北東から）



SB9562－EB9570（北から）

SB9548－EB9549（北から）

SB9548－EB9552（北から）



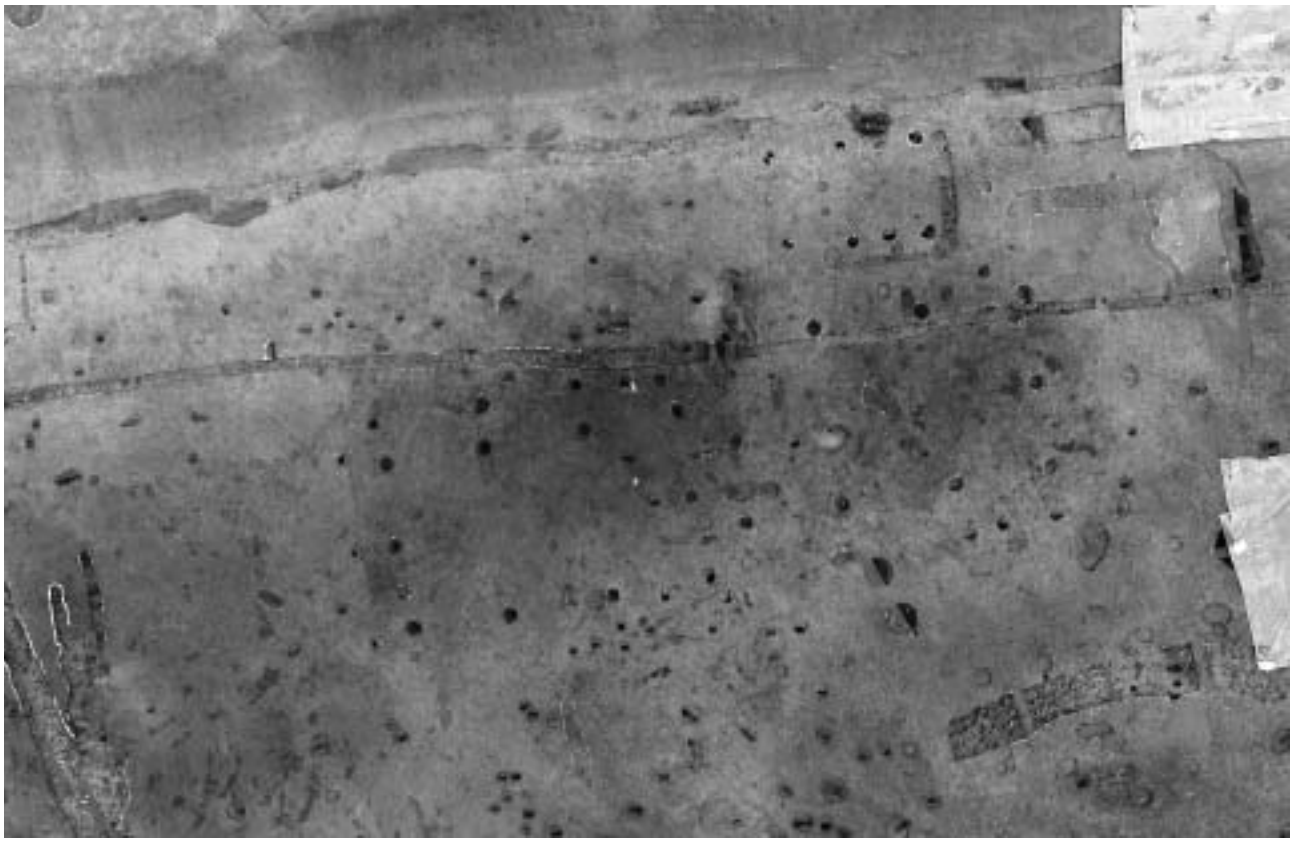
SB9999－EB500（南から）

SB9999－EB508（南から）

図版34

掘立柱建物跡鳥瞰写真（南東から）

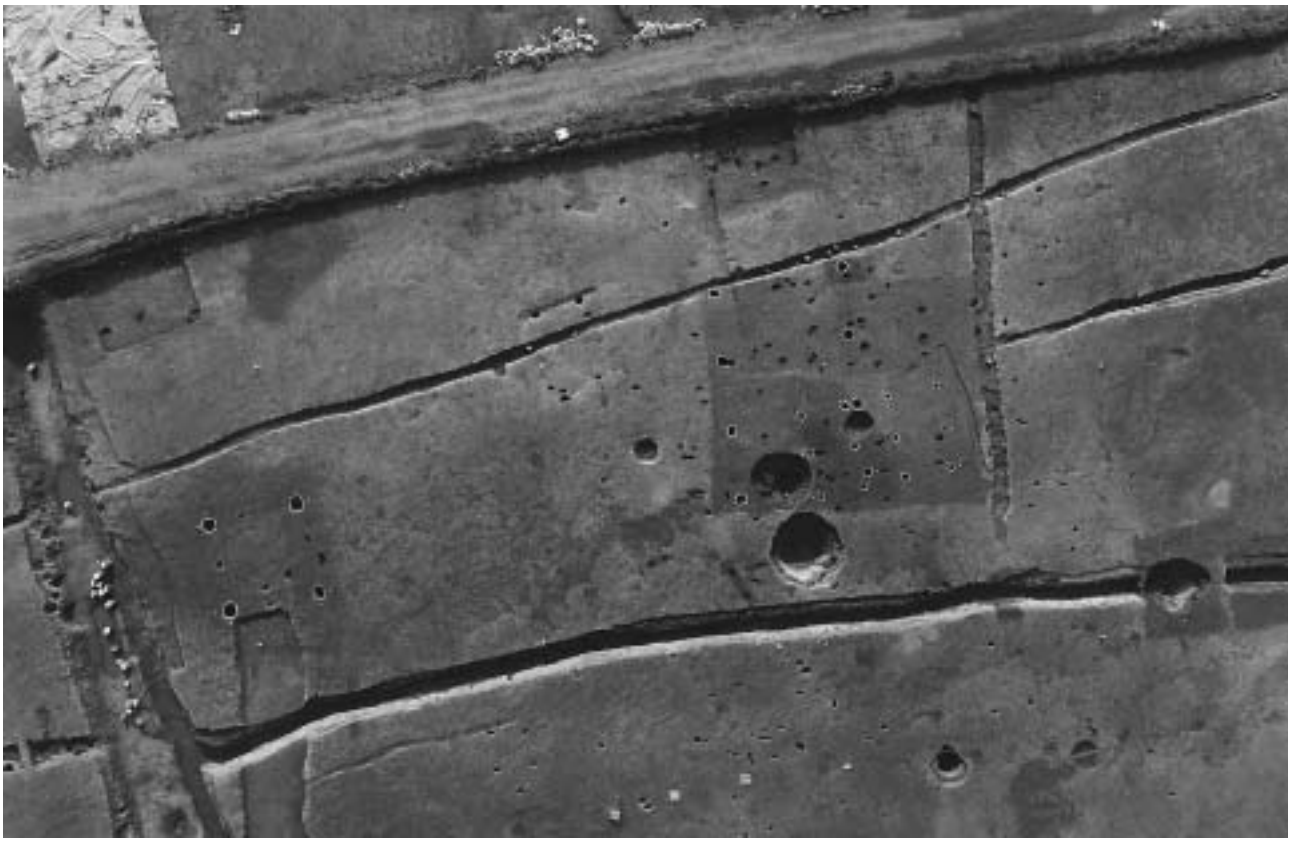
掘立柱建物跡空中写真（３）



掘立柱建物跡空中写真（４）

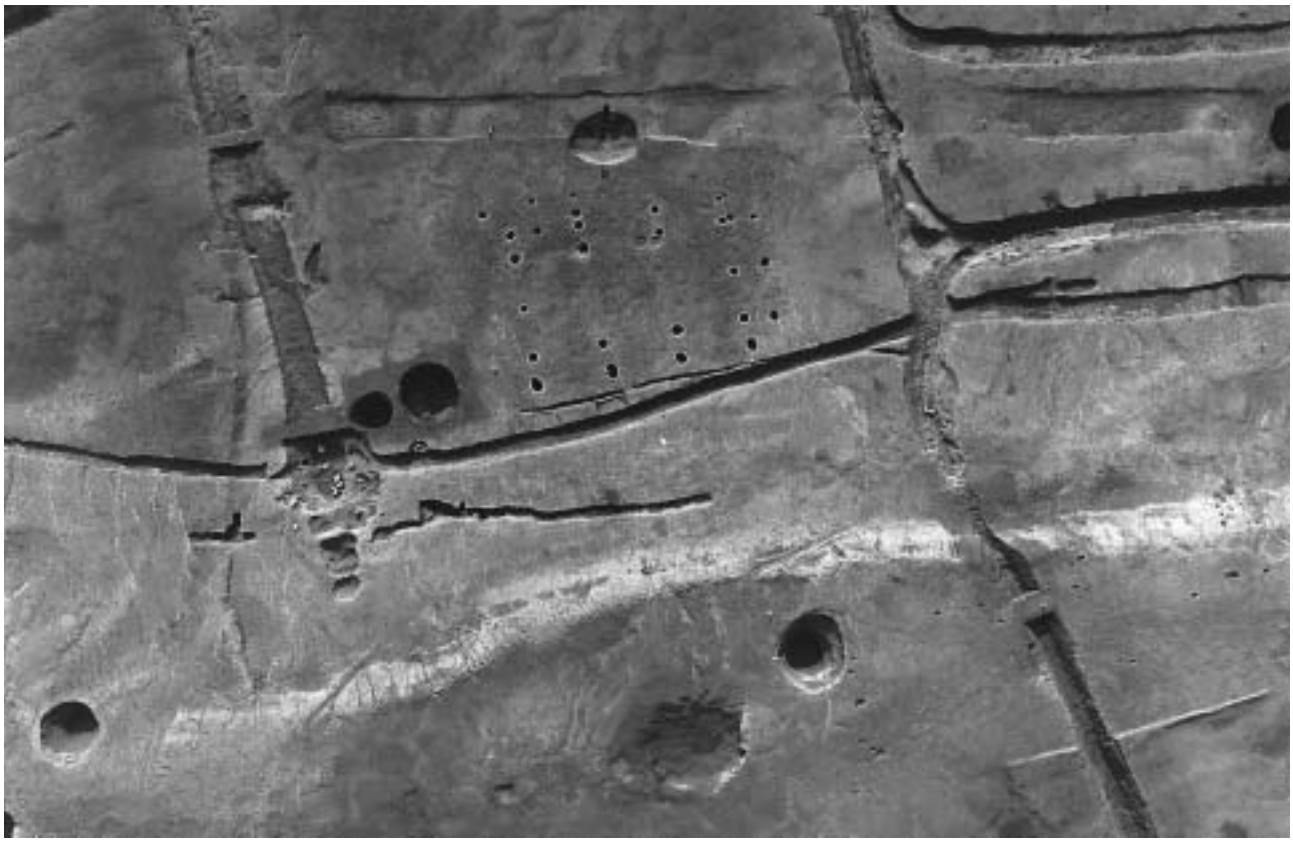
図版36

掘立柱建物跡空中写真（５）



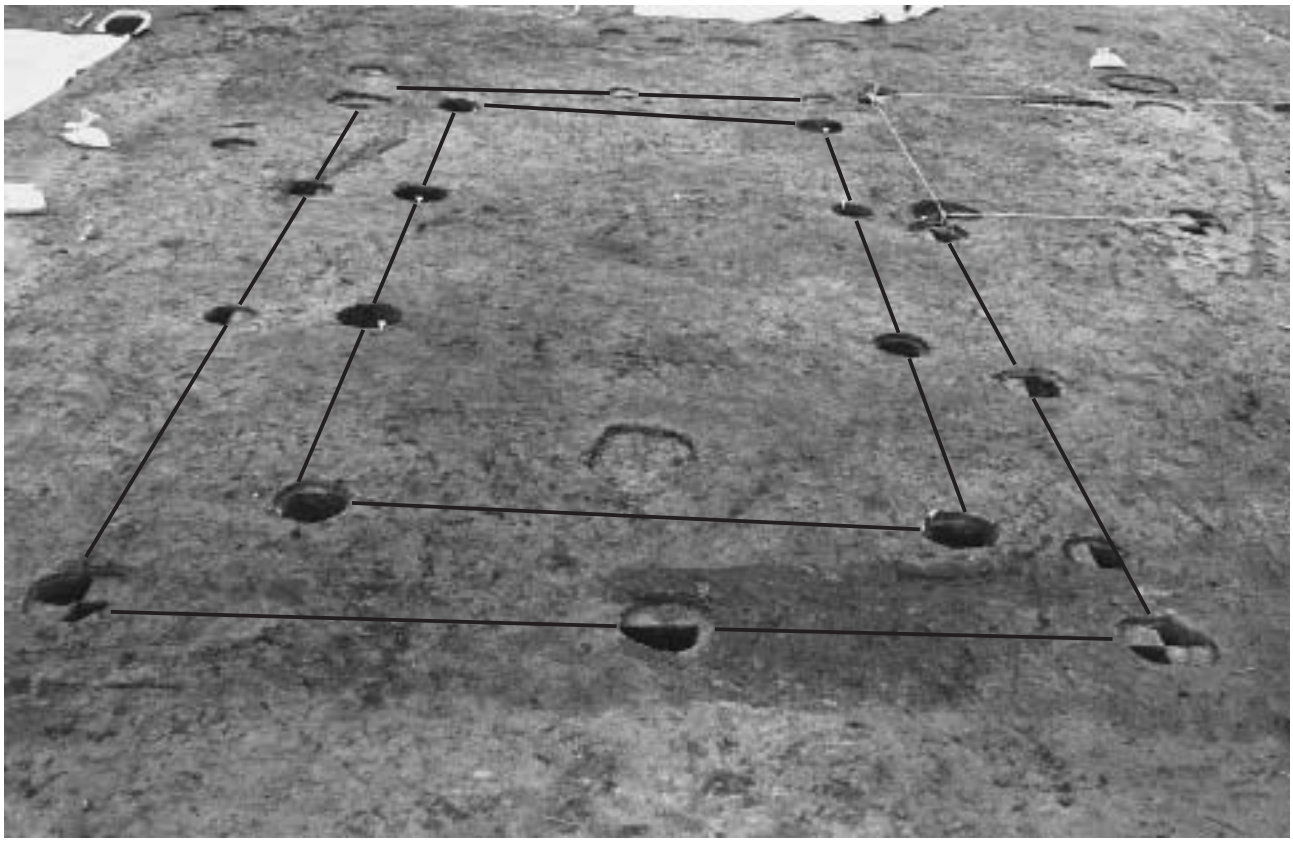
掘立柱建物跡空中写真（６）

掘立柱建物跡空中写真（７）



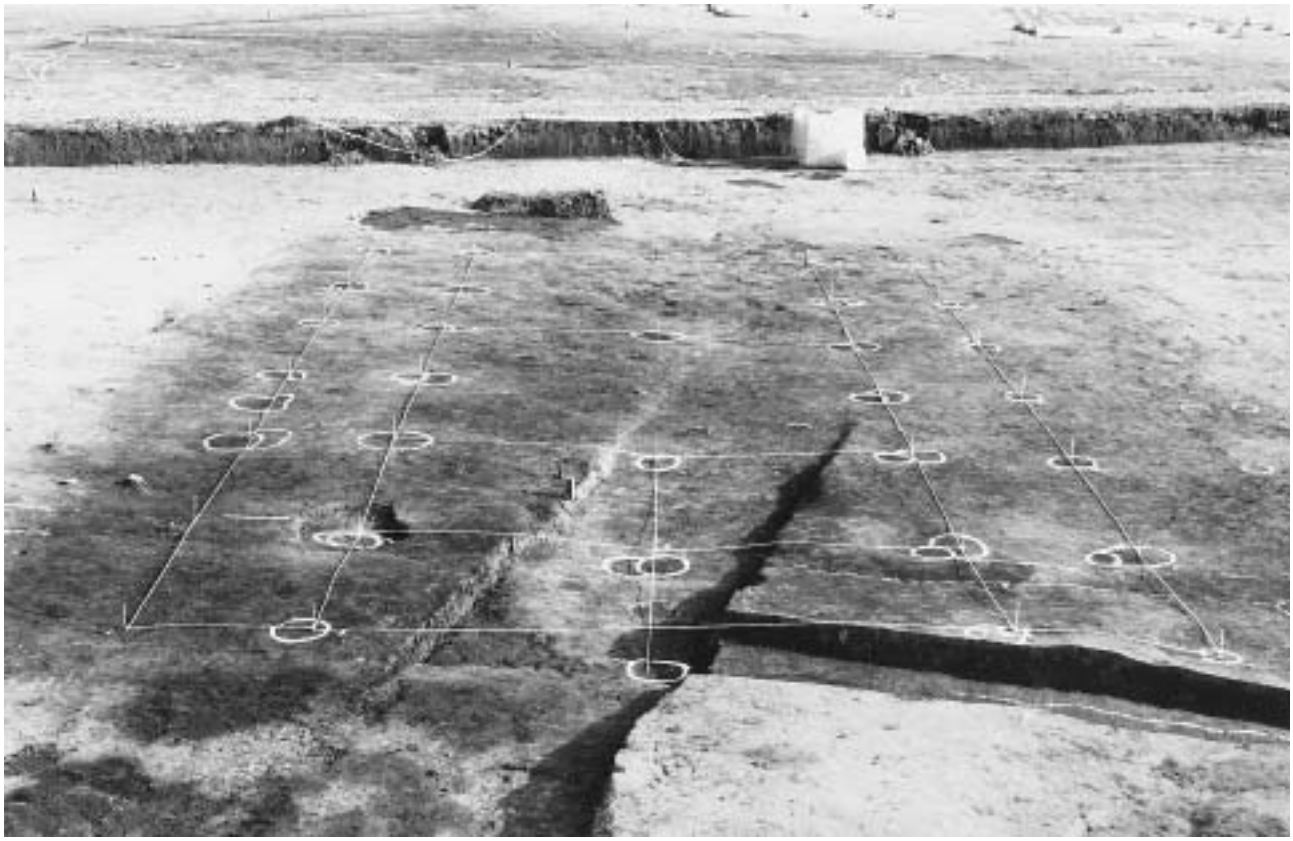
掘立柱建物跡空中写真（８）

図版38

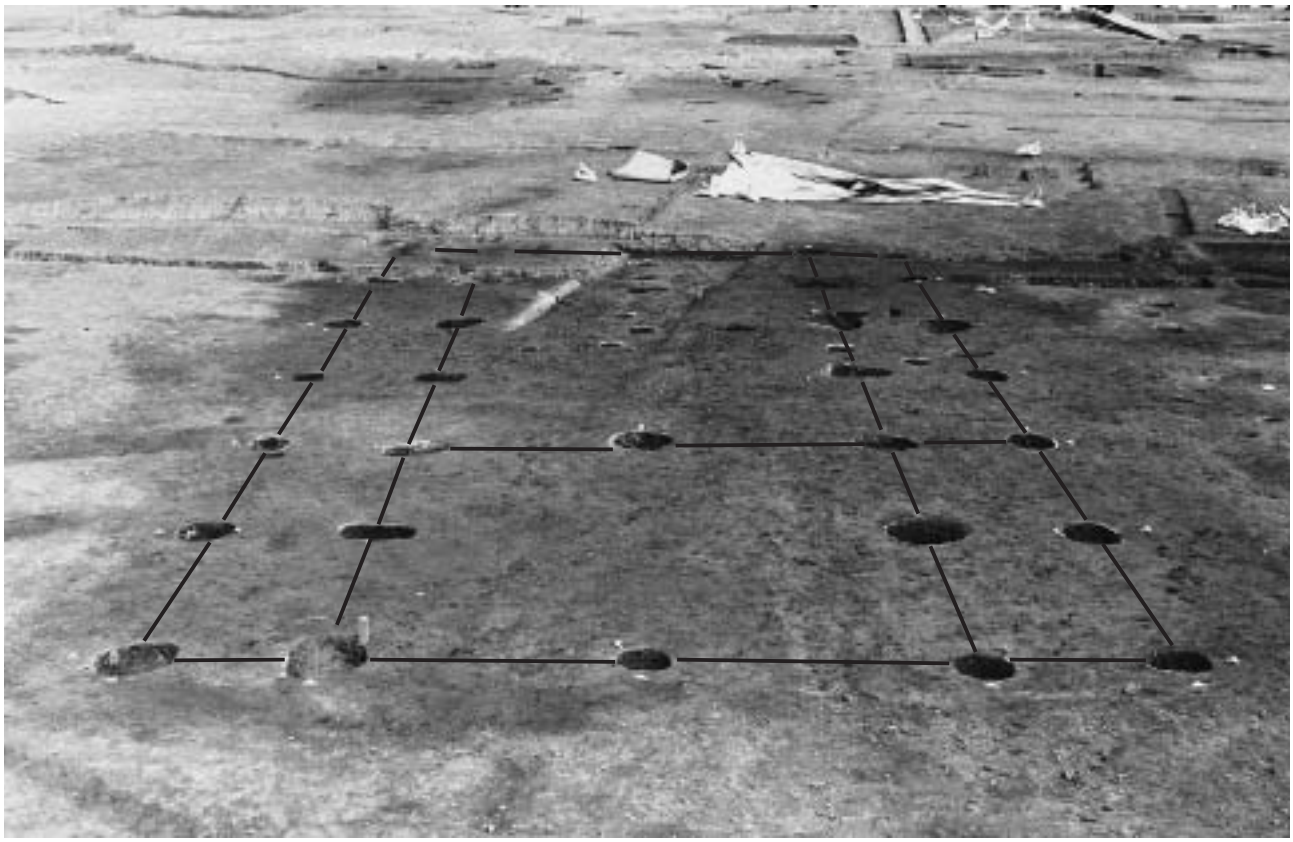


SB9264（南から）

SB9290・9316（南から）

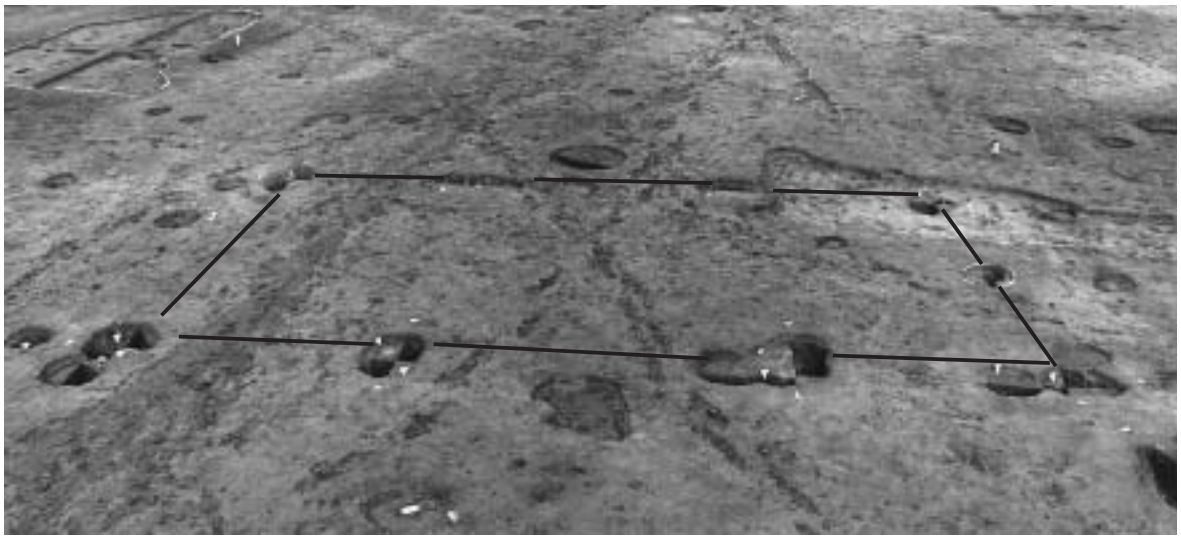


SB9762検出状況（北から）

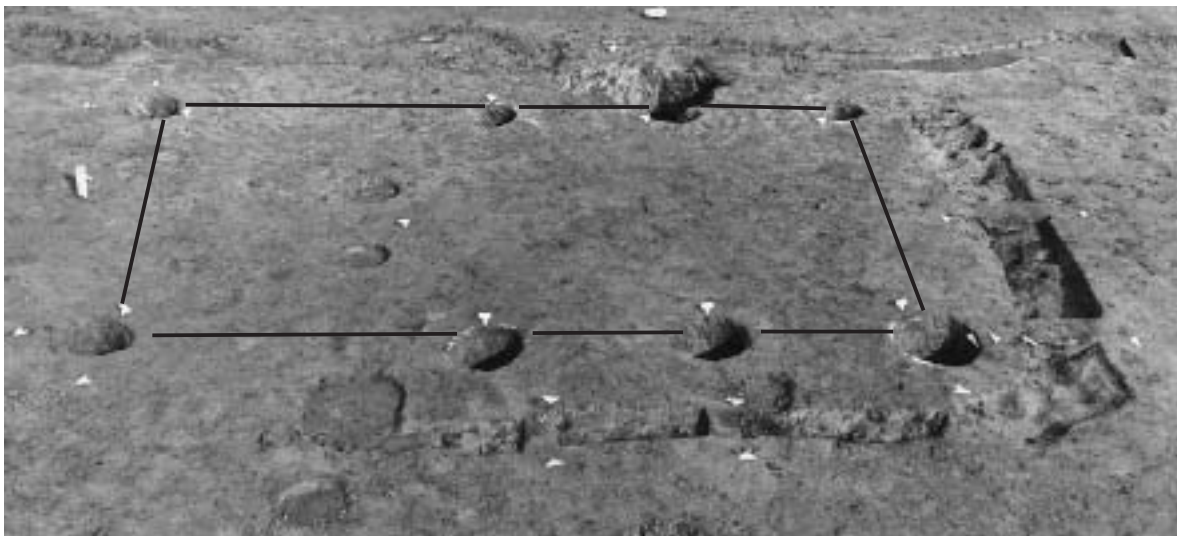


SB9762完掘状況（南から）

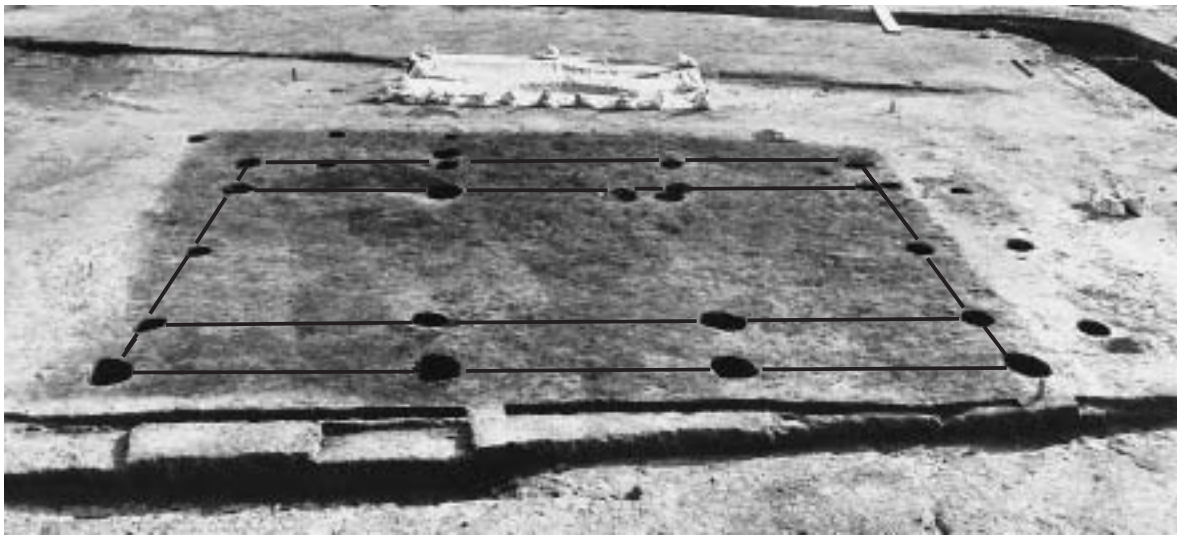
図版40



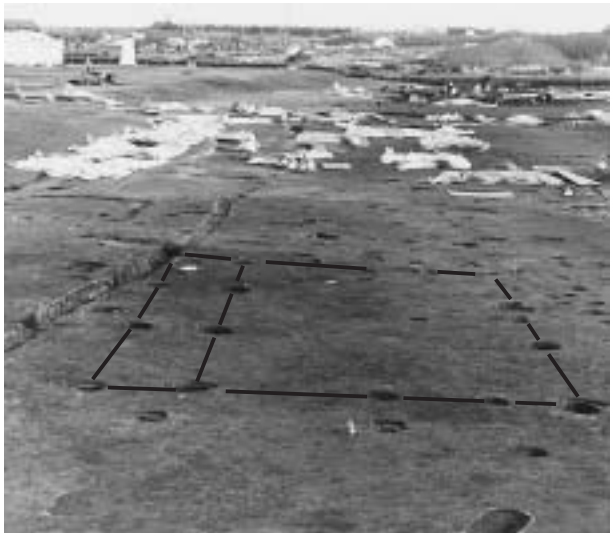
SB9211・9220（南から）



SB9316（南から）



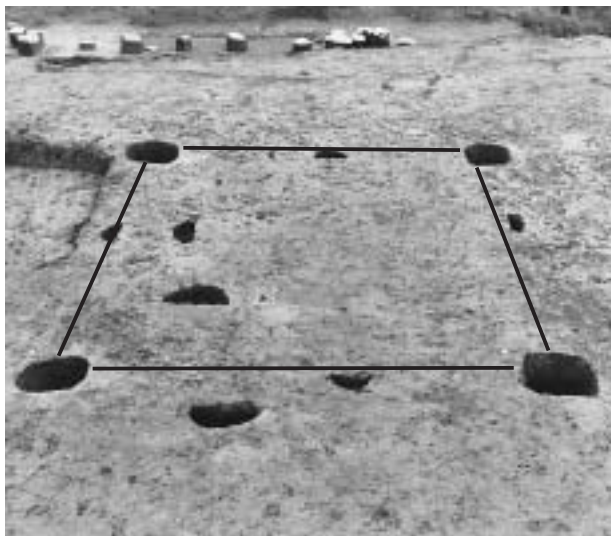
SB9731（北から）



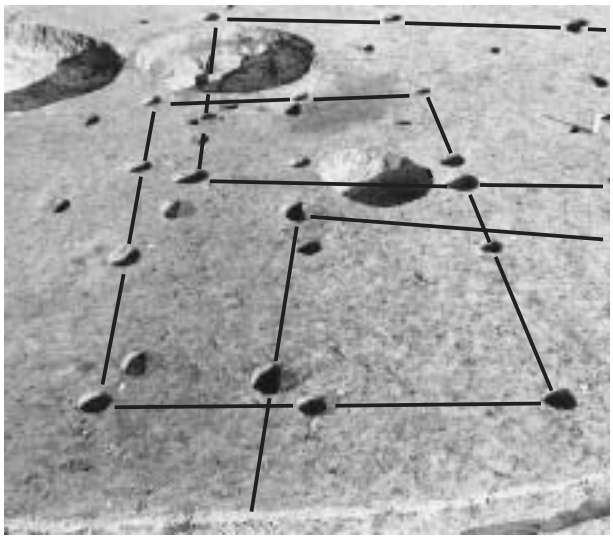
SB9273・9290（西から）

SB9731（南から）

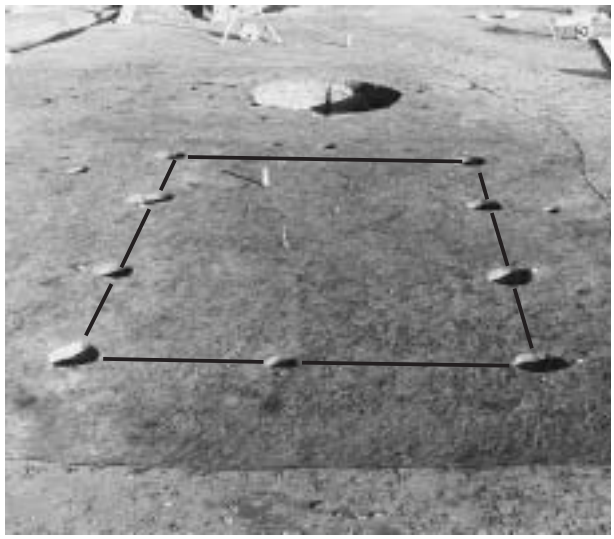
SB9971（北東から）



SB845（西から）



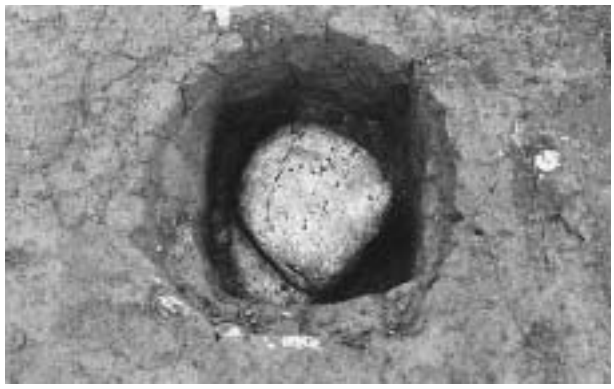
SB824・815・206（南から）



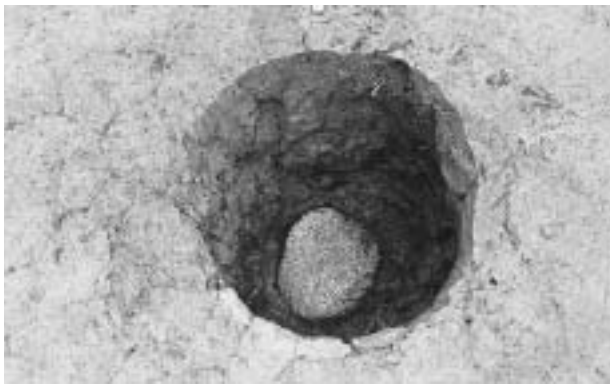
SB9750（西から）

図版42

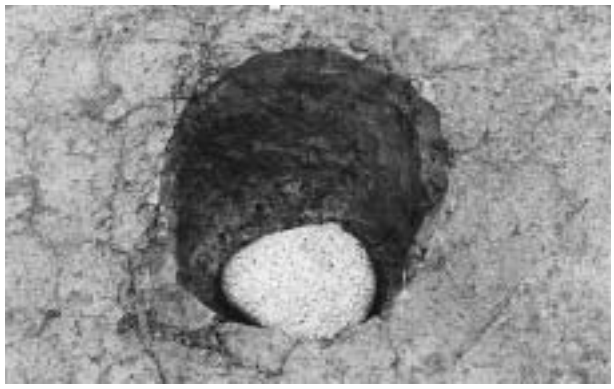
SB264－EB9265（西から）



SB264－EB9268（西から）

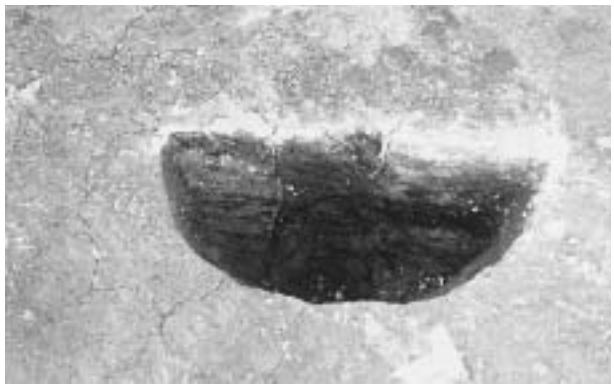


SB264－EB9270（西から）



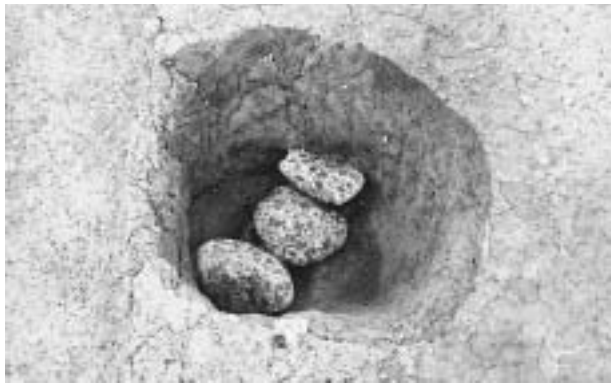
SB264－EB9271（西から）

SB9750－EB9756（南から）



SB9750－EB9757（南から）

SB9762－EB9773（西から）



SB9762－EB9778（西から）

SE562土層断面（南西から）

SE562中段（上が西）

SE562（上が西）

SE562（西から）

SE562（東から）

図版44

SE764土層断面（南から）

SE764内RP448・449（南から）

SE762土層断面（南から）

SE9159土層断面（東から）

SE9159（東から）

SE9961土層断面（東から）

SE9961外枠（北から）

SE9961（北から）

SE9961内RW238（西から）

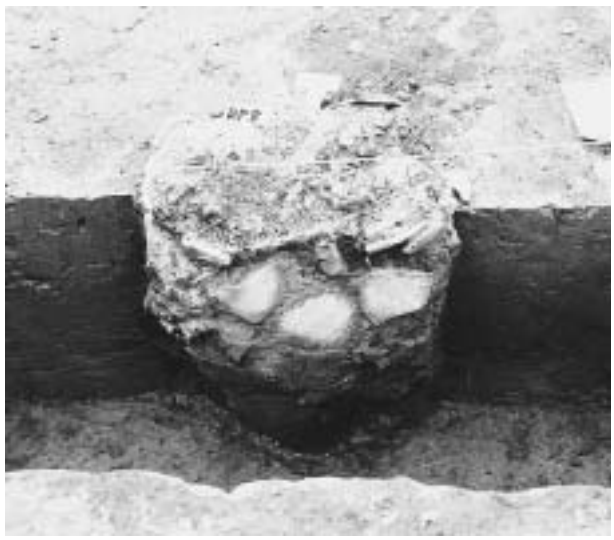
SE9961（北西から）

図版46

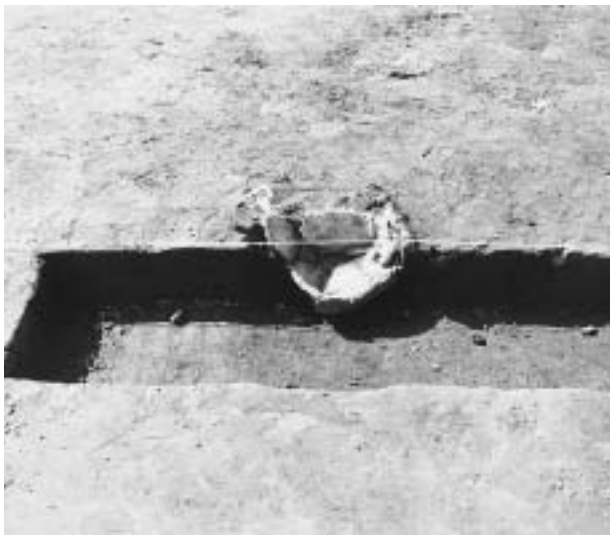
EU761・RP379（南から）

EU9916・RP 6 （南東から）

EU9325（南東から）



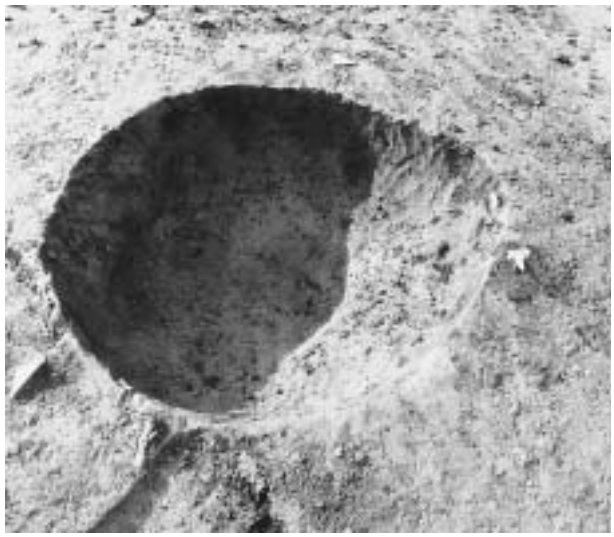
EU9931・RP 8 （東から）



EU9934・RP10（東から）

EU9945・RP 5 （西から）

SK 3 （東から）



SK 4 （東から）

SK 6 （東から）

SK16（南西から）

SK61・RP36（北から）

SK139（北から）

図版48

SK88土層断面（南から）

SK88・RP20（北から）

SK140土層断面（南東から）

SK140・RP35上部（西から）

SK140・RP35下部（東から）

SK140完掘状況（東から）

SK141（北から）

SK144（東から）

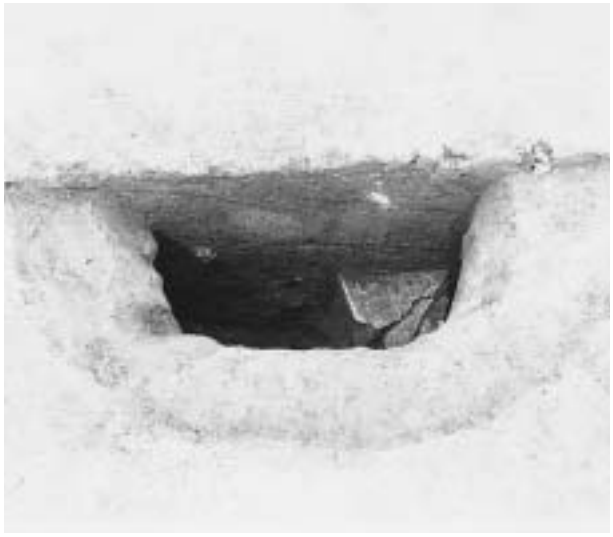
SK146（北から）

SK154・RP39（西から）

SK763（西から）

SK9596（南西から）

図版50

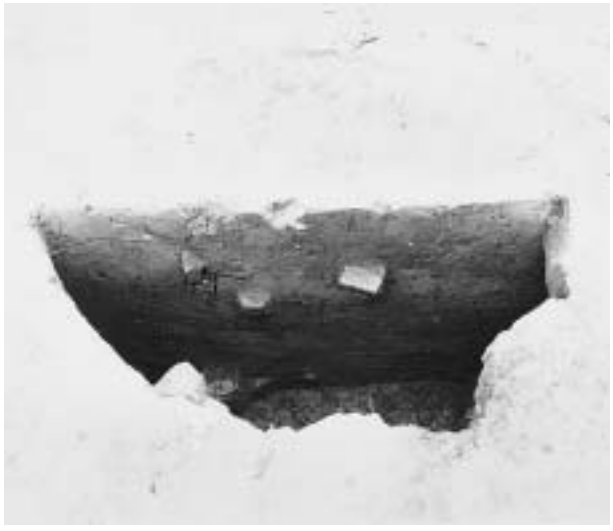


SK9904土層断面（南から）

SK9904・RP17（西から）

SK9904・RP17（南から）

SK9909（西から）



SK9913（北から）

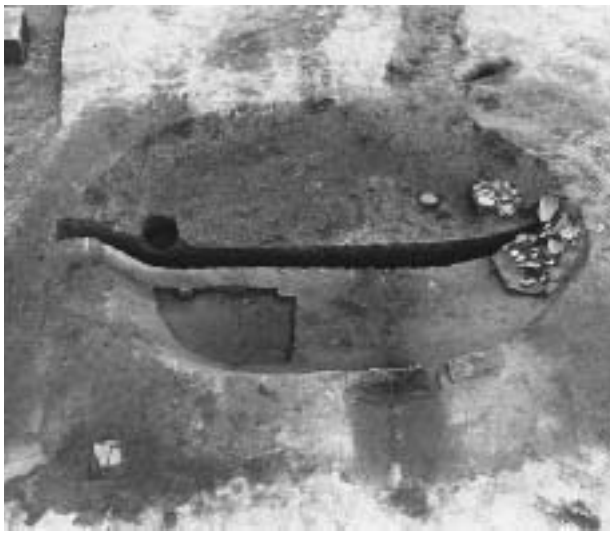
SK9338（北西から）

SK646遺物出土状況（南から）

SK647遺物出土状況（南から）

SK652（北東から）

SK9202（南から）



SK9613完掘状況（西から）

SK9613遺物出土状況（北から）

図版52

SK9160（南から）

SK9301（南から）

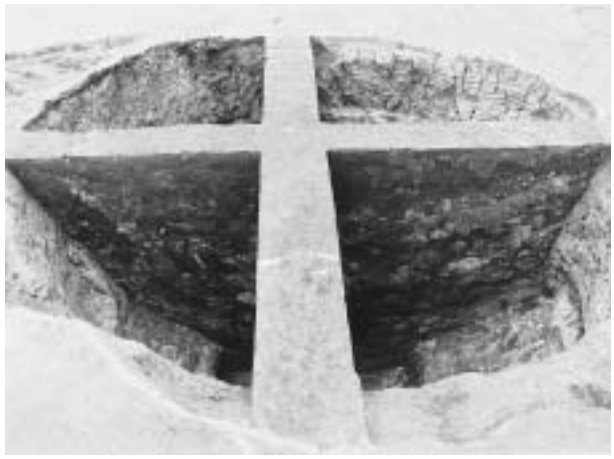
SK9016（南から）

SK9018（東から）

SK9201（東から）

SK9876（南から）

SK9012（南東から）



SK9013（南から）

SK9014（南から）

SK9015（南西から）

SK9019（北東から）

SK9200（南から）

図版54

SK9324（南から）

SK9348（南から）

SK9820（南から）

SK9888（南から）

SK9601・9602（南西から）

2 次調査区（西から）

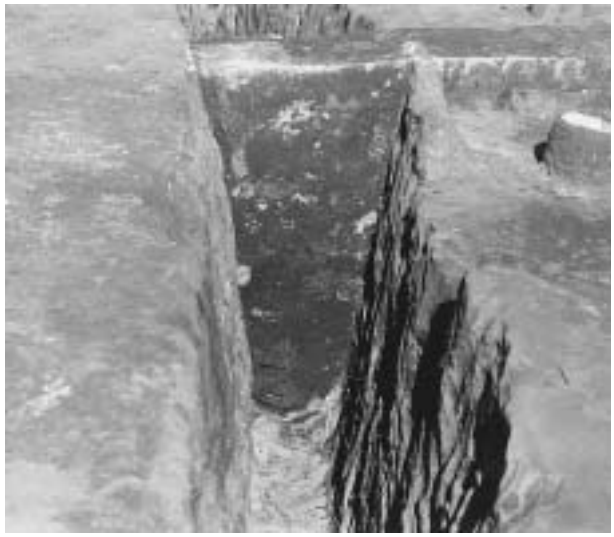
3 次調査区（北東から）

図版56

SD4002（南から）

SD4002土層断面（北から）

SD4006（南から）



SD4006土層断面図（南から）

SD4006土層断面（南から）

SD7085（北から）

SD7085土層断面（北から）

SD7085・9583（西から）

SD7085内RQ233（東から）

SD9170（南から）

SD9573土層断面（南から）

図版58

SD9168（南から）

SD9579（西から）

SD9580（北東から）

SD9580土層断面（西から）

SD9580内RP389（北から）

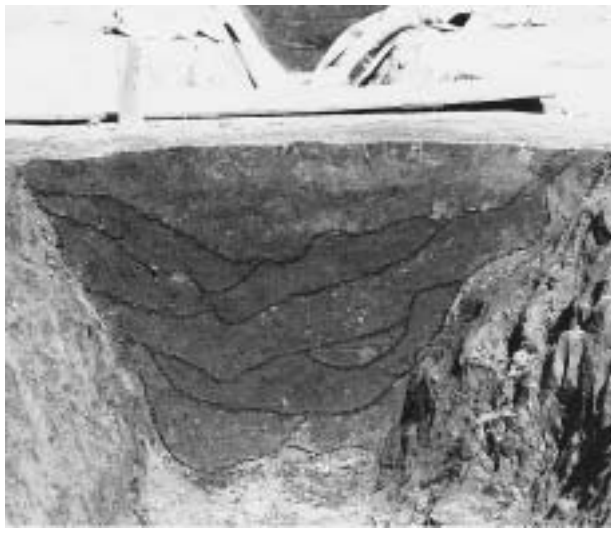
SD9581（北から）

SD9581土層断面（北から）

SD9586（南東から）

SD9586土層断面（東から）

SD9587（南から）



SD9587土層断面（南から）

図版60

SD9198（東から）

SD9866・RP407（南から）

SP9197・RP61（南から）

SP643・RP246上部（南から）

SP643・RP246下部（南から）

SD7085（北から）

SD7085（北西から）

図版62

SD9328（西から）

SD9583（西から）

SD9584（西から）

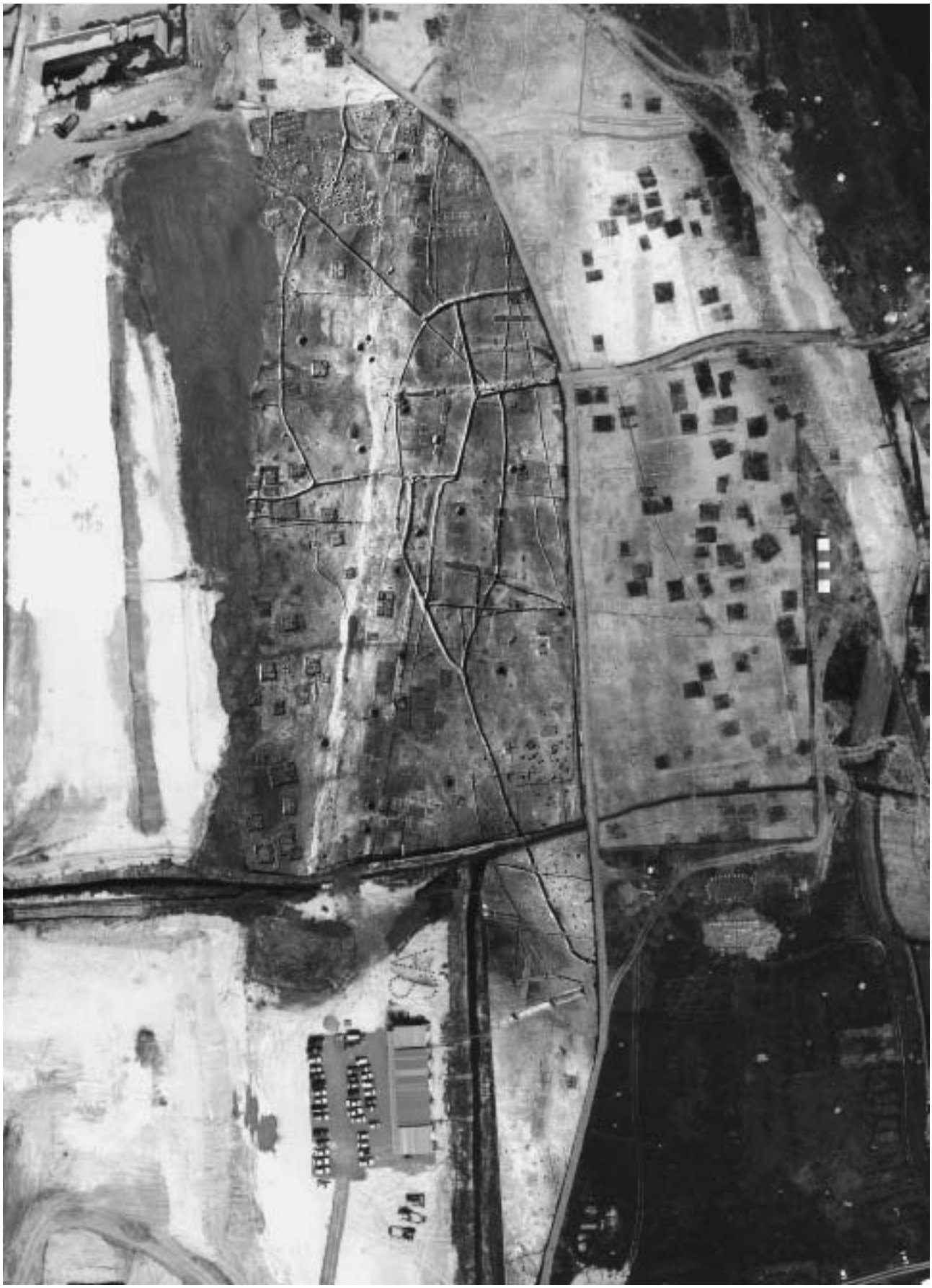
SD9581（北から）

SD9581（南から）

SD9581（南西から）

図版64

2 次調査区と 2 期12・13区（南西から）



3 次調査区とHO調査区

図版66

3 次調査鳥瞰写真 1 （南から）

3 次調査鳥瞰写真 2 （北から）

図版68

3 次調査鳥瞰写真 3 （南東から）

3 次調査鳥瞰写真 4 （南南から）

図版70

17－1

18－2

18－3

23－2

23－3

18－1

33－1

第17、18、23、33図　掲載遺物

20－1

26－1

第20、26図　掲載遺物

図版72

19－3

23－1

35－6

21－2

27－3

第19、21、23、27、35図　掲載遺物

25－1

第25図　掲載遺物

図版74

21－3

27－4

35－3

35－4

36－7

36－8

36－9

36－10

36－11

第21、27、35、36図　掲載遺物

34－7

35－1

35－5

31－1

31－4

35－7

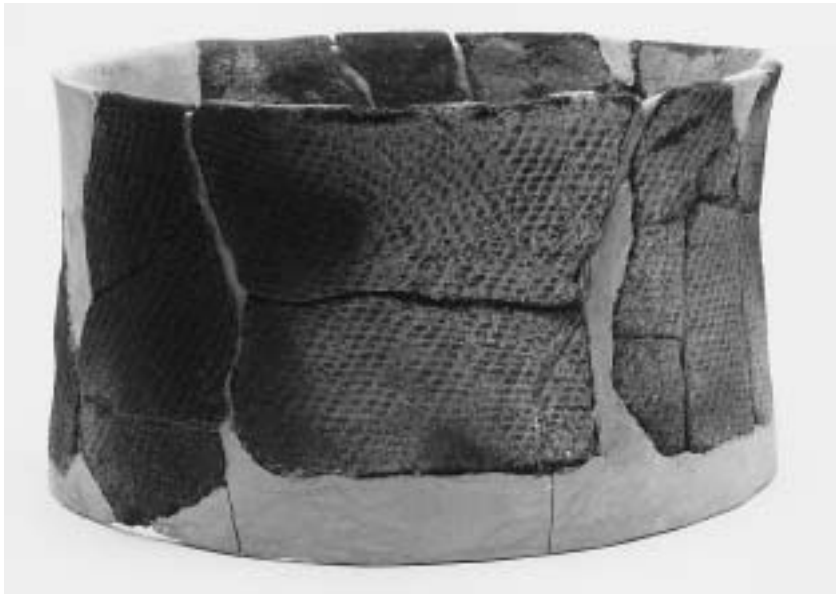
第31、34、35図　掲載遺物

図版76

32－1

27－1

27－2



32－6

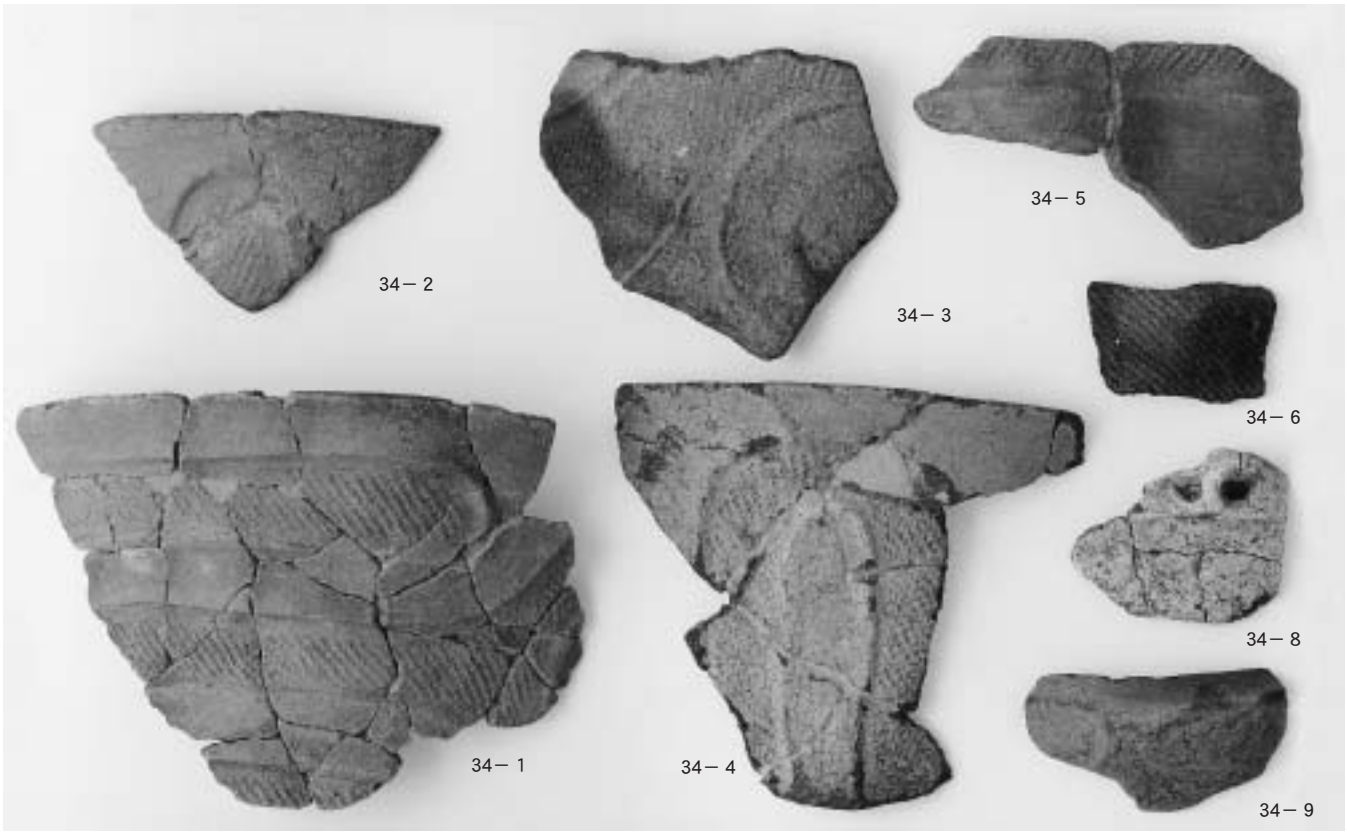
33－5

35－2

33－6

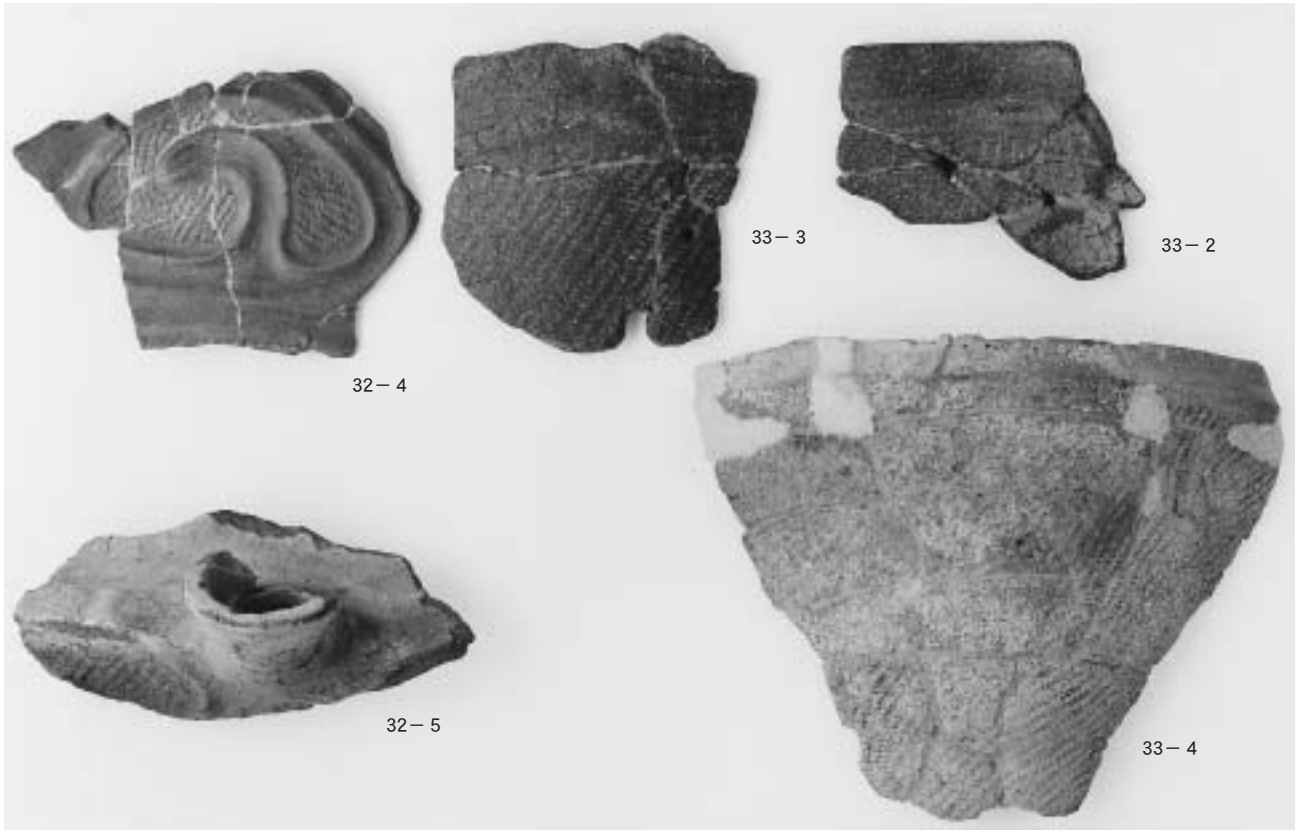
33－7

第27、32、33、35図　掲載遺物

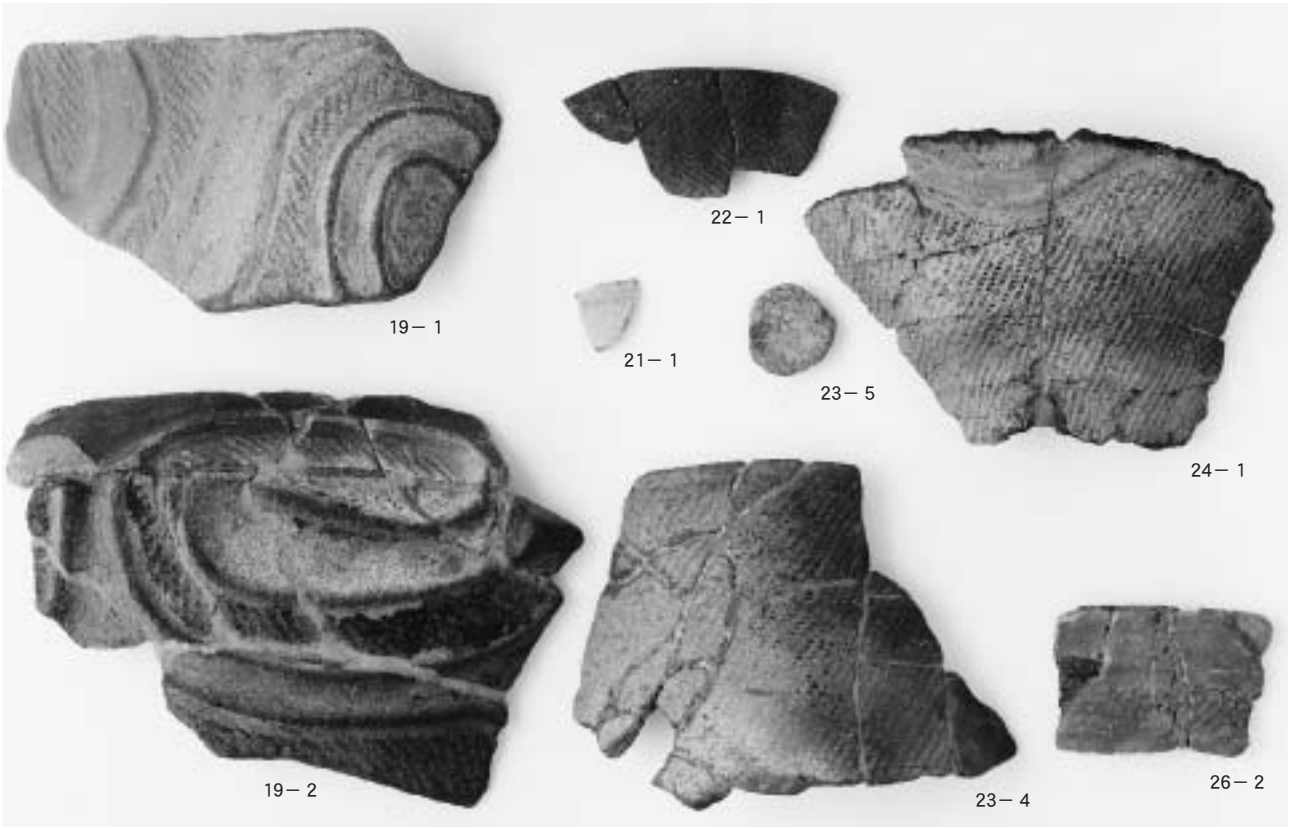


第34、36図　掲載遺物

図版78

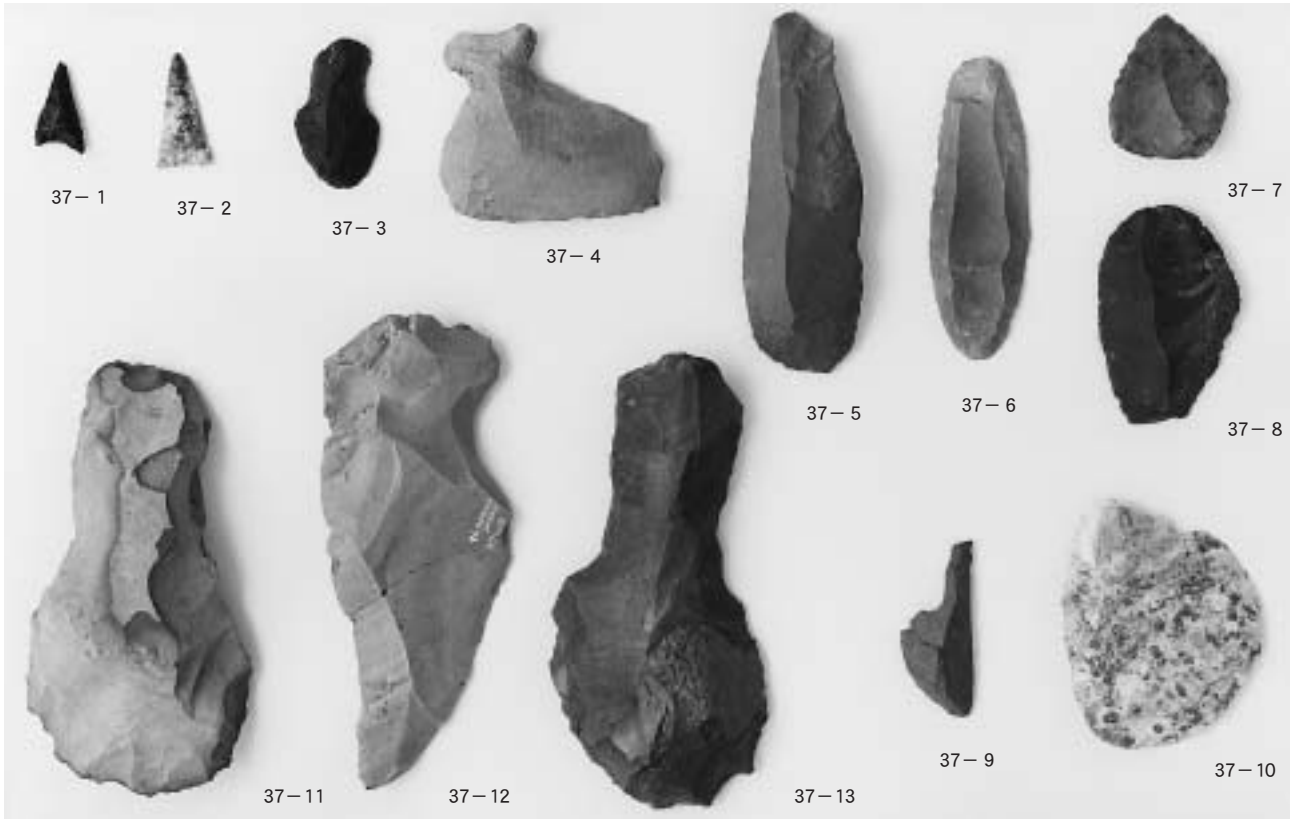


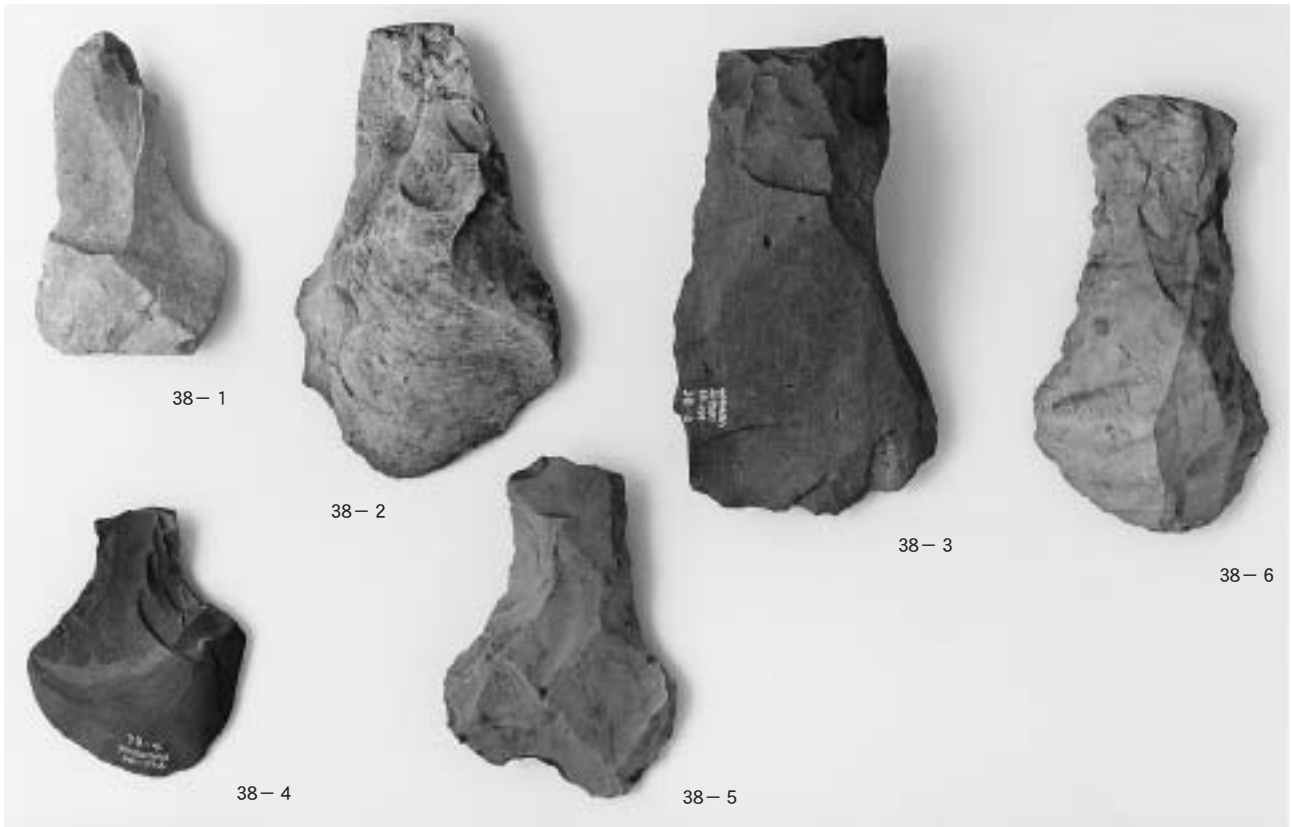
第31、32、33図　掲載遺物



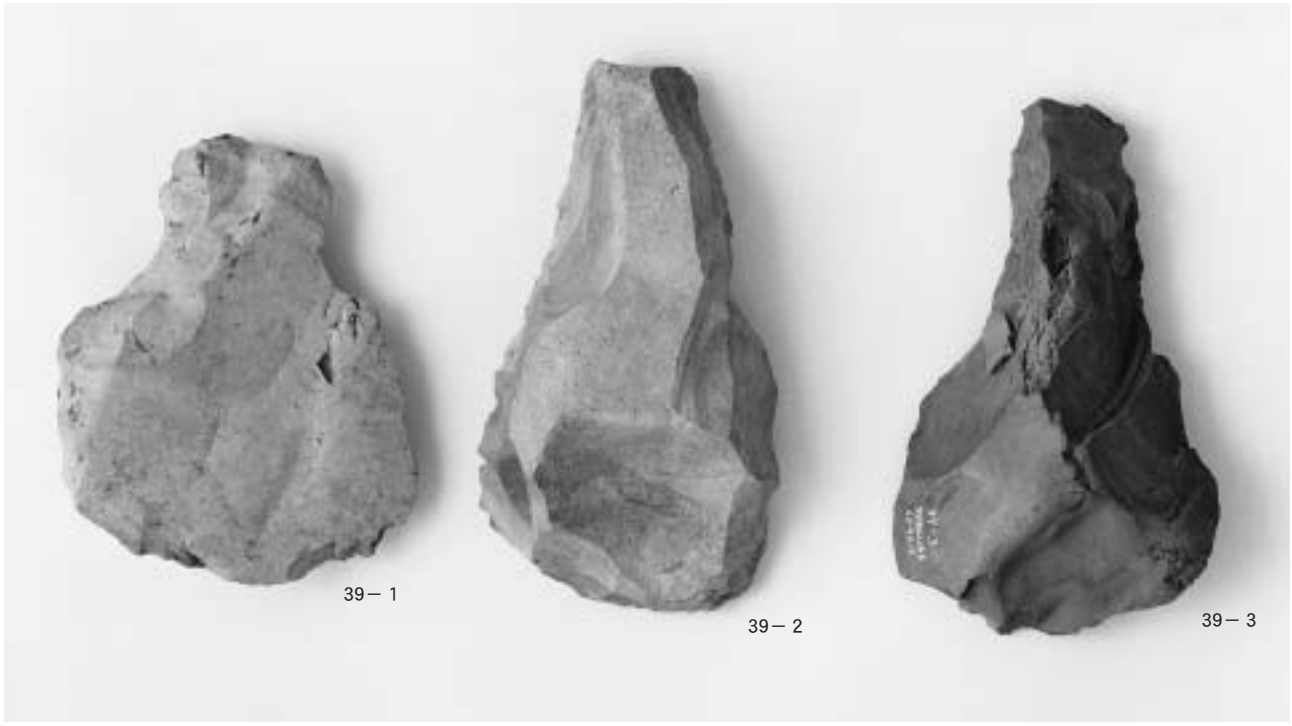
第19、21、22、23図他　掲載遺物

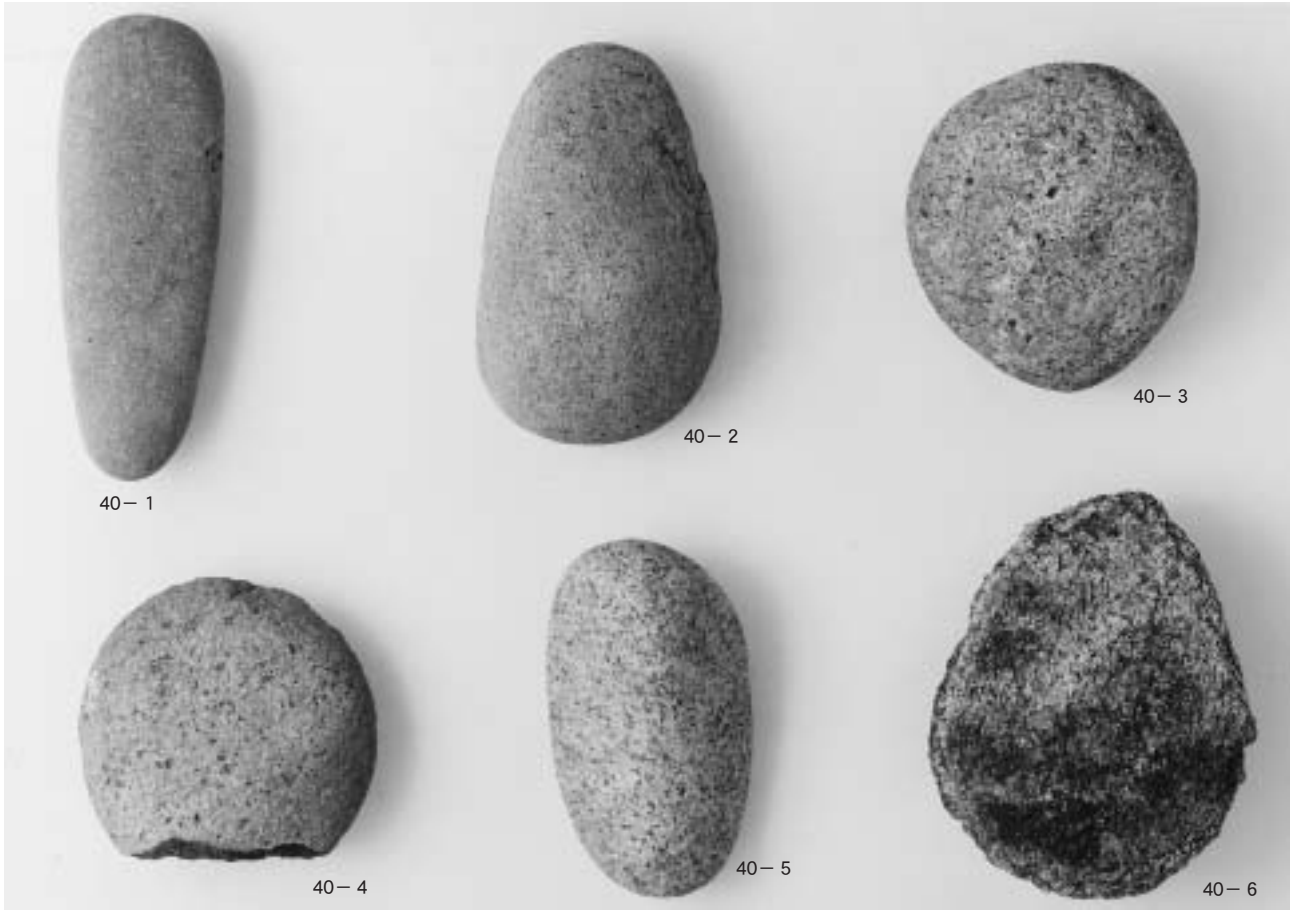
図版80





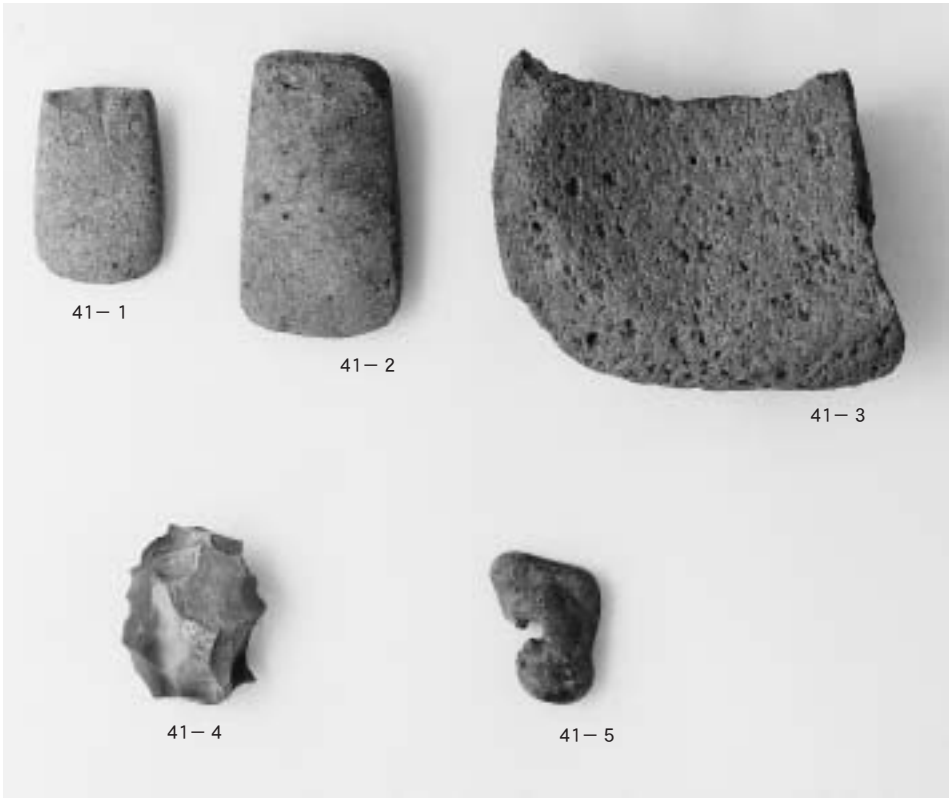
第37、38図（石器）掲載遺物

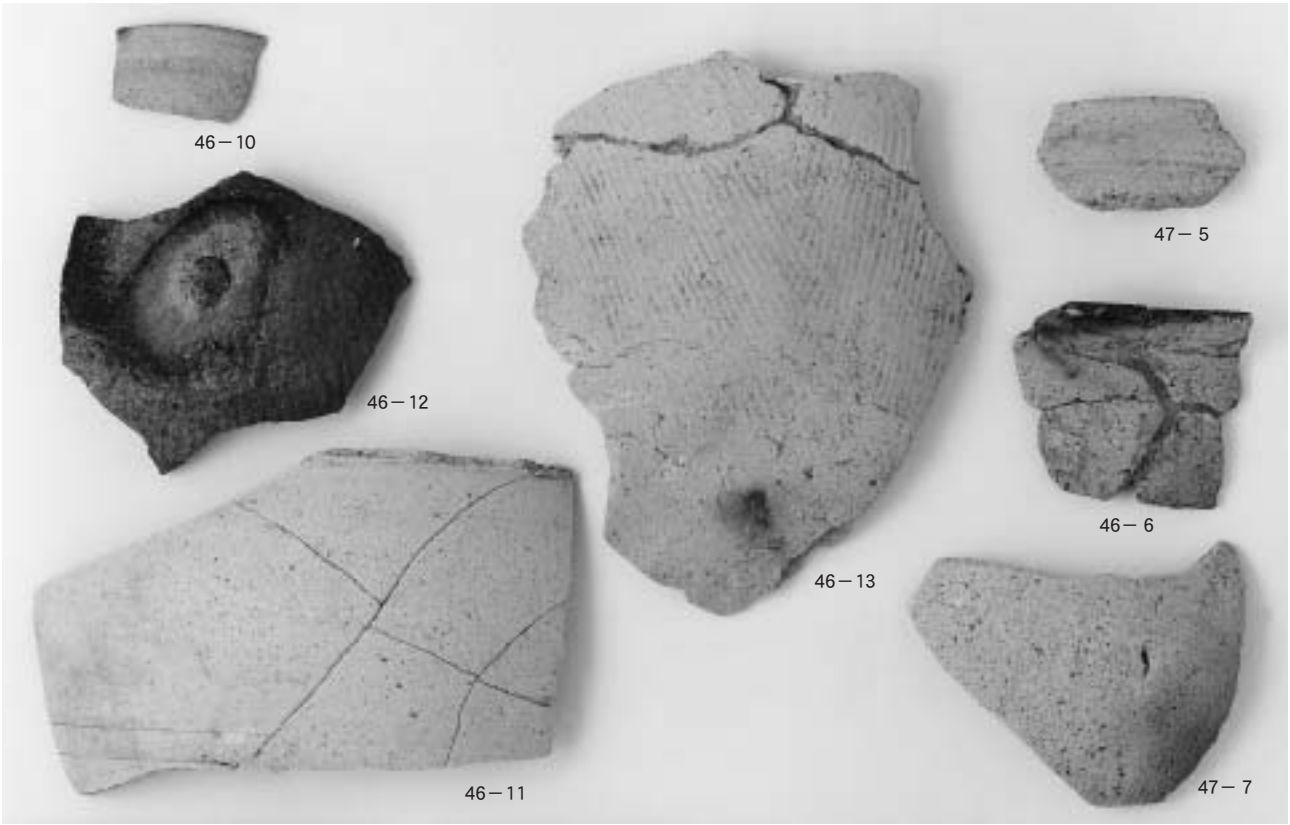




第39、40図（石器）掲載遺物

図版82





第41、46、47図　掲載遺物

46－1

46－2

43－1

46－3

46－4

46－6

46－7

46－8

46－9

46－5

47－1

47－2

47－3

47－4

49－3

49－1

49－2

49－4

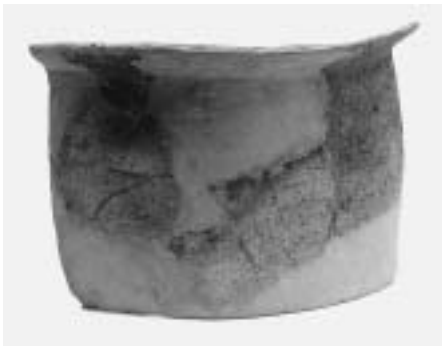
ST9001、9002　出土遺物

図版84

49－5

49－6

49－11



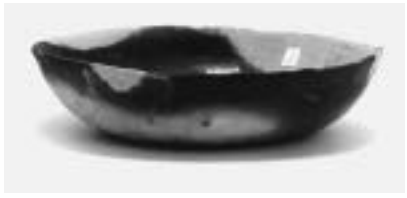
49－10

51－1

51－3

51－11

49－12



51－7

52－1

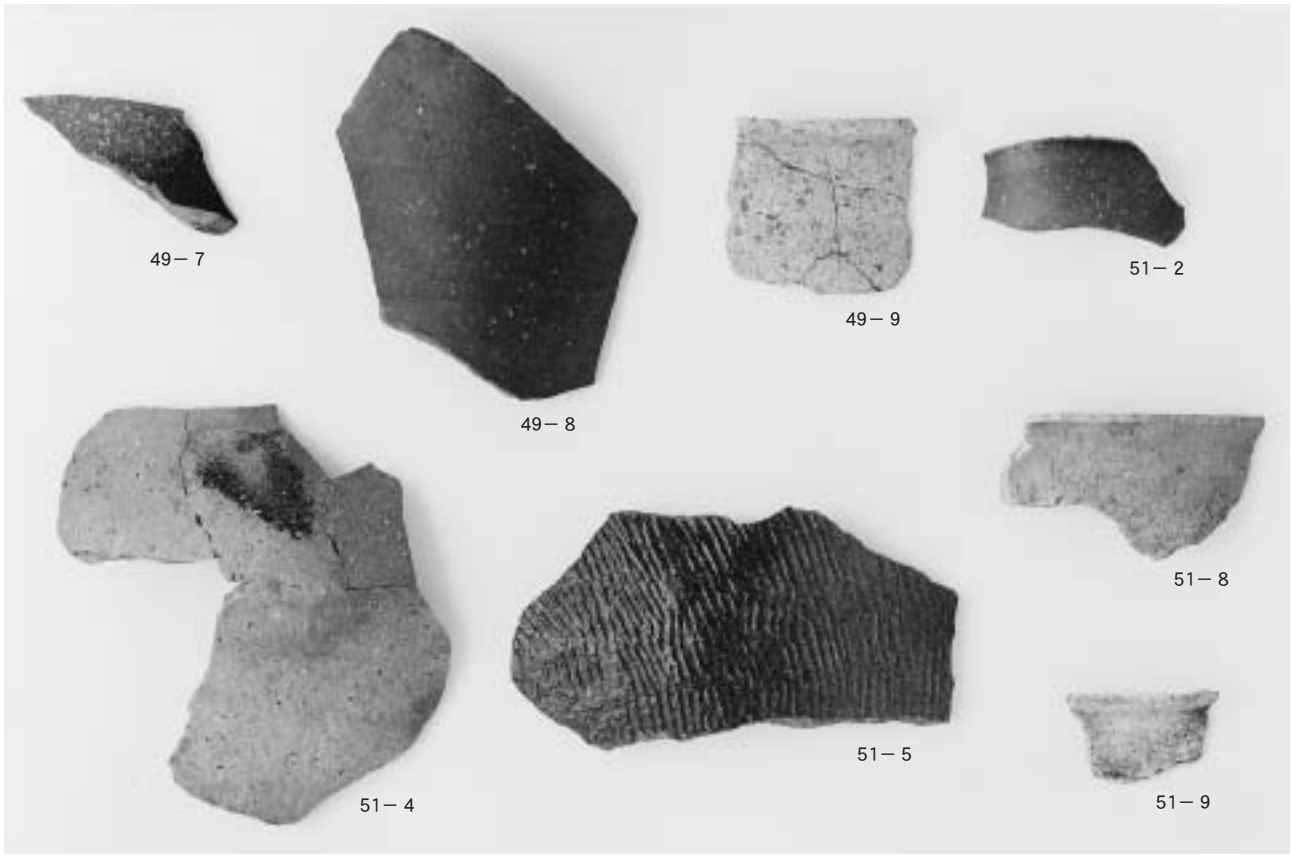
53－1

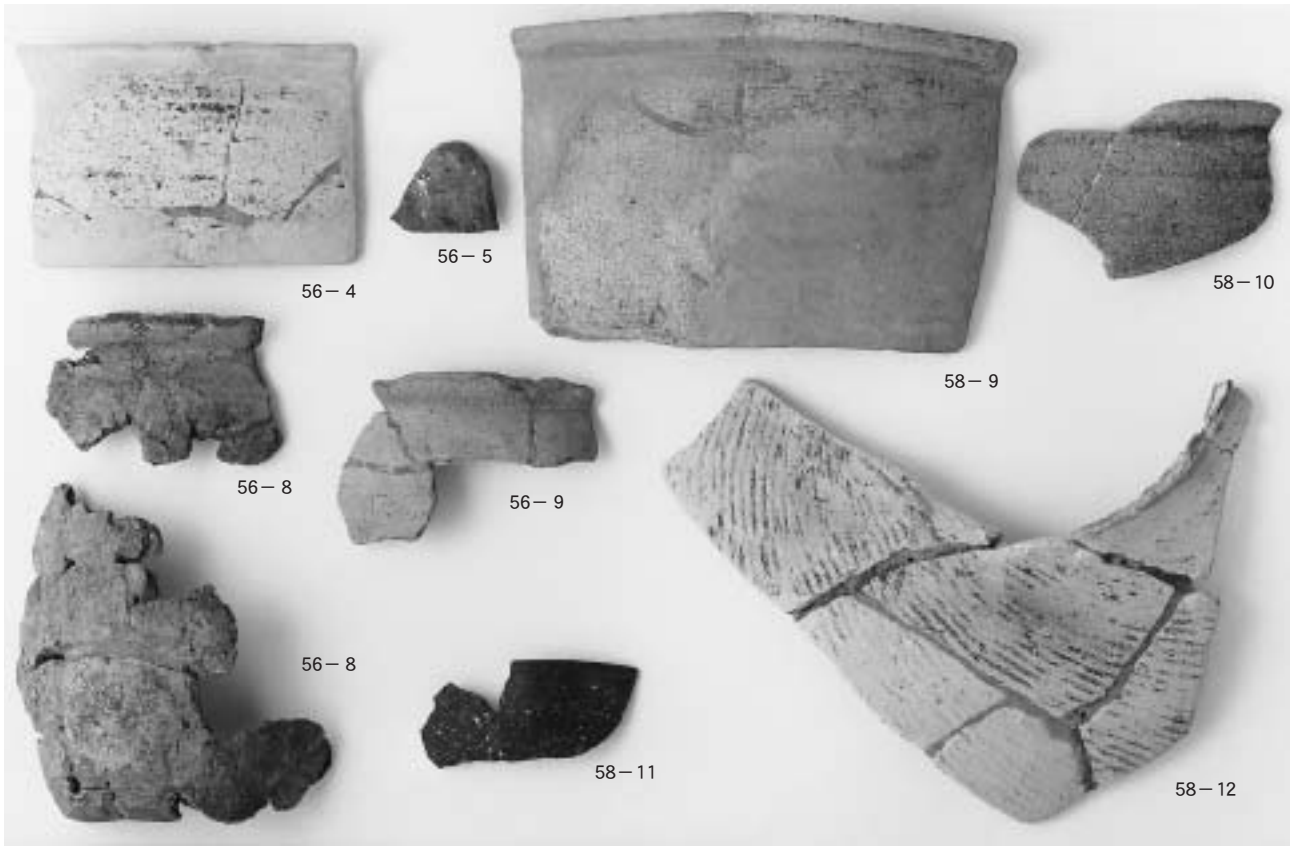
52－2

51－6

51－10

ST9002、9003、9004　出土遺物





ST9003、9007、9008　出土遺物

図版86

51－12

56－ 1

56－ 2

56－ 6

56－ 3

56－ 7

56－10

58－ 1

58－ 2

58－ 3

58－ 4

58－ 5

58－6

58－ 7

58－ 8

61－1

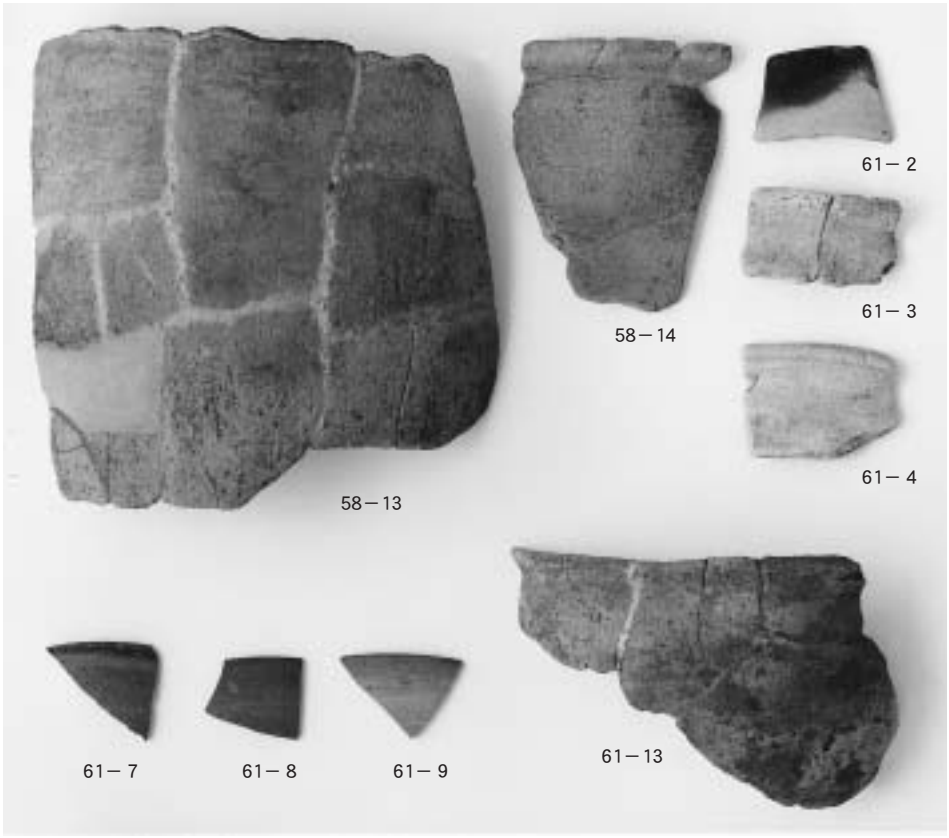
61－6

ST9007、9008、9514　出土遺物

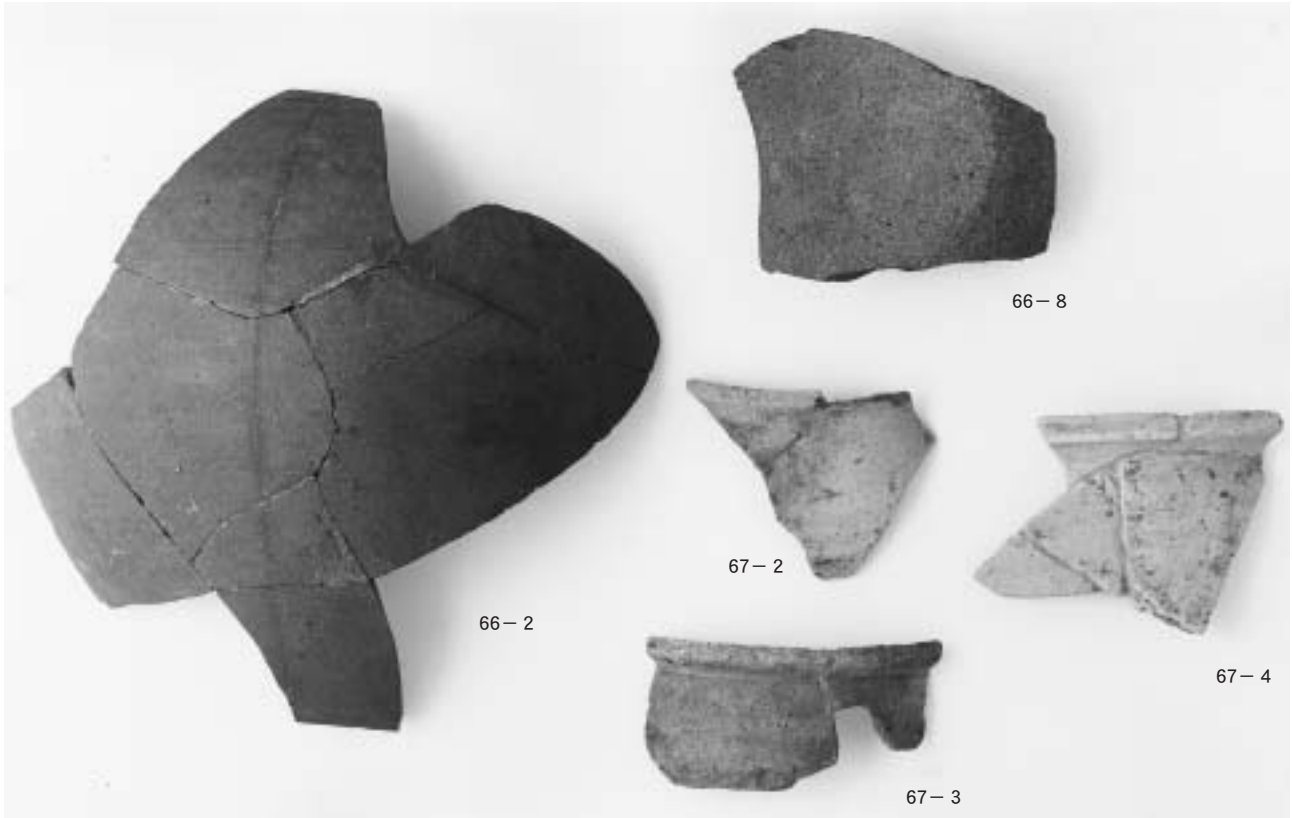
61－5

61－10

61－11



61－2
61－3
58－14
61－4
58－13
61－7
61－8
61－9
61－13



66－8
66－2
67－2
67－4
67－3

ST9011、9514、9525　出土遺物

図版88

61－12

61－13

64－ 1

64－ 2

64－ 3

64－ 4

64－ 7

64－ 5

64－ 6

64－ 8

64－ 9

64－10

64－13

64－11

64－12

64－14

64－15

64－16

ST9514、9525　出土遺物

65－1

65－2

65－3

65－4

65－6

65－7

65－11

65－5

65－8

65－9

65－10

65－13

65－12

65－14

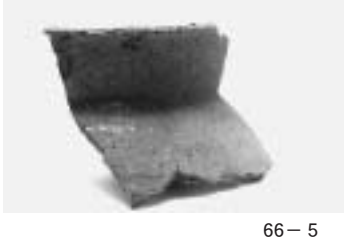
65－15

66－1

65－17

65－16

66－3


66－5

66－6

図版90

66－4

66－7

67－8

67－1

67－5

ST9525　出土遺物

67－6

67－9

69－1

69－5

69－7

69－6

69－8

67－7

69－11

69－12

69－28

69－14

69－15

69－23

69－24

69－26

69－25

71－5

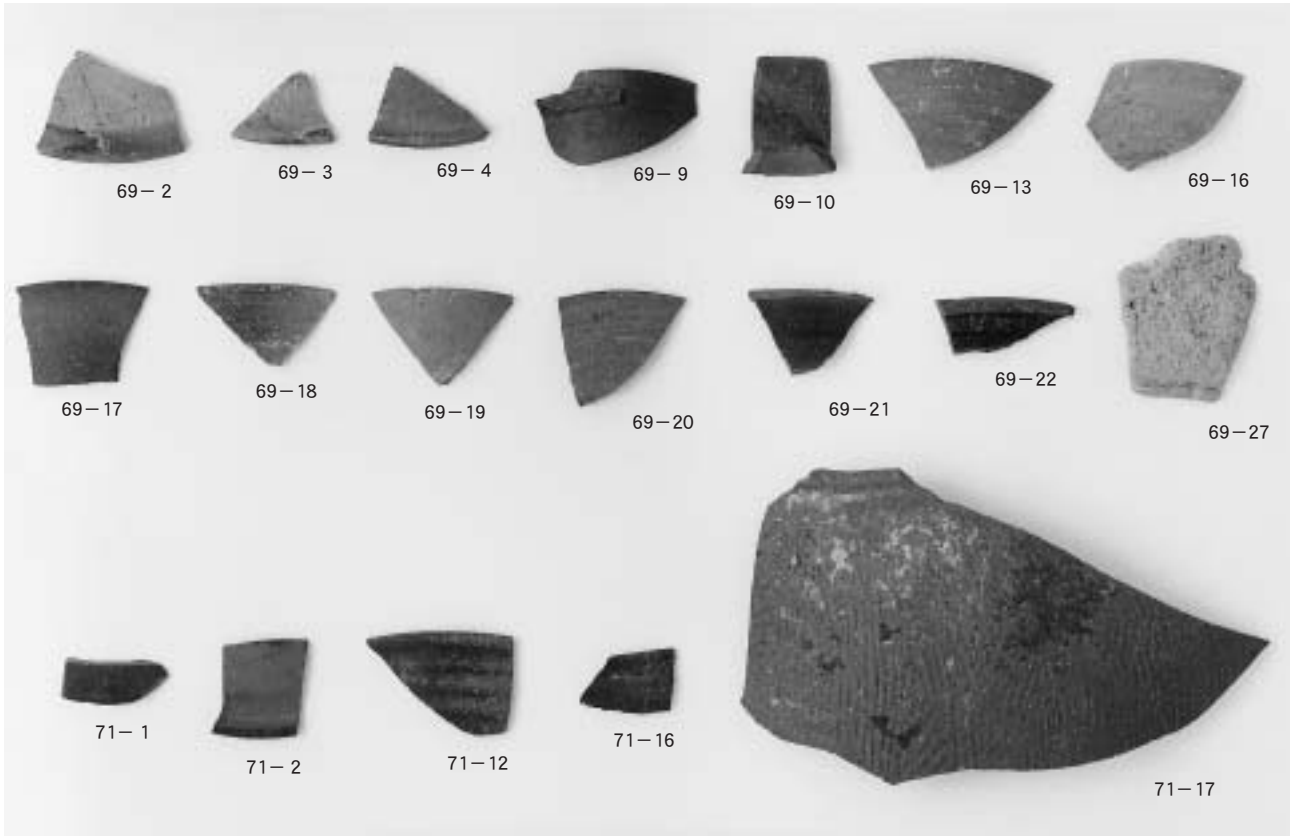
71－7

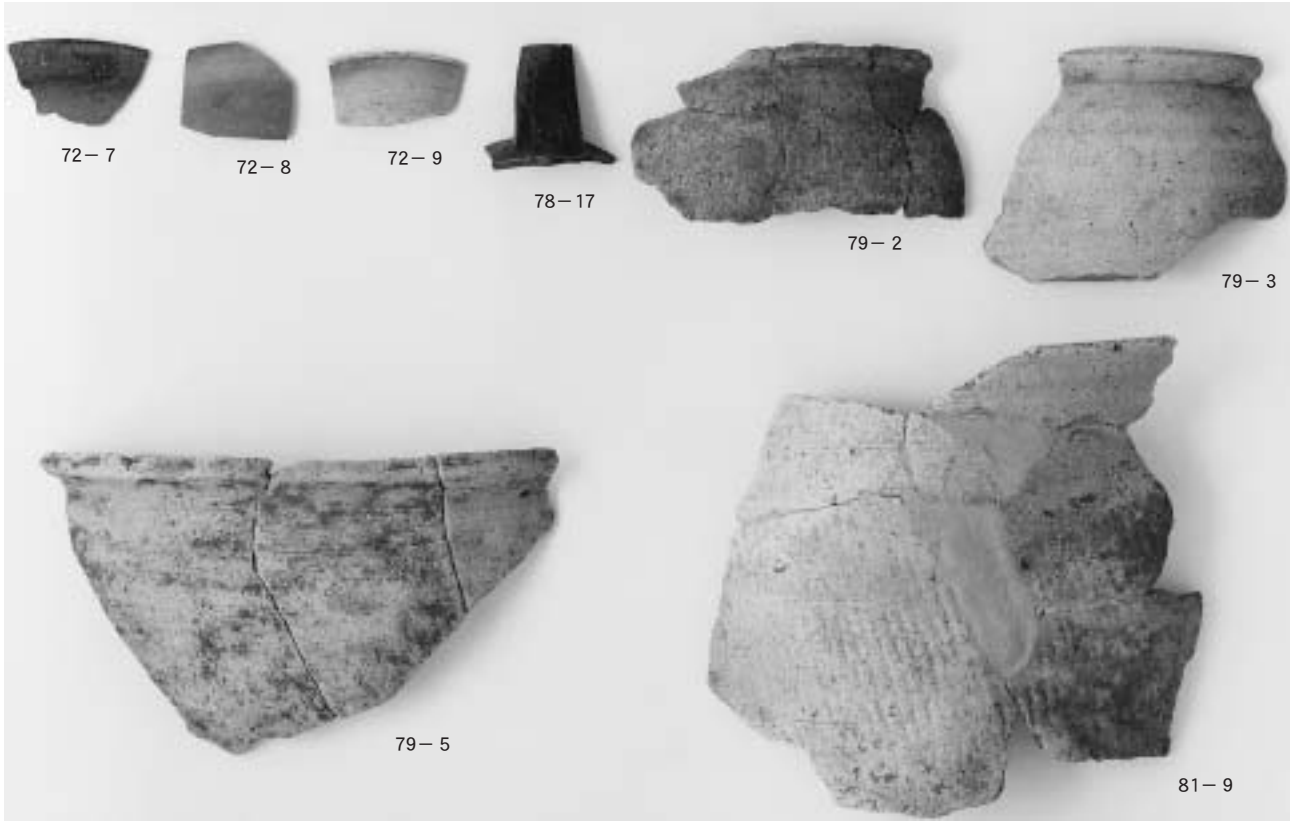
71－15

71－14

ST9525、9559、9590　出土遺物

図版92





ST9559、9590、9816　出土遺物

70－1

71－3

71－4

71－6

71－8

71－9

71－10

71－11

71－13

72－4

72－5

72－6

72－1

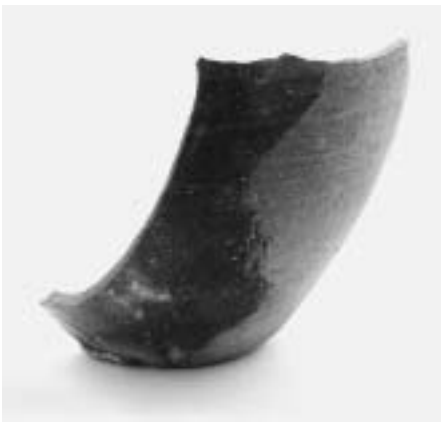
72－2

72－3

72－10

75－1

75－2


72－11

75－3

75－4

75－5

75－6

75－7

図版94

75－8

75－9

75－10

75－11

75－12

75－13

75－14

75－15

75－16

78－1

78－2

78－3

75－17

78－4

76－3

76－1

76－4

78－5

ST9607、9728　出土遺物

78－6

78－7

78－8

78－10

78－11

78－9

79－4

81－1

78－12

78－13

81－6

78－15

81－3

78－16

79－1

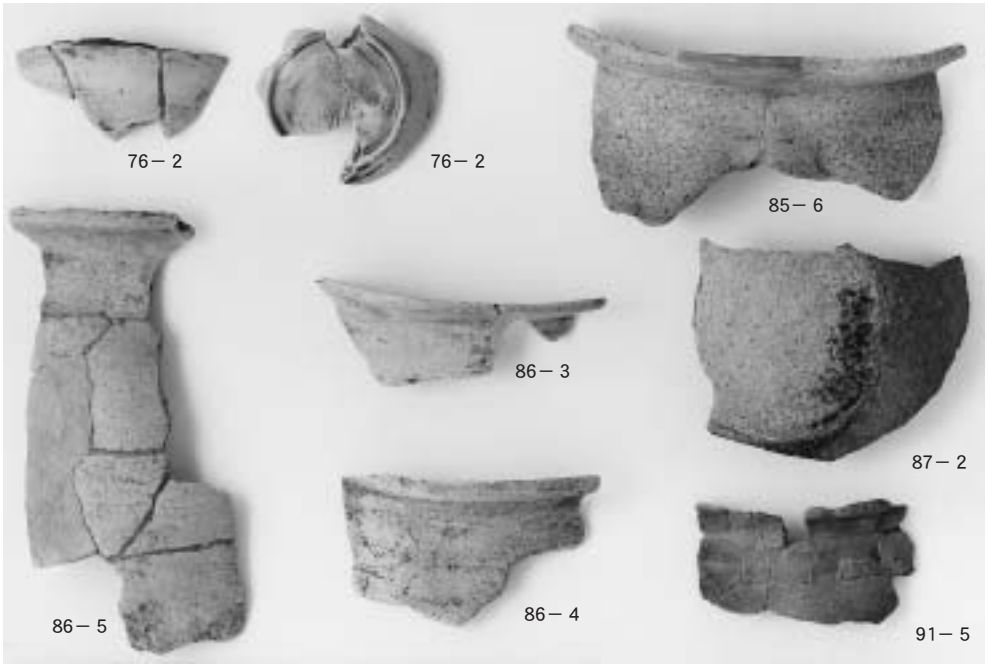
81－2

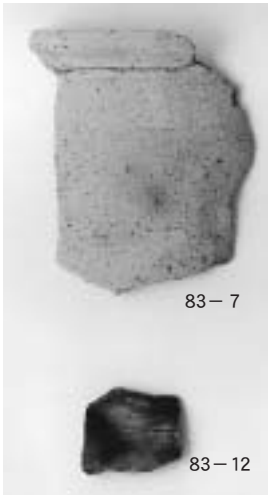
81－5

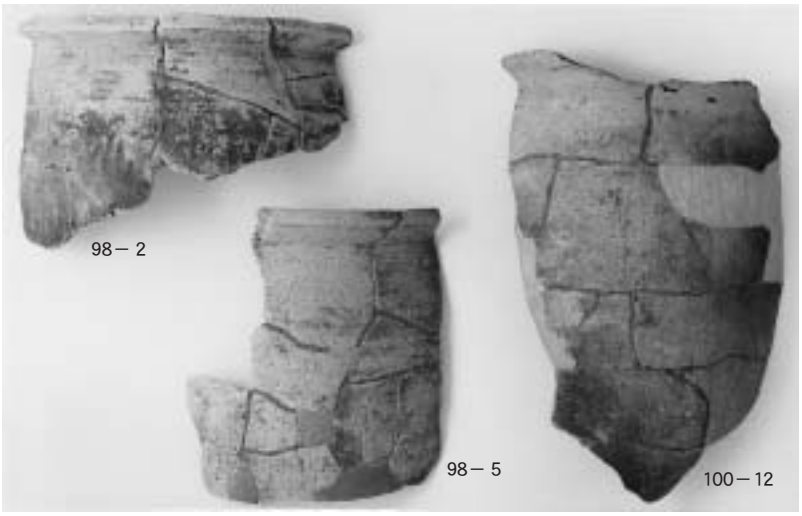
81－7

ST9728、9816　出土遺物

図版96

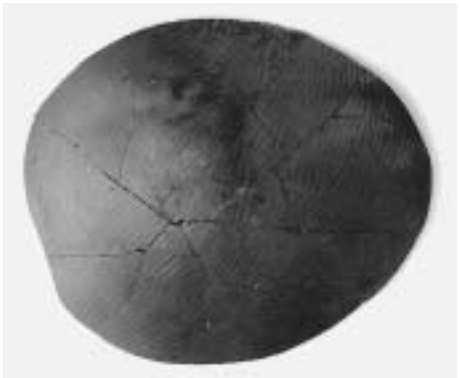






81－8

76－5


96－8

172－9

ST9829、9846、9860他　出土遺物

83－ 1

83－ 2

83－ 3

83－ 4

83－ 5

83－11

81－ 4

83－ 9

83－10

83－ 8

図版98

85－1

85－2

85－3

85－4

86－2

85－5

85－7

85－9

86－1

85－8

86－6

88－1

87－1

89－1

ST9826、9829、9834　出土遺物

91－1

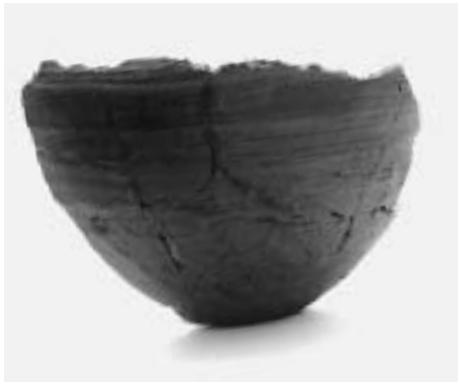
91－2

91－3

91－6

91－7

91－8


92－1

92－2

91－4

96－1

96－2

96－5

96－3

96－4

97－5

97－7

96－6

96－7

ST9846、9847、9860　出土遺物

図版100

97－1

97－6

97－4

100－1

100－2

97－2

98－3

ST9860、SD9866　出土遺物

97－3

98－4

100－7

100－9

100－14

100－4

100－5

100－3

100－6

100－8

98－1

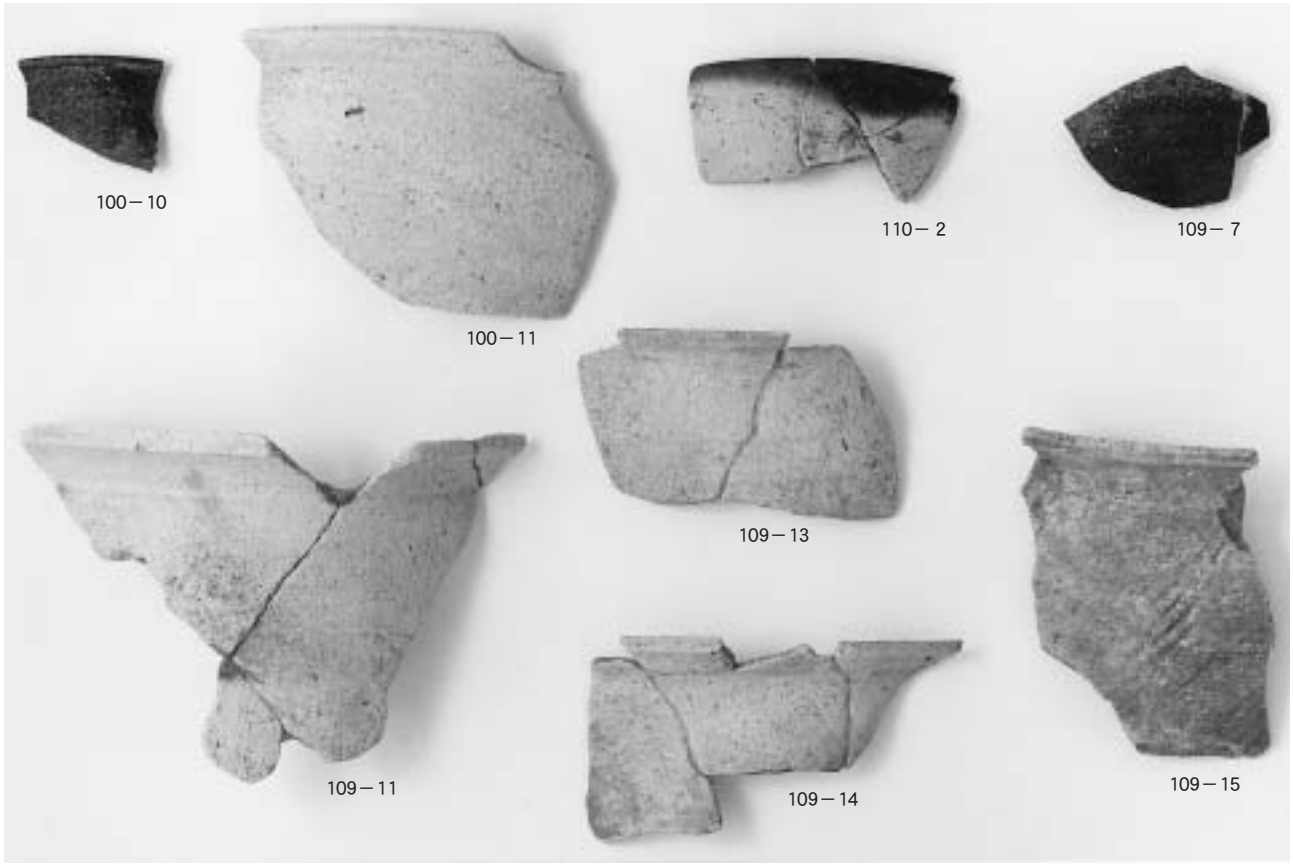
102－1

102－2

98－6

ST9860、9861、SD9866　出土遺物

図版102



SD9866、9869、9874　出土遺物

100－13

102－5

102－6

102－3

102－4

102－7

102－10

102－8

102－9

SD9866、ST9861　出土遺物

図版104

104－1

104－2

104－3

104－4

106－1

106－2

104－6

104－7

104－5

106－8

ST9867、9868　出土遺物

106－3

106－4

106－5

109－1

106－9

106－6

109－2

109－3

109－4

109－5

106－7

106－10

ST9868、9869　出土遺物

図版106

107－ 1

107－ 2

109－ 6

109－ 8

109－ 9

107－ 3

110－ 1

109－10

109－12

111－ 1

ST9868、9869、9870　出土遺物

111－2

115－1

115－4

116－1

116－2

115－2

116－6

116－3

115－3

115－5

ST9871、9874　出土遺物

図版108

116－4

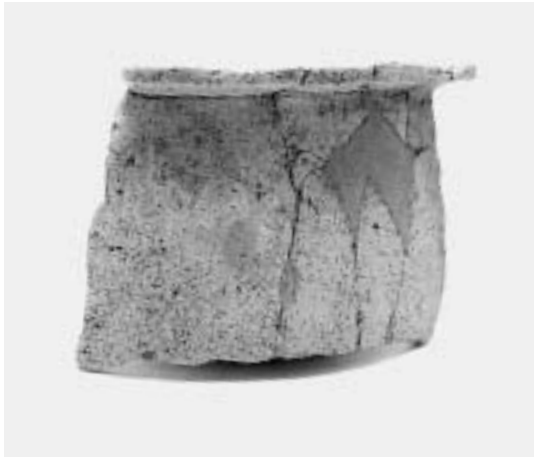
116－5

116－9

117－1

117－2

116－11



116－12

116－8

116－7

116－14

ST9874、9875　出土遺物

117－3

117－4

117－5

117－8

117－9

117－10

117－6

119－1

119－2

119－3

119－4

119－5

ST9875、9872　出土遺物

図版110

119－6

121－1

121－2

121－4

121－5

121－3

121－6

121－7

122－1

121－11

121－8

122－2

123－1

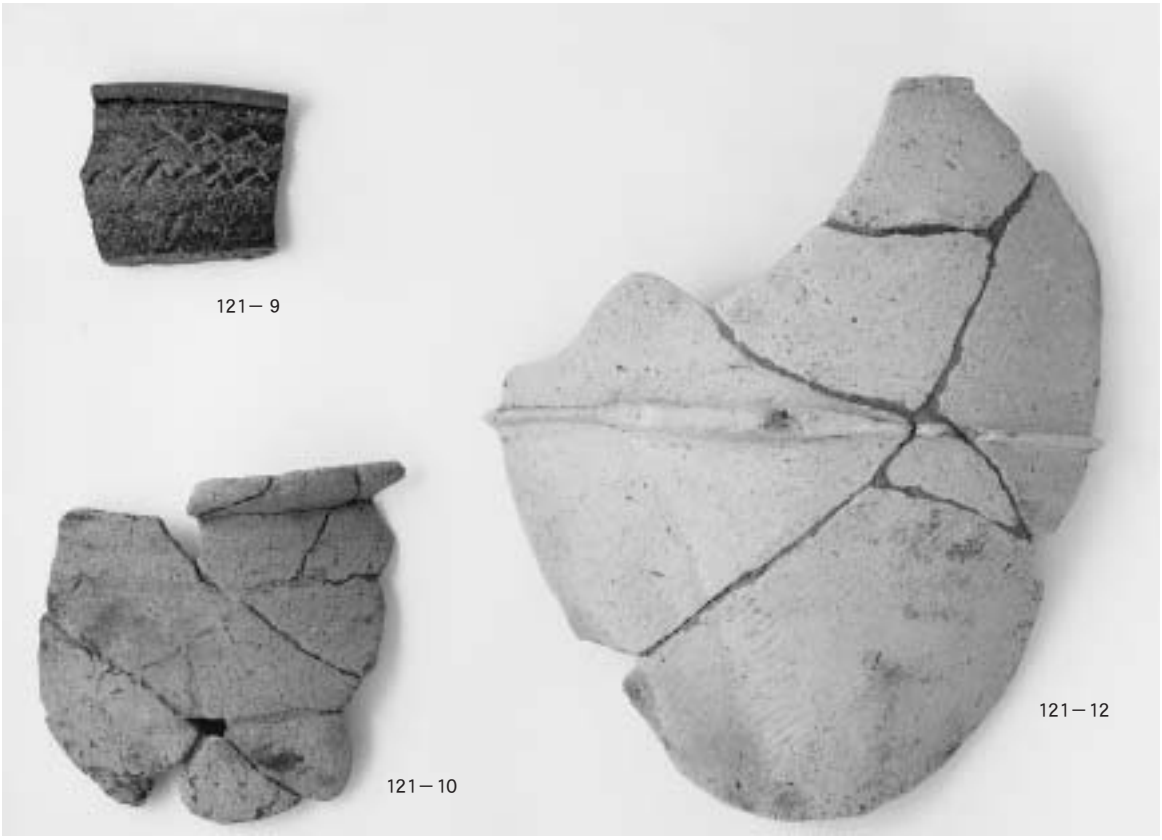
123－2

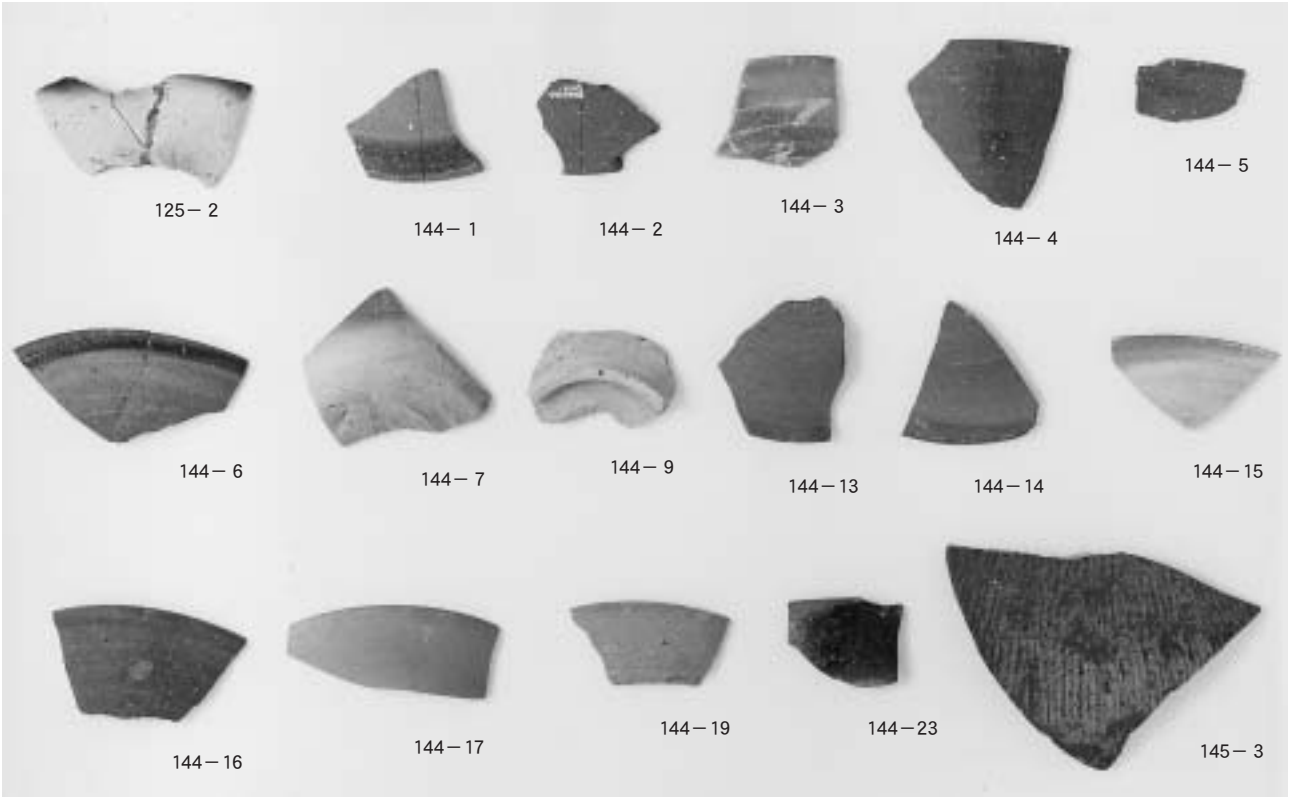
123－3

125－3

125－1

ST9872、9873、9895　出土遺物





ST9873、9962　柱穴出土遺物

図版112

132－1

132－2

133－1

137－1

139－1

141－1

144－10

144－12

144－18

144－11

144－21

144－22

144－25

144－24

144－26

144－11部分「円」

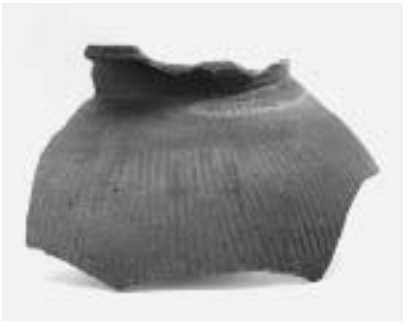
144－20

145－1

145－2

144－27

SB677、9515　柱穴出土遺物


153－1

153－2

153－3

153－4

153－5

153－6

154－1

154－2

154－3

154－4

156－1

156－2

156－4

156－5

156－6

156－3

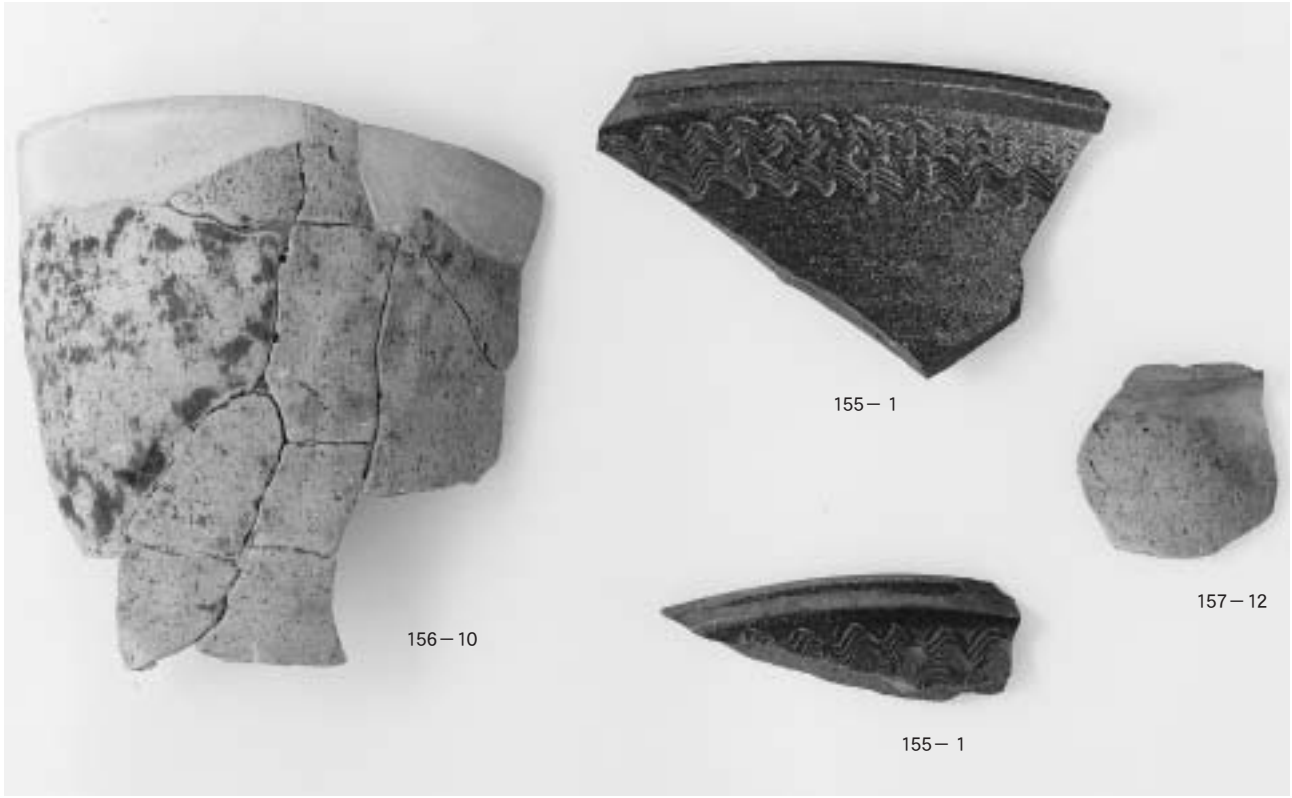
156－8

156－9

156－7

SE764、SK647　出土遺物

図版114



SK646、647、652　出土遺物

157－ 1

157－ 2

157－ 3

157－ 4

157－ 5

157－ 6

157－ 7

157－ 8

157－ 9

157－10

157－11

157－13

157－14

158－ 2

158－ 3

158－ 4

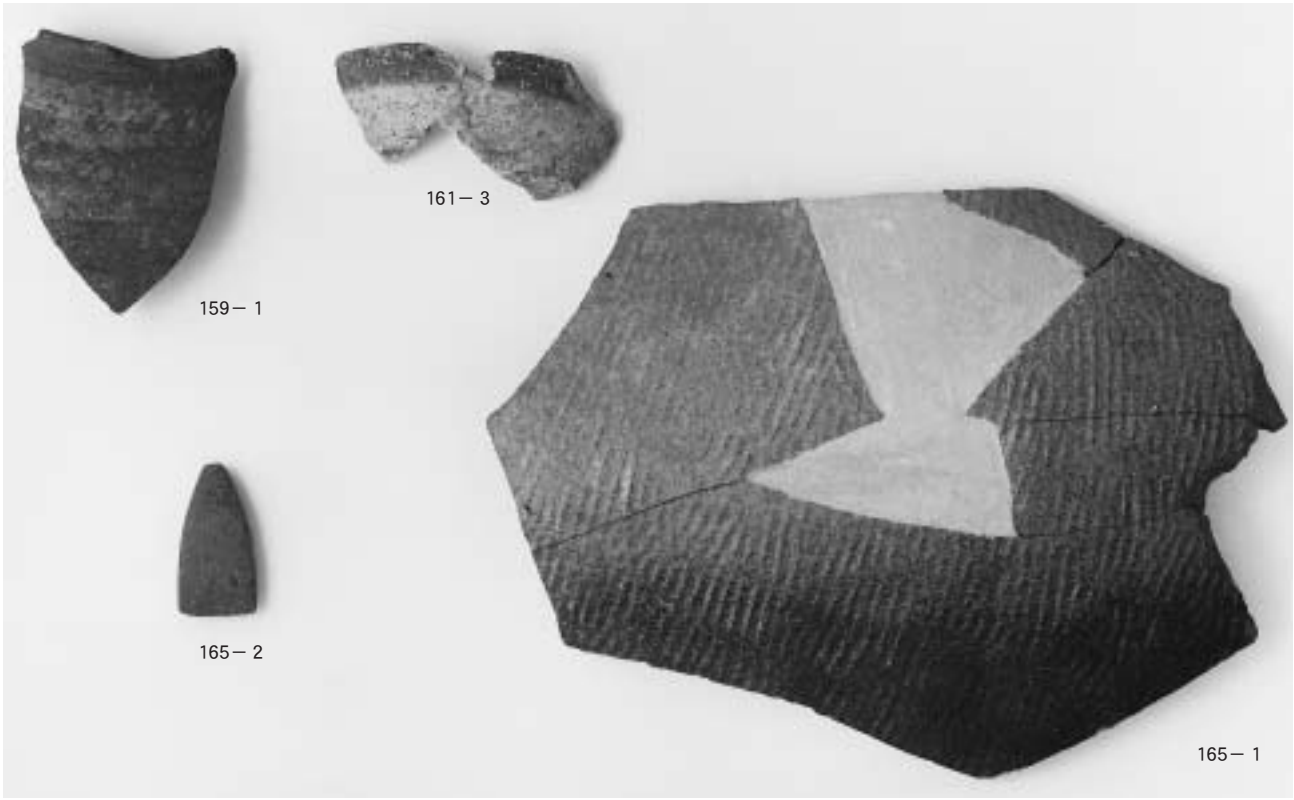
158－ 5

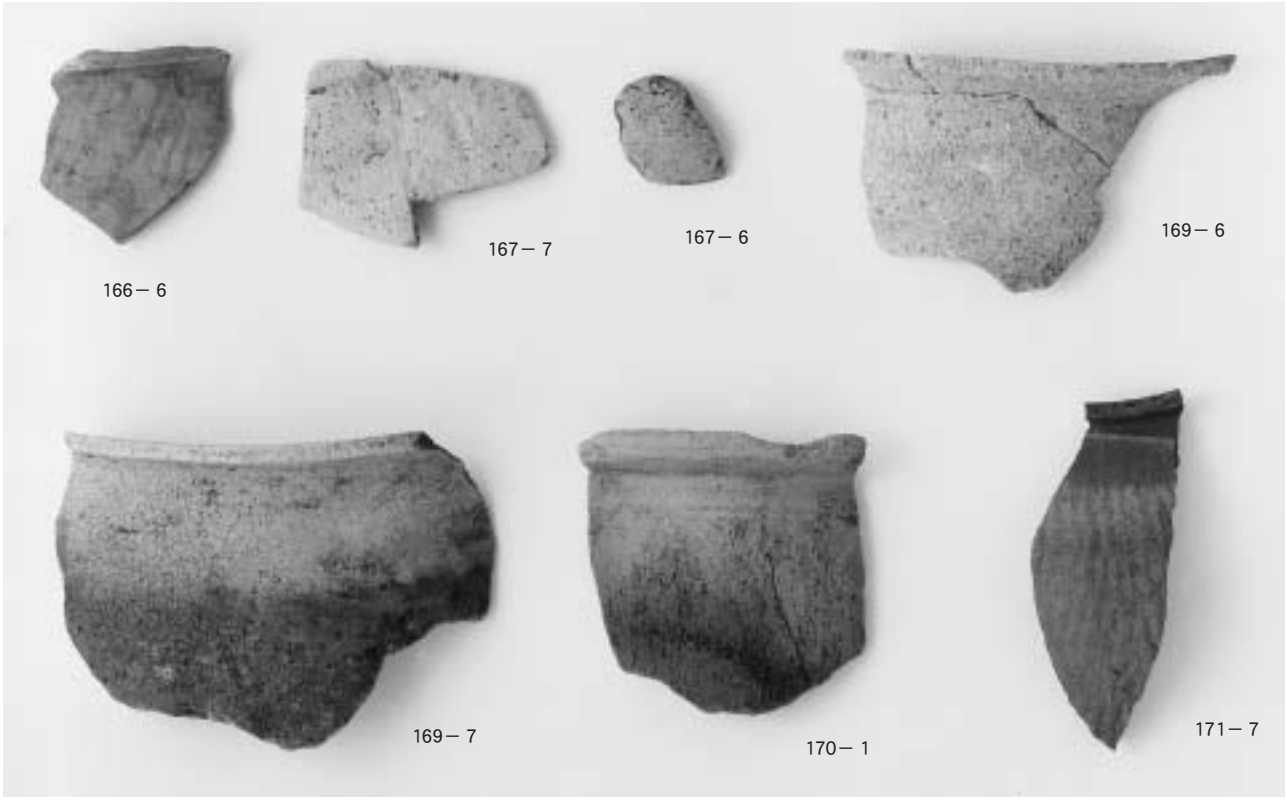
160－ 1

158－ 1

SK647、652、9020　柱穴出土遺物

図版116





SK9015、9613、9876　出土遺物

160－2

160－3

165－3

161－6

161－4

161－7

161－8

161－9

161－1

161－2

161－5

164－1

165－4

159－2

SK9015、9020、9324　出土遺物

図版118

166－1

166－2

166－3

166－4

166－5

167－5

167－1

167－2

167－3

167－4

168－3

168－1

166－7

168－4　168－4

SK9820、9876　出土遺物

168－7

168－2

168－5

168－8

168－6

168－9

168－10

168－12

168－11

169－1

169－2

169－8

169－3

169－5

169－4

169－9

SK9876　出土遺物

図版120

171－1

171－4

169－10

171－2

171－5

171－3

172－4

171－9

171－6

172－6

171－10

171－8

171－11

第171図　掲載遺物

172－7

172－11

172－12

172－16

172－8

172－10

172－17

172－14

173－1

173－2

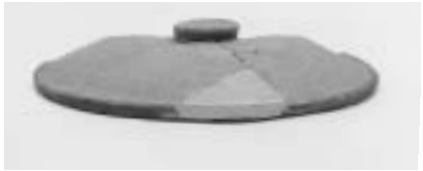
173－3

173－4

173－5

173－6

173－7


173－8

173－9

173－10

173－11

173－17

173－18

173－19

173－22

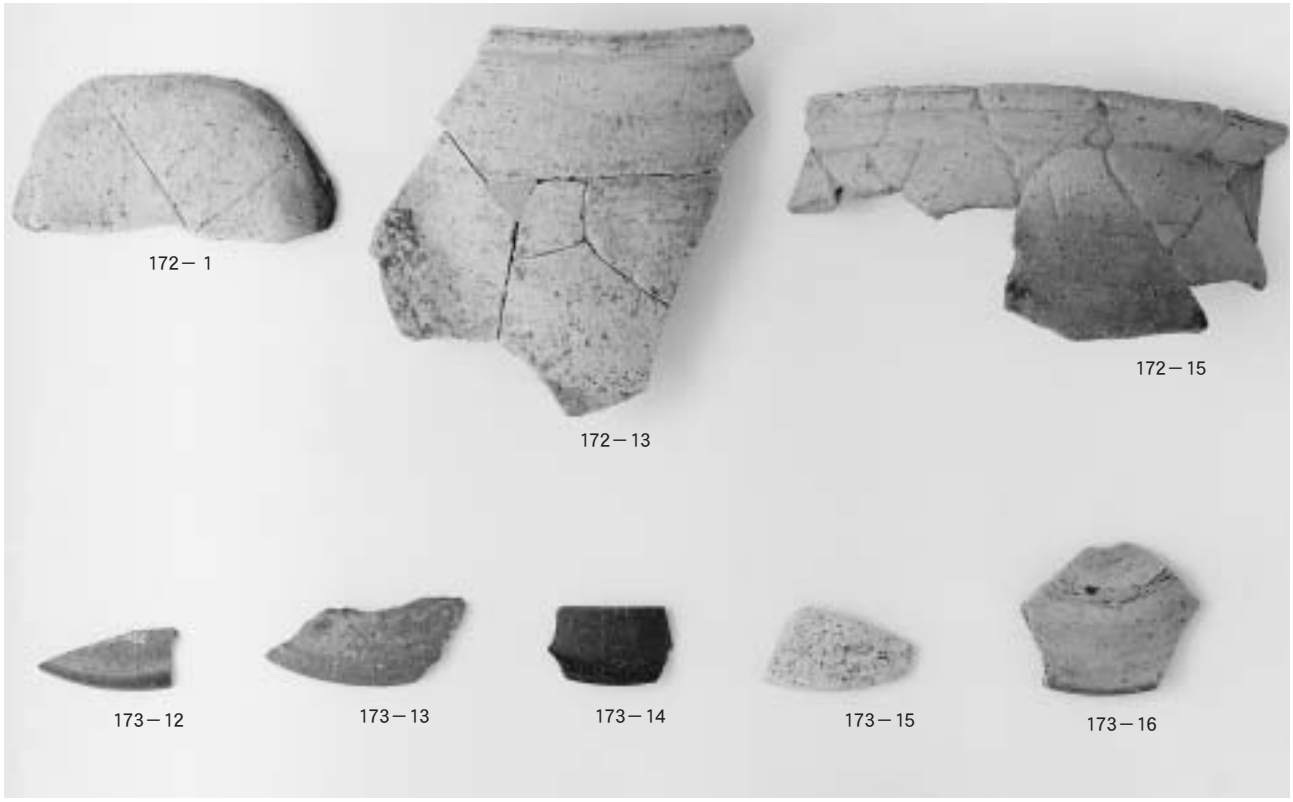
173－23

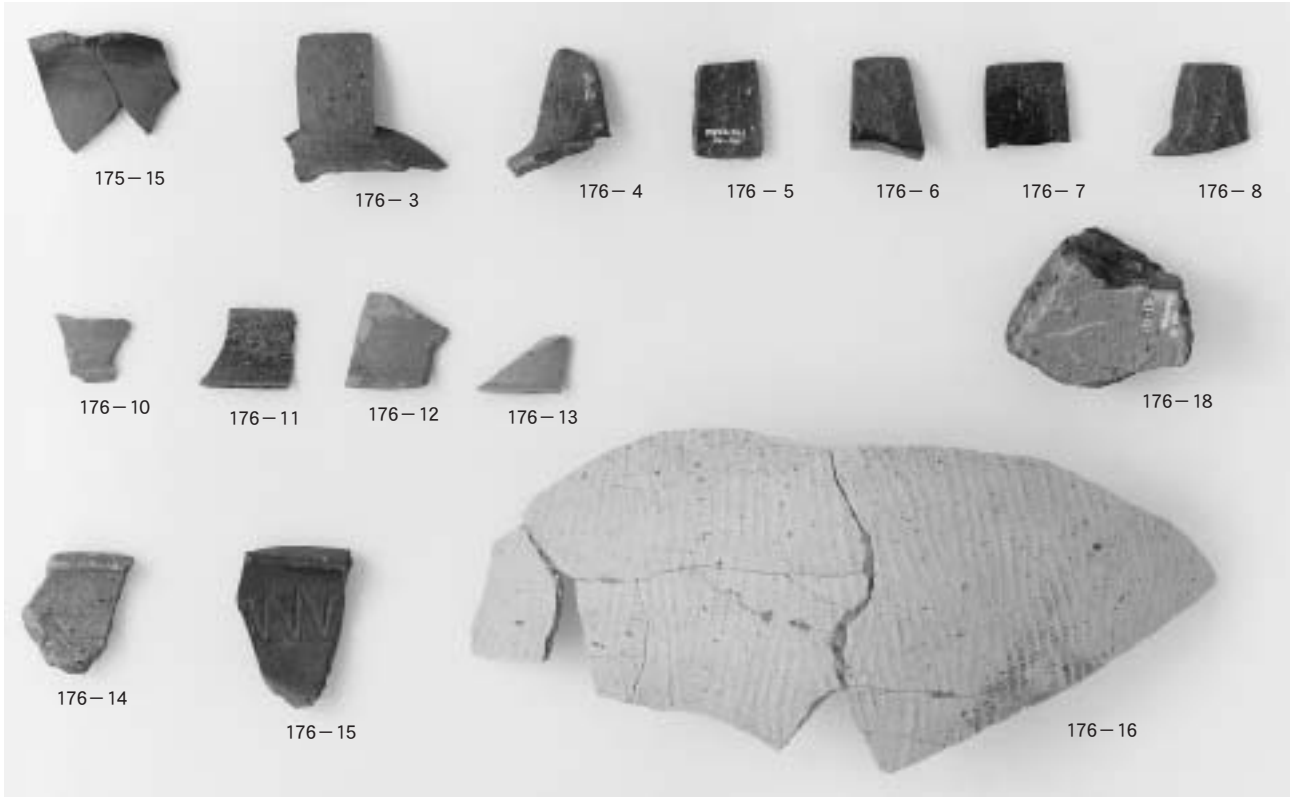
173－20

173－21

第172、173図　掲載遺物

図版122





第172、173、176図　掲載遺物

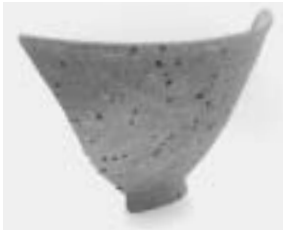
174－1

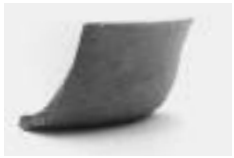
174－2

174－3

174－4

174－5


174－6


174－7

174－8

174－9

174－10

174－11

174－12

174－13

174－14

174－15

175－1

175－2

175－3

175－4

175－5

175－6

175－7

175－8

175－9

175－10

175－11

第174、175図　掲載遺物

図版124

175－12

175－13

175－14

176－9

175－16

176－1

176－2

177－2

177－3

177－1

176－17

177－5

177－6

188－1

177－9

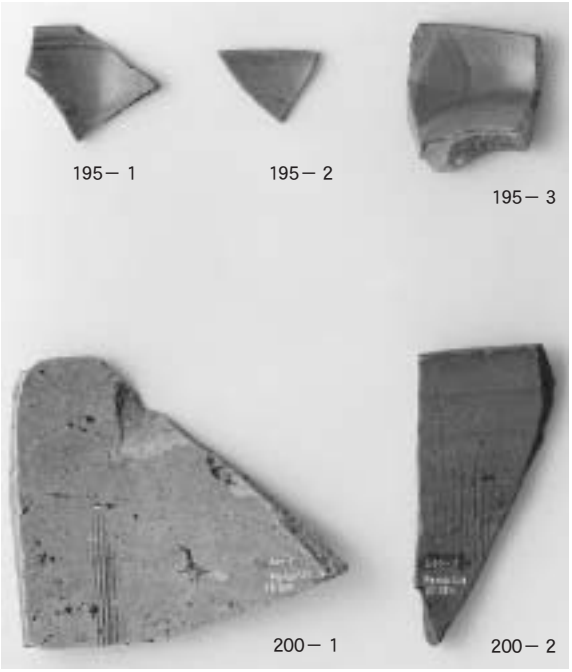
177－7

190－1

188－2

177－10

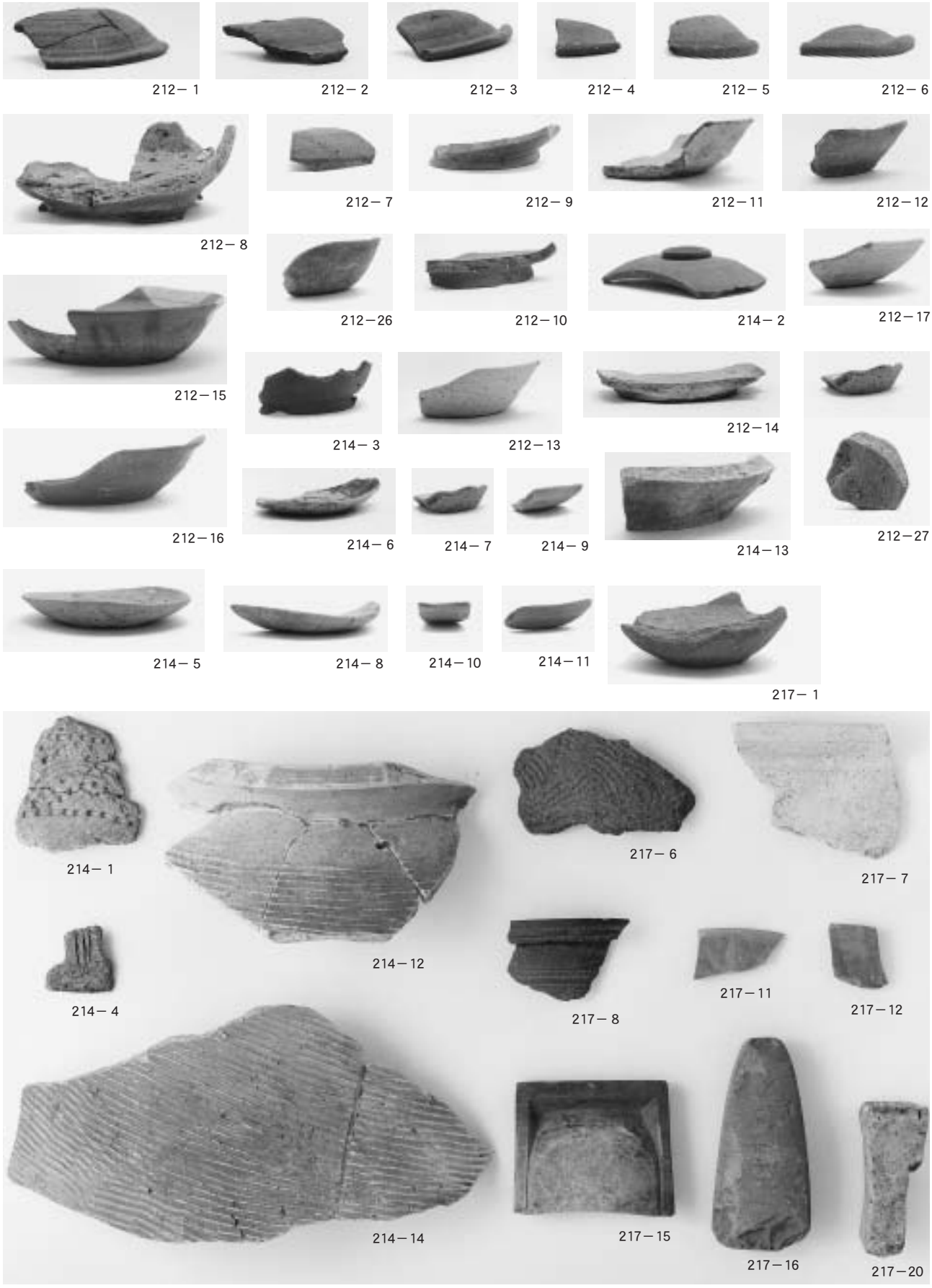
206－1



第175、177、195図　掲載遺物

第177図掲載遺物、SD9581　出土遺物

図版126



SD9580、9581　出土遺物

217－2

217－3

217－4

217－5

217－9

217－13

217－17

217－18

217－19

220－2

217－10

217－14

220－5

220－6

220－7

221－7

220－9

221－1

221－5

221－8

220－10

222－7

221－6

222－1

222－3

222－8

222－4

222－5

222－2

221－10

222－6

222－10

223－1

223－2

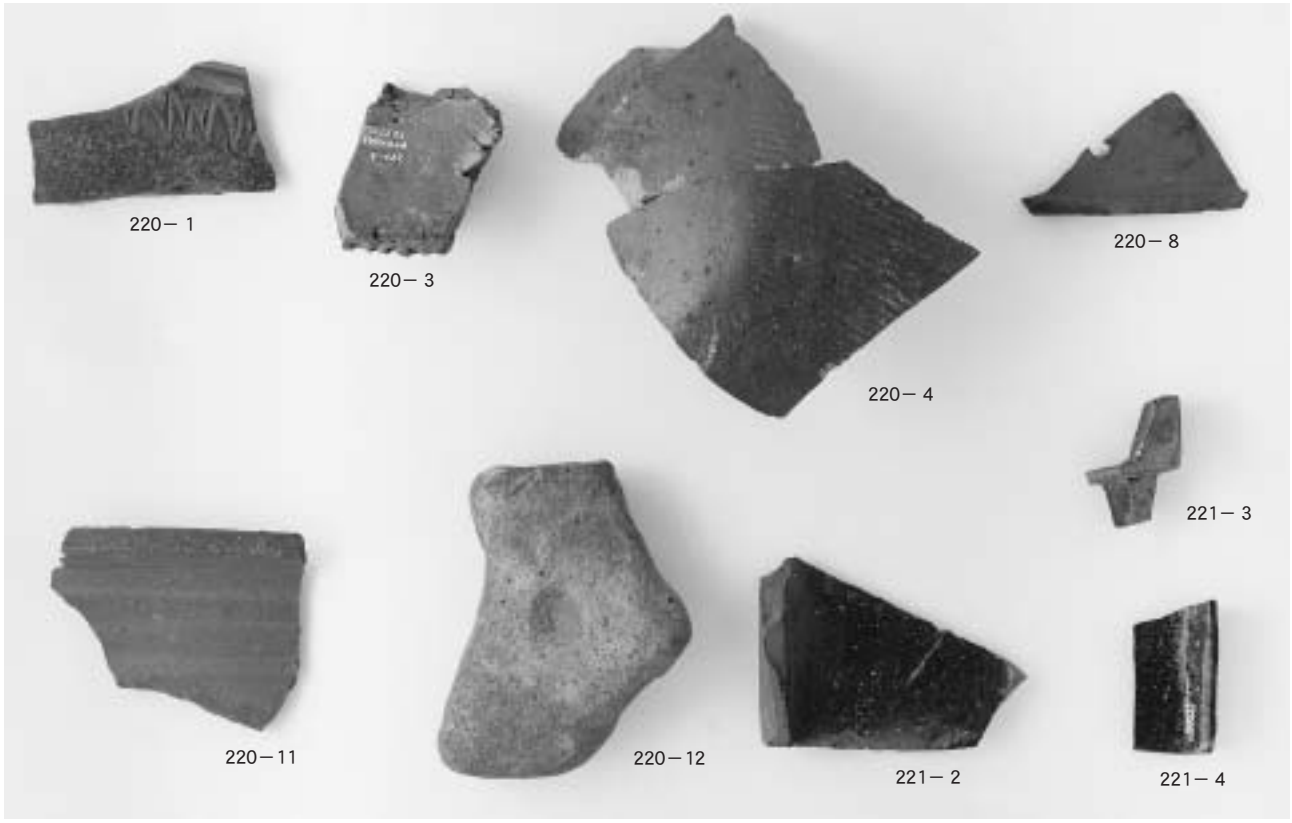
223－3

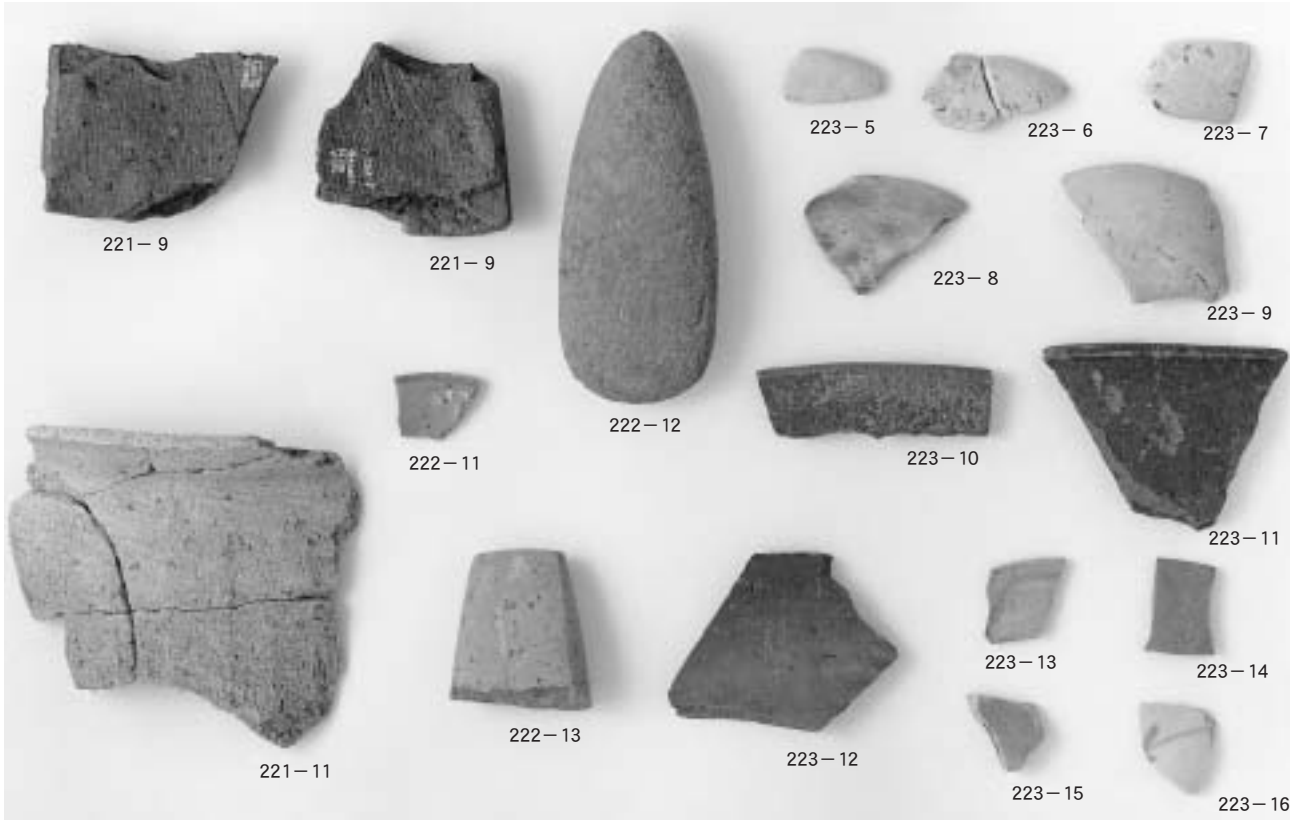
223－4

223－16

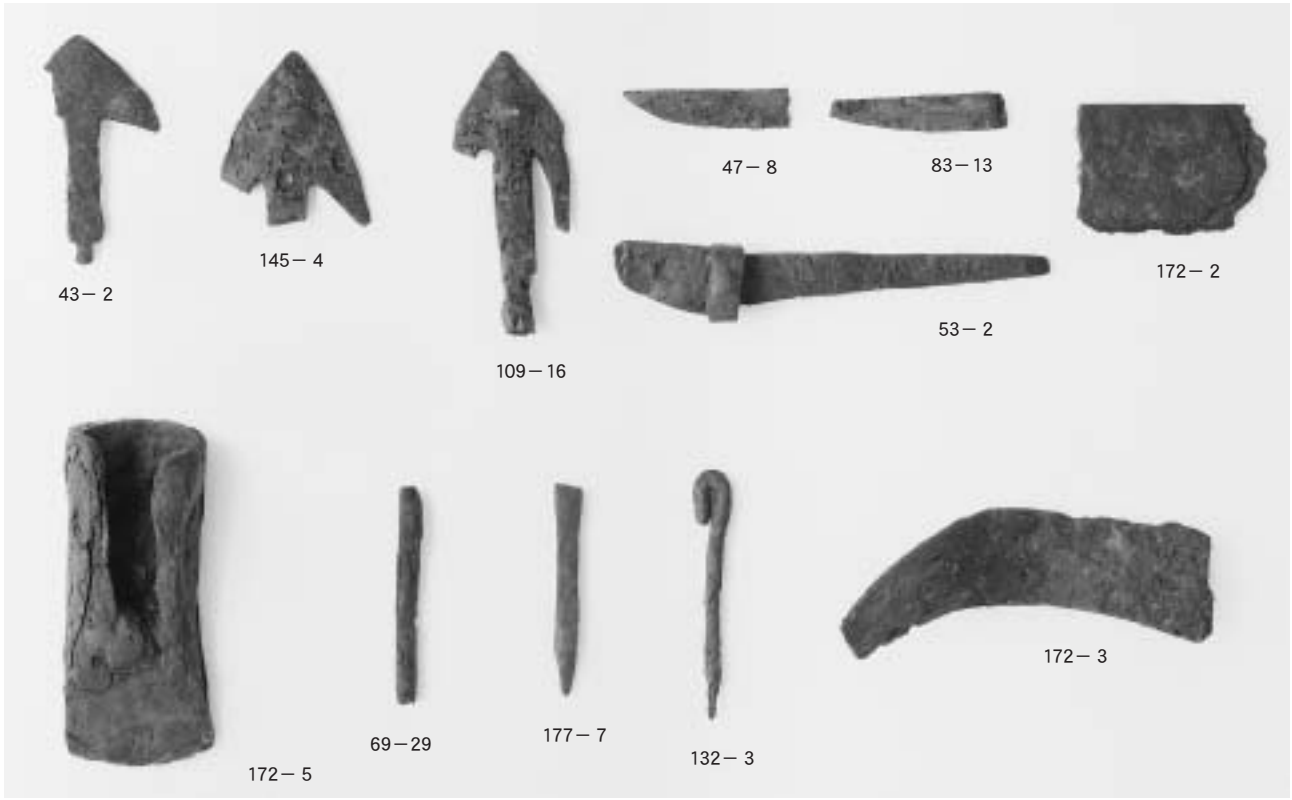
第217、220、222図　掲載遺物

図版128

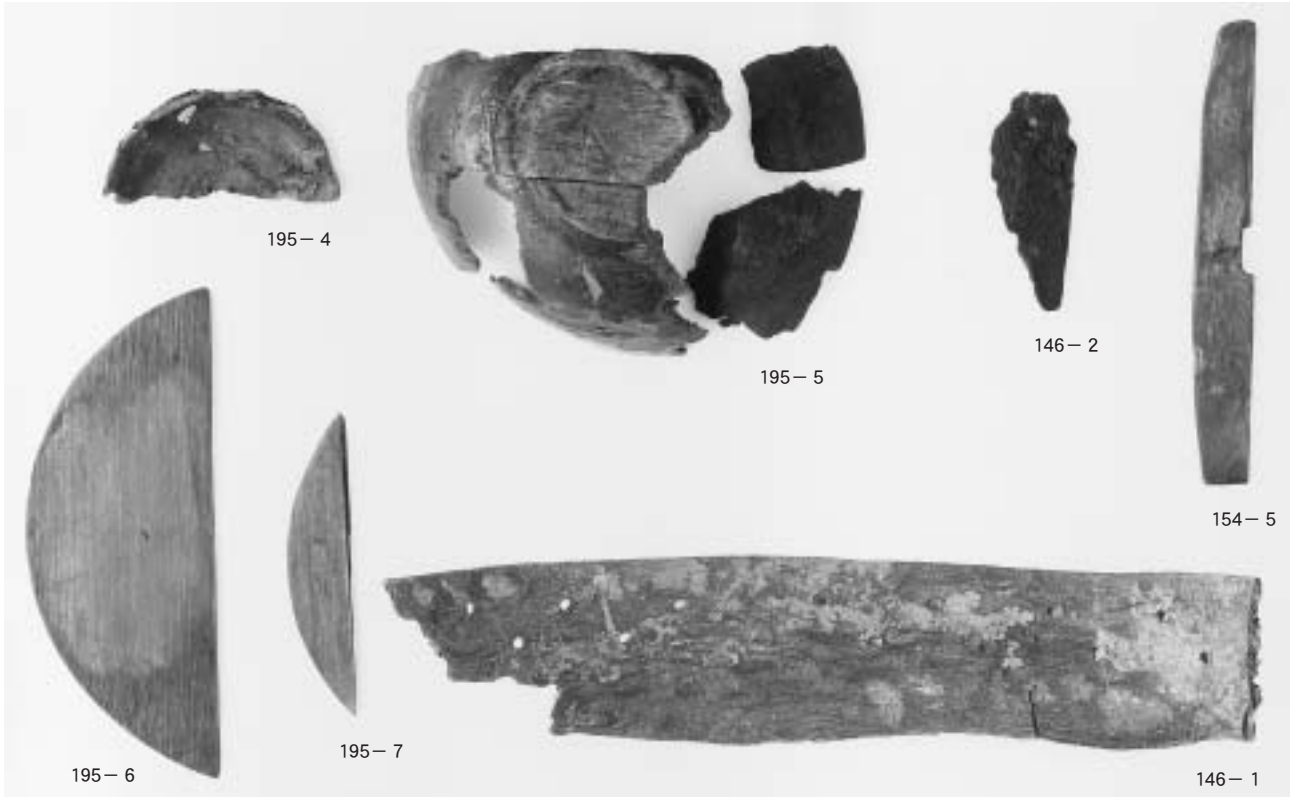




第220、221、222、223図　掲載遺物

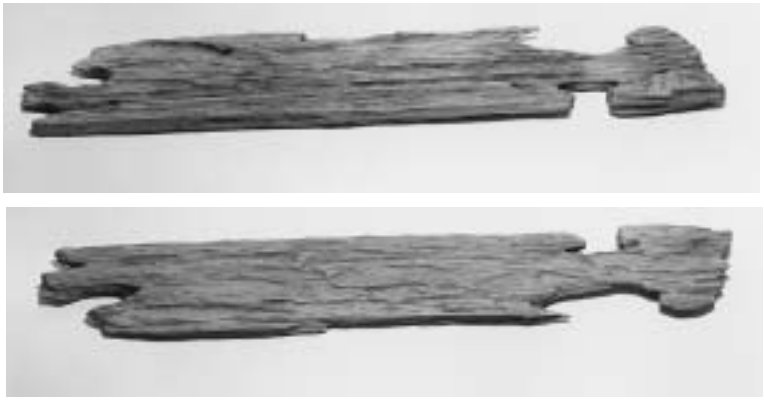

43－2
145－4
109－16
47－8
83－13
53－2
172－2
172－5
69－29
177－7
132－3
172－3

鉄製品

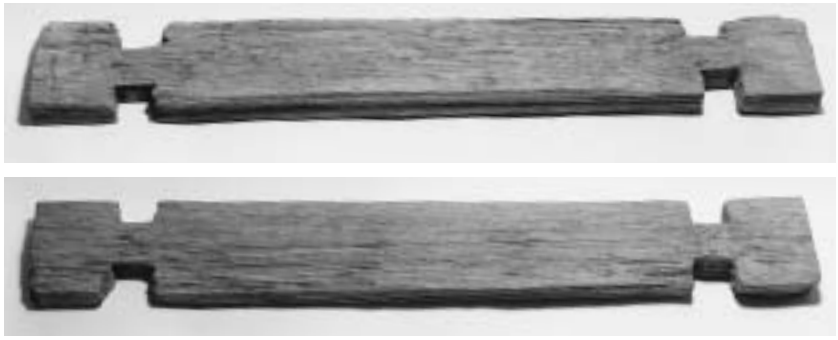

195－4
195－5
146－2
154－5
195－6
195－7
146－1

木製品

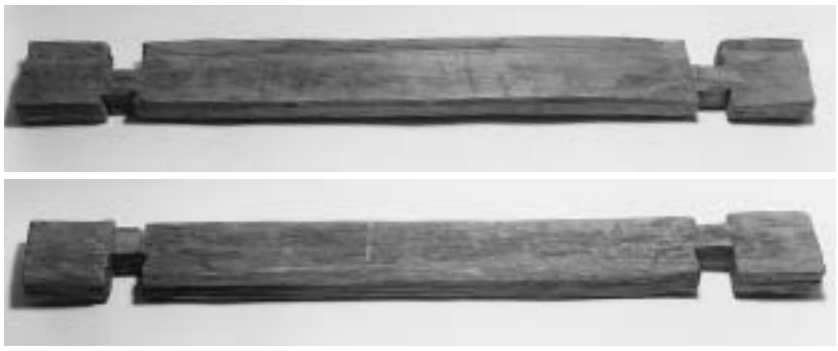
図版130



147－1



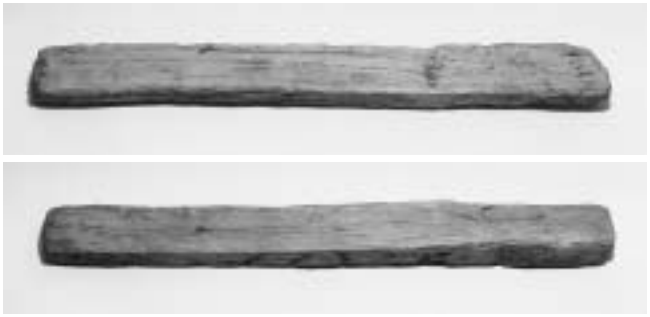
147－2



147－3

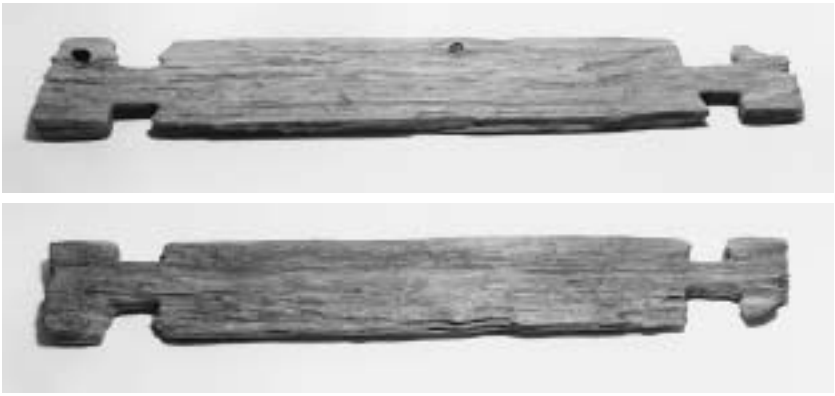
147－4

SE562　東井戸枠



148－1

148－2



148－3

148－4

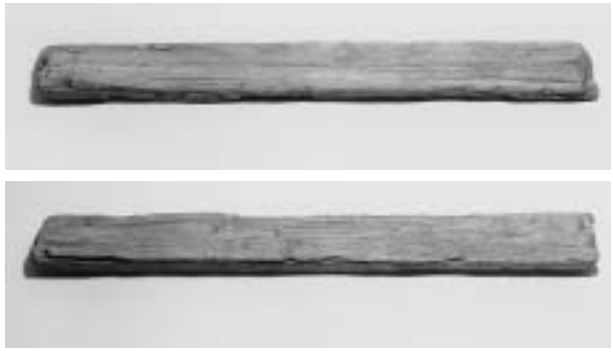
SE562　東、西井戸枠

図版132

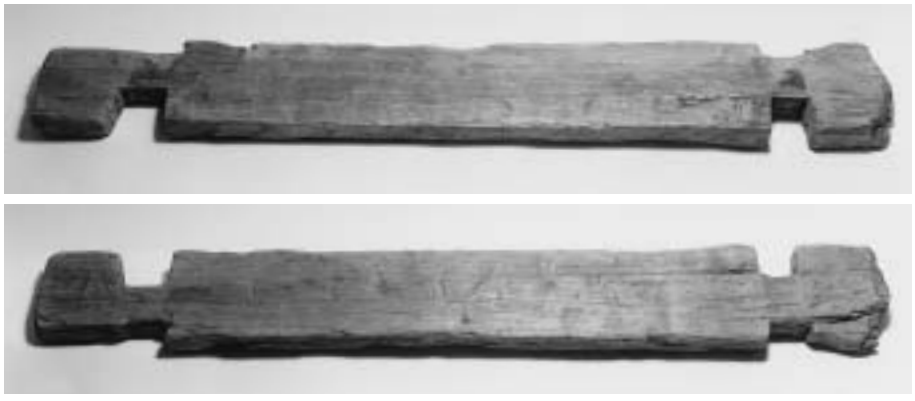
149－1

149－2

149－3



149－4



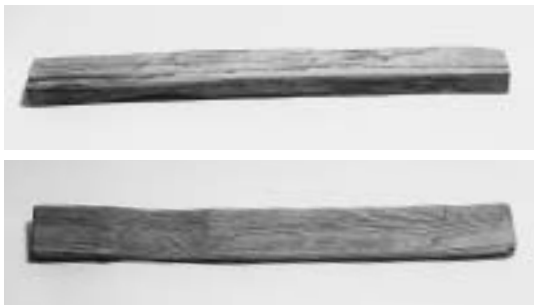
149－5

SE562　西井戸枠

150－1

150－2

150－3



150－4

SE562　南井戸枠

図版134

151－1

151－2

151－3

151－4

SE562　北井戸枠

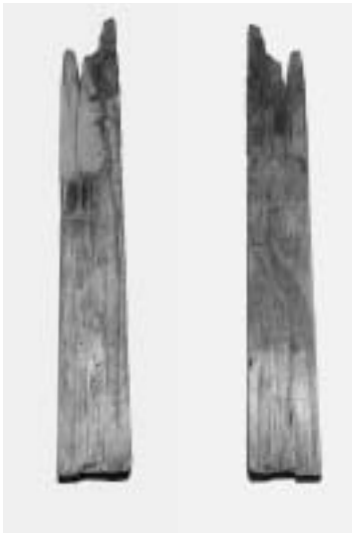
152－1

152－2

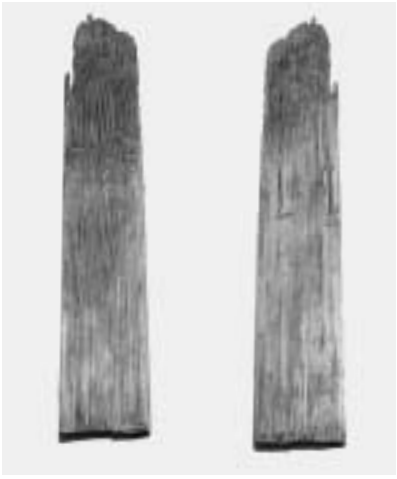
152－3

図版136

196－1



196－2



196－3

196－4

196－5

196－6

SE9961　東、西井戸枠

197－1

197－2

197－3

197－4　197－5

197－7

197－6

197－8

197－9

197－10

SE9961　西、南井戸枠

図版138

198－1

198－2

198－3

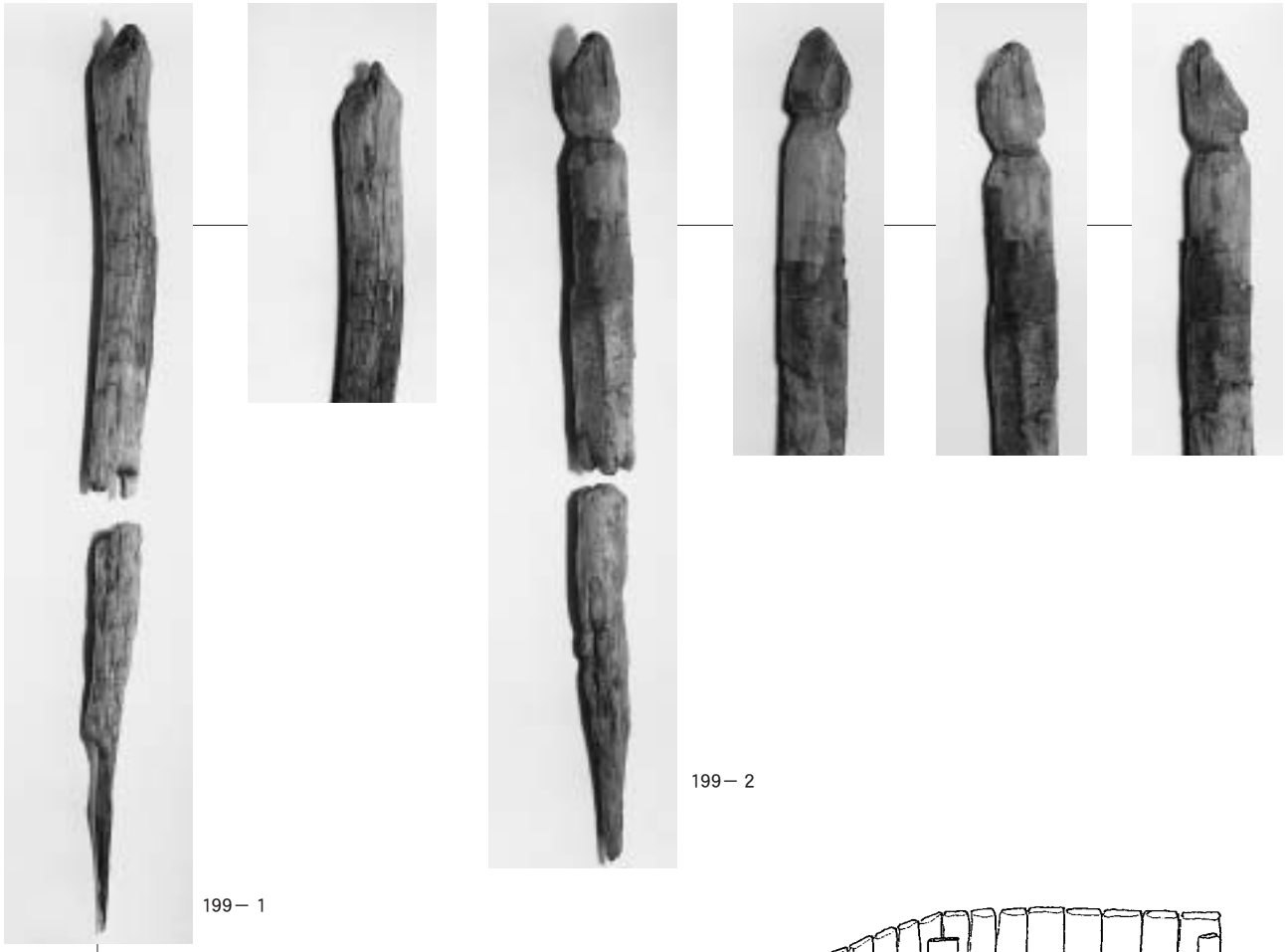
198－5

198－4

198－7

198－6

SE9961　南、北井戸枠

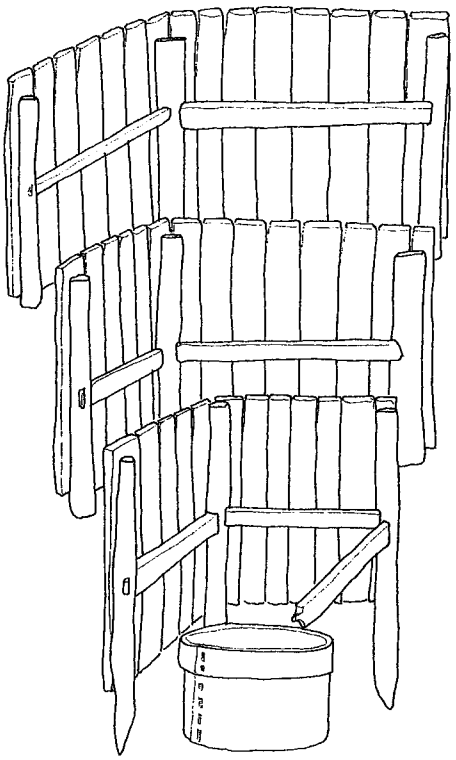


199－ 1

199－ 2

199－ 3

199－ 4



SE9961　模式図

SE9961　井戸角柱

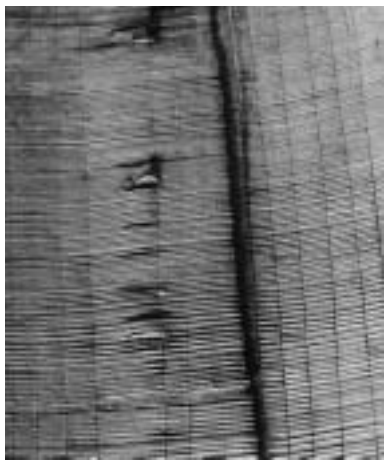
図版140

198－8

198－10

198－9

201－1



部分（内）

部分（外）

SE9961　曲物

SE9961　井戸横桟、曲物、漆器

付　　編

高瀬山遺跡SA地区土壙内堆積物の珪藻化石

藤　根　　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

珪藻は、10～500μmほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられている。また、現生の生態から特定の環境を指標する珪藻種群も設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給される環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、過去の堆積物中の珪藻化石の解析から、堆積物の堆積環境について知ることが可能である。

ここでは、高瀬山遺跡SA地区から検出された土壙堆積物について珪藻化石を調べ、当時土壙内がいかなる環境であったかについて検討した。

２．試料と処理方法

珪藻化石の検討を行った試料は、土壙SK9013の７層（オリーブ黒色シルト）、SK9014の11層（暗褐色シルト）、SK9016の13層（にぶい黄褐色シルト）、SK9160の８層（黒褐色シルト）、SK9200の10層（褐色細砂）、SK9348の14層（黒褐色シルト）、の６試料である。

これらの試料は、以下の方法で処理し、珪藻用プレパラートを作製した。(1)．試料から湿潤重量的１g程度を取り出し、計量した後ビーカーに移し、蒸留水を加えた後懸濁液を回収する。放置後上澄み液を除去し、30％過酸化水素を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。(2)．反応終了後水を加え、１時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を上澄み液が透明になるまで繰り返す（７回程度）。(3)．ビーカーに残った残渣は、遠心管に細粒分のみ回収する。(4)．マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥後は、マウントメディア（封入剤）で封入しプレパラートを作成する。

作成したプレパラートは光学顕微鏡下600～1000倍（油浸）で珪藻種を調べた。なお、珪藻化石が少ないためプレパラート全面を検鏡した。

３．珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、また海水～汽水種不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群は、その種群を不明として扱った。以下に、小杉（1988）が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

［外洋指標種群（A）］：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群（B）]：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。
[海水藻場指標群（C1）]：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。
[海水砂質干潟指標種群（D1）]：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの具類が生活する。
[海水泥質干潟指標種群（E1）]：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の具類相やカニなどの甲殻類相が見られる。
[汽水藻場指標種群（C2）]：塩分濃度が４～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。
[汽水砂質干潟指標種群（D2）]：塩分濃度が５～26パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群
[汽水泥質干潟指標種群（E2）]：塩分濃度が２～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。
[上流性河川指標種群（Ｊ）]：上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。
[中～下流性河川指標種群（K）]：中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。
[最下流性河川指標種群（Ｌ）]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。
[湖沼浮遊生指標種群（M）]：水深が約1.5m以上で、水生植物は岸で見られるが、水底には生育しない湖沼である。
[湖沼沼沢湿地指標種群（N）]：水深が１m内外で、一面に植物が繁殖しているところ、および湿地である。
[沼沢湿地付着生指標種群（O）]：沼沢ならびに、前述した湿地で付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。
[高層湿原指標種群（Ｐ）]：ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。
[陸域指標種群（Q）]：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている。）

４．結　　果

６基の土壙底部堆積物中の珪藻化石は、全体で25分類群13属17種１亜種が検出された。SK9013以外の堆積物では、珪藻化石が極端に少ない。また、保存の悪い海水種珪藻化石はいずれの試料からも検出される。これら海水種珪藻化石は、基盤岩から洗い出されて堆積した誘導化石である。

淡水種珪藻化石の組成から、大きく３タイプに分類される。陸域指標種群以外の珪藻群集が検出されるSK9013、概ね陸域指標種群のみから構成されるSK9014・SK9016・SK9160・

表１．土壙内基底部堆積物中の珪藻化石産出表
SK9013：７層、SK9014：11層、SK9016：16層、SK9160：８層、SK9200：10層、SK9348：14層
（種群は、小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群による）

分類群	種群	土壙内堆積物 9013	9014	9016	9160	9200	9348
Coscinodiscus marginatus	?	1	－	－	－	－	－
C. spp.	B	4	2	2	3	1	1
Stephanopyxis spp.	?	1	－	－	－	－	－
Thalassiosira spp.	?	－	－	1	1	－	－
Diploneis smithii	E1	－	－	－	1	－	－
Cymbella gracilis	W	1	－	－	－	－	－
C. tumida	W	6	－	－	－	－	－
Diploneis spp.	?	－	1	－	－	－	－
Hantzschia amphioxys	Q	9	5	6	6	－	22
Melosira spp.	?	1	1	－	－	－	－
Meridion circulae var. constricta	K	1	－	－	－	－	－
Navicula contenta	Q	－	－	－	－	－	1
N. mutica	Q	1	－	1	3	－	2
N. tokyoensis	W	1	－	－	－	－	－
N. spp.	?	1	－	－	－	－	－
Neidium affine	W	2	－	－	－	－	－
N. iridis	O	1	－	－	－	－	－
Pinnularia borealis	Q	4	3	7	7	－	－
P. gibba	O	9	－	－	－	－	－
P. microstauron	W	1	－	－	－	－	－
P. viridis	O	4	－	－	－	－	1
P. spp.	?	7	1	－	－	－	－
Rhopalodia gibberula	W	7	－	－	－	－	3
R. quisumbirgiana	W	2	－	－	－	－	－
Stauroneis phoenicenteron	O	1	－	－	－	－	－
Unknown	?	1	2	－	1	－	－
内湾	(B)	4	2	2	3	1	1
海水泥質干潟	(E1)	－	－	－	1	－	－
不定または不明	(?)	2	－	1	1	－	－
中～下流性河川	(K)	1	－	－	－	－	－
沼沢湿地付着生	(O)	15	－	－	－	－	1
陸域	(Q)	14	8	14	16	－	25
広布	(W)	20	－	－	－	－	3
不明	(?)	10	5	－	1	－	－
珪藻殻数		66	15	17	22	1	30

SK9348、海水種珪藻化石のみ検出されるSK9200である。

SK9013では、保存の良い陸域指標種群のHantzschia amphioxysやPinnularia borealisあるいは沼沢湿地付着生指標種群のPinnularia gibbaやPinnularia viridis が検出される。これ以外の珪藻種では、水域に生育する広布種のRhopalodia gibberulaのCymbella tumidaなどである。これらの珪藻化石組成から、ジメジメとした場所を伴う沼沢地的環境が推定され、水か滞水する環境が成立していたものと思われる。なお、計数した珪藻殻から算定した堆積物１gあたりの殻数は（海水種は除く)、2.61×10^{4}個と比較的高いとことが分かる。

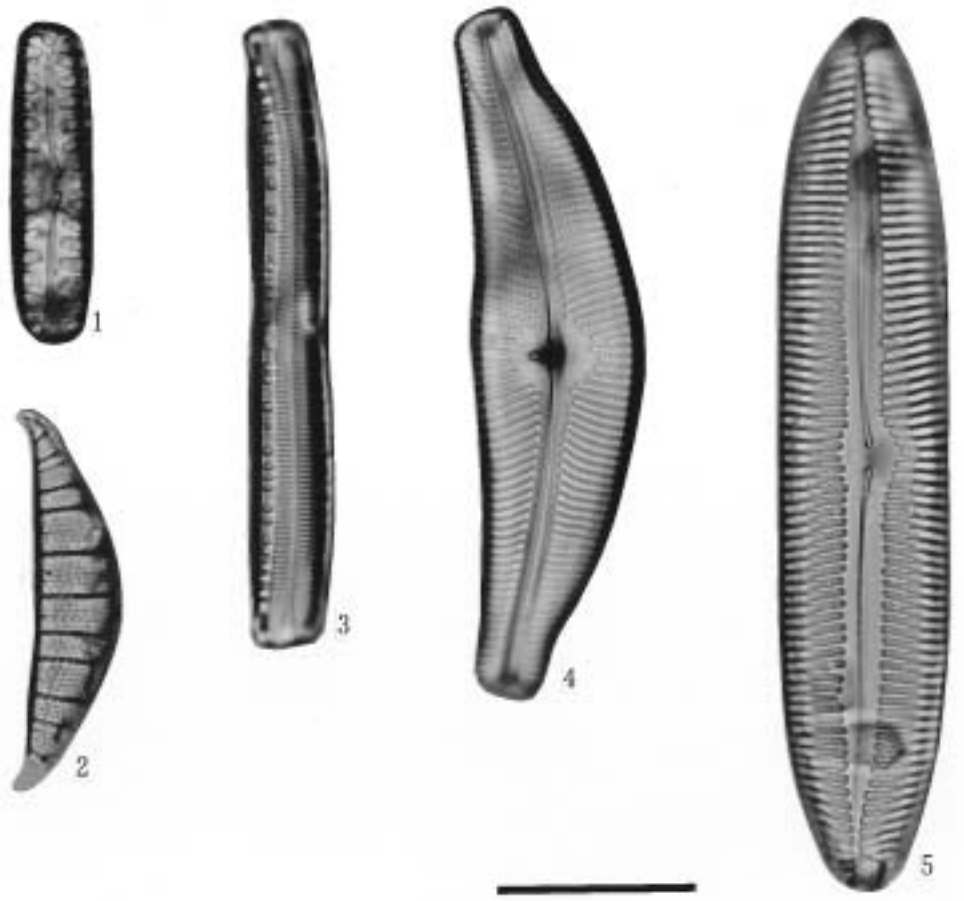
SK9014・SK9016・SK9160・SK9348では、いずれも陸域指標種群のHantzschia amphioxysやPinnularia borealisなどがやや多く検出される。これ以外の環境で生育する珪藻種は非常に少ない。これらの珪藻種は陸生珪藻とも呼ばれ、ジメジメとした土壌や岩石あるいはコケなどの表面など比較的水分の少ない場所で生育する珪藻種である。計数した珪藻殻から算定した堆積物１gあたりの殻数は（海水種は除く)、SK9014の11層が$9.33x10^{3}$個、SK9016の16層が$1.11x10^{4}$個、SK9160の８層が$1.22x10^{4}$個、SK9348の14層が$2.27x10^{4}$個である。これらの堆積１g中の殻数はかなり高い値を示すことから、当時の基底部に生育していた珪藻である可能性が高い。珪藻は光合成を行う藻類であり、これらの土壌は直射日光ではないにせよ、薄暗い場所であったことが考えられる。これら陸域指標種群が土壌内に生育していた場合、これら土壌は密閉された環境ではなかったことが想像される。

SK9200は海水種珪藻化石のみ検出され、淡水種珪藻化石は全く検出されないことから、乾燥した環境あるいは密閉された環境にあったものと思われる。

引用文献

安藤一男（1990）：淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理. 42-2、37-88

小杉正人（1988）：珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究. 27（1)、1-20



図版．土壌内堆積物の珪藻化石（スケール：20μm）

1．Pinnularia borealis（SK9160）　2．Rhopalodia gibberula（SK9013）

3．Hantzschia amphioxys（SK9013）　4．Cymbella tumida（SK9013）

5．Pinnularia viridis（SK9013）

高瀬山遺跡SAの土壙内堆積物の花粉化石群

吉　川　昌　伸（パレオ・ラボ）

１．概　　要

高瀬山遺跡SAは山形盆地西縁の寒河江市に位置し、最上川の左岸側に立地する。本遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡からなり、住居址や土壙、井戸跡、溝跡などが確認されている。SAでは直径60～200cm、深さ150cm程度の中世頃の土壙が数基確認され、これら土壙は一度に埋め戻されたと推定されている。ここでは、これら土壙の用途を解明することを目的として、６基で花粉化石の検討を行った。

表１　分析試料リスト

土　壙	直径(cm)	深さ(cm)	最下部の堆積物
SK9013	260	160	黒褐色シルトに灰色シルトや褐色砂混じる
SK9014	210	100	暗灰色シルトに黒色シルトが混じる
SK9016	230	120	黒色シルト
SK9160	130	150	黒色シルトに褐色粘土混じる
SK9200	280	140	灰オリーブ色シルト
SK9348	220	170	黒色シルト

試料はいづれも土壙の底部から採取した。なお、土壙内の堆積状況や試料採取層準についてはここでは示さないことから関係する項を参照されたい。花粉化石の抽出は、試料約３gの10％KOH（湯煎約15分）―48％ HF（約30分）―重液分離（比重2.1）―アセトリシス処理の順に行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、タッチミキサーで十分攪拌後マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。

同定はプレパラートの全面を計数した。この間に出現した花粉化石のリストを表１に、主要花粉分布図を図２に示す。出現率は花粉・胞子数を基数として百分率で産出した。なお、図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。図版に示したPAL. MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本はパレオ・ラボに保管してある。

２．各土壙の花粉化石群の記載と若干の考察

花粉化石はSK9013とSK9160で比較的多くの花粉が出現したが、他の試料では稀である。花粉の保存状態は悪く外膜の構造が明瞭でないものやピット状に穴が開いた花粉も少なくない。また、プレパラートにはおびただしい炭化物片が含まれていた。さて、SK9013ではヨモギ属が大半を占め、クワ科やイネ科、落葉広葉樹のブナを伴う。SK9160ではヨモギ属が高率に出現し、ソバ属、クワ科、イネ科、ブナが比較的高率に出現した。いづれの試料ともヨモギ属が

表２　高瀬山遺跡SAの土壙内堆積物より出現した花粉化石の組成表

和　　名	学　　名	9013	9014	9016	9160	9200	9348
樹木							
マツ属	Pinus	1	－	－	－	－	－
ズキ	Cryptomeria japonica (L.fil.)D.Don	2	－	－	4	－	－
クマシデ属－アサダ属	Carpinus - Ostrya	4	－	－	6	－	－
ハンノキ属	Alnus	2	3	－	5	－	－
ブナ	Fagus crenata Blume	6	－	－	34	－	1
イヌブナ	Fagus japonica Maxim.	－	－	－	2	－	－
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	4	－	－	1	－	－
クリ属	Castanea	－	－	－	1	－	－
ニレ属－ケヤキ属	Ulmus - Zelkova	－	－	－	2	－	－
ウルシ属	Rhus	－	－	－	1	－	－
草本							
イネ科	Gramineae	11	－	4	14	－	4
カヤツリグサ科	Cyperaceae	3	－	－	1	－	－
クワ科	Moraceae	20	－	－	15	－	6
サナエタデ節－ウナギツカミ節	Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon	－	－	－	1	－	－
ソバ属	Fagopyrum	－	－	－	19	－	－
アカザ科	Chenopodiaceae	5	1	－	2	－	－
アブラナ科	Cruciferae	－	－	－	－	－	2
キジムシロ属近似種	cf. Potentilla	－	－	－	1	－	－
ヨモギ属	Artemisia	135	10	14	88	－	10
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	1	－	1	－	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	－	1	－	－	3
シダ植物							
単条型胞子	Monolete spore	9	13	2	3	2	1
三条型胞子	Trilete spore	4	－	－	4	－	－
樹木花粉	Arboreal pollen	19	3	0	56	0	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	178	12	19	142	0	26
シダ植物胞子	Spores	13	13	2	7	2	1
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	210	28	21	205	2	28
不明花粉	Unknown pollen	3	1	1	0	0	0

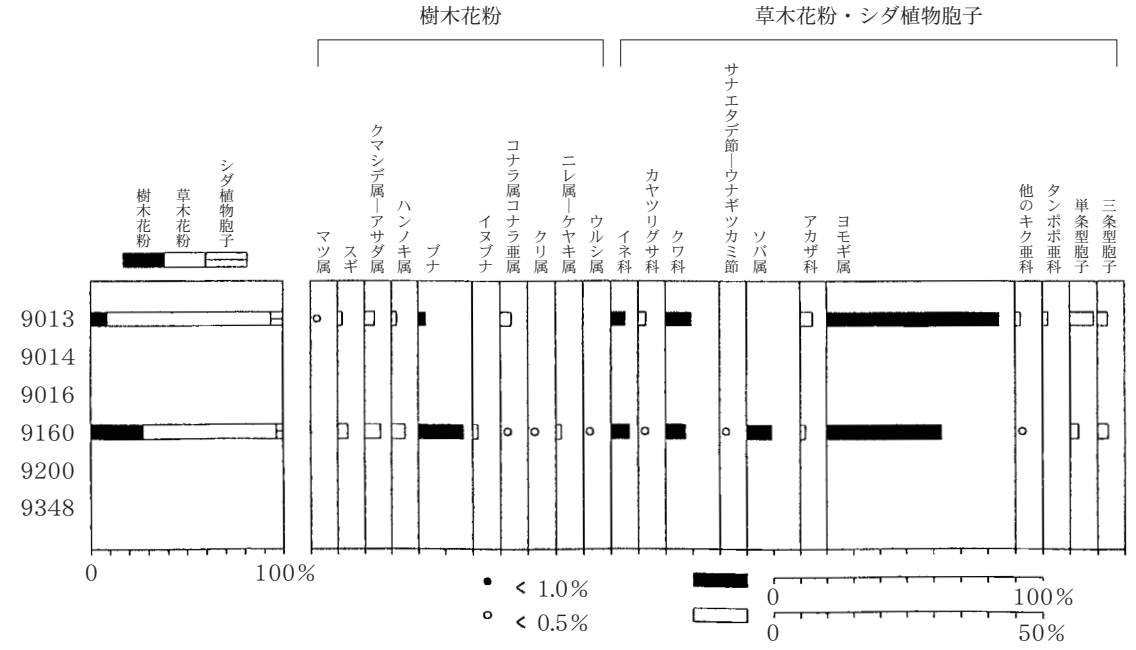
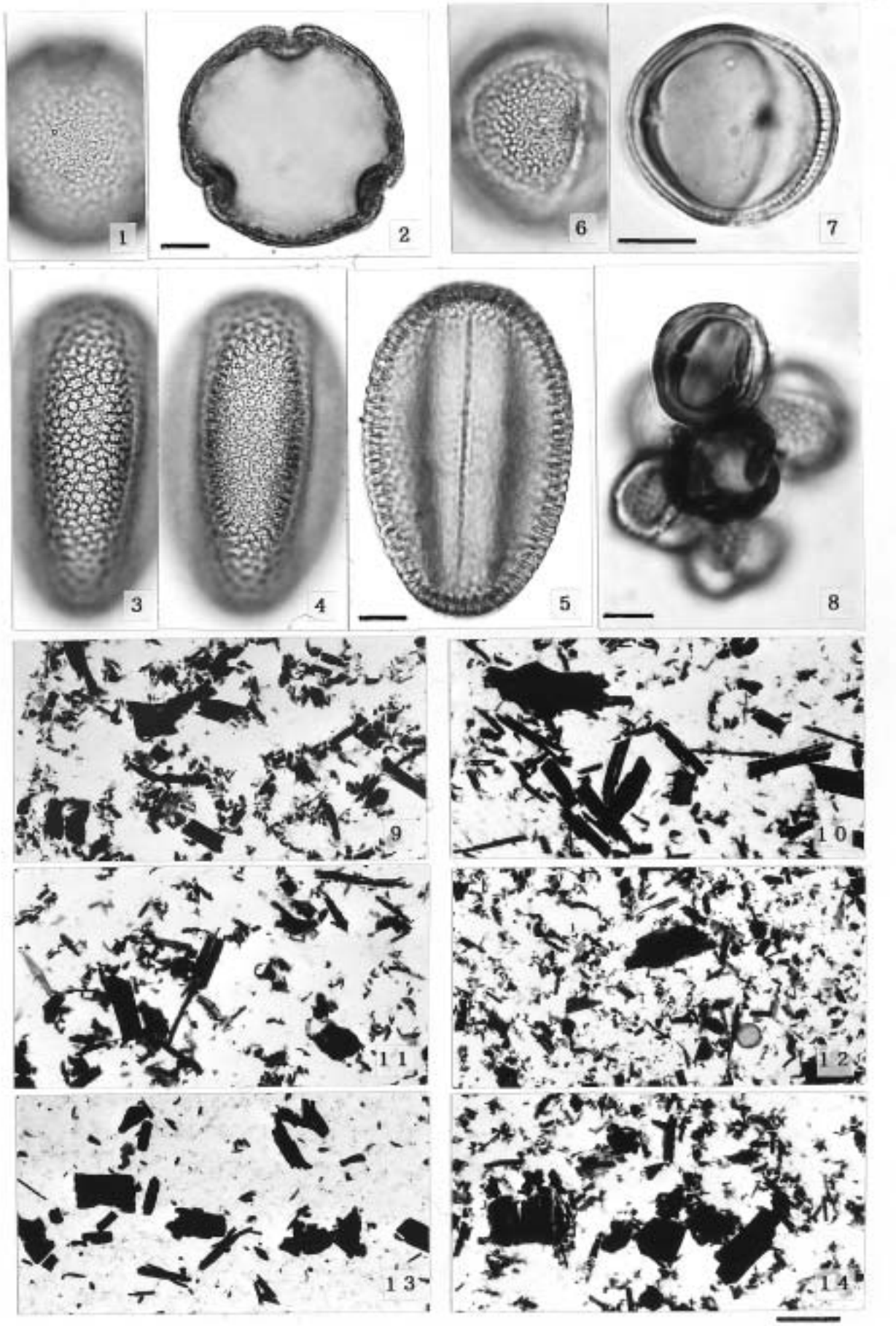


図１　高瀬山遺跡SAの土壙内堆積物の主要花粉分布図

優占し、クワ科やイネ科を伴う特徴がある。クワ科は花粉形態からは樹木ではなくカラハナソウ属などの草本に由来するとみられる。こうしたことから、ヨモギ属やクワ科及びイネ科などの植物は遺跡周辺の開けたところに繁茂していたと推定される。また、樹木で多く占めるブナは周辺の主要な森林構成要素であったとみなせる。こうしたことから、特異的な植物としてはSK9160で特徴的に出現したソバ属があげられる。ソバ属の果実は収穫されたままの状態では花粉が付着しており、著者の標本には１果実あたり約70個の花粉が付着していた。この値は果実の取り扱い状況によりかなり幅を持つ値であるが、いづれにしても土壙内にソバの果実を貯蔵していた可能性が示唆される。一方で土壙内にソバを脱穀した果皮などのゴミを廃棄した場合にも花粉が含まれることも考慮する必要がある。

SK9160の土壌については用途について１つ可能性が示せたが、他の土壙については花粉からは不明である。



図版．高瀬山遺跡SAから産出した花粉化石
１－２：ブナ（Fagus crenata）、SK9160、PAL. MY2663.　３－５：ソバ属（Fagopyrum）、SK9160、PAL. MY2665.　６－７：ヨモギ属（Artemisia）、SK9013、PAL. MY 2666.　８：ヨモギ属（Artemisia）、SK9348、PAL. MY 2662.　９－14：プレパラートの状況（９：SK9013、10：SK9014、11：SK9016、12：SK9160、13：SK9200、14：SK9348）
（スケールは10μm、状況は100μm）

高瀬山遺跡SAの植物珪酸体

鈴　木　　茂（パレオ・ラボ）

高瀬山遺跡SAにおいては竪穴住居跡や井戸跡などとともに土壙がいくつか検出されている。この土壙の用途については貯蔵に使われた室である可能性も考えられているが、現時点では不明である。こうしたことから、土壙の用途について何等かの手がかりを得る目的で植物珪酸体分析を試みた。なお、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成された植物珪酸体のうち機動細胞珪酸体については、藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。

１．試料と分析方法

植物珪酸体分析は６つの土壙、SK9013、SK9014、SK9016、SK9160、SK9200、SK9348の底あるいは底に近い部分より採取された試料について行った。そのうち、SK9013はオリーブ黒色のシルト～粘土（７層）で、炭化粒や黄褐色の砂・ローム粒が含まれる。SK9014は暗褐色のシルト～粘土(11層)で、黄褐色のローム粒が散在しており、砂塊も認められる。SK9016は粘性の高い黒色粘土（13層）で、黄褐色のローム粒や砂が塊状に認められる。SK9160は粘性の高い黒褐色のシルト～粘土（８層）で、極暗褐色のロームが塊状に多く含まれる。SK9200は極暗黒褐色の砂混じりローム質土(10層)、SK9348は粘性の高い黒褐色シルト～粘土(14層)で、黄褐色のローム粒子や砂が塊状に認められる。

植物珪酸体分析は上記した６試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定)。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径40μｍ）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

２．分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表１)、それらの分布を図１に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、SK9014、SK9016、SK9160、SK9348の４試料よりイネの機動細胞珪酸体が検出されたが、個数としては少なく、最も多いSK9348で4,100個、他は1,300個前後である。また、図表には示していないが、SK9348からはイネの穎の一部破片と判断される珪酸体が少し観察される（写真図版参照)。最も多く検出されたのはクマザサ属型で、最多はSK9348の約81,000個、最少のSK9200でも約21,000個である。次いでウシクサ族が多く、SK9200（4,100

表１　試料１g当りの機動細胞珪酸体個数

試料番号	イ　ネ（個／g）	ネザサ節型（個／g）	クマザサ属型（個／g）	ヨ シ 属（個／g）	キ ビ 族（個／g）	ウシクサ族（個／g）	不　明（個／g）
SK9013	0	2,600	60,000	2,600	1,300	15,600	23,500
SK9014	1,200	3,600	38,000	0	1,200	21,400	29,700
SK9016	1,300	0	65,500	0	1,300	32,700	41,500
SK9160	1,400	2,800	59,600	4,200	1,400	16,600	41,600
SK9200	0	0	21,400	0	0	4,800	6,000
SK9348	4,100	12,400	81,400	1,400	4,100	60,700	64,900

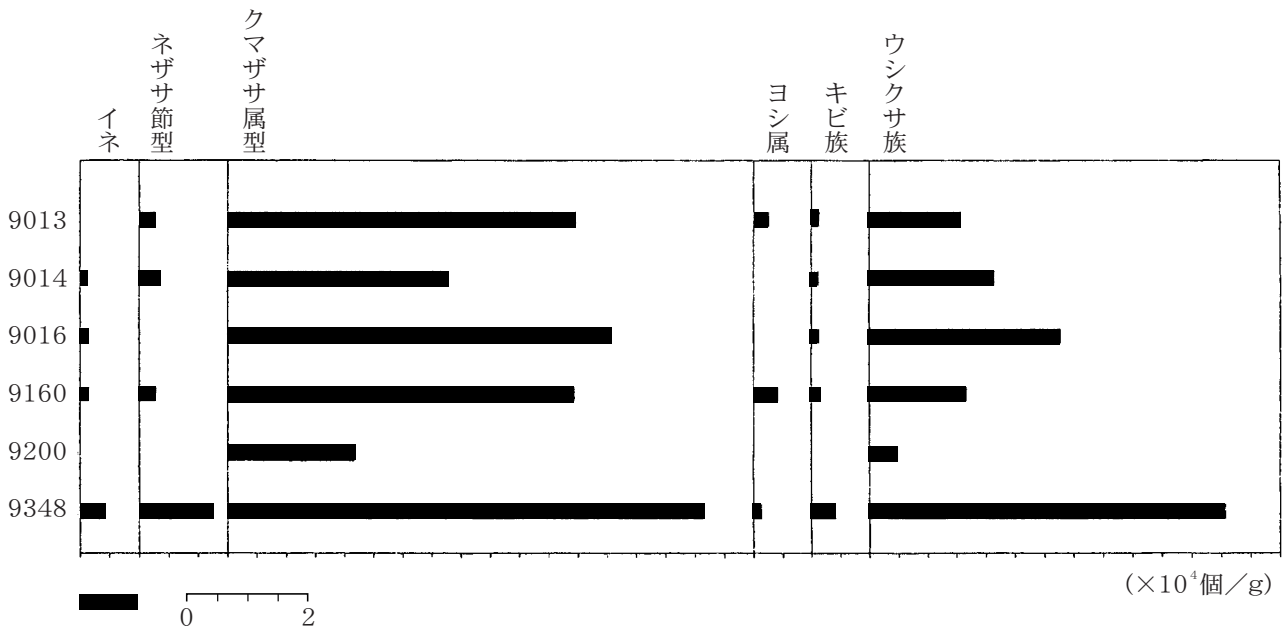


図１　植物珪酸体分布図

個）を除いて15,000個以上得られている。また、キビ族がSK9200を除く５試料から個数は少ないが検出されており、その他、ネザサ節型・ヨシ属が出されている。

３．考　　察

イネが最も多く検出されたSK9348土壙についてみると、イネの機動細胞珪酸体とともに穎の部分に形成された珪酸体の一部破片が検出された。このことから穎すなわち稲籾の存在が予想されるのであるが、数量的には非常に少なく、稲籾が貯蔵されていたとは考えにくい状況である。おそらく、土壙周囲の土壌中に、籾殻が焼かれるなどして土壌中に混入していたイネ穎部の珪酸体が土壌とともに土壙内に運ばれたのであろう。これはイネ機動細胞珪酸体についても同様である。また、地山にちかいものと思われる試料SK9200に比べ、分類群数や検出個数が多くなっている。そのうち、ネザサ節型のササ類（アズマネザサなど）はウシクサ族（ススキ・チガヤなど）とともに開けた草地的景観を遺跡周辺につくっていたとみられる。一方、ク

マザサ属型のササ類（チシマザサ・チマキザサなど）は森林下での生育が予想、遺跡周辺の森林の林床に広く分布しており、これらの植物珪酸体を多く含んだ土壌によって、SK9348土壙は埋積されたものと推測されよう。このことは、分類群数・検出個数とも多少異なるがSK9013、SK9014、SK9016、SK9160の各土壙についても同様のことが考えられよう。

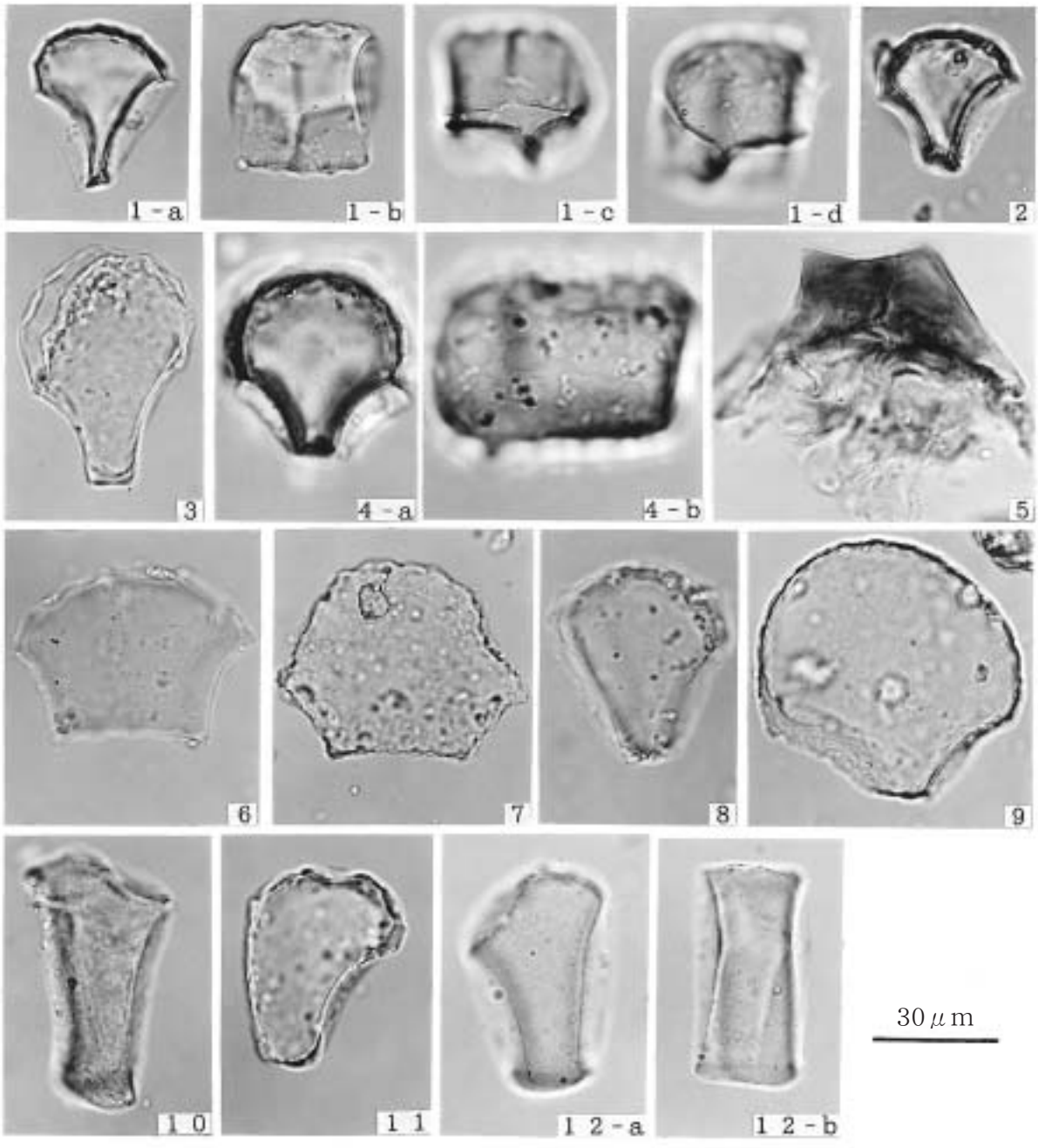
このように今回の分析からは土壙の用途について何の手がかりも得られなかったが、少なくとも、イネの機動細胞珪酸体が検出された各層の埋積時にはイネが存在していたことは確かであろう。

なお、キビ族については、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明である。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，P.15－29.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－．考古学と自然，11，P.9-20



図版　高瀬山遺跡SAの植物珪酸体
１～４：イネ（１－a、２、３、４－a：断面、１－b：側面、１－c：表面、１－d、４－b：裏面）
１、４：SK9348、２：SK9014、３：SK9016
５：イネ穎部破片　　SK9348
６、７：クマザサ属型（断面）　　６：SK9013、７：SK9016
８：ネザサ節型（断面）　　SK9013
９：ヨシ属（断面）　　SK9013
10～12：ウシクサ族（10、11、12－a、：断面、12－b：側面）
10：SK9013、11：9016、12：SK9160

高瀬山遺跡SAのリン・カルシウム分析

菱　田　　量（パレオ・ラボ）

１．はじめに

高瀬山遺跡SA（サービスエリア地区）は、山形県寒河江市大字柴橋字落衣に所在する。本遺跡の遺構EU9325にみられる土器の中の堆積物について、人間活動の影響や動植物の関与を検討するために、堆積物のリン・カルシウム分析をおこなった。

リン（P）は、生物の生命を維持する上で必要な元素であるため、生物体中には普遍的に含まれ、濃集している。したがって人間や動植物が関与した生活面や堆積層には、遺骸、排泄物、食物残渣、燃料などを供給源とするリンが蓄積し、周辺の自然に堆積した部分よりも多く存在する。また、リンは、堆積物中の鉄やアルミニウムの水和酸化物と強く結合し、水に難溶性のリン酸化合物となるため、拡散が少なく、供給された層準に長く保存される。なお、リンの保存性は、ローム層のような酸化状態の堆積物については良いが、、還元性土壌や水成堆積物では悪い。このような性質にもとづくと、リン分析は、墓坑や生活面など人間活動の影響の確認、埋没腐植層を判定する手段として有効である（竹迫、1993）。

また、骨の主成分であるカルシウム（Ca）は、溶解性が高いため、堆積物中で移動や拡散をすることから、カルシウムを用いた解析は困難であるとされている（坂上、1984）。しかし、カルシウムがリンとともに、相対的に高い濃度を示す場合は、骨が存在した可能性が高い。よって、ここでは、全リン酸とともに全カルシウムも測定した。その結果から、若干の考察をおこなった。

２．試料と分析方法

試料は、遺構EU9325にみられる土器を埋積する堆積物で、底部のものを採取し、それを№１とした。また、バックグラウンドの比較試料として、土器の外側の堆積物を採取し、№２とした。

方法は、リンについては、バナドモリブデン酸法により、原子吸光光度計を用いて全リン酸を測定した。また、カルシウムについては、硝酸－過塩素酸分解、原子吸光光度法により、全カルシウムを測定した。測定値は、mg/100g乾土で表した。

３．結果と若干の考察

表１　試料中の全リン酸・全カルシウム測定結果

№.	堆　積　物	全リン酸	全カルシウム
1	土器内の堆積物	165	15.6
2	土器外の堆積物	122	34.7

単位：mg/100g乾土

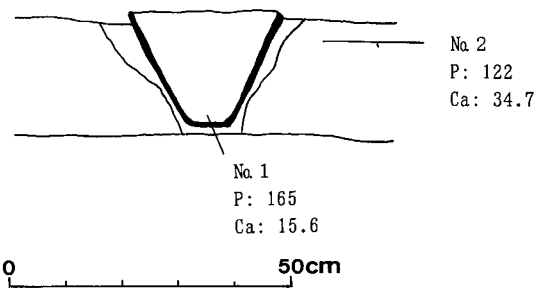


図１　遺構（EU9325）を埋積する堆積物の全リン酸（P）・全カルシウム（Ca）測定結果（mg／100g乾土）

全リン酸は、№.１の土器内の堆積物が、165mg/100gで、土器外の堆積物の122mg/100gよりやや高い値である。何らかの人間や動植物の影響があった可能性が考えられるが、分析点数が少なく、土器内部と外部の値の差が明瞭ではないので、この結果だけで、明確な結論をだすことは避ける。また、全カルシウムについては、土器外の№.２の方が高い値がでているので、土器内の堆積物に骨が存在した可能性は低いと考える。こうした結果は、状況的な証拠の１つである。さらに考古学的な知見をはじめとして、総合的に検討した上で解釈することが重要と考える。

引用・参考文献

土壌標準分析・測定法委員会編　1986　『土壌標準分析・測定法』、日本土壌肥料学会監修、博友社、354p.

坂上寛一　1983　「小山田№.23遺跡・土坑に関する若干の土壌学的考察」『東京都町田市・小山田遺跡群　』　小山田遺跡調査会、221-228.

坂上寛一　1984　「小山田№.15遺跡・縄文土坑と現代芋穴における全リン酸分布の比較」『小山田遺跡群　』　小山田遺跡調査会、１-８.

竹迫　紘　1993　「リン分析法」『第四紀試料分析法２　研究対象別分析法』日本第四紀学会編、東京大学出版会、38-45

高瀬山遺跡SA地区の理化学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高瀬山遺跡SA地区は、最上川左岸の河岸段丘と氾濫原上に立地する。今回の第３次調査により、縄文時代、奈良・平安時代、鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。

このうち、縄文時代の埋設土器および土坑については、埋葬施設の可能性が指摘されている。そこで、遺体の埋納を検証するために、これらの遺構覆土を対象としてリン・カルシウム分析を実施することとした。リン酸は人骨などの骨に多量に含まれる成分であり、分解した遺体のリン酸成分が土壌中に含まれるアルミや鉄と結合し、難溶性のリン酸化合物を形成するために、濃集の有無が確認しやすい。今回はさらに、人骨に多量に含まれるカルシウムについても分析を行う。

また、井戸底部や土坑の覆土には、当時の植生を反映する花粉化石などの微化石の残留が期待された。そこで、花粉分析により遺跡周囲の古植生に関する情報を得ることとした。

１．埋設土器および土坑のリン・カルシウム分析

試　　料

調査対象は、埋設土器４基（EU761・EU9916・EU9917・EU9931）、土坑６基（SK81・SK104・SK852・SK9918・SK9919・SK9930）である。分析試料は30点であり、採取場所などの詳細は表１に分析結果とともに表記する。

埋設土器では、試料として各土器の内部および外部の土器が採取された。また、６基の土坑では、縄文時代中期末葉の注口付き土器や台付き土器が出土しており、いずれも小判形を呈する。試料として、土坑内部の覆土および外部の土壌が採取された。

分析方法

分析では、土壌標準分析・測定法委員会編（1986）、土壌養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）など参考にした。以下に、その行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（NNO_3）５㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HC10_4$）10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100㎖に定容して、ろ過する。今回は、リン含量をリン酸（P_2O_5）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。

別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。

これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカ

ルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

結　　果

結果を、表１に示す。

表１　埋設土器および土坑のリン・カルシウム分析結果

試料番号		試料名	土　性	土　　色	P205(mg/g)	CaO(mg/g)
埋設土器	1	EU761　外	HC	10YR2/2　黒褐	1.30	3.20
	2	2	HC	10YR3/1　黒褐	1.03	3.95
	3	3	HC	10YR3/2　黒褐	1.33	3.58
	4	EU9916　外	HC	10YR3/2　黒褐	1.18	3.32
	5	1	HC	10YR3/2　黒褐	1.09	3.79
	6	2	HC	10YR3/2　黒褐	1.17	3.18
	7	EU9917　外	HC	10YR3/2　黒褐	1.22	3.51
	8	内	HC	10YR2/1　黒	1.46	3.28
	9	EU9931　外	HC	10YR2/3　黒褐	1.30	3.89
	10	2	HC	10YR2/3　黒褐	1.00	3.67
	11	3	HC	10YR2/3　黒褐	1.03	3.90
土　　坑	12	SK81　外	HC	10YR3/3　暗褐	0.61	1.82
	13	1	HC	10YR2/1　黒	1.18	2.63
	14	2	HC	10YR3/1　黒褐	1.45	1.86
	15	3	HC	10YR3/2　黒褐	0.94	2.03
	16	4	LiC	10YR3/3　暗褐	0.67	1.95
	17	SK104　外	LiC	10YR3/4　黒褐	0.57	0.98
	18	1	LS	10YR3/2　黒褐	0.58	0.64
	19	2	S	10YR3/2　黒褐	0.39	0.42
	20	3	S	10YR3/4　暗褐	0.34	0.40
	21	SK852　1	HC	10YR2/1　黒	1.03	2.18
	22	2	HC	10YR3/2　黒褐	0.75	2.14
	23	SK9918　外	LiC	10YR4/3　にぶい黄褐	0.51	1.43
	24	1	HC	10YR2/1　黒	1.37	2.43
	25	2	HC	10YR3/2　黒褐	1.04	2.33
	26	SK9919　外	HC	10YR3/3　暗褐	0.72	1.92
	27	外	HC	10YR2/2　黒褐	1.00	2.08
	28	SK9930　外	HC	10YR4/4　褐	0.56	1.47
	29	1	HC	10YR3/3　暗褐	0.76	2.09
	30	2	S	10YR3/3　暗褐	0.43	0.58

土色：マンセン表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。
　S：砂土（粘土０～５％、シルト０～15%、砂85～100%）
　LS：壌質砂土（粘土０～15%、シルト０～15%、砂85～95%）
　LiC：軽埴土（粘土25～45%、シルト０～45%、砂10～55%）
　HC：重埴土（粘土45～100%、シルト０～55%、砂０～55%）

各遺構覆土の土質は、SK104やSK9930の砂質土壌を除いて、土色が黒色～黒褐色(10YR2/1～3)、土性が粘質な腐植質火山灰土（いわゆる黒ボク土）とみられる。

以下、各遺構毎にその結果を述べる。

・埋設土器EU761

リン酸含量は、土器内外ともに1.0P_2O_5mg/g程度の近似した含量である。また、カルシウムでも3.0CaOmg/g程度の近似した含量であり、土器内外で顕著な差は認められない。

・埋設土器EU9916

埋設土器EU761と同様に、リン酸含量は土器内外ともに1.0P_2O_5mg/g程度、カルシウムは3.0CaOmg/g程度であり、土器内外で顕著な差は認められない。

・埋設土器EU9917

リン酸含量は、他の埋設土器に比較してやや高い傾向が認められ、土器外よりも土器内で高い傾向にある。一方、カルシウムは土器内より土器外で高い。

・埋設土器EU9931

埋設土器EU761・9916と同様なリン酸・カルシウム含量であり、顕著な差は認められない。

・土坑SK81

リン酸含量は土坑外よりも土坑内で高い傾向があり、特に試料番号１・２で高い。カルシウム含量でも同様な傾向が見られる。

・土坑SK104

リン酸含量は、土坑内外とも0.6P_2O_5mg/g未満と、著しく低い。また、カルシウム含量1.0mg/g未満と低い含量である。

・土坑SK852

リン酸とカルシウムの含量は、試料番号１でやや高い。

・土坑SK9918

リン酸含量は、土坑内試料で1.0mg/gを越える含量を示すのに対し、土坑外試料では0.5mg/gと著しく低い。また、カルシウム含量についても土坑内と土坑外ではあきらかな含量差があり、土坑内で高い。

・土坑SK9919

土坑外試料のうち、黒みの強い試料でリン酸とカルシウムの含量が高い傾向が認められる。

・土坑SK9930

リン酸含量は、土坑内外ともに1.0mg/g未満の低い含量である。カルシウム含量は、土坑内の試料番号１で最も高く、試料番号２で最も低い含量である。

考　　察

今回調査した埋設土器や土坑内多くは、軽埴土～重埴土の粘質な土壌で充填されていることから、遺体のに由来するリン酸などの化学成分が土壌内に集積されやすかったと推定される。

先に、本遺跡16区の土坑についても、当社にてリン酸･カルシウムの含量を測定している。その結果、人骨が出土した土坑（SK6111）では、粘土がある程度含有される壌土でリン酸含量が約70P_2O_5mg/g、カルシウム含量が約130CaOmg/gであり、骨片が含まれている土壌については同程度のリン酸・カルシウム含量があることが示唆されている。また、骨片が見られなかった土坑では、リン酸含量が1.0P_2O_5mg/g前後、カルシウム量が2.0CaOmg/g前後であった。

これらの点と比較すると、今回調査した埋設土器や土坑では同様な立地にあり、土壌内に理化学成分が残留しやすかったにも関わらず、リン酸やカルシウム成分が富化していないと考え

られる。なお、遺構外の土壌と比較すると、土坑SK9918で明らかに土器内覆土でリン酸とカルシウム含量が高かったが、両者の土色をみると土器内が黒褐色に対して土器外ではにぶい黄褐色であり、土壌そのものの違いが含量差として現れていると考えられる。この点は、植物由来のリン酸の影響を評価することで明確になると思われ、腐植含量も測定し、濃集の有無を検討することが有効であろう。

また今後、埋葬の方法についても検討していきたい。すなわち、遺体をそのまま埋葬した場合と再葬した場合、あるいは遺体の一部を埋葬した場合は、残留成分が異なることが予想される。この点については、さらに調査例を蓄積するとともに、実験例などの蓄積をはかりたい。

２．遺跡周辺の古植生

試　　料

調査対象は、井戸１基（SK795）、土坑１基（SK869）である。SK795は、比較的新しい時期の井戸と考えられる。SK869は、埋設土器EU9931と切り合っており、縄文時代中期末葉と考えられる。その用途として、貯蔵穴あるいは廃棄土坑が考えられている。

各遺構では、底部を中心として土壌試料が採取された。

分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結　　果

調査した試料のうち、SK869の試料番号１でキク亜科１個体が検出されたに過ぎず、他の試料では花粉化石が全く検出されない。分析残渣は少なく、微細な木片が多く含まれている。

考　　察

今回の調査地点は段丘上に立地していたために、土坑底部も井戸部付近もおそらく好気的な環境であり、花粉化石が分解・消失してしまったと考えられる。

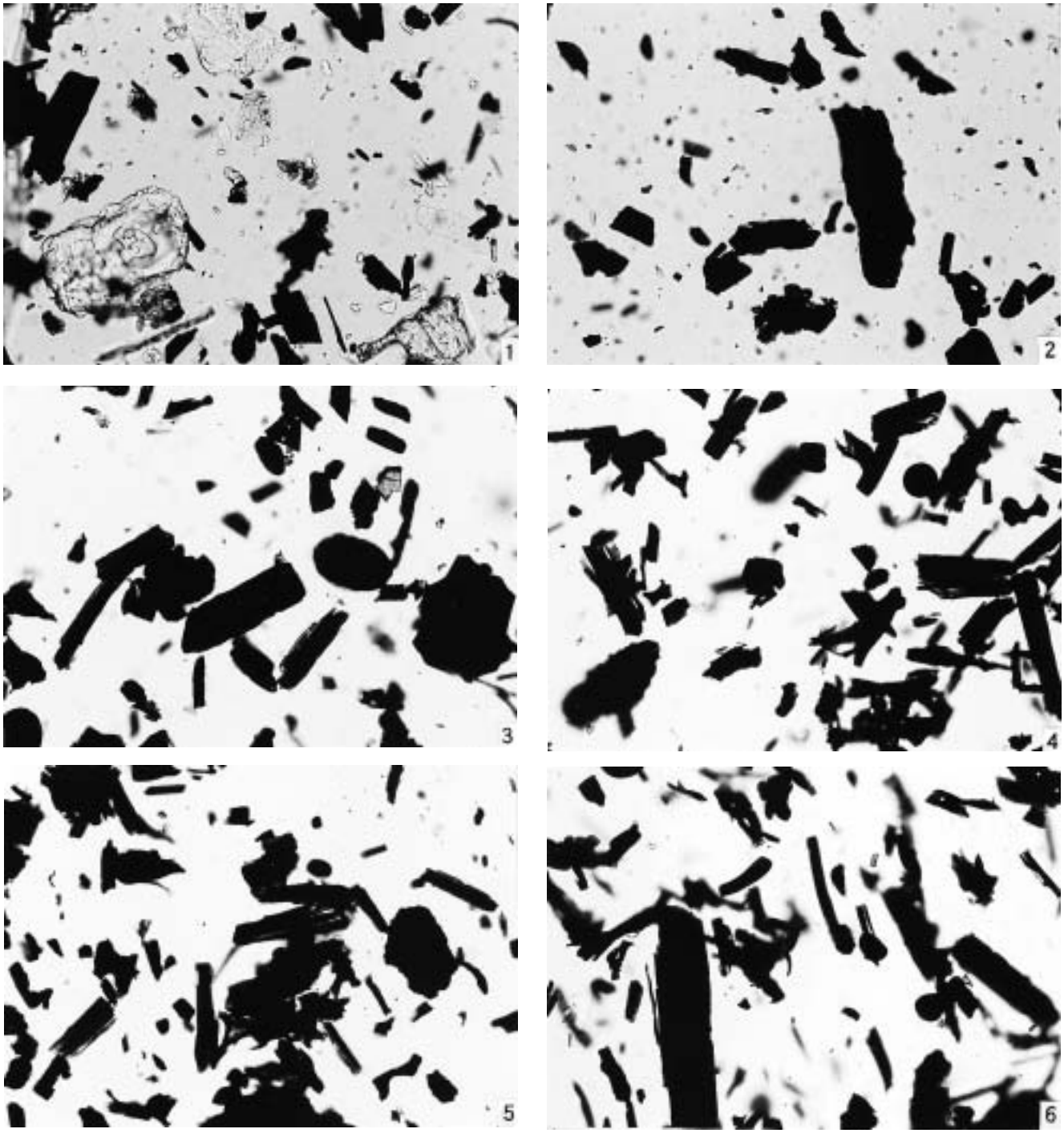
なお、高瀬山遺跡周辺の古植生変遷に関する調査は、これまでにも当社にて行っている。それによれば、縄文時代中期にはクマシデ－アサダ属やハンノキ属、ブナ属、カエデ属などで構成される山地の林縁部から河畔にかけての落葉広葉樹がみられ、水さらし遺構や石組遺構の周辺にオニグルミやトチノキも生育していたことが推定されている。また、奈良、平安時代の遺跡周辺の古植生の特徴として、イネ科をはじめとする草本類の増大があげられる。この要因として、イネ属やソバ属など栽培種が伴うことから、耕地開発などに伴う草地の増加と低地林の減少が指摘されている。

今回の調査地点でも同様な古植生が存在したことが想像されるが、今回の分析結果からは不明である。さらに周囲の分析調査例を蓄積し、詳細に検討したい。

引用文献

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，博友社
土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂．
京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書　第１巻．411p.，産業図書．
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖．
ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」，156p,：p.39-40.

図版１　花粉分析プレパラート内の状況



1. 状況写真（SK795;4）　2. 状況写真（SK795;5）　3. 状況写真（SK869;1）SK869；１）
4. 状況写真（SK869;2）　5. 状況写真（SK869;3）　6. 状況写真（SK869;4）SK869；４）

100μm

高瀬山遺跡SA関連の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

奈良・平安時代の大規模な集落跡が検出されている高瀬山遺跡は、倉庫を中心に整然と配置された掘立柱建物跡が検出されるなど発掘調査者をして普通の集落とは異なった空間が感じられると言わしめている。発掘調査資料によれば高瀬山遺跡は、一大窯業生産地の平野山古窯跡を抱えた古代長岡郷南半部において、最上川の船運を利用した経済活動における重要な位置を占めていたと考えられている。したがって、高瀬山遺跡から出土する土器の生産地の推定は、古代における最上川流域の土器の生産と流通の状況を考える上で非常に重要な作業となる。本報告では、高瀬山遺跡SAの調査区から出土した須恵器および中世陶器の胎土の特徴を捉える。また、近接する平野山窯跡および最上川支流の須川上流に位置するオサヤズ、小松原、三本木の各窯跡から出土した瓦、須恵器、赤焼土器などの胎土を調べ、高瀬山遺跡出土土器と比較することにより、高瀬山遺跡における奈良・平安時代の土器の事情について考え、生産地推定のための資料を作成する。

１．試　　料

試料は、高瀬山遺跡SAの調査区内から出土した須恵器９点（試料番号１～９）と中世陶器１点（試料番号10)、平野山窯跡から出土した須恵器７点（試料番号11～12、14～18)、平野山窯跡の窯壁１点（試料番号13)、オサヤズ窯跡から出土した瓦３点（試料番号19～21)、オサヤズ窯跡の窯壁１点（試料番号22)、小松原窯跡から出土した須恵器２点（試料番号23、24）と瓦１点（試料番号25)、三本木窯跡から出土した須恵器２点（試料番号26、27）および赤焼土器３点（試料番号28～30）の合計30点である。各試料の器種、出土した遺構名などを観察結果を示した表１に併記する。

２．分析方法

当社では、これまでに山形県内の遺跡から出土した須恵器および赤焼土器について、土器片の薄片を作製し、偏光顕微鏡観察により認められる鉱物片や岩石片の種類を同定し、また鉱物の変化から推定される焼成温度を記載して胎土の特徴とし、窯跡試料との比較や遺跡間の比較を行ってきた。今回の試料についてもこれらとの比較を考慮して同一の方法で行う。さらに今回は、蛍光X線分析装置により胎土の化学組成を調べ、その分析値から粘土ノルム計算を行い、胎土の鉱物成分を推定し、薄片観察結果と合わせて比較検討する。以下に各分析方法の手順を示す。

１）薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は岩石学的な手法を用いて観察され、構成鉱物および組織を中心に各試料特徴を把

握し、鉱物の加熱変化をもとに焼成温度を推定した。

２）蛍光X線分析

ａ）装　　置

理学電機工業社製RIX1000（FP法のグループ定量プログラム）

ｂ）試料調整

試料を振動ミル（平工製作所製T1100：10ml容タングステンカーバイト容器）で微粉砕した後、105℃で４時間乾燥させた。この微粉砕試料から以下の条件でガラスビートを作成した。

溶融装置　　：自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）
溶剤および希釈率：融剤（ホウ酸リチュウム）5.000g：試料0.500g
剥 離 剤　　：LiI（溶融中２回投与）
溶融温度　　：1,200℃　約７分

ｃ）測定条件

Ｘ 線 管　　：Cr（50Kv-50mA）
スペクトル　　：全元素Ｋα
分光結晶　　：LiF、PET、TAP、Ge
検 出 器　　：F-PC、SC
計数時間　　：Peak40sec、Back20sec

ｄ）粘土ノルム計算

一般に陶磁器等の化学組成分析表による品質判定は、SiO_2、Al_2O_3、Na_2O、K_2O、Fe_2O_3、の含有量を比較することでなされることが多いが、的確な判定資料として利用されることを目的としてここでは粘土ノルム計算法による解析を行った。岩石学の分野では火成岩の化学組成から構成鉱物の種類と量比を計算する目的で、1902年以降CIPWノルム計算が用いられてきた。粘土ノルム計算は粘土・土壌など堆積物・変質物で形成される含水鉱物・炭酸塩鉱物などを含む天然物質中の鉱物組成を計算するために考案された計算法である（五十嵐、1983）。本文で用いている計算法は焼成物等から原土の鉱物組成を推定するシュミレーションプログラムで、陶磁器など含水鉱物を原料とするが、高温加熱により無水状態になっている製品の化学組成から、原料の化学組成と鉱物組成を推定することを目的としている。ただし、粘土鉱物を多く含む岩石や鉱石、陶土等は化学組成が同じであっても生成過程（物理化学条件）の相違により、鉱物組成が異なるため、岩石学におけるCIPWノルム法のように一義的に一定の規則によって計算することはできない。このため粘土ノルム計算法ではいくつかの鉱物の有無により、他の鉱物組成を類推して計算する方式を採用している。従ってこの種の鉱物の有無はＸ線回折試験・顕微鏡観察などにより予め知られていなければならない。今回は顕微鏡観察により、前提となる鉱物が確認されている。試料もあるが、高温焼成された試料では手がかりとなる粘土鉱物は消失している試料も少なくない。また、計算結果は原産地の粘土の鉱物組成と比較検討することが望ましいが、まだ、十分な試料は得られていない。このような事情があるために、ここでは1）粘土鉱物成分は一部薄片で確認されるセリサイトともっとも一般的なカオリンが主成分

であると仮定し、緑泥石・モンモリロナイトを伴う条件での計算を行うこととした。今回行った分析結果は一部に資料が不足したために不完全な結果となつているものがある（試料番号16)。しかし、、当該試料についても補正計算した結果、鏡下で同質の試料とみられる試料番号17とほぼ類似する結果が得られたため、表示することとした。

３．結　　果

薄片観察

観察結果を一覧表にして表１に示す。以下に観察された鉱物片、岩石片および基質について説明し、また焼成温度を推定する。

１）鉱物片

石　　英：各試料に含まれる石英の最大粒径は1.50～0.20mmで他形粒状または破片上を呈し、平均的には1.0～0.5mmの粒径を示すことが多い。900℃前後の焼成試料の石英では加熱変化はみられないが、須恵器試料では高温加熱によるクラックを生じ、1,150℃以上に加熱されている試料はクラックに沿って溶融する組織が観察される。

カリ長石：17試料に少量～きわめて微量の範囲で存在する。各試料に含まれるカリ長石の最大粒径の平均は0.48mmで他形粒状または破片状を呈して包有されている。カリ長石には正長石・パーサイト・マイクロクリンがある。カリ長石の含有量比は原土を供給する後背地の地質と密接な関係を有し、花崗岩類が露出する地域で多く含有される。カリ長石は1,150℃前後の加熱で溶化し、焼成温度を推定する重要な指標の一つとなる。観察試料の中でも試料番号２、７、９、11、14、18、21、24では一部に微小の残晶がみられるが、大部分は完全に溶融してガラス化しているために溶化した外形でその存在を推定することになる。なお、試料番号１と５の２試料では鉱物片の周縁部および劈開に沿って溶化組織が認められ、試料番号３、６、27の３試料では周縁部に沿って微溶化している。これに対し試料番号４、８、12、30の４試料では加熱変化は認められない。

斜 長 石：全試料に少量～微量で存在する。各試料に含まれる斜長石の最大粒径の平均は0.51mmで破片板状または他形粒状を呈して包有されている。集片双晶が発達し、一部には火山岩源とみられる累帯組織が観察される。斜長石の一種の曹長石は1,130℃以上で加熱変化がみられ、1,200℃前後でムライトの存在が顕微鏡下で顕在化し、1,250℃前後ではムライトの結晶成長が顕著になるため、焼成温度を推定する重要な指標の一つとなる。観察試料では試料番号２、７、９、11、13、14、15、16、17、18、21、22、24の13試料にムライトの生成が認められ、長さ0.02mm以上の針状結晶を晶出している。

表１　胎土薄片観察結果

試料番号	器種	器形	遺跡名	遺構名	実測№	備考	鉱物片											岩片								素地鉱物					素地の性状				推定焼成温度（℃）	分類型
							石英	カリ長石	斜長石	黒雲母	白雲母	角閃石	緑簾石	単斜輝石	斜方輝石	ジルコン	不透明鉱物	チャート	砂岩	泥岩	凝灰岩	スコリア	流紋・デイサイト岩	安山岩	花崗岩	ムライト	セリサイト	石英	酸化鉄	酸化鉄結核	孔隙	色調	配向性	粘土量比	陶汰度		
1	須恵器	蓋	高瀬山遺跡SA	ST9525	29	RP115	△	＋	＋	±			±					＋～±	±	＋～±				＋				△～＋	○		△	○	○	○～△	△～＋	1,150～1,200	Ⅰ
2	須恵器	蓋	高瀬山遺跡SA	SK9613	38	RP187	△	＋	＋				±			±					△～＋	＋			△～＋	＋					○～△	○	○	△	＋	1,200℃±	Ⅱ
3	須恵器	坏	高瀬山遺跡SA	ST34	19	RP41	△	△～＋	＋								＋～±		＋		＋	＋		＋			△～＋	＋			△～＋	○	△	△	1150℃±	Ⅱ
4	須恵器	坏	高瀬山遺跡SA	34－188	115		△	＋	△～＋	±	±	±						＋			＋	＋					△～＋	△～＋		△～＋		＋	○	△	△	1,150℃－	Ⅱ
5	須恵器	高台坏	高瀬山遺跡SA	ST9728	27		△	＋	△									＋～±			△～＋						△～＋	○～△		○～△	○	○	△	△～＋	1,150℃－	Ⅰ
6	須恵器	皿	高瀬山遺跡SA	SK647	2	RP357	△	△～＋	＋	±											△～＋	＋				△～＋	△～＋				△	○	△	△	1,150℃±	Ⅱ
7	須恵器	横瓶	高瀬山遺跡SA	SK9578	1		△	＋	△～＋										＋		△～＋					△～＋	△～＋	＋			○	△～＋	△	△	1,200℃±	Ⅲ
8	須恵器	甕	高瀬山遺跡SA	ST9867	2	RP320	△～＋	＋～±	＋								＋～±		＋		＋				＋		△	△		＋		△～＋	＋	○～△	△	900℃±	Ⅳ
9	須恵器	甕	高瀬山遺跡SA	SE9606	8		△	＋	△～＋	△～＋									＋		＋					△～＋		△	○～△	△～＋	△	○	○	△～＋	△～＋	1,200℃±	Ⅰ
10	中世陶器	甕	高瀬山遺跡SA	SD9580	25		＋		△～＋								＋～±	＋		△～＋	＋						△	△～＋		＋		△～＋	＋	○～△	＋	900℃	Ⅳ
11	須恵器	坏	平野山窯跡	SQ1		RP388	△	＋	△～＋	＋									＋～±	＋～±	△～＋	＋			＋	△～＋		±	＋～±			○～△	＋	△	＋	1,200℃±	Ⅲ
12	須恵器	甕	平野山窯跡	SQ1			△～＋	＋	＋	＋							＋～±	＋		＋			＋	＋	△～＋		◎～○	±				△	○	△	＋	900℃	Ⅳ
13	窯壁		平野山窯跡	SQ1			△～＋		＋	＋		±		＋～±							△～＋					△		＋		＋	◎～○	△	＋	△	△	1,200～1,250	Ⅴ
14	須恵器	甕	平野山窯跡	SQ4		RP21	△～＋	＋	△～＋	＋										＋	△～＋	＋				△		±	△	＋	△	○	○	○～△	○～△	1,200～1,250	Ⅴ
15	須恵器	甕	平野山窯跡	SQ9		(SK9)	△		△～＋	＋									＋～±		＋	＋				○～△		±		＋	○～△	○～△	△	△～＋	△～＋	1,250℃±	Ⅲ
16	須恵器	坏	平野山窯跡	SQ33		RP821	＋		＋								＋～±	±			＋					○～△		＋～±		±	○	○	＋	○～△	○～△	1,250℃±	Ⅴ
17	須恵器	甕	平野山窯跡	SQ33		F5.6	△～＋		△～＋									＋	＋	＋～±	＋				＋	○～△		＋			＋	○～△	○～△	△	1,250℃±	Ⅱ
18	須恵器	甕	平野山窯跡	SQ46		RP220	△～＋	＋	△～＋	＋～±										＋	△～＋	＋				○～△		±	△	＋～±		○	＋	△	＋	1,200～1,250	Ⅲ
19	瓦	女瓦	オサヤズ窯跡	SQ1			△～＋		＋						±		＋～±	＋	＋	＋	＋		＋	±			△	＋		△～＋		△	△～＋	○～△	＋	900℃＋	Ⅳ′
20	瓦	女瓦	オサヤズ窯跡	SQ1			△～＋		＋			±		＋～±			＋～±			＋～±	＋	＋		＋			＋	△～＋		＋		○～△	＋	○～△	○～△	900℃＋	Ⅴ
21	瓦	女瓦	オサヤズ窯跡	SQ2			△～＋	＋	△～＋								＋			＋	＋	＋				△～＋		＋	△	＋	△	○	○	△	△	1,200～1,250	Ⅰ
22	窯壁		オサヤズ窯跡	SQ1			△～＋		＋										＋		＋			＋		△		＋～±			○	○～△	＋	△～＋	＋	1,200～1,250	Ⅴ
23	須恵器	坏	小松原窯跡	SQ1			△～＋		＋					＋～±			＋～±			＋			△～＋				△～＋	△～＋	△～＋	＋		△～＋	△	○	△～＋	900℃±	Ⅳ′
24	須恵器	坏	小松原窯跡	SQ2			△～＋	＋	＋								＋～±	±		＋～±	△～＋		＋	±		＋		△～＋	○～△	＋	△	○	○	△	△～＋	1,150～1,200	Ⅴ
25	瓦	女瓦	小松原窯跡	SQ3		T10	△～＋		＋			±		±			＋～±			＋			＋～±			◎～○	＋		△～＋	△	△	＋	○～△	△～＋	900℃	Ⅳ
26	須恵器	坏	三本木窯跡	SQ1		Y	＋		△～＋			±		＋～±	＋～±		＋～±			＋～±	＋	＋					＋	△	＋			○～△	△	○～△	○～△	900℃＋	Ⅳ′
27	須恵器	坏	三本木窯跡	SQ1		F1	△～＋	＋	＋			＋～±		±	＋～±		＋～±			＋		＋						△		±		△	＋	○～△	○～△	1,150℃±	Ⅳ′
28	赤焼土器	甕	三本木窯跡	SQ1		F1燃焼室	＋		＋			＋～±		＋～±	＋～±		＋～±				△			±			＋	＋	△	＋		○～△	＋	○～△	△	1,150℃－	Ⅴ
29	赤焼土器	甕	三本木窯跡	SQ1		F1	＋		＋			＋～±		＋～±	＋～±		＋～±			＋～±	△～＋			＋			◎	＋～±		±		△	△	○～△	△～＋	900℃－	Ⅳ′
30	赤焼土器	坏	三本木窯跡	SQ1		灰原F2	＋	＋	＋			＋～±					＋～±	＋～±		＋～±							◎	＋	＋	△～＋		△	△	○～△	△	900℃－	Ⅳ′

注
量比◎：多量　◎～○：多量～中量　○：中量　○～△：中量～少量　△：少量　△～＋：少量～微量　＋：微量　＋～±：微量～きわめて微量　±：きわめて微量
素地の性状
　素地の色調　○：濃色　○～△：濃色～中間　△：中間　△～＋：中間～淡色　＋：淡色
　素地の配向性　○：強い　○～△：強い～中程度　△：中程度　△～＋：中程度～弱い　＋：弱い
　素地の粘土量比　○：多い　○～△：多い～中程度　△：中程度　△～＋：中程度～少ない　＋：少ない
　淘汰度　○：良好　○～△：良好～中程度　△：中程度　△～＋：中程度～不良　＋：不良

黒 雲 母：10試料に含有が認められる。多くは微量～きわめて微量の範囲で含まれるが、例外的に試料番号９に少量～微量の黒雲母が含まれている。黒雲母は一般には褐色～濃褐色または赤褐色の多色性を有するが、原土中で風化作用を受けた黒雲母は加水雲母化して淡色化して多色性が弱くなり、また、高温焼成された黒雲母は黒色鉄鉱物化していることが多い。

角 閃 石：９試料に微量～きわめて微量で存在する。破片状または破片柱状を呈し、大部分は酸化角閃石化している。角閃石は約800℃以上の加熱で酸化角閃石に変質する性質があり、酸化角閃石の存在は少なくとも800℃以上で加熱されたことを示している。角閃石は次項の輝石類とともに安山岩質火成活動に伴って火山岩の構成鉱物となることの多い鉱物の一つである。

輝 石 類：輝石には単斜輝石と斜方輝石の二種がある。観察試料では単斜輝石は８試料に、斜方輝石も５試料に観察される。これらの輝石類は輝石安山岩または安山岩質火砕岩類に起源すると考えられている。

不透明鉱物：微量～きわめて微量の範囲で16試料に存在する。一部を除くと黒色鉄鉱物とみなされるものが多く、一部の柱状を呈するものは角閃石または黒雲母からの変質物の形状を示している。

２）岩石片

チャート：10試料中に微量～きわめて微量の範囲で含まれる。多くは粒径1.0mm以下の亜角礫状を呈し、最大粒は1.5mmの亜角礫状で含まれる。微晶質～細晶質石英の集合体で、いわゆる「非変成チャート」が多く、一部はカルセドニ質である。原土の供給後背地にはチャート層が発達する中―古生層が分布していることを示唆している。

砂　　岩：10試料に含まれる。石英質砂岩で、チャートとともに中―古生層を構成する地層の一部であると考えられる。

凝 灰 岩：24試料に少量～微量の範囲で観察される。新第三系と考えられる亜角礫～亜円礫状の凝灰岩片で、各試料に含まれる凝灰岩の最大粒径は2.40～0.30mmで平均的には1.0～0.5mmの粒径を示すことが多い。多くは非晶質であるが、一部はセリサイト化または珪長質鉱物化されている。

安 山 岩：９試料に微量～きわめて微量で検出される。ガラス基流晶質組織を示す安山岩、ガラス質安山岩、および変質安山岩の破片で、各試料に含まれる安山岩の最大粒径は0.90～0.10mm、平均最大粒径は0.44mmである。

流紋岩・デイサイト：流紋岩またはデイサイトとみなされる火山岩片は計５試料に少量～微量で観察される。流紋岩・デイサイトは球顆組織または放射組織を示し、一部は火山ガラス岩状で、晶子が析出したガラス質岩の破片として検出される。

花崗岩類：５試料に少量～微量の範囲で検出される。各試料に含まれる花崗岩類は亜

角礫状を呈する。最大粒径は1.2～0.60mm、平均最大粒径は0.84mmである。いずれも石英・カリ長石・斜長石で構成される深成岩の岩片で、小片であるために鉱物組み合わせは必ずしも忠実に原岩の岩質を表しているとはいえないために花崗岩類とした。胎土中の石英・カリ長石・黒雲母・ジルコン等は花崗岩に由来する鉱物が大半であると考えられる。

泥　　岩：少量～微量の範囲で17試料に存在する。最大粒径0.80mmの粒径を示すが、大部分は0.5mm以下の円礫状を呈している。非晶質粘土で構成されるものが多い。一部はスメクタイト質粘土鉱物で構成されている組織を残存している。泥岩とした岩片は前途の頁岩と異なり、新第三紀以降の非変成の新期堆積岩または未固結物質で含鉄質粘土であることが多い。

スコリア：12試料に微量で検出される。粒径最大2.0mm、平均最大粒径0.77mmの亜円礫状を呈する多孔質黒色ガラス質物質で構成される。含鉄質のものが多く、一部は焼成時に赤鉄鉱化している。しばしば斜長石や単斜輝石などの砕宵片を包有する。明確な発泡組織がみられず安山岩質凝灰岩の疑いがもたれるものもある。

石英片岩：きわめて微量で１試料（試料番号30）に認められる。粒径最大0.30mmの亜角礫状を呈する。片理組織が発達している細晶質石英で構成されている。

3）基　質

石　　英：全試料の基質粘土中には0.02mm以下の石英破片が少量～きわめて微量の範囲で存在し、少量～微量で存在すると粘土は砂質となる。

粘土鉱物(セリサイト)：セリサイトは鉱物学的には白雲母と同質の鉱物であるが、素地を構成する重要な粘土鉱物の一つであるが、高温焼成で加熱変化を受け易く、溶化または非晶質化しているため、焼成物ではその確認は困難な鉱物となる。観察試料のうち14試料ではセリサイトとしての光学性が保持されたまま残存して観察され、とくに試料番号29、30の２試料ではほとんど加熱変化がみられない。

セリサイトはＸ線回折試験では900℃前後で非晶質化するのが通常で、セリサイトの大部分が残存する現象は比較的低温で焼成されたことを証明する指針とされる。観察試料でみられるセリサイトは素地を構成する粘土の主構成鉱物で、酸化鉄を含み、着色されているものが多い。一般的な土師器はこの種の含鉄粘土を使用しているものが大部分で、須恵器は含鉄種と鉄分が少ない試料の二種が認められている。

酸 化 鉄：胎土の外観が赤味または暗赤色を帯びる試料に含まれる。粘土中の含水酸化鉄（褐鉄鉱）は、実験的には320～350℃の加熱で脱水して赤鉄鉱に移転し、焼成物中では結核状および鉱染状を呈する赤鉄鉱として存在する。堆積時に原料粘土中に水酸化鉄として含まれるものは、焼成時に酸化鉄に変

化して鉱物粒子の粒間を埋め、膠結することから比較的低温で焼結すると考えられる。観察試料では試料番号１、５、９、14、18、21、24、28の８試料の含鉄量が高い。

酸化鉄結核：素地に不純物として含まれる鉄分が濃集した結核は高温で加熱されると、濃赤褐色～鮮赤色となり、周縁の石英等の鉱物片を包有して膠結する現象がみられる。不規則形を呈し、核として黒色不透明鉱物が残存し、円形の空隙を生じていることも多い。空隙を多く生ずるものは鉄分の多い原土を組成に応じた適温を越えて加熱した試料に多くみられる。なお、濃赤褐色～鮮赤色結核中には微細な赤鉄鉱が生成されている。観察試料では試料番号４、９、19、25、30の５試料に比較的多くの結核が含まれる。

４）推定焼成温度

一般的に粘土を高温焼成すると、その温度条件と化学組成に対応した鉱物の晶出（代表的な鉱物はムライト)、溶融･非晶質化などの現象がみられる。観察試料では、焼成温度の推定に次の現象について検討して指針として適用した。

１）角閃石が酸化角閃石に変化している試料は800℃以上の加熱を受けている。

２）素地を構成する主要粘土鉱物のセリサイトが加熱変化を受けていない試料の焼成温度は900℃－と推定される。

３）セリサイトの一部は加熱変化を受けて非晶質化しているが、大部分は残留している状態を900℃±の焼成温度と推定する。

４）セリサイトの大部分は加熱変化を受けて非晶質化しているが、石英・長石類に加熱変化がみられない試料の焼成温度は900℃＋と見積もる。

５）セリサイトは加熱により非晶質化しているが、石英・長石類に加熱変化がみられない試料の焼成温度は1,150℃－と推定される。

６）石英に高温焼成で生じたクラック（高温クラック）がみられ、カリ長石の周縁部が微溶化している状態の試料の焼成温度は1,150℃±と推定される。

７）石英に高温クラック・溶融組織がみられ、カリ長石に顕著な溶融組織が認められるが、曹長石のムライト化は明瞭ではない試料の焼成温度は1,150～1,200℃と推定される。

８)ムライトの生成が褐色リムまたは短針状で確認される試料の焼成温度を1,200℃±と推定する。

９）針状ムライトが粗に生成している試料は1,200～1,250℃の焼成温度と見積もられる。

10）針状ムライトが密に生成している試料は1,250℃±の焼成温度と見積もられる。

一覧表には上記の現象を基準として各試料を推定焼成温度別に区別して表示した。焼成温度別には次のように判定される。

900℃－の試料（２試料）　　：試料番号29、30

900℃±（２試料）　　：試料番号12、25
900℃＋（６試料）　　：試料番号８、10、19、20、23、26
1,150℃－（３試料）　　：試料番号４、５、28
1,150℃±（３試料）　　：試料番号３、６、27
1,150～1,200℃（２試料）　：試料番号１、24
1,200℃±（４試料）　　：試料番号２、７、９、11
1,200～1,250℃±（５試料）　：試料番号13、14、18、21、22
1,250℃±（３試料）　　：試料番号15、16、17

ただし、試料番号２、５、13、15、16、22の各試料は焼成時に素地が発泡して生じた孔隙が多くみられ、過焼成状態であると判定される。

５）薄片観察による胎土の分類

顕微鏡下で観察される胎土の焼成温度、色調、粒度、淘汰の程度をもとに試料は次のI～V型に区分され、IV型にはこれに準ずるIV′亜型が認められる。主な特徴は次の通りである。

I　：含鉄質で配向性が強く、濃赤褐色の縞状組織を示す。
II　：比較的淡色系で淘汰性が不良で、砕屑片が比較的多く含まれる組織を示す。
III　：濃色系で配向性が弱く、比較的高温焼成された組織を示す。
IV　：淡色系で微細な粘土で構成され、大型の砕屑片に乏しい組織を示す。
IV′：組織IV型に準ずるが、粘土の粒度がやや粗い。
V　：その他のタイプ

蛍光Ｘ線分析

化学組成を表２に、計算の途上で得られる原土の推定化学組成（補正化学組成）を表３に、表３の値をもとに計算される粘土ノルム鉱物組成を表４に揚げた。また、粘土ノルム鉱物組成計算をもとに、石英－粘土鉱物－長石類、カオリン－セリサイト－その他の粘土鉱物（緑泥石）の各三角ダイアグラムをそれぞれ図１、図２に示した。

石英－粘土鉱物－長石類三角ダイアグラムでは、出土地による組成の差違はほとんどみられない。しかし、カオリン－セリサイト－その他の粘土鉱物三角ダイアグラムでは出土地により異なる傾向がみられ、高瀬山遺跡SAおよび小松原窯跡では比較的組成が集中しているが、平野山窯跡と三本木窯跡の試料では分散が著しく、オサヤズ窯跡の試料でも二種類に分かれた。

４．考　　察

高瀬山遺跡SA出土の須恵器では、鉱物片と岩片の産状に試料間で明瞭な差異は認められない。また、前途のように粘土ノルム鉱物組成においても試料間に大きな違いはない。このことは、高瀬山SA遺跡から出土した須恵器がいずれも共通した地質学的背景をもつ地域内で生産されたことを示唆する。特徴となる鉱物片は石英、カリ長石、斜長石であり、岩片では凝灰岩であ

る。これまでに分析した高瀬山遺跡（２期）出土の須恵器および今回同時に分析を行っている三条遺跡出土の須恵器は、いずれも今回の須恵器と同様の鉱物片・岩片の産状を示す。また、試料によっては鉱物片では黒雲母が微量伴われ、岩片ではチャート、スコリアおよび花崗岩が微量伴われることも上記３つの分析例に共通する。さらに、粘土ノルム鉱物組成においても高瀬山遺跡SA出土須恵器と三条遺跡出土須恵器はよく類似する。これらのことから、高瀬山遺跡（２期）、高瀬山遺跡SAおよび三条遺跡の各遺跡から出土した須恵器は、いずれも同一地域内で製作された可能性が高い。この場合の「地域」とは、現段階では半径何kmのように特定することはできないが、概ね山形盆地北東部という程度の範囲を想定している。胎土中の鉱物片や岩片は、土器の材料として採取された河成の粘土層や砂層中に含まれていたと考えれば、上記各遺跡出土の須恵器に含まれている鉱物片や岩片の種類構成からは、凝灰岩が広く分布し、チャートや花崗岩が局地的に分布するような地域を流れる河川沿いの地域が推定される。高瀬山遺跡や三条遺跡は最上川河畔に位置するが、最上川が流れている地域の地質（日本の地質「東北地方」編集委員会、1989）は、ほぼこのような地質に相当する。すなわち、最上川最上流部には、チャートを含む山形－福島県境を構成する飯豊山地の古生層があり、上流部には左岸に朝日山地、右岸に長井付近のともに白亜紀の花崗岩類が分布している。そして流域にはいわゆるグリーンタフと呼ばれる新第三紀の凝灰岩が広く分布している。高瀬山遺跡が位置する最上川中流域周辺の仲積層中には上記の各岩石に由来する鉱物片や岩片が混在し、今回観察した須恵器胎土における鉱物片、岩片の産状に近いものとなっている可能性が高い。実際に今回同時に分析を行った平野山窯跡より出土した須恵器７点のうち５点までが、鉱物片と岩石片の産状および粘土ノルム鉱物組成ともに上記各遺跡出土須恵器とよく類似することが確かめられた。現階段では、高瀬山遺跡や三条遺跡出土須恵器の生産地を全て平野山窯跡群に特定することはできないが、平野山窯跡群を含む山形盆地中部地域で製作されたものである可能性は高い。ただし、後述するように平野山窯跡群出土須恵器の中には、粘土ノルム鉱物組成において大きく異なる胎土も存在することから、平野山窯跡群で製作された土器が全て高瀬山遺跡に供給されていたとはいえない。なお、胎土薄片観察による分類の基準である粘土における鉄含量の違いや焼成温度の違いは、より詳細な製作地または製作者の技術の違いを示唆していると考えられる。また、中世陶器である試料番号10については、鉱物片と岩片の産状においてカリ長石が認められないことと泥岩がやや多い傾向が認められるが、凝灰岩やチャートなどの産状と粘土ノルム鉱物組成は須恵器試料と大きく違わない。このことは、中世陶器についてもその製作地は山形盆地中部付近にあることを示唆している。

一方。各窯跡出土の試料では、鉱物片と岩片の産状および粘土ノルム鉱物組成を合わせてみることで、高瀬山遺跡出土試料との関係を考えることができる。平野山窯跡群出土須恵器では、上述のように粘土ノルム鉱物組成において少なくとも３種類の胎土が存在する（図２）。７点中５点は高瀬山遺跡出土試料と類似の組成であるが、試料番号15の甕と試料番号16の坏はともに他の５点とは大きく異なる組成を示す。これらのうち、試料番号15の粘土ノルム鉱物組成は、試料番号13の窯壁の試料の組成と類似する。以上のことから、平野山窯跡群で製作された須恵器

が高瀬山遺跡に供給されていた可能性は高いが、平野山窯跡群で製作されていた須恵器の中には、高瀬山遺跡や三条遺跡には供給されなかったものもあったといえる。

オサヤズ窯跡の試料は瓦であり、須恵器とは胎土の質が異なるのは当然であるが、それでも鉱物片や岩片の産状や粘土ノルム鉱物組成が胎土の地質学的背景すなわち材料となる粘土や砂の採取地を示唆していることには変わらない。したがって、須恵器胎土との比較に意味がないわけではない。オサヤズ窯跡出土の瓦の胎土における鉱物片と岩片の産状は、高瀬山遺跡出土須恵器のそれと大きく異なることはないが、カリ長石がほとんど認められないことと角閃石や輝石類および流紋岩・デイサイトが微量でも認められることに差異が感じられる。さらに、粘土ノルム鉱物組成では、高瀬山遺跡出土須恵器との違いはより明瞭に認められる。したがって、オサヤズ窯跡と高瀬山遺跡との関係は希薄であると判断される。なお、粘土ノルム鉱物組成から、オサヤズ窯跡の窯壁に使用された土は、そこで瓦に使用された土とは異なるものであるといえる。

小松原窯跡出土の須恵器は、鉱物片と岩片の産状においてカリ長石がほとんど含まれないことと微量または少量の流紋岩・デイサイトが含まれることで高瀬山遺跡出土の須恵器とは区別される。また、粘土ノルム鉱物組成でも高瀬山遺跡出土の須恵器との違いは比較的明瞭である。したがって現段階では、小松原窯跡で製作された須恵器が高瀬山遺跡に供給されていた可能性は低いといえる。なお、小松原窯跡で製作された瓦の胎土は須恵器の胎土と同質である。

三本木窯跡出土の須恵器は、鉱物片の産状においてカリ長石がほとんど含まれないことと角閃石、両輝石および不透明鉱物が微量含まれることが特徴である。これらの特徴は、高瀬山遺跡出土須恵器には認められない。粘土ノルム鉱物組成では類似する傾向が認められるものの、やはり三本木窯跡で製作された須恵器の胎土と高瀬山出土須恵器の胎土とは異なると判断される。したがって、三本木窯跡で製作された須恵器が高瀬山遺跡に供給されていた可能性は低い。三本木窯跡の赤焼土器については、鉱物片と岩片の産状および粘土ノルム鉱物組成のうち粘土鉱物の三角ダイアグラムにおいて赤焼土器の方がカオリンの量比が若干高い傾向が認められる。このことは、三本木窯跡において須恵器と赤焼土器では素地土の調整が異なっていたことを示唆するのかも知れない。

引用文献

五十嵐俊雄（1983）マイクロコンピュータによる粘土ノルム計算について．未開発陶磁器原料資源調査報告書（昭和57年度），p.119-136，地質調査所.
日本の地質「東北地方」編集委員会（1989）日本の地質２　東北地方．338p.，共立出版.

表２　蛍光Ｘ線分析結果（化学組成）

№.	遺跡名	Si02	Ti02	Al203	Fe203	Mn0	Mg0	Ca0	Na20	K20	P205	Ig. Loss	合計
1	高瀬山遺跡SA	69.11	0.85	20.45	5.21	0.01	0.93	0.35	1.19	1.88	0.02	0.00	100.00
2		67.23	0.76	19.88	5.91	0.01	0.99	0.47	1.23	2.13	0.07	1.32	100.00
3		65.52	0.80	20.40	7.04	0.02	1.02	0.46	1.32	1.90	0.03	1.50	100.01
4		63.55	0.82	20.26	7.02	0.02	0.94	0.37	0.94	1.83	0.11	4.15	100.01
5		67.77	0.84	20.20	5.66	0.00	0.86	0.42	1.08	1.77	0.02	1.37	99.99
6		66.68	0.81	20.74	6.39	0.02	0.97	0.45	1.45	1.93	0.05	0.51	100.00
7		72.99	0.87	17.71	4.49	0.01	0.84	0.31	0.91	1.86	0.02	0.00	100.01
8		73.62	1.02	17.61	4.70	0.01	0.75	0.15	0.72	1.33	0.10	0.00	100.01
9		67.57	0.75	20.59	5.99	0.01	1.11	0.49	1.36	2.12	0.02	0.00	100.01
10		70.94	1.10	20.70	3.71	0.01	0.97	0.28	0.59	1.67	0.04	0.00	100.01
11	平野山遺跡	71.05	0.72	19.53	4.40	0.02	0.96	0.46	0.93	1.90	0.03	0.00	100.00
12		70.51	0.75	20.08	5.02	0.01	1.02	0.33	0.59	1.65	0.03	0.00	99.99
13		69.43	0.61	17.80	4.26	0.06	1.30	0.93	1.65	2.96	0.05	0.93	99.98
14		68.70	0.75	21.66	4.58	0.01	1.20	0.41	0.75	1.94	0.01	0.00	100.01
15		67.14	0.76	19.33	4.89	0.04	0.91	1.11	1.15	3.29	0.05	1.31	99.98
16		65.57	0.82	20.31	6.70	0.02	0.93	0.64	1.23	2.81	0.04	0.93	100.00
17		68.73	0.85	21.70	4.85	0.01	0.80	0.26	0.77	1.99	0.04	0.00	100.00
18		69.47	0.72	20.82	4.50	0.02	1.11	0.68	0.84	1.79	0.03	0.00	99.98
19	オサヤズ窯跡	65.13	1.23	22.56	8.85	0.02	0.62	0.22	0.29	1.06	0.02	0.00	100.00
20		64.73	1.24	22.07	8.39	0.02	0.66	0.20	0.34	1.09	0.02	1.22	99.98
21		66.99	1.13	22.33	7.03	0.02	0.61	0.33	0.32	1.23	0.02	0.00	100.01
22		66.49	0.93	17.22	9.64	0.10	1.14	1.64	1.11	1.65	0.09	0.00	100.01
23	小松原窯跡	66.00	1.18	21.78	6.73	0.01	0.73	0.44	0.72	1.06	0.04	1.31	100.00
24		65.71	1.12	21.25	7.05	0.06	0.83	0.45	0.64	1.05	0.01	1.82	99.99
25		63.37	1.29	22.15	4.89	0.01	0.52	0.23	0.55	1.07	0.02	5.89	99.99
26	三本木窯跡	69.57	1.17	19.67	4.07	0.02	1.06	0.48	1.20	1.76	0.04	0.98	100.02
27		64.54	1.22	21.82	5.04	0.04	1.15	0.54	1.05	1.59	0.05	2.97	100.01
28		60.31	1.30	21.89	7.86	0.04	0.97	0.49	0.86	1.18	0.14	4.98	100.02
29		56.37	1.11	21.21	4.47	0.02	0.77	0.37	0.73	0.96	0.13	13.86	100.00
30		57.28	1.06	19.55	4.61	0.04	0.76	0.34	1.19	1.27	0.07	13.81	99.98

＊単位は重量％

表３　補正化学組成

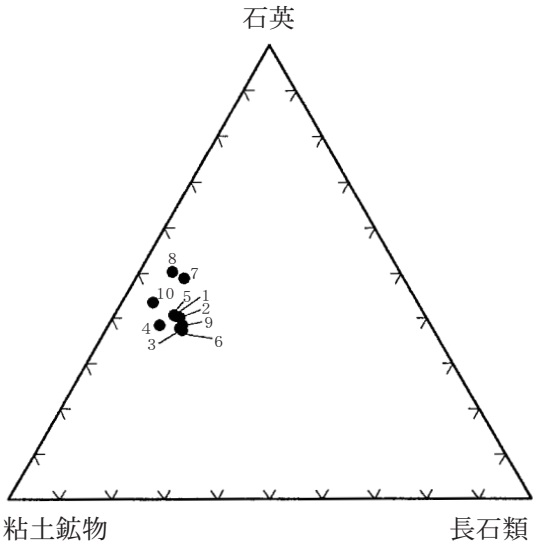
№.	遺跡名	Si02	Ti02	Al203	Fe203	Fe0	Mg0	Ca0	Na20	K20	P205	H20+	合　計
1	高瀬山遺跡SA	65.42	0.81	19.36	4.93	0.01	0.88	0.33	1.13	1.78	0.02	5.34	100.00
2		64.67	0.73	19.12	5.69	0.01	0.95	0.45	1.18	20.5	0.07	5.08	100.00
3		62.88	0.77	19.58	6.75	0.02	0.98	0.44	1.27	1.82	0.03	5.46	100.00
4		62.37	0.81	19.89	6.89	0.02	0.92	0.36	0.92	1.80	0.11	5.92	100.00
5		64.97	0.81	19.36	5.43	0.00	0.82	0.40	1.04	1.70	0.02	5.46	100.00
6		63.41	0.77	19.73	6.08	0.02	0.92	0.43	1.38	1.84	0.05	5.38	100.00
7		69.65	0.83	16.90	4.29	0.01	0.80	0.30	0.87	1.77	0.02	4.56	100.00
8		69.81	0.97	16.70	4.46	0.01	0.71	0.14	0.68	1.26	0.10	5.16	100.00
9		64.08	0.71	19.53	5.68	0.01	1.05	0.47	1.29	2.01	0.02	5.16	100.00
10		66.84	1.04	19.50	3.50	0.01	0.91	0.26	0.56	1.57	0.04	5.78	100.00
11	平野山遺跡	67.47	0.68	18.55	4.18	0.02	0.91	0.44	0.88	1.80	0.03	5.03	100.00
12		66.49	0.71	18.94	4.74	0.01	0.96	0.31	0.56	1.56	0.03	5.70	100.00
13		67.88	0.59	17.40	4.16	0.06	1.27	0.91	1.61	2.89	0.05	3.15	100.00
14		64.68	0.71	20.39	4.31	0.01	1.13	0.38	0.71	1.83	0.01	5.84	100.00
15		65.60	0.74	18.88	4.78	0.04	0.89	1.09	1.12	3.21	0.05	3.60	100.00
16		63.09	0.79	19.54	6.45	0.02	0.89	0.61	1.18	2.70	0.04	4.67	100.00
17		64.68	0.80	20.42	4.57	0.01	0.75	0.24	0.73	1.87	0.04	5.88	100.00
18		65.68	0.68	19.68	4.26	0.02	1.05	0.64	0.79	1.69	0.03	5.47	100.00
19	オサヤズ窯跡	60.32	1.14	20.89	8.20	0.02	0.57	0.21	0.27	0.98	0.02	7.38	100.00
20		60.79	1.17	20.73	7.88	0.02	0.62	0.19	0.32	1.02	0.02	7.25	100.00
21		62.33	1.05	20.78	6.54	0.02	0.57	0.31	0.30	1.14	0.02	6.95	100.00
22		63.63	0.89	16.48	9.23	0.10	1.09	1.57	1.06	1.58	0.09	4.30	100.00
23	小松原窯跡	62.39	1.12	20.59	6.36	0.01	0.69	0.41	0.68	1.00	0.04	6.71	100.00
24		62.49	1.06	20.21	6.70	0.06	0.79	0.43	0.61	1.00	0.01	6.65	100.00
25		62.56	1.27	21.87	4.83	0.01	0.51	0.23	0.54	1.06	0.02	7.11	100.00
26	三本木窯跡	66.69	1.12	18.86	3.90	0.02	1.02	0.46	1.15	1.69	0.04	5.06	100.00
27		62.42	1.18	21.10	4.88	0.04	1.11	0.52	1.02	1.54	0.05	6.14	100.00
28		58.99	1.27	21.41	7.69	0.04	0.95	0.48	0.84	1.15	0.14	7.04	100.00
29		60.62	1.19	22.81	4.80	0.02	0.83	0.40	0.79	1.03	0.14	7.37	100.00
30		62.32	1.15	21.27	5.02	0.05	0.83	0.37	1.29	1.38	0.08	6.24	100.00

＊単位は重量％

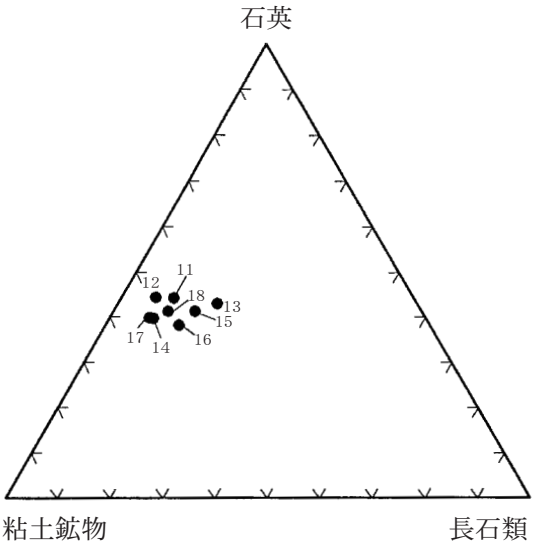
表４　粘土ノルム鉱物組成

No.	遺跡名	石　英	曹長石	灰長石	カオリン	セリサイト	緑泥石	褐鉄鉱	イルメナイト	ルチル	リン灰石	その他	合　計
1	高瀬山遺跡SA	37.97	9.53	1.52	27.15	15.05	2.42	5.49	0.02	0.80	0.05	0.00	100.00
2		37.26	10.01	1.80	23.75	17.32	2.63	6.33	0.02	0.72	0.16	0.00	100.00
3		34.60	10.72	2.01	26.19	15.42	2.70	7.51	0.04	0.75	0.07	0.00	100.00
4		35.09	7.80	1.10	29.53	15.19	2.54	7.67	0.04	0.79	0.26	0.00	100.00
5		37.88	8.76	1.87	27.97	14.35	2.27	6.04	0.00	0.81	0.05	0.00	100.00
6		34.54	11.67	1.82	26.24	15.52	2.54	6.76	0.04	0.75	0.11	0.00	100.00
7		46.13	7.35	1.35	22.30	15.01	2.21	4.77	0.02	0.82	0.05	0.00	100.00
8		47.27	5.78	0.09	28.70	10.67	1.96	4.96	0.02	0.96	0.23	0.00	100.00
9		35.75	10.91	2.18	24.16	17.00	2.90	6.32	0.02	0.70	0.05	0.00	100.00
10		41.43	4.70	1.06	31.97	13.30	2.52	3.89	0.02	1.03	0.08	0.00	100.00
11	平野山遺跡	41.91	7.47	1.98	25.43	15.26	2.52	4.65	0.04	0.66	0.07	0.00	100.00
12		41.73	4.71	1.36	30.34	13.16	2.65	5.27	0.02	0.70	0.07	0.00	100.00
13		40.74	13.65	4.19	8.03	24.47	3.51	4.63	0.13	0.53	0.12	0.00	100.00
14		37.57	5.98	1.85	30.50	15.45	3.12	4.80	0.02	0.70	0.02	0.00	100.00
15		38.72	9.51	5.06	10.87	27.18	2.45	5.31	0.09	0.69	0.12	0.00	100.00
16		35.21	10.02	2.80	18.57	22.86	2.46	7.18	0.04	0.77	0.09	0.00	100.00
17		37.58	6.14	0.97	31.42	15.84	2.08	5.08	0.02	0.79	0.08	0.00	100.00
18		39.08	6.72	3.01	28.48	14.31	2.89	4.74	0.04	0.66	0.07	0.00	100.00
19	オサヤズ窯跡	34.48	2.27	0.89	42.15	8.30	1.58	9.12	0.04	1.12	0.05	0.00	100.00
20		34.93	2.70	0.81	41.18	8.66	1.71	8.77	0.04	1.15	0.05	0.00	100.00
21		36.52	2.52	1.40	39.93	9.68	1.56	7.28	0.04	1.03	0.05	0.00	100.00
22		39.76	8.99	7.23	16.21	13.35	3.01	10.27	0.20	0.78	0.20	0.00	100.00
23	小松原窯跡	35.28	5.76	1.82	38.48	8.47	1.90	7.08	0.02	1.11	0.09	0.00	100.00
24		36.07	5.15	2.06	37.49	8.44	2.18	7.45	0.12	1.00	0.02	0.00	100.00
25		34.53	4.59	1.00	42.83	8.93	1.41	5.37	0.02	1.26	0.05	0.00	100.00
26	三本木窯跡	39.71	9.73	2.03	25.89	14.27	2.80	4.34	0.04	1.10	0.09	0.00	100.00
27		33.28	8.59	2.27	33.02	13.01	3.07	5.43	0.09	1.13	0.12	0.00	100.00
28		30.21	7.12	1.49	38.62	9.76	2.61	8.56	0.09	1.22	0.32	0.00	100.00
29		30.44	6.65	1.06	43.94	8.73	2.28	5.34	0.04	1.17	0.33	0.00	100.00
30		31.98	10.96	1.34	34.79	11.68	2.28	5.58	0.10	1.10	0.18	0.00	100.00

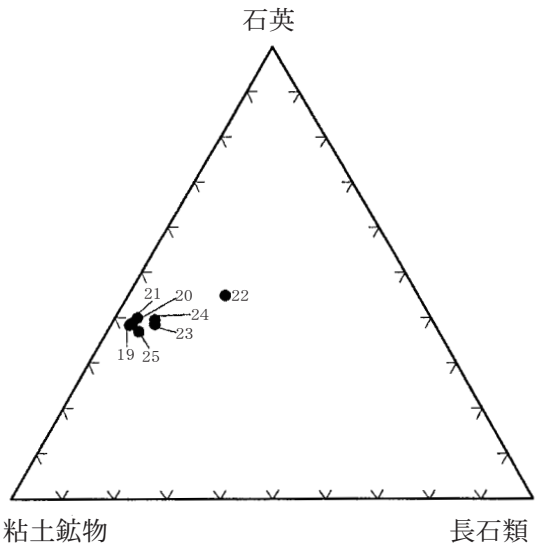
＊単位は重量％



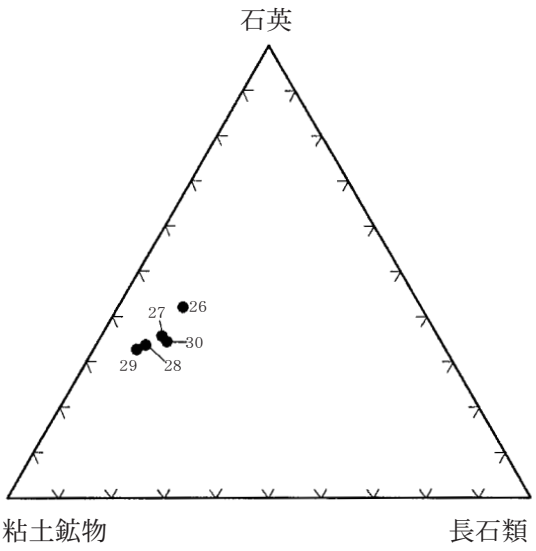
高瀬山遺跡SA



平野山窯跡

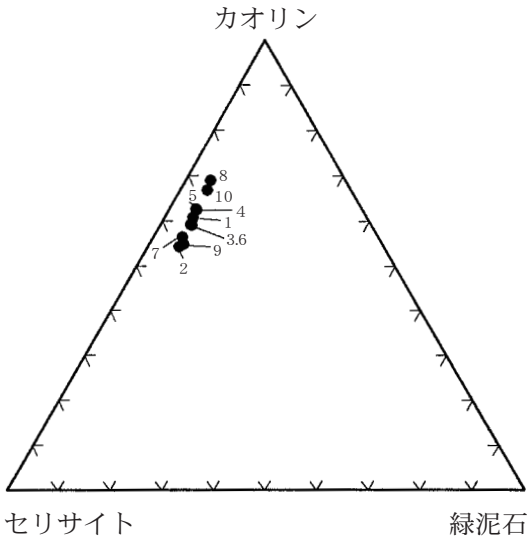


オサヤズ窯・小松原窯跡

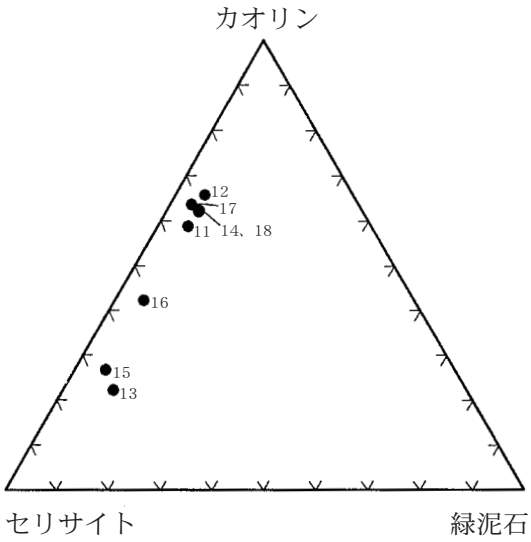


三本木窯跡

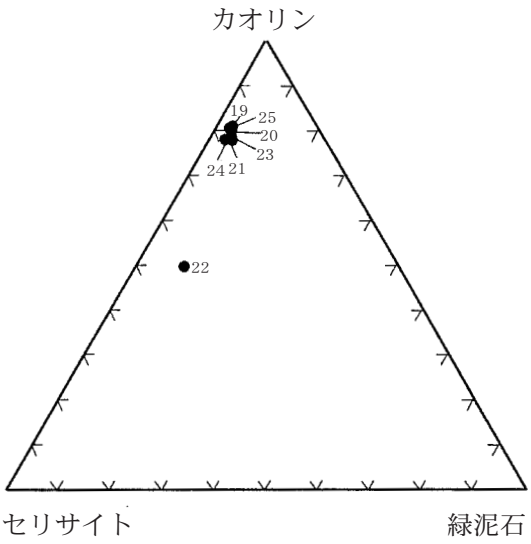
図１　石英－粘土鉱物－長石類の三角ダイアグラム



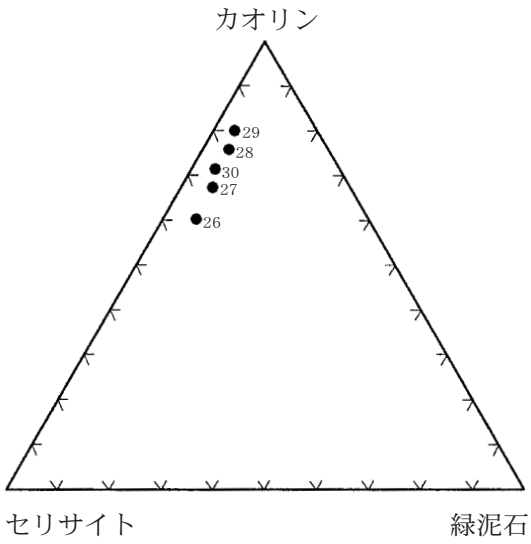
高瀬山遺跡SA



平野山窯跡



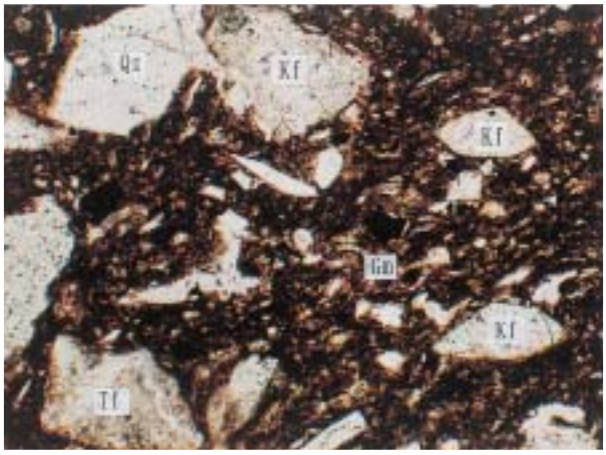
オサヤズ窯・小松原窯跡

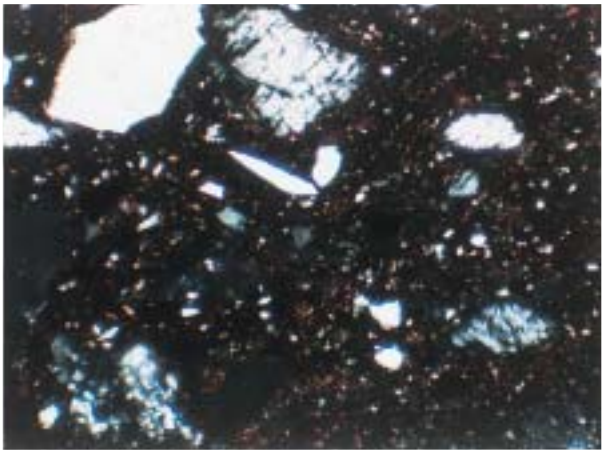


三本木窯跡

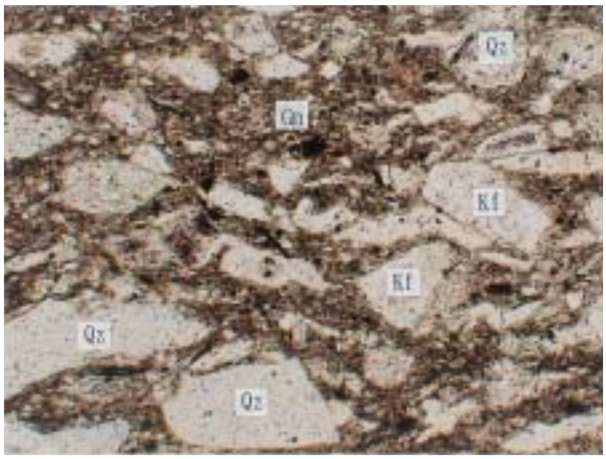
図２　粘土鉱物の三角ダイアグラム

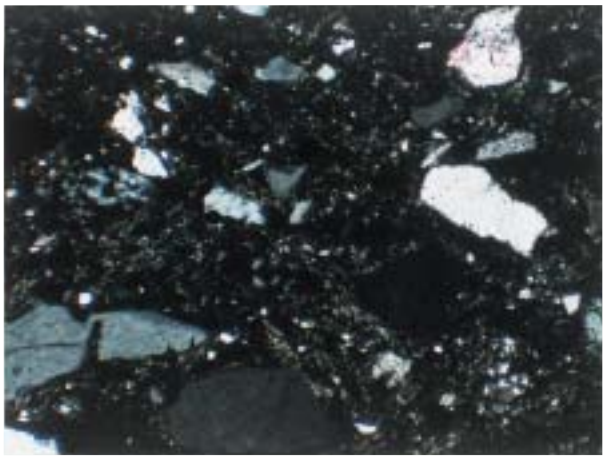
図版１　胎土薄片（１）



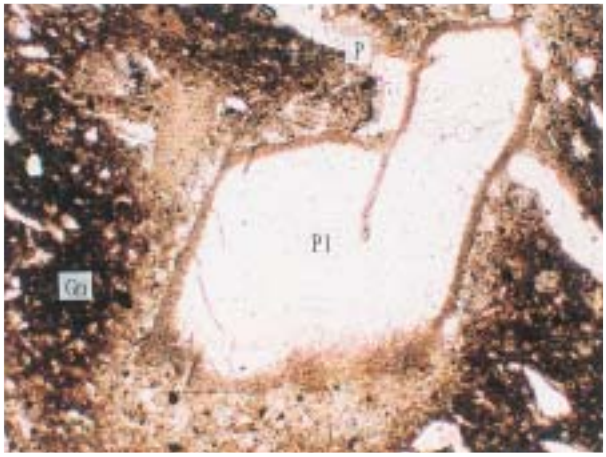


1. 高瀬山遺跡ＳＡ　ST9525　須恵器　蓋　実測№29　試料番号1　Ⅰ型



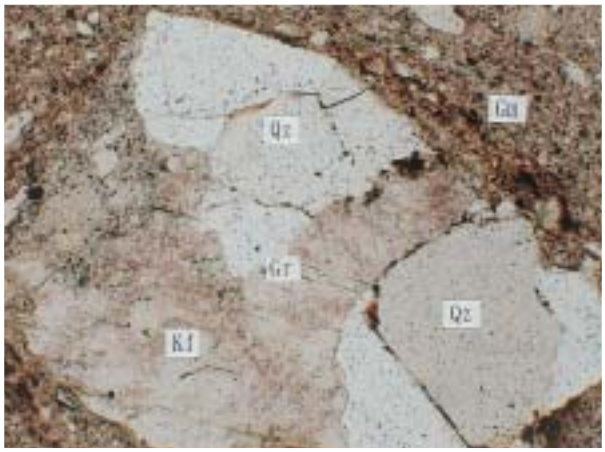


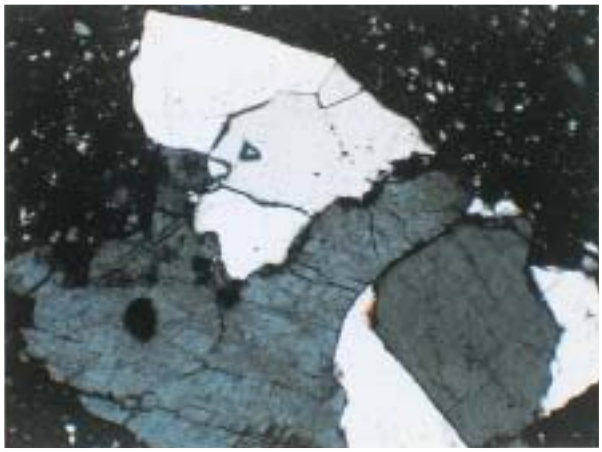
2. 高瀬山遺跡ＳＡ　ST34　須恵器　坏　実測№19　試料番号3　Ⅱ型



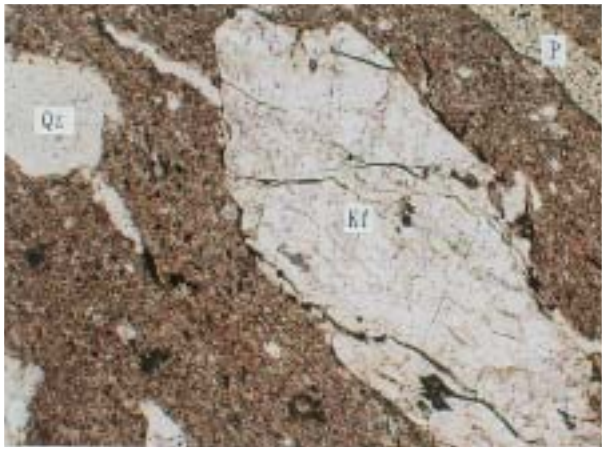
3. 高瀬山遺跡ＳＡ　SK9578　須恵器　横瓶　実測№１　試料番号7　Ⅲ型

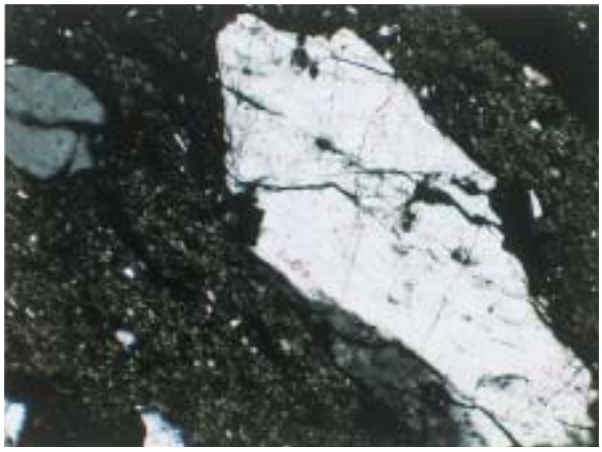
図版２　胎土薄片（２）



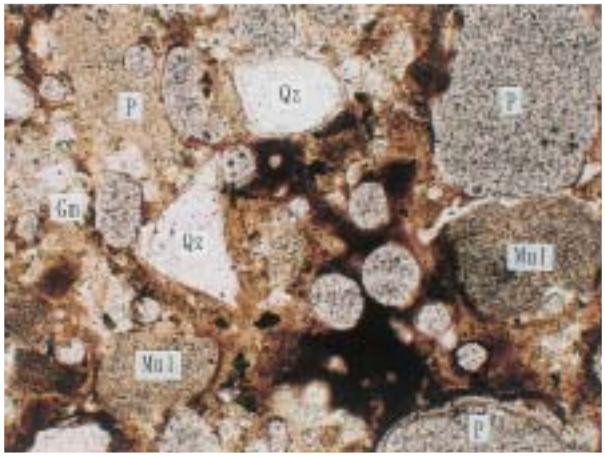


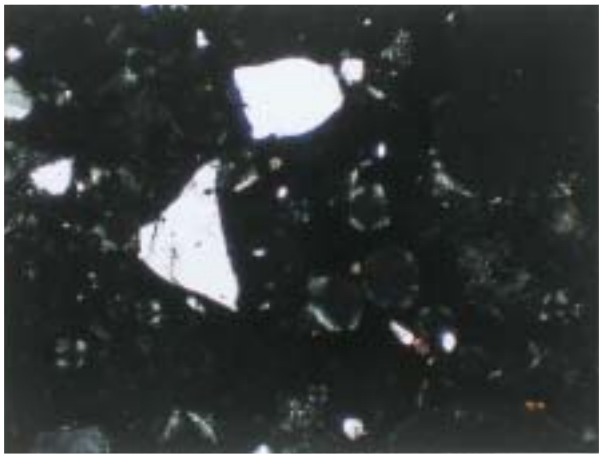
4. 高瀬山遺跡ＳＡ　ST9867　須恵器　甕　実測№.２　試料番号8　Ⅳ型



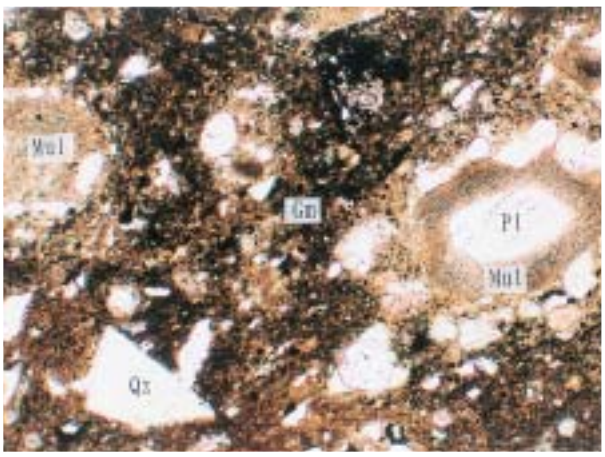


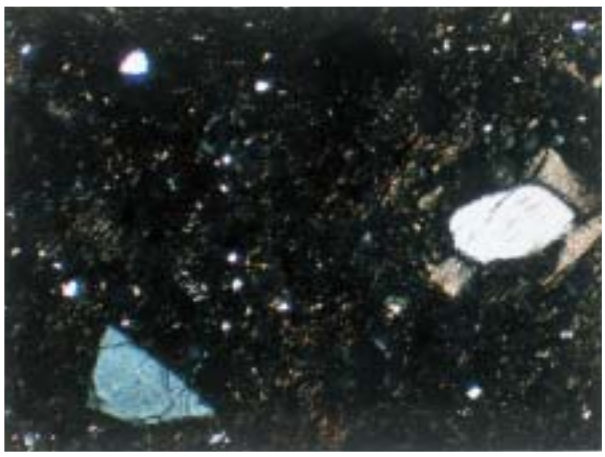
5. 平野山窯跡　SQ1　須恵器　甕　試料番号12　Ⅳ型



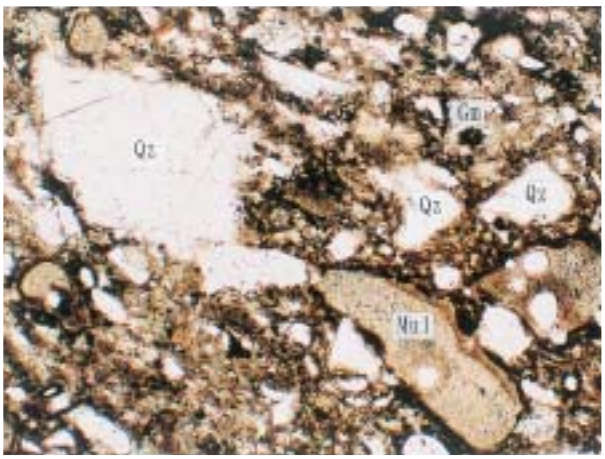


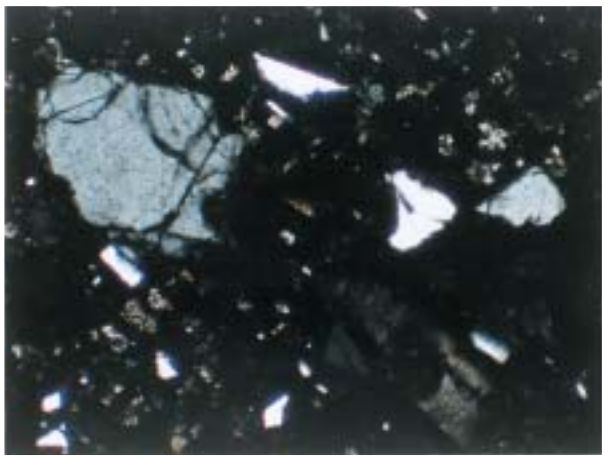
6. 平野山遺跡　SQ1　窯壁　試料番号13　Ｖ型



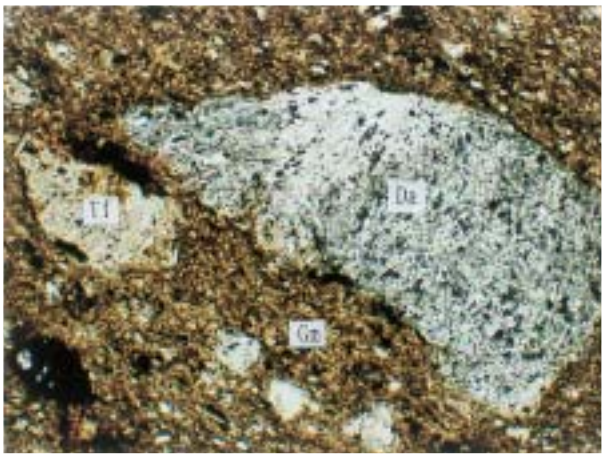


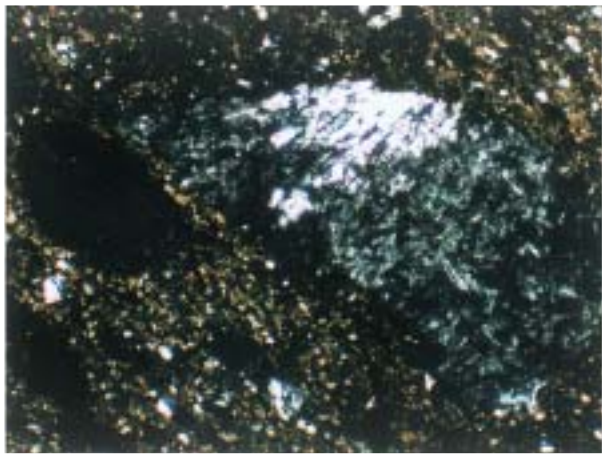
7. 平野山窯跡　SQ9　須恵器　甕　試料番号15　Ⅲ型





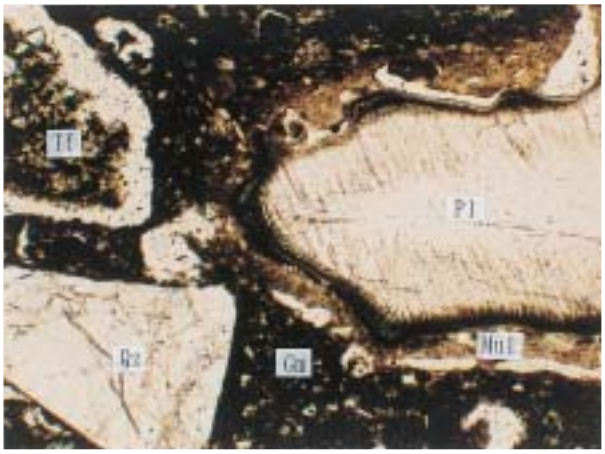
8. 平野山窯跡　SQ33　須恵器　甕　試料番号17　Ⅱ型



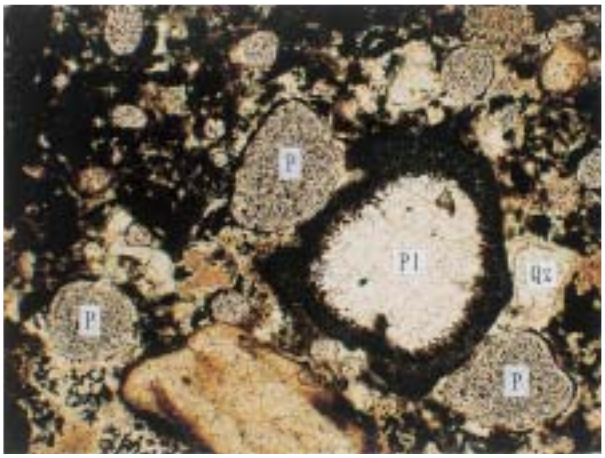


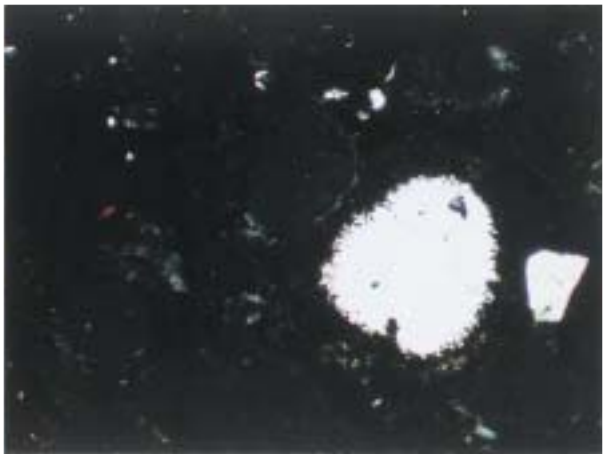
9. オサヤズ窯跡　SQ1　瓦　女瓦　試料番号19　Ⅳ’型

図版４　胎土薄片（４）

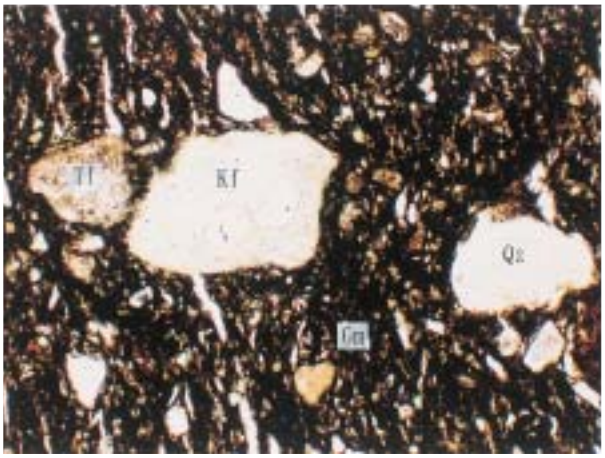


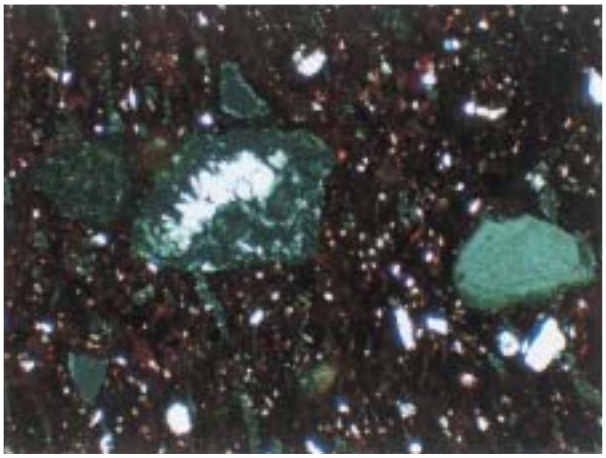
10. オサヤズ窯跡　SQ2　瓦　女瓦　試料番号21　Ⅰ型



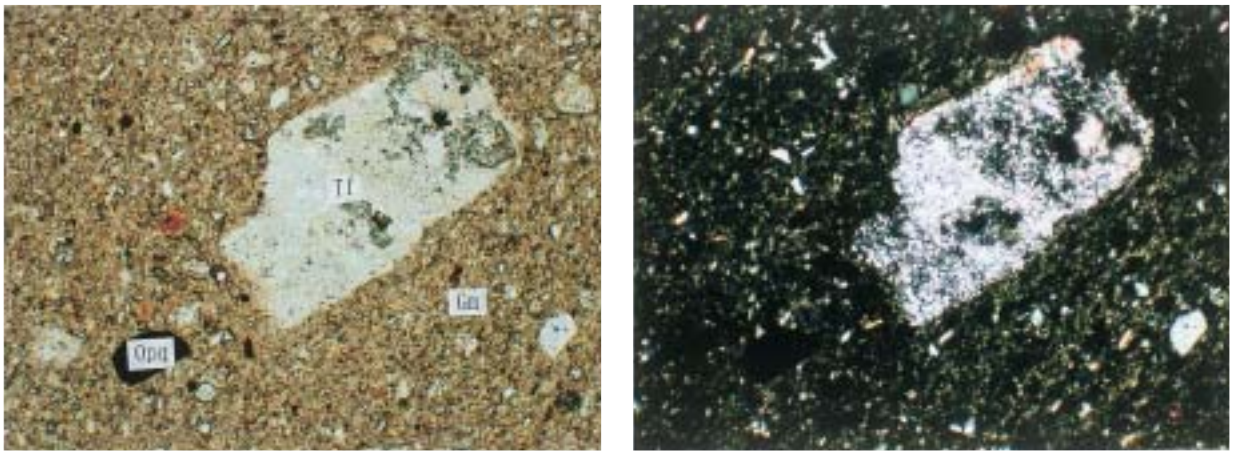


11. オサヤズ窯跡　SQ1　窯壁　試料番号22　Ⅴ型

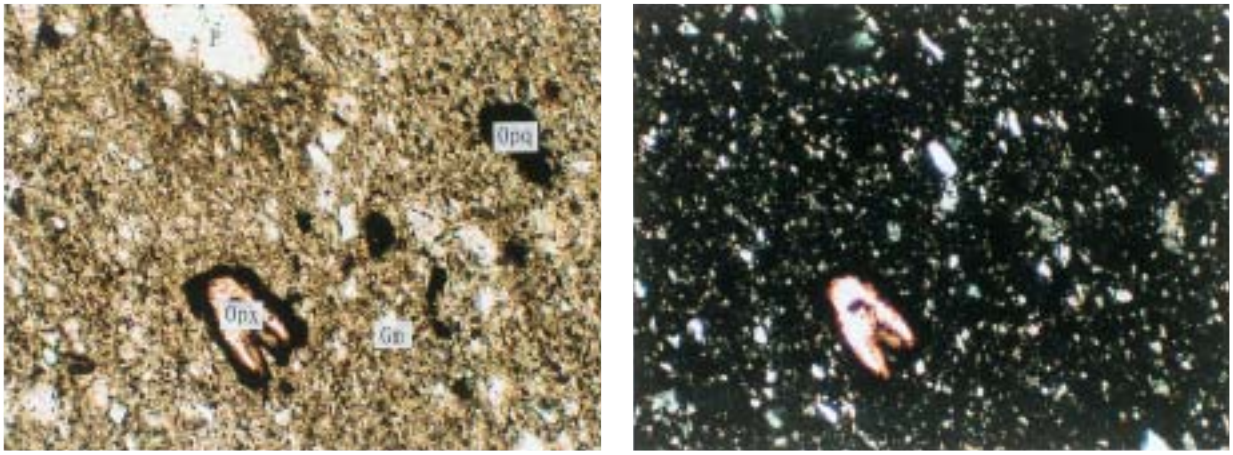




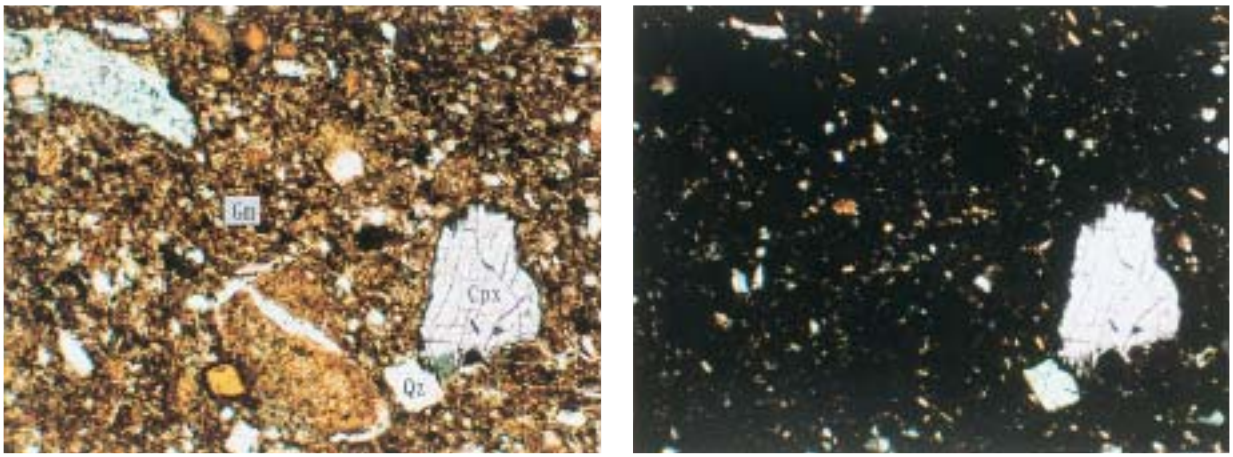
12. 小松原窯跡　SQ2　須恵器　坏　試料番号24　Ⅴ型



13. 小松原窯跡　SQ3　瓦　女瓦　試料番号25　Ⅳ型



14. 三本木窯跡　SQ1　須恵器　坏　試料番号26　Ⅳ’型



15. 三本木窯跡　SQ1　赤焼土器　甕　試料番号28　Ⅴ型

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第94集

高瀬山（たかせやま）遺跡（SA）第２・３次発掘調査報告書
図版・付編　編

2001年10月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161
山形県上山市弁天二丁目15番１号
☎023－672－5301
印刷　㈱大風印刷